2023年度（令和５年度）
教育・研究業績書

奈良学園大学

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和6年　5月　1日

氏名　飯塚照史　印

研究分野	研究内容のキーワード
人間医工学	リハビリテーション科学・福祉工学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）入学から卒業までの定期個人面談による学生の状況把握および助言	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の講師として平成22年度入学生および平成27年度入学生の担任を務めた．当該学生の入学から卒業まで，留年者も含めて総勢約80人に対し，毎年前後期併せて4回の定期面談に加え，成績低迷学生やその他問題のある学生に対して不定期面談を実施した．心理的問題を主とする学生については，学内に設置された学生相談室と連携し，対応を行った．問題ある場合には迅速な対応を行うい，学生の意識変容を促せた．その結果，退学者の減少に貢献できた．
2）リハビリテーション関連職種に対する総合的スプリント作製実習による装具療法の理解	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「義肢装具学実習」（3年次配当，1単位）および，理学療法学専攻の専門科目「義肢装具学実習」（3年次配当，1単位）において，スプリント作製を通じた装具治療の基本を教示した．具体的には，作業療法学専攻については8種類，理学療法学専攻については3種類の作製を通じて，原因組織別の拘縮矯正に対する評価技術やスプリント調整を行った．その結果，学生の理解度が向上した．
3）レポート課題の評価基準統一による学生へのフィードバック	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「身体障害作業療法学実習」（3年次配当，1単位）において，提出される課題レポートの評価基準をS，A1，A2，B1，B2などと8段階として統一し，それぞれの採点基準を設けた．これを学生にフィードバックすることで，実習に向けての自身の課題の明確化につながり，学生の動機が向上した．
4）コミュニケーション講座による実習への動機付け	平成25年4月 ～ 平成27年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の講師として平成25年度3年次学生（40名），平成26年度3年次学生（30名），平成27年度3年次学生（35名）に対し，実習で必要とされるコミュニケーションについて，その学術的意義から理論，実践，倫理などを教示した．さらに，昨今の学外実習による学生の諸問題，特に精神的不調についても学問的知識を教示し，予防的意義を含めた．結果．学外実習に対して漠然とした不安が，「指導者との関係」などといった具体的な不安へとつながり，これを学生が認識することで予防的効果を見込めることが分かった．また，倫理的事項に対する全体討論を通じて，いわゆる接遇的コミュニケーションのみならず，医療倫理としてのコミュニケーションを理解することにつながった．さらに，コミュニケーション教育について先駆的役割を果たされている桜美林大学リベラルアーツ群の教授や，リハビリテーション関連職種における養成教育での位置づけを強調される理学療法士などを招き，学内全体の取り組みとして周知に努めた．これの功績が認められ，平成28年度からの新カリキュラムにて授業化された．移行期間は，「身体障害作業療法学実習」およびホームルームなどで対応した．

事項	年月日	概　　要
5）学生個々の状況に応じた定期面談および指導	令和元年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の教授として，チューターを努め，理学療法学・作業療法学専攻学生の定期面談および個々の状況に応じた指導を行った．
6）穴埋め式レジュメの使用による理解を促す講義形	令和元年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科における人体構造学Ⅲの講義において，解剖学的構造や名称の暗記に際し，穴埋め式のレジュメを使用することで理解と定着を図った．
7）症例提示を通じた実践的講義	令和元年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科での担当講義において，適時症例提示を通じて，理論や治療法に関する実践的講義を展開し，理解を促した．
8）オンライン・オンデマンド方式を用いた講義	令和元年4月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科での担当講義について，COVID-19感染予防の観点から，Googleクラスルーム，Googleフォームを駆使したオンデマンド，オンライン方式の講義を展開した．講義内容は後日確認することも出来るようにし，復習用の教材としても提供した．各回での確認テスト提出を義務付けることで，学習内容の定着も図った．
２　作成した教科書，教材 1）小テストによる講義理解度の把握	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「身体障害作業療法学Ⅰ」（2年次配当，1単位）において，小テストを作成し各回の講義終了後に実施し，講義理解度の把握に努めた．同時に講義に対する感想も求め，次回講義でこれに応えるという形式で展開した．これにより，学生の理解度は飛躍的に向上し，身体機能障害領域を志望する学生が増加した．
2）症例報告レポート作成を目的とした 情報提供用資料	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「身体障害作業療法学実習」（3年次配当，1単位）において課題として提示する症例報告レポート用の症例情報提供資料を作成した．当該資料には，個人情報を保護したうえでの現病歴や既往歴，あるいは面接時の逐語録などを示した．これを基にしたレポート作成により学生は実践への理解度が向上した．
3）講義用補助教材	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門基礎科目「臨床運動学」（3年次配当，1単位）において，テキストに沿ったアウトラインについて資料を作成，配布している．さらに資料内には，関連事項として講師が経験した症例などを紹介する項目を設けて学生に興味を引き出すように工夫している．

事項	年月日	概　　要
4）体表解剖学における触診資料	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「臨床体表解剖学」（1年次配当，1単位）において，筋骨格の触診について再現性の高い資料を作成した．さらに，毎回触診した筋骨格に関する運動学的知識などを先取りで教示し，小テストを行った．これにより学生の解剖学への理解度が向上し，興味関心の高まりがある．さらに，ロードマップとして今後修得すべき知識を見せることで，勉学全般に対する動機づけにつながっている．
5）作業で語る事例報告 A4判　全164項 編者：斎藤佑樹 共著者：友利幸之助，上江洲聖，澤田辰徳	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「身体障害作業療法学実習」（3年次配当，1単位）において，教科書として使用した．当該教科書では作業療法学の文脈上にある作業について網羅的に示され，さらに実践として豊富な事例報告が収められている．学生が率直に疑問に思う点について簡潔明瞭に述べられているため教科書として採用した．さらに，講義内では教科書を用いた症例検討の重要性を説き，学外実習において参考にするよう指導した．
6）確認テスト	令和元年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科での担当講義について，各回毎に学習内容に応じた確認テストを作成した．質問項目も付記することで適宜学生からの反応も確認することが出来るようにしている．
7）穴埋め式レジュメの作成	令和元年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科での担当講義について，学習内容における重点項目を穴埋めとするレジュメを作成し，当該部分での強調と筆記による定着を促した．また，試験範囲の明確化にもつながるようにした．
３　教育上の能力に関する大学等の評価 1）星城大学再任評価	平成26年12月14日	学長，学部長による面接評価を受けた．入試広報委員会副部長としての活動による学内貢献，学生教育への尽力，研究領域としての科研費取得などが認められ，平成27年度かの再任が決定した．
2）星城大学学生による授業評価アンケート結果	平成28年12月	星城大学において毎年実施している学生による授業評価アンケートによると，3年次学生に対する「義肢装具学」，および2年次学生に対する「身体障害作業療法学Ⅰ」，いずれについても，95%以上の学生から満足との高い評価をもらっている．
3）奈良学園大学学生による授業評価アンケート結果	令和3年7月	奈良学園大学において実施される授業評価アンケートについて，3年次学生対象の「義肢装具学」「作業療法特論」，2年次学生対象の「人体構造実習」「身体障害作業療法学Ⅱ」「作業療法評価学演習Ⅰ（身体）」，1年次学生対象の「人体構造学Ⅲ」において，いずれも5点満点中4.3程度の満足度を得た．
4）学部長による定期面談	令和2年6月22日 令和3年3月2日	奈良学園大学保健医療学部において，学部長との定期面談を実施した．専攻運営，大学運営，とりわけ広報活動に関して一定の評価を受けた．

事項	年月日	概　　要
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）一般社団法人日本ハンドセラピィ学会主催 認定ハンドセラピスト養成カリキュラム 「入門セミナー」，研修会講師	平成20年4月 ～ 令和2年12月	認定ハンドセラピスト養成カリキュラムの一環として毎年開催される入門セミナーにて，肘関節・前腕の機能解剖につき継続して講師を務めている．毎年，おおむね100名程度の参加者がいる．
2）一般社団法人日本ハンドセラピィ学会主催 認定ハンドセラピスト養成カリキュラム 応用実践研修会「ハンドスプリントベーシックセミナー」，研修会講師	平成22年4月 ～ 現在に至る	認定ハンドセラピスト養成カリキュラムの一環として毎年開催される応用実践セミナーにて，座学としてスプリントの力学，実践として作製実習につき継続して講師を務めている．毎年，おおむね100名程度の参加者がいる．
3）一般社団法人日本ハンドセラピィ学会主催 認定ハンドセラピスト養成講習会「機能解剖・触診セミナー」，研修会講師	平成23年4月 ～ 現在に至る	認定ハンドセラピスト養成カリキュラムの一環として毎年開催される基礎セミナーにて，手，手指の機能解剖と触診実習の講師として継続して講師を務めている．毎年，おおむね100名程度の参加者がいる．
4）星城大学元気創造研究センター助成研究 公開講座「リハビリテーション専門職養成課程におけるコミュニケーション教育」，報告「作業療法学生に対するコミュニケーション教育」	平成26年9月27日	本講座は星城大学元気創造センター助成研究として実施した学生のコミュニケーション教育についての研究成果を周知するために開催し，報告した．併せて講義も企画し，学生への教示も行った．
5）星城大学FDセミナー 「科研費取得のポイント」，研修会講師	平成29年9月14日	これまで2度連続での科研費取得実績を評価され，学内FDセミナーでの講師を務めた．自身の経験を基に，成書で示される記載方法や研究の展開について教示した．
6)奈良県作業療法士会主催 学術部セミナー「手のリハビリテーション」講師	令和3年10月	手外科疾患について，概要，評価，治療について臨床上有用な情報を教示した．
7）奈良県作業療法士会主催 現職者研修会「急性期の作業療法」講師	令和3年11月	急性期の作業療法に関してリスクマネジメントを中心に教示した．

事項	年月日	概　　要
5　その他		
1）学部科目担当実績 星城大学リハビリテーション学部	平成22年4月 ～ 平成30年3月	星城大学リハビリテーション学部にて，「身体障害作業療法学」「身体障害作業療法学実習」「臨床運動学」「運動学演習」「臨床体表解剖学」「義肢装具学」「義肢装具学実習」「作業療法学特論」の科目担当として講義を行った．
2）修士課程科目担当実績 星城大学大学院リハビリテーション健康支援学研究科健康支援学専攻	平成25年4月 ～ 平成30年3月	星城大学大学院リハビリテーション健康支援学研究科健康支援学専攻にて，「病態運動学」「リハビリテーション健康支援学」の科目担当として講義を行った．
3）修士論文指導実績 星城大学大学院リハビリテーション健康支援学研究科健康支援学専攻	平成27年4月 ～ 平成30年3月	星城大学大学院健康支援学研究科健康支援学専攻の学生1名（テーマ：橈骨遠位端骨折後の患者満足度とリハビリテーション期間の認識に影響する因子についての研究）に対して，研究指導補助教員として修士論文作成における研究計画策定から，データ分析，論文作成，発表資料作成に至るまでの一連を指導した．
4）学部科目担当実績 奈良学園大学保健医療学部	平成31年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部にて，「基礎ゼミⅡ」「人体構造学Ⅲ（神経・運動神）」「義肢装具学（総論）」「義肢装具学」「身体障害作業療法学Ⅱ（運動器・難病）」「作業療法評価学演習Ⅰ（身体）」「作業療法評価学特論Ⅰ（身体障害）」の科目担当として講義を行っている．
5）修士課程科目担当実績 奈良学園大学大学院 リハビリテーション学研究科	令和5年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学大学院リハビリテーション学研究科にて，「運動器障害リハビリテーション学特論」「臨床実践特別演習」について科目担当をしている．併せて，大学院生の研究指導も行っている．

事項	年月日	概　　要
職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
作業療法士	平成10年3月	第20618号
修士（保健学）	平成12年3月	広島大学　第16792号 修士論文題目：指把持力の圧変化から見た書字動作解析；健常人とパーキンソン病患者との比較
博士（保健学）	平成19年4月	広島大学　第4258号 博士論文題目：ZoneII屈筋腱断裂修復後の後療法の特徴に関する一考察 ： 3週間固定法とKleinert変法の経時的関節可動域の比較
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）土谷総合病院リハビリテーション科 作業療法士	平成12年4月 ～ 平成14年3月	主に整形外科病棟に入院する患者および外来患者のリハビリテーション業務に従事した．外傷，先天性疾患に対して，筋力，関節可動域の改善，日常生活動作能力の向上を意図した作業療法を実施し，社会復帰へと導けるよう尽力した．併せて，在宅でリハビリテーションを行う訪問リハビリテーションも行い，施設から在宅へとシームレスな対応が出来るように他職種との連携も心がけた．
2）名古屋掖済会病院リハビリテーション科 作業療法士	平成17年4月 ～ 平成22年3月	整形外科の一専門分野である手外科領域のみを担当する作業療法士として，救急対応から医師と綿密な連携を取りながら，術前，術中，術後対応を行った．重度外傷にあっては，リハビリテーションが遅延することによって起こる障害が多いため，医師の手術の意図を踏まえた早期リハビリテーションを心がけた．
3）臨床実習における指導	平成17年4月 ～ 平成22年3月	名古屋掖済会病院にて常勤で在職中に大阪リハビリテーション専門学校延べ5人，星城大学リハビリテーション学部作業療法学科学生延べ2人に対し臨床評価実習，臨床治療実習を実施した．手の外科領域という特殊性があるものの，作業療法において共通である実践技術について指導した．また，作業療法だけでなく他職種の業務についても把握するために，手術見学や外来診察，病棟回診などにも同行してもらった．作業療法を実施する前に他職種が多くかかわっていること，作業療法士として評価，実践するべき事項があることを理解してもらうよう努めた．

事項	年月日	概　　要
4）有資格者に対する実践研修指導	平成19年4月 ～ 平成22年3月	名古屋掖済会病院にて在職中に，手外科リハビリテーションに対する実地研修の受け入れを行っており，三河地域より2名，豊田地域より2名，名古屋地域より3名の有資格者に対し，実技研修を指導した．具体的には症例の病態に対する評価，治療方針の立て方などを実践に即して指導，討論を通じて洗練化を図った．
5）一般社団法人日本海員掖済会名古屋掖済会 病院主催地域貢献事業エキサイ健康教室 「手と足と口の健康チェック」，研修会講師	平成29年7月18日	通年シリーズで行われる地域住民への啓発としての健康教室で講師を務めた．当該日においては，握力などの測定も行い，自身の健康に対する意識を高めてもらった．参加者および院内からの評価も高く，今後も継続して行うこととなっている．
6）科学研究費取得（若手B） 「適切なリハビリテーション期間の決定に関わる因子の探索的研究」	平成25年4月 ～ 平成28年3月	橈骨遠位端骨折患者を対象とし，患者満足度と関節可動域や筋力などの機能的因子の関連から，適切なリハビリテーション期間を決定づける因子について探索検討した．他施設共同研究として160名について検討したところ，機能的因子が患者満足度に関連するのは術後8週までであること，終了に係る印紙として患者とセラピストの間で一致するアウトカムは患者立脚型評価であること，術後4週をベースラインとすると患者立脚型評価において33点以上の改善が必要であることが提案された．
7）科学研究費取得（基盤C） 「健常人と腱移行術症例に対する前頭前野負荷と運動学習遅延に関する実証的研究」	平成28年4月 ～ 平成31年3月	予め練習をした群（事前練習群）と練習をしない群（非練習群）を設定し，指示された一定のつまみ力を維持する課題を与え，さらにそれぞれにN-back課題（数個前の数字を想起し答える課題）を負荷し，大脳前頭前野における脳血流量を近赤外線分光法にて計測し，被殻した．結果，事前練習群においては脳血流量の増大を認めず，筋電図における振幅は漸減していた．一方，非練習群においては事前練習群とは逆の傾向が認められた．以上から，運動学習における習熟過程を前頭前野脳血流量と筋電図がアウトカムとなる可能性が提案された．さらに外傷による機能再建術としての腱移行術後のリハビリテーションへの応用を提案した．
8）日本ハンドセラピィ学会理事としての活動	平成27年4月 ～ 現在に至る	会員数約700人の日本ハンドセラピィ学会において理事を務め2期目となる．2期目からは認定資格審査委員会事務局長の役を任ぜられ，認定ハンドセラピストの申請，更新，研修会運営に係る全体調整および報告のとりまとめ，など学会の根幹に関わる部分を担当している．

事項	年月日	概　　要
9）第29回日本ハンドセラピィ学会運営局長，学術局長としての活動	平成28年4月 ～ 平成29年4月	日本ハンドセラピィ学会の年次学術集会が名古屋で開催されるにあたり，名古屋大学手外科教室とともに，中日病院に所属する学会長とともに，実務的な作業を行った．当初は，学術局長として任命されたものの，運営局の業務遅延により中途から運営局長を兼任した．開催当日にあっては，過去最高の約800人の参加者を迎え大成功であり，これに貢献した．
10）第5回中部日本ハンドセラピィ研究会代表世話人としての活動	平成30年1月27日	手外科専門医による一般社団法人日本手外科学会の下部組織となる中部手外科研究会においては，毎年研究会を開催している．この中部手外科研究会の医師の支持を受けて発足した中部日本ハンドセラピィ研究会においては，世話人会を組織し，中部手外科研究会と併催する形で4回の研究会を行ってきた．第5回にあっては，名古屋で行われることとなり，中部日本ハンドセラピィ研究会世話人会で指名され，中部手外科研究会で承認され，代表世話人となった．共催にあたり藤田保健衛生大学医学部整形外科の鈴木教授と折衝を重ね，新規的な研究会を企画し，開催した．
11）第35回日本ハンドセラピィ学会大会長としての	令和3年4月 ～ 現在に至る	2023年4月開催予定の学会について大会長を拝命し，日本手外科学会側との交渉も通じて，企画を計画した．継続して活動中である．
12）科学研究費取得（基盤C）	令和4年4月 ～ 現在に至る	脆弱性骨折の初発となる橈骨遠位端骨折は高率で大腿骨頚部骨折といった二次骨折を発生するため，効率性のあるリスク評価が求められる．しかし，上肢骨折が転倒を主因とする二次骨折へとつながる一連のメカニズムは未解明である．これに対し，左右上肢活動量の対称性と動的立位バランスの相関性を明らかにし，予備的検討にて骨折側の運動制御パターンの変化を捉えた．すなわち，上肢骨折による中枢機能の変化が下肢機能へと波及しているとの仮説が成り立つ．方法としては，一次運動野から脊髄前角での複数の運動核への投射パターンを捉える筋シナジー解析を適用し，上下肢の運動制御の変化と姿勢反射および平衡反応との関連性を検討する．本研究は二次骨折のリスク評価への応用が期待される．
13）日本作業療法士協会主催「研究法」講師	令和4年 ～ 現在に至る	有資格者に対して研究計画立案から倫理的配慮を教示し，各自立案した研究計画に対してアドバイスを行った．
14）日本ハンドセラピィ学会主催「研究法」講師	令和4年6月25日 ～ 現在に至る	ハンドセラピィを専門分野とする者に対し，各種研究実践を紹介したのち，当該分野に資する研究計画についてアドバイスを行った．
15）日本ハンドセラピィ学会主催「触診セミナー」	令和4年8月28日	学会主催にて実施している実技セミナーとしての触診技術について，座学及び実技について教示した．
16）奈良県作業療法士会　現職者講習会「急性期の作業療法」	令和4年10月2日	現職者に対して急性期の作業療法について教示し，地域連携も踏まえた対応の重要性を説いた．

事項	年月日	概　　要
４　その他 1）入試広報委員会としての活動	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学内における入試広報活動の要として，入学者増加対策やオープンキャンパスの企画，運営など入試広報活動全般にわたる対応を行っている．平成25年からの2年間は副委員長を務め，リハビリテーション学部における当該業務を一手に引き受けてきた．オープンキャンパスの運営については一部ルーティン化し効率化を図るとともに，教員帯同による高校訪問なども定着させた．
2）キャリア委員会としての活動	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学内における就職活動において要となるキャリア委員会にて一貫して対応してきた．リハビリテーション学部においては2年次からのキャリア教育を実施し，早期内定あるいは公的機関受験対応を軸として取り組んでいる．
3）広報委員会としての活動	令和元年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部における広報委員として，高校訪問，進学ガイダンス，オープンキャンパス対応として，企画・講師派遣等を行った．
4）入試委員会委員長としての活動	令和4年 ～ 現在に至る	入試委員長として各種入試業務に関わる案件の委員会運営を行った．

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1. 作業で語る事例報告作業療法のレジメの書き方・考え方	共著	平成26年3月	株式会社　医学書院	作業療法における「作業」に着目し，その評価法と解釈について記したものである．本書はこれに基づき多数の事例が報告されている． A4判　全164項 編者：斎藤佑樹 共著者：友利幸之助，上江洲聖，澤田辰徳，飯塚照史，他38名． 本人担当部分：第5章　生活に焦点を当てた事例報告の書き方　「生活の変化に向けて必要な作業を確認し目標設定を行った手外科事例」を単著． 伸筋腱断裂および手関節可動域制限を来した症例に対し，主観的な面接を中心として，機能的側面の評価とともに包括的に目標設定を行った．また，妻の逝去に伴う対象者の役割の変化を踏まえて，現実的かつ具体的な目標から，対象者とともにチームとして治療を進めた症例を報告した．機能的側面だけでなく，対象者の全人間的理解が重要であることを強調した．
2. リハビリテーション義肢装具学	共著	平成29年3月	メジカルビュー	リハビリテーション分野において重要な装具学の知識を教示した．本書の特養としては，豊富な事例を用いて具体的に示している点である． A4判　全453項 編者：清水順一，青木主税 共著者：飯塚照史，他25名． 本人担当部分：Ⅱ装具　1章　上肢装具「肘装具」「手関節装具」，手部装具各論2「末梢神経障害」を単著． 肘，手関節について実践上で用いた独自性の高い装具を例示し，慣習的な装具との違い，利点，欠点，適用を述べたうえで，これを用いた症例の経過とともに最終成績を示した．
３．ハンドセラピィマニュアル（日本作業療法士協会編）	共著	令和2年2月	日本作業療法協会	日本作業療法士協会におけるマニュアルシリーズにて，評価に関して分担執筆した．当該マニュアルは日本における標準的なハンドセラピィ技術，知識の根拠となるものであり，その有用性は高い． A4判　全78項 著者：岡野昭夫，飯塚照史，稲垣慶之，内屋純，大山峰生，谷口しのぶ，茶木正樹，野中信宏，古田　裕之，武藤光弘 本人担当部分：「評価」について単著． ハンドセラピィ領域で多用される評価について，図表を用いて概説した．
4. 作業療法理論の教科書	共著	令和2年9月	メジカルビュー社	作業療法分野において適用される理論について，生体力学的モデルの分担執筆を担当した．学生への教示用として実践レベルを通して分かりやすく解説している． A4判　全255項 編者：小川真寛，藤本一博，京極真 著者：飯塚照史，他18名． 本人担当部分：「生体力学的モデル」を単著． 作業療法実践において機能評価を基にした治療におけるモデルを概説した．

5. 動画で学ぼう PT・OTのためのハンドセラピィ [Web付録付]	編集・共著	令和4年3月	医学書院	手のリハビリテーション（ハンドセラピィ）に関して初学者向けの教科書として，動画を加えて基礎から応用までを網羅し，コラムを加えて分かりやすく解説した． A4判　全160項 編者：斎藤和夫，飯塚照史，下田信明 本人担当：「ROM検査」「筋力評価」「感覚評価」「目標設定」「関節可動域の改善」「協調性の改善」の6章（全42項相当）を執筆した．加えて，編者として全体構成や動画等の校閲等を行った．
（学術論文） 1. 客観的臨床能力試験場面のビデオフィードバックによる臨床実習前教育の取り組み． （査読付）	共著	平成26年4月	作業療法，33巻2号，p181-190	学内で実習前に実施する客観的臨床能力試験に際し，ビデオフィードバックを用いた学習の効果について述べた．学生は，当該ビデオを用いた学習形態をとっており，有効であったと述べた者が8割を超えており，実習前の学習手段として有用である可能性を述べた． 本人担当部分：データ収集，解析，論文推敲 共著者：大浦智子，竹田徳則，藤田高史，古澤麻衣，木村大介，冨山直輝，林浩之，
2. 作業療法学生の臨床実習に対する意識の変容についての研究 （査読付）	共著	平成26年10月	星城大学紀要，14号，p43-56	作業療法専攻学生に対して，臨床実習前にストレスマネジメントを主眼とするコミュニケーション講座を開講し，その効果を学生アンケートからKJ法を用いて検討した．その結果，学生の不安は，当初漠然としたものであるが，後半には指導者や対象者との関係性構築に焦点化されており，その対策が必要であることを述べた 本人担当部分：データ収集，解析，論文推敲 共著者：綾野眞理，飯塚照史，今井あい
3. 滑車訓練における手関節主動筋の筋電位と握力の関係について （査読付）	共著	平成26年12月	日本ハンドセラピィ学会誌，7巻，p23-28	ハンドセラピィ領域で筋力増強目的に多用される滑車訓練について，実験的に検証した．手関節固定筋とともに，把持力を同期，解析した結果，10kg程度の負荷をかけてもその握力は最大握力の7割程度にとどまること，加えて手関節固定筋については最大握力発揮時の5割未満にとどまる事を報告した．以上から，握力増強には適さず，固定時における廃用性の筋力低下に対しての効果にとどまることを示した．さらに筋力増強効果としては，他の訓練法が有用である可能性を指摘したうえで，提案した． 本人担当部分：データ収集，解析，論文推敲
4. 手指PIP関節周辺骨折におけるDIP・PIP関節可動域の推移 （査読付）	共著	平成27年5月	日本ハンドセラピィ学会誌，8巻，p16-21	手指PIP関節脱臼骨折のリハビリテーションにおける可動域推移につき検討し報告した．開始当初にDIP関節のみの運動を実施している群については，これと同期するようにPIP関節の可動性が改善するのに対し，当該運動を実施していない群については，その相関性が低くなっていた．解剖学的，運動学的構造から，非損傷関節であるDIP関節の運動が最終成績の向上に有用であることを述べた． 本人担当部分：データ収集，解析，論文推敲 共著者：茶木正樹，武藤光弘，木野義武，花村克己，飯塚照史，渡辺康太

5. The optimal rehabilitation period for patients with distal radius fractures according to the MCID in DASH scores; a preliminary study (DASH MCIDを基準とした橈骨遠位端骨折に対する至適リハビリテーション期間に関する予備的検討) (査読付)	共著	平成28年4月	Journal of hand surgery-Asia-Pacific, vol.21(2), p1-6	手外科領域のおける患者立脚型評価としてのDASHについて，臨床的に意味のある差が17点であるとされており，これを用いて橈骨遠位端骨折の早期運動療法開始群と非早期運動療法開始群の効果を検討した．その結果，ベースラインからの得点変化が17点であっても，機能的な差が生じていないことが明らかとなった．そのため，手関節可動域や筋力の改善を指標としたリハビリテーションのアウトカムについては有用性が見出させない可能性があることを指摘した．また，検討結果から，現状のリハビリテーションの効果は長くとも受傷してから8週間程度であり，現状の12週間程度のリハビリテーションについては疑問が生じていることを述べた． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，論文執筆
6. Correlation of the Hand 20 with the International Classification of Functioning, Disability, and Health and comparison of the results with those of the Disability of the Arm, Shoulder and Hand (Hand 20とDASHのICFによる関連性について) (査読付)	共著	平成28年4月	Asian Journal of Occupational Therapy, vol.11, p27-33	著者も加わり名古屋大学手外科教室を主体として作成した，本邦における患者立脚型評価のHand20と世界的標準とされるDASHについて，その差異をICF概念へのリンクにて検討した．その結果，Hand20は手に限局する主観的困難感を聴取するのに対し，DASHは社会的不利について主軸を置いているものと捉えられた．以上とともに，2つの患者立脚型評価の得点を解釈するうえでは，対象者の測定範囲に配慮することが肝要であることを強調した． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，論文執筆 共著者：Terufumi Iitsuka, Tomoko Ohura, Takashi Fujita
7. 作業療法学学生に対する臨床実習前コミュニケーション講座の試み (査読付)	共著	平成28年12月	日本作業療法教育研究, 16巻1号, p23-29	作業療法学専攻3年次学生35名を対象として，臨床実習（以下，実習）に向けた対人コミュニケーション能力向上と心理的支援を目的とした講座を4回実施した．講座実施中の学生の実習に対する不安は，講座開始当初は指導者や対象者との「関係作り」であった．しかし，実習直前には「知識・技術不足」に対する不安が高まる傾向にあった．しかし，講座における指導者などとの対人関係を意図したロールプレイングやストレスマネジメントとしてのリラクゼーション方法の教示は，実習前不安の自己評価得点を軽減していた．一方，実習後のアンケートでは，コミュニケーション困難として対象者の疾患特性や沈黙，消極的態度といった状況に直面し，対人反応への戸惑いを感じていた．今後は作業療法実践におけるコミュニケーション特性を具体的に検討した上で，実習で想定される困難場面に対するロールプレイングや客観的評価に関する検討が必要であることを提案した． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，論文執筆 共著者：飯塚照史、今井あい子、竹田徳

8. 橈骨遠位端骨折手術例におけるセラピィ終了時期に影響を及ぼす要因について（査読付）	共著	平成29年5月	日本ハンドセラピィ学会	先行研究にて当研究グループではハンドセラピィパスを作成し，その有用性を述べてきた．しかし，パスに適用されない患者についての検討がなされていないため，実施した．その結果，骨折系と掌屈可動域，握力がその要因として挙げられ，これらに対する対策が良好な成績を安定して獲得するためのポイントであることを指摘した．また，握力増強に有用な訓練としてタオル絞りを提案した． 本人担当部分：データ収集，解析，論文推敲 共著者：稲垣慶之，桂理，飯塚照史，服部順和，渡邉健太郎
9. 臨床実習後作業療法学生におけるハンドセラピィに対する認識（査読付）	共著	平成29年10月	日本ハンドセラ	養成校作業療法学生の臨床実習後におけるハンドセラピィに対する認識を検討するために，作業療法特論（ハンドセラピィ）を選択した学生を対象として，提出レポートを用いた検討を行った．テキストマイニング手法により抽出された10コードを用いて主成分分析を行ったところ4つの成分に縮約された．また，主題分析による質的検討を踏まえると，学生はハンドセラピィを作業療法の一分野として認知はしているものの，その対象範囲は生活や作業と対極し，かつ作業療法士とは一線を画するものであるとの認識であることが示唆された．この要因として作業療法の定義と実践との乖離に対するジレンマの存在が推察され，卒前あるいは卒後教育にあってはハンドセラピィの定義と専門性，意義につき各分野との関連を念頭においた教示の必要性が示唆された． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，論文執筆 共著者：飯塚照史，大浦智子
10. 脳血管疾患患者における回復期リハビリテーション病棟退院後の日常生活活動能力の変化および関連因子に関するアンケート調査（査読付）	共著	平成30年6月	作業療法，38巻1号，p37-44	回復期リハビリテーション病棟退院後の脳血管疾患患者のADL能力は低下するとされ，退院前が最も高い能力を有するとされる．一方で慢性期脳血管疾患患者のADL能力と生活範囲，IADL能力やQOLは関連性があるとされるが，回復期病棟退院前を基準とした経時的変化との関連性の言及はない．本研究は脳血管疾患患者の退院前を基準とし在宅時とのFIM得点の比較，維持・改善と悪化に関わる因子探索を行った結果，移動項目に有意な低下を認め，FIM得点の維持・改善に関わる因子に生活範囲が関連していた．回復期の退院支援では，在宅時の活動範囲拡大を意図した指導でADL能力の維持・改善に寄与する可能性があった． 本人担当部分：研究計画策定，データ解析，論文推敲，一部執筆 共著者：久堀佐知，飯塚照史，児島範明，恵飛須俊彦

11. 運動学習段階を捉える新規的指標の開発に関する基礎的研究―事前練習の有無および健常若年者と高齢者の比較（査読付）	共著	平成30年10月	日本ハンドセラピィ学会誌，11巻2号，p58－67	運動学習の過程における「認知段階」と「連合・自動段階」への対応は異なる．前者では新規的運動を認知するために言語的情報や生体信号をフィードバックするなどで強化，促進するのに対し，後者は反復する練習あるいは環境設定の異なる場面での運動が奏功する．したがって，ハンドセラピィにおける実践，とりわけ新規的運動獲得が主となる筋・腱移行術等を想定すると，当該段階を区別する必要性は高く，かつ客観的であることが望ましい．以上を基に本研究では，同時注意要求課題を与えた際の筋出力と筋電図振幅，ならびに前頭前野の活動領域から「認知段階」と「連合・自動段階」を区別する新規的指標を見出し，かつそれが若年者と高齢者に普遍的であるか否かを検証することを目的とした．結果，同時注意要求課題を与えた際の前頭前野活動領域は拡大し，かつ事前練習を行った者にあっては，運動習熟値（筋出力を筋電振幅で除した値）が増加する傾向にあった．本結果で認められた現象は，「認知段階」と「連合・自動段階」を区別できる客観的指標として応用できる可能性が示唆された．しかし，本研究における実験課題等については，再現性や客観性を担保するべく今後の検討が必要である． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集・解析、論文執筆
12. 外傷手の予後予測（総説）	単著	令和1年10月	日本ハンドセラピィ学会	外傷手の予後予測について，戦略・戦術・アウトカムを基に，ハンドセラピィの対象疾患として頻度が高いと思われる代表的疾患に対しcritical pointとこれに関わるエビデンスについて述べた．手外科医との綿密な討論とチームワークで，外科的対応を含めた「戦略」および個々の局面での具体的な「戦術」を基に，ハンドセラピィでの「戦術」を立てる．並行してハンドセラピィ上の具体的な目標設定に沿って，これに反応するアウトカムについてICFを意識して認識することが重要である．加えて，最終成績を予想するための各時点のcritical pointによる中途結果の判断は，臨機応変な「戦術」の検討に資するものである．
13. 本学保健医療学部リハビリテーション学科志望経緯に関する調査（研究ノート）	共著	令和2年12月	奈良学園大学紀要第13	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の広報活動に資する基礎資料とするため，2020年度新入生の志望経緯および本学に対する印象等についてアンケート調査を行った．結果，理学療法・作業療法いずれの専攻についても，多くの学生は当初の志望を中途変更することはなかった．一方で，中途で変更する学生においては，自身の経験や自身の適性についての内省，さらに作業療法学専攻については，特徴的な技術に魅力を感じたことが契機となっていた．入学前の本学選択においては設備，環境面を魅力と感じており，入学後は教員や教育の質について肯定的な意見が多かった．以上から，低年齢における分かりやすい理学療法・作業療法に関する周知，あるいは本学の特徴的な講義等の教育方法に関する広報が有用であることを提案した． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集・解析，論文執筆 共著者：飯塚照史，辻下守弘、池田耕二、城野靖朋、中島大貴

14. 橈骨遠位端骨折に対するハンドセラピィと最近のトピック（総説）	単著	令和2年12月	日本ハンドセラピィ学会	橈骨遠位端骨折は高頻度で発生する外傷であるがゆえに多くの研究が存在し，その予防から予後に至るまで多様な知見が存在する．ハンドセラピィにおける臨床実践レベルにあっては対象者の機能的因子の改善に最も焦点があたるが，俯瞰すれば効果的であるとされる技術は未だ明確ではない．したがって，その効果は未だ懐疑的であり不要論さえ存在するのが実状である．これに対し，現時点での研究のトレンドを踏まえると費用対効果に優れる早期ハンドセラピィ開始および早期終了が鍵であり，これに資するアウトカムの開発が本骨折に対するハンドセラピィ技術の継承・発展において喫緊の課題と捉えられた．
15. 橈骨遠位端骨折に対する掌側ロッキングプレート固定術後のリハビリテーションにおけるHand20と患者満足度の関連性（査読付）	共著	令和3年8月	日本ハンドセラピィ学会誌，13巻4号，2021	橈骨遠位端骨折は，術後3か月程度の急峻な回復ののち，１年程度にわたる緩徐な回復を示すため，Minimally Clinical Important Difference（臨床的に意味のある差）の算出方法を参照し，患者満足度を改善させるHand20得点の改善量について検討した．術後4週をベースラインとすると，手全体の機能に対する患者満足度を改善するHand20得点の改善量のカットオフ値は26点であり，ハンドセラピィにおける対応や技術開発に資することが期待された． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集・解析，論文執筆 共著者：飯塚照史，岩月克之，平田仁
16. 移乗介助動作における医療従事者の筋活動 ―腰痛予防に向けた分析―	共著	令和3年11月	作業療法ジャーナル　55	セラピストの移乗動作中の腰部筋の筋電図から腰痛を発生させないための動作上の工夫について考察した．体幹全体をなるべく屈伸させず，膝関節を用いた動作介助が有用であることが示唆された． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，論文推敲，一部執筆 共著者：谷口敦也，窪優太，飯塚照史
17. 2021年度リハビリテーション学科新入生における志望経緯に関する調査	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要第13	学部設置3年目を迎えたリハビリテーション学科においては，定員充足率増加に伴い新入生の進学経緯も多様になっているものと考えられる．そこで，3期生においてアンケート調査を実施し，2期生との比較を通じてその傾向について比較検討した．結果，当初における職業選択は変更されることなく，近しい人物への相談を伴ったオープンキャンパスへの参加，加えて本学近隣環境等への好感を以て進学を決定している経緯があり，2期生との大きな変化はなかった．一方で，プレゼンスの高まり，教員対応への肯定的意見と捉えられる側面もあり，本学魅力の一端として認識する必要性が示唆された．以上の結果は，今後の広報戦略に資するものであると考えられた． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集・解析，論文執筆 共著者：飯塚照史，辻下守弘、池田耕二、城野靖朋、中島大貴

18. Factorial validity and internal consistency of a practitioners' checklist for therapists in rehabilitation (リハビリテーションにおける療法士のための実践者用チェックリストの因子的妥当性と内的整合性) (査読付)	共著	令和3年12月	JBI Evid Implement	病院・訪問で働く療法士を対象にリハビリテーション実践におけるチェックリストの因子的妥当性と内的整合性を検証した. 分析対象は385人で, 4因子20項目のモデル適合度はRMSEA0.083, GFI0.843,AGFI0.799で、因子間の相関は0.67-0.95, 各因子からの因子負荷量は20項目すべてで0.41以上だった. Cronbach's α係数は0.896, 0.890, 0.935, 0.925だった. 本人担当部分：研究計画策定, 論文推敲, 一部執筆 共著者：Ohura t, Tsuyama T, Furusawa M, Iitsuka T
19. 上肢固定を必要としない橈骨遠位端骨折症例におけるバランス機能の経時的推移	共著	令和5年12月	作業療法45巻6号, 163-	橈骨遠位端骨折受傷後1 ヵ月間は大腿骨近位部骨折の発生リスクが急増するとされる. この一因として, 外固定がバランス機能に影響するとされるが, 近年では外固定を必要としない早期運動療法の報告がなされている. 本研究では, 早期運動療法例を対象に, バランス機能の継時的変化について検討した. その結果, 動的・包括的バランス機能において術後1 週間で低下することが明らかとなった. ただし, 転倒を招くとされるカットオフ値を下回っていなかった. このことから, 早期運動療法例の動的バランス機能の低下は転倒を誘発する"きっかけ" となり, その他の要因と重なることで術後に転倒リスクを増加させる可能性が示唆された. 本人担当部分：研究計画策定, データ収集, 解析, 論文推敲 共著者：稲垣慶之, 飯塚照史, 車谷洋, 太
20. 橈骨遠位端骨折に対する疾患特異的健康関連QOL尺度の開発	共著	令和5年6月	日本ハンドセラピィ学会	橈骨遠位端骨折に対する疾患特異的健康関連QOL尺度の開発を行った. 16名のハンドセラピィに関わる作業療法士・理学療法士より項目を抽出し因子分析を通じて26項目, 5因子から成るHRQOL for DRF-JHTSを作成した. 症状の変動が少ない2時点でのデータから級内相関係数を算出した結果, 0.7以上であり十分な再現性が確認された. また, 本評価法における【日常・社会生活活動】【手の使用に対する負担感】については高い併存的妥当性が確認された. 一方で, 【精神的負担感】【外出】【症状】の下位尺度については中等度の併存的妥当性であることから, 本評価法における独自的測定概念と捉えられた. 反応性についてはDASH-JSSHをわずかに下回るものの判定はLarge (大) であり, 十分な反応性を有しているものと捉えられた. 以上から, HRQOL for DRF-JHTSは疾患特異的尺度としてハンドセラピィにおける臨床で十分使用できる指標であることが示された. 本人担当部分：研究計画策定, データ収集, 解析, 論文執筆 共著者：飯塚照史, 桂理, 野中信宏, 原田康江, 佐藤彰博

21. Relationship between Phase Angle and Physical Activity Intensity among Community-Dwelling Older Adults in Japan: A Cross-Sectional Study	共著	令和6年1月	Healthcare, 12 (2)	この横断研究は、地域在住の日本人高齢者における位相角（PhA）と身体活動強度との関連を明らかにすることを目的とした。また、高いPhAを予測するための身体活動の強度と時間についても検討した。本研究では、地域在住の高齢者67名（平均年齢78.3±5.5歳、女性83.6%）を対象とした。参加者の身体活動と体組成を測定した。身体活動量は三軸加速度計を用いて測定し、その結果から1日当たりの軽度身体活動量（LPA）と中等度～強度の身体活動量（MVPA）時間を算出した。体組成はInbody S10を用いて測定し、右半身の測定値からPhAを算出した。ベイズ統計モデリングにより、交絡因子を調整した後でも、PhAとMVPA（β＝0.256；P＝0.022；95%ベイズ信頼区間[CI]＝0.001、0.012）との関連が認められたが、LPA（β＝-0.113；P＝0.341；95%ベイズCI＝-0.002、0.001）との関連は認められなかった。MVPAのカットオフ値は19.7min/d（感度＝0.906、特異度＝0.429）であった。これらの結果は、高齢者のPhAを増加させる戦略を開発するために使用することができ、MVPAがこの集団において重要であることを示唆している。 本人担当部分：データ収集，論文推敲 共著者：Daiki Nakashima, Keisuke Fujii, Yoshihito Tsubouchi, Yuta Kubo, Kyosuke
22. Associations between cognitive function and muscle quality among community-dwelling older adults: a cross-sectional study.	共著	令和5年3月	Experimental Aging	本研究では，地域在住高齢者の筋質と認知機能の関連について調査することを目的とした． 参加者は地域在住高齢者40名（平均78.85±6.40歳、女性31名）であった． 目的変数をCOGNISTAT Five のMCI Index，説明変数をecho intensity (EI) で示される筋質，共変量を年齢，性別，骨格筋量指数，歩行速度，身体活動レベルとし，ベイズ統計による重回帰分析を実施した．EIはMCI Index と有意に関連した (EAP= 0.04 [95% ベイズ信頼区間: 0.01, 0.07], t = 2.47, β = 0.41, p = 0.019)．地域在住高齢者において，筋質は認知機能に関連する可能性が示唆された． 本人担当部分：データ収集，論文推敲 共著者：Kyosuke Yorozuya, Daiki Nakashima, Keisuke Fujii, Kento Noritake, Yuta Kubo, Yoshihito

23. 握力測定の課題と現状	共著	令和5年3月	日本手外科学会雑誌40巻4	握力は機能評価として頻用されるが，測定方法により値が変化するため，測定方法の統一が推奨される．米国ハンドセラピィ学会では「Jamar 式握力計を使用し，握り幅はハンドルポジション2，座位・肘90 度屈曲位で3 回測定した平均値を代表値とする方法」を推奨しているが，現状では測定方法は統一されていない．そこで本邦における握力測定の実態調査を目的に，2022 年に日本手外科学会会員を対象にWeb アンケート調査を実施した．660 名より回答があり（回答率18.4%），多くの会員が「Smedley 式握力計を使用し，握り幅は毎回異なり，立位か座位の肘伸展位で，1 回測定値を代表値とする」ことが判明し推奨方法との乖離を認めた．Jamar 式握力計は高価で大型なため普及しにくく，近年はSmedley 式握力計の研究も多くみられる．信頼性があり現状に即した実用的な握力測定方法の基準化が望まれる． 本人担当部分：研究計画策定，論文推敲 共著者：金内ゆみ子，村瀬剛，西脇正夫，小田桐正博，阿久津祐子，志村治彦，飯塚照史，茶木正樹
（その他） ＜国際学会＞ 1.A pilot study of influences of the thumb abduction limitations on the control of the rice-ball precision grip （母指外転制限による茶碗把持への影響に関する予備的検討）	-	平成26年6月	16th international congress of the world federation of occupational herapists （第16回世界作業療法士連盟大会：横浜）	模擬的に母指関節角度を制限し，茶碗保持への影響を筋電図および関節角度をパラメータとして比較検討した．直径11センチの茶碗保持においてMP関節可動域，母指球筋の筋積分値増加が認められた．実践にあっていずれかの関節に制限が認められた場合，当該関節および筋に対する配慮が必要であることがわかった． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿推敲 共同発表者：辻村雅美，飯塚照史，宮本定治
2. Occupational therapy approaches for bi-lateral metacarpal hands; A case report which have returned to work through proposing a treatment plan by patient’s desires （両側メタカルパルハンドに対する作業療法；患者の要望に合わせた治療方針提案により復職に至った一例）	-	平成26年6月	16th international congress of the world federation of occupational herapists （第16回世界作業療法士連盟大会：横浜）	両側の手指切断および母指の一部挫滅によるメタカルパルハンドの患者に対し，いくつかの治療方針を医師とともに提案しながら，本人の希望に沿った治療を行なった．結果的に足趾移植術を選択され，5年後の追跡調査においてもボタン操作や書字なども実施しており，有用であった． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿作成 共同発表者：飯塚照史，宮本定治，高見昌史
3. The effect of mixed tasks on pretraining for grasping tasks with a fixed gripping power: A preliminary study （つまみ力一定把持課題の事前練習に対する混合課題の影響：予備的検討）	-	平成29年11月	5th congress of the Asia Pacific Federation for Societies for Hand Therapy （第5回アジア太平洋ハンドセラピィ学会：フィリピン）	本研究では健常人を対象に，事前練習の有無が混合課題によって阻害されるか否かによってその客観的区別の可能性について予備的に検討した．結果，前頭前野における活動領域が大きいほど，一定のつまみ力に対する筋電図振幅が漸減していた．つまり，前頭前野の負荷をかけても末梢で学習が起きている状況であれば，運動学習が進行しているものと捉えられ，客観的指標の一つして提案した． Terufumi Iitsuka, Katsuyuki

4. LONGITUDINAL RECOVERY OF LATERALITY IN THE UPPER EXTREMITY ACTIVITY AFTER DISTAL RADIUS FRACTURES	-	令和5年8月	国際バイオメカニクス学	橈骨遠位端骨折は上肢骨折のなかでも最もポピュラーである．リハビリテーションの対象となることも多く，主要アウトカムは関節可動域や筋力となる．一方で，運動機能の回復が必ずしも日常生活での障害上肢の使用に繋がっていないケースも散見される．近年，客観的に日常生活内での障害上肢活動を測定する方法として加速度計によるモニタリングが注目されている．橈骨遠位端骨折については，日常生活での障害上肢の利用に影響する要因の一つに骨折の罹患側がある．人の手には側性があり，一般的には利き手が主要な動作を行い，非利き手が補助的な動作を行う．よって，利き手の骨折の方が非利き手の骨折より障害上肢の利用に影響し，左右対称な上肢活動になりにくいと考えられるが，未だ明らかではない．本研究では，術後1，４，８，12週までの上肢活動の継時的回復について，利き手と受傷側の影響を検討することを目的とした． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，論文執筆
「招待講演」 1. 手外科領域の作業療法	-	平成26年3月	滋賀県作業療法士会主催学術部研修会 （滋賀県栗東市）	滋賀県作業療法士会主催の研修会にて，他分野（脳卒中，精神疾患等）とともに，手外科領域における作業療法の展開について教示した．共通点として国際生活機能分類（ICF）を用いた障害像の捉え方，異なる点として医学的知識の重要性について説い
2. 橈骨遠位端骨折に対する作業療法	-	平成26年10月	滋賀県作業療法士会主催学術部研修会 （滋賀県栗東市）	滋賀県作業療法士会主催による研修会において，対応する機会の多い疾患として橈骨遠位端骨折について教示した．エックス線読影ならびに初期評価から抽出される問題点に対する運動プログラムの立案について具体的に教示したうえで，事例提示により
3. 臨床・教育・研究から捉えるハンドセラピィ	-	平成28年2月	九州ハンドセラピィ研究会第7回学術集会教育講演 （福岡市）	九州ハンドセラピィ学会における特別講演として，臨床，卒前卒後教育，研究の3領域にまたがる共通の問題点を明らかにしたうえで，今後の方向性について論じた．養成課程におけるハンドセラピィに関する教育の重要性とともに，実践において効果判定に資するアウトカムの開発の重要性を説いた．
4. Hand therapy for distal radius fractures Current trends	-	平成30年11月	Asia pacific wrist conference 2019 （narita, Japan）	アジア太平洋地域の手関節外科に関わる医師とセラピストが一同に会する国際学会において，本邦におけるハンドセラピィの実践状況とともに自身の研究内容について講演を行った．とりわけ，橈骨遠位端骨折に対する対応として本邦独自の装具やプログラムについて示し，早期からの拘縮予防の重要性について説いた．
5. Therapy for hand trauma: The importance of cooperation between surgeons and therapists	-	平成31年3月	18th shanghai international plastic and aesthetic surgery conference (Shanghai, china)	中国上海で行われた形成外科国際学会のセラピストセッションにおいて医師向けの招待講演を行った．本邦における外傷手の術後対応と初期治療後のリハビリテーションや機能再建に向けた対応について具体的に教示し，各時期に沿った独自の装具やプロ
6. 外傷手の予後予測	-	平成31年4月	第31回日本ハンドセラピィ学会（北海道札幌市）	ハンドセラピィにおいて比較的頻度の高い外傷として，屈筋腱損傷，伸筋腱損傷，骨折（主に橈骨遠位端骨折），末梢神経障害，手指再接着術後，手指切断に焦点を当て，その予後に影響する因子あるいは臨床上のcritical point（臨界点）とその対応方法等について概説した．

7. 外傷手に対するハンドセラピィと効果判定について	-	令和元年5月	京都ハンドセラピィ研究会（京都）	外傷手のハンドセラピィにおけるアウトカムに着目し，その得点を解釈することの重要性について述べた．併せて，現在進行中の研究における中途報告も兼ねて行い，ハンドセラピィ効果を判定するための新規アウトカム開発の重要性について説いた．
8. 関節外骨折に対する手術例のセラピィ	-	令和元年9月	第12回手関節外科ワーク	橈骨遠位端部における関節外骨折はAO分類のA2およびA3に該当し，60歳以降で高頻度となることからosteoporosisの影響が示唆される．したがって，骨折の連鎖を予防し健康寿命の延伸に資するためには，日常生活において十分に使える手での早期社会復帰が望ましい．これに対する特異的なハンドセラピィ手技は存在しないものの，前述の背景を踏まえると，如何に早く回復させ，それをどのようなアウトカムで判断するのかが最大の関心事であると捉えられる．以上を基に，本シンポジウムではハンドセラピィパスの紹介，外科的対応も含めた早期回復への工夫，新規的アウトカムの提案の3点を通じ，関節外骨折に対するセラピィについて述べた．
9. Preliminary study on the usability of a tri- axial accelerometer: Evaluation of how postoperative distal radius fracture patients use their hands in ADL (3次元加速度計の有用性に関する予備的検討：橈骨遠位端骨折後の患者の日常生活における評価)	-	令和元年3月	APFSSH/APFSHT2020	橈骨遠位端骨折に対するハンドセラピィでは，日常生活で不自由なく使用できる手の獲得を目標とする．これに対し，Lang CEらはウェアラブル加速度計での計測方法を開発し脳卒中患者に適用して上肢使用量の把握に有用であったことを報告している．本研究ではこの方法論を橈骨遠位端骨折患者に適用し，経時的推移および機能的結果との関連性について検討した．結果，受傷側手の使用時間は手関節角度，握力に，また，両手の使用時間と患者立脚型評価の間に正の相関関係が認められた．さらに，Total magnitude ratio（左右のvector magnitudeの比）が健常人の閾値以下の場合，機能的回復が劣る傾向にあった．以上から，ウェアラブル加速度計は橈骨遠位端骨折後の日常生活における上肢活動量の計測に有用である可能性がある．しかし，いくつかの限界もあるため，更なる検討が必要である．
10. 橈骨遠位端骨折に対する作業療法と最近のトピック	-	令和2年9月	第53回日本作業療法学会	橈骨遠位端骨折に関する現時点での研究のトレンドを踏まえ，費用対効果に優れる早期ハンドセラピィ開始および早期終了について根拠を説明した．さらに，これに資するアウトカムの開発が本骨折に対するハンドセラピィ技術の継承・発展において喫緊の課題と捉えられる点について論じた．
11. 複合組織損傷に対するハンドセラピィ	-	令和3年1月	第8回中部日本ハンドセラピィ研究会（名古屋）	複合組織損傷を伴う外傷手について，機能面としてどのような手を目指すのか（戦略）と，どのようにその手に近づけるのか（戦術）という観点で治療方針の概略をつかむことの重要性について述べた．具体的な戦略について鎌倉（1989）の分類に基づく8種類の手の用途を意識し，逆算的に戦術を捉える点について論じた．プログラム策定にあっては，各関節において可動・安定に係る優先性，ならびに増強すべき筋等を踏まえて訓練時間や頻度などを決定することについて提案した．
12. 拘縮に対する徒手療法		令和4年2月	第9回中部日本ハンドセラピィ研究会（名古屋）	ハンドセラピィ中に発生する拘縮に対して予防を主とした徒手療法について，拘縮発生のメカニズムと自身の研究を踏まえて概説した．具体的方法論についてもデータとともに動画を用いて説明した．

13. PT・OTのためのハンドセラピィ		令和4年5月20日	医学書院セミナー	書籍出版に併せて当該内容を基とした実践での応用について説明した.
14. 外傷手の予後予測		令和4年7月30日	金沢ハンドセラピィ研究	初療時所見から外科的対応を予測し，機能低下を未然に防ぐ対応について説明した.
15. 専門作業療法士の実践　養成校教員の立場から		令和4年9月16日	第56回日本作業療法士学	養成教育に際して，作業療法士の専門性を高めるために学生の傾向を踏まえ，教示すべき内容や最新のトピックと作業療法との関連性から，その内容についての考えを説いた.
16. 私の考える　Translational Hand therapy		令和5年1月20日	なにわハンドセラピィ研	ハンドセラピィ領域の学術的知識の整理とともに，近接あるいは遠隔領域にある内容とコラボレーションすることで，新規的提案が出来ることについて説いた．とりわけ，骨折後の転倒リスクについて継続中の研究内容を一部紹介し，将来的展望についても教示した.
17. 作業療法にできることってなんだろう		令和5年2月21日	奈良県作業療法士会	作業療法学分野における可能性や臨床実践にあたるうえでの心構え，概念等について説明した．作業療法の定義にとらわれず，今後の展望を踏まえた対応が必要であることを説いた.
18. スプリント療法の紹介		令和5年3月23日	帝人ヘルスケア株式会社主	スプリント療法の概念を紹介し，痙縮治療に資する内容を文献的考察を踏まえて説明した．参加者は個人開業医が多く，地域貢献としての可能性についても説明した.
19. 上肢外傷後の可塑的変化とハンドセラピィへの応用		令和5年9月	日本ハンドセラピィ全国	上肢外傷後における各種の変化について文献的考察も含めて発表した. 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，論文執筆 共著者：飯塚照史，藤井大起，稲垣慶之，車谷洋，太田英之
20.スプリント療法の実際		令和6年2月	第29回広島県作業療法学	スプリント療法について概要及び実践について教示し，作製実習を行った. 本人担当部分：講義，作製
「シンポジウム」 1. DASH　MCIDを指標とした橈骨遠位端骨折術後リハビリテーションの至適期間の構築	-	平成26年2月	中部日本手外科研究会（下関）	橈骨遠位端骨折術後のリハビリテーションについて臨床的に意味のある差（MCID）を指標とした場合，開始時期は可及的早期が望ましく，リハビリテーション至適期間は8週であることが示唆された．また，手関節尺屈可動域と握力が終了時期を見極めるた
「成果報告書」 1.学生のコミュニケーション技能向上に向けたプログラム開発と評価に関する研究	共著	平成28年3月	星城大学元気創造研究センター助成研究	平成25年度から27年度までの助成研究についてその進捗および成果を報告した．年度ごとに対象となる学生が異なるにも関わらず，臨床実習前の学生の不安傾向が普遍的であることと，これに沿ったコミュニケーションプログラムが有効である可能性を指摘した. A4判全3項 共著者：飯塚照史，竹田徳則，綾野眞理，

2.「若手研究B」適切なリハビリテーション期間の決定に関わる因子の探索的研究	単著	平成28年6月	科学研究費助成事業研究成果報告書	橈骨遠位端骨折に対するリハビリテーションはおおむね3か月で終了するが，その正当性は不明である．患者自己記入式の評価得点を指標としてデータを検討すると，術後3日程度から開始するリハビリテーションは支持されるが，その効果は8週間程度までであった．さらに，リハビリテーションの終了は医療者と患者の合意によって成り立っているため，双方のリハビリテーション継続に対する認識を加味した検討を行った．その結果，関節可動域や筋力などの客観的指標との関連は見当たらなかった．日常生活における手の使用を以て改善する部分が大半を占めている現状から，リハビリテーション期間は現状よりも短期間にするべきであることを指摘した．
3.運動学習段階を捉える新規的指標の開発に関する基礎的研究 － 健常若年者と高齢者の比較 －	共著	平成29年2月	一般社団法人日本ハンドセラピィ学会 研究助成事業2016年度 学研究課題研究成果報告書	本研究では若年者および高齢者を対象に運動学習に相違があるか否かについて検討する事を目的とした．実験はrest（20秒）－task（30秒）を繰り返すブロックデザインとし，taskは3種類とした（A：n-back課題，B：最大つまみ力の3割を保持する課題，C：task Aとtask Bの混合課題）．データは近赤外線分光法（NIRS）による前頭前野の脳血流量（Oxy-Hb），および筋電図（第1背側骨間筋：FDI，橈側手根伸筋：ECR）とした．対象は，若年者4名（平均年齢21歳，女性），高齢者2名（67歳，80歳，女性）とし，ランダムに事前に一定のつまみ力発揮を十分に練習する群（事前練習群：若年者2名，高齢者1名）と，確認のみで練習をしない群（非事前練習群）に分けた．結果，task A，Bにおける脳血流量の差異はいずれの群にても認められなかった．一方で，task Cにおいては，脳血流量の差異はほとんど見られないにもかかわらず，事前練習群では特にECRの活動電位が漸減していた．未解析ではあるが，同様の傾向は高齢者にても認められた．今後，さらに解析を実施することで傾向を明らかにすることが出来るものと考えられる．本結果が共通となれば手外科領域における腱移行術などでの習熟度を示す方法論の検討に資するものと思われた．
4.「基盤C」健常人と腱移行術症例に対する前頭前野負荷と運動学習遅延に関する実証的研究	共著	令和元年6月	科学研究費助成事業研究成果報告書	A4判 リハビリテーション分野での応用を視野に，運動学習の過程における「認知段階」および「連合・自動段階」の客観的区別を可能とする方法および指標の提案を研究目的とした．予備的検討結果に基づき，特定の課題について事前に十分練習をした者は，当該課題を遂行中に前頭葉活動を賦活するための課題を同時に与えても，効率性良く筋出力を発揮するものと仮定し検証した．事前に練習しない者と比較した結果，一部は仮説を支持する傾向が認められた．一方で，健常被験者において生来持ち合わせている運動経験の影響も考えられるため，患者群への応用は限定的であるものと考えられた．そのため，よりBalisticな運動としての指タッピング動作を課題としたところ，当該動作における筋収縮の効率性が，比較的明確な指標となる可能性が考えられた．今後は，臨床実践での応用が望まれる． A4判全5項 共著者：飯塚照史，岩月克之

1. 手指・母指損傷後の患者を対象とした自己機能・能力障害評価表の開発	-	平成26年4月	第26回日本ハンドセラピィ学会（沖縄）	ハンドセラピィ学会受託研究であり，疾患特異的QOL評価表の開発を開始した．第１期である本研究では，母指・手指で特異的に支障をきたすと考えられるADL項目を抽出し，因子分析にて24項目に絞った． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿推敲 共同発表者：原田康江，佐藤彰博，野中信宏，飯塚照史，桂理，安部幸一郎
2. 逆説性歩行を用いた課題志向型訓練に取り組み，歩行開始遅延・歩行中のすくみ足に変化が見られた一例	-	平成26年10月	第8回パーキンソン病・運動障害疾患コングレス（京都）	姿勢反射障害・筋強剛の症状によりすくみ足・動作緩慢が出現し，トイレ動作時または移動時に困難を感じている初期パーキンソン病患者に対し，先行研究で示されている外的手掛かりに加え，これに方向転換課題を組み込むことで，より生活動作内容に近い状況を設定した．その結果，自覚・他覚ともに歩行速度・動作緩慢は改善し、トイレまでの歩行動作質向上が得られた． 本人担当部分：研究計画策定，原稿推敲 共同発表者：金坂有紀，児島範明，宮本定治，飯塚照史，梅本安則
3. 手外科疾患における疾患特異的QOL評価表の開発-肘部管症候群-	-	平成27年4月	第27回日本ハンドセラピィ学会（東京）	ハンドセラピィ学会受託研究であり，疾患特異的QOL評価表の開発を開始した．第１期である本研究では，肘部管症候群で特異的に支障をきたすと考えられるADL項目を抽出し，因子分析にて20項目に絞った． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿推敲 共同発表者：野中信宏，佐藤彰博，原田康江，飯塚照史，桂理，阿部幸一郎
4. 手外科疾患における疾患特異的QOL評価表の開発-橈骨遠位端骨折	-	平成27年4月	第27回日本ハンドセラピィ学会（東京）	ハンドセラピィ学会受託研究であり，疾患特異的QOL評価表の開発を開始した．第１期である本研究では，橈骨遠位端骨折で特異的に支障をきたすと考えられるADL項目を抽出し，因子分析にて26項目に絞った． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿推敲 共同発表者：桂理，佐藤彰博，野中信宏，原田康江，飯塚照史
5. 手指・母指損傷後の患者を対象とした自己機能・能力障害評価表の再現性と妥当性	-	平成27年4月	第27回日本ハンドセラピィ学会（東京）	ハンドセラピィ学会受託研究であり，疾患特異的QOL評価表の開発を開始した．第2期である本研究では，母指・手指損傷に関して第１期で試作した評価表の再現性と妥当性を検証した． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿推敲 共同発表者：原田康江，佐藤彰博，野中信宏，飯塚照史，桂理，阿部幸一郎

6. コミュニケーション講座受講学生の実習直前の不安要因と実習成績との関連に関する探索的検討	-	平成27年10月	第20回日本作業療法教育研究学術集会（奈良）	養成教育過程における臨床実習前に学生に対して職業倫理の涵養も踏まえたコミュニケーション講座を実施した．学生の実習前の不安は多種多様であり，さらにこれと実習における評価得点には関連性はなかった．しかし，実習に対する不安傾向の特徴から，今後の講座展開に資する示唆を得た． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿作成 共同発表者：飯塚照史，今井あい子，綾野
7. 橈骨遠位端骨折手術例におけるセラピィ終了時期に影響を与える要因.	-	平成28年4月	第28回日本ハンドセラピィ学会（広島）	先行研究にて当研究グループではハンドセラピィパスを作成し，その有用性を述べてきた．しかし，パスに適用されない患者についての検討がなされていないため，実施した．その結果，骨折系と掌屈可動域，握力がその要因として挙げられ，これらに対する対策が良好な成績を安定して獲得するためのポイントであることを指摘した．また，握力増強に有用な訓練としてタオル絞りを提案した． 本人担当部分：データ収集，解析，原稿推敲 共同発表者：稲垣慶之，桂理，飯塚照史，
8. 手指屈筋腱断裂の術後成績不良因子とセラピィのアウトカム評価について	-	平成28年7月	第16回東海北陸作業療法学会（金沢）	後方視的検討により手指屈筋腱断裂の成績を検討した．ROC解析の結果，術後６週時点におけるカットオフ値が見出され，臨床的な指標となる可能性が示唆された． 本人担当部分：データ収集，解析，原稿推敲 共同発表者：稲垣慶之，服部順和，飯塚照史，太田英之，渡邊健太郎
9. 橈骨遠位端骨折に対する掌側ロッキングプレート固定術後のリハビリテーションにおけるHand20のMinimal Clinically Important	-	平成29年4月	第29回日本ハンドセラピィ学会（名古屋）	橈骨遠位端骨折後のハンドセラピィにおいて多用されるHand20の臨床的に意味のある差（MCID）を検討した．結果，術後４周をベースラインとした時に，12週時点で33点以上の変化がある場合に，患者も満足するという結果であった． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，分析，原稿作成 共同発表者：飯塚照史，岩月克之，西塚隆伸，平田　仁
10. 運動学習段階を捉える新規的指標の開発に関する基礎的研究；健常若年者と高齢者の比較	-	平成30年4月	第30回日本ハンドセラピィ学会（東京）	本研究では，同時注意要求課題を与えた際の筋出力と筋電図振幅，ならびに前頭前野の活動領域から運動学習段階を区別する新規的指標が若年者と高齢者に普遍的であるか否かを検証することを目的とした．結果，同時注意要求課題を与えた際の前頭前野活動領域は拡大し，かつ事前練習を行った者にあっては，運動習熟値（筋出力を筋電振幅で除した値）が増加する傾向にあり，若年者と高齢者で共通であった．しかし，本研究における実験課題等については，再現性や客観性を担保するべく今後の検討が必要である． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，分析，原稿作成 共同発表者：飯塚照史，冨山直輝，稲垣慶之

11. 患者および医療者側のハンドセラピィ継続要否を基とした橈骨遠位端骨折後のリハビリテーション至適期間策定に関する探索的研究	-	平成31年4月	第31回日本ハンドセラピィ学会（札幌）	本研究では，「患者，セラピスト双方におけるハンドセラピィ効果の認識を通じて治療継続の要否を判断している」と仮説を立て，これに影響する因子の特定を目的とした．結果，ハンドセラピィ継続の要否におけるセラピストと患者間の齟齬は，術後8週以降で顕著であり，影響因子として，セラピスト側では機能的因子，患者側ではHand20が一貫して挙げられており，双方でハンドセラピィ効果を判断する指標は異なるものと推測された．一方で，共通因子としてのHand20があることから，これを主要評価項目としたハンドセラピィ至適期間の策定が望まれた． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，分析，原稿作成 共同発表者：飯塚照史，加藤宗一，岩月克之，平田仁
12. 手外科疾患における疾患特異的QOL評価表の開発-橈骨遠位端骨折質問票試案の再現性・妥当性の検証-	共著	平成31年4月	第31回日本ハンドセラ	橈骨遠位端骨折に対するハンドセラピィ効果を判定するための患者立脚型評価表について述べた，本発表ではその再現性と妥当性を検証し，他の評価表と比較しても遜色ないことを確認した．
13. 橈骨遠位端骨折術後の抑うつは満足感に関連するか　―多施設間研究―	共著	平成31年4月	第31回日本ハンドセラ	抑うつとは，気分の落ち込みや興味・喜びの喪失などうつ症状が出現している状態のことであり，橈骨遠位端骨折の術後成績と関連があるとされている．抑うつが橈骨遠位端骨折の術後成績に影響するのであれば，患者の満足感にも影響する可能性があると考えられる．検討の結果，術後の抑うつと，手の機能の一部に関連があったが，患者が手の機能に満足する時期やリハビリテーション終了を希望する時期との関連はなかった．よって，橈骨遠位端骨折術後の抑うつは満足感に関連しないと考えられた．
14. 患者および医療者側のハンドセラピィ継続要否を基とした橈骨遠位端骨折後のリハビリテーション至適期間策定に関する探索的研究	共著	平成31年年4月	第31回日本ハンドセラ	橈骨遠位端骨折後に最大限の機能的回復を得るには1年以上の期間を要する（Swart E, 2012）ため，短期的かつ費用対効果に優れるハンドセラピィ至適期間の策定が望まれ，Cochrane review（Handoll H, 2015）においても強調されている．一方で，口頭指導が定型的なハンドセラピィよりも機能的回復に優れることが報告されており（Souer JS, 2011），その効果を機能的因子のみで説明するには限界がある．本研究では，「患者，セラピスト双方におけるハンドセラピィ効果の認識を通じて治療継続の要否を判断している」と仮説を立て，これに影響する因子の特定を目的とした．その結果，ハンドセラピィ継続の要否におけるセラピストと患者間の齟齬は，術後8週以降で顕著であり，影響因子として，セラピスト側では機能的因子，患者側ではHand20が一貫して挙げられており，双方でハンドセラピィ効果を判断する指標は異なるものと推測された．一方で，共通因子としてのHand20があることから，これを主要評価項目としたハンドセラピィ至適期間の策定が

15. 橈骨遠位端骨折患者の上肢活動の経時的回復における損傷側別特徴	共著	令和4年4月	第34回日本ハンドセラ	左右上肢の活動量から受傷側と非受傷側の回復特徴につき報告した．利き手の回復が速やかとなる一方で，非利き手の回復が遅延していた．また，相関する機能的指標とも相関が異なっており，損傷側別の特徴を踏まえたハンドセラピィにつき提案した．
16. 日本ハンドセラピィ学会作成関節可動域・握力測定マニュアル	共著	令和5年4月	第66回日本手外科学会	日本ハンドセラピィ学会および日本手外科学会機能評価委員会を代表して，関節可動域および筋力測定マニュアルの作成経緯，内容等について説明，発表した． 共著者：飯塚照史，小田桐正博，茶木正樹，越後歩，大森みかよ，大山峰生
17. 複合組織損傷ときこそ問われる理想の手外科診療システム	共著	令和5年4月	第35回日本ハンドセラ	複合組織損傷に対する新規的治療にあたり，ハンドセラピィ上の工夫も兼ねて説明された． 共著者：松末武雄，吉見育馬，藤井大起，

（注）
1 最近１０年間の教育活動、研究活動について作成すること。

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　６年　３月　31日

氏名　池田　耕二

研究分野	研究内容のキーワード
リハビリテーション科学，理学療法学，教育工学	理学療法学・理学療法教育，教育工学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 1）図示化教材と臨床現場を体験できるスライド教材を用いたシュミレーション教育の実践	平成18年4月 ～ 平成25年9月	大阪医療福祉専門学校　理学療法学科 担当授業科目：理学療法治療学Ⅱ 授業は，暗記型の授業ではなくできるだけ理学療法とはどういったものか考えることができるような授業にした．そのために授業資料は図によって見やすくレイアウトしたものを用いたり，臨床現場のスライド等をみせつつ，学生自身に実際現場に立てばどういった態度や評価，実践を行うかを問いながら，シュミレーショを交え学生とともに検討するスタイルにした．また，ときには勉強の仕方や資料の調べ方など，実践現場で臨床を行いながらどのように勉強していくのか等を，経験を交えて教示した．その結果，学生は理学療法実践するにあたって自分に何が足らないかを再認識し，自ら勉強しなければならないという姿勢を学ぶことができたと考える．
2）ペイパーペイシェントとインターネット活用による認知スキルトレーニングの実践	平成23年4月 ～ 平成26年3月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部　理学療法学科 担当授業科目：理学療法技術実習2，総合技術特別実習3 授業は，理学療法の認知スキル，つまり技術の一つとしての理学療法臨床推論について講義した．ペーパーペイシェントを用いて問題を抽出し，それを基に仮説生成しながら理学療法プログラムを立案する作業を行った．また，その際にはインターネット等を活用し，実践型の授業を展開した．その結果，問題を解決していこうとする姿勢や具体的な解決方法を学ぶことができた．
3）個々の学生の習熟度に合わせた学外実習指導	平成24年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当授業科目：理学療法体験実習，評価実習，総合臨床実習 学外施設で行われる各臨床実習を，個々のレベルに合わせて円滑に行えるようにするため，実習前には各学生と個人面談を行い，知識の習熟度，コミュニケーション能力，その他，不安なことを確認し，それを学外施設の指導者と共有しながら実習を行った．必要に応じて実習前に実技練習を行ったり，また何度も学外施設に出かけたり，学生との面談を繰り返したりした．　これにより学生のレベルに合わせた実習が可能となり，個々の学生が成長できた．

事項	年月日	概　　要
4）チーム別体験学習による教育実践	平成26年4月 ～ 平成28年9月	大阪行岡医療大学 医療学部　理学療法学科 担当授業科目：日常生活活動学演習 授業では，代表的な疾患を整理しながら，日常生活活動の評価法を教授し実践させた．また，障がい別に日常生活活動や生活関連動作の評価や動作指導，介助方法等についても，疑似体験させ理解を深めさせた．チーム別にレポートをまとめさせることでチームアプローチの重要性を体験させ，実際の現場で口頭指導ができるような体験も取り入れた．これにより日常生活活動における評価や指導力がついた．また，学年によっては理解を深めるために，班長には別に1コマ時間を作り，実践を教授し，それを伝えさせる練習も加えた．これにより学生の学習も進んだ．
5）高齢患者の動画教材を用いた教育実践	平成26年4月 ～ 平成30年9月	大阪医療福祉専門学校　理学療法学科 担当授業科目：老年学 大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当科目：老年期疾病論，老年期障害理学療法 授業では，学生があまり触れることない高齢者の身体的特徴をはじめ，疾患，環境についての講義を行った．その際には実際の患者の動画やデータを基に臨場感をもたせ，本学問と理学療法との関わりについて講義した．これからの高齢者には，地域における転倒，認知症，腰痛，生活習慣病に対する予防理学療法が大切になってくることも教授し，理解を深めた．これにより高齢者理学療法の実態を理解し，興味をもって老年学を学習できるようになった．
6）ペイパーペイシェントとインタ-ネットを活用したチームアプローチ実践	平成26年9月 ～ 平成29年3月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部　理学療法学科 担当授業科目：チームリハビリテーション特論 授業は，理学療法におけるチームアプローチによる臨床推論について講義した．ペーパーペイシェントを用いて問題抽出し，それを基に仮説を生成しながらチームアプローチによって理学療法プログラムを立案する作業を行った．また，その際にはインターネット等を活用し，実践型の授業を展開した．これによりチームアプローチによる臨床推論と理学療法プログラムの立案能力が養われた．
7）終末期・がん患者リハビリテーションにおけるスライド教材の作成と教育実践	平成28年9月 ～ 現在に至る	大阪電気通信大学　医療福祉工学部　理学療法学科 担当授業科目：基礎医学特論Ⅰ，臨床理学療法学特論 授業では，一般病院，地域におけるがんリハビリテーションについて教授し．生活の質を高めるための実際の工夫も加え，興味をひくように展開した．その際は，触れる機会の少ない終末期がん患者のリハビリテーションの風景のスライド教材を作成し，「生」や「死」，支援，ケアについて考えてもらうようにした．これによりがんリハビリテーションに対する知見を深めることができた．

事項	年月日	概　　要
8）予習，体験，復習シートを用いた訪問リハビリテーションにおける教育実践	平成28年9月 ～ 平成30年9月	大阪行岡医療大学 医療学部　理学療法学科 担当授業科目：地域リハビリテーション 本授業では，実際の現場の写真や動画を多用し，症例検討式にして実際の訪問リハが疑似体験できるように進めた．また，その際には，予習シート，体験シート，復習シートを作成し，現場に臨む姿勢，学ぶ姿勢，復習する姿勢を養うように工夫した．さらには，在宅における看取りまでの終末期理学療法をみてもらい，これからの訪問リハの有り方をともに考えることにした． また，地域リハビリテーションは，疾患だけでなく，地域特性や社会情勢からも大きく影響をうけたり，個々の価値観が大きく反映するため，書物を多く読んで考えることが大切となる．そこで,少し時間をかけて書物多く読んでもらい,レポート量も増やして熟考して貰う練習も行った．これにより,地域リハビリテーションの奥深さとかんがえることの大切さを学ばせた．
9）運動学I（総論）ワークブックを用いた教育実践	令和元年9月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目　運動学I（総論） 本授業では，運動学の総論を講義した．しかし，その範囲は非常に広く，どれも重要事項であるため，学生がどこから手をつけて良いかわかりづらくなっている．そのため，学生の学習意欲が下がる危険性も大きい．そこで，学習の方向性を示したり，運動学の理解を促すワークブックを作成し，それを用いて講義を行なった．これにより，自己学習を促し，学習意欲の低下を防ぐことができた．
10）オンデマンド・ライブ配信を行った学内・見学実習	令和2年8月 ～ 令和4年8月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目　早期体験実習（理学療法） 本実習は，外部の医療施設におもむき見学を通して学習を深めるものである．しかし，コロナ感染のため学内実習に切り替えた．できるだけ従来の実習に近づけるため，動画教材を作成し，病院からもライブ配信を実施した．さらには予習，復習のためのホームページも作成し，学習を変化にすすめた．これにより従来の見学実習と同程度の学習内容が得られたものと考える．ただし，実際に現場に行けなかったことは大きな不安材料になったことは否めない．

事項	年月日	概　　要
11）オンデマンド・ライブ配信を行った学内・地域理学療法実習	令和2年9月 ～ 令和4年9月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目　地域理学療法実習 本実習は，外部の介護保健施設，地域におもむき見学等を通して学習を深めるものである．しかし，コロナ感染のため学内実習に切り替えた．できるだけ従来の実習に近づけるため，動画教材を作成し，病院からもライブ配信を実施した．さらには予習，復習のためのホームページも作成し，学習を変化にすすめた．これにより従来の地域理学療法実習と同程度の学習内容が得られたものと考える．ただし，実際に現場に行けなかったことは大きな不安材料になったことは否めない．
12）予習・復習ワークシートを用いた徒手筋力検査学実習の教育実践	令和2年9月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目　運動器評価学I（総論） 本講義は，コロナ禍においてオンライン・対面のハイブリッドで実践されたため，実技時間が限られていた．そこで，できるだけ効率よく学習をすすめるために予習用ワークシートを作成し，これにより自己学習を促した．限られた実技練習の時間には，予習シートから理解度が低い考えられるところを抽出し，そこを重点的に説明できるようにした．これにより対面と同じ程度，学習効果を維持できたと考える．
13）課題ワークシートを活用した日常生活動作学演習の実践	令和2年9月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目　日常生活活動学演習 本演習は，コロナ禍においてオンライン・対面のハイブリッドで実践されたため演習時間が限られていた．そこで，できるだけ効率よく学習をすすめるために日常生活動作学演習の課題ワークシートを作成し，それをもとに考えるグループ学習を実践した．これにより演習は教える垂直型教育だけでなく，学生同士による平行型教育も可能となり，考える学習が実践できたと考える．これにより対面と同じ程度の学習効果が得られたとも考える．
14）高齢者のQOLを向上させるための外出プランの作成課題を通した地域理学療法学習	令和2年9月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目　地域理学療法学演習 本演習は，地域理学療法学を習得後，あらためて個々の対象者に対する地域理学療法学を演習を通して学ぶものである．本演習では，障害を有する高齢者を設定し，QOLを向上させる外出計画を個々に立案させた．立案計画は，同じ設定であっても多様な内容になることや，それぞれ意味合いが違うことを明らかにした．これらの実践により，地域理学療法学の多様性を学習できたと考える

事項	年月日	概　　要
２　作成した教科書，教材 1）図式化教材の作成	平成18年4月 ～ 平成25年9月	大阪医療福祉専門学校 担当授業科目：理学療法治療学Ⅱ 整形疾患に対する理学療法において，図で見る教材を作成し，視覚にうったえる教材を作成し，それに基づいて教育を行った．これにより教科書に苦手意識をもつ学生も興味をもって臨むようになり学習効果が向上した．
2）理学療法士のための物理療法臨床判断ガイドブック	平成19年9月 ～ 平成23年12月	病院現場における臨床実習指導 物理療法における浮腫に関する個所を担当し，ディシジョンツリーによって，わかりやすく治療を判断できるようにした（出版）．
3）認知症後期高齢者に対する理学療法の実践知の構造化による教材作成	平成20年4月 ～ 平成23年12月	病院現場における臨床実習指導 学生にとって対応が難しいとされる認知症患者の理学療法を指導する際に，認知症後期高齢者に対する理学療法から実践知を構造化し，図示化したものを活用し，臨床実習指導を行った．これにより学生は，認知症後期高齢患者の理学療法における方向性や概要が把握しやすくなり，学習効果が進んだ．
4）臨床における動作分析についてのプレゼンテーション資料（教材）の作成	平成22年6月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部　理学療法学科 特別講義：動作分析 病院における患者の状態を観察し，１）病態を探る，２）その能力から何ができるかを考える，３)動作の意味を考える，といったように動作分析の重要性や活用方法をわかりやすくするプレゼンテーション資料を作成した．これにより動作分析学習における導入が容易となり学習効果が向上した．
5）臨床における高齢者の理学療法(運動療法) 実践に向けたプレゼンテーション資料（教材）の作成	平成23年7月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部　理学療法学科 特別講義：臨床推論 高齢者の問題構造の把握や理学療法（運動療法）の設定方法を学ぶことを目的に，プレゼンテーション資料を作成した．これにより多角的な視点が必要となる高齢者理学療法の一端を体験することができるようになり学習効果が向上した．
6）高齢者理学療法における動画教材の作成	平成26年4月 ～ 平成31年3月	大阪医療福祉専門学校　理学療法学科 担当授業科目：老年学 大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当科目：老年期疾病論，老年期障害理学療法 授業では，高齢者の現場の実際の動画やデータを基に臨場感をもたせながら，本学問と理学療法との関わり動画教材を作成し講義した．これにより高齢者の理学療法が実感できるようになり，学生は興味をもって学習できるようになった．

事項	年月日	概　　要
7）終末期理学療法の実践	平成27年4月 ～ 平成30年3月	大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当授業科目　老年期障害理学療法学 終末期理学療法実践に関する教育方法を，熟達度に合わせて分かりやすく紹介した（出版）． 書籍名　終末期理学療法の実践　B5判　全208頁 編集者：日高正巳，桑山浩明 著者：池田耕二　本人担当部分：第2章　「終末期理学療法をどのように教えるか，そして学ぶか」pp7-13を単著.
8）地域リハビリテーション学習における予習，体験，復習シートの作成	平成28年9月 ～ 平成30年9月	大阪行岡医療大学 医療学部　理学療法学科 担当授業科目：地域リハビリテーション 本授業では，実際の現場の写真や動画を多用し，症例検討式にして実際の訪問リハが疑似体験できるように進めた．また，その際には，予習シート，体験シート，復習シートを作成し，現場に臨む姿勢，学ぶ姿勢，復習する姿勢を養うように工夫した．さらには，在宅における看取りまでの終末期理学療法をみてもらい，これからの訪問リハの有り方をともに考えることにした． また，地域リハビリテーションは，疾患だけでなく，地域特性や社会情勢からも大きく影響をうけたり，個々の価値観が大きく反映するため，書物を多く読んで考えることが大切となる．そこで,少し時間をかけて書物多く読んでもらい,レポート量も増やして熟考して貰う練習も行った．これにより,地域リハビリテーションの奥深さとかんがえることの大切さを学ばせた.
9）局所と全身からアプローチする運動器の運動療法	平成29年8月	運動器の運動療法の理解を深めるために，運動療法における歴史をまとめて紹介した（出版）． 書籍名　局所と全身からアプローチする運動器の運動療法　B5判　全342頁　編集者：小柳磨毅，中江徳彦，井上悟 著者：池田耕二　本人担当部位：第Ⅰ部　総論，1.運動器の運動療法とは，運動療法の歴史 pp14-17を単著.
10）訪問リハビリテーション アドバイスブック	平成30年3月	在宅での終末期にリハビリテーションにかかわるセラピストに求められる視点や，対象者と家族，周辺の人々とのかかわり方，セラピストの在り方について提言した
11）運動学ワークブック	令和元年9月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当科目　運動学I（総論） 運動学（総論）における学習意欲の低下を防ぎ，自己学習を促すために，ワークブックを作成し，それを授業に活用した.

事項	年月日	概　　要
12）徒手筋力検査学習のための予習・復習シートの作成	令和2年9月 ～ 令和6年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当科目　運動器評価学I（総論） コロナ禍における遠隔・対面のハイブリッド講義において，徒手筋力検査の学習を効率よく行うために予習復習シートを作成し活用した．
13）日常生活活動学演習のための課題シートの作成	令和2年9月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当科目　日常生活活動学演習 コロナ禍における遠隔・対面のハイブリッド講義において，徒手筋力検査の学習を効率よく行うために予習復習シートを作成し活用した．
14）理学療法臨床実習とケーススタディ	令和2年12月	コロナ禍で初めて行われた本学の学内実習の内容を紹介した（出版）． 書籍名　理学療法臨床実習とケーススタディ　B5判　285頁編集者：鶴見隆正，辻下守弘 著者：池田耕二　本人担当部分：With コロナ社会での学内実習の方法　pp50-59を単著
15）PT・OTのための運動学テキスト ： 基礎・実習・臨床	令和3年2月	運動学の理解を深めるために，補訂版を作成するにあたり編集・校正に加わり，運動学総論・等を紹介した（出版）． 書籍名　PT・OTのための運動学テキスト ： 基礎・実習・臨床　B5判　全570頁　編集者：小柳磨毅，山下協子，大西秀明，境隆弘 著者：池田耕二本人担当部分：主に運動学の定義，生体力学のページの大幅な修正・校正を行った．
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）　臨床実習施設における臨床実習生のアンケート調査	平成20年4月 ～ 平成23年3月	臨床実習施設において臨床実習生にアンケート調査を行い毎回臨床実習指導の評価を行った．その結果，評価としては「実習生に適した指導をしてもらえた」，「努力を継続することの必要性を学べた」，「親切丁寧に指導してもらえた」等があげられた．
2）大阪行岡医療大学における授業評価アンケート調査	平成26年4月 ～ 平成30年9月	大学授業評価の結果は，担当科目「日常生活活動」「日常生活活動演習」「老年期疾病論」「老年期障害理学療法」「地域リハビリテーション」「理学療法概論」において，「十分理解できた」，「理解できた」，「授業に情熱を感じた」等の評価を受けた．また，卒業研究ゼミにおいては，一番の人気ゼミとなっている．

事項	年月日	概　　要
3）奈良学園大学における授業評価アンケート調査	令和2年度 ～ 現在に至る	授業評価については，アンケートが実施された「運動学I」，「運動器評価学」，「日常生活動作学演習」「老年期障害理学療法学」において5段階中4.0程度の満足度が
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）　臨床実習指導	平成5年6月 ～ 平成23年3月	武部整形外科リハビリテーション，小川病院，道仁病院の各施設にて，臨床における理学療法業務において，実習指導者として理学療法の理論・技術の教授，実技の援助を実習生に対して行った．合計9校から，計83名の実習生を指導した．臨床現場で症例を数例担当し，理学療法実践を学ぶだけでなく，それ以外にもどのような準備や実践，チームワークが必要かも学んでもらった．また医療や社会のどのようなルールに基づいて理学療法が行われているのかも教示し学習してもらった．また，実践の中でどのように課題に取り組み，研究を行っていくのかも少し触れてもらうことにした．その結果，学生は理学療法評価や実践だけではなく，現場の諸仕事を学習し理学療法士のあり方を学習するにいたった．
	平成22年4月 ～ 平成23年3月	道仁病院にて臨床教育を有効に行うために構造構成主義を臨床教育に導入した構造構成的協同臨床教育法を開発し実践した．　昨今の理学療法臨床実習では指導者，学生ともに問題を有していることから，臨床実習の運営や指導が上手くいかないこともある．そこで考え方を根本から見直し，信念対立を解消することができる構造構成主義を基盤に新たな教育法を開発し実践した．そのことによって効果的に理学療法やその他のことを教示・学習しやすくなり臨床実習効果が向上した．
2）各施設（池田病院総合リハビリテーションセンター，大阪北警察病院，サンシティ―木津，大阪行岡医療大学など）の中堅理学療法士に対する教育，指導活動	平成25年4月 ～ 現在に至る	学生や新人理学療法士教育については，近年充実してきたが，中堅理学療法士が成長できる機会は，技術講習会や大学院を除いてほとんどない．そのため，業務管理や後輩指導，その他の技量アップや情報発信できる力を養うことを目的に，大学業務以外に個別に業務や学術指導を行ってきた．現在も中堅理学療法士の指導は継続実施であり，希望者があれば社会貢献目的で今後もそうした活動を継続する．

事項	年月日	概　　要
3)介護付有料老人ホームにおけるリハビリテーション業務のシニアアドバイザー	令和元年9月 ～ 現在に至る	介護付有料老人ホームのリハビリテーション室の立ち上げと業務等の指導・相談．老人ホームにおける理学療法の開発を担う．具体的には，リハビリテーション・ケアセンターうららかを開設し，実践の振り返りを通して，介護付き有料老人ホームのリハビリテーション・モデルを開発し提案している．
4）臨床実習指導者講習会　講師と世話人	令和2年度 ～ 現在に至る	2020年における理学療法養成校指定規則の改変による指導者の育成を行っている． 厚生省，日本理学療法士協会，奈良県理学療法士協会，奈良県理学療法養成校協議会による共同主催．
5）講演，シンポジウム ・公開講座である健康教室の企画・開催と講師	平成5年3月 ～ 平成10年3月	診療所（武部整形外科リハビリテーション）が市民に対して開いている健康教室の企画・準備・開催とその講師を行った．テーマは，腰痛，膝の痛み，肩の痛み，骨折などである．詳細については 医学書院，公衆衛生学の活動レポートとして出版された．論文名「健康教室」10年間の総括－公開講座を継続させる工夫－として（査読付）公衆衛生 61(7) 495－499，1997．
・痛みに対する低出力レーザー療法	平成7年11月	第3回物理療法研究会（神戸大会）講師 肩関節周囲炎患者に対する低出力レーザーは除痛効果があるものの，症例ごとには使用方法の再検討が示唆された．今後の課題としては照射条件や他の物理療法とのコンビネーション効果，使用時期などがあげられることを講演した．
・車椅子スポーツチャンバラの紹介	平成9年1月	第4回身体障害者スポーツ指導員養成講習会　講師 スポーツチャンバラを，患者や障がい者にリハビリの一環として，または楽しんもらうために車いすスポーツチャンバラとして開発し，実用していることを講演した．
・臨床実習における指導方法について	平成18年2月	大阪医療福祉専門学校実習指導者会議　講師 臨床実習指導には，知識や技術だけでなく感情面についての指導や配慮も必要であることを示唆し，具体的な手法と実践報告を講演した．
・臨床実習における指導方法の実際 ―臨床実習指導者からの提言―	平成19年7月	大阪府理学療法士会 臨床実習指導者研修会 講師 臨床実習生を知識・技術，感情面等からみると様々な学生がいることが理解できる．それに合わせて指導することが臨床実習指導を有効にできることを講演した．

事項	年月日	概　　要
・Bridge the gap － 臨床実習指導者の提言－	平成20年3月	行岡リハビリテーション専門学校 臨床実習指導者会議教育講演　講師 臨床実習では，指導者と学生の間に大きな隔たり，すなわちギャップがある．これを意識して指導することが有効な臨床実習につながっていくことを講演した．
・地域医療（小規模型民間病院）における終末期理学療法の実践　－事例研究の紹介－	平成21年2月	神戸大学就進会理学療法分科会 （神戸大学医学部保健学科同窓会）講師 地域医療における終末期がん患者，血液透析患者，遷延性意識障害患者等に対する終末期理学療法実践の内容を講演した．
・理学療法臨床実習をどのように実践していくか？	平成27年3月	三加茂田中病院（徳島）教育講師　講師 臨床実習指導について，知識や技術供与だけでなく，大切なことは学生が自然と伸びる場づくりであることを講演した．
・認知症を正しく知ろう	平成27年8月	大阪行岡医療大学健康教室　講師 地域住民の方に対して健康教室を開催し，認知症の疫学や予防方法，介護方法等について講演した．
・高齢者のリハビリテーション	平成27年12月	大阪行岡医療大学市民公開講座　講師 高齢者に多い疾患や障害の紹介とともに，それに対する予防方法や生活管理，制度，リハビリテーション等について講演した．
・理学療法士を育む	平成28年3月	宝持会　池田病院（大阪）教育講演　講師 池田病院の管理者研修の一環として，人材育成に関する方法論を理学療法士教育を通して講演した．
・人間科学リハビリテーションにおけるエビデンスを考える	平成29年1月	第13回人間科学リハビリテーション研究会　講師 人間科学においては，客観的実証主義に代表される数値化だけでエビデンスは作れないこと示唆し，現象学，構造構成学，接面等の考え方を利用すれば，新たな視点からエビデンスが作れる可能性が高まることを講演した．
・リハビリテーションと生活管理－寝たきりにならないために－	平成30年3月	宝持会総合健康づくりセンターハリーえいわ　市民健康講座　講師 寝たきりにならないためには，リハビリテーションが終了したあとも大切であることを伝え，生活管理として生活習慣の見直す，あるいは自己管理していくことが重要であることを講演した．

事項	年月日	概　　要
・リハビリテーションの視点から見た温泉旅行の可能性	令和元年11月	ユニバーサルツーリズム　阿智村シンポジウム2019 長野阿智村において開催されたユニバーサルツーリズムのシンポジウムにおいて，リハビリテーションにおける温泉旅行の可能性を講演した．
・現場の理学療法士育成論：経験学習を通して	令和3年11月	医療情勢の変化や働き方改革・等を背景に研修会や勉強会を重視した学習だけでは，現場の理学療法士（PT）教育・育成は限界にきている．そこで現場で行う経験学習に注目し，PTの経験学習プロセスの解明をもとに，現場教育・人材育成における支援方法を教示した．
・終末期・緩和ケアにおける在宅理学療法に求められる視点と対応	令和4年2月	緩和ケア・終末期の在宅理学療法における支持的理学療法の考え方や対応方法を講演した．具体的には，緩和期・終末期の定義や位置付け，終末期患者の特性，エンド・オブ・ライフケアという考え方，死と関係性など，緩和ケア・終末期の在宅理学療法の哲学的・実践的基盤について紹介した．
・学習し続ける組織の構築にむけて	令和4年2月	大阪府理学療法士会の理学療法士の中間管理職，管理職を対象に学習する組織の構築について講演した．講演内容は，現場経験に基づく組織づくりの内容に加え科学研究費による研究成果である理学療法士の経験学習プロセスの解明から導かれた経験学習支援方法を紹介した．
・緩和ケア領域における理学療法の紹介−理学療法士の可能性と広がる役割−	令和4年12月	緩和ケア領域における理学療法を紹介し，理学療法士の可能性と広がる役割について講演した．
・終末期・緩和ケアにおける在宅理学療法に求められる視点と対応	令和5年3月	緩和ケア・終末期の在宅理学療法における支持的理学療法の考え方や対応方法を講演した．具体的には，緩和期・終末期の定義や位置付け，終末期患者の特性，エンド・オブ・ライフケアという考え方，死と関係性など，緩和ケア・終末期の在宅理学療法の哲学的・実践的基盤について紹介した．
・緩和ケア・終末期のセラピストに求められる視点と対応―治療（キュア）と支援（ケア）をつなぐ―	令和5年11月	緩和ケア・終末期の在宅理学療法における支持的理学療法の考え方や対応方法を講演した．具体的には，緩和期・終末期の定義や位置付け，終末期患者の特性，エンド・オブ・ライフケアという考え方，死と関係性など，緩和ケア・終末期の在宅理学療法の哲学的・実践的基盤について紹介した．
・理学療法士の経験学習プロセスに基づく人材育成方法	令和5年11月	理学療法士の経験学習プロセスをもとに，現場の人材育成方法について紹介，講演した．

事項	年月日	概　　要
教育研究における research question の立て方 ～経験学習に関する研究から紐解く～	令和5年12月	自身の経験学習研究をもとに，教育研究における research question の立て方を紹介，講演した．
・老年療法における緩和ケアの重要性を考える 自分らしい人生に寄与する老年療法の新たな可能性	令和6年3月	老年療法における緩和ケア・終末期のリハビリテーションについての考え方や対応方法を講演した．具体的には，緩和期・終末期の定義や位置付け，終末期患者の特性，エンド・オブ・ライフケアという考え方，死と関係性など，緩和ケア・終末期リハビリテーションにおける哲学的・実践的基盤について紹介した．
・理学療法士の経験学習プロセスに基づく人材育成方法	令和6年3月	理学療法士の経験学習プロセスをもとに，現場の人材育成方法について紹介，講演した．
5　その他 ・理学療法士養成校における教育実績 （専任教員）	平成24年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学 医療学部理学療法学科 担当授業科目：理学療法体験実習，評価実習，総合臨床実習 専任教員 学外施設で行われる各臨床実習を，個々のレベルに合わせて円滑に行えるようにするため，実習前には各学生と個人面談を行い，知識の習熟度，コミュニケーション能力，その他，不安なことを確認し，それを学外施設の指導者と共有しながら実習を行った．必要に応じて実習前に実技練習を行ったり，また何度も学外施設に出かけたり，学生との面談を繰り返したりした． これにより学生のレベルに合わせた実習が可能となり，個々の学生が成長できた．
	平成26年4月 ～ 平成28年9月	大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当授業科目：日常生活活動学演習　専任教員 授業では，代表的な疾患を整理しながら，日常生活活動の評価法を教授し実践させた．また，障がい別に日常生活活動や生活関連動作の評価や動作指導，介助方法等についても，疑似体験させ理解を深めさせた．チーム別にレポートをまとめさせることでチームアプローチの重要性を体験させ，実際の現場で口頭指導ができるような体験も取り入れた．これにより日常生活活動における評価や指導力がついた． また，学年によっては理解を深めるために，班長には別に1コマ時間を作り，実践を教授し，それを伝えさせる練習も加えた．これにより学生の学習も進んだ．

事項	年月日	概　　要
	平成26年4月 ～ 平成30年9月	大阪行岡医療大学 医療学部　理学療法学科 担当授業科目：老年期疾病論（老年期障害学）専任教員 授業では，老年期を代表する疾患や高齢者問題等を教授した．また現在の医療保険制度や介護保険制度などの社会制度についても教授し，高齢者リハビリテーションには医療，看護，保険，社会福祉等の多様な知識が必要であることや，多職種のチームアプローチが必要であることを伝えた． これにより老年期疾病やそれに対する理学療法の理解が深まった．また，これから理学療法士が多く扱うであろう慢性疾患，とくに生活習慣病等についての対応も教授し，その役割の大きさを理解させた．
	平成26年9月 ～ 平成27年3月	大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当授業科目：日常生活活動学　専任教員 授業では，国際障害分類，国際生活機能分類をはじめ，生活活動評価であるバーサルインデックスや機能的自立度評価表（ＦＩＭ）等を教授した．また，代表的な疾患を整理しながら，日常生活活動の評価と実践内容の概要を教授した．
	平成26年9月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学　医療学部理学療法学科 担当授業科目：老年期障害理学療法　専任教員 授業では，老年期の障害の評価に基づいて，老人の生活自立に向けた系統的な健康管理や地域参加を促進するために，医学的管理下において，機能訓練などの理学療法技術が展開できるように演習した．これにより，老年期障害理学療法における考え方や捉え方が養われた．また，今後重要となってくる様々な内部障害や慢性疾患を想定し，運動や活動が体にどのような影響を及ぼすかも考えさせ，その奥深さを実感してもらった．また，がんをはじめ終末期の理学療法についても教授し，これから必要となる看取りまでの理学療法の可能性を示し，今後の課題を実感してもらった．
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学　医療学部理学療法学科 担当授業科目：卒業研究 専任教員 テーマは，平成28年度「終末期がん患者の在宅療養を支援するための理学療法の課題」，平成29年度「消化器系がんによる低栄養と運動療法」，「脊椎転移患者に対する理学療法」であった． これから大きな役割を担うと思われる難病や終末期を対象とした患者の理学療法を学習し，今後に備えることにした．

事項	年月日	概　　要
	平成28年9月 ～ 平成30年9月	大阪行岡医療大学　医療学部理学療法学科 担当授業科目：地域リハビリテーション 専任教員 授業では，実際の現場の写真や動画を多用し，症例検討式にして実際の訪問リハが疑似体験できるように進めた．また，その際には，予習シート，体験シート，復習シートを作成し，現場に臨む姿勢，学ぶ姿勢，復習する姿勢を養うように工夫した．さらには，在宅における看取りまでの終末期理学療法をみてもらい，これからの訪問リハの有り方をともに考えることにした． また，地域リハビリテーションは，疾患だけでなく，地域特性や社会情勢からも大きく影響をうけたり，個々の価値観が大きく反映するため，書物を多く読んで考えることが大切となる．そこで,少し時間をかけて書物多く読んでもらい,レポート量も増やして熟考して貰う練習も行った．これにより,地域リハビリテーションの奥深さとかんがえることの大切さを学ばせた．
	平成28年9月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学　医療学部理学療法学科 担当授業科目：理学療法評価学 専任教員 授業では，理学療法評価学に関する知識を総論的に教授し，ICFに基づく理学療法プログラムの立案や臨床推論の方法を教授した．
	平成29年4月 ～ 平成30年9月	大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当授業科目：理学療法概論　（専任教員） 授業では，高齢者の理学療法の概論を担当し，高齢者の理学療法の役割や可能性，その展望について紹介した．
	平成31年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：早期体験実習（理学療法）（専任教員） 授業では，十分なオリエンテーションのうえ，一般病院等の医療施設を３つ学生に体験してもらった．帰校後は，さらに学習を深化させてもらうためにディスカッションを行い学習内容の発表を行なった．これにより医療施設における理学療法，その他の専門職種の役割が理解できた．

事項	年月日	概　　要
	令和元年10月 ～ 令和5年３月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：基礎ゼミII（専任教員） 授業では，自己学習の進め方を学習するために，課題設定，文献検索の方法や読み方，プレゼンテーション方法を教授し，学習成果の発表を行なった．これにより学生は，大学内，学外実習，またはプロになってからの自己学習方法の一部が身についた．
	令和元年10月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：運動学I（総論）（専任教員） 授業では，運動学の総論を内容をすべて網羅できるように講義を行なった．なお，その際には運動学ワークブックを作成し，大切なところや自己学習の方向性がわかるようにし，学習を深めた．
	令和2年4月 ～ 令和4年9月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：日常生活動作学（専任教員） 本講義では，日常生活動作の基本や疾患別の動作分析，日常生活評価を講義した．また，様々な評価方法や評価尺度を紹介した．
	令和2年4月 ～ 令和4年9月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：地域理学療法学（専任教員） 本講義では，地域理学療法における施設系，訪問系の理学療法を講義した．また終末期理学療法についても講義した．
	令和2年9月 ～ 令和6年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：地域理学療法実習（専任教員） 本実習は，外部の介護保健施設，地域におもむき見学等を通して学習を深めるものである．しかし，本年は，コロナ感染のため学内実習に切り替えた．できるだけ従来の実習に近づけるため，動画教材を作成し，病院からもライブ配信を実施した．さらには予習，復習のためのホームページも作成し，学習を変化にすすめた．これにより従来の地域理学療法実習と同程度の学習内容が得られたものと考える．ただし，実際に現場に行けなかったことは大きな不安材料になったことは否めない．

事項	年月日	概　　要
	令和2年9月 ～ 令和6年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：運動器評価学I（総論）（専任教員） 本講義は，コロナ禍においてオンライン・対面のハイブリッドで実践されたため，実技時間が限られていた．そこで，できるだけ効率よく学習をすすめるために予習用ワークシートを作成し，これにより自己学習を促した．限られた実技練習の時間には，予習シートから理解度が低い考えられるところを抽出し，そこを重点的に説明できるようにした．これにより対面と同じ程度，学習効果を維持できたと考える．
	令和2年9月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：日常生活動作学演習（専任教員） 本演習は，コロナ禍においてオンライン・対面のハイブリッドで実践されたため演習時間が限られていた．そこで，できるだけ効率よく学習をすすめるために日常生活動作学演習の課題ワークシートを作成し，それをもとに考えるグループ学習を実践した．これにより演習は教える垂直型教育だけでなく，学生同士による平行型教育も可能となり，考える学習が実践できたと考える．これにより対面と同じ程度の学習効果が得られたとも考える．
	令和2年9月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：地域理学療法学演習（専任教員） 本演習は，地域理学療法学を習得後，あらためて個々の対象者に対する地域理学療法学を演習を通して学ぶものである．本演習では，障害を有する高齢者を設定し，QOLを向上させる外出計画を個々に立案させた．立案計画は，同じ設定であっても多様な内容になることや，それぞれ意味合いが違うことを明らかにした．これらの実践により，地域理学療法学の多様性を学習できたと考える
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：老年期障害理学療法学（専任教員） 本授業では，高齢者の身体，心理的，社会的特徴とともに，高齢者の理学療法における評価や実践方法を，そのエビデンスとともに教授した．
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：客観的臨床能力試験（専任教員） 本授業では，臨床実習に向けて臨床能力を図る態度や検査測定技術を教授し試験を行なった．

事項	年月日	概　　要
	令和3年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：理学療法評価実習（専任教員） 本実習では，実習に臨むにあたり面接，知識・実技試験を行い，各実習施設に赴いた．実習施設では主に理学療法評価の経験を積み上げ，対象者の問題点を抽出し理学療法プログラムの立案を行った．学生の学習がスムーズに行えるように教員が支援を行った．
	令和4年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：理学療法総合実習Ⅰ・II（専任教員） 本実習では，実習に臨むにあたり面接，知識・実技試験を行い，各実習施設に赴いた．実習施設では主に理学療法の経験を積み上げ，対象者の問題点を抽出し理学療法プログラムの立案，実施を行った．学生の学習がスムーズに行えるように教員が支援を行う．
	令和4年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：卒業研究（専任教員） 本授業では学生に卒業県有の指導を行なった．１期生のテーマ：「コロナ禍における在宅・地域高齢者の「思い」を探索する－ 3事例による探索的研究 －」，２期生のテーマ：「理学療法士を目指す学生が持つ領域ごとのイメージ調査」であった．
	令和5年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当授業科目：ラーニングスキルズ（専任教員） 本授業では，授業では，自己学習の進め方を学習するために，課題設定，文献検索の方法や読み方，プレゼンテーション方法を教授し，学習成果の発表を行なった．これにより学生は，大学内，学外実習，またはプロになってからの自己学習方法の一部が身についた．
・理学療法士養成校における教育実績 （非常勤講師）	平成12年4月 ～ 平成13年9月	大阪府立看護大学　医療技術短期大学部理学療法学科 担当授業科目：臨床実習　非常勤講師 臨床現場で理学療法を行うにあたり，単に理学療法評価や実践を学ばせるだけでなく，それ以外にもどのような準備や実践が必要なのか，医療や社会においてどのようなルールに基づいて理学療法が行われているのか等も教示し，学習できるようにした．その結果，学生は理学療法評価や実践だけではなく，現場の諸仕事を学習し理学療法士のあり方を学習するにいたった．

事項	年月日	概　　要
	平成18年4月 ～ 平成25年9月	大阪医療福祉専門学校　理学療法学科 担当授業科目：理学療法治療学Ⅱ　整形外科疾患（関節リウマチ，足部・足関節）　非常勤講師 授業は，暗記型の授業ではなくできるだけ理学療法とはどういったものか考えることができるような授業にした．そのために授業資料は図によって見やすくレイアウトしたものを用いたり，臨床現場のスライド等をみせつつ，学生自身に実際現場に立てばどういった態度や評価，実践を行うかを問いながら，シュミレーショを交え学生とともに検討するスタイルにした．また，ときには勉強の仕方や資料の調べ方など，実践現場で臨床を行いながらどのように勉強していくのか等を，経験を交えて教示した． その結果，学生は理学療法実践するにあたって自分に何が足らないかを再認識し，自ら勉強しなければならないという姿勢を学ぶことができたと考える．
	平成23年4月 ～ 平成24年9月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部理学療法学科 担当授業科目：理学療法技術実習2　非常勤講師 授業は，理学療法の認知スキル，つまり技術の一つとしての理学療法臨床推論について講義した．ペーパーペイシェントを用いて問題を抽出し，それを基に仮説生成しながら理学療法プログラムを立案する作業を行った．また，その際にはインターネット等を活用し，実践型の授業を展開した．その結果，問題を解決していこうとする姿勢や具体的な解決方法を学ぶことができた．
	平成25年9月 ～ 平成26年3月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部理学療法学科 担当授業科目：総合技術特別実習3　非常勤講師 授業は，認知スキルの一つとして理学療法における臨床推論について講義した．ペーパーペイシェントを用いて問題抽出し，国際生活機能分類に即しながら，それを基に仮説生成し理学療法プログラムを立案する作業を行った．また，その際にはインターネット等を活用し，実践型の授業を展開した．その結果，国際生活機能分類に即しながら，問題を解決していこうとする姿勢が身に付き，具体的な解決方法を自ら発見し，学ぶことができた．
	平成26年4月 ～ 平成31年3月	大阪医療福祉専門学校 理学療法学科 担当授業科目：老年学，非常勤講師 授業は，高齢者の身体的特徴をはじめ，疾患，環境についての講義を行った．また，その際には実際の患者の動画やデータを基に，本学問と理学療法との関わりについても講義した． また，これからの高齢者においては，地域における転倒，認知症，腰痛，生活習慣病に対する予防理学療法が大切になってくることを教授し，理解を深めた．これにより高齢者理学療法の実態を理解し，興味をもって老年学を学習できるようになった．

事項	年月日	概　　要
	平成26年9月 ～ 平成29年3月	大阪電気通信大学医療福祉工学部 理学療法学科 担当授業科目：チームリハビリテーション特論　非常勤講師 授業は，理学療法におけるチームアプローチによる臨床推論について講義した．ペーパーペイシェントを用いて問題抽出し，それを基に仮説を生成しながらチームアプローチによって理学療法プログラムを立案する作業を行った．また，その際にはインターネット等を活用し，実践型の授業を展開した．これによりチームアプローチによる臨床推論と理学療法プログラムの立案能力が養われた．
	平成28年9月 ～ 令和4年3月	大阪電気通信大学 医療福祉工学部理学療法学科 担当授業科目：基礎医学特論Ⅰ　非常勤講師 授業では，一般病院，地域におけるがんリハビリテーションについて教授し．生活の質を高めるための実際の工夫も加え，興味をひくように展開した．これによりがんリハビリテーションに対する知見を深めることができた．
	令和元年12月	大阪行岡医療大学　特論 担当授業科目：理学療法特論　非常勤講師 授業では，がんリハビリテーション・ケアと終末期理学療法の実践を教授し，これらの実践力がこれからの地域リハビリテーションには必要になることを学習した．
	令和4年4月 ～ 現在に至る	大阪保健医療大学　保健医療学部　理学療法学科 担当授業科目　老年期理学療法治療学　非常勤講師 授業では，緩和ケアの理学療法の実践を教授した．
	令和4年9月 ～ 現在に至る	大阪保健医療大学　保健医療学部　理学療法学科 担当授業科目　チーム医療論　非常勤講師 授業では，緩和ケアの理学療法におけるチーム医療について教授した．
	令和5年4月 ～ 現在に至る	大阪電気通信大学 医療福祉工学部理学療法学科 担当授業科目：臨床理学療法特論　非常勤講師 授業では，一般病院，地域におけるがんリハビリテーションについて教授し．生活の質を高めるための実際の工夫も加え，興味をひくように展開した．これによりがんリハビリテーションに対する知見を深めることができた．
・臨床実習生の自己開示レポートから意識変化を分析し，提言をおこなった．	平成21年10月	理学療法ジャーナル 43(10) 942-943 題目「コミュニケーション能力の向上に課題にした自己分析レポートからみえてきたもの」として実習生の自己開示レポートを分析し，実習指導における指導方法について考察した．

事項	年月日	概　　要
職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 理学療法士免許	平成 5年6月	（登録番号21836号）
ケアマネージャー	平成13年3月	（登録番号27995318号）
福祉住環境コーディーネーター　2級	平成15年6月	（証書番号10－2－04540）
修士（学術）	平成20年3月	放送大学大学院 文化科学研究科 教育開発プログラム（学位番号第1903号） 題目「理学療法臨床実習による臨床実習生の意識構造の変化」
専門理学療法士（教育・管理理学療法）取得	平成22年4月	日本理学療法士協会が制度化した専門理学療法士制度の専門理学療法士（教育・管理）を取得　登録番号（7－90）
博士（工学）	平成24年3月	大阪電気通信大学大学院 医療福祉工学研究科医療福祉工学専攻（学位番号博医甲第0028号） 題目「理学療法臨床実習における実習生の意識変化の解析に関する研究」
TOGU“FT-Physio”,”FT-coach Level1”	平成25年8月	TOGU社製のツールを活用したトレーニングやコンディショニングを実践するインストラクター（Instructor Number 002）
大阪府がんリハビリテーション研修　終了	平成28年2月	がんリハビリテーション料の算定可能
臨床実習指導者講習会　修了	平成31年3月	臨床実習指導者の資格，および指導者を育成できる資格を獲得した．（第2018-2-046号）
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）武部整形外科リハビリテーション （有床診療所） 職種　理学療法士	平成5年3月 ～ 平成8年3月	理学療法士として，主に脊椎圧迫骨折，大腿骨頸部骨折術後，人工膝関節置換術，前十字靭帯再建術，アキレス腱縫合術，下肢の切断等，整形外科疾患の理学療法に従事する．担当患者のカンファレンスや退院指導，訪問指導の役割も担う．また，診療所主催の公開講座である健康教室の企画を担当し，準備やテーマごとに講師の役割も担う．2か月に1回開催を実施．学術活動にも積極的に参加する．

事項	年月日	概　　要
2）武部整形外科リハビリテーション （有床診療所） 職種　主任　理学療法士	平成8年4月 ～ 平成13年3月	理学療法士として，上述した整形外科疾患診療に関わる傍ら，公開講座である健康教室の企画，運営にも関わった．また主任として，訪問リハビリテーションの開設し，大腿骨頸部骨折や脊椎圧迫骨折後の患者，脳卒中の患者にに対する在宅理学療法を行う．また，リハビリテーション室の管理業務として，職員である理学療法士の募集から育成，また理学療法アシスタントの育成を担う．治療実績の管理，勉強会，学術活動への積極的な参加，学生に対する臨床実習指導に従事する．
3）小川病院　リハビリテーション科 職種　主任　理学療法士	平成10年4月 ～ 平成13年3月	リハビリテーション科開設のため，主任としてリハビリテーション機器の見積もり，搬入等の準備・施設基準Ⅱの取得とシステムの構築，そして開設に従事した．その後，リハビリテーション科の主任として管理業務を行う．具体的には治療実績の管理，理学療法士の募集，後輩理学療法士の育成，勉強会の開催，学術活動に推進，学生に対する臨床実習指導を担う． 理学療法士としては，医療，介護のケアミックス病棟であったことから，整形外科疾患を中心に，長期寝たきり患者，虚弱高齢者等の理学療法に，この時から緩和ケア，終末期理学療法に関わる．また夜間にはスポーツ専門リハビリテーションを開設し，主に学生のスポーツ障害後のリハビリテーションに従事する．
4）道仁病院　リハビリテーション科 職種　統括責任者　理学療法士	平成13年4月 ～ 平成23年12月	統括責任者として，リハビリテーション科開設のための機器の見積もり，搬入等の準備・施設基準Ⅱの取得とシステムの構築，そして開設に従事した．その後，統括責任者として管理業務を行う．具体的には治療実績の管理，理学療法士の募集，後輩理学療法士の育成，勉強会の開催，学術活動に推進，学生に対する臨床実習指導を担う． 理学療法士としては，医療，介護のケアミックス病棟であったことから，整形外科疾患を中心に，長期寝たきり患者，がん患者，内部障害，虚弱高齢者等の理学療法に従事する．また，緩和ケアや終末期の患者に対する理学療法も行う．このとき末期がんの理学療法に対する症例報告の論文を発表し，理学療法ジャーナル奨励賞を受賞する．

事項	年月日	概　　要
5）池田病院　総合リハビリテーションセンター 職種　主任　理学療法士（現場最高責任者）	平成23年12月 ～ 平成25年3月	総合リハビリテーションセンターの現場最高責任者として，一般病棟，回復期リハビリテーション病棟，療養型病棟，訪問リハビリテーション，デイケア，デイサービス等のリハビリテーションセンターの運営に携わる．診療報酬の改定や患者へのサービス充実にあわせてシステムの再構築も行った．また，学術委員，医療安全委員，接遇委員等も担った．さらに理学療法士，作業療法士，言語療法士等の人事にも携わった．理学療法士としては，主に急性期から維持期の脳血管，運動器，呼吸器，循環器，内部障害（がん，糖尿病による切断等）の理学療法に関わった．また積極的に終末期医療や高齢者医療にもたずさわり理学療法士の役割等を模索・実践してきた．また地域住民の方々に対して理学療法の啓蒙や健康維持を目的に，相談や公開講座も行った． 現場では複数の部下（理学療法士）に勉強会や講習を行い育成にも力を注いできた．
6）池田病院　総合リハビリテーションセンター 職種　リハビリテーションコーディネーター（教育・研究活動と実務の指導）	平成25年4月 ～ 令和元年9月	大学勤務の傍ら，総合リハビリテーションセンター施設，訪問リハビリテーション，訪問看護ステーション，デイケア，デイサービス（医療，介護）において，リハビリテーションコーディネーターとして研究，相談業務を行ってきた． その際は，実際に現場にでて臨床実践するだけでなく，中堅，新人理学療法士の管理教育や学術活動等をも支援してきた．また，医療，保健，介護の分野における横断的な相談も担い，リハビリテーションが円滑に行える環境作りや支援を必要に応じて行っている． 現在，総合リハビリテーション施設では，緩和ケア系のがんリハビリテーションの評価やプログラム開発，腎臓リハビリテーションの構築，これから重要度が増してくると在宅リハビリテーションの評価やプログラム開発，健康予防教室等を行っており，地域リハビリテーション発展に寄与するだけでなく，後進教育という役割も担っている．
7）サンシティ木津　リハビリテーション・ケアセンターうららか 職種　シニアアドバイザー （教育・研究・実務相談業務）	令和元年9月 ～ 現在に至る	大学勤務の傍ら，介護付有料老人ホームサンシティ木津リハビリテーション・ケアセンターうららかの立ち上げと，教育・研究・実務相談業務を行なってきた． 現在，要介護度が高い高齢入居者に対するリハビリテーションの評価・実践プログラムの開発を検討しており，後進教育を担っている．
8）児童発達支援　放課後デイサービス いちごハウス 職種：教育研究アドバイザー	令和3年10月 ～ 現在に至る	大学勤務の傍ら，児童支援　放課後デイサービスいちごハウスにおける教育・研究のアドバイスを行っている． 現在，現場の問題点を抽出し，よりよい課題解決や人材育成，サービスの立案を担う研究や教育に関するアドバイスを行っている．

事項	年月日	概　　要
9）科学研究費等の研究助成		
・科学研究費助成事業（基盤研究C）	平成28年4月 ～ 平成31年3月	題目「線維筋痛症患者に対する運動療法の効果の検証：脳内ネットワークの変化を指標として」 研究代表　藤田信子　分担者　池田耕二 研究経費　平成28年度2.0千円，平成29年度4.5千円，平成30年度5.5千円
・科学研究費助成事業（基盤研究C）	平成29年4月 ～ 令和2年3月	題目「理学療法士の発達を促す経験学習支援方法の開発」 研究代表　池田耕二 研究経費　平成29年度288千円，平成30年度354千円，令
・奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成	令和元年6月 ～ 令和2年3月	題目「リハビリテーション学科臨床実習管理センターにおけるホームページによる双方向性活用システムの構築-臨床実習教育の質的向上を目指して-」研究代表　池田耕二
・奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成	令和2年6月 ～ 令和3年3月	題目「フラの動作に関する研究:フラを活用した効果的な介護予防プログラムを作成するために―」 研究代表者　笹野弘美　研究協力者　池田耕二 研究経費　令和2年度160千円
・奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成	令和2年6月 ～ 令和3年3月	題目「山間過疎地域における高齢者の体力特性－フレイル質問票を用いた検討―」 研究代表者　滝本幸治　研究協力者　池田耕二 研究経費　令和2年度　220千円
・科学研究費助成事業（基盤研究C）	令和3年4月 ～ 現在に至る	「理学療法士の発達や経験学習を促す【場】の特性の解明」 研究代表　池田耕二 研究経費　令和3年度700千円　令和4年度1800千円
・奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成	令和3年6月 ～ 令和4年3月	題目「COVID-19パンデミックが高齢者の健康および日常生活に及ぼす影響に関する研究　―コロナ禍における遠隔指導を加味した検討―」 研究代表者　滝本幸治　研究協力者　池田耕二 研究経費　令和3年度　340千円
・奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成	令和3年6月 ～ 令和4年3月	題目「地域の特性を活かした高齢者の健康増進に関する研究」研究代表者　笹野弘美　研究協力者　池田耕二 研究経費　令和3年度　340千円
・奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成	令和4年6月 ～ 令和5年3月	題目「介護を要する高齢者における見かけの可動域制限の実態調査について」 研究代表者　城野靖朋　研究協力者　池田耕二 研究経費　令和4年度300千円

事項	年月日	概　　要
・奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成	令和4年6月 ～ 令和5年3月	題目「地域の特性を活かしたAging in Placeに関する研究~体力測定および日常生活と健康に関する調査より住民が住み慣れた土地で最期まで生活するための方法を検討~」 研究代表者 笹野弘美　研究協力者　池田耕二 研究経費　令和4年度300千円
・奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成	令和5年6月 ～ 令和6年3月	題目「理学療法士の現場教育における指導者 ・被指導者間の認識の差異:質的アプロ ー チによる分析」 研究代表者　三上亮　研究協力者　池田耕二 研究経費　令和5年度300千円
４　その他 1）メディア取材 ・スポーツチャンバラと車椅子を活用して車椅子スポーツチャンバラとして体系化を行い，院内でのリハビリに活用した	平成5年3月 ～ 平成10年3月	車椅子スポーツチャンバラをリハビリに活用した（ラジオや新聞の取材あり）
2）学会座長 ・大阪府理学療法士会 北河内ブロック新人症例発表会　座長	平成22年1月	大阪府理学療法士会が新人教育を目的として平成22年より開始した北河内ブロック新人症例発表会において座長を行った.
・第22回大阪府理学療法学術大会　　座長	平成22年7月	第22回大阪府理学療法学術大会において座長を行った.
・大阪府理学療法士会 北河内ブロック新人症例発表会　座長	平成23年1月	大阪府理学療法士会が新人教育を目的として平成22年より開始した北河内ブロック新人症例発表会において座長を行った.
・第53回日本理学療法学術大会（第7回日本理学療法教育学会・第1回日本理学療法管理部門研究会）座長	平成30年11月	第53回日本理学療法学術大会（第7回日本理学療法教育学会・第1回日本理学療法管理部門研究会）の座長を行った.
・保健医療学会第10回学術集会座長	令和元年12月	保健医療学会第10回学術集会の座長を行なった.
・第11回日本理学療法教育学会　座長	令和4年11月	第11回日本理学療法教育学会の座長を行なった.
・保健医療学部第12回学術集会　特別講演　座長	令和4年12月	保健医療学部第12回学術集会の特別講演の座長を行なった.
・第5回日本理学療法管理研究会学術大会　座長	令和4年12月	第5回日本理学療法管理研究会学術大会の座長を行なった.
・第32回奈良県理学療法士学会　座長	令和5年7月	第32回奈良県理学療法士学会の座長を行なった.
3）学会査読 ・第46回日本理学療法学術大会　査読	平成23年5月	第46回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った.
・第47回日本理学療法学術大会　査読	平成24年5月	第47回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った.

事項	年月日	概　　要
・第48回日本理学療法学術大会　査読	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った.
・第25回大阪府理学療法学術大会　査読	平成25年7月	第25回大阪府理学療法学術大会の査読を行った.
・第49回日本理学療法学術大会　査読	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った.
・第26回大阪府理学療法学術大会　査読	平成26年7月	第26回大阪府理学療法学術大会の査読を行った.
・第50回日本理学療法学術大会　査読	平成27年5月	第50回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った.
・第51回日本理学療法学術大会　査読	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った.
・第52回日本理学療法学術大会　査読	平成29年5月	第51回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った.
・保健医療学学会第8回学術集会　査読	平成29年11月	保健医療学学会第8回学術集会の査読を行った.
・第53回日本理学療法学術大会（第7回日本理学療法教育学会・第1回日本理学療法管理部門研究会）査読	平成30年9月	第53回日本理学療法学術大会（第7回日本理学療法教育学会・第1回日本理学療法管理部門研究大会）の学会報告の査読を行った.
・保健医療学学会第9回学術集会　査読	平成30年12月	保健医療学学会第9回学術集会の査読を行った.
・保健医療学学会第10回学術集会　査読	令和元年12月	保健医療学会第10回学術集会の査読を行なった.
・第55回日本理学療法学術大会：日本地域・支援工学・教育合同理学療法学会学術大会2020（合同開催：理学療法管理部門研究会）査読	令和2年11月	日本地域・支援工学・教育合同理学療法学会学術大会2020（合同開催：理学療法管理部門研究会）の学会報告の査読を行った.
・第56回日本理学療法学術大会：日本地域・支援工学・教育合同理学療法学会学術大会2020（合同開催：理学療法管理部門研究会）査読	令和3年12月	日本地域・支援工学・教育合同理学療法学会学術大会2021（合同開催：理学療法管理部門研究会）の学会報告の査読を行った.
・第11回日本理学療法教育学会　査読	令和4年11月	日本理学療法教育学会の査読を行なった.
・第5回日本理学療法管理研究会学術大会　査読	令和4年12月	日本理学療法管理研究会学術大会の査読を行なった.
・第62回近畿理学療法学術大会　査読	令和5年2月	第62回近畿理学療法学術大会の査読を行なった.
・第6回日本理学療法管理学会学術大会　査読	令和5年11月	第6回日本理学療法管理研究会学術大会の査読を行なった.
・第12回日本理学療法教育学科学術大会　査読	令和5年11月	第12回日本理学療法教育学科学術大会の査読を行なった。
・第63回近畿理学療法学術大会　査読	令和6年2月	第62回近畿理学療法学術大会の査読を行なった.
4）論文査読		
・保健医療学雑誌　論文査読	平成30年6月	保健医療学学会「保健医療学雑誌」の論文査読を行った.

事項	年月日	概　　要
・医療情報福祉行動学雑誌　論文査読	令和2年3月	医療情報福祉行動学雑誌の論文査読を行った.
・医療情報福祉行動学雑誌　論文査読	令和3年2月	医療情報福祉行動学雑誌の論文査読を行った.
・保健医療学雑誌　論文査読	令和3年1月	保健医療学学会「保健医療学雑誌」の論文査読を行った.
・医療情報福祉行動学雑誌　論文査読	令和4年2月	医療情報福祉行動学雑誌の論文査読を行った.
・総合理学療法　論文査読	令和4年11月	総合理学療法の論文査読を行った.
・理学療法教育学　論文査読	令和5年3月	理学療法教育学の論文査読を行った.
・保健医療学雑誌　論文査読	令和5年7月	保健医療学学会「保健医療学雑誌」の論文査読を行った.
5）委員会活動		
・公益社団法人大阪府理学療法士会 臨床実習倫理規定策定特別委員会　委員	平成27年5月 ～ 平成28年3月	公益社団法人大阪府理学療法士会　臨床実習倫理規定策定特別委員会にて，理学療法臨床実習における倫理規定の策定を行った.
・保健医療学学会　第8回学術集会　大会準備委員長	平成29年4月 ～ 平成30年3月	保健医療学学会　第8回学術集会開催に向けて準備を行った.
・日本理学療法教育学会　選挙管理委員	令和3年8月 ～ 現在に至る	日本理学療法教育学会の選挙管理委員を担った.
・日本理学療法教育学会　コアカリキュラム委員	令和3年11月 ～ 現在に至る	日本理学療法教育学会コアカリキュラム委員を担った.
・日本理学療法士協会　指定規則等検討部会部会員 （学校養成施設検討作業部会）	令和4年7月 ～ 現在に至る	日本理学療法士協会　指定規則等検討部会部会員と学校養成施設検討作業部会を担う
6）学会理事活動		
・保健医療学学会　理事	平成29年4月 ～ 現在に至る	保健医療学会の理事に就任し運営に携わった.
・奈良県理学療法士協会　理事	令和5年6月 ～ 現在に至る	奈良県理学療法士協会の理事に就任し運営に携わった.
7）招待講演　シンポジスト		
・第3回物理療法研究会（神戸）シンポジスト	平成7年11月	肩関節周囲炎患者に対して低出力レーザーの臨床効果に

事項	年月日	概　　要
・第4回身体障害者スポーツ指導員養成講習会（大阪）講師	平成9年1月	スポーツチャンバラをリハビリテーションの一環に取り入れるために車椅子を使用した車椅子スポーツチャンバラを考案し方法やルール等を紹介した.
・大阪医療福祉専門学校　実習指導者会議　（大阪）講師	平成18年2月	問題を有する実習生に対して，実際行っている具体的な指導方法について講演した.
・大阪府理学療法士会臨床実習指導者研修会（大阪）	平成19年7月	臨床実習に対する指導方法の中でも，特に情意面における指導方法について講演を行った.
・神戸大学就進会理学療法分科会（神戸大学医学部保健学科同窓会，神戸）講師	平成20年2月	地域医療における一般病院にて行われている終末期医療を紹介し，それに対する事例研究を報告した．またこれから事例研究がどうあるかべきかについても合わせて報告した.
・行岡リハビリテーション専門学校　臨床実習指導者会議　教育講演（大阪）	平成20年3月	臨床実習における実習生の内面をパターン分類し，それらに対する指導方法について講演を行った.
・公益社団法人　大阪府理学療法士会（大阪）　新人教育プログラム研修　講師	平成29年12月 ～ 平成30年12月	新人教育プログラム研修における「理学療法研究方法論」の講義を行った.
・公益社団法人　大阪府理学療法士会（大阪）　新人教育プログラム研修　講師	平成31年1月	新人教育プログラム研修における「クリニカルリーズニング」の講義を行った.
・第30回大阪府理学療法学術大会（大阪）教育シンポジウムのシンポジスト	平成30年7月	これからの理学療法臨床実習の在り方を講演した.
・現場の理学療法士育成論：経験学習を通して	令和3年11月	医療情勢の変化や働き方改革・等を背景に研修会や勉強会を重視した学習だけでは，現場の理学療法士（PT）教育・育成は限界にきている．そこで現場で行う経験学習に注目し，PTの経験学習プロセスの解明をもとに，現場教育・人材育成における支援方法を教示した.
・終末期・緩和ケアにおける在宅理学療法に求められる視点と対応	令和4年2月	緩和ケア・終末期の在宅理学療法における支持的理学療法の考え方や対応方法を講演した．具体的には，緩和期・終末期の定義や位置付け，終末期患者の特性，エンド・オブ・ライフケアという考え方，死と関係性など，緩和ケア・終末期の在宅理学療法の哲学的・実践的基盤について紹介した.
・学習し続ける組織の構築にむけて	令和4年2月	大阪府理学療法士会の理学療法士の中間管理職，管理職を対象に学習する組織の構築について講演した．講演内容は，現場経験に基づく組織づくりの内容に加え科学研究費による研究成果である理学療法士の経験学習プロセスの解明から導かれた経験学習支援方法を紹介した.

事項	年月日	概　　要
・緩和ケア領域における理学療法の紹介−理学療法士の可能性と広がる役割−	令和4年12月	緩和ケア領域における理学療法を紹介し，理学療法士の可能性と広がる役割について講演した.
・終末期・緩和ケアにおける在宅理学療法に求められる視点と対応	令和5年3月	緩和ケア・終末期の在宅理学療法における支持的理学療法の考え方や対応方法を講演した．具体的には，緩和期・終末期の定義や位置付け，終末期患者の特性，エンド・オブ・ライフケアという考え方，死と関係性など，緩和ケア・終末期の在宅理学療法の哲学的・実践的基盤について紹介した.
・緩和ケア・終末期のセラピストに求められる視点と	令和5年11月	緩和ケア・終末期の在宅理学療法における支持的理学療法の考え方や対応方法を講演した．具体的には，緩和期・終末期の定義や位置付け，終末期患者の特性，エンド・オブ・ライフケアという考え方，死と関係性など，緩和ケア・終末期の在宅理学療法の哲学的・実践的基盤について紹介した.
・理学療法士の経験学習プロセスに基づく人材育成方法	令和5年11月	理学療法士の経験学習プロセスをもとに，現場の人材育成方法について紹介，講演した.
教育研究における research question の立て方	令和5年12月	自身の経験学習研究をもとに，教育研究における research question の立て方を紹介，講演した.
・老年療法における緩和ケアの重要性を考える 自分らしい人生に寄与する老年療法の新たな可能性	令和6年3月	老年療法における緩和ケア・終末期のリハビリテーションについての考え方や対応方法を講演した．具体的には，緩和期・終末期の定義や位置付け，終末期患者の特性，エンド・オブ・ライフケアという考え方，死と関係性など，緩和ケア・終末期リハビリテーションにおける哲学的・実践的基盤について紹介した.
・理学療法士の経験学習プロセスに基づく人材育成方法	令和6年3月	理学療法士の経験学習プロセスをもとに，現場の人材育成方法について紹介，講演した.
8）公益社団法人日本理学療法士協会 臨床実習指導者		
・第2回　臨床実習指導者講習会（大阪）　修了	平成31年3月	臨床実習指導者の資格，および指導者を育成できる資格を獲得した.
・第120回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和2年2月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した.
・第128回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和2年2月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した.
・第368回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和3年6月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した.
・第378回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和3年6月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した.

事項	年月日	概　　要
・第399回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和3年8月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した.
・第437回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和3年9月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した.
・第515回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和3年11月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した.
・第664回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和4年3月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した.
・第706回　臨床実習指導者講習会（奈良）　講師・世話人	令和4年3月	臨床実習指導者に対して指導方法等を講演・演習した.
8）大学内業務の経験	平成25年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学開学から臨床実習教育を担う臨床実習委員，教務一般を担う教務委員，国家試験対策を担う国家試験委員等に任命された.
	平成31年4月 ～ 令和4年3月	奈良学園大学リハビリテーション学科開設から臨床実習部会部長，入試委員を任命された.
	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　広報委員を任命された.
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　大学評議委員を任命された.
	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学　専攻主任，地域・高齢者領域領域長，予算委員，国家試験委員を担う.
	令和4年4月 ～ 現在に至る	理学療法専攻専攻長，大学広報委員長を任命された
9）大阪行岡医療大学における市民公開講座企画と運営	平成28年4月 ～ 平成29年3月	大阪行岡医療大学で行われる市民公開講座の企画運営を行った.
10）日本理学療法士協会 専門理学療法士（教育・管理）取得	平成22年4月 ～ 現在に至る	日本理学療法士協会が制度化した専門理学療法士制度の専門理学療法士(教育・管理)を取得した.

事項	年月日	概　　要
11）理学療法士の内面の発達を理学療法士発達論とし，それもとに理学療法教育を行う必要性を指摘した.	平成25年5月	理学療法ジャーナル　47（5）423 題目「理学慮法士発達論に基づいた教育方法の開発に向けて」に，理学療法士の内面の発達を理学療法士発達論とし，それもとに理学療法教育を行う必要性を指摘した.

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1.理学療法士のための物理療法臨床判断ガイドブック	共著	平成19年9月	文光堂	本書は，物理療法の対象となる疾患に対して，臨床的判断が行いやすいようにデシジョンツリーを作成してまとめ上げ，それぞれの手技や方法について系統立てて述べたものである. Ｂ5判　全566頁 編者：木村貞治 共著者：玉木彰，池田耕二 本人担当部分：第Ⅱ章，疾患・症状別　臨床判断に基づく物理療法のすすめかた 19　c 浮腫に対する物理療法の臨床判断を考える　pp323－344を単著. 浮腫の病態から，それらに対する理学療法を臨床的判断が行いやすいようにデシジョンツリーを作成してまとめ上げ，それぞれの手技や方法について系統立てて述べた.
2.持続可能な社会をどう構想するか. （構造構成主義研究　第４巻）	共著	平成22年4月	北大路書房	本書は，「持続可能な社会をどう構想するか」についての有識者の鼎談と構造構成主義の論文集をまとめたものである. Ａ5判　全255頁 編者：西條剛央，京極真，池田清彦 著者：池田耕二 本人担当部分：「構造構成的協同臨床教育法の構築に向けて-理学療法臨床実習を通して-」pp100-126を単著. 構造構成主義を基盤に，お互いの関心をすり合わせながら，お互いに教え合うことを可能にする教育方法，すなわち構造構成的協同臨床教育方法を開発し，これを理学療法臨床実習に活用し学習効果を上げたことを述べた.
3.よい教育とは何か. （構造構成主義研究　第５巻）	共著	平成23年4月	北大路書房	本書は，「よい教育とは何か」についての有識者の鼎談と構造構成主義研究の論文集をまとめたものである. Ａ5判　全328頁 編者：西條剛央，京極真，池田清彦 著者：池田耕二 本人担当部分：「理学療法臨床実習を通じた構造構成的協同臨床教育法の方法論的拡張」pp218-239を単著. 筆者が開発した構造構成的協同臨床教育方法を方法論的に拡張し，臨床現場基礎力の少ない学生に対して
4.思想が開く未来へのロードマップ. （構造構成主義研究　第6巻）	共著	平成26年4月	北大路書房	本書は，「思想がひらく未来へのロードマップ」についての鼎談と構造構成主義研究の論文集をまとめたものである. Ａ5判　全261頁 編者：西條剛央，京極真，池田清彦 著者：池田耕二 本人担当部分：「終末期理学療法教育における構造構成的協同臨床教育法の可能性」pp135-153を単著. 理学療法士にとってスムーズに教育が進みにくい終末期理学療法教育に対して，構造構成的協同臨床教育方法を活用し，その効果と可能性を述べた.

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5.終末期理学療法の実践	共著	平成27年5月	文光堂	本書は，終末患者に対する理学療法の実践方法を，総論，具体的な介入方法，諸問題，チームケアの展開の４つ点からまとめたものである. Ｂ5判　全208頁 編集者：日高正巳，桑山浩明 著者：池田耕二 本人担当部分：第2章　「終末期理学療法をどのように教えるか，そして学ぶか」pp7-13を単著. 　終末期理学療法における理学療法士教育の問題点を，理学療法士の発達段階ごとにあげ，それにあわせた学習や教育方法を紹介した.
6.局所と全身からアプローチする運動器の運動療法	共著	平成29年8月	羊土社	本書は，運動器疾患に関する運動療法を，主に，総論，身体の部位別の運動療法，姿勢と運動連鎖でまとめた入門書である．関節リウマチ，悪性腫瘍に対する運動療法についても少し触れている. Ｂ5判　全342頁 編集者：小柳磨毅，中江徳彦，井上悟 著者：池田耕二 本人担当部位：第Ｉ部　総論，1.運動器の運動療法とは，運動療法の歴史 pp14-17を単著. 　運動器に対する運動療法の歴史を，古代，近代，近現代，近年に分類し，その発展過程を説明した.
7.訪問リハビリテーション アドバイスブック	共著	平成30年3月	メジカルビュー社	本書は，訪問リハビリテーションにかかわるセラピストに対する様々なアドバイスをまとめた入門書である. B5判　全324頁 監修：青山朋樹，高橋紀代 編集者：辰巳昌嵩 著者：池田耕二 本人担当部分：コラム⑨終末期/ターミナル患者と，その家族に対する訪問スタッフ（セラピスト）のありかた，pp254-257を単著. 在宅における終末期/ターミナル患者と，その家族に対する訪問スタッフ（セラピスト）のありかたを提言した.
8.理学療法臨床実習とケーススタディ	共著	令和2年12月	医学書院	本書では，コロナ禍における奈良学園大学の早期体験，地域理学療法実習の学内実習の実践内容を紹介した. B5判　285頁 編集者：鶴見隆正，辻下守弘 著者：池田耕二 本人担当部分：With コロナ社会での学内実習の方法 pp50-59を単著 コロナ社会における学内実習の枠組みや具体的な実践内容について紹介した.

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
9.PT・OTのための運動学テキスト ： 基礎・実習・臨床	共著	令和3年2月	金原出版	本書は，運動学を基礎，実習，臨床の観点からまとめたものである． B5判　全570頁 編集者：小柳磨毅，山下協子，大西秀明，境隆弘 著者：池田耕二 本人担当部分：主に運動学の定義，生体力学のページの大幅な修正・校正を行った．
（学術論文）				
1 自動温度補償機能付きp02センサーの開発（査読付）	共著	平成5年12月	神戸大学医療技術短期大学部紀要　9　113－117	深在性組織に直接刺入できない対象組織の温度変化に対応可能な極細の針状センサーを開発した．これにより温熱や寒冷などの理学療法施行中の組織血行動態の変化を定量・経時的に計測が可能となり治療効果の判定に寄与することを報告した． 本人担当部分：実験担当，データ収集，一部加筆） （共著者：講武芳英，荒川佳子，池田耕二，嶋田智明，石川斉，北潔）
2 変形性膝関節症における疼痛および筋力とＡＤＬ能力との関係（査読付）	共著	平成6年5月	理学療法学　21(5)　347－350	変形性膝関節症患者の疼痛，変形・筋力・肥満度の観点から日常生活動作能力低下との関係を調べた．その結果，日常生活動作の低下には疼痛と筋力低下に影響されていることが示唆された． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，一部加筆 （共著者：生島秀樹，日高正巳，池田耕二）
3 直線偏光近赤外線照射が筋肉の血行動態に与える影響について（査読付）	共著	平成6年12月	神戸大学医学部保健学科紀要 10 43-47	ラットを対象に頸部神経節近傍への近赤外線照射を行ったところ，筋内の酸素分圧の上昇にある程度の影響を与えることが判明したことを報告した． 本人担当部分：実験担当，データ収集，分析，考察，一部加筆 （共著者：講武芳英，嶋田智明，石川斉，池田耕二，北潔）
4 痛みに対する低出力レーザー療法	共著	平成7年11月	物理療法研究会会誌　3 38－41	肩関節周囲炎患者に対して低出力レーザーの臨床効果を判定した．低出力レーザーは除痛効果があるものの，症例ごとには使用方法の再検討が示唆された．また今後の課題としては照射条件や他の物理療法とのコンビネーション効果，使用時期などがあげられた． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，日高正巳，武部恭一，武政誠一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5 変形性膝関節症における膝周囲筋力と日常生活動作能力との関連性（査読付）	共著	平成7年12月	神戸大学医学部保健学科紀要 11 9－15	変形性膝関節症患者に対して大腿四頭筋やハムストリングスの筋力を測定し，それらを体重で除した値等と疼痛，歩行，日常生活動作の障害程度の関係性を調査した．その結果，日常生活動作能力を筋力で評価するときは大腿四頭筋を体重で除した値が有効であるということが示唆された． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，日高正巳，武部恭一，武政誠一，生島秀樹）
6 在宅脳卒中後片麻痺者の自立度と介護者の負担との関係（査読付）	共著	平成8年11月	公衆衛生 60（11） 814－817	在宅高齢障害者を対象に実施した実態調査結果より，介護者の負担について分析した．被介護者の日常生活と家族の介護力とが，介護者の負担や健康に影響を与えていることを示唆した．介護者の精神的負担を今後の研究課題としてあげた． 本人担当部分：分析，考察，一部加筆 （共著者：日高正巳，池田耕二，武政誠一，嶋田智明）
7 両側セメントレス大腿骨人工骨頭置換術に対する理学療法の経験（査読付）	共著	平成8年12月	神戸大学医学部保健学科紀要 12 157-161	両側セメントレス大腿骨人工骨頭置換術を行った2症例に対して荷重訓練を行う上での問題点を述べた．本2症例は片側例と違って健側での支持が期待できないためリハビリテーションを行うためには症例に応じた工夫が必要であることを報告した． 本人担当部分：理学療法実践，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，岩本雅浩，武部恭一，武政誠一，日高正巳）
8 骨粗鬆症患者におけるライフスタイルと骨密度との関連に関する一考察（査読付）	共著	平成8年12月	神戸大学医学部保健学科紀要 12 39-44	骨粗鬆症患者を対象にライフスタイルと骨密度との関連を検討した結果，朝食，喫煙，散歩，体操，牛乳では健康的な生活習慣を有するものが高い骨密度を示した．今後の課題としては若い世代の生活習慣と骨密度の関係や，現在の生活習慣と骨密度の減少速度の関係があげられた． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，一部加筆 （共著者：日高正巳，池田耕二， 武部恭一，武政誠一，長尾徹， 嶋田智明）
9 「健康教室」10年間の総括－公開講座を継続させる工夫－（査読付）	共著	平成9年7月	公衆衛生 61（7） 495－499	地域住民の健康に寄与する目的にて「健康教室」を10年実施してきた．それらから長期継続するための工夫や，今後の展望について検討した．健康教室の有効性は示唆されたが，今後は情報源としても健康教室を役立たせ地域リハビリテーションの１システムとして確立していきたいことを報告した． 本人担当部分：健康教室の企画，開催．分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，武部恭一，武政誠一，岩本雅浩）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10 末期癌患者の緩和ケアにおける理学療法士の役割に関する一考察－未告知であった2症例の経験から－（査読付）	共著	平成16年10月	理学療法ジャーナル 38 (7) 597－602	末期癌患者2症例の緩和ケアにおいて理学療法士がどのような役割を担えるのかについて考察した．理学療法士には，疼痛緩和や身体機能低下から生じる不安や苦痛などに対する心理的サポートという役割があるように考えられた． 本人担当部分：理学療法実践，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，玉木彰，中塚奈々，村田磨優，宮崎昌之）
11 高齢血液透析患者における身体能力推移の経時的記録利用の試み－単一症例による15か月の理学療法経験－（査読付）	共著	平成19年7月	理学療法ジャーナル 41 (10) 865－869	高齢血液透析患者1症例から，身体能力評価表を作成しそれを用いて15か月間の身体能力推移を経時的に記録した．これらからは個人にあった課題抽出や理学療法の介入効果をあげるためには長期介入と観察，経時的記録など様々な角度から評価する必要性が示唆された． 本人担当部分：評価表の作成，理学療法実践，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，玉木彰，中塚奈々，山本秀美，宮崎昌之）
12 理学療法臨床実習による臨床実習生の意識構造の変化（修士論文）	単著	平成20年3月	放送大学	本研究の目的は，臨床実習期間における実習生の意識変容過程の分析から効果的な指導方法や援助方法を検討することにある．対象者は臨床実習生13名（男8名，女5名，平均年齢23.6±3.8歳）であり，分析対象は実習日誌の感想文であった．分析方法は，感想文の内容に対して知識・感情・意欲の３つ視点から「コード化/カテゴリー化」を行い数量化を行った．そして各期間における各カテゴリー数の変化と，臨床実習生の意識構造の分析を行った．その結果から，実習生には，理学療法実践だけではなく医療人として視野を広げるための指導や援助，緊張や焦りを少なくし心理的負担を少なくするためのケア，または具体的な行動目標の立案や課題の設定や自己モニタリング能力を養う指導や援助が必要と考えられた．また，臨床実習生の意識構造は，「感情」，「知識」，「専門・統合」，「意欲」，「冷静」，「躍動」，「混合」優位の７タイプに分類することができ，それぞれのタイプに合わせた指導や援助が必要になることが示唆された． Ａ4判　全41頁
13 マニュアルセラピーと科学性：マニュアルセラピーのエビデンスを考える～構造構成主義からみた見解～（査読付）	共著	平成21年3月	徒手的理学療法 8（2）49-52	本論文では，マニュアルセラピーの理論的基盤に構造構成主義をおき広義の科学性を担保した．その結果，客観的なものから主観的なものまでをマニュアルセラピーのエビデンスとすることを理論的に可能にした． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：瓜谷大輔，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14 認知症後期高齢患者に対する理学療法実践知の構造化：構造構成的質的研究法をメタ研究法としたメモリーワークとＭ－ＧＴＡのトライアンギュレーションによる事例研究（査読付）	共著	平成21年9月	心身健康科学　5(2)　102－109	認知症後期高齢患者に対する理学療法の実践知を質的研究によって構造化した．その結果，実践知モデルを活用することで理学療法実践においてどの部分に力点をあてるのかわかりやすくなり，また柔軟な理学療法ストラテジーの選択が可能になることを示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，玉木　彰，山本秀美，中田加奈子，西條剛央）
15 構造構成的協同教育法の構築に向けて-理学療法臨床実習を通して-（査読付）	単著	平成22年4月	構造構成主義研究 4　100－126	本研究では,多くの諸問題を抱えている理学療法臨床実習教育において，それらを解消しつつ教育効果を高める方法として構造構成的協同臨床教育法を構築した．それはお互いの理解を促したり，広義の科学性を担保することができるとされている構造構成主義をメタ理論に導入した教育法であり，指導者と実習生が共に成長できる教育法である．その特徴としては従来の知識や技術だけでなく，暗黙知や主観的なもので構成される知識や技術についても教育しやすくなっている．
16 遷延性意識障害を有する脳血管障害高齢患者1症例の理学療法実践からみた他動的関節可動域運動の即時効果に関する一考察（査読付）	共著	平成22年4月	理学療法科学　25(2) 305－308	本研究は，遷延性意識障害を有する脳血管高齢患者を対象に，関節可動域運動が可動域維持以外にどのような効果を有しているかを検討したものである．その結果，関節可動域運動は，上肢の動きを即時的に促す効果があることが明らかとなった． 本人担当部分：理学療法実践，データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，玉木彰，山本秀美 ，中田加奈子）
17 3年目の理学療法士は終末期理学療法実践をどのように体験しているか？－「無力感や意欲低下」の生成過程について－（査読付）	共著	平成22年8月	理学療法科学 25(4) 523-528	本研究は，終末期理学療法を実践している3年目の理学療法士を対象に，「無力感や意欲低下」の生成過程を検討したものである．本研究の結果からは，3年目の理学療法士は，実践における葛藤や実践している環境の中から，無力感や意欲低下が生成されていくことが明らかとなった． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
18 理学療法臨床実習における実習生の意識構造の変化－質的内容分析と数量化Ⅲ類による探索的構造分析― （査読付）	共著	平成22年12月	理学療法科学 25（6）881-888	本研究は，臨床実習生の実習日誌を対象に知識・感情・意欲の視点から分析を行い，臨床実習生の意識変化には，「感情」，「知識」，「専門・統合」，「意欲」，「冷静」，「躍動」，「混合」優位の７タイプがあり，それぞれのタイプに合わせた指導や援助が必要になることを示唆した. 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，玉木彰，吉田正樹）
19 理学療法臨床実習を通じた構造構成的協同臨床教育法の方法論的拡張 －臨床現場基礎力の欠如問題を通して－（査読付）	単著	平成23年4月	構造構成主義研 5 218－239	本研究は，以前，筆者が開発した構造構成的協同臨床教育法を方法論的に拡張し，理学療法における臨床現場基礎力の欠如の構造を構成し，教育的介入方法を検討したものである．臨床実習基礎力の欠如は，様々な構造からなっており，その構造を一つひとつ解消，または対応することで臨床実習指導がスムーズになることを示唆した.
20 理学療法臨床実習における実習生の内面因子の経時的変化（査読付）	共著	平成23年12月	教育工学会会誌 35 33-36	本研究では，医療や介護施設で患者の障害構造を評価する実習，いわゆる評価実習を行った実習生10名と患者に理学療法治療プログラムを総合実践する実習，いわゆる総合実習を行った実習生17名から実習理想因子，実習負荷軽減因子，不安軽減因子の内面3因子を抽出し，それらと睡眠，自宅勉強時間，自己目標達成度の経時的変化を調査した．その結果，実習期間を通して，内面3因子では評価，総合実習ともに実習理想因子は維持され実習負荷軽減因子と不安軽減因子は増加する傾向にあること，睡眠と自宅勉強時間では評価実習は自宅勉強時間が多く総合実習は睡眠時間が多い傾向にあること，自己目標達成度では評価，総合実習ともに増加する傾向にあることが明らかとなった．本研究は，理学療法臨床実習生の内面因子を明らかにし，それら因子の経時的変化を明らかにしたものである. 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，吉田正樹）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
21　理学療法臨床実習における実習生の意識変化の解析に関する研究 （博士論文）	単著	平成24年3月	大阪電気通信大学	本研究は，実習生の知識，感情，意欲の3因子に着目し，質的内容分析を用いて探索的に実習生の日誌を解析した．その結果，実習期間を通して，実習生は意識の中で理学療法実践を多く学びながら緊張や焦りを多く感じ，思考的な意欲を心がける傾向にあることを明らかにした．続いて，同じ3因子に着目し，質的（言語）データの因子分析とされる数量化Ⅲ類を用いて，実習生の日誌を探索的に解析し，実習生を「感情優位」，「知識優位」，「専門・統合優位」，「意欲優位」，「冷静優位」，「躍動優位」，「混合」の7タイプに分類できることを明らかにした．さらに従来は着目されなかった肯定的，否定的，高喚起，低喚起感情の４つの感情変化に着目し，実習生の日誌を解析した．その結果，実習生にはいくつかの感情変化パターンがあることを明らかにした．ここまでの解析方法は作業負担が大きく実用性にも欠けることから，簡便な調査方法が必要と考え調査票を作成し調査を行った．その結果，実習生には実習理想因子，実習負荷軽減因子，不安軽減因子の3つの内面因子があること，それら3因子と睡眠，自宅勉強時間，自己目標達成度の経時的変化からは，精神的ストレスは実習期間を通して軽減していくこと，精神的ストレスと自己目標達成度の間には因果関係があること，評価実習と総合実習では実習生の睡眠と自宅勉強時間の関係が逆転することを明らかにした． Ａ4判　全131頁
22　終末期理学療法教育における構造構成的協同臨床教育法の可能性（査読付）	単著	平成26年3月	構造構成主義研究 6　135-153	本研究は，筆者が開発した構造構成的協同臨床教育法を終末期理学療法教育に応用した実践研究であり，それによる学習効果を明らかにした．終末期理学療法には，従来の理学療法にはない最後に死を迎えるという問題を抱えていえる．そのため，無力感につながる可能性が大きい．こうした特殊な問題を抱える終末期理学療法教育において学習効果を示せた意義は大きいことを提示した．
23　理学療法臨床実習の認識構造からみた終末期理学療法の課題（査読付）	共著	平成26年6月	理学療法科学　29(3) 411-415	本研究では，理学療法臨床実習生の終末期理学療法に対する認識構造を視点に，終末期理学療法の教育的，実践的課題を提起した．理学療法臨床実習生の終末期理学療法に対する認識構造モデルは，主に理学療法士の内面の原動力と環境や状況 からくる行動の原動力から構成されていた．よって，本モデルからは終末期理学療法の環境や状況の見直しのための啓蒙や教育，医療，社会のシステム作り，死の語りを取り入れた教育課程の導入等が提起された． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，山本秀美，中田加奈子，黒田未貴，廣瀬将士）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
24　術後感染による両側TKA再置換術後１症例の理学療法からみた臨床的課題（査読付）	共著	平成27年3月	理学療法ジャーナル 49(3) 267-271	本研究では，術後感染症による両側2期的TKA再置換術1症例の理学療法を行い，従来のTKAとは違う経過や問題点を経験したので，それをもとに具体的な臨床的課題を抽出した．その結果，1）疼痛に対する物理療法の適切な選択，2）適切な関節運動を誘導する関節可動域運動とその妥当性，3）関節や筋の状態を評価しながら負荷量を設定する筋力増強運動とその妥当性，4）転倒リスクの回避と日常生活活動の維持，5）体力維持（廃用症候群予防），6）炎症の再燃を意識した運動量の設定，7）退院後の炎症の把握，8）運動量の増加に伴う転倒リスク，9）長期入院による心理的負担という臨床的課題が挙げられたことを提示した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：宮﨑紗也佳，池田耕二，廣瀬将士，町井義
25　特発性器質化肺炎患者に対して積極的呼吸理学療法を実施した一症例（査読付）	共著	平成27年3月	理学療法科学 30(1) 135-139	本研究では，特発性器質化肺炎（COP）に対する呼吸理学療法の有効性を1症例の症例研究法にて検討した．初期（1週）と最終（7週）の肺機能検査，心肺運動負荷試験，長崎大学呼吸器疾患日常生活活動評価表（NRADL）の評価結果を比較したところ，症例の運動耐容能，NRADLが改善し，病型分類に基づく呼吸理学療法の有効性を示唆した．Idiopathic Interstitial Pneumonias（以下，IIPs）の病型分類に基づく呼吸理学療法はCOP患者に対して有効であることを提示した． 引用文献（11） 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：大原佳孝，池田耕二，宮崎紗也佳，小田瑛梨，堀江淳，池田秀一）
26　回復期リハビリテーション病棟における終末期がん患者の在宅復帰を円滑にする条件 －悪性リンパ腫1症例の理学療法経験を通して－（査読付）	共著	平成27年7月	理学療法科学 30(3) 479-482	本研究では，回復期リハビリテーション病棟における終末期がん患者の在宅復帰を円滑にするための条件を明らかにした．その条件とは，1）患者，家族の在宅復帰への意志が明確であったこと，2）関わるスタッフが終末期という視点に転換できたこと，3）関わるスタッフが情報を共有できたこと，4）かかりつけ医との相性の良さや急変時の受け入れ体制が明確であったことであり，これら4つの条件を満たすことで終末期がん患者の在宅復帰は円滑になることを示唆した． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：黒田未貴，池田耕二，中田加奈子，井谷由香理，中川真優，朴聖章）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
27　直腸がんによるストーマ造設と化膿性関節炎による大腿骨骨頭切除を施行したがんサバイバー１人の二つの体験（査読付）	共著	平成28年3月	理学療法科学31（1） 175-180	本研究では，がんサバイバー1人の二つの体験から理学療法ケア（心理的ケア，配慮，工夫など）構築のための有効な視点を提示した．対象は，直腸がんによるストーマの造設と化膿性関節炎による大腿骨骨頭の切除を同時に体験した40歳代の男性1人である．方法は構造構成的質的研究法をメタ研究法においた事例―コード・マトリックス法とした．結果，本男性の体験は，【排泄機能の変更体験】と【下肢支持機能の停止体験】という二つの体験事例と，【生活レベルの変化の感じ方】，【機能変更，停止による感情表出】，【機能変更，停止に対する受け止め方】，【患部に対する認識】，【患部に対する接触行動】，【機能変更，停止による新たな学習】の六つのコード（カテゴリー）から構成された．二つの事例比較からは，生活レベルの変化の感じ方や機能変更，停止による感情表出，受け止め方，新たな学習の内容に違いが認められ，患部に対する認識や接触行動の内容には共通したものが認められた．直腸がんによるストーマ造設後と化膿性関節炎による大腿骨骨頭切除後のがんサバイバーに対する理学療法ケア構築のための有効な視点が提示できた． 本人担当部分：理学療法実践，データ収取，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，山本秀美，黒田未貴，河野茉梨絵）
28　理学療法時の意欲を向上させる声かけの言い回しに関する予備的研究（査読付）	共著	平成29年2月	理学療法科学 32(1) 35-38	本研究では，フレーミング効果を用いた言葉かけの言い回しが，リハビリテーション対象患者の意欲にどのような影響を与えるかを調査した．対象は，調査に協力を得られた入院患者37名（男性17名，女性20名，年齢69.9 ± 12.6歳）とした．紙面によるアンケートにて，トイレ，歩行，疼痛の3つの場面を想定し，各場面で肯定的および否定的な声かけの2つの言い回しを設定し，意欲の向上がみられるかを調査し比較した．結果，3つの場面全てにおいて，肯定的な声かけの言い回しで患者の意欲の向上が認められ，否定的な声かけの言い回しでは意欲の向上は認められなかった．理学療法時の肯定的な声かけの言い回しは，患者の意欲を向上させることが示唆された．結果は，肯定的なフレーミングによる言い回しが有効であったことを示唆した 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：喜多一馬，池田耕二）
29　回復期リハビリテーション病棟における高齢患者に対する退院支援能力の向上に向けた事例研究 ―高齢患者本人，家族，ケアマネージャーに対するインタビュー調査より―（査読付）	共著	平成29年3月	大阪行岡医療大学紀要 4 19-24	本研究では，近年，リハビリテーション対象者として多い骨折や認知症を抱える70～90歳代の女性を対象に，退院支援後の生活を調査し，回復期リハビリテーション病棟における退院支援能力を向上させる知見を抽出した． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，尾藤彩花，黒田未貴，阪本みさき，木村恵理，松井美夕貴，久貝亮太，池田秀一，清水貴恵）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
30　慢性疼痛患者の生活管理-訪問リハビリテーションによる実践-	単著	平成29年5月	ペインクリニック 38 (5) 623-639	本稿では，近年着目されている慢性痛患者を生活習慣病の一つと位置づけ，運動，睡眠，食事，排泄，ストレス，社会との関わり，生活史の視点から生活管理の必要性を示唆した．なお，訪問リハビリテーションによる生活管理の実践で有効であった事例を提示した．
31　肺サルコイドーシスを有した脛骨高原骨折術後1症例に対する全身持久力トレーニングの効果（査読付）	共著	平成29年6月	理学療法科学32 (3) 449-453	本研究では，肺サルコイドーシスを有する脛骨高原骨折術後1症例の全身持久力を，CPX（心肺運動負荷試験）を用いて検査し，問題点を明らかにするとともに運動処方を有効に行い，生活を向上させることができたことを示唆した． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：大原佳孝，池田耕二，高橋昇嗣，池田秀一）
32 在宅終末期がんサバイバーのリハビリテーションにおける多職種連携の有効性（査読付）	共著	平成29年８月	地域リハビリテーション 12(8)701-708	がんサバイバーは，がん罹患者（生存者）だけでなく家族（遺族）などを含む概念であり，周囲と共に人生を構築しようとする意味がある．そのため，がんサバイバーの訪問リハでは，本人に加え，周囲を取り込みながら実践していく必要がある．今回，在宅終末期がんサバイバー2事例のかかわりからは，地域における多職種連携の有効性を示唆することができたので報告する．事例1は，80歳代前立腺がんの男性である．多職種連携からは，情報共有アプリを利用したことで，座椅子に対する本人の想いや仏壇前でおむつを交換することへの妻の嫌悪感が理解できた．事例2は，60歳代右下顎歯肉がんの男性である．後日，本人の不安や葛藤の原因が間近に迫る次女の結婚式にあることが多職種連携でわかった．これらからは，従来の方法に加え，情報共有アプリなどを積極的に活用した多職種連携が地域でも有効に機能すれば，本人や家族の想いに応える実践が可能になると考えられた． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：金谷親好,竹ノ内裕一,岩元香菜子,濵﨑恵,池田耕二,久松憲明）
33　当院における家族支援の取り組み一事例からみたリハビリテーション科の支援の検討(査読付)	共著	平成29年10月	日本慢性期医療協会誌 25(113) 68-71	本稿では，脳卒中後遺症患者に対する緩和ケア（緩和的理学療法実践）の経過と合わせて，家族に対する支援について検討を加えた．リハビリテーション専門職が積極的に緩和ケアに取り組むことで家族の心理的負担は軽減し，緩和ケアに満足できる可能性が高まると考えられる． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：山口朋彦，池田耕二，山口美帆子，堀寿美代，沢田学）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
34 訪問リハビリテーションにおける在宅緩和ケアとしての理学療法の可能性 ―がん患者と非がん患者の事例を通して―（査読付）	共著	平成30年2月	医療福祉情報行動科学研究53-9	本稿では，訪問リハビリテーションにおける在宅緩和ケアとしての理学療法の実践から有効な実践知を抽出し，その可能性を提示した． 事例1の大腸がんを有する80歳代女性の実践からは，理学療法士の介入は限られているが，多職種連携により運動療法と環境調整が継続できれば，疼痛緩和の時間を多くし，生活全体を変化させることができることを示唆した． 事例２の多系統萎縮症を有する60歳代女性の実践からは，疼痛等により他者との関わりが減少していても，多職種連携によって小さな効果を積み重ねていくことができれば，最後まで希望のある充実した時間を提供できることを示唆した． 今回の訪問リハビリテーションにおける多職種連携による在宅緩和ケアの２実践は，がん患者と非がん患者に対する在宅緩和ケアとしての理学療法の可能性を広げたと考えられた． 本人担当部分：理学療法実践，データ収集，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，山本秀美，古家真優，中岡絵
35 【ペインリハビリテーションの新潮流・新戦略】慢性疼痛患者に対する地域・在宅リハビリテーション：理学療法士による生活管理の実践	共著	平成30年4月	ペインクリニック 39特別号：246－252	本稿では，近年着目されている慢性痛患者を生活習慣病の一つと位置づけ，運動，睡眠，食事，排泄，ストレス，社会との関わり，生活史の視点から生活管理の必要性を示唆し，訪問リハビリテーションによる生活管理の実践事例も紹介した． 本人担当部分：理学療法実践，分析，考察，論文執筆 (共著者：池田耕二，山本秀美，中岡絵美，古家真優，大島知子, 竹内章)
36【ペインリハビリテーション：新視点からの理学療法】慢性疼痛患者に対する地域・在宅リハビリテーション：理学療法士による生活管理の実践	共著	平成30年8月	ペインクリニック39(8) 1038-1044	本稿では，近年着目されている慢性痛患者を生活習慣病の一つと位置づけ，運動，睡眠，食事，排泄，ストレス，社会との関わり，生活史の視点から生活管理の必要性を示唆し，訪問リハビリテーションによる生活管理の実践事例も紹介した． 本人担当部分：理学療法実践，分析，考察，論文執筆 (共著者：池田耕二，山本秀美，中岡絵美，古家真優，大島知子, 竹内章)
37 腎臓リハビリテーションにおける高齢血液透析患者に 対する理学療法士の役割に関する一考察（査読付）	共著	平成30年8月	理学療法科学33(4)725-729	本稿では，高齢血液透析患者2症例の腎臓リハビリテーションから，運動療法による身体機能の改善，行動変容に対する支援，身体活動量の管理，生活の再構築に向けたソーシャルワーク的実践という理学療法士の4つの役割を示唆した 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：大原佳孝，池田耕二，古家真優，高橋昇嗣, 池田秀一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
38 理学療法士の経験学習プロセスの解明に向けて ―経験学習研究における理論的枠組みと課題―（査読付）	共著	平成31年3月	大阪行岡医療大学紀要（6），23-33，2019	本稿では，理学療法士の経験学習プロセスの解明と支援方法の開発に向け，これまで多くの専門職の経験学習プロセスを明らかにしてきた松尾による経験学習研究の理論的枠組みを要約し紹介した． そして，それによって解明された看護師と保健師の経験学習プロセスを紹介し，理学療法士の経験学習プロセスの解明に向けての研究的枠組みを整理し，課題を考察した． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）
39 ジャンプ着地後の姿勢安定化能力の信頼性と性差の検討（査読付）	共著	平成31年3月	大阪行岡医療大学紀要（6），5-9，2019	本稿では，前方ジャンプ着地後のDynamic stability index（DSI）の信頼性と，性差，体格との関連等を検討し，DPSIの信頼性は良好であり，性差の影響も把握できることを示唆した．また，女性はジャンプ着地後の姿勢安定化能力が低いことを示した． 本人担当部分：分析の一部，考察 （共著者：粕渕賢志，神里巌，久保峰鳴，幸田仁志，藤田浩之，福本貴彦，池田耕二）
40 理学療法想定場面におけるフレーミング効果を意識した声かけの言い回しの違いによる視覚的文字教示が患者の意欲に与える影響について ―肯定的と否定的な言い回しによる比較―（査読付）	共著	令和元年6月	理学療法科34(4)353-357	本稿では,理学療法時の肯定的，否定的な声かけの言い回しの違いによる視覚的文字教示が，患者の意欲にどのような影響を与えるかを検証し，いくつかの場面で肯定的な言い回しの方が患者の意欲を向上させることを明らかにした． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：喜多一馬，池田耕二）
41 理学療法を積極的に取り組んでいる障がいを有した働き盛りの患者の理学療法への取り組みに対する意欲を探求する－解釈学的現象学的分析による事例研究―（査読付）	共著	令和元年10月	保健医療学部雑誌 10(2) 79-91	本研究の目的は，障がいを有した働き盛りの患者の理学療法への取り組みに対する意欲を向上させるための知見を得ることである．対象は，理学療法に積極的かつ意欲的に取り組んでいる40 歳代の男性入院患者である．方法は解釈学的現象学的分析とし，手順としては，本患者に半構造化面接を行い，理学療法を積極的かつ意欲的に取り組める理由について聞きとり，理学療法への取り組みに対する意欲を分析した．結果は，本患者の理学療法への取り組みに対する意欲を9 つのテーマから解釈することができた．テーマは，半年限定，家族や妻の存在，男のプライド，苦痛を意欲に変化させる力，関係性から構成される意欲等が示された．我々は，これらに着目した理学療法実践時の声かけや配慮，工夫が理学療法への取り組みに対する意欲の向上に大切になると結論づけた． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：喜多一馬，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
42 高齢線維筋痛症2症例の3週間入院運動プログラムの効果について ―痛みと身体・注意機能，包括的QOLおよび背外側前頭前野の血流動態への影響―（査読付）	共著	令和元年12月	理学療法科34(6)893-846	本研究の目的は，高齢線維筋痛症（FM）患者の入院運動プログラムが痛みと身体・注意機能，包括的quality of living（QOL），背外側前頭前野（DLPFC）の機能に与える影響を検討することであった．対象は，高齢FM女性2名とし，方法は3週間入院運動プログラムを行い，介入前後に痛み，身体・注意機能，包括的QOL，DLPFCの血流量と反応時間の評価を行った．結果は，両者とも痛みの認知・情動的側面，身体機能，包括的QOLに改善がみられたが，注意機能とDLPFCの機能については症例で異なる結果となった．高齢者FM患者に対する入院運動プログラムの介入は，痛みの認知・情動的側面や身体機能，包括的QOLの改善に有効であることを示唆した． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：藤田信子，池田耕二，高井範子，金子基史，松野悟之，三木健司，仙波恵美子）
43 卒前教育における終末期理学療法講義の役割を再考する（査読付）	共著	令和2年2月	理学療法科35(1)133-138	本研究の目的は，終末期理学療法（終末期PT）の講義を理学療法学科の学生がどのように受け止めているかを明らかにし，本講義の役割を再考することである．対象は理学療法学科の学生62名とし，方法は質的研究法である修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach：M-GTA）を用いて終末期PTの講義後（90分）の感想文のテクストデータからカテゴリー化によってモデル構築を行い分析した．結果，モデルは，死と向き合う機会，死と向き合うことで促された学び，終末期PTに対する実践意欲の向上の3つカテゴリーからなり，これらは階層性を成していた．モデルは終末期PT講義における学生の段階的な受け止め方（習熟度）と実践意欲を高める過程を示した．これを活用すれば学生の習熟度に合わせた実践意欲を高める講義が可能になると考えられた． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：山口朋彦，池田耕二，桝本展孝）
44 デイケアにおいて閉じこもり傾向にあった高齢利用者に対する行動変容理論の実践（査読付）	共著	令和2年3月	地域リハビリテーション15(1) 54-59	高齢者の閉じこもりは，要支援・要介護，死亡リスクを高めるため，その予防や対策が重要視されている．高齢者の閉じこもり対策の一つに行動変容理論の実践がある．しかし，デイケア（通所リハ）における行動変容理論の具体的な実践方法や工夫などの知見は少ない．そこで今回，3つの実践事例に対する物語分析から有効な実践知を抽出した．その結果，3実践事例からは，個々に応じた靴の変更や横断歩道の横断開始のタイミングの指導，または痛みに対する自己管理の指導，時期に応じたケアマネジャーとの連携，デイケアにおける屋外歩行練習による成功体験の蓄積等の効果が重なることで，買い物行動の獲得に繋がる可能性があるという実践知が得られた． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：大山大将，池田 耕二，黒岡禎治，廣瀬将士，吉富慈洋，高本晴加，勝久江，池田秀一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
45 在宅終末期リハビリテーションを実践しているセラピストの体験を探求する ―グループインタビューによる事例研究― （査読付）	共著	令和2年3月	大阪行岡医療大学紀要 7 11-17	本研究では，在宅終末期リハビリテーションを実践しているセラピストの体験を探求し，在宅終末期リハビリテーションを有効に実践するためには患者や家族との関係性づくりや変化に気づく等の能力が必要であることを示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共著者：池田耕二，根釜夢乃，岩永愛理奈，谷口茉恵，西本正樹）
46 地域リハビリテーションとしての温泉旅行の可能性を探る -事例研究-（査読付）	共著	令和2年3月	医療福祉情報行動科学研究 7 37 - 43	本研究の目的は，地域リハビリテーションのソフトインフラとして温泉旅行を整備するため，温泉旅行および温泉旅行の各活動場面が要介護高齢者に与える影響を明らかにすることである．方法は，日帰り温泉旅行に参加した要介護高齢者2名を対象に，半構造化インタビューを行った．インタビューでは温泉旅行にある各活動場面の楽しみの程度と対象者や家族等の変化を調査した．結果は，A氏は入浴を含めた温泉旅行の全活動場面を楽しんでいた．また，脳卒中後10年間行くことはなかった温泉旅行に再び行こうとしており，温泉旅行の参加に対する自信を回復していた．B氏は温泉旅行の入浴以外の準備，移動を楽しんでおり，温泉旅行で新たな人間関係を構築していた．本研究では，温泉旅行にある各活動場面や温泉旅行は個々の要介護高齢者に様々な影響を及ぼすことが示唆された．その影響としては，自信の回復や人間関係の再構築を促進させることが示唆された． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：喜多一馬，池田耕二）
47 Quantitative Evaluation of Functional Instability Due to Anterior Cruciate Ligament Deficiency（前十字靭帯断裂による機能的不安定性の定量的評価）（査読付）	共著	令和2年7月	Orthopaedic journal of sports medicine 8(7) 2325967120933885 - 2325967120933885	本研究では，TBTテストが主観的な膝の不安定感を反映した体重負荷条件下でACLDによる機能的不安定感を定量的に評価できる安全かつ信頼性の高い方法であることを示した．本テストは，ACL再建前後の客観的な測定値を追加することで，治療成果やスポーツ復帰の指標となる． 本人担当部分：データ解析・統計 （共著者：松尾高行，小柳磨毅，沖本遼，森内俊貴，池田耕二，中江徳彦，中川滋人，史野根生）
48 単身世帯の認知症高齢者1症例の地域生活の再建を可能にした訪問リハビリテーションの実践 （査読付）	共著	令和2年8月	訪問リハビリテーション 10(3) 153-159	本論文では，認知症高齢者に対して，生活リズムの改善，生活意欲と活動性の向上に着目し，訪問リハが本人の希望に即しながら多角的に介入すれば，地域生活の再建に有効であることを示唆した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：金谷親好，金丸真由美，池田耕二，久松憲明）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
49 理学療法士の経験学習プロセスの解明と支援方法の開発に向けた探索的研究 （査読付）	共著	令和2年10月	理学療法学 48(1) 19-28	本論文では，熟達理学療法士（以下，PT）の経験学習プロセスにある成長を促す経験と学習内容を明らかにした．熟達PT はキャリアの初期に「障がいを有した患者の社会参加に向けた実践経験」から〈人とのかかわりや社会・生活に対する実感〉を，初期～中期に「予期できぬ否定的な経験」から〈医療の厳しさ〉等や「重度患者を基本的理学療法で改善した経験」から〈基本的理学療法技術の有効性〉等を，中期～後期に「実習生や新人に対するサポート経験」から〈自己内省による知識・技術の整理〉等や「多職種連携による介入経験」から〈コミュニケーション〉等を学習していることを示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）
50 理学療法臨床実習・現場教育を支援する教育的工夫と配慮	共著	令和2年12月	奈良学園大学紀要 13 1-8	本論文では，2019年に理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則の一部を改正する省令がだされ，理学療法臨床実習は大きく変わろうとしていること，昨今の社会情勢を背景に理学療法士の現場教育も変わろうとしていることを踏まえ，学生や新人理学療法士の自律性を育成し，それを支える教育的工夫や配慮を，1)教育目標の共有，2)現場のストレスに対する認識，3)チームという場づくり，4)感情労働，5)経験資本という視点から，筆者らの経験をもとに提案した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，田坂厚志，城野靖朋）
51 本学保健医療学部リハビリテーション学科志望経緯に関する調査	共著	令和2年12月	奈良学園大学紀要 13 149-155	本研究では，本学保健医療学部リハビリテーション学科の広報活動に資する基礎資料とするため，2020年度新入生の志望経緯および本学に対する印象等についてアンケート調査を行った．その結果，理学療法・作業療法いずれの専攻についても，多くの学生は当初の志望を中途変更することはなかった．一方で，中途で変更する学生においては，自身の経験や自身の適性についての内省，さらに作業療法学専攻については，特徴的な技術に魅力を感じたことが契機となっていた．入学前の本学選択においては設備，環境面を魅力と感じており，入学後は教員や教育の質について肯定的な意見が多かった．以上から，低年齢時における分かりやすい理学療法・作業療法に関する周知，あるいは本学の特徴的な講義等の教育方法に関する広報が有用であると考えられた． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：飯塚照史，辻下守弘，池田耕二，城野靖朋，中島大貴）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
52　日帰り温泉旅行における要介護高齢者自身の生活機能に対する認識の変化：解釈学的現象学的分析（査読付）	共著	令和3年3月	医療福祉情報行動科学研究 8 55-65	本論文では，日帰り温泉旅行に参加した個々の要介護高齢者自身の生活機能に対する認識の変化を，解釈学的現象学的分析を用いて分析した．その結果，13サブテーマと【楽しさに繋がる行動を促進する】，【喪失されていた思いの再獲得】，【豊かな感情を喚起する環境に対する認識】，【スタッフの関り方や置かれた立場によって生じる感情】，【自身の在り方に対する認識の変化】という5テーマが抽出できた．要介護高齢者は温泉旅行を経験したことにより，多様な生活機能に対する認識の変化を生じていたことを述べた． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：喜多一馬，池田耕二）
53　終末期肺腺がん高齢者1症例のQOLの向上が図れた訪問リハビリテーションの実践（査読付）	共著	令和3年8月	訪問リハビリテーション 11(3) 160-165	本論文では，終末期にある利用者との間に，信頼関係の構築ができれば，たとえ余命1ヶ月であったとしても新たに希望が芽生え，訪問リハが終末期がん高齢者に対するQOL向上の実現の可能性を高めることや，訪問リハの多面的な視点と専門的な知識・技術に基づいた介入，多職種連携による多角的介入が有効に機能すれば，終末期がん高齢者のQOLも向上させることができることを示唆した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：金谷親好，金丸真由美，池田耕二，田中千恵）
54 Perceptions, beliefs, and needs of Japanese people with knee osteoarthritis during conservative care: A qualitative study(保存療法中の変形性膝関節症の日本人における認識，信念，ニーズ：質的研究）（査読付）	共著	令和3年9月	BMC Musculoskeletal Disorders3;22(1):754. doi: 10.1186/s12891-021-04641-7.	本研究では，日本人の膝OA患者がどのように症状や障害を経験・認識し，保存的ケアの際にどのように向き合っているのかを質的研究によって明らかにした．参加者は膝OA患者（男性2名，女性7名，平均年齢74.3±5.5歳）であった．対面式の半構造化インタビューによって個人的な経験を聞き取った．分析はグラウンデッド・セオリー・アプローチに基づいて行った．結果，データから「負の経験」と「困難への対処」の2つのコアカテゴリーが抽出された．日本人の膝OA患者は，エビデンスに基づいた情報や，同じ境遇の人とつながって問題を解決することを望んでいることがわかった．よって，患者の不安を解消するためには，医療従事者が丁寧なヒアリングを行い，患者の過去の経験に関する情報を得て，膝OAに関する患者の経験を理解する必要がある．膝OA患者が経験する症状や困難は，膝OAに対する患者の認識や信念を統合したエビデンスに基づく情報によって管理されるべきである． 本人担当部分：計画，データ収集，分析，考察，執筆 （共著者：Daisuke Uritani, Akane Ikeda, Toru Shironoki, Kentaro Matsubata, Yuto Mutsura, Tadashi Fujii, Koji Ikeda）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
55 2021年度リハビリテーション学科新入生における志望経緯に関する調査	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要 13 1-6	本論文では，学部設置3 年目を迎えた奈良学園大学リハビリテーション学科においては，定員充足率増加に伴い新入生の進学経緯も多様になっているものと考えられれる．そこで，3 期生においてアンケート調査を実施し，2 期生との比較を通じてその傾向について比較検討した．結果，当初における職業選択は変更されることなく，近しい人物への相談を伴ったオープンキャンパスへの参加，加えて本学近隣環境等への好感を以て進学を決定している経緯があり，2 期生との大きな変化はなかった．一方で，プレゼンスの高まり，教員対応への肯定的意見と捉えられる側面もあり，本学魅力の一端として認識する必要性が示唆された． 本人担当部分：考察，一部加筆 （共著者：飯塚照史，辻下守弘，池田耕二，城野靖朋,中嶋大貴）
56　介護付き有料老人ホームにおけるリハビリテーションに関する一考察一事例研究．リハビリテーション･ケアセンターつららかにおける実践の振り返り一	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要 13 7-17	本論文では，介護付き有料老人ホームにおける2年間のリハビリテーション実践の振り返りを通して，その効果や役割，あり方，可能性を考察した．その結果，筆者らが取り組んでいる介護付き有料老人ホームのリハビリは，リハビリスタッフと入居者，家族とのコミュニケーションや関係性を基軸に，喜びや安心感という感情表出，全身調整機能や生活リズムの再構築，集団リハビリというコミュニティ，環境変化からくる多様な効果や役割が総じて，入居者や家族の生活の質（QOL）向上の可能性を高めていると考えられた．これらを考慮したリハビリテーションが実施できれば多様な障害像を有する入居者のQOL向上が図れると期待することができる．これらについてはさらに検証を加える必要があり，今後の課題であることを提言した． 本人担当部分：実践，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，山本秀美，古家真優，梅津奈央，大塚佳世）
57　地域リハビリテーションにおけるソフトインフラとしての温泉旅行についての再考：地域高齢者・障がい者のQOLの向上を図る仕組み作り	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要 13 53-58	本論文では，温泉旅行を地域リハビリテーションの一環として理論的に整備し，その可能性について考察した．温泉旅行の効果に関する先行研究の多くは温泉浴の疾病に対するものであり，生活の質への効果やその因果関係を明示するものは少ない．しかし，高齢者に人気のある温泉旅行を，生活の質を向上させるためのソフトインフラとして，新たな視点から理論的に再構築する意義は大きい．日帰り温泉旅行における2つの実態調査からは，要介護高齢者には多様な楽しみ方があることや，多様な思い・感情・変化があることが示唆されている．これらを温泉旅行へ理論的に組み込むことができれば，地域リハビリテーションの新たなソフトインフラになる可能性があると考えられる．本稿では，これらの知見を通じて，温泉旅行をソフトインフラとして理論的に再構築し，多様な工夫や企画等を提案し，その可能性や課題を提示した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：喜多一馬，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
58 線維筋痛症患者の語りから見出された疼痛の背景･疼痛抑制要因および今後の治療に望まれること	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要 13 91-101	本研究では，FM患者12名を対象とした3週間入院運動プログラムの介入前後に行った半構造化面接から，痛みの背景にある精神的ストレス要因，および，FM患者の痛みの状況や疼痛抑制要因に関する語りを取り上げ，今後のFM治療に望まれることを示唆する．結果，疼痛抑制要因として痛みがあっても身体を動かすことが逆に痛みを軽減させること．セルフマッサージや入浴・シャワーなどで身体を温めること，運動を含めた規則正しい生活習慣等が重要になることが示唆された．また辛さに共感してくれる他者の存在が痛みの軽減につながることが語られた．今後，FM治療に望まれることとして，FM治療の専門家の育成やFM患者に対する「初期対応」の重要性，FM患者が語る疼痛抑制要因から見出された疼痛管理やFM患者に対する入院運動プログラムの可能性，さらに，FM患者への言葉がけの工夫や患者に寄り添う医療スタッフの育成，および，FM患者に対するチーム医療の必要性などが患者の語りから見出された． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：高井範子，池田耕二，藤田信子，三木健司，高橋紀代，仙波恵美子）
59 3週間入院運動プログラムによる線維筋痛症患者の心身の変化 -心理面談により明らかになった理学療法士の対応の重要性- （査読付）	共著	令和4年2月	理学療法科学 37(1) 45-58	〔目的〕新たに考案した3週間入院運動プログラムによる介入前後の線維筋痛症（FM）患者の心身の変化を調査し，理学療法士（PT）の適切な対応を明らかにすることである．〔対象と方法〕FM女性患者12名を対象とし，医療や心理学などの専門家による共同チームが考案した3週間入院運動プログラムによる介入を行い，その前後において質問票（日本語版線維筋痛症質問票（JFIQ），日本版ベック抑うつ質問票（BDI-Ⅱ），The 8-item Short-Form Health Survey （SF-8））による評価と心理面談による聴き取りを行った．〔結果〕本プログラムによりFM患者のJFIQでは11名，BDI-Ⅱでは10名，SF-8では9名（身体面），8名（精神面）が改善を示した．患者の語りからは，患者の痛みや辛さに寄り添う姿勢など，PTの対応が患者にとり重要であることが示唆された．〔結語〕本プログラムはFM患者の心身に変化を及ぼす効果があり，その遂行において患者の痛みや辛さに寄り添うPTの姿勢が重要である． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：高井範子，藤田信子，池田耕二，金子基史，丸山伸廣，中原理，三木健司，髙橋紀代，仙波恵美子）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
60 放課後等デイサービスにおける理学療法士の役割および課題 （査読付）	共著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究 9 39-46 2022年	近年，放課後等デイサービスの事業所は年々増加しており，そこに関わる理学療法士は国，放課後等デイサービスおよび理学療法士協会から期待されている．しかし，現状は放課後等デイサービスに関わる理学療法士は極めて少ない．また放課後等デイサービスにおける理学療法士の役割や課題に関する先行研究や実践報告はほとんど見受けられない．このような現状では理学療法士はどのように放課後等デイサービスに関われるべきか分かりにくい状況である．理学療法士が放課後等デイサービスで働くことに関心を有しても，行動に移しづらい要因となっている．そこで，本論文では，放課後等デイサービスにおける理学療法士の役割や課題について，数少ない先行研究や実践報告，そして，筆者のこれまでの経験を通して提示することを目的とした．その結果，放課後等デイサービスにおける理学療法士の役割は，個別療育と集団療育の大きく二つあることが分かった．個別療育では理学療法士が主に個別に合わせたリハビリテーションを行う．集団療育では主には理学療法士以外のサービス提供職員が担当することが多いが，集団療育の場にも積極的に理学療法士が関与することで支援スタッフの児童やリハビリテーション専門職への理解が進む可能性がある．次に，放課後等デイサービスに理学療法士が関わる際の今後の課題としては日常生活動作が比較的自立した児童～医療的ケアが必要な重症児にも対応できるように理学療法士としての専門性を幅広く高める必要性，リハビリテーション専門職が早期から放課後等デイサービスと情報共有する必要性，地域に住む人たちが障害児・者についての理解を広げてもらえるように理学療法士が啓発活動を行うことなどが課題として挙げられた． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：辻下聡馬，池田耕二，辻下千賀）
61 コロナ禍における地域理学療法・作業療法実習の取り組みと課題―学内実習の概要と学生アンケート調査による考察― （査読付）	共著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究 9 31-38 2022年2月	【目的】指定規則の改正により，訪問リハビリテーションまたは通所リハビリテーションに関する実習（以下，地域実習）を行うことになったが，新型コロナウイルスの感染拡大により令和2年度・3年度においては学内実習となった．本研究は学内実習の構成について触れ，履修学生のアンケート調査より学内実習の課題と可能性について検討した．【方法】リハビリテーション学科（理学／作業療法専攻）の地域実習は，2年次後期配当科目（2単位）であり，2週間にわたり実施した．学内実習は，①予習，②学内実習，③復習で構成した．①予習は臨床実習専用ホームページ（HP）にて，実習開始1か月前に予習用教材を掲載した．②学内実習では，可能な限り学外実習と遜色のない学習機会が学生に提供されるよう配慮し，日々の学習テーマに沿ってグループ討議を積極的に行い，訪問・通所事業所とライブ中継等を取り入れた．③復習は，学内実習を振り返ることができるよう復習用資料をHPに掲載した．また，令和2年度・3年度の履修学生に対し，実習終了後に学内実習に関するアンケート調査を実施した．【結果】回答率は，令和2年度95.7%，令和3年度94.7%であった．

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				アンケート調査の結果，両年度ともに類似した回答傾向であり，地域実習で扱ったテーマについては77.5 - 97.2%が理解できたと回答した．訪問・通所事業所のライブ中継については，94.4 - 100%で高い評価結果であった．一方，3年次以降の臨床実習に関する質問では，36.4 - 85.9%の学生が「不安」という回答であった． 本人担当部分：実践，考察 （共著者：滝本幸治,吉川義之,笹野弘美,坪内善仁,前田吉樹，中島大貴,辻下聡馬,大浦智子,山形力生,池田耕二）
62 コロナ禍における理学・作業療法士養成課程の早期体験実習 ―学内実習後の学生アンケート調査による検証―（査読付）	共著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究 9 55-63 2022年	令和2年および3年度，新型コロナウイルスの感染拡大をうけ早期体験実習を学内実習とした．学生アンケートの結果から，学内実習の意義や課題を明確にした．アンケートの結果，両年度とも実習内容については多くの学生が「よく理解できた」「まぁまぁ理解できた」と回答した反面，「2年次以降の学外実習に向けた不安」を訴える学生が多かった．自由記述では「教員が近くにいる分質問などがしやすかった」，「疑問をすぐに先生に質問することができた」という意見のほか，「自分が知らなかった分野にも興味が持てた」という意見もみられた．早期体験実習の本来の目的を達成する上で，学内実習は必ずしも不利な点ばかりではない． 本人担当部分：実践，考察 （共著者：前田吉樹，中島大貴，伊藤健一，野中紘士，阿波邦彦，藤田信子，岩﨑智子，橋本雅至，山形力生，池田耕二）
63 熟達理学療法士の経験学習プロセスにおける成長を促す経験（査読付）	共著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究 9 97-103 2022年	【目的】熟達理学療法士から経験学習プロセスにある成長を促す経験を明らかにし，経験学習支援を理論的・実践的に示唆することである．【方法】対象は，熟達理学療法士43名とした．方法はアンケート調査とし，印象に残った経験（時期，内容）を聞き取った．分析にはオープンコーディング法を採用し，成長を促す経験カテゴリーを作成し，コード数の多い上位の成長を促す経験カテゴリーを抽出した．【結果】1）担当患者の理学療法・関係性に苦悩した経験，2）理学療法における成功体験，3）先輩・指導者の治療技術に差を感じた経験などの成長を促す経験カテゴリーが抽出された．【考察】成長を促す経験からは，キャリアを通して理学療法士管理者・指導者は，理学療法士に対して担当患者の理学療法や，担当患者との関係性からくる苦悩に対してケアを行うこと，できるだけ成功体験の蓄積を支援すること，先輩と治療技術の差を実感させる機会を多くすること，そして重度な患者を診る機会や学会発表や参加する機会を多くすることが経験学習支援につながると考えられた． 本人担当部分：研究計画，データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
64 Work beliefs and experiential learning among proficient physical therapists in Japan: Developing a method to support belief formation （日本の熟達理学療法士における仕事の信念と経験学習：信念形成に対する支援方法の開発） （査読付）	共著	令和4年4月	Journal of Physical Therapy Science 34(4) 262-268	[Purpose] This study aimed to elucidate the content of work beliefs related to proficiency among physical therapists in Japan. [Participants and Methods] Participants included 50 therapists who met the definition of proficiency to participate in a questionnaire survey conducted between October 2017 and March 2019. Participants were asked to freely describe their daily work beliefs, including their thoughts, values, and ideals. This content was coded and categorized using open coding; a hierarchical cluster analysis (Ward's method) was conducted of the proficient therapists with the individuals and belief categories as the variables. All belief categories were classified into three groups. [Results] Three work beliefs were identified as follows: 1) practices that emphasize building relationships in the field, 2) broad practices with physical therapist pride (responsibility and enthusiasm), and 3) practices with awareness of treatment outcomes and social benefits. [Conclusion] A better understanding of the three aforementioned work beliefs would facilitate good support for and development of physical therapists. We recommend continuing to elucidate the three work beliefs identified among proficient therapists and verify their educational effects. 本人担当部分：研究計画，データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：Koji Ikeda, Atsushi Tasaka, Kenji Kasubuchi, Yasutomo Jono, Junko Matuda）
65 養成校からみた訪問への臨床実習の実際	共著	令和4年6月	訪問リハビリテーション 12(2) 112-123	訪問リハの役割を，①再自立支援型，②疾病・介護予防型，③緩和ケア型に区別し，各役割ごとに学習すべき事柄や重要ポイントを述べ，訪問リハの臨床実習の配置時期と３つの役割ごとに，臨床実習における組み立て方や指導，教育方法について紹介した． 本人担当部分：論文執筆 （共著者：池田耕二，吉川義之）
66 放課後等デイサービスにおける保護者およびスタッフ視点の児童の課題・目標に関する探索的研究　（査読付）	共著	令和4年12月	理学療法科学 37(6) 571-578	〔目的〕児童に対する保護者およびスタッフの目標や課題を明らかにし，理学療法の課題を提示することである．〔対象と方法〕対象は保護者10名とスタッフ5名とし，10名の各児童の目標・課題を質問紙による自由記述式にて調査した．分析方法はオープン・コーディング法とし，短期・長期的な目標や課題を整理したうえで保護者とスタッフのものを比較した．〔結果〕短期的な目標・課題では，保護者は家庭内の生活のことを，スタッフは学校内の生活のことを気にする意見が多く，認識の相違が認められ，長期的な目標・課題では，保護者もスタッフも就労に関するものが多く，将来の方向性は類似していた．

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				〔結語〕今後の理学療法の課題は，保護者およびスタッフに対して定期的に理学療法評価の結果を伝え，協働してリハビリテーションを進めていくことが重要である． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：辻下聡馬，池田耕二，辻下千賀）
67 数量化III類分析による線維筋痛症女性患者の症状改善傾向の類型化 -3週間入院運動プログラムにおける症状変化を通して-（査読付）	共著	令和4年12月	理学療法科学 37(6) 593-599	〔目的〕3週間入院運動プログラム（有酸素運動，筋力増強運動など）における線維筋痛症（FM）女性患者の症状改善傾向を類型化すること．〔対象と方法〕対象はFM女性患者11名，方法はプログラムの開始前，中，後で，①SF-8（身体的健康度（PCS），精神的健康度（MCS）は前後のみ），②体調，③疲労度，④熟睡度，⑤疼痛，⑥楽しさ，⑦歩数，⑧睡眠時間，⑨睡眠効率，⑩姿勢（座位・立位の割合）を測定し，各項目の改善傾向から数量化Ⅲ類分析を用いて症状改善傾向を4つに分類した．〔結果〕症状改善傾向は，1）睡眠時間，熟睡度，疲労度，2）姿勢とPCS，3）歩数，MCS，睡眠効率，4）疼痛，楽しさ，体調の4つのグループに分類できた．〔結語〕本研究はFM女性患者の運動療法の効果の現れ方を4つに類型化した． 本人担当部分：研究計画，データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，藤田信子，松野悟之，高井範子，金子基史，三木健司，仙波恵美子）
68 施設の種類に対応した臨床参加型実習モデルの提案 一施設の特徴を活かした経験の積ませ方一	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要 15 1-14	本稿では，臨床実習が行われる医療施設と介護施設，訪問リハビリテーションに大別しながら，各施設の理学療法の特徴や役割を整理し，臨床実習の内容や方向性を確認した．次に，学生に対する経験の積ませ方を考慮しながら，各施設における臨床参加型臨床実習モデルを構築し，併せて臨床実習におけるキーポイントを提示した． 本人担当部分：論文執筆 （共著者：池田耕二，滝本幸治，城野靖朋，吉川義之，野田 優希，野中紘士，辻下守弘）
69 理学療法士を育む【場】づくりの着想に関する一考察	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要 15 15-20	本稿では，現在の理学療法士の現場教育や人材育成の課題と限界を提示し，新たな枠組みの必要性を指摘する．筆者らが着想する新たな枠組みとは，理学療法士の発達や成長を後押しする“理学療法士を育む【場】づくり”である．これは理学療法士の経験学習が促進されやすい【場】（雰囲気や組織風土からなる空間）をつくりあげるというものである．しかし，現在，理学療法士の経験学習を促す【場】の特性や，それを成立させるための条件は明らかになっていない．これらを解明することができれば，理学療法士を育む【場】づくりが可能となり，現場教育や人材育成に貢献できると考える．本枠組みの実現可能性は十分あり，これからの現場教育，人材育成の課題の一つとなる． 本人担当部分：論文執筆 （共著者：池田耕二，田坂厚志，城野靖朋，吉川義之，野田優希）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
70 高齢心不全患者のQOL に対する多職種連携による介入の有用性: スコーピングレビュー	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要 15 37-43	心不全患者に対する治療目的の一つは生活の質(Quality of life：QOL)の改善であり，日本循環器学会のガイドラインは高齢心不全患者に対する多職種連携による介入を推奨している．しかし，高齢心不全患者のQOLに関する研究の多くは在宅や地域の患者を対象としており，入院中の患者を対象にはしていない．今後，日本では高齢心不全患者の増加が予測されており，入院中の高齢心不全患者に対する多職種連携による介入のQOL改善効果を検討する意義は大きい．そこで，本研究では入院中の高齢心不全患者に対する多職種連携による介入が退院後のQOL改善に寄与しているかという関心のもと，スコーピングレビューを行った．対象文献の収集はPubMedと医中誌web版とした．結果，11件が全文精読の対象となり，そのうち，分析対象となった文献は1件であった．本採用文献は入院中の高齢心不全患者に対する多職種連携による介入のQOL改善効果を示したが，除外された中で対象国が日本である文献の全てはQOL評価が実施されておらず，日本における入院中の高齢心不全患者に対する多職種連携による介入のQOL改善効果の研究が不十分であることを示唆した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：梅津俊介，喜多一馬，森田隆剛，池田耕二）
71 コロナ禍における生活変化がフレイルに及ぼす影響 ―山間地域における後期高齢者を対象とした質問紙調査―（査読付）	共著	令和5年3月	医療福祉情報行動科学研究 10 55-62	本研究では，コロナ禍における生活の変化がフレイルに及ぼす影響を検討するため，山間地域在住の後期高齢者を対象に質問紙調査を行った．検討対象は，奈良県曽爾村在住でフレイル健診該当者（75歳以上高齢者）のうち住民基礎健診の受診者とした．方法は，自記式質問紙調査とし，①Frailty Screening Index (FSI)によるフレイル判定，②後期高齢者の質問票（15点満点に得点化して使用．高得点ほど解決すべき課題が多い状況を示す），③コロナ禍における生活変化の質問票（主観的な毎日の移動量や下肢筋力，食事量などの増減について過去1年間における生活変化について5つの質問により構成）を採用した．結果，後期高齢者58名（平均81±4歳）が検討対象であった．コロナ禍において主観的に移動量，下肢筋力，会話の機会が減少，あるいは心配や不安が増加したと回答した者が多い傾向であった．FSIによりフレイルと判定されたものは8名（13.8%）であった．多変量解析の結果，FSIによるフレイル判定に対してコロナ禍における移動量（OR:2.66，p=0.037），脚筋力（OR: 0.17，p=0.006）の変化が影響していた．また，後期高齢者の質問票（得点）に対して交絡因子の年齢（標準β：0.243，p=0.047）とともに脚筋力（標準β：-0.343，p=0.007），食事量（標準β：-0.317，p=0.015）の変化が影響していた．結論として，フレイル判定者は少なかったものの，コロナ禍における主観的な下肢筋力低下がフレイル状態を反映すること 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：滝本幸治，池田耕二，笹野弘美，辻下聡馬，椿根純子，小杏宣子）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
72 熟達理学療法士における成長を促した経験学習サイクルを探求する:教訓と応用 （査読付）	共著	令和5年4月	日本理学療法管理学 1 15-22	【目的】熟達理学療法士の成長を促した経験から獲得した教訓と応用の内容を探求すること． 【方法】対象は熟達理学療法士 43 名とした．方法はアンケート調査とし，調査項目は1基本属性，2成長を促した経験，3獲得した教訓内容，4次に向けた応用内容とした．分析方法はオープンコーディング法とし，成長を促した経験と教訓，応用内容をカテゴリーとして抽出した． 【結果】1基本属性:男 31 名，女 12 名，年齢 36.8 ± 4.5 歳，臨床経験年数 14.0 ± 4.4 年であった．次に2成長を促した経験と3教訓，4応用カテゴリーは順に，a)担当患者の理学療法・関係性に苦悩した経験，教訓は理学療法士としての態度，応用は丁寧な患者対応など，b)理学療法における成 功体験，教訓は個々の症例に対する気づき，応用は介入方法の変化など，c)先輩・指導者の治療技術 に差を感じた経験，教訓は評価の重要性，理学療法士の能力の必要性，応用は自己研鑽などであった． 【結論】熟達理学療法士は多様な経験から多様な教訓を得て，次の経験に向けて応用していた． 本人担当部分：研究計画，データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）
73 Toward the development of a training program that promotes a “social model of disability” for physical therapists: a discussion on experiential learning surrounding the use of “acceptance of disability” by physical therapists （理学療法士のための「障害の社会モデル」を推進する研修プログラムの開発に向けて：理学療法士による「障害の受容」の活用をめぐる体験学習についての考察 ） （査読付）	共著	令和5年6月	J. Phys. Ther. Sci. 35 471-478	[Purpose] This study aimed to extract knowledge for the development of a training program for creating a social model of disability for physical therapists, focusing on the experiential learning of those physical therapists who did not use acceptance of disability according to their subjective judgment. [Participants and Methods] The study included 11 physical therapists who were interviewed about their use of acceptance of disability and the circumstances leading to its non-use. [Results] The study identified the past and current use of acceptance of disability, as well as cases and reasons for its discontinuation, along with changes in clinical content. [Conclusion] The study extracted knowledge for the development of training programs in line with the components of the experiential learning model. 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：Akiko Tajima, Koji Ikeda, Kenichi Ota, Kohei Oka, Yaeko Ishihara, Takashi Yamada）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
74 Stroop test実施中の中高年線維筋痛症患者における前頭前野の活動について-近赤外分光法を用いた 測定と考察-（査読付）	共著	令和5年6月	理学療法科学 38(5) 338-344	目的〕中高年線維筋痛症患者と中高年健常者のStroop test時における前頭前野の活動を近赤外分光法で測定し，結果を比較・検討した．〔対象と方法〕対象を中高年線維筋痛症患者と中高年健常者の2群に分けてStroop testを行い，前頭前野の活動を近赤外分光法で測定した．酸素化ヘモグロビン（oxy-Hb値），およびtask-induced deactivationの傾向を表すΔoxy-Hb値を2群および前頭前野3領域で比較した．〔結果〕Stroop test時の右背外側前頭前野のoxy-Hb値は，中高年線維筋痛症患者に比べて中高年健常者で有意に高かった．中高年線維筋痛症患者の前頭極のΔoxy-Hb値は，左右の背外側前頭前野領域より高い傾向を示した．〔結語〕Stroop test中，中高年線維筋痛症患者には中高年健常者のような前頭前野の活動はみられず，加えてデフォルトモードネットワークの抑制機能の低下が示唆された． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：藤田信子，池田耕二，松野悟之，三木健司，仙波恵美子）
75　痛みをみる 自己の痛みと他者の痛み	単著	令和5年11月	PTジャーナル 57(11) 1315-1321	本稿では，痛みの形成とその原因の多様性を整理し，感情・情動．苦悩，思い込み・期待・ 注意，共感という観点から，痛みをみる際の理学療法士のかかわり方や配慮，工夫について，筆者の経験を踏まえ提案した．
76 計測者に設置した慣性センサによる関節角度計測の妥当性と信頼性の検討（査読付）	共著	令和5年11月	地域理学療法 3 77-85	【目的】本研究では慣性計測ユニット（IMU）のセンサを計測者に設置して関節角度を計測する方法（IMUrater）の妥当性と信頼性について検証した． 【方法】健常成人16名を対象とし，IMUraterと光学カメラを用いた運動分析システム（OMC）を利用した計測方法との妥当性と，IMUraterの信頼性を検証した． 【結果】IMUraterとOMCを利用した方法との重相関係数（CMC），二乗平均平方根誤差（RMSE）はそれぞれ0.93，31.20度であった．IMUraterのセッション内のCMC，RMSE，級内相関係数（ICC）はそれぞれ0.95，19.40度，0.92，セッション間はそれぞれ0.85，35.74度，0.19であった．【結論】IMUraterの相対的な角度に高い妥当性が確認された．セッション内の信頼性は高かったが，セッション間では時系列波形データの類似性であるCMCのみが高い信頼性であった．絶対的な角度は誤差が大きいことも確認された． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：城野靖朋　，野田優希，前田吉樹，山本秀美，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
77 当医療法人におけるリハビリテーション専門職の「働きがい」に影響を与える要因	共著	令和5年11月	奈良学園大学紀要 16 1-6	〔目的〕当医療法人におけるリハビリテーション専門職の「働きがい」に影響を与える要因を明らかにすることを目的とし調査を行った．〔対象と方法〕リハビリテーション専門職 37名を対象に 5 件法による全 18 項目のアンケート調査を実施し，重回帰分析およびパス解析を用い分析した ．〔結果〕「働きがい」の構成要素は，「性別」，「配置」，「能力向上」，「職場風土」，「ビジョン共有」，「人間関係」，「仕事以外」，「仕事と家庭」の8項目であり，因果関係をみたパス解析の結果も含めると「働きがい」と特に関係が強い要因は，「配置」，「ビジョン共有」，「能力向上」の順であることが示唆された．〔結語〕当法人におけるリハビリ専門職の「働きがい」をさらに向上させるためには，ビジョンやミッションに準じた人事考課制度の導入と運用，また人材育成を軸とした評価・処遇の雇用管理制度が必要と考えられる． 本人担当部分：研究計画，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田裕介，池田耕二）
78 地域の特性を考慮した村民の健康増進への取り組みの検討	共著	令和5年11月	奈良学園大学紀要 16 47-52	【目的】高齢化率42.6%の岡山県真庭郡新庄村にてAging in Placeを実現するために，地域の環境や特性・資源を調査し，それらを活用し理学療法士が村民の健康増進および介護予防にどのように関われるかを検討すること．【方法】フィールドワークによる環境や地域特性・社会資源の調査．【結果】自然豊かな村であり冬は雪深くなる．人口は876人で24の地区ごとにまとまって生活している．村民の30%強が第一次産業，その多くが農業に就いている．村内公共交通機関が無く自家用車移動が中心となっている．医療施設は診療所１か所，内科医1名が常駐．福祉は社会福祉協議会のデイサービスと小規模多機能型居住介護１か所ずつ．リハビリテーション職種はデイサービスに作業療法士１名常駐．保健として民間で運動教室を実施している．【考察】新庄村は人口の減少が続いており過疎化と高齢化が進んでいるが，運動教室参加者の平均年齢が80歳を超えており元気な高齢者が多い．一方で日常生活での移動は自家用車が中心であり運転免許証返納後の移動手段が無く，冬季の自動車運転は危険を伴うため生活の狭小化につながっている．また入所施設が無く短期入所施設も１か所のため，障害を有すると村内での生活が困難である．さらに農業従事者は仕事と生活の線引きが難しく作業期間も決まっているため，体調不良でも無理をする傾向にある．よって村民の健康増進，介護予防およびAging in Placeの実現と継続には，まず自身の健康へ目を向ける機会を増やし，農業による身体への負荷を軽減する動作指導等が重要と考える．そのため，健康へ目を向けるきっかけ作りのための体力測定会，心身の状況や日常生活における課題を明らかにするための意識調査，何らかの障害を有しても村内で暮らせる住まい作りの検討を実施する．さらに意識調査等の結果を行政と共有しながらより具体的な関わり方を検討する． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：笹野弘美，平野孝行，池田耕二，滝本幸治，辻下聡馬，笹野英樹）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
79 中高一貫校の軟式野球部のコンディションニングに対する意識向上を目的としたアクションリサーチの実践	共著	令和5年11月	奈良学園大学紀要 16 125-136	野球ではオーバーユースによる障害発生が問題となっているため，アクションリサーチを用いてコンディショニングの必要性の理解，意識向上を促し，障害予防を行うことを目的とした．対象は奈良学園登美ヶ丘中学校・高等学校の軟式野球部の部員21名および監督とした．アンケート調査を行い，その結果をもとにウォーミングアップを考え提供した．アンケートの結果，ウォーミングアップの必要性は10点満点のうち平均で1回目は8.0であり，2回目が4.7であり，3回目が7.2であった．アンケート結果ではウォーミングアップの必要性は一旦低下したが，2回目から3回目にかけて向上した．これは2回目アンケートやインタビューからウォーミングアップを修正し，メニューの変更，時間の調整，難易度の高いメニューの再指導を実施した結果であると推察された． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：野田優希，寄能彩未，寺岡舞，池田耕二）
80 パーキンソン病患者に対する集団体操に関するナラティブレビュー	共著	令和5年11月	奈良学園大学紀要 16 159-164	本稿の目的は，地域在住パーキンソン病患者の集団体操の企画・実践にむけ，ナラティブレビューにより，パーキンソン病患者に対する集団体操の内容やアウトカム・効果に対する知見を整理することである．対象となった文献は6件であり，集団体操の内容はボールを用いた運動や棒体操セラバンドを用いた筋力増強，歩行練習，ストレッチング，バランス練習，レジスタンストレーニング，ダンス，太極拳であった．アウトカム・効果については姿勢や疲労，体幹機能，バランス機能，歩行能力，握力，認知機能，生活の質(Quality of Life：以下，QOL)の改善が多く，有効な所見が示唆されていた．個別運動療法と集団体操には利点と欠点が示唆されており，地域在住パーキンソン病患者の集団体操を企画する際は，利点，欠点を理解した混合型の実践が有効になると考えられた．今後は，地域在住のパーキンソン病患者は増加していくと推測することができ，効果的な集団体操の運営を積極的に模索していく必要性があるといえる． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：森田隆剛，喜多一馬，梅津俊介，池田裕介，池田耕二）
（その他） **「総説」** 1 ”Physical Therapy”1994年版まとめ	共著	平成7年8月	理学療法ジャーナル 29 (8) 865－869	アメリカ理学療法士協会の機関紙である”Physical Therapy，1994年”に掲載された92編の論文を要約し，それらから運動療法，物理療法，運動学，検査，測定，義肢・装具，教育・管理・調査に分類し主だったものをいくつか紹介した．1年間を通して各研究において研究デザインが検討されており，研究自体の信頼性を高める努力がなされている．また日常的な技術についての信頼性や妥当性の再確認もされていた．その他，患者教育に関するもの，物理療法に関する研究が多くなされていた． 本人担当部分：和訳，考察，論文執筆 （共著者：武政誠一，嶋田智明，日高正巳，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
「提言」 1 コミュニケーション能力の向上を課題にした自己分析レポートから見えてきたもの	単著	平成21年10月	理学療法ジャーナル 43(10) 942 -943	本論文では，実習生自らが提出した自己分析レポートを分析し，実習生の内面の変容過程を明らかにし，そこから一実習指導を提起した．コミュニケーションにおいては方法の模索に始まり，新たな模索へという子過程が示された．実習での新たな発見からは視野が広がる過程が示された．これらの過程に即した指導が必要になることを提起した．
2 終末期における理学療法の位置づけを再考する	共著	平成23年3月	理学療法ジャーナル 45(3) 240	本稿では，現場で実感しにくい生活の質を目標に理学療法を漠然と行うのではなく，理学療法の哲学的基盤を根底から見直し，終末期理学療法の位置づけを筆者の経験をもとに再考した．そして，終末期理学療法は生活の質の再構築と納得を目指すものと提起した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，山本秀美，中田加奈子）
3 認知症患者1症例の理学療法経験から学んだ「工夫」や「視点」	共著	平成23年4月	理学療法ジャーナル 45（4） 332	本稿では，認知症患者の理学療法経験を通して，学んだ工夫や視点を述べた．具体的には，認知症患者の介入によって，症例を理解しようと焦らず，何かを感じ取ろうとすること，患者の細かな変化を日々の中で捉えること，理学療法評価やツールとして家族機能を活用することで切る動作を通して治療を組み立てることなどを提示した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）
4 理学療法士発達論に基づいた教育方法の開発に向けて	単著	平成25年5月	理学療法ジャーナル 47（5）423	本稿では，徒弟制度に基づく教育だけでは個々の人材が有する新たな可能性を摘んでしまう危険性があることを指摘し，その可能性を積まない教育支援方法の必要性を説いた．そこで，理学療法士の内面の発達を理学療法士発達論とし，それにもとづく理学療法教育を行う必要性を提起した．
5 これからの地域社会に求められる理学療法士像を考える	共著	平成27年11月	理学療法ジャーナル 49（11）：1058	本稿では，地域包括ケア等がはじまった地域社会から現場で本当に求められる理学療法士像を考察した．現場では，様々な対応や知識が求めらえる．そして，それらを包括して解決に向かわせる力が必要となる．これを包括的理学療法として位置づけ，現場で必要な能力とした． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：大原佳孝，池田耕二）
6 コロナ禍で変わる臨床実習：奈良学園大学リハビリテーション学科	共著	令和3年4月	作業療法ジャーナル 55(4) 373 - 374	本稿では，2020年，コロナ禍で学内で行われた早期体験実習と地域理学療法実習について紹介した．具体的には，企画，内容，ＩＴの活用，問題意識，実践など，学生と教員が共同で実践した内容を提示し，これからの課題と合わせて提示した． 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：中島大貴，坪内善仁，池田耕二，山形力生，大浦智子，辻下守弘）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7 私のターニングポイント：自分と理学療法士としての成長の重なり	単著	令和4年5月	PTジャーナル 56(5)578	本稿では，理学療法士である筆者の理学療法士としての成長と自信の成長を重なり合わせ，時間をかけて理学療法士は成長することを示唆した．
「研究報告書」				
1 理学療法士の発達を促す経験学習支援方法の開発	単著	令和3年4月	科学研究費助成事業　（基盤研究C）研究成果報告書	本稿では，「理学療法士の発達を促す経験学習支援方法の開発」の研究成果を報告した． A4判5頁
2 リハビリテーション学科臨床実習管理センターにおけるホームページによる双方向性活用システムの構築-臨床実習教育の質的向上を目指して-	単著	令和3年5月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成成果報告書	リハビリテーション学科臨床実習管理センターにおけるホームページによる双方向性活用システムの構築の経緯，可能性について報告した． A4判4頁
「学会発表」 **＜国際学会＞**				
1 INTRODUCTION OF ″WHEELCHAIR SPORTS CHANBARA″- A NEW PROGRAM IN REHABILITATION - (車いすチャンバラの紹介；新しいリハビリテーションプログラム)	－	平成9年8月	The 8th World Congress of The International Rehabilitation Medicine Association, KYOTO, JAPAN（京都）	スポーツチャンバラをリハビリテーションの一環に取り入れるために車椅子を使用した．車椅子スポーツチャンバラの方法やルールを考案し紹介した． 本人担当部分：車いすスポーツチャンバラの開発，実践，考察） （共同発表者：K.TAKEBE, K.IKEDA, T.KANEKO, S.TAKEMASA, T.NAGAO)
2 INFLUENCE ON THE VOLUNTARY CONTRACTION OF PELVIC FLOOR MUSCLES WITH BODY WEIGHT SUPPORT （体重支持による骨盤底筋群の随意収縮の影響)	－	平成20年8月	10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy, CHIBA, JAPAN（千葉）	部分的荷重によって骨盤底筋群の収縮がどのように影響されるかについて調査検討を行い報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：Asuka Iso, Miwako Ishii, Mayumi Tayanaka, Kosaku Ota, Koji Ikeda)
3 CHANGE OF CONSCIOUSNESS IN STUDENTS IN PHYSICAL THERAPY CLINICAL PRACTICE- EXPLORATORY STRUCTURE ANALYSIS BY QUALITATIVE CONTENT ANALYSIS AND QUANTIFICATION III - （理学療法臨床実習における実習生の意識構造の変化－質的内容分析と数量化Ⅲ類による探索的構造分析―)	－	平成21年7月	Improving University Teaching (IUT) 34th International Conference, Simon Fraser University, Burnaby Campus, Vancouver, Canada（バンクーバー）	本研究の目的は，理学療法臨床実習期間における臨床実習生の意識変容過程を明らかにすることにある．その結果，理学療法臨床実習生は理学療法実践を多く学びながら，緊張や焦りを多く感じて思考的に意欲を心がける傾向にあることが明らかとなった．また意識構造は,知識・感情の軸と冷静な実習・躍動的な実習の軸で構成されていることがわかり,さらにその変容過程は「感情」，「知識」，「専門・統合」，「意欲」，「冷静」，「躍動」，「混合」優位の７つのタイプに分類できることが明らかとなった． 本人担当部分：データ取集，分析，考察，執筆 （共同発表者：Koji IKEDA, Akira TAMAKI, Masaki YOSIDA)

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4 Study on the Effects of Skin Stretching without Joint Movement on range of motion in Rats （ラットにおける関節可動域運動が無い状態での皮膚のストレッチ効果に関する研究）	－	平成28年10月	The Asian Confederation for Physical Therapy 2016, Kuala Lumpur（クアラルンプール）	本研究では，基礎研究としてラットにおいて関節運動を生じさせない状態での皮膚のストレッチが関節拘縮の予防に効果的かを検討した．その結果，皮膚のストレッチは関節拘縮の予防になる可能性を示唆した． 本人担当部分：考察 （共同発表者：Atsushi Tasaka, Takeya Ono, Hideki Ishikura, Kazuki Aihara, Yuta Sato, Koji Ikeda, Sadaaki Oki）
<国内学会>				
1 当院における大腿骨頚部骨折術後患者の生活状況について	－	平成5年11月	第33回近畿理学療法士学会（和歌山）	当院において手術し，リハビリテーションが施行された大腿骨頚部骨折患者の生活状況を調査し報告した． 本人担当部分：調査，分析，執筆 （共同発表者：平山敦子，宮本真美，池田耕二，太田光子，武部恭一，武政誠一）
2 変形性膝関節症における体重支持指数と日常生活動作について	－	平成6年5月	第29回日本理学療法士学会（青森）	変形性膝関節症における体重支持指数と日常生活動作についての関連性について検討した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆（共同発表者：池田耕二，宮本真美，平山敦子，太田光子，武部恭一，武政誠一，生島秀樹，石川司）
3 生体加温の際の組織酸素分圧測定用センサーの試作と特徴	－	平成7年6月	第30回日本理学療法士学会（東京）	深在性組織に直接刺入できない対象組織の温度変化に対応可能な極細の針状センサーを試作，開発しその特徴について報告した． 本人担当部分：実験担当，データ収集，分析 （共同発表者：講武芳英，嶋田智明，池田耕二，北潔）
4 振り子打腱装置の開発とその精度の検討	－	平成7年6月	第30回日本理学療法士学会（東京）	振り子打鍵装置を開発し，それらの定量的評価における精度について報告した． 本人担当部分：データ収集 （共同発表者：篠原英紀，吉田正樹，武富由雄，瀬藤乃理子，富田義之，鈴木喜子，池田耕二，坂本達也，徳原尚人，中山伸治）
5 両側ｾﾒﾝﾄﾚｽ大腿骨人工骨頭置換術に対する荷重訓練について	－	平成7年11月	第35回近畿理学療法士学会（京都）	両側セメントレス大腿骨人工骨頭置換術を行った2症例に対して荷重訓練を行う上で問題点を述べた．本2症例は片側例と違って健側での支持が期待できないためリハビリテーションを行うためには症例に応じた工夫が必要であることを報告した． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，日高正巳，武部恭一，武政誠一）
6 骨粗鬆症患者におけるﾗｲﾌｽﾀｲﾙ･生活活動能力と骨密度との関連に関する一考察	－	平成8年5月	第31回日本理学療法士学会（愛知）	骨粗鬆症患者を対象にライフスタイルと骨密度との関連を検討した結果，朝食，喫煙，散歩，体操，牛乳では健康的な生活習慣を有するものが高い骨密度を示すことを報告した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，武部恭一，武政誠一，長尾徹，嶋田智明）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7 車椅子スポーツチャンバラの紹介－リハビリテーションの一環として－	－	平成9年5月	第32回日本理学療法士学会（埼玉）	スポーツチャンバラをリハビリテーションの一環に取り入れるために車椅子を使用した車椅子スポーツチャンバラを考案した．車椅子スポーツチャンバラの方法やルール等，考案したものをビデオにて紹介した． 本人担当部分：開発，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，岩本雅浩，武部恭一，金子翼，武政誠一，長尾徹）
8 大学サッカー選手における外傷・障害調査	－	平成10年11月	第38回近畿理学療法士学会（和歌山）	大学のサッカーチームを対象に選手の外傷・障害の調査をポジション別に行い，その調査結果を報告した． 本人担当部分：考察 （共同発表者：岩本雅浩，池田耕二）
9 バレエ動作による足部障害 PartⅠ－繰り返し動作との関連性－	－	平成13年2月	第12回大阪府理学療法士学会（大阪）	バレエ動作の特徴である足部障害を，繰り返し動作の回数という視点から調査分析を行い，その関連性を報告した． 本人担当部分：調査，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，菊池奈美，磯あすか，式田利晴，玉木彰,林義孝）
10 バレエ動作による足部障害 PartⅡ －３症例を通して－	－	平成13年2月	第12回大阪府理学療法士学会（大阪）	バレエ動作の特徴である足部障害を有する３症例の理学療法経験から，その効果について検討を行い報告した． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：菊池奈美，池田耕二，磯あすか，式田利晴，玉木彰,林義孝）
11 随意的胸式・腹式呼吸が呼吸運動及び換気反応に及ぼす影響(第2報)：肢位の違いによる検討	－	平成13年5月	第36回日本理学療法学術大会（広島）	随意的胸式・腹式呼吸が呼吸運動及び換気反応に及ぼす影響を肢位の違いから検討を行い報告した． 本人担当部分：データ収集 （共同発表者：土井暁子，玉木彰，小室透，山下堅，太田善行，長谷川聡，池田耕二，辻田純三，堀清記）
12 有酸素能力の差が運動時のLocomotor Respiratory Coupling発生に及ぼす影響(運動・神経生理)	－	平成14年5月	第37回日本理学療法学術大会（静岡）	有酸素能力の差が運動時のLocomotor Respiratory Coupling発生に及ぼす影響を検討し，報告した． 本人担当部分：データ収集 （共同発表者：玉木彰，長谷川聡，小室透，白須章子，池田耕二，土井暁子，辻田純三，堀清記）
13 他動的関節可動域が終末期寝たきり脳血管障害者に及ぼす影響	－	平成19年11月	第47回近畿理学療法学術大会（京都）	他動的関節可動域が終末期寝たきり脳血管障害者に及ぼす影響を，シングルケースデザイン法によって検討したことを報告した． 本人担当部分：理学療法実践，データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，玉木彰，山本秀美，中田加奈子）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14 認知症後期高齢患者の理学療法実践における「実践知」の構造化にむけた事例研究	－	平成20年11月	第48回近畿理学療法学術大会（大阪）	認知症後期高齢患者の理学療法実践における「実践知」を明らかにし活用できるようにするために，その構造化を，質的研究を用いて行った． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，玉木彰，山本秀美，中田加奈子）
15 身体機能低下を伴った認知症高齢者の理学療法経験	－	平成20年11月	第48回近畿理学療法学術大会（大阪）	身体機能低下を伴った認知症高齢者の２症例の理学療法経験から，理学療法士の関わり方について考察し報告した． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美，玉木　彰）
16　3年目の理学療法士は終末期理学療法実践をどのように体験しているか？－SCQRMをメタ研究法とした修正版M－GTAによるモデル構築－	－	平成21年11月	第49回近畿理学療法学術大会（兵庫）	本研究は，終末期理学療法を実践している3年目の理学療法士を対象に，「無力感や意欲低下」の生成過程を検討したものである．本研究の結果からは，3年目の理学療法士は，実践における葛藤や実践している環境の中から，無力感や意欲低下が生成されていくことが明らかとなった． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）
17　脳出血後高齢血液透析患者1症例の10m介助歩行における往路と復路の能力差に着目した縦断研究	－	平成21年11月	第49回近畿理学療法学術大会（兵庫）	本研究では，脳出血後高齢血液透析患者1症例の10m介助歩行における往路と復路の能力差に着目し，縦断的に研究した．その結果，往路・復路の能力差は不安定性を示した．それらを今後さらに分析するとともに，それらを安定させることが課題であると考えられた． 本人担当部分：データ取集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，玉木彰，山本秀美，中田加奈子）
18 アルツハイマー型認知症を伴う大腿骨人工骨頭置換術後患者に対する理学療法経験 －関わりの中における工夫や視点－	－	平成22年7月	第22回大阪府理学療法学術大会（大阪）	アルツハイマー型認知症を伴う大腿骨人工骨頭置換術後患者1症例の理学療法経験から，関わりの中における工夫や視点について考察した． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）
19 脳出血後高齢血液透析患者１症例の10m介助歩行における往路と復路の能力差に着目した縦断研究・第２報	－	平成22年11月	第50回近畿理学療法学術大会（和歌山）	本研究では，脳出血後高齢血液透析患者1症例の10m介助歩行における往路と復路の能力差に着目し，それらの縦断研究を行い，能力差の不安定性と重錘負荷との関係を明らかにした． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，山本秀美，中田加奈子,玉木彰）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
20 終末期寝たきり高齢患者に対する理学療法評価思考ツールの開発に向けた事例研究	－	平成22年11月	第50回近畿理学療法学術大会（和歌山）	終末期寝たきり患者１症例の理学療法経験から，評価思考ツールの開発にむけた事例研究を行った．その結果，終末期寝たきり患者は全身状態と食事，コミュニケーションの関係から評価・思考できることが明らかとなった． 本人担当部分：理学療法実践，開発，考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）
21 理想の理学療法士モデルを視点にした理学療法臨床実習生の質的変化の検討 －評価実習と総合実習の比較－	－	平成23年5月	第46回日本理学療法学術大会（宮崎）	本研究では，理学療法臨床実習生が抱く理想の理学療法士モデルを視点に，質的変化の分析を行い，理学療法評価実習と総合実習における違いを明らかにした． 本人担当部分：データ収取集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，吉田正樹,山本秀美,中田加奈子）
22 感情変化に基づいた感性工学的臨床実習指導法の開発にむけて	－	平成23年9月	第13回日本感性工学会（東京）	本研究では，実習日誌から感情表現を抽出し，実習期間中における感情変化と成績との関係を明らかにした．それを基に指導方法を提起した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二,吉田正樹）
23トイレ動作が自立できていない高齢患者の在宅復帰を促す要因（構造）の検討	－	平成23年11月	第51回近畿理学療法学術大会（滋賀）	本研究では，トイレ動作が自立できていない高齢患者を対象に，在宅復帰を促す構造を明らかにした． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：岡村太嗣，池田耕二，梅木速水）
24 強い拒否がみられた認知症高齢患者2症例の理学療法経験から	－	平成23年11月	第52回近畿理学療法学術大会（滋賀）	本研究では，強い拒否がみられた認知症高齢患者における症例検討を行い，理学療法の有り方を提起した． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）
25 終末期リハビリテーションにおける理学療法評価思考ツールの開発に向けた暗黙知モデルの有用性について―理学療法士へのアンケート調査から―	－	平成24年5月	第47回日本理学療法学術大会（兵庫）	本研究では，以前，筆者らが構造化した「終末期理学療法評価思考ツール」に対するアンケートを実施し，その有用性について検討を行った． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）
26 Critical illness polyneuropathyを来した1例に対して訪問リハビリテーション介入により復職可能となった経験	－	平成24年7月	第24回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，Critical illness polyneuropathy 1症例に対する訪問リハビリテーションの有用性を検討した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：廣瀬将士，池田耕二，大原佳孝，竹内

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
27 退院後の転倒予防に向けた体力測定表の開発に向けて-運動器疾患を通して-	－	平成24年11月	第53回近畿理学療法学術大会（奈良）	本研究では，入院中の運動器疾患患者を対象に評価を行い，退院後の転倒予防に向けた体力測定表の開発経過を報告した. 本人担当部分：開発，データ収集，分析，執筆 （共同発表者：髙本晴輝，山本秀美，中田加奈子，中川真優，朴聖章，廣瀬将士，池田耕二）
28 理学療法臨床実習生の終末期理学療法に対する認識構造からみた終末期理学療法の課題	－	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会（愛知）	本研究では，理学療法臨床実習生の認識構造を構成し，それをもとに終末期理学療法実践と教育における課題を抽出した. 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二, 山本秀美, 中田加奈子, 黒田未貴, 廣瀬将士）
29 回復期病棟における脳血管障害患者のFIMの経時的変化	－	平成25年7月	第24回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，回復期病棟における脳血管障害患者のＦＩＭの経時的変化を，退院先（在宅，非在宅）別に明らかにし分析した. 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：廣瀬将士，池田耕二，河野茉梨絵，大原佳孝，水野瑛梨，粉川友太，朴聖章，阪本みさき）
30 運動耐容能トレーニングが奏効した特発性間質性肺炎患者の一例　心肺運動負荷試験による運動処方	－	平成25年7月	第24回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，特発性間質性肺炎患者に対して心肺運動負荷試験行い，それをもとに運動処方を行った．その結果，運動療法における有用性が明らかとなった. 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：大原佳孝，池田耕二，北川紗也佳，水野瑛梨，宇野陽子，堀江淳，池田秀一）
31 回復期病棟における終末期患者の在宅復帰をスムーズにするための条件とは?	－	平成25年6月	第18回日本緩和医療学会学術大会（横浜）	本研究では，回復期病棟に入院し，在宅復帰が円滑に進んだ終末期がん患者1症例を対象に，そこから在宅復帰をスムーズにするための条件を抽出した. 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：黒田未貴，池田耕二, 中田加奈子, 中川真優, 朴聖章, 井谷友香理, 北林直人, 川岸美佐子, 村中恵子, 小川 敦子, 池田 秀一）
32 理学療法士教育における演劇ワークショップを用いた対人技能向上の取り組み	－	平成25年8月	第5回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会（岐阜）	本研究では，理学療法養成大学における学生に演劇ワークショップを取り入れ，好評であったこと，そして学生に質的な変化がみられたことを報告した. 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：山本貴啓，原田信子，池田耕二，田坂厚志，横井輝夫）
33 高齢入院患者の転倒予防に向けた取り組み－運動器疾患に着目して－	－	平成25年11月	第53回近畿理学療法学術大会（京都）	本研究では，入院高齢患者に対して様々な評価を行い，運動器疾患によってそれからがどのように違ってくるかを検討した. 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：中川真優，山本秀美，中田加奈子，朴聖章，杉本貴美子，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
34 患者の行動様式を視点に多職種チームアプローチによって転倒予防対策に取り組んだ2症例	－	平成25年11月	第53回近畿理学療法学術大会（京都）	本研究では，2症例の行動様式に着目し，チームアプローチによって転倒予防に取り組んだ経験を報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，黒田未貴，井谷友香理，中川真優，朴聖章，北林直人，川岸美佐子，小川敦子，福井孝子，池田秀一）
35 臨床実習にある新人・中堅臨床実習指導者の不安増幅プロセスとは？	－	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会（神奈川）	本研究では，質的研究を用いて，新人・中堅理学療法臨床実習指導者の不安増幅プロセスを構成した．それを視点に不安解消対策を提示した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：湯地英充，池田耕二）
36 回復期リハビリテーション病棟における「家族が述べる在宅復帰のための条件」と在宅復帰に関する実態調査　―在宅復帰のための条件がトイレ動作の自立の場合―	－	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会（神奈川）	本研究では，回復期病棟入院時に家族が述べる在宅復帰のための条件，特にそれをトイレ動作の自立とした家族と患者の在宅復帰に着目し，その実態を調査した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：勢登香織，池田耕二，岡村太嗣）
37 腰椎圧迫骨折を呈した1症例に対する課題指向型アプローチ～家屋調査から見えてきた課題を中心に～	－	平成26年7月	第26回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，腰椎圧迫骨折を呈した1症例に対して，早期に家屋調査を行い，課題遂行型アプローチを実践し，良好な結果を得た経験を報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：高橋昇嗣，池田耕二，黒田未貴，中川真優）
38 整形外科疾患患者における内部障害有病率に関する実態調査	－	平成26年7月	第26回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，整形外科疾患患者における内部障害の実態を調査した．その結果，内部障害の有病率は75％であることが分かった．これらからは，整形疾患患者といえども内部障害に着目した理学療法が必要であり，包括的な理学療法が必要であることが示唆された． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：大原佳孝，吉富滋洋，徳永美由貴，池田耕二，池田秀一）
39 慢性期病院における終末期理学療法の1症例～脳幹出血後遺症の患者と家族を支えた16ヵ月間～	－	平成26年7月	第26回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，脳幹出血後遺症の患者と家族を支えた16ヵ月間の理学療法経験を報告し，支える医療における理学療法士の役割を提言した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：山口朋彦，木村美帆子，堀寿美代，黒田敦士，池田耕二，沢田学）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
40 不整脈・慢性糸球体腎炎を有する大腿骨転子部骨折術後患者の運動療法～心電図モニタと医師との連携によるリスク管理～	－	平成26年7月	第26回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，不整脈・慢性糸球体腎炎を有する大腿骨転子部骨折術後患者の運動療法の経験を報告し，心電図モニタの活用や医師との連携の必要性を再提起した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：黒岡禎治，池田耕二，大原佳孝） 共同研究につき本人担当部分抽出不可能
41　構造構成的協同臨床教育法の視点導入に基づく新たな協働の有り方に関する研究－ケーススタディへの応用－	－	平成26年8月	第42回日本職業リハビリテーション学会（岩手）	本研究では，筆者が開発した構造構成的協同臨床教育法の視点を職業リハビリテーションのケーススタディーに応用し，新たな協働の在り方を提言した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：前原和明，池田耕二）
42 終末期理学療法実践に対する評価法（考え方）の理論的構築と提案―実践の有効性をどのように評価するか？－	－	平成26年10月	第8回全国大学理学療法教育学会(兵庫)	本研究では，終末期理学療法実践に対する評価法（考え方）を，構造構成主義を活用することで理論的に構築し，理学療法教育に提案した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，田坂厚志，貞末仁美）
43 肺サルコイドーシスを有する右脛骨高原骨折術後一症例の理学療法　－臨床現場における包括的理学療法の必要性－	－	平成26年11月	第54回近畿理学療法学術大会（大阪）	本研究では，肺サルコイドーシスを有する右脛骨高原骨折術後一症例の理学療法経験を報告し，包括的理学療法の必要性を示唆した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：高橋昇嗣，大原佳孝，池田耕二，宮崎紗也佳，猪子純一，池田秀一）
44 右重度片麻痺患者一症例の退院後カンファレンスから得られたこと	－	平成27年1月	第1回日本地域理学療法学会（大阪）	本研究では，右重度片麻痺患者の退院時支援から，支援が奏功する3つの要因と，退院後にしか明らかにならなかった2つの課題を明らかにした． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中川真優，大原佳孝，池田耕二，北林直人，上田紀子，清水貴恵，川岸美佐子，池田秀一）
45 病院リハと訪問リハの連携によって終末期がん患者の在宅復帰を可能にした実践報告	－	平成27年1月	第1回日本地域理学療法学会（大阪）	本研究では，病院と訪問リハの連携によって終末期がん患者の在宅復帰を可能にした実践を報告した．病院,訪問リハスタッフの連携により在宅支援を進める意義は大きいと思われた． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：山本秀美，大原佳孝，池田耕二，原田美江，中瀬美穂，池田秀一）
46 看取り近くまでの理学療法を実践した終末期がん患者１症例における入院と訪問の担当理学療法士の連携について	－	平成27年6月	第20回日本緩和医療学会（横浜）	本研究では，看取りに向けた終末期がん患者の在宅復帰に対して，病棟担当理学療法士と訪問理学療法士の連携について考察した． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：河野茉梨絵，池田耕二，山本秀美，黒田未貴，早田敏）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
47 終末期がん患者の理学療法実践の方向性を示す理学療法教育モデルの構築とその可能性－2症例の経験から－	－	平成27年6月	第20回日本緩和医療学会（横浜）	本研究では，理解されにくい終末期がん患者の理学療法を，その有り方や目標がイメージしやすいモデルに構築しなおし，教育モデルとしの可能性を考察した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：黒田未貴，池田耕二，河野茉梨絵，赤田美和子，早田敏）
48 肺サルコイドーシスを有する両側人工膝関節置換術後一症例患者の運動耐容能および日常生活活動の経時的変化（第2報）	－	平成27年11月	第55回近畿理学療法士学会（神戸）	本研究では，肺サルコイドーシスを有する両側人工膝関節置換術1症例の運動耐容能をCPXにて測定し，運動耐容能と日常生活活動の経時的変化からその関係性について考察した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：髙橋昇嗣，池田耕二，大原佳孝，猪子純一，池田秀一）
49 当訪問リハビリテーション事業所・訪問看護ステーション利用者における基礎的調査―理学療法における支援課題抽出に向けて　―	－	平成27年12月	第2回日本地域理学療法学会（千葉）	本研究では，地域の特色が反映される訪問リハ事業所と訪問看護ステーションにおける利用者の基本的な特性を調査し，そこから支援課題を抽出した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：山本秀美，池田耕二，濱田絵美，古家真優，中瀬美穂，池田秀一）
50　透析患者に対する包括的腎臓リハビリテーションの役割―2症例の経験から　―	－	平成28年3月	日本腎臓リハビリテーション学会学術大会（岡山）	本研究では，透析患者に対するリハビリテーションの代表的な二つの役割を，事例研究を通して紹介した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：大原佳孝，池田耕二，高橋昇嗣，朴聖章，吉冨滋洋）
51　早期歩行獲得を目指した脊髄髄内上衣下腫摘出術後一症例に対する理学療法経験―感覚性運動失調に対するアプローチ―	－	平成28年5月	日本理学療法学術大会（札幌）	本研究では，胸髄髄内上衣下腫術後一症例に対して感覚性運動失調に着目した運動療法を行い，短期間に歩行が獲得できたのでその詳細を報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共著者：宮﨑紗也佳，池田耕二，井上良太，田中秀和，北村哲郎，竹島靖浩，堀川博誠）
52 看取りまでの緩和ケアの開発を目的にした終末期がん患者の睡眠状態の把握	－	平成28年6月	第21回日本緩和医療学会（京都）	本研究では，終末期がん患者に対する看取りに向けた緩和ケアを開発する目的にて，終末期がん患者の睡眠状態を調査した．その結果，睡眠パターン等が崩れていく状態が明らかとなり緩和ケアとしては良質な睡眠の確保が重要になっていくことが示唆された． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表：河野茉梨絵，池田耕二，黒田未貴，赤田美和子，早田敏）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
53 がん患者に対するリハビリ・ケアの質的向上を目指したアセスメントシートの開発とその有効性	－	平成28年6月	第21回日本緩和医療学会（京都）	本研究では，がん患者のリハビリやケアの質を向上させるために，アセスメントシートを作成し，それを用いることで必要な配慮や工夫を抽出していこうとした．これによりがん患者個々に配慮したリハビリの展開が可能となった． 本人担当部分：アセスメント作成，データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：黒田未貴，池田耕二，河野茉梨絵，赤田美和子，早田敏）
54 在宅終末期がんサバイバーのリハビリテーションにおける多職種連携の有効性	－	平成28年7月	第18回日本在宅医学会大会（東京）	本研究では，スマートフォン等を活用することで地域における広域の多職種連携を可能にし，在宅ガンサバイバーに対する有効な実践を報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：金谷親好，濵﨑恵，竹ノ内裕一，　池田耕二，久松憲明）
55 血液透析患者のフットケアにおける理学療法士の役割と可能性	－	平成29年2月	第7回腎臓リハビリテーション学会学術大会（茨城）	本研究では，これから需要が高まる透析患者のフットケア業務の構築とそれに関わる理学療法士の可能性を，実務面から検討し報告した． 本人担当部分：業務の構築，考察，執筆 （共同発表者：大原佳孝，池田耕二，高橋昇嗣，吉冨滋洋，朴聖章，白川優子，　池田秀一）
56 理学療法想定場面におけるフレーミング効果を意識した声掛けが意欲に与える影響について	－	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会（千葉）	本研究では，理学療法における様々な場面において，フレーミングを意識した声がけが意欲の向上とどのような関係にあるかをRCTによって調査した．その結果，主に肯定的なフレーミングが意欲の向上に寄与していることが分かった． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：喜多一馬，池田耕二）
57 訪問リハビリテーション利用者の暮らしを守る生活見守りシートの開発と実践の紹介	－	平成29年6月	第10回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（札幌）	本研究では，我々が開発した訪問利用者の暮らしを守るための生活見守りシートと，それを用いた実践を紹介した．虚弱高齢者や終末期利用者に倒しても生活見守りシートは問題点や方向性が示唆できるようになってあり，実践だけでなく教育にも有効活用できる可能性が示唆された． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，中岡絵美，山本秀美，古家
58 終末期患者の緩和ケアにおける訪問リハビリテーションの可能性	－	平成29年6月	第10回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（札幌）	本研究では，終末期のがん患者，非がん患者に対する訪問リハビリテーションの実践事例から，その可能性を報告した．在宅において理学療法士が看取りまで実践する意義や可能性を示唆することができた． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：山本秀美，池田耕二，中岡絵美，古家真優，大島知子，中瀬美穂，池田秀一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
59 訪問リハビリテーション利用者における外出頻度，地域活動への参加，時間の感覚，憂鬱に関する実態調査	－	平成29年6月	第10回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（札幌）	本研究では，ICFにおける活動や参加を促すことを目的に，訪問リハビリテーション利用者の活動，参加の実態を調査した．その結果，利用者の活動，参加が低下しているという実態があらためて示唆された．地域特性を考えながらこれらに対処していく必要性が示唆された． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：中岡絵美，池田耕二，山本秀美，古家真優，大島知子，池田秀一）
60 重症急性膵炎後に廃用症候群を呈した1症例に対する訪問リハビリテーションの長期介入効果に関する一考察	－	平成29年6月	第10回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（札幌）	本研究では，発症後，衰弱がひどく予後が不良な症例に対して，訪問リハビリテーションによる長期介入を行った．その結果，日常生活が自立し，活動範囲は広がり，自己管理能力が育まれたことを報告した．これにより，今後予想される在宅の虚弱高齢者に対する訪問リハビリテーションの可能性を広げることができた． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：大島知子，池田耕二，山本秀美，古家
61 訪問リハビリテーションにより認知症高齢者の地域生活の再建ができた事例報告	－	平成29年6月	第19回日本在宅医学会大会（名古屋）	本研究では，地域における認知高齢者の生活を，多職種，多部門連携と近隣住民との協力によって再建した事例を報告した．これにより認知症高齢者の地域生活再建の可能性を示唆することができた． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：金谷親好，池田耕二，久松憲明）
62 不眠のある終末期がん患者1症例に対する緩和ケアにおける理学療法の可能性 －睡眠計と理学療法ケアシートの活用－	－	平成29年6月	第22回日本緩和医療学会学術大会（横浜）	本研究では，終末期がん患者に対して，我々が開発してきた理学療法ケアシートと睡眠計を活用した理学療法の実践を通して，緩和ケアにおける理学療法の有効性や可能性を示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：河野茉梨絵，池田耕二，黒田未貴，赤田美和子，早田敏）
63 外出を契機に活動意欲を取り戻し自宅復帰可能となった虚弱高齢者1症例の理学療法経験	－	平成29年7月	第29回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，意欲低下を示したがんサバイバーの高齢者が，外出を契機に活動意欲を取り戻し自宅復帰が可能になった事例を報告した．ここでは，あらためて機能障害だけでなく，活動，参加に目を向けた実践や多職種連携の有効性や必要性を示唆した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：門内鈴香，池田耕二，中岡伶弥，　黒田未貴）
64 線維筋痛症2症例に対する3週間入院運動療法プログラムの試み ～運動療法介入による脳血流の変化とQOLの改善について～	－	平成29年9月	第22回ペインリハビリテーション（神戸）	本研究では，線維筋痛症患者の3週間入院プログラムの効果を，脳血流の変化と生活の質（ＱＯＬ）の改善から示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察 （共同発表者：藤田信子，池田耕二，高井範子，松野悟之，小泉優喜，平岡駿典，高橋紀代，三木健司，仙波恵美子）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
65 線維筋痛症２症例に対する3週間入院運動療法プログラムの試み　ー心理的側面からの検討	ー	平成29年9月	第22回ペインリハビリテーション（神戸）	本研究では，線維筋痛症患者の3週間入院プログラムの効果を，心理的変化と生活の質（ＱＯＬ）の改善から示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察 （共同発表者：高井範子，藤田信子，池田耕二，丸山伸廣，栗田樹，中原理，髙橋紀代，三木健司，仙波恵美子）
66 当院における入院高齢患者の「装い」に関するアンケート調査 -「装い」を支援する作業療法介入に向けて-	ー	平成29年9月	第37回近畿作業療法学会（奈良）	本研究では，入院高齢患者の「装い」に対する関心度をアンケート調査した．多くの高齢者は「装い」，すなわち，おしゃれに対する関心が低くなっていた．作業療法では装いを支援していく必要があることを報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：松井美夕貴，池田耕二，木村恵理，阪本みさき，尾藤彩花，宮内克明，水本紀子，黒田未貴，老田弘子，池田秀一）
67 繊維筋痛症患者に対する３週間入院プログラムの試み	ー	平成29年10月	日本繊維筋痛症学会第9回学術集会（大阪）	本研究では，線維筋痛症患者に対する3週間入院プログラム（運動療法）の効果を示唆した． 本人担当部分：データ収集 （共同発表者：高橋紀代，小泉優喜，谷山ゆりえ，丸山信廣，中原理，池田耕二，高井範子，藤田信子，三木健司，仙波恵美子）
68　圧迫刺激が足関節背屈可動域および足関節底屈筋の筋出力に及ぼす影響について	ー	平成29年12月	保健医療学学会第8回学術集会（大阪）	本研究では，圧迫刺激が足関節背屈可動域および足関節底屈筋の筋出力に及ぼす影響について調査した．結果，圧迫による足関節背屈可動域への影響は認められなかったが，筋出力においては介入後の腓腹筋に有意な低下が認められた．これは圧迫による腓腹筋の筋出力低下作用を示唆した． 本人担当部分：分析，執筆 （共同発表者：城野靖朋，岡村和典，池田耕二，粕渕賢志，神里巌，金井秀作）
69 理学療法を積極的に取り組んでいる腕神経叢引き抜き損傷を有する男性患者の意欲を探求する ―解釈学的現象学分析―	ー	平成29年12月	保健医療学学会第8回学術集会（大阪）	本研究では，理学療法を積極的に取り組んでいる腕神経叢引き抜き損傷を有する男性の意欲を探求し，理学療法実施患者の意欲向上における知見を得た．本男性からは，【半年限定で意欲が維持できるという認識】【焦り，病状，苦痛を，身体を回復させるための意欲に変化させる力】【家族の存在によって強気な自分を維持できる】【妻の努力に依存しない自分，妻からエネルギーをもらう自分という二つの自分】【父親，主人，男としてのプライド】【努力を維持するために，自分をモニタリングし，追い込む力】【職場復帰への意欲と，復帰後への不安から生じる葛藤】【医療スタッフからの情報により，ゆらぐ思い】【セラピスト，病棟，友人との関係性から構成される意欲や思い】の9つのテーマが得られた． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：喜多一馬，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
70　当院における血液透析患者の足病変・足部変形のケアに向けた実態調査	－	平成30年3月	第8回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会（仙台）	本研究では，透析患者における足病変・足部変形の実態調査を行った．その結果，①足病変は有26肢，無6肢，内訳は胼胝形成が58%，乾燥が12%，潰瘍形成が15%等（重複）であった．②足部変形は有26肢，無6肢，内訳は浮き足43%，外反母趾25%，内反小趾13%等（重複）であった．③ROM制限は有24肢，無8肢，横アーチは正常9肢，低下23肢であった．③潰瘍形成は，有4肢，無28肢であったことを報告し，足病変，足部変形のケアの必要性を報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：大原佳孝，池田耕二，朴聖章，髙橋昇嗣，吉冨慈洋，前田純依，島津生江，池田秀一）
71　高齢血液透析患者におけるFIMと自覚的困難感との関係性～緩和的な理学療法に向けた取り組み～	－	平成30年3月	第8回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会（仙台）	本研究では，高齢血液透析患者の自覚的困難感を軽減する緩和的な理学療法の取り組みに向け，FIMと自覚的的困難感の関係性を検討した．その結果，高齢HD患者の困難感を軽減するためには，個々に合わせた継続的な運動や環境・介助調整等が大切になることを報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：朴聖章，池田耕二，大原佳孝，髙橋昇嗣，吉冨滋洋，前田純依，島津生江，池田秀一）
72　末期腎不全(ESKD)を併存した恥骨骨折症例に対する理学療法経験	－	平成30年3月	第8回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会（仙台）	本研究では，末期腎不全（ESKD）を併存した恥骨骨折症例に対する理学療法の経験を報告した． 具体的には，本経験からは医師と連携し，理学療法士が運動中の呼吸循環応答等を評価し慎重に運動負荷を調整すれば，ESKD症例に対しても有効な理学療法が可能となり，ADL向上が図れることを示唆した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：前田純依，池田耕二，大原佳孝，髙橋昇嗣，吉冨慈洋，前田純依，池田秀一）
73 当院がんリハビリテーション実施患者の実態調査	－	平成30年6月	第23回日本緩和医療学学会（神戸）	本研究では，筆頭演者所属病院におけるがんリハビリテーションの実態を調査し，年齢80歳代，PSは重度，家族の関わり有は9割，独居は4割，症状は倦怠感，痛み，食欲低下が多く，ADL介助は清拭，移動，排泄が多く，退院先は自宅，死亡退院が4割を占めていたことを報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：河野茉梨絵，池田耕二，黒田未貴，中本直子，松井美夕貴，中川卓，赤田美和子，早田敏）
74　パーキンソン病独居高齢者に対する自助力を高める視点からの訪問リハビリテーションの実践	－	平成30年6月	第12回訪問リハビリテーション学会（北九州）	本研究では，転倒を繰り返し在宅生活が困難になりつつあったパーキンソン独居高齢者に対し，生活を見守る視点から訪問リハビリテーション（以下，訪問リハ）を実践し，良好な結果を得たので報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中岡絵美，池田耕二，山本秀美，古家真優，竹内章，大島知子，池田秀一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
75　閉じこもり傾向にあった高齢者に対して生活の再構築を可能にした理学療法実践～脱臼不安感，運動と食への関心に着目して～	－	平成30年7月	第30回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，入院前より閉じこもり傾向にあった高齢者に対して，身体機能だけでなく，脱臼不安感や運動と食への関心，他者との交流に着目した理学療法を実践したことで，それらに対する認識が変化し，生活の再構築が可能となった事例を報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中岡絵美，池田耕二，山本秀美，古家真優，竹内章，大島知子，池田秀一）
76　線維筋痛症高齢女性2症例に対する3週間入院運動プログラムの試み：前頭前野の血流動態の変化と疼痛，抑うつ，QOLの改善について	－	平成30年9月	第23回日本ペインリハビリテーション学会（福岡）	本研究では，線維筋痛高齢女性に対して3週間入院運動プログラムを行い，疼痛，抑うつ，QOLの改善とNear Infrared spectroscopy (NIRS)による前頭前野(PFC)の血流動態の変化について報告した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察 （共同発表者：藤田信子，池田耕二，高井範子，松野悟之，金子基史，三木健司，行岡正雄，仙波恵美子）
77　線維筋痛症高齢女性２症例に対する３週間 入院運動プログラムの試み －患者の心身の変化と理学療法士の関わり方に	－	平成30年9月	第23回日本ペインリハビリテーション学会（福岡）	本研究では，線維筋痛症（FM）患者である高齢女性２症例について，３週間入院運動プログラムの介入を行い，その効果と理学療法士（PT）の関わり方を含めた心身の変化の検討を行った． 本人担当部分：データ収集，分析，考察 （共同発表者：高井範子，藤田信子，池田耕二，金子基史，三木健司，行岡正雄，仙波恵美子）
78　転倒を契機に横紋筋融解症を呈した超高齢患者一症例に対する理学療法経験 ―摂食嚥下機能と栄養状態に着目して―	－	平成30年10月	第5回日本予防理学療法学会（福岡）	本研究では，横紋筋融解症に褥瘡，摂食嚥下機能障害を合併していた症例に対して，栄養状態と摂食嚥下機能に着目した理学療法を行い，経口摂取を可能にし栄養状態や基本的動作等を改善した症例を報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中本直子，池田耕二，古家真優，大原佳孝）
79　卒前教育における終末期理学療法講義の役割を再考する	－	平成30年11月	第7回日本理学療法教育学会（神戸）	本研究では，卒前教育として実施している終末期理学療法の講義が，学生に死と向き合う機会を提供し，終末期PTに対する学習・実践意欲を高める機会になっていることを報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：山口朋彦，池田耕二，柳本展孝）
80　理学療法士の経験学習プロセスの解明にむけた探索的研究 －成長を促す経験と教訓―	－	平成30年11月	第7回日本理学療法教育学会（神戸）	本研究では，熟達理学療法士の経験学習プロセスにある成長を促す経験と教訓を明らかにした．これらを理学療法士の現場教育に活用できれば有効な人材育成が可能になることを示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
81　在宅終末期リハビリテーションを実践しているセラピストの体験を探求する	―	平成30年12月	第9回保健医療学学会 2018年12月	本研究では，在宅終末期リハビリテーションを実践しているセラピストの体験を探求し，在宅終末期リハビリテーションを有効に実践するためには患者や家族との関係性づくりや変化に気づく等の能力が必要であることを示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：根釜夢乃，岩永愛里奈，谷口茉恵，西本正樹，池田耕二）
82 当訪問リハビリテーション事業所における利用者のクラスター分析による類型化とその特徴	―	平成30年12月	第5回日本地域理学療法学会（横浜）	本研究では，活動，栄養，排泄，睡眠の4つの視点からなる評価ツールを活用し，クラスター分析によって訪問リハ利用者の類型化を試みることである．その結果，訪問リハ利用者は，Ⅰ群：活動と睡眠に主な課題・介入箇所があり，特に運動機能が低い介護度4の高齢者，Ⅱ群：睡眠に主な課題・介入箇所がある介護度3の高齢者，Ⅲ群：栄養〈食事〉以外の7項目にわずかな課題・介入箇所がある介護度3の高齢者，Ⅳ群：睡眠〈量〉と排泄〈排便〉に主な課題・介入箇所がある介護度3の高齢者の4群に類型化できたことを報告した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，大島知子，山本秀美，中岡絵美，中川真優，竹内章，尾藤彩花，池田秀一）
83 質的研究で変形性膝関節症患者の痛みの心理社会的側 面を生成する要因と過程をひも解く：探索的事例研究	―	令和元年10月	第7回日本運動器理学療法学会学術大会（岡山）	本研究では膝OA患者の一人の語り（主観的体験）から，痛みの心理社会的側面の要因と生成・対処過程をモデル構築し，探索した．その結果，＜膝の症状に対する過剰な執着＞をコアカテゴリーとするモデルが構築でき，痛みの心理社会的側面の一つである症状への執着は適切な対処によって軽減可能なことを示唆した．本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：瓜谷大輔，池田茜，城之木徹，松端賢太郎，六浦優斗，池田耕二）
84 熟達理学療法士の経験学習能力を支える 仕事に対する信念とは？	―	令和元年11月	第54回日本理学療法学術大会・第8回日本理学療法教育学会・第2回理学療法士学会・管理部門研究会（名古屋）	本研究では，理学療法士の経験学習能力に大きく影響を与える仕事に対する信念を，熟達理学療法士から解明した．その結果，熟達PTの信念は人間関係の構築，PTのプライドや責任感，熱意と幅広い実践，治療成果による社会還元等から形成されていたことを報告した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
85 変形性膝関節症に患者・理学療法士はそれぞれどのように向き合っているのか:質的研究	－	令和2年9月	第32回大阪理学療法学術大会（大阪）	本研究では，膝OA患者とPTにおいて，膝OAに対する向き合い方に共通認識がある一方で，運動実施の判断基準や情報の信憑性の判断等に認識の差異が認められた．現場で膝OA患者の能動的参加を促すためには，これらの差異を意識した実践が必要になると考えられた． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田茜，瓜谷大輔，池田耕二）
86 熟達理学療法士の経験学習プロセスにある成長を促す経験とは？	－	令和2年11月	第55回日本理学療法学術大会 第９回日本理学療法教育学会学術大会 第３回日本理学療法士学会・管理部門研究会 （埼玉WEB）	本研究では，多くの専門職において経験学習プロセスにある成長を促す経験から経験学習支援方法が示唆されているなか，理学療法士の成長を促す経験を明らかにし，それをもとに経験学習支援方法を提案した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）
87 本人の希望であった書字動作の獲得が契機となり生活の質の向上が図られた末期肺腺がん利用者の訪問リハの実践	－	令和3年5月	第18回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（高知）	本報告では，本人の希望であった書字動作の獲得が契機となり生活の質（QOL）の向上が図れた末期肺線がん利用者の訪問リハビリテーション実践を報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：金谷親好，金丸真由美，池田耕二，
88 放課後等デイサービスにおける保護者視点の児童の課題および 目標に関する探索的研究	－	令和3年10月	日本発達障害学会 第56回研究大会（鹿児島WEB開催）	本報告では，放課後等デイサービスにおける保護者視点の児童の課題および 目標に関する探索的研究を行い，保護者は児童の家庭における具体的な生活動作に課題・目標を設定しており，将来的には児童の個性に合わせた就労支援について悩んでいることを明らかにした． 本人担当部分：データ分析，考察，執筆 （共同発表者：辻下聡馬,辻下千賀，池田耕二）
89 生活空間の広い通所リハビリテーション利用者の身体機能と生活様式の実態について - 転倒有無別による比較 -	－	令和3年12月	日本地域理学療法学会・日本支援工学理学療法学会 日本理学療法教育学会・日本理学療法管理研究会 合同学術大会2021（熊本WEB開催）	本研究では，生活空間の広い通所リハビリテーション利用者の身体機能と生活様式の実態について報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：上田翔平，田坂厚志，辻郁，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
90　熟達理学療法士の成長を促 ― 教訓と応用　―	―	令和3年12月	日本地域理学療法学会・日本支援工学理学療法学会 日本理学療法教育学会・日本理学療法管理研究会 合同学術大会2021（熊本WEB開催）	本研究では，熟達PTの経験学習プロセスにある成長を促す経験から，獲得していた教訓，その後の応用の内容を明らかにした．様々な応用パターンを理解し，成長を促す経験を提供することができれば効率の良い人材育成が可能になると考えられる． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆（共同発表者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）
91　放課後等デイサービスにおけるスタッフ視点の児童の目標・課題に関する探索的研究	―	令和3年12月	第11回保健医療学学会学術集会（大阪）	本報告では，放課後等デイサービスにおけるスタッフ視点の児童の課題および目標に関する探索的研究を行い，スタッフは，身体機能に課題・目標を設定しており，将来的には児童の就労について悩んでいることを明らかにした． 本人担当部分：データ分析，考察，執筆 （共同発表者：辻下聡馬,辻下千賀，池田耕二）
92　地域の特性を考慮した村民の健康増進への取り組みの検討	―	令和4年７月	日本予防理学療法学会 第7回サテライト集会（霧島）	本研究では，高齢化率40.2％（平成31年1月）である岡山県西北端に位置する真庭郡新庄村においてAging in Placeを実現および継続するために，地域の環境や特性・資源を調査し，村民の健康増進および介護予防の方法を検討した．新庄村は高齢になっても農業に従事している者が多く，ロコトレ参加者の平均年齢が80歳を超えており，元気な高齢者が多いと考えられる．しかし入所施設および小規模多機能型居宅介護以外の短期入所施設が無いため，何らかの障害を有すると村内での生活が困難となる．また農業従事者は仕事と生活の線引きが難しく1日の殆どが仕事という生活であるため，中高年者の健康への意識は低いと考えられる．以上より，村民の健康増進，介護予防およびAging in Placeの実現と継続には，自身の健康へ目を向ける機会を増やすとともに，農業による身体への負荷を軽減する動作指導等，高齢者のみならず中高年者へのアプローチが重要と考える． 本人担当部分：考察 （共同発表者：笹野弘美，平野孝行，池田耕二，滝本幸治，辻下聡馬，笹野英樹）
93 慣性センサーの加速度と角速度を用いて算出した角度の妥当性検証 ―単軸運動の角速度とセンサー位置の影響―	―	令和4年７月	第31回奈良県理学療法士学会（奈良）	関節角度は運動分析において重要な評価項目である．慣性センサーは重力加速度が鉛直方向に加わる特性を利用する方法と,角速度を利用する方法で角度を算出できる.本研究ではこれらの方法で算出した角度の妥当性,単軸運動の角速度と慣性センサーの設置位置が及ぼす影響を検証した.その結果，慣性センサーから算出できる角度は低速運動では加速度,高速運動では角速度を利用することで妥当性の高い結果が得られることが示された. 本人担当部分：考察 （共同発表者：城野靖朋，野田優希，前田吉樹，飯塚照史，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
94　コロナ禍における生活変化はフレイルに影響するか？ ―後期高齢者を対象とした質問紙による検討―	―	令和4年11月	第9回日本予防理学療法学会学術大会（東京）	本研究では，高齢化が進む山間地域の後期高齢者を対象に，コロナ禍における生活変化がフレイルに影響しているか質問紙にて調査したので報告する．その結果，コロナ禍における生活の変化が，フレイル判定や後期高齢者の質問票の結果と関連していることが分かった．質問紙且つ小サンプルの調査結果ではあるが，山間地域に在住の後期高齢者では，コロナ禍での生活変化が虚弱な状態への移行に関連する可能性が示唆された． 本人担当部分：考察 （共同発表者：滝本幸治，池田耕二，笹野弘美，辻下聡馬，椿根純子，小杏宜子）
95 軟式野球部のコンディショニングに対する意識向上を目的としたアクションリサーチ	―	令和4年12月	保健医療学学会第12回学術集会（奈良）	アクションリサーチを用いたスポーツ現場の障害予防を実践した報告は見当たらない．そこで，本手法を用いて，コンディショニングに対する意識の向上を目的とした．対象は対象は奈良学園登美ヶ丘中学校・高等学校の軟式野球部の部員21名および監督とした．チームのコンディショニングに対する意識についてアンケート調査し，その結果を受けてウォーミングアップの提供および指導を行った．介入による意識や行動の変化を捉えるためにアクションリサーチの手法を用いて分析した．コンディショニングに対する生徒の意識は，介入により一旦低下したが，介入方法を修正することで再び向上した．介入に際しては，メニューの目的をしっかり伝えること，チームの練習時間によってメニュー変更可能であるものにすること，さらに習得度に合わせ段階的に提供することでコンディショニングに対する取り組みを促すことができることが示唆された． 本人担当部分：研究計画，考察 （共同発表者：野田優希，寄能彩未，寺岡舞，橋本晃樹，池田耕二）
96 コロナ禍における在宅・地域高齢者の「思い」を探索する：３事例による探索的研究	―	令和4年12月	保健医療学学会第12回学術集会（奈良）	本研究では，コロナ禍における在宅・地域高齢者の「思い」を構造化した．その結果，在宅・地域高齢者の「思い」の構造からは，「コロナ感染からくる怖さや不安」を中心に【コロナ禍での 様々な変化】，「コロナ禍における制動」，「ワクチン接種がもたらす自由や期待」の 3 つがバランスを保ちつつ， 高齢者の行動を形成していることが示唆された.また，怖さや不安は「コロナ禍に対する感染対策への揺れる思い」と「コロナ禍がもたらす若者への揺れる思い・考え」と三角関係を形成し変容していること，そして【コロ ナ禍における死生観の再考】を促し，死の覚悟と喜びをもたらしていることも示唆された． 本人担当部分：研究計画，データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：松井翔大，前田颯太，松本嵐，土肥あかね，松本洋平，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
97 理学療法士を育む【場】の形成に向けて：新たな枠組みと今後の課題	―	令和4年12月	保健医療学学会第12回学術集会（奈良）	近年の現場は若手の理学療法士(以下，PT)の急増，ハラスメント意識の高まり，働き方改革，社会 的ニーズの多様化により大きく変わりつつある.現場には教えられないものも多くあり，個々の PT は自己学習・研鑽，経験学習により実践知や能力を獲得していかなければならない.本演題では現在の現場教育の限界を踏まえつつ，筆者らの経験と文献から必要と考えられる新たな枠組み，【場】づくりを示唆し，その実現に向けた今後の方向性と課題を提案した．【場】の形成はあくまでも間接的支援であり，直接的支援である教育方法の開発や実践は継続されなければならないと考える. 本人担当部分：研究計画，データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，田坂厚志，城野靖朋，吉川義之，野田優希）
98 理学療法士の苦悩経験(失敗，ミスなどを含む)における探求的研究	–	令和4年12月	第5回日本理学療法管理研究会学術大会（WEB）	本研究では，熟達理学療法士（以下，PT） の苦悩経験を探索した．その結果，PTは，患者に対して「理学療法の未熟さや目標設定ミス，患者 の転倒や死」に苦悩し，周囲や自身，学生・後輩に対して「周囲との関係性，自分の力量不足，自分の不甲斐ない態度，指導 不足や学生のドロップアウト」に苦悩していた. 特に中堅PT（4-10年目)の時期に苦悩する傾向にあり，PT管理者はPTの患者 や周囲・自身等に向かう苦悩に適切な支援を行う必要があると考えられた. 本人担当部分：研究計画，データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，田坂厚志，城野靖朋，吉川義之，野田優希）
99 リハビリテーション専門職の働きがいに与える 要因	–	令和4年12月	第5回日本理学療法管理研究会学術大会（WEB）	本研究では，当法人のリ ハビリ専門職の働きがいに影響を与える要因を明らかにした．その結果，当法人のリハビリ専門職の働きがいに影響を与える要 因は，配置，ビジョン共有，能力向上であった．当法人のリハビリは4部門あるが，配置は面談にて希望を確認し納得のうえで実施している．ビジョン共有はビジョン・ミッションの刷新を行ない職員で作成したビジョンを各部門で共有し，能力向上はプリセプター制度の採用，各部門での研修会や 症例検討会の実施，今年度からはキャリアラダー等を採用している．今回，これらが大きく影響したものと思われ，評価や処遇がなかった理由は当法人の人事考課制度が作成段階にあるためと推察できた. 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：池田祐介，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
100 感情労働や共感疲労からくる理学療法士のスト レスを探求する:解釈学的現象学的分析	–	令和4年12月	第5回日本理学療法管理研究会学術大会（WEB）	本研究では，現場の理学療法士（以下，PT）の心理的ストレスを解釈学的現象学的分析により探究し，支援方法を提案した．その結果， PTの心理的ストレスの経験には，対患者，対医療スタッフ，PT自身に由来のものがあった.それぞれへの支援としては，対患者では「患者への疼痛や吐露，理不尽さ，クレーム，ハラスメン トへの対応方法に関する教育やトレーニング，患者の突然の死や病状進行，出口の見えない状況，PTとして委ねられる意思決 定に対峙したときのケア，患者との関係を決定する職場の環境 の整備」，対医療スタッフでは「上司や他職種の決定や振る舞いに対する研修や仕組み作り，上司や他職種との考えや理解の 相違を埋めるための研修，管理職として働くうえでの研修やケア」，PT自身では「PTとして無力感が生じたときのケア」が提案できた. 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：喜多一馬，池田耕二）
101 後縦靭帯骨化症術後の運動障害に対して対側下肢を用いて運動感覚を想起させる介入が功を奏した一症例	–	令和4年12月	第62回近畿理学療法学術大会（和歌山）	本研究では，OPLL術後に運動障害を合併した症例に対し，初期介入時に反対側下肢を用いた運動感覚に着目した介入を実施し功を奏したので報告した．椎間板ヘルニアの罹患期間も合わせると2年間以上下肢に神経障害があったと推察できるため，OPLL術後の左下肢介入だけでは運動感覚の想起 や再教育が難しかったものと考えられる．脳血管障害でも非麻 痺側への介入でクロスエデュケーションとして利用されてきたが，本症例においても初期介入時に有効な介入方法となること が示唆された. 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：森田隆剛，喜多一馬，梅津俊介，池田耕二）
102 緊張性足趾屈曲反射を呈する脳卒中片麻痺者対する toe spreader 装着と電気刺激療法の併用効果	–	令和5年9月	第21回日本神経理学療法学会学術大会（横浜）	脳卒中片麻痺者の緊張性足趾屈曲反射（TTFR)は，足底に加わる刺激により誘発され，痙縮と同様に錐体路障害で発現する（近藤 1995)．TTFRに対するtoe spreader(TS)の装着は，歩行パラメーターを改善する(Lee 2018)とされているが，TS装着後の未装着時の持続効果や電気刺激療法の併用効果は明らかではない.本研究では，TTFRを呈する脳卒中片麻痺者に対して，TSと電気刺激療法を併用した理学療法の効果を報告した. 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：池田裕介，池田耕二，森田隆剛，梅津俊介）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
103 コロナ禍の生活変化が１年後の健康状態に及ぼす影響 ―山間地域在住高齢者が対象の後ろ向きコホート研究―	–	令和5年10月	第10回日本予防理学療法学会学術大会（函館）	コロナ禍における生活変化がフレイルに影響しているか，山間地域在住の75歳以上の後期高齢者58名を対象に質問紙調査を実施した．質問紙は，過去1年における主観的な生活変化を問うコロナ禍における生活変化の質問票（QCL），Frailty Screening Index（FSI）等で構成した．結果，フレイル判定者は少なかったものの，コロナ禍における主観的な下肢筋力低下がフレイルに影響する可能性が示唆された． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：滝本幸治，池田耕二，笹野弘美，辻下聡馬，椿根純子，小杢宣子）
104 岡山県真庭郡新庄村における日常生活と健康に関する調査（第1報）	–	令和5年10月	第10回日本予防理学療法学会学術大会（函館）	我が国の高齢化率は28.9%（R3年）であるが，国内での地域差は大きく，平均寿命と健康寿命の差が問題視されている．そこで，高齢化率43.8%（R3年10月）の新庄村に村民が住み慣れた地域で高齢期を過ごすため，また可能な限り住み慣れた自宅または地域で自立した生活ができるための方策を検討することを目的に中高年及び高齢の村民に対し日常生活と健康に関する調査を実施したのでその一部を報告する．結果は，高齢化率43.8%であるも介護保険を申請していないと回答した者が87.2%であることから健康な高齢者が多いと考えられ，先行研究で実施した調査とも合致する．また，日常生活は80%を超える者が満足していると回答しているが，介護や健康への不安が多くみられる．高齢社会の備えとして介護サービスの体制の整備や高齢者に配慮したまちづくりに重点を置くべきとの回答が多いことは介護や健康の不安が要因と考えられ，村民が可能な限り住み慣れた自宅または地域で自立した生活ができるためには不安を解消するための施策が必要であると考えられる．今回，調査の一部を報告したが，今後は年齢・性別等とそれぞれの回答の関係や内閣府発表の結果との比較など詳細の結果を報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：笹野弘美，平野孝行，池田耕二，滝本幸治，辻下聡馬，笹野英樹）
105 理学療法士を育む「場（職場，部署，チーム，グループ）」の雰囲気・風土に関する探索的研究	–	令和5年11月	第58回理学療法学術大会・第6回日本理学療法管理学会（埼玉）	本研究では，理学療法士の自己成長感は勤勉さと厳しさという雰囲気・風土を介した学習環境の良さによって形成されている可能性があるおとを示唆した． 「場」には，PTを育む雰囲気・風土の質，場の良さがあり，これらを介してPTは自己成長感や満足感等を得ていると考えられる． 本人担当部分：研究計画，実施，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，城野靖朋，吉川義之，野田優希，滝本幸治，三上亮）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
106 リハビリテーション専門職のレジリエンスとバ ーンアウトの関連性 ― 臨床経験年数別による 比較 ―	–	令和5年11月	第58回理学療法学術大会・第6回日本理学療法管理学会（埼玉）	本研究では，協力が得られた法人リハビリ専門職における臨床経験年数別のレジリエンスとバーンアウトを明らかにした．レジリエンスとバーンアウトにおいて違いは認められなかったが，レジリエンスの小項目においてバーンアウトに対処している可能性が示唆された． 本人担当部分：研究計画，分析，考察，論文執筆 （共同発表者：池田裕介，池田耕二）
107 理学療法士の成長を促した経験（学習）の場の雰囲気とは：場と現在の職場の雰囲気の比較	–	令和5年12月	第58回日本理学療法学術大会・第12回日本理学療法教育学会（埼玉）	理学療法士の臨床教育には成長を促す経験（学習）とそれを支える場の雰囲気（組織風土など）が重要であるが，場の雰囲気は解明されていない．本研究の目的は，臨床教育を支える場づくりにむけて成長を促した経験の場（以下，場）と現在の職場の雰囲気の違いから，臨床教育の場に足りない雰囲気を明らかにすることである．結果，現在の職場は，明るさと暖かさ以外の8項目で場よりも低い傾向が示唆された．特に厳しさ，誠実さ，勤勉さに違いがみられた．臨床教育を支える場づくりでは，現在の職場の雰囲気を場の雰囲気に近づけることが一つの方向性であり，特に厳しさ，誠実さ，勤勉さの雰囲気の向上が課題になると考えられた． 本人担当部分：研究計画，実施，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，城野靖朋，吉川義之，野田優希，滝本幸治，三上亮）
108 日本の保健医療福祉資格制度の特性と構造から見える理学療法士の専門職像：社会学的アプローチに基づくAdamsの分析モデルの援用	–	令和5年12月	第58回日本理学療法学術大会・第12回日本理学療法教育学会（埼玉）	本研究の目的は，日本の保健医療福祉資格制度の特性と構造から理論的に理学療法士の専門職像を明らかにすることである．理論的には，医療外での活躍が可能であり，評価業務については医師から自律した理学療法士の専門職像を導き出せた．また，理学療法士の評価業務は制度上，自律性を規定される余地があり理学療法評価の重要性が改めて示唆されたといえる．よって理学療法教育では，治療技術のみならず評価技術を高める教育を行っていく必要があると考える． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：三上亮，池田耕二，佐藤万知）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
109 死別後の悲嘆に対し思い出の共有などの理学療法ケアを実施した事例-死別の遺族に対する理学療法の意義-	–	令和5年12月	第10回日本地域理学療法学術大会（東京）	本報告では,娘との死別後の悲嘆に対し,傾聴や思い出の共有および故人の投影による実践事例を振り返り,死別に対するPTケアの手段とPTの意義を考察した．死別後の悲嘆に対し,思い出の共有や故人の投影により悲嘆感情を抑圧せず,喪失感情と回復への肯定的感情の揺れの体験を促す理学療法ケアが,悲嘆感情の軽減と行動変容に有用と思われた．また,運動指導なども行い身体機能や生活機能，QOLの低下を最小限にすることが,死別の遺族に対するPTの意義と考えられた． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：古川博章，池田耕二，石垣智也，知花朝恒，中村洋子）
110 心不全患者に対する多職種連携において他職種が求める理学療法士の役割とは：M-GTA法	–	令和6年3月	第88回日本循環器学会学術集会（神戸）	心不全患者に対する多職種連携が推奨されているが，その定義は曖昧で認識も各専門職種で異なる．そのため多職種連携において理学療法士（PT）が期待に応えられていないとされることもある．本研究では，心不全患者の多職種連携における他職種が認識するPTの役割を質的研究法により探求した．結果，他職種から理学療法士は，職種間のハブの役割を担うことが求められており，心不全患者の多職種連携の成功のためには，理学療法士はハブとしての自覚やその技術を向上させる必要があると考えられる． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：梅津俊介，喜多一馬，池田裕介，森田隆剛，中井健仁，福村典男，中村輝夫，池田耕二）
「招待講演，シンポジスト」				
1 痛みに対する低出力レーザー療法	—	平成7年11月	第3回物理療法研究会　神戸大会（神戸）	肩関節周囲炎患者に対して低出力レーザーの臨床効果を判定した．低出力レーザーは除痛効果があるものの，症例ごとには使用方法の再検討が示唆された．また今後の課題としては照射条件や他の物理療法とのコンビネーション効果，使用時期などがあげられた． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，日高正巳，武部恭一，武政誠一）
2 車椅子スポーツチャンバラの紹介	—	平成9年1月	第4回身体障害者スポーツ指導員養成講習会（大阪）	スポーツチャンバラをリハビリテーションの一環に取り入れるために車椅子を使用した車椅子スポーツチャンバラを考案した．車椅子スポーツチャンバラの方法やルール等，考案したものを紹介した． 本人担当部分：車いすスポーツチャンバラの開発，執筆 （共同発表者：池田耕二，岩本雅浩，武部恭一，金子翼，武政誠一，長尾徹）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3 臨床実習における指導方法について	－	平成18年2月	大阪医療福祉専門学校　実習指導者会議　（大阪）	問題を有する実習生に対して，実際行っている具体的な指導方法について講演した．
4 臨床実習における指導方法の実際　―臨床実習指導者からの提言―	－	平成19年7月	大阪府理学療法士会 臨床実習指導者研修会（大阪）	臨床実習に対する指導方法の中でも，特に情意面における指導方法について講演を行った．
5 地域医療（小規模型民間病院）における終末期理学療法の実践― 事例研究の紹介	－	平成20年2月	神戸大学就進会理学療法分科会（神戸大学医学部保健学科同窓会，神戸）	地域医療における一般病院にて行われている終末期医療を紹介し，それに対する事例研究を報告した．またこれから事例研究がどうあるかべきかについても合わせて報告した．
6 Bridge the gap，－”１”臨床実習指導者の提言－	－	平成20年3月	行岡リハビリテーション専門学校　臨床実習指導者会議　教育講演（大阪）	臨床実習における実習生の内面をパターン分類し，それらに対する指導方法について講演を行った．
7　理学療法研究方法論	－	平成29年12月	公益社団法人大阪府理学療法士会　新人教育プログラム研修会（大阪）	理学療法における研究法やエビデンスに基づく理学療法実践についての講演を行った．
8 これからの魅力ある臨床実習，臨床教育に向けて	－	平成30年7月	第30回大阪府理学療法学術大会　教育シンポジウム（大阪）	これからの理学療法臨床実習の在り方を講演した．
9 理学研究方法論（EBPTを含む）	－	平成30年12月	公益社団法人大阪府理学療法士会　新人教育プログラム研修会（大阪）	理学療法における研究法やエビデンスに基づく理学療法実践についての講演を行った．
10 クリニカルリーズニング	－	平成31年1月	公益社団法人大阪府理学療法士会　新人教育プログラム研修会（三島ブロック）（大阪）	理学療法におけるクリニカルリーズニングをわかりやすく解説する講演を行った．
11 リハビリテーションの視点から見た温泉旅行の可能性	－	令和元年11月	ユニバーサルツーリズム阿智村シンポジウム2019	長野阿智村において開催されたユニバーサルツーリズムのシンポジウムにおいて，リハビリテーションにおける温泉旅行の可能性を講演した． （共同発表者：池田耕二，喜多一馬）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
12　現場の理学療法士育成論：経験学習を通して	―	令和3年11月	大阪北区理学療法士会　研修会（大阪）	医療情勢の変化や働き方改革・等を背景に研修会や勉強会を重視した学習だけでは，現場の理学療法士（PT）教育・育成は限界にきている．そこで現場で行う経験学習に注目し，PTの経験学習プロセスの解明をもとに，現場教育・人材育成における支援方法を教示した．
13　終末期・緩和ケアにおける在宅理学療法に求められる視点と対応	―	令和4年2月	リハテック・リンクス　地域理学療法（オンライン）	緩和ケア・終末期の在宅理学療法における支持的理学療法の考え方や対応方法を講演した．具体的には，緩和期・終末期の定義や位置付け，終末期患者の特性，エンド・オブ・ライフケアという考え方，死と関係性など，緩和ケア・終末期の在宅理学療法の哲学的・実践的基盤について紹介した．
14　学習し続ける組織の構築にむけて	―	令和4年2月	大阪府理学療法士会・医療・介護保険部　ミドルマネジメント講習会（大阪）	大阪府理学療法士会の理学療法士の中間管理職，管理職を対象に学習する組織の構築について講演した．講演内容は，現場経験に基づく組織づくりの内容に加え科学研究費による研究成果である理学療法士の経験学習プロセスの解明から導かれた経験学習支援方法を紹介した．
15 緩和ケア領域における理学療法の紹介 −理学療法士の可能性と広がる役割−		令和4年4月	学研都市病院リハビリテーション科研修会	緩和ケア領域における理学療法を紹介し，理学療法士の可能性と広がる役割について講演した．
16 緩和ケア領域における理学療法の紹介−理学療法士の可能性と広がる役割−	−	令和4年12月	保健医療学学会第12回学術集会ランチョンセミナー（奈良）	緩和ケア領域における理学療法を紹介し，理学療法士の可能性と広がる役割について講演した．
17 終末期・緩和ケアにおける在宅理学療法に求められる視点と対応	―	令和5年3月	リハテック・リンクス　地域理学療法（オンライン）	緩和ケア・終末期の在宅理学療法における支持的理学療法の考え方や対応方法を講演した．具体的には，緩和期・終末期の定義や位置付け，終末期患者の特性，エンド・オブ・ライフケアという考え方，死と関係性など，緩和ケア・終末期の在宅理学療法の哲学的・実践的基盤について紹介した．
18 緩和ケア・終末期のセラピストに求められる視点と対応ー治療（キュア）と支援（ケア）をつなぐー	―	令和5年11月	北出病院リハビリテーション科研修会（WEB）	緩和ケア・終末期の在宅理学療法における支持的理学療法の考え方や対応方法を講演した．具体的には，緩和期・終末期の定義や位置付け，終末期患者の特性，エンド・オブ・ライフケアという考え方，死と関係性など，緩和ケア・終末期の在宅理学療法の哲学的・実践的基盤について紹介した．

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
19 理学療法士の経験学習プロセスに基づく人材育成方法	－	令和5年11月	第一回奈良県理学療法士研修会（奈良）	理学療法士の経験学習プロセスをもとに，現場の人材育成方法について紹介，講演した．
20 教育研究における research question の立て方 ～経験学習に関する研究から紐解く～	－	令和5年12月	第58回日本理学療法学術大会・第12回日本理学療法教育学会（埼玉）	自身の経験学習研究をもとに，教育研究における research question の立て方を紹介，講演した．
21 老年療法における緩和ケアの重要性を考える 自分らしい人生に寄与する老年療法の新たな可能性	－	令和6年3月	日本老年療法学会2023年度第4回学術研修会（WEB）	老年療法における緩和ケア・終末期のリハビリテーションについての考え方や対応方法を講演した．具体的には，緩和期・終末期の定義や位置付け，終末期患者の特性，エンド・オブ・ライフケアという考え方，死と関係性など，緩和ケア・終末期リハビリテーションにおける哲学的・実践的基盤について紹介した．
22 理学療法士の経験学習プロセスに基づく人材育成方法	－	令和6年3月	初台リハビリテーション病院研修会（東京）	理学療法士の経験学習プロセスをもとに，現場の人材育成方法について紹介，講演した．
＜研究大会＞ 1 当院における車椅子スポーツチャンバラの試み	－	平成6年11月	第4回車椅子ｽﾎﾟｰﾂ研究集会(名古屋)	スポーツチャンバラをリハビリテーションの一環に取り入れるために車椅子を使用した車椅子スポーツチャンバラを考案した．車椅子スポーツチャンバラの方法やルール等，考案したものを紹介した． 本人担当部位：車いすスポーツチャンバラの開発，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，平山敦子，朝倉光子，武部恭一，金子 翼，武政誠一）
2 車椅子ｽﾎﾟｰﾂﾁｬﾝﾊﾞﾗにおける心拍数変動について	－	平成7年11月	第5回車椅子ｽﾎﾟｰﾂ研究集会（大阪）	考案した車椅子スポーツチャンバラが，それに参加した患者に対して身体にどのような影響をあたえるかを，心拍変動より検討した． 本人担当部位：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，日高正巳，武部恭一，金子翼，長尾 徹，小室 透，居村茂幸）
3 健康教室″10年間の総括-公開講座を継続させる工夫-	－	平成8年8月	第18回全国地域リハビリテーション研究会（神戸）	地域住民の健康に寄与する目的にて「健康教室」を10年実施してきた．それらから長期継続するための工夫や，今後の展望について検討した．健康教室の有効性は示唆されたが，今後は情報源としても健康教室を役立たせ地域リハビリテーションの１システムとして確立していきたいことを報告した． 本人担当部分：健康教室の企画・運営，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，岩本雅浩，武部恭一，武政誠一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4 車椅子スポーツチャンバラにおける心身反応について	－	平成9年9月	第 7回車椅子ｽﾎﾟｰﾂ研究集会（東京）	考案した車椅子スポーツチャンバラが，それに参加した患者に対して心理面や血圧にどのような影響をあたえるかを検討した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：磯あすか，池田耕二，杉山安幾子，平田憲市，武部恭一，金子翼，武政誠一，長尾徹）
5 訪問リハビリを利用している主介護者の介護負担感と要介護者のＦＩＭとの関連性について	－	平成23年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会くまもと2011（熊本）	本研究では，介護者の負担かんと要介護者のＦＩＭとの関連性を明らかにし，訪問リハビリにおける理学療法の方向性を提示した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：岡村太嗣，池田耕二，岩森渉）
6 回復期リハビリ病棟における家族が述べる「在宅復帰のための条件」と在宅復帰について	－	平成25年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2013（千葉）	本研究では,回復期病棟入院時に家族が述べる在宅復帰のための条件と在宅復帰の関連性を検討した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：岡村太嗣，池田耕二，深田大介）
7 嚥下造影検査に嚥下障害の実態調査		平成25年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2013（千葉）	本研究では，嚥下造影検査と嚥下障害の関係を調査し，その実態を明らかにした． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：上田紀子，池田耕二，黒田未貴，廣瀬将士，清水貴恵，福井孝子，池田秀一）
8 在宅復帰に向けた家屋調査の実態とその傾向	－	平成25年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2013（千葉）	本研究では，在宅復帰に向けた家屋調査の実態を調査し，玄関，トイレ，入浴に環境調整が多いことを明らかにした． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：北林直人，池田耕二，井谷友香里，坂本みさき，尾藤彩花，上田紀子，黒田未貴，廣瀬将士，清水貴恵，福井孝子，池田秀一）
9 がんの緩和リハに対する意識調査－看護とリハスタッフの比較－	－	平成25年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2013（千葉）	本研究は，アンケートによって，がんの緩和リハに対する意識が看護師とリハビリスタッフでは違うことを明らかにした． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：河野茉梨絵，池田耕二，黒田未貴，廣瀬将士，赤田美和子，池田秀一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10 転倒予防専用カンファレンスによる転倒予防の取り組み―転倒カンファ導入の効果検討	―	平成26年2月	回復期リハビリテーション協会　第23回研究大会（愛知）	本研究では，転倒予防専用のカンファレンスが病棟の転倒予防に有用であることを示唆した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，黒田未貴，井谷友香理，中川真優，朴聖章，川岸美佐子，小川敦子，福井孝子，池田秀一）
11 デイケアにおけるサービス向上に向けた実施調査	―	平成26年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2014（長崎）	本研究では，デイケアにおいて実態調査を行い，約8割の利用者がリハビリに満足していたことや，約6割に転倒不安があり，4割が外出を控えていたことを明らかにした． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：大庭由香莉，池田耕二，上田紀子，中田加奈子，大村昌和，小田瑛梨，勝久江，池田秀一）
12 重度右片麻痺患者一症例の退院後カンファレンスからみえてきたもの	―	平成26年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2014（長崎）	本研究では，重度右片麻痺患者一症例の退院後カンファレンスから，オムツ交換の早期指導や転落時の対応指導，指導用パンフレットの有効性を明らかにした． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中川真優，池田耕二，黒田未貴，北林直人，上田紀子，福井孝子，川岸美佐子，池田秀一）
13 家屋調査と環境調整に関する追跡調査―インタビュー調査による質的検討―	―	平成26年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2014（長崎）	本研究では，退院後のインタビュー調査から，患者や家族の環境調整に対する理解不足，環境調整の追加の必要性や不安の存在を明らかにした． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：尾藤彩花，池田耕二，上田紀子，北林直人，阪本みさき，井谷友香理，久貝亮太，黒田未貴，廣瀬将士，清水貴恵，池田秀一）
14 慢性心不全患者1症例に対する生活管理という訪問リハビリの役割 - 入退院を繰り返さないために -	―	平成27年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会（神戸）	本研究では，慢性心不全患者の訪問リハビリを，生活管理の視点から見直し，その役割について考察した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：濵田絵美，池田耕二，山本秀美，古家真優，須々木星衣子，中瀬美穂，池田秀一）
15 高齢者の退院に向けた身体活動量把握の取り組み	―	平成27年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会（神戸）	本研究では，回復期リハビリテーション病棟における高齢者に対して，退院にむけた活動量の調査を行った． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：杉本貴美子，池田耕二，古家真優，吉冨滋洋，池田秀一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
16 訪問リハビリテーション利用者の生活習慣とリズムに関する実態調査- 虚弱高齢者の暮らしを支える活・栄・排・睡の4つの視点 -	―	平成28年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2016（茨城）	本研究では，訪問リハビリテーション対象患者の生活習慣とリズムを，主に活動，栄養，排泄，睡眠の4つの視点から調査した．その結果，訪問リハ利用者の活動低下，睡眠不足等の実態が明らかとなり，この4つの視点からの実践が今後は大切になることを示唆した． 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，山本秀美，中岡絵美，古家真優，大島知子，池田秀一）
17 転倒により入退院を繰り返した一症例に対する病棟と訪問理学療法士における協同の振り返り－シームレスな療養支援の構築に向けて	―	平成28年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2016（茨城）	本研究では，病棟と訪問の理学療法士が共同で同じ症例を振り返ることで，シームレスな支援の構築に重要な実践知を抽出した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中岡絵美，池田耕二，山本秀美，古家
18 高次脳機能障害患者1例に対する道のりシートを用いた退院支援について ―退院までの道程を共有する道のりシートの作成と活用―	―	平成28年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2016（茨城）	本研究では，リハビリテーションや退院支援が困難である高次脳機能障害患者に対して，退院の方向性や段階を示す道のりシートなるものを作成し，実践した．これにより患者の心理は安定し，リハビリテーションは可能となり，職員の連携も良好となり，有効な退院支援が可能となったことを報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：尾藤彩花，池田耕二，木村恵理，阪本みさき，松井美夕貴，猪子純一，黒田未貴，大原佳孝，米沢仁美，清水貴恵，上地康子，池田秀一）
19 回復期リハビリテーション病棟における高齢患者の活動量について ― 測定部位（手首と腰部），FIM，うつ，転倒予防自己効力感に着目して ―	―	平成29年2月	第29回復期リハビリテーション病棟協会研究大会（広島）	本研究では，回復期リハビリテーション患者の活動量を手と腰に装着し，それぞれの活動量を測定することで病棟の活動実態を明らかにした．手に装着した活動量では病棟生活の実態がより反映した．またFIM，うつ，転倒自己効力感との関係性についても報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：杉本貴美子，池田耕二，吉冨滋洋，中岡伶弥，古家真優，池田秀一）
20 質問項目から見た患者タイプ別のフレーミング効果を意識した肯定的・否定的な声かけの有効性に関する探索的研究	―	平成29年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2017（久留米）	本研究では，ユニーク質問により患者をタイプ別に分類し，肯定的な声かけと否定的な声かけでフレーミング効果を検証してみた．その結果，肯定的な声かけでフレーミング効果がみられたが，タイプ別に明らかになることはなかった． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：喜多一馬，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
21 重複障害を有する独居高齢者の退院支援から見えてきたもの	－	平成29年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2017（久留米）	本研究では，重複障害を有する独居高齢者の退院支援を振り返り，退院支援能力を向上させる知見を抽出した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：阪本みさき，池田耕二，尾藤彩花，木村恵理，松井美夕貴，黒田未貴，老田弘子，池田秀一）
22 デイケアにおいて閉じこもり傾向にあった高齢利用者に対する行動変容理論を用いた実践―3事例の物語分析から得た知見―	－	平成29年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2017（久留米）	本研究では，デイケアにおいて閉じこもり傾向にあった高齢利用者に対する行動変容理論を用いた実践を，物語分析によって分析し，閉じこもりを予防できる知見を抽出した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：大山大将，池田耕二，黒岡禎治，廣瀬将士，吉冨滋洋，高本晴加，勝久江，池田秀一）
23 糖尿病による右下腿切断後，多職種連携による訪問リハビリテーションを実施し生活の再構築を図った 認知症患者1症例の実践報告	－	平成29年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2017（久留米）	本研究は，糖尿病による右下腿切断後の認知症高齢患者を，多職種連携と訪問リハビリテーションによって生活の再構築を実現させた実践報告である． 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：竹内章，池田耕二，山本秀美，中岡絵美，大島知子，池田秀一）
24 当院回復期リハビリテーション病棟におけるサルコペニア症例の特徴からみた今後の取り組み	－	平成29年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2017（久留米）	本研究は，回復期リハビリテーション病棟におけサルコペニア症例を対象に，退院時にサルコペニアが改善した群と改善しなかった群を比較し，その特徴を明らかにし，今後の取り組みの方向性を示した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：中岡伶弥，池田耕二，杉本貴美子，尾藤彩花，大庭由香莉，加藤靖乃，門内鈴香，松井美夕貴，岡村大，田渕真由美，大原佳孝，老田弘子，池田秀一）
25　奈良学園大学におけるコロナ禍の学内実習の紹介① ：臨床実習専用ホームページの開設と運用方法の紹介	－	令和3年10月	全国リハビリテーション学校協会　第34回教育研究大会・教員研修会（福岡WEB開催）	本研究では，本学の臨床実習専用ホームページの紹介と，コロナ禍における学内実習の活用例(予習，経験，復習のサイクルに応用）を紹介した．併せて学生のアンケート結果を提示した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，滝本幸治，飯塚照史，城野靖朋，野田優希，福原啓太，中田修，辻下聡馬，岩﨑智子，辻下守弘）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
26　奈良学園大学リハビリにおけるコロナ禍の学内実習の紹介② ：早期体験実習の概要と学生アンケート調査	－	令和3年10月	全国リハビリテーション学校協会　第34回教育研究大会・教員研修会（福岡WEB開催）	本研究では，新型コロナウィルス感染拡大を受け，早期体験実習を学内実習としたが，その概要と学生に対して実施したアンケート結果を提示した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：前田吉樹，中島大貴，伊藤健一，野中紘士，阿波邦彦，藤田信子，岩﨑智子，橋本雅至，山形力生，池田耕二）
27　奈良学園大学におけるコロナ禍の学内実習の紹介③ ：地域理学療法・作業療法実習の概要と学生アンケート調査－	－	令和3年10月	全国リハビリテーション学校協会　第34回教育研究大会・教員研修会（福岡WEB開	本研究では，，新型コロナウィルス感染拡大を受け，地域実習を学内実習としたが，その概要と学に対して実施したアンケート結果を提示した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：滝本幸治，吉川義之，笹野弘美，坪内善仁，前田吉樹，中島大貴，辻下聡馬，大浦智子，山形力生，池田耕二）
28 回復期リハビリテーション病棟におけるセラピストの学習意欲の傾向に ついて	－	令和5年10月	リハビリテーション・ケア合同大会2023	Keller(1987) が提唱した学習意欲に影響する包括的なモデルである ARCS モデルを用い，注意，関連性，自信，　満足感の 4 因子から現状を分析し，当院セラピストの特徴を把握した．方法は，セラピスト 72 名(PT47 名，OT15 名，ST10 名 ）に対して，ARCS モデルに基づいた川上らによる Course Interest Survey 日本語版 4 因子 14 項目をセラピスト向けに一部改変し，5 件法によるリッカート尺度のアン ケートを実施した．結果は，経験年数 3 年未満では注意・満足感が高い傾向，3 年以上では関連性・自信の要素で高い傾向が示唆された． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：久保洋昭，八代 航，小川純史，藤田佳史，平林伸治，野田優希，池田耕二）
29 介護付き有料老人ホームにおけるリハビリテーションチームアプローチ の紹介 － 集団リハビリにおける多職種連携について-	－	令和5年10月	リハビリテーション・ケア合同大会2023	本報告では，リハビリテーション専門職と他スタッフ（ 介護福祉士等 ）でリハビリプロジェクトチームを結成し集団リハビリを実践している．この実践内容を紹介し ，アンケート調査結果と併せて報告した．リハビリチームによる集団リハビリの実践は,入居者のみならず,共に実践し ているスタッフにも何らかの変化をもたらしたと考えられる.また入居者の変化は,生活面や個々の性格などをより 深く知るスタッフだからこそ気付けた点である.本実践のような集団リハビリを実施することで,より入居者に適し た内容が実践できると期待できる. 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：山本秀美，池田耕二，古家真優，梅津奈史，石田大貴，松岡眞美，奥田茂）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
<医療集談会>				
1 車椅子ｽﾎﾟｰﾂﾁｬﾝﾊﾞﾗの試み	－	平成6年3月	第14回兵庫県リハビリテーション医療集談会（兵庫）	スポーツチャンバラをリハビリテーションの一環に取り入れるために車椅子を使用した車椅子スポーツチャンバラを考案した．車椅子スポーツチャンバラの方法やルール等，考案したものを紹介した． 本人担当部分：スポーツチャンバラの開発，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，宮本真美，平山敦子，太田光子，栗岡真弓，武部恭一，金子 翼，武政誠一）
2 当院における訪問ﾘﾊの現状と問題点	－	平成10年2月	第17回兵庫県リハビリテーション医療集談会（兵庫）	当院における訪問リハビリテーションの立ち上げ，その活動の現状と問題点を整理し報告を行った． 本人担当部分：訪問リハの開設，分析，考察，執筆 （共同発表者：平田憲市，池田耕二，杉山安幾子，磯あすか，松本知子，武部恭一，武政誠一，長尾徹）
3 竹を素材とした自助具の紹介	－	平成10年2月	第17回兵庫県リハビリテーション医療集談会（兵庫）	関節リウマチ患者に対して竹を素材とした自助具を作成し，その活用方法とともに紹介を行った． 本人担当部分：考察 （共同発表者：長尾徹，金子翼，武政誠一，池田耕二，武部恭一）
<その他>				
『リハビリテーション・ケアセンターうららか』の軌跡 ～ 実践報告：開設から現在までの振	－	令和4年7月	全国有料老人ホーム協会第25回西日本事例研修発表会（WEB）	『リハビリテーション・ケアセンターうららか』の軌跡を実践報告として振り返った（開設から現在までの振り返り）． 本人担当部分：実践，考察，執筆 （共同発表者：山本秀美，古家真優，梅津奈史，石田大貴，池田耕二）

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和5年3月31日

氏名　　伊藤　健一　　印

研究分野	研究内容のキーワード
人間医工学	呼吸・心臓リハビリテーション

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）講義の工夫	平成17年4月 ～ 平成28年9月	大阪府立看護大学医療技術短期大学部理学療法学科 大阪府立看護大学総合リハビリテーション学部 理学療法学専攻 大阪府立大学総合リハビリテーション学類 理学療法学専攻 内部障害理学療法学I・II・III 物理療法学I・II 講義では可能な限りイラストやビデオを多用し，分かりやすいように工夫した．また，様々な資料等で出てくる単語の統一にも気を配り，学生が混乱しないように努めた．さらに，教科書的な内容の教授の後に，実際の症例に重ね合わせることで机上での勉強と臨床でのギャップを少なくするように努めた．また，国家試験対策も盛り込んだ．
	平成26年10月 ～ 平成28年9月	大阪府立大学総合リハビリテーション学類 理学療法学専攻 内部障害理学療法学I・II・III 物理療法学I・II 講義には active learning を促通する目的で反転授業を取り入れている．具体的には自主制作した e-learning 教材で自宅学習させ，講義時間は演習やディスカッションに活用した．
2）実験・実習の工夫	平成17年4月 ～ 平成28年9月	大阪府立看護大学医療技術短期大学部理学療法学科 大阪府立看護大学総合リハビリテーション学部 理学療法学専攻 大阪府立大学総合リハビリテーション学類 理学療法学専攻 内部障害理学療法学I 基礎技術の習得には可能な限り時間を掛け，その後，臨床で起こりうる難渋例を想定した実習を行った． 呼吸リハビリテーションにおける聴診の実習ではシュミレータを活用した．
2　作成した教科書，教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）大阪府立大学　平成25年度教員業績評価 2）大阪府立大学　平成26年度教員業績評価	 平成26年12月 平成27年12月	 総合評価Ａ（S～Cの４段階評価） 総合評価Ｓ（S～Cの４段階評価）
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）講演，研究会について	 平成26年10月 平成27年10月	 はびきの市民大学「正しい運動で健康増進」講師 平成25年度第4回ホッと＆ハートの会 「骨密度と転倒予防運動について」講師
2）高大連携　講義について	平成26年 9月	大阪府立寝屋川高等学校「リハビリテーションとは」講師

事項	年月日	概　　要
	平成27年 7月	大阪府立泉陽高等学校「リハビリテーションとは」講師
	平成28年 1月	大阪府立急性期・総合医療センターふれあい病院探検隊「理学療法を体験しよう」講師
	平成30年6月	大阪府立河南高等学校「人を支える「リハビリテーション」を知る：変わるニーズと進歩する技術　講師
	平成30年12月	奈良県立生駒高等学校「理学療法とは」講師
	平成31年1月	奈良県立高取国際高等学校「リハビリテーション学への招待」講師
5　その他 1）大学院博士前期・後期課程指導実績	平成25年4月～ 平成27年3月	○博士前期課程：1名 エアマットレスが臥床中の呼吸機能へ与える影響
	平成26年4月～ 平成28年3月	○博士前期課程：2名 透析低血圧患者における透析施行中の低負荷レジスタンストレーニングは血圧および運動機能の改善に寄与するか スタチン投与中の運動が骨格筋ミトコンドリアへ及ぼす影響
	平成26年4月～ 平成29年3月	○博士後期課程：2名 Predictors of improvements in exercise capacityduring cardiac rehabilitation in the recovery phase after coronary artery bypass graft surgery versus acute myocardial infarction Changes in exercise tolerance and quality of life are unrelated in lung cancer survivors who undergo video-assisted thoracic surgery
	平成27年4月～ 平成30年3月	○博士前期課程：1名 食道がん切除再建術後患者の理学療法における認知行動療法の併用が退院後の身体活動量と健康関連QOLに与える影響
2）大学院博士前期・後期課程学位審査会実績 （大阪府立大学）	平成26年2月	○主査：1名 エアマットレスが臥床中の呼吸機能へ与える影響 （博士前期課程） ○副査：2名 Monaural auditory stimulus affects selection of the hand to reach（博士前期課程） Motor evoked potential of the hand muscles elicited by posterior-anterior current is suppressed during eye movement without vision （博士前期課程）
	平成27年2月	○主査：1名 透析低血圧患者における透析施行中の低負荷レジスタンストレーニングは血圧および運動機能の改善に寄与するか（博士前期課程）

事項	年月日	概　　要
	平成30年2月	○副査：3名 Switching or cancelling leg movement suppresses anticipatory postural adjustment before gait initiation（博士前期課程） 腕運動に随伴する眼球運動の発生源に関する研究（博士前期課程） The effect of tonic contraction of one hand muscle on motor area of tonically contracting another hand muscle（博士後期課程） ○学外審査員：2名 Predictors of improvements in exercise capacity during cardiac rehabilitation in the recovery phase after coronary artery bypass graft surgery versus acute myocardial infarction（博士後期課程） Changes in exercise tolerance and quality of life are unrelated in lung cancer survivors who undergo video-assisted thoracic surgery（博士後期課程）

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1）臨床実習指導者講習会	平成31年 3月3日	第2018-2-031号：厚生労働省
2　特許等 なし		

事項	年月日	概　　要
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1)国家公務員共済組合連合会枚方公済病院理学療法士	平成28年 10月1日 ～ 平成30年 3月31日	臨床業務，教育業務，研究業務 リハビリテーション科主任（室長） 組織再編と新人教育システムの構築 呼吸器リハビリテーション外来の開設 看護師長および看護師教育 療法士教育プログラムの作成と運営
4　その他 1)国・地方公共団体における審議会・委員会等の参画	平成26年10月 ～ 平成28年9月	文部科学省大学教育再生加速プログラム（I・II複合型）大阪府立大学プロジェクト委員
2)大学委員会の活動	平成30年4月	奈良学園大学共通教育委員会委員（現在に至る） 奈良学園大学大学院入試小委員会委員（平成31年３月まで） 奈良学園大学保健医療学部研究倫理審査委員会委員（平成31年３月まで）
	平成30年7月	奈良学園大学入試広報委員会委員（平成31年３月ま
	平成30年12月	奈良学園大学ハラスメント調査委員会委員長（令和元年６月まで）
	平成31年4月	奈良学園大学教務委員会委員（令和4年3月まで） 奈良学園大学自己点検・評価委員会委員（令和3年3月まで） 奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科教務ワーキング委員（令和5年度3月まで）
	令和3年4月	奈良学園大学共通教育委員会委員（現在に至る）
	令和4年４月	奈良学園大学教務委員長（現在に至る）
	令和6年４月	奈良学園大学社会・国際連携センター 副センター長（現在に至る）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1　PT卒後ハンドブック　１年目に習得したい基本スキル	共著	平成26年1月	三輪書店	本書は新人理学療法士に対してon the job trainingとoff the job trainingを職場の教育体制として整備するだけではなく，成人としての学習方法を身につけてもらうこと，そしてそうした自己研鑽が自らのエンプロイアビリティ学習に向けた動機付けを目的にしたテキストである. B5判 全190頁 編者：斉藤秀之，島村耕介，森本榮 共著者：斉藤秀之，森本榮，青山誠，大塚功，小泉幸毅，松原徹，豊田平介，島村耕介，後藤伸介，対馬栄輝，高橋哲也，伊藤直人，奥山夕子，村永信吾，伊能幸雄，中村崇，兼子昌幸，小林久文，川村博文，辻下守弘，西上智彦，川勝邦浩，大矢暢久，鶴見隆正，伊藤健一，他1名 本人担当部分：「症例報告から何を学ぶべきか！」（P175 - P181）を共著 分担執筆者：川村博文，辻下守弘，西上智彦，川勝邦浩，大矢暢久，鶴見正隆，伊藤健一 １年目のPTとして習得したい基本スキルとして「症例報告から何を学ぶべきか！」について，症例報告書の作成方法，症例報告の発表方法について具体例を提示した中で重要ポイントをまとめ，解説した.

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（学術論文） 1 Changes in antioxidant enzymes and lipid peroxidation in extensor digitorum longus muscles of streptozotocin-diabetic rats may contribute to muscle atrophy （査読付） （ストレプトゾトシン糖尿病ラット長指伸筋の抗酸化酵素と過酸化脂質の変化は筋萎縮と関連する）	共著	平成26年12月	Acta Physiologica Hungarica, 101：P421-P428	糖尿病時の筋萎縮が酸化ストレスと関連があるかについて検証した．速筋線維優位である長指伸筋は萎縮し，抗酸化酵素(カタラーゼ，グルタチオンペルオキシダーゼ，スーパーオキサイドジスムターゼ)活性の上TBARSの増加が確認された．一方，赤筋線維優位であるヒラメ筋の萎縮は軽度で，カタラーゼ活性は上昇したが，それ以外の抗酸化酵素活性とTBARSに変化は認められなかった．以上より，糖尿病に伴う酸化ストレスが速筋線維の萎縮を惹起する可能性を示した． （分担執筆者:Nonaka,K.，Une,S.，Tatsuta,N.，Ito,K.，Akiyama,J.） （担当部分：資料収集）
2 Electrical stimulated ventilation feedback improve ventilation pattern in patients with COPD （筆頭著者） （査読付） （電気刺激による換気フィードバックはCOPD患者の換気パターンを改善する）	共著	平成27年2月	Journal of Physical Therapy Science, 27：P325-P330	研究の目的は,COPD患者に対する呼息時電気刺激（PESE）を用いた換気フィードバックの有効性を明らかにすることである．24名のCOPD患者を，プラセボ群とPESEを行う群に割り付けた．これら対象者には5分間のエルゴメータ運動を2回行ってもらい，ベースライン（BL）と各介入による換気指標を中心としたデータの測定を行った．BLに対しプラセボ群では，安静時・運動時とも明らかな変化は認められなかったが， PESE群では安静時・運動時とも有意な換気効率の改善を認めた．この結果によりCOPD患者の換気効率改善にPESEが有効であることが明らかとなった． （分担執筆者:Ito,K.，Nozoe,T.，Okuda,M.，Nonaka, K.,Yamahara,J.，Horie,J.，Hayama,Y.，Kawamura,H.）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
3　虚弱高齢者を対象とした腹筋トレーニングを含む通所リハビリテーションの効果 （査読付）	共著	平成27年4月	ヘルスプロモーション理学療法研究，5：P31-P36	本研究の目的は，虚弱高齢者に対する腹筋トレーニングを含んだ6ヵ月間の通所リハの効果を検証することである．対象者は通所リハ利用中の虚弱高齢者20名（80.5 ± 6.6歳）とした．対照群は既存のプログラムとし，介入群は既存プログラムに1日20回の腹筋トレーニングを含んだ．結果，片脚立脚時間と5 m最速歩行速度は介入群が有意に向上した．腹筋トレーニングを含んだ通所リハは虚弱高齢者のヘルスプロモーションとして有効である可能性が示唆された． （分担執筆者:阿波邦彦，北村智哉，堀江淳，伊藤健一） （担当部分：考察と論文作成指導）
4　Evaluation of a Physical Activity Promotion Program Using the "Exercise Guide 2006" Aimed at Preventing Life style-related Disease among Working People （査読付） （勤労者の生活習慣病予防を目的としたエクササイズガイド2006を用いた身体活動促進プログラムの評価）	共著	平成28年5月	Japanease Journal of Occupational Medicine and Traumatology, 64: 162-172	健康づくりのための運動指針2006に基づく身体活動促進プログラム(EPAR)の効果を一般的な運動指針(GEG)とともに明らかにした．対象は製造業に従事する勤労者で,これら対象者をEPAR群とGEG群,コントロール群に割り付け,それぞれの介入を行った．評価項目は生化学検査値，身体組成，膝進展筋力，運動に対する自己効力感，行動変容ステージである.結果より健康づくりのための運動指針2006に基づく身体活動促進プログラムは運動への自己効力感を増大させ，生活習慣病予防に寄与する可能性が示唆された． （分担執筆者：Asada,F.,Nomura,T.,Kubota,M.,Ohashi,M.,Ito,K.） （担当部分：研究の企画およびデザインと論文指導）
5　Surface electromyogra-phy activity of the rectus abdominis, internal oblique,and external oblique muscles during forced expiration inhealthy adults （筆頭著者） （査読付） （健常成人の努力性呼気時における腹直筋，内腹斜筋，外腹斜筋の表面筋電図の活動）	共著	平成28年6月	Journal of Electromyo-graphy and Kinesiology, 28: 76-81	呼吸リハビリテーションの基礎研究として呼気筋の筋活動パターンを筋電図を用いて呼気抵抗別に検討した．10%PEmax，20%PEmax,30%PEmaxの抵抗を負荷した呼息時の腹直筋と内腹斜筋,外腹斜筋の活動量を評価した．３つの筋のうち,最も大きな活動量を示したのは内腹斜筋であった．ただし,その活動量は30%PEmaxの負荷であっても20%MVC以下であった．通常の呼吸筋トレーニングでは30%PEmax程度の負荷が推奨されるが,生理学的な視点でみた場合,その負荷は弱すぎることが示唆された． （分担執筆者：Ito,K.，Nonaka,K.，Ogaya,S.，Oogi,A.，Matsunaka,C.，Horie,J.） （担当部分：研究の企画およびデザインと論文作成）
6　Electrical stimulation ventilatory feedback facilitates maintenance of a prolonged expiration pattern during exercise: A proof of concept study in healthy adults （査読付） （電気刺激呼吸フィードバックは運動中の呼気延長の維持を容易にする：健常成人における概念実証試験）	共著	平成28年7月	Physiotherapy Theory and Practice, 32:P483-P488	本研究の目的は，運動中の呼息を促通させるために電気刺激を用いたフィードバック（ESVF）を行い，その効果と安全性を明らかにすることである．健常成人23名をESVF群と対照群に割り付けた．対象者は呼吸練習において，呼気延長の呼吸パターンを練習し，その呼吸法を運動中も維持するように指導された．運動中と運動後の呼気/吸気時間比において対照群と比較してESVF群が有意に高値を示した．また，ESVFによる副作用が認められなかったことからESVFは運動中の呼吸法を習得させるツールになり得ることが明らかとなった． （分担執筆者:Yamahara,J.,Ito,K.,Nonaka,K.） （担当部分：実験の計画立案と考察，論文作成指導）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7 慢性呼吸器疾患におけるPhysical Activity Scale for the Elderlyを用いた身体活動量評価の有用性に関する検証 （査読付）	共著	平成29年3月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌，26：P495-P501	本研究の目的は，慢性呼吸器患者におけるPhysical Activity Scale for the Elderly(PASE)を用いた身体活動量評価の有用性を検証することである．対象である50名のCOPD患者はPASEの回答の後，活動量計を２週間装着した．PASE調査は初回回答から１週間後に再度行った．結果はPASEスコアと活動量計カロリーには相関が認められ，さらに初回PASEスコアと2回目PASEスコアにも高い相関が認められた．これらのことから慢性呼吸器患者に対してPASEが利用できることが明らかとなった． （分担執筆者:青田絵里，伊藤健一，奥田みゆき，濃添建男，堀江淳，石原英樹）
8　エアマットレスが臥床中の呼吸機能へ与える影響 （査読付）	共著	平成29年4月	理学療法科学，32：P183-P188	本研究の目的は臥床時の呼吸機能に対するエアマットレスの悪影響の有無を明らかにすることである.対象は健常者群 19 名と胸郭コンプライアンス低下群 10名に対して，エアマットレスと標準マットレスの 2 つの条件下で臥位にて測定された呼吸機能を比較した．測定項目は一回換気量，分時換気量，死腔換気率，呼吸数，呼気時間，　吸気時間，全呼吸時間，呼気平均流量，吸気平均流量，吸気における腹部の隆起が開始するタイミングの 10 項目とした．結果は両群ともにすべての測定項目でエアマットレス上臥位と標準マットレス上臥位の間に有意な差は認められなかった．以上よりエアマットレス導入は呼吸機能へ悪影響を与えないことが明らかになった． （分担執筆者:井上貴裕，野中紘士，伊藤健一） （担当部分：実験の計画立案と考察，論文作成指
9　Comparison of the pain-relieving effects of transcutaneous electrical nerve stimulation applied at the same dermatome levels as the site of pain in the wrist joint （査読付） （手関節疼痛部位と同皮膚節レベルに実施する経皮的電気神経刺激の鎮痛効果の比較）	共著	平成29年11月	Journal of Physical Therapy Science，29：P1996-P1999	本研究の目的は手関節疼痛部位と同皮膚節レベルに実施する経皮的電気神経刺激（TENS）の鎮痛効果を比較検討することである．対象は成人女性で，熱刺激を手関節に与えて疼痛を出現させてコントロールを設定し，次に同熱刺激を与えつつ対側の同皮膚節レベルである手関節（CW）へのTENS実施，手関節背側の疼痛部位と同皮膚節レベルの頸部（N）へのTENS実施，CWとNの同時両部位（CWN）へのTENS実施である計3方法での介入を行い，痛みの程度及び脳血流測定を行った．3つの介入の痛みの程度は，コントロールに比べ有意に減少したが，3方法間における痛みの程度の比較では，いずれの組合せにおいても有意な差は認められなかった．効果的なTENSには皮膚節を有効に活用することも重要であるものと考えられた． （分担執筆者：Kawamura,H.,Nishigami,T., Yamamoto,A.,Tsujishita,M.,Ito,K., Ohya,N., Takagi,M.） （担当部分：資料収集と考察）
10　Changes in exercise tolerance and quality of life are unrelated in lung cancer survivors who undergo video-assisted thoracic surgery （査読付） （胸腔鏡下手術を受けた肺がん患者では運動耐容能の変化とQOLは関係がない	共著	平成30年3月	Journal of Physical Therapy Science，30:P467-P473	本研究の目的は，胸腔鏡下手術（VATS）を受けた患者の運動耐容能の変化とQOLとの関係を明らかにすることである．VATS後3ヶ月間，肺癌患者36名を追跡調査し，QOLと身体機能を評価した．QOLの身体的および社会的側面は，術後有意に減少したが，第12週までに回復した．対照的に，身体機能は術後4週までに回復していた．QOLの変化率と身体機能に関する変化率との間には有意な相関は認められなかった．身体機能の回復とQOLの回復は相関しないことが明らかとなった． （分担執筆者：Anami,K.，Horie,J.，Hirayama,Y.，Yamashita,N.，Ito,K.） （担当部分：研究デザインと解析，考察）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
11 Predictors of improvements in exercise capacity during cardiac rehabilitation in the recovery phase after coronary artery bypass graft surgery versus acute myocardial infarction （査読付） （回復期心臓リハビリテーションにおける運動耐容能改善予測因子の検討-冠状動脈バイパス術後患者と急性心筋梗塞患者の比較-）	共著	平成30年4月	Heart and Vessels, 33: P358-P366	心臓リハビリテーション(心リハ)における，冠状動脈バイパス術後(CABG)患者と急性心筋梗塞(AMI)患者の運動耐容能改善予測因子を検討した．CABG後患者(61例)では，等尺性膝伸展筋力の変化率(β=0.39,p<0.01)，ヘモグロビン値の変化値(β=0.23,p<0.05)，心リハ開始時の脳性ナトリウム利尿ペプチド値(β=-0.37, p<0.01)が運動耐容能改善予測因子であった．一方，AMI患者(91例)では心リハ開始時の運動耐容能(%予測値)(β=-0.43, p<0.01)が唯一の運動耐容能改善予測因子であった． （分担執筆者：Suzuki,Y., Ito,K., Yamamoto,K., Fukui,N., Yanagi,H., Kitagaki,K., Konishi,H., Arakawa,T., Nakanishi,M., Goto,Y.） （担当部分：研究デザインと解析，考察）
12 Potential of muscles to accelerate the body during late-stance T forward progression in individuals with knee osteoarthritis （査読付） （変形性膝関節症患者における立脚後期の前進中に体幹を加速するための筋の潜在性）	共著	平成30年8月	Human Movement Science, 61:P109-116	本研究では，加速度の減少が上腕三頭筋による前方進行の筋電位の低下と関連しているかどうかを明らかにするために，前方への身体重心加速度および筋電位に対する個々の筋の寄与を分析した．対象は膝OA患者12人と健常者12人である．誘導加速度分析を使用して，各筋肉が70～100%の立脚期の間に前方への身体重心加速にどのように寄与したかを分析した．次に，前方への身体重心加速度の筋電位を算出した．膝OA患者は健常者と比較してヒラメ筋，腓腹筋，および腸腰筋で有意に低い前方への身体重心加速度を示した．これらの所見は，前進に対するヒラメ筋の寄与を改善することが後期立脚期の間に膝OA患者の歩行速度を高めるのに有効であることが明らかとなった． （分担執筆者：Ogaya,S.,Kubota,R.,Chujo,Y., Hirooka,E.,Ito,K.,Kim,K.,Hase,K.） （担当部分：研究デザインと考察）
13 Endurance exercise increases the protein levels of PGC-1α and respiratory chain complexes in mouse skeletal muscle during atorvastatin administration （査読付） （アトルバスタチン投与中の持久力運動はマウス骨格筋のPGC-1αと呼吸鎖複合体タンパク質を増加させる）	共著	平成31年2月	The Journal of Physiological Sciences, 69: P327-333	アトルバスタチン（AS）の投与中に，マウスの持久力運動が骨格筋のミトコンドリア順応および筋肉損傷を誘発するか否かを調査した．雄のマウスを３つの群のうちの１つに割り当てた：対照（Con），スタチン（Sta），またはスタチンおよび運動(Sta＋Ex)．そしてASを投与し，トレッドミル上で8週間運動を行った．大腿四頭筋におけるミトコンドリア関連タンパク質PGC-1α，および呼吸鎖複合体（COX）I-V，および筋肉損傷マーカーである血清クレアチンキナーゼのレベルを計測した．PGC-1αおよびCOX I-VはStaおよびConの群と比較して，Sta＋Exの群で増大した．血清クレアチンキナーゼレベルは同様であった．これらのことからマウスにおける持久力運動はAS投与中に，筋肉損傷を引き起こさずに骨格筋におけるミトコンドリア順応を誘導することが明らかとなった． （分担執筆者：Nonaka, K.,Ozaki, Y., Ito,K.,Sakita,M.,Une,S.,Akiyama,J.） （担当部分：研究デザインと考察）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14　地域在住高齢者におけるテレビコマーシャルメッセージの時間を活用した身体活動促進プログラムの予備的研究 （査読付）	共著	令和3年4月	健康支援，23：早期公開	本研究の目的は，CM 中の歩行または足踏みを促す身体活動プログラムの実行可能性と身体活動量への影響を明らかにすることである.CM 開始時点から歩行または足踏みを開始し，CM 終了まで継続するよう指示した.また,CM 中の歩行または足踏みは，7日間，各日1日を通して実施するよう指示した．加速度計の装着時間は通常週が平均 776.6 ± 80.0 分/日，介入週が平均751.6 ± 116.0分/日であり，介入週で有意に短かった。通常週の歩数は平均6,483 ± 3,019歩/日，介入週の歩数は平均7,304 ± 3,196 歩 /日であり，介入週で有意に増加した．また，通常週の歩行時間は平均67.6 ± 35.8分/日，介入週の歩行時間は平均77.6 ± 36.9分/日であり，歩行時間は介入週で有意に増加した．本研究により，CM 中の歩行または足踏みを促す身体活動プログラムは，高齢者の歩数と歩行時間を有意に増加させ，厚生労働省の提案する「プラス 10」を満たすための実行可能な方法となり得ることが示された. （分担執筆者：中島大貴，伊藤健一，坪内喜仁，藤井啓介,田畑泉） （担当部分：研究デザインと考察）
「総説」 1　他職種で作成したハイフローシステムマニュアル	共著	平成30年６月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌，27巻：P146-P152	呼吸不全の新しい治療法であるハイフロー療法で用いるハイフローシステムの設定や取り扱い方について，医師や看護師，理学療法士，薬剤師，臨床工学技士がそれぞれの視点からわかりやすくまとめた. （分担執筆者：奥田みゆき，田中順哉，福田康二，木戸悠人，清水学，上田耕平，辻是道，加治木幸，有満道子，前田里美，伊藤健一，大木敦司，高橋留佳，野原隆司） （担当部分：リハビリテーション部分の企画と校正）
2　おしえてQ&A 呼吸ケア・リハビリテーションの未来はどうなる？	共著	令和4年4月	みんなの呼吸器 Respica，20巻2号：P96	読者からの問い「呼吸ケア・リハビリテーションの未来はどうなる？」に対し，昨今のリハビリテーションにおけるAIやICT・ロボット技術の導入を例として取り上げ，医療従事者側のそのような動向の認識と準備が必要であることを解説した. （分担執筆者：伊藤健一） （担当部分：執筆）
「学会発表」 〈国際学会〉				
1　CORRELATING FACTORS OF EXERCISE CAPACITY IMPROVEMENT AFTER CARDIAC REHABILITATION IN POST-CORONARY ARTERY BYPASS GRAFT SURGERY PATIENTS （冠動脈バイパス術後患者における心臓リハビリテーション後の運動能力改善の関連因子）	-	平成27年5月	World Confederation for Physical Theraty Congress 2015 (Singapore)	心臓リハビリテーション(心リハ)に参加した冠動脈バイパス術(CABG)後患者の運動耐容能改善関連因子を検討した．対象は，CABG後に3か月間の心リハプログラムに参加した61例とした．対象には心リハ前後で，運動負荷試験，膝伸展筋力測定，体組成測定，血液データ測定が行われた．多変量解析の結果，膝伸展筋力の変化率(β＝0.51，P＜0.05)と換気効率(VE/VCO2 slope)の変化率(β＝-0.67，P＜0.01)が運動耐容能改善の独立した関連因子であることが明らかとなった. （共同発表者：Suzuki,Y.,Hieda,M.,Fujiwara,R.,Yamamoto,K.,Fukui,N.,Konishi,H.Arakawa,T.,Kumasaka,R.,Nakanishi,M.,Fukui,S.,Nakao,K.,Ohara,T.,Noguchi,T.,Yanase,M.,Ito,K.,Goto,Y.） （担当部分：計画と考察，研究指導）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
2　Electromyography Activity of the Rectus Abdominis, Internal Oblique, and External Oblique Muscles During Forced Expiration in Healthy Adults （健常成人における努力性呼気時の腹直筋，内腹斜筋と外腹斜筋の筋電活動）	－	平成27年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2015 (Amsterdam)	呼気筋の筋活動パターンを筋電図を用いて呼気抵抗別に検討した．10%PEmax，20%PEmax,30%PEmaxの抵抗を負荷した呼息時の腹直筋と内腹斜筋,外腹斜筋の活動量を評価した．３つの筋のうち,最も大きな活動量を示したのは内腹斜筋であった．ただし,その活動量は30%PEmaxの負荷であっても20%MVC以下であった．通常の呼吸筋トレーニングでは30%PEmax程度の負荷が推奨されるが,生理学的な視点でみた場合,その負荷は弱すぎることが示唆された． （共同発表者：Ito,K.,Nonaka,K.,Ogaya,S.,Horie,J.） （担当部分：データの解析，考察，学会発表）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
3 Validity and Intra-class Reliability of Spirometry Using a Mask Instead of a Mouthpiece （マウスピースの代わりにマスクを用いたスパイロメータの信頼性と妥当性）	－	平成28年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2016 (London)	本研究の目的はマスクを用いたスパイロメトリの妥当性と再現性を明らかにすることである．筒型マウスピースの代わりにマスクを用いて肺機能を測定した結果，妥当性と再現性が確認できた．このことから，スパイロメトリの際に筒型マウスピースの代わりにマスクを用いることが可能であると考えられた．但し，データの取り扱いに関しては一次回帰式で補正する必要がある．また，今回の結果は安静時計測の結果であり，背景に記した運動時評価における妥当性と再現性の検討は今後の課題である． （共同発表者：Ito,K., Nonaka,K., Takeda,S., Nishikawa, T.,Anami,K., Horie,J., Tsujishita,M., Kawamura,H.） （担当部分：データの解析，考察，学会発表）
4 Assessment of the mechanism underlying the improvement in ventilation efficiency induced by phasic electrical stimulation during expiration in patients with chronic obstructive pulmonary disease. （慢性閉塞性肺疾患患者に対する呼息時電気刺激がもたらす換気効率の改善機序）	－	平成29年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2017 (Milan)	本研究の目的はCOPD患者に対する呼息時電気刺激（PESE）が換気効率を改善する機序を明らかにすることである．対象は35名の外来COPD患者で電気刺激を行わない，電極を設置しただけの群（sham control）と呼息筋である腹直筋に対して電気刺激を行う群（R-PESE），呼息に関係の無い腕橈骨筋に対し電気刺激を行う群（B-PESE）の３群に無作為に割り付けた．各群とも安静時の換気機能指標の計測の後，各群の介入下に軽い運動を行い換気機能指標を計測した．本研究の結果よりPESEの効果は呼息筋に対する機能的電気刺激としての効果ではなく，呼息を促すbiofeedbackの効果であることが明らかとなった． （共同発表者：Ito,K., Nonaka,K., Nozoe,T., Shiranita,S.,Horie,J.,Shimizu,G.,Ogi,A., Okuda,M.,Watanabe,N.） （担当部分：データの解析，考察，学会発表）
5 Analysis of changes in clinical characteristics of patients with COPD or interstitial pneumonia during a 6-minute walk test （COPDと間質性肺炎の6分間歩行中の臨床的特性）	－	令和２年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2020 (Wien)	本研究の目的は，COPD患者と間質性肺炎の患者の臨床的特性をあきらかにすることである． COPD患者では，6分間歩行前後のICの有意な減少が認められた（$p < 0.05$）． 間質性肺炎患者では，歩行の開始から終了まで呼吸数ががCOPD患者よりも有意に高い値を示した（$p < 0.05$）．経時的変化の特徴は，ほとんどすべての値が開始から3分まで有意な変動を示したが，その後定常状態に達したということでした．結果よりCOPDでのみに6分間の歩行テスト中に，動的過膨張が認めらた．浅速呼吸は間質性肺炎でのみに認められた．また，歩行開始後3分以内に各特性が現れることが観察された． （共同発表者：Ogi,A.,Enoki,T., Matsumoto,T.,Ito,K.,Shimizu,G., Okuda,M.,Tanaka,N., Fukuda,K.,Nohara,R.）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
〈国内学会〉 1　胸腔鏡下肺葉切除術（VATS）後1ヵ月時におけるATポイントでのMETsの差異で術前の身体機能に違いはあるか？	－	平成26年9月	第33回日本臨床運動療法学会学術集会（大阪）	本研究の目的は，胸腔鏡下肺葉切除術（以下，VATS）後1ヵ月時におけるATポイントでのMETsの差異で術前の身体機能に違いがあるか検証することである．対象はVATSが施行された23名，年齢70.5±7.3歳であった．3.1METs以上群（12名）と3METs以下群（11名）に分け術前身体機能を比較した結果，3METs以下群は有意に体重比膝伸展筋力が低値を認めたが，それ以外には有意差を認めなかった．結果より術後に安全かつ効率的な運動ができるためには下肢筋力が重要であることが明らかとなった． （共同発表者：阿波邦彦，平山善康，堀江淳，太田垣あゆみ，松井萌恵，田中宇大，山下直己，伊藤健一） （担当部分：計画と考察，研究指導）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
2　室内有酸素運動における映像の効果	－	平成26年9月	第33回日本臨床運動療法学会学術集会（大阪）	トレッドミルを用いた屋内有酸素運動中の「映像視聴」が及ぼす身体への影響について検討した．24名の健常女子大学生を映像視聴「あり」群と「なし」群の２群に割り付けトレドミル歩行を行い,疲労指標や呼吸代謝指標,換気能力指標を測定した．身体的疲労感と精神的疲労感はともに2群間で有意な差は認められなかった．一方でVO2,METS,EEについては,いずれも「あり」群が「なし」群に比べ有意に高い値を示した．本研究結果から,運動中の映像視聴は映像「なし」での運動と変わらぬ疲労感で効率の良い運動が可能となることが示唆された． （共同発表者：小西隆幸，杉山友香，谷口結子，藤井愛美，野中紘士，伊藤健一） （担当部分：計画と考察，研究指導）
3　エアマットレスが臥床時の「換気」を制限するか：健常者による基礎的研究	－	平成26年10月	第24回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（奈良）	健常者を対象に，エアマットレスが臥床中の呼吸機能に与える影響を明らかにした．対象者にはエアマットレスと標準マットレス上にて臥位を取らせ，一回換気量，呼吸数などの呼吸機能を測定し比較した．エアマットレス上臥位と標準マットレス上臥位の間で呼吸機能に有意差は認められなかった．胸郭のコンプライアンスの良い者についてはエアマットレスを使用しても，呼吸機能に変化を及ぼさないことが明らかになった． （共同発表者：井上貴裕，伊藤健一，野中紘士） （担当部分：計画とその解析，考察，研究指導）
4　胸腔鏡下肺葉切除術後患者における身体能力および健康関連QOLの縦断的変化の検証	－	平成27年6月	第50回日本理学療法学術大会（東京）	本研究は，VATS前後から術後1ヵ月にかけての身体能力および健康関連QOLの変化を前向きに検討した．対象は30名で年齢72.3±7.2歳であった．反復測定分散分析の結果，呼吸機能は低下したままだが，運動耐容能は術後1ヵ月で術前の値まで回復することが示唆された．しかしながら，健康関連QOLは1ヵ月では完全に回復しないことが明らかとなった．そのため退院前指導をはじめとした健康関連QOLを考慮した指導等の必要性が示唆された． （共同発表者：阿波邦彦，平山善康，山下直己，堀江淳，太田垣あゆみ，松井萌恵，出見世真人，佃陽一 ，伊藤健一） （担当部分：計画とその解析，考察，研究指導）
5　強制呼気筋の強度別筋活動パターンの解明：無作為割付，シングルブラインドによる検討	－	平成27年6月	第50回日本理学療法学術大会（東京）	呼吸リハビリテーションにおける呼吸筋トレーニングを効率良く実施するために,強度別筋活動パターンを筋電図を用いて検討した．10%PEmax,20%PEmax,30%PEmaxの抵抗を負荷した呼息時の腹直筋と内腹斜筋,外腹斜筋の活動量を評価した．３つの筋のうち,最も大きな活動量を示したのは内腹斜筋であった．ただし,その活動量は30%PEmaxの負荷であっても20%MVC以下であった．通常の呼吸筋トレーニングでは30%PEmax程度の負荷が推奨されるが,生理学的な視点でみた場合,その負荷は弱すぎることが示唆された． （共同発表者：大木敦司，松中千明，野中紘士，伊藤健一） （担当部分：データの解析，考察，研究指導）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6　心不全を伴う透析関連低血圧患者の特徴（第1報）	－	平成27年7月	第21回日本心臓リハビリテーション学会学術集会（福岡）	本研究の目的は透析関連低血圧患者の特徴を明らかにすることである．対象は当院外来透析患者のうち，研究の同意が得られた高齢心不全患者14名とし，透析中に収縮期血圧が20mmHg以上低下し，100mmHg未満となる血圧低下群7名と対照群7名の2群に分け，身体機能などを比較検討した．対照群と比較し，血圧低下群では蛋白異化率が有意に低値であったことから，透析関連低血圧患者の特徴として，蛋白摂取量が低い傾向であり栄養障害のあることが示唆された． （共同発表者：山下真由子，寺崎珠，中瀬理恵，杉本篤子，木下千春，神田豊子，伊藤健一） （担当部分：データの解析，考察，研究指導）
7　冠動脈疾患患者の心臓リハビリテーション後の体重増加は全て悪か？：筋力・体組成からの検討	－	平成27年7月	第21回日本心臓リハビリテーション学会学術集会（福岡）	心臓リハビリテーション(心リハ)に参加した冠動脈疾患(CAD)患者の体重増加について検討した．心リハ後に体重が増加した50例のうち膝伸展筋力改善10%以上の18例を筋力増加群，10%未満の32例を増加不良群とした．両群ともに膝伸展筋力と骨格筋量 は心リハ後に有意に増加したが，各増加率は筋力増加群が不良群より有意に大きかった．さらに，筋力増加群では体脂肪量は不変で，運動耐容能が有意に改善したが，不良群では体脂肪量が有意に増加し，運動耐容能に有意な増加は見られなかった．下肢筋力増加を伴う体重増加は「良い体重増加」であることが明らかとなった． （共同発表者：鈴木裕二，山本壱弥，福井教之，柳英利，北垣和史，小西治美，稗田道成，藤原玲子，荒川鉄雄，熊坂礼音，福井重文，大原貴裕，簗瀬正伸，中尾一泰，中西道郎，伊藤健一，後藤葉一） （担当部分：計画と考察，研究指導）
8　透析低血圧患者における透析施行中の低負荷レジスタンストレーニングの効果	－	平成28年3月	第6回日本腎臓リハビリテーション学会（岡山）	透析低血圧患者の血圧や運動機能が３か月間低負荷レジスタンストレーニング（RT）により改善するかを検討した。血圧については，変化は認められなかった．歩行速度については，介入前後で対照群で有意な低下が認められたが，RT群では維持された．また，身体活動量については，介入前後で対照群では有意な変化は認められなかったが，RT群では有意な増加が認められた．運動に対する行動変容ステージについても，RT群では介入前後で有意に増加し，運動に対するアドヒアランスの有意な改善が認められた．結果より今回のRTが運動機能の維持や身体活動量，運動に対するアドヒアランスの改善において有用であることが明らかとなった． （共同発表者：山下真由子，木下千春，伊藤健一） （担当部分：データの解析，考察）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
9　肺がん患者の健康関連QOLと身体能力の術後回復過程	－	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会 （札幌）	本研究は，胸腔鏡下胚葉切除術を受ける肺がん患者に対し，術前から術後3ヵ月にかけて健康関連QOLおよび身体能力の変化を前向きに検証した．結果，肺がん患者の身体能力は術後1カ月足らずで回復することが確認できたが，健康関連QOL（SF-36 PCS）は術前の状況まで回復するのに3ヵ月以上を要することが明らかとなった．つまり，身体能力を維持・向上させるだけでは健康関連QOL対策としては不十分であることが示唆された． （共同発表者：阿波邦彦，平山善康，山下直己，堀江淳，太田垣あゆみ，松井萌恵，出見世真人，佃陽一，伊藤健一） （担当部分：データの解析，考察）
10　食道がん切除再建術後患者の生存期間に影響を及ぼす因子の検討―手術後におけるQOL，身体機能改善への後追試的研究―	－	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会 （札幌）	食道がん切除再建術後患者の生存期間に関与する因子を対象の36名を生存群・死亡群に分け比較検討した．結果，術後1年でのAlbが死亡群で低値，術前のがん進行度が重症な者ほど生存期間が短かった．死亡群で生存期間が術後1年程の者も多く．術後におけるパラメータからは生存期間予測は困難であった．がん進行度が重症であれば，術後の生存期間が短い可能性があり，周術期から生存期間も考慮した理学療法を実施する必要性がある． （共同発表者：髙畑晴行，脇田正徳，伊藤健一，金光浩，長谷公隆） （担当部分：研究計画とデータの解析，考察）
11　減量に成功した肥満を有する冠動脈疾患患者の運動耐容能変化が筋力・体組成に及ぼす影響	－	平成28年7月	第22回日本心臓リハビリテーション学会学術集会 （東京）	心臓リハビリテーション参加後に減量したBMI25以上の肥満を有する冠動脈疾患患者50例を，運動耐容能(PVO2) 増加率が5%以上の33例(PVO2改善群)と，5%未満の17例(非改善群)に分け，体組成，筋力変化を比較した．PVO2改善群では，PVO2改善(改善率 +17%，p＜0.01)に伴い，下肢筋肉量(15.4→15.8kg，p＜0.01)と膝伸展筋力(41.4→44.4kg，p＜0.01)が有意に改善したのに対し，PVO2非改善群(PVO2改善率 -4%，NS)では下肢筋肉量，膝伸展筋力とも有意な増加を示さなかった． （共同発表者：鈴木裕二，福井教之，山本壱弥，柳英利，北垣和史，伊藤健一，小西治美，稗田道成，藤原玲子，渡慶次竜生，伊達歩，熊坂礼音，荒川鉄雄，中西道郎，大原貴裕，高潮征爾，中尾一泰，福井重文，簗瀬正伸，後藤葉一） （担当部分：データの解析，考察）
12　食道がん患者における術前の運動習慣と 術後呼吸機能・健康関連QOLとの関連	－	平成28年10月	第26回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会 （横浜）	本研究の目的は食道がん患者における運動習慣が身体機能，QOLに与える影響を検討することである．食道がん切除術を受ける15名の患者に対し，手術前と退院時の行動変容ステージ，膝伸展筋力，6分間歩行距離，咳嗽時最大呼気流量（PCF），最大呼気流量（PEF），健康関連QOLを測定した．結果を運動実行群と非実行群の2群に分けて検討した．運動習慣と術後のQOLに関連性は認められなかったが，運動習慣のある者は術前PCF・PEF，術後PEFが有意に高かった．このことから，運動習慣は食道がん術後経過に良い影響を及ぼす可能性が示唆された． （共同発表者：髙畑晴行，濱田真一，金光浩，伊藤健一，長谷公隆） （担当部分：データの解析，考察）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
13　マスクを用いたスパイロメトリの妥当性と信頼性	－	平成28年10月	第26回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（横浜）	本研究の目的はマスクを用いたスパイロメトリの妥当性と再現性を級内相関やブランド・アルトマンプロットにより明らかにすることである．筒型マウスピースの代わりにマスクを用いて肺機能を測定した結果，妥当性と再現性が確認できた．このことから，スパイロメトリの際に筒型マウスピースの代わりにマスクを用いることが可能であると考えられた．但し，データの取り扱いに関しては一次回帰式で補正する必要がある．また，今回の結果は安静時計測の結果であり，背景に記した運動時評価における妥当性と再現性の検討は今後の課題である． （共同発表者：伊藤健一，野中紘士，武田匠平，西川剛史，奥田みゆき） （担当部分：データの解析，考察，発表）
14　筋骨格シミュレーション解析を用いた変形性膝関節症患者の歩行時膝伸展パターン分類	－	平成28年12月	第3回日本運動器理学療法学会学術集会（金沢）	本研究の目的は変形性膝関節症患者が歩行中にどの筋を使って膝を伸展させるのかを調べ，代償動作のパターンを分類することである．計測された歩行の運動学・運動力学データを元に多関節運動モデルを用いたシミュレーション解析を行った結果，１．大殿筋の活動増加，２．ヒラメ筋の活動増加，3．前脛骨筋の活動減少，の3つの膝伸展代償パターンに分類できることがわかった．また，大殿筋で膝伸展を代償するパターンは他2群よりも歩行速度が高いことがわかった．この結果より，大殿筋による大腿骨の後方回旋で膝を伸展させる作用が，変形膝関節症患者の歩行速度を維持するのに重要であることが明らかとなった． 本発表で学術大会賞を受賞している． （共同発表者：小栢進也，久保田良，中條雄太，金光浩，伊藤健一，長谷公隆） （担当部分：研究デザイン，考察）
15　運動メニューの順序変更が心臓リハビリテーションの円滑な進行に有効であった高度心機能低下DCMの一例	－	平成29年2月	日本心臓リハビリテーション学会第2回近畿地方会（大阪）	今回，高度心機能低下若年DCM症例の心臓リハビリテーション（心リハ）を経験した．症例は25歳女性，23歳時にDCMと診断され，今回心不全増悪にて入院となった．心リハ開始時の左室駆出率は25%，BNP980pg/mlであった．心リハ実施中に血圧低下，眩暈がしばしば出現し，心リハ進行が困難であった．そこで，運動メニューの順序として有酸素運動の実施前に低強度レジスタンストレーニングを先行させたところ，低血圧症状は軽減し，心リハ3ヶ月終了時にはPeakVO2が＋37.7%，等尺性膝伸展筋力が＋17.9%と良好に増加した． （共同発表者：鈴木裕二，伊藤健一，福井教之，山本壱弥，柳英利，北垣和史，小西治美，渡慶次竜生，伊達歩，熊坂礼音，荒川鉄雄，三浦弘之，長谷川拓也，中尾一泰，福井重文，築瀬正伸，中西道郎，後藤葉一） （担当部分：データの解析，考察，発表）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
16　食道がん切除再建術患者における術前身体活動量が術後の身体機能と健康関連QOLに与える影響	－	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会（千葉）	本研究の目的は食道がん患者における手術前の身体活動量が，術後の身体機能,健康関連QOLに与える影響を検討することである．術前の活動量が1日3METs･時間以上の活動している群の方が，以下の群よりも手術前では等尺性膝伸展筋力，6分間歩行距離，身体的QOLサマリースコアが有意に高く，術後では等尺性膝伸展筋力のみ有意に高い結果となった．食道がん切除再建術は高侵襲を伴う手術であるため，身体機能のなかでも心肺機能と関連する運動耐容能の低下がQOLの低下に影響する可能性がある．今後は，術前，周術期，退院後において運動耐容能を高めるための理学療法介入の有効性について検討する必要がある． （共同発表者：髙畑晴行，濱田真一，清水遼子，脇田正徳，金光浩，伊藤健一） （担当部分：研究の計画立案と考察，指導）
17　CABG後患者の心臓リハビリでの運動耐容能改善規定因子はAMIと異なるか―重回帰分析による検討―	－	平成29年7月	第23回日本心臓リハビリテーション学会学術集会（岐阜）	心臓リハビリテーション（心リハ）に参加した，冠状動脈バイパス術後（CABG）症例61例と急性心筋梗塞（AMI）症例91例の運動耐容能改善規定因子について検討した．CABG症例の運動耐容能改善規定因子は，心リハ開始前後の膝伸展筋力の変化率，血中ヘモグロビンの変化値，心リハ開始時の血中脳性ナトリウム利尿ペプチド（BNP）値であった．AMI症例の運動耐容能改善規定因子は，心リハ開始時の運動耐容能の%予測値であった． （共同発表者：鈴木裕二，伊藤健一，福井教之，山本壱弥，柳英利，北垣和史，小西治美，渡慶次竜生，伊達歩，熊坂礼音，荒川鉄雄，三浦弘之，長谷川拓也，中尾一泰，福井重文，簗瀬正伸，中西道郎，後藤葉一） （担当部分：考察と指導）
18　体重200kgを超える肥満肺胞低換気症候群の症例を如何に運動療法に繋げるか	－	平成29年9月	第36回日本臨床運動療法学会（大阪）	体重が200kgを超える肥満肺胞低換気症候群患者に対し，理学療法の位置づけを考察しながら減量できた症例の経過について報告した．症例は30歳男性，体重は239kgでBMIは78であった．入院当初より低酸素血症と肺高血圧症，重度右心不全が認められた．動作レベルは寝返り，起き上がりが何とかできる程度であった．減量目的の介入が不可欠であったが，立ち上がりができなかったことからセザムベッドによる立ち上がり介助を行い，立位・歩行練習へと繋げていった．歩行距離も順調に延長することができ，170kgまで減量ができたため，自宅退院となった．一般的な肥満患者の理学療法プログラムでは減量目的の有酸素運動が主となるが，今回のような症例では基本動作から歩行までの手段を工夫し，担保する事が重要である． （共同研究者：大木敦司，伊藤健一，清水学，原智恵，林祐司，春名克純，奥田みゆき） （担当部分：治療介入と考察）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
19　体重200kgを超える肥満肺胞低換気症候群の１例：理学療法の位置づけ	－	平成29年10月	第66回共済医学会学術集会（京都）	体重が200kgを超える肥満肺胞低換気症候群患者に対し，理学療法の位置づけを考察しながら減量できた症例の経過について報告した．症例は30歳男性，体重は239kgでBMIは78であった．入院当初より低酸素血症と肺高血圧症，重度右心不全が認められた．動作レベルは寝返り，起き上がりが何とかできる程度であった．減量目的の介入が不可欠であったが，立ち上がりができなかったことからセザムベッドによる立ち上がり介助を行い，立位・歩行練習へと繋げていった．歩行距離も順調に延長することができ，170kgまで減量ができたため，自宅退院となった．一般的な肥満患者の理学療法プログラムでは減量目的の有酸素運動が主となるが，今回のような症例では基本動作から歩行までの手段を工夫し，担保する事が重要である． （共同研究者：大木敦司，伊藤健一，清水学，原智恵，林祐司，春名克純，奥田みゆき） （担当部分：治療介入と考察）
20　当院における「できるADL」と「しているADL」の検討	－	平成29年10月	第66回共済医学会学術集会（京都）	研究の目的は枚方公済病院における「屋内移動」と「トイレ」に関する「できる」「している」の乖離度合いを調査し，早期退院につなげる方策を検討することである．過去にリハビリテーションの依頼のあった310名の患者カルテから「屋内移動」と「トイレ」に関する「できる」・「している」について調査した．「できる」・「している」の乖離は7病棟中3病棟で存在していた．この3病棟は認知症患者を多く抱える病棟で，患者の転倒を避けるが故の乖離であることが推測できた．このことから認知症患者の病棟内移動手段の決定には病棟看護師と理学療法士の密なコミュニケーションと共通の基準を設ける必要性が示唆された． （共同発表者：木村拓磨，大木敦司，池島浩司，井上悟，吉本拓登，能勢亜友子， 伊藤健一，奥田みゆき） （担当部分：考察と発表指導）
21　COPD患者の換気効率を改善する呼息時電気刺激はどこを刺激すべきか	－	平成29年11月	第27回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（仙台）	本研究の目的はCOPD患者に対する呼息時電気刺激(PESE)の刺激部位を特定することである．対象者は35名のCOPD患者である．対象者は電極を設置しただけの群と呼息筋である腹部筋に対して刺激を行う群，呼吸運動に関係の無い前腕部に対し刺激を行う群の3群に割り付けられた．対象者にはエルゴメータ運動を課し，種々の換気指標を計測した．結果よりPESEの効果は呼息筋に対する機能的電気刺激としての効果ではなく，呼息を促すbiofeedbackの効果であることが示唆された． よって刺激部位は腹部でなく，露出しやすい前腕部でも良いことが明らかとなった． （共同発表者：伊藤健一，野中紘士，白仁田秀一，堀江淳，清水学，大木敦司，奥田みゆき） （担当部分：研究デザインと介入，考察，発表）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
22　臥位での運動療法が生きることを支援した終末期間質性肺炎の一例	－	平成29年11月	第27回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（仙台）	Platypnea-Orthodeoxia症候群（POS）を有する肝肺症候群の理学療法について報告した．症例は50代男性で診断名は間質性肺炎急性増悪，既往歴として肝硬変を有していた．呼吸苦により他院で上記診断．入院時血ガスは酸素4LでPCO2 33.6torr，PO2 55.2torrであり胸部CTでは両側下背野に網状影.を認めた．オキシマイザー+酸素6Lで臥位ではSpO2は97%を維持できたが，起坐位ではSpO2が70%台となるPOSを認めた．理学療法はPOSを許容した上で屋内短距離移動の獲得を目的に臥位での筋力トレーニングを行った．連続歩行は20mまでとし,退院後は訪問サービスで管理することで53病日オキシマイザー+酸素6LのHOTを使用し自宅退院となった. （共同発表者：大木敦司，伊藤健一，清水学，林祐司，木戸悠人，川田富美子，奥田みゆき） （担当部分：治療介入と考察）
23 肺がん術後に乳糜胸を合併した，認知機能障害がある高齢者に対する多職種での関わりが有効であった一例	－	平成29年11月	第27回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（仙台）	症例は80歳台女性で，肺炎加療中に左肺腫瘍が見つかり左上葉切除を施行した．術後に乳糜胸を認めた．乳糜胸の治療は安静による保存療法が一般的であるが，本症例は認知症を合併していたため，更なる機能低下を懸念し他職種間で綿密な情報交換を行いながら積極的なチームアプローチを行った．結果，スムーズに退院に繋げることができた. （中村佳菜子，松島裕美,糸賀詩織,能勢亜友子,田中順也,奥田みゆき,渡邊明,伊藤健一,上田 耕平,辻是道） （担当部分：理学療法の介入と考察）
24　心不全入院時における身体的フレイル指標の推移	－	平成30年2月	日本心臓リハビリテーション学会第3回近畿地方会（神戸）	フレイルの基礎研究として心不全入院時の身体機能の実態を調査した．急性心不全あるいは慢性心不全急性増悪で入院してきた患者で，入院前に屋内歩行が可能でshort physical performance batteryを測定した患者212名が対象である．これら対象者を低機能群，中間機能群，高機能群の3群に分け，それぞれの群毎に退院時に機能改善の認められた割合を調査した．低機能群のうち機能回復を示した割合は60.3%，中間機能群では57.1%，高機能群では0%であった．入院時に身体的フレイルが認められた者のうち，低機能群・中間機能群においてはリハビリテーションの介入で50%以上の者に身体機能の改善が認められた．また，高機能群においては入院時の機能が維持できていたことが明らかとなり，フレイルに対するリハビリテーションの介入効果が明らかとなった. （共同発表者：池田力，岩津弘太郎，芦川博信，松村幸一，坂本真実，伊藤健一，中野南帆子，阪田智子，原谷こずえ，高林健介，藤田亮子，北口勝司，野原隆司） （担当部分：考察）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
25 心臓サルコイドーシス患者における心臓リハビリテーションの有効性	－	平成30年7月	第24回日本心臓リハビリテーション学会学術集会（横浜）	心臓リハビリ3ヶ月プログラムとCPXを実施している21名の心臓サルコイドーシス患者に対する心臓リハビリテーション（心リハ）の有効性と安全性について検討した．検討した項目は最高酸素摂取量と等尺性膝伸展筋力，血液データである．結果より心臓サルコイドーシス患者では心リハ導入により運動耐容能は改善するが，開始時BNPの高値例では運動耐容能の改善は乏しいことが明らかとなった．また，有害事象も認められなかったことより心臓サルコイドーシス患者の心リハの有効性と安全性が示唆された． （共同研究者：鈴木裕二，伊藤健一，福井教之，山本壱弥，柳英利，北垣和史，島田幸洋，小西治美，荒川鉄雄，中尾一泰，長谷川拓也，福井重文，三浦弘之，中西道郎） （担当部分：考察）
26　COPD患者に対する呼息時電気刺激が動的肺過膨張に及ぼす影響：パイロットスタディ	－	平成30年11月	第28回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（幕張）	研究の目的はPESEの動的肺過膨張への影響を明らかにすることである．外来COPD患者６名に対して６分間歩行を呼息時電気刺激を行う「介入あり」と「介入なし」の２条件下に実施した．その際に最大吸気量(IC)と分時換気量(VE)，呼吸数(RR)，酸素飽和度(SpO2)，自覚的運動強度(Borg scale)を計測した．IC，VE，RR，SpO2，Borg scaleのいずれの評価項目においても有意な差は認められなかった．効果量についてはBorg scaleで効果量「大」であった．呼息時電気刺激は動的肺過膨張を抑制することはできなかったが，息切れの軽減に有用である可能性が示唆された． （共同研究者：伊藤健一，大木敦司，清水学，奥田みゆき） （担当部分：デザイン，考察，発表）
27　安定期呼吸器疾患の身体活動量及び生活空間の広がりと運動機能の関連	－	平成30年11月	第28回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（幕張）	外来リハビリテーションを実施している安定期呼吸器疾患患者70名を対象に，身体活動量及び生活空間の広がり（IPAC）と運動機能（膝伸展筋力，SPPB，6MD）の関連について調査検討した．結果より安定期呼吸器疾患患者の外出頻度にはバランス等のパフォーマンス能力が関与し，身体活動量には運動耐容能が関与することが明らかとなった． （共同研究者：大木敦司，清水学，伊藤健一，松本美希子，高橋留佳，池田力，奥田みゆき） （担当部分：考察）
28　在宅酸素療法（HOT）使用者における酸素ボンベと液体酸素デバイス間の患者特性	－	令和元年11月	第29回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（名古屋）	研究の目的はHOT適応者において，酸素ボンベと液体酸素各々の使用者の特性を明らかにすることである．51名のHOT適応患者において年齢，肺機能，酸素流量，上下肢筋力，６分間歩行距離，身体活動量，ADL能力，認知機能について評価した．結果，液体酸素使用群において上下肢筋力，身体活動量，認知機能において有意に勝っていた．これらの結果は酸素デバイスを選択する際に役立つものと考えられた． （共同研究者：清水学，大木敦司，池田力，伊藤健一，森山久美子，高橋留佳，上田耕平，木戸悠人，福田康二，奥田みゆき） （担当部分：考察）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
29　高齢安定期呼吸器疾患の身体活動量を規定する因子	－	令和元年11月	第29回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（名古屋）	研究の目的は高齢安定期呼吸器疾患の身体活動量を規定する因子を明らかにすることである．外来呼吸リハを実施している92名の患者に対し，SPPB，NRADL，HADS，MMSE，LSAを評価し，LSAを目的変数として重回帰分析を行った．結果，SPPBとNRADLが身体活動量を示すLSAを規定する因子として抽出された．高齢安定期呼吸器疾患の身体活動量を向上させるには息切れのコントロールを含めたADL能力とパオーマンス能力の向上が重要であることが示唆された． （共同研究者：大木敦司，清水学，伊藤健一，森山久美子，高橋留佳，池田力，奥田みゆき） （担当部分：考察）
30　地域在住呼吸器患者におけるCOVID-19流行期の状況調査ー身体活動性と各指標の関連ー	－	令和3年3月	第30回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（京都）	研究の目的はCOVID-19流行期の地域在住呼吸器患者の身体活動性と関連する要因を分析することである．感染予防対策の記載は手洗いやうがいが5割以上であり，運動習慣の記載はストレッチやスクワットが3割り程度であった.Life-Space Assessmentと性別,BMI,要介護度に有意な相関を認めた.COVID-19流行期において,呼吸器患者の身体活動性は低値であり,Life-Space Assessmentが低値な者は女性,低BMI，要介護度が高いという特徴が明らかとなった. （共同研究者：大木敦司，清水学，上田耕平，伊藤健一，池田力，奥田みゆき） （担当部分：考察）

別記様式第４号（その２の１）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

2024 年　 5 月　13 日

氏名　　柴田　政彦

研　究　分　野	研究内容のキーワード
行動科学　認知脳科学 リハビリテーション医学	行動科学　認知脳科学　リハビリテーション医学

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例 1)　医療系学生（看護学、リハビリテーション学、医学、薬学）を対象とした講義	平成 21 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月 平成 24 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	大阪大学医学部の新研修医を対象に血管穿刺の方法と注意点について講義 大阪大学医学部医学科　「麻酔学」、局所麻酔、伝達麻酔、医学生は局所麻酔と伝達麻酔について講義
	平成 24 年 4 月 ～ 現在に至る	大阪大学医学部医学科「臨床医学特論」、痛みについて医師として学ぶべき痛みの基礎知識の整理と、慢性痛の概念、評価方法、治療法について講義
	平成 29 年 ～ 令和 5 年	大阪大学医学部医学科「総合内科講義」、において痛みについて医師として学ぶべき痛みの基礎的包括的知識について講義
	平成 24 年 4 月 ～ 令和 4 年 3 月	大阪大学薬学部「薬物治療学Ⅲ」、薬学部の学生に対し、痛みの基礎知識と種々の鎮痛薬について講義
	平成 29 年 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科「疾病治療論Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ、Ⅴ」「生化学」「ペインコントロール論」「疫学」の講義担当
	平成 30 年 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「人体機能学Ⅰ」「内部障害学Ⅰ，Ⅱ」「痛み学概論」「疼痛リハビリテーション学」の講義担当
	平成 29 年 ～ 現在に至る	神戸大学、滋賀医科大学、奈良県立医科大学にて、非常勤講師として医学生を対象に痛みに関する講義担当
	平成 29 年 ～ 令和 5 年	大阪大学大学院医学系研究科環境医学大学院生を対象に招へい教授として痛みに関する講義担当
2）臨地実習における体験型学習	令和 4 年 ～ 令和 5 年	大阪大学医学部学生を対象に 6 か月間の臨床実習を担当
	平成 24 年 4 月 ～ 現在に至る	甲南女子大学人間科学部不大学院生を対象にペインクリニック診療の研修（市立芦屋病院にて）を担当
2　作成した教科書，教材		

痛みの教育コンテンツ提供システム	平成 23 年 4 月	厚労働科研「痛みに関する教育と情報提供システムの構築に関する研究」、 AMED 研究「慢性痛に対する認知行動療法の普及と効果解明に関する研究」の研究代表者として痛みに関する教育的資材を医療業務別に作成し公開するシステムを構築
痛みの集学的診療：痛みのコアカリキュラム	平成 28 年 10 月 真興交易 全 347 頁	慢性疼痛に対する集学的診療に関する図書
３　教育上の能力に関する大学等の評価 特になし		
４　実務の経験を有する者についての特記事項 「研究会・NPO 法人」 1)　関西痛みの診療研究会代表世話人	平成 23 年 4 月 ～ 令和 4 年 3 月	関西地区の痛み専門医療者の研修を目的として年一回の研修会を運営
2)　NPO 痛み医学研究情報センター講師	平成 24 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	関西地区の痛み専門医療者の研修を目的として年一回の研修会を運営
3)　NPO 痛みに取り組むしらかば	令和 5 年 4 月 ～ 現在に至る	痛みに関連した研修会開催、人材育成、広報活動を目的とした NPO を設立し運営
「講演」		
1)　「慢性痛の成り立ちと対策」	平成 27 年 3 月	第 15 回痛みの研究会　講演 於：九州大学医学部百年講堂
2)　「ファブリー病に伴う神経障害性痛について」	平成 27 年 4 月	一般社団法人 全国ファブリ―病患者と家族の会　基調講演　於：大阪大学医学部附属病院
3)　難知性疼痛の治療戦略、 オピオイドの長期使用について	平成 27 年 6 月	J-PAT PA2　於：東京コンベンションホール
4)　慢性疼痛の基礎知識、 慢性疼痛の評価と治療方針、 疾患別各論	平成 27 年 6 月	J-PAT PA2　於：東京コンベンションホール
5)　難知性疼痛の治療戦略	平成 27 年 7 月	J-PAT PA2　於：メルパルク大阪
6)　「一歩踏み込んだ痛みの治療」	平成 27 年 7 月	芦屋市医師会講演会 於：芦屋市医師会館
7)　難知性疼痛の治療戦略	平成 27 年 8 月	J-PAT PA2　於：TKP ガーデンシティ大阪梅田
8)　「運動器疼痛を対象とした脳機能画像研究と治療応用」	平成 27 年 9 月	第 3 回運動器疼痛を考える会 於：東京
9)　「痛みの慢性化と集学的アプローチの意義　―脳機能画像研究から見えてくるもの」	平成 27 年 10 月	第５回　脊椎の痛みを学ぶ会 in 九州 於：福岡サンパレス
10)　「複合性局所疼痛症候群　-補償上の問題点」	平成 27 年 12 月	日本損害保険協会「名古屋医療セミナー」
11)　「慢性痛に対する集学的アプローチについて」	平成 28 年 8 月	OSAKA 疼痛治療セミナー講演会 於：シェラトン都ホテル大阪
12)　「複合性局所疼痛症候群　-補償上の問題点」	平成 28 年 11 月	日本損害保険協会「さいたま医療セミナー」
13)　「痛みの責任は誰にあるのか？」	平成 28 年 11 月	日本麻酔医事法制研究会講演
14)　「何故　今？　慢性痛対策が重要なのか？」	平成 29 年 1 月	文部科学省課題解決型事業「慢性疼痛患者の生きる力を支える人材育成」キックオフ･セミナー　名古屋市立大学桜山キャンパスさくら講堂

15)　「慢性疼痛に対する治療の現状と将来の展望」	平成 29 年 1 月	第 56 回日本定位・機能神経外科学会シンポジウム 於：グランフロント大阪コングレコンベンションセンター
16)　「飛翔」	平成 29 年 6 月	第 39 回日本疼痛学会　会長講演 於：神戸国際会議場
17)　「複合性局所疼痛症候群　-補償上の問題点」	平成 29 年 7 月	日本損害保険協会「東京医療セミナー」
18)　「ICD-11 への改訂に向けての慢性痛」	平成 29 年 7 月	第 51 回日本ペインクリニック学会リフレッシャーコース　　於：長良川国際会議場
19)　「大阪大学医学部附属病院疼痛医療センターでの集学的診療について」	平成 29 年 10 月	日本線維筋痛症学会第 9 回学術集会シンポジウム 於：千里ライフサイエンスセンター
20)　「Alteration of resting state networks in patients with fibromyalgia, CRPS and other functional somatic pain syndrome（線維筋痛症、CRPS、機能性疼痛症候群患者における安静時脳内ネットワーク活動の変化）	平成 29 年 10 月	The 7th Asian Pain Symposium Preliminary Scientific Program, Taiwan （アジア疼痛シンポジウム：プレ大会，台湾）
21)　「慢性痛医療のバランス」	平成 29 年 11 月	イーライリリー社 Pain アドバイザリー会議
5　その他 1）博士学位論文指導実績　（25 名） 2）博士学位審査実績（副査 1 名）	平成 17 年 4 月 ～ 現在に至る 平成 28 年 3 月	神経障害性疼痛に対するリチウムの効果・神経障害性疼痛における NO の役割・神経障害性疼痛に伴う情動の変化・神経障害性疼痛に対する牛車腎気丸の効果・神経障害性疼痛における Serotonin2C receptor mRNA の役割・CRPS 患者における中枢機能の障害・機械的刺激による痛みの認知機構（2 名）・運動時痛の認知機構・慢性痛患者における不公平感・腕神経叢引き抜き損傷後痛の治療成績など 11 名に対してそれぞれ 2－4 年間指導した。 研究テーマ：下肢の難治性神経障害性疼痛に対する H コイルによる反復経頭蓋磁気刺激の除痛効果

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 医師免許 博士（医学）	 昭和 60 年 5 月 27 日 平成 10 年 5 月 29 日	 第 291103 号 大阪大学大学院医学系研究科 第 14051 号
日本麻酔科学会 指導医	平成 4 年 4 月	第 24125 号
日本ペインクリニック学会認定医	平成 6 年 6 月	第 19940054 号
公認心理師	平成 31 年 3 月 11 日	第 22882 号
日本医師会認定産業医	令和 4 年 3 月 29 日	第 1601741 号
2　特許等　特記すべきものなし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 臨床歴及び実務歴	 昭和 60 年 7 月 ～ 昭和 61 年 6 月 昭和 61 年 7 月 ～ 平成元年 6 月	 大阪大学医学部附属病院麻酔科において 麻酔科診療業務に従事 大阪警察病院麻酔科において麻酔科診療業務に従事

	平成元年 7 月 ～ 平成 2 年 6 月	佐賀医科大学麻酔科教室において麻酔科診療業務に従事
	平成 2 年 7 月 ～ 平成 5 年 6 月	西宮市立中央病院麻酔科にて副医長・医長として麻酔科診療業務に従事
	平成 5 年 7 月 ～平成 16 年 12 月	大阪大学医学部附属病院麻酔科にて麻酔科診療業務に従事
	平成 17 年 1 月 ～ 平成 17 年 6 月	千里 A&H ペインクリニックにて診療に従事
	平成 17 年 4 月 ～ 平成 19 年 3 月	大阪大学大学院医学系研究科臨床助教授（兼任）
	平成 17 年 7 月 ～ 平成 19 年 3 月	市立芦屋病院麻酔科部長として麻酔科診療業務に従事
	平成 19 年 4 月 ～平成 29 年 3 月	大阪大学大学院医学系研究科疼痛医学寄附講座教授として大阪大学医学部附属病院において麻酔科診
	平成 19 年 4 月 ～現在に至る	市立芦屋病院非常勤医師としてペインクリニックおよび緩和医療の診療業務に従事（兼任）
４　その他 芦屋市保健センター運営審議会委員長	平成 27 年 4 月 ～ 現在に至る	運営審議会委員長として芦屋市保健センター運営審議会の指導・助言をおこなう

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1.　まれな疾患の麻酔 A to Z	共著	平成 27 年 5 月	文光堂	B5 変型判・714 頁 編者：高崎眞弓，河本昌志，木内恵子，白神豪太郎，萩平哲 担当部分：「ハンセン病」
2.　Practice 臨床に役立つ神経障害性痛の理解	共著	平成 27 年 5 月	文光堂	A4 判・285 頁 編者：井関雅子 担当部分：「線維筋痛症」
3.　麻酔科学レビュー 2016	共著	平成 28 年 2 月	総合医学社	AB 判・300 頁 編者：澄川耕二，岩崎寛 担当部分：「38. ペインクリニッ
4.　痛みの集学的診療：痛みのコアカリキュラム	共著	平成28年10月	真興交易（株）医書出版部	A4 判・347 頁 編者：西江宏之，北原雅樹，柴田政彦，福井聖，矢吹省司，山下敏彦
5.　慢性疼痛疾患: 診断と治療の ABC	共著	平成 28 年 6 月	最新医学社	A4 判・237 頁 編者：田口敏彦 担当部分：「我が国における慢性疼痛に対する診療体制の実情と課
6.　慢性疼痛診療ハンドブック	共著	平成28年12月	中外医学社	A5 判・300 頁 編者：池本竜則 担当部分：「治療に難渋する慢性疼痛患者とは」
7.　「痛みをやわらげる心の科学」最前線	共著	令和 4 年 6 月	週間朝日 5779 号 2022.6.3 号　p26-27	
（学術論文）				

1. Validation of the Japanese Version of the Pain Self-Efficacy Questionnaire in Japanese Patients with Chronic Pain（査読付）	共著	平成 26 年 8 月	Pain Med: 15(8):1405-1417	
2. Age-related and sex-related changes in perfusion index in response to noxious electrical stimulation in healthy subjects.（査読付）	共著	平成26年12月	Journal of Pain Research2014;7:91.	
3. Pain-Related Brain Activity Evoked by Active and Dynamic Arm Movement: Delayed-Onset Muscle Soreness as a Promising Model for Studying Movement-Related Pain in Humans.	共著	平成 27 年 8 月	Pain Medicine: 16(8):1528-1539.	
4. 痛みの自己効力感とその他の認知・感情的要因が慢性痛患者の健康関連 Quality of Life と生活障害度に及ぼす影響（査読付）	共著	平成27年12月	慢性疼痛 1(34), 1.	
5. Go-sha-jinki-Gan (GJG) ameliorates allodynia in chronic constriction injury model mice via suppression of TNF-α expression in the spinal cord.（査読付）	共著	平成 28 年 1 月	Molecular Pain 12:1-16	
6. 第三者行為をきっかけとした神経障害性疼痛の治療反応性（査読付）	共著	平成 28 年 2 月	ペインクリニック 372(2), 221-228.	
7. resting-state fMRI による上肢 CRPS 患者における感覚・運動ネットワークの検討（査読付）	共著	平成 28 年 5 月	日本運動器疼痛学会誌 vol.8(2)203-208	
8. Independent Risk Factors for Positive and Negative Symptoms in Patients with Diabetic Polyneuropathy.（査読付）	共著	平成 28 年 6 月	Journal of Pain and Palliative Care Pharmacotherapy;30(3):178-183.	

9. 言語的妥当性を担保した日本語版 Injustice Experience Questionnaire:IEQ の作成（査読付）	共著	平成 28 年 8 月	ペインクリニック vol.37(8)1053-1057
10. ペインクリニック外来患者を対象とした薬剤師外来の現状（査読付）	共著	平成 28 年 8 月	医療薬学 vol.42(8)558-561
11. Socioeconomic value of intervention for chronic pain.（査読付）	共著	平成 28 年 8 月	Journal of Anesthesia vol.30 Issue4 2016;30(4):553-561.
12. Arthropathy-related pain in a patient with congenital impairment of pain sensation due to hereditary sensory and autonomic neuropathy type II with a rare mutation in the WNK1/HSN2 gene: a case report（査読付）	共著	平成28年10月	BMC Neurology16(1):201
13. Injustice Experience Questionnaire,Japanese Version: Cross-Cultural Factor-Structure Comparison and Demographics Associated withPerceived Injustice（査読付）	共著	平成28年10月	Plos One;11(8)e0160567
14. The Effect of Guidance regarding Home Exercise and ADL on Adolescent Females Suffering from Adverse Effects after HPV Vaccination in Japanese Multidisciplinary Pain Centers.（査読付）	共著	平成28年10月	Pain Research and Management;2016:1-6.
15. Resting state fMRI を用いた各脳部位の相互作用の解析（査読付）	共著	平成28年10月	バイオメディカル・ファジィ・システム学会年次大会講演論文集 vol.29 161-164

16. 慢性疼痛に対する漢方エキス剤の効果を、国際的な尺度を用いて多面的に評価し得た症例（査読付）	共著	平成28年10月	痛みと漢方 26, 33-39
17. 慢性痛患者への入院集学的リハの取り組み（査読付）	共著	平成28年10月	Journal of Musculoskeletal Pain Research 8巻3号 Page S125
18. Fear-avoidance beliefs are independently associated with the prevalence of chronic pain in Japanese workers.（査読付）	共著	平成29年4月	Journal of Anesthesia;31(2):255-262.
19. 非がん性慢性疼痛のチーム医療 大阪大学医学部附属病院の痛み診療（査読付）	共著	平成29年8月	ペインクリニック Vol.38 No.8 P1063-1068
20. 中枢機能障害性疼痛患者における脳部位間の機能的結合と背景因子との関連：安静時fMRIによる検討（査読付）	共著	平成29年10月	PAIN RESEARCH vol.32(1)52-59
21. 就労環境における慢性痛の実態調査～仕事に影響する慢性痛のリスク因子の検討 QWLICスタディ（査読付）	共著	平成29年12月	産業衛生学会誌 vol.59 (5) 125-134
22. Classification and characterisation of brain network changes in chronic back pain: A multicenter study.（査読付）	共著	平成30年	Wellcome Open Res 3:19
23. The relationships between pain catastrophizing subcomponents and multiple pain-related outcomes in Japanese outpatients with chronic pain: a cross-sectional study. （査読付）	共著	平成30年5月	Pain Pract.
24. Reliability and validity of the Athens Insomnia Scale in chronic pain patients. （査読付）	共著	平成30年	J Pain Res 11:793-801

25. Verbal Instruction Can Induce Extinction of Fear of Movement-Related Pain. （査読付）	共著	平成 30 年	j.pain.19:1063-1073
26. Evaluating the psychometric properties of two-item and four-item short forms of the Japanese Pain Self-Efficacy Questionnaire: a cross-sectional study. （査読付）	共著	平成 30 年 2 月	Journal of Anesthesia 2019 Feb;33(1):58-66.
27. Frequency of mental disorders among chronic pain patients with or without fibromyalgia in Japan. （査読付）	共著	平成 30 年	Neuropsychopharmacol Rep 38:167-174
28. Validation of the Japanese version of the life satisfaction checklist (LiSat-11) in patients with low back pain: A cross-sectional study. （査読付）	共著	平成 30 年	J Orthop Sci 23:895-901
29. 慢性疼痛領域における治療の費用対効果と社会経済的な負担（査読付）	共著	平成 30 年	日本運動器疼痛学会誌 10(2):205-216
30. 慢性疼痛に対する認知行動療法とリハビリテーションの併用効果 ： いきいきリハビリノートの治療実績を含めて（査読付）	共著	平成 30 年	日本運動器疼痛学会誌 10(2):205-216
31. Factors influencing outcomes among patients with whiplash-associated disorder: A population-based study in Japan. （査読付）	共著	令和元年	PLoS One 14:e0216857
32. Japanese cross-cultural validation study of the Pain Stage of Change Questionnaire. （査読付）	共著	令和元年	Pain Rep 4:e711

33. Association of sleep sufficiency and duration with chronic pain prevalence: A population-based cross-sectional study. （査読付）	共著	令和元年	J Psychosom Res 120:74-80
34. Towards prognostic functional brain biomarkers for cervical myelopathy: A resting-state fMRI study. （査読付）	共著	令和元年	Sci Rep 9:10456
35. Smoking is associated with greater pain intensity and pain-related occupational disability in Japanese workers. （査読付）	共著	令和元年	J Anesth 33:523-530
36. Evaluating the psychometric properties of two-item and four-item short forms of the Japanese Pain Self-Efficacy Questionnaire: a cross-sectional study. （査読付）	共著	令和元年	J Anesth 33:58-66
37. The Relationships Between Pain-Catastrophizing Subcomponents and Multiple Pain-Related Outcomes in Japanese Outpatients with Chronic Pain: A Cross-Sectional Study. （査読付）	共著	令和元年	Pain Pract 19:27-36

38. Pilot study of a basic individualized cognitive behavioral therapy program for chronic pain in Japan. （査読付）	共著	令和２年	Biopsychosoc Med 14:6
39. Associations between the injustice experience questionnaire and treatment term in patients with acute Whiplash-associated disorder in Japan（査読付）	共著	令和２年	PLoS One 15:e0231077
40. Resting-state Amplitude of Low-frequency Fluctuation is a Potentially Useful Prognostic Functional Biomarker in Cervical Myelopathy. （査読付）	共著	令和２年	Clin Orthop Relat Res 478:1667-1680
41. Associations between the injustice experience questionnaire and treatment term in patients with acute Whiplash-associated disorder in Japan: Comparison with Canadian data. （査読付）	共著	令和２年	PLoS One 15(4):e0231077
42. Pilot study of a basic individualized cognitive behavioral therapy program for chronic pain in Japan. （査読付）	共著	令和２年	Biopsychosoc Med 14:6
43. 慢性痛診療の現状と課題（査読付）	単著	令和２年	Journal of Musculoskeletal Pain Research 12(3):189-191

44. 発症契機に他者の落ち度を感じている慢性疼痛患者の初診時ならびに6ヵ月後の質問票スコアについて　後ろ向き研究（査読付）	共著	令和2年	Journal of Musculoskeletal Pain Research 12(1):22-31
45. 慢性痛を有する訪問リハビリテーション利用者の特徴と生活に影響を及ぼす要因（査読付）	共著	令和2年	Journal of Musculoskeletal Pain Research 12(1):13-21
46. 中枢性脳卒中後疼痛の多面的評価（査読付）	共著	令和2年	PAIN RESEARCH 35(2):99-106
47. 【痛みの診断と治療最前線】痛みの病態・機序	単著	令和2年	日本医師会雑誌 149(1):21-24
48. 皮膚科における帯状疱疹関連痛の治療の現状（査読付）	共著	令和3年	慢性疼痛(1340-2331)41巻1号 Page91-95(2022.12)
49. Validation of the Japanese version of the Bath CRPS Body Perception Disturbance Scale for CRPS.（査読付）	共著	令和3年	J Anesth 35(1):20-26
50. 診療体制の違いによる帯状疱疹関連痛の治療の現状（査読付）	共著	令和3年	慢性疼痛 40(1):222-228
51. 【慢性疼痛のリハビリテーション医療Up To Date】慢性痛の認知行動療法入院環境での取り組み（査読付）	共著	令和3年	The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine 58(11):1264-1269
52. 【複合性局所疼痛症候群とリハビリテーション】外傷や医療行為を契機に生じた痛みが長く続く患者のリハビリテーション（査読付）	共著	令和3年	総合リハビリテーション 49(10):945-950
53. 中枢性脳卒中後疼痛の病変部位の検討（査読付）	共著	令和3年	PAIN RESEARCH 36(2):81-87
54. 【運動器疼痛】運動器疼痛を対象とした医療体制　慢性疼痛診療・治療の歴史と現状（査読付）	共著	令和3年	ペインクリニック 42(別冊春):S227-S232
55. 慢性疼痛患者における不公平感の変化と治療反応性の関連検討のための予備的研究（査読付）	共著	令和3年	ペインクリニック 42(3):369-376

56. ペインクリニック外来における帯状疱疹関連痛の治療の現状（査読付）	共著	令和３年	慢性疼痛 39(1):141-146
57. 皮膚科における帯状疱疹関連痛の治療の現状（査読付）	共著	令和４年	慢性疼痛 41(1):91-95
58. 【「頭痛の診療ガイドライン 2021」準拠ジェネラリストのための頭痛診療マスター】(第２章)頭痛患者の QOL を改善するためのノウハウ　慢性頭痛に対する集学的診療（査読なし）	単著	令和４年	jmed mook (82):116-119
59. 麻酔・ペインクリニック　慢性痛の集学的診療の実施・運営のポイントは? 集学的診療には多職種の診療を支えるマネージャーが重要である（査読なし）	共著	令和４年	日本医事新報 (5137):54
60. 医学的に原因が見当たらない痛みで受診した患者の治療方針について 痛みの原因を探るのではなく、痛みを主訴に受診したのはなぜかを考える（査読なし）	単著	令和４年	日本医事新報 (5129):53
61. 慢性疼痛のリハビリテーション(第１回)　慢性疼痛の病態と機序（査読なし）	単著	令和４年	Journal of Clinical Rehabilitation 31(4):347-351
62. 慢性痛患者の初診評価　痛みの背景にある要因を探る多面的アプローチ（査読付）	共著	令和５年	慢性疼痛 42(1):117-122
63. 慢性疼痛難治例とは何か?　慢性疼痛医療への私の提言（査読付）	共著	令和５年	慢性疼痛 42(1):6-10
64. 慢性の痛みに対する集学的診療における精神科医療機関との連携	共著	令和５年	日本ペインクリニック学会誌 30(3):64

65. Three weeks of exercise therapy altered brain functional connectivity in fibromyalgia inpatients. （査読付）	共著	令和５年	Neurobiol Pain 14:100132	
（その他） 「総説」				
1) 慢性痛の問題点と今後の取り組み	共著	平成 26 年 12 月	理学療法学 vol.41(8) 699-705	
2) 医学生教育の観点から:医学生への痛みの教育	単著	平成 28 年８月	ペインクリニック vol.37 No.8 P991-998	
3) Functional Pain Disorder 3. 複合性局所疼痛症候群	共著	平成 28 年８月	最新医学 71 巻８号 P116-119	
4) 疼痛および鎮痛の神経メカニズム	共著	平成 28 年８月	The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine 第 53 巻 ８号 P591-595	
5) オピオイド治療と内分泌機能異常	共著	平成 28 年 11 月	Locomotive Pain Frontier vol.5 No.2 P44-46	
6) “Katakori”：a Pain Syndrome Specific to the Japanese(日本に特異的な症状"肩こり")	共著	平成 28 年 12 月	Current Pain and Headache Reports 20(12)64-65	
7) さまざまな慢性痛患者の安静時 fMRI 研究	共著	平成 28 年 12 月	Pain Research; vol.31 No.4 P189-196	
8) 痛みは脳をどう変えるか？ -Neuroimaging からみえてきたもの	共著	平成 29 年３月	週刊 医学のあゆみ 別刷 vol.260 No.2 P155-160	
9) 運動器慢性疼痛に対する認知行動療法理論に基づいた運動促進法	共著	平成 30 年	The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine 55(3): 206-214	
10) 慢性疼痛のリハビリテーション(第１回) 慢性疼痛の病態と機序	単著	令和３年４月	Journal of Clinical Rehabilitation(0918-5259)31 巻４号 Page347-351(2022.04)	
11) 医学的に原因が見当たらない痛みで受診した患者の治療方針について 痛みの原因を探るのではなく、痛みを主訴に受診したのはなぜかを考える (Q&A)	単著	令和４年	日本医事新報(0385-9215)5129 号 Page53(2022.08)	

（注）

1　この書類は，学長（高等専門学校にあっては校長）及び基幹教員（大学院にあっては専任教員）について作成すること。

2　医科大学又は医学若しくは歯学に関する学部若しくは学部の学科の設置の認可を受けようとする場合，附属病院の長についてもこの書類を作成すること。

3　「研究業績等に関する事項」には，書類の作成時において未発表のものを記入しないこと。

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　6年　3月　31日

氏名　辻下守弘

研究分野	研究内容のキーワード
外科系臨床医学	理学療法学、リハビリテーション学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1）奈良学園大学社会連携センター・センター長としての活動	平成26年4月～平成30年3月	奈良学園大学社会連携センター長として、大学と地域社会との連携をスムーズにするためのコーディネーターとしての役割を果たした。具体的には、大学が立地する市町村との連携事業である公開講座の企画運営、大学シーズと地域ニーズとのマッチング、産官学連携による共同研究の推進と実施などに関して実施責任者としての活動を行った。
2）奈良学園大学評議員としての活動	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学評議員として、大学に関する重要事項の審議に加わることで大学運営に関与した。
3）奈良学園大学保健医療学部研究倫理委員会・委員長としての活動	平成30年4月～現在に至る	保健医療学部研究倫理審査委員会は、教員の臨床研究および疫学研究に関して、被験者に対する人間の尊厳、人権の尊重その他の倫理的観点及び科学的観点を調査審議することを目的に設置されている。本委員会の委員長として、委員会の招集および審議の調整および議事録作成と学長への報告書作成など中心的な役割を果たした。これまで審査した申請件数は平成30年度で11件、令和元年度で34件、令和2年度で20件、令和3年度で22件であり、研究倫理審査委員長として審査した件数は合計87件である。
4）奈良学園大学大学院看護学研究科委員会・委員としての活動	平成30年4月～令和5年3月	奈良学園大学大学院看護学研究科設置に伴い、研究科の運営会議としての看護学研究科委員会の委員となって、毎月1回開催される定例の委員会に出席し、以下の事項について委員として審議を行った。①研究科の課程及び学生の教育に関する事項、②研究の指導及び論文の審査に関する事項、③単位認定、課程修了認定並びに学位授与に関する事項、④学生の厚生補導及びその身分に関する事項
5）奈良学園大学大学院看護学研究科研究倫理審査委員会・委員としての活動	平成30年4月～令和5年3月	奈良学園大学大学院看護学研究科設置に伴い、修士課程の1学年生に対する研究倫理審査委員会の委員として、毎年11月頃に開催される大学院研究倫理審査委員会で申請された研究計画書と申請者への質疑応答による審査を行った。これまで平成30年度に6件、令和元年度に3件、令和2年度に2件、令和3年度に5件の審査を担当した。
6）奈良学園大学大学院看護学研究科学位論文指導および修士論文審査の実績	平成30年4月～令和5年3月	奈良学園大学大学院看護学研究科修士課程の在宅看護学分野指導教授として、研究指導と修士論文の審査に関与した。 これまで主指導教員として2名の学生に対して研究倫理審査申請書類の作成からはじまり、調査計画およびデータ処理と修士論文作成に関する指導を継続し、令和4年度末終了予定である。主指導教員としてかかわっている学生の研究課題は、「重度身体障害者が進路を決定する要因～重度身体障害者の意識調査から～」と「病院から在宅移行支援する効果的な連携のあり方」である。 これまで副査として修士論文審査を担当した研究課題は、以下のとおりである。 令和元年度は、「オストメイトの余暇活動に関す

事項	年月日	概　　要
		る促進要因と阻害要因の検討」と「在宅にて脳血管障がい者である妻を支える男性介護者が感じる介護負担感について―要因とその支援策の検討―」である。令和2年度は、「精神科病院入院患者にトラウマ・インフォームドケアに基づく看護面接を実施した看護師の内面に生じること」である。 これまで主査として修士論文審査を担当した研究課題は、以下のとおりである。 令和3年度は、「在宅看護を実施する際の訪問看護師が抱える不安」である。
7）奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科・学科長としての活動	令和元年4月 ～現在に至る	令和元年4月にリハビリテーション学科が奈良学園大学保健医療学部に開設され、開設に際して学科長に就任した。学科長は、リハビリテーション学科の運営と人事、および教学などの管理責任者であり、学科に所属する教員の代表としてリーダーシップを発揮している。また。大学の執行部として、企画運営会議や大学評議会にも所属し、大学運営にも関与している。
8）奈良学園大学大学院リハビリテーション学研究科・教授としての活動	令和元年4月 ～現在に至る	令和5年4月にリハビリテーション学研究科が奈良学園大学大学院に開設され、開設に際して教授に就任した。研究科では、研究倫理学特論、リハビリテーション研究学特論、高齢者リハビリテーション学特論などの基盤科目、生活支援リハビリテーション学特論、生活支援リハビリテーション学特論演習などの専門科目、リハビリテーション学特別研究を担当し、学生1名の研究指導を担当している。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1）専門理学療法士資格更新 （日本理学療法士協会）	平成29年4月1日	公益社団法人日本理学療法士協会から神経(2017S-02-000033）と運動器（2017S-03-000043）の2分野に対する専門理学療法士資格を更新認定を取得
2）公益社団法人日本理学療法士協会認定試験委員会委員としての活動	平成30年6月 ～現在に至る	公益社団法人日本理学療法士協会において、新人教育プログラム修了者を対象に、自らの専門性を高め、高い専門的臨床技能の維持、社会、職能面における理学療法の専門性（技術・スキル）を高めていくことを目的とした生涯学習制度の一つとして認定理学療法士がある。この認定試験の作問と実施、そして認定基準などを審議する委員会の委員として活動した。
（研究活動） 1）科学研究費補助金研究成果報告書 （基盤研究C）	平成24年度 ～平成26年度	研究科題名：「性差と加齢を考慮した労働者の睡眠の質改善のためのセルフケア・プログラムの開発」 研究代表者：廣川空美 共同研究者：藤井保人、谷口敏代、辻下守弘 研究成果の概要：本研究の目的は、労働者の睡眠の質における性差と加齢の影響を明確にし、性別と加齢に応じた睡眠の質改善のプログラムを開発することである。研究対象者は中規模事業場で働く35歳以上の男女であった。研究期間中の健康診断時期に調査を実施した。1年目の調査結果では、男性の睡眠の質には運動習慣、女性の睡眠の質には教育歴や喫煙状況が関連していた。2年目には、23項目の睡眠チェックリストを作成した。3年目には、睡眠の質改善のためのセルフケア・プログラムの効果評価を行った結果、介入群において3項目に改善が認められた。今後は産業保健スタッフが睡眠改善指導にどのように活用するかを検討する

事項	年月日	概　　要
		睡眠改善指導にどのように活用するかを検討する必要がある。
2）科学研究費補助金（基盤研究C）	平成26年度 ～平成28年度	研究課題名「乳がん患者の就労を支えるJob recovery pathの開発」、配分額4,550千円、研究代表者：新谷奈苗、研究分担者：岩永誠、佐藤禮子、河野啓子、守本とも子、辻下守弘 研究成果の概要：乳がん患者の標準治療プロセスを、確定診断、手術、化学療法、放射線療法、ホルモン療法と定義し、これをベースに「全体プロセス」「確定診断時」「確定診断後」「手術後」「化学療法中」「化学療法後」「放射線療法中」「ホルモン療法前」「仕事を休みたい時」「つらい時」というタイミングごとに課題を明確化した。その課題に対し、医療者、企業、社会がそれぞれ何を行うべきかという対応策を検討、提示し、Job recovery pathとしてまとめた。 なお対応策のなかには現時点で実現できていない内容も含まれており、そういった課題の解決を広く社会に対して働きかけ続けていくことも、重要であると考えられる。
3）科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究）	令和2年度 ～平成28年度	研究課題名「介護老人保健施設での介護職員指導に関する研究－行動分析学の枠組みによる介助指導－」、配分額2,860千円、研究代表者：小林和彦、共同研究者：辻下守弘 研究成果の概要：行動分析学の枠組みを用いたe-learningによる自己学習式移乗介助指導プログラムを高齢者介護施設介護職員を対象に施行し、事前、事後、およびフォローアップ評価を行うことで、その介入効果を検証した（介入群15名、統制群15名）。評価内容は、介助技術評価指標として「模擬患者への“身体接触率”」を用いた。 その結果、介入群の事後評価時における身体接触率の減少傾向、およびフォローアップ評価時における増加傾向が認められた。
4）科学研究費補助金（基盤研究C）	令和4年度 ～令和6年度	研究課題名「転倒恐怖感を持つ高齢者を対象とした仮想現実技術を導入した曝露療法の開発とその評価」、配分額4,160千円、研究代表者：辻下守弘、共同研究者：登尾啓史、大西克彦、小枝正直 研究成果の概要：高齢者の転倒は、要介護状態を促すだけでなく、転倒を恐れて日々の生活活動が低下し、閉じこもりやうつ傾向を招き、再転倒や虚弱化のリスクを高める。そこで、本研究の目的は、仮想現実（VR）技術を用いて高齢者の転倒恐怖感を軽減させるVR曝露療法を開発することである。本研究では、転倒経験のある高齢者を対象として、転倒恐怖を感じる生活場面のVRデータを構築し、それをVRゴーグルで高齢者に視聴してもらうことで、高齢者に転倒恐怖感が惹起させることを精神生理学的測定により確認する。さらに、その転倒恐怖VRを用いて、惹起された恐怖感を心拍変動バイオフィードバックにて緩和させるといった VR曝露療法の有効性を確認する
4　その他 12）京都市立芸術大学大学院美術研究科美術専攻博士（後期）課程の博士論文審査委員	平成27年12月 ～平成28年12月	京都市立美術大学大学院美術研究科美術専攻博士（後期）課程において、美術作品をリハビリテーション医療に活かす研究を博士論文の課題としている学生に対して、リハビリテーション医療に携わる研究者として博士論文の審査を行っている。平成28年2月には第1回の博士論文報告会があり、発表論文への試問を実施し、博士論文審査委員会において論文への評価と今後の課題について報告を行った。

事項	年月日	概　　要

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1 生活支援の基礎理論Ⅰ	共著	平成27年4月	光生館	本書は、地域での生活を支援する介護福祉士として必要な基礎知識を，保健，心理，栄養，居住環境，家族支援などの関連分野から体系的に学習できるように解説している。（196頁） （編者：上之園佳子、谷口敏代、鈴木聖子、　分担執筆者：本名靖、太田貞司、土室修、辻下守弘、他16名） 担当部分：第５章「介護福祉の基礎となる心理学」の中の「学習」を担当した。 学習の定義と介護福祉領域で必要となる重要事項を解説した上で、認知心理学的な考え方と行動分析学的な考え方に分けて各理論を具体例を入れながら解説した。 (pp.98～102、単著)
2 痛みのケア	共著	平成29年3月	ピラールプレス	本書は、看護現場で求められる痛みのケアについて、哲学・倫理学的理解と痛みの理論からはじまり、痛みの治療と看護ケアについて解説した上で、看護実践事例について検討されている。（編者：守本とも子 分担執筆者：池辺寧、沖本克子、梶村郁子、辻下守弘、他15名） 担当部分：第Ⅱ部「痛みの理論」第5章「痛みの行動科学的理解」を担当した。看護現場における痛みの生理医学的アプローチの問題点を指摘した上で、慢性的ないたみを行動科学的にアプローチすることの重要性について解説している。また、痛みの社会的強化により出現する痛み行動に対する理解と看護現場での具体的なケアの方法論について提案している。（pp.34～41、単著）
3 看護師国家試験 直前 社会福祉学領域 ファイナルチェック	共著	令和3年3月	金芳堂	本書は、看護職をめざす読者が社会福祉について学ぶためのテキストである。また同時に、すでに看護職として活躍されている方々にも現代における社会福祉についての理解を深め、看護実践における社会資源の活用に向けて、重要な示唆を与えるものとなっている。（編者：守本とも子、富永堯史、分担執筆者：井上昌子、井上葉子、小林由里、齋藤英夫、佐藤郁代、芝田ゆかり、高橋寿奈、田場真理、中馬成子、辻下守弘、他21名） 担当部分：第12章「ソーシャルワークの理解」を担当した。ソーシャルワークが発展した歴史を概説した上で、ソーシャルワークの基礎理論と概念モデルについて解説した。また、看護職に必要なソーシャルワークの実践過程の知識とチーム医療における位置づけについても記述した。（pp.162～175、単著）
4 ＶＲ／ＡＲ技術における感覚の提示、拡張技術と最新応用事例	共著	令和3年6月	技術情報協会	本書は、5G時代の到来で医療や教育など様々な分野など市場が拡大しているAR（拡張現実）やVR（人工現実）などの先端技術に関する最新の理論と応用事例、および科学的根拠となる研究の現状を各方面の専門家により紹介している。 （編者：技術情報協会 分担執筆者：繁桝博昭、半田知也、鳴海拓志、辻下守弘、他63名） 担当部分：第９章「医療分野への活用事例」第6節「バーチャル・リハビリテーションの最新動向とバイオフィードバック技術」を担当した。 本節では，コロナ禍の社会において注目されるようになった遠隔リハビリテーションと最先端技術であるバーチャル・リハビリテーション（VR)の最新動向を紹介するとともに，このVR技術とバイオフィードバック技術との融合についても、自身が行った研究結果などを含めて解説した。（pp.482～493、単著）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（学術論文） 1　運動器疾患を有する高齢者の生活機能に対する理学療法の取り組み　通所リハビリテーション利用者の心理・社会的側面に着目して	共著	平成26年4月	理学療法第31巻第4号 pp.376～382	1.運動器疾患を有する高齢者の生活機能の改善には、高齢者の身体活動の開始と継続に関する要因を理解する必要があり、心理・社会的要因が大きく関連している。2.どのような治療を選択するにしても、高齢者個々の心理・社会的要因を認識し、オーダーメイドの治療を実施することが必要である。3.高齢者の心理・社会的要因を認識するための第一歩は、対象者とのコミュニケーションである。単なるコミュニケーション技法を用いるのではなく、対象者を支えている信念や認識に触れる関わり方がオーダーメイドの治療を実施できた。(7頁) (分担執筆者：大門恭平、米田大人、辻下守弘、川村博文) 担当部分：高齢者の運動機能に関する要因の分析と論文の一部執筆を担当した。
2　Central neural mechanisms of interindividual difference in discomfort during sensorimotor incongruence in healthy volunteers: an experimental study （健康対象者における感覚運動不一致による不快感が個人差に関する中枢神経メカニズムについて：実験的研究） （査読付）	共著	平成26年10月	Rheumatology 2014 Open Access	本研究の目的は、感覚運動認知の不一致に関する個人差に関して、その中枢神経メカニズムを明らかにすることである。対象は、18名の健常若年女性であり、感覚運動認知の不一致課題を独自に作成し、その認知課題中における脳波を分析し、脳内メカニズムをLORETA法によって解析した。その結果、不一致の個人差は前部帯状回および後部帯状回の活動状況の違いと一致していることがわかった。　(8頁) (分担執筆者：分担執筆者：西上智彦、中野英樹、大住道弘、辻下守弘、壬生彰、牛田孝博) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果部分を担当した。
3　バイオフィードバックの発展に向けての提言　日本バイオフィードバック学会企画委員会からのアンケート結果報告	共著	平成26年10月	バイオフィードバック研究 第41巻第2号 pp.95～102	2012年の第40回学術総合においてアンケート調査を実施した。学術総会に参加した25人の学会員から回答を得た。その結果、1.医学・工学・心理学の研究面の連携に関して学会の存在意義を認める回答が多かった。2.学会に望むことについては、次世代を担う若い研究者・学生が積極的に参加できる環境づくりを指摘する意見が目立った。3.会員以外には、バイオフィードバックについて正しく分かりやすく理解してもらう情報提供の必要性を訴える意見が多かった。以上の結果に基づいて今後学会の方向性に関する提案を行った。(8頁) (分担執筆者：中尾睦宏、大須賀美恵子、廣田昭久、佐久間春夫、志和資朗、竹林直紀、辻下守弘) 担当部分：アンケート調査の作成からデータ整理と統計分析および考察の一部の執筆を担当した。
4　高齢者に対する視覚誘導性到達課題を用いた音楽運動療法の開発とその効果に関する研究 （査読付）	共著	平成27年3月	医療福祉情報行動科学研究 第3号 pp.27～32	本研究では、視覚誘導性到達運動課題を用いた音楽運動療法を開発することとこれが高齢者のバランス能力に及ぼす影響を明らかにすることであった。対象は70歳以上の健常高齢者16名であり、実施群8名と対照群8名の2群に割り付けた。評価は機能的バランス尺度（BBS)、TUG、FRTおよび静的重心動揺計と動的姿勢制御検査とした。5回の練習後、BBS、FRTそして動的姿勢制御検査の有意な改善を認めた。(6頁) (分担執筆者：辻下守弘、川村博文、永田昌美、前田吉樹) 担当部分：研究全般を実施し論文全体の執筆を担当した。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5　Kinectセンサーを使った仮想環境が高齢者の運動機能に及ぼす影響について （査読付）	共著	平成27年4月	バイオフィードバック研究 第42巻第1号 pp.57～62	Microsoft社により開発されたKinectセンサーを使った風船割りゲーム「キネリハシステム」を使って高齢者にゲームを定期的に行ってもらい、仮想環境が高齢者の運動機能にどのように影響を及ぼすかを検討した。デイケアに週2回以上通う高齢者23名に対しキネリハシステムを週2回以上4週間実施した。この前後に(1)10m歩行(2)TUG(3)5StepTestを測定し4週間完遂した者について結果を比較した。その結果、継続してゲームを行い施行期間の最後まで継続してやり遂げ(1)～(3)を測定できた者は7名だった。ゲーム後の結果が(2)と(3)において有意に向上していた($p<0.05$)。(6頁) (分担執筆者：小貫睦巳、有田元英、井上悦治、辻下守弘) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果と考察の一部の執筆を担当した。
6　介助者による介助の経時的変化に基づいた介助評価方法の検討－認知症を有する高齢障害7 者への介護職員による移乗介助場面の行動論的分析－ （査読付）	共著	平成27年12月	理学療法科学第30巻第6号 pp.933-937	車椅子からベッドへの移乗課題を用い、介助を基準に被介助者の遂行レベルを査定する評価法の妥当性を行動論の視点から検討した。対象は施設介護職員および入所中の認知症を有する高齢障害者とした。介助者の4段階の介助系列をもとに6段階の遂行レベルを設定し、各単位行動が遂行されたときの介助を遂行機会ごとに図示し、介助の経時的変化を被介助者の遂行レベルの推移の視点から分析した。その結果、被介助者による遂行過程は単位行動ごとに異なった遂行レベルを推移しており，従来ADL評価法とは視点の異なる情報が得られた。 (分担執筆者：小林和彦、辻下守弘) 担当部分：症例の評価と介入指導および論文の結果と考察の一部の執筆を担当した。
7　生体センシング技術を使った仮想現実によるゲームが高齢者の運動機能に及ぼす影響について （査読付）	共著	平成27年12月	理学療法科学第30巻第6号 pp.811-815	生体センシング技術を使ったゲームを高齢者に行わせ仮想現実を利用したゲームが高齢者の運動機能にどう影響を及ぼすかを予備的調査した。高齢者23名に対しゲームシステムを週2回以上4週間実施した。4週間実施前後の①10m歩行②TUG③5StepTestの3つのパフォーマンステストの結果及びゲームの測定機能を利用したゲームに対する平均反応速度とゲームの成功率について比較した。その結果、②と③及び平均反応速度・成功率に於いて施行後が施行前に比べ有意に向上していた。またゲーム完遂者に運動習慣があるものが有意に多かった。 (分担執筆者：小貫睦巳、有田元英、井上悦治、辻下守弘) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果の一部の執筆を担当した。
8　こりと腰痛の重複症状の実態とその関連要因に関する研究 （査読付）	共著	平成28年3月	甲南女子大学研究紀要（看護学・リハビリテーション学編）第10号 pp.1-10	本研究では、中年女性従業員335名を対象として、肩こりと腰痛の重複症状が出現する実態を明らかにするとともに、その身体的、心理的、社会的な要因との関連性について検討した。症状なし群、肩こり単独群、腰痛単独群、そして両者重複群という4群間において各要因を比較したところ、年齢、運動態度、食行動、K6、そしてクッパーマン指数であった。多重ロジスティック回帰分析の結果、肩こりと腰痛の両者重複と関連する要因は、低いBMI、高いK6スコア、高いクッパーマン指数であった。 (分担執筆者：辻下 守弘、永田 昌美、芝 寿実子、前田 吉樹、川村 博文、小貫 睦巳) 担当部分：データ収集から統計処理および論文執筆を担当した。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
9　心身のストレスおよび作業量からみた体圧移動で座面が変化するERチェアの評価　健常成人女性および高齢者を対象としたプレテストの結果から （査読付）	共著	平成28年3月	甲南女子大学研究紀要（看護学・リハビリテーション学編）第10号 pp.19-28	本研究は、高齢者用に開発したERチェアと通常の椅子を比較し、対象者の心身のストレスにどのような影響をもたらすかを検証することとした。被験者は、参加条件を満たした健常成人女性6名と高齢者8名の計14名である。研究デザインはクロスオーバー・デザインとし、被験者にはERチェアと通常の椅子の2種類の椅子に座った際に５つの課題を課した。分析の結果、主観的疲労感の全身倦怠感において、被験者全体の操作実施前後の平均値はERチェアが減少したが、通常の椅子は増加し、平均値の差の比較で統計的に有意な差が認められた(p=.04)。また、唾液アミラーゼ量において、高齢者の操作実施前後の平均値はERチェアがやや減少し、通常の椅子が増加して統計的に有意な差が認められたが(p=.04)、交互作用が認められた。 (分担執筆者：丸尾 智実、兼田 美代、臼井 キミカ、辻下 守弘、速水 裕子) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果の執筆を担当した。
10　骨盤臓器脱術後の便失禁症状に骨盤底筋の筋電図バイオフィードバック療法が奏効した症例 （査読付）	共著	平成28年4月	バイオフィードバック研究 第43巻第1号 pp.19-26	今回、骨盤底筋の選択的筋収縮が困難であった便失禁を有する症例に対して、骨盤底筋の筋放電を確認しながら筋収縮を確認し、筋収縮を調整する筋電図バイオフィードバック療法が症状の改善に有効であったので報告した。症例は、膀胱瘤により骨盤臓器脱術を受けた70歳の女性である。骨盤臓器脱の症状は手術により改善したが、運動時にガス程度の便失禁が4～5回以上認められた。評価および介入は、Thought Technology社製のMyotrac3を用い、骨盤底筋と腹筋を分離して筋収縮させることを目的として実施した。10セッション実施の結果、持続的収縮においては8セッションから骨盤底筋のみを収縮させることが可能となった。運動時の失禁頻度は6セッション時から減少した。 (分担執筆者：松谷 綾子、青田 絵里、西上 智彦、辻下 守弘、服部 耕治、木村 俊夫) 担当部分：症例の評価と治療および論文の症例報告と考察の一部の執筆を担当した。
11　行動分析学の枠組みを用いたコンピューターシミュレーション教材による介護老人保健施設介護職員への介助指導 － 高齢障害者に対するベッドから車椅子への移乗介助指導効果の検討 － （査読付）	共著	平成28年8月	行動療法研究第42巻第2号 pp.201-213	本研究においては、行動分析学の視点から理論および介助の方法論を解説したパソコン上で作動する教材を開発し、介護職員3名に自己学習とセルフチェックを行ってもらい、介護老人保健施設入所者に対するベッドから車椅子への移乗介助技能への効果を、単一事例実験計画法を用いて検証した。その結果、3名とも適切な介助の頻度が増加(平均46.2%)し、彼らが日頃介助している入所者も、より少ない介助で移乗が行えるようになった。また、指導プログラムの内容や意義に関しても比較的良好な受け入れや評価が得られた。以上から、従来の指導方法によるデメリットを補完する役割を果たすことができ、本教材が介護職員指導における効果的な方法論として位置づけられる可能性が示唆された。 (分担執筆者：小林和彦、辻下守弘) 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
12　疼痛に対する物理療法・運動療法	共著	平成28年8月	The Japan Journal of Rehabilitation Medicine 第53巻第8号 pp.604-609	本論文では、疼痛に対する治療としての物理療法、運動療法について、有効性に関わる理論的な裏付けから臨床のエビデンスを交えて検討した。その結果、急性痛と慢性痛とでは、対応が異なり、急性痛には過度な不活動を避け、原因となる組織損傷の治療を下級的早期に進めることと、可能な限り疼痛を抑制し長期化を阻止することが重要であることが分かった。また、慢性痛では、感覚面に着目する以外に、情動面や認知面などの多面的、複合的な側面での特性の認識理解が不可欠であり、ADLやQOL向上を目的として、TENSなどの物理療法、運動療法、学際的集学的治療を導入することが重要であることがわかった。 (分担執筆者：川村博文、西上智彦、伊藤健一、大矢暢久、辻下守弘) 担当部分：文献収集と整理および論文の慢性疼痛に関する部分の執筆を担当した。
13　インタラクティブ・メトロノーム法の紹介とリハビリテーションへの応用可能性	単著	平成28年9月	奈良学園大学紀要第5集 pp.1-9	本論文では、運動・認知機能のリハビリテーションに欠けていた脳内時計と時間情報処理能力を高めるというコンセプトを導入した新しいトレーニング方法であるインタラクティブ・メトロノーム法（Interactive Metronome®：以下IMと略す）について、その歴史、原理と方法、トレーニングの手順、そして科学的根拠を概説した上で、リハビリテーションへの応用可能性について解説した。IMの利点は、リズム音に手と足の動きを同調させてタイミングをとるといった非常にシンプルなトレーニングであり、2歳程度の幼児から高齢者まで適用範囲が広く、生体への侵襲も全くないため、従来のリハビリテーションへ併用して使用可能なことである ただし、現在の問題点は、科学的根拠を裏付けるIMの臨床研究が国際的にも不足していることやIMシステムが日本における医療機器の薬事承認を得てないことであった。
14 バーチャルリアリティ（VR）技術を用いた高齢者のリハビリテーションに関する文献的研究	単著	平成29年9月	奈良学園大学紀要第7集 pp.75-81	コンピュータサイエンスの発展によってバーチャルリアリティ（VirtualReality：VR）技術が身近になった。一方で、わが国は急速なスピードで超高齢社会が進行し、要介護状態の高齢者が急増する中で、高齢者のリハビリテ-ションが注目されている。そこで、本論文では、VRの定義と特徴を解説した上で、主にWiiとKinectセンサーを用いた高齢者リハビリテーションへの応用に関する国内外の現状と課題を文献的に考察した。その結果、WiiとKinectセンサーを用いたトレーニングが高齢者の心身機能に及ぼす影響を明らかにした良質の無作為化比較対照試験（RCT）は少ないものの、高齢者の機能的なバランス能力を改善させる効果のあることが多くの論文で示唆されていた。VRを用いた高齢者のリハビリテーションには課題もあるが、より没入感の強いヘッドマウントディスプレイが普及することで、今後は高齢者リハビリテーションへの応用可能性が拡大すると考えられた。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
15 タイ王国の周産期看護ーチェンマイ大学看護学部の視察を通してー	共著	平成29年9月	奈良学園大学紀要第7集 pp.179-185	タイ北部にあるチェンマイ大学を視察し、タイにおける周産期看護の現状についての現状把握を行った。タイでは、仕事を持つ母親たちの多くが授乳のための環境が整っていないために母乳で育児を行うことは困難であり、母乳育児率の低下が問題視されていた。こういった社会的背景から、母乳育児の重要性についての啓発活動と環境を改善するための王室によるプロジェクトが発足し、企業の事業所内の授乳コーナー設置や無料での母乳輸送サービスの提供などが現在では行われていた。日本においても母乳育児の利点については知られてはいるが、タイ王国のようなサービスの整備までには至っていない状況なため、タイ王国の周産期看護の現状を把握することは、日本の周産期看護の質改善のための示唆を得ることにつながると考えられた。 （分担執筆者:田中和奈、守本とも子、辻下守弘） 担当部分：現地での調査および論文のインタビュー解析に関する部分の執筆を担当した。
16 リハビリテーション医療におけるバイオフィードバック―脳卒中片麻痺に対する応用可能性について	単著	平成29年9月	バイオフィードバック研究 第44巻第2号 pp.70-75	本研究の目的は、各種の生体情報を音や光などの人間にわかりやすい情報へ変換し、その情報に基づいて自己の状態を調整するバイオフィードバック（以下BF）に対するリハビリテーション医療（以下リハ医療）への応用可能性を検討することであった。リハ医療の特徴は、一般的な医療が手術や投薬など医療者に依存した受動的治療であるのに対して、残存機能の回復や健常機能への代償など患者自身による能動的治療が主体となることであり、患者の学習過程への介入が重要なアプローチとなる。本論文では、その効果的な介入方法としてのBFに関して、その治療メカニズムについて学習理論を用いた解説を行った。また、脳卒中片麻痺に対す表面筋電図BFについて、コンパクトなBF機器であるMyoTracの操作方法と治療手続きとその効果および臨床応用上の課題について論説した。最後に、EEG（脳波計）やHEG（近赤外線方式脳血流計）を用いたニューロフィードバックトレーニングが脳卒中だけでなく他の神経系障害および運動器障害へのリハビリテーションに応用されていく可能性を検証し、多様なモダリティを使ったBFがリハ医療に応用されていく必要性について論説した。
17 Comparison of the pain-relieving effects of transcutaneous electrical nerve stimulation applied at the same dermatome levels as the site of pain in the wrist joint （手関節部の疼痛に対する頸部と対側手関節および両者の同一皮膚分節知覚帯への経皮的膚電気刺激が疼痛軽減に及ぼす影響の比較） （査読付）	共著	平成29年11月	Journal of Physical Therapy Science Vol.29 No.11 pp.1996-1999	本研究の目的は、手関節部の疼痛に対する対側同一皮膚分節知覚帯への経皮的電気刺激(Transcutaneous Electrical Nerve Stimulation:以下TENS)が疼痛緩和にどのような影響を及ぼすかを検討することであった。対象は15名の健康な成人女性（21.9±0.3歳[21-22歳]）であった。実験手続きは、まず30秒間の安静後に左手関節背側部へ47℃で60秒間の温熱刺激にて疼痛を生じさせ、その後に頸部（N）と対側手関節部（CW）および両者（CWN）へのTENS（周波数:15Hz・波長:200μs）を実施した。その結果、TENSを行わない対照群を含んだ4条件の分散分析では視覚的アナログ尺度（VAS）の違いに有意な主効果を認めたが、N条件、CW条件、CWN条件間には有意差を認めなかった。 （分担執筆者：川村博文、西上智彦、山本綾子、辻下守弘、伊藤健一、大矢暢久、高木峰子） 担当部分：被験者への疼痛評価とTENSの実施および統計処理と論文の結果に関する部分の執筆を担当した。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
18　訪問リハビリテーションにおける在宅緩和ケアとしての理学療法の可能性―がん患者と非がん患者の事例を通して―（査読付）	共著	平成30年2月	医療福祉情報行動科学研究 vol.5 pp.3-9	本論文では、訪問リハビリテーションにおける在宅緩和ケアとしての理学療法の2実践を通して、有効な実践知を抽出し、その可能性について提示した。事例1の大腸がんを有する80歳代女性の実践からは、理学療法士の介入は限られているが、多職種間連携により運動療法と環境調整を継続することで、疼痛緩和の時間を多くし、生活全体を変化させることが可能であることを理解した。また、事例2の多系統萎縮症を有する60歳代女性の実践からは、疼痛などにより他者とのかかわりが減少したとしても、多職種間連携によって小さな効果を積み重ねていくことができれば、最後まで希望のある充実した時間を提供できることが明らかとなった。本研究では訪問リハビリテーションにおける多職種間連携による在宅緩和ケアの2実践を通して、がん患者と非がん患者に対する在宅緩和ケアとしての理学療法に対する可能性を広げたものと考えられた。 (分担執筆者：池田耕二、山本秀美、古家真優、中岡絵美、大島知子、竹内　章、辻下守弘、池田秀一) 担当部分：非がん患者である多系統萎縮症の事例に関する記述と多職種間連携に関する考察の執筆を担当した。
19 リハビリテーション医療におけるバイオフィードバックの応用	単著	平成30年4月	バイオフィードバック研究 第45巻第1号 pp.41-44	リハビリテーション医療におけるバイオフィードバックの応用として、主に表面筋電図バイオフィードバック（SEMGBF）と心拍変動バイオフィードバック（HRVBF）に関する臨床経験について解説した。SEMGBFについては、脳神経筋疾患における促通目的と弛緩目的での治療に使われることが多いため、その適用について目的別の説明を行った。実際の適用症例として、促通目的では交通外傷後の膝蓋大腿関節機能不全と便失禁の原因となる骨盤底筋機能不全に対する治療とその効果について紹介し、抑制目的では無意識な筋肉の過緊張状態（ディスポネーシス）を認める腰痛に対する治療とその効果について紹介した。また、HRVBFについては、心拍コヒーレンス法を用いた膠原病性間質性肺炎による呼吸不全患者の治療経験について紹介した。最後に、リハビリテーション医療におけるバイオフィードバック応用の利点と欠点について考察した上で、今後の応用可能性について論述した。
20 バーチャルリハビリテーションにおける次世代バイオフィードバックの可能性	単著	平成30年10月	バイオフィードバック研究 第45巻第2号 pp.73-78	リハビリテーションとは，脳卒中や交通事故により四肢に障害を抱えた患者をトレーニングし，家庭や職場へ復帰できるように支援することであるが，そのトレーニングは辛く苦しいものであることが大きな課題であった. 　バーチャル・リハビリテーションとは，一般的にVRと呼ばれているバーチャルリアリティ（仮想現実）技術とロボット技術を統合した次世代リハビリテーションの総称であるが，国際的には研究開発の歴史が長いものの日本ではまだ普及が遅れているのが現状である.バーチャル・リハビリテーションの利点は，病室やリハビリテーション室という限られた空間の中で，自由なVR場面を設定できることである.　本稿では，バイオフィードバックが応用されたバーチャル・リハビリテーションについて紹介し，その応用可能性について報告した.

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
21 失禁とバイオフィードバック	単著	令和2年4月	バイオフィードバック研究 第47巻第1号 pp.19-22	失禁（Incontinence）とは，排尿や排便が自分の意志でコントロール（禁制：Continence）できずに排出される状態のことをいう.本稿では，主に筋電図を用いた骨盤底筋に対するバイオフィードバックの方法とその効果について報告した。まず、失禁と骨盤底筋機能障害との関係について解剖生理学的に明らかにした上で、失禁に関して骨盤底筋機能が重要であることとそのケアについて解説した。また、骨盤底筋機能を効果的に高めるアプローチとして筋電図バイオフィードバック療法(EMGBF）について、その基本的原理と具体的なトレーニングの方法を解説するとともに、これまで行われた臨床研究を整理し、科学的なエビデンスについて言及した。最後に、日本においてEMGBFが欧米や中国に比較すると未だ標準的な治療として位置づけられてい現状および今後の課題と展望についても論述した。
22 作業療法を深める（42）VR（仮想現実）VR 技術を用いたリハビリテーションの現状と展望	単著	令和2年6月	作業療法ジャーナル 第54巻第6号 pp.562-569	最近ではコンピュータサイエンスの進歩により，VR（人口現実）技術が身近となり，意欲を高める多様なリハの可能性が高まり，欧米ではバーチャル・リハビリテーションと名づけられ，広く応用されつつある．また，脳卒中片麻痺の運動障害等に対してVRを導入した治療では，主に上肢機能と日常生活活動への効果に関する報告が多く，その効果は今のところ限定的ではあるが，作業療法への応用可能性は高いと考えられる. 本稿では，VR技術を用いたリハに関して，まずVRとは何かを定義したうえで，VRの鍵となる「臨場感」と「没入感」について解説し，リハにおけるVRの応用事例の紹介とリハビリテーション医療におけるVRの今後について展望した.
23 The Efficacy of Virtual Reality Exposure Therapy for Fear of Falling (FOF) in the Elderly ＜英文＞ 高齢者における転倒恐怖症に対するバーチャルリアリティ曝露療法の効果 （査読付）	共著	令和2年7月	Conference paper In International Conference on Human-Computer Interaction Springer, Cham. pp.178-187	転倒恐怖症は、過去1年間に転倒した人の平均50%に発生するため、高齢者によく見られる症状である。本研究の目的は、バーチャルリアリティ曝露療法を用いて、高齢者の転倒者における転倒恐怖症（FOF）を軽減する試みについて報告した。本研究では、以下の2つの実験を実施した。まず、バーチャルリアリティ技術を用いた曝露療法システムを開発し、被験者にそれを装着して視聴させ、被験者の心拍数や皮膚温などのバイタルデータを収集し、バーチャルリアリティを用いた曝露療法の有効性を検証した。本研究では、以前に転倒したことのある高齢者を対象として予備実験を行い、バーチャルリアリティ曝露療法による転倒恐怖症の軽減効果を確認した。 (分担執筆者：辻下守弘、登尾啓史、升谷保博、小枝正直、大西克彦) 担当部分：バーチャルリアリティ曝露療法の開発から臨床試験およびデータ解析と論文作成の全体を担当した。
24　本学保健医療学部リハビリテーション学科志望経緯に関する調査	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要第13集 pp.151-157	本学リハビリテーション学科の広報活動に資する基礎資料とするため、2020年度新入生の志望経緯および本学に対する印象等についてアンケート調査を行った。その結果、理学療法・作業療法いずれの専攻についても、多くの学生は当初の志望を中途変更することはなかった。作業療法学専攻については、特徴的な技術に魅力を感じたことが契機となっていた。入学前の本学選択においては設備、環境面を魅力と感じていた。 (分担執筆者：飯塚 照史，辻下 守弘，池田 耕二，城野 靖朋，中島 大貴) 担当部分：アンケート調査の実施と調査結果のデータ整理と統計処理を担当した。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
25 特集：コロナ禍におけるバイオフィードバック.リハビリテーション領域における現状	単著	令和3年4月	バイオフィードバック研究 第48巻第1号 pp.17-23	COVID-19の世界的な感染拡大は，リハビリテーション領域においても重大な問題となった．そもそもリハビリテーション領域の理学療法や作業療法は，徒手的治療あるいは日常生活動作指導において，セラピストと患者との濃厚接触が基本となる治療的介入であり，それを否定する接触感染対策は受け入れがたいのが現状である．コロナ禍におけるリハビリテーションの課題は，濃厚接触業務，3密回避困難，そして社会活動制限の3点である．これらの課題に対するBFの応用として，筋電図BFと心拍変動BFを紹介した．今後は，国内においても接触感染対策としての遠隔リハビリテーションが大きく注目され，BFの応用可能性はますます高くなると考えられることについて論述した．
26 創傷被覆材における近赤外線透過率の検証 （査読付）	共著	令和3年4月	医療福祉情報行動科学会雑誌 第8巻 pp.11-18	本研究では、創傷被覆材であるフィルムドレッシング（FD）材，ハイドロコロイドドレッシング（HC）材，ハイドロファイバー（PF）材，ポリウレタンフォーム（HP）材のドレッシング材を準備し，滲出液を含まない状態（乾燥している状態）と滲出液を含んだと仮定した状態（生理食塩水を吸収させた状態）の近赤外線透過率を確認した。 その結果、FD材については約95％の透過率があったため，FD材のみであれば十分な近赤外線が創部へ到達すると考えられる。しかし，HC材，PF材，HP材は13～96％と透過率に差があったため，使用ドレッシング材の透過率を計算した上での照射強度の設定が必要であることが示唆された。また，HC材については，水分を吸収することで透過率が減少し，PF材については水分を吸収することで透過率が増加していた。 (分担執筆者：吉川義之、城野靖朋、滝本幸治、植村弥希子、辻下守弘) 担当部分：近赤外線透過率の計測とデータ解析を担当した。
27 A Discussion of Social Support for Dementia Elderly People and Family Carers ＜英文＞ 認知症高齢者と家族介護者におけるソーシャルサポートの考察 （査読付）	共著	令和3年4月	医療福祉情報行動科学会雑誌 第8巻 pp.67-75	本研究では認知症高齢者と家族介護者が在宅での介護の継続を可能とし、QOLの高い生活が送ることができることを目的として、生活実態とソーシャルサポートに視点をあてた支援方法について検討した。対象者は兵庫県・奈良県・三重県・愛知県在住の認知症高齢者の主たる介護者であり、アンケート調査の有効回答は、138人(配布数200部、回収率69％)であった。また、面接調査30人であった。 本研究では約4割の介護者が認知症高齢者の緊急時への対応に不安を持っていることから、地域における医療的環境の改善が必要であると考えられた。また、ソーシャルサポートを大別して「情緒的サポート」「手段的サポート」「情報的サポート」に分類して考察した結果、情緒的サポートでは、家族が重要な意味を持っていて、福祉や医療従事者はほとんど関与していなかった。認知症という疾患を抱えた認知症高齢者と家族介護者の情緒的なサポートとしては、相談したり、往診したりしてくれる医師と緊急時に入院させてくれる病院の存在が不可欠であることが示唆された。 (分担執筆者：守本とも子、田場真理、新谷奈苗、辻下守弘) 担当部分：アンケート調査の実施とデータ集計および解析と論文の結果および英文作成を担当した。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
28 An Analysis of Related Factors of Subjective Health and Life Satisfaction among Caregivers of Dementia Elderly People ＜英文＞認知症高齢者の介護者における主観的健康感、生活満足度の関連要因の分析（査読付）	共著	令和3年4月	医療福祉情報行動科学会雑誌 第8巻 pp.77-83	本研究では認知症高齢者の介護者が在宅での介護の継続を可能とし、QOLの高い生活が送ることができることを目的として、認知症高齢者の介護者における主観的健康感、生活満足度に関連する要因に視点をあてた支援方法について検討した。対象者は兵庫県・奈良県・三重県・愛知県在住の認知症高齢者の主たる介護者であり、アンケート調査の有効回答は、138人(配布数200部、回収率69%)であった。また、面接調査30人であった。 調査の結果、主観的健康感と生活満足度に高い相関が認められた。その結果は主観的健康感を高めることが生活満足度を高める要因であることを示唆するものであった。また、生活満足度は、認知高齢者と介護者の生活の質に大きく関与する要因である。認知症高齢者と介護者は、今後ますます高齢化が進み、健康障害をきたしやすいことが考えられる。認知症高齢者と介護者の生活の質を維持、向上させるためには双方の健康管理が重要であることが示唆された。 (分担執筆者：守本とも子、田場真理、新谷奈苗、辻下守弘) 担当部分：アンケート調査の実施とデータ集計および解析と論文の結果および英文作成を担当した。
29 2021年度リハビリテーション学科新入生における志望経緯に関する調査	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要第14集 pp.1-6	学部設置3年目を迎えたリハビリテーション学科においては、定員充足率増加に伴い新入生の進学経緯も多様になっているものと考えられる。そこで、3期生においてアンケート調査を実施し、2期生との比較を通じてその傾向について比較検討した。結果、当初における職業選択は変更されることなく、近しい人物への相談を伴ったオープンキャンパスへの参加、加えて本学近隣環境等への好感を以て進学を決定している経緯があり、2期生との大きな変化はなかった。一方、プレゼンスの高まり、教員対応への肯定的意見と捉えられる側面もあり、本学魅力の一端として認識する必要性が示唆された。以上の結果は、今後の広報戦略に資するものであると考えられた。 (分担執筆者：飯塚 照史，辻下 守弘，池田 耕二，城野 靖朋，中島 大貴) 担当部分：アンケート調査の実施と調査結果のデータ整理と統計処理を担当した。
30 健常成人を対象にした手浴とストレッチプログラムの冷え症改善効果の自律神経機能評価（査読付）	共著	令和4年9月	看護理工学会誌第9巻 pp.253-265	健常成人の冷え症改善に対し皮膚表面温度と指尖容積脈波を用いてストレッチの有用性を検討した．健常成人31 名（平均年齢22.05±2.6歳）を上肢筋肉量の上位群と上肢筋肉量の下位群の2群に分けた。皮膚表面温度は，上位群と比較して有意に高値を示した．ストレッチは，下位群において，冷え症改善効果が示唆された． (分担執筆者：関谷まり、村松歩、辻下守弘水野（松本）由子) 担当部分：統計処理および論文の結果と考察の一部の執筆を担当した。
31 新しいバイオフィードバック技術がもたらす功罪	単著	令和4年4月	リハビリテーション医学第59巻第4号 pp.933-937	バイオフィードバック（BF）技術は、第4次産業革命におけるDXに恩恵を受けて大きく発展している．本稿では，これまでのBF技術の概要を紹介したうえで，DXによりもたらされる新しいBF技術の進化というメリットの側面とこのBF技術に対するデメリットの側面について解説した．BF技術には，必ず工学的手法による情報処理過程が含まれ，DXの恩恵を直接受けることができるという大きなメリットがある．一方，BF技術のデメリットには，測定の精度や判断基準の問題と良質な介入研究が乏しいことなどが考えられた．

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（その他） 1　膝蓋大腿関節機能不全に対する筋電図バイオフィードバック療法の一経験 （口頭発表）	共著	平成25年4月	第41回日本バイオフィードバック学会学術集会 （神奈川） バイオフィードバック研究第40巻第1号2013年 p.88	交通事故により膝蓋腱損傷を受傷し，再建術後に膝蓋大腿骨腎機能不全となった症例に対して筋電図バイオフィードバック療法（以下BF と略す）を実施し、歩行障害の改善に著効を認めたので、その実施方法と経過について報告した。退院時には、不安定性や疹痛もなく、階段昇降やスクワット動作も問題なくスムーズに可能となっていた。 (共同研究者：辻下守弘、西上智彦、笹田朋香、山本昇吾、孫 康基、梶原沙央里、田辺暁人) 担当部分：症例の評価から治療および論文の執筆まで研究の全般を担当した。
2　高齢者に対するキネクトセンサーを用いたインタラクティブ・リハビリテーションの効果 （口頭発表）	共著	平成26年4月	第42回日本バイオフィードバック学会学術集会 （東京） バイオフィードバック研究第41巻第1号2014年 p.50	本研究の目的は、高齢者を 対象としてキネリハを用いた運動トレーニングを実施し、全身の機能的身体運動能力やバランス能力に及ぼす 影響および認知脳機能に対する効果について検討することであった。対象は、認知症や中枢神経系疾患のないことが確認された健常高齢者3名であった。キネリハの所要時間は休息も入れて約15分とし，週3回の頻度で2週間継続した。キネリハの結果3名ともにFRTはリーチ距離が改善し、TUGは所要時間が短縮していた。ファイブ・コグテストは手先の運動スピードと注意分割機能が3名とも向上していた。 (共同研究者：辻下守弘、川村博文、西上智彦、松谷綾子、井上悦治) 担当部分：症例の評価から治療および論文の執筆まで研究の全般を担当した。
3　認知症患者に対するインタラクティブ・メトロノームの症例報告 （口頭発表）	共著	平成27年3月	第1回認知症の早期発見、予防・治療研究会 （東京） 抄録集 p.14	本研究では、認知機能の改善を目的としたIMトレーニングが、高齢者の認知症に対しても同様の効果が期待できると考え応用を試みたので報告する。対象は、IMトレーニングを3ヶ月間継続できた認知症高齢者2名とし、認知症の評価には、改訂長谷川式簡易知能評価スケール（HDS-R）とIMの専用ソフトに内蔵されているミリ秒単位でタイミング誤差を測定する評価ツールを使用した。IMは、1セッション約20分とし、提示される1分間54のテンポに対して正確にタイミングを合わせて両手、左右片手といった3種類のリズム運動を週3回、3ヶ月間実施した。被験者2名は、IMに対する意欲が3か月間維持され、トレーニング開始時に比較して、タイミング誤差が大幅に短縮し、それに伴ってHDS-Rの改善も認められた。IMは、認知症の認知機能の改善にも効果が期待できる。
4　タイミング誤差のフィードバックトレーニングが時間認知に及ぼす影響 （口頭発表）	共著	平成27年4月	第43回日本バイオフィードバック学会学術集会 （つくば） バイオフィードバック研究第42巻第1号2015年 p.85-86	本研究では、注意欠陥多動性障害（ADHD）と認知症といった代表的な認知機能障害に対してタイミング誤差のフィードバックトレーニングを継続的に実施する機会を得た。対象は、ADHDの中学生1名とアルッハイマー型認知症の高齢者1名であった。トレーニングには、IMを用いた。その結果、ADHDではセッション中期以降でタイミング誤差が小さくなり、認知症ではセッション中期で急激にタイミング誤差が小さくなっていた。 (共同研究者：辻下守弘、西上智彦、松谷綾子、青田絵里) 担当部分：症例の評価から治療および論文の執筆まで研究の全般を担当した。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5　インタラクティブ・メトロノーム(IM)がアルツハイマー型認知症の認知機能に及ぼす効果について （口頭発表）	共著	令和2年4月	第47回日本バイオフィードバック学会学術集会（名古屋） バイオフィードバック研究第47巻第1号2020年p.29	インタラクティブ・メトロノーム（IM）は、基準となるリズム音に対して身体運動のタイミングを合わせる簡単なトレーニングであり、基準音と運動のタイミング誤差を聴覚的・視覚的にリアルタイムでフィードバックさせることが特徴である。本研究では、軽度から中等度のアルツハイマー型認知症高齢者6名を対象として、IMをトレーニングに取り入れその効果について検討した。対象者全員がIMのスコアとトレーニングを理解し実施することが可能であった。その結果、スコアと認知症評価とは関連性があり、IMによってスコアが改善傾向にあることが分かった。 (共同研究者：辻下聡馬、辻下守弘) 担当部分：IMトレーニングと効果検証および論文の執筆までを担当した。
6　若齢女性における冷え症の手浴効果における自律神経評価 （口頭発表）	共著	令和3年12月	第51回日本臨床神経生理学会学術大会（仙台市） 臨床神経生理学第49巻第5号p.443	指尖容積脈波を用いて、冷え症の女子大学生の手浴後の自律神経の変化を調べることを目的とした。安静時では冷え症は、非冷え症群と比べて脈波振幅の相対値は有意に低値を示した。1回目手浴後冷え症は非冷え症群と比べて脈波振幅の相対値は有意に高値を示し、2回目手浴後では冷え症は非冷え症群と比べて脈波振幅の相対値は有意に高値を示した。以上の結果から冷え症では、温浴刺激によって脈波振幅が低値となり血管収縮、拡張が繰り返し起こり、冷え症は温浴刺激を繰り返すと自律神経が変調することがわかった。 (共同研究者：関谷まり、辻下守弘、嶋田理博、山本祐輔、水野由子) 担当部分：指尖容積脈波の測定とデータ解析を担当した。

別記様式第４号（その２）

教　育　研　究　業　績　書

令和 6 年 3 月 31 日

氏名　　西川　隆

研究分野	研究内容のキーワード
内科系臨床医学，神経科学	精神神経科学，神経科学一般，神経心理学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）作業療法学専攻における精神医学の授業に参加型演習を導入	平成 23 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部作業療法学専攻学生 2 年次授業科目「精神障害論」（後に「精神医学Ⅱ」）において，毎回，前週に検討課題を与えてグループによる事前学習を行わせ，授業ではプレゼンテーション・討論・総括を行い，翌週までに総括のレポートを提出させるという今日のいわゆるアクティブ・ラーニングを実践し，課題検討能力の向上をはかった。
2）作業療法学専攻における高次脳機能障害学の授業に参加型演習を導入	平成 23 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部作業療法学専攻学生 3 年次授業科目「認知心理障害論Ⅱ」（後に「高次脳機能障害学Ⅱ」）において，毎回，前週に検討課題を与えてグループによる事前学習を行わせ，授業ではプレゼンテーション・討論・総括を行うという今日のいわゆるアクティブ・ラーニングを実践し，課題検討能力の向上をはかった。
3）大学院生に対する職域横断的学術活動の支援	平成 23 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科大学院生に対し，各自の研究テーマに応じて，作業療法士・言語聴覚士・理学療法士などの職域を超えた医学分野の学会（老年精神医学会，高次脳機能障害学会，統合失調症学会等）への加入を促し，学会報告・論文発表を指導して，職域横断的な学術活動の能力向上をはかった。 現在，医療専門職として就業している社会人大学院生が多いという事情を考慮し，週 1 回，大阪市中心部にあるサテライト教室で夜間に研究指導を行った。
2　作成した教科書，教材 精神医学マイテキスト	平成 23 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部における「精神医学」（後に「精神医学Ⅰ」）の講義に用い，理学療法学専攻および作業療法学専攻の学生に，精神医学の諸理念と歴史，症候学，精神疾患の各論的知識を習得するために活用した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 大学設置・学校法人審議会の教員組織審査	平成 18 年 7 月	公立大学法人大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科臨床支援領域修士課程（職名：教授，講義科目：高次脳機能障害学特論　M可，研究指導：臨床支援特別演習　M○合，特別研究　M○合）の資格ありと判定
大学設置・学校法人審議会の教員組織審査	平成 20 年 8 月	公立大学法人大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科博士後期課程（職名：教授，講義科目：高次脳機能障害学特別講義　D可，研究指導：臨床支援特別演習Ⅱ　D○合，臨床支援特別演習Ⅲ　D○合，特別研究Ⅱ　D○合，特別研究Ⅲ　D○合）の資格ありと判定
4　実務の経験を有する者についての特記事		

5　その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許 1）医師免許 2）博士（医学） 3）日本精神神経学会精神科専門医 4）老年精神医学会専門医	 昭和 54 年 5 月 平成 13 年 11 月 平成 18 年 4 月 平成 16 年 6 月	 医師免許（第 244771 号） 大阪大学 16585 会員番号 04466 第 001676 号
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事		
4　その他		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1 症例で学ぶ高次脳機能障害-病巣部位からのアプローチ-	共著	平成 26 年 9 月	中外医学社	高次脳機能障害に関する種々の実例をもとに，各症候の病巣部位と病態を解説した書 B5 版 全 274 頁 編者：鈴木匡子 本人担当部分「脳梁前部」の項（236-245） 脳梁前部症候群を呈した症例を提示しその病態と診断上の留意点および脳梁の機能解剖学的知識を解説した。
2 注意と意欲の神経機構	共著	平成 26 年 10 月	新興医学出版社	従来の認知科学では捉え難かった人間の注意と意欲の神経基盤とメカニズムについて種々の病態を通じて検討した書 A5 版 全 280 頁 編者：日本高次脳機能障害学会教育・研修委員会 本人担当部分「消去現象の病態と注意機構」の項(97－118) 消去現象とは一側刺激では感知可能な刺激が両側刺激ではその一方を感知し得ないという現象である。その病態に関する研究の知見を総括し解説した。
3 精神・心理機能評価ハンドブック	共著	平成 27 年 6 月	中山書店	精神疾患や神経疾患でみられる精神・心理的障害および症状の評価尺度と検査法を解説した書 B5 版 全 528 頁 編者：山内俊雄，鹿島晴雄 本人担当部分「重度認知症における認知機能検査」 重度認知症の認知機能を評価しうる検査として著者らが新たに開発した評価尺度を解説した。

4 情動とトラウマ	共著	平成29年4月	朝倉書店	心的トラウマが与える精神発達への影響と精神障害発生の病態機制および治療戦略を生物学的・心理学的・社会学的側面から多面的に解説した書 A5版 全230頁 編者：三村將　奥山眞紀子 本人担当部分「ストレス関連障害に対する他の精神療法」の項（216-223） ストレス関連性精神障害の精神療法のうち認知行動療法を除く他の精神療法について効果のエビデンスにもとづく推奨度を国際外傷性ストレス研究学会のガイドラインに沿って解説し，理論的背景を解説した。
5 女性のメンタルヘルス	共著	平成29年11月	南山堂	平成 26 年の女性活躍推進法の制定を受け，働く女性のメンタルヘルスの向上と不調の予防および治療について総合的に解説した書 B5版 全274頁 編者：丸山総一郎 本人担当部分「女性のメンタル不調の診察」の項（71-78） 女性がメンタルヘルスの不調を呈した際の診察手順とその際に考慮すべき女性特有の生活史背景と心理的要因について解説した。
6　高次脳機能障害ビジュアル大事典	共著	令和2年9月	メディカ出版	看護師・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士を対象に、豊富なイラストと症例提示を添えて各種の高次脳機能障害の症候の概念と効果的な対応法を開設した事典 B5版 全286頁 監修：大沢愛子 本人担当部分「聴覚失認」の項（168-170） 聴覚失認の概念と病態の特徴、効果的なケアのアプローチについて解説した。
（学術論文）				

1 ライフヒストリーカルテの作成　生活史を多職種で共有する意義 （査読付）	共著	平成26年7月	老年精神医学雑誌 25(7)801-808	医療・介護療養型病床および介護老人保健施設に入院・入所している患者のケアに資することを目的に対象者の生活史を多職種が短時間で把握できる共有ツールの作成を試みた。ケアスタッフへの意識調査により，記載すべき情報として，出身地，家族関係，　家族や友だち，遊び，仕事，結婚，人柄，印象に残っている姿，生活習慣，誇りなどが挙げられた。 本人担当部分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：田中寛之，山本祐子，小城遼太，永田優馬，日垣一男，西川隆，植松正保
2 非失語性失書を合併したタイピング障害の一例　― 失書との関連 ― （査読付）	共著	平成27年6月	高次脳機能研究 35(2)233-241	非失語性の失書を伴うタイピング障害例の病態を検討した。失書は運動覚性失書であり，タイピングの障害は打鍵位置の空間的誤りによるものであった。左中心前回，角回に病巣を有し，音韻選択や配列に関わる左中前頭回後部には及んでいなかった。タイピングは書字と神経基盤の一部を共有していることが示唆された。 本人担当部分：症例の診断，神経学的所見，画像所見，検査結果の分析と考察，論文執筆に関わった。 共著者：坂井麻里子，柏木敏宏，江口香織，西川 隆
3 Development of the Cognitive Test for Severe Dementia （重度認知症のための認知機能テストの開発） （査読付）	共著	平成27年6月	Dement Geriatr Cogn Disord 40(1-2): 94-106	中等度から重度の認知症患者に対して既存の認知機能検査は床効果を示し，特に重度認知症者に対しては残存する認知機能を測定することができない。著者らは認知機能7領域13項目からなる重度認知症患者向けの認知機能テスト(the Cognitive Test for Severe Dementia; CTSD) を開発し，信頼性と妥当性を検討した。CTSDは床効果を示さず，信頼性・妥当性も確認された。CTSDは他の認知機能検査と比較して重度認知症患者の残存する認知機能を鋭敏に測定することができる。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Tanaka H, Nagata Y, Uematsu M, Takebayashi T, Hanada K, Inokawa M, Fukuhara K, Ogawa Y, Haga D, Kakegawa Y, Nishikawa T

4 右前頭葉内側面損傷により漢字の純粋失書を呈した一例 (査読付)	共著	平成27年6月	神経心理学 31(3)204-212	右前頭葉内側面損傷により漢字の純粋失書を呈した 1 症例について失書の発現機序を検討した．漢字の誤り方の特徴として，無反応に次いで形態性の誤りが多かった．漢字の書字の成否は画数ではなく，構成要素数の多さと関係し，錯書の場合は構成要素が他の漢字の構成要素に置換されることが多く，そのほとんどが実在する構成要素を組み合わせていた．他の言語機能に問題がなかったことから，本例の漢字の失書は，音韻の配列や意味から文字形態を想起する過程は終盤近くまで保たれているが，最終段階における構成要素の選択と配置の誤りによって生じているものと考えられた． 本人担当部分：症例の診断，神経学的所見，画像所見，検査結果の分析と考察，論文執筆に関わった。 共著者：坂井麻里子，鈴木則夫，柏木敏宏，西川隆
5 Decline of gustatory sensitivity with the progression of Alzheimer’s disease (アルツハイマー病の進行とともに低下する味覚感度) (査読付)	共著	平成28年3月	International Psychogeriatrics 28(3)511-517	アルツハイマー病患者 32 名の甘味・塩味・酸味・苦味に関する味覚閾値をテーストディスクを用いて測定するとともに，味覚弁別，味覚同定能力を評価した。健常対照群と比較した。患者の味覚閾値は初期から低下し認知症の重症度とともに進行した。酸味・苦味は弁別はできるが同定は困難であったが，甘味だけは同定能力が保たれていたことから，アルツハイマー病患者にみられる甘味への強い嗜好性の基盤に基礎的な味覚障害が関与している可能性が示唆された。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Sakai M, Ikeda M, Kazui H, Shigenobu K, Nishikawa T
6 重度認知症に対する従来の QOL 尺度の限界 (査読付)	共著	平成28年4月	老年精神医学雑誌 27(4)：429-437	を対象に開発された QOL 尺度が用いられてきたが，近年，その QOL 概念の枠組みは異なると示唆されている。36 人の重度認知症者を対象に，自己評点式尺度と代理評点式尺度をそれぞれ2種類従来のQOL尺度を用いて，重度認知症者に対する適応性を検討した。適応性の検定の結果，4 尺度の内の 1 尺度内における 2 項目が適合基準を満たしただけであった。重度認知症者に対する従来の QOL 尺度の適応性には限界があると考えられた． 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：永田優馬，田中寛之，石丸大貴，植松正保，福原啓太，小川泰弘，内藤泰男，西川隆

7 右前頭葉の発話・書字への関与― 一過性の発話開始困難と持続的な漢字の純粋失書を呈した症例からの考察	共著	平成28年6月	高次脳機能研究 36(2)236-243	前補足運動野を含む右前頭葉内側面損傷により一過性の発話開始困難と持続性の漢字の失書を呈た症例を報告した。右前頭葉内側面損傷による失書は過去に報告されていない。本例の書字の成否は，漢字の画数や使用頻度に依存せず，構成要素（偏や旁など漢字を構成する要素的単位）の数が増すほど書字が困難であり，その誤りの特徴は構成要素の置換であった。右前頭葉内側面は漢字書字を実現する過程の終盤の段階で，構成要素の選択・配列に関与している可能性が示唆される。 本人担当部分：結果の考察，論文執筆を担当した 共著者：坂井麻里子，鈴木則夫，西川隆
8 線画に比べ実物や写真でより顕著な障害を認めた視覚失認の一例 (査読付)	共著	平成28年6月	高次脳機能研究 36(2)304-311	特異な視覚失認と大脳性色覚障害，失語症，前向性健忘を呈する症例を報告した。左側の舌状回・紡錘状回を含む後頭葉から側頭葉内側下部に病変を有し，一般的に視覚対象の認知は実物や写真より線画のほうが難しいと考えられているのに反して，症例では線画に比べ実物や写真の認知が不良であった。症例の視覚認知機能をさらに検討した結果，輪郭情報にもとづく対象の認知は比較的保たれていたが，陰影や奥行きの情報を統合し，立体感のある対象として認知することが困難であると考えられた。 本人担当部分：結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：竹田奈央子，渋谷静英，塚本能三，西川隆，柏木敏宏
9 脳血管障害によりフレゴリの錯覚と身体パラフレニアを合併した 2 症例 (査読付)	共著	平成28年6月	高次脳機能研究 36(2)312-319	脳血管障害による右半球病変に伴って身体パラフレニアとフレゴリの錯覚を合併した 2 症例を報告した。Feinberg らは，身体パラフレニアを，カプグラ症候群と同型の病態構造を有していると指摘しているが，身体パラフレニアとカプグラ症候群の合併の報告はみられない。一方，身体パラフレニアにフレゴリの錯覚の合併をうかがわせる記述は少数見出された。身体パラフレニアと人物誤認症候は右半球とりわけ前頭葉病変に共通した責任病巣があるものと考えられており，これまで注目されてこなかったが，フレゴリの錯覚と身体パラフレニアはより高率に合併している可能性がある。 本人担当分：画像所見，結果の考察，文献的検討，論文執筆を担当した。 共著者：掛川泰朗，磯野理，西川隆

10 家族からのビデオレターによる simulated Presence Therapy が言語的混乱行動を軽減させた認知症高齢者の一症例 （査読付）	共著	平成29年4月	作業療法 36(2): 223-229	家族からの語りをオーディオ・ビデオテープに録音・録画・再生する擬似的再現療法とはことで感情を刺激し，快適さをもたらす療法を認知症高齢者の一症例に実施した結果，介入前と比較して介入後に言語的混乱行動の回数に有意な軽減を認めたが，音楽刺激では効果がみられなかった。家族からのビデオレターによる擬似的再現は症例の欲求不満を軽減する作用があると考えられた。 本人担当分：結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：田中寛之，永田優馬，石丸大貴，小城遼太，西川隆
11 Impaired Interpretation of Others' Behavior is Associated with Difficulties in Recognizing Pragmatic Language in Patients with Schizophrenia （統合失調症において他者の行動の理解障害は語用論的言語理解障害と関連している） （査読付）	共著	平成 29 年 10 月	Journal of Psycholinguistic Research 46(5): 1309-1318	統合失調症患者 34 人と健常者 34 人に対して，心の理論課題，比喩皮肉文課題，社会常識テストを実施した，全ての課題において，患者群は健常群よりも有意に障害されていた。また患者群内において比喩理解能力と正常行動理解能力，皮肉理解能力と異常行動理解能力の間に有意な相関がみられた。統合失調症患者の社会的認知機能障害はこれら 2 つの語用論的要因を含んでいることが示唆された。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Fukuhara K, Ogawa Y, Tanaka H, Nagata Y, Nishida S, Haga D, Nishikawa T
12 Earlier and greater hand pre-shaping in the elderly: a study based on kinetic analysis of reaching movements to grasp objects （高齢者にみられる早期のより大きな手 pre-shaping:物体把握到達運の運動学的分析に基づく研究） （査読付）	共著	平成 29 年 11 月	Psychogeriatrics 17(6): 382-388	物体把握の準備動作として到達運動期間にみられる手の形態変化を Pre-shaping という。高齢者の巧緻動作の評価とともに，高齢者群と若年対象者群の Pre-shaping を運動解析装置を用いて比較したところ，Pre-shaping の最大切線速度出現時点と母指・示指間最大距離出現時点高齢者の方が若年者に比べてより早期に出現することが示された。この結果は高齢者においては巧緻動作能力の低下を代償する方策として Pre-shaping を変化させていることを示唆している。 本人担当部分：研究計画，結果の考察，論文執筆に関わった。 共著者：Tamaru Y, Naito Y, Nishikawa T

13 Gustatory dysfunction as an early symptom of semantic dementia (意味性認知症の初期症状としての味覚障害) (査読付)	共著	平成 29 年 11 月	Dement Geriatr Cogn Dis Extra 7(3): 395-405	意味性認知症(SD)患者 18 名とアルツハイマー病(AD)患者 18 名，健常対照者に対して，味覚閾値および味覚弁別・味覚同定の能力を測定し比較した。SD と AD ではともに早期より健常者に比べて味覚閾値が低下しており，その傾向は SD でより目立った。この研究は SD の味覚閾値を測定した初めての研究である。SD では AD と比較してより甘味への嗜好性の強いことが知られているが，その背景には基本的な味覚機能低下が関与していると考えられる。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Sakai M, Ikeda M, Kazui H, Shigenobu K,Komori K, Ikeda M, Nishikawa T
14 Development of the Japanese version of the Quality of Life in late-stage Dementia Scale (Quality of Life in late-stage Dementia Scale 日本版の作成) (査読付)	共著	平成 30 年 3 月	Psychogeriatrics 18(2): 106-112	重度認知症者の QOL 尺度は海外でも少数しか開発されておらず，日本ではまだ臨床に導入されていない。本研究は海外で開発され広く使用されている Quality of Life in late-stage Dementia Scale(QUALID)を原著者の許可を得て翻訳して日本版(QUALID-J)を作成し，その信頼性と妥当性を検討したものである。70 人の重度認知症者に評価を施行し，十分な信頼性・妥当性を有する検査であることが確認された。今後重度認知症患者の治療や介護の効果判定に役立つことが期待される。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Nagata Y, Tanaka H, Ishimaru D, Uematsu M, Naito Y, Nishikawa T
15 Clinical Utility of the Cognitive Test for Severe Dementia: Factor Analysis, Minimal Detectable Change, and Longitudinal Changes (Cognitive Test for Severe Dementia の臨床的有用性:因子分析，最小検出可能変化値，長期変化) (査読付)	共著	平成 30 年 6 月	Dement Geriatr Cogn Dis Extra 8(2): 214-225	著者らが開発した重度認知症患者向けの認知機能テスト CTSD (the Cognitive Test for Severe Dementia) の臨床的有用性を COSMIN checklist によって検討した。232 人の認知症患者における認知機能の変化を追跡し，そのデータにもとづいて 1)因子分析による構成妥当性，2)標準誤差と最小検出可能変化値による信頼性と解釈可能性，3)長期変化による反応性，を検討した。結果は CTSD が信頼しうる評価指標であることを示した。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Ogawa Y, Fukuhara K, Nishikawa T

16 Physical Activity in Severe Dementia is Associated with Agitation Rather than Cognitive Function （重度認知症の身体活動は認知機能でなく焦燥と関連している） （査読付）	共著	令和１年９月	Am J Alzheimers Dis Other Demen doi: 10.1177/1533317519871397.	重度認知症者における身体活動と認知機能・日常生活活動(ADL)・心理行動症状(BPSD)の関連を検討した。認知症患者 63 名の 1 日身体活動量をアクティウォッチで定量的に計測し，認知機能・日常生活活動・心理行動症状の各評価尺度の結果との関連を分析した。重度認知症者の身体活動は認知機能ではなく BPSD の焦燥と相関していた。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Ishimaru D, Tanaka H, Nagata Y, Nishikawa T
2017 （統合失調症における病識と防衛様式） （査読付）	共著	令和１年９月	J Nerv Ment Dis 207(10):815-819	統合失調症者における病識と防衛機制，認知機能の関連を検討した.38 名の統合失調症患者に SAI-J（病識尺度），DSQ(防衛様式)，BACS-J（神経認知機能），BPRS（精神症状)を施行した結果，認知機能と精神症状を統制した重回帰分析によって，病識は未熟な防衛機制に関連していることが示された。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Ogawa Y, Fukuhara K, Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Nishikawa T
18 Clinical factors associated with Activities of Daily Living and their decline in patients with severe and profound dementia （重度および最重度認知症患者の日常生活活動とその低下に関連する臨床要因） （査読付）	共著	令和２年３月	Psychogeriatrics 20(3):327-336	認知症患者の ADL に影響を及ぼす因子を検討した。131 人の患者に Personal Self-Maintenance Scale（PSMS）（ADL 尺度）と CTSD(認知機能尺度)，NPI-NH と CSDD(PPSD 尺度)，MNA-FS（栄養状態)，CCI（合併疾患）等による評価の 6 か月間の変化を測定し，重回帰分析を行った結果，最重度の段階の認知症においても ADL 機能の低下を最もよく予測する因子は認知機能であることが示された。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Ogawa Y, Fukuhara K, Nishikawa T
19 認知症における engagement 評価尺度；日本語版 Menorah Park Engagement Scale の臨床的有用性の検討 （査読付）	共著	令和２年３月	老年精神医学雑誌 31(3):304-310	engagement とは活動に取り組む主体の態度のことであり，認知症者のリハビリテーションにおいては重要な要因と考えられるが，本邦ではいまだこれに関する評価尺度は導入されていない。海外で使用されている Menorah Park Engagement Scale を原著者の許可を得て日本語に翻訳し，その信頼性と妥当性を検討した。日本語版 Menorah Park Engagement Scale は認知症者の engagement を評価する上で有用性な尺である。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：石丸大貴，田中寛之，永田優馬，西川隆

20 Effect of Alzheimer's disease severity on upper limb function (上肢機能に対するアルツハイマー病重症度の影響) (査読付)	共著	令和２年８月	Psychogeriatrics. 20(5):802-804	著者らは物体把握の準備動作であるPre-shapingの最大切線速度出現時点と母指・示指間最大距離出現時点が加齢とともにより早く出現するようになることを既に報告した。今回の研究では，重症度の異なるアルツハイマー型認知症者（AD）の左右上肢による物体到達・把握動作を運動解析し，ADの初期の段階で利き手の到達運動が解体されるが非利き手には見られず，また把握動作には変化がみられないことを明らかにした。この知見はAD患者の動作障害を検討するうえで有用である。 本人担当部分：結果の考察，論文執筆に関わった。 共著者：Tamaru Y, Tanaka H, Ueda M, Sumino Y, Imaoka M, Matsugi A, Nishikawa T, Ishii R, Naito Y
21 Incidence and lesions causative of delusional misidentification syndrome after stroke. (脳卒中後の妄想性誤認症候群の発生頻度と原因病巣) (査読付)	共著	令和２年９月	Brain and Behavior 10(11): e01829.	脳卒中で入院した874人の患者における妄想性誤認症候群(DMS)の発生頻度と合併症，共通病巣を調査した。10例のDMSが見出されたが全てFregoli症候群であり，Capgras症候群を含め他のDMSはみられなかった。病変は全例が右半球病変を有し，全例左半側空間無視(USN)を呈していた。DMSを呈しないUSNの24例を対照群とするvoxel-based lesion-symptom mappingを用いた病巣解析の結果，鈎状束を含む病変がFregoli症候群に特異的に関連していることが示された。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Kakegawa Y, Isono O, Hanada K, Nishikawa T
22 青年期脳性麻痺児・者のための自己回答式QOL尺度-Cerebral Palsy Quality of Life Questionnaire for Adolescents（CPQOL-Teen）日本語版の作成と有用性の検討-.	共著	令和３年１月	脳と発達 53(1):10-14	青年期脳性麻痺児・者の主観的QOL評価尺度CPQOL-Teenを著者の許可を得て和訳した日本語版を脳性麻痺児・者57名（CP群）と定型発達児・者58名（TD群）に実施し，評価尺度としての有用性を検討した.日本語版CPQOL-Teen自己回答版は,十分な検査-再検査信頼性と内的整合性,J-KIDSCREEN-27を外的基準とした妥当性を示した.CPQOL-Teenの5領域のうち『機能についての満足度』は，CPの特性を反映する可能性が示された. 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：加藤雅子，荒井洋，小松光友，ラトン桃子，立山清美，西川隆

23 Impact of disturbed rest-activity rhythms on activities of daily living in moderate and severe dementia patients.（中等度から重度認知症者の日常生活活動に与える休息・活動リズムの影響）（査読付）	共著	令和３年４月	Alzheimer Disease and Associated Disorders 35(2):135-140	中等度から重度認知症者 64 名の睡眠・覚醒リズムをアクティグラフィで測定・解析するとともに，認知機能，ADL，心理行動異常を評価して，相互の関連を検討した。 昼間の睡眠・覚醒リズムの不安定性と休息ピークのタイミングの不適切さが低い ADL に有意な影響を与える因子であることが示された。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Ishimaru D, Tanaka H, Nagata Y, Ogawa Y, Fukuhara K, Takabatake S, Nishikawa T
24 左頭頂葉病変により把握反射，本能性把握反応を伴わず「つかんだものが放せない」症状を呈した１例（査読付）	共著	令和３年６月	高次脳機能研究 41(2):219-226	左中心後回後上部の転移性脳腫瘍に伴い，右手でつかんだものを放せなくなる症状を呈した症例を報告した。症状は，持つ対象やつかむときの手の形，使用する指のいかんに関わらず生じた。また，放すという行為にしか生じなかった。右手には運動拙劣と道具を正しく持てない症状があったが，麻痺はなく， 複雑な指の動きも可能だった。把握反射や本能性把握反応もみられなかった。つかんだものを放せない症状が把握反射や本能性把握反応から独立して，また頭頂葉損傷により起こりうることが示唆された。 本人担当部分：画像診断，結果の考察，論文執筆に関わった。 共著者：坂井麻里子，平山和美，後藤泰伸，西川隆
25 Pitch accent disorder observed in a Japanese patient due to traumatic head injury（頭部外傷の日本人患者にみられた高低アクセントの障害）	共著	令和３年９月	Aphasiology doi.10.1080/02687038.2021.1978382	頭部外傷により軽度ウェルニッケ失語に高低アクセント障害を選択的に発症した日本人の症例について，高低アクセント障害のメカニズムを検討した。アクセントの誤りのパターンを分析した結果、誤りであっても母語の大阪弁のパターンから逸脱していなかった。この結果は、高低アクセントの生成過程が音素の生成過程とは独立している可能性を示唆し、アクセント障害は発声の過程でランダムに生じたのではなく、母語のアクセントのレパートリーから当該の単語にパターンを割り当てる際に問題が生じたと思われる。つまり、この患者のアクセント障害は、音声生成の運動制御にではなく、より高次の言語処理、すなわち語彙的なアクセントの符号化の問題であったと考えられる。 本人担当部分：画像診断，統計解析，結果の考察，論文執筆に関わった。 共著者：Sakai M, Ihori N, Nishikawa T

26 Insight into illness and psychological defense attitudes in people with chronic schizophrenia using Markova's Insight Scale. （Markova 病識尺度によ る統合失調症患者の病識 と防衛的態度）（査読付）	共著	令和3年12月	J Nerv Ment Dis 209(12):879-883	病識は多次元的現象であり多くの評価法がある。Markova の Insight Scale (IS) に着目し、統合失調症患者 38 名を対象に、洞察力、心理的防衛スタイル、神経認知との関係を検討した。その結果、洞察力は未熟な防衛スタイルと有意に相関し、臨床変数を統制しても IS は未熟な防衛スタイルによって有意に予測された。これらは、IS で評価された洞察力の高さが未熟な防衛機制を反映している可能性が高いことを示唆している。また洞察力スコアが高いほど発症年齢が早かった。洞察力スコアは、統合失調症の未熟な心理的防御態度を反映し、そのような患者が臨床家の意見に従うことを望むようになると考えられる。 本人担当部分：研究全体を統括，指導するとともに，研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Ogawa Y, Fukuhara K, Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Urakawa M, Nishikawa T
27 Factors influencing the quality of life in patients with severe dementia（重度認知症患者の QOL に影響する要因）（査読付）	共著	令和4年1月	Psychogeriatrics 22(1): 49-54	重度認知症患者の QOL に影響する要因を検討するために，患者 105 名を対象に，QoL(QUALID-J),認知機能(CTSD), BPSD(NPI-NH), ADL(PSMS), 疼痛 (PAINAD)および 居住環境(SCUEQS) QOL(QUALID-J)を各評価尺度によって評価し重回帰分析を行った。QUALID-J の総得点は NPI-NH と PAINAD の得点に有意に影響されることが明らかとなった。 QUALID-J の因子 1（快適さの表現）と因子 2（不快さの表現）は、それぞれ PSMS と PAINAD、NPI-NH と PAINAD の得点に有意に影響されることが示された。この結果は、認知症の行動・心理症状や痛みが、重度認知症患者の QoL に影響を与える重要な要因であることを示している。 本人担当部分：研究全体を統括，指導するとともに，研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Nagata Y, Nishikawa T, Tanaka H, Ishimaru D, Ogawa Y, Fukuhara K, Shigenobu K, Ikeda M
28 Clinical utility of an assessment scale for engagement in activities for patients with moderate-to-severe dementia: additional analysis.	共著	令和4年4月	Psychogeriatrics 22(4): 433-444	我々が開発した中等度から重度の認知症患者の engagement 評価ツールである「活動への関与のための評価尺度 (ASEA)」の信頼性のに関して、精神科急性期病院における中等度から重度の認知症患者 195 名を対象に、「健康測定機器選定のための合意に基づく基準 (COSMIN) チェックリスト」を用いた追加解析を行った。重度の認知症に特化した数少ない評価方法の中で、ASEA は治療活動への関与状態を数値化し評価するのに有用な尺度であることが示された。共著者：Ishimaru D, Tanaka H, Nagata Y, Ogawa Y, Fukuhara K, Takabatake S, Nishikawa T.

29 語の意味記憶が解体された左側頭葉前部脳膿瘍の 1 例.	共著	令和 4 年 6 月	神経心理学 38(2): 144-154	左側頭葉前部の脳膿瘍の患者にみられた軽度の言語性意味記憶障害に対し，障害の質的検討を行った．本例の理解障害の特徴は，語の派生的意味の理解障害と語の範疇的使用の障害であった．また，語の理解が困難な場合，語の一部の意味や，その語を含む慣用表現の音韻的脈絡を手掛かりとして意味を探索する代償的方略もみられた．Patterson ら（2007）の Distributed-plus-hub 仮説を援用すれば，これらの所見は，損傷が及ばない脳領域の trans-modal pathway により各様式の表象間の局部的連結に基づく具体的な意味記憶は喚起されるが，semantic hub である側頭葉前部の損傷によって，より広範な表象の統合を要する抽象的な語の意味記憶が解体されたものと解釈できる． 共著者：坂井麻里子，鈴木則夫，西川隆
30 The Lower the Physical Function, the Higher the Quality of Life in Japanese Adolescents with Cerebral Palsy.	共著	令和 5 年 3 月	Physical & Occupational Therapy in Pediatrics, DOI: 10.1080/01942638.2023.2186197, March 17, 2023	脳性麻痺の青年 51 名を対象に日本語版 KIDSCREEN-27 を用いた面接により主観的 QOL を評価し，定型発達青年 60 名と比較した。また、主観的 QOL と年齢、性別、機能レベル、知能、ADL、教育支援の種類との相関を検討した。QOL の総得点および J-KIDSCREEN-27 の各領域は定型発達の青年と差がなく、性別、操作・コミュニケーション機能、知能は主観的 QOL と関係がなかった。総運動機能と ADL レベルは、学校環境に対する満足度と負の相関があった。重回帰分析の結果、年齢が高いほど心理的幸福度が低く、粗大運動機能が低いほど学校環境に対する満足度が高く、特別支援学校に通っているほど身体的幸福度が高い。通常クラスに通う軽症の青年に十分なサポートを提供することが重要であることを指摘した。 共著者：Kato M, Arai A, Komatsu K, Tateyama K, Nishikawa T
31 Aspects of rest-activity rhythms associated with behavioral and psychological symptoms in moderate and severe dementia: results of a cross-sectional analysis	共著	令和 5 年 10 月	Alzheimer Dis Assoc Disord;37(4):322-327	中等度から重度の認知症 64 名にアクチグラフを用い、認知症患者にみられる休息活動リズムの変化が行動・心理症状（BPSD）に及ぼす影響について検討した。相関分析の結果、最大活動時間が長く、日中の睡眠時間が短いほど、BPSD スコアが高いことが示された。重回帰分析では最大活動時間が NPI-NH スコアを予測することが示された。 共著者：Ishimaru D, Tanaka H, Nagata Y, Ogawa Y, Fukuhara k, Nishikawa T

（その他） 「総説」 1 外来で早期に認知症を疑うコツ	単著	平成27年3月	治療 97(3)： 313-316	一般的な診療において外来患者が認知症であることを治療者が疑うのはどのような所見を見出したときであるか，いくつかの経験上の要点を解説した。
2 脳梁と精神疾患	単著	平成27年3月	神経内科 82(3):297-304	脳梁離断症状は自己の単一性や同一性の障害を招くことがら，離断学説が提起されて以来，統合失調症や心因性の解離症状のモデルとされてきた。脳梁の解剖生理学的知識と症候学および精神疾患と関連する研究史の流れを解説し，今後の展望を述べた。
3 DSM-5からみた複合性注意の領域	共著	平成28年12月	神経内科 85(2):182-187	アメリカ精神医学会の精神疾患診断マニュアルDSM-IVからDSM-5への改訂に伴い，認知症の診断基準に含まれる認知機能が5領域から6領域に増えるとともに，領域間をまたいだ再編成が行われた。新たに設けられた「複合性注意」の概念を改訂の背景とともに開設した。 本人担当分：執筆 共著者：永田優馬，田中寛之，石丸大貴，西川隆
4 統合失調症患者における語用論的言語（比喩・皮肉）の理解能力について （査読付）	共著	平成28年12月	Journal of Rehabilitation and Health Sciences 1415-25	語用論の定義や統合失調症患者の言語使用に関する学術的背景，統合失調症患者の比喩・皮肉理解における障害についての知見を総説し，言語的観点からの統合失調症者に対する支援方法と今後の展望について指摘した。 本人担当分：執筆 共著者：福原啓太，田中寛之，小川泰弘，永田優馬，田中宏明，大西久男，西川隆
5 認知症における食行動異常と嗅覚・味覚の生理学的機能	共著	平成29年9月	神経心理学 33(3):167-176	認知症の食行動異常と嗅覚・味覚の生理学的機能との関連について近年の知見を概説した。アルツハイマー病（AD）とレビー小体型認知症（DLB）ではしばしば嗅覚障害を早期より認めるが，味覚については研究が少ない。著者らはADと意味性認知症（SD）に関して甘味・塩味・酸味・苦味の検知・認知閾値が初期から上昇することを見出し、食嗜好の変化の背景に基礎的な味覚機能の変化が関わることを指摘した。 本人担当分：執筆 共著者：坂井麻里子，西川隆
6 グローバリゼーションの負債－貧困・高齢の都市生活者に見える風景－	単著	平成30年2月	臨床精神医学 47(2)：169-175	グローバリゼーションやボーダーレスが進行する社会的影響について，都市の貧困・単身の高齢者の視点から最近の社会変化がどのように見えるかを救護施設での医療経験を踏まえ，素描した。

7 重度認知症者のための認知機能検査 ： Cognitive Test for Severe Dementia, Severe Cognitive Impairment Rating Scale	共著	平成 30 年 11 月	老年精神医学雑誌 29(11):1175-1181	重度認知症者の認知機能の変化を検出するためには残存する限られた機能を検出し，それをさらに段階づけることができるだけの感度を備えていることが必要である。現在日本で使用しうる検査のうち，著者らが開発した CTSD と同じく著者らが翻訳導入した SCIRS の 2 つの認知機能検査について，それぞれの内容と特徴を解説した。 本人担当分：執筆 共著者：田中寛之，永田優馬，石丸大貴，西川隆

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和6年　3月　31日

氏名　橋本　雅至

	研究内容のキーワード
健康・スポーツ科学 人間医工学	スポーツ科学、運動療法、動作分析、バイオメカニクス、病態運動学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
7）実技を取り入れた実践的な講義・実習	平成25年4月 ～ 令和2年3月	大阪河崎リハビリテーション大学リハビリテーション学部　「運動器系理学療法学」「運動器系理学療法学実習」「スポーツ・リハビリテーション」において実践的な実技を中心とした講義とプレゼンテーション資料の作成、実技の復習や練習が可能な講義資料を作成した。
8）実技を取り入れた実践的な講義・実習	令和1年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部「スポーツ障害理学療法学」「筋骨格障害理学療法学Ⅰ、Ⅱ」「理学療法計画論」において理論内容の講義に加えて、実技を積極的に取り入れ、理論に裏付けされた実技の実践を多く取り入れた。臨床実習前の治療場面を想定した知識や情報整理をおこなった。
2　作成した教科書，教材		
12）運動器障害理学療法学テキスト（改訂第3版）（南江堂）	令和3年8月	奈良学園大学保健医療学部 リハビリテーション学科理学療法学専攻 「筋骨格障害理学療法学Ⅰ、Ⅱ」のテキスト作成 B5版369ページ、（共同）担当部分:207～216ページ、21筋・軟部組織性障害①概論。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）大学設置・学校法人審査会の教員組織審査	平成30年10月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻　教授 「基礎ゼミⅡ」「スポーツ医学」「運動学Ⅱ」「筋骨格障害理学療法学Ⅰ」「筋骨格障害理学療法学Ⅱ」「スポーツ障害理学療法学」「早期体験実習」「地域理学療法実習」「理学療法評価実習」「総合臨床実習Ⅰ」「総合臨床実習Ⅱ」「理学療法卒業研究」可と判定。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		

事項	年月日	概　　要
42）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成26年5月	大阪河﨑リハビリテーション大学同窓会（河泉会）スキルアップスキンシップ講座「下肢関節疾患（膝関節）の評価と治療」
43）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成26年6月	(公社)大阪府理学療法士会　大阪南ブロック　研修会 「下肢運動連鎖を考慮した観察的動作分析とアプローチ（導入編）」
44）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成26年9月	(公社)大阪府理学療法士会大阪南ブロック技術講習会「下肢運動連鎖を考慮した観察的動作分析とアプローチ（実技編）」
45）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成26年10月	大阪臨床整形外科医会療法士会研修会「膝関節障害に対する理学療法～動作解析と評価から治療～」
46）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成26年12月	あしべん主催特別講習会「立位・歩行のための体幹機能と動作のとらえ方」
47）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成27年5月	第14回　日本良導絡自律神経学会　近畿ブロック講習会「病態運動学から見たスポーツ傷害のとらえ方とアプローチ」
48）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成27年12月	あしべん主催特別講習会「身体運動連鎖の基盤となる体幹機能をどう捉えるか？」
49）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成28年10月	(公社)大阪府理学療法士会　堺ブロック　研修会「歩行を診る」
50）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成28年12月	あしべん主催特別講習会「力学的観点から歩行を診る～動作分析の際、考慮すべきポイント～」
51）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成29年12月	あしべん主催特別講習会「運動連鎖の観点から歩行を診るポイント」
52）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成31年1月	第58回近畿理学療法学術大会　教育講演「下肢の荷重関節を力学的に考える～まずは足元から～」
53）現職者対象の研修会、講習会の講師	令和1年8月	第45回日本整形外科スポーツ医学会学術集会 特別企画４　コアトレーニングの神髄 講演「コアトレーニングを効果的に進めるために、体幹（筋）機能を適切に捉える評価について」

事項	年月日	概　　要
54）現職者対象の研修会、講習会の講師	令和1年8月	大阪府理学療法士会生涯学習センター主催 2019年医工連携&運動器疾患（足関節）研修会 「運動連鎖について足部・足関節の機能から考える」
55）現職者対象の研修会、講習会の講師	令和2年9月	大阪府理学療法士会生涯学習センター主催 第2回生涯学習研修集会（Web開催） 研修４：膝・足・足関節の機能障害に挑む 「身体動作の基礎、足部・足関節機能の捉え方」
56）現職者対象の研修会、講習会の講師	令和2年11月	大阪市北区理学療法士会　第1回生涯学習研修会 「足部・足関節の機能からみた理学療法」
57）現職者対象の研修会、講習会の講師	令和2年12月	あしべん主催　特別講演　「身体重心を考慮して、体幹機能と足部・足関節機能を考える」
58）現職者対象の研修会、講習会の講師	令和4年9月	日本理学療法士会主催　理学療法講習会 「スポーツフィールドにおける理学療法の実践 ～導入から実例紹介～」
59）現職者対象の研修会、講習会の講師	令和4年12月	奈良県障がい者スポーツ協会主催 令和4年度奈良県初級障害者スポーツ指導員養成講習会講習会 「各障がいのスポーツ指導上の留意点と工夫」
60）現職者対象の研修会、講習会の講師	令和5年4月	大阪府理学療法士会生涯学習センター主催研修会 「基礎から学ぶバイオメカニクス ～足部足関節の理学療法～」
61）現職者対象の研修会、講習会の講師	令和5年12月	日本理学療法士会主催　理学療法講習会 「スポーツフィールドにおける理学療法の実践 ～導入から実例紹介～」
62）現職者対象の研修会、講習会の講師	令和5年12月	奈良県障がい者スポーツ協会主催 令和5年度奈良県初級障害者スポーツ指導員養成講習会講習会 「各障がいのスポーツ指導上の留意点と工夫」
63）現職者対象の研修会、講習会の講師	令和6年2月	洛和会音羽病院主催　リハ職員研修会 「足部足関節の理学療法」
5　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1）理学療法士関連	昭和63年4月 平成16年12月 平成17年4月	理学療法士免許（第15840号）取得：厚生労働省 第31回理学療法士・作業療法士養成施設等教員講習会修了：厚生労働省（第3370号） 専門理学療法士（運動器3-115）認定：日本理学療

事項	年月日	概　　要
		法士協会
2）大学教育関連学位	平成9年9月 平成12年3月 平成17年3月	学士(社会学)取得：佛教大学第42456号 修士（体育学）取得：大阪体育大学大学院　第73号 「運動選手･非運動者における足部･足関節の機能評価」 博士（スポーツ科学）取得： 大阪体育大学大学院　第3号 「足部の機能と下肢の運動連鎖に関する研究」
2　特許等 特になし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）理学療法士としての臨床実務歴	平成7年4月 ～ 現在に至る 平成18年4月 ～ 現在に至る	金井整形外科医院非常勤にて外来部門を担当。週1回の診療にて外来症例の理学療法を行っている。対象症例に対して自宅リハや自主運動の立案、診療時のチェックを頻回に行った。十数年に渡り診療を継続している症例も少なくない。 宝持会池田病院リハビリテーションセンター非常勤にて、外来部門の夜間診療を担当。週1回の診療にて外来症例の理学療法を行っている。特にスポーツ選手のリハビリテーションを多く担当している。また若い理学療法士の教育的立場から臨床指導を行っている。
3）学校保健・地域スポーツ活動への参画	令和1年9月 令和3年12月 ～ 現在に至る	奈良学園大学にて第1回ボッチャ大会を開催 大学生、特別支援学校生、地域住民を対象にパラスポーツ（ボッチャ）の体験会と大会を開催 ：総勢150名の参加 　教員と大学生により大会運営を行い、特別支援学校の生徒や地域の小学生から高齢者まで参加してもらい、パラスポーツであるボッチャの体験会と、チーム編成して試合(大会)を行った。当日の内容は奈良テレビの夕方の地方ニュースでも報道された。 京都府立田辺高等学校硬式野球部（毎月1回） スポーツ傷害予防の指導、スポーツ医事相談とトレーニング、コンディショニング指導の実践 　硬式野球部の監督から要請があり、学校長からの高校として正式な依頼により、野球部部員の健康チェックやスポーツ障害予防や、トレーニング・コンディショニング指導を担当する。
4　その他 1）学外研究機関などとの共同研究 (株)ワコール人間科学研究所	平成17年4月 ～ 現在に至る	運動機能に着目したアンダーウェア、スポーツウェアの開発と三次元動作解析装置を用いた効果の検証 　ワコールのスポーツウエア部門の製品を対象に機能的ウエアの開発段階での効果検証や、発売前の機能効果の検証や身体への影響を客観化する。手段は主に三次元動作解析装置や筋電測定、加速度センサーなどを用いて短時間で多くの客観的データの収集を行い、結果の検証を行う。

事項	年月日	概　　要

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書）				
10. 教科書にはない敏腕PTのテクニック -臨床実践変形性膝関節症の理学療法-	共著	平成28年5月	(株)文光堂	変形性膝関節症に対する理学療法評価と治療アプローチに関して臨床上の工夫を多く紹介した。クリティカルパス通りに進まない場合のアプローチ、歩行（歩容）の改善など，臨床で遭遇する症例への対応、さらには、対象者を取り巻く心血管疾患を中心とした内科的問題を併発する場合の運動療法の進め方、荷重関節疾患との関連がある肥満に関する考慮のポイント、日常生活を含めた患者教育の実践と工夫について図表を用いて詳細に解説した。 （Ｂ５判　全196頁） 編著者：橋本雅至 ①本人担当部分： 膝OAの外科的治療を理解し術後に活かす（ｐ．47～ｐ．59）を共著。 人工膝関節置換術を中心にその手術方法を解説し、皮膚切開から術後の理学療法の工夫や考慮のポイントを解説した。特に術後関節可動性に影響を与えやすい術創部のアプローチを具体的に紹介した。 共著者：橋本雅至、木下和昭 ②本人担当部分： 膝OA患者の術前・術後の歩容改善をねらう（ｐ．120～ｐ．134）を単著。 手術前の状態から手術後の歩容の改善を、その時期に分けて解説した。特に術後の残存する体幹機能の不具合に着目して具体的なアプローチについて紹介している。 著者：橋本雅至
11. 教科書にはない敏腕PTのテクニック -臨床実践足部・足関節の理学療法-	共著	平成29年5月	(株)文光堂	足部・足関節に頻発する運動器傷害を中心に評価やアプローチについて臨床で行っている実践的な内容をまとめた。運動器疾患以外にも内科的障害に起因する足部の障害についてもあわせて解説した。 （Ｂ５判　全194頁） 編著者：橋本雅至 ①本人担当部分： 足部・足関節機能と身体運動との関係をとらえる（ｐ．25～ｐ．38）を共著。 足部・足関節の力学的機能について解説し、身体運動時の基礎としての役割に対して必要な機能を解説した。また機能不全の場合のアプローチについて紹介を行った。 共著者：橋本雅至、木下和昭 ②本人担当部分： 扁平足障害-足部・足関節の機能的特徴をふまえ介入する（ｐ．70～ｐ．84）を共著。 臨床で経験する扁平足障害が足部にとどまらず、身体運動に影響を及ぼす関係性について解説し、その評価方法やアプローチについて紹介した。 共著者：中尾英俊、橋本雅至 ③本人担当部分： 有痛性外反母趾-足部・足関節の機能的特徴をふまえ介入する（ｐ．85～ｐ．98）を共著。 外反母趾変形でも有痛性の場合を重要視して、足部にとどまらず、身体運動に影響を及ぼす関係性について解説し、その評価方法やアプローチについて紹介した。特に靴の工夫やインソールなどについて具体的に解説した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				共著者：生島直樹、橋本雅至 ④本人担当部分： 後脛骨筋腱、腓骨筋腱の要害−足部・足関節の機能的特徴をふまえ介入する（ｐ．99～ｐ．113）を共著。 　足アーチ機能を担保する筋群に加わる力学的ストレスを具体的に紹介し、その頻回な負荷が引き起こす筋腱の障害を解説した。足部機能だけではなく、身体の重心保持の機能を含めて具体的に解説した。 共著者：瓜生玲子、橋本雅至
12. アスリートケア 　理学療法士によるスポーツ 　選手への健康支援	共著	平成29年10月	(株)三輪書店	一般社団法人アスリートケアに所属する理学療法士が20年以上活動してきたスポーツ現場の健康支援事業を解説し、それぞれの課題克服や工夫など広く共有するため事業の各方面(スポーツ現場、領域など)を細かく解説した。 （A５判　全359頁） 越智隆弘監修、アスリートケア編集 本人担当部分： 第3章3高校部活動の支援　サッカー部.　（ｐ．224～ｐ．237）を共著。 　高校サッカー部の健康支援について解説した。特に成長期の体幹機能に着目をして，その評価(測定)方法の開発、トレーニング指導の効果の検証を客観的に行い、学会発表や論文になった内容などを含めて解説した。 共著者：井上直人、橋本雅至、高本晴輝、田頭悟志、木下和昭
13. 統合と解釈がよくわかる 　実践！理学療法評価学	共著	平成30年3月	(株)医歯薬出版	理学療法評価で得られた医学的情報，検査測定結果，動作観察の内容をどのように統合・解釈し、臨床推論をどのように組み立てていけばよいかを解説した。臨床実習で指導者が学生に指導するように、情報収集の項目と意味、画像解読のポイント，患者の動作をみるポイント、検査結果の解釈、治療場面での工夫とリスクなどについて紹介した。 （Ｂ５判　全305頁） 西守隆 編著，上杉雅之監修 本人担当部分： 第4章4アキレス腱断裂(手術適応例).　（ｐ．196～ｐ．205）を共著。 　アキレス腱断裂術後の理学療法を臨床上の工夫を踏まえて解説した。アキレス腱断裂の術後を中心に術後療法を補装具使用など積極的な回復を目標に行う方法における評価ポイントを紹介した。また機能改善に難治するような事項に対する対処方法などを具体的問題点把握から解説し、実践的な評価方法を紹介した。 共著者：橋本雅至、木下和昭
14. 教科書にはない敏腕	共著	平成30年5月	(株)文光堂	肩関節機能障害に対する理学療法士の臨床技術

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
PTのテクニック -臨床実践　肩関節の理学療法-				を解説した。病態を理解するための機能解剖と運動学，理学療法士が押さえておくべき手術のポイント，運動療法につなげるための機能評価を紹介した。さらに軟部組織の痛み，関節可動域制限，筋機能低下，関節不安定症を取り上げ，臨床で実際に行われている機能的特徴を踏まえた理学療法手技を解説した。 （Ｂ５判　全208頁） 編著者：橋本雅至，村西壽祥 本人担当部分： 肩の機能解剖を理解する。 (p. 2～p. 15)を担当 肩関節周囲の評価の基本になる体表面から見る触察方法を具体的に紹介した。また機能障害や疾患からくる痛みの部位を解剖学的に正確に捉える重要性を解説した。触察方法は図表を多く掲載し、評価手技につねがるように考慮した。 共著者：中尾英俊、橋本雅至
15. 教科書にはない敏腕PTのテクニック -臨床実践 体幹の理学療法-	共著	令和1年8月	(株)文光堂	体幹の機能障害や疾患に対する理学療法士の技術とコツを解説下。触診による機能解剖や疾患の特徴から見た運動連鎖の観点からの運動機能障害，機能評価を紹介し、動作分析からみた腰痛発生のメカニズムや外科的治療とその術後理学療法を解説した。また、成長期スポーツ選手の腰痛や非特異的腰痛の特徴、運動連鎖・隣接関節を理解したうえでの介入方法、産業医学の立場から見た腰痛対策について紹介した。 （Ｂ５判　全192頁） 編著者：橋本雅至 ①本人担当部分： 疾患の特徴から腰部の運動機能障害を理解する。 (p. 17～p. 27)を担当 高齢者に多く見られる器質的疾患について紹介し、その特徴を運動面や機能的異な観点から見る評価や観察のポイントを解説した。それらの観点からつながる理学療法の実践法を紹介した。 共著者：生島直樹、橋本雅至 ②本人担当部分： コアスタビリティを評価し結果を介入に活かす。 (p. 28～p. 38)を担当 体幹の安定性に関わる体幹機能の評価から、体幹の安定性改善を目的にした理学療法の立案を紹介する。コアスタビリティの具体的な実践方法に対する、その効果検証のため、評価の重要性について解説した。 共著者：田頭悟志、橋本雅至 ③本人担当部分： 運動連鎖の観点から体幹と下肢の機能の関連を評価する。 (p. 39～p. 57)を担当 体幹の筋機能を中心に動的、静的に評価する方法を紹介し、我々の行う体幹筋機能評価方法の実践と得られた結果から荷重位の姿勢保持や動作における体幹機能の関わりの考察を解説した。 著者：木下和昭、橋本雅至 ④本人担当部分： 非特異性腰痛の特徴を踏まえて介入する。 (p. 113～p. 129)を担当 非特異性腰痛の機能面での病態を評価し、体幹の筋機能の特性を考慮したアプローチについて解説した。特に体幹と股関節との連携、下肢荷重位での動作(歩行)時の力学的ストレスを考察し．理学療法を立案する実践を紹介した。 著者：森藤武、橋本雅至

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
16. 運動器スポーツ外傷・障害 の保存療法　下肢	共著	令和2年11月	(株)南江堂	スポーツ外傷・障害の保存療法についての最新の知識を紹介し、その具体的方法と進歩を解説した。下肢に認められる、多岐にわたる疾患ごとに運動療法の適切な選択や指導方法について細かく解説した。また、物理・装具療法の併用のポイント、最近のトピックスであるPRPや体外衝撃波治療のポイントから最新の実績まで網羅した。 （Ｂ５判　全316頁） 編集：熊井司、石橋恭之 本人担当部分： 各種保存療法の基礎知識　運動療法。 (p.18～p.33)を担当 スポーツ選手に対する運動療法にて行われる実際の手技を解説した。術後や急性期の基本的な運動療法から、スポーツ復帰期の競技動作の基本となるトレーニングについて紹介した。またスポーツ障害に対しては身体機能を考慮した運動療法、トレーニングが必要であり、実際に例示して解説した。 著者：橋本雅至
17. 教科書にはない敏腕PTのテクニック -臨床実践スポーツ傷害膝 の理学療法-	共著	令和2年12月	(株)文光堂	スポーツによる膝の外傷・障害に対する理学療法士の技術とコツについて解説した。触診による機能解剖や機能評価，疾患の特徴や病態，外科的治療について紹介し、外科的治療前後での介入や障害発生のメカニズム，運動連鎖を応用したアプローチについて解説した。また，競技レベルへの復帰を導く手法，再発予防のための取り組みについて紹介した。 （Ｂ５判　全214頁） 編著者：橋本雅至 ①本人担当部分： 膝関節の筋機能と下肢機能を評価する。 (p.16～p.27)を共著 筋力や筋持久力にとどまらず、筋機能と身体動作との関連を考慮して、その機能を評価、測定に関する実践方法を紹介した。筋機能測定機器を用いた方法(トルク値やトルクカーブなど)や、スポーツ現場でも可能な、パフォーマンステスト(スクワットやレッグランジなど)を工夫して筋機能の評価方法を紹介した。 共著者：井上直人、橋本雅至 ②本人担当部分： 膝関節のオーバーユース障害の要因を評価し改善に導く。(p.124～p.140)を共著 オーバーユース障害に至るメカニカルストレスに関する評価方法を下肢荷重位でのアライメント評価と局所の関節機能評価と組み合わせ、その考察から運動療法やトレーニング方法を具体的に立案し、テーピングなどのアイテムも加えて、対応する実践的な方法を解説した。 共著者：野田優希、橋本雅至

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
18. 運動器障害理学療法学テキスト（改訂第3版）	共著	令和3年8月	(株)南江堂	障害と疾患の基本的理解と，根拠に基づく介入法とその実践に必要な整形外科学などの基礎学問を解説した教科書の改訂版．今改訂では本文をフルカラーとし，運動療法・検査などを分かりやすいイラストで多数掲載．視覚的な理解にも優れた紙面となった．さらに運動器障害理学療法学分野，またその理解の基礎となる整形外科学分野の過去10年分の国家試験問題へのリンクも収載した充実の改訂版． （Ｂ５判　全316頁） 編集：高柳清美、中川法一、木藤伸宏、森山英樹 本人担当部分： 21. 筋・軟部組織性障害①　概論。(p.207～p.216)を共著 　軟部組織に起こる機能障害を例示して、軟部組織(結合組織)の特徴を踏まえて解説した。 筋、筋腱移行部、腱、靭帯や関節包などに由来する機能障害に対する運動療法を問題点を見る評価とあわせて紹介し、理学療法を学ぶ基本内容が網羅できるように解説した。 共著者：橋本雅至、野田優希
（学術論文） [原著論文] 66. 大学アメリカンフットボール選手におけるSide Bridge testと体幹筋力との関係 （査読付）	共著	平成26年4月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.22 (2) :P.297-P.301	大学生の体幹機能を瞬発力の観点と筋持久力の観点から測定し、その関連性を検討した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：井上直人、中川泰彰、向井章悟、新宮信之、廣瀬ちえ、橋本雅至、田頭悟志、木下和昭
67. 第5中足骨疲労骨折の既往を有するサッカー選手の切り返し動作の動作解析 （査読付）	共著	平成26年4月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.22 (2) :P.331-P.335	第5中足骨の骨折経験のあるサッカー選手の方向転換(切り返し)動作をハイスピードカメラにて撮影し､その足部の関節運動を健常者と比較検討した。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：藤高紘平、大槻伸吾、岸本恵一、橋本雅至、大久保衛、熊井司、田中康仁
68. 大学サッカー選手における足関節捻挫の競技復帰に影響を及ぼす要因の検討 （査読付）	共著	平成26年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.23 :P.19-P.21	縦断的に調査している大学サッカー選手の足関節捻挫についてスポーツ復帰に影響を及ぼす身体的特徴(筋力、柔軟性など)を検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、大久保衛、大槻伸吾、藤竹俊輔、来田晃幸、岸本恵一、橋本雅至、田中康仁

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
69. ハンドヘルドダイナモメーターを用いた体幹機能評価方法の再現性と関連性 （査読付）	共著	平成26年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.23 :P.27-P.29	体幹筋の筋力測定にハンドヘルドダイナモメータを用いた測定に関してその再現性について級内相関係数を用いて検討を行った。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭、米田勇貴、中雄太、北西秀行、大八木博貴、橋本雅至、柴沼均
70. 本学学生の国家試験前後における不安の変化 （査読付）	共著	平成26年6月	リハビリテーション教育研究 19号 P.216-P.217	最終学年の学生を対象に国家試験前後の不安状態を客観化し､その変化について検討を行った。資格を取得する教育課程において最終目標となる国家試験は多くの学生において不安をもたらす要因となることが考えられた。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：小杏武陛、岡健司、髙橋泰子、橋本雅至、酒井桂太
71. 荷重による足部アーチの変化が足部スポーツ障害の発生に与える影響　大学サッカーチームの8年間の前向き研究 （査読付）	共著	平成26年7月	日本整形外科スポーツ医学会雑誌 Vol.34 (3) :P.307-P.311	荷重負荷による足部アーチ高の沈降率を測定し、後に足部に発生するスポーツ障害との関係性について検討を行った。アーチ高の変化が大きい選手はスポーツ障害発生に何ら影響を与える可能性が示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、橋本雅至、大槻伸吾、大久保衛、熊井司、田中康仁
72. 大学男子サッカーチームにおける10年間の傷害発生状況 （査読付）	共著	平成26年8月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.22 (3) :P.463-P.472	縦断的に関わっている大学サッカー選手のスポーツ障害発生の動向について10年間の調査結果をまとめ、検討した。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：藤高紘平、藤竹俊輔、来田晃幸、岸本恵一、橋本雅至、大槻伸吾、大久保衛、熊井司、田中康仁
73. 股関節可動域、下肢筋タイトネスの経時的変化が運動時腰痛に及ぼす影響 （査読付）	共著	平成26年8月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.22 (3) :P.481-P.487	高校生サッカー選手を対象に股関節の可動性と下肢筋の硬さが、運動時腰痛との関連と関連すると考えられ、トレーニング介入によるその改善がその後の運動時腰痛にどう変化をもたらせるかを調査し検討を加えた。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：福本貴典、橋本雅至、田頭悟志、板矢悠祐、井上直人、木下和昭、大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
74. 変形性膝関節症における体幹機能と身体機能の関連性 （査読付）	共著	平成26年12月	運動器リハビリテーション Vol.25 (4) :P.350-P.355	変形性膝関節症患者において、体幹機能評価を実施し、身体機能との関連性を検討した。その結果、体幹機能評価である体幹荷重支持機能は、膝関節伸展筋力と静的バランス、動的バランスにおいて有意な相関が認められた。このことから変形性膝関節症患者は体幹機能にも着目することが重要であることが明らかとなった。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、米田勇貴、中雄太、北西秀行、大八木博貴、柴沼均
75. 端座位での片側支持における姿勢保持とTrunk Righting Testとの関係 （査読付）	共著	平成27年4月	理学療法科学 Vol.30 (2) :P.329-P.332	体幹機能評価であるTrunk Righting Testの姿勢を重心動揺の観点から検討した。その結果、Trunk Righting Testの劣位側は優位側に比して、外周面積が大きく、単位面積軌跡長が有意に劣っていた。このことからTrunk Righting Test中枢神経におけるコントロールも重要であることが明らかとなった。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、米田勇貴、中雄太、北西秀行、大八木博貴、星野祐一、柴沼均
76. 大学男子サッカーチームにおける上半身傷害の発生状況 ：10年間の傷害調査結果 （査読付）	共著	平成27年4月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.23 (2) :P.242-P.251	大学男子サッカーチームにおける，2003年から2012年までの10年間の上半身(上肢，体幹，頭頚部)に発生した傷害を調査した．　1年生時の発生率，ゴールキーパーの発生率が有意に高く，1部リーグに参加した年度と人工芝グラウンドに変更した年度の上肢傷害発生率の有意な増加が認められた. 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：藤高紘平、藤竹俊輔、来田晃幸、岸本恵一、橋本雅至、大槻伸吾、大久保衛、熊井司、田中康仁
77. 大学サッカー選手における足趾屈曲筋力が足部スポーツ障害の発生に与える影響 （査読付）	共著	平成27年5月	日本整形外科スポーツ医学会雑誌 Vol.35 (2) :P.133-P.138	多種多様なフットワーク動作が必要なサッカー選手において足趾の屈曲力(把持力)がスポーツ障害発生にいかに関与するかを検討した。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：藤高紘平、橋本雅至、大槻伸吾、大久保衛、熊井司、田中康仁
78. 足部横アーチ変化の測定方法の検討 （査読付）	共著	平成27年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.24 :P.19-P.22	外見の形状では測定が困難である足部横アーチの客観的な測定方法について考案し、その方法の有用性につて検討した。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：藤高紘平、藤竹俊輔、来田晃幸、岸本恵一、橋本雅至、大槻伸吾、大久保衛、熊井 司、田中康仁

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
79. Trunk Righting Test と体幹機能の関係性 (査読付)	共著	平成27年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.24 :P.31-P.34	体幹機能評価として考案したTrunk Righting Testと体幹筋の持久性と協調性を見るブリッジテストとの関連性から、体幹筋の評価方法について検討した。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、北西秀行、井上直人、植田篤史
80. A novel objective evaluation method for trunk function (体幹筋機能評価方法の検討) (査読付)	共著	平成27年6月	J. Phys. Ther. Sci. Vol.27 :P.1633-P.1636	立ち直り動作を客観化したTrunk Righting Testを考案し、その再現性を報告した。その結果、検者内・検者間共に良好な再現性を有していることが示唆された。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：Kazuaki Kinoshita, Masashi Hashimoto, Kazunari Ishida, Yuki Yoneda, Yuta Naka, HidekuKi Kitanishi, Hirotaka Oyagi, Yuichi Hoshino, Nao Shibanuma
81. 人工膝関節全置換術後患者の身体機能と術前および術後の体幹機能の関連性 (査読付)	共著	平成27年6月	理学療法科学 Vol.30 (3) :P.389-P.394	人工膝関節全置換術の術前後の体幹機能と術後の身体機能の関連性を検討した。その結果、術前の体幹機能が良好な方が術後のTUGが良好であることが示唆された。このことから術後の早期回復には術前の体幹機能の向上が重要であることが考えられた。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、中雄太、北西秀行、大八木博貴
82. 座位体幹荷重支持機能テストと体幹筋機能 (査読付)	共著	平成28年1月	理学療法科学 Vol.31 (1) :P.49-P.52	座位での体幹荷重支持機能テストと既存する体幹機能テストの関係を検討した。その結果、体幹荷重支持機能テストと既存する体幹機能テストとの間には有意な相関が認められなかった。そのため、両者は異なった観点で評価をしていることが明らかとなった。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、北西秀行、米田勇貴、中雄太、大八木博貴、井上直人、植田篤史、田頭悟志、福本貴典、高嶋厚史、板矢悠佑、新谷健、星野祐一
83. 腰椎変性疾患に対する体幹伸展持久力トレーニングの効果－日本整形外科学会腰椎疾患問診票(JOABPEQ)を用いた評価－ (査読付)	共著	平成28年4月	理学療法科学 Vol.31 (2) :P.275-P.279	腰椎変性疾患患者27名とし,体幹伸展持久力トレーニングを実施する15名（T群）と，通院のみの12名（C群）との間で,体幹伸展持久力,VAS,JOABPEQの経時変化を比較した．結果,T群の体幹伸筋持久力は3ヵ月目に，JOABPEQは腰椎機能障害のみ2ヵ月目に有意に高値を，VASは2，3ヵ月目に有意に低値を示し,体幹伸筋持久力トレーニングは，疼痛および ADL の改善に効果的

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（査読付）				であることが示唆される. 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：中尾英俊、稲葉孝洋、森藤武、内原由佳子、渡邊萌、金子元春、木下和昭、橋本雅至、大槻伸吾
84. 体幹の荷重支持機能の左右差がジャンプ動作に与える影響 （査読付）	共著	平成28年6月	JOSKAS Vol.41 (3) :P.1068-P.1074	Trunk Righting Testにて得られた体幹荷重機能の左右差が各種のジャンプ動作に与える影響について調査した。結果、体幹の安定性が大きく求められるジャンプ動作では体幹機能の左右差が関与しやすいことが示唆された。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、井上直人、北西秀行、中雄太、大八木博貴、植田篤史、星野祐一、石田一成、柴沼均、中尾英俊、大槻伸吾
85. 成長期スポーツ障害の腰椎分離症と非特異的腰痛のX線による腰椎アライメントと可動性について （査読付）	共著	平成29年3月	大阪河崎リハビリテーション大学紀要 11巻 :P.135-P.139	成長期スポーツ障害の腰痛症に多い、腰椎分離症と非特異的腰痛の腰椎のアライメントと可動域について検証した。検証はX線を用い、腰椎椎間角を計測した。分離症では下位腰椎の前弯角が大きいことが示唆された。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：中尾英俊、橋本雅至、森藤武、岡健司
86. 高校男子サッカー選手における体幹荷重支持機能とブリッジ姿勢保持の特徴～利き脚側と非利き脚側での比較～ （査読付）	共著	平成29年5月	日本整形外科スポーツ医学会雑誌 Vol.37 (2) :P38-P41	高校サッカー選手の体幹荷重支持機能についてどのような特徴を有するのか検討した。その結果、利き側の体幹荷重支持機能の方が有意に強いことが示唆された。このことから体幹の荷重支持機能は優位な荷重側のみが強くなるわけではなく、その反復される動作に影響を受ける可能性が明らかとなった。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、中尾英俊、大槻伸吾
87. 大学サッカー選手の人工芝グラウンドにおけるスポーツ傷害の経時的変化　人工芝グラウンドに対するゴムチップ補充の影響 （査読付）	共著	平成29年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.25 :P53-P55	サッカー競技中に発生する外傷や障害を引き起こす要因は，選手が使用しているグラウンドサーフェイスも一要因になると報告されている。今回，長期経過した人工芝グラウンドに特殊珪砂やゴムチップを補充したことによる，スポーツ傷害発生への影響を検討した．結果、人工芝グラウンドでは年数が経過するとともに下肢捻挫発生率が増加し，ゴムチップの補充後では下肢肉離れの発生率が有意に減少した. 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：藤高紘平、藤竹俊輔、来田晃幸、岸本恵一、橋本雅至、大槻伸吾、大久保衛、熊井司、田中康仁
88. Relationship between trunk function	共著	平成29年6月	J. Phys. Ther. Sci. V :P.996-P.1000	変形性膝関節症（OA）患者の運動機能評価において体幹の立ち直り運動のテスト（TRT）を用いて体幹筋機能の評価を行っている。その臨床上

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
function evaluated using the trunk righting test and physical function in patients with knee osteoarthritis (体幹筋機能テストと変形性膝関節症患者の身体特性との関連性) (査読付)			:P.996-P.1000	で体幹筋機能の評価を行っている。その臨床上の有効性について検討した。結果、同側のTRTと関連する因子は、最大等尺性膝伸筋力テストおよび同側のステップテストであった。術側と、非術側TRTはTUGとかなり関連していた。下肢の運動器疾患であるが、体幹機能評価の重要性が示唆された。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：Kazuaki Kinoshita, Kazunari Ishida, Masashi Hashimoto, YuKi Yoneda, Yuta NaKa, hideyuki Kitanishi, Hiroki Oyagi, Yuichi Hoshino, Masahiro Kurosaka, Nao Shibanuma
89. Side-to-side differences in range of motion, muscle strength, and medial elbow laxity in young baseball players with medial elbow injuries (内側型肘関節障害を有した成長期野球選手の関節可動域、筋力、関節弛緩性のの左右差について) (査読付)	共著	平成29年7月	J Phys Fitness Sports Med Vol.6 (4) :P.233-P.239	成長期の野球選手の肘関節の障害は投球動作に大きく影響し、また投球動作から力学的影響を受ける。今回、成長期の野球選手の関節機能の評価から検討を加えた。結果、肩外内旋、肘屈伸、前腕回内外､股関節内旋の可動域は非投球側に比べ減少していた。また僧帽筋および棘上筋の筋力、肘関節の内側不安定性は左右差を示していた。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：Takeshi Morifuji, Hidetoshi Nakao, Takahiro Inaba, Kenji Kasubuchi, Masashi Hashimoto, Motoharu Kaneko
90. 野球経験年数での肩関節回旋可動域の変化 (査読付)	共著	平成29年7月	JOSKAS Vol.42 ：P.493-P.498	小中学生の野球経験年数別での肩関節可動域の変化について検討した。結果は野球経験年数の増加に伴い、両側共に肩関節90°外転位での外旋角度と全可動域に有意な低下傾向が認められた。以上より、小中学生の野球選手の肩関節90°外転位での外旋角度と全可動域は野球経験の増加に伴い減少していくことが考えられ、今後の投球障害治療の一助となる可能性が示された。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭、中川泰彰、向井章悟、佐治隆彦、薮本浩光、井上直人、伊藤春盛、橋本雅至、大槻伸吾
91. 投球障害肘を有する小学生野球選手の肩関節可動域の特徴 (査読付)	共著	平成29年8月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.25 (3) ：P.454-P.457	投球動作において，肩関節可動域の制限は，投球障害肘の発症と関連が報告されている．そのため，本研究の目的は投球障害肘を有する小学生野球選手の肩関節可動域の特徴を明らかにすることとした.結果，障害群は健常群に比して，投球側，非投球側の肩関節外転位での外旋可動域が，有意に小さかった．また，投球側の肩全回旋可動域およびGlenohumeral Internal Rotation Deficitは，2群間で統計学的に有意差はなかったが，障害群のほうが小さい傾向であった. 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：植田篤史、橋本雅至、木下和昭、小島喜義、衛門良幸、井上直人、大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
92. Cognitive impairment associated with locomotive syndrome in community dwelling elderly women in　Japan（日本人の健常高齢者女性の運動機能評価と認知機能について）（査読付）	共著	平成29年10月	Clinical Interventions in Aging 2017 12 :P.1-P.7	日本人の健常高齢者を対象に運動機能評価と身体組成、認知機能との関連を検討した。ロコモティブシンドロームのように運動機能の低下により引き起こされるが、これは認知機能の変化や体組成の変化との関連が示唆された。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：Misa Nakamura, Fumie Tazaki, Kazuki Nomura, Taeko Takano, Masashi Hashimoto, Hiroshi Hashizume, Ichiro Kamei
93.体幹筋・股関節周囲筋の機能評価を目的とした難度別のcore stability testの保持時間について　（査読付）	共著	平成30年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌,27: p.27-p.29	難度別core stability test（CST）の姿勢保持時間を評価指標として測定を行い，設定した難度別CSTが有用であるかを検討することを目的とした．結果，SB・FBの保持時間はB～D の難度毎に有意差が認められ，A～Bの難度では有意差が認められなかった．つまり，難度別CST においてB～Dは有用であり，Aは姿勢や被験者の選定に配慮が必要であると考えられた． 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：高嶋厚史，田頭悟志，板矢悠佑，福本貴典，大槻伸吾，木下和昭，新谷健，橋本雅至
94.片脚立位と端座位での片側支持姿勢の腰部周囲筋の筋活動の関係　（査読付）	共著	平成30年12月	理学療法科学 33(6) p.929-p.934	片脚立位と体幹荷重支持との腰部周囲筋の筋活動の関係をワイヤー筋電にて検討した。その結果、両側の内腹斜筋と腹横筋，遊脚側の多裂筋と外腹斜筋に正の相関が認められた。このことより、片脚立位と体幹の荷重支持の腰部周囲筋の一部は，貢献度が同じ傾向であったことが明らかとなった。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭，橋本雅至，中尾英俊，澳昂佑，板谷悠佑，福本貴典，高嶋厚史，大槻伸吾
95.腰痛を有する高校野球選手における体幹・股関節筋力と腰椎アライメントとの関係性　（査読付）	共著	平成31年1月	日本臨床スポーツ医学会誌27巻1号 p.27-p.33	腰痛を有する野球選手を腰痛群，腰痛のない 選手を腰痛なし群とし，体幹・股関節筋力と腰椎前弯角を比較検討した．結果，筋力の比較では両群に有意差を認めなかったが，腰椎前弯角は体幹伸展位においてのみ群間の差が有意であった．筋力と腰椎前弯角との間には，腰痛群において股関節屈筋筋力と腰椎前弯角との間に有意な正の相関を認めた．腰痛を有する高校野球選手では，股関節筋力と腰椎アライメントが関係していることが示唆された． 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：中尾英俊，橋本雅至，濱田太朗，木下和昭，森藤武，大槻伸吾
96.A Vertical Load Applied Towards the Trunk Unilaterally Increases the Bilateral Abdominal Muscle Activities　（査読付）	共著	平成31年3月	J. Phys. Ther. Sci. Vol.30(3) :P.273-P.276	端坐位と体幹荷重支持中の腰部周囲筋の筋活動についてワイヤー電極を用いて検討した。その結果、両側の内腹斜筋、多裂筋、腹横筋、腹直筋、非移動側の外腹斜筋に有意な筋活動の増大が認められた。このことから体幹の荷重支持には、両側の腰背筋の筋活動が重要であることが

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				明らかとなった。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：Kazuaki Kinoshita, Kazunari Ishida, Masashi Hashimoto, Hidetoshi Nakao, Nao Shibanuma, Masahiro Kurosaka, Shingo Otsuki
97.肩肘障害を発症する小学野球選手の肩関節可動域の特徴　一年間の縦断的検討（査読付）	共著	平成31年4月	日本臨床スポーツ医学会誌 27巻2号 p.273-p.278	肩肘障害を発症した軟式野球選手の一年前の肩関節可動域の変化について検討した。その結果、肩関節外転位での外旋角度において肩肘障害を発症する前には、有意な可動域差は認められないが、発症後は肩肘障害者において有意な低下が認められた。このことから、肩肘の障害発生には、肩関節の可動域が重要な要因とはならず、傷害発生後に肩関節の可動域が低下していることが明らかとなった。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下 和昭，中川 泰彰，向井 章悟，伊藤 盛春，井上 直人，橋本 雅至，大槻 伸吾
98.体操競技に必要な倒立と身体因子との関係　（査読付）	共著	令和1年6月	JOSKAS　44巻3号 Page882-888	直線的な倒立姿勢に必要な身体機能因子について検討した。その結果、直線的な倒立姿勢には背筋筋力、肩-肩甲帯の柔軟性が重要な因子であることが明らかとなった。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭，橋本雅至，横田尚子，澳昂佑，来田宣幸，西澤勇一郎，星野祐一
99.人工膝関節全置換術後早期のTimed up and go test の改善に関係する因子　（査読付）	共著	令和1年10月	理学療法科学　34巻5号 p.553-p.557	人工膝関節全置換術（TKA）後の早期のTimed up and go test（TUG）の回復に影響を及ぼす因子を検討した。結果、TKA後4週のTUGの回復率には，5STSと術側のTRTが影響を及ぼす因子であった。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭，橋本雅至，大八木博貴，石田一成，柴沼均，来田宣幸
100.健常者の足背高測定による足部アーチ評価とアーチ高に影響を及ぼす因子（査読付）	共著	令和1年11月	バイオメカニズム学会誌 43巻4号 p.256-p.262	18歳以上の689名（男性370名，　女性319名）の足背高および足長計測からアーチ高率を算出し，さらに自記式アンケートを行った．アンケートから身長，体重，BMI，足の既往歴の有無，歩行困難の有無，スポーツ活動の有無を確認した．足背高とアーチ高率から高値（H群），標準（S群），低値（L群）の3群に分類し比較した結果足背高が高い群では体重とBMIの増加が影響していることが示唆された． 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：中尾英俊，今岡真和，岡健司，肥田光正，森藤武，橋本雅至，松本和幸，北研二

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
101.SVM-RFEを用いた足部アーチ高比の低下を有する人の関連要因分析　(査読付)	共著	令和1年12月	生体医工学　57巻6号 Page190-196	足部アーチの低下に基本属性が関連する要因の解析を目的とする．　基本属性を説明変数とした非線形回帰分析手法のSVM-RFEによる関連要因を判別する分析を行った．　対象は1178名(男性485名,女性693名)とし，　低アーチ群は207名，　非低アーチ群は971名となり，　「年齢」，　「身長」，　「体重」，　「BMI」，　「足長」の5項目を説明変数とした．その結果，　SVM-RFEによる説明変数の識別評価では，　「年齢」，　「足長」，　「体重」の3項目が足部低アーチの関連要因として明らかとなった．　本研究では説明変数が限定的かつ少数であったが，　足部低アーチの関連要因として，　SVM-RFEの分析手法は有効であった． 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：中尾 英俊，今岡 真和，岡 健司，森藤武，橋本 雅至，松本 和幸，北 研二
102.小学生軟式野球選手における投球障害肘発症時の体幹筋機能の変化　(査読付)	共著	令和2年3月	日本整形外科スポーツ医学会雑誌 40巻1号 p.26-p.29	小学生軟式野球選手が投球障害肘を発症したときのSide Bridge testの変化を調査した．結果，新たに投球障害肘を発症した選手は，投球側のみSide Bridge testの向上が認められなかった．成長に伴い体幹筋機能の向上が認められない場合，小学生軟式野球選手の投球障害肘発生に影響を与えている可能性が示唆された． 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：井上直人、中川泰彰、向井章悟、横田尚子、橋本雅至、木下和昭
103.一都道府県のジュニア体操競技選手権大会における疼痛発生調査　(査読付)	共著	令和2年4月	日本臨床スポーツ医学会誌 28巻2号 p.298-p.306	一都道府県における小中学生の体操競技選手権大会に出場する選手を対象とした疼痛発生の調査を行い，次に上肢傷害の起因となり得る倒立での疼痛調査の特徴について検討することである。結果，男女とも小学生では足関節に多くの疼痛が発生しており，中学生ではそれに加え，男子で上肢や膝関節，女子では腰部での疼痛発生件数も多く見られた．また一年以内に倒立時の疼痛を有した選手は男子 22.1%，女子37.2%であり，手関節に多く，有痛の女子は身長が高く，体重が重かった． 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下和昭、横田尚子、橋本雅至、来田宣幸、西澤勇一郎、星野祐一
104.Acute effects of static passive stretching without voluntary contraction of skeletal muscles on arterial stiffness in elderly lacking exercise habits　(査読付) (運動習慣のない高齢者における動脈硬化に対する骨格	共著	令和2年6月	J Phys Fitness Sports Med, 9 (5)	運動習慣の少ない高齢者を対象に筋収縮を伴わない持続伸張トレーニング(ストレッチング)を他動的に行うことで、the cardio-ankle vascular index (CAVI)が減少し、動脈硬化における血管系の硬さの改善が認められた。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：Takeshi Morifuji, Hidetoshi Nakao, Masashi Hashimoto, Masakazu Imaoka and

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
筋の随意収縮が関与しない静的受動的ストレッチの急性効果)				Hidemi Fujino
105.Correlation of Medial Longitudinal Arch Morphology with Body Characteristics and Locomotive Function in Community-Dwelling Older Women: A Cross-Sectional Study（査読付） （地域女性高齢者の足部痛と足部アーチ形状の変形が身体的特徴と運動機能に及ぼす影響）	共著	令和3年3月	Journal of orthopedic and surgery. 29(2)	地域高齢者の女性を対象に足部の痛みと足部アーチ形状の変形が身体的特徴と運動機能に及ぼす影響を調査した。方法は65～90歳の145人の地域在住の女性とし、足部アーチ高の比率（足背高/切長足長）を測定した．参加者を高アーチ型グループ（HAG）、低アーチ型グループ（LAG）、または通常アーチ型グループ（NAG）とし、身体特徴（年齢、身長、体重、肥満度指数（BMI）、骨格筋量を比較した。結果、足部の痛みを有する場合において3グループ間で内在筋力、および2ステップ値に有意差を示し、高アーチグループが低下を示した。足部アーチが高く、足部の痛みを有する場合、足部内在筋の衰弱と関連しており、高齢者の女性の運動機能の低下に影響を与える可能性がある。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：Hidetoshi Nakao, Masakazu Imaoka, Mitsumasa Hida, Ryota Imai, Fumie Tazaki, Takeshi Morifuji, Masashi Hashimoto, Misa Nakamura.
106.Stepwise increase of upper limb muscle activity induced by progressive 4 positions of a handstand training（査読付） (倒立姿勢獲得のための段階的な4つのトレーニング姿勢による上肢筋活動の増加について)	共著	令和3年8月	Isokinetics and Exercise Science (in press) （Web公開済）	倒立姿勢は体操競技において最も重要な技である。成長期のジュニア選手においては、協調性のある筋機能により安定した倒立姿勢保持が好まれるため、倒立姿勢における上肢の筋活動をEMGにて測定した。倒立姿勢獲得の段階的な4つのトレーニング姿勢における筋活動を測定し、4つの倒立獲得のトレーニングでは、徐々に筋活動が高くなり、ゆるやかなおよびバランスがとれた運動負荷量の増加を示していた。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：Kazuaki Kinoshita, Yuichi Hoshino, Naoko Yokota, Masashi Hashimoto, Yuichiro Nishizawa, Noriyuki Kida
107.The effects of vertical trunk supportability improvement on one-leg rebound jump efficiency	共著	令和4年5月	PLoS One. 2022 May 19;17(5): e0267460.doi: 10.1371/journal.pone.0267460.	本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：Kinoshita Kazuaki, Kazunari Ishida, Masashi Hashimoto, Hidetoshi Nakao, Yuichiro Nishizawa, Nao Shibanuma, Masahiro Kurosaka, Shingo Otsuki
108.小学軟式野球選手における超音波検査かつX線やCT、MRI所見で認められた肘	共著	令和4年4月	日本臨床スポーツ医学会誌 30(3) Page468-474	本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
CT、MRI所見で認められた肩障害の因子　一年前の検診結果から（査読付）				本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：木下 和昭，中川 泰彰，向井 章悟，井上 直人，横田 尚子，橋本 雅至
109.Factors affecting chronic low back pain among high school baseball players in Japan: A pilot study（査読付）	共著	令和5年1月	PLoS One.　2023 Jan 26;18(1): e0280453.doi: 10.1371/journal.pone.0280453.	本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：Hidetoshi Nakao, Ryota Imai, Taro Hamada, Masakazu Imaoka, Mitsumasa Hida, Takeshi Morifuji, Masashi Hashimoto
110.大学生アスリートにおける足部アーチ形態の特徴および既往歴との関係（査読付）	共著	令和5年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌,31: p.15-p.18	足部アーチは、内側縦アーチと外側縦アーチおよび横アーチで形成されており、これらは立位や歩行において衝撃の吸収や身体バランスを維持するうえで重要な役割を果たしている。特に内側縦アーチは体重支持や運動中に機能することから臨床上重要視されており、その測定指標の一つにArch height index(AHI)がある。今回、大学生アスリート81名(男性57名、女性24名)のAHIを測定し、対照群(健常な男女学生100名)と比較するとともに、既往歴との関係について検討した。結果、アスリートのAHIは男女とも対照群に比べて有意に低値であった。アスリートで足部足関節傷害の既往歴が有る群と無い群のAHIを比較した結果、男女とも有意な群間差は認められなかった。 本人担当部分：研究方法の検証、結果の考察、論文執筆指導 共著者：濱口幹太，露口亮太，吉田平，橋本雅至，仲田秀臣，大槻伸吾
その他 「総説・報告書」				
14.　運動器疾患の理学療法における臨床力	単著	平成25年4月	理学療法京都 42号 ：41-46	運動器疾患の理学療法を効果的に進めるにあたり、身体の機能を如何に捉えることができるが重要である。その際、動作の観察・分析が適切に行い、機能障害を具体的にする評価が治療の成果を左右する。著者の工夫している動作の捉え方を紹介しながら、ポイントを解説した。
15.　観察的動作分析における介入効果から身体運動を捉える方法～足部・足関節の機能に着目して運動器疾患における歩行動作を考察する～	単著	平成26年6月	大阪河﨑リハビリテーション大学紀要 8巻1号 :P.158-P.165	身体運動の土台である足部足関節の機能を中心に運動連鎖の観点から身体全体に及ぶ姿勢制御や運動調整について解説した。特にインソール療法と運動療法の併用や荷重位トレーニングにおける考え方、観察的動作観察のポイントなどを紹介しながら説明を加えた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
16.　足部・足関節のスポーツ障害-overuse障害の克服-　理学療法によるoveruse障害への対応	共著	平成26年7月	臨床スポーツ医学 31巻7号 ：P.674-P.684	overuse障害の要因を関節弛緩性など関節の特性と運動連鎖における力学的ストレスの観点から解説する。具体的には運動療法の紹介とインソールなどの装具療法を併用した理学療法を解説した。 本人担当部分：論文執筆 共著者：橋本雅至、伊佐地弘基
17.　動作解析を用いた機能的ウエア開発-ワコールとの共同開発	単著	平成29年11月	理学療法ジャーナル 51巻11号 ：P.959-P.962	特集「多分野に広がる理学療法」の1つを担当執筆。 身体運動解釈、動作分析の観点から機能的ウエアを開発する業務について紹介した。過去10年の実施の開発例を示し、理学療法の観点がどのように活用できるかを解説した。
(その他) [学会発表] (国際学会) 4. Characteristics of human body movement when lifting loads: investigation into difference in load weight. (重量物の持ち上げ動作におけるの重さに違いが身体動作に与える特徴)	—	平成25年9月	WCPT-AWP & ACPT Congress 2013 (Taichung, Taiwan)	荷物の持ち上げ動作における運動特性について、荷物の重さを変えた時に体幹、下肢の運動負荷がどのように変化するかを検討した。 本人担当部分：研究計画、データ分析、研究指導 共同発表者：Yasuhiro Mitani, Masashi Hashimoto, Tomomi Kitagawa
5. Electromyography analysis in stratified core stability testing (体幹筋機能の評価テストの筋電図学的検討)	—	平成28年10月	ACPT Congress 2016 (Kuala Lumpur, Malaysia)	体幹機能評価としてブリッジ姿勢を用いた機能評価を行っている。今回、その評価姿勢における体幹の筋活動の特性を客観化し、今後の評価方法としての有用性を検討することとした。 本人担当部分：研究計画、データ分析、研究指導 共同発表者： Satoshi Tagashira, Masashi Hashimoto
6. Body Factors of Low Arch of Foot for Middle and Senior Age （中高年者の足部アーチ低下に関連する身体的因子について）	—	令和1年5月	WCPT congress 2019 （Geneva, Switzerland）	加齢に伴う足部変形の進行度はさまざまであり関連因子の検討が必要である。対象は40歳以上の124名（男性43名）とし，調査方法は足の測定としてアーチ高を測定した。加えて、自記式のアンケート調査を行った。結果，BMIのみが独立関連因子であった。40歳代以降では、BMIが高いことは足部アーチ高の低下に関連する因子であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：Hidetoshi Nakao, Masakazu Imaoka, Kenji Oka, Mitsumasa Hida, Takeshi

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				Morifuji, Masashi Hashimoto, Kazuyuki Matsumoto, Kenji Kita
7. Factor Affecting Low-Arch and High-Arch of Foot （足部アーチ高に影響する因子について）	―	令和1年6月	International society of Physical and Rehabilitation Medicine world congress. （Kobe. Japan）	対象は1100人（男性471人）の右1100足、平均年齢50.2±22.3（18～97歳）となった。方法は右足背高率（足背高mm/足長mm×100）を算出した。加えて自記式アンケートを実施した。アンケートには、身長、体重、BMIなどを調査した。3群の比率は、Normalが940足（86.2%）、Lowが64足（5.9%）、Highが86足（7.9%）となった。統計解析の結果、年齢、BMIに有意差を認めた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：Hidetoshi Nakao, Masakazu Imaoka, Kenji Oka, Mitsumasa Hida, Takeshi Morifuji, Masashi Hashimoto,Kazuyuki Matsumoto, Kenji Kita
（国内学会）				
76. 人工膝関節全置換術後患者の身体機能と術前及び術後の体幹機能の関連性	―	平成26年5月	第49回 日本理学療法学術大会 （横浜）	変形性膝関節症患者（以下，膝OA）の膝関節の炎症や変形などを主症状とする運動連鎖機能不全の一病態に至ったものであると報告されており、術後は膝関節のみでなく，病変の悪化につながる体幹および下肢の運動連鎖を考慮することが重要である。我々はその機能を客観化することを目的にTrunk Righting Test（以下，TRT）を考案し，術後の体幹機能と身体機能との関連性についても検討した。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，中雄太，北西秀行，大八木博貴
77. 大学サッカー選手における足趾把持筋力が足部スポーツ障害の発生に与える影響	―	平成26年9月	第40回 日本整形外科スポーツ医学会学術集会 （東京）	多種多様なフットワーク動作が必要なサッカー選手において足趾の屈曲力(把持力)がスポーツ障害発生にいかに関与するかを検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平，岸本恵一，橋本雅至，大槻伸吾，大久保衛，熊井司，田中康仁
78. 高校生サッカー選手における体幹筋機能と障害発生の関係	―	平成26年11月	第25回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （東京）	体幹筋機能検査として行っているSide bridge test（SB）と体幹筋力の伸展／屈曲比（E／F比）との関連について報告した．その後，対象者数を増やしさらに検討を加えた。SBと伸展筋力との間、SBとE／F比との間に有意な相関が認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：田頭悟志，橋本雅至，新谷健，福本貴典，板矢悠祐，高嶋厚史，木下和昭，大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
79. Trunk Righting Testと体幹機能の関係性　第2報	―	平成26年11月	第25回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （東京）	個人内のTrunk Righting Test(以下、 TRT)の左右データの優劣かSide-Bridge test(以下、 SB)の姿勢保 持時間の優劣を反映していることを報告した。その後、対象者数を 増やしさらに検討を加えた。結果、TRTとFB・SBとの間に相関関係は認められなかった。またFB・SBともにTRTの優位側が有意に姿勢保持の時間が長かった。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至,米田勇貴，中雄太，北西秀行，大八木博貴，井上直人，植田篤史，田頭悟志，福本貴典，高嶋厚史，板矢悠祐，新谷健，星野佑一
80. Back Bridge 動作における体幹・股関節周囲筋に関する筋電図学的分析	―	平成26年11月	第25回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （東京）	体幹筋や股関節伸筋に着目し、Back Bridge(BB)を筋電図学的に分析し、評価としての有用性を検討した。結果、体幹伸筋、股関節伸筋の%IEMG、 MdPFに有意な変化か認められ、BB姿勢保持が体幹伸筋、股関節伸筋の持久性評 価の方法としての有用性か示唆された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：高嶋厚史，田頭悟志，板矢悠祐，福本貴典，橋本雅至，大槻伸吾
81. 人工膝関節全置換術前後における椅子立ち上がりテストの有用性	―	平成27年6月	第50回 日本理学療法学術大会 （横浜）	スクリーニングである30秒椅子立ち上がりテスト（以下，CS-30）や5回椅子立ち上がりテスト（以下，SS-5）が、変形性膝関節症の患者（以下，膝OA）やその後，手術に至った患者に対する有用性について検討した。結果、SS-5は今回測定した他の動作テストとの関係性が確認でき，先行研究と同様に膝OAに対して使用が可能であることが示唆された。SS-5の方が短時間にて可能であり，負担が少なく，有用性の高いテストであると考えられた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、中雄太、米田勇貴、北西秀行、大八木博貴
82. 体幹の荷重支持機能の左右差がジャンプ動作に与える影響	―	平成27年6月	第7回 日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 （札幌）	Trunk Righting Testにて得られた体幹荷重機能の左右差が各種のジャンプ動作に与える影響について調査した。結果、体幹の安定性が大きく求められるジャンプ動作では体幹機能の左右差が関与しやすいことが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、井上直人、北西秀行、中雄太、大八木博貴、植田篤史、星野佑一、石田一成
83. 高校男子サッカー選手の座位体幹荷重支持機能と利き脚、非利き脚との関連	―	平成27年9月	第41回 日本整形外科スポーツ医学会学術集会 （京都）	Trunk Righting Testにて得られた体幹荷重機能とブリッジ姿勢保持により得られた体幹筋機能の左右差と効き脚と非効き脚の関係性について調査した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，中尾英俊，大槻伸吾
84. 人工股関節全置換術前における体幹機能評価の重要性	―	平成27年10月	第42回 日本股関節学会学術集会 （大阪）	人工股関節全置換術（以下、THA）の術前の身体機能が術後の回復に影響を与えることが報告されている。THA前の体幹機能と身体機能の客観的な関連性を示した報告は少なく、我々はTHA前後の体幹機能に着目し、術前から体幹機能評価（Trunk Righting Test以下、TRT）を行っている。今回、THA前の症例を対象に、術前の体幹機能と身体機能との関係性を検討した。結果、術側TRTと術側膝関節伸展筋力、術側下肢荷重量との間にそれぞれ有意な正の相関が認められた。術側TRTと歩行時NRSとの間に有意な負の相関が認められた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：中雄太、木下和昭、橋本雅至、柴沼均、林申也、橋本慎吾
85. 座位での体幹荷重支持機能テストの力学的考察	―	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	体幹荷重支持機能テスト（TRT）を考案し、片側の体幹の荷重支持機能が同側の連続ジャンプ動作に影響を与えることを報告した。今回、TRTを力学的に検討し、荷重動作との関係も検討した。TRTの肩で押す力と腎部で押す力は強い相関があった。またTRTの測定値は床反力値と強い相関があった。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、中尾英俊、井上直人、田頭悟志、新谷健、大槻伸吾
86. 高校男子サッカー選手における競技パフォーマンスと体幹筋機能との関係	―	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	高校男子サッカー部に対して、体幹筋機能とサッカーに必要な競技パフォーマンスとの関係について検討した。FBはT－testと12分間走、SBはT－testと12分間走、 BBはT－testと12分間走に有意な相関が認められた。FB・SB・BBのような姿勢を一定時間保持する体幹筋機能は、T－testや12分間走と関係することが考えられた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				共同発表者：新谷健、橋本雅至、田頭悟志、木下和昭、清野大輔
87. Bridge姿勢を用いた体幹筋機能評価における腹筋と背筋の不均衡についての検討	―	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	体幹筋機能評価としてBack Bridge test（BB）とFront Bridge test（FB）の測定値から、 BB（背筋）とFB（腹筋）の不均衡が動作テストに与える影響を検討した。結果、BB／FB高値群（BB優位）のBB＋FBは3回片足跳び、20m走、50m走、T test、12分間走との間に有意な相関が認められた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：高嶋厚史、橋本雅至、田頭悟志、新谷健、福本貴典、板矢悠佑、幸田康宏、木下和昭、大槻伸吾
88. 体幹筋機能の左右差がランニング動作へ及ぼす影響	―	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	サッカー選手に対して傷害予防やパフォーマンスの向上を目的に介入し、体幹筋機能の左右差とランニング動作との関連を調査した。体幹筋機能評価はFront Bridge test（FB）、Side Bridge test（SB）を実施し、ランニング動作は50m走、 Ttest、12分間走とした。体幹筋機能評価より左右差あり群と左右差なし群に群分けを行い、ランニング動作との相関を調査した。結果、体幹の安定性が必要なランニング動作では体幹機能がランニングの動作に影響を及ぼすことが示唆された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：田頭悟志、橋本雅至、新谷健、板矢悠佑、福本貴典、高嶋厚史、幸田康宏、木下和昭、大槻伸吾
89. 成長期スポーツ障害の腰椎分離症と非特異的腰痛のX線による腰椎分節可動域の違い	―	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	成長期スポーツ選手の腰椎分離症と非特異的腰痛における腰椎の各椎体間の可動性について検証した。X線またはMRIにてL5片側の腰椎分離症（分離群）と診断された10名と、非器質的腰痛症（腰痛群）と診断された12名の臥位腰椎側面像のX線動態撮影により、L1－Sの各椎体間の最大伸展時の前弩角および最大屈曲時の後弩角を測定し、さらに最大伸展時と最大屈曲時の腰椎分節角を計測し、その差から各椎体間の分節可動域を算出した。結果、最大伸展時の前弩角は、分離群が腰痛群に比して高値を示し、腰椎の分節可動域は、分離群が腰痛群に比して高値を示した。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：中尾英俊、稲葉考洋、森藤武、金子元春、木下和昭、橋本雅至、大槻伸吾
90. 小学生軟式野球選手におけるSide Bridge testの有用性	―	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会	小学生軟式野球選手に野球検診を実施しており、今回、小学生軟式野球選手にSBを実施し、傷害との関連を調査し、さらにSBの負荷量設定

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
testの有用性			学術集会 （神戸）	傷害との関連を調査し、さらにSBの負荷量設定を検討した。結果、今回の条件下の調査においては、SBと投球による傷害との関連は認められなかった。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：井上直人、中川泰彰、向井章悟、佐治隆彦、藪本浩光、新宮信之、伊藤盛春、廣瀬ちえ、橋本雅至、大場友裕、木下和昭、高嶋厚史、石束友輝、吉川晋矢
91. 器質的な投球障害肘を有する小学野球選手の肩関節・体幹可動域の特徴	—	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	器質的な投球障害肘を有する小学生野球選手における肩関節・体幹可動域の特徴を検討した。対象は、投球障害肘と診断された小学生野球選手（以下、障害群）と健常な小学生野球選手（以下、健常群）とした。投球側の肩関節2nd外旋は障害群が健常群に比して有意な可動域減少が認められた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：植田篤史、橋本雅至、木下和昭、小島喜義、衛門良幸、大槻伸吾
92. 下肢筋タイトネスがボールキック動作時の骨盤前傾角度に及ぼす影響の検討	—	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	下肢筋タイトネスがボールキック動作時の骨盤運動や肢位に及ぼす影響を検討した。 三次元動作解析システムにて、利き脚のインステップキックを解析した。踵腎間距離（HBD）と骨盤前傾角度の最大値に有意な相関は認められなかった。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：福本貴典、橋本雅至、田頭悟志、新谷健、板矢悠佑、高嶋厚史、幸田康宏、木下和昭、大槻伸吾
93. 小学生軟式野球選手におけるSide Bridge testと投球障害	—	平成28年5月	第51回 日本理学療法学術大会 （札幌）	軟式野球連盟に加入している小学生に対して投球障害を早期発見することを目的に野球検診を実施している。投球動作においては，上肢機能だけでなく下肢，体幹機能の重要性が報告されている。今回，体幹筋機能の検査方法を取り入れ、小学生にSide Bridgetestを実施し投球障害との関連を調査した。結果、Side Bridge testの保持時間は投球側､非投球側ともに肘障害群と障害なし群の間に有意差は認められなかった。点数の差は肘障害群が障害なし群に比べ、有意に大きい結果であった。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：井上直人、中川泰彰、向井章悟、佐治隆彦、藪本浩光、伊藤盛春、廣瀬ちえ、橋本雅至、木下和昭、高本晴輝

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
94. 高校男子サッカー選手におけるシンスプリント既往者の疾走動作の特徴について	―	平成28年5月	第51回 日本理学療法学術大会 （札幌）	シンスプリント（Medial Tibial Stress Syndrome　以下，MTSS）の発生要因は下腿内側筋群の伸張性低下や足部の過回内による伸張ストレスによるとの報告が多い。我々は高校男子サッカー選手に対するフィジカルチェックにて明らかな特徴が認められなかった。そこで今回、MTSS 群と MTSS 既往の無い群（以下，control 群）の動作時アライメントを比較し MTSS 群の動作的特徴を検討した。 結果、静的アライメントと ROM には有意差が認められなかったが、動的アライメントでは足関節の回内角度と足部外転モーメントに有意差が認められた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：幸田康宏、田頭悟志、新谷健、福本貴典、板矢悠佑、高嶋厚史、林孝明、春日勇磨、木下和昭、橋本雅至
95. 野球経験年数での肩関節回旋可動域の変化	―	平成28年7月	第8回 日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 （福岡）	小中学生の野球経験年数別での肩関節可動域の変化について検討した。結果は野球経験年数の増加に伴い、両側共に肩関節90°外転位での外旋角度と全可動域に有意な低下傾向が認められた。以上より、小中学生の野球選手の肩関節90°外転位での外旋角度と全可動域は野球経験の増加に伴い減少していくことが考えられ、今後の投球障害治療の一助となる可能性が示された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下和昭，中川泰彰，向井章悟，佐治隆彦，薮本浩光，井上直人，橋本雅至，大槻 伸吾
96. 成長期野球選手の腰椎分離症における股関節屈筋群と伸筋群の筋力の検討	―	平成28年9月	第42回 日本整形外科スポーツ医学会 （札幌）	腰椎と股関節の運動時における連動について着目し、腰椎分離症による腰痛と、股関節周囲筋の筋機能との関連性について検討した。結果、分離症を有する選手の投球軸足股関節の屈曲筋力、伸展筋力ともに低く、ステップ脚の股関節屈曲筋力が有意に低かった。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：中尾英俊，稲葉考洋，木下和昭，濱田太朗，森藤武，橋本雅至，大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
97.　ボールキック動作における体幹運動の解析	―	平成28年9月	第42回 日本整形外科スポーツ医学会 （札幌）	サッカー選手の特有なボールのキック動作では、骨盤から下肢の分析が多く、体幹の詳細な分析は少ない。今回はキック動作中の体幹運動に着目し検討した。結果、インステップキックは体幹伸展位、蹴側へ側屈させて力を貯め、インパクトに向けて骨盤と胸郭が相反する動きを伴いながら、急激に体幹を屈曲し、軸側方向へ側屈させていくことが示唆された。また水平面上では骨盤と胸郭が相反する回旋を伴いながら体軸を調整し、脊柱を一定方向へ回旋させている可能性が示唆された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，中尾英俊，福本貴典，大槻伸吾
98.　童期野球選手における肩肘関節障害者の肩関節可動域の特徴～健常群と障害群との比較～	―	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	学童期野球選手における野球経験年数別での肩、肘関節に障害を有する者の肩関節可動域の特徴について検討した。野球開始1年目から4年目の障害群では、投球側の2nd外旋と2nd全可動域が健常群に比して有意に可動域が低下していた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下和昭、中川泰彰、向井章悟、藪本浩光、新宮信之、伊藤盛春、井上直人、廣瀬ちえ、橋本雅至、大槻伸吾
99.　中学生と高校生野球選手における投球障害の危険因子の違い	―	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	投球障害（Throwing Injury、以下TI）の危険因子を年代別で調査しTIの要因となる成長に伴う身体的特徴の違いについて検討した。TIと関連性の高かった項目は小中学生では投球側elbow push testとlnitial abduction test、高校生では投球側EPTと肩関節2nd外旋可動域、股関節内旋可動域左右差であった。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：衛門良幸、橋本雅至、小島喜義、植田篤史、大木毅
100.　小学生軟式野球選手におけるSide Bridge testと投球障害肘との関係　～第2報～	―	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	小学生野球選手に対して野球肘検診を実施しており、小学生野球選手の体幹筋機能検査として我々が用いているSide Bridge test（SB）の負荷設定の変更が必要であることを報告した。今回、SBの負荷を変更し投球障害との関連を調査した。SBの差は肘傷害群が低い傾向であったことから、SBの結果に左右差が認められることが示唆された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：井上直人、中川泰彰、向井章悟、藪本浩光、新宮信之、伊藤盛春、廣瀬ちえ、橋本雅至、木下和昭

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
101. 座位での体幹荷重支持機能評価における筋活動	—	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	動作の体幹機能評価として、端座位での立ち直り姿勢から鉛直方向への負荷を課した方法（体幹荷重支持機能評価）を用いている。今回は本法の筋活動を検討した。体幹荷重支持機能評価において、腹直筋、内腹斜筋、外腹斜筋、多裂筋、腹横筋が有意に高かった。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、中尾 英俊、板矢悠佑、福本貴典、高嶋厚史、田頭悟志、田邊智、大槻伸吾
102. 高校野球選手の腰痛症の体幹・股関節筋力と腰椎アライメントとの関係性	—	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	野球選手の腰痛発生頻度は高く、今回、ハンドヘルドダイナモメーター（HDD）にて野球選手の体幹と股関節の筋力を測定し、腰痛者と腰痛の既往がない者で比較した。腰痛群の筋力は股関節屈筋群が低下傾向を示し、同様に腰椎アライメントは前湾角が小さいことが認められた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：中尾英俊、木下和昭、橋本雅至、大槻伸吾
103. 階層別Core stability testにおける身体重心動揺についての検討	—	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	幅広い筋機能レベルの評価が可能となるように階層別Core stability test（CST）を難易度別に考案し、身体重心動揺の観点から、評価方法の難易度の設定に関する妥当性を検討した。単位軌跡長、加速度は有意に増加し、難度が高くなることにより姿勢保持における不安定性が増加することが示唆された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：高嶋 厚史、橋本雅至、田頭悟志、新谷健、福本貴典、板矢悠佑、幸田康宏、木下和昭、大槻伸吾
104. 男子高校野球選手におけるSide Bridge Testと走タイムの関係性	—	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	男子高校硬式野球部員に対して、体幹筋機能検査としてSide Bridge Test（以下、 SB）を実施しており、テストの目標値を提示するために走タイムとの関連性を検討した。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：板矢悠佑、橋本雅至、田頭悟志、木下和昭、新谷健、福本貴典、高嶋厚史、幸田康宏、大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
105. 片側の体幹の荷重支持機能の向上が動作に与える効果	―	平成29年5月	第52回 日本理学療法学術大会 （千葉）	歩行や走行，ジャンプ動作では体幹に対して鉛直方向に荷重負荷が加わりながら，片脚で支持するような場面が求められ，その時の体幹機能の評価方法として座位での片側の体幹荷重支持機能（Trunk Righting Test，TRT）に着目している。今回、TRT の向上がどのような動作能力の向上に効果を与えるのか検討することとした。結果、pre 期と post 期の間では TRT と膝関節伸展の最大等尺性筋力，ジャンプ効率に有意な増加が認められ，side hop test には有意な低下が認められた。post 期と retraining 期の間では TRT，ジャンプ効率に有意な低下が認められた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本 雅至，中尾 英俊 田頭 悟志，大槻 伸吾
106. 小学生野球選手における肩肘関節障害発生者の肩関節可動域の特徴1年間の縦断的検討	―	平成29年6月	第９回 日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 （札幌）	1年間に肩肘関節の障害が発生した小学生野球選手の肩関節可動域の特徴について検討した。対象は2015年度から2016年度の1年間に肩肘関節に障害を有さなかった小学生野球選手（健常群）140名と肩肘関節に障害を有した小学生野球選手（障害群）38名とした。結果、障害群は2015年度に比して2016年度の投球側の2nd外旋が有意に低下していた（p＜0.05）。小学生野球選手において新規に発生した肩肘障害者は投球側の2nd外旋が低下していた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下和昭，中川泰彰，向井章悟，佐治隆彦，薮本浩光，井上直人,伊藤盛春，橋本雅至，大槻 伸吾
107. 高等学校におけるスポーツ活動支援事業の利用状況とその意義	―	平成29年9月	第43回 日本整形外科スポーツ医学会 （宮崎）	本学では付属の高等学校に対し、スポーツ活動支援事業を実施している。本研究の目的は、その事業の利用者状況とその意義について考察する。結果、開始当初は受診率が低値であったが、継続的に活動を行うことにより増加する傾向であった。また医療機関を受診した者は、重度なスポーツ傷害と診断された利用者も存在し、医療機関への受診の重要性が示唆された。これらの結果は、学校保健内において理学療法士が顧問や保護者と良好な関係を保ちながら、継続的なスポーツ活動支援事業を実施する重要性を示唆する。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、澳昂佑、北川智美、長野聖、森永敏博、星野祐一、廣島和夫
108. 倒立姿勢保持における肘関節と肩甲骨周囲の筋活動～上肢の	―	平成29年11月	第28回 日本スポーツ医学会 学術集会	小学生女子の器械体操選手の肘関節障害に着目して、競技特性である上肢での荷重肢位における筋活動から、力学的考察を行った。特に肘関

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
肩の筋活動～上肢の肢位の違いによる変化～			学術集会 （東京）	る筋活動から、分析的考察を行った。特に肩関節障害の小学生に多い、肩関節回旋位に観点を置き肩甲骨から肩関節肘関節の制御する筋活動に代償運動を示す運動を示唆する筋活動が認められた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、横田尚子、澳昂佑、来田宜幸、星野祐一
109. 姿勢保持の難度別に分けたCore stability test の筋活動につい ての検討	—	平成29年11月	第28回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （東京）	Core stability test を用いて体幹筋機能を測定するにあたり、対象者の身体特性を反映して用いる姿勢保持に難度別の条件を検討している。実際に考案した方法ごとに筋活動を測定し、難度ごとに筋活動から見た運動負荷の違いを検討した。結果、いくつかの条件間で有意差が認められ、難度別に分けることがより具体的になった。。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：高嶋 厚史、橋本雅至、田頭悟志、福本貴典、板矢悠佑、木下和昭、大槻伸吾
110. 小学生軟式野球選手における関節可動域の経年変化と投球障害肘との関係	—	平成29年11月	第28回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （東京）	小学生の野球選手に対して継続して関わり、メディカルチェックを行っている。対象の小学生の肘関節障害が、スポーツ活動を継続し、時間経過を伴ってどのように発生するかを検討している。今回は左右の関節可動域に着目して股関節の回旋可動域の減少と肘障害発生との関連性を示唆した。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：井上直人、中川泰彰、向井章悟、藪本浩光、新宮信之、伊藤盛春、橋本雅至、木下和昭
111.器械体操に必要な倒立姿勢と身体因子との関連性	—	平成30年6月	第10回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 （福岡）	直線的な倒立と身体因子の関係について検討した.倒立の評価は,静止画撮影にて倒立時の肩関節屈曲角度(以下,肩屈曲)と胸骨の傾斜角度を求めた.身体因子の測定項目は肩甲上腕関節と肩甲胸郭,体幹の柔軟性,複合的な肩関節の柔軟性,肩-肩甲骨の荷重位での安定性,体幹筋機能,バランス能力とした.結果,直線的な倒立は,各関節の柔軟性よりも,胸郭を含めた肩関節の可動性と肩-体幹の安定性が影響していた. 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，横田尚子，澳昂佑，来田宜幸，西澤勇一朗，星野祐一
112.腰痛症の高校野球選手に対する股関節筋力トレーニングが腰椎前弯角に及ぼす影響	—	平成30年6月	第10回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 （福岡）	高校野球選手に股関節屈曲筋力トレーニングを実施させ、腰椎前弯角と腰痛の変化を検討した。対象は腰痛群12名と、腰痛がない選手16名をコントロール群とした。トレーニング期間は4週間とした。介入前後に腰椎前弯角と体幹・股関節筋力を計測した。なお腰痛群のみVASを評価した。結果、股関節屈曲筋力トレーニングは、腰椎アライメントの変化と自覚的な痛みの改善に影響を与えた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：中尾英俊，木下和昭，橋本雅至，大槻伸吾
113.小学生軟式野球選手における投球障害肘発症時の体幹筋機能の変化	－	平成30年9月	第44回日本整形外科スポーツ医学会学術集会（徳島）	投球障害発生の原因として体幹筋機能の低下はその一要因としての報告があり、小学生軟式野球選手を対象に体幹筋機能検査としてSide Bridge testの変化を調査した．過去1年以内に投球側の肘関節に障害の経験がない小学5年生54名を対象とし，Side Bridge testの1年の変化を調査した．結果，新たに投球障害肘を発症した選手は，投球側のみSide Bridge testの向上が認められなかった．成長に伴い体幹筋機能の向上が認められない場合，小学生軟式野球選手の投球障害肘発生に影響を与えている可能性が示唆された． 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：井上直人，中川泰彰，向井章悟，横田尚子，橋本雅至，木下和昭
114.ジュニア体操競技における倒立時の疼痛調査	－	平成30年9月	第44回日本整形外科スポーツ医学会学術集会（徳島）	H県ジュニア体操競技選手権大会に出場した選手に対して倒立時の疼痛発生頻度や部位について検討した。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，横田尚子，澳昂佑，来田宣幸，西澤勇一郎，星野祐一
115.地域在住高齢者における体幹筋機能とロコモティブシンドロームとの関係について144.	－	平成30年9月	第44回日本整形外科スポーツ医学会学術集会（徳島）	健康教室に通う地域高齢者を対象に、体幹筋機能検査を行い、体幹機能と身体活動量との関係を調査した。結果、体幹機能の良好な高齢者と機構低鏡と止められる高齢者では、日常生活での身体活動量に客観的な差が認められた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：高嶋厚史，大槻伸吾，橋本雅至，田頭悟志，新谷健
116.地域在住高齢者の園芸活動の実態 ～園芸習慣のアンケートからわかったこと～	－	平成30年9月	第8回日本認知症予防学会学術集会（東京）	地域の高齢者において園芸を行う理由は男女で異なる が，他者と関わり，つながるツールとして園芸が介在 していることが示唆された。また、前期高齢者と後期高齢者では園芸をする環境条件は違っており，年を重ねてからも，その時の身体機能に沿った方法で継続することが可能な趣味活動であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：髙野珠栄子，田崎史江，橋本雅至，野村和樹，山口隆司，中村美砂
117.健康教室へ参加されている高齢者に対する体幹機能評価法が血圧・心拍数に及ぼす影響について	－	平成30年11月	第29回日本臨床スポーツ医学会学術集会（札幌）	高齢者の体幹機能をブリッジ姿勢にて評価し、その評価方法が血圧と心拍数に及ぼす影響について検討した。ブリッジ姿勢を用いた体幹機能評価法は、血圧と心拍数の観点からアメリカスポーツ医学会が定める基準の範囲内での変化であったため安全に実施可能であることが示唆さ

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				れた. 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：田頭悟志，橋本雅至，高嶋厚史，福本貴典，新谷健，大槻伸吾
118.小学生軟式野球選手の肘障害に影響を与える因子1年前の検診結果から	－	平成30年11月	第29回日本臨床スポーツ医学会学術集会（札幌）	本研究は1年前の野球検診（以下、検診）の結果から肘障害に影響を与えている因子について検討した。対象は2015年から2017年に行われた検診に、2年連続 で参加した小学生軟式野球選手474名とした。学童期軟式野球選手では、筋力やパフォーマンスが高く、野 球開始年齢が遅い選手ほど、肘障害の原因となる関節への力学的負荷が大きくなる可能性が示唆された. 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下和昭，中川泰彰，向井章悟，伊藤盛春，井上直人，横田尚子，橋本雅至
119.Side-bridge姿勢における股関節の肢位の違いが腰部周囲筋の筋活動に及ぼす影響	－	平成30年11月	第29回日本臨床スポーツ医学会学術集会（札幌）	Side－bridge姿勢における股関節の肢位の違いが腰部周囲筋の筋活動に及ぼす影響を検討した。Side－bridge姿勢における挙上側の股関節肢位の変化は、体 幹の姿勢制御に必要なローカル筋群の筋活動に加えて、股関節より遠位の下肢姿勢保持による負荷量の増大に対応した腰部周囲グローバル筋の筋活動が増大すると考えられた。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：齋藤優季，木下和昭，橋本雅至，来田宣幸，大槻伸吾
120.高校男子サッカー選手におけるBridge姿勢の保持時間と筋厚との関係性	－	平成30年11月	第29回日本臨床スポーツ医学会学術集会（札幌）	Bridge姿勢の保持時間と筋厚との関係性及びトレーニング効果について検討した。Side Bridge（SB）とFront Bridge（FB）においてトレーニング群は非運動群よりSB・FBの保持時間と筋厚は優っていたが、SB・FBの保持時間と筋厚との相関はなく、Bridge姿勢の保持には筋持久力や共同運動などが影響すると推察された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：新谷健，橋本雅至，木下和昭，田頭悟志，福本貴典，高嶋厚史，大槻伸吾
121.中高齢者の足部アーチ低下の身体要因について	－	平成30年11月	第29回日本臨床スポーツ医学会学術集会（札幌）	40歳代以降の足部アーチ高に着目し、低アーチの要因について検討を行った。対象は124名（男性43名）調査方法は足の測定としてアーチ高と自記式のアンケート調査を行った。BMIのオッズ比0.84と独立関連因子となった 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：中尾英俊，木下和昭，森藤武，濱田太朗，橋本雅至，大槻伸吾
122.段階づけた倒立姿勢における肩関節と肩甲骨周囲筋の筋活動の変化	－	平成30年12月	第6回日本運動器理学療法学術大会（福岡）	上肢傷害からのスポーツ復帰やジュニア世代の体操選手での倒立練習は、上肢への荷重負荷を段階づける方法が重要である。そこで本研究は段階づけた倒立の練習方法における筋活動につ

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				段階づけた倒立の練習方法における筋活動について検討した。肩関節角度90°位と比較すると、135°位は肩甲骨周囲筋の筋活動の増大が起こり、倒立まで上体を挙げることにより、さらに肩甲上腕関節周囲筋の筋活動の増大が起こることが明らかとなった。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，横田尚子，澳昂佑
123.運動講座に参加している高齢者における体幹筋機能と下肢機能及び移動能力との関係について	―	平成30年12月	第6回日本運動器理学療法学術大会（福岡）	体幹筋機能の向上と下肢機能や移動能力の向上には、関係性があると考えられる。本研究では一定の運動習慣のある高齢者に対して、体幹筋機能と下肢機能や移動能力との関係性について検討した。運動習慣のある高齢者においてブリッジ姿勢で難度の高い姿勢を保 持できることが、下肢機能や移動能力の結果と関係していることが示され、一定以上の体幹筋機能を有することが下肢機能や移動能力の向上に必要であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：高嶋厚史，橋本雅至，田頭悟志，新谷健，福本貴典，木下和昭，大槻伸吾
124.倒立時の上肢障害予防に着目した練習方法の筋活動の検討(Muscle Activity Analysis of Exercise Methods Focusing on The Prevention of Upper Limb Disorders During a Handstand)	―	令和1年6月	第11回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会（札幌）	This study was to examine the muscle activity during handstands in a graded manner. The muscle activities were evaluated with the upper limb in flexion of 90°, 135°, and 180° positions and during handstand using the forearm (elbowstand). The scapular muscles showed increased muscle activity with increasing shoulder flexion angle in all postures. The shoulder muscles exhibited increased muscle activity from the 90° position to the 180° position. The elbowstand showed significantly increased muscle activity in the upper and middle trapezius muscles compared to that in the 135° position. 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下 和昭，横田 尚子，橋本 雅至，澳 昂佑，来田 宣幸，西澤 勇一郎，星野 祐一
125.コアトレーニングを効果的に進めるために、体幹(筋)機能を適切に捉える評価について	―	令和1年8月	第45回日本整形外科スポーツ医学会学術集会（大阪）	体幹筋機能の評価として考案したブリッジテストについて解説した。従来使用されるクラウスウェーバーテスト大阪市大変法との関係について検討し、実際に行ってきた成長期のスポーツ選手の測定とデータ蓄積から、その評価方法としての有用性を検討した研究を紹介した。また、コアトレーニングの継続による、体幹筋機能評価の成績の推移と腰痛発生との関係について検討した研究などから、トレーニングとその客観的な評価の重要性について提案した。 特別企画「コアトレーニングの神髄」
126.ジュニア体操競技選手における段階づけた倒立練習方法の有用性	―	令和1年11月	第30回日本臨床スポーツ医学会学術集会（横浜）	ジュニア体操競技選手に対して、段階づけた倒立練習方法の導入による上肢の疾痛発生件数と身体機能の 変化について検討した。段階づけた倒立練習方法の亭入は、肘痛を予防する一手段となることが考えられた。一方、その予防において、体幹の筋機能や柔軟性、肩一肩甲骨の荷重位での

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				安定性など多角的な変化が重重要であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下 和昭，横田 尚子，橋本 雅至，来田 宣幸，西澤 勇一郎，星野 祐一
127.上肢支持を除外したSide Bridgeの筋活動について	―	令和1年11月	第30回日本臨床スポーツ医学会学術集会（横浜）	上肢支持を除外したSBの筋活動を調査し、トレーニ ングとして有用であるかを検討した。内腹斜筋、中殿筋、大腿筋膜張筋、腓骨筋は下肢挙上をする ことにより筋活動は有意に上昇した。僧帽筋、前鋸筋は台を使用すると筋活動は有意に低下した。台を使用し上肢支持を除外することにより、体幹、下肢への筋活動を減少させることなく上肢の筋活動を低下させることが可能であった。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：田頭 悟志，橋本 雅至，木下 和昭，高嶋 厚史，福本 貴典，大槻 伸吾
128.一般ランナーと非運動者の足部アーチアライメントおよび足部の既往等に関するアンケート調査の比較	―	令和2年11月	第31回日本臨床スポーツ医学会学術集会（神戸）(Web開催)	対象はマラソン大会に出場した39名(女性12名)，平均41.7歳と日常的に運動習慣がない者111名(女性31名)，平均年齢41.7歳、両群の足部アーチ高比（足背高/切頂足長），身長，体重，BMI，足部の既往歴と既往歴による歩行困難感の有無を比較した。結果、非運動群に比べR群のアーチ高比は左右とも高く，足の既往および歩行障害の経験の割合が高いことがわかった. 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：中尾 英俊，森藤 武，濱田 太朗，橋本 雅至
129.ジュニア体操競技選手における Sever 病が発生する身体因子	―	令和2年12月	JOSKAS/JOSSM2020	ジュニア体操競技選手におけるSever病が発生する身体因子を検討した。結果、足アーチ高率が低い選手ほどsever病が発生しやすいことが示唆された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：木下和昭，横田尚子，橋本雅至，西澤勇一郎，星野祐一
130.男子小学陸上競技選手における足趾把持筋力と100m走記録の関係	―	令和3年10月	第32回日本臨床スポーツ医学会学術集会（東京）	足趾把持筋力（TGS）は、静止立位および前傾姿勢の安定性や転倒などに関連している。TGSと100m走の関係について検討した．結果、TGSと100mの関係は、4年および5年において有意な相関が認められた。TGSは走行時の蹴り出しに関与しており、小学陸上競技選手を対象とした場合でもTGSは100m走に影響する可能性を示した。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：濱口幹太，露口亮太，橋本雅至，中西康人，仲田秀臣，宮本忠吉，大槻伸吾
131.高校生中・長距離選手の足部評価と走タイムの関係性について	―	令和4年2月	第36回日本体力医学会近畿地方会(神戸)	足部を評価する方法であるArch height index（AHI）と走タイムの関係性について検討した。結果、男性では、アーチが低いほど、3000mの走タイムが速い結果が示された。女性においては、足趾把持筋力が高いほど1500mが速い結果で

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				あった。よって、足部評価と走タイムの間には関係を示す可能性が示唆された。 本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：濱口幹太、露口亮太、橋本雅至、仲田秀臣、宮本忠吉、大槻伸吾
132.小学生における足部機能と身体機能の関連　足アーチと足趾把持筋力に着目して	―	令和4年8月	第69回日本教育医学会大会 （大阪　オンライン開催）	本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：濱口 幹太，露口 亮太，吉田 平，橋本 雅至，仲田 秀臣，大槻 伸吾
133.男子小学生の陸上競技経験の有無における足趾把持筋力と走速度の関係について	―	令和4年10月	第33回　日本臨床スポーツ医学会学術集会（札幌）	本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：濱口 幹太，露口 亮太，吉田 平，橋本 雅至，仲田 秀臣，大槻 伸吾
134.高校生中・長距離選手の足部評価と走タイムの関係性について	―	令和4年10月	第77回　日本体力医学会（栃木　オンライン開催）	本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：濱口幹太、露口亮太、橋本雅至、仲田秀臣、宮本忠吉、大槻伸吾
135.小学生の足趾把持機能と身体機能に関する縦断的観察	―	令和5年8月	第70回日本教育医学会大会 （オンライン開催）	本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：濱口幹太，露口亮太，小林実優，橋本雅至，仲田秀臣，大槻伸吾
136.男性大学生アスリートの足部機能とバランス能力の特徴	―	令和5年9月	日本体力医学会(東京)	本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：濱口幹太，露口亮太，吉田平，小林実優，橋本雅至，仲田秀臣，大槻伸吾
137.足趾把持持久筋力とバ	―	令和5年9月	日本体力医学会(東京)	本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
ランス能力における筋活動の検討				本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：吉田平，露口亮太，小林実優，橋本雅至，大槻伸吾
138.慢性足関節不安定症（CAI）を有する大学バスケットボール選手の足部機能および筋活動 の特徴	－	令和5年11月	第34回　日本臨床スポーツ医学会学術集会（横浜）	本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：濱口幹太，露口亮太，小林美優 ，橋本雅至，仲田秀臣，大槻伸吾
139.一般市民ランナーの足趾把持筋力および足部形態の特徴	－	令和6年3月	第36回日本体力医学会近畿地方会(大阪)	本人担当部分：研究計画検証、データ分析、結果考察研究指導 共同発表者：濱口幹太、露口亮太、小林実憂 、橋本雅至、仲田秀臣、大槻伸吾
（研究会、その他）				
28. 高校男子サッカー選手における関節弛緩性とその特徴	－	平成25年6月	第23回 関西臨床スポーツ医科学研究会 （大阪）	運動量が多い高校サッカー選手の関節弛緩性について調査した。成長期の高校生において関節の安定性や不安定性はスポーツ障害の要因になることが考えられ、個人差が多い成長段階にあるスポーツ選手の特徴を考察した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：山崎岳志，橋本雅至，井上直人，古川博章，吉川晋也，石東友輝
29. ハンドヘルドダイナモメーターを用いた体幹機能評価方法の信頼性と妥当性	－	平成25年6月	第23回 関西臨床スポーツ医科学研究会 （大阪）	体幹筋の筋力測定にハンドヘルドダイナモメータを用いた測定に関してその再現性について級内相関係数を用いて検討を行った。再現性のある方法として課題が残り、方法のさらなる検討を必要とする。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，米田勇貴，中雄太，北西秀行，大八木博貴，柴沼均

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
30. Trunk Righting Test と体幹機能の関係性	―	平成26年6月	第24回 関西臨床スポーツ医科学研究会 （大阪）	体幹機能評価として考案したTrunk Righting Testと体幹筋の持久性と協調性を見るブリッジテストとの関連性から、体幹筋の評価方法について検討した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，北西秀行，井上直人，植田篤志
31. 足部横アーチ変化の測定方法の検討	―	平成26年6月	第24回 関西臨床スポーツ医科学研究会 （大阪）	外見の形状では測定が困難である足部横アーチの客観的な測定方法について考案し、その方法の有用性につて検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平，藤竹俊輔，来田晃幸，岸本恵一，橋本雅至，大槻伸吾，大久保衛，熊井司，田中康仁
32. 高校部活動に対するフィジカルサポート	―	平成27年6月	第25回 関西臨床スポーツ医科学研究会 （大阪）	縦断的に行っている高校サッカー選手へのフィジカルサポートについて具体的に紹介した。今まで行ってきた経験から得た課題について考察を加えた。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：田頭悟志、新谷健、福本貴典、板矢悠祐、高嶋厚史、幸田康宏、林孝明、橋本雅至
33. 大学サッカー選手の人工芝グラウンドにおけるスポーツ傷害の経時的変化-人工芝グラウンドに対するゴムチップ補充の影響-	―	平成27年6月	第25回 関西臨床スポーツ医科学研究会 （大阪）	サッカー競技中に発生する外傷や障害を引き起こす要因は，選手が使用しているグラウンドサーフェイスも一要因になると報告されている。今回，長期経過した人工芝グラウンドに特殊珪砂やゴムチップを補充したことによる，スポーツ傷害発生への影響を検討した．結果、人工芝グラウンドでは年数が経過するとともに下肢捻挫発生率が増加し，ゴムチップの補充後では下肢肉離れの発生率が有意に減少した． 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平，藤竹俊輔，来田晃幸，岸本恵一，橋本雅至，大槻伸吾，大久保衛，熊井司，田中康仁

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
34. 腰椎分離症者のスポーツ復帰期間による腰椎前弯角と腰椎椎間可動域の違い	―	平成28年6月	第26回 関西臨床スポーツ医科学研究会（大阪）	腰椎矢状面上のアライメント評価は、分離症のストレス要因の特徴を見出すうえで重要な項目であると考えられる。今回、スポーツ復帰までの期間を急性期と亜急性期との境界である4週経過を基準とし、X線撮影による腰椎前弯角と腰椎椎間可動域について検討した。結果、腰椎（L1-S）前弯角は、最大屈曲時、4週未満群に対し、4週以上群は低値を示し、最大伸展時では、4週未満群に対し4週以上群は高値を示した。腰椎椎間可動域は、4週未満群に対し、4週以上群は低値を示した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：中尾英俊、稲葉孝洋、木下和昭、森藤武、橋本雅至、大槻伸吾
35. 姿勢保持の難度別に分けたCore stability testの保持時間についての検討	―	平成29年6月	第27回 関西臨床スポーツ医科学研究会（大阪）	我々は、体幹や股関節周囲筋の総合的な筋機能を反映するBridge活動を利用したSide Bridge(SB)とFront Bridge(FB)をCore stabilityの評価として用いている。客観的な指標として姿勢の保持時間を用いて評価してきたが、多様な対象者に対する評価として課題があった。そこで今回、姿勢保持の難度に着目することが必要であると考え、SBとFBの姿勢を難度に分けて階層別に評価する方法としてCore stability test(CST)を考案した。結果、SBとFBの両姿勢においてB、C、D順に姿勢保持時間が有意に長くなっていた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：高嶋厚史、橋本雅至、田頭悟志、新谷健、福本貴典、板矢悠佑、木下和昭、大槻伸吾

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和６年３月31日

氏名　山形　力生

研究分野	研究内容のキーワード
日常生活援助技術 高齢者支援 臨床教育技術	福祉用具（自助具）、住宅改造、障害と日常生活、 高齢に伴う機能低下に対する援助、生活環境への援助

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 1）講義資料の作成	平成18年 ～ 平成31年	姫路獨協大学医療保健学部作業療法学科 科目名「福祉機器特論、チーム医療特論、身体障害作業療法治療学、作業療法理論特論」講義内容によって多くの専門書等から資料を集め授業資料を作成した。
	令和元年 ～ 令和４年	奈良学園大学リハビリテーション学科作業療法専攻 科目名「作業療法概論、身体障害作業療法治療学、日常生活活動学、生活環境学等」講義内容によって多くの専門書等から資料を集め授業資料を作成した。
2)パソコンを利用した視聴覚教材の作成	平成18年 ～ 平成31年	姫路獨協大学医療保健学部作業療法学科 科目名「福祉機器特論、チーム医療特論、身体障害作業療法治療学、作業療法理論特論」講義内容によって、できるだけイメージできるように写真スライドの作成・提示、アニメーションによる図表を多く取り入れた。
	令和元年 ～ 令和４年	奈良学園大学リハビリテーション学科作業療法専攻 科目名「作業療法概論、身体障害作業療法治療学、日常生活活動学、生活環境学等」講義内容によって、できるだけイメージできるように写真スライドの作成・提示、アニメーションによる図表を多く取り入れた。
3)演習問題の提示	平成18年 ～ 平成31年	姫路獨協大学医療保健学部作業療法学科 科目名「身体障害作業療法治療学」前期、後期のそれぞれ中期および後半の時期に演習問題を提示し、学習内容がどの程度身に付いているかを学生自ら点検してもらう機会とした。また、これにより学生が適切に学期末試験の準備ができるように配慮した。
	令和元年 ～ 令和４年	奈良学園大学リハビリテーション学科作業療法専攻 科目名「作業療法概論、身体障害作業療法治療学、日常生活活動学、生活環境学等」講義内容によって、前期、後期のそれぞれ中期および後半の時期に演習問題を提示し、学習内容がどの程度身に付いているかを学生自ら点検してもらう機会とした。また、これにより学生が適切に学期末試験の準備ができるように配慮した。
4)学期末試験の工夫	平成18年 ～ 平成31年	姫路獨協大学医療保健学部作業療法学科 「身体障害作業療法治療学」出題形式を客観テストと記述試験をバランス良く作成した。客観テストでは国家試験を意識した回答方法を盛り込んだ。これにより学生が国家試験の回答方法に慣れるようにした。記述試験は、文章表現等の表現力の育成をねらいとし、作成に工夫をこらした。

	令和元年 ～ 令和４年	奈良学園大学リハビリテーション学科作業療法専攻 科目名「作業療法概論、身体障害作業療法治療学、日常生活活動学、生活環境学等」出題形式を客観テストと記述試験をバランス良く作成した。客観テストでは国家試験を意識した回答方法を盛り込んだ。これにより学生が国家試験の回答方法に慣れるようにした。記述試験は、文章表現等の表現力の育成をねらいとし、作成に工夫をこらした。
5)学年担任およびチューター活動	平成 20 年 ～ 令和４年	入学より卒業までを継続して担当している。定期的に学生個人面談を行い、各学生の課題の確認と指導、学科教員への周知に努めている。担当学生が１回生時には、学習面に加え学校生活全般の状況把握を行い、２回生時は学習面を重点的に指導・助言を行った。3 回生からは臨床実習時の状況把握と必要な指導を行っている。
6)臨床実習訪問指導	平成 20 年 ～ 平成 31 年	2 回生時および 3 回生時の臨床実習実施中に、実習施設に訪問し、学生の問題や今後の実習の目標について、実習指導者と協議する。毎年、各学年延べ 20 施設程度の実習訪問指導を行った。
7)臨床現場技術指導	平成 23 年 ～ 平成 31 年	卒業生を対象に週１回、近隣のリハビリテーションの臨床現場において技術指導を行っている。在校生の臨床実習指導を担当する指導者の養成も兼ねている。
２　作成した教科書，教材 1)教科書「作業療法士が選ぶ自助具・生活機器」	平成 22 年 ～ 平成 31 年	臨床でよく使われる自助具・生活機器について紹介し、必要な材料、制作方法、適応事例などについて紹介した。（255 頁） 頸髄損傷などの四肢麻痺に対するコンピューター機器に対する自助具についての項を解説した。(P. 124～P. 126) 後に、姫路獨協大学で「福祉機器特論、身体障害作業療法学」の資料として使用した。
2)教科書「生活支援技術・介護過程」（黎明書房）	平成 22 年 ～ 平成 31 年	居住環境の整備や身じたく、移動、食事、入浴、排泄、睡眠等における実践的な介護の方法と、介護過程の意義から実例をふまえた介護の実践的展開やチームアプローチまでを、初めて学ぶ人でも分かるようイラストや図を交え解説した。 第２章 自立へ向けた居住環境の整備を担当　(P24-P40) ヘルパーを対象にした講習において教科書として使用した。
3) 教科書「老年看護学」（ピラールプレス）	平成 22 年 ～ 平成 31 年	高齢者の身体的・心理的特徴を十分把握したうえで、高齢者のQOLの向上を目指した看護実践を意識的に取り上げた、老年看護の実践に向けての質の評価への取り組みを盛り込んだ看護学生向けのテキストとして使用した。
4)教科書「介護実習入門」（黎明書房）	平成 24 年	介護福祉士の養成科目のテキストとして作成、使用した。高等教育に向けた豊かな専門性と人間性の構築という主旨を踏まえたうえで、介護の専門援助に焦点を当て、その内容・方法を具体的に示した。
5)「身体障害作業療法学実習」の補助教材	平成 22 年 ～ 平成 31 年	PBL(問題解決型学習)のために、学生の主体的なグループワークにより進められるが、その臨床症例を実際の症例から選択し、教材用に修正し作成した。学生はこの教材を基に、グループワークを行った。

6)OSCE（客観的臨床能力試験）のための模擬患者症例プロフィール資料	平成 22 年 ～ 平成 31 年	学生が受ける試験の模擬患者のプロフィールを実際の臨床例に照らし合わせ作成した。症例は、脳卒中などの内科系と骨折などの整形外科の 2 症例作成した。4 回生の総合臨床実習前の客観的臨床能力試験の学生提示資料として使用した。
7)実体験型課題「動作分析のフローシート」の作成	平成 22 年 ～ 平成 31 年	「日常生活活動学」において日常の動作の分析を学習する際に、実際の動作分析を教材として行う。初学者の学生でも動作分析が身につくように、動作分析のフローシートを作成した。このシートに書き込むことで動作の分析が段階的に学習できるように工夫した。 食事・更衣・トイレ・整容・入浴の 5 種類の動作につい
8)演習問題の作成	平成 22 年 ～ 平成 31 年	「日常生活活動学、身体障害作業療法学」のそれぞれの中期および後半の時期に演習問題を分野ごとに 20 問程度作成した（合計 80 問）。学習内容がどの程度身に付いているかを学生自ら点検してもらうために使用した。
9)国家試験模擬試験の作成	平成 25 年 ～ 平成 31 年	実際の国家試験の出題傾向に合せ、3 回分の模擬試験問題を作成した。4 回生時の演習の中で使用した。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 1)姫路獨協大学医療保健学部作業療法学科学生による授業評価	平成 19 年 ～ 平成 28 年	科目：「福祉機器特論、チーム医療特論、身体障害作業療法学、作業療法理論特論」点検・評価の結果：長所としては、今回の調査による得点は平均を上回っており、授業目標は達成されていると理解した。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 1)奈良県介護支援専門員　現職者講習　講師	平成 15 年 ～ 平成 28 年	奈良県の現職者介護支援専門員に対象に「福祉用具・住宅改修」の実際について講義指導した。平成１５年より毎年１回担当、現在に至る。
2)文部科学省教員免許更新講習　講師	平成 25 年 ～ 平成 31 年	教員免許更新講習において「障害支援（福祉機器領域）論」（平 25-30501-56332 号）講師として年 2 回担当する（1 回 6 時間）
５　その他 （講演） 1)姫路市シニアオープンカレッジ「介護に役立つ福祉用具の基礎知識」	平成 24 年 8 月 5 日～ 平成 24 年 8 月 31 日	姫路市の依頼により、姫路市民を対象にした姫路市シニアオープンカレッジ「介護に役立つ福祉用具の基礎知識」について企画した。また、5 回の講座の講師を担当した。

2)姫路市立生涯学習大学校公演「地域の活動を支える」	平成 25 年 12 月	「地域の活動を支える」の第３回として「介護に役立つ福祉用具の基礎知識」について公演する。歳を重ねても、地域で生き生きと暮らしていくために役立つ福祉用具について紹介し、介護保険制度での金銭的補助も含めて、地域生活における介護活動への利用について述べた。
3)姫路市立生涯学習大学校講座 「暮らしに役立つ福祉用具について」	平成 28 年 12 月	健康生活コースの受講生を対象に「暮らしに役立つ福祉用具について」３回の講座の講師を担当した。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　資格，免許		
看護士免許	昭和 58 年 3 月	（厚生省第 4985 号）
作業療法士免許	昭和 63 年 4 月	（厚生省第 13239 号）
福祉用具プランナー	平成 10 年 3 月	財団法人テクノエイド協会（第 9-0100 号）
認定作業療法士	平成 16 年 4 月	社団法人日本作業療法士協会
臨床実習指導者研修修了認定	平成 31 年 2 月	社団法人日本作業療法士協会（認定番号 1790）
２　特許等 特になし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 特になし		
４　その他 奈良県介護実習・普及センター　運営委員会委員	平成 21 年 4 月 ～ 現在に至る	運営委員長および学識経験者の委員として運営委員会に出席（奈良県知事より嘱託）。

研究業績等に関する事項							
	著書，学術論文等の名称	単著・共著	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	著者名	頁	概　　要
	（著書）						
1	生活支援技術・介護過程	共著	2010	黎明書房	守本とも子、星野政明	24-40	（第２章　自立へ向けた居住環境の整備を担当）
2	老年看護学	共著	2012	黎明書房	川野雅資、守本とも子	258-266	（高齢者を介護する家族への援助を担当）
3	介護実習入門	共著	2012	黎明書房	守本とも子、星野政明	106-134	（第３節　整容の介助を担当）
	（学術論文）						
1	作業療法学生のOSCEの成績とコミュニケーション・スキルの関連について	共著	2014	兵庫県作業療法士会機関誌第3巻1号	◎山形力生,梅本静香,眞々部仁美，櫻井秀雄	10-18	作業療法学生にとって対人関係能力を含むコミュニケーション・スキル（以下CS）を獲得することは重要な課題といえる。今回、客観的臨床能力試験（以下OSCE）の成績とCSとの関連について検討を行った。作業療法学科4回生50名を対象として、臨床総合実習前に面接と検査測定の2課題のOSCEを実施した。CSの評価はコミュニケーション・スキル尺度（ENDCOREs）を用い、研究目的を説明し同意を得た上で調査を実施した．分析はOSCE合格群と不合格群のENDCOREs得点について比較検討し、ENDCOREsの下位6因子についても比較を行った。その結果、ENDCOREs得点は不合格群に対して合格群が有意に高かった。面接課題では合格群が有意に高く、下位6因子得点の比較では「自己統制」と「自己主張」の因子得点に有意差がみられた。これらから「自己統制」と「自己主張」のスキルを獲得に重点を置かれた教育プログラムの必要性が考えられた。 ［担当部分］ 研究の企画、データーの収集および分析、論文の執筆を担当した。
2	原著　実習指導内容評価スケールの検討	共著	2015	リハビリテーション教育研究　第20号	◎山形力，櫻井秀雄、眞々部仁美	324-329	現在の大学教育では教授内容の改善や質の向上のため、学生による授業評価が行われている。しかし、実習科目については評価を受けることは少ない。特に臨床実習の指導内容に関する評価はほとんど行われていない。そこで今回、臨床実習をより良いものとするために、学生主体の実習指導内容評価スケールを検討し報告した。作業療法学科4年生39名を対象として、総合臨床実習終了後、実習指導内容を評価する質問紙を実施した。また、調査協力の得られた32名の実習指導者による自己評価を実施した。評価結果は、スケールの下位の9項目それぞれについて得点を算出し比較した。各下位の項目とも学生の評価得点が上回る傾向がみられた。さらに各項目毎の平均得点をWilcoxon-Mann-Whitney検定を行ったところ、④指導者・学生相互行為（ｐ＜0.05）、⑤学生への期待・要求（ｐ＜0.01）、⑥教員・指導者間の指導調整（ｐ＜0.05）の3項目について、学生の評価得点が有意に高い傾向がみられた。また、全項目の合計得点について学生得点と指導者得点の相関係数を求めたところ、rs=0.40（ｐ＜0.05）で正の相関がみられた。各下位の項目とも学生の評価得点が上回る傾向がみられた。有意な差がみとめられた下位の3項目は学生と指導者の指導的上の相互関係を示す項目であり、指導内容の中核をなす部分と考えられる。この項目において学生の得点が上回ったこということは指導者の指導に対して概ね満足しているものと考えられ、正の相関を示したことから指導内容評価スケールは指導内容を評価するに妥当なものと考えた。 ［担当部分］ 研究の企画、データーの収集および分析、論文の執筆を担当した。

3	原著　作業療法評価技術学実習におけるStudent Assistantの効果−上級生の視点から−	共著	2016.3	リハビリテーション教育研究第21号	◎山形力生，石浦佑一，沼田景三	416-421	本学作業療法学科では、３年生が教員の補助（Student Assistant：以下，SA）として2年生の作業療法評価学実習の授業に入り、実技指導する科目を採用している。今回、SAの効果について調査、検討した。作業療法学科3回生40名を対象として、SAに関する質問紙を参考に作成し調査を実施した。内容は、授業の満足度、2年生および教員とのコミュニケーション、授業後の学習意欲の変化、自己の知識･技術の認職度、4年生臨床実習の準備などについて調査した．調査後、項目間の相関を調べた。尚、相関係数は5％未満を有意とした。その結果、講義を通じて学んだことして、説明のスキル(90％)、専門知識技術の確認（75％）、CS（60％）を挙げた。授業の満足度は92.5％と高く、知識技術は62％が確認できたと回答した。成果として92.5％が実習の準備となり、95％が今後の学習意欲が高まったと回答した。教科書等での事前学習も十分に行い指導に望んだ学生は、対象学生に分かりやすく説明でき、実技指導もうまくできたと評価した。SAの経験は既習技術の再確認となり、4年生実習の準備の機会となると考えられ、さらなる学習意欲を高め、授業の満足度も高くなると考えられた。一方、授業準備が十分でなかった学生は、思ったよりも成果は上げられず、授業前の準備学習を確認させる工夫が今後の課題と考えられた。また、説明のスキルに関して、2年生にうまく説明しきれず、困惑する様子もみられ、状況に応じて教員が介入する必要性も考えられた。 ［担当部分］ 研究の企画、データーの収集および分析、論文の執筆を担当した。
4	教員免許更新講習における福祉用具講習の導入について	共著	2016.3	兵庫県作業療法士会機関誌第5巻1号	◎山形力生，田中優子	P12-P19	本学では大学地域貢献事業の一環として教員免許状更新研修を行っている。今回、この更新研修の一科目として福祉用具に関する科目を実施し、受講者に意識調査を実施した。調査の目的は、現場に従事する教員の福祉用具に関する講習の実態や効果および課題点を検討することにある。平成26年および平成27年に受講した教員119名を対象に、講習を選択した動機、従事する現場の詳細などの背景のほか、講習で扱った用具に対する認知度、講習の理解度、用具の現場における必要度などについて調査した．講座選択の動機から現場での用具の必要性を主とする実践群と教養として選択した非実践群に大別された。調査の結果は、用具の種類により違いがあり、実践群か否かによっても違いがみられた。講座の理解度は高く、講習の内容の構成や難易度は概ね妥当と考えられた。また、用具の適応や判定の中で作業療法士の専門性や役割について触れ、教員の作業療法士に対する認識を高めることに寄与できたと考えられた。 ［担当部分］ 研究の企画、データーの収集および分析、論文の執筆を担当した。
5	作業療法評価学実習において Student Assistant導入が学生におよぼす効果	共著	2016.3	兵庫県作業療法士会機関誌第5巻1号	石浦佑一，◎山形力生，眞々部仁美，沼田景三	p3-p7	現在、本学科の2年生は作業療法評価学実習において、3年生が教員の補助（Student Assistant：以下、SA）として2年生に実技指導を行う授業形態を導入している。SA導入の目的は、3年生から指導を受けることで、評価に関する身近な自己到達目標が設定でき、学習意欲の向上を図る，評価の重要性を具体的に学ぶ、コミュニケーションスキルの向上などである。今回、2年生の作業療法評価学実習におけるSA導入の効果を調査、検討した。本学科2年生51名を対象にSAに関する質問紙により実施した。質問項目は、3年生の指導方法、3年生との関係性、実習後の学習意欲の変化や満足度、習熟度、教員との関係性に関してであった。調査後、質問項目間の相関を調べた。3年生の指導方法や3年生との関係性、学習意欲の変化や満足度、習熟度、教員との関係性においてはポジティブな回答が多かった。 質問項目間の相関について、学習意欲は、3年生の指導方法や3年生との関係性、教員とのコミュニケーションで相関を認めた。また満足度は、3年生の指導方法、3年生への声かけや相談で相関を認めた。習熟度は、3年生の指導方法、教員への相談、3年生への声かけや相談で相関を認めた。これらの結果よりSA導入は本学科2年生にとって有効であることが示唆された。また、学習意欲、満足度、習熟度と3年生の指導方法や3年生との関係性、教員とのコミュニケーションで相関を認めたことから、3年生と2年生との関係性をいかに良好に保つか、3年生が評価技術を適切に指導できるよう教員がどのように調整していくかが重要であり、今後の課題となった。 ［担当部分］ 研究の企画、データーの収集および分析、論文の執筆を担当した。

6	原著　作業療法実習における学生のレジリエンスとストレスの関係について	共著	2017.3	リハビリテーション教育研究第22号	◎山形力生，櫻井秀雄	280-284	臨床実習は学生にとってストレス状況であり，その状況に適応し乗り越えることが要求される．ストレス状況に直面し，乗り越えるためにはレジリエンス（精神的回復力）が左右するものと考えられる．この研究の目的はレジリエンスと実習ストレスとの関連について検討をすることとした．対象および方法は，作業療法学生4年生69名を対象とし，総合臨床実習の終了時にレジリエンス尺度を実施した．また実習場面のストレスおよびストレスによる心理的落ち込みを測定し、レジリエンスとの関連を検討した．その結果，実習ストレスの内容としては，「対象者の評価・治療が上手くいかない」，「睡眠時間の減少」，「レポートが進まない」の順に得点が高かった．また，各尺度得点の相関を求めたところ，実習ストレスと落ち込み得点は正の相関を示し，レジリエンスと落ち込み得点は負の相関を示した．したがって，実習ストレスの高いものほど落ち込み得点は高い傾向にあり，レジリエンスの高いものほど落ち込み得点は低い傾向を示した．次にレジリエンスおよび実習ストレスの得点の夫々について高得点群（高群）と低得点群（低群）に分け，落ち込み得点について比較した．その結果，実習ストレスの高群において，レジリエンスの高群の落ち込み得点は，レジリエンスの低群に比べ群有意に低値を示した（p<.01）．したがって，レジリエンスの高い学生は同じストレスを受けてもレジリエンスの低い学生に比べ精神的立ち直りは早く，ダメージは小さいと考えられた． ［担当部分］ 研究の企画、データーの収集および分析、論文の執筆を担当した。
7	脳梗塞によりapathyを呈した一例への介入 ～ADL自立と楽しみ活動の再獲得を目指して～	共著	2017.3	兵庫県作業療法士会機関誌第6巻	岩﨑智子、◎山形力生	16-21	脳血管性apathyは最近注目されてきた病態である.今回apathyを発症し,難渋した一例に対し,“意欲には淡蒼球の活性が重要である”とする池谷の理論を参考に作業療法を行った.介入を通して,意欲の向上が見られ,ADLの自立度も向上した.ひいては,退院後継続して実施可能な楽しみ活動の再獲得に繋げることができたことは,70歳代前半という若さで,施設に退院することが決まっている症例にとって,QOLに関わる大切な事柄であったと考える. ［担当部分］ 研究の企画,データーの収集および分析,論文の執筆を担当した.
8	手を使用する行動戦略（Transfer Package）により上肢機能が改善した頚髄症の事例	共著	2017.3	兵庫県作業療法士会機関誌第6巻	塩見健太，◎山形力生，和田由美子，石田茜 ，上田徹	27-32	頚髄症により感覚障害が著明にあり，上肢使用頻度が減少していた患者に対し，脳卒中患者に実施されるConstraint-induced movement therapy （CI療法）のコンセプトであるTransfer Package(以下TP)を行った. CI療法で併用されるTPではあるが，今回報告する頚髄症患者では，患者自ら改善方法を探索できるようにTPの手法を導入したところ，ADLでの両上肢の使用頻度が向上する効果が得られた．その経過を報告するとともに頚髄症に対するTP活用の可能性について考察した．頚髄症の患者にも有効であったことから，脳卒中以外の疾患でのリハビリテーションで併用が効果的であると推察された. ［担当部分］ 研究の企画,データーの収集および分析,論文の執筆を担当した.

9	原著　作業療法実習における学生のレジリエンスとストレスの関係について ～ストレスコーピングからの分析	共著	2018.3	リハビリテーション教育研究第24号	◎山形力生，櫻井秀雄	226-231	臨床実習は学生にとってストレス状況であり，その状況に適応し乗り越えることが要求される．学生は実習場面において様々なストレス状況にさらされることになるが，ストレス状況に直面し，乗り越えるためにはレジリエンス（精神的回復力）が左右するものと考えられる．作業療法学生４年生に対してレジリエンス尺度（小塩ら，2002）を実施し，総合臨床実習の終了時に実習場面のストレスと実習中のストレスコーピングについて調査した．調査は2014～2016年において，研究内容を説明し同意を得られた84名（男性32名，女性52名）を分析対象とした．ストレスは，川村ら（2008）の臨床実習中のストレスに関する因子分析の結果を参考に作成した質問紙と神村ら（1995）のストレスへの対処方略尺度(以下TAC-24）によって測定した．ストレスによる心理的落ち込みの測定には堀野ら（1991）の落ち込み尺度を用いた．レジリエンス（以下RES）とストレスの得点（以下STR）は負の相関を示した．落ち込みと問題回避の得点に有意な正の相関がみられた．RESとCP_F2には負の相関がみとめられたまた，TAC-24の8下位尺度の各得点ついて，クラスター分析を行った．その結果，Ⅰ型「問題回避・情動調整型」，Ⅱ型「対処少・非情動調整型」，Ⅲ型「問題解決・非問題回避型」の３つのクラスターが得られた．次に，３型について落ち込み得点およびレジリエンス得点の分散分析を行ったところ，レジリエンス得点はⅢ型が有意に高く，Ⅰ型が有意に低くかった．実習等の指導においては「問題回避・情動調整型」のコーピングを行うものの指導が重要と考えられ，問題の回避や責任転嫁をしやすい学生ととらえ指導に当たる必要があると考えた． ［担当部分］ 研究の企画,データーの収集および分析,論文の執筆を担当した．
10	コロナ禍で変わる臨床実習	共著	和3年4	作業療法ジャー	中島大貴，坪内善仁，池田耕二，◎山形力生，大浦智子，辻下守弘	373-374	コロナ禍は医療教育のあり方も変えようとしている2020年の新型コロナウイルス感染症拡大により．多くの謎成校は臨床実習の中止を余儀なくされた．学生が患者と実際に接して学ぶ臨床実習．この貴重な機会をどう確保するか.そこで試みられたのがオンラインシステムの活用等である．この頁では、2020年に奈良学園大学の早期体験実習（1年次）,地域作業療法実習（2年次）において代替の学内実習プログラムを紹介するとともに,オンラインシステムなどを活用した学内実習の効果や問題点について報告した． ［本人担当部分］ 研究の企画,データーの収集および分析,論文の執筆を担当した．
11	作業療法学生のコミュニケーション・スキルの経時的変化について（査読付き）	単著	令和4年3月	医療福祉情報行動科学研究，vol.9	◎山形力生	65-71	″作業療法士は対象者の身体的側面だけでなく，心理的，社会的な側面にも関わり，幅広い対人関係能力が求められる。作業療法学生にとって対人関係能力を含む社会的スキルを獲得することは重要といえる。そこで社会的スキルの基礎的構造を成すコミュニケーション・スキル（以下CS）について，その特徴を明らかにするため，コミュニケーション・スキル尺度（ENDCOREs）を用いて調査した。調査は4年制大学作業療法士養成課程の学生を対象に3年次評価実習の前後，4年次総合実習後について縦断的に行った。その結果，ENDCOREsの得点（以下CS得点）は，評価実習の後に有意に低下する傾向がみられ，総合実習後では評価実習後と有意な変化はみられなかった。また， ENDCOREsを構成する下位尺度から管理系スキル，表出系スキル，反応系スキルについても算出し，比較した。その結果では表出系スキルが他の2系のスキルに比較し低値となる傾向がみられた。経時的変化ではCS得点と同様に評価実習後に低値となる傾向がみられ，管理系スキルと表出系スキルは有意な低下がみとめられた。評価実習後のCS得点の低下は，初めての本格的な実習の経験により，普段のコミュニケーション場面とは異なる対象者や実習指導者との関わりにおいて，自身のCSについて再認識したことによると推測され，スキルの特徴として表出系スキルの自己評価が低くなる傾向があると考えられた。学生指導の観点からは，実習後の振り返りの支援が必要と考えられ，その要点としては，CSに対する気づきを実践の中で高めること，表出面のスキルを高める支援が必要と考えた。 ［本人担当部分］ 研究の企画,データーの収集および分析,論文の執筆を担当した．
12	コロナ禍における理学・作業療法士養成課程の早期体験実習―学内実習後の学生アンケー	共著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究，vol.9	前田吉樹、中島大貴、伊藤健一、野中紘士、阿波邦彦、藤田信子、岩崎　智子、橋本雅	55-63	【目的】本学リハビリテーション学科の早期体験実習では，1年次の学生が複数の病院を見学し，療法士の役割や自己の適性について学ぶ。しかながら令和2年度および3年度は，新型コロナウイルスの感染拡大をうけ当実習を学内実習として実施した。当実習を履修した学生の

	後の学生アンケート調査による検証ー（査読付き）				岡 智子、橋本雅至、◎山形力生、池田耕二″		【方法】早期体験実習は理学および作業療法学専攻の1年次生の前期配当科目（1単位）であり，1週間にわたり実施した。実習を構成する上で①ホームページを活用した予習・復習、②映像資料やライブ中継の活用、③朝礼やロールプレイ等を通じた緊張感、④グループワークによる学びの４点を重視した。令和 2 年度・3 年度の履修学生に対し、実習終了後に学内実習に関するアンケート調査を実施した。 【結果】アンケートの結果、両年度とも実習内容については約90%が「よく理解できた」「まぁまぁ理解できた」と回答した。反面，「2年次以降の学外実習に向けた不安」については、令和2年度で約45%，令和3年度で58.9～76.7%が「不安」「非常に不安」と回答した。自由記述では「教員が近くにいる分質問などがしやすかった」、「疑問をすぐに先生に質問することができた」という意見のほか，「自分が知らなかった分野にも興味が持てた」という意見もみられた。 【考察】学内実習で臨地での学びを完全に再現することは困難だが、早期体験実習の本来の目的を達成する上で学内実習は必ずしも不利な点ばかりではない。今回の学内実習を通じて得た経験を、コロナ禍終息後の臨床実習で活かしていくことが重要である。 ［本人担当部分］ 研究の企画,データーの収集および分析,論文の執筆を担当した.
13	作業を通して自信と士気の回復を図り，畑仕事の再開を目指した一例	共著	令和4年3月	医療福祉情報行動科学研究，vol.9	岩崎智子、◎山形力生	19-30	小脳梗塞により，自信を無くし，不安・恐怖の訴えが続いていた症例に対し，本人にとって意味のある作業である水彩画と畑仕事を用い介入した．加えて生活行為向上マネジメント（MTDLP）を取り入れ，対象者を取り巻く人的・物理的環境へのアプローチを含め介入を行った．

	ー生活行為向上マネジメント（MTDLP）を活用した作業療法介入ー（査読付）						限られた期間で合意目標の達成に向けて，畑仕事の再開を目指すことができたのは，症例自身が自分の進歩を肯定的に捉えることで自信や士気を回復し，漠然とした未来の希望が，自分自身が主体的に達成するべき具体的な目標と変化したことが大きい．その要因として，本人を取り巻く家族や多職種との連携により，心理的側面への作業活動の治療効果がより高められたことや，生活場面での自主練習の時間が十分に確保できたこと，実際場面での畑仕事の練習を繰り返し行うことで，症例自身が着実に成果を積み重ねている実感を持てたことが大きく，MTDLPを用いた作業療法介入の有効性が確認された． ［本人担当部分］ 研究の企画,データーの収集および分析,論文の執筆を担当した.
14	地域在住成人における実行機能質問紙の利用可能性の検討ー客観的行動評価との関連ー	共著	令和5年3月	医療福祉情報行動科学研究，vol.10	岩﨑智子，中田修，◎山形力生，中島大貴，大西 久男	17-27	実行機能は神経心理学検査によって評価されるが，これらは検査に時間を要する等の不便さもあるため，簡便に行える質問紙検査の作成が試みられている。本研究の目的は，実行機能質問紙の得点と神経心理学的検査の成績との関連を明らかにし，前者の利用可能性を検討することである。 実行機能の主観的評価として実行機能質問紙（EFQ・J-BES），客観的評価として神経心理学検査（TMT-J・新ストループ検査Ⅱ・D-CAT）を実施した。年齢と認知機能成績（MoCA-J）別に参加者を各2群に分け，基本情報を比較した。各2群について実行機能質問紙の得点と，神経心理学検査の成績との関連を検討した。 実行機能質問紙において，年齢Low群，MoCA-J高成績群において有意な相関のある項目を多く認め，利用可能性が比較的高いことが示唆された。対象者側の要因（年齢や全般的な認知機能の程度）と使用する質問紙検査側の要因（測定したい実行機能の要素）を考慮することで，実行機能質問紙を客観的行動評価のスクリーニングとして利用できる可能性があると考えた。 ［本人担当部分］ 研究の企画,データーの収集および分析,論文の執筆を担当した.
15	生活環境学における住宅改修学習課題プログラムの効果（査読付）	共著	令和5年3月	医療福祉情報行動科学研究，vol.10	◎山形力生、岩崎智子	71-78	超高齢化社会にあって，理学療法や作業療法において高齢者や障害者が在宅で生活するための支援の技術として住環境整備が求められており，住宅改修や福祉用具の活用などの指導的な役割が求められている。そのため対象者が暮らす地域や住環境に注目し，日常生活活動の機能に着目する知識や技術が必要となる。今回，これらの内容について学ぶ生活環境学の授業において，学生が能動的に取り組む授業課題を考案し試行した。その内容を報告するとともにその効果を検証した。課題内容は自宅の生活環境（玄関・トイレ・浴室など）について①写真撮影を行い，間口・高さ・段差などを実測する，②簡単な図面を作成する，③障害を想定した手すりの設置などの改修プランを作成する，の３段階の課題を設定し，授業の進行とともに実施した。講義の終了後，当該科目を履修した3年次生103名を対象に４件法による授業後アンケート調査を実施した。その結果，課題に対する肯定的な回答が大部分を占める傾向がみられた。また，自由記述においても作成ツールの説明など丁寧な説明を求める記述がみられ，今後の課題と考えられた。 ［本人担当部分］ 研究の企画,データーの収集および分析,論文の執筆を担当した.

16	作業療法学生と臨床従事者とのコミュニケーション・スキルの比較（査読付）	共著	令和6年3月	リハビリテーション教育研究第30号	◎山形力生、岩崎智子、櫻井秀雄		【はじめに】作業療法士は対象者の身体的側面だけでなく,心理的,社会的な側面にも関わり,幅広い対人関係能力が求められる．作業療法学生（以下OTS）にとって対人関係能力を含む社会的スキルを獲得することは重要といえる．今回,社会的スキルの基礎的構造を成すコミュニケーション・スキル（以下CS）について,作業療法学生と臨床実務に従事する作業療法士との比較をおこなったので報告する．目的はそれぞれの特徴や共通点,相違点を検討することにより,学生にとって育成すべきCS教育の方向性を明らかにすることにある. 【対象および方法】作業療法養成校学生3年生に対してコミュニケーション・スキル尺度（ENDCOREs）を実施した.調査は2014～2016年において,臨床評価実習（3週間の2施設実施）の終了後に行い,研究内容を説明し同意を得られた108名を分析対象とした．また,臨床現場に従事する臨床経験4年以上の作業療法士118名に対しても同意を得てENDCOREs を実施し,学生（以下OTS群）と比較した. 【結果】ENDCOREs合計得点は現場の作業療法士(以下OTR群)が中央値124点を示したのに対し,OTS群が96点と有意に低値を示した.ENDCOREsの下位6因子の比較では,どの因子もOTS群が低値の傾向がみられた.CSの3系（管理系スキル,表出系スキル,反応系スキル）の比較においてもOTS群が低値の傾向がみられ,反応系スキル（END_F3およびEND_F5）をのぞき表出系スキル,反応系スキルにそれぞれ有意差がみられた. 【考察】ENDCOREs値はOTR群と比較して低値傾向にあることが確認された.CSを構成する6因子の比較では,特に「自己主張」のスキルの因子の低値が学生の特徴と考えられた.さらに表出系スキル（END_F2および END_F4）が有意に低かったことから,CS教育のプログラムにおいては表出面のスキルに重点をおいて検討することがあらためて確認された. ［本人担当部分］ 研究の企画,データーの収集および分析,論文の執筆を担当した.

（その他）学会発表				
70 臨床実習における作業療法学生のコミュニケーション・スキルと実習成績との関連について	－	平成 25 年 6 月	第 47 回日本作業療法学会（大阪）	作業療法学生（以下 OTS）にとって対人関係能力を含む社会的スキルを獲得することは重要といえる。今回、社会的スキルの基礎的構造を成すコミュニケーション・スキルについて、その能力と臨床実習の実習成績との関連について検討をおこなった。H 大学 OTS4 年生 27 名について、総合臨床実習（7 週間）の終了時にコミュニケーション・スキル尺度（ENDCOREs）を実施し，臨床実習の成績との関連を検討した。調査後、 ENDCOREs の因子と実習成績領域間相互の相関係数を求めた。「自己主張」や「表現力」の因子は、「医療従事者としての行動様式」以外の 4 領域に相関をみとめた。「他者受容」は「医療従事者としての行動様式」のみに相関がみられた。「他者受容」の因子は入力系のスキルであり、他者からのサインを敏感に読みとるなどの能力が問われるものと考えられる。「医療従事者としての行動様式」は状況を把握したうえで慎重な判断が要求される項目であることから、「他者受容」との関連がみられたと考えた．。 ［共同発表者］ 山形力生、眞々部仁美、櫻井秀雄
71 早期の学外活動が学生にあたえたもの	－	平成 25 年 6 月	第 47 回日本作業療法学会（大阪）	現代学生の特徴として真面目で素直な性格である長所をもつ反面、対人関係能力の未熟さや主体性の乏しさ等が指摘されている。本作業療法学科においても積極的に欠ける、指導者や対象者と適切な距離をとることができない等の理由により臨床実習でつまずく学生も多い。このような状況に対応するため、3 年前より 1 年生を対象に早期からの学外活動「地域連携・貢献活動」を必須科目として実施している。今回、学外活動により学生が学んだことを明らかにし、活動のあり方を検討するために実践内容を整理したので報告する。本学科学生 31 名を対象とし、自由記述による質問紙法を実施した。「学外活動により学んだこと」について、１ラベルにつき 1 つの内容を、思い浮かばなくなるまで書き出すように求めた。その後、記述内容を質的研究手法に基づき著者らで関連性のあるものに分類、空間配置図を作成した後に解釈結果を叙述化した。作成された 205 のラベルを整理し、見出された最終カテゴリは［対象者への関わり方（72）］［施設の性質や現場を知る（51）］［対象者の理解（22）］［基礎的な対人関係スキル（20）］［プログラム遂行の難しさと取組の姿勢（18）］［自分自身に対する気付き（14）］［学習面への効用（8）］の 7 つであった。目的としていた能動的な行動や対人関係スキルの向上については体得してきている学生がいることが明らかになった。専門的知識を持たないまま関わることで経験した見て学ぶ姿勢や、

				継続して参加することにより成された行動変容やそれによる成功体験が，学生の能動性を喚起したのではないかと思われる。［共同発表者］梅本静香、眞々部仁美、山形力生
72 臨床実習成績の分析ー評価および治療計画から探るー	－	平成 25 年 6 月	第 47 回日本作業療法学会（大阪）	作業療法士養成課程の最終年次で実施される臨床実習は、学内で学習した知識や技術を実際の臨床現場で統合する機会であり、卒前教育として最終的かつ最重要な段階であるとされている。本学 4 年生は、作業療法学総合実習 1 の科目を履修し、単位を修得しなければ臨床実習に臨めない。この科目は本学科独自が導入している客観的臨床能力試験（以下 OSCE）であり、作業遂行障害の模擬クライエントについて、作業療法プロセスの一部（作業遂行障害の評価・分析の実施）を体験的に学習することを授業目的としている。本研究の目的は、昨年と同様の結果が得られた大項目の一つである「評価および治療計画」の小項目を分析し、関連性を明らかにすることとした。4 年生 27 名を対象とし、OSCE 結果及び臨床実習成績を研究に使用する旨を説明し、同意を得た。OSCE の結果は、合格者 19 名、不合格者 8 名であり、再試験では全員が合格となった。総合実習前期において、OSCE 合格群と再試験群に有意な差が認められたのは、1．3．5 の 3 項目であり、総合実習後期では 1．2．3．5．6．7 の 6 項目と増えた。前後期を通じて有意な差を認めたのは、1：他職種からの情報収集、3：評価法の実施，5：長期目標の設定であった。総合実習前期から後期にかけ、有意な差を認めた項目が増えたことから、実習期間中の学び方に違いがあると考えられ、低学年時から総合実習を意識した授業態度や学習方法を確認し、主体的に行動および学習できる勉強方法を身につける必要があると考える。 ［共同発表者］ 眞々部仁美 、 山形力生、梅本静香
73 実習指導内容評価スケールの検討（２報）ー指導者による自己評価との比較ー	－	平成 25 年 8 月	日本リハビリテーション学校協会第 26 回教育研究大会（大阪）	現在の大学教育では教授内容の改善や質の向上のため、学生による授業評価が行われている。しかし、実習科目については評価を受けることは少ない。筆者らは昨年の研究大会において、学生主体の実習指導内容評価スケールについて報告した。今回は、指導者による自己評価を実施し、学生による評価と比較検討し報告した。作業療法学科 4 年生 39 名を対象として、総合臨床実習終了後、実習指導内容を評価する実習指導内容評価スケールに記入してもらった。調査協力の得られた 32 名の実習指導者による自己評価を実施した。評価結果は、スケールの下位の 9 項目とも学生の評価得点が上回る傾向がみられた。また、全項目の合計得点について学生得点と指導者得点の相関係数（Spearman の順位相関）を求めたところ、正の相関がみられた。各下位の項目とも学生の評価得点が上回る傾向がみられた。学生の得点が上回ったことということは指導者の指導に対して概ね満足しているものと考えられ、

				正の相関を示したことから指導内容評価スケールは指導内容を評価するに妥当なものと考えた。［共同発表者］山形力生、眞々部仁美、櫻井秀雄
74 作業療法学生の OSCE の成績とコミュニケーション能力の関連について	－	平成 25 年 8 月	日本リハビリテーション学校協会第 26 回教育研究大会（大阪）	本学科では 4 年次総合実習前に客観的臨床能力試験（以下 OSCE）を実施してきているが、その成果を見るかぎり CS が重要な要素であるという印象をもたざるを得なかった。そこで今回は、学生の CS と OSCE の成績との関連について検討し報告した。作業療法学科 4 年生 50 名を対象とした。CS の評価にコミュニケーション・スキル尺度（ENDCOREs）を用い、ENDCOREs の点数と OSCE の成績の関連を検討した。OSCE は総合臨床実習の約 1 カ月前に、面接と検査測定の 2 課題を実施した。分析は、OSCE 合格群と不合格群の ENDCOREs 得点について比較検討した。OSCE 合格者は 29 名、不合格者は 21 名であった。ENDCOREs 総合得点は合格群 93.90±15.03、不合格群 73.38±18.46 と合格群の方が有意に高かった。 ENDCOREs による CS が高い学生は OSCE でも良好な成績を修めており、特に面接課題の成績でその傾向が認められた。CS は作業療法の面接や検査測定などの評価場面に限らずあらゆる場面で求められる能力ではあるが、特に会話場面における行動と密接に関連した個人特性であるため、会話に重点がおかれた面接課題にて ENDCOREs 得点に差が生じたと考える。学生の幅広い能力を育てていくことが今後の課題であると考えられた。 ［共同発表者］ 梅本静香、山形力生、眞々部仁美、櫻井秀雄
75 コミュニケーション・スキル尺度 ENDCOREs の紹介	－	平成 25 年 9 月	第 33 回近畿作業療法学会（兵庫）	作業療法士は人間関係を基盤としクライエントを援助する医療職であり、人と相互作用を持ちながら問題解決していく能力が求められる。作業療法学生（以下 OTS）にとって対人関係能力を含む社会的スキルを獲得することは重要課題といえる。今回、コミュニケーション・スキル（以下 CS）尺度 ENDCOREs を紹介するとともに、調査・研究でよく用いられている KiSS18 と比較検討した。臨床実習を終了した作業療法学生のうち同意を得られた 44 名を対象として、ENDCOREs（藤本ら，2007）および KiSS18 （菊池，1988）により CS を測定した。調査後、ENDCOREs と KiSS18 得点の相関を調べた。その結果、ENDCOREs の総得点と KiSS18 得点には有意な相関がみられた。一方、ENDCOREs の下位の因子「他者受容」とは関連が低い傾向がみられた。これは、KiSS18 が総合的な社会的スキルをみる尺度に対し、ENDCOREs が ENDCOREs 開発以前の CS に関する既存尺度の内容を包括的に検討し、整理、分類した上で作成されたものであることによると考えた。 ［共同発表者］ 山形力生、 眞々部仁美、櫻井秀雄
76 脳梗塞により右手指機能障害と感覚障害を呈した	－	平成 25 年 9 月	第 33 回近畿作業療法学会（兵庫）	脳梗塞により右片麻痺を呈し、約 1 カ月経過した症例（以下 A 氏）を担当した。重度であった失語症や上下肢の麻痺は顕著な回復を見

一例一食事動作における質の向上を目指して一				せている反面、手指の麻痺と感覚障害は残存し、利き手である右手の実用手としての使用は難しい状態である。夫の死去後3日後に上記疾患を発症したにも関わらず「今はこの手をよくするために頑張りたい」と前向きな姿勢をもってﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝに臨むA氏に対し、「右手で上手にご飯を食べたい」というﾃﾞﾏﾝﾄﾞに沿えるよう作業療法を行った。介入を通し麻痺側使用による箸操作が可能となり、食事動作における質の向上へと繋がった経過と考察を報告した。 ［共同発表者］ 岩﨑智子、山形力生
77 作業療法評価学実習における Student Assistant の効果−上級生の視点から−	−	平成26年8月	日本リハビリテーション学校協会第27回教育研究大会（岡山）	本学作業療法学科では3年生が教員の補助（Student Assistant：以下，SA）として2年生の作業療法評価学実習の授業に入り、実技指導する科目を採用している。授業の目的はSAとして3年生が2年生へ実技指導を通し、それまでに修得した知識・技術を対象者に合わせて指導するスキル及び必要なコミュニケーションスキル（CS）を向上させることにある。今回、SAの効果について調査、検討した。 作業療法学科3年生40名を対象として、SAに関する質問紙を参考に作成し、研究目的を説明し同意を得た上で調査を実施した。その結果、講義を通じて学んだこととして、説明のスキル(90%)、専門知識技術の確認（75%）、CS（60%）を挙げた（回収率100%）。授業の満足度は92.5%と高く、知識技術は62%が確認できたと回答した。成果として92.5%が実習の準備となり、95%が今後の学習意欲が高まったと回答した。SAの経験は既習技術の再確認となり、4年生実習の準備の機会となると考えられ、さらなる学習意欲を高め、授業の満足度も高くなると考えられた。 ［共同発表者］ 山形力生、石浦佑一、沼田景三
78 作業療法評価学実習における Student Assistant の効果−下級生の視点から−	−	平成26年8月	日本リハビリテーション学校協会第27回教育研究大会（岡山）	現在、本学科の2年生は作業療法評価学実習において，3年生が教員の補助（Student Assistant：以下，SA）として2年生に実技指導を行う授業形態を導入している。SA導入の目的は、3年生から指導を受けることで、評価に関する身近な自己到達目標が設定でき、学習意欲の向上を図る、評価の重要性を具体的に学ぶ、コミュニケーションスキルの向上などである。今回、2年生の作業療法評価学実習におけるSA導入の効果を調査、検討した。質問項目は、3年生の指導方法、3年生との関係性、実習後の学習意欲の変化や満足度、習熟度、教員との関係性に関してであった。調査後、質問項目間の相関を調べた。その結果、3年生の指導方法や3年生との関係性、学習意欲の変化や満足度、習熟度、教員との関係性においてはポジティブな回答が多かった。質問項目間の相関について、学習意欲は、3年生の指導方法や3年生との関係性、教

				員とのコミュニケーションで相関を認めた。また満足度は、3 年生の指導方法、3 年生への声かけや相談で相関を認めた。習熟度は、3 年生の指導方法、教員への相談、3 年生への声かけや相談で相関を認めた。SA 導入は 2 年生にとって有効であることが示唆された。また、学習意欲、満足度、習熟度と 3 年生の指導方法や 3 年生との関係性、教員とのコミュニケーションで相関を認めたことから、3 年生と 2 年生との関係性をいかに良好に保つか、3 年生が評価技術を適切に指導できるよう教員がどのように調整していくかが、今後の課題となった。 ［共同発表者］石浦佑一、山形力生、沼田景三
79 作業療法実習における学生のレジリエンスとストレスの関係について	－	平成 27 年 6 月	第 49 回日本作業療法学会（神戸）ポスター発表	【はじめに】臨床実習は学生にとってストレス状況であり、その状況に適応し乗り越えることが要求される。学生は実習場面において様々なストレス状況にさらされることになるが、ストレス状況に直面し、乗り越えるためにはレジリエンス（精神的回復力）が左右するものと考えられる。この研究の目的はレジリエンスと実習ストレスとの関連について検討をすることである。【対象および方法】4 年制大学作業療法学生 4 年生に対して総合臨床実習（7 週間）の終了時にレジリエンス尺度（小塩ら，2002）を実施し、実習場面のストレスとの関連を検討した。調査は,平成 24 年～平成 26 年において、研究内容を説明し同意を得られた 71 名（男性 25 名，女性 46 名）を対象とした。ストレスは、川村ら（2008）の臨床実習中のストレスに関する因子分析の結果を参考に作成した質問紙（17 項目，５件法）によって測定した。また、ストレスによる心理的落ち込みの測定には堀野ら（1991）の落ち込み尺度（24 項目，４件法）を用いた。【結果】レジリエンスの得点（以下 RES）は中央値 69 点、ストレスの得点（以下 STR）は中央値 42 点を示した。また、落ち込み尺度得点（以下 DEP）は中央値 72 点を示した。各尺度得点の相関を求めたところ、STR と DEP は正の相関を示し、RES と DEP は負の相関を示した。次に RES および STR の得点の夫々について中央値以上と未満の 2 群に分け、DEP 値について比較した。その結果、ストレスの高い群（以下 STR_H）において、RES の低い群（以下 RES_L）が 82.3 点を示したのに対し、RES の高い群（以下 RES_H）は 65.9 点と低値を示し、Mann-Whitney の U 検定の結果，有意であった（p<.01）。【考察】RES の高い学生は同じストレスを受けても RES の低い学生に比べ精神的立ち直りは早く、ダメージは小さいと考えられ、RES_H 群が RES_L 群に比べ DEP が低値となった理由と考えた。さらに、ストレスの低い STR_L 群では RES の高低群とも DEP に差がみられず、レジリエンスはある程度の高いストレスに発揮されることを示すと捉えた。［共同発表者］山形力生、櫻井秀雄、眞々部仁美

80 脳梗塞により apathy を呈した一例への介入ーADL 自立と楽しみ活動の再獲得を目指してー	-	平成 27 年 6 月	第 49 回日本作業療法学会（神戸）ポスター発表	血栓性脳梗塞により apathy を呈した症例を担当した.病棟生活では無気力で臥床し,全 ADL に介助を要する状態であった.今後の退院先が施設となる症例にとって,自立して行える ADL を 1 つでも増やし,他者に依存した生活ではなく,意欲と自信・楽しいと思える生活を取り戻すことが重要であると考え,作業療法を行った.介入方法として,“意欲には淡蒼球の活性が重要である”とする池谷の理論を参考に意欲向上訓練を取り入れ実施した.介入を通して,意欲・発動性の向上が見られ,ADL 能力の向上,楽しみ活動の再獲得が成された.［共同発表者］岩﨑智子、山形力生
81 教員免許更新講習における福祉用具講習の導入について	-	平成 27 年 6 月	第 49 回日本作業療法学会（神戸）ポスター発表	本学では大学地域貢献事業の一環として教員免許状更新研修を行っている。今回、この更新研修の一科目として福祉用具に関する科目を実施し、受講者に意識調査を実施した。調査の目的は、現場に従事する教員の福祉用具に関する講習の実態や効果および課題点を検討することにある。平成 26 年および平成 27 年に受講した教員 119 名を対象に、講習を選択した動機、従事する現場の詳細などの背景のほか、講習で扱った用具に対する認知度、講習の理解度、用具の現場における必要度などについて調査した．講座選択の動機から現場での用具の必要性を主とする実践群と教養として選択した非実践群に大別された。調査の結果は、用具の種類により違いがあり、実践群か否かによっても違いがみられた。講座の理解度は高く、講習の内容の構成や難易度は概ね妥当と考えられた。また、用具の適応や判定の中で作業療法士の専門性や役割について触れ、教員の作業療法士に対する認識を高めることに寄与できたと考えられた。 ［共同発表者］ 田中優子、山形力生
82 活動経験と社会的スキル、活動の志向の関連について	-	平成 27 年 6 月	第 49 回日本作業療法学会（神戸）ポスター発表	【はじめに】活動への集団または個別での取り組みは、取り組む対象者に対し身体、心理、社会面などさまざまな面に影響を与える。今回、学生のサークル活動の集団・個別の種目選択が、日常生活の社会的スキルへの影響、日常の集団・個別作業の種目選択の志向に関連があるか、ということについて検討したので報告する。【対象および方法】対象は 4 年制大学生 172 名（男性 100 名、女性 72 名）で、これまでのサークル活動の経験種目、日常生活社会的スキル尺度（以下 LSS）、日常の集団・個別作業の種目選択について質問紙により調査した。尚、調査は研究の目的を説明し同意を得られたものに実施した。【結果】サークル活動の経験種目は、運動系集団競技（A 群 67 名）、運動系個人競技（B 群 57 名）、文化系（C 群 25 名）、その他（23 名）に大別された。経験年数は、2 年未満が 59 名

				（34.7%）、2 年以上が 111 名（65.3%）であった。LSS により対人スキル（以下 RS）および個人スキル（以下 PS）を求めた。両スキルとも経験 2 年以上では、年数の増加と共に上昇する傾向がみられ、有意な相関がみられた（p<.05）。また、RS、PS の値について経験種目の３群を比較した。その結果、C 群より A,B 群が高い傾向がみられたが、分散分析では有意ではなかった（p<.05）。また、LSS を構成する 8 因子についての 3 群間の比較では、第 2 因子（対人スキル：リーダーシップ）に差をみとめた（F(2, 145)=3.7, p<.05）。さらに多重比較では、A 群が C 群より有意に高いことがわかった。 【考察】島本ら（2010）の先行研究では、LSS は、スポーツ群で他の文化系群に対し有意に高くなることが確認されている。また、対人、個人スキルについても同様の傾向にあるとされている。集団競技の経験者は個人競技の経験者に対し対人スキル（RS）が高くなると予想していた。しかし差がみられなかった理由として、今回の調査対象が学生のサークルであり、スポーツ活動体験としては文化系より差がみられても、競技の個別か、集団かの要素にまで差がみられるレベルの体験ではなかったのではないかと考えた。 ［共同発表者］山田怜奈、岩切知美、<u>山形力生</u>
83 Student Assistant の効果と作業療法評価における実技試験との関係について	－	平成 27 年 8 月	日本リハビリテーション学校協会第 28 回教育研究大会（仙台） ポスター発表	目的：本学科の作業療法評価学実習では，3 年生が教員の補助（Student Assistant：以下，SA）として 2 年生に実技指導を行う授業形態を導入して 3 年になる．我々は先行研究にて，SA を導入した 2 年生を対象にアンケート調査を実施し，3 年生や教員とのコミュニケーションが学習意欲や習熟度，満足度と関係があったことを報告した．今回は，作業療法評価の実技試験の得点とアンケート結果との関係を調査し，SA において学生のどのような能力に着目していけば実技能力の向上に結びつくか検討することを目的とした．対象及び方法：平成 24 年度～平成 26 年年度の本学科２年生 79 名を対象に，SA に関するアンケートを作成し，研究目的を説明し同意を得た上で調査を実施した．アンケートは３年生や教員との関係性，実習後の学習意欲の変化や満足度，習熟度に関して 5 件法で回答してもらった．さらに 3 以上の回答をポジティブな群、2 以下をネガティブな群とし、実技試験の得点についてこの 2 群を比較した。結果：全ての質問項目においてポジティブな回答が多数を占めていた．質問項目ごとに 2 群による実技試験の得点を比較していくと，学習意欲と教員へのコミュニケーションに関する項目でポジティブな回答をした群は有意に実技試験の得点が高い結果となった．考察：3 年間の SA 導入によるアンケート結果から，本学科 2 年生にとって SA は有効的な授業形態であることが示された．さらに実技試験の得点との関係において，学習意欲と教員へのコミュニケーションの項目でポジティブな回答をした群は有意に得点が高かった．先行研究において，学習意欲は 3 年生

				とのコミュニケーションが関係しており，実技能力の向上にはコミュニケーション能力が重要となることが示唆された．［共同発表者］石浦佑一、眞々部仁美、梅本静香、山形力生、沼田景三、友國由美子
84 作業療法評価学実習における Student Assistant の効果ー上級生と下級生のアンケート結果の比較ー	-	平成 27 年 8 月	日本リハビリテーション学校協会第 28 回教育研究大会（仙台） ポスター発表	本学作業療法学科では，3 年生が教員の補助（Student Assistant：以下，SA）として２年生の作業療法評価学実習の授業に入り，実技指導する科目を採用している．今回，SA の効果について調査，検討した．作業療法学科 3 年生 40 名を対象として，授業の満足度，2 年生および教員とのコミュニケーション，授業後の学習意欲の変化，自己の知識･技術の認職度，4 年生臨床実習の準備などについて調査した．調査後，項目間の相関を調べた．その結果，講義を通じて学んだことして，説明のスキル(90%)，専門知識技術の確認（75%），CS（60%）を挙げた．授業の満足度は 92.5%と高く，知識技術は 62%が確認できたと回答した．成果として 92.5%が実習の準備となり， 95%が今後の学習意欲が高まったと回答した．教科書等での事前学習も十分に行い指導に望んだ学生は，対象学生に分かりやすく説明でき，実技指導もうまくできたと評価した．SA の経験は既習技術の再確認となり，４年生実習の準備の機会となると考えられ，さらなる学習意欲を高め，授業の満足度も高くなると考えられた．一方、授業準備が十分でなかった学生は，思ったよりも成果は上げられず，授業前の準備学習を確認させる工夫が今後の課題と考えられた．また，説明のスキルに関して，２年生にうまく説明しきれず，困惑する様子もみられ，状況に応じて教員が介入する必要性も考えられた． ［共同発表者］ 山形力生、石浦佑一、沼田景三
85 学生のコミュニケーション参与スタイルとグループ学習における役割行動の関係について	-	平成 28 年 8 月	日本リハビリテーション学校協会第 29 回教育研究大会（高松） ポスター発表	筆者らの作業療法学科では、3 年次の評価実習を経験した後に、PBL によるグループ学習を中心とした授業を導入している。今回、学生のコミュニケーション参与スタイル（PS）とグループ学習内での役割行動の関係について検討した。それは、2 者の関連性を検討することにより学生がグループの中で取る役割を予測できれば、より効果的なグループ編成を考える資料となるのではないかと考えた。対象は、2013 年～2015 年に作業療法学科の授業を受講した３年生 68 名を対象とした。あらかじめコミュニケーションに参与する傾向をコミュニケーション参与スタイル尺度（以下 COMPASS）によって調べ、グループ学習後、実際にグループの中で各自がどのような役割行動を取ることが多かったかをグループメンバーに評価してもらい、両者の関係を調べた。グループ中での役割行動は、想定される 7 つの役割（リーダーなど）について 5 件法により点数化し、さらに COMPASS から得られる４要素（因子得点）との関連性を検討した。その結果、「リーダーの役割」および「自分の意見を言う役割」は

				COMPASS の「能動的参与」および「会話マネジメント」と有意な相関を示し、「消極的参与」と逆相関を示した。「全体を調整する役割」も同様の傾向がみられたが、「受動的参与」の因子に軽度な相関を示すという違いがみられた。「状況を見守る役割」は、「能動的参与」および「会話マネジメント」とは逆相関し、「消極的参与」と軽い相関を示す特徴がみられた。「能動的参与」や「会話マネジメント」は、コミュニケーション・スキルの表出系の側面と相関する（2008、藤本ら）ことが確認されており、相関がみられた役割の特徴と一致すると考えた。これらにより、学生の PS の傾向からグループ学習内での役割行動を推測できる可能性が示唆された。
86 臨床に従事する作業療法士のコミュニケーション・スキルについて	－	平成 28 年 9 月	第 50 回日本作業療法学会（札幌） ポスター発表	作業療法学生(OTS)にとって対人関係能力を含む社会的スキルを獲得することは重要といえる. OTS の目標と考えられる臨床家の作業療法士を対象にコミュニケーション･スキル尺度（ENDCOREs）を用いて検討を行った.また,臨床現場での他職種との関係を測定するために,鈴木らの臨床活動での質を測定する尺度（以下 QOE）を改変し用いた.臨床経験群間の比較では,臨床経験とともにコミュニケーション･スキル(以下 CS)が成長し充実していく傾向にあることが示唆された.QOE_F3（他の職員と関係を維持する行動）は ENDCOREs の得点と相関したことから,CS が現場における仕事上のコミュニケーション活動全般の要素となっていることを示唆すると考えた.経験年数に伴う CS の充実には,END_F2(表現力)や END_F4(自己主張)の因子が影響するものと考えられた.これら 2 因子のスキルの成長が CS や臨床活動の基盤になっている可能性が考えられた. ［共同発表者］岩﨑智子、山形力生、櫻井秀雄
87 手を使用する行動戦略（Transfer Package）により上肢機能が改善した頚髄症の事例	－	平成 28 年 9 月	第 23 回兵庫県作業療法学会（兵庫）	頚髄症により感覚障害が著明にあり、上肢使用頻度が減少していた症例に対し、CI 療法に併用される Transfer Package（以下 TP）を行った。 TP 導入までは ADL 上での上肢の使用に消極的であったが、TP の要素である両手の使用状況の報告を義務付け、OTR と症例が議論をするきっかけを増やし、症例自身で問題解決を促した。その結果、ADL での両上肢の使用頻度が向上した症例の経過と考察を報告した。 ［共同発表者］ 塩見健太、上田徹、山形力生
88 作業療法実習における学生のレジリエンスとストレスの関係について～ストレスコーピングからの分析	－	平成 29 年 9 月	第 51 回日本作業療法学会（東京）ポスター発表	作業療法実習における学生のレジリエンスとストレスの関係について～ストレスコーピングからの分析　平成 29 年 9 月 第 51 回日本作業療法学会 （東京）ポスター発表 臨床実習は学生にとってストレス状況であり，その状況に適応し乗り越えることが要求される．学生は実習場面において様々なストレス状況にさらされることになるが，ストレス状況に直面し，乗り越えるためにはレジ

				リエンス（精神的回復力）が左右するものと考えられる．本学作業療法学生４年生に対してレジリエンス尺度（小塩ら，2002）を実施し，総合臨床実習の終了時に実習場面のストレスと実習中のストレスコーピングについて調査した．調査は 2014～2016 年において，研究内容を説明し同意を得られた 84 名（男性 32 名，女性 52 名）を分析対象とした．ストレスは，川村ら（2008）の臨床実習中のストレスに関する因子分析の結果を参考に作成した質問紙と神村ら（1995）のストレスへの対処方略尺度(以下 TAC-24）によって測定した．ストレスによる心理的落ち込みの測定には堀野ら（1991）の落ち込み尺度を用いた．レジリエンス（以下 RES）とストレスの得点（以下 STR）は負の相関を示した．落ち込みと問題回避の得点に有意な正の相関がみられた．RES と CP_F2 には負の相関がみとめられたまた，TAC-24 の 8 下位尺度の各得点ついて，クラスター分析を行った．その結果，Ⅰ型「問題回避・情動調整型」，Ⅱ型「対処少・非情動調整型」，Ⅲ型「対処少・非情動調整型」の３つのクラスターが得られた．次に，３型について落ち込み得点およびレジリエンス得点の分散分析を行ったところ，レジリエンス得点はⅢ型が有意に高く，Ⅰ型が有意に低くかった．実習等の指導においては「問題回避・情動調整型」のコーピングを行うものの指導が重要と考えられ，問題の回避や責任転嫁をしやすい学生ととらえ指導に当たる必要があると考えた．［共同発表者］山形力生、櫻井秀雄
89 作業療法士の職業経験とその質について		平成 29 年 9 月	第 51 回日本作業療法学会（東京）ポスター発表	臨床に従事する作業療法士は,様々な経験を重ね,臨床実践に関わる能力を獲得し,キャリアを成長させることが期待されている.今回,現場に従事する作業療法士を対象に職業経験の質の一側面を調査するとともにどのような傾向があるのかについて分析した.方法として,鈴木らの臨床活動での質を測定する尺度（以下 QOE）を改変し用い,また自己効力感（以下 SE）についても合わせて調べた.臨床経験毎の比較では,QOE 合計得点は上昇する傾向にあり,臨床経験とともにその職業経験の質は充実していく傾向にあることが示唆された.さらに職業経験の質の高さは自己効力感の高さにも影響すると考えられた.一方経験年数の浅い G1 群において,自己効力感の高低によって職業経験の質に差があることが確認された．特に QOE_F（実践力を獲得し,多様な役割を果たす行動）に差がみられたことから，役割を意識できることが重要と考えられ，新人 OTR に対する卒後教育などでは留意すべき点と考えた.［共同発表者］岩﨑智子,山形力生
90　学生のコミュニケーション・スキルの経時的変化と臨床実習の影響について		平成 29 年 9 月	日本リハビリテーション学校協会　第 30 回教育研究大会（新潟）	【目的】学生のコミュニケーション・スキル（以下 CS）は様々な経験を元に成長していくものと考えられる．特に実習経験は大きなものと考えられる．今回，この実習体験前後での CS の変化を縦断的に調査し，その変化に影響した背景との関連を検討した.【方法】2013 年～2016 年に作業療法学科の評価実習を経験し，研究趣旨に同意を

				得た学生 86 名を対象とした．実習前後において CS 尺度 ENDCOREs により CS の程度を比較検討した．さらに追跡できた 39 名を対象に変化に影響したと思われる内容について調査した．調査はその変化の理由となる項目を学生に列挙させ，その項目について 5 件法（思わない：１点～思う：５点）にて回答を求めた．【結果】CS 得点は評価実習後で増加したのが 37.2%（32 名）に対し，67.8%（54 名）が減少する傾向がみられた．Wilcoxon の符号付順位検定の結果，評価実習前が 25.1±3.7 だったのに対し，評価実習後 24.1±3.8 と有意に減少することが確認された（p<.01）．また，CS の変化に影響した理由について「臨床評価実習の経験が影響したと思うか？」に 4 点以上の学生は 71.8%であった．主な理由として，4 点以上の学生が多かったものは「実習での自分の説明力などから（79.5%）」，「SV の指導内容による影響（76.9%）」「実習での対象者との関わり（61.5%）」，「実習でのいろんな人々との関わり（59.0%）」だった．【考察】CS 得点の評価実習前後での減少傾向は，スキルの低下を意味するのではなく，むしろ実習による自己認識が高まった結果であると考えた．評価実習前の状況では，自己の CS 能力について認識する経験の機会は少なく漠然とした評価と考えられ，実習による指導者や対象者の関わりの中で，自己の能力に対して改めて気づき，厳しい評価に結びついたのではないかと考えた．
91　作業療法学生と臨床従事者とのコミュニケーション・スキルの比較		平成 30 年 9 月	第 52 回日本作業療法学会（名古屋）	【はじめに】作業療法士は対象者の身体的側面だけでなく，心理的，社会的な側面にも関わり，幅広い対人関係能力が求められる．作業療法学生（以下 OTS）にとって対人関係能力を含む社会的スキルを獲得することは重要といえる．今回，社会的スキルの基礎的構造を成すコミュニケーション・スキル（以下 CS）について，作業療法学生と臨床実務に従事する作業療法士との比較をおこなったので報告する．目的はそれぞれの特徴や共通点，相違点を検討することにより，学生にとって育成すべき CS 教育の方向性を明らかにすることにある． 【対象および方法】本学作業療法学生 3 年生に対してコミュニケーション・スキル尺度（ENDCOREs）を実施した．調査は 2014～2016 年において，臨床評価実習（3 週間の 2 施設実施）の終了後に行い，研究内容を説明し同意を得られた 108 名（男性 43 名，女性 65 名）を分析対象とした．また，臨床現場に従事する臨床経験 4 年以上の作業療法士 118 名（男性 51 名，女性 67 名，平均 31.7±5.3 歳，臨床経験平均 8.5±4.7 年）に対しても同意を得て ENDCOREs を実施し，学生（以下 OTS 群）と比較した．ENDCOREs は，「自己統制」（以下 END_F1），「表現力」（以下 END_F2），「解読力」（以下 END_F3），「自己主張」（以下 END_F4），「他者受容」（以下 END_F5），「関係調整（以下 END_F6）」の６種類の下位スキルが測定できる．尚，本研究は本学生命倫理審査委員会の承認（姫獨生 17-02）を得て行なわれた．統計学的検討には Mann-Whitney の U 検定を用い，5%以下を有意とした．

				【結果】ENDCOREs 合計得点は現場の作業療法士(以下 OTR 群)が中央値 124 点を示したのに対し,OTS 群が 96 点と有意に低値を示した.ENDCOREs の下位 6 因子の比較では,どの因子も OTS 群が低値の傾向がみられた.特に END_F1,END_F4 では有意に OTS 群が低くかった.また,CS の 3 系（管理系スキル,表出系スキル,反応系スキル）の比較においても OTS 群が低値の傾向がみられ,反応系スキル(END_F3 および END_F5）をのぞき表出系スキル,反応系スキルにそれぞれ有意差がみられた. 【考察】学生の CS に関する自己評価は,臨床実習などの経験により変化する.今回は自己認識が高まったと考えられる評価実習を経験した学生群を対象とした（2017,山形）.ENDCOREs 値は OTR 群と比較して低値傾向にあることが確認された.CS を構成する 6 因子の比較では,特に「自己主張」のスキルの因子の低値が学生の特徴と考えられた.さらに表出系スキル（END_F2 および END_F4）が有意に低かったことから,CS 教育のプログラムにおいては表出面のスキルに重点をおいて検討することがあらためて確認された.OTR 群においてはこれら表出系スキルが臨床活動の基盤になっている可能性も指摘されており（2016,岩崎）,将来の臨床活動の観点からも重要と考えた.［発表者］山形力生
92 DRIVE を用いた反復促通療法と SIXPAD 併用により中枢性重度麻痺に効果がみられた一症例		平成 30 年 9 月	第 52 回日本作業療法学会（名古屋）	【はじめに】脳卒中後のリハビリテーションにおいて電気刺激は脳卒中ガイドライン 2015 で勧められている(グレード B).一方で重度上肢麻痺に対する介入方法についての報告は少ない．今回，弛緩性麻痺の症例に対し，DRIVE(デンケン社製)で促通筋と拮抗筋を交互に電気刺激しながら徒手での反復促通し，作業療法後に SIXPAD(Body Fit：MTG 社製)を使用することで改善した一例を経験したので考察を加えて報告する．尚，本報告に際し，本人の同意を書面で得，当院の倫理審査委員会の承認を得ている．【対象】30 歳代男性．親夫婦と娘 4 人暮らし．家事の分担，仕事に行くなど活動的な生活をしていた．もやもや病による被殻出血と診断され，同日，開頭血腫除去術と間接血行再建術を施行．発症後 26 病日に当院回復期病院に転院．左片麻痺．Brunnstrom Recovery Stage(以下 BRS)は上肢Ⅰ，手指Ⅰ，下肢Ⅲ．感覚軽度鈍麻．FIM57 点．認知機能は MMSE28 点．【方法】SIXPAD とは筋力増強を目的としたコードレスの電気刺激機器を指し，DRIVE とはスイッチ操作で 2 つの筋を同時，もしくは別々に電気刺激が可能な機器である．40 病日で病棟セルフケアは軽介助から見守りとなった．しかし，BRS においては左上肢・手指ともに変化を認めなかったため，上肢神経促通の頻度を増やし麻痺側上肢の肩屈曲・肘屈曲・手背屈の運動に対して DRIVE での反復促通療法を開始した．具体的には関節運動の誘導しながら運動開始を指示し，症例が肩屈曲を起こそうと努力したタイミングで三角筋前部繊維，戻す際に三角筋後部繊維にスイッチで電気刺激を入れ

				て関節運動を実現した．電気刺激の電極は各運動の目的筋に貼付し，刺激条件は周波数 100Hz，刺激強度は筋が強縮して関節運動が起こる運動閾値以上とした．期間は 28 日とし，回数は各運動パターン 50 回×2 を毎日とした．さらにリハビリ後に SIXPAD を三角筋に対し貼付し，電気刺激条件は筋収縮する程度とし 23 分間，毎日実施した．評価項目は BRS，Fugl-Meyer Assessment(以下 FMA)，Wolf Motor Function Test(以下 WMFT)，改訂 Ashworth scale(以下 MAS)とした．【結果】（→は 40 病日から 68 病日の変化を示す）BRS：上肢（Ⅰ→Ⅲ），手指（Ⅰ→Ⅲ），下肢(Ⅳ→Ⅴ)．FMA(0/66→30/66)．WMFT(中央値 120 秒→50.7 秒　FAS0→3.1)．MAS：肘関節屈筋群(0→1)，手関節屈筋群(0→1)．68 病日以降は HANDS 療法・CI 療法を実施し，159 病日には左上肢は実用手レベルまで改善し，職場復帰が可能になり，自宅退院となった．【考察】　脳卒中発症 1 か月の時点で測定できるだけの握力がない場合は機能的予後が悪い(Sunderland A,1989)とされ，症例は 40 病日の時点で上肢運動機能は BRS 上肢Ⅰ，手指Ⅰと，旧来の予後予測法では廃用手と判断されるレベルであった．脳卒中発症から 13～38 日の対象者の FMA の臨床における意味のある最小変化量を 9～10 点と報告(Feys ら,1998)しており本症例の電気刺激を用いた反復促通療法と自主練習での SIXPAD を実施したことは自然回復の影響を受ける回復期であっても，意味のある改善を示したことが示唆された．痙性麻痺筋の拮抗筋に対する電気刺激では痙縮麻痺筋の痙縮が抑制される(鈴木ら,2009)としている．さらに電気刺激は身体不活動状態にある抗重力筋に電気刺激を与えると筋萎縮が予防できる(浜田ら,2002)としている．今回，廃用が進んでおり，DRIVE で屈筋と伸筋の二筋を交互に電気刺激しながら反復促通を実施し，作業療法後に SIXPAD 実施したことで屈筋の痙縮を抑制しながら麻痺筋の随意性を向上することが可能になり，その後の CI 療法も痙縮の影響を大きく受けることなく実用手になったと推察される．以上より，電気刺激を用いた反復促通療法と SIXPAD を実施した結果，上肢機能が向上し，退院時には実用手に至るまで改善できた．今回は症例検討による知見であり，さらに症例数を増やし統計的な検討が課題と考える．［共同発表者］塩見健太，山形力生，上田徹
93 学生の臨床実習における職業的モデルとの出会いとその影響に関する検討		平成 31 年 8 月	第 32 回教育研究大会（岐阜）	【目的】臨床実習は現場を体験する貴重な経験であり，特に自分が目指す理想像を体現するモデルともいうべき職業的モデル（以下 VM）となるセラピストの出会いは職業的アイデンティティに影響を与えると考えられる．今回，臨床実習において，このような VM との出会いがあったか，またその VM はどのような要素を持っていたか，また学生のセラピスト観や作業療法観との関連について調査，分析したので報告する．【方法】対象は，2014 年～2018 年に作業療法養成大学において総合実習を経験した学生 89 名を対象とした．総合実習終了後，VM（OT モデル）の出会いの有無について調査し，出会

				いがあった場合は，藤井らの VM 特性に関する質問紙によって回答を求めた．また，学生のセラピスト観や OT 観への影響の有無についてあわせて調査した．尚、調査は目的等を説明し同意を得て実施した．【結果】1 期では，79.8%，2 期では，79.6%が OT モデルと出会ったと回答した．OT モデルと出会った学生の VM 特性の 4 因子の得点では，患者への医療を大切にする作業療法士（以下 OTR）の因子が最も高く，次いで臨床への熱意を持っている OTR，学生への誠意ある態度を持つ OTR，専門家としての力量を持った OTR の順であった．次に「この施設での実習は，作業療法観に影響を与えたか」，「この施設での実習は，セラピスト像に影響を与えたか」について 5 段階にて回答を求めた．さらに，4 以上を「あり」群と 3 以下を「なし」群とに分け，モデルに出会えた群と出会えなかった群のクロス集計を行った．χ2 検定の結果，モデルに出会えた群は，それぞれに影響が「あり」の群が有意に多かった（P<.05）．【考察】モデルとの出会いは，学生の OT 観やセラピスト観に影響していると考えられ．モデルのもつ要素としては，モデルとなった指導者の「患者への医療的な対応」や「臨床への熱意」といった側面が学生に影響を与えている可能性が示唆された．
94　臨床実習における作業療法学生のコミュニケーション・スキルと対人ストレスとの関連について		平成 31 年 9 月	第 53 回日本作業療法学会（福岡）	【はじめに】作業療法士は対象者の身体的側面だけでなく，心理的，社会的な側面にも関わり，幅広い対人関係能力が求められる．作業療法学生にとって対人関係能力を含むコミュニケーション・スキル（以下 CS）を獲得することは重要といえる．今回，臨床実習場面において学生が感じる対人ストレスイベントと学生の CS のレベルとの関係について検討をおこなったので報告する．目的はこれらの検討により，実習指導上の留意点を知ることと，育成すべき CS 教育の方向性を明らかにすることにある． 【対象および方法】4 年制大学作業療法養成校の 4 年生を対象とし，総合臨床実習（7 週間）開始前に後述のコミュニケーション・スキル尺度（ENDCOREs）を実施し，実習の終了後，実習中の対人場面を想起してもらい対人ストレスについて質問紙による調査を行った．調査は 2015～2017 年において，研究内容を説明し同意を得られた学生 57 名（男性 23 名，女性 34 名）を分析対象とした．ENDCOREs は，「自己統制」（以下 END_F1），「表現力」（以下 END_F2），「解読力」（以下 END_F3），「自己主張」（以下 END_F4），「他者受容」（以下 END_F5），「関係調整」（以下 END_F6）の 6 種類の下位スキルが測定できる．また，臨床実習中の対人ストレスの測定には，橋本ら（2000）の対人ストレススイベント尺度を一部修正して使用した．この尺度は対人関係上のストレスを感じた事項について 24 項目により測定され，「対人葛藤」（以下 IP_F1），「対人劣等」（以下 IP_F2），「対人摩耗」（以下 IP_F3）の 3 因子によって説明できる．合計点数が高いほど対人ストレスイベントの頻度が高かったことを示す．統計学的検討には speaman の順位相関を用い，5%以下を有意とした．

				【結果】対人ストレスの因子得点の平均点数は,IP_F2 が最も高く(18.5 点),IP_F3(9.8 点),IP_F1(13.0 点)の順に高かった.分散分析の結果,有意であり,多重比較では IP_F2 が他の 2 群に対し有意に高かった.相関係数を求めたところ,IP_F2 と表出系スキル(END_F2 および END_F4)との間に有意な逆相関(rs=-.43)がみられた. 【考察】「対人劣等」の因子は,対人関係において劣等感を触発する事態やスキルの欠如などに関するものと解釈されており,主として主体側の要因に起因するもの,すなわち学生側のスキルの要因によるストレスイベントと捉えられる.また,「自己主張」や「表現力」の 2 因子は ENDCORE モデルの中の表出系スキルを示す.これら 2 因子と「対人劣等」の因子に逆相関をみとめたことは,表出系スキルの未熟な学生は指導者への意思の伝達がうまくいかず,ストレスになりやすい可能性を示唆するものと考えた.「対人葛藤」の因子は主に他者の行動に起因する顕在的な対人葛藤に関するものであり,これは実習指導者の要因によるものと考えられる.臨床実習指導に当たっては,学生に十分な配慮を講じていたとしても,CS に乏しいと自覚している学生は,対人ストレスイベントを多く経験している可能性があると考えられ,このような学生への認識と対処に留意する必要性が改めて確認された.
95 感覚性運動失調に対し Transfer Package 併用下で肩への継続した電気刺激により改善した一例		令和 2 年 9 月	第 54 回日本作業療法学会（新潟）口述発表	感覚性運動失調（Sensory Ataxia:以下 SA）とは,深部感覚障害を条件とする運動失調であり,視床や後頭葉などの病変で出現するといわれている.今回,運動失調に対して Transfer Package（以下 TP）併用下での随意運動介助型電気装置（オージー技研,以下 IVES）を用いた持続的電気刺激を実施した.その結果,運動失調の軽減がみられ,その後の生活における麻痺手の使用につながった一例を経験した。対象は,60 歳代女性.1 年前,左視床出血を認め四肢運動失調・右半身の感覚障害を認め,回復期病棟を経て自宅に退院したが,失調症状の増悪を認めたため,当院回復期病棟へ入院となる.入院から 1 か月後に 3 週間,右三角筋前部繊維を標的筋として IVES をパワーアシストモードで感度を肩屈曲 45°程度で最大強度に達する設定とし,一日 8 時間装着した.TP は 10 項目の目標を聴取し,右上肢使用の同意を得,毎日の右上肢の使用を症例とセラピストがディスカッションした.開始時は右上肢使用に困り,消極的であった.麻痺手の挙上で振戦が増強するため,下方の棚のドアの操作・ズボンを下げるなど麻痺手の挙上が伴いにくい動作を明示した.また座位では前腕を机上に置き,必要な関節数を減らすことを指導した.その結果,動作の安定がみられ,肘をついて物品をつまむようになり,自ら動作を工夫するようになった.本介入では SA による学習性不使用を補うことを目的とし,TP 併用下で肩への IVES を持続的に装着した.このことは臨床的に意義のある最小変化量,MAL0.5 点（van der Lee,1999）,WMFT 所要秒数 19 秒・FAS1.0（Lang,2008）を超える改善を認め,自助箸での食事や両手での料理が可能になり,麻痺手の使用行動の改善へつながった.先行研究では運動失調に対して日常生活における麻痺手の使用を促すことは運動学習につながり有効である（Ricards,2008）と考えられており,また電気刺激を随意運動に同期させることでより皮質興奮性が増大する

				(Khaslavskaia,2005) との指摘がある.TP による日常生活での手の使用の促しが運動学習につながり,さらに IVES による肩への持続的な電気刺激を実施したことが失調の軽減につながったと考えた.しかし,本症例の企図振戦は持続しており,意識することで肩の動きを制御することが必要なレベルにとどまり,行為の自動化までには至らなかった.この点は今後の課題として症例数を重ね検証していきたい. ［共同発表者］塩見健太，山形力生，上田徹
96　近赤外分光法（NIRS）による手工芸の基礎的研究：健常若年者を対象とする予備的研究		令和 3 年 9 月	第 55 回 日本作業療法学会（仙台）	紙細工の認知的治療効果について，健常若年者を対象に近赤外分光法(NIRS)を用いて検証した．あわせて,ワーキングメモリと実行機能との関連も検討した．紙細工活動はペーパーブロックとロールピクチャーを使用し，実験課題は,パーツを「折る（巻く）」課題と「構成する」課題で,対照課題は用紙を無目的に折る－開く動作とした.関心領域は左右の背外側前頭前野(DLPFC),左右の外側前頭極(外側 FP),内側前頭極(内側 FP)の 5 か所に設定した．分散分析の結果では,課題ごとの 5 領域での Δoxy-Hb については,統計的差異は認められなかったが,部位と検査間の関連性の検討で,両活動において,ワーキングメモリや実行機能を反映する指標とされる TMT B・TMT(B-A)と，「構成する」課題で左 DLPFC との間に有意な負の相関がみられた（所要時間が短いほど左 DLPFC の Δoxy-Hb が大きい傾向を示した）こと等いくつかの示唆的結果を得た．［共同発表者］岩崎智子，大西久男，山形力生，中田修，中島大貴
97　慢性期脳卒中患者に対する遠隔リハビリテーションの試み		令和 3 年 9 月	第 55 回日本作業療法学会（仙台）ポスター発表	近年,退院後の脳卒中対象者においてコロナウイルスのため在宅における訪問リハビリテーション等の対面では感染の恐れがあり,介入が不十分な現状がある.今回,当院を退院された 3 名の脳卒中麻痺患者に対し,パソコンを用いた遠隔リハビリテーション（遠隔リハ）で麻痺側上肢の随意性・使用頻度の維持・向上目的とした介入を行った結果,機能の維持・向上を認めたため報告する． 対象者は当院回復期リハビリテーション病棟を退院した慢性期片麻痺患者のうち,自主練習が遂行でき,パソコンおよびタブレットを本人及び家族が操作出来る 3 名（男性 1 名,女性 2 名.発症後期間 0.6～2.8 年）とした.期間は 3 カ月,各々実施した.方法は,タブレット使用しスカイプアプリ（マイクロソフト社）にて作業療法士が対象者へ週 1 回 20 分間テレビ通話を行った.内容として①上肢の自主練習の確認・提案,②上肢の使用状況の確認・使用方法の提案,③困ったことの聴取,動作指導などを行った.評価方法は,3 カ月に 1 回当院にて Fugl-Meyer Assessment（以下 FMA）,Motor Activity Log の Amount of Use（以下 MAL-A）,Wolf Motor Function Test の平均時間（以下 WMFT 時間）の 3 項目につき経時的に比較検討した.その結果,評価の 3 項目は開始時と比して低下を認めず概ね維持されていた. 石川（1997）は「在宅復帰後の不活動により身体機能や ADL 能力の低下が起こりやすく運動麻痺が残存する場合はその傾向が著しい」と指摘し,及川（2003）は「退院後の患者において上肢で改善が見られた 8 名のうち,5 名は組手による肩屈曲などの自主練習トレーニングを毎日実施していた」としている.今回の遠隔リハの症例では FMA 項目では開始時と比して低下を認めず 2 名は機能維持,1 名は機能向上したと捉えた.週 1 回の遠隔リハを行ったことにより,日常生活の中での自主練習頻度が向上し,上肢機能維持に寄与したと考え

				た.退院後の遠隔リハは上肢機能を維持・向上する可能性を秘めており,退院後の機能維持の選択肢の一つになると示唆された.尚,今回は 3 例のみの検証であったため,今後はプロトコルを吟味したうえで症例数を増やしていきたい. ［共同発表者］ 塩見健太,山形力生,上田徹
98 奈良学園大学リハビリテーション学科におけるコロナ禍の学内実習の紹介②― 早期体験実習の概要と学生アンケート調査―	共著	令和 3 年 10 月	第 34 回教育研究大会・教員研修会	本学の早期体験実習（1 年次）について，令和 2 年度は，新型コロナウィルス感染拡大を受け，当実習を学内実習として実施した．今回の実習では，①予習は臨床実習専用ホームページ（HP）に予習用教材を配置し，Web フォームから課題を提出させた．②学内実習では，療法士の役割や疾患・障がいの理解を促すために写真や動画，現場からのライブ配信等の視覚教材を活用した．学生は 10 名程度の小グループに分かれ，専任教員のファシリテートのもと意見を出し合い，学習内容の定着を図った．また③復習においても同様に HP から復習を促すと共に，アンケートに回答させた．実習内容については約 90%が「よく理解できた」「まぁまぁ理解できた」と回答していた．反面，「2 年次以降の学外実習に向けた学習面の不安」については約 45%が「不安」「非常に不安」と回答した．また印象に残ったコンテンツとして「病院からのライブ配信」「脳血管障害（高次脳機能障害）」を挙げた学生が約 50%いた．自由記述では「教員と話ができた」「指導してもらえた」ことが良かったという意見のほか，「自分が知らなかった分野に興味が持てた」という意見もみられた．コロナ情勢下においては，従来のような多人数での見学実習は困難となる．今回は，現状における早期実習の一つのモデルを示すことができたと考える． ［共同発表者］前田吉樹，中島大貴，伊藤健一，野中紘士，阿波邦彦，藤田信子，岩﨑智子，橋本雅至，山形力生，池田耕二
99 手工芸が健常成人の脳活動に及ぼす効果：実行機能の個人差に着目した fNIRS 研究	共著	令和 4 年 9 月	第 56 回 日本作業療法学会（京都）口述発表	作業療法で治療の手段として用いる手工芸の認知的効果について健常成人を対象に NIRS を用いて検証した．あわせて，実行機能の個人差との関連も検討した．手工芸として紙細工活動であるペーパーブロックとロールピクチャーを用い，実験課題は，「パーツ作成課題」と「構成課題」課題で，対照課題は用紙を無目的に折る－開く動作とした．関心領域は左右の DLPFC，内側 FP の 3 か所に設定した． 実行機能 Low 群と High 群で Δoxy-Hb の総量を比較した分析の結果，両活動とも，Low 群＞High 群となった．難易度が低い課題では，高齢になるほど神経資源を多く動員する必要があり，今回の両活動においても，2 群間には年齢差があったことから Low 群の方が脳賦活が高くなったと考えられた．課題毎に 3 領域の脳賦活を分析した結果，また，High 群ではより選択的に DLPFC が賦活されており，Low 群では領域全般にわたり賦活される傾向があった．さらに，High 群では両活動において，右側の DLPFC の脳賦活が高かったことが特徴的であり，視覚・空間的処理の要素が影響したと

				考えられた．Low 群ではペーパーブロックの構成課題でのみ左右DLPFC が選択的に賦活されている点，ロールピクチャーの構成課題にでは 3 領域において High 群より有意に賦活している点等が特徴的であり，課題の難易度と認知的負荷が関連していると考えた． 以上により，紙細工活動を治療として選択する際には，個人の実行機能に適した活動を選択することで，より効果的な治療として活用できる可能性があると考えた． ［共同発表者］岩崎智子，大西久男，山形力生，中田修
100　地域在住成人の実行機能における主観的評価と客観的評価との関係－実行機能質問紙の利用可能性の検討－	共著	令和 5 年 6 月	第 43 回 近畿作業療法学会（奈良）口述発表	実行機能を評価する神経心理学検査には時間を要する等の不便さがあり，簡便に行える質問紙検査の作成が試みられている。本研究では，実行機能質問紙の得点と神経心理学的検査の成績との関連を明らかにし，前者の利用可能性を検討した。 実行機能の主観的評価として実行機能質問紙（EFQ・J-BES），客観的評価として神経心理学検査（TMT-J・新ストループ検査Ⅱ・D-CAT）を実施した。年齢と認知機能成績（MoCA-J）別に参加者を各 2 群に分け，実行機能質問紙の得点と，神経心理学検査の成績との関連を検討した。 年齢 Low 群，MoCA-J 高成績群において有意な相関のある項目を比較的多く認め，実行機能質問紙において利用可能性が比較的高いことが示唆された。対象者側の要因（年齢や全般的な認知機能の程度）と使用する質問紙検査側の要因（測定したい実行機能の要素）を考慮することで，実行機能質問紙を客観的行動評価のスクリーニングとして利用できる可能性があると考えた。 ［共同発表者］ 岩崎智子,中田修,山形力生,中島大貴,大西久男
101　学生の臨床実習における職業モデルとの出会いとその影響に関する検討　―モデルの背景との関係―	単著	令和 5 年 11 月	第 57 回 日本作業療法学会（沖縄）ポスター発表	【はじめに】臨床実習は現場を体験する貴重な経験であり，特に自分が目指す理想像を体現するモデルともいうべき職業的モデル（以下 OT モデル）となるセラピストの出会いは，職業的アイデンティティに影響を与えると考えられる．筆者らは，臨床実習において，このような OT モデルとの出会いがあったか，またその OT モデルはどのような特徴を持ち，学生のセラピスト観や作業療法観に影響を与えたかについて報告した（2019，山形）．今回，さらに学生が出会えたという OT モデルの背景，すなわち背景となる臨床現場や OT 部門の役割などについて調査し，OT モデルとの関連を検討したので報告する．【方法】対象は，作業療法養成大学において４年次総合実習（７週間）を経験した学生を対象とした． 実習終了後，OT モデルとの出会いの有無について調査し，出会いがあった場合は，職業的モデル特性（2004，藤井ら）に関する質問紙の回答を求めた．また，学生のセラピスト観や作業療法観への影響の有無についてあわせて調査した．職業的モデル特性（以下 VM）に関する質問紙は「患者への医療を大切にする作業療法士

				（以下 OTR）」，「学生への誠意ある態度を持つ OTR」，「専門家としての力量を持った OTR」，「臨床への熱意を持っている OTR」の 4 因子にて説明される．モデルの背景因子としては，勤めてみたいと思う臨床現場である（EV_1），チームの中で OT の役割がはっきりしている（EV_2），やりがいのある OT の役割をとっている（EV_3），理想的なシステム（他部門も含め）有した施設である（EV_4），訓練室や器具などの設備が備わっている（EV_5）の各設問に，①あてはまらない～⑤非常にあてはまる，の 1～5 点にて回答を求めた．尚，調査は目的等を説明し同意を得て実施した．次に，職業的モデル特性の合計得点（以下 VM_TO）および構成の 4 因子および背景因子（EV_1～EV_5）との相関係数を求めた．さらに VM 因子を従属変数，背景因子を独立変数として重回帰分析を行った．有意水準はいずれも 5%とした．【結果】1 期では，79.8%，2 期では，79.6%が OT モデルと出会ったと回答した．背景因子のうち VM_TO と特に高い相関がみられたのは,1 期実習で EV_3（r=.67）および EV_4（r=.73），2 期実習では EV_3（r=.61），EV_4（r=.60）だった．また，VM の 4 因子について得点間の分散分析の結果，有意差がみられたため（p<.0001），多重比較を行ったところ，1 期，2 期とも「患者への医療を大切にする OTR」の因子（以下 VM_F1）が最も高いことが確認された．また，VM_F1 因子と背景因子との相関では，1 期実習で EV_3（r=.63）および EV_4（r=.67），2 期実習では EV_2（r=.50），EV_3（r=.56），EV_4（r=.51）と有意な相関をみとめた．ステップワイズ法による重回帰分析では，EV_3 および EV_4 の 2 要因にて有意となった（R2=.503，β=.380，β=.390）．同様に 2 期実習では，EV_3 にて有意となった（R2=.265，β=.515）．【考察】学生が臨床現場で出会ったセラピストに OT モデルと感じた要素は医療を大切にしていると感じる人物像と考えられ，その施設の背景の特性が影響している可能性が示唆された．特に，臨床現場のセラピストがやりがいのある作業療法を展開し，しっかりとしたチーム医療を体現する機能を有する中で役割を遂行している姿が OT モデルとして魅力的なものにしていると考えられた．
102　多職種連携を強化するための情報シート導入の効果:回復期リハビリテーション病棟における試験的な半年運用の検討	共著	令和 6 年 3 月	回復期リハビリテーション病棟協会第 43 回研究大会（熊本）口述発表	【はじめに】回復期リハビリテーション病棟では効果的なリハビリテーションを提供するためには,適切な目標設定を行い,チームで包括的にアプローチを行う多職種連携が推奨されている.そこで患者様の目標・している ADL などの多職種で共有する情報シートを作成し,使用した職員に無記名式アンケートで情報シートの意義を考察したので報告する.尚,本報告は当院倫理審査委員会の承認を得ている.【方法】情報シートとは Excel で作成した,①生活目標及び退院時の ADL 目標②病棟 ADL 目標及び患者様の身体機能を 1 週間単位で記載し,多職種で共有するものである.セラピストが病棟 ADL の目標を記載し,それが出来ているか否か看護師が○△×の

				3段階評価をする.その選択をもとに次のしているADL目標を次週以降に反映させるといった手続きを繰り返すことで退院時のADL目標に近づけていくものである.対象は脳卒中及び不全脊髄損傷患者様に対して試験的に半年運用した.運用状況を使用したセラピスト17名,看護師5名にアンケートにて調査した.アンケートは情報シートを使用して良かった点,困った点を質問し,「はい」「どちらともいえない」「いいえ」の3段階で回答を求めた.【結果】情報シートにより「患者様の目標を意識するようになった」が68%,「自身の業務内容や役割が明確になった」が63%,「しているADLの把握ができるようなった」は45%,「多職種と連携が増えた」は31%と回答した.【考察】樋口らは「可視化により振り返りに繋がり,自身の思考を深めることに繋がる」と述べており,情報シートを通して振り返る作業を通して「患者様の目標の意識化」・「各職種の役割の明確さ」の好意的な意見に繋がったと考える.多職種との連携増加に関してはどちらともいえないといった意見もあり十分とは言えない結果となった.各職種が情報シートの記入内容に個人差がある現状もあり,今後の課題としたい. ［共同発表者］ 塩見健太,足立史奈,山形力生
「国際学会」				
1 Correlation between students' Resilience and communication skills in occupational therapy practice （作業療法学生の臨床実習におけるレジリエンスとコミュニケーション能力の関連について）	−	平成26年6月	WFOT（第16回世界作業療法士連盟大会・横浜）	臨床実習は学生にとってストレス状況であり、その状況に適応し乗り越えることが要求される。この研究の目的はレジリエンスとコミュニケーション能力の関連について検討をすることである。臨床実習を終了した作業療法学生のうち同意を得られた 29 名を対象として、レジリエンスの質問紙（小塩ら，2002）を実施した。さらに、ENDCOREs（藤本ら，2007）によりコミュニケーション・スキルを測定した。調査後、それぞれの構成因子間の相関係数を調べた。その結果、レジリエンスとENDCOREsの得点には有意な相関がみられた。これらからコミュニケーション能力の高い学生ほど困難な状況を乗り越える精神的回復力は高い傾向にあることが示唆された。ENDCOREsの「他者受容」や「解読力」の因子と相関がみられたことから、これらの反応系のスキルを高めることが安定したレジリエンスをもたらすものと考えた。 ［共同発表者］ 山形力生、櫻井秀雄、眞々部仁美
2 The Effects of Individual Differences in Executive Function on Prefrontal Lobe Activation in Healthy Adults: An fNIRS Study		令和5年7月	International Neuropsychological Society（INS）2023 meeting（Taipei） ポスター発表	実行機能（EF）は、日常活動のパフォーマンスに関与する。本研究の目的は、機能的近赤外分光法（fNIRS）を使用して、実行機能テストのパフォーマンスの個人差と、WMおよびIC負荷による脳活性化の対応する変化を調べることである。健康な成人54名に対し、fNIRSを使用した2つの実行機能検査（D-CATおよびストループ検査）でΔOxy-Hbを測定し、得点の高低で2群に分けた。両方のテストで領域の主効果に有意な差が見つかり、前頭極（FP）よ

(実行機能の個人差が健康な成人の前頭前野の活性化に及ぼす影響: fNIRS 研究)				りも左 DLPFC の活性化が有意に高いことが示唆された。実行機能の個人差が前頭前野の活性化の特定の側面に影響を与えることを示唆する。 ［共同発表者］ Tomoko Iwasaki ,Osamu Nakata,Rikio Yamagata,Hisao Ohnishi

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和 5年10月17日

氏名　　阿波　邦彦　　印

研究分野	研究内容のキーワード
人間医工学	リハビリテーション科学・福祉工学、呼吸リハビリテーション、がんリハビリテーション

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 1.呼吸機能検査や呼吸理学療法評価の実技演習および排痰手技や気道吸引実習の活用	平成27年10月1日 ～ 平成28年3月31日	京都橘大学健康科学部理学療法学科での内部障害系理学療法学応用演習で、肺および肺葉の位置、肺区域の位置などの確認を触診および座学にて演習を行った。また、呼吸器疾患に関する理学療法評価、呼吸機能検査等の評価方法や排痰手技および気道吸引の演習を行った。
2.授業における小テストの活用	平成28年4月1日 ～ 現在に至る	大和大学保健医療学部総合リハビリテーション学科理学療法学専攻での呼吸・循環障害理学療法学および内部障害理学療法学で、座学を中心に講義している。なお、毎回、授業の初めに前回の授業内容の復習を目的とした小テストを実施している。
3.症例ビデオを視聴してADLや家庭環境をもとに、介護保険を使ったサービスなどを協議するグループワークの活用	平成28年4月1日 ～ 現在に至る	大和大学保健医療学部総合リハビリテーション学科理学療法学専攻での地域理学療法で、学生は介護保険を使ったサービスや価格帯を予習し、症例ビデオを視聴した後、対象症例の在宅における問題点及び課題をグループワークで協議し、発表会を催す反転授業を実施している。その際、対象症例の動作や基本情報を基に介護度を予想し、その介護度ごとに異なる補助費から提供サービスを検討するよう指導している。また、授業前に前回の授業内容から小テストを実施している。
4. 症例レポートの作成のためのグループワークの活用	平成28年10月1日 ～ 現在に至る	大和大学保健医療学部総合リハビリテーション学科理学療法学専攻での呼吸・循環障害理学療法学で、肺および肺葉の位置、肺区域の位置などの確認を触診で演習を行い、呼吸器疾患に関する理学療法評価、呼吸機能検査等の評価方法や排痰手技や呼吸介助などの演習を行っている。また、臨床実習や症例レポート課題を見越し、学生に慢性呼吸器疾患患者のビデオを視聴させ、性別や年齢、現病歴といった基本情報を基にグループワークで問題点や課題点を協議し、レポート作成の指導を実施している。
5.症例のレジュメをもとに、症例の問題点や課題点を探るグループワークを活用	平成28年10月1日 ～ 現在に至る	大和大学保健医療学部総合リハビリテーション学科理学療法学専攻での内部障害理学療法学で、内部障害患者の症例レポートのレジュメから主な問題点や課題点、今後予想される問題などをグループワークを通し演習を起こい、各グループによる発表会を催している。

6.兵庫県立但馬長寿の郷で地域ケアに関わる座学およびグループワークの活用	平成29年7月8日 ～ 平成29年7月9日	大和大学保健医療学部総合リハビリテーション学科理学療法学専攻での地域理学療法学で、兵庫県立但馬長寿の郷で学外講習を受ける。そこでは地域ケアに関わる当該施設の理学療法士より「地域ケアに関わる基礎知識」等の座学を受け、当該施設で管理されている介護補助具や車いす等を用いてグループディスカッション並びにグループ発表を行った。 学外講習を受けるために、当該施設で協議および準備し、宿泊と食事、移動手段の手配等を準備した。
7.症例検討をもとに、予防的リスクマネジメントにおける予防的検討に対しグループワークを活用	平成31年4月1日 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科での人体機能学Ⅱ（動物性機能）、運動学Ⅱ（各論）、臨床運動学、理学療法研究法、内部障害評価学、人体性機能実習において、コロナ禍に伴い授業形態がWeb講義などへ変更になった。それに伴い、各科目の授業の学修状況を確認するために、「Google classroom」のフォームやスプレットシートを用いて、舞授業の初めに前回授業の確認問題を提示し、その確認を講義初めに行った。 また、事前に予習的な課題や資料提示を行い、反転授業を意識した取り組みを行った。
8.遠隔授業の必要性に対しZoomを用いたグループワークを活用	令和2年4月1日 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻での、臨床運動学や生理機能実習などで、Zoomのブレイクアウトルームを活用してグループワークを通し演習を行い、各グループによる発表会を実施した。現在は対面に戻ったため、個別対応での学生グループに対し適宜実施している。
9.症例検討をもとに、予防的リスクマネジメントにおける予防的検討に対しグループワークを活用	令和4年9月18日 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻での、医療リスクマネジメントで、症例の事例を通して、医療リスクマネジメントにおける予防策をグループワークを通し演習を行い、各グループによる発表会を催している。
２　作成した教科書，教材		
1.講義用プリント	平成28年4月1日 ～ 現在に至る	大和大学保健医療学部総合リハビリテーション学科理学療法学専攻での呼吸循環障害理学療法学、内部障害理学療法学、地域理学療法学のための講義用プリントを作成し、使用している。
2.PT・OTビジュアルテキスト　内部障害理学療法学、初版、335頁、松尾善美（編）、ISBN 978-4-7581-0217-9	平成28年12月6日 発行	「【第5章　呼吸器疾患・呼吸障害の理学療法】、肺がんを含む胸部外科手術前後、症状・障害の理解、理学療法の理論と実際、p.224～231」の執筆を担当。 共著者：角田晃啓、松尾善美、椿淳裕、高橋祐介、山科吉弘、関川清一、田畑稔、平野康之、泉唯史、高瀬広詩、堀江淳、柳澤幸夫、阿波邦彦、石井光昭、堀竜次、笹沼直樹、森田恵美子、河野健一、井坂昌明、永嶋道浩
3.PT・OT入門 イラストでわかる内部障害、初版、352頁、上杉雅之（監修）、堀江淳（編）、ISBN 978-4-263-26611-3	令和元年1月10日 発行	「【第2章　呼吸器疾患-知識・検査データ・治療-】、エッセンス、治療、p.19～26」の執筆を担当。 共著者：阿波邦彦、江越正次郎、田平一行、野崎忠幸、木村智子、小川真人、北村匡大、下雅意崇亨、笠原酉介、井澤和大、野村卓生、河野健一、河辺信秀、渡部祥輝、音部雄平、平野康之、堀田千晴、堀田一樹、平木幸治、加藤祐司、鈴木昌幸、池田聖児、島雅晴、島﨑寛将、谷口小百合、井出宏、森尾裕志

4.PT・OT入門 イラストでわかる理学療法概論、初版、352頁、上杉雅之（監修）、ISBN 978-4-263-26614-4	令和元年3月25日発行	「【第15章　内部障害系理学療法（COPDの症例）】、エッセンス、内部障害とは、増加している内部障害者、高齢化と内部障害そして重複障害、内部障害とリハビリテーション対象患者、慢性閉塞性肺疾患とは、COPDの病態、全身併存症と肺合併症、COPDの問題点、呼吸リハビリテーション、症例検討、確認してみよう！・解答p.263～282」の執筆を担当。 共著者：秋月千典、阿波邦彦、安彦鉄平、今井章人、岩瀬弘明、岡村和典、金井秀作、神里巌、小柴武、木下めぐみ、甲田宗嗣、篠原博、菅原仁、武内孝祐、永井宏達、中越竜馬、中西亮介、成瀬進、西守隆、山野薫、山本克己、吉田一正、吉田勇一
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
1.大学設置・学校法人審議会の教員組織審査	平成23年7月	京都橘大学健康科学部理学療法学科専任助教「内部障害系理学療法学基礎演習」「内部障害系理学療法学応用演習」可と判定
2.大学設置・学校法人審議会の教員組織審査	平成25年10月	大和大学 保健医療学部 総合リハビリテーション学科 理学療法専攻専任講師「卒業研究Ⅰ」「内部障害理学療法学」「内部障害理学療法学演習」「呼吸・循環障害理学療法学」「呼吸・循環障害理学療法学演習」「地域理学療法学」「理学療法学臨床実習Ⅰ」「理学療法学臨床実習Ⅱ」「理学療法学臨床実習Ⅲ」「理学療法学臨床実習Ⅳ」「卒業論文」「早期体験実習」「地域理学療法実習」「理学療法評価実習」可と判定
3.大学設置・学校法人審議会の教員組織審査	平成30年8月	奈良学園大学 保健医療学部 リハビリテーション学科 理学療法専攻専任准教授「基礎ゼミⅡ」「人体機能学Ⅱ（動物性機能）」「人体生理機能実習」「運動学Ⅱ（各論）」「臨床運動学」「理学療法研究法」「客観的臨床能力演習（理学療法）」「理学療法卒業研究」「内部障害評価法」「総合臨床実習Ⅰ（理学療法）」「総合臨床実習Ⅱ（理学療法）」可と判定
4.授業評価アンケート	令和4年1月	奈良学園大学 保健医療学部 リハビリテーション学科 理学療法専攻で、人体機能学Ⅱ（動物性機能）、臨床運動学、客観的臨床能力演習（理学療法）、内部障害評価学、地域理学療法実習、理学療法評価実習にて、授業評価アンケートを実施。「この授業に積極的に参加していますか。」等の概ねの項目（5点満点）において、平均が4点以上であったものの、「この授業を理解するのに1週間に授業時間外でどれほど学習をしていますか。」の項目に関しては3点台であった。より予習と復習を意識した講義内容、もしくは反転授業等を検討する必要があった。

5. 大学設置・学校法人審議会の教員組織審査	令和4年9月	奈良学園大学大学院リハビリテーション学研究科内部機能障害リハビリテーション学領域専任准教授「統計解析特論」「内部機能障害リハビリテーション学特論」「臨床支援特別演習」「リハビリテーション学特別研究」可と判定
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 実習指導実績	平成16年4月 ～ 平成19年4月	春陽会うえむら病院にて ケースバイザーとして評価実習指導を行った。実習生は柳川リハビリテーション学院（福岡）4年生で指導に際しては、以下のことに留意した。 ・ 他のスタッフとの連携の中で患者の選定基準や臨床での教育内容などを検討。 ・ 実習期間中は担当患者を定め、課題レポート、症例レポートを課題とした。 ・ 担当患者以外にも他の患者の病棟や病室でのリハビリテーションやカンファランスなどを積極的に経験させるようにした。 ・ 指導内容やその結果は他のスタッフとも共有しながら進めた。
2. 実習指導実績	平成21年4月 ～ 平成24年3月	敬天堂古賀病院にて スーパーバイザーとして、臨床実習、評価実習、見学実習、クリニカル・クラークシップ実習などの実習を受け入れた。対象校は西九州大学（佐賀）、医療福祉専門学校緑生館（佐賀）、福岡国際医療福祉学院（福岡）、目白大学（埼玉）、西日本リハビリテーション学院（熊本）であり、年間7名～8名の実習生を受け入れた。その際、上記以外に下記のことに留意した。 ・ 呼吸リハビリテーション専門病院として、質の高い医療を経験してもらい、考察できるように担当制とし、症例を3例ほど担当し指導した。また、他の患者に対し呼吸リハビリテーション評価を実施する際はアシスタントとして、必ず評価に参加することを徹底していた。 ・ 担当患者の症例レポート、症例発表を必須課題とし、実習終盤に症例発表を実施する。発表時は西九州大学リハビリテーション学部堀江研究室の勉強会などで多くの人の前で発表する機会を作った。 ・ 臨床実習では英文抄読を課題とし、佐賀大学大学院医学系研究科堀川研究室の抄読会で発表を実施した。 ・ 臨床実習指導者としての資質を高めるため、外部研修や関連学会への参加した（平成21年度九州ブロック研修会・臨床実習指導者研修会参加）
3. 院内研修会での講義 「当院におけるリハビリテーションについて」	平成19年11月	敬天堂古賀病院におけるリハビリテーション開設にあたっての目標と注意点。内容として、リハビリテーションの対象、算定方法などについての講義、リハビリテーションの概要と評価、治療について講義を行った。
4. 院内研修会での講義 「介護領域におけるトランスファー」	平成20年5月	患者のトランスファーについての講義。概念と方法を実技と資料を交えて3日に分けて実施した。現在も講義は年に1回から2回程度実施継続中だが、後輩スタッフが主となり私はアドバイザーとして指導にあたった。

5.院内研修会での講義 「呼吸介助方法の指導」	平成20年8月	年間2回程度数日間にわたり、院内スタッフに対し呼吸介助方法の指導を資料と実技を用いて実施した。その際、各病棟のリーダーを育成できるよう、研修会以外での実習講義を行った。
6.佐賀県理学療法士会南部地区勉強会での講義 「呼吸リハビリテーションの実際」	平成20年8月	佐賀県理学療法士会南部地区勉強会にて呼吸リハビリテーションについて講義した。パワーポイントを用いて、呼吸リハビリテーションの概要と評価方法、治療プログラムなどについて症例などを通して講義した。
7.鳥栖・若楠呼吸勉強会での講義 「COPDの呼吸リハビリテーション」	平成20年9月	鳥栖・若楠呼吸勉強会にてCOPDの呼吸リハビリテーションについて講義した。パワーポイントを用いて、呼吸リハビリテーションの概要と評価方法、治療プログラムなどについて症例を通し、実用性を求める講義をした。
8.佐賀呼吸リハビリテーションリーダー研修会での講義「呼吸生理と解剖」	平成21年6月	佐賀呼吸リハビリテーションリーダー研修会にて呼吸生理と解剖について講義をした。パワーポイントを用いて、呼吸器の発生から生理学、解剖学を疾患と共に説明した。
9.佐賀県理学療法士会研修会での講義 「排痰」	平成22年8月	今年度から理学療法士も吸引が可能となり、吸引・排痰における知識と技術が求められる。本研修会では排痰と吸引の知識と技術獲得のためである。理学療法士の立場での排痰法や排痰体位、排痰の機序などの講義を行い、排痰の技術指導や吸引指導などを行った。
10.佐賀県理学療法士会南部地区研修会での講義 「呼吸リハビリテーションの基礎」	平成22年9月	呼吸リハビリテーションにおける基礎的な知識、臨床においての慢性呼吸不全患者に対する中止することなどを講義し、歩行トレーニングや離床の重要性を中心に講義を行った。
11.武雄医師会研修会での講義 「呼吸リハビリテーションの基礎」	平成22年11月	看護師を中心に構成された研修会で、呼吸リハビリテーションにおける基礎的な知識やupdate BODE indexなどの新しい知見などを紹介した。
12.佐賀包括的呼吸リハビリテーション研究会南部地区勉強会での講義 「呼吸リハビリテーションの基礎」	平成24年2月	理学療法士、看護師を中心とした呼吸リハビリテーションに係わる勉強会で、慢性呼吸器疾患患者に対する酸素管理や運動療法、基礎的な考え方などを講義した。
13.京都橘大学 淳芳会　健康セミナーでの講義 「あなたが知らないCOPD」	平成24年10月	京都橘大学卒業生を対象に健康セミナーとしてCOPDについて講義した。喫煙とCOPDとの関わり、COPDの病態やその対策などを講義するとともに、参加者の呼吸機能を測定した。
14.わかあゆ呼吸ケア勉強会での講義 「慢性期呼吸リハビリテーションの評価」	平成24年11月	理学療法士と作業療法士を中心とした慢性期リハビリテーションに関する評価法の研修会を実施した。内容は運動機能に関する評価、呼吸機能に関する評価、日常生活動作や健康関連生活の質の評価などを講義した。
15.わかあゆ呼吸ケア勉強会での講義 「慢性呼吸器疾患の呼吸リハビリテーションの実際」	平成25年12月	理学療法士と作業療法士を中心とした慢性呼吸器疾患の呼吸リハビリテーションに関する研修会を実施した。参加者は140名程度で、内容は運動療法、日常生活動作に関することを中心に講義した。

16. わかあゆ呼吸ケア勉強会での講義 「慢性期呼吸リハビリテーション」	平成26年10月	理学療法士と作業療法士を中心とした慢性期リハビリテーションに関する評価法と運動療法を中心とした研修会で、参加者は100名程度であった。内容は運動機能に関する評価、呼吸機能に関する評価と、それらを基にした運動療法等について講義した。
17. チーム医療CE研究会九州主催、第73回 臨床セミナー、呼吸療法Brush-up! ～あなたの知識、更新してみませんか ～福岡県での講義 「呼吸リハビリテーションの基礎」	平成27年8月	チーム医療に必要な呼吸リハビリテーションに関する基礎知識とチーム医療脳方法などを講義した。
18. わかあゆ呼吸ケア勉強会での講義 「慢性期呼吸リハビリテーション」	平成27年11月	理学療法士と作業療法士を中心とした慢性期リハビリテーションに関する評価法と運動療法を中心とした研修会で、参加者は120名程度であった。内容は運動機能に関する評価、呼吸機能に関する評価と、それらを基にした運動療法等について講義した。
19. 第56回日本呼吸器学会学術講演会および 第13回呼吸ケアカンファレンスでの講義 アシスタント 「理学療法の実習」アシスタント	平成28年4月	チーム医療のためのプラクティカルな呼吸ケアに関する講義と実践に即した実習のアシスタントを行った。
20. 兵庫県介護老人保健施設協会阪神支部 リハビリテーション部会研修会での講義 「呼吸リハビリテーションの基礎と在宅・施設への応用」	平成28年10月	理学療法士と作業療法士を中心に呼吸リハビリテーションの基礎と在宅・施設への応用について、症例を交えた座学と実技実習を用いて講義した。
21. わかあゆ呼吸ケア勉強会での講義 「慢性期呼吸リハビリテーション」	平成28年10月	理学療法士と作業療法士を中心とした慢性期リハビリテーションに関する評価法と運動療法を中心とした研修会で、運動機能に関する評価、呼吸機能に関する評価と、それらを基にした運動療法等について講義した。
22. わかあゆ呼吸ケア勉強会での講義 「慢性期呼吸リハビリテーション」	平成29年11月2日	理学療法士と作業療法士を中心とした慢性期リハビリテーションに関する評価法と運動療法、薬物療法を中心に座学形式で講義した。参加者は80名弱であった。
23. 石川県臨床工学技士会　第11回呼吸療法 セミナー「テーマ：ベッドサイドで活かす 呼吸療法」での講義 「チームとして取り組む呼吸リハビリテーション」	平成29年11月26日	看護師を中心としたコメディカルに対して、急性期から慢性期にかけての呼吸リハビリテーションに関する講義を実施した。参加者は100名程度であった。
24. 鳥取県臨床工学技士会　第7回鳥取県 呼吸療法セミナー「テーマ：チームで学ぶ！呼吸ケア！」での講義 「急性期から慢性期にかけたCOPD患者に対する呼吸リハビリテーション」	平成30年7月22日	看護師、理学療法士、臨床工学技士を中心としたコメディカルに対して、急性期から慢性期にかけての呼吸リハビリテーションに関する講義を実施した。参加者は222名であった。

25. 2022年度株式会社ビーナス研修会での講義「呼吸リハビリテーション入門」	令和4年9月26日	通所系サービス看護師を中心としたコメディカルに対して、急性期から慢性期にかけての呼吸リハビリテーションに関する講義を実施した。参加者は100名程度であった。
26. 石川県臨床工学技士会　第11回呼吸療法セミナー「テーマ：ベッドサイドで活かす呼吸療法」での講義 「チームとして取り組む呼吸リハビリテーション」	平成29年11月26日	看護師を中心としたコメディカルに対して、急性期から慢性期にかけての呼吸リハビリテーションに関する講義を実施した。参加者は100名程度であった。
24. 鳥取県臨床工学技士会　第7回鳥取県呼吸療法セミナー「テーマ：チームで学ぶ！呼吸ケア！」での講義 「急性期から慢性期にかけたCOPD患者に対する呼吸リハビリテーション」	平成30年7月22日	
5　その他 【教育実績】 1. 京都橘大学健康科学部理学療法学科における教育実績	平成24年4月1日 ～ 平成28年3月31日	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査を受け、専任助教として勤務した。担当科目は、内部障害系理学療法学基礎演習、内部障害系理学療法学応用演習であった。実務としては、理学療法学実習における巡回指導および実習先との連絡・調整業務、理学療法学科運営に関する業務、各種行事への参加、調査活動、広報活動、入試関連業務等に従事し、特にヘルスプロモーションコースに在籍していたため、野洲市や山科市での調査測定で学生とともに身体能力調査を行い、学生へ調査方法の指導、スケジュール管理、機器・機材運搬等を行った。ホームルームや学生が主体となっている学生学会の臨床評価研究会にて、アドバイザーとして、学生学会の一員として参加していた。また、例年行われている『全国私立大学FD研修会（浜松）』に参加し、FDについて学ぶ。一方、京都・滋賀を中心とした呼吸リハビリテーションを学ぶ会「わかあゆ呼吸ケア勉強会」をつくり、その事務局として運営に関わっていた。 担当科目は、内部障害系理学療法学基礎演習、内部障害系理学療法学応用演習であり、実技をともなう科目やその他の科目の補助として講義に参加した。ホームルームや学生が主体となっている学生学会の臨床評価研究会にて、アドバイザーとして、学生学会の一員として参加していた。また、例年行われている『全国私立大学FD研修会（浜松）』に参加し、FDについて学ぶ。また、京都・滋賀を中心とした呼吸リハビリテーションを学ぶ会「わかあゆ呼吸ケア勉強会」をつくり、その事務局として運営に関わっている。また、平成25年度4月から平成28年3月まで、科学研究助成費「課題名：健康関連QOLに着目した、新たな肺がん葉切除術前後のがんリハビリテーションの開発」に携わった。

2. 大和大学保健医療学部総合リハビリテーション学科理学療法学専攻における教育実績	平成28年4月1日 ～ 平成31年3月31日	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査を受け、専任講師として勤務した。担当科目は、「卒業研究Ⅰ」「内部障害理学療法学」「内部障害理学療法学演習」「呼吸・循環障害理学療法学」「呼吸・循環障害理学療法学演習」「地域理学療法学」「理学療法学臨床実習Ⅰ」「理学療法学臨床実習Ⅱ」「理学療法学臨床実習Ⅲ」「理学療法学臨床実習Ⅳ」「卒業論文」「生理学Ⅰ」「内科学」であった。平成28年度は2期生の副クラスアドバイザーとして、平成29年以降は4学年すべての副クラスアドバイザーとして学生指導等を日々行うとともに、国家試験対策および広報活動の責任者として業務に携わり、成績下位学生への個別指導およびグループワークにおける助言と監督業務を行った。また、2か月に1回開催される吹田市片山地区の地域ケア会議に参加し、地域における事案について協議していた。
3. 奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻における教育実績	平成31年4月1日 ～ 現在に至る	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査を受け、専任准教授として勤務する。担当科目は、「基礎ゼミⅡ」「人体機能学Ⅱ（動物性機能）」「人体生理機能実習」「運動学Ⅱ（各論）」「臨床運動学」「理学療法研究法」「客観的臨床能力演習（理学療法）」「理学療法卒業研究」「内部障害評価法」「早期体験実習」「地域理学療法実習」「理学療法評価実習」「総合臨床実習Ⅰ（理学療法）」「総合臨床実習Ⅱ（理学療法）」である。平成31年度は1期生、令和2年度は2期生、令和3年度は3期生の１年担当クラスアドバイザーとして初年度教育における学生指導等を日々行っている。また、大学管理運営においては、キャリアセンター運営委員会、学生生活WG委員会、衛生委員会に所属している。キャリアセンター運営委員会では、近畿地方の病院・施設関係に求人票等のご案内や就職説明会の準備、キャリアガイダンス等の企画・運営を行っている。学生生活WG委員会では学科内の学生に関する情報共有と各イベントの企画と指導、新入生研修のタスクフォースリーダーとして新入生研修の企画・運営を行っている。衛生委員会では、学科代表としてコロナ禍における学内の感染拡大予防対策、情報共有、学内マニュアルの作成などに携わっている。

事項	年月日	概　　要
【研修活動】		
1. 長崎呼吸器リハビリクリニックでの研修	平成19年9月1日 ～ 平成20年3月31日	毎週木曜日に長崎呼吸器リハビリクリニックにて、呼吸リハビリテーションの研修を受けた。主に呼吸リハビリテーション評価方法（フィジカルアセスメント、画像診断、呼吸機能検査、6分間歩行距離テスト、漸増シャトルウォーキングテストなど）、治療方法（全身持久力トレーニング指導、呼吸介助、薬物療法、栄養療法など）などを研修した。
2. 大阪国際がんセンターでの研修	令和1年5月30日 ～ 令和5年3月31日	毎週金曜日に大阪国際がんセンターにて、がんリハビリテーションの研修を受け、特別研究員として評価・治療に関わる知識、技術を学んでいる。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
(1) 理学療法士資格	平成16年4月26日	第46765号
(2) 3学会合同呼吸療法認定士	平成22年1月1日	第100732号
(3) 修士（医科学）	平成22年3月24日	佐賀大学第72号 修士論文題目：慢性閉塞性肺疾患患者における多次元重症度指数（BODE index）の有用性の研究
(4) 呼吸ケア指導士	平成25年4月1日	第213313号
(5) 博士（保健学）	平成30年3月31日	大阪府立大学第27号

		博士論文題目：「Natural recovery of tolerance and quality of life in elderly thoracic surgery （胸腔鏡下肺葉切除術を受ける高齢肺がん患者運動耐容能とQOLの縦断的変化に関する研究）」
２　特許等 特記事項なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 1.春陽会うえむら病院理学療法士	平成16年4月1日 ～ 平成19年8月31日	リハビリテーション科に勤務。 主に脳血管疾患、パーキンソン病などの特殊疾患、大腿骨頸部骨折術後、変形性関節症疾患を有する患者に対する理学療法、他部署とのカンファランス業務を中心に業務をしていた。特に循環器を中心に診療する病院であったため、循環器疾患をベースとする患者が多く、リスク管理、症状・病状の変化に十分に注意を払って理学療法を実施していた。家屋調査や訪問リハビリテーションを積極的に導入し、平成18年7月からは週3日午後から2～3件ほどの訪問リハビリテーション業務を行った。その際、担当者会議や訪問リハビリテーション会議などに参加を積極的に行った。また、地域における介護予防事業での転倒予防、筋力増強の講習会などで講師として参加し、年間2回程度定期的に行った。
事項	年月日	概　　要

2.敬天堂古賀病院理学療法士	平成19年9月1日 ～ 平成24年3月31日	リハビリテーション部開設および勤務。 入職時はリハビリテーション機能がなく、リハビリテーション部責任者として平成19年9月にリハビリテーション部を立ち上げた。入職当初は開設業務を行いながら理学療法を実施、平成19年9月から平成20年3月末まで長崎呼吸器リハビリクリニックにて週1日の頻度で研修させてもらった。また、開設2年時は新人が入職、理学療法士2人となり、後進の指導を中心に行った。主に呼吸器疾患、運動器疾患を有する患者に対する理学療法、他部署とのカンファランス業務、リハビリテーション部の管理業務、新人職員の教育、実習生指導を中心に業務をした。特に呼吸器疾患を中心に診療する病院であるため、呼吸器疾患に対する理学療法を実施し、専門的な知識・技術を習得するため学会活動、研修会活動を積極的に行っていた。リハビリテーション対象者の5割超が呼吸器疾患であり、専門的な呼吸リハビリテーション評価を行い、客観的な運動処方を行い、定期的な評価を実践していた。また、リハビリテーション部責任者として、運営会議、病院機能評価委員会、広報・地域連携委員会、医療安全委員会リスク部会、教育委員会、リハビリテーション検討会、療法病棟検討会などに参加し、病院の運営方針、事業計画に介入していた。院内活動では呼吸ケアに関わる講義など院内研修活動に従事していた。院外活動では活動地域における呼吸器疾患に関するリハビリテーションの啓発活動、佐賀包括的呼吸リハビリテーション研修会の事務局を行いつつ、地域行事などへ参加し広報活動を行った。
3.地域における肺機能検診	平成21年4月 ～ 平成22年4月	地域の行事（江北町馬頭観音祭り）において、健康相談ブースの設置、無料の肺機能検査などを実施し、地域における呼吸器関連、リハビリテーション関連の相談、呼吸器疾患の早期発見事業に取り組んだ。
【受賞】		
1.第18回佐賀県理学療法士会学会 優秀賞	平成22年1月	第18回佐賀県理学療法士会学会 「COPD患者におけるBODE indexを用いた身体機能とADLの関係についての検証」
2.第19回佐賀県理学療法士会学会 優秀賞	平成23年2月	第19回佐賀県理学療法士会学会 「Update BODE indexと身体機能評価の関係」
3.第2回日本ヘルスプロモーション理学療法学会（佐賀県）学会長賞受賞	平成24年9月	第2回日本ヘルスプロモーション理学療法学会 「COPD患者の歩行距離低下に与える身体機能的影響因子の抽出と外出制限に関する研究」
4.第4回日本ヘルスプロモーション理学療法学会（京都府）学会長賞受賞	平成26年9月	第4回日本ヘルスプロモーション理学療法学会 「慢性閉塞性肺疾患患者における6分間歩行テスト後の息切れ優位群と下肢疲労優位群の身体機能の比較」
5.第5回日本ヘルスプロモーション理学療法学会（佐賀県）学会長賞受賞	平成27年10月	第5回日本ヘルスプロモーション理学療法学会 「下肢荷重力測定における日常生活動作自立度判定の基準訪問リハビリテーション利用者での検証」

6.第9回日本呼吸理学療法学会（東京都）優秀賞受賞	令和5年9月	第9回日本呼吸理学療法学会 「1年間の呼吸リハを完遂した男性COPD患者における6-minute walk workと心身機能、ADLの縦断的検証」
7.第11回日本筋骨格系徒手理学療法研究会学術大会（大阪府）優秀受賞	令和6年2月	第11回日本筋骨格系徒手理学療法研究会学術大会 「階層的クラスタリングによる地域在住高齢女性の腰痛サブグループの特性分析」
【研究活動】		
1.科学研究助成費 若手研究Ｂ （代表者 阿波邦彦：25750240）	平成25年4月1日 ～ 平成27年3月31日	研究代表者として「健康関連QOLに着目した、新たな肺がん葉切除術前後のがんリハビリテーションの開発」に従事した。助成額：4,290千円（直接経費 ： 3,300千円、間接経費 ： 990千円）
2.大阪ガス研究助成（代表者 阿波邦彦）	平成28年4月1日 ～ 平成29年3月31日	研究代表者として「高齢肺がん患者の術前後における呼吸代謝能評価スケールの開発」に従事した。助成額：700千円
3.科学研究助成費 若手研究Ｂ （代表者 阿波邦彦：17K17456）	平成29年4月1日 ～ 令和5年3月31日	研究代表者として「術後の健康関連QOLの早期回復を目的とした肺がん患者教育プログラムの開発」に従事した。助成額：4,160千円（直接経費 ： 3,200千円、間接経費 ： 960千円）
4.奈良学園大学保健医療学部共同研究費 （代表者 阿波邦彦）	令和4年6月2日 ～ 令和5年3月31日	研究代表者として「Empowerment評価を用いた慢性閉塞不活動の解明」に従事している。助成額：300千円
5.科学研究助成費 基盤研究Ｂ （代表者 阿波邦彦：23K10332）	平成29年4月1日 ～ 現在に至る	研究代表者として「COPD患者の身体活動性向上へむけた集団参加型遠隔医療プログラムの構築」に従事している。助成額：4,550千円（直接経費 ： 3,500千円、間接経費 ： 1,050千円）
４　その他		
1.　大和大学保健医療学部での学内委員会活動	平成28年4月1日 ～ 平成31年3月31日	国家試験対策委員会の専攻代表として、国家試験対策の企画、準備、運営を行い、各学年での学外模試の申し込みと運営、国家試験受験における願書作成の運営、成績下位学生への個別指導、学生のスケジュール管理等を行った。また、広報委員会の専攻代表として、高校への模擬授業の企画・スケジュール管理、教員の手配、オープンキャンパスの企画・運営に携わった。

2. 奈良学園大学保健医療学部での学内委員会活動	平成31年4月1日 ～ 現在に至る	キャリアセンター運営委員会、学生生活WG委員会、衛生委員会に所属している。キャリアセンター運営委員会では、学科代表として近畿地方の病院・施設関係に求人票等のご案内や就職説明会の準備、キャリアガイダンス等の企画・運営を行っている。学生生活WG委員会では学科内の学生に関する情報共有と各イベントの企画と指導、新入生研修のタスクフォースリーダーとして新入生研修の企画・運営を行っている。衛生委員会では、学科代表としてコロナ禍における学内の感染拡大予防対策、情報共有、学内マニュアルの作成などに携わっている。 令和5年からは学生支援センター運営委員、図書運営委員、実習管理センター長、衛生委員に所属し、学生支援に関わる学科運営を行っている。 また、令和6年からは自己点検評価委員会にも加入し学生支援センターの調書作成に従事している。
3. 学術論文の査読歴	平成26年7月23日 ～ 現在に至る	「Journal of Physical Therapy Science」 「International Journal of Environmental Research and Public Health」 「BMC Geriatric」 「BMJ Public Health」 「Journal of Occupational Health」 「Aging Medicine and Healthcare」 「Scientific Reports」 「Cureus Journal of Medical Science」 「日本呼吸理学療法学」 「理学療法科学」 「ヘルスプロモーション理学療法研究」 「医療福祉情報行動科学研究」 「保健医療学雑誌」

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書） 1. 『PT・ATビジュアルテキスト内部障害理学療法学』	共著	平成28年12月	羊土社	本書は学生がイメージしやすいよう多数の図表を掲載し、「目で見てわかる」かつ「実践的な」理解が進めやすいことを目的に企画された書籍である。その中で、「第5章　呼吸器疾患・呼吸障害の理学療法、肺がんを含む胸部外科手術前後、症状・障害の理解、理学療法の理論と実際」を担当し、症状・障害、理学療法の実際について科学的根拠と治療のポイントなどを絞って解説した。 B5判　全333頁 編者：松尾善美 共著者：角田晃啓、松尾善美、椿淳裕、高橋祐介、山科吉弘、関川清一、田畑稔、平野康之、泉唯史、高瀬広詩、堀江淳、柳澤幸夫、阿波邦彦、石井光昭、堀竜次、笹沼直樹、森田恵美子、河野健一、井坂昌明、永嶋道浩 本人担当部分：「第5章　呼吸器疾患・呼吸障害の理学療法、肺がんを含む胸部外科手術前後、症状・障害の理解、理学療法の理論と実際」（p224～231） 肺がん周術期の理学療法に焦点を当て、周術期における症状や各合併症、障害について説明し、それらに対する理学療法の理論と治療方法に関する実践的な内容について解説した。

2. 『PT・OT入門 イラストでわかる内部障害』	共著	令和元年1月	医歯薬出版株式会社	本書は理学療法士・作業療法士養成校の学生に合った内容で、「わかりやすい」・「興味が持てる」・「ポイントを絞った」を目標に企画された書籍である。その中で、「第2章　呼吸器疾患-知識・検査データ・治療-、エッセンス、治療」を担当し、呼吸器疾患の病態・症状について科学的根拠と治療のポイントなどを絞って解説した。 B5判　全337頁 監修者：上杉雅之 編集者：堀江淳 共著者：堀江淳、阿波邦彦、江越正次郎、田平一行、野崎忠幸、木村智子、小川真人、北村匡大、下雅意崇享、笠原酉介、井澤和大、野村卓生、河野健一、河辺信秀、渡部祥輝、音部雄平、平野康之、堀田千春、堀田一樹、平木幸治、加藤祐司、鈴木昌幸、池田聖児、島雅晴、島崎寛将、谷口小百合、井出宏、森尾裕志 本人担当部分：「第2章　呼吸器疾患-知識・検査データ・治療-、エッセンス、治療」（p.19～26） 呼吸器疾患の病態・症状について説明し、その治療方法に関する実践的な内容について解説した。
3. 『PT・OT入門 イラストでわかる理学療法概論』	共著	令和元年3月	医歯薬出版株式会社	本書は理学療法士・作業療法士養成校の学生に合った内容で、「わかりやすい」・「興味が持てる」・「ポイントを絞った」を目標に企画された書籍である。その中で、「第15章　内部障害系理学療法（COPDの症例）、エッセンス、内部障害とは、増加している内部障害者、高齢化と内部障害そして重複障害、内部障害とリハビリテーション対象患者、慢性閉塞性肺疾患とは、COPDの病態、全身併存症と肺合併症、COPDの問題点、呼吸リハビリテーション、症例検討、確認してみよう！・解答」を担当し、内部障害の概要、COPDの病態と治療、呼吸リハビリテーションについて解説した。 B5判　全337頁 監修者：上杉雅之 共著者：秋月千典、阿波邦彦、安彦鉄平、今井章人、岩瀬弘明、岡村和典、金井秀作、神里巌、小柴武、木下めぐみ、甲田宗嗣、菅原仁、武内孝祐、永井宏達、中越竜馬、中西亮介、成瀬進、西守隆、山野薫、山本克己、吉田一正、吉田勇一 本人担当部分：「第15章　内部障害系理学療法（COPDの症例）、エッセンス、内部障害とは、増加している内部障害者、高齢化と内部障害そして重複障害、内部障害とリハビリテーション対象患者、慢性閉塞性肺疾患とは、COPDの病態、全身併存症と肺合併症、COPDの問題点、呼吸リハビリテーション、症例検討、確認してみよう！・解答」（p.263～282） 内部障害の概要、COPDの病態と治療について説明し、呼吸リハビリテーションの理論と治療方法に関する実践的な内容について解説した。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（学術論文）				

1. 基本動作トレーニングを中心とした理学療法が有効であった重症慢性閉塞性肺疾患の1例 （査読付）	共著	平成20年3月	西九州リハビリテーション研究 第1号 pp.35～40	症例は長期臥床により日常生活能力低下、歩行能力低下を呈し、強い呼吸困難感、肺機能の低下があり、起立・歩行といった基本動作トレーニングを中心とした理学療法を施行し、歩行能力、ADL、健康関連QOLの改善が認められた。本症例を通して、重症COPD患者に対する理学療法の評価・治療について検討する。 本人担当部分：筆頭著者として報告した。 共著者：阿波邦彦、山田穂積、堀江淳
2. 酸素カートの異なる運搬条件が6分間歩行距離テストに及ぼす影響 （査読付）	共著	平成22年3月	西九州リハビリテーション研究 第3号 pp.17～22	本研究は、6分間歩行距離テスト（以下、6MWT）において酸素カートの異なる運搬条件（自己牽引・他者運搬）が最大歩行距離と生理学的変化、自覚症状の変化に及ぼす影響を検証することである。対象はCOPD患者16例（在宅酸素療法群8例、対照群8例）とした。6MWTは対照群では自己牽引よりも他者運搬の方が有意に高値であった。したがって、6MWTは酸素カートの運搬条件の違いが最大歩行距離に影響すると示唆された。 本人担当部分：筆頭著者として報告した。 共著者：阿波邦彦、堤恵理子、堀江淳、白仁田秀一、山田穂積、古賀義行、堀川悦夫
3. 慢性閉塞性肺疾患患者における多次元重症度指数（BODE index）の有用性の研究 （修士論文）	単著	平成22年3月	佐賀大学	COPDは全身性疾患であり、運動耐容能の低下を呈している。Celliらによって発表された多次元重症度を評価するBODE indexはGOLD病期分類よりCOPDを機能的に評価できる。そこで、COPD患者の身体機能とBODE indexとGOLD病期分類との関係を検討した。GOLD病期分類は実際の症状よりも軽症に評価してしまう可能性が示唆され、BODE indexは身体機能を含め総合的な評価となりうると考えられた。（全23頁）
4. 慢性閉塞性肺疾患患者における30秒椅子立ち上がりテストの運動耐容能評価法としての可能性 （査読付）	共著	平成22年10月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌 第20巻第2号 pp.156～159	30秒椅子立ち上がりテストがCOPD患者の運動耐容能評価として応用できるかCOPD患者27例を対象に検証した。CS-30はpeak VO2predとの間に精度の高い回帰式が得られた。このことから、CS-30は運動耐容能評価法として臨床応用の可能性を有しているのではないかと考えられた。 本人担当部分：データ収集、分析、考察を担当。 共著者：髙川晃敏、堀江淳、阿波邦彦、畠中耕志、白仁田秀一、畠中章吾、髙折和男

5. 男性慢性閉塞性肺疾患患者の病期におけるバランス能力の差異に関する検討 （査読付）	共著	平成23年4月	理学療法科学　26巻2号 pp.215～219	COPD患者のバランス能力と身体機能、身体能力の関係、GOLD病期間のバランス能力の差を検証することを目的とした。男性COPD患者31例のTUGは身体機能、身体能力と有意な相関が認められ、外周面積、総軌跡長は身体能力と有意な相関が認められた。GOLD最重症ではバランス能力の低下が起こり始める可能性が高くなることが示唆された。 本人担当部分：データ収集を担当。 共著者：堀江淳、阿波邦彦、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、白仁田秀一、田中将英、林真一郎、堀川悦夫
6. A Comparison of the BODE Index and the GOLD Stage Classification of COPD Patients in the Evaluation of Physical Ability （COPD患者の身体能力評価におけるBODE指数とGOLD分類の比較） （査読付）	共著	平成23年6月	Journal of Physical Therapy Science Vol. 23 No. 3 第23巻第3号 pp.437～441	COPD患者におけるBODE indexと身体機能、身体能力の関係、BODE indexとGOLD病期分類の関係、BODE indexの軽症群と重症群との身体機能、身体能力の比較を検証することを目的とした。COPD患者48例のBODE indexは身体機能、身体能力と有意な相関が認められ、GOLD病期分類は実際の症状よりも軽症と判断されることが示唆された。これらにより、BODE indexはGOLD重症度分類よりもCOPDの身体機能を含め総合的な評価となりうると考えられた。 本人担当部分：データ収集、統計処理、考察などを担当。 共著者：Anami Kunihiko、Horie Jun、Shiranita Shuichi、Imaizumi Yujiro、Ichimaru Katsuaki、Naotsuka Hiroyuki、Yamada Hozumi、Koga Yoshiyuki、Horikawa Etsuo
7. 慢性閉塞性肺疾患患者のBODE indexの重症度別におけるTimed up and go testの比較 （査読付）	共著	平成23年11月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第1巻第1号 pp.67～72	COPD患者のTimed up and go testと身体機能、身体能力の関係およびBODE indexの重症度分類に分けてTUGの差を検証することを目的とした。COPD患者48例が対象であった。TUGと各身体機能は相関化関係を認め、TUGはBODE indeの軽症群より重症群に低下が認められた。COPD患者は重症化するとTUGは低下し、転倒への危険性が増えることが示唆された。 本人担当部分：データ収集、分析、考察を担当。 共著者：阿波邦彦、堀江淳、白仁田秀一、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、山田穂積、古賀義行、堀川悦夫
8. 慢性閉塞性肺疾患患者の肥満が身体機能、身体能力に及ぼす影響に関する検証 （査読付）	共著	平成24年2月	体力科学 第61巻1号 pp.125～130	研究はCOPD患者の栄養状態をBMIから「痩せ」「標準」「肥満」と分類し、運動機能、運動能力が如何に影響を及ぼしているか検討した。その結果、COPD患者にとって「肥満」は、必ずしも否定される状態ではなく、むしろ肯定すべき状態である可能性が示唆された。 本人担当部分：データ収集を担当。 共著者：堀江淳、林真一郎、田中将英、阿波邦彦、堀川悦夫

9. COPD患者の重症度別5m最速歩行時間測定の意義の検討 （査読付）	共著	平成24年2月	西九州リハビリテーション研究 第5巻 pp.37～42	本研究は、COPD患者の瞬間的歩行能力として5m最速歩行時間が有用な指標となり得るか検討した。結果、運動耐容能評価精度向上のために瞬発的歩行能力測定を組み合わせることは、有用であることが示唆された。 本人担当部分：データ収集、分析を担当。 共著者：柳原加奈子、堀江淳、阿波邦彦、村田伸
10. COPD患者の歩行距離低下に与える影響因子の抽出と外出制限に関する研究 （査読付）	共著	平成24年10月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第2巻第3号 pp.107～112	本研究の目的は、COPD患者の外出制限の一指標である歩行距離低下の影響因子を抽出し、そのカットオフ値を算出することである。その結果、COPD患者の外出制限に影響を及ぼす因子はmMRC息切れスケールと膝伸展筋力であった。そのカットオフ値は、mMRCがGrade2、膝伸展筋力は53.6%であった。 本人担当部分：データ収集、分析、考察を担当。 共著者：阿波邦彦、堀江淳、村田伸、林真一郎、田中将英、堀川悦夫、山田穂積、古賀義行
11. 慢性閉塞性肺疾患患者の6分間歩行距離の違いにおける身体特性の比較 （査読付）	共著	平成24年10月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第2巻第3号 pp.125～130	慢性閉塞性肺疾患(COPD)患者の6分間歩行距離(6MWD)の違いにおける身体特性を比較した。対象は安定期COPD患者76名とした。COPD患者における6MWDは、呼吸機能、筋力、身体能力、ADL能力、健康関連QOLを反映した。 本人担当部分：データ収集を担当。 共著者：江越正次朗、堀江淳、阿波邦彦、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、白仁田秀一、上田真智子、田中将英、林真一郎
12. 30秒間椅子立ち上がりテストは慢性閉塞性肺疾患患者の運動耐容能を反映するか? （査読付）	共著	平成24年10月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌 第2巻第2号 pp.221～226	慢性閉塞性肺疾患（COPD）患者に対して、30秒間椅子立ち上がりテスト（CS-30）が運動耐容能評価法として応用できるかを検証した。対象はCOPD患者137例で、6MW peak VO2 pred=0.38×CS-30+4.42（R2=0.53）、ISWT peak VO2 pred=0.64×CS-30+1.85（R2=0.59）の有意な回帰式が得られた。CS-30の影響因子は、ISWT peak VO2 pred、TUGであった。CS-30は、在宅や狭小な施設において、客観的に運動耐容能が評価できる可能性が示唆された。 本人担当部分：データ収集を担当。 共著者：白仁田秀一、堀江淳、直塚博行、髙川晃敏、阿波邦彦、今泉潤紀、田中将英、渡辺尚、林真一郎

13. 高齢患者の最速歩行と最大低速歩行に及ぼす下肢筋の貢献度 －大腿四頭筋筋力と足把持力に着目して－ （査読付）	共著	平成25年1月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第2巻第4号 pp.163～167	本研究の目的は、高齢入院患者を対象に、異なる歩行速度における下肢筋力の貢献度を明らかにすることである。足把持力は最大低速歩行時の姿勢の安定化に関与している可能性が示された。一方、大腿四頭筋筋力は、身体を前方へ進める推進力としての役割が大きいことが推察された。 本人担当部分：データ収集を担当。 共著者：岩瀬弘明、村田伸、阿波邦彦、松尾奈々、山﨑康平、米山智彦、小松直正、重田裕子、窓場勝之
14. 地域活動に参加している地域住民の閉塞性換気障害調査とCOPDスクリーニングテストの関係 －Eleven-Item Pre-Interview Questionnaire（11-Q）、IPAGによるCOPD質問票（IPAG質問票）と呼吸機能検査を用いて－ （査読付）	共著	平成25年2月	西九州リハビリテーション研究 第6巻 pp.11～17	本調査の目的は、呼吸機能検査、11-QとIPAG質問票を地域祭事に参加している地域住民に実施し、閉塞性換気障害を疑う対象がいないか調査することである。結果、閉塞性換気障害疑いは4名（11. 8%）であった。今回の調査から、地域祭事参加者に1割強ほどの閉塞性換気障害を疑う人たちがいることが分かった。 本人担当部分：データ収集、分析、考察を担当。 共著者：阿波邦彦、堀江淳、堀川悦夫、白仁田秀一、村田伸、池田秀俊、山田穂積、古賀義行
15. 疾患に関係なく簡便に評価できる下肢機能評価法の検討－座位での下肢荷重力測定法に関して－ （査読付）	共著	平成25年2月	西九州リハビリテーション研究 第6巻 pp.45～49	本研究の目的は、様々な疾患を有する対象に、下肢荷重力測定法が下肢機能を反映する有用な評価法となるか否かについて検討することである。結果、入院中の回復過程にあり、様々な疾患を有する患者を対象とした場合、下肢荷重力測定法は下肢機能を反映する有用な評価法とは成り得ない可能性が示された。 本人担当部分：データ収集を担当。 共著者：岩瀬弘明、村田伸、阿波邦彦、松尾奈々、下平佳代、渡邉俊行、廣瀬智理、舩田雅之、原由香利、窓場勝之、宮原洋八
16. 疾患に関係なく簡便に評価できる下肢機能評価法の検討－虚弱高齢者用10秒 椅子立ち上がりテスト（Frail CS-10）を用いて－ （査読付）	共著	平成25年2月	理学療法科学 第28巻第1号 pp.27～30	様々な疾患を有する入院患者を対象に、虚弱高齢者 10秒椅子立ち上がりテスト（Frail CS-10）が下肢機能を反映する有用な評価法であるか否かについて検討した。結果、Frail CS-10 は男女ともにほぼ全ての評価項目と有意な相関あるいは、有意な相関を示す傾向が認められた。Frail CS-10は疾患を統一せずに様々な疾患を有する患者を対象としても、下肢機能を反映する有用で簡便な評価法であることが示唆された。 本人担当部分：データ収集を担当。 共著者：岩瀬弘明、村田伸、阿波邦彦、松尾奈々、佐藤光美、原田純、今西和也、福永恵子、窓場勝之

17. 高齢患者の歩行パラメーターと下肢筋力およびADL能力との関連 ー最速歩行と最大低速歩行時の比較ー （査読付）	共著	平成25年6月	理学療法科学 第28巻第3号 pp.347～350	高齢入院忠者を対象に、最速歩行と最大低速歩行の歩行パラメーターを洪1定し、条件別に下肢筋カおよびADL能力との関係を明らかにすることを目的とした。結果、最速歩行時において、歩行パラメーターはFIM-Mと、最大低速歩行時において、歩行パラメーターはFrail CS-10との間に有意な相関を示した。 本人担当部分：データ収集を担当。 共著者：岩瀬弘明、村田伸、阿波邦彦、松尾奈々、米山智彦、山﨑康平、小松直正、重田裕子、窓場勝之
18. 慢性閉塞性肺疾患患者の抑うつに関わる因子の検討 （査読付）	共著	平成25年7月	ヘルスプロモーション理学療法研究3巻2号 P.65～69	本研究の目的は、COPD患者における抑うつ状態に影響を及ぼす規定因子を不安尺度、身体機能、日常生活動作などの観点から検討することとした。対象は、COPD患者21名であった。主要項目は、抑うつ自己評価尺度（Self-rating Depression Scale；SDS）とした。結果、SDSに影響を与える項目は、STAI特性と30秒椅子立ち上がりテストであった。COPD患者における抑うつ状態は、不安感や下肢機能の低下が影響することが示唆された。これにより、チームアプローチが抑うつ状態を予防できる可能性を示唆した。 本人担当部分：データ収集、分析、考察を担当。 共著者：阿波邦彦、堀江淳、白仁田秀一、北島麻美、宮副孝茂、林真一郎
19. COPD患者の予後予測評価であるupdated BODE indexとADO indexは健康関連QOLに影響しているか？ （査読付）	共著	平成25年9月	健康支援 第15巻第2号 pp.15～21	本研究の目的は、COPD患者の予後予測評価であるupdated BODE indexとADO indexが健康関連QOLの指標であるSGRQに影響しているか検証することである。updated BODE indexは、ADO indexよりも健康関連QOLに影響することが示唆された。 本人担当部分：データ収集、分析、考察を担当。 共著者：阿波邦彦、堀江淳、村田伸、林真一郎、田中将英、堀川悦夫
20. 立位から背臥位までの臥床パターンの分類と身体機能の特徴 （査読付）	共著	平成25年9月	健康支援 第15巻第2号 pp.23～29	地域在住の女性高齢者143名を対象に、立位から仰臥のパターンを類型化し、各動作パターン別に身体機能を比較し、仰臥パターンに影響を及ぼす要因を明らかにするために調査を行った。立位からの臥床パターンは、体格や動的バランス能力に影響を受ける可能性が示唆された。 本人担当部分：分析、考察を担当。 共著者：岩瀬弘明、村田伸、宮崎純弥、大田尾浩、堀江淳、阿波邦彦

21．男性間質性肺炎患者におけるCS-30と運動能力との関係 （査読付）	共著	平成25年12月	理学療法科学 第28巻第6号 pp.757～760	本研究の目的は、慢性閉塞性肺疾患患者における抑うつ状態に影響を及ぼす規定因子を不安尺度、身体機能、日常生活動作などの観点から検討することとした。COPD患者における抑うつ状態は、不安感や下肢機能の低下が影響することが示唆された。これにより、チームアプローチが抑うつ状態を予防できる可能性を示唆した。 本人担当部分：データ収集、分析、考察を担当。 共著者：阿波邦彦、堀江淳、上田真智子、白仁田秀一、田中将英、林真一郎
22．非呼吸器疾患にて理学療法を実施している症例の呼吸機能に関する調査 （査読付）	共著	平成26年3月	神戸国際大学リハビリテーション研究 第5号 pp.27～31	呼吸器疾患以外で理学療法を施行している26名（男7名、女19名、中央値72.0歳）を対象に、呼吸機能に関する調査を行った。結果、呼吸・換気障害疑いと判定されたのは5名で、1秒率70%未満の閉塞性換気障害疑いが1名（男）、%肺活量80%未満の拘束性換気障害疑いが4名（女）であり、身体能力や精神機能との関連は認めなかった。 本人担当部分：リクルート、データ収集、分析、考察を担当。 共著者：堀江淳、阿波邦彦、今西和也、窓場勝之、中川法一、宮崎純弥、阪本良太、西川明子、森實徹、高橋健太郎、富田素子
23．地域在住男性高齢者のブリッジ力と立位バランスならびに筋力との関連 （査読付）	共著	平成26年3月	理学療法科学 第29巻3号 pp.405～409	本研究では、ブリッジ力測定法の有用性について、地域在住男性高齢者32名に対し、ブリッジ力と各種身体機能評価との関連性から検討した。結果、ブリッジ力と膝伸展筋力、FRT、片脚立位保持時間との間に有意な相関が認められた。さらに、ブリッジ力へ影響を及ぼす因子として、膝伸展筋力とFRTが抽出された。 本人担当部分：データ収集を担当。 共著者：政所和也、村田伸、宮崎純弥、堀江淳、阿波邦彦、上城憲司
24．最重症COPD患者に対する運動療法中におけるモニター心電図検査の取り組み （査読付）	共著	平成26年9月	武雄杵島臨床医学誌 第20巻 pp.7～10	運動負荷後に上室性期外収縮2連発が出現した最重症COPD患者に対し、運動療法実施時にモニター心電図を検査しながら負荷量を調節した。モニター心電図で循環動態を確認しながらの運動療法は、リスク管理や運動プログラムの作成、効果判定に有用であると考えられる。 本人担当部分：考察指導を担当。 共著者：松本雄次、阿波邦彦、宮副孝茂、財津和希、北島麻美、手島由美子、山田穂積、古賀義行

25．慢性呼吸不全患者のADL指導 （査読付）	共著	平成26年10月	作業療法佐賀 第4巻第1号 pp.31～36	慢性呼吸不全患者に対する作業療法士によるADL、IADLの獲得に向けた指導や援助は、呼吸リハにおける直近の課題である。そこで実践報告を踏まえ、ADLにおけるモニタリングや動作指導の基本、指導上の留意点について報告した。 本人担当部分：文章構成および内容指導を担当。 共著者：野﨑忠幸、阿波邦彦、堀江淳、林真一郎、堀川悦夫
26．運動負荷後における循環応答の経時的変化 （査読付）	共著	平成27年4月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第5巻第1号 pp.19～24	安静時の血圧や脈拍を測定する際の適切な安静時間を明らかにするため、健常者27名に対し、30秒椅子立ち上がりテスト後の脈拍や血圧の変化を終了直後から30秒ごとに5分間計測した。その繕果、血圧や脈拍の測定において、開始前の安静時間を設定する際は個々の変動パターンに合わせて安静時間を設定する必要性が示唆された。 本人担当部分：データ収集、分析を担当。 共著者：小西佑磨、村田伸、窓場勝之、阪本昌志、杉森信吾、山川瑠奈、白岩加代子、安彦鉄平、阿波邦彦、堀江淳
27．虚弱高齢者を対象とした腹筋トレーニングを含む通所リハビリテーションの効果 （査読付）	共著	平成27年4月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第5巻第1号 pp.31～36	虚弱高齢者20名に対する腹筋トレーニングを含んだ6ヵ月間の通所リハビリテーションの効果を検証した。結果、FIM-M、片脚立位時間、5m最速歩行速度に交互作用が認められ、片脚立脚時間と5m最速歩行速度は介入群が有意な向上を認めた。一方で、FIM-Mは対照群が有意な低下を認めた。 本人担当部分：データ収集、分析、考察を担当。 共著者：阿波邦彦、北村智哉、堀江淳、伊藤健一
28．登山による大腿四頭筋の筋力および筋活動量の変化 （査読付）	共著	平成27年7月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第5巻第2号 pp.65～69	本研究の目的は、登山前後における大腿四頭筋の筋疲労について、筋力および筋活動量を用いて検討することである。対象は健常成人15名であった。登山後に大腿四頭筋、特に内側広筋と外側広筋に筋疲労が生じる可能性が示された。 本人担当部分：データ測定を担当。 共著者：桐野耕太、安彦鉄平、川添里菜、小澤美奈、和田真紀、白岩加代子、堀江淳、阿波邦彦、窓場勝之、村田伸

29. 踵なしスリッパの着用が歩行に及ぼす影響 （査読付）	共著	平成27年9月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第5巻第3号 pp. 123～127	本研究の目的は、踵なしスリッパの着用が歩行に及ぼす影響を明らかにすることである。対象は、健常成人女性14名とした。踵なしスリッパの着用は、歩幅を狭めるが素早く1歩を出すことで通常のスリッパと同じ歩行速度を保ち、大腿直筋および腓腹筋の筋活動を効果的に高める可能性が示された。 本人担当部分：分析を担当。 共著者：吉田安香音、村田伸、安彦鉄平、小澤実奈、小西佑磨、阪本昌志、高橋 萌、白岩加代子、 窓場勝之、阿波邦彦、堀江淳、甲斐義浩
30. 地域在住高齢者の転倒要因に関する研究身体・認知・精神機能の共分散分析による検討 （査読付）	共著	平成27年9月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第5巻3号 pp. 139～143	地域在住高齢者の転倒と身体・認知・精神機能との関連性について総合的に明らかにするために、高齢者345名を対象に、過去1年間における転倒経験の有無別に身体・認知・精神機能について、年齢と性別を調整した共分散分析で比較した。その結果、転倒の危険因子は数多く報告されているが、年齢や性を考慮する必要性が示唆された。 本人担当部分：分析を担当。 共著者：井上椋太、村田伸、桐野耕太、小澤実奈、 小西佑磨、白岩加代子、安彦鉄平、阿波邦彦、窓場勝之、堀江淳
31. 地域在住高齢者の参加サークルの違いによる身体機能の差異 （査読付）	共著	平成28年1月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第5巻第4号 pp. 167～171	地域在住高齢者を対象に身体機能の評価を行い、参加しているサークルにより身体機能に差異がみられるのか検討した。年齢と性別を共変量として解析した結果、上体起こしの測定項目のみ「いきいき百歳体操」グループの方が、「マシントレーニングサークル」グループよりも低い値を示した（$p<0.01$）。このことから、「いきいき百歳体操」グループでは、体幹機能の強化に関してはさらにトレーニングを追加する必要性が示唆された。 本人担当部分：データ収集、分析を担当。 共著者：白岩加代子、村田伸、安彦鉄平、阿波邦彦、窓場勝之、堀江淳
32. 最適歩行と最速歩行中の歩行パラメーターと下肢筋活動の比較 （査読付）	共著	平成28年1月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第5巻第4号 pp. 179～183	最適歩行と最速歩行の歩行パラメーターと下肢筋活動を比較し、それぞれの特徴を明らかにするため、健常成人女性15名を対象に、歩行中の大腿直筋、大腿二頭筋長頭、前脛骨筋、腓腹筋内側頭の筋活動量を、表面筋電計を用いて測定した。歩行速度の増大には、歩行率の増加、立脚期の短縮が大きく関与し、また筋活動では前方への推進力としての役割が強い大腿直筋が大きく影響していることが示唆された。 本人担当部分：データ分析を担当。 [執筆者]小澤実奈、村田伸、窓場勝之、小西佑磨、阪本昌志、高橋萌、吉田安香音、安彦鉄平、白岩加代子、阿波邦彦、堀江淳、甲斐義浩

33. 後方歩行の歩行パラメーターと筋活動の特徴健常成人を対象とした検討 （査読付）	共著	平成28年1月	ヘルスプロモーション理学療法研究5巻4号 P.185～189	本研究の目的は後方歩行における、歩行パラメーターと筋活動の特徴を明らかにすることである。対象は健常成人女性15名とし、各筋の最大随意収縮を測定後、前方歩行と後方歩行の2条件で歩行を行った。後方歩行では距離因子、時間因子の影響により前方歩行に比べて速度、ケイデンスが低下することで安定性が高まり、1歩行周期での筋活動量においても前方歩行と相違が認められたことから、後方歩行の運動学的特徴が明らかとなった。 本人担当部分：データ分析を担当。 共著者：阪本昌志、村田伸、小澤実奈、小西佑磨、高橋萌、吉田安香音、安彦鉄平、白岩加代子、阿波邦彦、窓場勝之、堀江淳、甲斐義浩
34. 高齢者の主観的な睡眠状態と身体・認知・精神機能との関係 （査読付）	共著	平成28年2月	健康支援 第18巻第1号 pp.9～15	健康支援事業に参加した65歳以上の男女264名にアンケートと各種評価を行い、主観的な睡眠状態と身体・認知・精神機能との関係について統計学的に検討した。主観的な睡眠状態は「等尺性膝伸展筋力」「SF-8」と有意な正の相関を示した。また、「主観的な健康感・満足感」と有意な正の相関を示し、「主観的な認知症症状」と有意な負の相関を示した。 本人担当部分：データ収集を担当。 共著者：大杉紘徳、村田伸、白岩加代子、安彦鉄平、阿波邦彦、窓場勝之、堀江淳
35. 閉塞性換気障害と拘束性換気障害が疑われる地域在住高齢者の身体機能の特徴 （査読付）	共著	平成28年4月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第6巻第1号 pp.17～22	地域在住高齢者における閉塞性換気障害と拘束性換気障害の有症率を明らかにし、正常群を含む3群間の身体機能を比較検証するために、地域在住高齢者128名（年齢75.5 ± 6.1歳）に対し、呼吸機能検査や身体機能を評価し、換気障害別の各測定項目を比較した。結果、換気障害の差異で身体機能に有意差は認めないが、閉塞性換気障害群は呼吸機能の低下に伴い、筋力が低下する可能性が示された。 本人担当部分：データ収集、データ分析、考察を担当。 共著者：阿波邦彦、村田伸、岩瀬弘明、政所和也、八谷瑞紀、久保温子、伊藤健一、上城憲司、堀江淳
36. 地域在住高齢者における血圧と認知機能との関係 （査読付）	共著	平成28年6月	日本早期認知症学会誌 第9巻第1号 pp.41～46	本研究では、地域在住高齢者の血圧と認知機能との関連について、地域在住高齢者286名を対象に収縮期血圧と拡張期血圧を自動血圧計により測定し、認知機能をMini-Mental State Examination（MMSE）で評価した。結果、非通院群でのみ、収縮期血圧とMMSEとの間に有意な低い負の相関を認めた。高齢者において、血圧と認知機能との関係は高血圧治療における降圧剤の影響をうけることが推察される。 本人担当部分：データ収集を担当。 共著者：大杉紘徳、村田伸、白岩加代子、安彦鉄平、阿波邦彦、窓場勝之、堀江淳

37. 地域在住の前期高齢女性と後期高齢女　性の握力および足趾把持力が身体機能に及ぼす影響 （査読付）	共著	平成28年7月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第6巻第2号 pp.53～57	地域在住高齢女性312名を対象に、前期高齢者と後期高齢者の2群に分類し、握力および足趾把持力が身体機能に及ぼす影響について検討した。結果、前期高齢者では足趾把持力が、後期高齢者では握力が身体機能と関連しやすいことが示された。 本人担当部分：データ収集、考察の助言を担当。 共著者：二階堂素子、安彦鉄平、阿波邦彦、足立愛実、井上椋太、山川瑠奈、窓場勝之、白岩加代子、堀江淳、村田伸
38. 軽度認知機能障害に該当する高齢者の身体機能・活動能力・精神機能の特徴 （査読付）	共著	平成28年7月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第6巻第2号 pp.59～64	地域在住高齢者335名を対象に、軽度の認知機能障害に該当する高齢者と認知機能の低下を認めない高齢者の身体機能、活動能力および精神機能を比較し、認知機能に及ぼす要因を検討した。軽度の認知機能を呈する高齢者では、教育歴、バランス能力および活動能力が低下していることが示された。 本人担当部分：データ収集を担当。 共著者：山川瑠奈、安彦鉄平、大杉紘徳、足立愛実、井上椋大、二階堂素子、窓場勝之、阿波邦彦、白岩加代子、堀江淳、村田伸
39. 活動的な高齢者の5m最速歩行時間と身体・認知・精神機能との関連 （査読付）	共著	平成28年9月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第6巻第3号 pp.111～116	女性高齢者351名を対象に、5m最速歩行時間と下肢筋力や立位バランスなどの身体機能の他,認知機能や精神機能を含めて調査した。重回帰分析の結果、5m最速歩行時間と独立して関連する因子は、30-second chair-stand test,身長,大腿四頭筋筋力,開眼片脚立位時間,Geriatric Depression Scale-5の5項目であった。このことから、5m最速歩行時間の測定は,活動的な高齢者であっても下肢筋力やバランス能力などの身体機能のみならず、精神機能をも反映する簡便な指標として使用できる可能性が示された。 本人担当部分：データ収集を担当。 共著者：中嶋大喜、村田伸、飯田康平、井内敏揮、鈴木景太、中島彩、中村葵、白岩加代子、安彦鉄平、阿波邦彦、窓場勝之、堀江淳
40. 二重課題が地域在住高齢者の歩行パラメータに及ぼす影響 （査読付）	共著	平成28年9月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第6巻第3号 pp.127～131	本研究の目的は、二重課題が地域在住高齢者の歩行パラメータに及ぼす影響を明らかにすることである。方法は女性高齢者35名を対象に、通常歩行（single-task歩行;ST歩行）と暗算課題を行いながらの歩行（dual-task歩行;DT歩行）について、それぞれの歩行パラメータを比較した。DT歩行中の歩行速度の低下には、歩行率、歩幅、ストライドの短縮、および立脚時間と両脚支持時間の増加が影響していること、特に立脚時間と両脚支持時間の増加が歩行速度低下に大きく関与していることが示唆された。 本人担当部分：データ収集を担当。 共著者：飯田康平、村田伸、井内敏揮、鈴木景太、中島彩、中嶋大喜、中村葵、白岩加代子、安彦鉄平、阿波邦彦、窓場勝之、堀江淳

41．ヒールの高さの違いが歩行パラメータと下肢筋活動に及ぼす影響 （査読付）	共著	平成28年9月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第6巻第3号 pp.133～137	本研究は健常成人女性14名を対象に、ヒールの高さの違いが歩行パラメータと下肢筋活動に及ぼす影響について検討した。ヒール高3cm以上で歩行中の立脚時間や遊脚時間に影響を与えるが、ヒール高3cmまでであれば、歩行速度および歩幅やストライド長には影響が少ないことが示唆された。 本人担当部分：データ収集を担当。 共著者：中島彩、村田伸、飯田康平、井内敏揮、鈴木景太、中嶋大喜、中村葵、白岩加代子、安彦鉄平、阿波邦彦、窓場勝之、堀江淳
42．高齢女性における主観的な認知症症状の有無による身体・認知・精神機能の差異 （査読付）	共著	平成28年10月	保健医療学雑誌 第7巻第2号 pp.46～53	胸腔鏡下肺葉切除術（VATS）前の身体機能と健康関連QOLが、退院時にどのように変化しているかを明らかにするために、測定を完遂できた33症例の身体機能と健康関連QOLを評価した。結果、身体機能における6分間歩行距離は有意に低下し、健康関連QOLでは身体機能に関するQOLが有意に低下した。特に身体機能にかかわる健康関連QOLの低下程度は大きかった。 本人担当部分：データ収集、データ分析、考察の助言を担当。 共著者：大杉紘徳、村田伸、白岩加代子、安彦鉄平、阿波邦彦、窓場勝之、堀江淳
43．胸腔鏡下肺葉切除術後患者に対するリハビリテーションの短期的検証 （査読付）	共著	平成28年12月	三菱京都病院医学総合雑誌 第23巻 pp.15～20	女性高齢者189名に対し、主観的な認知症症状の自覚の有無で、身体、認知、精神機能に差異を認めるか否かを前期高齢者と後期高齢者それぞれに明らかにすることが目的である。主観的な認知症症状の有無に関わる身体、精神機能は、前期高齢者と後期高齢者では異なる傾向を示すことが明らかとなった。 本人担当部分：データ収集、データ解析、考察を担当。 共著者：平山善康、太田垣あゆみ、瀬崎萌恵、出見世真人、佃陽一、田中宇大、小池初慧、山下直己、阿波邦彦、内藤紘一、堀江淳

44．高齢者用歩行評価法「バランス歩行テスト」の開発 （査読付）	共著	平成29年2月	健康支援 第19巻第1号 pp.1～8	歩隔を制限しながら超低速で歩行する『バランス歩行テスト』を考案し、その妥当性について一般高齢者258名を対象に検討した。結果、本テストは再現性が高く、他の身体機能や認知機能との相関も認められたことから妥当性があると考えられた。 本人担当部分：データ収集を担当。 共著者：村田伸、甲斐義浩、安彦鉄平、岩瀬弘明、白岩加代子、窓場勝之、阿波邦彦、大杉紘徳、堀江淳
45．地域在住女性高齢者の疼痛の部位数と身体機能および精神・心理機能との関係 （査読付）	共著	平成29年4月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第7巻1号 pp.7～12	本研究目的は地域在住高齢女性を疼痛の部位数によって分類し、比較することで、疼痛を有する高齢者の特徴を明らかにすることである。対象は、186名の高齢女性とした。疼痛の部位数という側面を考慮することで、疼痛を有する高齢者の特徴をより詳細に捉えることが可能なことを明らかにした。 本人担当部分：データ収集を担当。 共著者：安彦鉄平、村田伸、大杉紘徳、窓場勝之、阿波邦彦、白岩加代子、堀江淳
46．登山前のスクワット運動が登山後の大腿四頭筋の筋疲労に与える効果 （査読付）	共著	平成29年4月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第7巻第1号 pp.13～17	登山2週間前に、登山と類似したスクワット運動を行う介入群（10名）と介入を行わないコントロール群（10名）に分類した。登山前後に最大随意収縮の50%に相当する大腿四頭筋筋力を91秒間持続させたときの中間周波数を用いて筋疲労を評価した。測定筋は内側広筋、外側広筋、大腿直筋の3筋とし、コントロール群と介入群を比較した。その結果、登山前にスクワット運動を行うことで、筋疲労が軽減する可能性が示された。 本人担当部分：データ収集を担当。 共著者：林勇樹、安彦鉄平、井上遼一、岡本雄輝、澤田貴大、村山寛和、白岩加代子、阿波邦彦、堀江淳、窓場勝之、村田伸
47．高齢肺がん患者の術前後における呼吸代謝能評価スケールの開発 （査読付）	共著	平成29年6月	大阪ガスグループ福祉財団研究報告書 第30巻 pp.33～38	高齢肺がん患者のVATS前後において、呼吸機能と健康関連QOLは有意に低下した。また、術後健康関連QOLは術前の呼吸代謝能と有意な相関を認めたが、呼吸機能、筋力、歩行能力とは有意な相関を認めなかった。そこで、術後のQOLの大小に関するカットオフをROC曲線で解析し、活用が期待できるカットオフが算出された。 本人担当部分：データ収集、データ解析、考察を担当。 共著者：阿波邦彦、堀江淳、平山善康、山下直己、大杉紘徳、伊藤健一

48．Relationship between strength asymmetry and body sway in older adults （高齢者の体力と非対称性の関係） （査読付）	共著	平成29年10月	Aging Clinical and Experimental Research Vol.16 第16巻 pp. 1～17	高齢者の膝伸展力、足の握り強さ、手の握力の非対称性を分析し、歩行中のこれらの非対称性と身体の揺れの関係を検証した。右膝伸展筋力および手握り強度の値は、左膝伸展筋力および手握り強度の値よりも有意に高かった。左右のつま先握力の間に有意差はなかった。トーグリップ強度の非対称性は、歩行中の身体の揺れと有意な正の相関を示した。膝関節と手の握力の非対称性は、身体の揺れとの有意な相関を示さなかった。トーグリップ強度の非対称性は、身体の揺れを増加させ、カットオフ値は23.5%であった。 本人担当部分：統計解析を担当。 共著者：Hitoshi Koda、Yoshihiro Kai、Shin Murata、Hironori Osugi、Kunihiko Anami、Takahiko Fukumoto、Hidetaka Imagita
49．運動習慣のある高齢者の転倒と身体・認知・精神機能との関連 （査読付）	共著	平成30年1月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第7巻第4号 pp. 171～175	本研究の目的は、運動習慣のある高齢者における転倒経験の有無と身体・認知・精神機能との関連について明らかにすることである。地域在住高齢者158名を対象に、過去1年間における転倒経験の有無別に身体・認知・精神機能を二元配置分散分析で比較した。結果、高齢者が運動習慣を有することは転倒の有無に関わらず身体・認知・精神機能の維持に影響し、転倒は過去の転倒経験と精神機能の低下によって予測できる可能性が示された。 本人担当部分：データ収集を担当。 共著者：鈴木景太，村田伸，白岩加代子，安彦鉄平，阿波邦彦，窓場勝之，堀江淳
50．Natural recovery of exercise tolerance and quality of life in elderly patients with lung cancer who undewent thoracotomy via video-assisted thoracic surgery （胸腔鏡下肺葉切除術を受ける高齢肺がん患者の運動耐容能とQOLの縦断的変化に関する研究） （博士論文）	単著	平成30年3月	大阪府立大学	本研究は、入院期間にのみ理学療法を実施した患者の12週間の身体機能とQOLの経時的な変化を調査し、QOLの変化に関連する指標を明らかにすることとした。研究方法は前向き研究とし、胸腔鏡下肺葉切除術が施行された36名の肺がんサバイバーを対象とした。測定項目は呼吸機能検査や心肺運動負荷テスト、QOLの指標にはSF-36を使用した。測定時期は、術前、術後1週、術後4週、術後12週とした。呼吸機能は術後12週まで有意に低下しているが、運動耐容能を含む身体機能は4週までに術前レベルまで回復することが明らかとなった。一方、身体的側面QOLは術後4週、術後12週でも有意な低下を認めた。そして、身体機能の変化率とQOLの変化率には有意な相関は認めなかったことから、身体機能とQOLの変化は乖離していることが示された。その要因には、肺がんサバイバーが術後に身体活動レベルが低下することや、対象者の老化やがんに対する自己認識がQOLの低下や身体活動レベルの低下に影響している可能性が推察される。 （全22頁）

51. Changes in exercise tolerance and quality of life are unrelated in lung cancer survivors who undergo video-assisted thoracic surgery （胸腔鏡下肺葉切除術を受ける肺がんサバイバーの運動耐容能とQOLにおける経時的変化は無関係である） （査読付）	共著	平成30年4月	J Phys Ther Sci. vol.30 （3） 第30巻第3号 pp. 467～473	胸腔鏡下肺葉切除術を受ける肺がんサバイバーの呼吸機能、運動耐容能、および生活の質の変化の関連を明らかにすることを目的に、前向き研究を行った。結果、術後の身体機能は早期回復が可能であったものの、QOLの回復と相関しているわけではなかった。QOLの回復は12週かかることが示唆された。 本人担当部分：研究立案、データ収集、解析、考察を担当。 共著者：Anami Kunihiko, Horie Jun, Hirayama Yoshiyasu, Yamashita Naomi, Ito Kenichi
52. 男性慢性閉塞性肺疾患患者のライフスタイル・社会背景は健康関連QOLと関連しうるか? （査読付）	共著	平成30年7月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第8巻第2号 pp. 57～63	男性慢性閉塞性肺疾患患者の健康関連QOLに関連する因子について、ライフスタイルや社会背景に着目し検討を行った。安定期男性COPD患者53名を対象として、SGRQの結果に基づき、高QOL群と低QOL群に分類し、各測定項目の比較を行った。その結果、ライフスタイル・社会背景では、運動習慣、home oxygen therapy（HOT）の使用、家外環境においてHRQOLとの有意な関連が示唆された。 本人担当部分：考察を担当。 共著者：江越正次朗、堀江淳、阿波邦彦、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、白仁田秀一、林真一郎
53. 腰痛予防教室に参加した地域在住女性高齢者の慢性腰痛に影響を与える心理的因子 （査読付）	共著	平成31年1月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第8巻第4号 pp. 175～179	本研究は、腰痛予防教室に参加した地域在住女性高齢者の身体的および精神心理的特徴を明らかにするため、慢性腰痛に影響を及ぼす因子について検討することを目的とした。対象は、腰痛予防教室に参加した地域在住女性高齢者71名とし、腰痛既往群（13名）と腰痛群（58名）の2群に分類し、痛みの有無を目的変数とした多重ロジスティック回帰分析を用いて、慢性腰痛に影響を及ぼす因子を抽出した。結果、痛みの有無に影響を及ぼす因子は、恐怖回避思考と破局的思考であった。特異的腰痛が多いとされる地域在住女性高齢者の腰痛と心理的因子との関連が明らかになり、とくに恐怖回避思考や破局的思考への対応が必要であることが示唆された。 本人担当部分：データ測定を担当。 共著者：牧野有沙、安彦鉄平、村田伸、白岩加代子、岩瀬弘明、窓場勝之、阿波邦彦、堀江淳
54. 腰椎アライメントに着目した腰痛学級が腰痛者および腰痛既往者の身体機能・精神心理機能に与える効果の検証 （査読付）	共著	平成31年3月	保健の科学 第61巻3号 pp. 205～211	本研究は、市町村主体の腰痛学級を開催し、腰痛者及び腰痛既往者を対象に姿勢にちゃくもくした腰痛学級効果を検証した。対象は34名であり、2週に1度約60分の腰痛学級を計6回実施した。結果、腰痛ぐうは介入前位に比べて痛みが改善した。しかし、腰痛既往群において破局的思考が高まり、腰痛群には効果的であることが示唆された。 本人担当部分：データ測定を担当。 共著者：安彦鉄平、村田伸、阿波邦彦、窓場勝之、岩瀬弘明

55. Positive Effects of Yoga on Physical and Respiratory Functions in Healthy Inactive Middle-Aged People. （健康的で非活動な中年者における身体的呼吸機能に対するヨガの効果） （査読付）	共著	平成31年4月	Int J Yoga. 2019 Jan-Apr;12（1） 第12巻第1号 pp. 62～67	身体的、呼吸機能に対する異なるヨガ手法の効果検証をRCTにて実施した。参加者28名に対し、一般的なヨガグループと呼吸法を特化したヨガグループに分け8週間実施した。その結果、両群とも身体木野の改善を示し、呼吸法を特化した予後グループは最大吸気量も向上した。 本人担当部分：データ測定、考察を担当。 共著者：Yamamoto-Morimoto Kuniko, Horibe Shuji, Takao Rikio, Anami Kunihiko
56. 慢性呼吸器疾患高齢患者の呼吸リハビリテーションにおけるADLトレーニング・指導 （総説・査読付）	共著	令和元年9月	臨床老年看護 第26巻第5号 pp. 53～61	呼吸リハビリテーション対象疾患であるCOPDの特徴と、それに伴う全身併存症、高齢化と重複障害について解説し、COPDに対する呼吸リハビリテーションの概要、ADL評価とトレーニングについて、最新の知見を踏まえ解説した。 共著者：阿波邦彦、松本雄次
57. Association of Low Bone Mass with Decreased Skeletal Muscle Mass: A Cross-Sectional Study of Community-Dwelling Older Women （骨量低下と骨格筋量低下の関連性：地域在住女性高齢者を対象とした横断的研究）	共著	令和2年9月	Healthcare 第8巻第3号 343（計8ページ）	本研究は，地域高齢者を対象に骨量と骨格筋量，筋力そして身体能力の関連性を検討することを目的とした．体力測定会に参加した地域高齢者306名の中から，214名を対象とし，分析を行った．対象者は超音波骨量測定装置により測定された骨量に基づき，正常（T-score>-1），低値(-2.5<T-score≤-1)，超低値群(T-score ≤ -2.5)に分けられた．加えて，対象者の骨格筋量，筋力（握力と膝伸展筋力），身体能力[歩行速度とtimed up and go（TUG)]を測定した．上肢，下肢および四肢のSkeletal muscle indexは骨量低値群に比べ骨量超低値群で有意に低かった．握力，膝伸展筋力，歩行速度，TUGは各群間で有意差を認めなかった．これらの結果より，骨量が低い高齢女性は骨格筋量が減少していることが示された． 本人担当部分：データ測定および解析を担当した． 共著者：Nonaka K, Murata S, Nakano H, Anami K, Shiraiwa K, Abiko T, Goda A, Iwase H, Horie J

58. Subjective and objective mental and physical function affects subjective cognitive decline in community-dwelling elderly Japanese people （地域在住日本人高齢者の主観的認知機能低下に影響を与える主観的・客観的な心身機能） （査読付）	共著	令和2年9月	Healthcare 第8巻第3号 347（計12ページ）	主観的認知機能低下（SCD）の症状は複雑であり，特に日本人においてはよく理解されていない。本研究では，日本人の地域在住高齢者を対象に，主観的および客観的な心身機能とSCDとの関係を明らかにすることを目的とした。SCDは，基本チェックリストの認知機能項目を用いて評価した。SCD以外の客観的精神機能については，MMSEとGDS-5の5項目版を用いて評価した。客観的な身体機能については，TUGと膝伸展筋力を用い，主観的な精神・身体機能については，健康関連QOL尺度の8項目短縮版のMCSとPCSを用いて評価した。その結果，MMSE，GDS-5，TUG，膝伸展筋力，MCSはSCD群で有意に悪化した。また，ロジスティック回帰分析の結果，GDS-5，MCSはSCD発症と関連していた。以上のことから，日本人の地域在住高齢者におけるSCDの発症には，抑うつ症状と主観的精神機能の低下が関係していることが示唆された。これらの結果は，日本人高齢者の認知症予防や介入プログラムを計画する上で有用である 本人担当部分：データ測定を担当した。 ［共著者］ Akio Goda, Shin Murata, Hideki Nakano, Kayoko Shiraiwa, Teppei Abiko, Koji Nonaka, Hiroaki Iwase, Kunihiko Anami, Jun Horie
59. The Association between Health Literacy and Gait Speed in Community-Dwelling Older Adults （地域在住高齢者のヘルスリテラシーと歩行速度との関連） （査読付）	共著	令和2年9月	Healthcare 第8巻第4号 349（計10ページ）	本研究は，地域在住高齢者を対象にヘルスリテラシーと歩行速度との関連を検討することを目的とした．測定会に参加した地域在住高齢者240名に対し，通常歩行速度，ヘルスリテラシー，各種身体機能，認知機能等を測定した．ヘルスリテラシーはCCHLを使用した．対象者は、通常歩行速度に基づいて、速い（速度≥1.3m/ s）と遅い（<1.3 m / s）の2つのグループに分けられ，歩行速度を従属変数とするロジスティック回帰分析を行った．その結果，CCHLは独立して歩行速度に影響を与えることが明らかとなった． 本人担当部分：データ測定および解析，論文執筆を担当した． 共著者：Anami K, Murata S, Nakano H, Nonaka K, Iwase H, Shiraiwa K, Abiko T, Horie J

60. 地域在住女性高齢者における異なる立ち上がりテストと身体機能との関連 （査読付）	共著	令和2年10月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第10巻第3号 pp.105-110	本研究の目的は,自立生活を営む地域在住女性高齢者154名を対象に，30秒椅子立ち上がりテスト，30-sec Chair Stagnd testと虚弱高齢者用10秒椅子立ち上がりテストを合わせて行い，上下肢・体感の筋力，柔軟性，性的・動的立位バランスとの関連から，地域在住高齢者に適した簡易下肢機能評価法を検討した．重回帰分析の結果，CS-30とFrail CS-10はともに大腿四頭筋筋力，上体起こし回数，TUGの3項目と独立して関連することが示された．これらの結果から，特別な機器を必要とせず，簡便に実施できるCS-30とFrail CS-10は，地域在住女性高齢者の下肢筋力や動的バランス評価として有用であることが示された. 本人担当部分：データ測定を担当した. ［共著者］村田 伸，合田明生，白岩加代子，安彦鉄平，中野英樹，岩瀬弘明，野中紘士，阿波邦彦，松本典久，堀江 淳
61. 地域在住高齢女性における1年後の軽度認知機能障害の発現を予測する身体機能指標 -傾向スコアマッチング法を用いた検証- （査読付）	共著	令和2年10月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第10巻第3号 pp.117-123	本研究の目的は,1年後に軽度認知障害(mild cognitive impairment: MCI)を発現する地域在住高齢女性における身体機能を明らかにすることであった。ベースライン時点で認知機能障害のない地域在住高齢女性201名を対象とした。1年後に Mini-Mental State Examination(MMSE)24‐26点に低下した者をMCI 群36名,27点以上に保たれた非 MCI 群165名に分類した。その後,傾向スコアを用いて認知機能低下に影響する交絡因子をコントロールして両群36名ずつにマッチングし,両群のベースライン時の身体機能を比較した。その結果,MCI 群では,非MCI群と比較して開眼片脚立位時間が有意に短く,Timed Up and Go Testと5m最速歩行の所要時間が有意に長かった。以上から,バランス能力と歩行能力の評価は,地域在住高齢女性の1年後の MCI 発現を予測するために有用なスクリーニング指標である可能性が示された。 本人担当部分：データ測定を担当した. ［共著者］合田明生，村田 伸，白岩加代子，中野英樹，安彦鉄平，野中紘士，岩瀬弘明，阿波邦彦，堀江 淳
62. The Relationship between Subjective Cognitive Decline and Health Literacy in Healthy Community-Dwelling Older Adults （健康な地域在住高齢者における主観的認知機能低下とヘルスリテラシーの関係） （査読付）	共著	令和2年12月	Healthcare 第8巻第3号 567（計10ページ）	健康な地域在住高齢者を対象に、ヘルスリテラシーと主観的認知機能低下（Subjective Cognitive Decline; SCD）の関係を調査した。ロジスティック回帰分析の結果、SCDの発生は年齢だけでなく、ヘルスリテラシーの低さや抑うつの重症度と関連していた。この結果は、健康な地域在住高齢者において、ヘルスリテラシーの低さがSCDの罹患率と関連していることを示唆しており、この集団に対する認知症予防や介入プログラムを計画する際に有用であることを示唆するものである。 本人担当部分：データ測定を担当した。 ［共著者］Akio Goda, Shin Murata, Hideki Nakano, Kayoko Shiraiwa, Teppei Abiko, Koji Nonaka, Hiroaki Iwase, Kunihiko Anami, Jun Horie

63. Validation of Clinical Characteristics and Effectiveness of Pulmonary Rehabilitation in a COPD Population with Discrepancy between Exercise Tolerance and FEV1 （運動耐容能とFEV1の間に不一致があるCOPD集団における臨床的特徴と呼吸リハビリテーションの有効性の検証） （査読付）	共著	令和3年1月	Healthcare 第9巻第1号 53（計10ページ）	さまざまな運動耐容能レベルを示す慢性閉塞性肺疾患（COPD）患者を対象に3か月間の呼吸リハビリテーションを実施し、臨床的特徴を調べた。安定したCOPDの合計235人の患者を4つのグループに分類し、各グループを比較した。その結果、気道閉塞が軽度で運動耐容能が低いグループは、他のすべてのグループと比較して、呼吸リハビリテーションの最大の効果があったことを示唆しました。軽度の気流閉塞にもかかわらず運動耐容能が低いCOPD患者は、呼吸リハビリテーションの恩恵を受ける可能性があります。 本人担当部分：データ解析を担当した。 ［共著者］Jun Horie, Koichiro Takahashi, Shuuichi Shiranita, Kunihiko Anami, Shinichiro Hayashi
64. 大学衛生委員会が作成した新型コロナウイルス感染拡大防止のための「出席停止期間早見表」と「出勤不可期間早見表」 （査読なし）	共著	令和3年4月	保健師ジャーナル 第77巻第4号 pp. 308-316	2020(令和2)年1月末に奈良県内で国内初の新型コロナウイルス(SARS-CoV-2)陽性者が確認されて以来、本学の登美ヶ丘キャンパス衛生委員会(以下、衛生委員会)は、2020年6月に、衛生管理者(保健師免許を持つ公衆衛生看護学領域の教員)3名、養護教諭、産業医等を含む計11名で活動を開始した。我々は「新型コロナウイルス感染拡大防止のための具体的実践方法」(以下,「具体的実践方法」)を作成し、様々な取り組みを行っている。本稿では、2020(令和2)年6月～2021(令和3)年2月までの9ヵ月間の衛生委員会の活動報告を行う。 本人担当部分：大学衛生委員として取り組みを担当、ならびに文章校正を担当した。 ［共著者］三浦康代，井上葉子，松村あゆみ，上栫佳代子，阿波邦彦，森村佳史，島本卓也
65. Physical performance in relation to preserved ratio impaired spirometry: a cross-sectional study of community-dwelling older Japanese adults （preserved ratio impaired spirometryに関連する身体能力：日本の地域在住高齢者を対象とした横断的研究） （査読付）	共著	令和3年8月	Scientific Reports 第11巻17411（計9ページ）	PRISm（Preserved ratio impaired spirometry）は、死亡率の上昇と関連しているが、日本ではその特徴が明確に示されていない。本研究は、地域在住高齢者668人を調査した結果、PRISmの有病率は12%、閉塞性肺障害の有病率は6.9%であった。傾向スコアマッチングを用いて、PRISm群（n=80）と健常高齢者群（n=80）を比較した。PRISm群は予測比肺活量（%FVC）、体幹筋持久力が低く、片足立ちの持続時間が長かった。多変量ロジスティック回帰では、%FVCの低下と片脚立ちの増加がPRISm状態の独立した予測因子であった。地域に住む日本人高齢者のPRISmの有病率は、閉塞性肺障害の有病率を上回り、%FVCの低下やバランステストの成績向上と関連していた。 本人担当部分：構想、データ測定、データ解析、論文執筆を担当した。 ［共著者］Kunihiko Anami, Shin Murata, Hideki Nakano, Koji Nonaka, Hiroaki Iwase, Kayoko Shiraiwa, Teppei Abiko, Akio Goda, Jun Horie

66. Factors Influencing the Development of Mild Cognitive Impairment in Community-Dwelling People Aged 75 Years and Older [75歳以上の地域居住者における軽度認知障害の発症に影響を与える要因] （査読付）	共著	令和3年10月	Geriatrics 第6巻第4号 104	75歳以上の地域在住高齢者291名を対象に，身体的および心理的な状態が，軽度認知障害（MCI）の発症と関連を検討した．研究対象者を，Mini-Mental State Examinationのスコアを基準に，非MCI群（28点以上）とMCI群（28点未満かつ24点以上）に分けた．さらに，病気による受診状況，抑うつ症状の重症度，各種身体機能，体組成を評価した．MCI群の対象者は，教育歴が有意に短く，高血圧による受診率が高く，バランス能力も低かった．この結果から，これらの指標は75歳以上の高齢者のMCIを発見するためのスクリーニング指標と考えることができ，この集団に対する介入プログラムを計画する際に有用であると考えられる． 本人担当部分：データ測定を担当した． 共著者：Akio Goda, Shin Murata, Kayoko Shiraiwa, Teppei Abiko, Hideki Nakano, Koji Nonaka, Hiroaki Iwase, Kunihiko Anami, Yuki Kikuchi, Jun Horie
67. Relationship Between Age-Related Changes in Skeletal Muscle Mass and Physical Function: A Cross-Sectional Study of an Elderly Japanese Population [骨格筋量の加齢変化と身体機能との関係： 日本人高齢者集団の横断的研究] （査読付）	共著	令和4年4月	Cureus 第18巻第14号 e24260	65歳以上の地域在住高齢者684名を対象に，部位別骨格筋量の年齢階級別変化を明らかにし、部位別骨格筋量の加齢変化と身体機能との関係を明らかにすることを目的とした．その結果、すべての測定部位において、性別に関係なく骨格筋量が加齢とともに減少していることがわかった。さらに、年齢、体質、運動習慣の有無で調整した偏相関分析では、すべての部位で骨格筋量と握力の間に最も高い相関があることがわかった。 本人担当部分：データ測定を担当した． 共著者：Hiroaki Iwase, Shin Murata, Hideki Nakano, Kayoko Shiraiwa, Teppei Abiko, Akio Goda, Koji Nonaka, Kunihiko Anami, Jun Horie
（その他） 「学会発表」 1．工業用傾斜角度計による関節可動域測定	－	平成17年5月	第40回日本理学療法学術大会 （大阪）	工業分野において頻繁に用いられている傾斜角度計を用いて、関節可動域を測定し、測定値の再現性と妥当性について検証する。結果、測定値の妥当性は検者AとB共に有意な正の相関が認められ、再現性は有意な検者内級内相関係数が認められた。従来の関節可動域測定よりも簡便で、かつ専門的知識や熟練した技術を必要としない。そのため、患者本人や家族にも測定可能であり、患者の自己管理能力の向上に繋がる可能性を示唆した。 本人担当部分：データ収集を担当。 ［共同研究者］宮副孝茂、村田伸、阿波邦彦

2. 基本動作トレーニングを中心とした理学療法が有効であった重症慢性閉塞性肺疾患の１例	－	平成20年2月	第16回佐賀県理学療法士会学会 （佐賀）	重症COPD患者に理学療法を施行し有効であった症例を報告した。肺機能、筋力、全身持久力、歩行能力、ADL、健康関連QOLの低下が著明だったが、歩行トレーニングを中心とした理学療法を施行し、改善がみられた。重症COPD患者は全身持久力の低下だけでなく、歩行バランス低下もみられる。そのため、Timed up and go testなどといった評価も必要と考え、今後、それらの検討が課題である。 本人担当部分：症例のデータ収集、抄録・スライド作成、口頭発表担当。 [共同研究者]阿波邦彦、山田穂積、堀江淳
3. 当院における呼吸リハビリテーションの現状について－開設後1年間を振り返って－	－	平成20年9月	第51回佐賀リハビリテーション研究会 （佐賀県）	敬天堂古賀病院における呼吸リハビリテーションの現状について開始後6ヶ月経過した12例を調査し、評価項目を比較、検討した。結果、呼吸困難の弱いグループは改善傾向にあったが、呼吸困難の強いグループには有意な変化は認められなかった。呼吸困難の強弱によって呼吸リハビリテーションの効果が異なる可能性が示唆された。今後の課題として、スタッフの技術、知識の均一化が必要であり、さらに対象者を増やし長期にわたる経過観察が必要である。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表担当。 [共同研究者]阿波邦彦、堀江淳、白仁田秀一、山田穂積、古賀義行、堀川悦夫
4. 当院における呼吸リハビリテーション導入への取り組み－６ヶ月間の継続効果からの検証－	－	平成20年10月	第11回佐賀呼吸ケア研究会 （佐賀）	平成19年9月よりリハビリテーション部を開設し、敬天堂古賀病院での呼吸リハビリテーション導入への取り組みと現状を報告した。呼吸リハビリテーションの評価内容、治療内容を説明し、継続できている症例についての経時的変化を調査した。慢性呼吸器疾患における呼吸リハビリテーションは、各項目で有効性が示された。今後、呼吸リハビリテーションに対する啓蒙活動、スタッフ、患者会などに対して定期的な呼吸リハビリテーション教室や勉強会などを開催してゆく。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表担当。 [共同研究者]阿波邦彦、堀江淳、白仁田秀一、山田穂積、古賀義行、堀川悦夫

5. ６分間歩行距離テストにおける酸素キャリー使用有無の検討	－	平成20年10月	第18回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会（愛媛）	6分間歩行距離テストは呼吸不全患者に対して広く用いられる評価法であるが、酸素カートの運搬方法の違いが測定値に差異を生じさせるかを検討した。対象は在宅酸素療法実施グループと非在宅酸素療法グループで、結果は非在宅酸素療法グループにおいて酸素カートを自己牽引した方が歩行距離が短くなった。非在宅酸素療法グループは、いずれ酸素療法を実施する可能性がある。そのため、6分間歩行距離テストをする際は、他者が運搬する方がより客観的に評価できることが示唆された。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表担当。 [共同研究者]阿波邦彦、白仁田秀一、山田穂積、堀江淳、堀川悦夫
6. ６分間歩行距離テストにおいて酸素キャリー使用は可能か？	－	平成20年11月	第50回全日本病院学会（東京）	6分間歩行距離テストは全身持久力評価法の一つである。6分間歩行距離テストにおいて、酸素運搬方法の違いが測定値に差異を生じさせるかを検討した。対象は在宅酸素療法グループと非在宅酸素グループであり、6分間歩行距離、酸素飽和度、脈拍、呼吸困難、下肢疲労感について検討した。在宅酸素療法グループにおいて歩行距離の有意差は認められず、在宅酸素療法グループは酸素カートの運搬方法の違いによる影響は少ないものと考えられた。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表担当。 [共同研究者]阿波邦彦、白仁田秀一、山田穂積、古賀義之、堀江淳、堀川悦夫
7. 客観的運動処方が可能であった中等度慢性閉塞性肺疾患の一例	－	平成20年11月	第30回九州PTOT合同学会大分大会（大分）	呼気ガス分析装置を用いず、客観的な運動処方が可能であった中等症COPD患者の一例を報告した。症例は81歳女性で漸増シャトルウォーキングテストを用いて予測Peak VO2を算出し、適正な運動処方を実施した。軽症から中等症COPD患者であれば、漸増シャトルウォーキングテストなどで客観的な運動処方が可能である。また、症例を通し、早期からの呼吸リハビリテーションの導入が重要と考えられ、運動処方をするにあたり、循環能などのリスク評価もあわせて行うことが重要と再認識した。 本人担当部分：症例の評価および発表指導担当。 [共同研究者]白仁田秀一、阿波邦彦、山田穂積、堀江淳

8. 慢性閉塞性肺疾患患者に対する運動機能評価としてTimed Up and Go Testは有用か？	-	平成21年2月	第17回佐賀県理学療法士会学会 （佐賀）	COPD患者の運動機能に関する研究で、筋力評価、運動耐容能評価などは多くなされているが、機能的移動評価であるTUGはほとんど検討されていない。しかしながら、COPD患者の多くは高齢者であり、呼吸困難と運動不足による運動機能低下を呈していることがしばしば確認される。本研究では、COPD患者における運動機能評価として、TUGが有用であるか検討したので報告する。呼吸困難の重症度でみると呼吸困難が強くなるにしたがって、機能的移動能の低下が示唆された。特にMRC Grade 3以降では、正常より下回る傾向がみられた。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表担当。 [共同研究者]阿波邦彦、堀江淳、白仁田秀一、山田穂積、堀川悦夫
9. 慢性呼吸不全患者に対する呼吸リハビリテーションの6ヶ月間継続効果の検討	-	平成21年4月	第52回佐賀リハビリテーション研究会 （佐賀）	本研究の目的は、6ヶ月間の呼吸理学療法継続にて、理学療法の各評価項目がどのような経時的変化をたどるのか分析し、今後の課題を見出すことである。対象はCOPD12例で、全身調整訓練を中心にリラクゼーション、呼吸指導、呼吸筋訓練、胸郭可動域訓練、全身持久力訓練、ADL訓練、排痰訓練などである。TUG･6MWTの改善傾向は、開始後4ヶ月以降から変化が認めらなかった。呼吸理学療法の長期効果に関する検証の必要性が示唆された。 本人担当部分：データ収集、発表指導担当。 [共同研究者]白仁田秀一、阿波邦彦、堀江淳、山田穂積、古賀義行
10. 慢性呼吸不全患者に対する評価法としてのTimed Up and Go Testの検討	-	平成21年4月	第44回日本理学療法学術大会 （東京）	本研究は、TUGが慢性呼吸不全患者のバランス機能の評価として成りえるのかを検討した。対象は当院で呼吸リハビリテーションを実施している慢性呼吸不全患者21名であり、TUGをMRC別比較を行い、MRC 2とMRC 3、4との間に有意差が確認された。それにより、TUGは呼吸困難感の強い重症慢性呼吸不全患者のバランス能力評価として、より鋭敏に反応する評価であると考えられた。これよりTUGが慢性呼吸不全患者において評価法の一つに成りえることが示唆された。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、ポスター発表を担当。 [共同研究者]阿波邦彦、堀江淳、白仁田秀一、堀川悦夫

11. 慢性閉塞性肺疾患患者の早期発見への取り組み～地域行事での健康ブースの活用	-	平成21年9月	第53回佐賀リハビリテーション研究会 （佐賀）	本研究の目的は、地域行事の健康ブースで呼吸機能検査を実施し、閉塞性換気障害の有病状況を実施しCOPD疑い患者を早期発見すること。対象は地域行事に参加した呼吸器疾患のない一般住民34名（男性26名・女性8名、平均年齢63．3歳、喫煙率54．2%）とした。方法は、対象に呼吸機能検査とCOPDスクリーニング質問表（11-Q）を実施した。地域行事における一般住民による小規模調査でのCOPD有病率は11．5%であった。これは福地らによるNICE Study（2001年）の60歳代とほぼ同率であり、本地域においてもほぼ同様に「隠れCOPD患者」の存在が明らかになった。 本人担当部分：データ収集、統計解析、発表指導担当。 [共同研究者]白仁田秀一、阿波邦彦、古賀義行、山田穂積、堀江淳、堀川悦夫
12. COPD患者におけるBODE indexを用いた身体機能とADLの関係についての検証	-	平成22年1月	第18回佐賀県理学療法士会 （佐賀）	本研究では、COPD患者における身体機能、ADL能力がBODE indexやGOLD重症度分類にどの程度関係するのかを客観的に検証した。BODE indexは全身持久力をはじめ、各身体機能や日常生活動作にGOLD重症度分類よりも高い相関が認められ、重症度別にみても各測定項目で有意差が認められた。要因としてBODE indexは6MWTやMRCなど障害像を多次元的に捉えているためと考えられる。呼吸困難と全身持久力は呼吸リハビリテーションで介入できる項目であり、それらの改善はBODE indexに反映され、呼吸リハビリテーションの効果予測に有用と考えられる。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当。 [共同研究者]阿波邦彦、堀江淳、白仁田秀一、堀川悦夫
13. バランス能力に着目した間質性肺炎の一考察～重心動揺計を用いて～	-	平成22年4月	第54回佐賀リハビリテーション研究会 （佐賀県）	間質性肺炎患者の呼吸リハビリテーションはまだ確立されていない。本研究の目的は、間質性肺炎患者のバランス能力について、症例を通して検証する。対象は%FVCが73%（症例A）・55%（症例B）・41%（症例C）で、それらの症例に対し重心動揺計（総軌跡長・単位軌跡長・外周面積）を用いて評価した。結果、症例A・B・Cの順により、 総軌跡長、単位軌跡長、外周面積、片脚立位時間、FRなど静的バランスの低下がみられ、%FVCの低下はバランス能力に影響していることが示唆された。今後、症例数を増やし、更なる影響因子の検証を努めていきたい。 本人担当部分：データ収集、統計解析、発表指導を担当。 [共同研究者]白仁田秀一、阿波邦彦、堀江淳、山田穂積、古賀義行

14. COPD患者に対する全身持久力評価としてのCS-30の有用性の検証	-	平成22年5月	第45回日本理学療法学術大会 （岐阜）	本研究は30秒椅子立ち上がりテスト（CS-30）がCOPD患者の客観的な全身持久力評価として、有用であるのか検証することを目的とする。対象は、安定期COPD患者21名（平均年齢74.5±6.6歳）とした。結果、CS-30とMRC息切れスケール、%膝伸展筋力、TUG、ISWT、NRADL、SGRQに有意な相関が認められた。また、従属変数をISWT、独立変数をCS-30とする単回帰分析ではy=29.5x-138.5（R2=0.728）の回帰式が得られた。CS-30とISWTは高い相関を示し、有意な回帰式が得られたことで、CS-30は全身持久力を予測する方法として有用であることが示唆された。転倒や循環能のモニタリングなどリスク管理が可能になると考えられ、臨床的な全身持久力評価として提案できる有意義な研究となった。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当。 [共同研究者]阿波邦彦、髙川晃敏、堀江淳、畠中耕志、白仁田秀一、山田穂積、古賀義行、堀川悦夫
15. COPD患者における新しい全身持久力評価として、CS-30への期待	-	平成22年10月	第20回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会 （長崎）	CS-30とISWTとの関係、各評価項目との関係を検証し、CS-30の全身持久力評価としての有用性を検討した。対象は、安定期の男性COPD患者27名（平均年齢76.9±7.1歳）。CS-30とBMI、MRC、%MEP、 %膝伸展筋力、6MWT、ISWT、NRADL、SGRQに有意な相関が認められた。従属変数をISWT、独立変数をCS-30とする単回帰分析ではy=25.2x-55.7（R2=0.642）の回帰式が得られた。CS-30とISWTは高い相関を示し、有意な回帰式が得られた。また、CS-30は全身持久力に関係する各評価項目との相関が高く、COPD患者の全身持久力評価法として有用性が期待できる。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当。 [共同研究者]阿波邦彦、髙川 晃敏、堀江淳、白仁田秀一、畠中耕志、山田穂積、古賀義行、堀川悦夫
16. COPD患者のバランス能力と%FEV1.0、身体機能、ADL、QOLの関係についての検討	-	平成22年10月	第20回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会 （長崎）	バランス能力と%FEV1.0、身体機能、ADL、QOLの官益を客観的に検証した。方法は、片足立脚時間、FR、TUG、重心動揺と肺機能、身体機能との関係を分析した。COPD患者のバランス能力は、病期の進行、身体能力、ADLと関連のあることが示唆された。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、作成協力を担当。 [共同研究者]市丸勝昭、堀江淳、今泉裕次郎、阿波邦彦、白仁田秀一、直塚博行、富永正樹、片渕宏輔

17. COPD患者における重症度別に見た動的バランスの検討Timed up and go testに着目して	-	平成22年10月	第52回全日本病院学会（兵庫）	COPD患者48名を対象にTUGおよび肺機能、身体機能を測定し、TUGと各測定項目との相関関係を分析し、重症度別にTUGの群間比較を実施した。結果、TUGは各身体機能と相関関係が認められ、BODE indexの軽症群と重症群との間に有意差が認められた。このことから重症COPD患者は動的バランスが低下しており、転倒のリスクがあることが示唆された。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当。 [共同研究者]阿波邦彦、堀江淳、白仁田秀一、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、柳原加奈子、山田穂積、古賀義行、堀川悦夫
18. 侵襲的人工呼吸器装着患者の在宅への取り組みと課題	-	平成22年10月	第52回全日本病院学会（兵庫）	IPPV管理下の患者に対する在宅復帰へ向けて呼吸ケアの取り組みに対する症例検討。60代女性で膠原病肺が主病名の患者を担当し、2型呼吸不全を呈しており、ADL、在宅へのケア、家族への指導などを行い、退院が可能となった。今後、呼吸ケアに対する取り組みが課題となった。 本人担当部分：データ収集、抄録・スライド作成協力、口頭発表指導などを担当。 [共同研究者]徳本洋、阿波邦彦、堀江淳、岸川美代、蒲原美智子、小副川豊美、片渕あきな、重松敬子、山田穂積、古賀義行
19. 慢性閉塞性肺疾患患者のバランス能力は病期進行といかに関係があるか～%FEV1、身体能力、ADLの関係について～	-	平成22年11月	第32回九州理学療法士・作業療法士合同学会（沖縄）	COPD患者17例に対して、バランス能力とGOLD病期分類の進行を検討した。重心動揺と%FEV1、身体機能との相関関係を分析し、重心動揺はそれらと相関関係を示した。これによりCOPD患者のバランス能力は、病期の進行、身体機能、ADLと関連のあることが示唆された。今後、病期の進行との関係を明確にし、理学療法プログラム、ADL指導に活用できるようにする。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、作成協力を担当。 [共同研究者]今泉裕次郎、堀江淳、阿波邦彦、白仁田秀一、市丸勝昭、直塚博行、平田晃久、三村さやか、堀邦広、小柳孝太郎、本田知行

20. Update BODE index と身体機能評価の関係	-	平成23年2月	第19回佐賀県理学療法士会学会 （佐賀）	update BODE indexが身体機能と関係しているかを検討した。対象はCOPD患者64名であり、mMRC息切れスケールやシャトルウォーキングテスト、Timed up and go test、NRADL、SGRQなどを測定し相関関係を求めた。結果はほとんどの身体機能評価と相関関係が認められた。このことからupdate BODE indexは身体機能を反映することが示唆された。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]柳原加奈子、阿波邦彦、白仁田秀一、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、山田穂積、古賀義行、堀江淳
21. update BODE index およびADO indexと身体機能評価との関係	-	平成23年5月	第46回日本理学療法学術大会 （宮崎）	2009年に発表されたupdate BODE indexとADO indexが身体機能と関係しているかを検討した。対象はCOPD患者64名であり、update BODE indexとADO indexともに呼吸困難感、筋力、全身持久力、動的バランス、ADL、QOLと有意な相関を求めた。このことからupdate BODE indexとADO indexは身体機能を反映することが示唆された。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、堀江淳、白仁田秀一、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、柳原加奈子、山田穂積、古賀義行、堀川悦夫
22. 慢性閉塞性肺疾患患者における息切れ分類別にみるバランス能力の差異についての検討	-	平成23年5月	第46回日本理学療法学術大会 （宮崎）	COPD患者は息切れによって活動性の低下からADLやQOLを低下させる。本研究の目的は、息切れの重症度とバランス能力の関係を検証することである。結果、性的バランスと動的バランスは息切れの増加により低下していることが示唆された。COPD患者において息切れの増加による活動性の低下は廃用性症候群などによるバランス能力の低下に影響を及ぼしていると考えられる。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]白仁田秀一、堀江淳、阿波邦彦、柳原加奈子、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、山田穂積、古賀義行
23. 慢性閉塞性肺疾患患者における息切れスケール、多次元重症度指数の各クラス別にみた動的バランスの検討―Timed up and go testに着目して―	-	平成23年5月	第46回日本理学療法学術大会 （宮崎）	本研究の目的は、mMRC息切れスケールと多次元重症度指数（BODE index）の各クラス別に動的バランスの差異を検討することした。その結果、息切れが強くなるほど動的バランスは低下し、BODE indexでも最重症において動的バランスの有意な低下を認めた。これらのことより、重症COPD患者の転倒リスク管理、理学療法プログラムの立案などにも有益となると考える。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]今泉裕次郎、阿波邦彦、堀江淳、白仁田秀一、市丸勝昭、直塚博行、平田晃久、小柳孝太郎、本多知行

24. COPD患者のバランス能力と身体能力、ADL、QOLの関係についての検討	-	平成23年5月	第46回日本理学療法学術大会 （宮崎）	本研究は、COPD患者のバランス能力と、身体機能、ADL、QOLの関係を客観的に検証することである。動的バランスはほぼすべての測定項目と関係を認め、バランス能力は全身持久力とも関係を認めた。これらのことから、バランス能力の低下からADL不安定感を感じることで自発的な活動が低下し、さらに身体機能の低下を引き起こすことが示唆された。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]市丸勝昭、堀江淳、今泉裕次郎、阿波邦彦、白仁田秀一、直塚博行、岩永健一郎、片渕宏輔
25. 慢性閉塞性肺疾患患者の6分間歩行距離350mの違いにおける身体特性の比較	-	平成23年5月	第46回日本理学療法学術大会 （宮崎）	COPD患者における6分間歩行距離が350m以上群と350m未満群で身体機能にどのような違いがあるのかを比較することとした。結果、多くの身体機能で意差を認め、350m未満群は有意な低値を認めた。このことから、6分間歩行距離が350m未満は生命予後の指標だけでなく運動能力の低下を示すことが示唆された。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]江越正次朗、阿波邦彦、堀江淳、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、白仁田秀一、柳原加奈子、藤岡康彦
26. 当院における呼吸不全患者に対する呼吸リハビリテーションの短期的効果の検証	-	平成23年10月	第53回全日本病院学会 （沖縄）	運動療法を中心とした慢性呼吸不全患者に対するリハビリテーションの3ヶ月間における短期的効果を検証した。結果、3ヶ月間のリハビリ継続率は44%であり、%握力、TUG、6MWDに有意な改善が認められた。筋力、動的バランス、持久力が改善したことで、敬天堂古賀病院におけるプログラムの効果が得られたと考えられる。しかし、ADL、生活関連QOLに改善が認められなかった。また、継続率が低値を示した要因として、患者教育や患者会などが積極的に実施できていなかったことが考えられる。当院における今後の取り組みとして、病院全体で患者をフォローする体制を再構築していく必要があると思われる。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]柳原加奈子、阿波邦彦、白仁田秀一、松本雄次、財津和希、山田穂積、古賀義行、堀江淳

27. COPDにおけるBody Mass Indexが身体機能、身体能力に及ぼす影響「痩せ型」「標準型」「肥満型」の比較から	-	平成23年10月	第21回日本呼吸ケア・リハビリテーション学術集会 （長野）	本研究は、COPD患者におけるBMIが身体機能、身体能力に与える影響を検討すること。結果、「肥満」は必ずしも回避するべき状態ではなく、むしろ身体機能、身体能力にとって良好な状態をもたらすものである可能性が示唆された。 本人担当部分：データ収集、統計解析を担当した。 [共同発表者]堀江淳、阿波邦彦、白仁田秀一、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、江越正次郎、田中将英、林真一郎、堀川悦夫
28. 外科周術期における運動療法の必要性の検討	-	平成23年10月	第21回日本呼吸ケア・リハビリテーション学術集会 （長野）	本研究の目的は術前後の呼吸機能検査を含めた理学療法評価を実施し、外科周術期における運動療法の必要性を明らかにすることである。結果、内視鏡手術後においても運動療法の必要性が示唆された。 本人担当部分：抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]大野正也、今山隆士、堀江淳、金子秀雄、阿波邦彦、堀川悦夫、千住秀明、塩塚順、那須賢司、松山悟
29. 慢性閉塞性肺疾患患者の6分間歩行距離の違いにおける身体特性の比較	-	平成23年10月	第21回日本呼吸ケア・リハビリテーション学術集会 （長野）	COPD患者の6MWDを350m以上群と349-250m群、249m以下群に分類し、身体特性を比較した。結果、肺機能、筋力、身体能力、ADLに有意差を認め、これらの能力低下は生存率に悪影響を及ぼす可能性があることが示唆された。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]江越正次郎、堀江淳、阿波邦彦、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、白仁田秀一、田中将英、林真一郎

30．慢性閉塞性肺疾患患者の6分間歩行距離テスト前後の脈拍の上昇率の違いにおける身体特性の比較	－	平成24年4月	第47回日本理学療法学術大会 （兵庫）	COPD患者の6MWD前後の脈拍の上昇率に着目し、上昇率の高値群と低値群で身体特性に違いがあるのかを比較検討した。結果、6MWD前後の脈拍上昇率は22．1%であった。そして、高値群と低値群との間にFVC、膝伸展筋力、片足立脚時間、6MWD、5m最速歩行速度などで有意差を認めた。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]野中賢、阿波邦彦、堀江淳、江越正次朗、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、白仁田秀一、山下義己、藤岡康彦、林真一郎
31．慢性閉塞性肺疾患患者の6分間歩行距離と%1秒量の違いにおける身体特性の比較	－	平成24年4月	第47回日本理学療法学術大会 （兵庫）	COPD患者において、%一秒量が50%未満群と50%以上群に分け、身体特性を比較した結果、多くの身体特性に有意差を認めた。6MWDは呼吸機能よりも筋力、バランス能力、歩行能力、ADL能力により強い影響を受けることが示唆された。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導を担当した。 [共同発表者]江越正次朗、堀江淳、阿波邦彦、今泉祐次郎、市丸勝昭、直塚博行、白仁田秀一、藤岡康彦、田中將英、林真一郎
32．男性COPD患者に対する全身持久力評価としての30秒間椅子立ち上がりテストの可能性	－	平成24年4月	第47回日本理学療法学術大会 （兵庫）	男性 COPD 患者に限定し、また、GOLD 病期分類で 1 期 2 期と 3 期 4期に分け、CS-30 と 6MWT 予測 VO2Peak、ISWT 予測 VO2Peak の関係を検証する事とした。CS－30 と 6MWT と ISWT の予測 VO2Peak は病期進行に関わらず有意な回帰式が得られた。 本人担当部分：データ収集を担当した。 [共同発表者]白仁田秀一、堀江淳、直塚博行、阿波邦彦、今泉裕次郎、市丸勝昭、江越正次朗、今泉潤紀、渡辺尚、田中將英、林真一郎

33. 佐賀県下での医療連携に向けた呼吸リハビリテーションの取り組み	-	平成24年4月	第47回日本理学療法学術大会 （兵庫）	平成22年より呼吸リハビリテーションの臨床連携と教育・研修活動を目的とした佐賀包括的呼吸リハビリテーション研究会を発足し、様々な取り組みを行ってきたので、これまでの活動状況を報告した。今後の課題として、未診断のCOPD患者の早期発見のため、また包括的に呼吸リハビリテーションを行っていくための地域全体・多職種への呼吸リハビリテーションの啓蒙活動や、呼吸リハビリテーション継続率を高めるための工夫、地域で継続して行うためのメディカルスタッフのスキルアップ、地域での各施設の強みを生かした連携病院の拡大など取り組んでいく必要があると考える。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]上田真智子、直塚博行、江越正次朗、 今泉裕次郎、市丸勝昭、阿波邦彦、白仁田秀一、堀江淳、田中将英、林真一郎
34. 30秒踵上げ反復テストは慢性閉塞性肺疾患患者の身体能力の一指標となり得るのか? 新たな簡易検査法としての可能性の試み	-	平成24年4月	第47回日本理学療法学術大会 （兵庫）	今回、我々は簡易検査法として30秒踵上げ反復テストを考案し、各種検査項目との関連性を検討した。今回の結果から踵上げ動作は単なる筋力評価に止まらず、バランス能力（片脚立位時間、TUG-T、5m最速歩行時間）や筋力（握力、膝伸展筋力、CS-30、MIP、MEP）や全身持久力（6MWT、ISWT）等と有意な相関が認められた。これは踵上げ反復運動は全身の運動機能的な要素が強く反映される動作であることが考えられ、COPD 患者の身体能力の一指標としての可能性が示唆された。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]兵働佳代子、今泉裕次郎、三村さやか、白仁田秀一、今泉潤紀、本多知行、小林弘美、杉原充、小柳孝太郎、阿波邦彦、八谷瑞紀、堀江淳
35. 男性COPD患者における6MWD、片脚立位時間、5m最速歩行速度はADO indexに影響していた	-	平成24年4月	第47回日本理学療法学術大会 （兵庫）	今回、ADO index に影響を与えている身体機能、身体能力を検証したので報告した。本研究により、COPD患者の生命予後、障害像に 6MWD、片脚立位時間、5m最速歩行速度が関与する可能性が示唆された。これによって、COPD 患者に対する治療プラグラムの中で、運動耐容能、バランス能力、歩行スピードの改善に向けたアプローチの効果が、生命予後、障害像にいくらかの影響を与える可能性が期待される。 本人担当部分：データ収集、スライド作成の指導を担当した。 [共同発表者]神門慶子、阿波邦彦、堀江淳、市丸勝昭、今泉裕次郎、白仁田秀一、直塚博行、江越正次朗、片渕宏輔、林真一郎

36. COPD患者における外出制限指標としての体重支持力指数（WBI）の有用性	-	平成24年4月	第47回日本理学療法学術大会 （兵庫）	外出に制限が生じ始める 6 分間歩行距離 400m をもとに、大腿四頭筋筋力を体重で除した体重支持力指数（WBI）のカットオフ値を求めた。そして、そのカットオフ値で COPD 患者を 2 群に分け、身体機能、身体能力、ADL、健康関連 QOL の比較をすることでWBI のカットオフ値の有用性を検討した。COPD 患者における外出に制限が生じ始める WBI は中等度の予測能を認めた。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、堀江淳、長江真弥、村田伸、林真一郎、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、白仁田秀一、江越正次朗、堀川悦夫
37. COPD患者に対して「歩行速度指数」は運動耐容能評価指標となりえるか?	-	平成24年4月	第47回日本理学療法学術大会 （兵庫）	簡便で安全に持久力を評価する 6MWDに瞬発的な要素を反映する 5m最速歩行速度を掛け合わせ、6MWDの運動耐容能評価としての精度を高めることを目的とした『歩行速度指数』を考案した。COPD 患者17名のパイロットスタディ-の結果として、6MWD 単独よりも歩行速度指数が ISWT と極めて強い相関が得られた。そこで今回は、症例数を増やして検証してみた。本研究により、6MWD の評価精度を高めることは困難であった。しかし、歩行速度指数は ISWT と強い相関を認めたことで、全身持久力評価として有用である可能性が示唆された。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]松本雄次、堀江淳、阿波邦彦、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、江越正次朗、白仁田秀一、山田穂積、林真一郎
38. COPD Assessment Testと呼吸機能、身体機能、身体能力、ADL能力、QOLの関係	-	平成24年4月	第47回日本理学療法学術大会 （兵庫）	CAT と呼吸機能、身体機能、身体能力、ADL能力、健康関連 QOL との関係を検証し、評価項目の相対的な指標として CAT が臨床的に有用であるかを検討することを目的とした。本研究の結果より、CATはCOPD患者の全体像を把握するツールとして活用できる可能性が示唆された。専門的な検査を行うことができない病院、施設でも、CAT を用いることで簡便に COPD 患者の身体能力や ADL 能力、QOL の相対的な状態を把握することができるのではないかと考える。また、患者教育や病態管理を行う際の指標としても用いることができ、より的確な治療やケアを提供できるのではないかと考える。 本人担当部分：スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]今泉潤紀、白仁田秀一、堀江淳、阿波邦彦、渡辺尚

39. 当院における呼吸リハビリテーション継続脱落課題と今後の展望	-	平成24年9月	第54回全日本病院学会 （神奈川）	呼吸リハの継続群と脱落群の身体機能の比較、その背景を調査し、結果から今後の当院における取組を検討した。継続率は42%と低かったが男女差や身体機能の差は認められなかった。そのため、個人におけるモチベーションなどが関与したものと考えられる。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]宮副孝茂、阿波邦彦、柳原加奈子、財津和希、松本雄次、北島麻美、堀江淳、山田穂積、古賀義行
40. 佐賀県内の作業療法士における呼吸リハビリの現状	-	平成24年10月	第22回日本呼吸ケア・リハビリテーション学術集会 （福井）	佐賀県内のOTにおける呼吸リハの現状を分析した。結果、回答率は、施設が76%、個人が84%であった。呼吸リハに興味を持つOTは多いが、施設基準や専門医の有無などOT実施には環境的要因も影響されることが示唆された。 本人担当部分：統計解析、抄録・スライド作成の指導を担当した。 [共同発表者]野崎忠幸、堀江淳、阿波邦彦、市丸勝昭、林真一郎
41. 間質性肺炎患者におけるCS-30と身体機能との関係COPD患者と比較して	-	平成24年10月	第22回日本呼吸ケア・リハビリテーション学術集会 （福井）	間質性肺炎におけるCS-30と身体機能の関係をCOPD患者と比較しながら報告した。結果、CS-30において間質性肺炎群はCOPD群より有意な低回数を認めた。また、筋力や歩行能力と強く関係した。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]上田真智子、阿波邦彦、堀江淳、田中将英、林真一郎
42. mMRC息切れスケール、CS-30、年齢を用いたCOPD患者の漸増シャトルウォーキングテストの予測式	-	平成24年10月	第22回日本呼吸ケア・リハビリテーション学術集会 （福井）	COPD患者の漸増シャトルウォーキングテストの予測式を作成することを目的とした。結果、有効な予測式が算出され、診察室や在宅などでも簡易的に評価できることが可能になると考えられた。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、堀江淳、直塚博行、田中将英、林真一郎

43.男性慢性閉塞性肺疾患（COPD）患者の体重支持指数（WBI）0．6を示すCS-30のカットオフ値	－	平成24年10月	第22回日本呼吸ケア・リハビリテーション学術集会 （福井）	COPD患者のWBIのカットオフ値を算出することを目的とした。結果、WBIが0.6に相当するCS-30のカットオフ値は16回であった。COPD患者の活動指標としてのWBIは、CS-30である程度の予測が可能であると示唆された。 本人担当部分：スライド作成の指導を担当した。 [共同発表者]白仁田秀一、堀江淳、阿波邦彦、八谷瑞紀、直塚博行、今泉潤紀、田中将英、林真一郎、 渡邊尚
44．COPD患者のmMRC息切れスケール、CATに影響を与える因子の検討	－	平成24年10月	第22回日本呼吸ケア・リハビリテーション学術集会 （福井）	COPD患者におけるドキュメント分類に基づきmMRCとCATの値で対象を2群に分け、身体特性などの比較を行った。結果、mMRCとCATは、どちらもSGRQが影響しており、ドキュメント分類の症状はHRQOLが基準になることが示唆された。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]今泉潤紀、白仁田秀一、堀江淳、阿波邦彦、八谷瑞紀、渡邊尚
45．当院における呼吸リハビリテーション継続における課題	－	平成24年10月	第22回日本呼吸ケア・リハビリテーション学術集会 （福井）	呼吸リハの継続群と脱落群の身体機能の比較、その背景を調査し、結果から今後の当院における取組を検討した。継続率は42%と低かったが男女差や身体機能の差は認められなかった。そのため、個人におけるモチベーションなどが関与したものと考えられる。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]宮副孝茂、阿波邦彦、柳原加奈子、財津和希、松本雄次、堀江淳、山田穂積、古賀義行
46．COPD患者の歩行距離低下に与える身体機能的影響因子の抽出と外出制限に関する研究	－	平成24年10月	第2回日本ヘルスプロモーション理学療法学会学術集会 （佐賀）	本研究の目的は、COPD患者の外出制限の一指標である歩行距離低下の影響因子を抽出し、そのカットオフ値を算出することである。その結果、COPD患者の外出制限に影響を及ぼす因子はmMRC息切れスケールと%膝伸展筋力であった。そのカットオフ値は、mMRCがGrade2、%膝伸展筋力は53.6%であった。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、堀江淳、村田伸、林真一郎、田中将英、堀川悦夫、山田穂積、古賀義行

47. COPD患者において簡易的に6分間歩行距離テストを予測することは可能か？	-	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会 （愛知）	本研究の目的は、診察室や在宅でもCOPD患者における6MWTの予測式を作成することとした。本研究のデザインは横断研究である。有用な予測式を作成できた。これにより多忙な診療の中で 6MWT を簡便に予測することが可能となりうる、臨床還元性の高い貴重な研究であると思われる。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、堀江淳、直塚博行、今泉裕次郎、市丸勝昭、白仁田秀一、宮副孝茂、江越正次朗、林真一郎
48. COPD患者において簡易的に6分間歩行距離テストを予測することは可能か?	-	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会 （愛知）	本研究の目的は、診察室や在宅でもCOPD患者における6MWTの予測式を作成することとした。141名（年齢73.3 ± 8.1歳）を解析対象とした。結果、mMRC、CS-30、%FVC、年齢が、呼吸機能を除いた分析では、mMRC、CS-30、年齢が6MWTに影響することが明らかとなった。そして本研究の結果より、予測精度の高い6MWTの予測式を作成することが出来た。決定係数は0.5以上で適合度は高いと評価できるため、本研究による予測式は適合度が高く、男性COPD患者に対して有用な予測式となりえる。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、堀江淳、直塚博行、今泉裕次郎、市丸勝昭、白仁田秀一、宮副孝茂、江越正次朗、林真一郎
49. 慢性閉塞性肺疾患患者の健康関連QOLと生活背景、身体特性との関係	-	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会 （愛知）	COPD患者の健康関連QOLにはどのような生活背景や身体特性が関係しているのか調査することとした。対象は、研究の参加に同意が得られた安定期COPD患者142名である。生活背景の運動習慣、高血圧、HOTの使用、呼吸器での入院に有意な関連が認められたことより、COPD患者の良好なQOLを確保するためには、運動習慣を身につけ、高血圧を予防し、HOTの使用や入院に至るような呼吸器疾患の重症化を可及的に予防することの必要性が示唆された。 本人担当部分：統計解析を担当した。 [共同発表者]江越正次朗、堀江淳、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、上田真智子、白仁田秀一、阿波邦彦、田中將英、林真一郎

50. ブリッジ力測定法の有用性について地域在住男性高齢者を対象に	-	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会 （愛知）	本研究では、ブリッジ力測定法の有用性について各種身体機能評価との関連性から検討した。対象は、要支援および要介護状態でない地域在住男性高齢者32 名（平均年齢78.6 ± 6.8 歳、平均体重59.5 ± 7.2kg）とした。ブリッジ力と下肢筋力を反映する膝伸展筋力およびバランス能力を反映する片脚立位保持時間、FRT との間に有意な相関が認められた。その他、上体起こし、TUG、長座体前屈との間には有意な相関は認められなかった。 本人担当部分：データ収集を担当した。 [共同発表者]政所和也、村田伸、宮崎純也、堀江淳、阿波邦彦、上城憲司
51. 運動療法を中心とした呼吸リハビリテーションが慢性呼吸器疾患患者に及ぼす影響	-	平成25年6月	第38回日本運動療法学会 （大分）	本研究は、COPD患者と間質性肺炎患者をはじめとする慢性呼吸器疾患患者群を対象に、全身持久力評価（シャトルウォーキングテスト、6分間歩行テスト）の結果から運動強度の基準を同一方法で設定した呼吸リハビリ介入効果を疾患別に比較検討し、身体機能の改善およびADLの向上などの介入効果を明らかとすることを目的とした。結果より、両群ともADLなど同じ測定項目に改善を認めた。全身持久力評価から運動強度を決定した運動処方はCOPD以外の疾患でも有用と考えられる。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、堀江淳、宮副孝茂、白仁田秀一
52. 閉塞性換気障害を有する地域在住高齢者の特徴	-	平成25年10月	第23回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会 （東京）	本研究の目的は、閉塞性換気障害を有する地域在住高齢者の身体機能や主観的健康感などから、その特徴を検証することとした。 閉塞性換気障害を有している地域在住高齢者は主観的健康感が有意に低値を示し、それ以外には有意差を認めなかった。このことより、閉塞性換気障害がある場合、身体機能の低下がなくとも、健康感に対する不安感などが早期から低下していることが示唆された。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、村田伸、堀江淳、政所和也、八谷瑞紀、久保温子、江渡文、上城憲司
53. 胸腔鏡下手術（VATS）後の身体機能と健康関連QOLの低下を呈した症例を経験して	-	平成26年2月	京都府理学療法学会 （京都）	胸腔鏡下手術（VATS）後の身体機能と健康関連QOL低下を呈した症例について検討した。症例1は左下葉扁平上皮癌の70歳代男、症例2は右下葉扁平上皮癌の70歳代男で、術後翌日から離床と周術期呼吸理学療法を開始した。症例1の6MWDは術後1ヵ月時には495mと著明に低下し、健康関連QOLもSF-8 PCSは44.5→36.9へ低下した。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]平山善康、阿波邦彦、佃陽一、太田垣あゆみ、山下直己、堀江淳

54. 慢性閉塞性肺疾患患者の健康関連QOLに影響を及ぼす因子の検討	-	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会 （神奈川）	安定期COPD患者57名に対し、健康関連QOLへの影響因子について生活背景や身体特性に着目し検討した。有意な関連が認められた項目を独立変数、SGRQを従属変数としてステップワイズ分析した結果、mMRC、運動習慣、呼吸器疾患での入院の有無、%FEV1.0が規定因子として抽出され、6MWDは除外された。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]江越正次朗、堀江淳、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、上田真智子、白仁田秀一、阿波邦彦、宮副孝茂、田中將英、林真一郎
55. 肺がん患者に対する胸腔鏡下肺葉切除術（VATS）後の身体機　能および精神心理機能の変化に関する検証	-	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会 （神奈川）	本研究の目的は、術前の身体機能、精神心理機能が、退院時にどのように変化しているか検討し、VATS施行患者の術後経過を検証することとした。周術期呼吸理療法を実施した13名であった。結果、TUGの所要時間の延長、6MWDの有意な減少が認められた。VATSは低侵襲であるため、早期離床が容易に可能であるが、歩行時における疼痛や呼吸機能の低下が原因で、それらの能力が低下したものと考えられる。その一方、術後1週間程度では、倦怠感や不安などの精神心理機能面や健康関連QOLの改善には至っていない。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成を担当した。 [共同発表者]平山善康、阿波邦彦、佃陽一、太田垣あゆみ、松井萌恵、田中宇大、堀江淳、山下直己
56. どのような慢性閉塞性肺疾患患者が短期間で運動耐容能を改善させることができるのか?呼吸リハビリテーションベースライン特性の多次元的比較より	-	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会 （神奈川）	本研究の目的は、運動耐容能が、3か月間の呼吸リハビリで改善できた患者と改善できなかった患者の初期評価の種々の指標を比較すること。更に、その特性を多次元的、横断的に検証し、今後の呼吸リハビリプログラム導入の在り方について提言することとした。COPD患者51例（男性44例、女性7例、平均年齢74±9歳）とした。短期的な運動耐容改善効果は、予測比一秒量に有意差がなく、初期評価時の息切れ、運動耐容能、ADL、QOLの評価に差が認められていることから、それらはCOPDの病期進行に依存するものではなく、症状、運動耐容能など能力の高低に依存する可能性が示唆された。 本人担当部分：統計解析を担当した。 [共同発表者]堀江淳、白仁田秀一、阿波邦彦、林真一郎

57．慢性閉塞性肺疾患患者に対する呼吸リハビリテーションの長期効果身体活動量の高い群と低い群の効果	－	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会 （神奈川）	1年間の呼吸リハについて、身体活動量の高い群と低い群に分けて検討する事を目的とした。1年間の呼吸リハ継続において、高活動群は、mMRCスケール、%膝伸展筋力、運動耐容能の項目で有意な改善を示した。一方で低活動群は全てにおいて維持傾向を示した。両群において呼吸リハ開始当初は運動習慣に差が認められないことからも、呼吸リハ期間中に身体活動が向上させることが長期の呼吸リハにおいて重要である事が示唆された。 本人担当部分：統計解析を担当した。 [共同発表者]白仁田秀一、今泉潤紀、堀江淳、阿波邦彦、林真一郎、渡辺尚
58．胸腔鏡下肺葉切除術（VATS）後1ヵ月時におけるATポイントでのMETsの差異で術前の身体機能に違いはあるか?	－	平成26年9月	第33回日本臨床運動療法学会 （大阪）	本研究の目的は、胸腔鏡下肺葉切除術（以下、VATS）後1ヵ月時におけるATポイントでのMETsの差異で術前の身体機能に違いがあるか検証することとした。周術期呼吸理療法を実施した23名（男性16名、女性7名）であった。3METs以下群は有意に術前の体重比膝伸展筋力（$p<0.05$）が低値を認めたが、それ以外には有意差を認めなかった。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、堀江淳、宮副孝茂、白仁田一
59．慢性閉塞性肺疾患患者における6分間歩行テスト後の息切れ優位群と下肢疲労優位群の身体機能の比較	－	平成26年9月	第4回日本ヘルスプロモーション理学療法学会学術大会 （京都）	6分間歩行テスト後に下肢疲労感よりも息切れ感を強く感じる群を息切れ優位群、下肢疲労感の方が強く感じる群を下肢疲労優位群とし、両軍の呼吸機能、身体機能に差があるのか検証した。結果、下肢疲労優位群は下肢筋力が低下していることが示唆された。 本人担当部分：統計解析、抄録・スライド作成を担当した。 [共同発表者]松本雄次、宮副孝茂、財津和希、北島麻美、手島由美子、小野智史、山田穂積、古賀義行、阿波邦彦

60. 当院における透析中の運動療法の実際いつまでも歩ける透析患者をめざして	-	平成26年9月	第35回滋賀腎・透析研究会 （滋賀）	今回、運動療法の効果を実感できた症例を報告する。【症例】80歳代の男性。原疾患は慢性糸球体腎炎。脊椎カリエス・狭心症の既往あり。要介護2。2012 年末より活動量低下、転倒を繰り返し歩行困難となる。翌5月より透析中の下肢床上運動を開始しPTの運動機能評価と運動処方に基づき透析後の下肢ストレッチも実施している。1年後の評価で下肢筋力向上し転倒リスクが減少した。また意欲的に生活し運動を継続している。 本人担当部分：抄録・スライド作成、発表準備を担当した。 [共同発表者]坂あゆみ、阿部美穂、池田友子、半田誠、安田真知子、富田耕彬、阿波邦彦、岩瀬弘明
61. 透析患者の転倒危険因子に関する調査	-	平成26年9月	第35回滋賀腎・透析研究会 （滋賀）	転倒危険因子に関して検討を行ったので報告する。 外来透析患者81名に対し、半年間の転倒歴を調査した。転倒危険因子として年齢、透析歴、転倒恐怖感、バーセルインデックス、外出頻度、日常作業頻度、透析日・非透析日の臥床時間の７項目とした。 結果、転倒群は24名、非転倒群は57名で、転倒因子として日常作業頻度が抽出された。透析患者の転倒危険因子は日常活動頻度が低下している者ほど転倒しやすいことが示唆された。 本人担当部分：統計解析、スライド作成を担当。 [共同発表者]成瀬綾、辻節子、南出悦子、宮本和代、荒木陽子、岩瀬弘明、阿波邦彦、廣川隆一、 安田真知子、富田耕彬
62. COPD患者の心理面における呼吸機能、身体機能、能力、ADL、QOLの差の検討	-	平成26年10月	第24回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会 （奈良）	本研究は、COPD 患者の心理的要因として HADS を用い不安・抑うつを疑診群と非疑診群に分類し、それぞれの呼吸機能、身体機能、身体能力、ADL 能力、QOL への差について検討することとした。結果、不安得点の 2 群間比較において、mMRC、SGRQ、CAT は疑診群が有意に高く、抑うつ得点の 2 群間比較においては、SGRQ、CAT、NR-ADL は疑診群が有意に高かった。また、HADS の不安における SGRQ のカットオフポイントは 50.8 点（AUC；0.82）であった。統計解析を担当した。 本人担当部分：統計解析、スライド作成を担当。 [共同発表者]松枝希見子、今泉裕次郎、堀江淳、阿波邦彦、池田さやか、小池このみ、梅口仁美、河島通博、林真一郎

63. COPD患者のISWT終了時における自覚症状の違いは、身体機能に差を生じさせるか?	-	平成26年10月	第24回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会 （奈良）	COPD患者の漸増 Shuttle Walking Test終了時に息切れ感が強く感じる群と下肢疲労感が強く感じる群の身体機能などの特性を比較した。結果、年齢や呼吸機能、呼吸筋力、ISWT に有意差を認めなかったが、下肢疲労感優位群は、息切れ感優位群よりも握力（p＜0.044）、体重比膝伸展筋力（p＜0.002）、Timed up and go test（p＜0.014）が有意に低下していた。 本人担当部分：統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]諸富誠一、古賀秀作、阿波邦彦、堀江淳、林真一郎
64. 胸腔鏡下肺葉切除術前の高齢者がん患者における心肺機能と健康関連QOLとの関係パイロットスタディ	-	平成27年3月	第16回日本健康支援学会 （福岡）	本研究の目的は、胸腔鏡下肺葉切除術（VATS）前の肺がん患者における心肺機能と健康関連QOLとの関係を検証することとする。術前肺がん患者は、先行研究と同様に健康関連QOLは高くはなく、Peak VO2は低下していた。今回、PCSに関係しているのはPeak VO2とVE/VCO2 slopeであるが、Peak VO2はModel 2～4より、見かけ上の相関である可能性が示唆された。一方で、PCSは年齢や性別を考慮した状態でもVE/VCO2 slopeと負の相関を認めた。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、堀江淳、平山善康、山下直己、伊藤健一
65. 肺癌葉切除例の年齢の差異による術後身体機能と健康関連QOL変化の関係	-	平成27年6月	第50回日本理学療法学術大会 （東京）	本研究では、肺癌葉切除術後の身体機能と健康関連QOLについて、年齢の違いによる術前、術後、退院後の継時的変化を検討した。退院期において手術操作後の肺容量の減少による%FVCやPeakTVなどの換気量低下はあるものの、最大運動能力や最大仕事量としてのPeakVO2/Wt、PeakWRに有意な低下は認めなかった。疼痛、息切れ、歩行能力の改善に向けた治療アプローチの効果が、高齢者の健康関連QOLにいくらかの影響を与える可能性が期待される。 本人担当部分：統計解析を担当した。 [共同発表者]市丸勝昭、堀江淳、阿波邦彦、林真一郎、光岡正浩
66. 肺癌葉切除例の年齢の差異による術後身体機能と健康関連QOL変化の関係	-	平成27年6月	第50回日本理学療法学術大会 （東京）	本研究は、VATSにて肺葉切除を実施した症例に対し、周術期リハビリテーションを実施し、身体能力、健康関連QOLが術前から術後1ヵ月にかけて、どのように変化しているか前向き研究で検証した。VATS前後から術後1ヵ月にかけて、身体能力および健康関連QOLの変化を前向きに検証した。結果、呼吸機能は低下したままだが、運動耐容能は術後1ヵ月で術前の値まで回復することが示唆された。しかしながら、健康関連QOLは1ヵ月では改善できない可能性が示唆された。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、平山善康 山下直己、堀江淳、太田垣あゆみ、松井萌恵、出見世 真人 佃陽一、伊藤健一

67. 地域在住虚弱高齢者における二重課題下歩行トレーニングが身体機能・身体能力に及ぼす効果の検証	-	平成27年6月	第50回日本理学療法学術大会 （東京）	本研究の目的は、虚弱高齢者に対するDT効果を身体機能，身体能力、ADLの6ヶ月間の変化から縦断的に検証することである。研究デザインは無作為化対照試験とし、研究のプロトコールは、「通常の理学療法」のみを実施した群を対照群（n＝15）、「通常の理学療法」に加え、DTを追加した群を介入群（n＝15）とした。FIM（合計）、FIM（運動）、長座位体前屈、障害物歩行、最速歩行時間は有意な期間の主効果を認めており、ADL、柔軟性、動的バランス、瞬発的歩行能力の改善にはPTプログラムは有効かもしれない。しかし、MMSE、FIM（認知）、老研式活動能力指標、上体起こし回数、握力、6MWD、%QF、TUG、FR、片脚立位時間はPTプログラムが有効でない可能性が示唆された。 本人担当部分：統計解析、抄録・スライド作成を担当した。 [共同発表者]北村智哉、萩原崇、小島宏志、阿波邦彦、堀江淳
68. 下肢荷重力測定における日常生活動作自立度判定の基準　訪問リハビリテーション利用者での検証	-	平成27年9月	第5回日本ヘルスプロモーション理学療法学会学術大会 （佐賀）	本研究は下肢荷重力がADLの自立度判定基準として有用か否かの検証を行った。訪問リハ利用者44名を対象とした結果、カットオフは63.1％であった。AUCは0.67-0.73であった。これにより、他専門職種や利用者本人、またはその家族が、利用者のADL自立度を共通認識できると考えられる。 本人担当部分：統計解析、抄録・スライド作成を担当した。 [共同発表者]窓場勝之、大杉紘徳、阿波邦彦、村田伸
69. 閉塞性換気障害あるいは拘束性換気障害を呈する地域在住高齢者の身体機能の特徴	-	平成27年9月	第5回日本ヘルスプロモーション理学療法学会学術大会 （佐賀）	本研究の目的は、地域在住高齢者における閉塞性換気障害と拘束性換気障害の優勝率を明らかにし、正常群を含む3軍艦の身体機能を比較検証することである。128名を対象とした結果、正常群は66.7％、閉塞性換気障害軍は11.7％、拘束性換気障害群は19.1％であった。群間比較において有意差は認めなかった。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、村田伸、堀江淳、岩瀬弘明、政所和也、八谷瑞紀、久保温子、平尾文、伊藤健一、上城憲司

70. 閉塞性換気障害ならびに拘束性換気障害を有する未診療地域在住高齢者の身体機能的特徴	－	平成27年10月	第25回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会 （東京）	本研究は、閉塞性換気障害ならびに拘束性換気障害を有する未診療地域在住高齢者の身体機能的特徴を検証することを目的とした。地域在住高齢者270名に対し、身体機能や呼吸機能などを計測し、年齢と性別を共変量とした共分散分析で検証した結果、拘束性換気障害群は身体機能の一部が低下している可能性が示唆された。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、村田伸、白岩加代子、安彦鉄平、窓場勝之、伊藤健一、堀江淳
71. 高齢者の認知機能低下に関連する身体・精神機能の検討　地域在住高齢者を対象とした1年間の縦断調査	－	平成28年3月	第17回日本健康支援学会 （愛知）	本研究の目的は、地域在住高齢者の1年後の認知機能低下にかかわる身体・精神機能を明らかにすることである。対象は123名であった。結果、1年間の追跡機関で認知機能が低下した対象は35名であり、ベースラインのTUG、足把持力の成績が悪くMMSEが高いものが経過することが示唆された。 本人担当部分：データ収集、統計解析を担当した。 [共同発表者]大杉紘徳、村田伸、白岩加代子、安彦鉄平、阿波邦彦、窓場勝之、堀江淳
72. 気道閉塞別にみた地域在住高齢者の身体・認知機能の差異閉塞性換気障害群、COPDに分類できない分類不能群と正常群における比較	－	平成28年3月	第17回日本健康支援学会 （愛知）	本研究の目的は、地域在住高齢者を気道閉塞別に分類し、身体および認知機能の差異について検討することとした。対象は、体力測定会で地域在住高齢者252名とした。3群間における各測定項目の比較では、分類不能群は、予測比努力性肺活量が他2群よりも有意に低下していた。また、体脂肪量が閉塞性換気障害群よりも有意に多かった。しかし、身体および認知機能において、分類不能群は他2群と有意差は認められなかった。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、村田伸、堀江淳、安彦鉄平、大杉紘徳、白岩加代子、窓場勝之
73. 地域在住高齢女性における疼痛の部位数と身体・認知・精神心理機能の差異	－	平成28年3月	第17回日本健康支援学会 （愛知）	本研究の目的は地域在住高齢女性を対象に疼痛の部位数と身体、認知、精神心理機能の関連について検討することとした。対象は241名であった。疼痛の部位数が1か所の高齢者はと通のないものと同等の身体機能を有しているものの主観的健康感が低下していることが明らかになった。そのため、身体的なアプローチだけでなく、ストレスマネジメントなども必要であると考える。 本人担当部分：データ収集、統計解析を担当した。 [共同発表者]安彦鉄平、村田伸、阿波邦彦、大杉紘徳、白岩加代子、堀江淳、窓場勝之

74. 長下肢装具を作成した脳卒中患者の在宅復帰率と身体的特徴の検討	-	平成28年3月	第17回日本健康支援学会（愛知）	本研究は長下肢装具を処方された患者が、その後、短下肢装具へと移行できたか否かに着目し、移行できなかった患者の転機先を示すともに、そのリハ開始時の機能的特徴を明らかにする。結果、長下肢装具から短下肢装具へと移行できなかった群は、移行できた群よりも在宅復帰率が低く、入院時の機能障害の程度やADLが低いことが示された。 本人担当部分：統計解析を担当した。 [共同発表者]窓場勝之、大杉紘徳、阿波邦彦、村田伸
75. 特異的運動耐容能を呈するCOPD患者の呼吸リハビリテーションにおける変化特性についての検証	-	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会（北海道）	本研究は、COPD患者の1年間の縦断的分析から、呼吸リハビリテーションにおける変化の特性を多施設共同の前向きコホート研究で明らかにすることを目的とした。COPD患者294例のうち、1年間、呼吸リハビリが継続できた49例とした。呼吸リハビリに関する1年間の効果は、特異的運動耐容能を有するCOPD患者では、多くの指標において変化に乏しく、現状維持が呼吸リハビリの目標となるのかもしれない。 本人担当部分：統計解析を担当した。 [共同発表者]堀江淳、白仁田秀一、阿波邦彦、林真一郎
76. 肺がん患者の健康康関連QOLと身体能力の術後回復過程	-	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会（北海道）	本研究の目的は、胸腔鏡下肺葉切除術（以下、VATS）で肺葉切除を施行された症例の術後3カ月間における身体能力、健康関連QOLの縦断的変化を明らかにすることとした。反復測定共分散分析の結果、術後1ヵ月後に有意に低下したのは、呼吸機能、握力、SF-36 PCS、SF-36 RCSであった。呼吸機能とSF-36 PCSの術後3ヵ月後は術前よりも有意に低下していた。TUG、Peak VO2、SF-36 MCSは各時点において有意差を認めなかった。また、各群におけるSF-36の変化では、運動耐容能の低い群が術後優位に低下していた。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、平山善康、山下直己、堀江淳、太田垣あゆみ、松井萌恵、出見世真人、佃陽一、伊藤健一

77. 長下肢装具のカットダウンにおける身体機能要因の検証	－	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会 （北海道）	本研究では、カットダウンに影響する身体機能要因を明らかにすることを目的とした。本研究は後ろ向き研究として平成21年から平成27年までにA病院に入院し、KAFOを作成した脳卒中患者43名（年齢74.2±12.2歳）の情報を調査した。入院直後のFIMに影響する身体機能要因と、カットダウンしたか否かに影響する身体機能要因は，ともにSIAS下位項目が抽出された。 本人担当部分：統計解析を担当した。 [共同発表者]窓場勝之、大杉紘徳、阿波邦彦、岩瀬弘明、村上貴士、東智里
78. 血液透析患者におけるADL困難感に関連する要因の検証	－	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会 （北海道）	本研究は、ADL困難感を測定可能である透析患者移動動作評価表（以下、ADL評価表）を用いてADL困難感に影響を及ぼす身体機能を横断的に検討した。対象は、研究の参加の同意が得られた当院透析センター通院中の血液透析患者58名（男性38名、女性20名、平均年齢68.1±10.5歳、BMIは20.9±2.9）とした。ADL評価表は%膝伸展筋力、SPPB合計点、立位バランス、，起立・着席、4m歩行、起立・着席時間、歩行時間と有意な相関関係が確認された。さらにADL評価表を従属変数とした重回帰分析において起立・着席時間、歩行時間、が影響因子として抽出された（R2=0.297，p＜0.001）。 本人担当部分：統計解析、考察指導を担当した。 [共同発表者]田中宇大、小林光子、山田優美子、辻博子、阿波邦彦
79. 地域在住虚弱高齢者における二重課題下歩行トレーニングが身体機能・身体能力に及ぼす効果の検証	－	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会 （北海道）	本研究は、12ヶ月間の縦断的な検証により、要介護高齢者に対するDTの効果を認知機能、身体機能、ADLから明らかにすることを目的とした。 統計解析、考察指導を担当した。対象は通所リハビリテーションを利用し、12ヶ月間の縦断調査が可能であった要介護高齢者23名であった。老健式活動能力指標（p＜0.05）において交互作用を認め、介入後の介入群で対照群よりも有意な高値を示した。DTは社会適応能力の改善に有用である可能性が示唆された。 本人担当部分：統計解析を担当した。 [共同発表者]北村智哉、萩原崇、阿波邦彦、大杉紘徳、堀江淳

80. 肺がん患者の術前における歩行テストの臨床意義	-	平成28年10月	第6回日本ヘルスプロモーション理学療法学会学術集会 （広島県）	本研究の目的は、肺がん患者の術前における歩行テストの臨床意義を身体機能および健康関連QOLとの関係から検証することである。歩行テストは身体機能および健康関連QOLの身体機能に関わる領域と有意な相関を認め、影響する指標であった。加えて術後1ヵ月後の健康関連 QOL と有意な相関を認めたことにより、術前における歩行テストは健康関連QOLの観点からも臨床上意義のある評価指標であることが示唆された。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、堀江淳、内藤紘一、平山善康、太田垣あゆみ、松井萌恵、田中宇大、小池初慧、山下直己、伊藤健一
81. 高齢者における筋力の非対称性と身体動揺性の関係	-	平成28年10月	第6回日本ヘルスプロモーション理学療法学会学術集会 （広島県）	本研究は、地域在住高齢者を対象に、膝伸展筋力、足把持力、握力の非対称性と歩行時の身体動揺性との関係性を検討することとした。結果、足把持力の非対称性は歩行時における身体動揺性との間に有意相関を認めた。一方、膝伸展筋力および握力の非対称性は、歩行時における身体動揺性との間に有意相関を認めなかった。また、身体動揺性を増大させる足把持力の非対称性のカットオフ値は23.5%であった。 本人担当部分：データ収集、統計解析を担当した。 [共同発表者]幸田仁志、甲斐義浩、村田伸、大杉紘徳、阿波邦彦、福本貴彦、今北英高
82. 地域高齢者の認知機能低下に影響する要因の検討	-	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会 （北海道）	本研究では、2年間の縦断調査から、地域高齢者の認知機能低下に影響する要因を、身体機能と抑うつ状態に着目して明らかにすることとした。対象はにMMSEが28点以上で，認知機能障害がないと判断された78名とした。低下群、維持群の2群間で各測定値を比較した結果、抑うつ傾向の有無で有意差を認め、低下群では2014年時点に抑うつ傾向を有している者の割合が有意に高かった（P＜0.05、低下群44%、維持群17%）。ロジスティック回帰分析の結果、認知機能低下の有無に関わる要因として有意であったのは抑うつ傾向の有無のみであり、オッズ比は8.89だった（95%信頼区間；1.55-51.10、P=0.014）。 本人担当部分：データ収集を担当した。 [共同発表者]大杉紘徳、村田伸、白岩加代子、安彦鉄平、阿波邦彦、窓場勝之、岩瀬弘明、内藤紘一、堀江淳

83. Characteristics of Physical and Mental Function in Community Dwelling Elderly Women with Pain （痛みを伴う女性地域在住高齢者における身体的・精神的機能の特徴）	－	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会 （北海道）	本研究の目的は、地域在住高齢女性と疼痛の有無との機能的差異を調査することであった。 データ収集を担当した。対象は186名の高齢女性であった（平均年齢：72.5歳、SD：5.9）。 痛みのないグループと比較して、2つ以上の痛みを伴う領域を有するグループでは、主観的な健康の満足度が低下した。睡眠の質は、痛みのない群よりも中程度の痛みを伴う群で痛みが減っていた。 [共同発表者]Teppei Abiko、Shin Murata、Hironori Ohsugi、Katsuyuki Madoba、Kunihiko Anami、Kayoko Shiraiwa、Jun Horie
84. 肺がんサバイバーの術後QOLを予測する術前心肺運動負荷試験	－	平成30年3月	第19回日本健康支援学会学術大会 （京都）	本研究は、胸腔鏡下肺葉切除術後1カ月時に体の痛みを訴える肺がんサバイバーの心肺機能の変化や手術関連情報、併存疾患などから、その特徴を検証することを目的とした。肺がんサバイバー35名を対象に、呼吸機能、筋力、心肺運動負荷テスト、疼痛指標を測定した。結果、疼痛低下群と疼痛不変群に分け、術前データを比較したところ、両群間に有意な差は認められなかったため、術後疼痛を誘発するであろう対象者を予測することは困難であった。一方、疼痛低下群は運動耐容能の指標が有意に低下することが明らかとなった。 本人担当部分：データ収集、解析、考察を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、堀江淳、平山善康、山下直己、伊藤健一
85. 地域高齢者の最速歩行速度と下肢筋力の非対称性との関係について	－	平成30年3月	第19回日本健康支援学会学術大会 （京都）	本研究は地域在住高齢腰痛者16名の疼痛軽減あるいは疼痛既往者9名の再発予防を目的に、腰痛の危険因子の一つである脊柱のアライメントに着目した腰痛予防・改善教育プログラムを実施し、その効果について検証した。結果、腰痛群は介入前に比べ介入後では痛みの程度を示すVASが有意に改善したが、下肢筋力は有意に減少した。一方、腰痛既往群では介入前に比べ介入後に破局的思考が有意に高まった。 本人担当部分：データ収集、解析を担当した。 [共同発表者]幸田仁志、甲斐義浩、村田伸、阿波邦彦
86. 腰痛者および腰痛既往者に向けた不良姿勢に対する介入効果の検証	－	平成30年3月	第19回日本健康支援学会学術大会 （京都）	本研究は地域在住高齢者85名を対象に膝伸展筋力と足趾把持力、握力の非対応性を測定し、歩行速度との関係性について検証した。結果、歩行速度に影響する要因として、足趾把持力の非対称性、足趾把持力の最大筋力、CS-30が抽出された。地域高齢者の済足歩行速度には、足趾把持力の最大筋力のみならず、その非対称性が影響していることが示された。 本人担当部分：データ収集を担当した。 [共同発表者]安彦鉄平、村田伸、岩瀬弘明、佐藤節子、 茅原太郎、窓場勝之、阿波邦彦

87. 呼吸器外科術後1ヵ月時に体の痛みを訴える肺がんサバイバーは心肺機能が低下している	-	平成30年7月	第55回日本リハビリテーション医学会学術大会（福岡）	本研究の目的は、肺がん患者の胸腔鏡下肺葉切除術前後における心肺運動負荷試験やQOLの変化を調査し、術後QOLを術前心肺運動負荷試験から予測できるか検証することである。腔鏡下肺葉切除術を受けた35名を対象に、QOLはSF-36を用いて、呼吸代謝能は心肺運動負荷試験と呼吸機能検査を用いて測定した。結果、縦断的変化では呼吸機能とQOLは有意に低下した。心肺運動負荷試験はpeak VO2とpeak Loadが有意に減少したが効果量は小さかった。そして、術後のQOLの大小に関する心肺運動負荷試験結果をROC曲線で解析した結果、中等度以上の正確性を有するのは，peak VO2であった。 本人担当部分：データ収集、解析、考察を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、堀江淳、平山善康、山下直己、大杉紘徳、伊藤健一
88. 外来COPD患者における全身持久力改善群と非改善群の特性比較	-	令和元年5月	第56回日本リハビリテーション医学会学術大会（兵庫）	外来リハビリテーションにおいてISWTが48m以上改善した群（13例）と改善しなかった群（23例）の特性を調査した結果、体重比膝伸展筋力、LSA、MNA-SFは期間の主効果を認めたが交互作用は認めなかった。交互作用を認めたのはHADS（不安）とSGRQであり、HADS（不安）では、改善群が有意な改善を認めたのに対し、非改善群は有意な変化を認めなかった。SGRQでは、改善群、非改善群ともに有意な改善を認めた。 本人担当部分：解析、考察を担当した。 [共同発表者]松本雄次、阿波邦彦、宮副孝茂、山田穂積、古賀義行、林真一郎、はがくれ呼吸ケアネット
89. 肺葉切除術前の肺がんサバイバーにおけるヘルスリテラシーと健康関連QOL、身体機能との関連	-	令和2年3月	第21回日本健康支援学会年次学術大会（沖縄）	胸腔鏡下肺葉切除術を行う肺がんサバイバーの術前のHLと身体機能・健康関連QOLとの関係を検証した。腔鏡下肺葉切除術を受けた21名を対象に、FCCHL、身体機能、SF-12を測定した。結果、術前肺がんサバイバーにおいて、3つのHLおよび全体HLは健康関連QOLの尺度であるSF-12の身体機能や日常役割機能、活力などと関連することが明らかとなった。 本人担当部分：データ収集、解析、考察を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、島雅晴、池田聖児、吉川正起、鈴木昌幸、伊藤公美子、木下翔太、小菅友里加、中橋玲那、田中太晶、岡見次郎、堀江淳
90. 地域在住高齢者における歩行速度とヘルスリテラシーの関連	-	令和2年3月	第21回日本健康支援学会年次学術大会（沖縄）	地域在住高齢者の歩行速度とヘルスリテラシー、年齢や身体機能との関連を検証した。対象は地域在住高齢者255名とした。結果、歩行速度に影響する要因に年齢、身長、CCHL、CS-30が抽出された。歩行速度に年齢や身長、身体機能だけでなく、ヘルスリテラシーが独立して影響することが示唆された。 本人担当部分：データ収集、解析、考察を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、村田伸、岩瀬弘明、白岩加代子、安彦鉄、合田明生、中野英樹、野中紘士、堀江淳

91. 地域在住高齢者における主観的認知機能低下とヘルスリテラシーの関連	-	令和2年10月	第10回日本ヘルスプロモーション理学療法学会（京都）	本研究の目的は、認知機能低下のない地域在住高齢者499名を対象に、主観的認知機能低下（SCD）とヘルスリテラシーの関連を明らかにすることである。結果、地域在住高齢者におけるSCD発症には、加齢、抑うつ症状の他に、ヘルスリテラシーの低さが関連することが示唆された。ヘルスリテラシーの向上がSCD発症予防、ひいては認知機能低下予防につながる可能性が考えられる。 本人担当部分：データ収集を担当した。 [共同発表者]合田明生，村田伸，白岩加代子，中野英樹，安彦鉄平，野中紘士，岩瀬弘明，阿波邦彦，堀江淳
92. 腰痛の既往あるいは軽度の腰痛をもつ高齢者へのPain Neuroscience Educationの効果 準ランダム化比較試験	-	令和4年10月	第10回日本運動器理学療法学（宮城）	本研究の目的は、準ランダム化比較試験を用い、腰痛の既往あるいは軽度の腰痛をもつ高齢者へのPain Neuroscience Educationの効果を検証することであった。結果、腰痛の既往あるいは軽度な腰痛を有する高齢者にとって、生体力学的な教育や運動指導は、腰部への過度な注意を惹起し破局的志向を悪化させたと考えられた。一方、PNEでは破局的思考は悪化することなく運動機能が改善した。以上のことから、公的機関と共同して行う腰痛学級では、PNEを用いた介入が望ましいことが示唆された。 本人担当部分：データ収集を担当した。 [共同発表者]安彦 鉄平，岩瀬 弘明，窓場勝之，野中 紘士，阿波 邦彦，白岩 加代子，宮崎 純弥，村田 伸
93. 慢性閉塞性肺疾患患者におけるサルコペニアと非サルコペニアの比較	-	令和4年11月	第32回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会（千葉）	COPD患者におけるサルコペニアと非サルコペニアの心身機能・QOL・活動範囲を傾向スコアマッチングを用いる前と後で，２群間の各指標を比較検討することを目的に、対象は安定期COPD患者60名を解析した。結果、COPD患者のサルコペニアは痩せ型と身体機能の低下が主な特徴であり，精神やADL，活動性の悪化は加齢性因子が関与していることが示唆された. 本人担当部分：データ解析、考察を担当した。 [共同発表者]猿渡聡，日高晴菜，阿波邦彦，堀江淳，林真一郎，渡辺尚
94. 慢性閉塞性肺疾患患者における呼吸サルコペニアの可能性がある者の割合とその特性についての検証	-	令和4年11月	第32回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会（千葉）	慢性閉塞性肺疾患（COPD）患者における呼吸サルコペニアの可能性がある者の割合とその特性について検証することを目的に、外来安定期COPD患者68名を対象とした。結果、呼吸サルコペニアは22.1%にみられ、その特徴はやせ型で息切れを呈しやすく、全身持久力や筋力、ADLの低下を認め、不安・抑うつ、生活範囲が狭小化する傾向であることが明らかとなった。 本人担当部分：データ解析、考察を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦，日高晴菜，猿渡聡，堀江淳，林真一郎，渡辺尚

95. COPD Assessment TestとLife-Space Assessment testで4群に分けた慢性閉塞性肺疾患患者の身体機能・心理機能の比較	－	令和4年11月	第32回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会（千葉）	Hamakawaらは，CAT＜10かつLife-Space Assessment test（LSA）≧60（症状無・広範囲群），CAT＜10かつLSA＜60（症状無・狭範囲群），CAT≧10かつLSA≧60（症状有・広範囲群），CAT≧10かつLSA＜60（症状有・狭範囲群）と4群を作り，CT所見で肺気腫やair-trappingを検討した．そこで本研究は，上記の通り4群に分け，心身機能を後方視的に比較した．結果、症状があっても活動範囲が広ければ，心身機能が良好であることが示唆された． 本人担当部分：データ解析、考察を担当した。 [共同発表者]日高晴菜，猿渡聡，阿波邦彦，堀江淳，林真一郎，渡邊尚
「国際会議」				
1. Physical Evaluation to Chronic Lung Failure for Pulmonary Rehabilitation（呼吸リハビリテーションのための慢性呼吸器疾患に対する身体的評価）	－	平成21年3月	Yuanpei University International Students Academic Presentation、2009 （台湾）	本研究は呼吸不全患者に対する呼吸リハビリテーション評価を検証することを目的とする。検証１：6分間歩行距離テストにおいて、酸素カートの運搬方法の違いが測定値に差異を生じさせるかを検討した。酸素カートを自己牽引した方が歩行距離が短くなり、他者が運搬する方がより客観的に評価できることが示唆された。検証2：慢性呼吸不全患者を対象にTUGを行った。MRC別比較を行い、MRC 2とMRC 3、4との間に有意差が確認されたことから、重症慢性呼吸不全患者の機能的移動能力の評価として、より鋭敏に反応する評価であると考えられた。これらよりTUGが慢性呼吸不全患者において評価法の一つに成りえることが示唆された。以上の2つの検証を英語のみで発表し、質疑応答を行った。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表担当。 [共同研究者]Kunihiko ANAMI、Jun HORIE、Syuuichi SHIRANITA、Kimiyuki MOTONAGA、Ryo MORIZONO、Etsuo HORIKAWA
2. Prediction of incremental shuttle walking test in patients with COPD（COPD患者における漸進的シャトルウォーキングテストの予測）	－	平成25年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2013 （バルセロナ）	本研究の目的は、COPD患者を対象に実施時間や限られたスペースで漸増シャトルウォーキングテスト予測式を作成することとした。対象は安定しているCOPD患者115名とした。対象は安定しているCOPD患者115名とした。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]Kunihiko Anami、Yosiyasu Hirayama、Naoki Yamashita、Naoki Yamashita、Yoichi Tsukuda、Jun Horie

3. Relationships between changes in the respiratory distress level of COPD patients undergoing a six-minute walking distance test, their physical functions, and exercise capacity （6分歩行距離試験を受けたCOPD患者の呼吸窮迫レベルの変化、その身体機能および運動能力の関係）	－	平成25年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2013 （バルセロナ）	研究の目的は、6MWD試験後の呼吸苦痛レベルの変化が、身体機能、運動能力、ADL、および健康関連QOLに及ぼす影響を調べることとした。被験者は、呼吸器リハビリテーションを受けていた安定期の181人のCOPD患者（男性167人、女性14人、平均年齢73.3±9.4歳）であった。結果、呼吸困難に影響を与える因子として6MWDのみが抽出された。 本人担当部分：データ収集、統計解析を担当した。 [共同発表者]Jun Horie、Kunihiko Anami、Masahide Tanaka、Shin-ichiro Hayashi
4. Video-assisted throracoscopic surgery decrease the physical performances of lung cancer patients: shortterm prospective study （ビデオ支援胸腔鏡手術は、肺癌患者の身体的能力を低下させる：短期前向き研究）	－	平成26年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2014 （ミュンヘン）	研究の目的は、肺癌患者における身体パフォーマンスや精神機能へのVATSの短期的効果を明らかにすることとした。18名を対象とし、術前と術後を比較した。結果、VATSは短期的には身体機能を低下させるため、術後のリハビリテーションが必要である。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]Kunihiko Anami、Yosiyasu Hirayama、 Naoki Yamashita、Naoki Yamashita、Yoichi Tsukuda、Jun Horie
5. Changes in the physical functions and health-related quality of life of elderly patients with lung cancer undergoing video-assisted thoracoscopic surgery （ビデオ支援胸腔鏡手術を受けている肺癌高齢患者の身体機能と健康関連QOLの変化）	－	平成27年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2015 （Amsterdum） （アムステルダム）	研究の目的は、肺癌を有する高齢患者における身体機能とHRQOLに対するVATSの影響を明らかにすることであった。30名を対象とし、術前と術後1ヶ月を比較した。結果、VATSは努力肺活量は低下し、Peak VO2は1ヶ月後に術前値に回復した。一方HRQOLは大幅にVATS後に減少し、有意な改善が認められなかった。 本人担当部分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]Kunihiko Anami、Yosiyasu Hirayama、Naoki Yamashita、Naoki Yamashita、Jun Horie、Kenichi Ito
6. Validity and intra- class reliability of spirometry using a mask instead of a mouthpiece （マウスピースの代わりにマスクを用いた肺活量測定の有効性とクラス内信頼性）	－	平成28年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2016 （ロンドン）	研究の目的は、マウスピースの代わりにフェイスマスクを使用して肺機能検査を行い、結果の妥当性と信頼性を検討することとした。結果、有効性と信頼性を確認し、フェイスマスクを使用することが可能であるとこを示唆した。 本人担当部分：統計解析を担当した。 [共同発表者]Kenichi Ito、Koji Nonaka、Shohei Takeda、Takeshi Nishikawa、Kunihiko Anami、 Jun Horie、Morihiro Tsujishita、Hirobumi Kawamura

1. 課題名「健康関連QOLに着目した、新たな肺がん葉切除術前後のがんリハビリテーションの開発」	共著	平成28年6月	科学研究費補助金 若手研究B 〔研究費〕	研究経費:3,300千円（直接経費） 研究経費:990千円（間接経費） ＜研究概要＞ 肺がん葉切除術前後の健康関連生活の質（QOL）が変化する要因を分析し、がんリハビリテーションが肺がん葉切除術後の身体機能や健康関連QOLに及ぼす効果を検討した。研究参加者は胸腔鏡下肺葉切除術が施行され、術後12週間の縦断調査が可能でった36名とした。結果、身体機能、健康関連QOLは術後1週後に有意な低下を認めたが、術後4週後から術後12週後にかけて、身体機能、健康関連QOLは有意に改善した。しかしながら、健康関連QOLは術前よりも有意に低下していた。これらの結果から、身体能力を維持・向上させるだけでは健康関連QOL対策としては不十分であることが示唆された。 全4頁 編者：阿波 邦彦 共著者：堀江 淳、平山 善康、山下 直己、伊藤 健一 本人担当部分：研究の企画、データ測定、統計解析、報告書執筆
2. 課題名「高齢肺がん患者の術前後における呼吸代謝能評価スケールの開発」	共著	平成29年6月	大阪ガスグループ福祉財団 調査・研究報告集30巻	助成額：700千円 ＜研究概要＞ 高齢肺がん患者のVATS前後において、呼吸機能と健康関連QOLは有意に低下した。また、術後健康関連QOLは術前の呼吸代謝能と有意な相関を認めたが、呼吸機能、筋力、歩行能力とは有意な相関を認めなかった。そこで、術後のQOLの大小に関するカットオフをROC曲線で解析し、活用が期待できるカットオフが算出された。 全6頁 編者：阿波 邦彦 共著者：堀江 淳、平山 善康、山下 直己、大杉 紘徳、伊藤 健一 本人担当部分：研究の企画、データ測定、統計解析、報告書執筆
3. 課題名「術後の健康関連QOLの早期回復を目的とした肺がん患者教育プログラムの開発」	共著	令和4年6月	科学研究費補助金 若手研究B 〔研究費〕	研究経費:3,200千円（直接経費） 研究経費:960千円（間接経費） ＜研究概要＞ 我々は以前、肺がん外科的手術後の患者の健康関連QOLを術前の状況まで回復するのに3ヵ月以上を要することを明らかにした。 そこで本研究は、肺がん患者の術前と術後における身体・認知・健康関連QOL・ヘルスリテラシーを客観的に評価し、健康関連QOLの回復遅延要因を明らかにし、新たな肺がん患者教育プログラムを作成することを目的とした。新型コロナウイルス前まではヘルスリテラシーと健康関連QOLは関連していたが、コロナ禍後は、ヘルスリテラシーが高値だからといって健康関連QOLの早期回復が可能ではないことが明らかとなった。 全6頁 編者：阿波 邦彦 共著者：堀江 淳、池田 聖児、島 雅晴、鈴木 昌幸、加藤 祐司、伊藤 久美子、岡見 次郎 本人担当部分：研究の企画、データ測定、統計解析、報告書執筆

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　6 年　5 月　13 日

氏名　藤田　信子

研究分野	研究内容のキーワード
加齢運動制御　痛みにおける脳血流動態	姿勢調節　高齢者　認知機能　前頭前野血流動態　線維筋痛症

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
大阪行岡医療大学 「復習テストの実施」	平成 26 年度 ～30 年度	「神経障害評価法」 基礎知識の理解度を確認するために授業内で国家試験問題を用いたり、授業開始毎に復習小テストを行った。
「グループによる検査技術の実技演習」		検査技術ではグループによる実技練習を行わせた後に発表形式で意見交換を実施した。
「実技テストの実施」		授業評価は筆記試験、およびオスキーを基本とした実技テストを実施し、知識と検査技能の総合評価を行った
「身体の姿勢と動作についての講義」		「運動学」 解剖学を基盤に身体の姿勢および動作を理解することを目的に、各関節の制御機構や動きに関わる筋肉の働き、歩行分析や姿勢の分析についてエビデンスに基づき講義した。
「歩行周期カードの作成とアクティビティの実施」		特に、歩行に必要とされる関節運動や筋収縮について興味を持ち理解を進めるため歩行周期カードを作成、学生同士でカードを組み合わせるアクティビティを取り入れた。
「グループで動作観察」		「臨床運動学」 疾患を持つ患者の異常な姿勢や動作のメカニズムを、運動学的考察に加え、運動力学的考察や姿勢反射的考察など多角的な側面から理解することを目的に、グループで行う動作観察や床反力計等を用いた測定実習を授業に取り入れた。
「床反力計による計測・結果の考察レポート作成」		具体的には立ち上がり動作や立位、ジャンプ動作を筋電図、床反力計等の機器で計測を行わせ、その結果と考察をレポート作成させ、学生に能動的な学習習慣を定着できるよう工夫した。
「視聴覚教材を用いた病態・障害の説明」		「中枢神経障害理学療法」 活字で理解が困難な疾患のイメージを視覚的に捉えることで理解度を高めることを目的に視聴覚教材を用いて病態の理解を深めたり、動作観察のレポート作成を行った。
「ペーパーペイシェントを対象に障害を把握し、グループ間で発表・討議」		講座の後半ではペーパーペイシェントを対象に障害を把握するための手技やプログラムの立案をグループで行った。学生が能動的に脳血管障害患者の問題に取り組む姿勢や態度を学ぶために、学生同士の発表会や討論会も実施した。

「研究手法と発表レジメの作成の指導」		「卒業ゼミ」 研究の目的や方法、論文の読み方を講義し、研究手法や結果のまとめ方の実際を体験させた。担当グループの研究テーマは以下の通りである。一期生「椎間板ヘルニア症例の分析」、二期生「高齢者の転倒の内的要因と転倒予防対策に関する文献調査」、三期生「二重課題動作時の運動課題の速度の違いが前頭前野の脳血流量に及ぼす影響」、四期生「スマホ操作がステップ動作の premotor time に与える影響について」、五期生「n-back 課題介入が疼痛抑制と脳活動に与える影響」「健常若年者に対する心的回転課題の介入が踏み出し動作反応時間に及ぼす影響」。
「ゼミ生の学会発表の指導」		なお、五期生の「n-back 課題介入が疼痛抑制と脳活動に与える影響」は、ゼミの代表者が保健医療学学会第 9 回学術集会で発表を行い、学会奨励賞を受賞した。
「実習前・中・後の学生面談と指導」		「臨床体験実習」「臨床評価実習」「臨床総合実習Ⅰ」「臨床総合実習Ⅱ」 実習前、実習期間中、実習終了時に少なくとも 3 回以上の学生面談を実施し、常に学生の実習に対する不安や悩み、心配事の相談を受けた。また実習前、および実習中に実習地に訪問し、実習指導者と少なくとも 2 回以上の面談を行い、実習の様子や学生が直面している問題など情報収集を行った。
「実習地への訪問と指導者との情報共有」		学生と実習指導者がスムーズな人間関係を形成し良好なコミュニケーションが取れるよう心がけ、学生が臨床現場で十分な知識と技術が体得し有意義な実習が実現できるよう努めた。
「実習終了後の発表会の開催」		実習終了後は、実習中に学生が実際に行った評価および治療プログラム作成をレジュメ作成し、発表会を開催して発表し、また他の学生の発表を通じて、理学療法の基礎知識と実践をまとめあげた。
奈良学園大学 「研究手法の基本と論文抄読、概要、発表の指導」	平成 31 年度～現在に至る	「基礎ゼミⅡ」 1 年生が大学の学習に慣れ、4 年間の大学生活を有意義に送るための基礎を学ぶ。基本的には自分の興味ある論文を収集しまとめ発表するという流れであるが、その中で講義ノートの取り方、文献資料の検索方法、論文の読み方、効果的な発表の仕方を学んでいく。グループの中でディスカッションやグループの中で発表会も行い、発表の聞き方、質疑応答などのアクティビティも学びに含めた。
「神経学的評価方法の講義」		「神経障害評価学」 脳卒中片麻痺患者の障害像理解と問題点の抽出に不可欠となる神経学的評価方法を学生が相互に模擬症例となり評価のシミュレーションを行い、ICF の考え方に従い理学療法の評価の流れを学ぶことを目標とする。講義では検査を行うためには検査の意義目的を把握することが重要であり、そのためこれまで学修してきた解剖学、生理学、運動学の知識を復習しながら実技を並行して行っている
「毎回の復習テスト実施」「オスキー実技テスト」		成績評価は毎回の講義前に行われる復習小テスト、前期

		定期試験、オスキーをもとにした実技テストの総合点で判断し、理論・実技両面からバランスよく学修できるよう工夫している。
「中枢神経障害患者の理学療法の講義」		「中枢神経障害理学療法学Ⅰ（総論）」 前半では、これまで習得した脳血管障害における障害像や評価技術の知識を基に、脳血管障害の病態、脳の可塑性のメカニズムと運動療法の適用、各病期における脳卒中リハビリテーションの理論について講義し、脳卒中片麻痺患者に対するリハビリテーションの基礎知識の学習を行った。
「視聴覚教材を用いた解説」		後半では、具体的な評価の方法やトレーニング方法の立案と実施のために、臨床現場における患者の動作、歩行を視聴覚教材を用いて解説し、実際の患者に対する運動療法を視覚で学ぶとともに、脳卒中片麻痺患者に対する運動療法の基本原理と治療体系リハビリテーションを具体的な方法をもって習得できるよう工夫した。
「脳卒中患者理学療法の基礎を再学習」		「中枢神経障害理学療法学Ⅱ（各論）」 前半では画像から読み取る障害と予後予測、リスク管理の方法、評価方法、病気における理学療法の目的と方法などを再学習した。
「ペーパーペイシェントを対象に情報の収集と臨床推論」		その後、ペーパーペイシェントを対象に情報収集、臨床推論、ICF の作成、治療の目標と立案まで行えることを目的に授業を進めた。患者の実像を理解しやすくするために、ペーパーペイシェントと似通った患者の映像を視聴させたり、最先端の治療の様子を視聴覚教材を用いて説明を行った。
「脳卒中片麻痺患者さんを招き、実例をもとに動作観察と問題点の抽出、実際の評価の見学を実施する」		後半では脳卒中片麻痺患者を招聘し、動作の観察方法、考察、問題点の抽出、実際の評価などが能動的にできるよう指導を行った。
「障害の把握と解釈を目的とした学修」		「理学療法評価学」 理学療法の一連の過程の中で情報収集、観察、測定の概要を学び、患者の障害像を相対的に把握するために、これらを統合と解釈し治療の目的およびプログラムを決定することを学修する。
「面接技能の習得」		面接方法の講義では実際の患者と治療者の会話を学生同士が行うことでよりよいコミュニケ―ションの方法を体得している。
「患者の機能障害についてグループ討論とレポート作成」		また、患者の障害像を想像しながら日常生活動作において、どのような機能障害が問題となるのかグループ討論を交えて考える機会を与えている。成績評価は小テスト、グループでまとめたレポートを評価対象としている。
「動作分析の学修を目的とした小テストとレポート課題」		「臨床運動学」 四肢と体幹・脊柱の関節の構造と筋肉の生理的機能、力学的視点について学修し、これらに基づき寝返りや起き上がり、立ち上がり、歩行などの動作分析を学ぶ。成績評価は小テスト、グループでまとめたレポートを評価対象としている。

「理学療法部門を見学し実地で学ぶことで、理学療法士の役割と自己の適性を確認させ、レポートでまとめさせる」		「早期体験実習（理学療法）」 リハビリテーション病院や施設における各部門を見学することによって、まず疾病や障がいを持つ者の問題を認識することで理学療法士を目指すにあたり自己の適性を確認させる。また、理学療法部門を観察することでリハビリテーションの中で理学療法の役割と位置付けをレポートにまとめ学修する。
「リモートによる患者の観察と地域システムの理解」「グループワークと討論」「経験談を交えた講義」		「地域理学療法実習」 地域に在住している障碍者や障碍者を取り巻く社会環境を含めた包括的な社会的リハビリテーションを学修する。リモートによる学びでは、システムである関連諸制度や地域連携、物的および人的社会資源などを学び、対象者の捉えかたや理学療法の知識の活用をグループワークで事例検討をしたりして地域理学療法のあり方を学修する。実習における学生担当者としては、リアルな臨床においても学生が十分な知識と技術が体得し有意義な実習が実現できるよう経験談を交えた講義なども行う。
「担当した科目について再度、講義」		「客観的臨床能力演習」 これまで学んだ評価テストについて、その目的、技能、結果の解釈などを総合的に体得できるよう学修し、最終的にオスキーテストを実施し、その能力を評価する。
「模擬テスト実施で個別に教授」		学生は教科書をもとにペアで演習を行い、教員は担当した講義科目（申請者は神経系評価）に従い、順次、重要ポイントの講義を行い、オスキーテスト前には模擬テストを実施し、学生の評価検査に不十分な点を個別に教授する。
「BMI、CI 療法、r-TMS、ロボット治療、装具療法など、脳卒中片麻痺患者を対象とした最新の応用技術を用いた理学療法技術についての講義」		「理学療法技術特論」 理学療法士として必要な知識・技術についてより専門的な事項について学修する。本授業は 4 人のオムニバス授業であり、その中で「脳血管障害と老年期障害に関する最新の理学療法技術」について講義をおこなった。
「卒業研究ゼミ生に対する研究指導」		「卒業研究」 論文抄読、研究計画書作成、倫理審査申請書作成、実験実施、データー解析、研究発表資料作成、プレゼンテーション、研究論文作成に至るまでの指導を実施。 〇令和 4 年の研究テーマ 「マスク着用による表情認知からわかる背外側前頭前野の脳血流量変化の違い」 〇令和 5 年の研究テーマ 「メンタルローテーション介入によるステップ開始時間への影響」
奈良学園大学大学院 「公正で責任のある研究活動について講義」	令和 5 年 4 月～現在に至る	「研究倫理特論」 （第 11,12,13 回担当） ヒトおよび動物を対象とする医療系研究における倫理的諸概念について理解するために、現代における倫理諸問題を検討する。
「高齢者の脳機能評価（近赤外分光法：NIRS）について講義」		「運動機能障害リハビリテーション特論」 （第 11,12,13,14,15 回担当） 近赤外分光法：NIRS の機能と NIRS を用いた最新の先行研究を紹介、その他の論文の抄読。立位姿勢調節の改善を目指した課題を選択し実験の計画と実施、レポート報告を課題とする。

2　作成した教科書，教材 「プリント授業教材の作成」 「プリント授業教材の作成」 「プリント授業教材の作成」	平成 23 年度～24 年度 平成 25 年度～30 年度 平成 31 年度～現在に至る	「神経障害評価学」「日常生活活動学」 「運動学」「臨床運動学」「神経障害評価学」「中枢神経障害理学療法」 「基礎ゼミⅡ」「理学療法評価学」「神経障害評価学」「中枢神経障害理学療法学Ⅰ（総論）」「中枢神経障害理学療法学Ⅱ（各論）」「臨床運動学」「客観的臨床能力演習」「理学療法技術特論」「研究倫理特論」「運動機能障害リハビリテーション特論」
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
「市民公開講座（大阪行岡医療大学にて）」 放送大学非常勤講師	平成 28 年度 令和 5 年 4 月～	タイトル「運動で認知機能の向上！認知症予防！最新の知見と運動の方法」茨木市の市民に対する公開講座を行った。 面接授業 担当科目：高齢者の身体機能と運動入門
5　その他 「科目担当実績」	平成 25 年度～平成 30 年度 平成 31 年度～現在に至る	大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科授業担当：「神経系障害評価法」、「運動学」、「臨床運動学」、「理学療法研究論」、「理学療法概論」、「卒業研究」、「臨床体験実習」、「臨床評価実習」、「中枢神経障害理学療法学Ⅰ」「臨床総合実習Ⅰ」、「臨床総合実習Ⅱ」 奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科理学療法学専攻授業担当：「理学療法評価学」「神経障害評価学」「中枢神経障害理学療法学Ⅰ（総論）」「卒業研究」「運動学」「臨床運動学」「日常生活活動学」「中枢神経障害理学療法学Ⅱ（各論）」「理学療法技術特論」「基礎ゼミⅡ」「客観的臨床能力演習」「早期体験実習（理学療法）」「地域理学療法実習」「理学療法評価実習」「理学療法総合実習Ⅰ・Ⅱ」「研究倫理特論」「運動機能障害リハビリテーション特論」

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 理学療法士免許（厚生労働省） 学士（文学） 修士（学術） 博士（学術）	昭和 60 年 4 月 平成 12 年 3 月 平成 20 年 9 月 平成 24 年 3 月	第 13798 号 佛教大学（第 51336 号） 神戸大学大学院人間発達環境学研究科（第 871 号） 神戸大学大学院人間発達環境学研究科（第 981 号）
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項	平成 28 年 4 月～平成 31 年 3 月	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究 C（課題番号 16K09002）研究課題「線維筋痛症患者に対する運動療法の効果の検証：脳内ネットワークの変化を指標として」 研究代表者：藤田信子、研究概要：線維筋痛症患者に運動療法を行い、日常生活での活動量を増やすことが、鎮痛や抗うつに効果があることが注目されている。この効果についての科学的検証とメカニズムの検討は未だ十分でない。本研究では、線維筋痛症患者に 3 週間の入院による有酸素運動を中心とした運動療法を行い、日常生活活動量や睡眠の変化をモニター、また質問紙による「痛

		み」「うつ」「睡眠」の評価を行った。また、脳機能変化の指標として、fNIRS の計測と fMRI の撮像により脳内のネットワークの変化と運動療法の関連性を明らかにすることを目的とした。令和 3 年 3 月までに 16 名の患者に対して 3 週間の運動療法の効果を検証するために、治療介入前後において、MRI 撮像、運動能力、生活 QOL、fNIRS の計測、心理面でのアンケート等を実施した。研究の成果や報告については、日本ペインリハビリテーション学会、線維筋痛症学会で発表、また日本臨床と理学療法科学でも論文発表した。また令和 2 年度から新たに運動療法介入後の治療持続効果を確認するため退院後の患者の痛みに関するアンケートや活動量の計測、インタビューなどを 3 か月ごとに行っている。
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文）				
1.Age-related differences in postural control associated with progression from a dynamic to a static during serial stepping in dual-task condition（二重課題を伴う連続ステップ動作時の高齢者が示す動的から静的姿勢制御）	共著（筆頭）	平成 26 年 3 月	大阪行岡医療大学紀要第 1 号 pp19-24	注意要求課題を伴って動から静への漸心的動作を行う時の高齢者の姿勢調節を若年者と比較検討した。高齢者は二重課題を課されたとき、ステップ開始し加速するときの速度が減速し、ステップ終了後には COP 総軌跡長が減少した。これらのことから、高齢者は姿勢調節がより難しくなる場面において注意の容量が増加すると、若年者とは異なるバランスの適応戦略を利用することが明らかになった。 著者：◎ Nobuko Harada(Fujita), Shuichi Okada （筆頭論文）
2. 二重課題を伴った階段降下動作が高齢者の姿勢調節に及ぼす影響 （査読付） （筆頭論文）	共著（筆頭）	平成 26 年 10 月	日本職業災害医学学会誌　第 62 巻　5 号 pp348-355	階段降下動作において二重課題動作を行う時の高齢者の立位姿勢調節を若年者と比較検討した。高齢者は二重課題動作時に階段降下時間を延長させ、また最終段の床面着地時には下腿筋の筋活動量を少なくし、共同収縮率を低くした。また、階段着地後には高齢者の COP 動揺が増加した。このことから、高齢者が階段降下動作で最も注意配分の影響を受けるのは連続動作から停止するときであることが示唆された。 著者：◎原田（藤田）信子、大澤傑、岡田修一
3. 地域在住高齢者における 6 か月間のウォーキングプログラムが体力と閉眼時の歩行に与える影響	共著	平成 28 年 1 月	ヘルスプロモーション理学療法研究　5(4) pp191-197	地域在住高齢者を対象に、継続的なウォーキングプログラムが体力と閉眼時の歩行に与える影響を検討した。結果は 6 か月間で Sit-to-Stand test の有意な短縮を認め、閉眼時の歩行にも改善が見られた。また、ロンベルグ率の変化と両脚支持期間の変化率に有意な相関関係を認めた。6 か月間のウォーキングプログラムは体力と閉眼時の歩行能力を向上させる可能性が示唆された。 著者：国宗翔、原田（藤田）信子、岡田修一

4.近赤外分光法の研究動向	共著	平成29年3月	大阪行岡医療大学 紀要　(4)pp 25-31	総説。近赤外分光法(NIRS)の研究動向やその原理・特性について述べるとともに、特に NIRS が医療（小児、精神科）の診断方法や治療の効果判定（リハビリテーション、循環器系）に実施されている現状について紹介するとともに、現在の NIRS の臨床上における課題についても述べている。現在進められている小型化や軽量化に伴う今後の脳神経科学の観点でのエビデンス構築の可能性を論じ、今後の発展性についてまとめた。 著者：松野悟之、**藤田信子**
5. Effect of wearing fingers rings on the behavioral and psychological symptoms of dementia: An exploratory study （認知症者のBPSDに対する指輪の効果：探索的研究）	共著	平成29年8月	Sage Open Medicine 5 1-11	女性認知症患者の示す BPSD に対する指輪の効果を検証するため、老人ホーム入居の 7 名の認知症患者の BPSD の場面、指輪の関心、自己認識能、全体像を用いた。その結果、指輪自体が介護者らから引き出した魔法の言葉「綺麗ね」が、対象者の自尊心を高め、「易怒性/不安定性」を軽減させる効果が見られた。 著者：Teruo Yokoi, H Okamura, T Yamamoto, K Watanabe, S Yokoi, H Atae, M Ueda, T Kuwayama, S Sakamoto, S Tomino, H Fujii, T Honda, T Morita, T Yukawa, **Nobuko Harada(Fujita)** （査読付）
6.線維筋痛症の運動療法―その効果と奏効メカニズム	共著（筆頭）	平成30年6月	日本臨床 76(11) pp2023-2029	線維筋痛症の非薬物的アプローチである運動療法の有用性について海外のガイドライン、システマティックレビューの概要を紹介。また、運動療法が奏効する脳メカニズムに関する最新の研究とニューロンを活性化し鎮痛に働くカギを握る慢性疼痛患者の生活習慣についても言及した。 著者：◎**藤田信子**、仙波恵美子 （招待あり） （筆頭論文）
7. 高齢線維筋痛症2症例の3 週間入院運動プログラムの効果について－痛みと身体・注意機能、包括的 QOL、および背外側前頭前野の血流動態への影響―	共著（筆頭）	令和2年12月	理学療法科学 34(6) pp839-846	高齢線維筋痛症患者の3週間入院運動プログラムを行い、痛み、身体・注意機能、包括的 QOL、背外側前頭前野(DLPFC)の機能に与える影響の検討を行った。2 症例ともに抑うつ自己効力感の改善が大きく見られ、これらが身体機能や包括的 QOL の改善に関与したことが推測された。DLPFC の機能の改善は 1 症例のみに見られた。高齢者の脳機能については加齢に伴う機能異常の影響も考えられ、今後さらに検討する必要性が考えられた。 著者：◎**藤田信子**、　池田耕二、高井範子、金子基史、松野悟之、三木健司、仙波恵美子 （筆頭論文）
8. 健常成人男性における家庭用体組成計を用いた部位別筋肉量と重心動揺検査における足圧中心動揺および Functional Rearch Test との関連性	共著	令和3年3月	理学療法科学 35(2) pp165-169	家庭用体組成計を用いて部位別筋肉量と重心動揺検査における足圧中心動揺指標・Functional Rearch Test との関連性を検討した。部位別筋肉量と各足圧中心動揺指標は有意な相関は認められなかったが、体幹筋肉量と FRT とは有意な中等度の正の相関が認められた。このこ

				とより、体幹筋肉量とバランスの関連について、家庭用体組成計を用いる臨床的意義があると考えられた。 著者：松野悟之、幸田利敬、**藤田信子** （査読付）
9. Contribution of dorsolateral prefrontal cortex, ankle muscle activities, and coactivation during dual-task to Postural balance: A pilot study	共著（筆頭）	令和元年12月	Journal of Physical Therapy Science 32(7) pp467-472	若年者を対象に、二重課題実施時の前頭前野の働きと足関節の筋活動、および足関節の同時収縮の関連性について検討を行った。その結果、二重課題時において左前頭前野の酸素化ヘモグロビンの増加がみられ、また重心動揺の少なかったグループは前脛骨筋の活動が上昇し、同時収縮率も高くなった。これらのことから、若年者においては、二重課題時には左前頭前野の活動が増加することは明らかであり、重心動揺の大きさは足関節同時収縮のストラテジーに関連することが示唆された。 著者：◎**藤田信子**、国宗翔、岡田修一 （査読付）
10. Stroopテスト遂行時における高齢者の前頭前野領域血流動態と年齢との関連	単著	令和2年4月	奈良学園大学紀要第13集 pp55-60	前頭前野を3領域に分け脳賦活反応性をNIRSを用いて評価し、前頭前野の脳機能と高齢者の年齢の関連を検討した。その結果、高次の認知課題を実施するとき、左DLPFCと前頭極の酸素化ヘモグロビン値は高齢者の年齢と有意な負の相関を示したが、右DLPFCは年齢との相関がみられなかった。これらのことから両側の半球はそれぞれ異なった機能を持っているが、片側の半球が加齢のため生理的機能が退行した場合、それを半球間で代償する可能性が示唆された。
11. ワーキングメモリ作業負荷が与える脳活動および主観的難易度と疼痛抑制効果の関連性	共著（筆頭）	令和2年7月	医療福祉情報行動科学研究 第8巻 pp47-53	ワーキングメモリ課題遂行時における作業負荷レベルが及ぼす前頭前野の脳活動および主観的難易度と疼痛抑制効果の関連性について検討を行った。その結果、疼痛抑制効果は左背外側前頭前野と有意な正の相関関係を示し、主観的難易度とは負の相関関係を示した。これらのことから、作業負荷を引き上げることで左背外側前頭前野の活動は高くなり、この脳活動の活性化が疼痛抑制効果に関与することが示唆された。また、主観的難易度においては作業負荷が高くなるにつれ、難しいと感じるほど疼痛抑制効果が下がることが示唆された。 本人担当部分：論文執筆、研究統括 共著者：◎**藤田信子**、林英典、林弘規、木村晋太郎、大槻嵐志、松野悟之 （査読付） （筆頭論文）
12. 線維筋痛症患者の自律神経機能と運動療法	共著（筆頭）	令和3年12月	奈良学園大学紀要 第14集 pp139-148	線維筋痛症に対する非薬物療法として，段階的有酸素運動や抵抗運動などが推奨されており，線維筋痛症の主症状である「痛み」をはじめ，「運動関連のQOL」や「精神機能（うつや不安）」の改善が認められている．一方で，「睡眠障害」

				「慢性的な疲労」など，線維筋痛症の自律神経機能の変調に対する運動の効果については，いまだ十分な議論がされていない．本稿では，線維筋痛症患者の自律神経機能，およびその変調に対する運動介入の効果についてこれまでの研究の動向を紹介するとともに，FM 患者の自律神経機能障害に対する運動介入の今後の展望について述べている。 本人担当部分：論文テーマ構想　論文執筆 共著者：**◎藤田信子**、仙波恵美子 （筆頭論文）
13. 線維筋痛症患者の語りから見いだされた疼痛の背景・疼痛抑制要因および今後の治療に望まれること	共著	令和 3 年 12 月	奈良学園大学紀要第 14 集 pp91-101	FM 患者 12 名を対象とした 3 週間入院で運動プログラムの介入前後に行った半構造化面接から、痛みの背景にある精神的ストレス要因、および FM 患者の痛みの状況や疼痛抑制要因に関する語りを取り上げた。痛みがあっても運動や歩くことなど身体を動かすことによって逆に痛みが軽減すること、専心・没頭時には痛みが軽減し、忘れていること、セルフマッサージも有効であった。規則正しい生活習慣や寝る前にリラックスする等が良好な睡眠につながり、また辛さに共感して傾聴してくれる他者の存在が精神面に大きく影響することが示唆された。 本人担当部分：論文作成の計画、研究統括 共著者：高井範子、池田耕二、**藤田信子**、三木健司、高橋紀代、仙波恵美子
14. 3 週間入院運動プログラムによる線維筋痛症患者の心身の変化-心理面談により明らかになった理学療法士の対応の重要性－	共著	令和 4 年 2 月	理学療法科学 37(1) pp45-58	3 週間入院運動プログラムによる介入前後の心身の変化を調査し、理学療法士の適切な対応を明らかにすることを目的とした。J 介入前後において、日本語版線維筋痛症質問票や日本語版ベック抑うつ質問票、SF-8 で改善がみられた。また患者の語りからは患者の痛みや辛さに寄り添う姿勢等、理学療法士の対応が患者にとって重要であることが示唆された。 本人担当部分：論文作成の計画、研究統括 共著者：高井範子、**藤田信子**、池田耕二、金子基史、丸山伸廣、中原理、三木健司、高橋紀代、仙波恵美子 （査読付）
15. コロナ禍における理学・作業療法士養成課程の早期体験実習 ―学内実習後の学生アンケート調査による検証－ （査読付）	共著	令和 4 年 2 月	医療福祉情報行動科学研究 vol.9, pp55-63	令和 2 年度および令和 3 年度，新型コロナウイルスの感染拡大をうけ早期体験実習を学内実習として実施した。学生アンケートの結果から，学内実習の意義や課題を明確にした。アンケートの結果，両年度とも実習内容については多くの学生が「よく理解できた」「まぁまぁ理解できた」と回答した反面，「2 年次以降の学外実習に向けた不安」を訴える学生が多かった。自由記述では「教員が近くにいる分質問などがしやすかった」，

				「疑問をすぐに先生に質問することができた」という意見のほか，「自分が知らなかった分野にも興味が持てた」という意見もみられた。学内実習で医療施設での学びを完全に再現することは困難だが，早期体験実習の本来の目的を達成する上で，学内実習は必ずしも不利な点ばかりではない。 本人担当部分：論文作成の計画 共著者：前田吉樹、中島大貴、伊藤健一、野中紘士、阿波邦彦、**藤田信子、**岩﨑智子、橋本雅至、山形力生、池田耕二 （査読付）
16. 線維筋痛症患者の入院・外来運動療法	共著（筆頭）	令和4年10月	ペインクリニック Vol.43(10), pp1076-1083	「痛覚変調性疼痛として考える線維筋痛症」の特集の一つとして「線維筋痛症患者の入院・外来運動療法」をテーマに執筆。脳機能イメージングの発達により線維筋痛症の発症に中枢性感作が起因することが明らかとなり、運動療法が線維筋痛症の症状を改善できるとともに脳機能にも変化を与えると考えられている。本論文では、執筆者が取り組んだ線維筋痛症患者に対する運動介入により患者の心身機能とADL改善効果について述べるとともに、海外における線維筋痛症患者への運動介入の効果について最近の研究を紹介した。本人担当部分：論文テーマ構想　論文執筆 共著者：**◎藤田信子**、仙波恵美子、山野宏章、松野悟之 （招待あり） （筆頭論文）
17. 数量化Ⅲ類分析による線維筋痛症女性患者の症状改善の類型化―3 週間入院プログラムにおける症状変化を通して―	共著	令和4年12月	理学療法科学 37(6) pp593-599	3週間入院プログラムにおける線維筋痛症患者の症状改善傾向を数量化Ⅲ類分析を行い、症状改善傾向を4つに分類した。その結果、①睡眠時間、熟睡度、疲労度②姿勢とPCS③歩数、MCS、睡眠効率④疼痛、楽しさ、体調の4グループに分類でき、運動療法の効果の現れ方が4つに類型化することが可能となった。 本人担当部分：論文作成の計画、研究統括 共著者：池田耕二，**藤田信子、**松野悟之、高井範子、金子基史、三木健司、仙波恵美子 (査読付)
18. Three weeks of exercise therapy altered brain functional connectivity in fibromyalgia inpatients	共著	令和5年4月	Neurobiology of pain 14	安静時fMRIを用いて線維筋痛症患者に対する運動プログラムの奏効メカニズムについて検討した。13例ではFM質問紙の得点および不安と恐怖の尺度が運動プログラム終了後に有意に低下し、運動プログラムによる抑うつ傾向の改善は辺縁系の内側前頭前野と右扁桃体の機能的結合の強度の変化と有意に相関していた。これらの結果から、運動プログラムが辺縁系の機能不全を正常化して症状を改善させたことが明らかとなり、動物実験で示された慢性疼痛への運

				動の奏効メカニズムが線維筋痛症患者でも成り立つことを示唆した。 本人担当部分：論文作成の計画，研究統括 著者：Shigeyuki Kan, Nobuko Fujita, Masahiko Shibata, Kenji Miki, Masao Yukioka, Emiko Senba (査読付)
19. Stroop test 実施中の中高年線維筋痛症患者における前頭前野の活動について－近赤外分光法を用いた測定と考察－	共著（筆頭）	令和 5 年 10 月	理学療法科学 38(5) pp338-344	中高年線維筋痛症患者と中高年健常者と対象に注意機能を要する Stroop test 実施時の前頭前野の活動を検証するために近赤外分光法（f NIRS）を用いて測定した。線維筋痛症患者では健常人に見られた右背側前頭前野領域の脳活動はみられなかった。また、テスト実施中の前頭極の活動が高い傾向がみられたことから、デフォルトモードネットワークの抑制機能の低下が示唆された。 本人担当部分：論文作成の計画，測定実施，研究統括 著者：**◎藤田信子、**池田耕二、松野悟之、三木健司、仙波恵美子 （筆頭論文）
20.　マスク着用時における表情認知が前頭前野の脳活動に及ぼす影響	共著	令和 5 年 12 月	奈良学園大学紀要 第 16 集 Pp119-124	健常若年者 21 名にマスク着用の画像をみるグループ、マスクなしの画像をみるグループの 2 グループに無作為に分けた。マスク有り無しで、それぞれ表情認知課題「真顔」「笑顔」「嫌悪」「悲しみ」の写真 16 枚を作成し、それらの写真をみて表情を認知する課題遂行中の前頭前野の脳血流量を fNIRS で測定した。課題の正答数、主観的難易度アンケートの集計を行い、その関連性も検討した。結果、「嫌悪」の表情の際、マスク着用時の前頭前野の脳血流量が有意に高い値を示した。また、正答数にはマスク有り無しで有意な差はみられなかったが、主観的アンケートの結果、マスク着用時の「嫌悪」を認知することが難しいことが明らかとなった。 本人担当部分：論文作成の計画，研究統括 著者：仲間咲耶、井上真綾、永田一翔、岩崎智子、**藤田信子**
（学会発表） 1. Prefrontal activation during a consecutive calculation related strategies for postural control in human adults; A fNIRS Study （計算課題時の立位姿勢制御に関連する前頭前野の血流動態について：fNIRS 研究）（筆頭演者）		平成 27 年 5 月	World Confederation for Physical Therapy Congress 2015 (Singapore)	健常人の計算課題実施時における立位姿勢制御脳の前頭前野の活動にどのように影響されるのかを検証するために、NIRS を用いた PFC の脳血流動態と床反力計による COP 変位、下肢筋電図による下肢の筋活動との関連性の検討を行った。その結果、計算課題を行うと有意に対象者全員の HbO_2 が増加したが、特に立位の重心動揺が大きい対象者の方が小さい対象者に比べて HbO_2 が増加し、下肢筋の筋収縮が減少していた。これらのことから、二重課題時の立位姿勢制御は戦略的であり、そのことは前頭前野の活動に関連していることが示唆された。

				演者：Nobuko Harada(Fujita), Shuichi Okada, Sho Kunimune, T Nishimura
2.線維筋痛症 4 症例に対する 3 週間入院運動療法プログラムの試み～運動療法介入による脳血流量の変化と QOL の改善について～ （筆頭演者）		平成 29 年 9 月	第 22 回日本ペインリハビリテーション学会学術大会 （兵庫県）	線維筋痛症患者 4 名に対して中等度負荷の運動療法を集中的に行ったところ、前頭前野の血流のバランスが良くなる傾向が NIRS の測定で明らかとなった。期間中に行った運動療法前後の注意機能テスト(TMT)では全員改善が見られたが、二重課題を伴った歩行速度の改善はばらつきが見られた。また QOL(SF8)では全員に身体的健康では改善が見られたが、精神的健康については改善が見られなかった者が一人いた。 演者：**藤田信子**、池田耕二、高井範子、松野悟之、　小泉優喜、平岡駿典、高橋紀代、三木健司、仙波恵美子
3.線維筋痛症 2 症例に対する 3 週間入院運動療法プログラムの試み　ー心理的側面からの検討ー		平成 29 年 9 月	第 22 回日本ペインリハビリテーション学会学術大会 （兵庫県）	線維筋痛症の多くに見られる恐怖回避反応と過活動傾向の忍耐反応のある対極的な２例について、運動療法プログラム介入による効果判定を心理的側面から比較検討した。異なるタイプの患者ではあったが運動療法は両者とも良い効果をもたらしていた。しかし、同じ運動療法を行っても、その体験がもたらす効果は異なっていた。担当理学療法士が患者の身体的、心理的傾向を速い段階で感じ取り、その患者に応じた適切な言葉掛け・アドバイスをすることが、運動療法の効果をより高めるものとなることが示唆された。 演者：高井範子、**藤田信子**、池田耕二、丸山伸廣、栗田樹、中原理、高橋紀代、三木健司、仙波恵美子
4.線維筋痛症 2 症例に対する 3 週間入院運動療法プログラムの試み　ー運動が困難な患者に対する介入方法についてー		平成 29 年 9 月	第 22 回日本ペインリハビリテーション学会学術大会 （兵庫県）	線維筋痛症患者 2 症例に 3 週間の集中的運動療法を行い、取り組みにおける難渋した点や工夫した点について紹介した。2 症例とも痛みに囚われ、運動療法を開始するところに難渋したが、可能な自動運動から行い徐々に運動負荷を増加することで、退院時には 2 症例とも身体機能、痛みに改善の傾向を示した。身体の触れ方、痛みの対応、動作方法の提案の仕方、運動のペーシング、自己効力感の確認など、注意と工夫を要した。 演者：小泉優喜、平岡駿典、栗田樹、丸山伸廣、中原理、高橋紀代、**藤田信子**、三木健司、仙波恵美子
5.維筋痛症患者に対する 3 週間入院プログラムの試み～中等度以上の運動負荷が可能であった症例～		平成 29 年 10 月	第 9 回日本線維筋痛症学会学術学会 （大阪府）	線維筋痛症患者に中等度以上の運動療法を行うことで疼痛の軽減と運動後の爽快感を認めた例を紹介するとともに、短期集中型運動療法のリスク管理、段階的運動負荷について文献的考察を含めて報告した。 演者：高橋紀代、小泉優喜、谷山ゆりえ、丸山伸廣、中原理、池田耕二、高井範子、**藤田信子**、三木健司、仙波恵美子

6.慢性疼痛に対する運動療法を推進する立場から		平成 29 年 10 月	第 9 回日本線維筋痛症学会学術集シンポジウムⅠ「心理療法・運動療法の立場から考える、慢性痛の再発・再燃の乗り越え方」	運動による鎮痛(EIH: exercise-induced hypoalgesia)のメカニズムについて運動が脳報酬系の要である腹側被蓋野(VTA)におけるドーパミン産生を増やし自発運動量が多いほど産生が増え、疼痛行動が抑えられること、その他背外側被蓋核(LDT)や視床下部外側核などの関与についても紹介し、脳報酬系の活性化が鬱やQOLの改善につながることを紹介した。 演者：仙波恵美子　**藤田信子**
7.線維筋痛症高齢女性 2 症例に対する 3 週間入院運動の試み：前頭前野の血流動態の変化と疼痛、抑うつ、QOL の改善について		平成 30 年 9 月	第 23 回日本ペインリハビリテーション学会学術大会	FM高齢女性に対して3週間の入院運動プログラムを行い、疼痛、抑うつ、QOL、の改善とNIRSによる前頭前野(PFC)の血流動態の変化について報告した。高齢女性の入院プログラムが疼痛、抑うつ、QOLの改善につながり、背側前頭前野(DLPFC)の質的、量的な脳活動変化を伴ったと考えられた。 演者：**藤田信子**　池田耕二　高井範子　松野悟之　金子基史　三木健司　行岡正雄　仙波恵美子
8.線維筋痛症高齢女性 2 症例に対する 3 週間入院運動の試み：患者の心身の変化と理学療法士の関わり方に関する検討		平成 30 年 9 月	第 23 回日本ペインリハビリテーション学会学術大会	FM高齢女性に対して3週間の入院運動プログラムを行い、BDI-2、JFIQ、インタビューを行った。2 症例とも心身の回復が良好であり、面談からも PT の関わり方が非常に重要であることがわかった。特に患者の不安傾向を踏まえ、運動内容や規則正しい生活リズムをきちんと守らせていたことが功を奏していた。 演者：高井範子　**藤田信子**　池田耕二　金子基史　三木健司　行岡正雄　仙波恵美子
9.n-back 課題の疼痛抑制効果と前頭前野の脳活動との関連性		平成 30 年 12 月	保健医療学学会第 9 回学術集会	背外側前頭前野(DLPFC)の活性化が痛み刺激に対する閾値の関連性を明らかにするため、n-back 課題による疼痛抑制効果の検証を NIRS を用いて行った。その結果、3-back 時に左 DLPFC の活性化が見られ、また NRS は 3-back 時において左 DLPFC および前頭極の血流量と正の相関がみられたが、正答率との間に相関がみられなかった。これらのことから、疼痛抑制を目的に認知課題を与える場合、作業負荷量や患者の主観的難易度に着目することが疼痛抑制と脳の活性化に効果を与えることが示唆された。 演者：林英典　大槻嵐志　林弘規　木村晋太郎　田中大樹　島田大地　松野悟之　**藤田信子**
10.運動療法が痛みに効く基礎医学的機序と線維筋痛症患者に対する集中的入院運動療法の効果		令和元年 10 月	第 11 回日本線維筋痛症学会学術集会　シンポジウム「慢性の痛み政策研究事業からみた集学的診療・運動療法の実態」	運動による鎮痛(EIH: exercise-induced hypoalgesia)のメカニズムの中で、運動による脳報酬系の活性化の重要性について、神経障害性疼痛を起こしたマウスを自発運動させ、疼痛行動の著明な改善とともに脳報酬系におけるドーパミン

				産生の増加の観察について紹介。慢性疼痛患者の脳報酬系を含むmesocortico-limb systemの機能不全、特に側坐核の機能低下がみられるが、運動による側坐核の活性化により側坐核に投射する扁桃体基底外側核(BLA)、内側前頭前野の活性化とともに、痛みに対する恐怖による不動や種々の自律神経反応の発現に関与する扁桃体中心核(CeA)の抑制につながり脳のネットワークの正常化と鎮痛と生活習慣の改善につながることを紹介する。臨床例として、現在、3週間入院運動プログラムによる痛み、身体・認知機能、包括的QOL、うつや睡眠の改善について検討し、脳のresting-state functional connectivityの解析による脳機能変化についても紹介した。 演者：仙波恵美子　**藤田信子**
11.線維筋痛症患者への3週間集中運動プログラムにおける効果発現機序の安静時fMRIによる検討		令和2年12月	第42回日本疼痛学会シンポジウム「慢性疼痛のイメージとニューロフィードバック」	安静時fMRIを用いて線維筋痛症患者に対する運動プログラムの奏効メカニズムについて検討した。13例ではFM質問紙の得点および不安と恐怖の尺度が運動プログラム終了後に有意に低下し、運動プログラムによる抑うつ傾向の改善は辺縁系の内側前頭前野と右扁桃体の機能的結合の強度の変化と有意に相関していた。これらの結果から、運動プログラムが辺縁系の機能不全を正常化して症状を改善させたことが明らかとなり、動物実験で示された慢性疼痛への運動の奏効メカニズムが線維筋痛症患者でも成り立つことを示唆した。 演者：寒重之　**藤田信子**　仙波恵美子　柴田政彦　三木健司　金子基史　高橋紀代　中原理
12. 近赤外分光法を用いた線維筋痛症患者におけるStroop課題実施中の前頭前野機能局在について－中高年線維筋痛症患者を対象とした一考察－		令和4年7月	第24回一般社団法人日本光脳機能イメージング学会学術集会	線維筋痛症は身体の広範な部位の筋骨格系に生じる慢性疼痛と全身のこわばりを主症状とする。また随伴症状の一つに認知機能の問題があり、FM患者の生活に多大な悪影響を与えている。本研究ではNIRSを用いCentral Executive Networkに関連する背外側前頭前野（DLPFC）とDefault Mode Networkに関連する前頭極（FP）を関心領域とし、FM患者の前頭前野の機能局在について検討を行った。 演者：**藤田信子**　仙波恵美子
13.メンタルローテーション介入によるステップ動作時の中枢神経反応時間とステップ時間への影響		令和5年10月	第26回総合理学療法研究会学術大会	健常若年者20名を対象に、メンタルローテーション課題を介入し、課題実施前と実施後にフォースプレート上でステップ動作を実施させ、中枢反応時間、ステップ時間に差があるかどうか。オーバークロス法を用いて検討した。その結果、メンタルローテーション課題を介入すると、中枢神経反応時間およびステップ時間が有意に改善することが明らかになった。

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和6年　3月　31日

氏名　　城野靖朋

研究分野	研究内容のキーワード
人間医工学、健康・スポーツ科学、神経科学	リハビリテーション科学、運動分析、運動療法、臨床神経科学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 1)確認テストによる理解度の確認と復習の支援	平成28年4月 ～ 平成28年9月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の専門科目「運動療法学」（2年次配当　2単位）において実践した。講義の要点を理解できているかを毎回の講義で確認テストを行った。また、その小テストの問題と解答を学内ネットワーク上のフォルダで閲覧可能な状態とし、自主学習を促した。
2)中間テストによる理解度の確認と、理解度の低い学生を対象とした学習支援	平成28年10月 ～ 平成29年3月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の専門科目「運動療法学」（1年次配当　1単位）において実践した。本講義は1年生を対象にした専門科目であったので、専門領域の学習に難渋する学生がいることも想定された。そこで、講義内容の理解度を確認するための中間テストを実施し、学生の理解度の把握に努めた。中間テストの得点の低かった半数程度の学生を対象に誤答問題の解説作成を課題とし、個別の添削を通して指導を行った。さらに、特に得点の低かった学生（クラスの1/4程度）には授業時間以外の時間を利用して個別に指導を行った。個別指導を実施した学生の中間試験の平均点（個別指導前）はクラス全体の平均点の40%の得点だったが、終講試験（個別指導後）の平均点はクラス全体の平均点の87%の得点となった。講義内容の理解度が低い学生に対して個別性の高い指導を行うことで、専門科目の学習初期段階における学力の向上に効果的があった。
3)少人数グループでの実習指導	平成28年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の専門基礎科目「解剖学実習」（2年次配当　1単位）の実習で取り組んだ。学生を10人程度の少人数グループに分け、複数の教員でそれぞれが一グループを担当した。実習では体表解剖のチェック項目を設定し、それを基にを体表から骨指標や筋などの触診を指導し、テスト形式で修得度の確認を行い、学習を支援した。
4)学生による演習内容の実演を中心とした演習授業の実施	平成29年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の専門科目「運動器障害評価法Ⅱ」（2年次配当　1単位）において実践した。学生の主体的な取り組みを支援する目的で、学生がペアで評価方法を実演する形式をとり、学生の実演する評価方法で不足している内容はその場で指導、訂正を行い、その後全学生で演習を行った。学生ペアと実演する評価内容は事前に学生に伝え、演習の事前学習を促した。実演担当の授業日までに教科書と教科書付属のDVDでの事前学習を課題とした。DVDは全学生が保有していたが、学内にも2ヶ所、学生が視聴できる場所を設けて事前学習を支援した。ほとんど毎日いずれかの学生が演習の予習、復習を行っており、教員にだけでなく学生間でも質問や指導が行われるなど、積極的に学習へ取り組む学生の姿がみられた。

事項	年月日	概　　要
5)授業理解度の聞き取り調査と補講の実施、ならびに講義スライド閲覧による自己学習支援	平成29年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の専門基礎科目「運動器系解剖学」（1年次配当　4単位）の担当10コマ（上下肢の筋学各論）において実践した。専門的な科目を初めて受講する講義なので、数名の学生から理解が不十分な内容について聞き取り調査を行った。また、その内容に基づいた補講を行い、学習の理解に努めた。また、講義スライドを学内のパソコンやタブレット端末で学生がいつでも閲覧できる状態にし、自主学習を促した。補講後には講義時間以外での質問が増えるなど、分からないことをそのままにしない学習姿勢が身についた。
6)臨床動画の活用	平成29年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の専門科目「理学療法学総合演習Ⅰ」（3年次配当　1単位）において実践した。理学療法評価のひとつである動作分析について、その基礎的な内容を講義した後に、脳卒中後片麻痺者の理学療法（歩行練習）の動画を視聴して実際の臨床を想定した学習支援を行った。その結果、動画を視聴しながら動作の模倣を行うなど、積極的な学習の姿勢が見られた。
7)暗記カード形式のプリント配布による自己学習支援	令和元年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の専門基礎科目「人体構造学Ⅲ」（1年次配当1単位）において実施した。暗記が中心となる科目なので、記憶の定着を目的に暗記カードを作成できる授業資料を作成した。授業時間外の学習ツールを提供することで反復学習が必要となる暗記学習を支援したが、学生が授業時間外で暗記している場面がみられるなど、学生に自主的な学習姿勢姿勢が見られた。
２　作成した教科書，教材 1)確認テストの作成	平成28年4月 ～ 平成28年9月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の専門科目「運動療法学」（2年次配当　2単位）において作成し、学生の学習を促した。
2)授業時間外に復習できるスライドの作成	平成29年4月 ～ 平成30年3月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の専門基礎科目「運動器系解剖学」」（1年次配当　4単位）の講義スライドを学内のパソコンやタブレット端末で学生がいつでも閲覧できる状態にし、自主学習を促した。
3)ワークブックの作成	平成31年9月 ～ 令和4年3月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の専門基礎科目「運動学Ⅰ」（1年次配当　1単位）において作成した。これにより、学習内容を明確にし学生の予習復習を支援することで、学生に自主的な学習姿勢が見られた。
4)オンラインクラス専用教材の作成	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の専門基礎科目「運動学Ⅰ（総論）」（1年次配当、1単位）、「人体機能学Ⅱ（動物性機能）」（1年次配当、1単位）、「人体構造学Ⅲ（神経・運動器）」（1年次配当、1単位）、「人体生理機能実習」（2年次配当、2単位）、「人体構造実習」（2年次配当、2単位）、「運動学演習」（2年次配当、1単位）において、学習補助動画、確認テストなど作成した。これにより、授業時間外での学習ツールを提供し学生の自宅学習を促した。

事項	年月日	概　　要
5)OSCE bookの作成	令和3年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の専門科目「客観的臨床能力演習（理学療法）」（3年次配当　2単位）において、自己の能力を客観視する学習システムのツールとして作成した。具体的には、演習のポイントと、動画撮影した自身の演習の様子の自己採点を行う自己採点表から構成される。これを使用することにより、各学生の苦手な点を明確にすることができ、個別性の高い学習を支援した。
6)オンラインコンテンツの作成	令和3年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の「人体機能学Ⅱ（動物性機能）」、「人体構造学Ⅲ（神経・運動器）」、「人体生理機能実習」）、「人体構造実習」などの事業時間外での学習をサポートするオープンな教材としてオンラインコンテンツを作成した。これにより、授業時間外での学習ツールを提供し学生の自宅学習を促した。また、これはオープンな教材であり、履修生に限らず広く学習をサポートできる教材として作成した。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
1)大阪行岡医療大学の授業評価アンケート	平成29年4月 ～ 平成29年9月	大阪行岡医療大学の授業評価アンケート（4段階評価で「4」が最も良い）のうち、一人で担当する「運動器障害評価法Ⅱ」で授業評価アンケートは概ね「4」、もしくは「3」の評価であった。
2)大学設置・学校法人審議会の教員組織審査	平成30年8月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科　講師 担当授業科目：「運動学Ⅰ（総論）」「人体機能学Ⅱ（動物性機能）」「人体構造学Ⅲ（神経・運動器）」「基礎ゼミⅡ」「早期体験実習（理学療法）」「人体生理機能実習」「人体構造実習」「運動学演習」「地域理学療法実習」「客観的臨床能力演習（理学療法）」「理学療法評価実習」「総合臨床実習Ⅰ（理学療法）」「総合臨床実習Ⅱ（理学療法）」可と判定□
3)大学院設置・学校法人審議会の教員組織審査	令和4年9月	奈良学園大学大学院リハビリテーション学研究科講師 担当授業科目：「研究方法特論」「地域リハビリテーション・ケア学特論」「生活支援特別演習」可、「リハビリテーション学特別研究」研究指導（Mマル合）と判定

事項	年月日	概　　要
4)奈良学園大学の授業評価アンケート	令和2年4月 ～ 令和3年3月	奈良学園大学の授業評価アンケートの総合的な満足度を問う項目の得点は次のような結果であった（5段階評価で「5」が最も良い）。令和2年度は人体構造学Ⅲで4.37、人体機能学Ⅱで4.31であった。
	令和3年4月 ～ 令和4年3月	令和3年度は人体構造実習で4.45、人体生理機能実習で4.39、運動学演習で4.29、人体構造学Ⅲで4.05であった。学科全体の平均は前期4.27、後期4.04であった。
	令和4年4月 ～ 令和5年3月	令和4年度はリハビリテーション医学で3.85、運動学演習で3.98、運動学Ⅰで4.17、人体構造学Ⅲで3.94であった。学科全体の平均は前期3.84、後期4.01であった。
	令和5年4月 ～ 令和6年3月	令和5年度はリハビリテーション医学で3.85、運動学演習で3.98、人体構造実習で4.07、人体生理機能実習で4.06であった。学科全体の平均は前期3.85であった。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 1)理学療法士養成校から受け入れてた実習生に対する指導	平成20年2月 ～ 平成23年1月	複数の理学療法士養成校から臨床実習生を受け入れており、そのうちの5名の実習生にはケースバイザーとして症例レポートの作成、院内における症例発表の指導までを行った。実習生の学習を支援する目的で以下のような環境設定に取り組んだ。 ・実習指導を統括する責任者と相談し、実習生との信頼関係が構築しやすく、障害像が複雑過ぎない患者を選択し、実習が行えるよう調整 ・実習指導責任者と連携し、実習指導内容の確認や修正を行いながら実習指導を実施 ・医師や他職種からの情報収集を実習生が直接行えるように調整 ・実習の進捗状況によって、疾患の異なる複数の患者（中枢神経疾患の患者と整形外科疾患の患者など）について、理学療法プロセスが経験できるように調整 ・理学療法プロセスの模倣ができるよう、指導者による指導だけでなく、理学療法士や他の実習生の症例発表に参加できるよう調整 ・他の理学療法士や他職種にも実習生が直接指導を受けられる機会を設け、様々な意見や考えを聞けるように調整 ・実習で取り組んだこと、考えたことをまとめて発表する機会を設定（症例発表）
2)病院職員に対する体位変換に関する講習	平成25年9月	病院の職員を対象に、意識レベルが低いなどで自力での寝返りが行えない入院患者に対する体位変換について、静止画での説明と演習の実施を交えた講習を実施した。
3)移乗動作介助に関する講習	平成26年9月	病院の職員を対象に、脳卒中後の機能障害によって自力での移乗が行えない入院患者に対する移乗時の介助方法について、動画による説明と実技演習を交えた講習を実施した。

事項	年月日	概　　要
4)模擬講義の講師	平成28年8月	大阪行岡医療大学のオープンキャンパスの内容のひとつとして「腰痛講座」と題し、実演を交えた日常生活動作指導や運動療法について模擬講義を行った。
5)腰痛予防講の講師	平成30年12月	公立学校共済組合大阪支部が主催する腰痛予防講座事業の講師の一人として、参加者42名に対して講師2名で実演を交えた日常生活動作指導や運動療法について模擬講義を行った。
5　その他 1)奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成29年6月 ～ 平成29年9月	奈良学園大学保健医療学部看護学科における非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「ヘルスプロモーション論」 　奈良学園大学保健医療学部看護学科の非常勤講師として担当の「ヘルスプロモーション論」（選択科目、2年次配当、半期、選択2単位）において、運動学の基礎的な内容と、運動療法で用いられる運動と身体機能への効果について授業を行い、それによって、学生に運動を用いたヘルスプロモーションの方法を理解させる教育効果があった。
2)大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科における教育実績	平成28年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科における専任教員（助教）として、以下のような科目を担当した。
	平成28年4月 ～ 平成29年3月	「運動療法学」 　大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「運動療法学」（専門科目、2年次および1年次配当、半期、必須2単位）において、運動療法を適切に行うための基礎的な知識と運動器や神経系疾患、内部障害など目的に合わせた運動手技について授業を行った。それによって、学生に運動療法の目的と治療計画立案など基礎理論を理解させる教育効果があった。
	平成29年4月 ～ 平成31年3月	「解剖学実習」 　大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「解剖学実習」（専門基礎科目、2年次および1年次配当、半期、必須1単位）において、人体を体表から観察することによる肉眼的構造の理解を促す授業を行い、それによって、学生に具体的実体として人体の構造を理解させる教育効果があった。
	平成29年4月 ～ 平成31年3月	「運動器系解剖学」 　大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「運動器系解剖学」（専門基礎科目、1年次配当、半期、必須4単位）において、運動器を構成する筋に関する内容を担当し、その授業を通して、学生に身体運動を理解する基礎を理解させる教育効果があった。

事項	年月日	概　　要
	平成29年4月 ～ 平成31年3月	「理学療法概論」 大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「理学療法概論」（専門科目、1年次配当、半期、必須2単位）において、理学療法における筋の知識の重要性に関する内容を担当し、その授業を通して、学生に理学療法への興味・関心を高める教育効果があった。
	平成29年4月 ～ 平成31年3月	「運動器障害評価法Ⅱ」 大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「運動器障害評価法Ⅱ」（専門科目、2年次配当、半期、必須1単位）において、筋系障害の評価の理論と技術について授業を行い、それによって、学生に筋系の評価と位置づけ、筋力検査の意義を理解させることと、その方法を習得させることの教育効果があった。
	平成29年4月 ～ 平成31年3月	「理学療法学総合演習Ⅰ」 大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「理学療法学総合演習Ⅰ」（専門科目、4年次配当、半期、必須1単位）において、理学療法の評価過程に必要な情報収集と検査・測定技術の向上を目的に授業を行い、それによって、学生に理学療法評価を理解させることと、理学療法評価の立案と実施方法を習得させる教育効果があった。
	平成29年10月 ～ 平成31年3月	「理学療法学総合演習Ⅱ」 大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「理学療法学総合演習Ⅱ」（専門科目、4年次配当、半期、必須1単位）において、模擬症例やグループワークを通して理学療法プロセスを経験する授業を行い、それによって、学生に理学療法の目標と治療プログラムの立案と具体的な実施方法を理解させ、実践力を養う教育効果があった。
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	「臨床体験実習」 大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「臨床体験実習」（専門科目、2年次配当、半期、必須1単位）において、学外施設の臨床実習指導者と連携して、理学療法の見学を通して理学療法業務について学び、問診や評価を一部体験するなどの実習を行った。それによって、学生に理学療法の意義と役割の理解させるだけでなく、理学療法士として今後習得しなければならない能力を認識させる教育効果があった。

事項	年月日	概　　要
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	「臨床評価実習」 　大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「臨床評価実習」（専門科目、3年次配当、半期、必須3単位）において、学外施設の臨床実習指導者と連携して、症例に応じた基本的な障害評価の方法を経験し、障害の種類や程度を具体的に把握するなどの実習を行った。それによって、学生に理学療法の基本的な評価技術を習得させる教育効果があった。
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	「臨床総合実習Ⅰ」 　大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「臨床総合実習Ⅰ」（専門科目、4年次配当、半期、必須6単位）において、学外施設の臨床実習指導者と連携して、理学療法の対象となる代表的な疾患について障害評価から治療計画の立案までの過程の実施と、理学療法の治療の一部を体験するなどの実習を行った。それによって、学生に一連の理学療法プロセスを実施できる能力を向上させる教育効果があった。
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	「臨床総合実習Ⅱ」 　大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「臨床総合実習Ⅱ」（専門科目、4年次配当、半期、必須8単位）において、学外施設の臨床実習指導者と連携して、理学療法の対象となる代表的な疾患について障害評価から治療計画の立案までの過程の実施と、理学療法の治療の一部を体験するなどの実習を行った。それによって、学生に一連の理学療法プロセスを実施できる能力を向上させる教育効果があった。
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	「卒業研究」 　大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「卒業研究」（専門科目、4年次配当、通年、必須4単位）において、今まで学習してきたことの見直し、文献検索、研究方法の選択や論文の書き方の指導を行った。それによって、学生に具体的なテーマを選択し、自ら研究する姿勢と能力を養う教育効果があった。 ・平成29年度の卒業研究のテーマ 「閉塞性換気障害と拘束性換気障害におけるADL指導の違い」「筋緊張の分類とその特徴、そして治療法、理学療法アプローチについて」「ギラン･バレー症候群と多発性硬化症の比較」 ・平成30年度の卒業研究のテーマ 「トップアスリートへの理学療法的アプローチについて」「整形外科疾患の歩行の特徴について」「パーキンソン病の運動症状の特徴」

事項	年月日	概　　要
3)大阪ハイテクノロジー専門学校柔道整復師学科における教育実績	平成29年4月 ～ 平成31年3月	大阪ハイテクノロジー専門学校柔道整復師学科における非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「リハビリテーション医学」 　大阪ハイテクノロジー専門学校柔道整復師学科の非常勤講師として担当の「リハビリテーション医学」（3年次配当、前期-必須1単位、後期-必須1単位）において、脳や脊髄、運動器、呼吸器などの幅広い疾患による障害と、障害をリハビリテーションの観点から治療することについて授業を行い、それによって、学生にリハビリテーションの意義とリハビリテーションに携わる職種の役割を理解させる教育効果があった。
4)奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科における教育実績	平成31年4月 ～ 現在に至る 平成31年9月 ～ 令和4年3月 平成31年9月 ～ 令和4年3月 平成31年9月 ～ 令和4年3月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科における専任教員（講師）として、以下のような科目を担当した。 「運動学Ⅰ（総論）」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「運動学Ⅰ（総論）」（専門基礎科目、1年次配当、半期、必須1単位）をオムニバス形式で5回分の授業を担当した。主に運動の心身への影響と運動学習について授業を行った。それによって、学生に運動をリハビリテーションに応用するための基礎的な理論を理解させる教育効果があった。 「人体機能学Ⅱ（動物性機能）」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「人体機能学Ⅱ（動物性機能）」（専門基礎科目、1年次配当、半期、必須1単位）をオムニバス形式で5回分の授業を担当した。主に脳神経系に関する生理機能を系統的に理解できるように授業を行った。それによって、学生に理学療法士・作業療法士にとって動物性機能が必要な意味を理解させる教育効果があった。 「人体構造学Ⅲ（神経・運動器）」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「人体構造学ⅢⅢ（神経・運動器）」（専門基礎科目、1年次配当、半期、必須1単位）をオムニバス形式で5回分の授業を担当した。主に運動の発現とそれを統制・支配する脳神経系の機能解剖を説明できるように授業を行った。それによって、学生に、これらの知識を基に機能解剖や運動学との関連性、臨床面への応用について理解させる教育効果があった。

事項	年月日	概　　要
	平成31年9月 ～ 令和4年3月	「基礎ゼミⅡ」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「基礎ゼミⅡ」（共通教育科目、1年次配当、半期、必須1単位）を少人数のゼミ形式で1年次生が大学の学習に慣れ、4年間の大学生活を有意義に送るための基礎を修得できるよう授業を担当した。最終的には一人一つのテーマを設定し、具体的には、講義ノートの取り方、文献資料の検索、学術的な文章の読み方などについて、ゼミ形式の演習を通じて学修し、最終的には1人1テーマで学習した内容をまとめてプレゼンテーションを行った。それによって、学生に大学における能動的な学びを理解させ、慣れさせる教育効果があった。
	平成31年9月 ～ 令和4年3月	「早期体験実習(理学療法)」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「早期体験実習(理学療法)」（専門科目、1年次配当、半期、必須1単位）を担当した。教員引率による臨地での見学実習、および学内でのセミナーを通して、理学療法の役割と位置付けを学修させ、他職種の専門性と相互の連携を理解させ、理学療法士への動機付けと学習意欲を高める効果があった。なお、令和2年度と3年度は学内にて実習を実施した。臨床のオンライン見学、視聴覚教材を用いたリハビリテーションにおける診療チームの役割を学習することで、理学療法の役割と位置付け、他職種の専門性と相互の連携を理解させる教育効果があった。
	令和2年4月 ～ 令和4年8月	「人体生理機能実習」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「人体生理機能実習」（専門基礎科目、2年次配当、半期、必須2単位）を担当した。主に運動がおこる生理機能の理解し、運動の電気生理的評価を行えるように授業を行った。それによって、学生に、1年次で習得した機能学の知識の臨床面への応用について理解させる教育効果があった。
	令和2年4月 ～ 現在に至る	「人体構造実習」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「人体構造実習」（専門基礎科目、2年次配当、半期、必須2単位）を担当した。脳神経系の機能解剖の学習にはコンピューター上でヴァーチャルな人体解剖がおこなえるアプリも導入し、構造を3次元的に理解させた。自己の理解度を確認させるためにスケッチ課題、令和3年からは粘土で脳の一部を作成させるなど、自己理解度の確認を行わせた。それによって、学生に、人体構造への興味を沸かせ、運動学との関連性、臨床面への応用について理解させる教育効果があった。
	令和2年4月 ～ 令和4年8月	「運動学演習」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「運動学演習」（専門基礎科目、2年次配当、半期、必須1単位）を担当した。リハビリテーション評価の基礎となる運動の解析が行え、解析結果を解釈できるように授業を行った。それによって、学生に、運動学を臨床へ応用する方法とその重要性を理解させる教育効果があった。

事項	年月日	概　　要
	令和2年9月 ～ 令和5年3月	「地域理学療法実習」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「地域理学療法実習」（専門科目、2年次配当、半期、必須2単位）を担当した。令和2年度と3年度は学内にて実習を実施した。地域理学療法の臨床のオンライン見学、事例検討、グループワークを通して、地域に在住し生活している障害児・者と家族を取り巻く社会環境を含めた包括的な社会的リハビリテーションを理解させる効果があった。
	令和3年9月 ～ 現在に至る	「客観的臨床能力演習（理学療法）」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「地域理学療法実習」（専門科目、3年次配当、半期、必須2単位）を担当した。理学療法における臨床能力の演習を体系的に行わせ、学生は本学独自のOSCE bookを用いて自己の演習内容の動画から客観的に自己評価を行わせた。これにより個別性の高い学習を支援するとともに、積極的な演習の取り組みを促す効果があった。
	令和3年9月 ～ 現在に至る	「理学療法評価実習」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「理学療法評価実習」（専門科目、3年次配当、半期、必須3単位）を担当した。臨床実習施設と連携を図り、診療チームの一員として理学療法の経験を積ませ、理学療法評価に基づいたニーズの把握、問題点の設定、治療計画の作成といった一連の理学療法過程の経験学習につながる実習教育を計画、実施した。それによって、学生に理学療法の基本的な評価技術の習得と一連の理学療法過程を理解させる教育効果があった。
	令和4年4月 ～ 現在に至る	「総合臨床実習Ⅰ（理学療法）」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「総合臨床実習Ⅰ（理学療法）」（専門科目、4年次配当、半期、必須8単位）を担当した。臨床実習施設と連携を図り、診療チームの一員として理学療法の経験を積ませ、理学療法の治療の一部の経験を含めた一連の理学療法過程の経験学習につながる実習教育を計画、実施した。それによって、学生に一連の理学療法過程を理解させ、実施能力を向上させる教育効果があった。
	令和4年4月 ～ 現在に至る	「総合臨床実習Ⅱ（理学療法）」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「総合臨床実習Ⅱ（理学療法）」（専門科目、4年次配当、半期、必須8単位）を担当した。臨床実習施設と連携を図り、診療チームの一員として理学療法の経験を積ませ、理学療法の治療経験や管理や各組織との連携を含めた理学療法の経験学習につながる実習教育を計画、実施した。それによって、学生に基礎的な理学療法を広く理解させ、実施能力を向上させる教育効果があった。

事項	年月日	概　　要
	令和4年9月 ～ 現在に至る	「理学療法卒業研究」 奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「専門基礎科目」（専門基礎科目、4年次配当、半期、必須2単位）を担当した。担当ゼミで卒業研究を実施し、卒業研究発表、卒業論文の作成までの一連のプロセスを実施した。それによって、学生に具体的なテーマを選択し、自ら研究する姿勢と能力を養う教育効果があった。 ・令和4年度の卒業論文のタイトル 「短期的な足関節固定による受動トルクの変動に及ぼす柔軟性との関係－性別間の比較による検討－ 」 ・令和5年度の卒業論文のタイトル 「歩行の対称性に及ぼす歩幅と歩行リズムの影響」
	令和4年4月 ～ 現在に至る	「チーム医療論演習」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「専門基礎科目」（専門基礎科目、4年次配当、半期、必須1単位）を担当した。少人数のグループにて医療現場で実施されているチーム医療について、想定される事例・状況にそって患者中心の医療をチームで実践するシミュレーションを展開した。その内容を発表資料としてまとめ、全グループ参加のプレゼンテーションとディスカッションというスタイルで多様な意見が共有できるように授業を行った。それによって、学生に、チーム医療に関わる職種の多さと役割の複雑さを理解させる教育効果があった。また、学生個人が選択予定の専門職のチーム内での役割を再認識させ、専門性を高めるために必要な能力を理解させる教育効果もあった。
	令和5年9月 ～ 現在に至る	「理学療法技術特論」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「理学療法技術特論」（専門科目、4年次配当、半期、必須1単位）を担当した。脳血管障害や神経系障害の理学療法について最先端の知見・技術が理解できるよう基礎的な内容と結び付けられるように授業を行った。それによって、学生に、脳血管障害や神経系障害の理学療法技術を基礎から理解させる教育効果があった。
	令和5年4月 ～ 令和5年8月	「リハビリテーション医学」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「リハビリテーション医学」（専門基礎科目、1年次配当、半期、必須1単位）を担当した。リハビリテーション医学における脳、中枢神経の障害について基礎的な内容を学習し、リハビリテーションが担う役割について理解できるよう授業を行った。それによって、学生に、脳、中枢神経の損傷によって生じる障害とリハビリテーションとの関わりを理解させる教育効果があった
	令和5年4月 ～ 現在に至る	「ラーニングスキルズ」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「理学療法技術特論」（専門科目、4年次配当、半期、必須1単位）を担当した。脳血管障害や神経系障害の理学療法について最先端の知見・技術が理解できるよう基礎的な内容と結び付けられるように授業を行った。それによって、学生に、脳血管障害や神経系障害の理学療法技術を基礎から理解させる教育効果があった。

事項	年月日	概　　要
	令和5年9月 ～ 現在に至る	「人体構造学Ⅲ」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「人体構造学Ⅲ」（専門基礎科目、1年次配当、半期、必須1単位）を担当した。神経系の構造と機能についてスケッチを通した能動的な学習を通した授業を行った。それによって、学生に神経系の基礎的な機能解剖を理解させる教育効果があった。
	令和5年9月 ～ 現在に至る	「理学療法見学実習Ⅰ」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「早期体験実習(理学療法)」（専門科目、1年次配当、半期、必須1単位）を担当した。臨地での見学実習、および学内でのセミナーを通して、理学療法の役割と位置付けを学修させ、他職種の専門性と相互の連携を理解させ、理学療法士への動機付けと学習意欲を高める効果があった。
5)奈良学園大学大学院リハビリテーション学研究科における教育実績	令和5年4月 ～ 現在に至る 令和5年4月 ～ 現在に至る 令和5年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学大学院リハビリテーション学研究科における研究指導教員（講師）として、以下のような科目を担当した。 「研究方法特論」 　奈良学園大学大学院リハビリテーション学研究科の講師として担当の「研究方法特論」（基礎科目、1年次配当、半期、必須2単位）を担当した。修士論文作成に必要なアカデミック・ライティングの基礎を説明し、実践と修正を行う双方向な授業を行った。それによって、学生に、論文の基本構成と、各項目での記載すべき内容を理解させる教育効果があった。 「地域リハビリテーション・ケア学特論」 　奈良学園大学大学院リハビリテーション学研究科の講師として担当の「地域リハビリテーション・ケア学特論」（専門科目、1年次配当、半期、選択2単位）を担当した。地域リハビリテーションに運動機能評価の意義と、運動機能評価の実践と活用に関するディスカッション形式の授業を行った。それによって、学生に、地域リハビリテーションの意義と今後の在り方について考える基盤を理解させる教育効果があった。

事項	年月日	概　　要
6)原著論文の査読	平成28年6月	Journal of Physical Therapy Scienceの原著論文1編の査読を担当した。
	令和元年9月	PLOS ONEの原著論文1編の査読を担当した。
	令和3年8月	PLOS ONEの原著論文1編の査読を担当した。
	令和3年8月 ～ 令和3年11月	総合理学療法学の原著論文1編の査読を担当した。
	令和3年2月	医療福祉情報行動科学研究の原著論文1編の査読を担当した。
	令和4年1月	医療福祉情報行動科学研究の原著論文1編の査読を担当した。
	令和4年3月 ～ 令和4年6月	物理療法科学の原著論文1編の査読を担当した。
7)学術大会演題の査読	平成28年9月	大阪府理学療法士学会三島ブロックの新人症例発表演題2名分の査読担当した。
	平成29年9月	大阪府理学療法士学会三島ブロックの新人症例発表演題3名分の査読担当した。
	令和4年6月	第31回奈良県理学療法士学会の発表5名分の査読を担当した。
	令和4年11月	保健医療学学会第12回学術集会の演題2名分の査読を担当した。
	令和5年4月	第32回奈良県理学療法士学会の発表3名分の査読を担当した。
	令和5年11月	第4回日本物理療法合同学術大会の演題4名分の査読を担当した。

事項	年月日	概　　要
職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 理学療法士	平成19年5月	理学療法士免許登録（第63125号）
修士（保健福祉学）	平成25年3月	県立広島大学　第419号 題名「二重課題訓練の注意に関する指示が姿勢動揺に与える影響」
博士（保健学）	平成28年3月	大阪府立大学　第15号 題名「The effect of tonic contraction of one hand muscle on motor area of tonically contracting another hand muscle 」（訳文：手指筋緊張性収縮が緊張性に収縮する隣接運動野表象へ及ぼす影響）
臨床実習指導者講習会 修了	令和4年6月	臨床実習指導者講習会修了書番号（第2022-746-029号）
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1)東浦平成病院理学療法士	平成21年1月 ～ 平成23年1月	回復期病棟に勤務。 回復期病棟の専従理学療法士として、回復期病棟で個別リハビリテーションを行うリハビリテーション専門職種のリーダーとして、回復期リハビリテーション病棟業務に従事した。リハビリテーションプログラムの検討、退院前の在宅訪問評価、退院先の検討など、理学療法士の視点からチーム医療に携わった。 　個別には脳血管疾患をはじめとする中枢神経疾患患者、整形外科疾患をはじめとする運動器疾患患者や肺炎後や外科的術後の廃用症候群の患者などを対象にした理学療法に従事した。
2)白須整形外科クリニック理学療法士	平成23年1月 ～ 平成25年3月	変形関節症、肩関節周囲炎、人工関節置換術後や腱板断裂術後など多くの運動器疾患患者の理学療法に従事した。また、オスグッドシュラッター病、脊椎分離症など若年者の理学療法も実施した。微弱電流治療器という新奇性のある物理療法の実施も行った。
3)大津病院理学療法士	平成25年4月 ～ 平成27年8月	療養病棟での勤務では、慢性期の整形外科疾患、呼吸器疾患、中枢神経疾患の入院患者への理学療法に従事した。 外来リハビリテーションでの勤務では、脳卒中後で片麻痺のある地域在住高齢者の外来での理学療法に従事した。 在宅訪問サービスでの勤務では、地域在住の片麻痺の方や、神経変性疾患の方の理学療法に従事した。
4)ゆきおかデイケアセンター理学療法士	平成28年4月 ～ 平成31年3月	週に1回程度の頻度で、行岡病院の通所リハビリテーションで個別理学療法に従事した。対象は脳血管疾患、脊髄小脳変性症などの中枢神経疾患、変形性膝関節症、人工膝関節術後、腰椎圧迫骨折などの運動器疾患を背景に持つ地域在住の高齢者である。

事項	年月日	概　　要
5)保健医療学学会第8回学術集会準備運営スタッフ	平成29年12月	保健医療学学会第8回学術集会準備運営スタッフとして学会の準備、運営に従事し、保健医療の発展に努めた。
6)大阪大学大学院医学系研究科脳神経機能再生学特任研究員	平成31年5月 ～ 令和3年3月	週に1回程度の頻度で、大阪大学大学院医学系研究科脳神経機能再生学の特任研究員として臨床研究に従事した。アルツハイマー型認知症や神経障害性疼痛を有する対象者への反復経頭蓋磁器刺激による治療の有効性に関する研究に従事した。
7)日本物理療法研究会評議員	令和3年7月 ～ 令和3年7月	日本物理療法研究会評議員として物理療法の発展と普及のため、研究会の活動に貢献した。
8)日本物理療法研究会理事	令和3年7月 ～ 現在に至る	日本物理療法研究会理事として物理療法の発展と普及のため、研究会の活動に貢献した。
9)保健医療学学会第12回学術集会準備委員	令和4年7月 ～ 令和4年12月	保健医療学学会第12回学術集会準備委員の学術局担当として学会の準備、運営に従事し、保健医療の発展に努めた。
10)第4回日本物理療法合同学術大会準備委員長	令和5年4月 ～ 令和6年2月	第4回日本物理療法合同学術大会準備委員会の準備委員長として学会の準備、運営に従事し、物理療法学の発展に努めた。
11)公益社団法人日本理学療法士協会臨床実習指導者講習会	令和4年9月	第843回臨床実習指導者講習会の報告書作成等の運営に携わった。
	令和5年3月	第1003回臨床実習指導者講習会の講師ならびに世話人として運営に携わった。
	令和5年7月	第1057回臨床実習指導者講習会の司会、報告書作成等の運営に携わった。
	令和6年3月	第1215回臨床実習指導者講習会の司会、報告書作成等の運営に携わった。
12)研究費取得実績	令和元年9月	奈良学園共同研究費助成：学童期から青年期における姿勢の形態学的・運動学的機能面が静的・動的バランス能力に及ぼす影響について-パイロットスタディ（共同研究者-助成額：70万円）
	令和2年6月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成：腱振動刺激中マッチング課題の経時的解析（研究代表者-助成額：22万円）
	令和2年6月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成：創傷被覆材における近赤外線透過率の検証（共同研究者-助成額：22万円）
	令和2年6月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成：リハビリテーション学科臨床実習管理センターにおけるホームページによる双方向性システムの構築-臨床実習教育の質向上を目指して-（共同研究者-助成額：22万円）

事項	年月日	概　　要
	令和3年6月	奈良学園共同研究費助成：ICTを活用した幼児に対するリズムとタイミングを強化する遊びが運動能力に及ぼす効果の検証（共同研究者-助成額：27万円-）
	令和3年6月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成：電子角度計を用いた痙縮評価の定量化の試み（研究代表者-助成額：34万円）
	令和3年6月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成：足関節捻挫既者に対する主観的評価質問票と客観的機能評価との関連（共同研究者-助成額：34万円）
	令和4年7月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成：介護を要する高齢者における見かけの可動域制限の実態調査について（研究代表者-助成額：30万円）
4　その他 1)奈良学園大学ハラスメント防止委員会	令和2年4月 ～ 現在に至る	ハラスメント防止委員としてハラスメント防止の啓発活動、調停活動、相談員マニュアルの改訂などに従事し、ハラスメントの防止に努めた。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） なし				
（学術論文） 1 イメージ能力の差がメンタルプラクティスによる筋力増強効果に与える影響 （査読付）	共著	平成24年11月	運動療法と物理療法 23巻3号 pp.302-307	整形外科疾患、中枢神経疾患、また、高齢や廃用症候群によって重度の筋力低下がみられる対象の運動療法の開発を目的として、健常成人を対象にメンタルプラクティスによる膝伸展筋力増強効果を検証した。メンタルプラクティスは等尺性膝伸展筋力を有意に増強させた。イメージする課題中の脳血流量を、近赤外光脳機能イメージング装置で測定したところ、前頭葉領域の脳活動賦活が確認された。したがって、メンタルプラクティスによる筋力増強効果は、脳活動を賦活させることによる神経性要因による可能性が示唆された。 本人担当部分：研究結果の解釈、特に脳機能に関する部分の考察について部分的に担当。 共著者：谷出康士，金井秀作，城野靖朋，後藤拓也
2 高齢者にみられる浮き趾と足趾運動機能および姿勢制御能力について （査読付）	共著	平成25年3月	理学療法の臨床と研究 22号 pp.15-19	浮き趾と足趾運動機能、姿勢制御能力の関連について検証した。足趾が全て接地している対象と比較し、足趾の接地状態が不良な対象では、Functional reach testの距離および足趾荷重量が低値を示し、Center of foot pressure軌跡の後方偏移を認めた。また、これらの対象では足趾筋力が低値を示し、足趾屈曲が困難であった。したがって、浮き趾を有する高齢者では姿勢制御能力や足部機能が低下している可能性が示唆された。このことは、健常高齢者に限らず、リウマチなどの運動器疾患や痙縮などの中枢神経疾患による足趾変形の理学療法評価と関連する知見である。 本人担当部分：研究結果と姿勢制御能力の関係について考察するなど、考察を部分的に担当。 共著者：長谷川正哉，金井秀作，島谷康司，城野靖朋，島田雅史，大塚彰
3 二重課題訓練の注意に関する指示が姿勢動揺に与える影響 （修士論文）	単著	平成25年3月	県立広島大学	注意機能の低下がみられる中枢神経疾患患者や高齢者の理学療法を想定し、健常成人を対象とした運動課題と認知課題の二重課題干渉効果ならびに、二重課題練習における注意に関する指示の影響を検証した。運動課題と認知課題の二重課題干渉効果によって、運動課題パフォーマンスは向上し、認知課題パフォーマンスは低下することが示唆された。また、二重課題練習時の注意に関する指示は与えず、自由に練習させることで、運動課題パフォーマンスが即時的に向上することが示唆された。 A4判　全25頁

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4 運動課題と認知課題の二重課題干渉効果 （査読付）	共著	平成25年7月	ヘルスプロモーション理学療法研究 3巻2号 pp.47-51	運動課題にタンデム立位保持課題、認知課題にストループ干渉課題を用いて、各課題パフォーマンスが受ける二重課題干渉効果について検証した。二重課題干渉効果でタンデム立位の重心動揺面積は縮小し、ストループ干渉課題の正当数が減少した。したがって、運動課題と認知課題の二重課題干渉効果によって、運動課題のパフォーマンスは向上し、認知課題のパフォーマンスは低下することが示唆された。このことは、注意機能の低下がみられるような高齢者や中枢神経疾患患者にはより顕著に観察される可能性があり、そのような対象者の理学療法評価で二重課題の干渉を考慮する必要性を示している。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、結果の分析、論文作成、論文投稿に至るまでを中心的に担当。 共著者：城野靖朋，金井秀作，後藤拓也，原田亮，藤高祐太，谷出康士，長谷川正哉，大塚彰
5 二重課題練習における注意の指示の影響 （査読付）	共著	平成25年8月	理学療法科学 28巻4号 pp.533-537	中枢神経障害や加齢の影響によって注意機能が低下している患者への理学療法では、効率的に運動学習が達成されるための注意の操作は重要な問題である。そこで健常成人を対象に、二重課題練習における注意に関する指示方略の影響を検証した。二重課題練習時に注意の指示を与えない方略による練習で、二重課題の運動課題パフォーマンス、高難易度運動課題パフォーマンスが即時的に向上した。したがって、二重課題練習時の注意に関する指示は与えず、自由に練習させることで、運動課題パフォーマンスが即時的に向上することが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、論文作成、結果の分析、論文投稿に至るまでを中心的に担当。 共著者：城野靖朋，金井秀作，後藤拓也，原田亮，藤高祐太，谷出康士，長谷川正哉，大塚彰
6 Different corticospinal control between discrete and rhythmic movement of the ankle. （査読付） （足関節背屈の単発運動とリズミカル運動との間における皮質脊髄制御の違い）	共著	平成26年7月	Frontiers in Human Neuroscience Vol. 8 article.578 （訳文：フロンティアイン　ヒューマンニューロサイエンス）	中枢神経障害や運動器障害によって生じる歩行障害の理学療法では連続的な歩行練習と分節的な歩行練習とが行われる。そこでこれらの違いを神経生理学的に明らかにするため、リズミカルな足関節底背屈運動と、1回の足関節底背屈運動における皮質脊髄制御ならびに脊髄制御の違いを検証した。その結果、前脛骨筋の運動誘発電位が、リズミカルな運動の後期で有意に大きかった。このことから、リズミカルな運動の初期と後期で皮質脊髄制御が異なる可能性が示唆された。この結論は、理学療法における歩行練習が連続的もしくは分節的に行うかによって、皮質脊髄制御のレベルで違いがあることを示している。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。運動誘発電位とH反射の結果から，神経的な制御機構に関する考察を行った。 共著者：Goto Y.（後藤夢野），Jono Y.（城野靖朋），Hatanaka R.（畑中良太），Nomura Y.（野村佳史），Tani K.（谷恵介），Chujo Y.（中條雄太），Hiraoka K.（平岡浩一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7 Bimanual coordination of force enhances interhemispheric inhibition between the primary motor cortices. （査読付） （両手間force協調が一次運動野の半球間抑制を強化）	共著	平成26年10月	NeuroReport Vol. 25(15) pp.1203-1207 （訳文：ニューロレポート）	一次運動野の半球間抑制は、中枢神経障害による運動麻痺に影響を及ぼしていると考えられている。その半球間抑制が運動制御に及ぼす影響を明らかにするため、Forceの両手協調が、一次運動野の半球間抑制に与える影響を神経生理学的に検証した。左右の示指外転運動による両側間force調整が不要な課題と比較して、両側間force調整が必要な課題で半球間抑制が増大した。したがって、両側間でforceを調整する運動の協調において一次運動野の活動が抑制されることを示唆した。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察を部分的に担当。 共著者：Hiraoka K.（平岡浩一），Ae M.（阿江実乃里），Ogura N.（小倉奈々），Sano C.（佐野千紗），Shiomi K.（塩見啓悟），Morita Y.（森田祐司），Yokoyama H.（横山遥香），Jono Y.（城野靖朋），Nomura Y.（野村佳史），Tani K.（谷恵介），Chujo Y.（中條雄太）
8 Asymmetry of anticipatory postural adjustment during gait initiation. （査読付） （歩行開始時の予測的姿勢制御の非対称性）	共著	平成26年10月	Journal of Human Kinetics Vol.42 pp.7-14 （訳文：ジャーナルオブ　ヒューマンキネティクス）	歩行開始時の重心移動は、まず歩行を開始する足側かつ後方へ重心が移動する。これは予測的姿勢制御を反映しているが、パーキンソン病患者の外的合図による歩行開始では、歩行開始足と反対側に最初の重心移動が生じることが多くなる（予測的姿勢制御の誤り）。そこで、歩行開始足の選択プロセスの違いが、歩行開始時の予測的姿勢制御の非対称性へ与える影響を運動学的に検証した。外的な合図による歩行開始時の重心移動は、歩行開始足が右足や自由に選択した足よりも左足の場合に有意に側方へ変移した。本研究結果は外的合図による歩行開始時の予測的姿勢制御の左右非対称性を示唆する。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。結果の解釈、考察を部分ではパーキンソン病のすくみ足に関して臨床的観点から議論を行った。 共著者：Hiraoka K.（平岡浩一），Hatanaka R.（畑中良太），Nikaido Y.（二階堂泰隆），Jono Y.（城野靖朋），Nomura Y.（野村佳史），Tani K.（谷恵介），Chujyo Y.（中條雄太）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
9 The effect of tonic contraction of the finger muscle on the motor cortical representation of the contracting adjacent muscle. （査読付） （手指筋緊張性収縮が収縮中の隣接手指筋運動野表象に与える影響）	共著	平成27年4月	Somatosensory & Motor Research Vol.32(2) pp.114-121 （訳文：ソーマトセンソリー　アンド　モーターリサーチ）	中枢神経疾患の運動障害である共同運動は、活動を意図していない筋に隣接する筋活動からの影響が及んでいる。そこで、隣接筋間の活動の関係性を明らかにするため、手指筋支配運動野表象に隣接手指筋活動が与える影響を神経生理学的に観察した。隣接筋活動の影響により興奮性の重心が運動野内側へ偏移した。隣接筋運動野表象との重複表象の興奮性は変化しなかったが、非重複表象の興奮性は抑制された。非重複表象は重複表象よりも外側に位置していた。したがって、隣接筋活動は非重複表象の興奮性を抑制し、興奮性の重心を偏移させることが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、論文作成、論文投稿に至るまでを中心的に担当。 共著者：Jono Y.（城野靖朋），Chujo Y.（中條雄太），Nomura Y.（野村佳史），Tani K.（谷恵介），Nikaido Y.（二階堂泰隆），Hatanaka R.（畑中良太），Hiraoka K.（平岡浩一）
10 Monaural auditory cue affects the process of choosing the initial swing leg in gait initiation. （査読付） （モノラルな音刺激が歩行開始足の選択過程に与える影響）	共著	平成27年4月	Journal of Motor Behavior Vol.47(6) pp.522-526 （訳文：ジャーナルオブ　モータービヘイバー）	すくみ足のみられるパーキンソン病患者では、歩行開始足の左右の選択にばらつきが生じる。また、音信号は歩行開始時の反応時間や歩幅、予測的姿勢制御などに影響を与えることが知られている。そこで歩行開始足の選択に音信号が与える影響を検証した。開始足に選択しにくい足側からの音信号は、開始足に選択しにくい足を開始足に選択する確率を増大させた。しかし、常時同側から音信号与える実験では、開始足に選択しにくい足を選択する確率を増大させなかった。したがって、選択しにくい足側への音信号は、それが予測できない場合に、選択しやすい足を選択する優先性を弱めることが示唆された。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案部分ではパーキンソン病のすくみ足に関して臨床的観点から議論を行った。 共著者：Hiraoka K.（平岡浩一），Ae M.（阿江実乃里），Ogura N.（小倉奈々），Sano C.（佐野千紗），Shiomi K.（塩見啓悟），Morita Y.（森田祐司），Yokoyama H.（横山遥香），Iwata Y.（岩田泰幸），Jono Y.（城野靖朋），Nomura Y.（野村佳史），Tani K.（谷恵介），Chujo Y.（中條雄太）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
11 不安定面での姿勢制御能力が地域在住高齢者の転倒に及ぼす影響―不安定面での重心動揺検査における検証― （査読付）	共著	平成27年7月	ヘルスプロモーション理学療法研究 5巻2号， pp.75-79	地域在住高齢者の不安定面での姿勢制御能力が転倒にどう影響するかを運動学的に検証した。過去1年間の転倒歴から転倒群と非転倒群とを分類し、ラバー負荷使用による姿勢制御能力を比較した。その結果、重心動揺面積ならびに軌跡長に有意な差は認められなかったが、ラバー負荷時のロンベルク率で、非転倒群で高値だった。したがって、転倒群の姿勢制御は非転倒群と比べ下肢の体性感覚への依存が少ない可能性が示唆された。このことは地域在住高齢者に対する理学療法のみならず、健康増進、予防理学療法にとって重要な知見である。 本人担当部分：研究結果の解釈、考察の姿勢制御に関する議論を行い、部分的に担当。 共著者：藤高祐太，金井秀作，原田亮，後藤拓也，城野靖朋，田中聡，大塚彰
12 Corticospinal Excitability in the Hand Muscles is Decreased During Eye Movement with Visual Occlusion. （査読付） （視覚遮断下での眼球運動による手内在筋皮質脊髄興奮性の減少）	共著	平成28年2月	Perceptual and motor skills Vol.122(1) pp.238-255 （訳文：パーセプチャル　アンド　モータースキルス）	眼と手の協調的な運動制御を神経生理学的に明らかにするため、眼球運動命令が手指筋支配皮質脊髄路興奮性に及ぼす影響を検証した。眼球運動前と比較して、眼球運動開始から終了を4分割した第3相の手指筋支配皮質脊髄路興奮性が有意に減少した。筋の違い、眼球運動方向および筋が収縮した場合の指運動方向に影響を受けなかった。したがって、眼球運動命令が手指筋への運動命令を生成しなかった。また、抑制は前腕肢位の影響を受けなかったため、視覚的フィードバックが存在しないときに前腕筋の固有受容によって抑制が影響されなかったことを示した。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共著者：Chujyo Y.（中條雄太），Jono Y.（城野靖朋），Tani K.（谷恵介），Nomura Y.（野村佳史），Hiraoka K.（平岡浩一）
13 Corticospinal modulations during bimanual movement with different relative phases （査読付） （異なる相対位相の両側運動中における皮質脊髄変調）	共著	平成28年3月	Frontiers in human neuroscience Vol.10 Artikle.95 （訳文：フロンティアイン　ヒューマンニューロサイエンス）	相対位相の異なる両側性運動を用いて皮質脊髄調整による運動制御への影響を神経生理学的に調べた。難易度の高い相対位相の両側性運動中の皮質脊髄興奮性が高かった。このことは、課題の難易度、半球間相互作用の関与、または運動課題を習得するために費やされる労力が大きいことに起因する可能性がある。また、難易度の高い相対位相の両側性運動中の背景筋活動に対する皮質脊髄興奮性の依存性は低かった。このことは、難易度の高い相対位相の両側性運動に対する皮質脊髄の寄与の小ささを反映し得る。この知見は、両手を用いて行う日常生活動作の難易度によって神経系の関与が異なることも示している。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共著者：Nomura Y.（野村佳史），Jono Y.（城野靖朋），Tani K.（谷恵介），Chujyo Y.（中條雄太），Hiraoka K.（平岡浩一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14 The effect of tonic contraction of one hand muscle on motor area of tonically contracting another hand muscle （博士論文） （手指筋緊張性収縮が緊張性に収縮する隣接筋運動野表象へ及ぼす影響）	単著	平成28年3月	大阪府立大学	隣接する手指筋緊張性収縮が、運動野の興奮性および抑制性に及ぼす影響について検証した。第1実験では、隣接筋活動により運動野興奮性分布が運動野の内側へ偏移した。第2実験では、独立性の高い運動に関連する筋の運動野表象の外側が、独立性の低い運動に関連する筋活動によって興奮性が抑制し、抑制性は脱抑制した。したがって、隣接する手指筋緊張性収縮の影響は筋特異的かつ領域特異的であることが示唆された。このことは、中枢神経障害による運動麻痺のパターンの特徴を電気生理学的に示すことに発展する可能性がある。 A4判　全42頁
15 Time and direction preparation of the long latency stretch reflex （査読付） （長潜時反射の時間と方向の準備）	共著	平成28年6月	Human movement science Vol.47 pp.38-48 （訳文：ヒューマンムーブメント　サイエンス）	運動制御に影響を与える予測、反射、感覚情報といった因子が、外力に対して指の位置を保とうとする際の運動反応の潜時へどのような影響を与えるかを神経生理学的に検証した。長潜時の伸張反射は外力の方向に関わらず誘引されたことから、筋伸張の感覚情報だけでなく、運動方向に関係のない感覚情報によっても誘引されることが示唆された。どちらの外力方向に対しても運動反応の時間予測は長潜時伸張反射を促通した。この変調は筋の伸長に媒介されないと考えられる。また、運動反応の方向予測は、その方向に筋が伸長された場合に長潜時伸張反射と皮質脊髄興奮性を促通した。したがって、これらの変調は脊髄反射に媒介されていると考えられる. 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共著者：Nikaido Y.（二階堂泰隆），Hatanaka R.（畑中良太），Jono Y.（城野靖朋），Nomura Y.（野村佳史），Tani K.（谷恵介），Chujyo Y.（中條雄太），Hiraoka K.（平岡浩一）
16 The Effect of Monaural Auditory Stimulus on Hand Selection When Reaching （査読付） （モノラルな音刺激がリーチ動作における手の選択へ及ぼす影響）	共著	平成28年8月	Motor control pp.1-23 （訳文：モーターコントロール）	標的物へのリーチ動作に左右どちらの手を選択するかの運動プロセスは、聴覚的な情報処理に関わる脳機能が関係していると推察し、モノラルな聴覚刺激が手選択に及ぼす影響について検証した。右耳への聴覚刺激は右手選択を増大させ、左耳への聴覚刺激は左手選択をわずかに増大させた。手選択が左右均等になる水平視線角度は、右聴覚入力の影響を受けて有意に左へ偏移したが、左聴覚入力の影響を受けなかった。したがって、手選択に対する右聴覚刺激が有意となる効果は、手選択の皮質活動の左右非対称性を示唆する。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共著者：Tani K.（谷恵介），Jono Y.（城野靖朋），Nomura Y.（野村佳史），Chujyo Y.（中條雄太），Hiraoka K.（平岡浩一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
17 Interhemispheric inhibition induced by transcranial magnetic stimulation over primary sensory cortex （査読付） （一次感覚野への経頭蓋磁器刺激による半球間抑制）	共著	平成28年8月	Frontiers in human neuroscience Vol.10 Artikle.438 （訳文：フロンティアイン　ヒューマンニューロサイエンス）	中枢神経障害による運動麻痺に影響を及ぼしていると考えられている半球間抑制は、一次運動野だけでなく一次感覚野においても観察されている。一次感覚野を経頭蓋磁気刺激することによる長潜時半球間抑制が触覚入力によって調節されるのか、この抑制が一次運動野を刺激することによって生じる抑制と異なるのかを神経生理学的に検証した。一次感覚野を刺激することによる長潜時半球間抑制は、対側示指への皮膚刺激による体性感覚求心性入力が一次感覚野に到達するタイミングで促通した。一次運動野を刺激することによる長潜時半球間抑制は、指刺激の影響を受けなかった。したがって、一次感覚野を刺激することによる長潜時半球間抑制は、体性感覚経路の活動と関連することが考えられ、また、一次運動野を刺激することによる抑制と異なることが示唆された。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共著者：Iwata Y.（岩田恭幸），Jono Y.（城野靖朋），Mizusawa H.（水澤裕貴），Kinoshita A.（木下篤），Hiraoka K.（平岡浩一）
18　地域在住高齢者における三次元複数対象追跡課題のトレーニング効果の検証 （査読付）	共著	平成28年10月	理学療法科学 31巻5号 pp.729-732	脳卒中やパーキンソン病などの既往のある方を含む地域在住高齢者を対象に、三次元複数物体追跡課題のトレーニング効果を検証した。トレーニング介入群ではTrail Making Test part Aが介入後に有意に短くなった。介入群においてTrail Making Test part AとTimed Up and Go Testの変化比率の間に有意な正の相関が認められた。地域在住高齢者に対する三次元複数物体追跡課題のトレーニング効果は注意機能および動的バランス能力の向上が期待でき、新しい運動療法として可能性があるだけでなく、健康増進や転倒予防といった予防理学療法に有効であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、論文作成、論文投稿に至るまでを中心的に担当。 共著者：城野靖朋，辻下守弘
19 Change in excitability of corticospinal pathway and GABA-Mediated inhibitory circuits of primary motor cortex induced by contraction of adjacent hand muscle （査読付） （隣接する手指筋収縮による皮質脊髄の興奮性回路とGABAが介在する抑制性回路の興奮性変化）	共著	平成28年11月	Brain Topography Vol.29(6) pp.834-846 （訳文：ブレイン　トポグラフィー）	隣接する複数の筋活動の協調性が障害されるような脳卒中後の運動障害には，運動系の興奮性や抑制性の問題が影響していると考えられる。そこで本研究では，隣接する手指筋緊張性収縮が運動野の興奮性および抑制性に及ぼす影響について神経生理学的に検証した。小指外転筋活動の影響によって、運動野外側に位置する小指外転筋の運動野表象周辺の第1背側骨間筋の運動野表象で興奮性が減少し、抑制性は脱抑制した。このことから共同的な示指と小指の運動において、独立性の高い運動に関連する筋が独立性の低い運動に関連する筋の活動の影響を受けることを示唆した。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施，論文作成，論文投稿に至るまでを中心的に担当。 共著者：Jono Y.（城野靖朋），Iwata Y.（岩田恭幸），Mizusawa H.（水澤裕貴），Hiraoka K.（平岡浩一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
20 Processes of anticipatory postural adjustment and step movement of gait initiation（査読付） （歩行開始のステップ動作と予測的姿勢制御の調整過程）	共著	平成29年4月	Human movement science Vol.52 pp.1-16 （訳文：ヒューマンムーブメント　サイエンス）	歩行開始の予測的姿勢調整（APA）とステップ動作のプロセス間の相互作用を検証した。APAは歩行開始前の圧力中心の変移の第1相（S1）で観察した。S1は振出下肢変更あるいは歩行開始動作を中止した場合でも出現し、歩行のAPAとステップ動作は二重プロセスであることが示唆された。S1の側方振幅と持続時間が、振出下肢変更あるいは動作中止により有意に減少した。歩行開始動作の中止プロセスと振出下肢変更はAPAに対して共通の抑制メカニズムを共有している可能性がある。歩行開始の運動プロセスは、すくみ足のあるパーキンソン病患者で障害されていると考えられており、歩行開始の運動プロセスの解明は、パーキンソン病患者に限らず神経系障害患者の理学療法評価につながる知見である。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案部分ではパーキンソン病のすくみ足に関して臨床的観点から議論を行った。 共著者：Mizusawa H.（水澤裕貴），Jono Y.（城野靖朋），Iwata Y.（岩田恭幸），Kinoshita A.（木下篤），Hiraoka K.（平岡浩一）
21 眼球運動が立位姿勢制御へ及ぼす影響 （査読付）	共著	平成29年4月	理学療法科学 32巻2号 pp.211-214	眼球運動が立位姿勢制御に及ぼす影響を運動学的に検証した。衝動性眼球運動を選択反応課題で行わせた条件の重心動揺総軌跡長は、衝動性眼球運動を単純反応課題で行わせた条件と比較して有意に小さかった。また、滑動性眼球運動を行わせた条件の重心動揺総軌跡長と外周面積は、衝動性眼球運動を選択および単純反応課題で行わせた条件よりも有意に大きかった。したがって、眼球運動による立位姿勢動揺への影響は、眼球運動の反応課題の違いよりも、眼球運動制御の違いによる影響を反映したものと考えられる. 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施，論文作成，論文投稿に至るまでを中心的に担当。 共著者：城野靖朋，金井秀作
22 大腿四頭筋の運動錯覚を惹起する振動刺激周波数の再現性についての検討 （査読なし）	共著	平成30年3月	大阪行岡医療大学紀要 5号 pp.23-27	大腿四頭筋の運動錯覚を惹起する振動刺激周波数の再現性について検証した。Visual Analog Scaleを用いて50Hz、70Hz、90Hz、120Hzのそれぞれの周波数の振動刺激による運動錯覚の程度を1週間以上の間隔をあけて2回評価した。90Hzの周波数にのみ2回の評価間に有意な正の相関がみられた。また、2回の評価間の誤差の種類はすべての周波数で偶然誤差であった。本研究結果より、90Hzの周波数による振動刺激は大腿四頭筋の運動錯覚を惹起させる方法として有用であることが明らかになった。 本人担当部分：研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共著者：神里巌，城野靖朋，粕渕賢志

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
23 異なる負荷値における足関節背屈可動域測定の信頼性 （査読なし）	共著	平成30年3月	大阪行岡医療大学紀要 5号 pp.19-22	低い負荷での足関節背屈可動域測定の信頼性を明らかにする目的で、異なる負荷値における足関節背屈可動域測定の信頼性を検証した。本研究では同一検者による2回の測定を実施した。本研究で用いた25N、50N、75N、100Nすべての負荷におい誤差は偶然誤差で、誤差の範囲は2.74°から3.79°の範囲であった。本研究結果から、負荷値を統一した足関節背屈可動域測定では、低い負荷であっても4°未満の偶然誤差で評価できることが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、論文作成、論文投稿に至るまでを中心的に担当。 共著者：城野靖朋，神里巌，岡村和典，金井秀作，大塚彰
24 足部内在筋トレーニングの学習における随意運動介助型電気刺激装置の効果　内在筋および外在筋の筋活動からの検討 （査読付）	共著	平成30年10月	物理療法科学 25巻 pp.27-33	本研究ではShort Foot exercise(以下、SFex)の習得を促進する目的で随意運動介助型電気刺激装置(以下、IVES)を利用することの有効性を検討した。その結果、IVESを利用するSFexが、足部外在筋による代償を増加させることなく、従来の方法以上にSFex中の母趾外転筋の筋活動を増加させた。このことから、IVESの利用がSFexの習得の促進に有効であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共著者：岡村和典，城野靖朋，山本征孝，江川晃平，金井秀作
25 The influence of muscular activities in a squat with hands on a table for ″locomotion training″ (テーブルを用いたスクワットによるロコモーショントレーニングが筋活動に与える影響) （査読付）	共著	平成31年3月	人間と科学：県立広島大学保健福祉学部誌 19巻1号 pp.49-53	椅子上の座位からテーブルに手を添えたスクワット(HOTS)をした際の筋活動を、通常の立位スクワット(SPS)と比較した。HOTSではテーブルの高さを変えた高位HOTSと低位HOTSの2種類で測定した。その結果、大腿直筋、内側広筋および半腱様筋に関しては、SPSによる筋活動の方が高位HOTSよりも有意に大きかった。これらより、下肢筋の筋活動はテーブルを用いたスクワットが通常のスクワットより必ずしも有意に減少するわけでは無いことが明らかとなり、テーブルの高さを調節することで、効果的で安全なスクワットができることが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 論文作成，論文投稿に至るまでを中心的に担当。 共著者：金井秀作，池上あゆみ，岡村和典，城野靖朋，大塚彰

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
26 前腕マッチング課題の信頼性―自作装置による予備的研究― （査読なし）	共著	平成31年3月	大阪行岡医療大学紀要 6号 pp. 11-16	本研究では自作の前腕マッチング課題装置を用いた位置覚評価システムの信頼性を検討し、適切な実験プロトコルを提案することを目的とし、肘関節の屈曲課題と伸展課題においてマッチング課題の信頼性を検討した。その結果、マッチング課題には偶然誤差が認められた。信頼性が優秀となるには屈曲課題で10回、伸展課題で7回の計測が必要であることが示された。これらより、本システムによる位置覚の計測は10回以上の計測が必要であることが示された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、論文作成、論文投稿に至るまでを中心的に担当。 共著者：城野靖朋，神里巌
27 理学療法士の経験学習プロセスの解明に向けて―経験学習研究における理論的枠組みと課題― （査読なし）	共著	平成31年3月	大阪行岡医療大学紀要 6号 pp. 23-33	理学療法士の経験学習プロセスの解明と支援方法の開発に向けて、これまで多くの専門職の経験学習プロセスを明らかにしてきた松尾による経験学習研究の理論的枠組みを要約するとともに、それらによって解明された看護師と保健師の経験学習プロセスについて要約した。これらを踏まえ、我々が計画している理学療法士の経験学習プロセスの解明に向けた研究的枠組みに関する課題を考察した。 本人担当部分：理学療法士の経験学習プロセスの解明に向けた研究的枠組みに関する課題の考察に関して、部分的に担当。 共同発表者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子
28 本学保健医療学部リハビリテーション学科志望経緯に関する調査 （査読なし）	共著	令和2年12月	奈良学園大学紀要学紀要 第13集 pp. 151-157	本調査では2020年度新入生の志望経緯および本学に対する印象等についてアンケート調査を行った。その結果、理学療法・作業療法いずれの専攻についても、多くの学生は当初の志望を中途変更することはなかった。一方で、中途で変更する学生においては、自身の経験や自身の適性についての内省、さらに作業療法学専攻については、特徴的な技術に魅力を感じたことが契機となっていた。入学前の本学選択においては設備、環境面を魅力と感じており、入学後は教員や教育の質について肯定的な意見が多いことが分かった。 本人担当部分：アンケート内容の作成、結果のまとめ、解釈を部分的に担当。 共著者：飯塚照史，辻下守弘，池田耕二，城野靖朋，中島大貴

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
29 理学療法臨床実習・現場教育を支援する教育的工夫と配慮 （査読なし）	共著	令和2年12月	奈良学園大学紀要学紀要 第13集 pp.1-8	本稿では、臨床実習と現場教育における教育目標の共有、現場のストレスへの認識、チームの形成、感情労働、経験資本の視点から、学生や新人理学療法士の自律性を育成するための教育的工夫や配慮を提案した。現在、日本では理学療法教育や人材育成に関する検討が進んでおり、有効な取り組みやエビデンスの構築が行われている。理学療法専門教育や人材育成は重要な課題であり、今後ますます注目されると考えられる。 本人担当部分：本稿の計画段階、本文の作成過程全般にわたり部分的に担当。 共著者：池田耕二，田坂厚志，城野靖朋
30 理学療法士の経験学習プロセスの解明と支援方法の開発に向けた探索的研究－ 熟達理学療法士の成長を促す経験とそこから得る知識や教訓等－ （査読付）	共著	令和3年2月	理学療法 1号48巻 pp.19-28	本研究では熟達理学療法士の経験学習プロセスから成長を促す経験と学習内容を明らかにし、そこから理学療法士に対する経験学習支援方法を示唆することを目的とした。熟達理学療法士3名を対象に質的研究の手法と経験学習プロセス解明の枠組みを用いた。熟達理学療法士はキャリアの初期に人とのかかわりや社会・生活に対する実感を、初期～中期に医療の厳しさや基本的理学療法技術の有効性を、中期～後期に自己内省による知識・技術の整理やコミュニケーションを学習していた。このような学習を促す経験を積ませることが、理学療法士の経験学習支援につながると考えられる。 本人担当部分：研究結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共著者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子
31 Common motor drive triggers response of prime movers when two fingers simultaneously respond to a cue （査読付） （刺激に反応する2本指の同時反応における主動作筋への共通運動命令）	共著	令和3年5月	Brain Sciences Vol.11(6) Article.700 （訳文：ブレイン　サイエンス）	本研究では指運動の実行過程が、異なる指運動に受ける影響を調べた。本研究から外転の反応時間は、屈曲よりも有意に長く、指の反応の運動実行にかかる時間が運動方向に依存していることが示された。また、反応時間の長い外転運動は異なる指運動の反応時間を延長した。これにより、指運動の反応時間は2本同時に運動することで差が小さくなった。これらの結果は、2本の指が一緒に動いたときに、共通の運動命令が運動を誘発していることを示唆する。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施，論文作成，論文投稿に至るまでを中心的に担当。 共著者：Jono Y.（城野靖朋），Iwata Y.（岩田恭幸），Kinoshita A.（木下篤），Hiraoka K.（平岡浩一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
32 2021 年度リハビリテーション学科新入生における志望経緯に関する調査	共著	令和3年12月	奈良学園大学紀要学紀要 第14集 pp.1-6	学部設置3年目を迎えたリハビリテーション学科においては、定員充足率増加に伴い新入生の進学経緯も多様になっているものと考えられる。そこで本調査では、3期生においてアンケート調査を実施し、2期生との比較を通じてその傾 向について比較検討した。結果、当初における職業選択は変更されることなく、近しい人物への相談を伴ったオー プンキャンパスへの参加、加えて本学近隣環境等への好感を以て進学を決定している経緯があり、 2期生との大き な変化はなかった。一方で、プレゼンスの高まり、教員対応への肯定的意見と捉えられる側面もあり、本学魅力の一端として認識する必要性が示唆された。以上の結果は、今後の広報戦略に資するものであると考えられた。 本人担当部分：アンケート作成や調査に関して部分的に担当。 共著者：飯塚照史，辻下守弘，池田耕二，城野靖朋，中島大貴
33 荷重量と下肢アライメントを規定した足部内側縦アーチ測定法の信頼性（査読付）	共著	令和4年3月	医療福祉情報行動科学研究 第9巻 pp.47-54	成人男性3名6足とし、90%荷重時と10%荷重時の2条件において，MLAを測定し級内相関係数を算出した。また，Bland-Altman分析によって系統誤差の有無を検証した。さらに，高い信頼性を確保するためにはICC≧0.7を満たすことが必要とされているが、その測定回数をSpearman-Brownの公式を用いて算出し，ICC（1，k）を求めた。Bland-Altman分析の結果，系統誤差は認められなかったことから，本測定法の測定値に含まれる誤差は，偶然誤差のみであり，測定を繰り返すことで高い信頼性を期待できることが分かった。また、本測定法は6回繰り返し測定を行うことで，信頼性の高い測定方法となることが分かった。 本人担当部分：研究データの記録，データ解析を部分的に担当。 共著者：野田優希，城野靖朋，藤田信子，橋本雅至

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
34 Work beliefs and experiential learning among proficient physical therapists in Japan: developing a method to support belief formation （査読付） （日本における熟練理学療法士の仕事観と経験学習：信念形成を支援する方法の開発）	共著	令和4年4月	Journal of Physical Therapy Science Vol.34(4) pp.262-268 （訳文：ジャーナルオブフィジカルセラピーサイエンス）	本研究では、日本の理学療法士における仕事に関する信念の内容を明らかにすることを目的とした。参加者は、2017年10月から2019年3月にかけてアンケート調査に参加した50人の理学療法士であり、日常の仕事に関する考えや価値観、理想などを自由に記述するように求められた。これらの内容はコーディングとカテゴリー分類が行われ、階層的クラスター分析（ワード法）が、熟練した理学療法士の個人と信念のカテゴリーを変数として行われた。すべての信念カテゴリーは3つのグループに分類された。これらの3つの仕事に関する信念の理解は、理学療法士のサポートや成長を促進する上で重要です。熟練した理学療法士の持つ3つの仕事に関する信念をさらに明らかにし、その教育効果を検証することを推奨する。 本人担当部分：アンケート調査の準備と実施、データ分析、論文作成を部分的に担当。 共著者：Ikeda K.（池田耕二），Tasaka A.（田坂厚志），Kasubuchi K.（粕渕賢志），Jono Y.（城野靖朋），Matsuda J.（松田淳子）
35 Randomized, sham-controlled, clinical trial of repetitive transcranial magnetic stimulation for patients with Alzheimer’s dementia in Japan （査読付） （日本におけるアルツハイマー型認知症患者に対する反復経頭蓋磁気刺激の無作為化偽薬対照臨床試験）	共著	令和4年10月	Frontiers in Aging Neuroscience Article.14 （訳文：フロンティアインエイジングニューロサイエンス）	本研究では日本人アルツハイマー病患者40名を対象とし、4週間の反復経頭蓋磁気刺激（rTMS）の有効性と安全性を検討した。40人の患者をランダムにrTMS の強度120% Resting Motor threshold（120% RMT）、90%RMT、それと偽刺激とに割り付けた。Alzheimer’s Disease Assessment Scale-Japanese Cognitive（ADAS-J cog)の3点以上の改善は、120%RMT群では41.7%、Sham群では0%で有意な差があった。Montreal Cognitive Assessment（MoCA-J)も同様の傾向を示したが、有意差はなかった。ADAS-cogとMoCA-Jに基づくと、有効性は20週目に消失した。介入に関連する重篤な有害事象は発生しなかった。以上のことより、本治療法は安全であり、120%RMT rTMSを用いた重要な臨床試験のターゲットは中等症～軽症のアルツハイマー病患者であると思われる。 本人担当部分：主として研究データの記録を担当。 共著者：Saitoh Y.（齋藤洋一）,Hosomi K.（細見晃一）,Mano T.（眞野智生）Takeya Y.（竹屋泰）,Tagami S.（田上真次）,Mori N.（森信彦）,Matsugi A.（松木明好）,Jono Y.（城野靖朋）,Harada H.（原田秀明）,Yamada T.（山田知美）,Miyake A.（三宅顕光）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
36 The relationship between body sway patterns and motor and attentional functions in early childhood （査読付） （幼児期における身体動揺パターンと運動・注意機能の関係）	共著	令和5年2月	Journal of Physical Therapy Science Vol.35 pp.121-127 （訳文：ジャーナルオブフィジカルセラピーサイエンス）	幼少期の体の揺れパターンと運動・注意機能の関係を調査し、4つのパターンに分類しました。身体運動能力テストとインタラクティブメトロノーム（IM）課題との関連を検討し、揺れパターンが幼少期の運動・注意機能の指標となるかを明らかにしました。参加者は24人の男児と26人の女児で、平均年齢は2,148.1±103.7日でした。結果から、揺れパターンは運動機能とわずかに関連していることが示されました。ただし、前後方向の揺れパターンを持つ参加者は、他のパターンを持つ参加者と比較して、タスク平均とSR0%が低く、タイミングや注意機能が低下していることがわかりました。これらの結果から、前後方向の揺れは6歳などの子どもの体の揺れを測定する際に、注意機能を反映する可能性があると示唆されました。 本人担当部分：データ記録の実施、データ分析、論文作成を部分的に担当。 共著者：Tsujishita S.（辻下聡馬）,Jono Y.（城野靖朋）,Tsujishita M（辻下守弘）
37 施設の種類に対応した臨床参加型実習モデルの提案 一施設の特徴を活かした経験の積ませ方一	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要学紀要 第14集 pp.1-14	本稿では、臨床実習が行われる施設を医療施設と介護施設、訪問リハビリテーションに大別しながら、各施設の理学療法の特徴や役割を整理し、臨床実習の内容や方向性を確認した。次に、学生に対する経験の積ませ方を考慮しながら、各施設における臨床参加型実習モデルを構築し、併せて臨床実習におけるキーポイントを提示した。 本人担当部分：本稿の計画段階、本文の作成過程全般にわたり部分的に担当。 共著者：池田耕二，滝本幸治，城野靖朋，吉川義之，野田優希，野中紘士，辻下守弘
38 理学療法士を育む［場］づくりの着想に関する一考察	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要学紀要 第15集 pp.15-20	本稿では、現在の理学療法士の現場教育や人材育成の課題と限界を提示し、理学療法士育成システムにおける新 たな枠組みの必要性を指摘する。筆者らが着想する新たな枠組みとは、理学療法士の発達や成長を後押しする“理 学療法士を育む【場】づくり”である。これは理学療法士の経験学習が促進されやすい【場】（雰囲気や組織風土からなる空間）をつくりあげるというものである。しかし、現在、理学療法士の経験学習を促す【場】の特性や、それを成立させるための条件は明らかになっていない。これらを解明することができれば、理学療法士を育む【場】づくりが可能となり、現場教育や人材育成に貢献できると考える。本枠組みの実現可能性は十分あり、これからの 現場教育、人材育成の課題の一つとなる。 本人担当部分：本稿の計画段階、本文の作成過程全般にわたり部分的に担当。 共著者：池田耕二，田坂厚志，城野靖朋，吉川義之，野田優希

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
39 慣性センサによる片脚連続ホッピング時のReactive Strength Indexの妥当性と信頼性 （査読付）	共著	令和5年10月	理学療法科学 39巻1号 pp.6-11	本研究では慣性センサを用いた片脚連続ホッピング（OLCH）時の筋反応指数（RSI）測定の妥当性と信頼性を検証することとした。対象は健常成人7名とし、フォースプレートと慣性センサを同期させて、OLCH時のRSIを解析した。フォースプレートで測定したRSI（RSI-fp）をゴールドスタンダードとし、慣性センサで得られたRSI（RSI-IMU）を独自の3つの基準を用いて解析した。その結果、自由落下の重力加速度（OG）を基準としたRSI-OGは、RSI-fpと有意な正の相関を認めたが、系統誤差が認められた。RSI-OGのICC（1,1）は0.97であり、系統誤差を含んでいなかった。以上のことから、RSI-OGは高い信頼性はあったが妥当性はなかったため、慣性センサ独自のRSI値として用いる必要性が明らかとなった。 本人担当部分：データ記録の実施、データ分析を部分的に担当。 共著者：野田優希，城野靖朋
40 計測者に設置した慣性センサによる関節角度計測の妥当性と信頼性の検討 （査読付）	共著	令和5年11月	地域理学療法学 3巻 pp.77-85	本研究では慣性計測ユニット（IMU）のセンサを計測者に設置して関節角度を計測する方法（IMUrater）の妥当性と信頼性を検証することを目的とした。健常成人16名を対象とし、IMUraterと光学カメラを用いた運動分析システム（OMC）を利用した計測方法との妥当性と、IMUraterの信頼性を検証した。その結果、IMUraterとOMCを利用した方法との重相関係数（CMC）、二乗平均平方根誤差（RMSE）はそれぞれ0.93、31.20度であった。IMUraterのセッション内のCMC、RMSE、級内相関係数（ICC）はそれぞれ0.95、19.40度、0.92、セッション間はそれぞれ0.85、35.74度、0.19であった。これらの結果より、IMUraterの相対的な角度に高い妥当性が確認された。セッション内の信頼性は高かったが、セッション間では時系列波形データの類似性であるCMCのみが高い信頼性であった。絶対的な角度は誤差が大きいことが明らかとなった。 本人担当部分：研究計画の立案からデータ記録の実施、データ分析、論文作成までを中心的に担当。 共著者：城野靖朋、 野田優希、 前田吉樹、 山本秀美、 池田耕二

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（その他） 「総説」 1 ユニバーサルデザインと福祉用具の開発研究	共著	平成25年5月	理学療法えひめ	ユニバーサルデザインの概念に基づき，福祉用具の研究・開発を行ってきた。サリドマイド薬禍障害児の電動義手，進行性筋ジストロフィー症児に対するバネ付き装具の開発に始まり，様々な義手，福祉用具の研究・開発に携わってきた。近年では障害を持つヒトの余暇の利用を支援するタンデムチェアスキーや，砂浜歩行研究に基づく砂浜裸足用5本趾履物，介助者の主観的な負担を軽減する寝返り介助用具を開発した。 本人担当部分：砂浜歩行研究に関する研究を中心的に担当。 共同発表者：大塚彰，長谷川正哉，城野靖朋，田中聡，沖貞明
「学会発表」 ＜国際学会＞ 1 Effects of cerebral -blood-flow change during muscle power enhancing training with mental practice. （訳文：メンタルプラクティスによる筋力増強訓練における脳血流量変化の影響）	-	平成25年9月	The 6th WCPT-AWP & 12th ACPT Congress 2013 （於台湾） （訳文：第6回世界理学療法アジア西太平洋地域学会および第12回アジア理学療法学会の合同学会）	メンタルプラクティスによる膝伸展筋力増強効果を検証した。2週間のメンタルプラクティスによる筋力増強効果の評価と、イメージ課題中の脳血流量を測定した。メンタルプラクティスは等尺性膝伸展筋力を有意に増強させた。イメージ課題中は、前頭葉領域の脳活動賦活が確認された。したがって、メンタルプラクティスは脳活動を賦活させることで、神経性要因による筋力増強効果を得ている可能性が示唆された。これは、整形外科疾患、中枢神経疾患、また、高齢や廃用症候群によって重度の筋力低下がみられる対象の運動療法となりうる。 本人担当部分：研究結果の解釈、考察を部分的に担当。 共同発表者：Daniide Y.（谷出康士），Kanai S.（金井秀作），Jono Y.（城野靖朋），Goto T.（後藤拓也）
2 Study of dual-task cost by manipulating the attentional demands of a cognitive and motor task. （訳文：認知課題と運動課題における注意需要量を統制した二重課題コストの研究）	-	平成25年9月	The 6th WCPT-AWP & 12th ACPT Congress 2013 （於台湾） （訳文：第6回世界理学療法アジア西太平洋地域学会および第12回アジア理学療法学会の合同学会）	二重課題によるパフォーマンスの低下（dual-task cost）は、高齢者や中枢神経疾患患者で顕著にみられ、日常生活動作能力へ影響を及ぼす重要な問題である。そこで、注意需要量を統制した運動課題下での認知的負荷によるdual-task costへの影響を検証した。難易度を注意需要量で統制した二重課題条件を設定し、単一運動課題能力の高い群と低い群とでdual-task costを比較した。両群間でdual-task costに有意な差をみとめなかった。したがって、二重課題におけるdual-task costは、単一運動課題能力に影響されない可能性が示唆された。 本人担当部分：研究結果の解釈、考察を部分的に担当。 共同発表者：Goto T.（後藤拓也），Okita K.（沖田一彦），Hasegawa M.（長谷川正哉），Tanaka S.（田中聡），Shimatani K.（島谷康司），Jono Y.（城野靖朋），Daniide Y.（谷出康士），Harada R.（原田亮），Fujitaka Y.（藤高祐太），Kanai S.（金井秀作）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
＜国内学会＞ 1 メンタルプラクティスによる筋力増強効果の検討	－	平成24年5月	第47回日本理学療法学術大会 （於神戸ポートピアホテル）	イメージ課題を用いたメンタルプラクティスによる筋力増強効果を検証した。メンタルプラクティスは等尺性膝伸展筋力を有意に増強させた。等尺性膝伸展筋力測定をイメージする課題中の脳血流量を、近赤外光脳機能イメージング装置で測定したところ、前頭葉領域の脳活動賦活が確認された。したがって、メンタルプラクティスは脳活動を賦活させ、神経性要因による筋力増強効果を得ることが示唆された。 本人担当部分：研究結果の解釈，考察を部分的に担当。 共同発表者：谷出康士，金井秀作，城野靖朋，後藤拓也，島谷康司，長谷川正哉，大塚彰
2 変形性膝関節症に対する微弱電流の効果	－	平成20年8月	第20回日本物理療法学会学術大会 （於佛教大学）	変形性膝関節症患者を対象に，微弱電流の効果を疼痛および歩行の変化から検討した。対象は70歳代の左変形性膝関節症患者1名とし，通常の理学療法に微弱電流治療を追加した。介入一日目に，疼痛の軽減と歩行時の左下肢単脚支持期の延長がみられた。介入二日目以降，治療前後の変化は観察できなかったが，一日目の治療効果は維持できていた。本症例は微弱電流治療の介入一日目に，疼痛緩和による単脚支持期の延長が観察された。 本人担当部分：研究計画の立案から介入の実践，発表資料の作成，発表に至るまでを中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，堀内賢，岡田裕尚，百々美樹，白須健司
3 運動野表象に対する隣接筋随意収縮の影響	－	平成26年5月	第49 回日本理学療法学術大会 （於パシフィコ横浜）	試験筋随意収縮中に隣接筋を随意収縮させた時に生じる試験筋支配運動野表象分布の変化を観察し、試験筋随意収縮中の隣接筋活動の影響を神経生理学的に検証した。隣接筋活動の影響を受けて、試験筋運動野興奮性分布の重心は内側へ偏移した。試験筋随意収縮中の隣接筋活動は、試験筋運動野表象の興奮性分布を変化させることが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、発表資料の作成、発表に至るまでを中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，中條雄太，谷恵介，野村佳史，二階堂泰隆，畑中良太，平岡浩一

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4 外乱予測が筋反応および反応前期の皮質脊髄興奮性に与える影響	－	平成26年5月	第49 回日本理学療法学術大会 （於パシフィコ横浜）	外乱方向および外乱タイミング予測が外乱に対する筋反応と反応前期の皮質脊髄興奮性に与える影響を神経生理学的に検証した。タイミング予測により伸展外乱時のみ反応前期皮質脊髄興奮性が増大した。タイミング予測は筋伸張を予測できないにもかかわらず伸展外乱反応前期のみで皮質脊髄興奮性増大に作用することを示唆した。したがって、タイミング予測による反応前期皮質脊髄興奮性増大に筋伸張求心性インパルスが関与することが示唆された。 本人担当部分：実験の実施、研究結果の解釈、考察を部分的に担当。 共同発表者：二階堂泰隆，畑中良太，城野靖朋，谷恵介，野村佳史，中條雄太，平岡浩一
5 地域在住高齢者における不安定面での姿勢制御能力が転倒にどのように影響を及ぼすか―不安定面での重心動揺検査における検証―	－	平成26年5月	第49 回日本理学療法学術大会 （於パシフィコ横浜）	ラバー負荷重心動揺検査を利用して、地域在住高齢者の不安定面での姿勢制御能力が転倒にどう影響するかを運動学的に検証した。ラバー負荷使用による姿勢制御能力は、転倒と関連しなかった。ラバー負荷時のロンベルク率は、非転倒群で高値を示した。したがって、転倒群の姿勢制御は非転倒群と比べ下肢の体性感覚への依存が少ない可能性が示唆された。 本人担当部分：研究結果の解釈、考察を部分的に担当。 共同発表者：藤高祐太，金井秀作，原田亮，後藤拓也，城野靖朋，田中聡，大塚彰
6 身体軸に対する手指運動方向が手指筋運動野表象に及ぼす影響	－	平成26年11月	第44回日本臨床神経生理学会学術大会 （於福岡国際会議場）	身体軸に対する運動方向の違いが手指筋運動野表象に及ぼす影響を検証した。異なる3つの上肢肢位において手指筋運動誘発電位マッピングを行った。運動方向の違いによる手指筋運動野表象の違いはみられなかった。肩関節角度と肘関節角度の違いで、hotspot内側の手指筋運動誘発電位に有意な差がみられた。したがって、中枢関節角度の影響により手指筋運動野表象内側の興奮性が変化することが示唆された。肢全体の関節に共同運動が生じてしまう中枢神経障害の運動障害と関連する知見である可能性がある。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、発表資料の作成、発表に至るまでを中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，中條雄太，谷恵介，野村佳史，畑中良太，岩田泰幸，水澤裕貴，平岡浩一

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7 両側forceの協調が皮質間抑制に及ぼす影響	－	平成26年11月	第44回日本臨床神経生理学会学術大会（於福岡国際会議場）	半球間抑制は中枢神経障害による運動障害と関係していると考えられている。そこで、両側forceの協調が半球間抑制に及ぼす影響を神経生理学的に観察した。半球間抑制は、左右示指同士を直接押し合う協調したforce出力を要する課題において、左右示指間に金属板を挟んだ協調したforce出力を要しない課題と比較して有意に大きくなった。条件刺激と試験刺激の刺激間隔時間の違いが、半球間抑制の大きさに与える影響はみとめなかった。したがって、両側forceの協調は皮質間抑制を促通することが示唆された。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：平岡浩一，阿江美乃里，小倉奈菜，佐野千紗，塩見啓悟，森田祐司，横山遙香，城野靖朋，野村佳史，谷恵介，中條雄太
8 聴覚刺激が視覚標的リーチ時の手選択に及ぼす影響	－	平成26年11月	第44回日本臨床神経生理学会学術大会（於福岡国際会議場）	聴覚刺激が視覚反応リーチ課題時の手選択に及ぼす影響を検証した。右利き者のリーチ側選択が左右均等になる水平視線角度は、右聴覚入力の影響を受けて有意に左へ偏移した。左利き者の水平視線角度は、右聴覚入力の影響を受けて半数で左へ偏移したが、残りの半数では算出できなかった。したがって、右聴覚音は右利き者の視覚標的リーチ時の右手選択確率を増加させるが、左利き者において右利き者と異なる機構の存在が示唆された。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：谷恵介，城野靖朋，中條雄太，野村佳史，畑中良太，平岡浩一
9 異なる相対位相の両側リズミカル運動における運動制御	－	平成26年11月	第44回日本臨床神経生理学会学術大会（於福岡国際会議場）	相対位相の異なるリズミカルな両側性運動の運動制御を神経生理学的に検証した。難易度の高い相対位相のリズミカル運動で、運動誘発電位が有意に大きくなり、背景筋放電量に対する運動誘発電位の相関が有意に低下した。したがって、高い難易度の両側性運動では皮質脊髄路興奮性は増大するが、筋出力の皮質脊髄制御の依存は小さいことが示唆された。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：野村佳史，畑中良太，城野靖朋，谷恵介，中條雄太，平岡浩一

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
10 視覚入力を伴わない衝動性眼球運動が手指筋皮質脊髄路興奮性に及ぼす影響	－	平成26年11月	第44回日本臨床神経生理学会学術大会 （於福岡国際会議場）	視覚入力を伴わない衝動性眼球運動が、手指筋支配皮質脊髄路興奮性に及ぼす影響を神経生理学的に検証した。眼球運動前と比較して、衝動性眼球運動開始から終了を4分割した第3相の運動誘発電位が有意に減少した。前腕肢位及び筋の違いによる影響はみられなかった。衝動性眼球運動は手指筋支配皮質脊髄路の興奮性を抑制するが、その抑制に視覚、前腕固受容器、および共通経路を介した手指運動命令は関与しないことが示唆された。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：中條雄太，城野靖朋，谷恵介，野村佳史，畑中良太，平岡浩一
11 手指筋の緊張性収縮が隣接筋運動野の興奮性および抑制性回路に与える影響	－	平成27年11月	第45回日本臨床神経生理学会学術大会 （於大阪国際会議場）	手指筋運動野表象の興奮性および抑制性回路に及ぼす隣接筋活動の影響を神経生理学的に検証した。第1背側骨間筋は，小指外転筋と重複していない運動野表象で小指外転筋活動による運動野興奮性および抑制性が抑制された。小指外転筋では第1背側骨間筋活動による運動野興奮性および抑制性は変化しなかった。したがって，隣接筋活動による運動野表象の興奮性変動は筋によって異なることが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施，発表資料の作成，発表に至るまでを中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，岩田恭幸，水澤裕貴，平岡浩一
12 単耳聴覚性歩行開始合図が振出下肢選択におよぼす影響	－	平成27年11月	第45回日本臨床神経生理学会学術大会 （於大阪国際会議場）	単耳聴覚性歩行開始合図が振出下肢選択に及ぼす影響を検証した。聴覚合図側が予想不能なセッションで、自己ペース歩行開始動作における振出下肢に選択しにくい下肢側からの聴覚合図は、聴覚合図側の下肢を振出下肢に選択する確率を増大させた。しかし、聴覚合図側が予想可能なセッションでは、有意な変化は観察されなかった。したがって、選択しにくい振出下肢側への予測不能な聴覚合図は、聴覚合図側の下肢選択確率を増加させる。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：平岡浩一，阿江実乃里，小倉奈々，佐野千紗，塩見啓悟，森田祐司，横山遥香，岩田恭幸，城野靖朋，野村佳史，谷恵介，中條雄太

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
13 一次感覚野への経頭蓋磁気刺激による一次運動野半球間抑制	－	平成27年11月	第45回日本臨床神経生理学会学術大会（於大阪国際会議場）	一次感覚野への経頭蓋磁気刺激による半球間抑制を神経生理学的に観察した。一次感覚野への経頭蓋磁器刺激により感覚減弱が生じた対象者では、刺激後20 msおよび40msで半球間抑制が観察された。このことから、一次感覚野への経頭蓋磁器刺激で長潜時の半球間抑制を誘発可能であることが示唆された。また、この抑制は感覚減弱が生じた対象者で観察されたことから、皮膚知覚経路に関連していると考えられる。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：岩田恭幸，城野靖朋，水澤裕貴，平岡浩一
14 歩行開始時予測的姿勢制御の動作変換または中止による抑制	－	平成27年11月	第45回日本臨床神経生理学会学術大会（於大阪国際会議場）	歩行開始時予測的姿勢制御における、足底移動中心軌跡のS1相に及ぼす動作変換あるいは中止の影響を運動学的に検証した。歩行開始合図により生じたS1の側方振幅とその持続時間が、振出下肢変更あるいは動作中止により有意に減少した。このことは、歩行開始時の予測的姿勢制御は、他の競合する運動プログラムから抑制フィードバックを受けることを示唆する。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：水澤裕貴，城野靖朋，岩田恭幸，平岡浩一
15 高齢者に対する3次元複数物体追跡課題を用いた視覚認知トレーニングの効果	－	平成28年6月	第44回日本バイオフィードバック学会学術集会（於日本大学文理学部百年記念館）	地域在住高齢者を対象に、三次元複数物体追跡課題のトレーニング効果を検証した。トレーニング介入群ではTrail Making Test part Aが介入後に有意に短くなった。介入群においてTrail Making Test part AとTimed Up and Go Testの変化比率の間に有意な正の相関が認められた。地域在住高齢者に対する三次元複数物体追跡課題のトレーニング効果は注意機能および動的バランス能力の向上が期待でき、新しい運動療法としての可能性が示唆された。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：辻下守弘，城野靖朋

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
16 異なる手指運動プロセス間の協調	－	平成28年11月	第46回日本臨床神経生理学会学術大会（於ホテルハマツ）	異なる手指運動プロセス間の協調について検証した。示視屈曲時の示指支配筋単純反応時間は小指運動の影響を受けなかったが、小指屈曲時の小指支配筋反応時間は示指運動の影響を受けて有意に延長した。また、示指支配筋と小指支配筋の反応時間差の試行間標準偏差は、示指と小指の同時外転時に最も小さく、同時屈曲時に最も大きかった。したがって、独立性の高い運動を実行する示指の運動プロセスでは他の指運動プロセスとの干渉はないが、独立性の低い小指の屈曲運動プロセスでは他の指運動プロセスの干渉を受ける場合がある。また、指の外転運動は屈曲運動よりも他の指運動との共同性が高いことが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、発表資料の作成、発表に至るまでを中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，岩田恭幸，木下篤，平岡浩一
17 一次感覚野経頭蓋磁気刺激による半球間抑制の体性感覚経路依存性	－	平成28年11月	第46回日本臨床神経生理学会学術大会（於ホテルハマツ）	対側示指への皮膚刺激が、経頭蓋磁気刺激によって観察される長潜時半球間抑制へ及ぼす効果を神経生理学的に観察した。一次運動野を刺激することによる長潜時半球間抑制は、対側示指への皮膚刺激の影響を受けなかった。一次感覚野を刺激することによる長潜時半球間抑制は、一次感覚野を刺激する20ms前に対側示指へ皮膚刺激を与えると促通した。これは体性感覚求心性入力が一次感覚野に到達した時点で、一次感覚野を刺激することによる長潜時半球間抑制が促通されることを意味する。したがって、一次感覚野を刺激することによる長潜時半球間抑制は、体性感覚経路の活動と関連することが考えられた。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：岩田恭幸，城野靖朋，水澤裕貴，木下篤，平岡浩一
18 リズムフィードバック入力視野がポリリズム両側運動に及ぼす影響	－	平成28年11月	第46回日本臨床神経生理学会学術大会（郡山）	ポリリズム両手運動に対するリズム視覚フィードバックの入力側、刺激位置間距離、およびフィードバックと運動側の一致の影響を検証した。フィードバック入力側が片側の条件におけるポリリズムの周期の長い側の手運動周期が、片手運動と比較して短縮した。フィードバック入力側が両側の条件では片手運動に対する周期の差は観察されず、刺激位置間距離の違いにおいても運動周期の差は観察されなかった。したがって、フィードバックの入力側半球が同一であることに起因して、ポリリズムの周期の長い側の手運動周期が短縮することが考えられた。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：木下篤，城野靖朋，水澤裕貴，岩田恭幸，平岡浩一

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
19 上腕三頭筋腱振動刺激時の肘関節角度の違いが運動錯覚の惹起に及ぼす影響	－	令和元年10月	第27回日本物理療法学会学術大会（東京）	関節角度の違いによる筋長の変化が筋腱振動刺激による運動錯覚の惹起に及ぼす影響を明らかにすることを目的とし、左肘関節屈曲30度、60度、90度の3条件で運動錯覚を評価した。その結果、肘関節屈曲60度と90度において肘関節屈曲の運動錯覚が惹起された。したがって、筋腱振動刺激による運動錯覚の惹起には被刺激筋の長さが影響し、伸長位であることが必要だと考えられた。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、発表資料の作成、発表に至るまでを中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，神里巌，吉川義之，辻下守弘
20 熟達理学療法士の経験学習能力を支える 仕事に対する信念とは？	－	令和元年11月	第8回日本理学療法教育学会学術大会・第2回日本理学療法士学会管理部門研究会（名古屋）	仕事に対する信念は専門職の経験学習に重要な役割を担い、理学療法士（以下、PT）の育成には信念の形成支援が大切となる．しかし、PTの信念の内容や形成支援方法は明らかにされていない．そこで、本研究では現場の熟達PTの信念を明らかにし、信念の形成支援方法を提案する．熟達PTからは30個の信念カテゴリーが得られたが、それらは実に多様であった．これらを要約すると、熟達PTの信念は人間関係の構築、PTのプライドや責任感、熱意と幅広い実践、治療成果による社会還元等から形成されていた． 本人担当部分：研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子
21 創傷被覆材における近赤外線透過率の検証	－	令和3年2月	第1回物理療法部門研究会（Web）	本研究は、褥瘡治療に用いる近赤外線の創傷被覆材（ドレッシング材）の透過率を、ドレッシング材の状態（乾燥、湿潤）とドレッシング材の種類の要因で検討した。 フィルムドレッシング材については約95%の透過率があったため、フィルムドレッシング材のみであれば十分な近赤外線が創部へ到達すると考えられる。ハイドロコロイドドレッシング材については、水分を吸収することで透過率が減少し、ポリウレタンフォームドレッシング材については水分を吸収することで透過率が増加した。それゆえに、ドレッシング材の種類によって使用時期を変更する必要性があることも示唆された。 本人担当部分：解析の実施、結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：吉川義之，辻下守弘，城野靖朋，滝本幸治

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
22 筋腱振動刺激の圧力の信頼性と圧力値フィードバックの有効性について	-	令和3年2月	第1回物理療法部門研究会（Web）	本研究は筋腱振動刺激の圧力を被刺激部と刺激部の圧力センサーにてそれぞれ記録し、異なる振動周波数における圧力の信頼性について検討した。また、圧力センサーの値をフィードバックし、その効果についても検討した。本研究の結果から、刺激部の圧力は視覚的にフィードバックされており,全ての条件で高い信頼性を示した。しかし、被刺激部の圧力は信頼性が低く、特に振動が加わると信頼性は著しく低下することが明らかになった。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、結果の解釈、考察部分を中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，吉川義之，野田優希，神里巌，辻下守弘
23 筋腱振動刺激圧力の安全性に関する検討	-	令和3年10月	第28回物理療法学会学術大会（Web）	本研究は筋腱振動刺激を安全に実施することを目的に、主観的な疼痛閾値以下の最大限の圧力と、それらを繰り返し実施した際の信頼性について検討した。対象は健常成人9名の上腕二頭筋腱とし、2回の連続したセッションを行った。本研究の結果から、振動がある場合のセンサーからの圧力はセッション間で偶然誤差であった。このことから、本研究で用いた方法は、振動刺激を疼痛閾値以下で制御するパラメーターとして有効だと考えられる。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、結果の解釈、考察部分を中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，吉川義之，野田優希，神里巌，辻下守弘
24 奈良学園大学リハビリテーション学科におけるコロナ禍の学内実習の紹介①―実習専用ホームページの開設と運用方法の紹介―	-	令和3年10月	第34回教育研究大会･教員研修会（Web）	本研究では臨床実習専用ホームページをコロナ感染拡大下において学内実習へと切り替えた2つの実習（早期体験実習;１年次，地域理学・作業療法実習;2年次）において活用し、それに対して学生に実施したアンケーを実施した。アンケートの結果、本学科の取り組みは個々の学生の学習進捗状況や理解度といった情報が円滑に共有できるだけでなく、すべての項目で半数以上の学生が「とてもよかった」、「まあまあよかった」と回答したことから、学習しやすい良い取り組みだと考えている。 本人担当部分：解析の実施、結果の解釈、考察を部分的に担当。 共同発表者：池田耕二，滝本幸治，飯塚照史，城野靖朋，野田優希，福原啓太，中田修，辻下聡馬，岩﨑智子，辻下守弘

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
25 異なる運動課題が反応時間の学年間の違いに及ぼす影響	－	令和3年12月	第8回 日本地域理学療法学会学術大会（Web）	本研究では中高生の神経機能の学年間の違いを明らかにすることを目的とし、サッカー部所属の男子中高生31名（中学1年7名、2年7名、3年9名、高校1年8名）を対象にボタン押し、歩き始め、跳躍の運動課題で反応時間を計測した。その結果、ボタン押しのような焦点的な運動ではなく、歩きはじめや跳躍といった全身運動の反応時間に学年間の有意差がみられた。さらに跳躍でみられた反応時間の学年間の違いは、前運動時間の違いを反映している可能性があり、全身的な運動における動き始めるまでの神経系の情報処理プロセスは、中高生においても発達過程にあることが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、結果の解釈、考察部分を中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，野田優希，藤田信子，三笘康之，橋本雅至
26 熟達理学療法士の成長を促す経験における経験学習サイクルを解明する ― 教訓と応用 ―	－	令和3年12月	第4回 日本理学療法管理研究会学術大会（Web）	本研究では熟達理学療法士から教訓と応用の内容を解明することを目的とし、臨床歴10年以上、臨床実習指導や非常勤講師等の教育歴、学位取得や学会発表等の研究歴のすべてを有するもの43名を対象にアンケート調査を行った。解析結果の一例として、担当患者の理学療法・関係性に苦悩した経験から、理学療法士としての態度を教訓として学び、丁寧な患者対応へと応用していたことが明らかとなった。このように、成長を促す多様な経験から多様な教訓を得て，次の経験に向けて応用（思考・行動変容）していることが分かった。これら理学療法士支援方法の構築や検証は今後の課題である。 本人担当部分：解析の実施、結果の解釈、考察を部分的に担当。 共同発表者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子
27 痙縮に対する筋腱振動刺激の即時的効果	－	令和4年2月	第2回日本物理療法研究会学術大会（Web）	本研究はでは痙縮の治療に有効だと報告されている振動刺激の刺激部位を痙縮筋とその拮抗筋とに実施し、その即自的な効果を観察した。痙縮筋への振動刺激は伸張反射の出現角度を増大させ、拮抗筋への振動刺激では減少させた。また、痙縮筋への振動刺激では運動錯覚が観察されなかったが、拮抗筋では観察された。これらのことから拮抗筋への刺激は筋紡錘を興奮させて即時的に痙縮を減弱させた可能性が考えられた。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、結果の解釈、考察部分を中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，吉川義之，野田優希，神里巌，辻下守弘

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
28 慣性センサーの加速度と角速度を用いて算出した角度の妥当性検証―単軸運動の角速度とセンサー位置の影響―	－	令和4年7月	第31回 奈良県理学療法士学会(Web)	本研究では、関節角度評価のための慣性センサーを使用した2つの方法（方法Aと方法B）の妥当性を検証しました。等速運動装置を使用して10回の運動試行を行い、異なる速度条件と位置条件で角度を記録しました。方法Aでは加速度から角度を算出し、方法Bでは角速度を積分して角度を算出しました。真の角度との比較に基づき、相関係数（r）とRMSEを評価しました。結果では、方法Bの妥当性が高く、速度が速いほど方法Aの妥当性が低下する傾向が見られました。低速運動では加速度を使用する方法Aが適しており、高速運動では角速度を使用する方法Bが優れていることが示されました。運動解析においては、解析対象の運動と適切な角度算出方法を考慮する必要があります。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、結果の解釈、考察部分を中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，野田優希，前田吉樹，飯塚照史，池田耕二
29 上肢の神経障害性疼痛に対する反復経頭蓋磁気刺激の長期介入試験	－	令和4年11月	第52回日本臨床神経生理学会学術大会（於国立京都国際会館）	この研究は、上肢の神経障害性疼痛に対する反復経頭蓋磁気刺激（rTMS）の有効性と安全性を評価するために、盲検化無作為化プラセボ対照並行群間比較試験を行いました。30人の患者を実刺激群と偽刺激群にランダムに割り付け、8週間の介入を行いました。結果では、実刺激群と偽刺激群の間で明確な有効性の差は見られませんでしたが、長期的なrTMSの実施による有効性の可能性が示唆されました。重大な有害事象は報告されませんでした。この臨床試験では、8週間の実刺激が上肢の神経障害性疼痛患者に対して偽刺激よりも有効であることを明確には示せませんでしたが、長期的なrTMSの有効性が示唆されました。 本人担当部分：主として研究データの記録を担当。 共同発表者：細見晃一，西麻哉，森信彦，三宅顕光，山田知美，林燦碩，松木明好，城野靖朋，董冬，Khoo HuiMing，谷直樹，押野悟，貴島晴彦，齋藤洋一
30 短期的な関節固定による一時的な柔軟性の変化に及ぼす性別の影響	－	令和4年12月	保健医療学学会第12回学術集会（於奈良学園大学）	本研究では短期間の筋の短縮位固定による一時的な柔軟性の変化と可動域制限などで観察される柔軟性との関係について、性別間の違いがあるかどうかを調べることを目的とした。健常成人18名（男性9名）を対象に、足関節の底屈、背屈の可動範囲を測定し、その後、10分間足関節を底屈10度で固定した後、等速運動装置を用いて繰り返し底背屈運動を行い、受動トルクを計測した。その結果、男女間で可動域が異なることが確認され、男性では女性に比べて短期的な関節固定による柔軟性の低下が大きいことが示された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、結果の解釈、考察部分を補助的に担当。 共同発表者：林咲季，中島瑠維，清水龍助，城野靖朋

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
31 幼児におけるリズムのタイミング誤差と運動能力との関連性について	－	令和5年7月	第32回奈良県理学療法士学会（於奈良学園大学）	本研究では幼児におけるリズムのタイミング誤差と運動能力との関連性を明らかにすることを目的とした。6歳園児46名（男子21名，女子25名）を対象にした。運動能力調査とタイミング誤差および重心動揺計測を行った。タイミング誤差にはInteractive Metronome（以下IM）を使用した。その結果、 25m走、立ち幅跳び、ソフトボール投において、男女に有意差を認めた。IM変動誤差と両足連続飛び越しで有意な相関が認められた。両足連続飛び越しは、両足の協調したタイミングが要求される運動であり、時間情報処理能力が必要な運動能力であると考えられた。 本人担当部分：研究データの記録、結果の解釈、考察部分を補助的に担当。 共同発表者：辻下守弘，城野靖朋，辻下聡馬
32 理学療法士を育む「場（職場、部署、チーム、グループ）」の雰囲気・風土に関する探索的研究	－	令和5年11月	日本理学療法管理学会・日本精神・心理領域理学療法研究会 合同学術大会2023（於東京国際大学）	理学療法管理の役割には理学療法士（PT)を育む「場」づくりがある。しかし「場」の雰囲気・風土の質は解明されていない。本研究ではPTを育む「場」の雰囲気・風土の質を探求することを目的とした。方法はGoogle formによるアンケート調査とし、同意の得られた357名のPTから回答を得た。回答結果より、PTの自己成長感は勤勉さと厳しさという雰囲気・風土を介した学習環境の良さによって形成されている可能性があることが分かった。「場」には、PTを育む雰囲気・風土の質、場の良さがあり、これらを介してPTは自己成長感や満足感等を得ていると考えられる。 本人担当部分：研究計画の立案からアンケート作成の、結果の解釈、考察部分を補助的に担当。 共同発表者：池田耕二，城野靖朋，吉川義之，野田優希，滝本幸治，三上亮
33 理学療法士の成長を促した経験（学習）の場の雰囲気とは：場と現在の職場の雰囲気の比較	－	令和5年12月	第12回日本理学療法教育学会（於大宮ソニックシティビル）	本研究では、臨床教育を支える場づくりにむけて成長を促した経験の場（以下、場）と現在の職場の雰囲気の違いから、臨床教育の場に足りない雰囲気を明らかにすることを目的にアンケート調査を行った。現在の職場では、明るさと暖かさ以外の8項目で場よりも低い傾向が示唆された。特に厳しさ、誠実さ、勤勉さに違いがみられた。臨床教育を支える場づくりでは、現在の職場の雰囲気を場の雰囲気に近づけることが一つの方向性であり、特に厳しさ、誠実さ、勤勉さの雰囲気の向上が課題になると考えられた。 本人担当部分：研究計画の立案からアンケート作成の、結果の解釈、考察部分を補助的に担当。 共同発表者：池田耕二，城野靖朋，吉川義之，野田優希，滝本幸治，三上亮

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
「研究報告書」 1 研究助成報告会 「学童期から青年期における姿勢の形態学的・運動学的機能面が静的・動的バランス能力に及ぼす影響について-パイロットスタディ」	-	令和2年8月	奈良学園	本研究では中高生の神経機能の学年間の違いを明らかにすることを目的とし、サッカー部所属の男子中高生）を対象にボタン押し、歩き始め、跳躍の運動課題で反応時間を計測した。また、アーチの計測、身体組成の計測を行った。学会発表に向け準備中である。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、解析、結果の解釈を中心的に担当。 共同研究者：橋本雅至、城野靖朋，野田優希，藤田信子，三笘康之
2 研究助成報告書 「腱振動刺激中マッチング課題の経時的解析」	-	令和3年5月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成報告書	本研究は筋腱振動刺激の圧力を被刺激部と刺激部の圧力センサーにてそれぞれ記録し、異なる振動周波数における圧力の信頼性について検討した。また、圧力センサーの値をフィードバックし、その効果についても検討した。本研究の結果から、刺激部の圧力は視覚的にフィードバックされており,全ての条件で高い信頼性を示した。しかし、被刺激部の圧力は信頼性が低く、特に振動が加わると信頼性は著しく低下することが明らかになった。以上の内容を第1回物理療法部門研究会（Web）にて令和3年の2月に発表した。引き続き研究は継続して実施している。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、結果の解釈、考察部分を中心的に担当。 共同研究者：城野靖朋，吉川義之，野田優希，神里巌，辻下守弘 A4判　全2頁
3 研究助成報告書 「創傷被覆材における近赤外線透過率の検証」	-	令和3年5月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成報告書	本研究は、褥瘡治療に用いる近赤外線の創傷被覆材（ドレッシング材）の透過率を、ドレッシング材の状態（乾燥、湿潤）とドレッシング材の種類の要因で検討した。 フィルムドレッシング材については約95%の透過率があったため、フィルムドレッシング材のみであれば十分な近赤外線が創部へ到達すると考えられる。ハイドロコロイドドレッシング材については、水分を吸収することで透過率が減少し、ポリウレタンフォームドレッシング材については水分を吸収することで透過率が増加した。それゆえに、ドレッシング材の種類によって使用時期を変更する必要性があることも示唆された。以上の内容を第1回物理療法部門研究会（Web）にて令和3年の2月に発表し、論文投稿の準備中であるる。 本人担当部分：解析の実施、結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同研究者：吉川義之，辻下守弘，城野靖朋，滝本幸治 A4判　全2頁

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4 研究助成報告書 「リハビリテーション学科臨床実習管理センターにおけるホームページによる双方向性システムの構築-臨床実習教育の質向上を目指して-」	-	令和3年5月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成報告書	本研究では臨床実習管理センターにホームページによる双方向性活用システムを作成し運用し、臨床実習教育施設との密な連携の構築、臨床実習教育の質の向を目的とした。研究デザインは、アクションリサーチとし、その手順は臨床実習教育に関する課題・問題点、解決のための方向性を抽出した（①）。問題点の優先順位を設定した（②）。臨床実習管理センターのホームページを作成し、手順②であげられた問題点の優先順位の高いもの、解決の方向性が示されているものから、解決できるシステムを考案し、作成、導入した（③）。試用を繰り返し、問題点を収集し、システムの修正を行った（④）。手順①～④の繰り返しを行い、本リハ学科臨床実習教育ネットワークを構築した（⑤）。これらの結果を学会発表に向けて準備中である。 本人担当部分：解析の実施、結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同研究者：池田耕二,飯塚照史,城野靖朋,福原啓太,滝本幸治,リハビリテーション学科臨床実習管理センター・教員,辻下守弘 A4判　全4頁

別記様式第４号（その２の１）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

年　月　日

氏名　滝本　幸治

研究分野	研究内容のキーワード
地域ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ学、地域理学療法学、予防理学療法学、老年期理学療法学	健康増進、介護予防、地域包括ケア、歩行、転倒、認知症、フレイル、サルコペニア

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）臨床実習学生教育	平成12年4月 ～ 現在に至る	平成12～平成16年には、理学療法士として臨床業務に携わる傍ら、臨床実習学生の実践的スキルの向上を目的とした教育を行ってきた。 平成17年からは、土佐リハビリテーションカレッジ 理学療法学科 専門分野 「臨床評価実習（2年次）」「臨床総合実習Ⅰ（3年次）」「臨床総合実習Ⅱ（4年次）」において、令和元年からは奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科にて、養成校教員の立場から臨床実習指導者と連携し、特に実習困難な学生の指導方法について相談・指導してきた。同時に、学生教育から資格取得後の新人教育への連携を意識した教育を行ってきた。
2）卒後の学術活動を意識した卒業研究指導	平成17年4月 ～ 現在に至る	土佐リハビリテーションカレッジ 理学療法学科 専門分野 「理学療法セミナーⅠ（3年次）」「卒業研究（4年次）」および奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻「卒業研究（4年次）」において、6名程度のゼミ生に対し卒業研究を指導。文献抄読や研究計画のプレゼンテーションを積極的に行う。学内での研究発表や論文執筆のみならず、在学中の関連学会への演題投稿や学会発表なども積極的に支援。卒後、臨床へのシームレスな学術活動の支援を目的として指導しているため、卒後の臨床研究に活動が継続されている。
3）フィールドワークを通した職業意識の向上にむけた取り組み	平成17年4月 ～ 現在に至る	土佐リハビリテーションカレッジ 理学療法学科 専門分野 「地域リハビリテーション演習（3年次）」「理学療法セミナーⅠ（3年次）」および奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻「卒業研究（4年次）」においては、自治体事業（介護予防事業等）や介護保険サービス事業所（通所介護など）および高齢者の自主運動教室に学生と参加。当事者や職員との関わりから、地域課題や当事者意識に直接触れ、将来理学療法士として学生自身がどのように貢献し得るか考え関心を高める機会となり、学生の感想も貴重な機会であったとする肯定する評価が大半を占めた。
4）臨床実習対策レクチャーの実施	平成17年4月 ～ 平成31年3月	土佐リハビリテーションカレッジ 理学療法学科 専門分野 「臨床評価実習（2年次）」「臨床総合実習Ⅰ（3年次）」「臨床総合実習Ⅱ（4年次）」に先立って、当該学生を対象に臨床実習に向けた対策レクチャーを開講。主に「姿勢・動作分析」をテーマとして、観察・分析のプロセス、仮説の証明（原因の特定）、治療手段の決定、効果判定について実技を交えて指導。臨床に即した実践的なレクチャーのため、毎年受講希望者が多く、実習で役立ったという声も多い。

5）国家試験対策レクチャーの実施	平成17年10月 ～ 現在に至る	土佐リハビリテーションカレッジ理学療法学科において、国家試験受験を前にした学生に対し、毎年10月～2月に国家試験対策レクチャーを実施。担当領域は主に「生理学」「運動学」「義肢・装具学」であり、国家試験過去問題からその傾向を探り、学生の効率的且つ効果的な学習のために過去問題演習とともにポイント解説を行っている。また、平成28年から新たな国家試験出題基準が適応されたことを受け、それに対応すべく新たな出題傾向について検討するとともに情報収集に努め、学生に情報提供している。 奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科においては、国家試験対策ソフトを活用した取り組みや、CBTを反映したワークブックを作成し学生に提供する取り組みを行っている。
6）メーリングリストを利用したレポート添削による効率的な個別学習支援	平成25年10月 ～ 平成31年3月	土佐リハビリテーションカレッジ 理学療法学科専門分野 「運動分析学（2年次）」において、姿勢・動作の観察・分析方法の指導と演習（レポート作成）を行う。学生は繰り返しレポート提出を行い、それに対して個別にフィードバックを行う必要があるため、学内メーリングリストを利用した課題の提出・返却を実施した。学生は提出期日までの間、昼夜問わずレポートを提出できる利便性があるとともに、添削の際もワープロソフトの校閲機能を用いて効率よく丁寧に実施できる。
7）チューター制度による少人数制の学生生活および学習のサポート	平成26年4月 ～ 現在に至る	土佐リハビリテーションカレッジ理学療法学科および奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科において、学年を問わず、履修中の科目の中で理解が不十分であったり、学生生活で悩みがあったり、将来的な不安などを抱えている学生は少なくない。そこで、学年別に少人数（6名程度）の学生を対象に放課後等の時間を活用してチューター制度を設けた。比較的共通する課題や悩みがあるなどピアとしても機能し仲間意識が高まるなど、きめ細かいフォローが学生にとって有効にはたらいていることを実感する試みである。
8）事前テストの実施による学習目標の明確化	平成27年4月 ～ 平成31年3月	土佐リハビリテーションカレッジ 理学療法学科専門基礎分野 「人体の機能演習Ⅰ・Ⅱ」「運動学演習Ⅰ・Ⅱ」（ともに1年次）では、初めて専門的な学習を行う学生にとって難易度は高いと思われる。そこで毎回講義の最初に、当日講義で扱う内容で構成された「事前テスト」を講義冒頭で実施（5分程度）。これによりこれから何を学ぶか意識付けするとともに、講義終了後には事前テストの解答を完成させたものを提出させ、理解の確認とともに質問を受け付け、次回講義時にフィードバックするよう努めた。学生評価は非常に高いものであった。
9）臨床における理学療法士・作業療法士に対する教育	令和元年10月 ～ 現在に至る	医療機関（社会医療法人黎明会 北出病院）において、臨床経験の浅い理学療法士・作業療法士に対しては、症例の担当場面に介入して直接的な指導を実施（on the job training）。一方、中堅以上のスタッフに対しては、学術活動や後進育成のための教育・マネジメント、多職種・多事業所連携等に関する相談・指導を実施した。
10）オンライン教育コンテンツを活用した学習支援	令和2年5月 ～ 現在に至る	教員が学生と共有できる教育コンテンツを活用し、講義および講義で課した課題の解説などの動画を掲載することで、学生がいつでもどこでも自己学習できる環境を構築した。また、必要に応じて講義資料（補足、参考資料等）の掲載や演習問題の提供・解説など、講義時間外においても学生が学習できる機会を提供した。
11）地域理学療法・作業療法実習の学内実習の実施	令和2年5月 ～ 令和4年9月	コロナ禍により現場での実習が困難となったため、学内にて地域理学療法・作業療法実習を計画し実施した。学内であっても本来の学外実習と遜色がないよう工夫し、現場スタッフの講義や、現場とWeb中継を行って現場の様子やスタッフや患者様の声を聴かせて頂いた。また、グループワークやプレゼンテーションの機会をたくさん設けることで、学生の主体的取り組みを促した。

12）臨床実習および国試対策としてのComputer Based Testing（CBT）の実施	令和3年5月 ～ 現在に至る	臨床実習を受講するために必要な知識の確認及び国家試験対策として、複数回にわたってCBTを実施している。また、CBTに先駆けて、学生が自己学習に取り組むツールとして多肢選択問題を領域別に網羅したCBTワークブックを作成して学生に提供している。さらに、CBTの結果に基づき教員が学生に個別指導を行うことで学習支援を行っている。
2　作成した教科書，教材 3）講義用テキスト作成	平成26年4月 ～ 現在に至る	土佐リハビリテーションカレッジ 理学療法学科で担当している「地域リハビリテーション学」「地域理学療法学Ⅰ」（ともに3年次）において、講義用テキストを作成した。医療・福祉・保健・介護等を取り巻く状況が目まぐるしく変遷するなか、専門職養成に必要な標準的事項は既刊のテキストで補えるが、リアルタイムにトピックス的な話題や状況を反映させるために、教材として50ページ程度のサブテキストを作成し講義で活用している。
4）地域理学療法実習 予習・復習用ホームページ作成	令和2年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科で担当している「地域理学療法実習」（2年次配当科目）において、学科HPを活用した取り組みを実施した。より充実した実習期間となるよう実習に先駆けて予習用ページを作成・学生公開するとともに、実習終了後に復習用ページを作成・掲載して実習の振り返るが行えるよう配慮した。
5）CBTワークブックの作成	令和3年6月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻では、3年次配当科目の理学療法評価実習、4年次配当科目の臨床総合実習Ⅰ・Ⅱに先んじて、実習で求められる知識面の確認のためにCBT(computer based testing)を実施する。そこで、学生の学習ツールのひとつとして、学習すべき領域ごとに国家試験形式の問題を取りまとめ、4冊のワークブック（「解剖・運動・生理学編」「一版臨床医学編」「理学療法編１」「理学療法編2」）を作成した。CBT実施の約半年前から順次ワークブックを学生に配布し、必要に応じて教員が取り組み状況を確認しながら学習を促した。
6）国家試験模擬試験 個別返却シート作成	令和4年10月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻では、国家試験受験に向けた模擬試験を実施している。受験後、学生が試験結果を受けてその後の学習に活かせるよう、個々の学生に模擬試験の個別返却シートを作成してフィードバックを行っている。具体的には、問題の出題領域ごとにレーダーチャートにして専攻正答率と自己正答率を示したり、専攻の正答率が高いにも関わらず自分が誤った問題を容易に確認できるなどの工夫をしている。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 2）奈良学園大学における授業評価アンケートにおける評価	令和3年4月 ～ 令和4年2月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科での担当科目である「運動学入門」「地域理学療法学」「地域理学療法学演習」「理学療法研究法」「物理療法学Ⅰ」「物理療法学Ⅱ」「福祉用具・生活環境論Ⅱ（各論）」において授業評価が行われ、結果に基づき教授方法を工夫した。概ね、いずれの科目も肯定的な意見であったが、十分に授業外学習に取り組めていない傾向を認めた。そのため、オンラインツールを活用して、講義・解説動画や補足資料を公開したり、授業で扱った内容に関する問題を出題するなどして、学生が授業外学習に取り組みやすい学習環境を提供することにより、総合的に満足度が高い結果が得られた。

4　実務の経験を有する者についての特記事項 3）島津病院 勉強会　講師	平成26年 5月1日	島津病院リハビリテーション科スタッフを対象に「臨床実習教育再考」というテーマで講演。
4）川田整形外科 勉強会 講師	平成28年 12月9日	川田整形外科リハビリテーション科スタッフを対象に「臨床実習教育について考える」というテーマで講演。
5）同窓会「未来会」勉強会 講師	平成18年 4月15日	土佐リハビリテーションカレッジ同窓会「未来会」にて、現職の理学療法士・作業療法士を対象に「少子化する高齢社会」というテーマで講演。
	平成25年 3月30日	土佐リハビリテーションカレッジ同窓会「未来会」にて、現職の理学療法士・作業療法士を対象に「周期運動の神経メカニズム―タイミングと力制御に関する研究動向とともに」というテーマで講演。
	平成27年 9月29日	土佐リハビリテーションカレッジ同窓会「未来会」にて、現職の理学療法士・作業療法士を対象に「地域包括ケアシステムにおけるリハ専門職の貢献と課題」というテーマで講演。
	令和3年 4月10日	土佐リハビリテーションカレッジ同窓会「未来会」にて，理学療法士・作業療法士を対象に「Motoric Cognitive Risk Syndromeについて考える･―高齢者の有害事象を予測する新しい徴候―」というテーマで講演（オンラインにて実施）。
6）高知県香南市地域ケア会議事前研修会 講師	平成27年 2月15日	高知県香南市が平成27年4月より実施する地域ケア個別会議に先立って、事業所職員らを対象とした研修会を実施。 「運動機能アセスメント―測定目的と方法について―」と題して研修会講師を務めた。
7）高知県介護予防強化型サービス事業所育成支援事業研修会 講師	平成29年 8月24日	高知県主催の自立支援機能を強化する介護事業所スタッフの育成支援を目的とした研修会にて、「転ばぬ先の転倒予防」と題して、アセスメント方法や具体的転倒予防策等について講演。
8）高知県芸西村教育委員会スポーツ研修会 講師	平成29年 8月29日	高知県芸西村教育委員会が、競技スポーツを実施する小・中学生の保護者に対して企画した研修会にて、「成長期のスポーツとの付き合い方」というテーマで、実技を交えながら講義を実施。
9）高知県越知町介護予防事業リハ専門職派遣事業 講師	平成30年 2月16日	リハ専門職が介入していない自治体を県が抽出し、リハ専門職を派遣する事業の一環。 高知県越知町にて継続されてきた介護予防事業において、参加者減少という課題や介護予防の動機づけのために地域在住高齢者を対象に「健康長寿で生きかた上手」というテーマで講演するとともに体操と体力測定を実施。
10）社医）黎明会 北出病院　勉強会講師	平成30年 8月11日	理学療法士を対象に「加速度センサを用いた歩行解析の基礎―臨床研究への展開を踏まえて」というテーマで講演。実際に歩行時加速度計測およびデータ解析を実演するとともに、これらの臨床研究への展開を想定した具体的提案を試みた。

11）高知県介護予防強化型サービス事業所育成支援事業研修会　講師	平成30年 9月6,10,13日	高知県主催の自立支援機能を強化する介護事業所スタッフの育成支援を目的とした研修会であり、「Healthy Agingを叶えるために―アセスメントに基づく介入方法を考える―」と題して、老年症候群（フレイル）の解説やアセスメント方法、アセスメント結果に基づく具体的介入方法等について講演。高知県下の中央（高知市）・西部（黒潮町）・東部（香美市）にて実施。
12）平成30年度香南市通所介護事業所連絡会　講師	平成30年 9月21日	高知県香南市で年次計画されている通所介護事業所連絡会において、通所介護事業所スタッフ向けに「転ばぬ先の転倒予防体操―老いるショックに陥らないために―」というテーマで講演。
	平成31年 3月15日	高知県香南市で年次計画されている通所介護事業所連絡会において、通所介護事業所スタッフ向けに「根拠に基づく生活支援を考える―効果検証の方法を通じて―」として、事例検討のなどの際に一助となるよう症例研究デザインやアセスメントの重要性について解説した。
13）香南市いきいきクラブ事業研修会　講師	平成30年 9月28日, 10月1日	高知県香南市で実施されている住民主体型運動教室の運営を支援する当該事業において、運動教室のリーダーを対象に「健康体操で生きかた上手―コグニサイズの方法と実践―」というテーマで講演と実技指導を実施。
14）介護予防事業実践報告研修　講師	平成31年 2月24日	高知県リハビリテーション職能三団体協議会の主催による本研修において、PT・OT・STの参加者（50名）を対象に「介護予防の機能強化を支援する活動の報告―地域リハビリテーション活動支援事業を踏まえて―」というテーマで講演した。
15）高知県越知町介護予防事業リハ専門職派遣事業講師	平成31年 3月4日	高知県越知町のリハビリテーション活動支援事業の一環として、越知町中大平地区の住民に対し「元気よく畑仕事を続けるために―農作業がもたらす健康生活―」というテーマで講演とともに体操および体組成計側等を実施した。
16）奈良市社会福祉協議会（青和地区）講演会 講師	令和元年 10月14日	奈良市社会福祉協議会（青和地区）の主催で開催された地域住民を対象とした講演会で、「Healthy Agingを叶える街づくり―健康長寿を叶えるために―」というテーマで講演とともに参加者とともに体操を行った。
17)和歌山県理学療法士連盟研修会 講師	令和2年 1月12日	和歌山県理学療法士連盟の主催で開催された研修会の講師として「地域包括ケアに貢献する理学療法士になるためにー「地域共生社会」の実現に向けてー」というテーマで現職理学療法士を対象に講演とともに住民への体操指導について実技・演習を行った。
18）奈良市社会福祉協議会　講演会　講師	令和2年 2月1日	奈良市社会福祉協議会（青和地区）主催の地域住民を対象とした講演会で、「健康長寿を叶える街づくり―人生100年時代にできること―」というテーマで講演を行い、認知症予防体操や自宅でできる体操などを参加者とともに実施した。
19）奈良県臨床実習指導者講習会　世話人・講師	令和2年 2月8日～9日	第120回臨床実習指導者講習会が白鳳短期大学にて開催され、2日間に渡って80名の参加者に対して講義・演習を担当した。
	令和2年 2月15日～16日	第128回臨床実習指導者講習会が奈良学園大学にて開催され、2日間に渡って78名の参加者に対して講義・演習を担当した。
	令和3年 6月5日～6日	第368回臨床実習指導者講習会が白鳳短期大学にて開催され、2日間に渡って78名の参加者に対して講義・演習を担当した。

	令和3年 6月26日～27日	第378回臨床実習指導者講習会が畿央大学にて開催され、2日間に渡って80名の参加者に対して講義・演習を担当した。
	令和3年 7月31日 ～ 8月1日	第399回臨床実習指導者講習会が白鳳短期大学にて開催され、2日間に渡って80名の参加者に対して講義・演習を担当した。
	令和3年 9月11日～12日	第437回臨床実習指導者講習会が奈良学園大学にて開催され、2日間に渡って74名の参加者に対して講習会の運営に携わった。
	令和3年 11月6日～7日	第515回臨床実習指導者講習会が白鳳短期大学にて開催し、世話人・講師として参加した。2日間に渡って80名の参加者に対して講義・演習を担当した。
	令和3年 11月20日 ～21日	第538回臨床実習指導者講習会が奈良学園大学（Web開催）にて開催され、2日間に渡って48名の参加者に対して講習会の運営に携わった。
	令和4年 2月12日～13日	第646回臨床実習指導者講習会が奈良学園大学（Web開催）にて開催され、2日間に渡って46名の参加者に対して講習会の運営に携わった。
	令和4年 3月5日～6日	第664回臨床実習指導者講習会が畿央大学（Web開催）にて開催され、2日間に渡って47名の参加者に対して講義を担当した。
	令和4年 5月14日～15日	第727回臨床実習指導者講習会が白鳳短期大学（Web開催）にて開催され、2日間に渡って48名の参加者に対して演習を担当した。
	令和4年 7月16日～17日	第776回臨床実習指導者講習会が奈良学園大学（Web開催）にて開催され、2日間に渡って47名の参加者に対して講習会の運営に携わった。
	令和4年 9月10日～11日	第843回臨床実習指導者講習会が奈良学園大学（Web開催）にて開催され、2日間に渡って46名の参加者に対して講習会の運営に携わった。
	令和5年 5月13日～41日	第1026回臨床実習指導者講習会が畿央大学（Web開催）にて開催され、2日間に渡って47名の参加者に対して講義・演習を担当した。
	令和5年 7月15日～16日	第1057回臨床実習指導者講習会が奈良学園大学（Web開催）にて開催され、2日間に渡って46名の参加者に対して講習会の運営に携わった。
	令和6年 3月2日～3日	第1215回臨床実習指導者講習会が奈良学園大学（Web開催）にて開催され、2日間に渡って45名の参加者に対して講習会の運営に携わった。
20）奈良県理学療法士協会　新人教育プログラム　講師	令和3年 10月3日	奈良県理学療法士協会の令和3年度第2回新人教育プログラムにおいて、日本理学療法士協会の会員である受講者に対して「臨床実習指導方法論」についてオンライン形式での講義を行った。
21）奈良市二名地域包括支援センター 元気アップなら講座　講師	令和3年 11月26日	奈良市二名地域包括支援センター主催の元気アップなら講座にて、参加者に対して「転ばぬ先の転倒予防」というテーマで講演を行うとともに体力測定を実施し、参加者に対して測定結果のフィードバックを行った。
	令和4年 11月11日	奈良市西福祉センターにて奈良市二名地域包括支援センター主催の元気アップなら講座の講師として「歩行は健康のバロメーター」というテーマで講演を行うとともに体力測定を実施し、参加者に対して測定結果のフィードバックを行った。

	令和4年 11月16日	エクセルハイツ第二学園前集会所にて奈良市二名地域包括支援センター主催の元気アップなら講座の講師として「転ばぬ先の転倒予防」というテーマで講演と健康体操を行った。
	令和4年 12月2日	二名公民館にて奈良市二名地域包括支援センター主催の元気アップなら講座の講師として「転ばぬ先の転倒予防」というテーマで講演を行うとともに体力測定を実施し、参加者に対して測定結果のフィードバックを行った。
	令和5年 6月1日	城ケ丘公民館にて、奈良市二名地域包括支援センター主催の元気アップなら講座（通いの場継続支援）の講師として「城ケ丘わかトレ講座―先手必勝のフレイル予防―」というテーマで講演を行うとともに体力測定を実施し、参加者に対して測定結果のフィードバックを行った。
	令和5年 6月2日	松陽台2丁目3丁目集会所にて奈良市二名地域包括支援センター主催の元気アップなら講座（通いの場継続支援）の講師として「松陽台わかトレ講座―先手必勝のフレイル予防―」というテーマで講演を行うとともに体力測定を実施し、参加者に対して測定結果のフィードバックを行った。
	令和5年 8月11日	西福祉センターにて奈良市二名地域包括支援センター主催の元気アップなら講座（通いの場継続支援）の講師として「転倒を効果的に予防する秘訣―運動・食事・住環境を見直そう―」というテーマで講演を行うとともに体力測定を実施し、参加者に対して測定結果のフィードバックを行った。
	令和5年 9月1日	二名公民館にて奈良市二名地域包括支援センター主催の元気アップなら講座（通いの場継続支援）の講師として「転倒を効果的に予防する秘訣―運動・食事・住環境を見直そう―」というテーマで講演を行うとともに体力測定を実施し、参加者に対して測定結果のフィードバックを行った。
	令和5年 10月13日	UR学園前・鶴舞 20号棟集会室・談話室にて奈良市二名地域包括支援センター主催の元気アップなら講座（通いの場開設支援）の講師として「転ばぬ先の転倒予防：運動と住環境を見直そう！」というテーマで講演を行うとともに体力測定を実施し、参加者に対して測定結果のフィードバックを行った。
	令和6年 2月9日	西福祉センターにて奈良市二名地域包括支援センター主催の元気アップなら講座（通いの場継続支援）の講師として「ヘルスリテラシーのチカラ」というテーマで講演を行うとともに体力測定を実施し、参加者に対して測定結果のフィードバックを行った。
22）ひいのの介護予防事業　講師	令和4年 12月11日	和歌山県旧日高町立比井小学校跡にて、社会医療法人黎明会主催のひいのの介護予防事業オープン記念特別健康講座の講師として「生き方上手で健康長寿」というテーマで講演を行うとともに体力測定を行い、参加者約50名に対して測定結果のフィードバックを行った。
	令和5年 5月12日	和歌山県旧日高町立比井小学校跡にて、社会医療法人黎明会主催のひいのの介護予防事業の講師として「健康長寿のキーワード『フレイル』について」というテーマで講演を行い、健康体操指導を行った。
	令和5年 7月14日	和歌山県旧日高町立比井小学校跡にて、社会医療法人黎明会主催のひいのの介護予防事業の講師として「ひいのの介護予防事業 3カ月の振り返り／今日までそして明日から」というテーマで講演を行うとともに、当該介護予防事業の総括を行った。
23）奈良学園大学登美ヶ丘カレッジ　講師	令和5年 6月17日	奈良学園大学にて、公開講座「第14回奈良学園大学登美ヶ丘カレッジ」の講師として「生き方上手で健康長寿）というテーマで講演を行った。

24）奈良住まいセンター講演会　講師	令和5年 10月6日	平城第二団地集会場（大ホール）にて、奈良市北部地域包括支援センター・奈良市社会福祉協議会（共催）の講演会の講師として「大切な人と幸福寿命を全うするために―健康と介護のヒントをお伝えします！―」というテーマで講演を行い、参加者に対して体力測定を実施し、結果のフィードバックを行った。
25）認定理学療法士講習会　講師	令和5年 10月22日	公社）日本理学療法士協会の生涯学習制度における認定理学療法士（脳卒中）取得のための臨床認定カリキュラムにおいて、必須科目の「在宅生活の充実と社会参加促進のための生活期理学療法」を担当し、受講者に対して講義を行った。
26）和歌山県日高川町生き生き健康セミナー　講師	令和6年 3月9日	和歌山県日高川町農村環境改善センターにて、社会医療法人黎明会主催の健康セミナーの講師として「活力ある超『幸』齢社会の構築に向けて」というテーマで講演とともに健康体操の指導を行った。
５　その他 〈教育実績〉 1)高知大学教育学部 非常勤講師	平成21年10月 ～ 平成28年3月	高知大学 教育学部 共通科目「高齢者スポーツ論」を担当。高齢社会の現状および要因分析とともに、老年医学の知見に基づいた高齢者の心身機能の特徴を概説。健康長寿に向けた生涯スポーツの位置づけや考え方、老年学・公衆衛生学・健康心理学等を踏まえた実践論について教授している。
2)高知県立室戸高校「看護基礎医学2」授業担当	平成20年7月 ～ 平成22年9月	室戸高校 生活福祉系列の２・３年生に対して「リハビリテーション医療の基礎技術について」として看護基礎医学2の授業を担当した。
3）土佐リハビリテーションカレッジ理学療法学科 専任講師	平成17年4月 ～ 平成31年3月	土佐リハビリテーションカレッジ理学療法学科の専任講師として勤務。
4）土佐リハビリテーションカレッジ理学療法学科 非常勤講師	平成31年4月 ～ 現在に至る	土佐リハビリテーションカレッジ理学療法学科の3年生に対して「地域リハビリテーション学」「地域リハビリテーション演習」の講義を担当。
5）奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻　講師	平成31年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として勤務。「運動学入門」「基礎ゼミⅡ」「理学療法評価学」「地域理学療法学」「地域理学療法学演習」「物理療法学Ⅰ（総論）」「物理療法学Ⅱ（各論）」「理学療法研究法」「福祉用具・生活環境論Ⅱ（各論）」「客観的臨床能力演習（理学療法）」「早期体験実習（理学療法）」「地域理学療法実習」「理学療法評価実習」の科目を担当。
6）奈良学園大学大学院リハビリテーション学研究科講師	令和5年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学大学院リハビリテーション学研究科の講師として勤務。「研究方法特論」「高齢者リハビリテーション学特論」「リハビリテーション学特別研究」の科目を担当。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1)理学療法士免許　取得	平成12年 5月17日	理学療法士名簿登録番号 第35252号
2)修士（教育学）	平成20年3月	高知大学大学院教育学研究科（教修第98号） 論文題目「運動に対する意識と体力の関連 －運動経験・習慣・認識に着目して－」
3)福祉住環境コーディネーター2級　取得	平成20年 7月13日	証書番号20-2-06209
4)介護支援専門員　取得	平成22年 2月2日	登録番号39090079
5)専門理学療法士（生活環境支援理学療法）取得	平成22年 4月1日	登録番号5-138 （公社）日本理学療法士協会が定める制度である。自らの専門性を高め、良質なサービスを提供する臨床能力を備え、理学療法の学問的発展に寄与する研究能力を高めていくことを目的としたものである。
6)地域包括ケア推進リーダー　取得	平成27年 1月18日	（公社）日本理学療法士協会の重点施策の一つである地域包括ケアシステムに関わることのできる人材育成制度を修了。
7)介護予防推進リーダー　取得	平成27年 2月1日	（公社）日本理学療法士協会の重点施策の一つである地域包括ケアシステムに関わることのできる人材育成制度を修了。
8)博士（医学）	平成28年 5月17日	高知大学大学院総合人間自然科学研究科（甲総医博第47号） 論文題目「Comparison of timing and force control of foot tapping between elderly and young subjects（足タッピングのタイミングと力の制御における高齢者と若年者の比較）」
9）都道府県コーディネーター養成研修会　修了	平成29年 3月16日	（公社）日本理学療法士協会の介護予防・健康増進事業であるシルバーリハビリ体操を普及するための研修を茨城県水戸市にて受講し修了した。
10）臨床実習指導者講習会　修了	令和1年 6月23日	（公社）日本理学療法士協会、全国リハビリテーション学校協会の共催であり、各都道府県で今後実施される講習会の世話人・講師を担う者を育成する目的で開催された第10回臨床実習指導者講習会を修了した。
11)フレイル対策推進マネジャー　取得	令和2年 11月30日	（公社）日本理学療法士協会の重点施策の一つである保健事業と介護予防事業の一体的実施に関わることのできる人材育成制度所定の課程を修了した。
12)登録理学療法士　取得	令和4年 4月1日	登録番号:T22-0017244 （公社）日本理学療法士協会が定める制度である。多様な障害像に対応できる能力を有するジェネラリストの育成と目的としたものであり、生涯にわたる知識・技術の維持と亢進を促進し、社会に対する理学療法士の質の担保の証となるものである。

13)専門理学療法士（予防理学療法）取得	令和4年 4月1日	登録番号:S10-0002270 （公社）日本理学療法士協会が定める制度である。自らの専門性を高め、良質なサービスを提供する臨床能力を備え、予防理学療法の学問的発展に寄与する研究能力を高めていくことを目的としたものである。
14)専門理学療法士（地域理学療法）取得	令和4年 4月1日	登録番号:S10-0002070 （公社）日本理学療法士協会が定める制度である。自らの専門性を高め、良質なサービスを提供する臨床能力を備え、地域理学療法の学問的発展に寄与する研究能力を高めていくことを目的としたものである。
15)専門理学療法士（支援工学理学療法）取得	令和4年 4月1日	登録番号:S10-0002470 （公社）日本理学療法士協会が定める制度である。自らの専門性を高め、良質なサービスを提供する臨床能力を備え、支援工学理学療法の学問的発展に寄与する研究能力を高めていくことを目的としたものである。
２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 4）平成28年度 公益信託高知新聞・高知放送「生命（いのち）の基金」採択	平成29年3月	研究課題名：歩行動揺計を用いた認知機能検査に関する研究 研究代表者：滝本幸治 助成金額　：507,600円
5）2019年度 一社）日本物理療法学会研究助成 採択	令和1年6月	研究課題名：ヒト皮膚由来線維芽細胞における温度の違いが細胞増殖に与える影響 研究代表者：吉川義之 共同研究者：杉元雅晴，野中紘士，滝本幸治，前重伯壮，植村弥希子 助成金額　：450,000円
6）2020年度奈良学園大学保健医療学部共同研究助成採択	令和2年5月	研究課題名:山間過疎地域における高齢者の体力特性に関する研究―フレイル調査票を用いた検討― 研究代表者：滝本幸治 共同研究者：伊藤健一，池田耕二，大浦智子，堀内美由紀，井上葉子，椿根純子，阿波邦彦，野中紘士，松村あゆみ，笹野弘美，坪内善仁，中島大貴 助成金額　：220,000円
7）2020年度奈良学園大学保健医療学部共同研究助成採択	令和2年5月	研究課題名：リハビリテーション学科臨床実習管理センターにおけるホームページによる双方向性活用システムの構築―臨床実習教育の質的向上を目指して― 研究代表者：池田耕二 共同研究者：飯塚照史，城野靖朋，福原啓太，滝本幸治，笹野弘美，前田吉樹，野田優希，中田修，坪内善仁，中島大貴，岩﨑智子，辻下聡馬，辻下守弘 助成金額　：220,000円
8）2020年度奈良学園大学保健医療学部共同研究助成採択	令和2年5月	研究課題名：創傷被覆材における近赤外線透過率の検証 研究代表者：吉川義之 共同研究者：辻下守弘，城野靖朋，滝本幸治 助成金額　：220,000円
9）2020年度奈良学園大学保健医療学部共同研究助成（成果発表）採択	令和2年5月	助成学術大会：第57回日本リハビリテーション医学会学術集会 発表演題　：歩行予備能力は独立して転倒リスクを反映するか？―地域在住高齢者を対象とした検討― 筆頭発表者：滝本幸治 助成金額　：23,000円

10) 令和2年度 公益信託高知新聞・高知放送「生命（いのち）の基金」採択	令和3年3月	助成課題名：安全に可能な全身振動刺激療法とバランス能力に関する研究 研究代表者：近藤　寛 共同研究者：竹林秀晃，滝本幸治 助成金額　：350,000円
11) 日本学術振興会 科学研究費 若手研究　採択	令和3年4月	研究課題名：Motoric Cognitive Riskが社会参加に与える影響に関する研究 研究代表者：滝本幸治 助成金額　：4,680,000円
12) 2021年度奈良学園大学保健医療学部共同研究助成採択	令和3年6月	助成課題名：COVID-19パンデミックが高齢者の健康及び日常生活に及ぼす影響に関する研究―コロナ禍における遠隔指導を加味した研究― 研究代表者：滝本幸治 共同研究者：池田耕二，大浦智子，吉川義之，笹野弘美，坪内善仁，辻下聡馬 助成金額　：340,000円
13) 2021年度奈良学園大学保健医療学部共同研究助成採択	令和3年6月	助成課題名：地域の特性を活かした高齢者の健康増進に関する研究 研究代表者：笹野弘美 共同研究者：池田耕二，滝本幸治，辻下聡馬，平野孝行，笹野英樹 助成金額　：340,000円
14) 2022年度奈良学園大学保健医療学部共同研究助成採択	令和4年6月	助成課題名：地域の特性を活かしたAging in Placeに関する研究 研究代表者：笹野弘美 共同研究者：池田耕二，滝本幸治，平野孝行，辻下聡馬，笹野英樹 助成金額　：300,000円
（自治体事業） 2)香南市高齢者健診事業（運動啓発事業）	平成17年4月 ～ 平成29年9月	H17年度以降、現在に至るまで高知県香南市の高齢者健診事業（H26より運動啓発事業に事業名変更）を受託。毎年9～10月頃に、香南市在住の65歳以上高齢者を対象として、運動・認知機能の計測を実施し、計測データを市に提供するとともに、計測データを統計処理することにより同市の体力標準値等を算出・共有してきた。
3)香南市地域ケア会議アドバイザー	平成27年4月 ～ 平成31年3月	高知県香南市がH27年度より開始した地域ケア個別会議において、アドバイザーとして当初より参加。個別事例の課題分析および目標設定、支援内容について助言を行っている。
4)高知市介護認定審査会 委員	平成29年4月 ～	高知県高知市の介護認定審査会委員として、介護認定審査にあたる。
5)高知県介護予防強化型サービス事業所育成支援事業講師	平成29年度 ～ 平成30年度	高知県下の通所介護事業所職員を対象に、生活機能向上支援の知識・技術の習得を支援し、市町村と連携して高齢者の自立支援に向けた介護サービスを提供できる事業所の育成を図るため、研修会講師などを勤め講演等を実施。
6)香南市通所介護事業所連絡会 講師	平成30年度	高知県香南市の地域包括ケアシステム構築のため、地域の通所介護事業所のスタッフ育成及び多職種連携などスキルアップを目指した研修の講師を勤め、アセスメントおよび介護予防手法などについて講演等を実施。

7)奈良市二名地区介護予防事業	令和元年10月 ～ 現在に至る	奈良市二名地域包括支援センターの管轄する地域住民を対象とした介護予防事業に講師として参画。介護予防や健康に関連する講話とともに健康体操の実践指導を実施。
8）奈良県曽爾村 フレイル健診（後期高齢者の質問票）	令和2年度 ～ 現在に至る	奈良県曽爾村において，令和2年度より全国市町村で実施することになったフレイル健診（後期高齢者の質問票）について，曽爾村保健師らとともにフレイル健診の実施及び結果集約，今後の介護予防事業への反映などについて協働。
（理学療法士協会・学会関連業務） 2）日本物理療法学会 選挙管理委員会 委員長	平成20年5月 ～ 現在に至る	日本物理療法学会の選挙管理委員として（H23年5月から委員長）、学会評議員の選出のための選挙告示および選挙を実施している。
3）（公社）高知県理学療法士協会 広報部	平成20年6月 ～ 平成26年6月	（公社）高知県理学療法士協会の広報部員（後に副部長）として、主に協会ホームページの管理や会員向け会誌（県協会ニュース）や一般向け広報誌「ぱわふるとさ！」の編集・発行に携わってきた。
4）日本理学療法学術大会 演題査読委員	平成22年11月 ～ 平成28年11月	（公社）日本理学療法士協会が毎年開催する日本理学療法学術大会の演題査読委員を務めている。
5）日本理学療法士協会グランドデザイン策定委員（予防領域）	平成24年4月 ～ 平成25年3月	（公社）日本理学療法士協会が、国民の保健福祉を支援する理学療法士グランドデザインを策定するためにチームを構成し、「予防領域」の委員としてグランドデザイン策定に携わった。
6）四国理学療法士学会　演題査読委員	平成26年7月 ～ 平成31年3月	四国理学療法士会が毎年開催する四国理学療法士学会の演題査読委員を務めている。
7）（公社）高知県理学療法士協会 事務局次長	平成27年6月 ～ 平成29年6月	（公社）高知県理学療法士協会の事務局次長に就任。高知県の理学療法士の質の向上と社会貢献のための企画総括や会員管理に努めている。
8）高知県理学療法士連盟　事務局長	平成27年6月 ～ 平成31年3月	高知県理学療法士連盟の事務局長に就任。県民や理学療法士の声を受け取り、県もしくは国に届けるためのサポート（講演会の開催など）の活動している。
9）（公社）高知県理学療法士協会　総務部長	平成29年6月 ～ 平成31年3月	（公社）高知県理学療法士協会の総務部長に就任。会員管理や法人運営を担い、理事会および総会の開催・運営を行っている。
10）日本地域理学療法学会学術大会　演題査読委員	平成30年3月 ～ 現在に至る	日本地域理学療法学会学術大会の演題査読委員を務めている。

11）日本予防理学療法学会学術大会　演題査読委員	平成27年2月 ～ 現在に至る	日本予防理学療法学会学術大会の演題査読委員を務めている。
12）奈良県理学療法士養成校協議会　理事	令和2年12月 ～ 現在に至る	奈良県下の理学療法士養成校で組織された協議会理事として，臨床実習指導者養成のための臨床実習指導者講習会の開催計画・運営など担当。
13）日本理学療法教育学会学術大会　演題査読委員	令和3年8月 ～ 現在に至る	日本理学療法教育学会学術大会の演題査読委員を務めている。
14）公社）日本理学療法士協会 指定規則等検証部会（カリキュラム検討作業部会）部会員	令和4年8月 ～ 令和6年3月	2018年に理学療法士作業療法士学校養成施設指定規則が改正されたが、新カリキュラムの適用から5年を目途として、新たな見直しの必要性についての検討を行うことが望まれている。これを受け、当該作業部会において改正された指定規則を検証するとともにカリキュラムの改善などつについて検討を行う。
15）近畿理学療法学術大会　演題査読委員	令和4年9月 ～ 現在に至る	近畿理学療法学術大会の演題査読委員を務めている。
16）保健医療学学会学術集会　演題査読委員	令和4年11月 ～ 現在に至る	保健医療学学会学術集会の演題査読委員を務めている。
（学術大会 司会・座長）		
7)第25回高知県理学療法士協会新人発表学術集会（座長）	平成27年 3月22日	第25回高知県理学療法士協会 新人発表学術集会にて、ポスター演題「生活環境」の座長を務めた。
8)第44回四国理学療法士学会（座長）	平成27年 11月29日	第44回四国理学療法士学会にて、一般演題Ⅱ-④「運動器・基礎系」の座長を務めた。
9)第72回日本体力医学会大会（座長）	平成29年 9月18日	第72回日本体力医学会大会（愛媛）にて、一般演題「リハビリテーション，運動療法②」の座長を務めた。
10)第47回四国理学療法士（座長）	平成30年 12月2日	第47回四国理学療法士学会（高知）にて、一般演題Ⅳ-③「生活環境支援系」の座長を務めた。
11)第6回日本予防理学療法学会学術大会（座長）	令和元年 10月19日	第6回日本予防理学療法学会学術大会（広島）にて、ポスター演題8（9演題）の座長を務めた。

12)第6回日本地域理学療法学会学術大会（座長）	令和元年 12月15日	第6回日本地域理学療法学会学術大会（京都）にて、一般口述12「訪問・通所3」（6演題）の座長を務めた。
13）第8回日本地域理学療法学会学術大会（座長）	令和3年 12月5日	第8回日本地域理学療法学会学術大会（Web開催）にて、口述発表「地域⑪」（5演題）の座長を務めた。
14）保健医療学学会第12回学術集会（座長）	令和4年 12月4日	保健医療学学会第12回学術集会（奈良）にて、口述発表「教育セッション」（2演題）の座長を務めた。
4　その他 2）第12回保健医療学学会学術集会 準備委員（会期：2022年12月4日）	令和4年5月 ～ 令和4年12月	令和4年12月4日に奈良学園大学（奈良市）で開催された第12回保健医療学学会学術集会において、集会の準備委員として主に会計について対応し、大会の運営に携わった。
3）日本物理療法合同学術大会2024　準備委員	令和5年1月 ～ 令和6年3月	2024（令和6）年1月26日（金）・27日（土）に奈良県コンベンションセンターで開催される日本物理療法合同学術大会2024の開催に向けて、準備委員を努めた。

研究業績等に関する事項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1）高齢者に対する予防的運動介入―実践指導に必要な基礎と技術	共著	令和4年4月	文光堂（東京）	高齢者の運動指導場面において求められる知識や実践的な方法論が網羅的に解説されている。医療・保健・介護関連の施設や事業所、あるいは自治体事業などにおいて活用されることを想定した構成である。 B5判　全202頁 編　者：柳澤幸夫 共著者：井坂昌明，竜田庸平，速見弥央，柳澤幸夫，澤田優子，今岡真和，土居誠治，森　耕平，福岡達之，滝本幸治，大久保吏司，松浦　康，竹林秀晃，近藤　寛，積山和加子，鶯　春夫，近藤慶承，出口憲市，三浦　哉，清水裕子 本人担当部分：第4章 高齢者に使用するスクリーニングおよび体力測定（76-99頁） フレイル、サルコペニアおよび地域で活用できる体力測定項目（各種の歩行能力、筋力、バランステスト）の方法について解説。計測機器を用いなくても計測できる方法や具体的な計測手順・声掛けの例などを示すとともに、測定時の留意事項と判定指標を示すことで、より丁寧かつ正確な測定が叶い、運動指導に役立てることができる構成となっている。
（学術論文） 73)Comparison of timing and force control of foot tapping between elderly and young subjects（足タッピングのタイミングと力の制御における高齢者と若年者の比較） （査読付） （博士論文）	共著	平成28年5月	Journal of Physical Therapy Science 28: pp1909-1015,2016.	足タッピング課題を用い、タイミングと力の制御における高齢者と若年者の比較を行った。結果、高齢者の方がタッピングの精度が低かったが、テンポ音に同期してタップすると精度が低くなるという若年者とは異なる新知見を得た。 ・共著者：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏，椛秀人 ・本人担当部分：論文執筆、研究計画、データ計測・解析、資料収集

74）二重課題による認知機能評価の有用性―地域在住高齢者を対象とした検討― （査読付）	共著	平成28年12月	土佐リハビリテーションジャーナル10：pp1-8, 2016.	Walking Stroop Carpet(WSC)という新しい二重課題を用いて、地域在住高齢者の認知機能低下の初期スクリーニングとして有用か検討した。結果、多変量解析によりWSCの文字条件が認知機能低下を説明する変数として抽出され、ROC曲線においても判別性能が高いことが示された。 ・共著者：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三 ・本人担当部分：論文執筆、研究計画、データ計測・解析，資料収集
75）上腕骨・前腕両骨骨折(floating elbow)を受傷した症例 （査読付）	共著	平成28年12月	土佐リハビリテーションジャーナル10：pp23-30, 2016.	機能障害が残存しやすく治療に難渋することが多い上腕骨・前腕両骨骨折症例の理学療法効果について検討した。結果、術直後から早期に関節可動域練習と上肢全体に対するアプローチが、疼痛の消失や関節可動域の再獲得に効果をもたらした。 ・共著者：上堀　琢，高橋佑輔，滝本幸治 ・本人担当部分：研究計画，資料収集、論文の一部執筆
76）異なる二種類の二重課題による転倒リスク評価の検討―Multitarget Stepping Taskの改良版による試み― （査読付）	共著	平成28年12月	土佐リハビリテーションジャーナル10：pp31-36, 2016.	二重課題であるMultitarget Stepping Task(MTST)は、転倒リスク評価としての有用性が知られているが、より感度よく評価するために認知機能負荷を課した改良版MTSTを考案し、高齢者を対象に転倒リスク評価を実施した。結果、改良版MTSTは従来のMTSTより感度や正診率が高く、より有効な転倒リスク評価として活用の可能性が示唆された。 ・共著者：門脇一弘，滝本幸治 ・本人担当部分：研究計画，データ計測・統計解析，資料収集、論文の一部執筆
77）心理社会的要因による痛み関連脳領域の変化―高社会性げっ歯類を用いた基礎研究―	共著	平成29年3月	四国理学療法士会学会誌39：pp112-113, 2017.	社会環境の変化による痛み関連領域（ペインマトリックス）の変化についてハタネズミを用いて検討した。結果、パートナーの存在有無によりペインマトリックスの活動性が変化し、脊髄後角における痛みシグナリングを減少させていることが示唆された。 ・共著者：奥田教宏，大迫洋治，竹林秀晃，滝本幸治，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宅間豊，宮本謙三，由利和也 ・本人担当部分：統計解析、論文の一部執筆
78）自己身体像の視覚外乱刺激は感覚の重みづけを変化させる―身体感覚情報との不一致が及ぼす影響―	共著	平成29年3月	四国理学療法士会学会誌39：pp110-111, 2017	視覚情報を変化させることで身体感覚情報との不一致を作り、姿勢制御への影響を検討した。被験者自身の後方からの映像を回転させて見せ、立位姿勢の重心動揺を評価したところ、回転角度が大きいほど重心動揺が大きくなることが分かった。 ・共著者：竹林秀晃，弘井鈴乃，滝本幸治，宮本謙三，井上佳和，岡部孝生，宮本祥子，宅間豊 ・本人担当部分：研究計画、データ計測、資料収集、論文の一部執筆
79）Dual Taskによる歩行能力と認知機能評価の有用性―Walking Stroop Carpetによる検討―	共著	平成29年3月	四国理学療法士会学会誌39：pp56-57, 2017.	地域在住高齢者を対象に、Walking Stroop Carpetを用いたDual Task歩行による転倒リスクおよび認知機能評価を試みた。結果、過去1年の転倒歴の判別適中率は79.0%、認知機能低下の判別適中率は90.5%であり、Walking Stroop Carpetの有用性が示唆された。 ・共著者：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三 ・本人担当部分：論文執筆、研究計画、データ計測・解析、資料収集

80）高齢者大腿骨近位部骨折術後患者の自宅退院に与える要因―回復期ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ病棟によるFIMを用いた検討―	共著	平成29年3月	高知県理学療法24：pp63-67，2017.	回復期ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ病棟に入院していた高齢大腿骨近位部骨折術後患者42例を対象に、自宅退院に影響を与える要因について検討した。結果、整容や更衣動作などのセルフケアと移動動作の自立度、認知機能の低下予防が自宅退院に必要な要因であることが考えられた。 ・共著者：奥田教宏，竹林秀晃，滝本幸治，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三 ・本人担当部分：研究計画、統計解析、資料収集、論文の一部執筆
81）Walking Stroop Carpetによる転倒リスク評価の有用性 （査読付）	共著	平成29年6月	理学療法学44(3)：pp219-225，2017.	Walking Stroop Carpet（WSC)課題による転倒リスク評価の有用性について、地域在住高齢者100名を対象に検討した。結果、WSC課題（色条件）は高齢者の転倒歴を有意に説明することが示され、地域在住高齢者の転倒リスク評価ツールとして活用の可能性が示唆された。 ・共著者：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三 ・本人担当部分：論文執筆、研究計画、データ計測、統計解析、資料収集
82）二重課題による認知機能低下および転倒リスク評価の有用性―Walking Stroop Carpetを用いた検討― （査読付）	共著	平成29年12月	土佐リハビリテーションジャーナル11：pp1-8，2017.	Walking Stroop Carpet（WSC)課題を用いて，認知機能低下と転倒リスクの評価を行い，その有用性について地域在住高齢者113名を対象に検討した。結果、認知機能低下はWSC課題（文字条件）が，転倒リスクはWSC課題（色条件）が有意に説明することが示され、地域在住高齢者の認知機能低下と転倒リスクの簡便な評価ツールとして活用の可能性が示唆された。 ・共著者：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，渡邊家泰，宮本祥子，宅間豊，井上佳和，岡部孝生，岡林　悠，宮本謙三 ・本人担当部分：論文執筆、研究計画、データ計測、統計解析、資料収集
83）急性期脳卒中リハビリテーション （査読付）	共著	平成29年12月	土佐リハビリテーションジャーナル11：pp29-36，2017.	脳卒中急性期においては，十分な医学的管理の下にできる限りの離床と運動負荷を意識し対応することで，二次的な合併症の予防や有害事象を発生させることなく有効な治療成績が得られる報告が多々存在する。早期リハの必要性を理解するために，安静臥床が及ぼす悪影響を理解したうえで，早期リハが身体の諸機能に及ぼす影響について解説した。 ・共著者：小川真輝，滝本幸治 ・本人担当部分：論文構成，文献収集、論文の一部執筆
84）心理･社会的ストレスによるペインマトリックスの反応性変化―炎症性疼痛時の脳活動性―	共著	平成30年3月	四国理学療法士会学会誌40：pp98-99，2018.	高社会性げっ歯類のプレーリーハタネズミを用いて、心理･社会的要因（絆）による痛み関連脳領域（ペインマトリックス）の反応性を検討した。結果、絆を解かれたネズミは側坐核外側のFos蛋白発現が少なく内因性疼痛制御系のドーパミン経路が機能しにくくなり、島ではFos蛋白が多く嫌悪感や恐怖・不安を感じる可能性が示唆された。 ・共著者：奥田教宏，大迫洋治，竹林秀晃，滝本幸治，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，渡邊家泰，宅間豊，宮本謙三，由利和也 ・本人担当部分：統計解析、論文の一部執筆
85）加齢による二重課題条件下での歩行特性―体幹加速度計測による検討―	共著	平成30年3月	四国理学療法士会学会誌40：pp160-161，2018.	加齢による二重課題条件下での歩行を評価するために、若年者と高齢者を対象に体幹加速度計測を行った。結果、二重課題条件下では高齢者の歩行速度低下とともに加速度振幅の指標であるRMSが増大することが確認された。 ・共著者：滝本幸治，山本聖香，浅井剛，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，渡邊家泰，宮本謙三 ・本人担当部分：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集

86）視覚外乱刺激において周辺環境の有無が姿勢制御に及ぼす影響	共著	平成31年3月	四国理学療法士会学会誌 41：pp54-55, 2019.	Head Mounted Displayを用いて映像を回転させることによる視覚外乱刺激を加え、姿勢制御に及ぼす影響について検討した。結果、背景があると重心動揺が増大するとともに、回転角度が大きいとより顕著に重心動揺が増大した。視覚情報が姿勢制御に与える影響が異なることから、トレーニングへの応用が期待できる。 ・共著者：竹林秀晃，藤田雅登，滝本幸治，奥田教宏，岡部孝生，宮本祥子，井上佳和，宅間豊，宮本謙三 ・本人担当部分：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集、論文の一部執筆
87）認知機能低下が歩行パラメータに与える影響―体幹加速度計測による検討―	共著	平成31年3月	四国理学療法士会学会誌 41：pp92-93, 2019.	地域在住高齢者を対象に、認知機能低下有無が各種歩行パラメータに与える影響について検討した。結果、歩行時の合成RMS（加速度振幅の大きさ）が健常群より認知機能低下群で有意に増大するとともに 、多変量解析により認知機能低下を説明する変数として抽出された（OR:1.34, 95%CI:1.01-1.77, p<0.05)。 ・共著者：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，渡邊家泰，浅井剛，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，岡林悠，宮本謙三 ・本人担当部分：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集
88）運動負荷による疼痛域値の変化―自転車エルゴメーター―による比較―	共著	平成31年3月	四国理学療法士会学会誌 41：pp108-109, 2019.	自転車エルゴメーター駆動の運動負荷量の違いが疼痛域値に与える影響について、健常若年成人男性30名を対象に検討した。心拍数100拍／分と150拍／分の運動20分実施後、第6頚椎棘突起側方の表在感覚・圧痛域値を計測した結果、いずれの条件も運動前後で比較で、運動後に疼痛域値が上昇した。しかし、条件間では両域値に差を認めなかった。 ・共著者：奥田教宏，中平愛里，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，滝本幸治，渡邊家泰 ・本人担当部分：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集、論文の一部執筆
89）視空間記憶能力と歩行能力および転倒歴との関連―視覚的ワーキングメモリスパンテストを用いた検討―	共著	平成31年3月	四国理学療法士会学会誌 41：pp212-213, 2019.	視空間情報の記憶能力と高齢者の歩行能力・転倒との関連について、高齢者15名を対象に検討した。歩行能力検査（10m歩行、TUG）とともに、視覚的ワーキングメモリスパンテスト（VWMST）を実施した結果、非転倒群より転倒群で空間位置情報を記憶する能力（スペース課題）が有意に低下しており、多変量解析によりスペース課題の成績はTUGを説明する変数として抽出された。 ・共著者：橋詰愛里彩，谷脇弘将，山﨑優，滝本幸治 ・本人担当部分：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集、論文の一部執筆
90）外来患者に対する杖適応の判断基準の検討	共著	平成31年3月	四国理学療法士会学会誌 41：pp232-233, 2019.	整形外科疾患により外来通院中の患者を対象に、杖使用を決定づける要因について検討した。結果、杖使用群と未使用群間の比較において、有意に杖使用群の10m歩行時間が遅延しており、多変量解析によって歩行時間のみが杖使用有無を決定付ける変数として抽出された。ROC曲線による判別性能はAUC:0.79であり、カットオフ値は7.8秒であった。 ・共著者：土居優仁，山本哲夫，山下亜乃，片岡歩，滝本幸治 ・本人担当部分：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集、論文の一部執筆

91）パーキンソン病症例を対象にした短期集中入院の効果	共著	平成31年3月	四国理学療法士会学会誌41：pp254-255，2019.	パーキンソン病(PD)専用リハコースに入院するPD症例37名の効果検証を行った。リハ専門職による介入を240分／日×週5回×5週間実施したところ、入院前後比較によりUPDRSのpart1（精神機能、行動及び気分）、part2（ADL）、part（運動機能）は有意に改善したが、part4（治療の合併症）は不変であった。また、抑うつ性(SDS)は有意に低下した。 ・共著者：下川貴大，馬渕勝，岡本和久，武田正和，横瀬崇光，國重裕二，薮田英吾，澤田侑貴，鎌田剛，滝本幸治 ・本人担当部分：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集、論文の一部執筆
92）地域包括ケアに貢献するリハビリテーション専門職―現状と展望―（総説）	共著	平成31年3月	高知県理学療法26：pp83-90，2019.	リハビリテーション専門職が地域包括ケアシステムの構築に向け貢献するためには，地域における現状や課題の把握に努めるとともに，地域包括ケアに関連した枠組み（市町村事業等）や自治体との関係性構築が重要である。本論文では，これまでの取り組みの紹介を通して地域包括ケアに貢献する手段をまとめ，解決すべき課題について解説した。 ・共著者：滝本幸治，竹林秀晃，井上佳和，萩原賢二，吉村亮子，古谷知佐子，近藤沙綾，和田譲，宮本謙三 ・本人担当部分：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集
93）臨床実習評価と帰属要因・Gritとの関連	共著	令和2年3月	高知県理学療法27：pp49-55，2020.	臨床実習成績とその帰属要因との関連について検討するとともに、臨床実習成績とGrit（やり抜く力）の関連について検討した。臨床総合実習を履修した理学療法学生91名を対象とし、質問紙により帰属要因やGritについて調査した。結果、実習成績の帰属要因は、努力と能力が相関関係を示した。また、Gritと努力および実習難度で正の相関を認めたが、Gritと実習成績に関連は認めなかった。 ・共著者：竹林秀晃，奥田教宏，渡邊家泰，滝本幸治，岡部孝生，宮本祥子，井上佳和，宅間豊，宮本謙三 ・本人担当部分：研究計画，質問紙作成・集計，統計解析，資料収集
94）創傷被覆材における近赤外線透過率の検証 （査読付）	共著	令和3年3月	医療福祉情報行動科学研究8：pp11-17，2021.	褥瘡に対する近赤外線療法を実施する場合、褥瘡部分を覆っている創傷被覆材上から近赤外線療法を実施することが推奨される。そのため、ドレッシング材の赤外線透過率を検証した。近赤外線透過率はドレッシング材の種類により異なり、滲出液を吸収した際に透過しやすいドレッシング材や滲出液を吸収する前の方が透過しやすいドレッシング材があった。そのため、ドレッシング材によって照射時期を変える必要であることが確認された。 ・共著者：吉川義之，城野靖朋，滝本幸治，植村弥希子，辻下守弘 ・本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集、論文の一部執筆
95）歩行予備能力は独立して転倒リスクを反映するか―運動習慣を有する高齢者を対象とした横断研究― （査読付）	共著	令和3年3月	医療福祉情報行動科学研究8：pp25-30，2021.	通常歩行時と努力歩行時の歩行能力の差異である歩行予備能力が、既知の歩行能力指標と独立して転倒リスクを反映するか、地域在住高齢者１８５名を対象に検証した。多変量解析の結果、一般的な歩行能力指標（10m歩行時間、TUGなど）と比較して歩行予備能力のみが転倒歴を説明する変数として抽出された。 ・共著者：滝本幸治，竹林秀晃，矢野まのか，平井絢子 ・本人担当部分：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集

96）二重課題を用いた歩行能力の年代特性―地域在住高齢者を対象とした横断研究― （査読付）	共著	令和3年3月	医療福祉情報行動科学研究8：pp31-37，2021.	高齢者における歩行能力の年代間差異は、二重課題（Walking Stroop Carpet：WSC課題）がより鋭敏に反映するという仮説を検証した。65歳以上高齢者を年代別に3群に分け、3つの年代を目的変数としてロジスティック回帰分析を実施した結果、WSC課題と10m努力歩行が説明変数として抽出されたが、WSC課題の方がオッズ比が高い結果であった。 ・共著者：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，渡邊家泰 ・本人担当部分：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集
97）超高齢社会を担うﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ専門職が取り組むべき課題に関する論考―現状と展望を踏まえて―	単著	令和3年12月	奈良学園大学紀要第14集：pp115-127，2021.	超高齢社会においてリハビリテーション専門職が地域包括ケアや健康寿命延伸のための予防などに貢献するためには、新たにパラダイム転換が必要である。また、予防活動のターゲットやそれらを展開するための制度・関連事業の概略に触れるとともに、コロナ禍におけるリハビリテーション専門職の貢献についても概説した。 ・著　者：滝本幸治 ・本人担当部分：論文執筆，研究計画，データ計測・集計，資料収集
98）バーチャルな手のサイズにおける視覚効果が身体性・運動調節に及ぼす影響	共著	令和4年3月	四国理学療法士学会誌43：pp114-115，2022.	Virtual Reality(VR)により自身の手サイズを拡大・縮小させる視覚効果を用いた際の筋力調整能力課題を視標追従課題にて検討した。若年健常成人20名を対象として検討した結果、VRによる手の大きさの主観的感覚は、ノーマル・拡大・縮小サイズ間で有意に異なった。また、主観的感覚の差異の大きさと力量調節誤差の間には有意な相関を認めたが、サイズ間で力量調節誤差に有意差を認めなかった。 発表者名：竹林秀晃，中西未来，繁桝博昭，滝本幸治，奥田教宏，渡辺家泰，近藤寛，岡部孝生，宮本祥子，井上佳和，宅間豊，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ解析，論文一部執筆，資料収集
99）コロナ禍における地域理学療法・作業療法実習の取り組みと課題―学内実習の概要と学生アンケート調査による考察― （査読付）	共著	令和4年3月	医療福祉情報行動科学研究9：pp31-38，2022.	訪問リハビリテーションまたは通所リハビリテーションに関する実習（地域実習）を、コロナ禍の影響を受け、学内にて開講した。履修対象である理学・作業療法学生（2年次生）に対し、2週間の学内実習をICTの活用とともに、学生の能動的学習（ワークブックの活用、グループワークなど）を促し、臨床スタッフによる講義（現地とのオンライン講義含む）などを実施した。受講学生のアンケート結果からは、満足度は高かったものの、次年度以降の臨床実習に対する不安が高い傾向であることが明らかになった。 ・共著者：滝本幸治，池田耕二，吉川義之，坪内善仁，笹野弘美，前田吉樹，中島大貴，辻下聡馬，大浦智子，山形力生 ・本人担当部分：論文執筆，実習計画・運営，アンケート調査・集計，資料収集
100）ヒト皮膚由来線維芽細胞の培養温度が細胞増殖に与える影響 （査読付）	共著	令和4年8月	物理療法科学29(1)：pp72-76，2022.	ヒト皮膚由来線維芽細胞(HDFs)を異なる温度で培養し、細胞増殖に及ぼす影響を検討した。方法は、HDFsを31,33,35,37,39℃の5条件で培養し、24,48,72時間後に剥離して生細胞数と死細胞数をカウントした。結果、24時間時点の細胞数を基準とした細胞比率は、48,72時間のいずれの時点においても培養温度の高さに依存して高くなった。一方、細胞生存率については有意差を認めなかった。結論として、今回検討した5条件においては、31,33,35℃では37℃よりも細胞増殖が低下し、39℃では37℃に比べ細胞増殖が促進した。 ・共著者：吉川義之，野中紘士，滝本幸治，前重伯壮，植村弥希子，杉元雅晴 ・本人担当部分：研究計画，資料収集

101）安全性を考慮した座位での全身振動刺激トレーニングが身体機能に与える影響	共著	令和5年2月	四国理学療法学会誌44：pp64-65，2023.	立位不可の高齢者でも全身振動（WBV）刺激トレーニングが有効か検討する基礎研究として、若年者21名（平均20.3±0.8歳）を対象に検討した。方法は、立位群と座位群でそれぞれ足底に対してWBV刺激トレーニングを4週実施し、前後でバランス能力、下肢筋力を評価した。結果、立位群はバランスと筋力、座位群はバランスにのみ向上を認めたが、対照群（プラセボ）との比較では差を認めなかった。若年者であったことから十分な能力改善を認めなかったことが考えらる。今後は、高齢者における有効性の検討が必要である。 ・共著者：近藤　寛，竹林秀晃，滝本幸治，奥田教宏，渡邊家泰，岡部孝生，宮本祥子，井上佳和，宅間　豊，宮本謙三 ・本人担当部分：研究計画，一部論文執筆，資料収集
102）高齢者におけるタイミング一致課題と身体機能との関係	共著	令和5年2月	四国理学療法学会誌44：pp66-67，2023.	高齢者の静的・動的タイミングを一致させる能力と身体機能との関係について検討した。対象は、高齢の転倒群8名、非転倒群22名とした。方法は、タイミング一致課題として5つのランプを0.5秒間隔に順に点灯させ最終ランプの点灯に合わせる静的課題（手元のボタン押し）と動的課題（前方へのジャンプ）とともに、膝伸展筋力、敏捷性、バランス、歩行能力評価を実施した。結果、転倒群において動的タイミングとともに敏捷性、バランスと歩行能力が有意に低下していた。また、動的タイミングと敏捷性と歩行能力に有意な正の相関を認めた。 ・共著者：竹林秀晃，滝本幸治，奥田教宏，近藤寛，渡邊家泰，岡部孝生，宮本祥子，井上佳和，宅間　豊，宮本謙三 ・本人担当部分：研究計画，一部論文執筆，資料収集
103）COVID-19院内クラスターによる影響調査―実践報告を踏まえて―	共著	令和5年2月	四国理学療法学会誌44：pp96-97，2023.	院内クラスター発生時、理学療法が中止された80名（平均81.3歳）に対して簡易式評価表を作成し、中止前と再開後の身体機能および日常生活活動（ADL）評価を実施した。結果、平均中止期間は15.8日であり、再開時に関節可動域制限（57%）、筋力低下（23%）、運動時の息ぎれ・倦怠感（24%）などの廃用を認めた。ADL評価では、移乗や移動に関する項目が低下傾向であった。理学療法再開後も立ち入り制限等があったため、自主運動パンフレットを作成して遠隔運動療法を試みた。今後も、院内の感染レベルに準じた患者に対する介入策を検討する必要がある。 ・共著者：田中健太郎，滝本幸治，前田秀博 本人担当部分：研究計画，図表作成，一部論文執筆，資料収集
104）施設の種類に応じた臨床参加型実習モデルの提案―施設の特徴を活かした経験の積ませ方―	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要第15集：pp1-14，2023.	医療機関以外で理学療法実習が取り組まれるようになりつつある中、各種施設・事業所における理学療法の特徴・役割を整理し、臨床実習のあり方について解説した取りあげた施設は医療施設と介護施設、訪問リハビリテーションであり、臨床参加型実習モデルを示すとともに、臨床実習のキーポイントも提示した。 ・共著者：池田耕二，滝本幸治，城野靖朋，吉川義之，野田優希，野中紘士，辻下守弘 ・本人担当部分：論文構成，論文執筆，表作成，資料収集
105）老年健康科学領域の研究で用いられる統計解析―検定方法の選択基準と手順について―	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要第15集：pp107-120，2023.	老年健康科学領域で用いられる機会の多い統計解析について、目的に応じた検定手法をどのように選択するのか、あるいはどのような手順で検定を進めるとよいか系統的に整理した。差の検定や相関検定はじめ、多変量解析などについて取り上げ、老年健康科学領域で臨床研究に取り組む初学者や若手研究者にも理解できるよう解説した。 ・共著者：滝本幸治，近藤寛，田中健太郎 ・本人担当部分：論文構成，論文執筆，図表作成，資料収集

106）コロナ禍における生活変化がフレイルに及ぼす影響―山間地域における後期高齢者を対象とした質問紙調査―（査読付）	共著	令和5年3月	医療福祉情報行動科学研究10：pp55-62，2023.	コロナ禍における生活変化がフレイルに影響しているか、山間地域在住の75歳以上の後期高齢者58名を対象に質問紙調査を実施した。質問紙は、過去1年における主観的な生活変化を問うコロナ禍における生活変化の質問票（QCL）、Frailty Screening Index（FSI）等で構成した。結果、フレイル判定者は少なかったものの、コロナ禍における主観的な下肢筋力低下がフレイルに影響する可能性が示唆された。 ・共著者：滝本幸治，池田耕二，笹野弘美，辻下聡馬，椿根純子，小杏宣子 ・本人担当部分：研究計画，質問紙作成，統計解析，論文執筆，図表作成，資料収集
107）学術活動からGritの源泉を探る	共著	令和5年3月	高知県理学療法30：pp45-52，2023.	研究に着手し、研究成果を公表するまでにはいくつもの過程を経る必要があり、同時にどのような研究にも必ず限界があり、追及するほど解決・解明すべき課題を気付かされる。それ故に、研究活動は絶えず継続されうるものといえるが、このような学術活動に取り組み続けるためのコツやポイントをGritというキーワードから紐解き解説した。 ・著者：滝本幸治 ・本人担当部分：論文構成，論文執筆，図表作成，資料収集
108）健康の社会的決定要因に対するリハビリテーション専門職の在り方に関する論考	共著	令和5年12月	奈良学園大学紀要第16集：pp79-92，2023.	人々の健康に影響を及ぼす非医学的要因である「健康の社会的決定要因（SDH）」に着目し、これに基づく健康格差の問題が注目されている。介護予防や健康増進に寄与するリハビリテーション専門職は、その職能を活かしてどのようなかたちで健康格差の縮小に貢献し得るか論じるとともに、これを叶えるために解決すべきリハビリテーション専門職の課題についても言及した。 ・著者：滝本幸治，三好雅之，花澤侑里佳 ・本人担当部分：論文構成，論文執筆，図表作成，資料収集
109）地域の特性を考慮した村民の健康増進への取り組みの検討	共著	令和5年12月	奈良学園大学紀要第16集：pp47-52，2023.	高齢化が進んだ山間部の自治体において、社会資源をはじめとした地域特性を把握するためにフィールドワークにて調査した。結果、農業従事者が多く高齢に至っても継続せざるを得ない状況があり、健康管理に関する意識向上を図るとともに、公共交通機関の未整備や入所施設が少ないことなどを踏まえ、理学療法士として健康指導や行政との協調的な取り組みが重要である。 ・著者：笹野弘美，平野孝行，池田耕二，滝本幸治，辻下聡馬，笹野英樹 ・本人担当部分：論文構成，論文修正，資料収集
（その他） 2）歩行動揺計を用いた認知機能検査に関する研究	単著	平成30年5月	公益信託高知新聞・高知放送「生命（いのち）の基金」（平成28年度）実績報告書 A4判全1頁	地域在住高齢者を対象に一般的な認知機能検査とともに、10mの歩行路を快適・努力条件下での歩行を求めた。歩行時には腰部と踵部に加速度センサを貼付し、歩行時の体幹加速度を計測した。結果、認知機能が低下している者は歩行時の体幹加速度振幅(root mean square)が高値を示し、且つ歩行時の滑らかさに欠く(Harmonic ratioが低値)特徴を得た。 研究代表者：滝本幸治
（国際学会発表） 11）Usefulness of the walking stroop carpet in evaluation fall risks among the community-dwelling elderly（Walking Stroop Carpetによる地域在住高齢者の転倒リスク評価の有用性）	―	平成27年5月	World Confederation Physical Therapy Congress 2015（Singapore）	地域在住高齢者を対象にWalking Stroop Carpet(WSC)という二重課題による転倒リスク評価の有用性について検討した。その結果、一般的な歩行能力テストであるTUGとともにWSCは転倒歴を説明する変数であり、判別性能が高いことからその有用性が示された。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成

12) The association between mental chronometry temporal/spatial conformity and physical ability in the elderly （高齢者の心的時間と時間・空間的適合性と身体能力との関連）	—	平成27年5月	World Confederation Physical Therapy Congress 2015 （Singapore）	10m歩行による心的時間(MC)の加齢変化と、MCと身体機能との関連について検討した。結果、MCと実測時間との誤差は若年者より高齢者で高値を示した。また、その誤差は若年・高齢者ともに実測時間よりMCが延長する者が有意に多かった。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
13) EFFECTS OF AGING ON PERFORMANCE IN STATIC AND DYNAMIC COINCIDENCE TIMING TASKS: ASSOCIATION WITH FALLS （静的・動的同時タイミング課題における加齢の影響：転倒との関連）	—	令和元年5月	World Confederation Physical Therapy Congress 2019 (Geneva, Switzerland)	加齢および転倒リスクについて、静的な反応課題は多いが動的反応課題は少ない。そこで、目前に設置されたライトの発光に対して静的（手元スイッチを押す）および動的（ジャンプする）反応課題を実施し、若年者と高齢者（転倒歴有無別）で比較・検討した。結果、若年者より高齢者の方が反応が遅延していた。また、転倒歴がない高齢者は静的・動的反応課題間で反応時間の差はなかったが、転倒歴がある高齢者では動的反応時間が有意に遅延していた。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治，奥田教宏，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，渡邊家泰 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
14) Usefulness of a Walking Stroop Carpet in Evaluating Cognitive Impairment and Fall Risk Among The Community-Dwelling Eldery （地域在住高齢者の認知機能障害と転倒リスク評価におけるWSCWalking Stroop Carpetの有用性）	—	令和3年4月	World Physiotherapy Congress 2021 (online)	地域在住高齢者の転倒リスクおよび認知機能障害を二重課題であるWalking Stroop Carpet(WSC)課題により評価を試みた。自立した生活を営む113名の高齢者を対象に実施したところ，転倒リスクはWSC課題の色条件下において，認知機能障害はWSC課題の文字条件下において評価可能であった。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
（国内学会発表） 82) 高齢者におけるMental Chronometryの時間・空間的一致性と身体能力との関係	—	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会（横浜）（理学療法学41. Supplement 2: 0100）	10m歩行による心的時間(MC)の加齢変化と、MCと身体機能との関連について検討した。結果、MCと実測時間との誤差は若年者より高齢者で有意に高値を示した。また、その誤差は若年・高齢者ともに実測時間よりMCが有意に延長する者が多かったが、若年・高齢者間で差は認めなかった。 発表者名：竹林 秀晃，滝本 幸治，奥田 教宏，宮本 謙三，宅間 豊，井上 佳和，宮本 祥子，岡部 孝生，小松祐貴 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
83) 加齢に伴う足タッピングのタイミングと筋出力制御の特徴— 異なる目標発揮筋力による検討 —	—	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会（横浜）（理学療法学41. Supplement 2: 0335）	足タッピング課題を用いて加齢の要因に注目し、異なる力発揮がタイミングと力制御に及ぼす影響について検討した。結果、タッピング間隔の誤差や変動は高齢者が有意に大きく、目標発揮筋力が大きくなるほどその差が縮小する傾向であった。筋出力ピーク値の変動も高齢群で有意に大きかった。 発表者名：滝本 幸治，竹林 秀晃，宮本 謙三，宅間 豊，井上 佳和，宮本 祥子，岡部 孝生，奥田 教宏，椛 秀人 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
84) 肢位の違いによる内側広筋の筋活動特性	—	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会（横浜）（理学療法学41. Supplement 2: 1294）	肢位別による内側広筋の筋発揮量の相違について筋電図を用いて検討した。結果、立位同期settingでは筋活動量が最も低く、踵settingでは最も筋活動量が高かった。 発表者名：奥田 教宏，竹林 秀晃，宮本 謙三，宅間 豊，井上 佳和，宮本 祥子，岡部 孝生，滝本 幸治 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成

85）地域高齢者における転倒因子の検討と各年代における片脚立位時間の変化について	—	平成26年11月	第43回四国理学療法士学会（高知）（プログラム・抄録集p80）	地域在住高齢者に対し、転倒に関連する因子を検討するとともに各年代の片脚立位時間について検討した。結果、転倒歴のある者はない者と比較して片脚立位時間や膝伸展筋力が有意に低値であり、年代が上がるにつれて片脚立位の保持時間が短縮していた。 発表者名：奥田教宏，竹林秀晃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録一部作成
86）足タッピング課題による加齢に伴う力制御能力の特性―異なる力発揮水準を用いた検討―	—	平成26年11月	第43回四国理学療法士学会（高知）（プログラム・抄録集p90）	足タッピングを異なる力発揮水準で行い力制御の特性を若年・高齢群間で比較した。その結果、小さい力発揮時に高齢群の力発揮の変動が大きく、力発揮水準が大きいほど若年・高齢群の差が縮小する傾向にあった。 発表者名：滝本幸治，高橋夏姫，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏，椛秀人 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
87）Mental Rotation課題における道具使用・物体把持の影響	—	平成26年11月	第43回四国理学療法士学会（高知）（プログラム・抄録集p113）	運動イメージの評価法のひとつであるMental Rotation（MR；心的回転）課題を用いて、道具使用有無別に成績を比較した。結果、正答率に差を認めなかったが、反応時間は道具を使用した条件下で有意に速かった。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治，奥田教宏，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
88）Walking Stroop Carpetによる転倒リスク評価の妥当性	—	平成27年3月	第28回高知県理学療法士学会（高知市）（抄録集p24 ）	Walking Stroop Carpet（WSC)は転倒リスク評価に用いることができるかその妥当性について検討した。結果、転倒歴の有無別群間で、WSC（色条件）の所要時間に有意差を認め、ROC曲線を用いた検討より、転倒歴の判別性能が高いことが確認された。 発表者名：滝本幸治，近森鷹希，竹林秀晃，奥田教宏，宅間　豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，門田美和，古谷千佐子，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
89）高齢者の努力歩行がMental Chronometryに及ぼす影響―転倒と運動機能との関連―	—	平成27年6月	第50回日本理学療法学術大会（東京）（理学療法学42 Supplement 2: P2-A-0513）	高齢者の努力歩行における心的時間(MC)に着目し、転倒や運動機能との関連ついて検討した。結果、歩行の実測時間とMCとの誤差は転倒歴のある高齢者で高値を示した。また、時間一致の精度が高い者ほど運動機能が高かった。 発表者名：竹林 秀晃，滝本 幸治，奥田 教宏，宮本 謙三，宅間 豊，井上 佳和，宮本 祥子，岡部 孝生 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
90）Walking Stroop Carpetによる新しい転倒リスク評価の有用性	—	平成27年6月	第50回日本理学療法学術大会（東京）（理学療法学42 Supplement 2: P3-C-1069）	Walking Stroop Carpet(WSC)という二重課題が転倒リスク者の検出に有効であるか検討した。結果、WSC（色条件）とTimed Up & Go testが転倒歴を説明する変数として抽出されたが、WSCの判別性能がより優れることが分かった。 発表者名：滝本幸治，近森鷹希，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
91）Stroop Walking Taskを用いた転倒リスク評価の有用性	—	平成27年6月	第35回日本リハビリテーション医学会中国・四国地方会（高知）（プログラム・抄録集p54-55 ）	Stroop Walking Task（SWT)という二重課題が転倒リスク者の検出に有効であるか検討した。結果、SWT遂行時のエラー数は転倒歴有無別群間で差は認めなかったが、SWT（色条件）は正診率が74.5%であり、転倒リスク者の検出に有効であることが考えられた。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成

92）高齢者における歩行の運動イメージについて―自由歩行と努力歩行のMental Chronometry―	―	平成27年6月	第35回日本リハビリテーション医学会中国・四国地方会（高知）（プログラム・抄録集p56 ）	転倒歴の有無別群間で、歩行の運動イメージ能力をMental Chronometry (MC)により評価し比較・検討した。結果、転倒群の運動イメージは有意に誤差が大きく、それは努力歩行においてより顕著であった。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
93）複数体肢の同時動作における反応時間からみた運動制御	―	平成27年11月	第44回四国理学療法士会学会（愛媛）（プログラム・抄録集p77）	複数体肢の同時動作の組み合わせによる反応時間の特性について、健常成人を対象に検討した。結果、四肢いずれか単肢および両上肢や両下肢で反応するより、同側上下肢や対側上下肢で反応する際に有意に反応時間が遅延することが分かった。 発表者名：竹林秀晃，前田康介，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録一部作成
94）自治体事業における効率的な認知機能テストの試み―Walking Stroop Carpetを用いた検討―	―	平成28年3月	第29回高知県理学療法学会（香南市）（抄録集p28）	Walking Stroop Carpet(WSC)という二重課題による歩行能力評価は、集団に対する認知機能検査に有用か地域在住高齢者を対象に検討した。結果、認知機能検査(MMSE)が24点未満の者を正診率90.5%で検出できたことから、WSCの認知機能検査としての有用性が確認された。 発表者名：滝本幸治，伊東咲也香，上岡奈津美，川久保優菜，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
95）Walking Stroop Carpetによる認知機能評価の有用性―自治体事業における地域在住高齢者を対象とした検討―	―	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会（札幌）（理学療法学43. Supplement 2: O-YB-01-4）	Walking Stroop Carpet(WSC)が自治体事業等において認知機能障害のスクリーニング検査として有用であるか地域在住高齢者を対象に検討した。重回帰分析などにより検討した結果、WSCは認知機能検査として有用であることが見いだされた。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
96）加齢が下肢の視覚誘導性関節運動調節に及ぼす影響	―	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会（札幌）（理学療法学43. Supplement 2: P-KS-29-2）	加齢が下肢の視覚誘導性関節運動調節に及ぼす影響について検討した。結果、関節位置覚再現性の誤差は若年・高齢者間で差を認めなかったが、視覚誘導性関節運動では高齢者において有意に誤差が大きかった。 発表者名：竹林秀晃，田中未優，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成
97）高齢者の視覚フィードバックによる関節位置調節課題の制御特性	―	平成28年11月	第78回日本体力医学会中国・四国地方会（山口）（抄録集p36-37）	加齢が下肢の視覚フィードバックによる関節位置調節課題に及ぼす影響について検討した。結果、静的な関節位置覚再現性は高齢・若年者間で差を認めなかったが、動的な条件下では関節位置調節の誤差が高齢群で有意に大きかった。 発表者名：竹林秀晃，田中美優，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，岡部孝生，奥田教宏 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成
98）Dual Taskによる歩行能力と認知機能評価の有用性―Walking Stroop Carpetによる検討―	―	平成28年11月	第45回四国理学療法士学会（香川）（プログラム・抄録集p39）	Walking Stroop Carpet(WSC)という新しい二重課題による歩行能力評価により、転倒リスクと認知機能低下の評価を高齢者を対象に試みた。結果、WSCは転倒歴や認知機能障害の判別性能が良好であることが示された。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成

99）自己身体像の視覚外乱刺激は感覚の重みづけを変化させる―身体感覚情報との不一致が及ぼす影響―	―	平成28年11月	第45回四国理学療法士学会（香川）（プログラム・抄録集p67）	視覚に自己の背面像が回転する外乱刺激を加えることで身体感覚情報との不一致をつくり、立位保持時の重心動揺に与える影響を検討した。結果、回転角度が大きくなるに従い、視覚より前庭覚や体性感覚が関与することが示唆された。 発表者名：竹林秀晃，弘井鈴乃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成
100）心理社会的要因による痛み関連脳領域の変化―高社会性げっ歯類を用いた基礎研究―	―	平成28年11月	第45回四国理学療法士学会（香川）（プログラム・抄録集p68）	プレーレーハタネズミを用いてその社会環境を変化させ、心理･社会的要因により痛み関連脳領域の反応性がどう変化するか検討した。結果、心理･社会的要因による痛みの修飾メカニズムにドーパミンが関与している可能性が示唆された。 発表者名：奥田教宏，大迫洋治，竹林秀晃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，由利和也 本人担当部分：データ解析，資料収集，抄録一部作成
101）視覚フィードバック・負荷の有無が関節位置覚に及ぼす影響―若年者と高齢者の比較―	―	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会（千葉）	視覚フィードバック（FB）と負荷有無の条件下で、加齢を加味して関節運動制御特性を検討した。結果、高齢者では視覚FBがない条件下で関節位置の変動が大きく、目標関節角度に対して正の誤差が大きくなる特徴が得られた。 発表者名：竹林秀晃，津野沙也加，滝本幸治，奥田教宏，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成
102）痛みの社会的修飾メカニズムの一考―一夫一婦制げっ歯類を用いた基礎的研究―	―	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会（千葉）	高社会性げっ歯類（プレーリーハタネズミ）を用い、社会環境の変化による痛みの修飾メカニズムについて検討した。結果、パートナーの存在が痛刺激に対するペインマトリックスの反応性を高めることが示唆された。 発表者名：奥田教宏，大迫洋治，竹林秀晃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，由利和也 本人担当部分：データ解析，資料収集，抄録一部作成
103）パーキンソン病の姿勢調節障害とは―表面筋電図を用いた検討―	―	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会（千葉）	パーキンソン病（PD）者の姿勢調節障害に着眼し、立位保持時の足関節周囲筋を筋電図学的に評価し検討した。結果、PDの進行に伴い立位保持時の重心動揺が大きくなり、前脛骨筋の活動が増大すること確認された。 発表者名：下川貴大，横瀬崇光，岡本和久，渡利太，武田正和，竹林秀晃，滝本幸治 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
104）地域在住高齢者に対する二重課題を用いた歩行能力の年代比較―Walking Stroop Carpetによる検討―	―	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会（千葉）	地域在住高齢者の年代比較をWalking Stroop Carpet（WSC）課題を用いて実施し、加齢による歩行能力の特性を検討した。結果、一般的な歩行能力テストでは検出が困難であったが、WSC課題（文字条件）は、後期高齢者（75歳～）と超高齢者（85歳～）の差異を明らかにした。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
105）腱への振動刺激が筋力・筋出力調節に及ぼす影響	―	平成29年9月	第72回日本体力医学会大会（愛媛）	振動刺激が筋力と筋出力調節能力に及ぼす影響を、膝伸展運動課題を用いて大腿四頭筋腱に対し振動刺激を加えた。結果、再大筋力の増加とともに、膝伸展40%，20%MVC時に筋出力調節能力の精度が向上することが分かった。 発表者名：竹林秀晃，吉川尚輝，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏，渡邊家康 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成

106）新しい二重課題を用いた地域在住高齢者に対する転倒リスク評価―Walking Stroop Carpet課題による検討―	―	平成29年9月	第72回日本体力医学会大会（愛媛）	地域在住高齢者を対象に、Walking Stroop Carpet（WSC）課題という二重課題による転倒リスク評価を試みた。結果、WSC課題（色条件）は他の一般的な歩行能力指標よりも転倒歴の判別性能に秀でている結果が得られた。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，渡邊家康，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
107）心理･社会的ストレスによるペインマトリックスの反応性変化―炎症性疼痛時の脳活動性―	―	平成29年11月	第46回四国理学療法士学会（徳島）（プログラム・抄録集p73）	高社会性げっ歯類のプレーリーハタネズミを用いて心理･社会的要因による痛み関連領域の反応性を検討した。炎症性疼痛を惹起させ脳を採取した結果、パートナーロス群では内因性疼痛抑制系であるドーパミン回路が機能しにくく、嫌悪感や不安が強かった可能性が示唆された。 発表者名：奥田教宏，大迫洋治，竹林秀晃，滝本幸治，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，渡邊家泰，宅間　豊，宮本謙三，由利和也 本人担当部分：データ解析，資料収集，抄録一部作成
108）加齢による二重課題条件下での歩行特性―体幹加速度計測による検討―	―	平成29年11月	第46回四国理学療法士学会（徳島）（プログラム・抄録集p109）	二重課題（減算課題）歩行時の体幹加速度を計測し、加齢による歩行特性について検討した。結果、加齢とともに二重課題による影響を反映したパラメータは加速度成分(RMS)であり、高齢者のみ単純課題－二重課題間でRMSの増大を認めた。 発表者名：滝本幸治，山本聖香，浅井　剛，竹林秀晃，奥田教宏，宅間　豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，渡邊家泰，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
109）二重課題による身体的フレイル評価の試み―Walking Stroop Carpetを用いた検討―	―	平成30年2月	第3回日本予防理学療法学会サテライト集会（東京）（プログラム集p78）	Walking Stroop Carpet（WSC）という歩行による二重課題を用いて、地域在住高齢者を対象に身体的フレイルの評価を試みた。結果、一般的な歩行能力検査では検出できなかったが、WSC課題（文字条件）はプレフレイルに該当する高齢者を検出することができた。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，渡邊家泰，宅間　豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，岡林　悠，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
110）地域在住高齢者の認知機能と歩行能力との関連―体幹加速度計測による検討―	―	平成30年6月	第55回日本リハビリテーション医学会学術集会（福岡）	地域在住高齢者を対象に、認知機能テストとともに歩行を加速度センサで計測し、認知機能と歩行機能との関連を精査した。結果、健常群より認知機能低下群の歩行速度が遅く、歩行時の加速度振幅が大きい特徴を得たが、多変量解析では有意な変数として抽出されなかった。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，渡邊家泰，浅井　剛，宅間　豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，岡林　悠，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
111）加齢における選択反応課題のサイモン効果が及ぼす影響	―	平成30年6月	第55回日本リハビリテーション医学会学術集会（福岡）	選択反応課題（ボタン押し課題）における刺激の一致・不一致が加齢とともに反応時間にどう影響するか検討した。結果、若年・高齢者ともに反応時間の遅延を認める共通項も認めたが、刺激と反対方向に反応する不一致課題では高齢者がより遅延した。 発表者名：竹林秀晃，入野哲暢，滝本幸治，奥田教宏，宮本謙三，宅間　豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，渡邊家泰 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成

112）Older adult have delayed reaction times to peripheral visual stimuli during exercise （高齢者における運動中の周辺視野刺激に対する反応時間の遅延について）	—	平成30年9月	第73回日本体力医学会大会（福井）（JPFSM Vol.7,2018: p342）	中心及び周辺視野に提示する視覚刺激に対するステッピングの反応時間について、20代以上の成人65名を対象に検討した。結果、50歳代を境に非線形に反応時間は遅延し、反応時間のバラつきが大きくなる結論を得た。 発表者名：竹林秀晃，今西　諒，滝本幸治，奥田教宏，宮本謙三，宅間　豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，渡邊家泰 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成
113）認知機能低下が歩行に及ぼす影響―加速度計測による歩行パラメータを用いた検討―	—	平成30年10月	第5回日本予防理学療法学会学術大会（福岡）（プログラム集p149）	一般的な歩行能力検査(10m歩行)時に加速度計測を行い、高齢者の認知機能が歩行パラメータのどのような側面に影響するか検討した。結果、認知機能が低下している者は歩行時の加速度振幅(RMS)が増大するとともに、歩行の円滑性の指標であるHarmonic ratio（前後成分）が低値を示したことから、円滑性に欠く歩行をしている可能性が示唆された。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，浅井　剛，奥田教宏，渡邊家泰，岡林　悠，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
114）視覚外乱刺激において周辺環境の有無が姿勢制御に及ぼす影響	—	平成30年12月	第47回四国理学療法士学会（高知）（プログラム・抄録集p56）	Head Mounted Displayを用いて映像を回転させることによる視覚外乱刺激を加え、姿勢制御に及ぼす影響について検討した。結果、背景があると重心動揺が増大するとともに、回転角度が大きいとより顕著に重心動揺が増大した。視覚情報が姿勢制御に与える影響が異なることから、トレーニングへの応用が期待できる。 発表者名：竹林秀晃，藤田雅登，滝本幸治，奥田教宏，渡邊家泰，岡部孝生，宮本祥子，井上佳和，宅間　豊，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成
115）認知機能低下が歩行パラメータに与える影響―体幹加速度計測による検討―	—	平成30年12月	第47回四国理学療法士学会（高知）（プログラム・抄録集p76）	地域在住高齢者を対象に、認知機能低下有無が各種歩行パラメータに与える影響について検討した。結果、歩行時の合成RMS（加速度振幅の大きさ）が健常群より認知機能低下群で有意に増大するとともに 、多変量解析により認知機能低下を説明する変数として抽出された（OR:1.34, 95%CI:1.01-1.77, p<0.05)。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，渡邊家泰，浅井　剛，宅間　豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，岡林　悠，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
116）運動負荷による疼痛域値の変化―自転車エルゴメーターによる比較―	—	平成30年12月	第47回四国理学療法士学会（高知）（プログラム・抄録集p85）	自転車エルゴメーター駆動の運動負荷量の違いが疼痛域値に与える影響について、健常若年成人男性30名を対象に検討した。心拍数100拍／分と150拍／分の運動20分実施後、第6頚椎棘突起側方の表在感覚・圧痛域値を計測した結果、いずれの条件も運動前後で比較で、運動後に疼痛域値が上昇した。しかし、条件間では両域値に差を認めなかった。 発表者名：奥田教宏，中平愛里，竹林秀晃，宮本謙三，宅間　豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，滝本幸治，渡邊家泰，大迫洋治 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成
117）視空間記憶能力と歩行能力および転倒歴との関連―視覚的ワーキングメモリスパンテストを用いた検討―	—	平成30年12月	第47回四国理学療法士学会（高知）（プログラム・抄録集p144）	視空間情報の記憶能力と高齢者の歩行能力・転倒との関連について、高齢者15名を対象に検討した。歩行能力検査（10m歩行、TUG）とともに、視覚的ワーキングメモリスパンテスト（VWMST）を実施した結果、非転倒群より転倒群で空間位置情報を記憶する能力（スペース課題）が有意に低下しており、多変量解析によりスペース課題の成績はTUGを説明する変数として抽出された。 発表者名：橋詰愛里彩，谷脇弘将，山﨑　優，滝本幸治 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成

118）外来患者に対する杖適応の判断基準の検討	—	平成30年12月	第47回四国理学療法士学会（高知）（プログラム・抄録集p154）	整形外科疾患により外来通院中の患者を対象に、杖使用を決定づける要因について検討した。結果、杖使用群と未使用群間の比較において、有意に杖使用群の10m歩行時間が遅延しており、多変量解析によって歩行時間のみが杖使用有無を決定付ける変数として抽出された。ROC曲線による判別性能はAUC:0.79であり、カットオフ値は7.8秒であった。 発表者名：土居優仁，山本哲夫，山下亜乃，片岡歩，中内睦郎，滝本幸治 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
119）パーキンソン病症例を対象にした短期集中入院の効果	—	平成30年12月	第47回四国理学療法士学会（高知）（プログラム・抄録集p165）	パーキンソン病(PD)専用リハコースに入院するPD症例37名の効果検証を行った。リハ専門職による介入を240分／日×週5回×5週間実施したところ、入院前後比較によりUPDRSのpart1（精神機能、行動及び気分）、part2（ADL）、part（運動機能）は有意に改善したが、part4（治療の合併症）は不変であった。また、抑うつ性(SDS)は有意に低下した。 発表者名：下川貴大，馬渕　勝，岡本和久，武田正和，横瀬崇光，國重裕二，藪田英吾，澤田侑貴，鎌田　剛，滝本幸治，三ツ井貴夫 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
120）臨床実習成績の妥当性と原因帰属要因との関連―15年前との比較―	—	平成31年2月	第32回高知県理学療法学会（高知市）（抄録集p27）	学生の臨床実習成績に対する認識について、過去に実施したものと同様のアンケート調査を臨床総合実習後の4年次生（91名、延べ182件）を対象に実施した。結果、過去と同様に成績の帰属要因として努力が反映していたが、今回新たに指導者との相性が最も高く反映しており、過去の報告と異なる特徴的な変化であった。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治，奥田教宏，岡部孝生，宮本祥子，渡邊家泰，井上佳和，宅間豊，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
121）運動習慣を有する高齢者の骨格筋量及び歩行特性―プレフレイルに注目した検討―	—	令和元年6月	第56回日本リハビリテーション医学会学術集会（神戸）	運動習慣を有する高齢者も長期的には加齢に伴い体力が低下するが、その最初の転機であるプレフレイルの特徴を検討した。高齢者37名（ロバスト18名、プレフレイル19名）を対象に四肢骨格筋量と歩行パラメータを計測し特徴を検出したところ、プレフレイル群の方が四肢骨格筋量が低値を示し、歩行時の加速度振幅（垂直方向）が有意に高値を示した。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，渡邊家泰，門脇康平，井上優輝，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，浅井剛，岡林遥，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
122）早期退院が可能であった肺炎患者の特徴と要因	—	令和元年6月	第56回日本リハビリテーション医学会学術集会（神戸）	患者の栄養状態に注目し、肺炎患者の早期退院に向けた取り組みを行った。肺炎の診断にて入院しその後自宅退院となった61名の高齢者を対象に、入院時の体格指数(BMI)、栄養評価(SGA)、介護度、FIMなどのを用いて評価した。結果、入院時BMIとともに、SGAが早期退院に影響していることが示された。 発表者名：谷岡寿昭，西田佳祐，蔭山美紀，小松聖偏，市川徳和，滝本幸治 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成

123）身体的フレイルが歩行に及ぼす影響―運動習慣を有する地域在住高齢者の検討―	―	令和元年9月	第74回日本体力医学会大会（つくば）	身体的フレイルの基準に歩行速度があるが、定期的な運動習慣を有する高齢者における歩行の質的な側面の特徴を検出した。運動習慣を有する高齢者40名を対象に、J-CHSに基づくフレイル判定とともに歩行評価（速度、加速度計測）を実施した。結果、歩行速度はフレイル者がそうでない者より有意に低下し，加速度解析による歩行時の円滑さの指標(harmonic ratio)gaが低値（円滑さに欠く）特徴を検出した。なお、健常者とプレフレイルとの者間で、歩行の差異は認めなかった。 発表者名：滝本幸治，門脇康平，竹林秀晃，浅井剛，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
124）視標追従課題における自他由来波形操作が運動制御に与える影響	―	令和元年11月	第48回四国理学療法士学会（愛媛）	運動学習において運動観察学習の有効性が知られている。本研究では、視標追従力量調節課題による自他のフィードバック(FB)情報が、力量調節の学習に与える影響を検討した。健常成人32名を対象とし、視標追従力量調節課題を実施した結果、他者の課題成績のFBでは、運動主体感の低下を招き力量調節の学習が妨げられた。また、自己の課題成績がFBされたにもかかわらず、それが他者の課題成績であると疑った場合には学習が妨げられた。 発表者名：竹林秀晃，門田涼香，滝本幸治，奥田教宏，渡邊家泰，岡部孝生，宮本祥子，井上佳和，宅間豊，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成
125）歩行予備能力は独立して転倒リスクを反映するか？―地域在住高齢者を対象とした検討―	―	令和2年8月	第57回日本リハビリテーション医学会学術集会（京都）	2種の10m歩行所要時間の変化率で表される歩行予備能力は、既知の歩行指標と独立して転倒リスクを反映するか検討した。自立生活を営む地域在住高齢者185名を対象とし、転倒群・非転倒群に分類し種々の歩行能力評価とともに歩行予備能力を算出した。結果、多変量解析により歩行予備能力のみが転倒歴を説明する変数として抽出された。簡便に算出可能な本指標は、自立高齢者の転倒リスクを反映する指標であることが示唆された。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，田井絢子，矢野まのか，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
126）視覚フィードバックの操作による自己身体の変化が身体認知・筋力調節に及ぼす影響	―	令和2年12月	第25回日本基礎理学療法学会学術大会（Web開催）	VRによる視覚フィードバックにより、自己身体サイズを変化させた際の身体認知および筋力調節能力に及ぼす影響について検討した。対象は健常成人20名である。VRにより被検者の手のサイズを拡大・縮小する条件下で、ピンチ力の筋力調節課題を実施した。結果、VRによる手の大きさの主観的感覚は、拡大・縮小により有意差を認めた。しかし、ピンチ力の調節課題における絶対誤差は有意差を認めなかった。 発表者名：竹林秀晃，弘瀬未来，繁枡博昭，滝本幸治，奥田教宏，渡邊家泰，近藤寛 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，プレゼン資料作成
127）創傷被覆材における近赤外線透過率の検証	―	令和3年2月	第1回物理療法部門研究会（Web開催）	創傷被覆材（ドレッシング材）管理下において，赤外線照射の透過率を確認することで，褥瘡治療の補完療法実施時の条件を確認した。結果，フィルムドレッシング材は約94～97%の透過性を有した。一方，ハイドロコロイドドレッシング材，ポリウレタンドレッシング材，ハイドロポリマードレッシング材は，13～96%と透過率に差があり，使用ドレッシング材の透過率を考慮した照射強度の設定が必要であることが示唆された。 発表者名：吉川義之，辻下守弘，城野靖朋，滝本幸治 本人担当部分：研究計画，資料収集，抄録一部作成

128）バーチャルな手のサイズにおける視覚効果が身体性・運動調節に及ぼす影響	—	令和3年10月	第49回四国理学療法士学会in香川（Web開催）	Virtual Reality(VR)を用いて自身の異なる大きさの手を視覚効果として与えた際の筋力調整能力を、視標追従課題により検討した。若年健常成人20名を対象とした結果、VRによる手の大きさの主観的感覚は、ノーマル・拡大・縮小サイズ間で有意に異なった。また、主観的感覚の差異の大きさと力量調節誤差の間には有意な相関を認めたが、サイズ間で力量調節誤差に有意差を認めなかった。 発表者名：竹林秀晃，弘瀬未来，繁桝博昭，滝本幸治，奥田教宏，渡辺家泰，近藤寛，岡部孝生，宮本祥子，井上佳和，宅間豊，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録・プレゼン資料一部作成
129）筋力調節課題における個人内・個人間での運動制御特性	—	令和3年10月	第26回日本基礎理学療法学会学術大会（Web開催）	筋出力が変化する筋力調節課題において、一人で力制御を行う個人内課題と二人の共同行為として行う個人間課題により力制御の運動特性を検討した。結果、個人内および個人間課題の間で力制御の誤差や変動に有意差を認なかった。個人間であっても相手の出力に応じて自己の出力を増減させ補うような相補的側面や同調的側面がみられた。 発表者名：竹林秀晃，西岡拓真，滝本幸治，奥田教宏，渡辺家泰，近藤寛，岡部孝生，宮本祥子，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，データ解析，資料収集，抄録一部作成
130）地域の特性を考慮した村民の健康増進への取り組みの検討	—	令和4年5月	第7回予防理学療法学会サテライト集会（鹿児島）（ハイブリット開催）	高齢化率の高い山間地域の住民がAging in Placeを実現するため、地域環境の特性や社会資源を調査し、村民の健康増進・介護予防の在り方を検討した。方法は、現地にて行政職員や社会福祉協議会からヒアリングを行い、フレイル対策教室（ロコトレ）等の訪問にて、現状を分析した。結果として、同地域は高齢でも一次産業従事者が多いため元気高齢者が多いと思われる一方、入所施設等が無いため、障害を有した場合の生活継続が困難になる可能性がある。高齢期のみならず、中高年者へのヘルスプロモーションが重要と考えられた。 発表者名：笹野弘美，平野孝行，池田耕二，滝本幸治，辻下聡馬，笹野英樹 本人担当部分：研究計画、抄録作成、ポスター作成
131）運動イメージの時間的要素は転倒に影響する	—	令和4年10月	第20回日本神経理学療法学会学術大会（大阪）	運動イメージ能力評価として心的時間測定（MC）を用いて、高齢者の静的および動的タイミングの一致能力を計測し検討した。高齢者31名（転倒群9名、非転倒群22名）を対象に、MCには10m歩行課題を用いた。また、ランプの点灯にタイミングを合わせる静的・動的課題を実施した。検討した結果、タイミング一致をジャンプ動作で求められる動的課題において、転倒群が有意に誤差が大きかった。また、転倒群でのみMCと動的課題の誤差に有意な正の相関を認めた。結論として、転倒群では、ジャンプ動作など自身の運動能力から運動計画を正しく見積もる能力が低下していることが示唆された。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治，奥田教宏，近藤寛，渡邊家泰，岡部孝生，宮本祥子，井上佳和，宅間豊，宮本謙三 本人担当部分：研究計画、抄録作成、ポスター作成
132）コロナ禍における生活変化はフレイルに影響するか？―後期高齢者を対象とした質問紙による検討―	—	令和4年11月	第9回日本予防理学療法学会学術大会（東京）	コロナ禍における生活変化がフレイルに影響しているか、奈良県曽爾村の住民健診に参加したの75歳以上の後期高齢者58名を対象に質問紙調査を実施した。質問紙は、過去1年における主観的な生活変化を問うコロナ禍における生活変化の質問票（QCL）、Frailty Screening Index（FSI）等で構成した。結果、QCLのうち主観的な脚筋力低下や毎日の移動量、食事量減少などがフレイルと関連していることが示唆された。 発表者名：滝本幸治，池田耕二，笹野弘美，辻下聡馬，椿根純子，小杰宜子 本人担当部分：研究計画，データ計測・解析，資料収集，抄録・プレゼン資料作成

133）安全性を考慮した座位での全身振動刺激トレーニングが身体機能に与える影響	—	令和4年11月	第50回四国理学療法士学会（徳島）	立位不可の高齢者でも全身振動（WBV）刺激トレーニングが有効か検討する基礎研究として、若年者21名（平均20.3±0.8歳）を対象に検討した。方法は、立位群と座位群でそれぞれ足底に対してWBV刺激トレーニングを4週実施し、前後でバランス能力、下肢筋力を評価した。結果、立位群はバランスと筋力、座位群はバランスにのみ向上を認めたが、対照群（プラセボ）との比較では差を認めなかった。若年者であったことから十分な能力改善を認めなかったことが考えられ、引き続き高齢者においても検討が必要である。 発表者名：近藤寛，竹林秀晃，滝本幸治，奥田教宏，渡邊家泰，岡部孝生，宮本祥子，井上佳和，宅間豊，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
134）高齢者におけるタイミング一致課題と身体機能との関係	—	令和4年11月	第50回四国理学療法士学会（徳島）	高齢者に対して静的・動的タイミングを合わせる能力と身体機能との関係について検討した。対象は、高齢の転倒群8名、非転倒群22名とした。方法は、タイミング一致課題として5つのランプを0.5秒間隔に順に点灯させ最終ランプの点灯に合わせる静的課題（手元のボタン押し）と動的課題（前方へのジャンプ）とともに、膝伸展筋力、敏捷性、バランス、歩行能力評価を実施した。結果、転倒群において動的タイミングとともに敏捷性、バランスと歩行能力が有意に低下していた。また、動的タイミングと敏捷性と歩行能力に有意な正の相関を認めた。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治，奥田教宏，近藤寛，渡邊家泰，岡部孝生，宮本祥子，宅間豊，井上佳和，宮本謙三 本人担当部分：研究計画，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
135）COVID-19院内クラスターによる影響調査―実践報告を踏まえて―	—	令和4年11月	第50回四国理学療法士学会（徳島）	院内クラスター発生時、理学療法が中止された80名（平均81.3歳）に対して簡易式評価表を作成し、中止前と再開後の身体機能および日常生活活動（ADL）評価を実施した。結果、平均中止期間は15.8日であり、再開時に関節可動域制限（57%）、筋力低下（23%）、運動時の息ぎれ・倦怠感（24%）などの廃用を認めた。ADL評価では、移乗や移動に関する項目が低下傾向であった。再開後にも病棟単位で立ち入り等制限があったため、自主運動パンフレットを作成し、看護部の協力を得て遠隔運動療法を試みた。今後は、院内の感染レベルに準じて患者の不利益防止に持続可能な介入策を検討する必要がある。 発表者名：田中健太郎，滝本幸治，前田秀博 本人担当部分：研究計画，資料収集，抄録・プレゼン資料作成
136）コロナ禍の生活変化が１年後の健康状態に及ぼす影響―山間地域在住高齢者における前向きコホート研究-	—	令和5年10月	第10回日本予防理学療法学会学術大会（函館）	コロナ禍による生活環境の変化が高齢者の健康状態にどのような影響を及ぼしたのか、山間地域に在住の高齢者92名を対象に検討した。結果、前期高齢者よりも後期高齢者において、コロナ禍での生活変化が長期にわたって健康状態（フレイル）に影響することが分かった。 発表者名：滝本幸治，池田耕二，笹野弘美，辻下聡馬，竹林秀晃，椿根純子，小杢宜子 本人担当部分：研究計画、計測、統計解析、抄録作成、ポスター作成、資料収集
137）岡山県真庭郡新庄村における日常生活と健康に関する調査（第1報）	—	令和5年10月	第10回日本予防理学療法学会学術大会（函館）	高齢化が進んだ山間部の自治体において、住民が住み慣れた地域で高齢期を過ごすための方策を検討するため、40歳以上の村民556名を対象にアンケート調査を実施した。結果、日常生活を満足に送っている者の割合は80%以上であったが、介護や健康への不安が多くみられ、高齢社会の備えとして介護サービス体制の整備や高齢者に配慮したまちづくりが必要であると考えられた。 発表者名：笹野弘美，平野孝行，池田耕二，滝本幸治，辻下聡馬，笹野英樹 本人担当部分：研究計画、抄録作成、ポスター作成

138）理学療法士を育む「場」の雰囲気・風土に関する探索的研究	—	令和5年11月	第6回日本理学療法管理学会・日本精神・心理領域理学療法研究会合同学術大会2023（埼玉）	理学療法管理業務のうえで理学療法士を育む「場」づくりがあるが、「場」の雰囲気・風土の質は解明されていないことから、357名の理学療法士を対象にオンラインによるアンケート調査を実施した。結果、理学療法士の自己成長感は、勤勉さと厳しさという雰囲気・風土を介した学習環境の良さによって形成されている可能性があることが示唆された。 発表者名：池田耕二，城野靖朋，吉川義之，野田優希，滝本幸治，三上亮 本人担当部分：研究計画、抄録作成、ポスター作成
139）理学療法士の成長を促した経験（学習）の場の雰囲気とは：場と現在の職場の雰囲気の比較	—	令和5年11月	第12回日本理学療法教育学会学術大会（埼玉）	理学療法士の成長を促す臨床の場の雰囲気（組織風土）がどのようなものであるか、357名の理学療法士を対象にオンラインによるアンケート調査を実施した。結果、職場における厳しさ、誠実さ、勤勉さの雰囲気の向上が成長を促す経験であることが分かった。 発表者名：池田耕二　城野靖朋　吉川義之　野田優希　滝本幸治　三上亮 本人担当部分：研究計画、抄録作成、ポスター作成
140）包括的健康支援を目的とした通いの場創設の試み―廃校跡の有効活用事業として―	—	令和5年12月	第10回日本地域理学療法学会学術大会（東京）	住民主体の通いの場づくりに、理学療法士として包括的な健康支援を目的とした事業を企画し、廃校跡を利用した新たな通いの場創設に取り組んだ。住民に募集をかけ、週1回×13回の約3ヶ月にわたって医療専門職や行政職員等による健康講座、体操指導などを行い、結果として住民の主体性を意図した取り組みにより、役割の創出や通いの場運営のためのリーダーを育成することができた。 発表者名：根来拓弥，宮本敬二，宮井淳次，三好雅之，武内紳，滝本幸治 本人担当部分：研究計画、計測、統計解析、抄録作成、ポスター作成、資料収集
141）地域在住高齢者の健康および社会生活に影響を及ぼす指標に関する一考	—	令和6年12月	第11回日本筋骨格系徒手理学療法研究会学術大会（大阪）	高齢者の健康や社会生活に影響を及ぼすリスク徴候を捉えることは重要である。そこで、簡便に評価可能なMotoric Cognitive Risk（MCR）という指標を用いて、高齢者の健康及び社会生活への影響を検討した。高齢者70名を対象とした検討の結果、MCRは後期高齢者の質問票（健康指標）やJST版活動能力指標（高齢者の自立生活の指標）に反映しており、今後スクリーニング手段の一つとして活用できる可能性がある。 発表者名：滝本幸治 本人担当部分：研究計画、計測、統計解析、抄録作成、ポスター作成、資料収集

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　6年　3月　31日

氏名　野中　紘士

研究分野	研究内容のキーワード
人間医工学	生理学、骨格筋、物理療法

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）講義の工夫	平成26年10月1日～平成28年3月31日	大阪府立大学総合リハビリテーション学類理学療法学専攻の物理療法学Ⅰ・IIの講義にはアクティブラーニングを促通する目的で反転授業を取り入れている．具体的には自主制作した e-learning 教材で自宅学習させ，講義時間は演習やディスカッションに活用している．これにより，学生の臨床場面で獲得した知識の応用を習得させる効果があった．
	令和3年9月1日～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻・作業療法学専攻の人体構造学III（神経・運動器）の運動器部分の講義にアクティブラーニングを促通する目的で反転授業を取り入れている．具体的には制作した e-learning 教材で事前に自主学習させ，講義時間はグループワークにより知識定着を促進し，口頭試問による知識定着度の確認を行っている．これにより，学生の運動器の解剖学的知識の修得を促進させる効果があった．
2）実験・実習の工夫	平成26年10月1日～平成28年3月31日	大阪府立大学総合リハビリテーション学類理学療法学専攻の物理療法学Ⅰ・IIの実習ではロールプレイを導入し，臨床場面で可能な限り近い状況で演習を行っている．学生にロールプレイでプレゼンテーションを行わせ，フィードバックを通じて，必要な知識と治療技術の修得ができるよう講義を展開している．これにより，学生の臨床能力育成に効果があった．
2　作成した教科書，教材		
1)電気刺激療法（e-learning 用教材）	平成26年5月	大阪府立大学総合リハビリテーション学類理学療法学専攻の物理療法学IIで，電気刺激療法の予習・復習用 e-learning 教材を作成し，電気刺激療法の基本的原理とゲートコントロール理論の講義内容を理解させる効果があった．
2)心臓（講義用資料）	平成27年10月	大阪府立大学総合リハビリテーション学類の理学療法学専攻と作業療法学専攻の形態機能学実習で，心臓の構造や生理学的特性および心臓の収縮メカニズムや心電図などについての要点をまとめた資料を作成した．心臓の形態機能を理解させる効果があった．
3)寒冷療法（e-learning 用教材）	平成27年12月	大阪府立大学総合リハビリテーション学類理学療法学専攻の物理療法学Ⅰで，寒冷療法の予習・復習用 e-learning 教材を作成し，寒冷療法の基本的原理と効果の講義内容を理解させる効果があった．
4）温熱療法（e-learning 用教材）	平成27年12月	大阪府立大学総合リハビリテーション学類理学療法学専攻の物理療法学Ⅰで，温熱療法の予習・復習用 e-learning 教材を作成し，温熱療法の基本的原理と効果の講義内容を理解させる効果があった．

5）股関節の運動学（講義資料）	平成 30 年 6 月	京都橘大学健康科学部理学療法学科の運動学演習で，股関節の解剖と運動学などについての要点をまとめた資料を作成した．股関節の運動学を理解させる効果があった．
6）膝関節の運動学（講義資料）	平成 30 年 6 月	京都橘大学健康科学部理学療法学科の運動学演習で，膝関節の解剖と運動学などについての要点をまとめた資料を作成した．膝関節の運動学を理解させる効果があった．
7）足関節・足部の運動学（講義資料）	平成 30 年 6 月	京都橘大学健康科学部理学療法学科の運動学演習で，足関節・足部の解剖と運動学などについての要点をまとめた資料を作成した．足関節・足部の運動学を理解させる効果があった．
8）関節リウマチの理学療法（講義資料）	平成 30 年 11 月	京都橘大学健康科学部理学療法学科の運動器障害系理学療法基礎演習で，関節リウマチの理学療法についての要点をまとめた資料を作成した．関節リウマチの理学療法を理解させる効果があった．
9）上肢の骨折の理学療法（講義資料）	平成 30 年 11 月	京都橘大学健康科学部理学療法学科の運動器障害系理学療法基礎演習で，上肢の骨折の理学療法についての要点をまとめた資料を作成した上肢の骨折の理学療法を理解させる効果があった．
10）肩関節障害の理学療法（講義資料）	平成 30 年 11 月	京都橘大学健康科学部理学療法学科の運動器障害系理学療法基礎演習で，肩関節障害の理学療法についての要点をまとめた資料を作成した肩関節障害の理学療法を理解させる効果があった．
11）靭帯損傷の理学療法（講義資料）	平成 30 年 11 月	京都橘大学健康科学部理学療法学科の運動器障害系理学療法基礎演習で，靭帯損傷の理学療法についての要点をまとめた資料を作成した靭帯損傷の理学療法を理解させる効果があった．
12）姿勢制御（講義資料）	平成 30 年 12 月	京都橘大学健康科学部理学療法学科の臨床運動学演習で，姿勢制御などについての要点をまとめた資料を作成した．姿勢制御の運動学を理解させる効果があった．
13)細胞の構造と膜の興奮（講義用資料）	令和元年 9 月	奈良学園大学リハビリテーション学部理学療法学・作業療法学専攻の人体機能学 II（動物性機能）で，細胞構造と細胞膜の興奮メカニズムなどについての要点をまとめた資料を作成した．細胞膜の興奮のメカニズムを理解させる効果があった．
14)骨格筋の構造と収縮のメカニズム（講義用資料）	令和元年 9 月	奈良学園大学リハビリテーション学部理学療法学・作業療法学専攻の人体機能学 II（動物性機能）で，骨格筋の構造と収縮のメカニズムなどについての要点をまとめた資料を作成した．骨格筋の構造と収縮のメカニズムを理解させる効果があった．
15)運動単位，神経支配比，脊髄反射（講義用資料）	令和元年 9 月	奈良学園大学リハビリテーション学部理学療法学・作業療法学専攻の人体機能学 II（動物性機能）で，骨格筋に関する運動単位，神経支配比，脊髄反射メカニズムなどについての要点をまとめた資料を作成した．運動単位，神経支配比，脊髄反射メカニズムを理解させる効果があった．

16)骨格筋の代謝特性とエネルギー代謝（講義用資料）	令和元年9月	奈良学園大学リハビリテーション学部理学療法学・作業療法学専攻の人体機能学 II（動物性機能）で，骨格筋の代謝特性とエネルギー代謝などについての要点をまとめた資料を作成した．骨格筋の代謝特性とエネルギー代謝を理解させる効果があった．
17)骨の構造と生理（講義用資料）	令和元年9月	奈良学園大学リハビリテーション学部理学療法学・作業療法学専攻の人体機能学 II（動物性機能）で，骨の構造と生理などについての要点をまとめた資料を作成した．骨の構造と生理を理解させる効果があった．
18)体幹の解剖学（講義用資料）	令和元年10月	奈良学園大学リハビリテーション学部理学療法学・作業療法学専攻の人体構造学 III（神経・運動器）で，体幹の骨，筋および神経支配や作用，靭帯，周辺の血管などについての要点をまとめた資料を作成した．体幹の解剖を理解させる効果があった．
19)下肢の解剖学（講義用資料）	令和元年10月	奈良学園大学リハビリテーション学部理学療法学・作業療法学専攻の人体構造学 III（神経・運動器）で，下肢の骨，筋および神経支配や作用，靭帯，周辺の血管などについての要点をまとめた資料を作成した．体幹の解剖を理解させる効果があった．
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
1) 大阪府立大学　総合リハビリテーション系長および総合リハビリテーション学研究科長による平成25年度教員業績評価	平成26年12月4日	総合評価S（4段階中最高評価）
2) 大阪府立大学　総合リハビリテーション系長および総合リハビリテーション学研究科長による平成26年度教員業績評価	平成27年12月17日	総合評価S（4段階中最高評価）
3)大阪府立大学　総合リハビリテーション系長および総合リハビリテーション学研究科長による平成27年度教員業績評価	平成28年12月22日	総合評価S（4段階中最高評価）
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
1)講演について	平成26年11月26日	はびきの市民大学　講師 「腰痛予防のための運動」 慢性腰痛について，現在考えられている発生理由とその予防・改善のための運動療法（運動方法）について講演を行った．
2)高大連携　講義について	平成26年10月30日	大阪府立鳳高等学校　模擬講義講師 「理学療法とリハビリテーション」 リハビリテーション職である理学療法士の仕事内容や社会における役割，また他の医療職とのかかわりについての講義を行った．
	平成30年6月14日	西舞鶴高校　講師 「医療」 医療職である理学療法士，作業療法士，臨床検査技師の仕事内容について講義を行った．
	平成30年6月20日	伊吹高校　講師 「医療技術・リハビリ」 医療職である理学療法士，作業療法士の仕事内容や社会における役割について講義を行った．
	平成30年8月23日	花園高校　講師 「理学療法・作業療法」 医療職である理学療法士，作業療法士の仕事内容や社会における役割について講義を行った．

	平成 30 年 9 月 11 日	八日市高校　講師 「医療技術・リハビリ」 医療職である理学療法士，作業療法士の仕事内容や社会における役割について講義を行った．
	平成 30 年 9 月 26 日	甲西高校　講師 「医療技術（リハビリ）」 医療職である理学療法士，作業療法士の仕事内容や社会における役割について講義を行った．
	平成 30 年 9 月 26 日	桂高校　講師 「医療技術」 医療職である理学療法士，作業療法士，臨床検査技師の仕事内容について講義を行った．
	平成 30 年 11 月 12 日	長浜北高校　講師 「医療（理学療法）」 医療職である理学療法士の仕事内容や社会における役割について講義を行った．
	令和 3 円 2 月 13 日	賢明学院高等学校　講師 「理学療法」 医療職である理学療法士の仕事内容や社会における役割について講義を行った．
５　その他 1)大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科学位論文(博士前期課程)審査実績	平成 28 年 2 月	博士前期課程：副査 1 名 「スタチン投与中の運動が骨格筋ミトコンドリアへ及ぼす影響」について学位論文（博士前期課程）の審査を行った．
2)大阪府立大学総合リハビリテーション学部および総合リハビリテーション系における教育実績	平成 21 年 4 月～平成 29 年 3 月	「理学療法早期体験実習」（平成 21 年度から平成 28 年度まで） 理学療法学専攻の 1 年生に講義や病院や介護老人保健施設での実習やディスカッションを行い，理学療法士の役割や業務内容を理解させる教育効果があった． 「理学療法基礎評価学 II」（平成 22 年度から平成 28 年度まで） 　理学療法評価である関節可動域測定の方法について講義を行い，関節可動域測定の習得させた 「形態機能学実習」（平成 23 年から平成 28 年度まで） 　神経，骨格筋，呼吸循環の解剖生理の講義および生理機能に関する実習を行い，学生に解剖生理学の理解を深める教育効果があった． 「物理療法学 I」（平成 23 年から平成 28 年度まで） 　物理療法の歴史や温熱，寒冷，水治療法の生理学的効果や適応，禁忌，実施方法の講義を行い，それら知識と実施方法を習得させた． 「物理療法学 II」（平成 24 年から平成 28 年度まで） 　電気，牽引，マッサージ療法の生理学的効果や適応，禁忌，実施方法の講義を行い，それら知識と実施方法を習得させた．

		「理学療法学総合評価演習」（平成 21 年度から平成 28 年度まで） 　地域のボランティア高齢者の評価を行い，評価技術の研鑽と評価レポート作成の指導を行い，理学療法評価およびレポート作成を総合的に理解，実施できるようにした． 「理学療法学研究法 II」（平成 28 年度） 　卒業論文作成の指導を行い，論文の作成方法およびリサーチマインドを習得せせる教育効果があった． 「理学療法臨床実習 I」（平成 21 年度から平成 28 年度まで） 　病院で臨床現場を見学させることにより，理学療法業務の概要や役割を理解させる教育効果があった． 「理学療法臨床実習 II」（平成 21 年度から平成 28 年度まで） 　理学療法評価に関する実習を行い，各種検査の実施と検査結果をもとに問題点を把握し，理学療法評価技術を習得させる教育効果があった． 「理学療法臨床実習 III」（平成 24 年度から理学療法臨床実習 III・IV に変更 ）（平成 21 年度から平成 28 年度まで） 　理学療法の過程全般を経験させ，理学療法の全体的な業務を遂行させる能力および臨床場面で的確な理学療法を発展させる能力を習得させる教育効果があった． 「理学療法臨床実習 IV」（平成 24 年度から平成 28 年度まで） 　臨床実習 III と同様に理学療法の過程全般を経験させ，理学療法の全体的な業務を遂行させる能力および臨床場面で的確な理学療法を発展させる能力を習得させる教育効果があった．
3)京都橘大学健康科学部における教育実績	平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月	「理学療法技術学入門演習Ⅰ」 　解剖学の知識と触診技術の習得の教育効果があった． 「理学療法技術学入門演習 II」 　筋の解剖学的知識と触診技術の習得の教育効果があった． 「ヘルスプロモーション応用演習」 　地域在住高齢者の体力測定を行い，高齢者の健康増進を実践するための知識や技術の習得の学習効果があった．
	平成 29 年 4 月～平成 31 年 3 月	「理学療法研究法 I」 　研究計画の立案，研究の実施，結果のまとめ方について学習効果があった． 「理学療法研究法 II」 　研究計画の立案，研究の実施，結果のまとめ方について学習効果があった． 「キャリア開発演習」 　新入生に大学での学び方や生活の心構えなどに対して教育効果があった．

4）奈良学園大学保健医療学部における教育実績	平成30年4月～平成31年3月	「運動学演習」 下肢（股関節，膝関節，足関節，足部）の運動学について教授し，理学療法士の基礎となる運動学の知識習得の教育効果があった． 「動作分析学演習」 寝返り，立ち上がりの動作分析について教授し，理学療法士にとって重要な動作分析法の習得の教育効果があった． 「臨床運動学演習」 力学に基づいた関節運動や動作に加え姿勢制御について教授し，理学療法士にとって重要な力学に基づいた関節運動や動作に加え姿勢制御の知識習得の教育効果があった． 「運動器障害系理学療法基礎演習」 関節リウマチ，肩関節障害，上肢の骨折，靭帯損傷の理学療法について教授し，理学療法士にとって重要な運動器障害の理学療法の習得の教育効果があった． 「総合臨床実習Ⅰ」 理学療法の過程全般を経験させ，理学療法の全体的な業務を遂行させる能力および臨床場面で的確な理学療法を発展させる能力を習得させる教育効果があった． 「総合臨床実習Ⅱ」 総合臨床実習Ⅰと同様に理学療法の過程全般を経験させ，理学療法の全体的な業務を遂行させる能力および臨床場面で的確な理学療法を発展させる能力を習得させる教育効果があった．
	平成31年4月～令和5年3月	「基礎ゼミⅡ」 講義ノートの取り方，文献資料の検索，学術的な文章の読み方などについて，演習を通じて大学での学習を進める上で必要となる基礎的な知識や技能，学ぶ姿勢を身につける教育効果があった． 「人体構造学Ⅲ（神経・運動器）」 体幹及び下肢の骨や骨格筋，支配神経の解剖についての講義行い，学生に解剖学の理解を深める教育効果があった． 「人体機能学Ⅱ（動物性機能）」 骨格筋，反射，骨の生理についての講義行い，学生に生理学の理解を深める教育効果があった． 「早期体験実習(理学療法)」 理学療法学専攻の1年生に講義や病院での実習、ディスカッションを行い，理学療法士の役割や業務内容を理解させる教育効果があった．
	令和2年4月～令和6年3月	「人体構造実習」 体幹及び下肢の骨や骨格筋，神経の解剖についての講義行いうとともに，体表より触察方法の実習を行うことで，学生に解剖学の理解を深める教育効果があった．

		「人体生理実習」 血圧，経皮的酸素飽和度，呼吸機能，心電図，筋電図，誘発筋電図，平衡機能の実験実習を通じて，学生に生理学の理解を深める教育効果があった． 「地域実習(理学療法)」 理学療法学専攻の２年生に地域理学療法についての実習やディスカッションを行い，理学療法士の役割や業務内容を理解させる教育効果があった．
	令和３年４月～現在に至る	「客観的臨床能力演習（理学療法）」 理学療法評価に前に，理学療法評価に関する演習を通じて，理学療法評価技術を習得させる教育効果があった． 「理学療法評価実習」 理学療法評価に関する実習を行い，各種検査の実施と検査結果をもとに問題点を把握し，理学療法評価技術を習得させる教育効果があった．
	令和４年４月～現在に至る	「総合臨床実習Ⅰ(理学療法）」 理学療法評価，治療に関する実習を行い，各種検査の実施と検査結果をもとに問題点を把握し，治療プログラム立案，治療の実施を経験させ，理学療法を実施に関する知識の活用と実践を理解させる教育効果があった． 「総合臨床実習Ⅱ(理学療法）」 総合臨床実習Ⅰ（理学療法）に引き続き，理学療法評価，治療に関する実習を行い，各種検査の実施と検査結果をもとに問題点を把握し，治療プログラム立案，治療の実施を経験させ，理学療法を実施に関する知識の活用と実践する能力向上の教育効果があった． 「チーム医療論演習」 リハビリテーション職種と医療に携わる多職種との連携において，リハビリテーション職の役割を明確にし，多職種を理解することで，多職種との連携のあり方をディスカッションとプレゼンテーションを通して学習させ，チーム医療の実践を理解させる教育効果があった．
	令和５年４月～現在に至る	「ラーニングスキルズ」 講義ノートの取り方，文献資料の検索，学術的な文章の読み方などについて，演習を通じて大学での学習を進める上で必要となる基礎的な知識や技能，学ぶ姿勢を身につける教育効果があった． 「人体構造学Ⅰ」 体幹及び下肢の骨や骨格筋，支配神経の解剖についての講義行い，学生に解剖学の理解を深める教育効果があった． 「人体機能学Ⅱ」 骨格筋，反射，体性感覚、特殊感覚、骨の生理についての講義行い，学生に生理学の理解を深める教育効果があった．

		「理学療法見学実習Ⅰ」 理学療法学専攻の1年生に講義や病院での実習を行い，理学療法士の役割や業務内容を理解させる教育効果があった．
		「理学療法見学実習Ⅱ」 「理学療法見学実習Ⅰ」と同様に理学療法学専攻の1年生に講義や病院での実習を行い，理学療法士の役割や業務内容を理解させる教育効果があった．
5）奈良学園大学大学院看護学研究科看護学専攻修士課程における教育実績	平成31年4月～令和5年3月	「フィジカルアセスメント」 代謝性疾患にたいするフィジカルアセスメントの講義と演習を行うことで，学生に代謝性疾患に対するフィジカルアセスメントの理解を深める教育効果があった．
	令和3年4月～令和5年3月	「ヘルスプロモーション特論」 サルコペニア，フレイル，ヘルスプロモーションを促進するうえでの身体機能評価、運動の効果についての講義と演習を行うことで，高齢者・子どもの身体機能に関するヘルスプロモーションの理解を深める教育効果があった．
6）奈良学園大学大学院リハビリテーション学研究科リハビリテーション学専攻修士課程における教育実績	令和5年4月～現在に至る	「リハビリテーション研究特論」 リハビリテーション領域の基礎研究の意義と実験動物や培養細胞を用いた実験手法と組織学，生化学や生理学などの解析手法について講義し，基礎研究についての理解を深める教育効果があった．
	令和5年4月～現在に至る	「内部機能障害リハビリテーション学特論」 EBMに基づく内部機能障害リハビリテーションについて解説し，併せてクリニカルクエスチョン（CQ）に対する文献レビューの演習を行う．さらに，CQの解決手法としての基礎研究手法について講義し，内部機能障害領域における疑問や問題を自ら解決できる能力とリハビリテーションを科学的見地から考察できる能力の育成効果があった．

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許 1)理学療法士免許	平成15	厚生労働省　第44332号
2)修士（保健学）	平成17年3月	吉備国際大学　修第2-14号 論文題目「骨格筋収縮様式の違いによる解糖系酵素変動の検討」
3)博士（保健学）	平成20年3月	吉備国際大学　博甲第保-4号 論文題目「遠心性収縮による持久トレーニング効果についての検討」
4)生理学エデュケーター認定	平成28年1月	日本生理学会　第160056号
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		

1)医療法人三憲会老人介護保健施設エリシウム柵原理学療法士	平成15年4月～平成17年3月	運動器疾患や神経疾患などを既往歴にもつデイケアおよび施設入所の利用者を対象に、日常生活活動や運動機能の維持・改善のための理学療法などにあたった。
2) 医療法人三憲会柵原病院　理学療法士	平成17年4月～平成20年10月	回復期から慢性期における運動器疾患および神経系疾患を発症した入院患者に対する日常生活活動動作や運動機能の改善・維持のための理学療法などにあたった。また、運動器疾患や神経疾患を発症した外来患者の疼痛に対する理学療法、運動機能の維持・改善のための理学療法などにあたった。
４　その他		
1)研究助成獲得実績	平成26年4月	科学研究費　基盤研究(B) 「骨格筋量の性差制御因子の同定と食品成分による発現調節」 研究代表者：山地亮一　研究分担者：野中紘士
	平成26年4月	科学研究費　基盤研究(C) 「COPD患者に対する呼息時電気刺激を用いた呼吸リハビリテーションの実証的研究」 研究代表者：伊藤健一　研究分担者：野中紘士，堀江淳，河村博文
	平成27年6月	御器谷科学財団　国際交流活動 「Heat stress attenuates skeletal muscle atrophy in diabetic rats」 研究代表者：野中紘士
	平成30年4月	科学研究費　基盤研究(C) 「糖尿病による末梢神経の酸化ストレスおよび栄養血管退行に対する運動療法の効果検証」 研究代表者：野中紘士　研究分担者：秋山純一，崎田正博
	平成31年4月	理学療法士協会 大規模臨床研究助成 「地域在住高齢者の虚弱化を予防し健康寿命を延伸する介護予防プログラムの開発と効果検証」 研究代表者：中野英樹　研究分担者：村田伸，堀江淳，兒玉隆之，白岩加代子，安彦鉄平，野中紘士，合田明生
	令和元年7月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成 「マウス由来C2C12筋管細胞に対する活性型ビタミンDの抗炎症作用および筋タンパク分解抑制に関する検討」 研究代表者：野中紘士　研究分担者：秋山純一，畦五月，伊藤健一
	令和元年10月	日本物理療法学会研究助成 「ヒト皮膚由来線維芽細胞における温度の違いが細胞増殖に与える影響」 研究代表者：吉川義之　研究分担者：杉本雅晴，野中紘士，滝本幸治，前重伯壮，植村弥希子
	令和2年5月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成 「高齢者における終末糖化産物と身体機能および身体組成との関連についての検討」 研究代表者：野中紘士　研究分担者：吉川義之，伊藤健一，門條宏宣
2)大阪府立大学総合リハビリテーション学部および総合リハビリテーション系における学内業務実績	平成21年4月～平成29年3月	「広報委員」 平成21年度に広報委員として，広報活動に携わった．

		「高大連携教育展開委員」 平成 21 年度に高大連携教育委員として，地域住民向けの講座や高校生向けの講座の調整などに携わった. 「動物実験倫理委員」 平成 22 年度から平成 28 年度まで動物実験倫理委員として倫理審査などに携わった. 「予算委員」 平成 27 年度から平成 28 年度まで予算委員として理学療法学専攻の運営予算の配分や管理などに携わった. 「紀要委員」 平成 22 年度から平成 28 年度まで紀要委員として雑誌の編集などに携わった.
3)京都橘大学健康科学部における学内業務実績	平成 29 年 4 月～平成 31 年 3 月	「教育研修センター」 平成 29 年度から京都橘大学の卒業生を対象とした卒後教育研修の運営に携わっている. 「学科会議運営委員」 平成 29 年から理学療法学科の会議運営に携わっている.
4)奈良学園大学保健医療学部における学内業務実績	平成 31 年 4 月～現在に至る	「教務ワーキンググループ」 平成 31 年度からリハビリテーション学科の教務関連の運営に携わっている. 「カリキュラム検討委員」 平成 31 年度からリハビリテーション学科のカリキュラム検討の運営に携わっている. 「卒業研究委員」 平成 31 年度からリハビリテーション学科の卒業研究の実施方法検討に携わっている.
5)学術論文の査読歴	令和 3 年 4 月～現在に至る 平成 26 年 4 月～現在に至る	「Journal of Physical Therapy Science」 「Experimental Physiology」 「Acta Physiologica Hungarica」 「Experimental and Molecular Pathology」 「Archives of Physiology and Biochemistry」 「Current Nutrition and Food Sience」 「FACETS」 「Acta Physiologica」 「ヘルスプロモーション理学療法研究」 「Nutrients」 「保健医療学雑誌」 「Journal of Life Science Research」 「Natural Product Communications」 「医療福祉情報行動科学研究」 「BMC Geriatrics」 「Scientific Reports」 「Pflügers Archiv - European Journal of Physiology」

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要

（著書） 1PT 入門　イラストでわかる運動器障害理学療法 :	共著	令和 3 年 1 月	医歯薬出版株式会社	運動器疾患に対する理学療法に関する基本的な考え方と各疾患における実践的な理学療法を解説している. A4 版　全 291 頁 監修：上杉雅之 編集：横山茂樹，甲斐義浩 著者：安彦鉄平，井上由里，内田重博，甲斐義浩，木村智子，幸田仁志，篠原博，武内考祐，対馬栄輝，永松隆，根地島誠，野田優希，野中紘士，松井知之，宮崎純弥，宮地諒，横山茂樹 本人担当部分：「第 14 章　関節リウマチ」（P.245-P.266）を単著. 関節リウマチの病態・障害像，診断および治療方針，理学療法評価，治療計画及びプログラムについて解説した.
（学術論文） 1 Changes in antioxidant enzymes and lipid peroxidation in extensor digitorum longus muscles of streptozotocin-diabetic rats may contribute to muscle atrophy （ストレプトゾトシン糖尿病ラット長趾伸筋の抗酸化酵素と過酸化脂質の変化は筋萎縮と関連する） （査読付）	共著	平成 26 年 12 月	Acta Physiologica Hungarica vol.101(4) P.421-P.428	糖尿病時の筋萎縮が酸化ストレスと関連があるかについて検証した. 速筋線維優位である長趾伸筋は萎縮し，抗酸化酵素(カタラーゼ，グルタチオンペルオキシダーゼ，スーパーオキサイドジスムターゼ)活性の上昇と TBARS の増加が確認された. 一方，赤筋線維優位であるヒラメ筋の萎縮は軽度で，カタラーゼ活性は上昇したが，それ以外の抗酸化酵素活性と TBARS に変化は認められなかった. 以上より，糖尿病に伴う酸化ストレスが速筋線維の萎縮を惹起する可能性を示した. 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および統括を行った. また，実験結果に基づき論文執筆を行った. 共著者：Nonaka K, Une S, Tatsuta N, Ito K, Akiyama J
2 Electrical stimulated ventilation feedback improve ventilation pattern in patients with COPD （電気刺激による換気フィードバックは COPD 患者の換気パターンを改善する） （査読付）	共著	平成 27 年 2 月	Journal of Physical Therapy Sciences vol.27(2) P.325-P.330	COPD 患者に対する呼息時電気刺激（PESE）を用いた換気フィードバックの有効性を検証した. 24 名の COPD 患者を，プラセボ群と PESE を行う群に割り付けた. 対象者には 5 分間のエルゴメータ運動を 2 回行ってもらい，ベースライン（BL）と各介入による換気指標を中心としたデータの測定を行った. BL に対しプラセボ群では，安静時・運動時とも明らかな変化は認められなかったが，PESE 群では安静時・運動時とも有意な換気効率の改善を認め，COPD 患者の換気効率改善に PESE が有効であることが明らかとなった. 本人担当部分：研究計画を立案するとともに，測定データの分析を行った. 共著者：Ito K, Nozoe T, Okuda M, Nonaka K, Yamahara J, Horie J, Hayama Y, Kawamura H

3 ラット骨折モデルによる高濃度人工炭酸泉浴の骨折治癒への影響 -TGF-β1の血中濃度変化と組織学的観察による検討	共著	平成27年3月	吉備国際大学保健福祉研究所紀要 16号 P.1-P.6	炭酸泉浴の骨折治癒への影響について検討した．ラットをコントロール群(C群)，さら湯35℃温浴群(I群)，炭酸泉35℃温浴群(II群)に分けた．2週目のTGF-β濃度はII群が，I群と比べて高値を示した．その後は時間経過とともに，TGF-β濃度はII群で下降し，I群では上昇し，8週目には，I群の方が高値を示した．5週目では，II群で治癒の促進が見られた．8週目では，各群とも骨再生が進み，群間での明らかな差は見られなかった． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験を実施した． 共著者：秋山純一，高須賀純一，野中紘士，矢田智大，川浦昭彦，中嶋正明，加納良男，畦五月，龍田尚美，平上二九三
4 Heat stress attenuates skeletal muscle atrophy of extensor digitorum longus in streptozotocin-induced diabetic rats (温熱刺激はストレプトゾトシン誘発性糖尿病ラットの長趾伸筋の萎縮を減弱させる) （査読付）	共著	平成27年9月	Acta Physiologica Hungarica vol.102(3) P.293-P.300	糖尿病による骨格筋萎縮が温熱療法により予防できるかについて検討した．ストレプトゾトシンを投与し糖尿病を誘発したラットに42℃で30分間の温浴を1週間に5回，3週間行った．その結果，温熱療法を行っていないラットに比べ長趾伸筋のHeat shock protein 25，72の発現が増加し，筋線維横断面積の減少が予防された．本研究より，温熱療法が糖尿病による骨格筋萎縮を予防できることを示した． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験の実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K，Une S，Akiyama J
5 健康寿命と細胞の寿命	共著	平成28年3月	吉備国際大学保健福祉研究所紀要 17号 P.11-P.14	突然変異を持つPI3K遺伝子による細胞老化の法則を調べるために，FLAG標識野生型あるいは突然変異型PI3K遺伝子をラット線維芽細胞に導入した．その結果，正常なラット線維芽細胞は約20回分裂すると老化した．しかし，突然変異型PI3K遺伝子を導入したラット線維芽細胞は約26回分裂まで長生きした．さらに我々は，突然変異型PI3K遺伝子をマウスの受精卵に導入して作成したトランスジェニックマウスの寿命を調べたところ約20%の寿命延長が観察された． 本人担当部分：動物実験を実施した． 共著者：秋山純一，平上二九三，野中紘士，川浦昭彦，元田弘敏，井上茂樹，河村顕治，加納良男

6 Surface electromyography activity of the rectus abdominis, internal oblique, and external oblique muscles during forced expiration in healthy adults （健常成人の強制呼気中の腹直筋および内腹斜筋，外腹斜筋の表面筋電活動） （査読付）	共著	平成 28 年 4 月	Journal of Electromyography and Kinesiology vol.28 P.76-P.81	呼気抵抗下（最大呼気の 10%，20%，30%）での腹直筋，内・外腹斜筋の筋活動を筋電図を用いて検証することを目的に研究を行った．その結果，強制呼気の際は腹直筋よりも内・外腹斜筋の筋活動が高いことが明らかになった．また内・外腹斜筋の活動は 10%，20%の抵抗に比べ 30%の抵抗で高値を示した．また，本研究より，呼気筋トレーニングとしては最低 30%の抵抗を必要であることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画の立案および解剖生理学的側面から考察を行った． 共著者：Ito K，Nonaka K，Ogaya S，Ogi A，Matsunaka C，Horie J
7 Electrical stimulation ventilator feedback facilitates maintenance of a prolonged expiration pattern during exercise: a proof of concept study in healthy adults （電気刺激による換気フィードバックは運動時の延長呼息パターンの維持を促進する－健常成人にたいする概念実証研究） （査読付）	共著	平成 28 年 8 月	Physiotherapy Theory and Practice vol. 32(6) P.483-P.488	本研究の目的は，運動中の呼息を促通させるために電気刺激を用いたフィードバック（ESVF）を行い，その効果と安全性を明らかにすることである．健常成人 23 名を ESVF 群と対照群に割り付けた．対象者は呼吸練習において，呼気延長の呼吸パターンを練習し，その呼吸法を運動中も維持するように指導された．運動中と運動後の呼気/吸気時間比において対照群と比較して ESVF 群が有意に高値を示した．また，ESVF による副作用が認められなかったことから ESVF は運動中の呼吸法を習得させるツールになり得ることが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画の立案および一部論文執筆を行った． 共著者：Yamahara J，Ito K，Nonaka K
8 Effects of hull scratching, soaking, and boiling on antinutrients in Japanese red sword bean (Canavalia gladiata) （赤なた豆の抗栄養成分に対する皮処理および浸漬，加熱の影響） （査読付）	共著	平成 28 年 10 月	Journal of Food Science vol. 81(10) P.C2398-P.C2404	ナタマメはタチナタマメに類似した学名の豆であり，抗栄養性のレクチンを含有している．餡として使用するためには，その吸水性を上昇させることと，マメに含有されるレクチンを含んだ各種の抗栄養成分の含有量を低下させることが課題となる．そこで，種皮に各種の処理を施したマメについて吸水性と，抗酸化活性，抗栄養成分（レクチン，各種プロテアーゼインヒビター，アミラーゼインヒビター量など）を測定した．その結果，種皮に穴をあけた場合にこれら物質が無処理よりも有意に低下した．餡への利用のためには，皮処置と浸漬処理，加熱の三処理が必須と考えられた． 本人担当部分：抗酸化活性のデータ測定を行った． 共著者：Une S，Nonaka K，Akiyama J

9 Deep heating using microwave diathermy decreases muscle hardness: a randomized, placebo-controlled trial （極超短波を用いた深部加温は筋硬度を返照させる－無作為化，プラセボ対照試験） （査読付）	共著	平成 28 年 12 月	Journal of Rehabilitation and Health Sciences vol.14 P.9-P.13	深部温熱の筋硬度変化に与える影響を極超短波を用いて検証した．20 名の健常大学生をマイクロウェーブ群とプラセボ群に割り付け，介入前後で筋硬度変化を測定した．介入後マイクロウェーブ群では筋硬度が低下した．一方，プラセボ群は筋硬度の変化を認めなかった．本研究より，深部温熱は筋硬度を減少させる効果を持つことが示された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Kataoka M, Ogaya S, Ito K, Akiyama J
10 Co-presence of osteophyte and effusion as a risk factor for knee pain in the community-dwelling elderly （骨棘と浮腫の共存は地域高齢者の膝関節痛のリスクファクターである） （査読付）	共著	平成 29 年 3 月	Topics in Geriatric Rehabilitation Vol. 33(1) P.57-P.61	膝の痛みに関与する要素を検討するため，超音波診断装置を用いて膝関節周囲組織の状態を調べた．その結果，関節浮腫と骨棘の両方を有する高齢者において膝の痛みを有する割合が高いことがわかった． 本人担当部分：データの解析を行った． 共著者：Ogaya S, Iwata A, Nonaka K, Higuchi Y, Fuchioka S
11 エアマットレスが臥床中の呼吸機能へ与える影響 （査読付）	共著	平成 29 年 4 月	理学療法科学 vol.32(2) P.183-P.188	臥床時の呼吸機能に対するエアマットレスの悪影響の有無を明らかにすることである．健常者群 19 名と胸郭コンプライアンス低下群 10 名に対して，エアマットレスと標準マットレスの 2 つの条件下で臥位にて測定された呼吸機能を比較した．測定項目は，一回換気量，分時換気量，死腔換気率，呼吸数，呼気時間，吸気時間，全呼吸時間，呼気平均流量，吸気平均流量，吸気における腹部の隆起が開始するタイミングの 10 項目とした．両群ともにすべての測定項目で，エアマットレス上臥位と標準マットレス上臥位の間に有意な差は認められなかった．エアマットレス導入は呼吸機能へ悪影響を与えないことが明らかになった． 本人担当部分：研究計画の立案および考察の検討を行った． 共著者：井上貴裕，野中紘士，伊藤健一

12 女性高齢者の外反母趾に影響を及ぼす因子の検討 （査読付）	共著	平成 30 年 1 月	ヘルスプロモーション理学療法研究 vol.7(4) P.165-P.169	本研究の目的は，女性高齢者の外反母趾に影響を及ぼす因子について，足部の形態に着目して検討することである．高齢者健康サークルに所属し，体力測定会に参加した地域在住女性高齢者 176 名（平均年齢 73.8±5.7 歳）を対象とした．測定は，外反母趾に影響を及ぼす因子を抽出するため，対象者の年齢，身長，体重，Body Mass Index，および足部・足趾の形態（足長，足幅，母趾角，小趾角，開帳角，足底・足趾の接地状態）につて足圧分布測定器を用いて測定した．さらに，外反母趾と浮き趾の有無を判定した．ステップワイズ重回帰分析の結果，外反母趾に影響を及ぼす因子として抽出されたのは足幅のみであった．足部・足趾の健康を考える場合，足長のみならず足幅も考慮した靴のサイズ選びが重要であることが示唆された． 本人担当分：考察の一部を執筆． 共著者：弓岡まみ，村田伸，岩瀬弘明，内藤紘一，安彦鉄平，白岩加代子，野中紘士，堀江淳
13 Heat stress prevents the decrease in succinate dehydrogenase activity in the extensor digitorum longus of streptozotocin-induced diabetic rats （温熱刺激はストレプトゾトシン誘発性糖尿病ラットの長趾伸筋のコハク酸脱水素酵素活性低下を予防する） （査読付）	共著	平成 30 年 2 月	Physiological Research vol.67(1) P.117-P.126	温熱刺激が糖尿病による骨格筋コハク酸脱水素酵素(SDH)活性低下を予防するかについて検討した．Wistar 系雄ラットを対照群および温熱群，糖尿病群，糖尿病+温熱群に分け，ストレプトゾトシン投与による糖尿病誘発を確認した後，温熱刺激を 3 週間行った。糖尿病群と糖尿病+温熱群では SDH 活性が低下したが，糖尿病+温熱群は糖尿病群に比べ骨格筋 SDH 活性低下が減弱した。本研究より，温熱刺激が糖尿病による骨格筋 SDH 活性低下を予防することが示唆された。 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Une S, Komatsu M, Yamaji R, Akiyama J
14 Lectin isolated from Japanese red sword beans (Canavalia gladiata) as a potential cancer chemopreventive agent （日本産のナタマメから精製したレクチンはガンの化学的予防剤となる可能性がある） （査読付）	共著	平成 30 年 3 月	Journal of Food Science Vol.83(3) P.837-P.834	日本産のナタマメから精製したレクチン（RSB-L）は、アミノ酸分析や部分的なアミノ酸配列によりタチナタマメから精製された ConA と類似した構造をしていた．しかし RSB-L は ConA より耐熱性があり、糖に対する特異性が後者と異なった．マイトジェン活性，NK 活性は有意に RSB-L の方が高く，同時にマウス B16 メラノーマ細胞の増殖を有意に RSB-L は抑制した．一方，中国産のナタマメから得られたレクチンとも異なった生物学的な性質を RSB-L は示した．KSB-L はガン予防作用を有する物質として使用の可能性が示唆された． 本人担当部分：データ測定の一部を行った．加えて，データ解析および方法と結果の一部の執筆を行った． 共著者：Une S, Nonaka K, Akiyama J

15 地域在住女性高齢者の浮き趾と身体機能との関係 （査読付）	共著	平成 30 年 5 月	地域リハビリテーション Vol.13(5) P.383-P.387	本研究の目的は，体力測定会に参加した 65 歳以上の女性高齢者 175 名（平均年齢 73.8±5.7 歳）を対象に浮き趾と身体機能との関係を明らかにすることである．その結果，浮き趾群では足趾把持力（p＝0.002），長座体前屈距離（p＝0.046），身長（p＝0.005）が有意に低い値を示した．その他の身体機能に有意差は認められなかった．効果量は，足趾把持力（d＝0.50）が中等度であり，身長（d＝0.44）と長座体前屈距離（d＝0.32）は小さい効果量が認められた．浮き趾がある女性高齢者は足趾把持力が有意に低下したが，歩行や立位バランスなどの身体機能に有意差は認められず，総合的な身体機能の低下として表在化しがたいことが示唆された． 本人担当部分：考察の一部を担当した． 共著者：弓岡まみ，村田伸，岩瀬弘明，内藤紘一，安彦鉄平，白岩加代子，野中紘士，堀江淳
16 Effect of skeletal muscle and fat mass on muscle strength in the elderly （高齢者の筋力に対する骨格筋と脂肪量の影響） （査読付）	共著	平成 30 年 6 月	Healthcare Vol.6 No.3 pii:E72（計 6 ページ）	本研究は，高齢者の筋力に対する脂肪量と骨格筋量の影響を 192 名の女性高齢者にてステップワイズ法を用いて検証した．その結果，上肢の脂肪量と骨格筋量のどちらも握力に影響していた．下肢は骨格筋量のみが膝伸展筋力に影響しており，脂肪量は影響していなかった．本研究より，筋力に影響する骨格筋量/脂肪量率の閾値が存在する可能性が示唆された。 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および解析を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Murata S, Shiraiwa K, Abiko T, Nakano H, Iwase H, Naito K, Horie J
17 大腿中央前面筋厚・脂肪厚，大腿周径，大腿前面筋硬度測定の再現性および膝伸展筋力との関連 （査読付）	共著	平成 30 年 7 月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.8, No.2 P.85-P.89	本研究は，大腿中央前面筋厚（以下，筋厚）・脂肪厚（以下，脂肪厚），大腿周径，大腿前面筋硬度（以下，筋硬度）測定の検者内・検者間再現性と膝伸展筋力との関連を健常成人 20 名の両下肢計 40 脚を対象として検討した．その結果，筋厚，脂肪厚，大腿周径の再現性は，男女ともに級内相関係数が 0.9 以上と極めて高かったが，筋硬度は検者間で男性が 0.763，女性が 0.787 と低い値を示した．筋力との相関では，男性の大腿周径のみに有意な相関(r＝0.54，p<0.05)が認められた．これらの結果から，筋硬度の測定は測定値の再現性に留意すること，また男性の大腿周径は膝伸展筋力を反映するが，女性の大腿周径の測定値は脂肪厚の影響を考慮する必要性が示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに，実験結果に基づき論文作成を行った． 共著者：小林佐季，乕若あかり，野中紘士，安彦鉄平，白岩加代子，堀江淳，村田伸

18 Physical characteristics vary according to body mass index in Japanese community-dwelling elderly women （日本の地域在住高齢女性において身体的特徴はBMIに応じて変わる） （査読付）	共著	平成30年11月	Geriatrics Vol.3, No.4 87(計8ページ)	本研究は，日本の地域在住高齢女性を対象にBMIに基づき低体重，過体重，肥満群と正常体重の群と身体機能と体組成の比較を行った．その結果，低体重群では正常体重群に比べ，上体起こしの回数が少なく膝伸展筋力が歩行速度と強く正相関した．過体重群では，正常体重群に比べ，骨格筋量は増加したが膝伸展筋力は増加しなかった．肥満群では正常体重群に比べ，片脚立位時間が少なかった．本研究によりBMIにより身体機能や新体組成が変化すること，高齢女性の身体機能の評価や維持・改善のプログラム作成の際，BMIが有益な情報になることを示した． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および解析を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Murata S, Shiraiwa K, Abiko T, Nakano H, Iwase H, Naito K, Horie J
19 高齢者における歩行調整能力の違いによる身体的特徴 （査読付）	共著	平成31年1月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.8, No.4 P.169-P.173	高齢者の歩行速度調整能力を検討するために，歩行速度を「普通歩行」，「やや速歩き」，「最速歩行」の3段階で実施し，主観的判断による速度変化と身体機能，注意機能，認知機能との関係性について検討した．その結果，「やや速歩き」の速度調整ができない高齢者が39.4%いた．調整可能群は，調整不良群より，やや速歩きと最速歩行が有意に速い結果を示した．群間比較において，身体機能，注意機能，認知機能には有意な違いを示さなかったことから，調整不良群は，歩行速度を調整する際に，筋力，バランス能力などの機能が十分に活用できていない可能性が示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともにデータ測定を行った． 共著者：白岩加代子，村田伸，安彦鉄平，野中紘士，中野英樹，岩瀬弘明，内藤紘一，堀江淳
20 要介護高齢者における大腿四頭筋筋力と大腿前面筋厚・脂肪厚，大腿周径，大腿前面筋硬度との関連 （査読付）	共著	平成31年1月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.8, No.4 P.181-P.185	本研究では，要介護高齢者（男性23人，女性37人）を対象に，大腿四頭筋筋力と大腿前面筋厚（以下，筋厚）・脂肪厚，大腿周径，大腿前面筋硬度との関連を検討した．単相関解析の結果，男性では大腿周径が，女性では筋厚と大腿周径が，大腿四頭筋筋力との間に有意な相関を示した．また重回帰分析の結果，男性では大腿周径が大きいほど，女性では筋厚が厚いほど，大腿四頭筋筋力が強かった．これらのことから，要介護高齢者において，男性では大腿周径が，女性では筋厚が，大腿四頭筋筋力を反映することが示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともにデータ測定を行った． 共著者：合田明生，村田伸，谷川加奈子，藤井伶衣奈，吉岡弓佳，野中紘士，中野英樹，安福祐一，白岩加代子

21 地域在住高齢者におけるプレサルコペニアの身体・認知・心理機能特性 （査読付）	共著	平成 31 年 2 月	健康支援 Vol.21, No.1 P.11-P.17	本研究は，地域在住の女性高齢者を対象に，正常な筋肉量の高齢者と比較することで，筋肉量低下を生じたプレサルコペニア高齢者の身体・認知・心理機能の特性を明らかにすることを目的に行われた．その結果，プレサルコペニアに該当する高齢者は，筋肉量の低下に伴い四肢・体幹の筋力低下を認めることが示唆された．プレサルコペニア高齢者は，筋力以外の身体機能の低下が認められないことから，日常生活に支障をきたさず，自身の筋力低下を自覚していないことが予想された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともにデータ測定を行った． 共著者：森耕平，村田伸，白岩加代子，安彦鉄平，岩瀬弘明，内藤紘一，野中紘士，中野英樹，堀江淳
22 Endurance exercise increases the protein levels of PGC-1α and respiratory chain complexes in mouse skeletal muscle during atorvastatin administration （アトルバスタチン投与中の持久的運動はマウス骨格筋の PGC-1α と呼吸差複合体タンパクを増加させる） （査読付）	共著	平成 31 年 3 月	The Journal of Physiological Sciences Vol.69, No.2 P.327-P.333	本研究は，アトルバスタチン投与中の持久的運動がマウス骨格筋のミトコンドリア順応および筋損傷を起ここすかどうかについて検討した．その結果，アトルバスタチン投与中に運動した群は，アトルバスタチン投与のみの群に比べ，大腿四頭筋の PGC-1α と呼吸差複合体 I-V のタンパクが増加した．また，アトルバスタチン投与中に運動した群の血清クレアチンキナーゼは上昇せず，組織学的にも筋損傷は認められなかった．これらの結果より，アトルバスタチン投与中の持久的運動は骨格筋のミトコンドリア順応を起こすこと，筋損傷は惹起されないことが示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Ozaki Y, Ito K, Sakita M,Une S, Akiyama J

23 幼児の重心動揺と歩行パラメータとの関連 （査読付）	共著	平成 31 年 4 月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.9, No.1 P.7-P.11	本研究の目的は，幼児の重心動揺と歩行能力との関連を明らかにすることである．対象児 45 名（男児 16 名，女児 29 名）の重心動揺の測定と歩行分析を行った結果，重心動揺の指標とした総軌跡長と外周面積は，ともに通常歩行時の歩行率（総軌跡長 r＝－0.421，外周面積 r＝－0.347），立脚時間（それぞれ r＝0.474，0.426），両脚支持時間（それぞれ r＝0.398，0.346）の 3 項目と有意な相関が認められ，最速歩行時の歩行速度（それぞれ r＝－0.469，－0.382），歩行率（それぞれ r＝－0.388，－0.351），立脚時間（それぞれ r ＝0.489，0.569），両脚支持時間（それぞれ r＝0.556，0.653）の 4 項目と有意な相関が認められた．これらの結果から，幼児期の重心動揺と歩行は密接に関連しており，幼児に対する重心動揺計を用いた姿勢制御能の評価の重要性が示された．また，幼児の姿勢制御能を高めることで，歩行をはじめとする身体運動の発育支援が効果的に行える可能性が示された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定を行った． 共著者：村田伸，安彦鉄平，中野英樹，満丸望，久保温子，八谷瑞紀，古後晴基，野中紘士，松尾大，上城憲司
24 プレサルコペニア高齢者の歩行速度と身体機能・認知機能との関連 （査読付）	共著	令和元年 7 月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.9, No.2 P.53-P.58	本研究の目的は，プレサルコペニア高齢者の歩行速度と身体機能および認知機能との関連を検討することである．対象者を正常筋肉量群（48 名）とプレサルコペニア群（17 名）の 2 群に分類し，歩行速度（通常・最速）と身体機能（膝伸展筋力，上体起こし，開眼片足立ち時間，長座体前屈距離）および認知機能（Mini-Mental State Examination，Trail making test-Part A；TMT-A）との相関分析を行った．その結果，プレサルコペニア群の通常歩行速度と中程度以上の有意な相関が認められたのは，膝伸展筋力（r=0.51）および TMT-A（r=-0.52）であり，最速歩行速度では膝伸展筋力（r=0.74），TMT-A（r=-0.66）および開眼片足立ち時間（r=0.56）であった．一方，正常筋肉量群の歩行速度はいずれの項目とも中程度以上の有意な相関は認められなかった．これらの知見より，プレサルコペニア高齢者は正常筋肉量の高齢者に比べ努力性の高い歩行である可能性が示され，下肢筋力，バランス能力および注意機能のわずかな低下をきっかけに歩行能力低下を生じる可能性が示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定を行った． 共著者：森耕平，村田伸，白岩加代子，安彦鉄平，岩瀬弘明，内藤紘一，野中紘士，中野英樹，堀江淳

25 地域在住女性高齢者のヘルスリテラシーと身体機能，心理機能，運動習慣との関連について－傾向スコア法による検証 （査読付）	共著	令和元年７月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.9，No.2 P.59-P.63	地域在住の女性高齢者を対象にヘルスリテラシーと身体機能，心理機能および運動習慣との関連について，傾向スコア法を用いてデータベースを作成し，ロジスティック回帰分析を用いて検討した．解析の結果，ヘルスリテラシーに関連する因子として抽出されたのは，主観的健康感と運動習慣であった．これらのことから，ヘルスリテラシーを高めるためには，主観的健康感を高めるような取り組みと運動習慣を定着させるような取り組みが必要になることが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定を行った． 共著者：岩瀬弘明，村田伸，白岩加代子，安彦鉄平，内藤紘一，野中紘士，堀江淳
26 地域在住高齢者における主観的認知機能低下と客観的認知機能低下の関連 （査読付）	共著	令和元年７月	日本早期認知症学会誌 Vol.12，No.1 P.44-P.51	本研究は，地域在住高齢者における主観的認知機能低下（subjective cognitive decline：SCD）と客観的認知機能低下の関連を検討することを目的とした．対象は明らかな認知機能障害がない地域在住高齢者 242 名とした．「基本チェックリスト」の認知機能項目（Kihon-Checklist-Cognitive Function：KCL-CF）を用いて，主観的認知機能低下を測定した．また，Mini-Mental State Examination（MMSE）を用いて，客観的認知機能低下を測定した．対象者を KCL-CF 得点で群分けし，MMSE 得点を比較した結果，SCD を認めた対象者は，「認知症初期症状を反映する MMSE 因子」の得点が有意に低かった（$p<0.05$）．さらに，MMSE 下位項目得点の得点別比率を比較すると，２つの KCL-CF 質問項目（記憶，日付の見当識）において，SCD を認めた対象者が，主に「認知症初期症状を反映する MMSE 因子」項目の得点が有意に低かった（$p<0.05$）．KCL-CF で測定する SCD は，地域在住高齢者の初期認知機能低下を捉えるスクリーニングツールとして有用である可能性が示された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定を行った． 共著者：合田明生，村田伸，白岩加代子，野中紘士，中野英樹，安彦鉄平，堀江淳

27 通所介護施設を利用する高齢者の浮き趾と身体特性，身体組成および身体機能との関連 （査読付）	共著	令和元年7月	保健の科学 Vol.61，No.7 p.491-495	通所介護施設を利用する要支援・要介護認定を受けた高齢者の浮き趾(「立位時に足趾が地面に接地していない状態」)と身体特性、身体組成、身体機能との関連を明らかにすることを目的に、滋賀県の通所介護施設1施設に通所中の高齢者57名(男性24名、女性33名、平均年齢80.3±1.0歳、要支援38名、要介護19名)を対象に検討した。浮き趾群(42名)と非浮き趾群(15名)を比較した結果、浮き趾群では非浮き趾群と比べ、身長、骨格筋量、足底接地率がそれぞれ有意に低値を示した。 本人担当部分:研究計画の立案およびデータ測定を行った. 共著者：弓岡まみ，村田伸，岩瀬弘明，野中紘士，中野英樹，白岩加代子
28 要介護女性高齢者におけるロンブステストの再現性と妥当性 （査読付）	共著	令和元年10月	保健医療学雑誌 Vol.10，No.2 P.92-P.98	要介護女性高齢者において，新たな動的バランス評価であるロンブステストの再現性と妥当性を検証した．要介護女性高齢者29名を対象に，ロンブステストと4つの身体パフォーマンス指標（開眼片脚立位時間，Timed Up and Go Test [TUG]，5m最速歩行時間，30-sec chair stand test [CS-30]）を測定した．ロンブステストの再現性を検証するために，20名の対象者に対して，同一測定日に2回目の測定を実施した．その結果，ロンブステストは優れた再現性（ICC 0.96～0.97）を示し，開眼片脚立位時間，TUG，5m最速歩行時間，CS-30との間に中程度の有意な相関（r=|0.42|～|0.59|）を認めた．以上の結果から，ロンブステストは，要介護女性高齢者において，再現性と妥当性のある動的バランス評価法であるとことが示唆された． 本人担当部分:研究計画の立案およびデータ測定を行った. 共著者：合田明生，村田伸，礒谷光，宇野友萌子，影山瑞希，野中紘士，中野英樹，白岩加代子
29 1年後に軽度認知障害を発症した地域高齢者の身体および精神機能の特徴 （査読付）	共著	令和元年10月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.9，No.3 P.119-P.125	本研究は，1年後に軽度認知障害（MCI）を発症した地域在住高齢者における，身体機能・精神機能の特徴を明らかにすることを目的とした．ベースライン時点で認知機能障害のない地域在住高齢者91名を対象とした。1年後にMMSE24‐26点に低下した者をMCI 群，27点以上に保たれた者を非MCI 群に分類し，ベースライン時の身体機能および精神機能を比較した．その結果，MCI 群では，非MCI 群と比較して開眼片脚立位時間が有意に低値を示した（p＜0.05）．以上から，開眼片脚立位時間は，地域在住高齢者の1 年後のMCI 発症を予測する評価として有用である可能性が示された． 本人担当部分:研究計画の立案およびデータ測定を行った. 共著者:合田明生，村田伸，白岩加代子，野中紘士，中野英樹，安彦鉄平，堀江淳

30 小学6年生における足部および足趾に関する実態調査 （査読付）	共著	令和元年10月	体育の科学 Vol.69, No.10 P.767-P.771	本研究は，小学1年生と6年生の足部形態および足部形態以上を調査することで，現代の学童期児童の足部成長状況および浮き趾を主とした足部形態異常の実態を明らかにすることを目的とした．その結果，足部形態異常は，1年生および6年生に共通して浮き趾が認められ，約7割の児童が浮き趾であった．また，6年生では外反母趾が13.3%に認められたが，1年生では認められなかった．その他，内反小趾と回張足は1年生および6年生ともに認められなかった．結果より，1年生から6年生までの間に足部の形態が大きく変化し，靴のサイズが足部の形態に適していない可能性が推察された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定を行った． 共著者：弓岡まみ，村田伸，岩瀬弘明，安彦鉄平，中野英樹，野中紘士，松井宏彰
31 Elongation training decreases spinal excitability in healthy human soleus muscle （エロンゲーショントレーニングは健常ヒトヒラメ筋の脊髄の興奮性を減弱させる） （査読付）	共著	令和元年11月	Journal of Asian Rehabilitation Science Vol.2 No.4 P.23-26	本研究は，健常ヒトヒラメ筋の脊髄の興奮性に対するエロンゲーショントレーニング(ELT)の効果について検証した．26名の健常若年男性を無作為にELT群（n=13)と安静対照群（n=13)に分け，介入前，介入の1と30分後にH反射とM波を測定した．その結果，介入前のH-max/M-maxは両群で同レベルであり，介入の1と30分後のH-max/M-maxはELT群のみ低下した．本研究結果より，ELTは脊髄の興奮性を低下させること，その効果は最低でも30分持続することが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案，データ解析および一部考察を行った． 共著者：Miyazaki J, Yurugi R, Ogawa H, Nonaka K, Uematsu A

32 要介護高齢者における踵上げ動作を用いたバランステストの再現性と妥当性 （査読付）	共著	令和元年 12 月	保健の科学 Vol.61, No.12 P.851-P.856	本研究の目的は，要介護高齢者において，踵上げテストの再現性と妥当性を検証することであった．要介護高齢者 57 名を対象に， 踵上げテストと 4 つの身体パフォーマンス指標（Timed Up and Go Test [TUG], 30-sec chair stand test [CS-30], 開眼片脚立位テスト, Functional Reach Test [FRT]）を測定した．また踵上げテストの再現性を検証するため，同一測定日に 2 回目の測定を実施した．その結果， 踵上げテスト は優れた再現性（ICC 0.91）を示し， TUG, CS-30, 開眼片脚立位テスト，FRT との間に有意な相関（rs=|0.32|～|0.60|）を認めた．以上の結果から，踵上げテストは，要介護高齢者において，再現性と妥当性のあるバランス評価法であることが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定を行った． 共著者：合田明生，村田伸，髙畑咲紀，谷口緩夏，野中紘士，中野英樹，白岩加代子
33 地域在住高齢者における閉じこもり調査－身体機能，身体組成，認知・精神心理機能の特徴 （査読付）	共著	令和 2 年 1 月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第 9 巻第 4 号 pp.195～200	本研究では，体力測定会に参加した地域在住高齢者 245 名（男性 50 名，女性 195 名）を対象に，閉じこもりの有無により，身体機能，身体組成，認知・精神機能に差異がみられるか検討した．その結果，男性では，TUG と歩行速度が閉じこもり群より，非閉じこもり群の方が有意に良好な値を示した（p＜0.05）．身体組成は，筋肉量，体水分量，タンパク質量，骨ミネラル量，基礎代謝量が，閉じこもり群より非閉じこもり群の方が良好な値を示した（p＜0.05）．うつ傾向を示す者が，閉じこもり群の方が非閉じこもり群より有意に多い結果を示した．女性では，身体機能は，握力，TUG，歩行速度が閉じこもり群より非閉じこもり群の方が良好な値を示した（p＜0.05）．その他の項目には 2 群間に有意差は認められなかった．閉じこもりによる影響は，男性と女性では異なることが示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともにデータ測定を行った． 共著者：白岩加代子，村田伸，安彦鉄平，中野英樹，合田明生，野中紘士，岩瀬弘明，堀江淳

34 Increased time difference between imagined and physical walking in older adults at a high risk of falling. （転倒ハイリスク高齢者におけるイメージ歩行と実歩行の時間的不一致の増大） （査読付）	共著	令和２年５月	Brain Sciences 第 10 巻第 6 号 332（計 8 ページ）	歩行の運動イメージ能力は転倒恐怖感と関連があることが報告されているが，実際の転倒リスクとの関係性については未だ明らかにされていない．本研究は，転倒ハイリスク群と転倒ローリスク群高齢者におけるイメージ歩行と実歩行の時間的不一致を明らかにすることを目的とした．全ての対象者は幅の異なる 3 種類の歩行路におけるイメージ歩行と実歩行に要する時間を測定した．その結果，イメージ歩行と実歩行の時間的不一致は幅が狭くなるにつれて転倒ハイリスク群で有意に増大した．さらに，転倒ハイリスク群では自己の歩行能力の過大評価を示した．本研究により，イメージ歩行と実歩行の時間的不一致は運動イメージに基づく転倒リスク評価として貢献できる可能性を示した． 本人担当部分：データ測定，投稿論文のチェックおよび校正を行った． 共著者：Nakano H, Murata S, Shiraiwa K, Nonaka K
35 Correlations between physical performance and muscle mass, strength, and quality in obese and normal-weight community-dwelling older Japanese women （地域在住日本人高齢女性の肥満者と標準体重者における身体パフォーマンスと骨格筋量および筋力，筋質との関連） （査読付）	共著	令和２年６月	Asian Journal of Gerontology & Geriatrics 第 15 巻第 1 号 pp.17～22	本研究は地域在住日本人高齢女性の肥満者と標準体重者における身体パフォーマンスと骨格筋量および筋力，筋質との関連を調べることを目的とした．170 名の地域在住高齢女性を対象とし，被験者を標準体重群と肥満群に分けた．被験者の膝伸展筋力、下肢骨格筋量，筋質データ，30 秒椅子立ち上がりテスト（CS-30），timed up and go test（TUG）を記録した．膝伸展筋力/体重比と下肢骨格筋量/体重比は標準体重群に比べ肥満群で低かったが、筋質は両群で同程度だった．肥満群では CS-30 や TUG と骨格筋量/体重比との間に有意な相関を認めたが，筋質との有意な相関は認めなかった．標準体重群では，CS-30 や TUG と筋質の間に有意な相関を認めた．これらの結果より，骨格筋量/体重比は肥満の地域在住高齢者の身体パフォーマンスを維持向上させるために重要な要因であることが示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および解析を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Murata S, Shiraiwa K, Abiko T, Goda A, Yasufuku Y, Nakano H, Iwase H, Horie J

36 Changes with aging in skeletal muscle mass, body fat mass, and bone mineral density in adults with cerebral palsy: A pilot cross-sectional study （成人脳性麻痺者の筋肉量，体脂肪量，骨密度の加齢に伴う変化-予備的横断研究） （査読付）	共著	令和２年７月	International Journal on Disability and Human Development 第 19 巻第 2 号 pp.139～144	本研究は，27 名の成人脳性麻痺者を対象に，成人脳性麻痺者の骨格筋量，体脂肪量，骨密度の加齢変化を横断的に検証した．その結果，成人脳性麻痺者の年齢と骨格筋量との間に有意な相関が認められないこと，年齢と体脂肪量に有意な正相関が認められること，年齢と骨密度に有意な負の相関が認められることが確認できた．これらの結果より，成人脳性麻痺者は体脂肪の増加に注意する必要があることが示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともにデータの解析を行った．また，解析結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Iwase H, Murata S, Kubo A
37 Different patterns in age-related morphometric alteration of myelinated fibers and capillaries of th tibial nerve: a longitudinal study in normal rats （脛骨神経のミエリン化線維と毛細血管の年齢に関連した形態変化におけるパターンの相違） （査読付）	共著	令和２年６月	Journal of Anatomy 第 236 巻第 6 号 pp.1101～1111	有髄線維と毛細血管の退行パターン間の時間的関係はいまだ明らかにされていない．本研究は，有髄線維と毛細血管両者の加齢に伴う形態学的および組織学的変化を解析し，どちらが先行して退行するかを明らかにすることを目的とした．組織学的評価には，20 週齢(若齢群)，70 週齢(中齢群)，および 97 週齢(高齢群)に，それぞれ 7 匹の Wistar 系雄ラットを無作為に選択した．左右の脛骨神経を摘出し，有髄線維と毛細血管を形態学的および組織学的に解析した．軸索の直径とミエリン厚は，若齢群と比較して中齢群で変化は認められなかったが，これらのパラメーターは高齢群において，有意な減少を認めた($P<0.001$)．毛細血管の直径と吻合の数は中齢群で既に有意に減少した($P<0.001$)．これらの結果から，末梢神経の有髄線維が高齢ラットで退行の兆候を示すのに対して，毛細血管は中齢で退行することを示している．脛骨神経の自然老化では，毛細血管は有髄線維の前に退行することを明らかにした． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施した． 共著者：Sakita M, Murakami S, Nonaka K, Sakamoto R, Saito T, Isobe W, Kumagai S

38 1,25-dihydroxyvitamin D3 inhibits lipopolysaccharide-induced interleukin-6 production by C2C12 myotubes （1,25-Dihydroxyvitamin D3 はC2C12 筋菅細胞のリポポリサッカライドによるインターロイキン6 産生を抑制する） （査読付）	共著	令和2年9月	Medicina 第56巻第9号 450（計7ページ）	本研究は、マウス由来C2C12 筋菅細胞に対する1,25-dihydroxyvitamin D3 [1,25(OH)2D3]の抗炎症作用と筋タンパク分解抑制作用を検討することを目的に実験を行った．マウス由来のC2C12 筋芽細胞を増殖培地である10%牛血清を含むDulbecco Modified Eagle（DMEM）培地で増殖させた後，培地を分化培地である2%ウマ血清を含むDMEM 培地に変更し4日間培養し，筋菅細胞に分化させた．筋菅細胞に分化させた後、0、0.1、1、10nM の1,25(OH)2D3 を添加した培地で24時間培養し，その後，炎症を惹起させるため100ng/ml のリポポリサッカライド（LPS）を含む培地で48時間培養した．その結果，LPS は培養液中のinterleukin（IL)-6 を増加させた．しかしながらIL-6 の濃度は1,25(OH)2D3 処理した筋管細胞で処理されていない細胞に比べ，IL-6 濃度は有意に低かった．ミオシンやMAFbx とMuRF1 は各条件間で有意差は認められなかった．Tumor necrosis factor α の測定は多くのサンプルで検出限界を下回ったため正確な測定ができなかった．本研究結果から，1,25(OH)2D3 がLPS 刺激による筋菅細胞でのIL-6 産生を抑制することが示された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Akiyama J, Yoshikawa Y, Une S, Ito K
39 Association of low bone mass with decreased skeletal muscle mass: A cross-sectional study of community-dwelling older women (骨量低下と骨格筋量低下の関連性：地域在住女性高齢者を対象とした横断的研究) （査読付）	共著	令和2年9月	Healthcare 第8巻第3号 343（計8ページ）	本研究は，地域高齢者を対象に骨量と骨格筋量，筋力そして身体能力の関連性を検討することを目的とした．体力測定会に参加した地域高齢者306名の中から，214名を対象とし，分析を行った．対象者は超音波骨量測定装置により測定された骨量に基づき，正常（T-score>-1)，低値(-2.5<T-score≦-1)，超低値群(T-score≦-2.5)に分けられた．加えて，対象者の骨格筋量，筋力（握力と膝伸展筋力），身体能力[歩行速度とtimed up and go（TUG)]を測定した．上肢，下肢および四肢のSkeletal muscle index は骨量低値群に比べ骨量超低値群で有意に低かった．握力，膝伸展筋力，歩行速度，TUG は各群間で有意差を認めなかった．これらの結果より，骨量が低い高齢女性は骨格筋量が減少していることが示された． 研究計画を立案するとともに測定実施および統括を行った．また，測定結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Murata S, Nakano H, Anami K, Shiraiwa K, Abiko T, Goda A, Iwase H, Horie J

40 Subjective and objective mental and physical function affects subjective cognitive decline in community-dwelling elderly Japanese people（主観的・客観的な心身機能は地域在住日本人高齢者の主観的認知機能に影響を与える） （査読付）	共著	令和２年９月	Healthcare 第８巻第３号 343（計８ページ）	主観的認知機能低下（SCD）は複雑であり，特に日本人においてはよく理解されていない．本研究では，日本人の地域在住高齢者を対象に，主観的および客観的な心身機能と SCD との関係を明らかにすることを目的とした．SCD は、基本チェックリストの認知機能項目を用いて評価した．SCD 以外の客観的精神機能については，Mini-Mental State Examination（MMSE）と Geriatric Depression Scale（GDS-5）の５項目版を用いて評価した．客観的な身体機能については，TUG（Timed Up-and-Go Test）と膝伸展筋力を用い，主観的な精神・身体機能については，健康関連 QOL 尺度の８項目短縮版の Mental Component Summary（MCS）と Physical Component Summary（PCS）を用いて評価した．その結果，MMSE，GDS-5，TUG，膝伸展筋力，MCS は SCD 群で有意に悪化した．また、ロジスティック回帰分析の結果，GDS-5，MCS は SCD 発症と関連していた．以上のことから，日本人の地域在住高齢者における SCD の発症には，抑うつ症状と主観的精神機能の低下が関係していることが示唆された．これらの結果は，日本人高齢者の認知症予防や介入プログラムを計画する上で有用である． 本人担当部分：データ測定と整理および論文の校正を行った． 共著者：Goda A，Murata S，Nakano H，Shiraiwa K，Abiko T，Nonaka K，Iwase H，Anami K，Horie J
41 The association between health literacy and gait speed in community-dwelling older adults （地域在住高齢者のヘルスリテラシーと歩行速度との関連） （査読付）	共著	令和２年９月	Healthcare 第８巻第４号 349（計 10 ページ）	本研究は，地域在住高齢者を対象にヘルスリテラシーと歩行速度との関連を検討することを目的とした．測定会に参加した地域在住高齢者 240 名に対し，通常歩行速度，ヘルスリテラシー，各種身体機能，認知機能等を測定した．ヘルスリテラシーは CCHL を使用した．対象者は、通常歩行速度に基づいて、速い（速度≥1.3m/s）と遅い（<1.3m/s）の２つのグループに分けられ，歩行速度を従属変数とするロジスティック回帰分析を行った．その結果，CCHL は独立して歩行速度に影響を与えることが明らかとなった． 本人担当部分：データ測定と整理および論文の校正を行った． 共著者：Anami K，Murata S，Nakano H，Nonaka K，Iwase H，Shiraiwa K，Abiko T，Horie J

42 地域在住女性高齢者における異なる立ち上がりテストと身体機能との関連 （査読付）	共著	令和 2 年 10 月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第 10 巻第 3 号 pp.105-110	本研究の目的は，自立生活を営む地域在住女性高齢者 154 名を対象に，30 秒椅子立ち上がりテスト（30-sec Chair Stand test；CS-30）と虚弱高齢者用 10 秒椅子立ち上がりテスト（10-sec Chair Stand test for Frail Elderly；Frail CS-10）を併せて行い，上下肢・体幹の筋力，柔軟性、静的・動的立位バランスとの関連から，地域在住女性高齢者に適した簡易下肢機能評価法を検討した．重回帰分析の結果，CS-30 と Frail CS-10 はともに大腿四頭筋筋力，上体起こし回数，Timed Up Go Test の 3 項目と独立して関連することが示された．これらの結果から，特別な機器を必要とせず，簡便に実施できる CS-30 と Frail CS-10 は，地域在住女性高齢者の下肢筋力や動的バランス評価として有用であることが示された．とくに Frail CS-10 は，自立生活を営む地域在住女性高齢者を対象としても，簡易下肢機能評価法として汎用性の高いテストであることが示唆された． 本人担当部分：データ測定と整理および論文の校正を行った． 共著者： 村田伸，合田明生，白岩加代子，安彦鉄平，中野英樹，岩瀬弘明，野中紘士，阿波邦彦，松本典久，堀江淳
43 地域在住高齢女性における 1 年後の軽度認知機能障害の発現を予測する身体機能指標 -傾向スコアマッチング法を用いた検証 （査読付）	共著	令和 2 年 10 月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第 10 巻第 3 号 pp.117-123	本研究の目的は，1 年後に軽度認知障害（mild cognitive impairment：MCI）を発現する地域在住高齢女性における身体機能を明らかにすることであった．ベースライン時点で認知機能障害のない地域在住高齢女性 201 名を対象とした．1 年後に Mini-Mental State Examination（MMSE）24 - 26 点に低下した者を MCI 群 36 名，27 点以上に保たれた非 MCI 群 165 名に分類した．その後，傾向スコアを用いて認知機能低下に影響する交絡因子をコントロールして両群 36 名ずつにマッチングし，両群のベースライン時の身体機能を比較した．その結果，MCI 群では，非 MCI 群と比較して開眼片脚立位時間が有意に短く，Timed Up and Go Test と 5m 最速歩行の所要時間が有意に長かった．以上から，バランス能力と歩行能力の評価は，地域在住高齢女性の 1 年後の MCI 発現を予測するために有用なスクリーニング指標である可能性が示された． 本人担当部分：データ測定と整理および論文の校正を行った． 共著者： 合田明生，村田 伸，白岩加代子，中野英樹，安彦鉄平，野中紘士，岩瀬弘明，阿波邦彦，堀江 淳

44　The Relationship between Subjective Cognitive Decline and Health Literacy in Healthy Community-Dwelling Older Adults ［健康な地域在住高齢者における主観的認知機能低下とヘルスリテラシーの関係］ （査読付）	共著	令和２年12月	Healthcare 第８巻４号 567（計10ページ）	健康な地域在住高齢者を対象に、ヘルスリテラシーと主観的認知機能低下（Subjective Cognitive Decline; SCD）の関係を調査した。ロジスティック回帰分析の結果、SCDの発生は年齢だけでなく、ヘルスリテラシーの低さや抑うつの重症度と関連していた。この結果は、健康な地域在住高齢者において、ヘルスリテラシーの低さがSCDの罹患率と関連していることを示唆しており、この集団に対する認知症予防や介入プログラムを計画する際に有用であることを示唆するものである。 本人担当部分：データ測定および論文の校正を行った. 共著者：Goda A, Murata S, Nakano H, Nonaka K, Iwase H, Shiraiwa K, Abiko T, Anami K, Horie J
45　児童のロコモティブシンドローム発生と運動イメージ想起能力との関連 （査読付）	共著	令和３年１月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.10, No.4 P.183-P.188	本研究の目的は児童のロコモティブシンドローム（以下，ロコモ）発生と運動イメージ想起能力との関連を明らかにすることである．対象は小学生の児童212名とした．ロコモ判定には運動器機能不全チェック項目，運動イメージ想起能力の測定にはメンタルローテーション課題を用いた．ロコモ判定の結果から，対象者を陽性群38名と陰性群174名の２群に分けた．２群比較の結果，ロコモ陽性群では，有意に男児が多く，年齢，身長，体重，ローレル指数が高く，メンタルローテーション課題の成績が不良であった．性別，年齢，体格を調整したロジスティック回帰分析の結果，メンタルローテーション課題の成績は，ロコモ判定結果に対する有意な説明変数であった．以上から運動イメージ想起能力は，児童におけるロコモ発生に影響する因子であることが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画立案およびデータ測定を行った. 共著者：合田明生，安彦鉄平，村田 伸，久保温子，田中真一，満丸 望，野中紘士，岩瀬弘明，甲斐義浩，宮地 諒，大野真悠，宮崎純弥

46 Physical performance in relation to preserved ratio impaired spirometry: a cross-sectional study of community-dwelling older Japanese adults （preserved ratio impaired spirometry に関連する身体能力：日本の地域在住高齢者を対象とした横断的研究） （査読付）	共著	令和３年８月	Scientific Reports Vol.11, 17411（計９ページ）	PRISm（Preserved ratio impaired spirometry）は死亡率の上昇と関連しているが，日本ではその特徴が明確に示されていない．地域在住高齢者 668 人を調査した結果，PRISm の有病率は 12%，閉塞性肺障害の有病率は 6.9%であった．傾向スコアマッチングを用いて，PRISm 群（n=80）と健常高齢者群（n=80）を比較した．PRISm 群は予測比肺活量(%FVC)，体幹筋持久力が低く，片足立ちの持続時間が長かった．多変量ロジスティック回帰では，%FVC の低下と片脚立ちの増加が PRISm 状態の独立した予測因子であった．日本における地域在住高齢者の PRISm の有病率は，閉塞性肺障害の有病率を上回り，%FVC の低下やバランステストの成績向上と関連していた． 本人担当部分：データ測定と整理を担当した． 共著者： Kunihiko Anami, Shin Murata, Hideki Nakano, Koji Nonaka, Hiroaki Iwase, Kayoko Shiraiwa, Teppei Abiko, Akio Goda, Jun Horie
47 Factors Influencing the Development of Mild Cognitive Impairment in Community-Dwelling People Aged 75 Years and Older （75 歳以上の地域居住者における軽度認知障害の発症に影響を与える要因） （査読付）	共著	令和３年 10 月	Geriatrics Vol.6, 104（計 10 ページ）	75 歳以上の地域在住高齢者 291 名を対象に，身体的および心理的な状態が，軽度認知障害（MCI）の発症と関連を検討した．研究対象者を，Mini-Mental State Examination のスコアを基準に，非 MCI 群（28 点以上）と MCI 群（28 点未満かつ 24 点以上）に分けた．さらに，病気による受診状況，抑うつ症状の重症度，各種身体機能，体組成を評価した．MCI 群の対象者は，教育歴が有意に短く，高血圧による受診率が高く，バランス能力も低かった．この結果から，これらの指標は 75 歳以上の高齢者の MCI を発見するためのスクリーニング指標と考えることができ，この集団に対する介入プログラムを計画する際に有用であると考えられる． 本人担当部分：データ測定と整理を担当した． 共著者：Akio Goda, Shin Murata, Kayoko Shiraiwa, Teppei Abiko, Hideki Nakano, Koji Nonaka, Hiroaki Iwase, Kunihiko Anami, Yuki Kikuchi, Jun Horie

48 コロナ禍における理学・作業療法士養成課程の早期体験実習 ―学内実習後の学生アンケート調査による検証－ （査読付）	共著	令和４年２月	医療福祉情報行動科学研究 vol.9, P.55-P.63	令和２年度および令和３年度，新型コロナウイルスの感染拡大をうけ早期体験実習を学内実習として実施した．学生アンケートの結果から，学内実習の意義や課題を明確にした。アンケートの結果，両年度とも実習内容については多くの学生が「よく理解できた」「まぁまぁ理解できた」と回答した反面，「2年次以降の学外実習に向けた不安」を訴える学生が多かった．自由記述では「教員が近くにいる分質問などがしやすかった」，「疑問をすぐに先生に質問することができた」という意見のほか，「自分が知らなかった分野にも興味が持てた」という意見もみられた．学内実習で医療施設での学びを完全に再現することは困難だが，早期体験実習の本来の目的を達成する上で，学内実習は必ずしも不利な点ばかりではない． 本人担当部分：データの集計および論文の校正を行った． 共著者：前田吉樹，中島大貴，伊藤健一，野中紘士，阿波邦彦，藤田信子，岩﨑智子，橋本雅至，山形力生，池田耕二
49　線維芽細胞の増殖，遊走およびAkt活性化に対する微弱電流刺激の効果 （査読付）	共著	令和４年２月	医療福祉情報行動科学研究 vol.9, P.73-P.79	本研究では，微弱電流刺激にAktの活性化が関与していると仮説を立て、微弱電流刺激による線維芽細胞の増殖，遊走，Akt活性化に対する効果を調べることを目的とした．ヒト皮膚線維芽細胞に微弱電流刺激を電流200μA，周波数2Hzで1時間実施し，細胞増殖，遊走およびAkt活性化を調べた。1日1回の微弱電流刺激を3回実施した結果，線維芽細胞は微弱電流刺激により有意に減少した．微弱電流刺激による遊走を検証するためスクラッチアッセイを実施した結果，微弱電流刺激により創傷治癒率は促進されなかった．また，微弱電流刺激によるAkt活性化を調べたが，微弱電流刺激による線維芽細胞のAkt活性化は認められなかった．本研究結果より，微弱電流刺激は刺激条件により線維芽細胞の増殖や遊走の促進は見られず，細胞数を減少させる可能性があることが示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験の実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：野中紘士，吉川義之

51 Relationship Between Age-Related Changes in Skeletal Muscle Mass and Physical Function: A Cross-Sectional Study of an Elderly Japanese Population （骨格筋量の加齢変化と身体機能との関係：高齢日本人集団の横断研究） （査読付）	共著	令和４年４月	Cureus Vol.14, No.4 e24260（計７ページ）	本研究は，日本の地域在住高齢者において部位別骨格筋量の年齢階級による変化を明らかにし，部位別骨格筋量の年齢による変化と身体機能との関係を明らかにすることを目的とした．参加者は５歳刻みの年齢群（65-69 歳、70-74 歳、75-79 歳、80 歳以上）に分けられ，さらに性差で分類された．上肢，下肢，体幹の骨格筋量は，多周波生体電気インピーダンス分析装置を用いて測定した．身体機能評価として，握力，大腿四頭筋力，座位回数，座位・リーチ距離，開眼片足立ち時間を測定し，Timed Up and Go テストを行った。その結果，すべての測定部位において，性別に関係なく加齢とともに骨格筋量が減少していることが明らかになった．さらに，年齢，体質，運動習慣の有無を調整した偏相関分析では，すべての部位で骨格筋量と握力との間に最も高い相関があることが明らかになった．このことから，日本人においても握力の測定は全身の骨格筋量の代表的な指標として利用できる可能性がある． 本人担当部分：データ測定と整理，論文の最終校正を担当した． 共著者：Iwase S, Murata S, Nakano H, Abiko T, Goda A, Nonaka K, Anami K, Horie J
52 ヒト皮膚由来線維芽細胞の培養温度が細胞増殖に与える影響 （査読付）	共著	令和４年８月	物理療法科学 Vol.29 P.72-P.76	本研究ではヒト皮膚由来線維芽細胞（HDFs）を異なる温度で培養し，細胞増殖に及 ぼす影響を検討した．HDFs を５×104 cells/dish の濃度で 35-mm dish に播種し，31， 33，35，37，39℃の５ 条件で培養した．HDFs は 24，48，72 時間後に剥離し，血球計 算板を使用して生細胞数と死細胞数をカウントした．解析には，37℃で培養した 24 時 間時点での細胞数を基準とした細胞比率を用いた．また，それぞれの温度における細胞 生存率を算出した．統計学的検討は温度と時間については二元配置分散分析を用い，細 胞生存率については一元配置分散分析を行った．分散分析にて有意差がみられた際には Bonferroni の多重比較検定を行った．結果は二元配置分散分析にて主効果，交互作用と もに有意差を認めた（p＜0.01）．インキュベーター設定温度の違いによる細胞比率は， 48，72 時間のいずれの時点においても培養温度の高さに依存して高い結果となった．細 胞生存率については有意差はみられなかった．以上のことから，今回検討した５ 条件に おいては，31，33，35° C では 37℃よりも細胞増殖が低下し，39° C では 37℃に比べ細胞 増殖が促進した． 本人担当部分：研究計画立案，データ測定と整理，論文の校正を担当した． 共著者：吉川義之，野中紘士，滝本幸治，前重伯壮，植村弥希子，杉元雅晴

53 Comparison of Physical Function among Elderly Japanese Women with and without Low Bone Mass and Low Muscle Mass: A Cross-Sectional Study of Older Women Who Engage in Regular Physical Activity （低骨量・低筋量の日本人高齢女性における身体機能の比較：定期的な身体活動を行う高齢女性の横断的研究） （査読付）	共著	令和４年９月	Geriatrics Vol.7, No.5 98（計９ページ）	骨量と筋肉量の両方が低下した高齢者では，身体機能の低下が一般的である．本研究の目的は，定期的に運動している異なる年齢層の高齢女性において，低い骨量と筋肉量と身体機能の関係を調査することである．解析対象は，299 名の高齢女性でとした．低骨量はＴスコア-2.5 以下，低筋量は骨格筋量指数 5.7kg/m2 未満で判定した．身体機能として，握力，膝伸展力，起立力，歩行機能，バランス機能を測定した．骨量と筋肉量により４群に分け（健常群，低骨量群，低筋量群，低骨・筋肉量群），身体機能を比較した．その結果，低骨量・筋肉量群と健常者群の間で身体機能に統計的に有意な差は見られなかった．また，後期高齢者（75 歳以上）においても４群間で身体機能に統計的に有意な差は見られなかった．定期的に運動している高齢女性は骨量や筋肉量が減少しても身体機能が低下しにくいことが確認され． 本人担当部分：研究計画の立案，データ測定および論文内容の精査・修正を行った． 共著者：Katsurasako T Murata S Goda A, Nakano H Shiraiwa K, Horie J, Nonaka K
54 骨量と筋量がともに低下する女性高齢者の運動機能の特徴 （査読）	共著	令和５年６月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.13, No.1 P.1-P.6	本研究の目的は，骨量と筋量がともに低下する女性高齢者の運動機能の特徴を縦断的に検討することである．2018 年と 2019 年に開催された体力測定会にともに参加した 65 歳以上の女性高齢者 105 名を解析対象とした．筋量低下の基準は四肢骨格筋指数が 5.7 kg/㎡未満とし，骨量低下の基準はＴスコアが-2.5 以下とした．１年後の身体組成の状態から骨量・筋量低下群，筋量のみ低下群，骨量のみ低下群，正常群の４群に分け，ベースライン時の運動機能を比較した．さらに，身体組成別の４群を従属変数とした多項ロジスティック回帰分析を実施した．その結果，骨量・筋量低下群は Body Mass Index（BMI），握力，通常歩行速度が有意な影響要因として抽出された．これらのことから，骨量と筋量がともに低下してしまう女性高齢者は，BMI が低いこと，握力が弱いこと，通常歩行速度が遅いことに影響を受けることが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案，データ測定および論文内容の精査・修正を行った． 共著者：葛迫剛，村田伸，合田明生，中野英樹，白岩加代子，堀江淳，野中紘士

55 1年後に骨量が低下する地域在住高齢女性の身体・生活機能の特徴 （査読付）	共著	令和5年8月	理学療法学 Vo.50, No.4 P.122-P.128	本研究は，1年後に骨量が低下した高齢女性における身体機能および生活機能の影響要因を明らかにすることを目的とした．骨量低下はTスコアが-2.5以下とし，ベースライン時点で骨量が低下していない高齢女性85名を対象とした．1年後に骨量が低下した者を骨量低下群，骨量を維持していた者を対照群として群分けし，ベースライン時点の基本属性，身体機能，基本チェックリストを比較した．骨量低下の影響要因として，Body Mass Index（オッズ比0.761，95%信頼区間0.612-0.945），基本チェックリストの「運動器の機能」（オッズ比1.995，95%信頼区間1.020-3.901）が抽出された．1年後に骨量が低下する高齢者は，ベースライン時点でBMIが低いこと，「運動器の機能」が低下していることに影響を受けることが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案，データ測定および論文内容の精査・修正を行った． 共著者：葛迫剛，村田伸，合田明生，中野英樹，白岩加代子，堀江淳，野中紘士
56 Antiproliferative and anti-inflammatory effects of fractionated crude lectins from boiled kidney beans (Phaseolus vulgaris) （インゲンマメ（Phaseolus vulgaris）由来粗分画レクチンの抗増殖および抗炎症作用） （査読付）	共著	令和6年1月	Journal of Food Science Vol.89, No.1 P.671-P.683	本研究は、生および茹でた日本の赤金時豆（赤インゲン豆［RKB];Phaseolus vulgaris）から単離されたレクチンの生物学的プロファイルを調査した． 凝集活性を示す豆中のレクチンは加熱後も保持された． 生の RKB レクチンと煮沸した RKB レクチンをそれぞれカルボキシメチル セファロースとジエチルアミノエチル セファロースを使用して分別した． 煮沸した RKB レクチンの炭水化物特異性，がん細胞に対するサイトカイン誘導活性および抗増殖活性を評価し，生の RKB レクチンと比較しました．生の RKB レクチンはサイログロブリンとフェチュインに対して特異性を示したが，煮沸したレクチンは N-アセチルノイラミン酸に対して特異性を示した．生の RKB レクチンはプロテアーゼに対して低い耐性を示し、80° C を超える温度に 5 分間耐えた． 特に、生豆および茹で豆のレクチンは，5 種類のがん細胞 B16，LM8，HeLa，HepG2，および Colo 679 に対して抗増殖活性を示した．特に，生豆のレクチンは，茹で豆のレクチンよりも顕著に強い活性を示した． 抗炎症効果は，生の豆と茹でた豆からの粗抽出物で特に観察された． 具体的には，茹でたインゲン豆から分画したレクチンは，腫瘍壊死因子αおよびインターロイキン6の発現を顕著に阻害した。 これらの結果から，茹でた豆からの RKB レクチンが抗炎症作用と抗がん作用を発揮し，潜在的な化学予防薬として開発できる可能性があることが示された． 本人担当部分：データ解析および方法と結果の一部の執筆を行った． 共著者：Une S, Nakata R, Nonaka K, Akiyama J

57 Exercise may increase oxidative stress in the sciatic nerve in streptozotocin-induced diabetic rats （運動はストレプトゾトシン誘発糖尿病ラットの坐骨神経における酸化ストレスを増加させる可能性がある） （査読付） :	共著	令和6年3月	Medicina Vol.60, No.3 480（計12ページ）	糖尿病性末梢神経障害（DPN）は糖尿病（DM）患者の約半数が罹患しており，転倒や骨折の一因となっている．糖尿病による高血糖に関連する酸化ストレスはDPNの発症に関与している．DM患者には運動が推奨されているが，DPNに対するその効果は依然として不明である．そこで本研究では，運動がDPNに及ぼす影響とその機序について検討することを目的とした．30匹の雄性Wistarラットを対照群，ストレプトゾトシン（STZ）誘発糖尿病（DM）群，STZ誘発糖尿病・運動（DM＋Ex）群に分けた．糖尿病はSTZ注射により誘導した．DM + Ex群のラットは6週間のトレッドミル運動を行った．運動神経伝導速度（MNCV），抗酸化酵素（カタラーゼ，グルタチオンペルオキシダーゼ[GPx]，スーパーオキシドジスムターゼ[SOD]），酸化ストレスマーカー（マロンジアルデヒド[MDA]，4-ヒドロキシ-2-ノネナール[4HNE]），神経栄養因子（脳由来神経栄養因子[BDNF]，神経成長因子[NGF]）を含む坐骨神経パラメータを調べた． 運動はラットのDM誘発性MNCVの減少を緩和した．運動は抗酸化酵素活性には有意な影響を与えなかったが，4HNEレベルは有意に上昇し，酸化ストレスの増加を示した．さらに，運動はラットのDM誘発性NGFおよびBDNFレベルの上昇に有意な影響を及ぼさなかった．本研究結果より運動はおそらく抗酸化でない機序を介して，DMラットのDPNを予防する可能性がある。 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験の実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Akiyama J, Une S
（その他） 「文献抄録」 1定期的な身体運動活動を実施している透析患者の不安と抑うつの状態－予備研究 「国際学会発表」	単著	平成30年2月	理学療法ジャーナル 52巻2号 P.184	Dziubekらの論文"The level of anxiety and depression in dialysis patients undertaking regular physical exercise training: A preliminary study. Kidney Blood Press Res 41: 86-98, 2016"の文献抄録作成を行った．報告内容は以下の内容であった．透析中に末期腎不全患者が定期的な身体活動を行うことは不安感や抑うつを減弱することができる．レジスタンス運動と持久運動のどちらも抑うつを改善するが，持久運動のみ不安感も減少させる．透析中の定期的な身体運動プログラムは高齢患者や，身体運動プログラム開始時に抑うつと不安感が高い患者に対し最も効果がある．

1 Role of muscle coactivation and reaction time in postural perturbation in the elderly（高齢者の姿勢動揺での筋協働活動と反応時間の役割について）	-	平成 26 年 6-7 月	2014 International Society for Posture & Gait Research World Congress（バンクーバー）	筋骨格シミュレーションモデルを用いて筋の同時収縮が外乱刺激後の姿勢制御にどのように影響するかを調べた．外乱刺激後の反応時間が遅い場合のみ，同時収縮が外乱を抑えるのに有効であることがわかった． 本人担当部分：研究結果の解析を行った． 共同発表者：Ogaya S, Nagai K, Okita Y, Nonaka K, Iwata A, Higuchi Y, Fuchioka S
2 A preliminary study of the effect of trunk position on strategies for lower limb function during forward reaching movements（前方リーチ動作時の下腿機能ストラテジーに対する体幹位置の効果についての予備的研究）	-	平成 26 年 7 月	The XX Congress of the International Society of Electrophysiology and Kinesiology（ローマ）	前方リーチ動作の際の体幹ポジションの違いが下肢機能に及ぼす影響について検証した．その結果，体幹ポジションの違いが床反力やハムストリングスと前脛骨筋の筋活動に影響を及ぼすことが示された． 本人担当部分：研究の立案および発表を行った． 共同発表者：Nonaka K, Yonetsu R, Taniguchi F, Ueno S, Shintani A, Nakagawa C, Kataoka M, Ito T
3 Heat stress attenuates skeletal muscle fiber atrophy in diabetic rats（温熱刺激は糖尿病ラットの骨格筋線維萎縮を減弱する）	-	平成 27 年 6 月	9th World Congress of the International Society of Physical and Rehabilitation Medicine（ベルリン）	糖尿病による筋萎縮が温熱療法で減弱するかについて検討した．ストレプトゾトシンを投与し糖尿病を誘発したラットに温浴(42℃)を 30 分間，1 週間に 5 日，3 週間行った．温浴を行ったラットは温浴を行っていないラット比べ長趾伸筋の筋横断面積の減少が予防された．本研究より，温熱療法が糖尿病による筋萎縮を予防することが示された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った． 共同発表者：Nonaka K, Iwata A, Une S, Akiyama J
4 Electromyography activity of the rectus abdominis, internal oblique, and external oblique muscles during forced expiration in healthy adults（健常成人の強制呼気中の腹直筋および内腹斜筋，外腹斜筋の筋活動）	-	平成 27 年 9 月	European Respiratory Society Annual Congress 2015（アムステルダム）	呼気筋の筋活動パターンを筋電図を用いて呼気抵抗別に検討した．10%PEmax, 20%PEmax, 30%PEmax の抵抗を負荷した呼息時の腹直筋と内腹斜筋，外腹斜筋の活動量を評価した．３つの筋のうち，最も大きな活動量を示したのは内腹斜筋であった．ただし，その活動量は 30%PEmax の負荷であっても 20%MVC 以下であった．通常の呼吸筋トレーニングでは 30%PEmax 程度の負荷が推奨されるが，生理学的な視点でみた場合，その負荷は弱すぎることが示唆された． 本人担当部分：研究の立案および解剖生理学的視点より結果の解釈をした． 共同発表者：Ito K, Nonaka K, Ogaya S, Horie J

5 Effectiveness of back school versus brain school for elderly with chronic low back pain （慢性腰痛の高齢者に対する腰背教室と脳教室の効果）	－	令和元年６月	13th World Congress of the International Society of Physical and Rehabilitation Medicine（神戸）	慢性腰痛を有する高齢者にバイオメカニクスに基づいた腰背部教室と神経科学的教育に基づいた脳教室の効果について検証した．慢性腰痛のある高齢者を対象に，腰背部教室群（n=16）と脳教室群（n=20)に分け、3 か月間に 6 回の介入を行った．その結果，両群とも介入後に疼痛の軽減が認められた．脳教室の対象者は腰背部教室の対象者に比べ，Pain Catastrophizing Score, Fear-Avoidance Beliefs Questionnaire が有意に改善した．これらの結果より，慢性腰痛の高齢者に対して，神経科学教育に基づいた脳教室は腰背部教室に比べ効果的であること，神経科学的教育は心理面へ良好な効果があることが分かった． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：Abiko T, Iwase H, Anami K, Madoba K, Nonaka K, Murata S
「国内学会発表」				
1 気相中の高濃度炭酸ガスが褥瘡治癒に与える影響－ラットを用いた難治性創傷モデルによる検討	－	平成 26 年 5 月	第 49 回日本理学療法学術大会（横浜）	気相中の高濃度炭酸ガスが難治性創傷モデルに与える影響について検討した．ラットをコントロール群， 0.5%CO2 群， 2%CO2 群に分け，全ラットに難治性創傷を作成した．0.5%CO2 群，2%CO2 群に対し，1 日 1 回 40 分，週 5 回の頻度で 8 週間，高濃度炭酸ガス暴露を行った．その結果，2%CO2 群は治癒の促進が認められた．TGF-β1 はコントロール群と比較して 2%CO2 群 4 日目において高値を示した．真皮結合組織形成は 2% CO2 群で促進した．本研究より，気相中の高濃度炭酸ガスが難治性創傷の治癒を促進することが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画の立案および発表内容の検討を行った． 共同発表者：前川美幸，中村友貴，矢代梓，野中紘士，森潤一，秋山純一
2 マウスを用いたビタミン D3 の経口投与による学習能力に与える影響－受動的回避試験と脳内のセロトニン濃度測定による検討	－	平成 26 年 5 月	第 49 回日本理学療法学術大会（横浜）	マウスにビタミン D3 の経口投与を行い，受動的回避試験による学習効果と明暗弁別回避学習の習得や空間記憶に関与するとされる脳内セロトニン濃度の変動について検討を行った．その結果，ビタミン D3 投与は 学習効果を高めた．脳内のセロトニン濃度はビタミン D3 投与で高値を示した．以上より，ビタミン D3 が学習能力に有意性を与えることが確認された． 本人担当部分：研究計画の立案および発表内容の検討を行った． 共同発表者：中村友貴，前川美幸，矢代梓，野中紘士，森潤一，秋山純一

3 脳性まひ児への新しい短下肢装具の開発を目的とした異分野研究の試み	–	平成 26 年 5 月	第 49 回日本理学療法学術大会（横浜）	脳性まひ児がより効率的な運動を実施できる短下肢装具の開発するため，リハビリテーション学的知見と工学的知見を融合させた異分野研究に取り組んだ．その結果，脳性まひ児の動作をコンピュータ上で再現できる人間モデルを構築することで，試作したいと考える短下肢装具の設計を容易に考案できるようになった． 本人担当部分：研究計画の立案を行った． 共同発表者：米津亮，草田俊介，中川智皓，新谷篤彦，崎田博之，三木由紀子，瓦井義広，Abbas Abdorahmani，野中紘士，谷口芙紗子，伊藤智博，奥田邦晴
4 小型 3 軸加速時計を用いた静止立位時の重心動揺評価	–	平成 26 年 5 月	第 49 回日本理学療法学術大会（横浜）	面に装着した小型 3 軸加速度計を用いて静止立位時の身体重心加速度（COGacc）を推定し，3 次元動作解析装置で求めた COG との比較からその有用性を検討した．その結果，COG と COGacc の実効値，最大振幅 ML 成分に有意な差は認められず，非線形解析ではカオス性が確認されたが，AP 成分に有意な差が認められ COGacc と COG で振幅が異なる可能性が示された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ解析を行った． 共同発表者：山中悠紀，野中紘士，山本洋之，村上仁之，石井禎基
5 室内有酸素運動における映像の効果	–	平成 26 年 9 月	第 33 回日本臨床運動療法学会学術集会（大阪）	トレッドミルを用いた屋内有酸素運動中の「映像視聴」が及ぼす身体への影響について検討した．24 名の健常女子大学生を映像視聴「あり」群と「なし」群の２群に割り付けトレドミル歩行を行い，疲労指標や呼吸代謝指標，換気能力指標を測定した．身体的疲労感と精神的疲労感はともに 2 群間で有意な差は認められなかった．一方で VO2，METS，EE については，いずれも「あり」群が「なし」群に比べ有意に高い値を示した．本研究結果から，運動中の映像視聴は映像「なし」での運動と変わらぬ疲労感で効率の良い運動が可能となることが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案し，生理学的視点から結果を解釈し，発表内容の検討を行った． 共同発表者：小西隆幸，杉山友香，谷口結子，藤井愛美，野中紘士，伊藤健一

6 エアマットレスは臥床時の「換気」を制限するか－健常者による基礎的研究	-	平成 26 年 10 月	第 24 回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（奈良）	健常者を対象に，エアマットレスが臥床中の呼吸機能に与える影響を明らかにした．対象者にはエアマットレスと標準マットレス上にて臥位を取らせ，一回換気量，呼吸数などの呼吸機能を測定し比較した．エアマットレス上臥位と標準マットレス上臥位の間で呼吸機能に有意差は認められなかった．胸郭のコンプライアンスの良い者についてはエアマットレスを使用しても，呼吸機能に変化を及ぼさないことが明らかになった． 本人担当部分：研究計画の立案および発表内容の検討を行った． 共同発表者：井上貴裕，伊藤健一，野中紘士
7 各種植物レクチンのマウス脾細胞を使用したマイトジェン活性と NK 活性	-	平成 27 年 5 月	日本家政学会第 67 回大会（岩手）	サトイモレクチン，ナタマネレクチン，キントキマメレクチンを生成し，それぞれのレクチンのマイトジェン活性と NK 活性を ConA レクチンと比較した．ConA と比べサトイモレクチン，ナタマメレクチンに強いマイトジェン活性を認めたが，キントキマメレクチンのそれは低かった．4 種類のレクチンの羊赤血球を指標とした凝集活性は，サトイモレクチンが最も弱い結果であったこれらレクチンを加熱した場合には，凝集活性は認められるもののマイトジェン活性が消失したレクチンもあった 一部レクチンには NK 活性も認められ，一部のレクチンは免疫活性化に関与する可能性が考えられた． 本人担当部分：NK 活性の測定を行った． 共同発表者：畦五月，秋山純一，野中紘士
8 強制呼気筋の強度別筋活動パターンの解明－無作為割付，シングルブラインドによる検討	-	平成 27 年 6 月	第 50 回日本理学療法学術大会（東京）	呼吸リハビリテーションにおける呼吸筋トレーニングを効率良く実施するために，強度別筋活動パターンを検討した．10%PEmax，20%PEmax，30%PEmax の抵抗を負荷した呼息時の腹直筋と内腹斜筋，外腹斜筋の活動量を評価した．3 つの筋のうち，最も大きな活動量を示したのは内腹斜筋であった．ただし，その活動量は 30%PEmax の負荷であっても 20%MVC 以下であった．通常の呼吸筋トレーニングでは 30%PEmax 程度の負荷が推奨されるが，生理学的な視点でみた場合，その負荷は弱すぎることが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案および発表内容の検討を行った． 共同発表者：大木敦司，松中千明，野中紘士，伊藤健一

9 加熱による各種植物性食品中のレクチンの変性	–	平成 28 年 5 月	日本家政学会第 68 回大会（名古屋）	ボイルした食品からレクチンを精製し，生のレクチンとの比較を試みた．金時マメとサトイモの試料においては，生と加熱した状態では精製にあたってカラム樹脂の種類が異なった．また電気泳動によるバンドの位置から生とは異種のタンパク質に変性している可能性が推測された．また，調理条件のわずかな違いによりレクチンが熱変性していった可能性が示唆された．ブロッコリーレクチンについては，生ではマウス血球で全く活性が検出されなかったが，加熱により HA 活性を示し，その分子量は 200 万付近の高分子になっていた． 本人担当部分：電気泳動による測定を担当した． 共同発表者：畦五月，秋山純一，野中紘士
10 マスクを用いたスパイロメトリの妥当性と再現性	–	平成 28 年 10 月	第 26 回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（横浜）	マスクを用いたスパイロメトリの妥当性と再現性を検証した．健常大学生 48 名の対象者に対し，マウスピース（MS）とマスク（FS）を用いたスパイロメトリを実施した．計測項目は肺活量，一回換気量，最大吸気量，1 秒量，1 秒率である．今回計測した全ての項目において MS と FS とで高い相関が認められた．同様に全ての項目の 1 回目データ と 2 回目データとで高い級内相関が認められた．本研究結果より，スパイロメトリの際にマウスピースの代わりにマスクを用いることが可能であることが明らかとなった． 本人担当部分：結果解析および発表内容の検討を行った． 共同発表者：伊藤健一，野中紘士，武田匠平，西川剛史，奥田みゆき
11 加熱調理したキントキマメレクチンのマウス細胞への影響	–	平成 29 年 5 月	一般社団法人日本家政学会第69回大会(奈良)	本研究は，加熱したキントキマメに含有されるレクチンの生体への影響を検討することを目的とした．加熱試料から得られたレクチンは，画分ごとに異なった阻害糖を示し，この糖は生試料から生成されたレクチンとは異種であった．生レクチンの耐酵素性は認められたが，加熱試料の画分ごとの耐性は異なった．生レクチンは B16 細胞に対する成長阻害を示したが，同濃度で細胞に添加した加熱レクチンは増殖作用を示した． 本人担当部分：B16 細胞の成長阻害効果の測定および結果の解析を行った． 共同発表者：畦五月，秋山純一，野中紘士，森秀治，豊村隆男，渡邊政博，中田理恵子

12 ラット高齢期低強度運動による末梢神経の修復・再生に対する促進効果 -血清と末梢神経組織の脳由来神経栄養因子(BDNF)・BDNF受容体（NTRK2）発現量解析に着目して	-	平成30年3月	第19回日本健康支援学会年次学術大会（京都）	本研究では，高齢ラットに継続的な低強度運動を実施し，血清と末梢神経組織のBDNFおよびNTRK2発現量解析により血中から末梢神経組織への輸送が生じているかを検討した．また，末梢神経組織のBDNFおよびNTRK2量が増加した場合，有髄線維の修復促進作用によって有髄線維の形態が改善するか組織学的に検討した．その結果、高齢ラットの2週間の低強度運動実施から，血中BDNFとNTRK2の一部は末梢神経組織に輸送されることが明らかとなった．また，末梢神経組織のBDNFとNTRK2の増加によりシュワン細胞と軸索の修復シグナル伝達が促進され，有髄線維の形態を改善させることが考えられた． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：崎田正博，村上慎一郎，村田伸，野中紘士，栗山みちる，小山梨穂，斉藤彩夏，中田明里，齊藤貴文，磯部航，熊谷秋三
13 女性高齢者の浮き趾と身体機能との関係	-	平成30年3月	第19回日本健康支援学会年次学術大会（京都）	本研究は，足底圧分布測定器を用いて浮き趾の有無を判定し，上下肢筋力，全身柔軟性，立位バランス，歩行などの身体機能と浮き趾との関連を検討した．体力測定会に参加した65歳以上の女性高齢者199名を対象に浮き趾の有無，握力，足趾把持力，大腿四頭筋力，長座体前屈距離，開眼片脚立位時間，30秒椅子立ち上がりテスト(CS-30)，Timed Up & Go Test(TUG)，5m最速歩行時間(5MWT)を測定した．その結果，浮き趾がある女性高齢者は足趾把持力が有意に低下したが，歩行などの身体機能との関連は認められなかった．また，浮き趾群では非浮き趾群に比べ柔軟性が低下し，身長が低い結果となり，高齢者特有の姿勢異常が関与している可能性が予測された． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：弓岡まみ，村田伸，岩瀬弘明，内藤紘一，安彦鉄平，白岩加代子，野中紘士，堀江淳

14 地域在住高齢者におけるプレサルコペニアの身体・認知・心理機能特性	－	平成 30 年 3 月	第 19 回日本健康支援学会年次学術大会（京都）	本研究は、地域在住の女性高齢者を対象に、正常な筋肉量を有する高齢者と比較することで、筋肉量低下を生じたプレサルコペニア高齢者の身体・認知・心理機能の特性を明らかにすることを目的とした。対象とした 199 名の女性高齢者のうち、正常筋肉量群は 142 名（71.4%）、プレサルコペニア群が 49 名（24.6%）であった。サルコペニアの判定項目および身体機能の比較では、プレサルコペニア群で SMI（p<0.01）、握力（p<0.01）、膝伸展筋力（p<0.01）、上体起こし（p<0.01）は有意に低値を示した。一方、通常歩行速度、最速歩行速度、長座体前屈距離、開眼片足立ち時間、CS-30、TUG においては、両群間に有意な差を認めなかった。また、認知機能および心理機能においても、すべての項目で両群間に有意な差を認めなかった。本研究結果より、サルコペニアの予防には、高齢者の早期の筋力低下を把握することは重要であり、筋肉量の測定がその重要な指標となる可能性が示された。 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能. 共同発表者：森耕平，村田伸，白岩加代子，安彦鉄平，岩瀬弘明，内藤紘一，野中紘士，中野英樹，堀江淳
15 加熱調理したサトイモレクチンが免疫細胞へ与える影響	－	平成 31 年 5 月	一般社団法人日本家政学会第 71 回大会（徳島）	本研究では，生及び加熱したサトイモから精製した糖阻害，酵素耐性，さらには，生体に与える影響を免疫に関する遺伝子を指標に検討した．その結果，加熱試料から得られたれクチン（加熱レクチン）の阻害糖の種類は，活性のある文革では同一種類の糖であったが，その阻害濃度は分画ごとに異なった．また，生試料から精製されたレクチン（生レクチン）と加熱レクチンとは阻害糖の種類は若干異なった．また，生レクチンの耐酵素性は認められたが，加熱試料のクロマトグラフィー分画ごとのその耐性は異なった．さらに，マウス腹腔マクロファージを生レクチン，および加熱レクチンで処理した結果，LPS 誘導による炎症反応が抑制されることが明らかとなった． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能. 共同発表者：畦五月，秋山純一，野中紘士，森秀治，豊村隆男，渡邊正博，中田理恵子

16 低学年の児童における運動イメージ想起能力と身体特性および運動能力との関連	-	令和2年3月	第 21 回日本健康支援学会年次学術大会（那覇）	本研究は，低学年の児童を対象に，運動イメージ想起能力が良好な児童と不良な児童の身体特性および運動能力を比較し，運動イメージ想起能力の運動能力への関与について検討した．その結果，メンタルローテーション課題の正答率は全体 57.4±24.1%（174 名），良好群 89.6±7.6%（50 名），不良群 24.1±7.4%（43 名）であった．不良群と比較して良好群では握力，上体起こし回数，体支持時間，立ち幅跳び距離が有意に高い値であり，両足飛び越し時間が有意に低い値であった．一方，月齢，身長，体重，ローレル指数，性別，骨格筋量，長座体前屈距離に有意差は認められなかった．本研究結果より，低学年では運動イメージ想起能力の高い児童は，低い児童と比較して運動体力および運動技能が高いことが示された．これらの結果から，運動イメージ想起能力は子どもの運動能力に影響する因子であることが示された． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：安彦鉄平，大野真悠，村田伸，兒玉隆之，甲斐義浩，宮﨑純弥，宮地諒，野中紘士，久保温子，満丸望，田中真一
17 地域在住高齢者における歩行速度とヘルスリテラシーの関連	-	令和2年3月	第 21 回日本健康支援学会年次学術大会（那覇）	本研究は，地域在住高齢者の歩行速度とヘルスリテラシー，年齢や身体機能との関連を検証することを目的に行った．歩行速度で 2 群に分けた結果，1.3m/sec 以上群は 206 名，1.3m/sec 未満群は 49 名であった。有意差を認めた指標は，年齢，身長，教育歴，CCHL，握力，体重比膝伸展筋力，足趾把持力，長座体前屈，片足立ち保持時間，CS-30 であった．これらを独立変数，歩行速度を従属変数とし，ロジスティック回帰分析を実施した結果，歩行速度に影響する要因として，年齢（OR:0.940，95%CI：0.884-1.000），身長（OR：1.055，95%CI：1.004-1.109），CCHL（OR：1.174，95%CI：1.025-1.344），CS-30（OR：1.151，95%CI：1.060-1.250）が抽出され，判別的中率は 83.5％であった．歩行速度に影響する要因に年齢，身長，CCHL，CS-30 が抽出された．歩行速度に年齢や身長，身体機能だけでなく，ヘルスリテラシーが独立して影響することが示唆された． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：阿波邦彦，村田伸，岩瀬弘明，白岩加代子，安彦鉄平，合田明生，中野英樹，野中紘士，堀江淳

18 加熱した白花豆からのレクチンの精製とその性質	-	令和2年5月	日本家政学会第 72 回大会（高崎）	本研究では加熱後の白花豆からレクチンを精製し，その生物学的な性質を特にレクチンの機能性に着目して研究した．豆を乾熱と湿熱の条件で加熱した後，含有されるレクチンをマウス赤血球凝集活性を指標にしてアフィニティーカラムにて精製した．マウス脾細胞を使用してマイトジェン活性を，さらにマウスB16メラノーマ細胞を使用して細胞増殖抑制効果を測定した． 白花豆に含有されているレクチンは，湿熱及び乾熱の双方の条件でも加熱時間に関わらず失活は認められなかった．生と加熱を施した豆からそれぞれ同一のアフィニティーカラムクロマトでレクチンを精製した結果，溶出状態に差が認められた．この結果は熱処理により何等かの構造変化がタンパク質であるレクチンに起こったことを示唆している．金時豆レクチンに認められたB16メラノーマ細胞に対する増殖抑制作用が，同様に生の白花豆レクチンにも認められた． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：畦五月，秋山純一，野中紘士，中田理恵子
19 地域在住高齢者における主観的認知機能低下とヘルスリテラシーの関連	-	令和2年10月	日本ヘルスプロモーション理学療法学会第 10 回学術集会（京都）	本研究の目的は，認知機能低下のない地域在住高齢者 499 名を対象に，主観的認知機能低下（Subjective cognitive decline：SCD）とヘルスリテラシーの関連を明らかにすることである．測定項目は，SCD（Kihon check list-cognitive function：KCL-CF），ヘルスリテラシー（Communicative and Critical Health Literacy），認知機能（Mini Mental State Examination），注意機能（Trail Making Test）抑うつ（5-item version of the Geriatric Depression Scale）とし，年齢と教育歴を聴取した．KCL-CF 1 点以上を SCD あり（184 名），0 点を SCD なし（315 名）とした．群間比較の結果，ヘルスリテラシー，認知機能，抑うつ，年齢，教育歴に有意差が認められた。続いて SCD の有無を従属変数，有意な群間差があった項目を説明変数としたロジスティック回帰分析（強制投入法）を行った結果，ヘルスリテラシー，抑うつ，年齢が有意な説明変数であった．この結果から，地域在住高齢者における SCD 発症には，加齢，抑うつ症状の他に，ヘルスリテラシーの低さが関連することが示唆された．ヘルスリテラシーの向上が SCD 発症予防，ひいては認知機能低下予防につながる可能性が考えられる． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：合田明生，村田伸，白岩加代子，中野英樹，安彦鉄平，野中紘士，岩瀬弘明，阿波邦彦，堀江淳

20 加熱調理したサトイモからのレクチンの細胞に与える影響	-	令和3年5月	日本家政学会第 73 回大会（神戸）	レクチンは動植物界に広く分布する(糖)タンパク質である．レクチンに糖を認識する特異的な性質があるため，ガン細胞を認識し，ガン細胞を特異的にアポトーシスに導くことも知られている．生の試料から得られたレクチンの研究はされているが，本研究では，調理した状態で得たサトイモレクチンがガン細胞や，免疫細胞に与える影響について検討した．冷凍サトイモを一定時間加熱後，カラムクロマトグフィーにより赤血球凝集活性を示す画分を採集し，凍結乾燥し試料とした．対照として生のサトイモからもレクチンを精製し，加熱後の試料から採取した加熱後レクチンと比較した．細胞はガン細胞（マウスメラノーマ細胞，LM8 細胞，Hela 細胞）を使用して増殖抑制作用を測定した．マウス腹腔内からマクロファージを採取し，炎症性サイトカイン発現量から免疫賦活作用を検討した．サトイモレクチンは，無加熱と加熱試料ともに，マウスメラノーマ細胞には特異性を示さず，LM8 と Hela 細胞に有意に増殖抑制を示す画分があった．マウスマクファージを使用して免疫賦活作用を測定した結果，粗抽出レクチンと精製レクチン双方で，生イモ，加熱イモ双方とも共通に IL-6，IL-1β などのサイトカインを有意に低下させた．加熱した状態のイモに含まれるレクチンが，生活習慣病予防に有効に作用する結果が示唆された． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：畦五月，野中紘士，中田理恵子
21 ヒト皮膚由来線維芽細胞における温度の違いが細胞増殖に与える影響	-	令和3年10月	日本物理療法学会（WEB）	高齢者は低体温であり、皮膚温も低めである。しかし、培養細胞の環境は37℃で設定されているため、高齢者の体温を反映されていないと考えられる。そのため、ヒト皮膚由来線維芽細胞を温度環境の違う状況で培養し増殖を確認した。その結果、コントロール群に比べ39℃で有意に増殖し、31・33・35℃で有意に増殖が抑制された。これらの結果から体温低下は創傷治癒を抑制する影響があり、皮膚温の管理が創傷治癒を高める可能性が考えられた。 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：吉川義之、野中紘士、滝本幸治、杉元雅晴、前重伯壮、植村弥希子

22 近赤外線照射はヒト皮膚由来線維芽細胞増殖に影響を及ぼさない	-	令和４年２月	日本物理療法研究会（WEB）	近赤外線照射療法は日本褥瘡学会ガイドラインにおいて推奨されている治療方法であるため、創傷治癒機序を検証するために行った研究である。その結果、近赤外線照射による線維芽細胞の細胞増殖はみられなかったため、他の因子が治癒を促進していることが示唆された。もしくは波長や強度による違いが示唆された。本研究結果からは創傷治癒機序を解明できなかったため、継続した研究の必要性が示唆された。 担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共同演者：吉川義之、野中紘士
23 生及び加熱処理した白花豆からのレクチンの分画とガン細胞への影響	-	令和４年５月	日本家政学会第 74 回大会（佐賀）	本研究では，加熱した白花豆からレクチンを含む画分を分画し，その機能性をガン細胞増殖抑制作用を指標に評価することを目的とした．北海道産の白花豆を用い，加熱条件を湿式加熱と乾式加熱の 2 本立てとし，水抽出により試料液を得た．赤血球凝集活性はマウス赤血球を用いて測定した．細胞増殖抑制活性にはマウス B16 メラノーマ細胞，ヒト子宮ガン Hela 細胞，ヒト肝臓ガン HepG2 細胞を使用した．豆の加熱の有無，あるいは加熱条件の相違による凝集活性及びガン細胞の増殖抑制作用を MTT 法で検討した．100℃，60 分加熱で両方の処理豆中に凝集活性は存在したため，両方の処理豆からアフィニティークロマトグラフィーによりレクチンを分画した．三種の細胞に対して，生豆からと加熱処理豆からの分画画分双方において，有意に抑制活性が存在した細胞もみられた，本結果は，レクチンを含有する加熱豆を食用とした場合，食薬として抗ガン作用を示す可能性が示唆された． 担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共同演者：畦五月，野中紘士，中田理恵子

24 培養線維芽細胞における電気刺激が増殖に与える影響	-	令和４年８月	第 31 回奈良県理学療法士学会（奈良）	本研究では臨床で褥瘡の治癒を促進している電気刺激条件（直流パルス電流刺激，強度 200μA，周波数 2Hz，電流時間率 50%）を用いた培養細胞実験を実施し，細胞増殖に及ぼす影響を確認することを目的とした．細胞培養プレート 6well にヒト皮膚由来線維芽細胞を播種し 10%牛血清（FBS）を含む Dulbecco Modified Eagle 培地（DMEM）で培養し，播種の 24h 後に 1%FBS および 10%FBS に培地交換を実施した。その後、電流刺激を 1 時間実施した．細胞数の測定は播種 72 時間後に測定した。細胞数は、10%FBS の培地ではコントロール群が(17.6±1.1)×104 cells/well，電気刺激群が(12.5±0.4)×104 cells/well であり，細胞数はコントロール群で有意に多かった（$p<0.05$）．1%FBS の培地では、コントロール群が(10.4±0.2)×10^4 cells/well、電気刺激群が(10.2±0.2)×10^4 cells/well であり，有意差は認められなかった．これらのことから，直流パルス電流刺激、強度 200μA、周波数 2Hz，電流時間率 50%の電気刺激は細胞増殖を促進せず，細胞増殖を抑制することが示唆された． 担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共同演者：吉川義之，野中紘士

25 加熱調理したトラマメから分画したレクチンのガン細胞増殖抑制作用及び抗炎症作用	-	令和5年5月	日本家政学会第 75 回大会 （東京）	レクチンは動植物界に広く分布する(糖)タンパク質である．糖特異性を認識するため，ガン細胞を認識しアポトーシスに導くため，一部レクチンはガン患者に投与されている．生試料からのレクチンの種々の観点からの研究はされているが，本研究では，調理した状態のトラマメレクチンがガン細胞，抗炎症作用に与える影響を検討した．乾熱と湿熱条件で処理後にも含有されるレクチンをマウス赤血球凝集活性を指標にカラムクロマトにより分画した．これらの画分のガン細胞増殖抑制作用，ビフィズス菌増殖作用，マウスマクロファージでの炎症関連遺伝子発現作用を検討した． レクチンは湿熱加熱のみで失活した．生マメと乾熱加熱を施したマメをそれぞれ同一の種のカラムに負荷した結果，溶出状態に差が認められた．各々の活性画分は，熱耐性，あるいは酵素耐性で相違が確認された．生および加熱したマメからの画分全てで，Hela 細胞，B16 メラノーマ細胞に有意に増殖抑制作用を示した．この特異性は，キントキマメから得られたレクチンと類似した傾向であった．これらの画分にはビフィズス菌増殖促進作用は確認されなかった．粗抽出段階の抽出液で IL-6，IL-1β，COX-2 の炎症性サイトカインが有意に低下した．トラマメを食品として摂取した場合のレクチンの持つ有益な機能性が示唆された． 担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能 共同演者：畦五月，野中紘士，木村万里子，中田理恵子

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和6年3月31日

氏名　福原啓太

研究分野	研究内容のキーワード
精神科リハビリテーション 精神医学 心理学	精神科リハビリテーション　社会的認知　感情 障害者就労支援　統合失調症

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 1)作業療法士国家試験対策として自身の勉強方法の提示	平成23年5月16日	国家試験受験生である大阪府立大学総合リハビリテーション学部の4年生を対象に国家試験対策の講義をティーチングアシスタントとして実施した．国家試験の効率的な勉強方法を，実施者が実際に使用したテキストや教科書，その使い方などを伝達した．具体的には，有名参考書を2回解き，その際，設問毎に考え得る周辺知識をそのテキストに書き込む．1つの情報を他の類似する情報と紐づけることにより，知識の増大化を図り，自身で作る国家試験対策用の参考書を持つように促した．最後に，国家試験対策用のPC問題集で反復的に問題を解き，自身の苦手領域を把握し対策を取るように促した．その年の国家試験合格率は94.4%であった。
2)プレゼンテーションの導入	平成27年11月4日・11日 平成28年11月2日・9日 平成29年11月1日・8日	大阪府立大学地域保健学域の学部生を対象にティーチングアシスタントとして，「精神医学Ⅱ」の科目内で「統合失調症の社会的認知の障害と支援の方策」という題で合計2日間講義を実施した．対象は2年生である．プレゼンテーション（Power Pointの使用）により，授業を効率的に実施することができた．学生は，準備されたプレゼンテーション資料を見ながら，必要に応じて，講義実施者の口頭説明をそれに書きこむことができ，確実に授業内容を把握することができた．また，プレゼンテーションでの提示とその資料配布により，学生の集中力低下による授業理解の遅れを是正に努めた．
3)臨床的視点の強化を目的とした自験例の提示	平成27年11月4日・11日 平成28年11月2日・9日 平成29年11月1日・8日	大阪府立大学地域保健学域の学部生を対象にティーチングアシスタントとして，「精神医学Ⅱ」の科目内で「統合失調症の社会的認知の障害と支援の方策」という題で合計2日間講義を実施した．対象は2年生である．講義内で教科書的な定義や知識の理解を促すだけでは，臨床経験がほぼ皆無の学生にとって想像や理解が困難となる．そのため，できるだけ，詳細に自験例を提示し，学生に覚えてもらいたい知識を実際の患者に結びつけて理解できるように工夫している．自験例は症例レベルから臨床研究レベルまで幅広く提示している．

事項	年月日	概　　要
4)学外，臨床現場での実践的な臨床指導・教育の実践	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として大阪府立大学学部生を対象に臨床教育を実施している．これまでに，臨床講師として4年生2名，1年生4名を教育指導した。4年生には，特定の患者をケースとして持たせ，6週間評価・治療方法を教育・指導した．1年生には2日間の実習で，主に精神科患者との交流を促した．教科書からの勉強だけでは理解し得ない，生身の患者を前にして実際の臨床現場を体感してもらい，普段の患者の様子を観察・評価・治療の一連，または一部を経験できるよう促した．
5)医療分野における社会人としてのマナー教育	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として大阪府立大学学部生を対象に臨床教育を実施している．これまでに，臨床講師として4年生2名（各6週間），1年生4名（各2日間）を教育指導した。臨床現場における社会人として，患者への対応，職員への対応を教育した．学生には，「常に明るく」「笑顔で接する」「元気に挨拶」「対象者を敬う」といった基本的な接遇・マナーを具体的に伝え徹底させた．またそれが患者にとって安心につながる支援になるということも教育した．
6)臨床教育に沿った医学文献を学生に提供し，要約文・感想文を書かせることによる臨床と研究を架橋する能力の指導	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として長期臨床実習を受ける4年生2名を対象に臨床教育を実施した．その際，臨床現場で実際に起こる問題や疑問に対して，学術論文や著書を提供し，それを読ませ課題として要約文・感想文を提出させた．これは，臨床現場にて疑問が生じた際，迅速に適切な文献をレビューし臨床疑問を解決する能力を育むために実施した．その際，臨床疑問と提供した文献の趣旨が学生の中で一致するように具体的に「文献を読んで〇〇について述べよ」と課題を提示し指導した．
7)自己の臨床研究・症例報告の自験例を学生が模倣できるように指導	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として長期臨床実習（6週間）を受ける4年生2名を対象に臨床教育を実施した．その際，臨床現場で実際に起こる患者の問題や疑問において，臨床講師の臨床研究・症例報告の自験例をまとめた文献とその実際の患者を提示した．それにより学生が，より臨床的で実践的な技術を磨くことができるよう，また臨床講師の技術を他の患者でも模倣できるよう指導した．
8)学外，病院外において，患者の生活活動範囲でのフィールドワークの導入	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として長期臨床実習（6週間）を受ける4年生2名を対象に臨床教育を実施した．臨床教育は病院の精神科デイケア内で実施するため，患者の実生活を垣間見ることができない．そのため，積極的に，患者と学生を病院外に連れ出し，学生に患者の社会生活の実際を観察させた．例えば，患者の生活範囲や職業訓練所への順路に患者，学生，臨床講師の3者で出向き，患者の様子を観察させた．このフィールドワーク導入により，学生に精神科患者の病院外での生活の一部を把握させた。

事項	年月日	概　　要
9)他職種連携・チーム医療の実践的指導	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として長期臨床実習（6週間）を受ける4年生2名を対象に臨床教育を実施した．臨床教育の場は病院の精神科デイケアであったため，他職種との連携が重要である．学生には，他職種の職能や実務について説明し，各職種と必要に応じた関わり方が持てるように場面設定した．具体的には，患者の情報を作業療法士以外の他職種から得るために，学生には質問事項をまとめさせ，目的となる他職種職員に学生の質問に答えてもらう時間を作ってもらった．それにより，学生が他職種連携の実践的経験を得ることができた．
10)レポート課題提出における電子媒体の利用	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として長期臨床実習（6週間）を受ける4年生2名を対象に臨床教育を実施した．学生のレポート課題提出において，電子媒体（Word）の提出を試みた．臨床実習では，通常レポートの書き直しが頻回に起きるため，Wordでの課題提出と添削後の返却により，時間と紙代費用削減に成功した．時間的削減により，効率化が進むため，結果的に，より情報量の多い教育・指導を学生に提供することができた．また学生は紙の量が増えずにすむため，情報の整理を容易にすることができた．
11)症例報告会の実施	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として長期臨床実習（6週間）を受ける4年生2名を対象に臨床教育を実施した．学生には，6週間の症例検討から得られた臨床的経験を文書化し適切な症例報告とその報告書作成をできるようにするため，また学生レベルに留まらず臨床家としても一定レベルが確保された症例報告を実施するため，質の高い症例報告となるように教育・指導した．具体的には，患者の評価において質的評価・量的評価の重要性を説き，主観的・客観的の両側面から報告できるように教育した．
12)学生による臨床講師への指導に関する評価の活用	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として大阪府立大学学部生を対象に臨床教育を実施している．これまでに，臨床講師として4年生2名，1年生4名を教育指導した． 全ての学生に，臨床実習終了後にお礼状とは別に臨床講師宛に教育方針・方法の感想を用意した書面にて記載してもらった．これにより，臨床講師は自己の教育方法を振り返ることができ，かつ，次期学生教育に役立てることができた．具体的な評価として「全ての疑問に答えてくれてありがたかった」とのポジティブ意見と「もう少し時間をかけて指導して欲しかった」などのネガティブな意見があった．これに対してはその都度教育方針の訂正ができている．
13)授業外早期体験講義の実施	令和1年6月14日	単位外（授業外）にて、奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻学部1年生に対して、「精神科作業療法の実践」について1時間講義を実施した。学部1年生は、精神医学領域の作業療法を学ぶ経験がなく、その予備知識もない。精神科作業療法に関して学ぶのは2年生前期である。また精神医学領域という特性上、学部生にはイメージしにくい領域である。そのため、一症例の紹介を通して、精神科における作業療法の実践を早期体験講義形式で伝達した。

事項	年月日	概　　要
14)新型コロナウイルス禍に対応した遠隔講義と対面講義のハイブリット授業の展開	令和2年4月 ～ 令和3年9月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の2年生を対象に、作業療法評価学Ⅱ（精神）、作業療法評価学演習Ⅱ（精神）において、各15回（合計30回）の遠隔講義を実施した。ZOOMとGoogleClassroomを駆使し、学生に最大限不利益が生じないように、レジュメの配布、レジュメと表示資料の対応などを考慮した。さらに、できる限りスムーズな学習がはかれるように、数回の対面授業を実施した。
15)eラーニングを用いた授業展開	令和2年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の3年生を対象に、医学映像教育センターが提供しているスマコクforPT/OTというeラーニングサービスを使用して授業を展開した。eラーニングによる国試対策により、平常の授業と国家試験問題を結びつけ、理解促進を図った。
16)eラーニングを用いた国家試験対策の展開	令和2年2月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科では国家試験対策を1年次生より導入している。医学映像教育センターが提供しているスマコクforPT/OTというeラーニングサービスを使用して、2月に複数回にわたり国家試験問題を1・2年生学部生に触れさせ、その後、確認テストを実施している。
17)医療現場における各主義同士の模擬的討論の実践	令和2年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の2年生を対象に、作業療法評価学演習Ⅱ（精神）において、各種主義やモデルの使用を各学生に割り振り、自分自身の主張を通しながらディスカッションをすることで、一つの主義に固執することのデメリットの理解を体験する授業を展開した。
18)授業内容展開のためのeラーニングの展開	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の2年生を対象に、作業療法評価学Ⅱ（精神）の授業科目において授業内容・配布資料・教科書に沿って、適切に迅速に授業の復習ができるようにGoogleClassroomとGoogleFormsを使用しオリジナルの復習問題を作成した。設問は資料を確認しながら解くように指示し、何度も繰り返し解答できるように設定した。全問正解または規定の点数以上がとれると課題達成となるようにしたため、学生は意欲的に効率よく学習することが可能となった。成果としては全学生が9割以上が繰り返し解答し満点をとるまで実施した。
19)グループ模擬症例検討の実施	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の2年生を対象に、作業療法評価学Ⅱ（精神）の授業科目において模擬症例を提示し、4～5人一組の学生グループに患者評価について検討をしてもらう授業を展開した。各学生が自身の意見を言い合い相互の主張を理解する機会を提供した。
20)授業外相談の個別対応(精神科身体拘束について)	令和3年4月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の作業療法評価学Ⅱ（精神）受講学生（2年生）個別対応。ある学生がネット記事（精神障害者の身体拘束が日本で多いことについて）に興味を示し、教員の意見が聞きたいと問い合わせがあった。学生が日常で精神科領域に触れる機会が少ないことからこの問い合わせは学生にとって貴重な学習機会と考え、応じた。授業時間外で日本の精神科と諸外国の精神科を対比しながら日本の身体拘束が多い理由を解説しながらディスカッションを交え学生の興味を引き出し理解を深める機会を提供した。

事項	年月日	概　　要
21)社会生活技能訓練(SST)の実技演習	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の2年生を対象に、精神障害作業療法学Ⅰ（総論）の授業科目において精神科作業療法の治療法の1つにあげられるSSTを実演した。教員が作業療法士（治療者）役に学生を患者役にみたて、学生の実際の困りごとに対する対処方法を習得するように実践的な演習を行った。教員のモデリング学習を経て次の段階として学生にも治療者役をしてもらいさらなる学習を深めた。
22)認知矯正療法(NEAR)の実技演習	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の3年生を対象に、精神障害作業療法学Ⅰ（総論）の授業科目において精神科作業療法の治療法の1つにあげられるNEARを実演した。教員が認知矯正療法士役に学生を患者役に見立て、NEARを実践した。PCゲームが認知機能改善の治療方法になることについて実演を通して理解を深める機会を提供した。
23)メタ認知トレーニング(MCT)の実技演習	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の3年生を対象に、精神障害作業療法学Ⅰ（総論）の授業科目において精神科作業療法の治療法の1つにあげられるMCTを実演した。教員が治療者役に学生を患者役に見立て、MCTを実践した。PowerPointスライドを集団で見ながらクイズ形式の治療構成がメタ認知改善の治療方法になることについて実演を通して理解を深める機会を提供した。
24)治療プログラム立案とフィードバック	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の3年生を対象に、精神障害作業療法学Ⅰ（総論）の授業科目において精神科作業療法の治療プログラムについて、対象、方法、効果、リスク管理など全般的な治療プログラム計画を学生に立案させ、それぞれのプログラムについてフィードバックを行った。精神科作業療法において患者の治療を見据えた実践的な演習を行うことで学生の治療計画立案能力向上に資する講義展開ができた。
25)メンタルヘルス・リテラシー教育(学内実習)	令和3年8月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻・作業療法学専攻の1年生を対象に、早期体験実習(コロナ禍による学内実習)において 学生の実習に向けた不安の対処法ならびに療法士として必要とされる自身のメンタルヘルスセルフヘルプの意識づけを目的とした心理学的自習教育を実践した。「自分の不安を知ること」「不安を表現すること」「不安の対処方法を分析すること」の講義と学生間によるディスカッションを通して、自身のメンタルヘルスや不安と向き合いながら臨床・実習に臨めるよう実習教育を行った。
26)検査・測定実習（学内実習）	令和3年8月	作業療法学専攻3年次生対象の検査・測定実習はコロナ禍の影響により学内実習に切り替わった。そのため、学内で学外で学習する内容と同等の教育、学習機会を設けることが必要となり、そのコーディネータとして業務に従事した。5日間の実習を身体障害基礎、脳卒中運動機能、脳卒中高次脳機能、整形外科、身体障碍臨床の5領域に分け各専門の教員や臨床の作業療法士（非常勤講師）に業務を振り分け学生が総合的に検査・測定実習を経験できるよう采配した。

事項	年月日	概　　要
２　作成した教科書，教材 1)講義における配布資料の工夫	平成27年11月 4日・11日 平成28年11月 2日・9日 平成29年11月 1日・8日	大阪府立大学地域保健学域の2年生を対象にティーチングアシスタントとして，「精神医学Ⅱ」の科目内で「統合失調症の社会的認知の障害と支援の方策」という題で合計2日間講義を実施した．その際に使用するレジュメ講義資料としてプレゼンテーション（Power Point）の全スライドを学生に配布している．本講義で解説している領域について，その資料だけでおおよその全体像から細部まで把握できるように，つまりハンドブック的に使用することを想定して作成している．
2)穴埋め式の教材	平成27年11月 4日・11日 平成28年11月 2日・9日 平成29年11月 1日・8日	大阪府立大学地域保健学域の2年生を対象にティーチングアシスタントとして，「精神医学Ⅱ」の科目内で「統合失調症の社会的認知の障害と支援の方策」という題で合計2日間講義を実施した．その際に配布するレジュメ講義資料（教材）は穴埋め式となるように作成している．穴埋め式にすることで，学生が授業に集中して取り組めるように工夫している．また，穴埋め式文章は，受動的な受講スタイルではなく，自ら考える時間を確保することによる能動的な受講スタイルとなるという利点もある．
3）授業オリジナル教材	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の学生の必修科目である2年生前期「作業療法評価学Ⅱ（精神）」、2年生後期「作業療法評価学演習Ⅱ（精神）」、3年生前期「精神障害作業療法学Ⅰ（総論）」、3年生後期「精神障害作業療法学Ⅱ（各論）」の計4科目（合計2年間）は精神科作業療法、精神科リハビリテーションについて、一連の流れの中で学ぶことができるように計画されている。評価、治療、演習、ディスカッション、症例検討、国家試験対策など幅広く学習できるように、してい教科書と連動しながら学習が勧められるように、全てオリジナルのPowerPoint資料を作成し、配布している。
4）科目担当実績「基礎ゼミⅡ」	令和元年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻1年生を対象に、基礎ゼミⅡを展開している。社会人としてのマナー、ビジネスメール、学術論文の選び方、学術論文の読み方、学術論文のまとめ方、学術的発表の指導、など学部1年生が身に付けるべき素養を教育・指導している。講義・演習形式で実施している。（年間15コマ）
5）科目担当実績「作業療法評価学Ⅱ（精神）」	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻2年生を対象に、精神科作業療法の評価学の授業を展開している。精神医学をベースとした精神科特有の作業療法の評価のあり方について、幅広い視点から適宜必要に応じて評価の方法論を選択できるように教育・指導している。主に講義形式で実施している。（年間15コマ）

事項	年月日	概　　要
6）科目担当実績「作業療法評価学演習Ⅱ（精神）」	令和2年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻2年生を対象に、精神科作業療法の評価学演習の授業を展開している。精神科作業療法評価学で学んだ知識をベースとした精神科特有の作業療法の評価のあり方について、幅広い視点から適宜必要に応じて評価の方法論を学生が実際に選択したり扱えるように教育・指導している。主に講義・演習形式、事例検討などディスカッションで実施している。（年間15コマ）
7）科目担当実績「精神障害作業療法学Ⅰ（総論）」	令和3年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻3年生を対象に、精神科作業療法の治療学の授業を展開している。精神科作業療法評価学・評価学演習で学んだ知識をベースとした精神科特有の作業療法の治療のあり方について、幅広い視点から適宜必要に応じて治療の方法論を学生が実際に選択したり扱えるように教育・指導している。主に講義・演習形式で実施している。（年間15コマ、内完全独立での講義は10コマ）
8）科目担当実績「精神障害作業療法学Ⅱ（各論）」	令和3年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻3年生を対象に、精神科作業療法の治療学演習の授業を展開している。精神科作業療法評価学・評価学演習、治療学で学んだ知識をベースとした精神科特有の作業療法の治療のあり方について、幅広い視点から適宜必要に応じて治療の方法論を学生が実際に選択したり扱えるように教育・指導している。主に講義・演習形式、事例検討などディスカッションで実施、そして学生自身が治療方法について検討し実演できるように指導している。（年間15コマ）
9）科目担当実績「作業療法特論Ⅱ(精神)」	令和3年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻3年生を対象に、精神科作業療法の評価学・評価学演習、治療学・治療学演習で学んだ知識をベースに、4年次の臨床実習に向けた知識の拡充を図る講義を展開している。臨床で必要なトピックスを提示したり、良質な国家試験問題を通して臨床実習や臨床現場の実際について教育・指導している。（年間8コマ）
10）科目担当実績「人間発達学」	令和5年6月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻1年次生を対象に、人間発達学のうち精神心理発達分野の基礎的知識を学ぶ講義を実施した。人間の記憶、心理検査で評価し得る人格、作業技能、知能、発達の程度、認知機能、転移・逆転移の心理学、Eriksonによる発達段階、防衛機制などを教育・指導した。（年間4コマ）
11）科目担当実績「研究方法特論」	令和5年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学大学院リハビリテーション学研究科リハビリテーション学専攻[修士課程]の修士1年次生に対して、研究方法のうち文献検索についての講義を行った。文献検索の方法、文献抄読、文献カードの作成、およびそれらの発表を演習形式で実施した。（年間3コマ）

事項	年月日	概　　要
12）科目担当実績「作業療法臨床実習Ⅳ特別講義」	令和2年5月 ～ 令和2年6月	大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類作業療法学専攻の学生4年生に対して実施。新型コロナウイルス感染拡大の影響で臨床実習が学内に切り替わったことにより、臨床経験者として「臨床で必要なインテーク面接時の心得」を教育指導した。その際、講師（福原）は患者役を演じ、面接演習を実施し適宜学生に面接の方法について解説指導した。 実施コマ数：4コマ
13）科目担当実績「精神障害作業療法学Ⅱ」	令和2年7月	大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類作業療法学専攻の学生3年生に対し臨床経験者として「臨床で必要なインテーク面接時の心得」を教育指導した。その際、講師（福原）は患者役を演じ、面接演習を実施し適宜学生に面接の方法について解説指導した。 実施コマ数：2コマ
14）科目担当実績「作業療法ゼミナールⅡ」	令和2年12月	大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類作業療法学専攻の学生に対し「作業療法士の精神科におけるキャリア形成」という題材で、作業療法士として精神科領域の道を選択した場合におけるキャリアの積み上げ方や精神科領域のなかでも細分化する専門性について解説した。 実施コマ数：2コマ
15）科目担当実績「作業療法ゼミナールⅢ」	令和5年12月	大阪公立大学医学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の3年生に対して、客観的臨床能力試験の評定員兼指導員を実施した。臨床実習に向けて学生が実技技能を修得するように指導した。 実施コマ数：1コマ

事項	年月日	概　　要
３　教育上の能力に関する大学等の評価 1)大阪府立大学教員（助教）による評価	平成27年 6月20日	大阪府立大学地域保健学域助教の教員による推薦で，第49回日本作業療法学会のシンポジウム7精神科作業療法がなすべきこと～作業療法の効果を示すための臨床研究～のシンポジストに選任された．
2)大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科研究科長による評価	平成27年 8月29日	大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科研究科長による推薦により、第3回全国作業療法学系大学院ゼミナール in Osakaにおいて，研究報告会第2座の座長に選任された．4人の研究者の発表（内1名は欠席）について座長としての責務を果たした．
3)大阪府立大学教員（教授）による評価	平成27年11月 4日・11日 平成28年11月 2日・9日 平成29年11月 1日・8日	大阪府立大学地域保健学域教授の教員による推薦で，年に2日間，講義を実施している．ティーチングアシスタントとしての推薦であるが，2コマ分を完全に1人で授業を実施している．内容は，自身の研究領域である「統合失調症の社会的認知機能の障害と支援の方策」がテーマである．本講義では学生に馴染みのない精神科患者について最新の知見を交え，詳細に病態について教育している．最初の推薦以来，3年連続で推薦して頂いている．
4)大阪府立大学学長による評価	平成28年6月 ～ 平成29年3月 平成29年5月 ～ 平成30年3月 平成30年8月1日 ～ 平成31年3月31日	大阪府立大学学長より大阪府立大学地域保健学域臨床講師の称号を左記の期間付与されている．称号の付与には臨床経験，大阪府立大学学部生への臨床実習指導経験と履歴書が考慮されている．

事項	年月日	概　　要
5)大学設置・学校法人審査議会の教員組織審査結果	平成31年4月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション作業療法学専攻設置時における福原啓太の職位は「講師」として認定された。 「作業療法評価学Ⅱ（精神）」、 「作業療法評価学演習Ⅱ（精神）」、 「精神障害作業療法学Ⅰ(総論)」、 「精神障害作業療法学Ⅱ(各論)」、 「作業療法特論Ⅱ(精神)」、 「客観的臨床能力演習（作業療法）」、 「チーム医療論演習」、 「作業療法卒業研究」、「基礎ゼミⅡ」、 「早期体験実習（作業療法）」、「地域作業療法実習」、 「検査・測定実習」、「作業療法評価実習」、 「総合臨床実習Ⅰ（作業療法）」、 「総合臨床実習Ⅱ（作業療法）」
6)学生による授業評価アンケートの結果	令和3年11月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻対象の講義・演習・実習の学生による授業アンケート結果は以下の通りである。 ・作業療法評価学Ⅱ（精神）：「授業のわかりやすさ」の平均点が4.29点／5点満点、「教員の熱心さ」の平均点は4.79点／5点満点、「満足度」の平均点は4.5点／5点満点 ・作業療法評価学演習Ⅱ（精神）：「説明のわかりやすさ」の平均点は4.2点／5点満点、「教員の話し方」の平均点は4.47点／5点満点、「資料のわかりやすさ」の平均点は4.2点／5点満点 ・精神障害作業療法学Ⅰ（総論）：「授業のわかりやすさ」の平均点が4.6点／5点満点、 「教員の熱心さ」の平均点は5点／5点満点、「満足度」の平均点は4.8点／5点満点 ・精神障害作業療法学Ⅱ（各論）：「説明のわかりやすさ」の平均点は4.8点／5点満点、「教員の話し方」の平均点は5点／5点満点、「資料のわかりやすさ」の平均点は5点／5点満点 ・作業療法特論Ⅱ（精神障害）：「説明のわかりやすさ」の平均点は4.8点／5点満点、「教員の話し方」の平均点は4.8点／5点満点、「資料のわかりやすさ」の平均点は5点／5点満点

事項	年月日	概　　要
４　実務の経験を有する者について特記事項 （実習指導） 1)大学から受け入れた実習生に対する実習指導（作業療法臨床実習など）	平成25年 8月6日～ 平成31年3月	四条畷学園大学リハビリテーション学部の臨床実習指導者として，臨地見学実習ⅠおよびⅡにおいて四条畷学園大学作業療法学専攻学部生11名に対しそれぞれ2日間の臨床指導・教育を実施した．大阪府立大学の臨床実習指導者・臨床講師として，「作業療法臨床実習Ⅰ」および「作業療法臨床実習Ⅳ」において，大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類作業療法学専攻の学生8名に対して，28日間（うち4名は2日間）の臨床指導・教育を実施した． 受け入れに際して，以下のことに留意した． ・実際の精神科の臨床現場（精神科デイケア）において，精神科患者に対する評価・治療についてを，患者との関りを通して指導した． ・患者と関わる経験の乏しい学生に対して，指導者による患者へのコミュニケーション，評価，治療の一連を間近で観察させた． ・必要に応じて指導者・臨床講師の指導のもと学生にそれら一連を実践させた． ・学生を患者の中に放置するのではなく，患者と適切な交流が持てるように，学生と患者が自然に会話を開始できるように会話開始時には指導者が両者をつなぎあわせた． ・事前に担当教員から学生の情報を聞き，特性を踏まえて患者との関りを援助した．例えば，内気な学生には手厚く患者と話ができるようサポートした． ・事前に学生自身から自己PRを聞き，もし，特技があるなら，患者の前で披露させ，患者との関り初めが容易になるようにサポートした． ・他職種連携の経験ができるようにするため，デイケア内の作業療法士以外の職種にも相互に声をかけさせ，さらに，デイケア外の職種（医師，精神保健福祉士，訪問看護師）との関りも持てるように場面を設定した． ・学生の実習中に湧き出た疑問全てに答えられるようにするため，時間の許す限り，学生に対するフィードバックを行った． ・学生が体調不良に陥らぬよう，睡眠時間の確認とその確保，休憩の促しとその都度の課題量の調節を行った． これらにより，通常授業によって得ることのできない実践的教育指導を学生に提供することができた．

事項	年月日	概　　要
（講演依頼） 1)製薬会社からの講演依頼	平成27年 3月14日	ヤンセンファーマ株式会社主催のXeplion Patient Focus Meeting（於ホテル日航大阪）より依頼を受け講演を実施した．演題名は「ゼプリオンに対する当事者評価　デイケアスタッフ（作業療法士）からみた変化～薬物療法と非薬物療法の効果～」とし，2事例を挙げて薬物療法と非薬物療法（作業療法）の相乗的な効果についての講演を実施した． 講演にはPowerPointスライドを用い、薬物療法と非薬物療法（作業療法など）が患者の治療において両輪の関係であるというモデルを提示し、製薬会社職員、聴衆（医師、薬剤師など）に、非薬物療法の重要性について説明した。また、実際の活動中の患者の写真や動画をスライド内で用い、 活動量の変化を視覚的に提示した。その時の、座長（医師）や製薬会社職員からは、患者の活動の変化を引き出したこと、スライドの説得力について好評を得た。
2)北摂四医師会からの講演依頼	平成28年 10月20日	第19回北摂四医師会神経性氏に学研究会（共催：大日本住友製薬株式会社）（於大阪医科大学）より依頼を受け演題発表を実施した．演題名は「精神科デイケアにおける，複数疾患に対するメタ認知トレーニング（MCT）の実践」とし，6名の患者（統合失調症，うつ病，強迫性障害，発達障害）を介入実施前後での比較し検討した結果を報告した．MCTは複数の疾患に対して効果があることが示唆された． 講演はPowerPointスライドを用いて実施した。多職種の聴衆（医師、看護師、臨床心理士、精神保健福祉士、作業療法士など）にわかりやすく伝えるために、患者の客観的データによる変化と一人一人の変化について細かく端的に、メタ認知トレーニングの効果を説明した．
3)学校法人ミスパリ学園　ミス・パリ　エステティック専門学校　大阪校からの講演依頼	令和2年 12月26日	ミス・パリエステティック専門学校より講演依頼を受け、「精神障害・発達障害の実態や対応について」という演題で講演を行った。当該専門学校のみならず、多くの学校教育現場において、精神障害または発達障害の学生あるいはスムーズな学習が困難な学生が在籍している。医学、リハビリテーション学、障害学などに精通していない高等教育現場は多く、適切な対応や合理的配慮の方法に苦慮しているところである。当該専門学校ではそのような事案にいち早く対応できるよう、精神障害、発達障害に精通した本申請者に依頼し、当該専門学校の教員・事務員向けに講演会を実施した。申請者はそれに応えるべく、スムーズな学習が困難な学生に対する対応方法について講演を行った。
（企業内教育） 1)病院内職員の教育・接遇・育成を図るための研修	平成27年 8月12日	医療法人美喜和会美喜和会オレンジホスピタル教育接遇委員会から講師依頼を受け，全職員対象に「統合失調症の社会的認知機能障害」について講義した．精神科病院内において，統合失調症患者の奇異な行動に対し，しばしば病院職員は理解を示すことができない．それにより患者の病状を適切に解釈することができず，対応に戸惑いが生じてしまう．その様な奇異な行動が出現するメカニズムを社会的認知機能障害の観点から最新の知見を交え解説した．これにより，受講職員の統合失調症患者の行動に対する洞察力を高めることに努め

事項	年月日	概　　要
		めた．
2)病院精神科デイケア職員に対するチーム医療・連携・相互理解を図るための研修	平成29年 2月22日	医療法人美喜和会美喜和会オレンジホスピタル精神科デイケア内職員向けに，チーム医療・連携・相互理解を高めるための講義を実施した．他職種のそろう精神科デイケアは患者を多面的に支援する利点はあるが，反対に職種とその考え方の違いによる職員間・職種間の不理解がしばしば生じる．それぞれの医療に対する主義が対立するとき，各々に多大なるストレスが生じそれは間接的に患者の不利益につながる可能性がある．そこで，「方法論的自覚と多元主義」というテーマで，各職種や各個人が独自に持つ主義は無意識の間に教育と自己の経験の中で確立されたものであることを説き，自己の主義の方法論やその限界について自覚すること，さらに他職種もまた各々の中で確立されたものであることを共通認識とし，患者の問題に対し，その都度，どの主義が最もその問題に対応し得るかを話し合うことが良い，とされる多元主義の考え方について講義した．その成果として，各職員は自己の方法論について自覚を持ち始め，さらに他職種の方法論に対して興味を持ち始め相互理解が高まった．
3)病院内職員の教育・接遇・育成を図るための研修	平成29年 6月8日	医療法人美喜和会美喜和会オレンジホスピタル教育接遇委員会から講師依頼を受け，全職員対象に「精神科リハビリテーションにおける作業療法」について講義した．精神科における医療は他職種による関りが多く，職能の相互理解が良好なほど患者に利益をもたらと推測される．そのため，精神科領域で作業療法士が患者に「していること」を知ってもらうことは患者にとっても，他職種にとっても，我々作業療法士にとっても意義がある．しかし，他職種らは作業療法がの目的や効果を適切に説明できる者は少ない．そのため，他職種でもわかりやすいように，身近な例から一般的な解釈，学術的な解釈などあらゆる方面から作業療法について解説・講義をした．これにより，作業療法士への他職種からの理解を高めることに努めた．

事項	年月日	概　　要
５　その他		
1)臨床現場の後輩への学術的指導	平成27年10月	医療法人美喜和会美喜和会オレンジホスピタルにおいて作業療法士後輩職員に対し，学会での学術発表を行えるように，その全般（執筆・発表）を教育・指導した．※以下の学会発表欄「人と人をつなぐことを目的としたプログラムの有効性―同性集団活動による対人関係の変化―：第20回日本デイケア学会」
2)臨床現場の後輩への学術的指導	平成27年12月	医療法人美喜和会美喜和会オレンジホスピタルにおいて作業療法士後輩職員に対し，学会での学術発表を行えるように，その全般（執筆・発表）を教育・指導した．※以下の学会発表欄「長期入院患者が街に出た！！～退院促進プログラムの取り組みより～：第23回日本精神障害者リハビリテーション学会高知大会」
3)臨床現場の作業療法士への学術的・臨床的指導	令和3年3月	社会福祉法人天心会小阪病院精神科急性期病棟担当の作業療法士より臨床指導の依頼を受けたため、PowerPointスライドを作成し、精神科作業療法における急性期治療について学術的知見を交えながら臨床指導を行った。
3)臨床現場の作業療法士への学術的指導	令和3年11月	南勢病院の作業療法士より臨床指導の依頼を受けたため、対象患者に対するアプローチの具体的な方策の指示、支援、教育、指導を当該作業療法士に行い、症例報告として学会発表に至るまでの一連を指導した。

事項	年月日	概　　要
職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 作業療法士免許（国家資格） 修士（保健学） 博士（保健学） 公認心理師免許（国家資格）		 大阪府立大学 論文題目「統合失調症における心の理論・語用論的能力と社会的行動に対する判断障害の関連」 大阪府立大学 論文題目「慢性期統合失調症患者の非形式言語の理解及び表現能力に関する研究」
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1)作業療法士の臨床歴及び実務歴	平成23年4月 ～ 平成25年3月	医療法人達磨会東加古川病院作業療法室において作業療法臨床業務に従事 平成23年度は急性期病棟および慢性期解放病棟を担当 平成24年度は慢性期閉鎖病棟および認知症病棟を担当 各病棟において、病期・疾患に合わせた精神科作業療法を入院患者に提供。精神科作業療法内容として、創作活動、身体活動、音楽療法、レクレーション活動、映画鑑賞、外出訓練などを実施。 精神疾患の患者で特に長期入院患者は、活動性が乏しく、中には病院内で生涯を過ごす患者もいる。そのような患者に対して、精神科の作業療法士は何ができるのかを常に考えながら業務に従事した。できる限り、精神疾患を抱えながらまた、精神的、身体的、社会的に制限を受けながらもその人らしく前向きに生活ができるように支援をしてきた。
	平成25年4月 ～ 平成31年3月	医療法人美喜和会美喜和会オレンジホスピタル精神科デイケアにおいて臨床業務に従事 病院運営として禁煙委員会委員長，広報委員会委員長を兼任 平成29年10月より精神科デイケア主任・リハビリテーション科主任として臨床業務・管理業務に従事 精神科デイケア内にて、対象患者に対し、社会的認知機能訓練、神経認知機能訓練、社会技能訓練、創作活動、日常生活訓練、リラクゼーション活動、レクレーション活動、外出訓練などを提供。地域で生活する精神科科患者が自分らしく生きながら、生活の幅、人生の豊かさを感じられるように関りを継続した。 また、主任業務として、リハビリテーション科全体の職員の業務マネジメント、心理的支援、職員・患者の安全配慮、治療行為におけるリスク管理を実施してきた。 委員会活動として、病院広報誌作成、精神科デイケアホームページ作成、敷地内全面禁煙活動の推進、敷地内外の巡回と清掃活動の指揮などを実施。
	令和2年9月 ～ 現在に至る	株式会社ハーティケア　訪問看護ステーションこころ　にて、作業療法士として訪問看護業務に従事している。頻度は週1回 これまで、8名の利用者を担当し、そのうち6名を主担当として従事した。

事項	年月日	概　　要
2)精神科OT研究会の運営	平成24年12月 ～ 現在に至る	精神科領域に勤務する作業療法士が有志で集まり，作業療法士として相互に研鑽するために精神科OT研究会を発足した．立案初期メンバーである．2ヶ月に1回の頻度で研究会の集会を執り行い，メンバーによる講義や症例報告を実施している．平成28年4月1日より運営強化を目的に常任理事を設定し，その中で副理事長に就任し，現在に至る．これまでに臨床に従事する作業療法士に向けて4回講義や症例報告をしている． 平成31年4月より令和2年12月に至るまで理事長に就任した。
3)臨床指導および臨床活動継続の実施	平成31年4月 ～ 令和元年3月	大学教員として大学に勤務する傍ら、週1日程度、前職場である医療法人美喜和会美喜和会オレンジホスピタルリハビリテーション科にて臨床指導を行った。精神科一般病棟、精神科急性期病棟、認知症治療病棟、精神科デイ・ケアにて、勤務する作業療法士に臨床指導、教育を行った。また、申請者自身も臨床活動実践を継続した。
（研究員） １）大阪府立大学　客員研究員	平成30年4月 ～ 平成31年4月	大阪府立大学大学院　総合リハビリテーション学研究科において、客員研究員に任命されている。客員研究員として大阪府立大学大学院田中寛之研究室に所属し研究を継続している。
２）大阪公立大学　客員研究員	令和元年5月 ～ 現在に至る	大阪公立大学大学院リハビリテーション学研究科において、客員研究員に任命されている。客員研究員として大阪公立大学大学院田中寛之研究室に所属し研究を継続している。

事項	年月日	概　　要
（学会活動） 1）第34回大阪府作業療法学会　座長	令和1年12月8日	第34回大阪府作業療法学会の一般演題4において3演題について、座長として学会を取り仕切った。
2）第34回大阪府作業療法学会　運営委員	令和1年12月8日	第34回大阪府作業療法学会の運営委員として、学会運営に従事した。
3）第34回大阪府作業療法学会　当日演題審査員	令和1年12月8日	第34回大阪府作業療法学会において、演題賞を選定する審査員をした。
4)研究助成	平成26年 4月1日 ～ 平成29年 3月31日	大阪府作業療法士会にて「統合失調症セルフエフィカシー研究会」の研究員として年間10万円（3年間で合計30万円）の研究助成を受けた. 研究代表者：小川泰弘 研究員：福原啓太，長池将太，梅田錬 平成26年度：「統合失調症者のセルフエフィカシーに関する文献レビュー」（学会報告として） 「統合失調症者セルフエフィカシー研究会活動報告」（報告書として） 平成27年度：「統合失調症者の就労に関する自己効力感尺度「Work - Related Self - Efficacy Scale」の作成」（学会報告として） 「統合失調症者セルフエフィカシー研究会平成27年度活動報告」（報告書として） 平成28年度：「就労関連自己効力感尺度 Work-related self-efficacy scale WSES日本語版の信頼性・妥当性の検討」（学会報告として） 「表題：精神障害者の就労関連自己効力感尺度日本語版（WSS-J）作成の試み」（報告書兼学術誌短報）

事項	年月日	概　　要
5)研究助成	平成28年 4月1日 ～ 平成31年 3月31日	大阪府作業療法士会にて「生体医工学的指標・生活研究会」の研究代表者として年間10万円（3年間で合計30万円）の研究助成を受けた. 研究代表者：福原啓太 研究員：小川泰弘，森泰祐 平成28年度：「精神疾患患者を対象とした，生体医工学技術を用いた客観的指標の検討」（学会報告として） 「精神科生体医工学的指標・生活研究会平成28年度活動報告」（報告書として） 平成29年度：「精神科生体医工学的指標・生活研究会　H29年度研究報告」（学会報告として） 「精神科生体医工学的指標・生活研究会　平成29年度　活動報告」（報告書として） 平成30年度：「：統合失調症の情動表出能力について～精神科生体医工学的指標・生活研究会　H30年度研究報告～」（学会報告として） 「精神科生体医工学的指標・生活研究会　平成30年度　活動報告」（報告書として）
6)日本学生支援機構理事長からの認定証の授与	平成25年 5月31日	大阪府立大学大学院博士前期課程在学中に第一種奨学金を借り受けしていたが，特に優れた成績を挙げたと認定され，奨学金の返還を一部免除された.
7)大阪府高槻市立図書館との連携	平成25年	これまで，大阪府高槻市の市立図書館では，その貸出可能利用者を高槻市に在住，在勤，在学の者，または高槻市内に入院する患者のみを対象としてきた．そこで，美喜和会オレンジホスピタルと高槻市立阿武山図書館を通して高槻市中央図書館館長と間接的に交渉することにより，高槻市外に在住する精神科デイケア利用患者も図書貸出可能という許可をもらうことができた．これにより，デイケアを利用する高槻市外在住の患者も図書館にて図書と触れ合うことができるようになり，社会生活の幅をひろげることができた.
8)日本学生支援機構理事長からの認定証の授与	平成28年 5月31日	大学院博士後期課程在学中に第一種奨学金を借り受けしていたが，特に優れた成績を挙げたと認定され，奨学金の返還を一部免除された.

事項	年月日	概　　要
9)科学研究費　基盤研究（C）（共同研究者）	平成31年4月 ～ 令和5年3月	研究課題/領域番号：19K11421 認知症高齢者における重症度・居住形態別ADLリハビリテーション戦略の構築 概要：認知症者のADL障害の背景因子として，認知機能障害，行動心理学的症候，身体活動量など様々な要因が指摘されている。先行研究の多くは，交絡因子の調整が不十分であること，重症度に合わせた適切な評価指標が用いられていないこと，など限界を有していた。しかし，重症度に応じた評価指標を導入することによって，ADL障害の背景要因が重症度によって異なることを明らかにできると考えている。本研究では,重症度別の検討に加えて，在宅・入院・入所と居住形態をも層別化してADL障害に関連する要因を明らかにし，得られた知見に基づいて重症度別・居住形態別のADL障害へのリハビリテーション戦略を構築する。 助成額：4,420千円
10)2019年度奈良学園大学保健医療学部共同研究助成	令和元年4月 ～ 令和2年3月	課題名：統合失調症患者のVocal Expression Abnormalitiesにおける障害の同定と精神症状と生活機能との関連に着目して 助成額：347千円
11)2019年度奈良学園大学保健医療学部共同研究助成	令和元年4月 ～ 令和2年3月	課題名：要介護高齢者ケア従事者の健康に関する研究：パイロット調査（共同研究者） 助成額：347千円
12)科学研究費　若手研究（研究代表者）	令和2年4月 ～ 令和5年3月	研究課題/領域番号：20K19122 統合失調症の感情表現障害が対人交流に与える影響の調査および治療技法開発の研究 概要：統合失調症はおおよそ100人に1人が発症し、感情の「理解」と「表現」の障害を含む多彩な症状により社会参加に制限をきたすことがある精神障害である。本患者が、円滑に社会参加、対人交流をするために感情の理解と表現の障害を改善することは重要である。本研究では、主に感情の表現についてとりあつかい、本邦における統合失調症患者の感情表現（音声と表情）における障害特性を明らかにする。また、社会参加に重要である対人交流技能を評価し感情表現能力との関連性を検証する。さらに、感情表現障害に対する治療可能性について確認する。 助成額：4,160千円
13)2020年度奈良学園大学保健医療学部共同研究助成	令和2年4月 ～ 令和3年3月	課題名：精神障害者の雇用継続における促進・阻害要因における実態調査～企業に向けたインタビューによる質的研究～ 助成額：220千円
14)2020年度奈良学園大学保健医療学部共同研究助成	令和2年4月 ～ 令和3年3月	課題名：リハビリテーション学科臨床実習管理センターによる双方向性活用システムの構築　－臨床実習教育の質的向上を目指して－ 助成額：220千円

事項	年月日	概　　要
４　その他 (奈良学園大学　大学内業務)		
1)実習部会【作業】評価／検査測手実習・総合臨床実習	平成31年4月 ～ 現在に至る	作業療法学専攻の学部生3年生4年生を対象とした、評価／検査測定実習・総合臨床実習について、実習の手引き（要綱）作成、実習資料の作成や実習候補地開拓を行っている。
2)実習ワーキンググループ	平成31年4月 ～ 現在に至る	保健医療学部リハビリテーション学科の１～4年生の学部生を対象にした実習全般における作業を行っている。臨床実習指導者会議における出欠状況を管理している。
3)学生生活部会　国家試験対策	平成31年4月 ～ 現在に至る	学生が受験する理学療法・作業療法国家試験の対策委員として、実働している。内容は国家試験対策用書籍の購入と管理、学生向けガイダンス、保護者向けガイダンス、模擬試験の設定、国家試験対策eラーニングソフト（スマコク）の管理、年度予算の管理をしている。国家試験関連の模擬試験の管理や試験監督を実施している。
4)図書委員	平成31年4月 ～ 現在に至る	教員図書委員として、推薦図書、専攻別推薦図書の管理をしている。
5)保護者懇談会　国家試験対策委員のガイダンス	令和1年6月22日 令和2年6月20日	保護者にむけて、奈良学園大学の学生向け国家試験対策についてのビジョンを説明した。
6)国家試験対策専用ソフト（スマコク）説明会	令和1年6月26日	国家試験対策ソフト（スマコク）を学生が使用できるように教員がソフトの中身を把握することを目的とした説明会に出席した。
7)奈良学園大学オープンキャンパス　ミニ講義担当	令和1年7月13日	次年度の奈良学園大学の入学希望者に向けたオープンキャンパスにて、高校生に向けて「認知機能と生活とリハビリテーションの世界」という題目でミニ講義を実施した。
8)FD・SD委員会主催研修会（シラバス・ハラスメント）出席	令和1年8月28日	シラバス作成についての注意事項、ハラスメントについてのワールドカフェ形式での研修会に出席し、シラバスとハラスメントについての知識を深めた。
9)奈良学園大学　入学試験　面接官　試験官	令和1年9月28日 令和2年1月25日 令和2年3月14日 令和2年10月31日 令和2年11月23日 令和3年2月4日 令和3年9月25日 令和3年11月14日 令和3年12月4日 令和3年12月18日 令和4年1月16日 令和4年3月13日 令和4年9月24日 令和5年1月14日 令和5年3月12日 令和5年9月24日 令和5年10月28日 令和6年2月17日	奈良学園大学にて入試面接官の実施 本学入試、センター試験、共通テスト含む
10)ハラスメント相談員　就任	令和元年10月 ～ 現在に至る	奈良学園大学のハラスメント相談員に就任し、学生、教職員からのハラスメントの相談窓口を担当することになった。 令和3年より公認心理師国家資格を習得したことによりより専門的な対応が可能となった。

事項	年月日	概　　要
11)奈良学園大学オープンキャンパス　ミニ講義担当	令和元年12月22日	次年度の奈良学園大学の入学希望者に向けたオープンキャンパスにて、高校生に向けて「人の気持ちに寄り添う作業療法」という題目でミニ講義を実施した。
12)高校生対象大学ガイダンス　ミニ講義	令和2年2月15日 令和2年2月19日 令和2年10月15日 令和3年2月17日	高校生向けにリハビリテーション職（理学療法士・作業療法士）の職業について説明をした。
10)高校訪問大学説明	令和2年7月7日	関西大倉高等学校進路指導室担当者に本学リハビリテーション学科の特色について説明した。
11)学部3年次生担任業務	令和3年4月 ～	奈良学園大学作業療法学専攻3年次生の担任業務(副担任)担当。専門科目増加、臨床実習開始、学内演習増加など学部生が作業療法士・社会人になるための意識づけが必要となる業務を実施し、学生の全般的な生活・学習をサポートしている。
12)キャンパス見学会	令和3年7月	高校3年生と保護者一組に対し、キャンパス見学会を実施した。個別対応、作業療法士教育の相談、作業療法士についての説明、キャンパス内施設見学説明を2時間実施した。
13)卒業研究教務部会	令和3年4月 ～ 現在に至る	大学学部教育における卒業研究について取りまとめを行う卒業研究教務部会の担当者として当該業務を実施している。
14)卒業研究　倫理委員	令和3年4月 ～ 現在に至る	学部卒業研究の倫理委員に所属し、当該業務を実施している。
15)評価実習（作業療法）部会	令和3年4月 ～ 現在に至る	作業療法学専攻学部3年次生後期科目である評価実習のコーディネータとして実習配置や実習内容についての業務を実施している。
16)総合臨床実習（作業療法）部会	令和3年4月 ～ 現在に至る	作業療法学専攻学部4年次生前期科目である総合実習のコーディネータとして実習配置や実習内容についての業務を実施している。
17)リハビリテーション教育評価機構　作業療法学専攻実地調査対応	令和5年11月16日	作業療法学専攻の実習に関する調書作成、実地調査にて、審査員対応、説明を実施。
18）広報委員会	令和5年4月 ～ 現在に至る	学内広報委員会にて、作業療法学専攻ないでリーダーを務める。オープンキャンパス、広報発信用SNS、高校生ガイダンス、アカデミックインターンシップの取り仕切りと実施。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） なし （学術論文） 1　統合失調症における心の理論・語用論的能力と社会的行動に対する判断障害の関連 （修士論文）	単著		大阪府立大学	近年，統合失調症患者の心の理論能力と共に語用論的言語の理解能力が注目されている．本研究では，地域に住む慢性期統合失調症患者28人と健常者28人を対象に比喩・皮肉理解の能力とToM能力，社会常識テストを実施した．その結果，我が国においても統合失調症患者は語用論的言語の理解能力が障害されていた．また統合失調症患者において，比喩理解能力と基本的な認知機能に関連があり，心の理論の障害や皮肉を文字通りに解釈する傾向は非社会的行動への認識の低下と関連していることが示唆された． A4判　全60頁
2　重度認知症者のための認知機能検査 － ‘Severe Cognitive Impairment Rating Scale’日本語版の臨床的有用性の検討 － （査読付）	共著	平成25年10月	「老年精神医学雑誌」 第24巻第10号 P.1037～P.1046	重度認知症患者にとって既存の認知機能検査は難易度が高く，残存する認知機能を詳細に把握することが困難である．海外では，重度認知症患者の認知機能検査として，Severe Cognitive Impairment Rating Scale (SCIRS)が開発されている．本研究では，SCIRSの日本語版を作成し，臨床的有用性を検討した．その結果，既存の検査では床効果を示した患者に対しても，SCIRSを用いてより詳細に認知機能を判別できた．以上より，日本語版SCIRSは重度認知症者の残存する認知機能を詳細に幅広く測定可能な検査であると考えられた． 共著者：田中寛之，植松正保，永田優馬，福原啓太，内藤泰男，大西久男，西川隆 本人担当部分：認知機能検査の検査者としての実施，データ収集
3　認知症患者における認知機能，ADL，BPSDの関連性 重度認知症患者に着目して （査読付）	共著	平成26年3月	「老年精神医学雑誌」 第25巻第3号 P.316～P.323	認知症患者の認知機能，日常生活活動（ADL），周辺症状（BPSD）の関連性を明らかにするため，94人の入院患者を対象に認知機能検査，ADL検査そしてBPSDの検査を実施した．その結果，入院中の認知症患者において，ADLが高ければ認知機能障害が軽度であり，移動能力が高い程，BPSDが増悪していることが明らかになった．また，重度認知症患者においては，認知機能検査，ADL検査において，いくつかの床効果を示した．そのため，重度認知症患者向けの各検査が必要であると思われた． 共著者：田中寛之，植松正保，小城遼太，永田優馬，福原啓太，内藤泰男，大西久男，西川隆 本人担当部分：認知機能検査の検査者としての実施，データ収集
4　リハビリテーション医療系学生の抑うつ状況について：学習性無気力の観点から （査読付）	共著	平成26年3月	「四条畷学園大学リハビリテーション学部紀要」 第9号 P.27～P.34	リハビリテーション系学生は，授業や課題の多さ，長期実習，国家試験など多くのストレッサーが長期に継続する特徴がある．それらが学生の「学習性無気力」の状況と関連すると考え，学生の抑うつ傾向，心理的状況を調査した．その結果，抑うつ傾向・ストレス反応が高くまた自尊感情は低かった．また家庭内に相談できる人物が多いこと，睡眠・休養・食事の生活リズムが確立していることが，抑うつ傾向を抑えることが示された．学生生活や精神状態について家族と情報を共有すること，また生活リズムの確立に向けた援助が，教員として必要であると考えられた． 共著者：西田斉二，橋本世奈，福原啓太，田丸佳希，杉原勝美，北山淳 本人担当部分：学生に関する客観的意見の提言

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5　Development of the Cognitive Test for Severe Dementia （重度認知症のための認知機能テストの開発） （査読付）	共著	平成27年6月	「Dement Geriatr Cogn Disord」40(1-2) P.94～P.106	中等度から重度の認知症患者に対して既存の認知機能検査は床効果を示し，特に重度認知症者に対しては残存する認知機能を測定することができない．我々は，7つの認知機能の領域をカバーする13項目からなる重度認知症患者向けの認知機能テスト（the Cognitive Test for Severe Dementia; CTSD）を開発し，その信頼性と妥当性を検討した．CTSDは床効果を示さず， また信頼性と妥当性も確認できた．CTSDは他の認知機能検査と比較して重度認知症患者の残存する認知機能を鋭敏に測定することができた． 共著者：Tanaka H, Nagata Y, Takebayashi T, Hanada K, Inokawa M,Fukuhara K, Ogawa Y, Haga D, Kakegawa Y, Nishikawa T（他1名） 本人担当部分：認知機能検査開発に対する提言，認知機能検査の検査者として評価，データ収集
6　重度認知症に対する従来のQOL尺度の限界 （査読付）	共著	平成28年4月	「老年精神医学雑誌」第27巻第4号 P.429～P.437	重度認知症者のQOL（quality of life）評価には，軽度～中等度認知症用のQOL尺度が用いられてきたが，近年，そのQOL概念の枠組みは異なると示唆されている．本研究では，36人の重度認知症者を対象に，軽度～中等度認知症用のQOL尺度を用いて，重度認知症者に対する適応性を検討した．QOL評価には，自己評点式尺度と代理評点式尺度をそれぞれ2種類使用した．適応性の検定の結果，4尺度の内の1尺度内における2項目のみ適合基準を満たした．以上より，重度認知症者に対する従来のQOL尺度の適応性には限界があると考えられた． 共著者：永田優馬，田中寛之，石丸大貴，植松正保，福原啓太，小川泰弘，内藤泰男，西川隆 本人担当部分：研究計画立案時の提言
7　リハビリテーション医療系大学1年生の日本語能力と科目成績の関連性についての検討 （査読付）	共著	平成29年8月	「第30回教育研究大会・教員研修会誌」	近年，大学生の学力低下，特に「国語能力」の低下が大きな問題となっている．本研究では，医療系大学1年生28名を対象に，日本語能力（語彙・文法能力）と，主要必須科目成績との関連性について検討した．その結果，前期GPAが日本語能力を有意に説明でき，また比較的強い正の相関を示した．つまり，日本語能力が1年生前期の総合的な学力に影響することが示唆された．そのため，入学前後に語彙や文法を学習することは学生の大学における学業適応に有効であると考える． 共著者：西田斉二，福原啓太，田丸佳希，杉原勝美 本人担当部分：研究計画立案時の提言，学生に関する客観的意見の提言

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8　Impaired Interpretation of Others' Behavior is Associated with Difficulties in Recognizing Pragmatic Language in Patients with Schizophrenia （統合失調症において他者の行動の理解障害は語用論的言語理解障害と関連している） （査読付）	共著	平成29年10月	「Journal of Psycholinguistic Research」 vol.46(5) P.1309～P.1318	近年，統合失調症患者の語用論的言語理解能力が注目されている．我々は統合失調症患者34人と健常者34人に対して，心の理論課題，比喩皮肉文課題，社会常識テストを実施した．その結果，全ての課題において，患者群は健常群よりも有意に障害されていた．また患者群内において比喩理解能力と正常行動理解能力，皮肉理解能力と異常行動理解能力の間に有意な相関がみられた．統合失調症患者の社会的認知機能障害はこれら2つの語用論的要因を含んでいることが示唆された。 共著者：Fukuhara K，Ogawa Y，Tanaka H，Nagata Y，Nishida S，Haga D，Nishikawa T 本人担当部分：研究全般（研究計画，執筆，データ収集・分析）
9　精神障害者の就労関連自己効力感尺度日本語版（WSS-J)作成の試み （査読付）	共著	平成30年1月	「大阪府作業療法ジャーナル」第31巻第2号 P.148～P.152	精神疾患を有する患者を対象とした課題特異的な自己効力感尺度はいくつか開発されているが，就労に関連する日本語の自己効力感尺度は見当たらない．そこで諸外国で既に用いられている就労関連自己効力感尺度（Work-related self-efficacy scaleの日本語版；WSS-J）の作成を試みた．本尺度は精神科患者自身による使用を想定しているため，文章の理解のしやすさが求められた．本研究では，プレテストの実施，文章の精度を整えた後，逆翻訳と原文との比較も実施した．今後，本尺度の信頼性・妥当性の検討が必要である． 共著者：小川泰弘，福原啓太，長池将太，梅田錬，西川隆 本人担当部分：研究全般（研究計画，執筆補助，データ収集・分析）
10　慢性期統合失調症患者の非形式言語の理解及び表出能力に関する研究 （博士論文）	単著		大阪府立大学	近年，統合失調症の非形式的言語の理解・表出の障害が注目されている．第Ⅰ章では統合失調症患者の非形式言語の理解面に着目し，語用論的言語理解の障害があることを確認した．またその障害は社会的行動の理解障害と関連していた．第Ⅱ章ではその表出面である，プロソディと会話量をコンピュータで分析した．その結果，患者群にプロソディの一部と会話量の障害が認められ，会話量と生活機能は関連していた．第Ⅲ章では患者のプロソディと会話量の障害に対し治療介入を実施した．その結果プロソディの一部は改善が認められたが，会話量の改善は認められなかった． A4判　全79頁

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11　Clinical Utility of the Cognitive Test for Severe Dementia: Factor Analysis, Minimal Detectable Change, and Longitudinal Changes. （査読付） （重度認知症向けの認知機能検査［CTSD］の有用性について：因子分析と最小可検変化量、そして縦断的変化）	共著	平成30年6月	Dementia and geriatric cognitive disorders extra　8(2) 214-225	本研究は、COSMINのチェックリストを用いて、十分なアウトカム尺度を開発するために、Cognitive Test for Severe Dementia (CTSD)をさらに分析した。研究では、以下の方法を行った。（１）構成概念妥当性を評価するために因子分析を用いた。（２）測定誤差 (SEM)と最小化検変化量について信頼性と解釈可能性を評価した。（３）反応性を評価するために縦断的変化を評価した。その結果、CTSDの因子分析は2要因から説明され、各項目の通過率により2分化された。我々はそれぞれSEMは1.6ポイント、MDCは3.6ポイントと計算した。我々の結果は、CTSDは、重度認知症患者に対する信頼できるアウトカム指標を提供するということを示している。 Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Ogawa Y, Fukuhara K, Nishikawa T 本人担当部分：データ収集
12　Distraction技能獲得により不安の軽減と自己効力感ならびに社会生活活動の改善がみられた一例 ： 事例報告 （査読付）	共著	平成31年1月	大阪作業療法ジャーナル 32(2) 135-142	不安を根底にもつ強迫症/強迫性障害には、一般的に薬物療法や認知行動療法(CBT)が適用される。一方で作業療法を用いた明確な治療的介入方法はあまり見当たらない。本稿では、作業活動をCBTの一技法であるdistractionとして応用させることで、不安や強迫観念により社会生活に制限のあった患者の不安、自己効力感そして社会生活の改善が認められたため、その報告をする。最後に、Distractionは不安や認知の歪みを根本的に解決する手段というよりも、即時的に不安や強迫観念から脱却し充実した社会生活を送れるようになることの一手段として有用であるということを提唱したい。 福原啓太, 田中宏明, 西田斉二, 小川泰弘, 森泰祐, 西川隆 本人担当部分：論文執筆、データ整理、対象者介入を含む研究の全工程
13　Insight Into Illness and Defense Styles in Schizophrenia. （査読付） （統合失調症の病識と防衛スタイル）	共著	令和元年10月	The Journal of Nervous and Mental Disease 207(10) 815-819	心理学的な否認のモデルは乏しい洞察（insight)は防衛機制の結果であると主張しているが、その二つの直接的な関係性は、明らかにされていない。本研究の目的は、認知機能障害を考慮しながら、洞察と防衛機制の関係性を調査することである。38人の統合失調症患者に対して、洞察、防衛機制、神経認知機能、精神症状について評価した。神経認知機能と精神症状を制御して洞察レベルの返送間分析を行ったところ、「病気の認識」が未熟な防衛スタイルと正の偏相関をして、成熟した防衛スタイルとは負の偏相関がみられた。ステップワイズの回帰分析では、「病気の認識」は有意に未熟な防衛機制を予測することが明らかになった。我々の結果は、未熟な防衛スタイルを使用する傾向にある患者は、自分自身の精神病を受け入れている傾向にあることを示唆している。 Ogawa Y, Fukuhara K, Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Nishikawa T. 本人担当部分：論文構成補助、データ解析補助、研究デザイン補助

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
14　統合失調症患者の声による情動表出能力について～予備的研究～ （査読付）	共著	令和2年1月	大阪作業療法ジャーナル 33(2) 117-122	近年、統合失調症の陰性症状、特に情動表出について改めて注目されている。本研究は予備的段階として、本邦の統合失調症患者の声の側面に着目し、情動表出の減少について調査した。DSM-5により統合失調症または統合失調感情障害と診断された入院患者23名と、年齢と性別をマッチさせた健常者23名に対して、声による情動表出を引き出す課題（紙芝居音読課題と4感情表出課題）を実施した。それにより得られた音声サンプルをデジタル評価ならびにアナログ評価を用いて、両群を比較した。その結果、患者群は健常群と比較して、プロソディスコアが減少しており、さらに怒りと幸せの感情について正確に表現できていなかった。今後は、より明確な知見を得るためにさらなる調査が必要である。 福原啓太、小川泰弘、森泰祐、田中寛之、西川隆 本人担当部分：論文執筆、データ収集、データ解析、研究デザイン立案を含む研究全般
15　Clinical factors associated with Activities of Daily Living and their decline in patients with severe dementia （査読付） （重度認知症患者のADLとその減少に関連する臨床要因について）	共著	令和元年12月	Psychogeriatrics 20(3) 327-336	認知症患者においてベースライン時と6ヶ月後の間の変化に影響を与える臨床的要因を探索した。参加者は131名の認知症患者であった。重度認知症の参加者のベースライン時においてADL尺度であるPSMSスコアはCTSD、CCI、MNA-SF、CSDDのスコアと有意に関連していた。縦断的な分析に置いて、CTSDスコアのみが6ヶ月後のPSMSスコアと有意に関連していた。重度の認知症の参加者にとって、6ヶ月後のADLに関連する要因としてCTSDで評価される認知機能は注目に値する。 Hiroyuki Tanaka, Yuma Nagata, Daiki Ishimar2, Yasuhiro Ogawa, Keita Fukuhara, Takashi Nishikawa 本人担当部分：執筆補助、データ解釈
16　Impact of Disturbed Rest-activity Rhythms on Activities of Daily Living in Moderate and Severe Dementia Patients （査読付） （中等度及び重度認知症患者における休息活動リズムが日常生活活動に与える影響について）	共著	令和2年12月	Alzheimer Dis Assoc Disord.35(2):135-140	認知症患者において休息-活動リズムの乱れや睡眠時間の延長が問題になっている。しかし、これらの問題が中等度及び重度の認知症患者の臨床的問題に及ぼす影響については、ほとんど知られていない。本研究では、安静時活動リズムの乱れ及び睡眠時間の延長とADLとの関連を検討した。その結果、中等度及び重度の認知症患者における案政治活動リズムと睡眠時間の異常は、ADLに影響を及ぼす可能性が示唆された。 Ishimaru D, Tanaka H, Nagata Y, Ogawa Y, Fukuhara K, Takabatake S, Nishikawa T. 本人担当部分：データ解釈、執筆補助

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
17 Possibility of Cognitive Improvement in Severe Dementia: A Case Series Assessed by Cognitive Test for Severe Dementia （査読付） （重度認知症における認知機能の改善可能性について～重度認知症向けの認知機能テストを用いて評価したケースシリーズ）	共著	令和3年4月	INTERNATIONAL JOURNAL OF GERONTOLOGY 15(2) 174-176	重度認知症患者の認知機能の改善は使用している検査が鋭敏でなければ見過ごされてしまうかもしれない。我々が開発したCTSDはそのような変化にも敏感である。ここではCTSDで評価した結果認知機能が改善した4人の重度認知症患者について報告する。臨床的に有意な認知機能の改善は重度の認知症であっても、介入方法や結果の測定方法を工夫することで、定量化することができることが示唆された。 Hiroyuki Tanaka, Yuma Nagata, Daiki Ishimaru, Yasuhiro Ogawa, Keita Fukuhara, Takashi Nishikawa 本人担当部分：執筆補助、データ解釈
18 Insight Into Illness and Psychological Defense Attitudes in People With Chronic Schizophrenia Using Markova's Insight Scale （査読付） （慢性期統合失調症患者の病識と心理的防衛機制について～マルコバのインサイトスケールを用いて～）	共著	令和3年7月	The Journal of Nervous and Mental Disease 209(12):879-883	統合失調症の病識は多次元的な現象であり様々な評価法がある。我々はMarkovaのInsight Scale（IS）に着目し統合失調症患者38名に病識、心理的防衛スタイル、神経認知機能の関連を検討した。今回の結果は、ISで評価された洞察力の高さが未熟な防衛機制を反映している可能性が高いことを示している。 Ogawa Y, Fukuhara K, Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Urakawa M, Nishikawa T. 本人担当部分：データ解釈、執筆補助
19 Factors influencing the quality of life in patients with severe dementia. （査読付き） （重度認知症患者の生活の質に影響を与える要因）	共著	令和4年1月	Psychogeriatrics 22(1):49-54	重度認知症患者に適した評価尺度を使用してQOLに寄与する要因を特定するために、105人の対象者を評価した。その結果、認知症と痛みの行動的および心理的症状が、重度の認知症患者のQOLに影響を与える要因であることが示された。 Nagata Y, Nishikawa T, Tanaka H, Ishimaru D, Ogawa Y, Fukuhara K, Shigenobu K, Ikeda M. 本人担当部分：データ解釈、執筆補助
20 Clinical utility of an assessment scale for engagement in activities for patients with moderate-to-severe dementia: additional analysis （査読付き） （中等度から重度の認知症患者向けの活動への取り組み評価尺度の臨床的有用性について：追加分析）	共著	令和4年4月	Psychogeriatrics. 2022 Jul;22(4):433-444	中等度から重度の認知症患者の治療活動時の患者の活動への取り組み（エンゲージメント）について定量化する評価ツール（ASEA）を開発した。その信頼性と実行可能性について追加の分析をしたため報告する。この分析により、ASEAの各データは感情と有意に相関していた。 重度認知症に特有のいくつかの評価方法の中でもASEAは治療活動への取り組みの状態を定量化し評価するための有用なツールであることが示された。 Hiroyuki Tanaka, Ren Umeda, Tatsunari Kurogi, Yuma Nagata, Daiki Ishimaru, Keita Fukuhara, Shunsuke Nakai, Masahiro Tenjin, Takashi Nishikawa 本人担当分：感情分析とデータ解釈、執筆補助

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
21) Aspects of Rest-Activity Rhythms Associated With Behavioral and Psychological Symptoms in Moderate and Severe Dementia （査読付き） （中等度および重度の認知症における行動と心理症状に関連した休息-活動リズムについて）	共著	令和5年10月	Alzheimer Dis Assoc Disord . 2023 Oct-Dec;37(4):322-327.	中等度および重度の認知症患者における休息-活動リズムとBPSDの関連性について調査した。64人の参加者にアクチグラフを用いて休息-活動リズムを分析た。その結果、活動の最大持続時間が長いほど、昼間の睡眠時間が短いほど、NPI-NHスコアが高くなることが示されました。これらの結果から、RARは中等度から重度の認知症におけるBPSDと関連しており、治療において考慮すべきであると示唆された。 共著者：Daiki Ishimaru, Hiroyuki Tanaka , Yuma Nagata, Yasuhiro Ogawa, Keita Fukuhara, Takashi Nishikawa 本人担当分：データ解釈、執筆補助

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） 「総説」 1　統合失調症患者における語用論的言語（比喩・皮肉）の理解能力について（査読付）	共著	平成28年12月	「Journal of Rehabilitation and Health Sciences」 14巻 P.15～P.25	統合失調症患者の症状は，陽性症状，陰性症状，認知機能障害の3つに大別される．そしてこれらは社会生活，社会的関係，コミュニケーション，そして言語的な理解に影響を与え，その疾患を特徴づけている．本稿では，語用論の定義や統合失調症患者の言語使用に関する学術的背景を述べた後に，統合失調症患者の比喩・皮肉理解における障害についてレビューしている．病期や類型，他の認知機能との関連，比喩と皮肉の理解プロセスの違いにも言及し，統合失調症患者の語用論的障害について詳細にまとめている．最後に，言語的観点からの支援方法や今後の展望について提言している． 共著者：福原啓太，田中寛之，小川泰弘，永田優馬，田中宏明，大西久男，西川隆 本人担当部分：執筆，文献レビュー，分析
「依頼原稿」 1　学会・研修会印象記　第32回近畿作業療法学会	単著	平成25年1月	「作業療法ジャーナル」 47巻第1号 P.95	平成24年10月に2日間にわたり大阪国際交流センターで開催された第32回近畿作業療法学会についての印象記執筆の依頼原稿である．著者は作業療法士（臨床）および大学院生（研究者）2年目であったため，新人作業療法士としての視点から，学会発表を見聞きし，当日に参加できた者，できなかった者が学会参加の意義を再確認できるよう執筆した．文章内で高畑進一学会長の「作業療法士がより脳の機能を理解することが作業療法の幅を広げる」という言葉を代弁するする形で，作業療法の学術意義について述べている．
2　第16回WFOT大会を終えて（その1）精神科セッション	単著	平成26年7月	「日本作業療法協会誌」 第28号 P.38～P.39	平成26年6月に4日間にわたりパシフィコ横浜で開催された16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists（WFOT）における精神科セッションについての印象記執筆の依頼原稿である．過去最大級の作業療法の国際会議・学会が我が国で開催されたため，本邦での作業療法士の取り組みを概観し集団を対象にした研究から単症例を対象にした症例報告までいくつかを紹介した．一方で海外の作業療法士の研究の特徴，つまりグループ活動や行政的取り組み，啓発的取り組みが目立った様子を，読者にわかりやすく対比して執筆した．

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3　特集：0からの研究「精神科に従事する作業療法士が臨床研究に取り組むことの意義」	共著	平成28年1月	「大阪府作業療法ジャーナル」29巻2号 P.73～P.80	精神科領域において作業療法のエビデンスが求められている．われわれ作業療法士の実践の効果を形あるものにし，対象者，他職種，第三者が理解できるように示す必要がある．研究は，様々な形で臨床に活き，臨床を深める手段となる．しかし，精神科の作業療法領域において，研究をすることは容易ではない．本稿では精神科の社会情勢を知ることで作業慮法の社会的位置づけを確認し，そして，著者の臨床研究の経験を通して，精神科の臨床の作業療法士が臨床研究に取り組むことの意義と研究の難しさに対する対応について述べている． 共著者：福原啓太，西川隆 本人担当部分：執筆，情報収集，分析
4　登録事例の紹介	単著	平成28年3月	「日本作業療法協会誌」第48号 P.42～P.43	該当教員が同協会学術委員会事例登録班員として執筆している．日本作業療法協会の教育的活動の一環である「事例登録システム」において精神科部門で「精神障害×認知（機能）」に沿ったテーマを2事例（「楽手教材を使った統合失調症患者へのアプローチ」，「認知ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝを実践した双極性感情障害の一例」）を紹介した．これらを通して「対象者の特性」「生活能力」「作業能力」「認知機能」などと言った評価視点の重要性を読者に説いている．

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「研究報告書」 1　統合失調症者セルフエフィカシー研究会活動報告	共著	平成27年7月	「大阪作業療法ジャーナル」 第29巻第1号 P.55	平成26年度における「統合失調症者セルフエフィカシー研究会」の大阪府作業療法士会に提出した活動報告である．統合失調症患者に対する医療では，症状や認知機能障害などの客観的指標だけでなく，「患者自身がどのように感じているのか」という主観的側面の指標が重要視されている．その中でも本研究会は統合失調症患者のセルフエフィカシーに焦点を当て，文献レビューを実施した．海外では比較対象研究や相関研究など関連性についての研究が半数を超えていた．一方で国内では介入研究やケーススタディなど実践的な報告が多かった．また本邦では，入院時から退院後の社会参加促進をターゲットとするセルフエフィカシー尺度が少ないという問題が抽出された． 共著者：小川泰弘，梅田錬，長池将太，福原啓太 本人担当部分：執筆補助，海外文献レビュー
2　統合失調症者セルフエフィカシー研究会平成27年度活動報告	共著	平成29年1月	「大阪作業療法ジャーナル」 第30巻第2号 P.146～P.147	平成27年度における「統合失調症者セルフエフィカシー研究会」の大阪府作業療法士会に提出した活動報告である．前年度に抽出された「本邦において社会参加に関するセルフエフィカシー尺度が少ない」という問題点をカバーするために，海外で開発された「就労関連自己効力感尺度 Work-related self-efficacy scale (WSES)」の原著者に許可を得て日本語版作成を実施した．研究員4名で原文を日本の精度や文化的背景に合うように複数回議論し，修正を重ねて仮尺度へと翻訳した．専門業者にも逆翻訳を依頼し，日本語版を完成させた．今後は信頼性・妥当性の検討へと進めていく予定である． 共著者：小川泰弘，梅田錬，長池将太，福原啓太 本人担当部分：執筆補助，尺度翻訳，データ収集，データ分析
3　統合失調症者セルフエフィカシー研究会 平成28年度 活動報告	共著	平成29年7月	「大阪作業療法ジャーナル」 第31巻第1号 P.66～P.66	精神保健福祉領域において「患者自身がどのように感じているか」という主観的側面，とりわけ自己効力感が重要視されていると考えられる．本研究では，精神障害者の社会参加に関連する自己効力感尺度の作成を目的としている．そこで，就労関連自己効力感尺度（Work-related self-efficacy scale；WSS-J）の翻訳作業を原著者の許可を得て実施した．外来・入院患者併せて53名の精神障害者の協力を得ることができた．今後は，協力者を増やし，信頼性・妥当性の検証を行うこととする． 共著者：小川泰弘，梅田錬，長池将太，福原啓太 本人担当部分：執筆補助，尺度翻訳，データ収集，データ分析

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4　精神科生体医工学的指標・生活研究会 平成28年度活動報告	共著	平成29年7月	「大阪作業療法ジャーナル」 第31巻第1号 P.72～P.73	統合失調症患者の感情表出障害の一つにプロソディの障害が挙げられている．さらに海外ではその評価に音声のコンピュータ分析を用いた生体医工学的指標がしばしば使用されている．本研究の目的は日本の統合失調症患者のプロソディの調査である．本報告書では，研究計画とデータ蓄積中である旨について中間報告をしている．患者群に対する評価としてプロソディの評価，精神症状評価，行動評価を実施した． 共同発表者：福原啓太，小川泰弘，森泰祐 本人担当部分：研究全般（研究計画，執筆，データ収集・分析）
「学会発表」 〈国際会議〉				
1　Relationship among pragmatic function, ToM function and judgment of abnormal social behavior in patient with schizophrenia. （統合失調症患者における語用論的機能，心の理論能力および社会的異常行動に対する判断能力の関連）	―	平成26年6月	16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists（於パシフィコ横浜）	統合失調症患者28人，健常者28人に対し，比喩・皮肉文テスト，心の理論課題，社会常識テストを実施した．どの課題においても統合失調症群のほうに有意な成績低下を認めた．また，患者群を課題の成績順に群わけすると，皮肉理解と心の理論に障害がなければ，社会常識テストの成績は良く，皮肉理解と心の理論に障害があれば，成績が低下していることがわかり，社会的認知機能の一部は社会常識の程度にある程度影響を与えることが示唆された． 共同発表者：Keita Fukuhara, Yasuhiro Ogawa, Goro Nishio, Hiroyuki Tanaka, Takashi Nishikawa 本人担当部分：研究全般（研究計画，執筆，データ収集・分析）
2　What are Effective Ways to Maintain Cognitive Abilities of People with Severe Dementia? Results of a One-Year Follow-Up Using the Cognitive Test for Severe Dementia （重度認知症の人々の認知機能を維持する効果的な方法は何か？CTSD［重度認知症患者用認知機能検査］を用いた1年間のフォローアップの結果）	―	令和元年6月	13th International Society of Physical and Rehabilitation Medicine World Congress（ISPRM 2019）（於　神戸コンベンションセンター）	我々は、重度認知症患者に対し、CTSDにより1年間の得点の変化を追った。我々は、CTSD上で、意味のある最小の変化（4ポイント上昇）が見られた患者のグループを発見した。161人のデータを集めたが、1年後に再テストできたのは40人であった。その中で、我々は4人のCTSDの得点が上昇した参加者を発見した。しかし、その患者らはMMSEの得点に変化はみられなかった。彼らは、脳血管性認知症と診断されていた。この結果は、CTSDによって、評価することで、重度認知症の認知機能改善が明らかにできる群がいることを示唆した。 Hiroyuki Tanaka, Yuma Nagata, Daiki Ishimaru, Keita Fukuhara, Yasuhiro Ogawa, Takashi Nishikawa 本人担当部分：データ収集、研究デザイン補助

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3 Comprehensive Social Cognition in Schizophrenia from the Social Common Sense Ability Perspective （統合失調症における包括的な社会的認知昨日について、社会常識的能力の観点から）	―	令和元年6月	13th International Society of Physical and Rehabilitation Medicine World Congress（ISPRM 2019） （於　神戸コンベンションセンター）	近年、多くの研究は統合失調症の社会的認知と社会的機能障害の関係について注目している。これまで社会的認知はいくつかの方法で別々に調査されてきた。したがって、統合失調症の社会的認知を包括的に評価する方法はあまりない。本研究では統合失調症の包括的な社会的認知を社会的常識能力の観点から調査した。統合失調症34人と健常者34人が研究に参加した。Dewey Stry Testを用いて社会的常識能力を評価した。正常行動と異常行動のそれぞれの合計得点について2群で優位さがみられた。本研究は、2群において、人間の行動に対する認識に差異があることを示し、また、このようなギャップが患者の社会的機能に影響を及ぼすということを示唆している。 Keita Fukuhara, Hiroyuki Tanaka, Yasuhiro Ogawa, Yuma Nagata, Saiji Nishida, Taisuke Mori, Takashi Nishikawa 本人探訪分：研究全般（論文執筆、研究デザイン立案、データ収集、データ解析）
〈国内会議〉				
1　重度認知症者の認知機能検査に関する研究(第2報)-本版SMMSE, SCIRSの信頼性に関する検討-	―	平成24年6月	第27回日本老年精神医学会（於大宮ソニックシティ）	現在あるMMSE, HDS-Rなどの認知機能検査は重度認知症にとって「床効果を示す」「集中力が続かない」などの問題点が指摘されており，残存している認知機能を評価することが難しい．そこで，海外で重度認知症向けに開発されたSevere Mini Mental State Examination (SMMSE), Severe Cognitive Impairment Rating Scale (SCIRS)の臨床的有用性を示すことを目的に検査―再検査信頼性と評価者間信頼性を検討した．その結果，SMMSEとSCIRSは既存の検査のMMSE, HDS-Rと比較して，重度認知症者の残存する認知機能をより詳細に評価でき，信頼性・妥当性にたる検査であることが示唆された． 共同発表者：田中寛之，植松正保，福原啓太，大西久男，西川隆 本人担当部分：検査実施を担当
2　統合失調症者における語用論的能力と社会常識理解の関連	―	平成25年4月	第8回日本統合失調症学会（於浦河町総合文化会館）	地域に住む慢性期の統合失調症患者28人に対して比喩・皮肉文テスト（metaphor and sarcasm scenario test; MSST），MMSE，社会常識テストを実施した．比喩理解能力はMMSE得点と有意な相関関係を示し，皮肉誤答回避得点（皮肉を文字通りにとらえてしまう傾向）は社会常識テストにおける社会常識総点と有意に相関していた．比喩・皮肉のような語用論的言語理解能力は，全般的知能，または他者の正常または異常の行動を理解するような高度な社会的能力と関連があることが示唆された． 共同発表者：福原啓太，芳賀大輔，西尾五郎，小川泰弘，内藤泰男，西川智子，大西久男，田中宏明，田中寛之，西川隆「他3名」 本人担当部分：研究全般（研究計画，執筆，データ収集・分析）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3　統合失調症者における語用論理解障害の一側面―一症例にみられた特徴的な思考様式―	―	平成25年6月	第47回日本作業療法学会（於大阪国際会議場）	日常生活で，多数の声主から命令的な幻聴に悩まされる地域に住む慢性期の統合失調症患者1人についての症例報告である．本患者は悪意ある幻聴からの命令に対しても，「自分の為を思って言ってくれている」と解釈していた．3人からの声主（幻聴）に敬意を持っている本患者は，相反する声主からの要求に耳を傾け，行動停止に陥るといった著しい行動制限に陥っていた．皮肉文テストでは成績低下を認めた．このことから悪意ある発言に対して，他者の悪意を「悪意」と捉えることへの困難さが伺われた． 共同発表者：福原啓太，小川泰弘，芳賀大輔，田中寛之，西川隆 本人担当部分：研究全般（研究計画，執筆，データ収集・分析）
4　精神科デイケア利用者への図書館利用の斡旋～社会生活の広がりに向けて～	―	平成25年11月	第21回日本精神障害者リハビリテーション学会沖縄大会（於沖縄コンベンションセンター）	精神科リハビリテーションのうち，社会参加の一環として，デイケア利用患者を地域の図書館へ引率するプログラムとその前後に実施したアンケート調査について報告した．精神科患者は，地域の図書館に興味はありつつも，多くの患者は利用していなかった．実際に図書館へ引率し，図書館の利用方法を患者とともに経験するなかで，参加した患者らは地域の行き場所として図書館の利用を始めた．精神疾患患者を地域の社会資源に結び付けるには，支援者が共に経験することで不安や抵抗感を消失させることが有効であると考えられる． 共同発表者：福原啓太，小川泰弘，西川隆 本人担当部分：研究全般（研究計画，介入，執筆，データ収集・分析）
5　プログラム「図書館ツアー」により生活の認識や行動に変化が見られた一症例	―	平成26年3月	第9回日本統合失調症学会（於京都テルサ）	精神科デイケア利用患者である統合失調症患者1人についての事例報告である．以前より，生活するグループホームの世話人から図書館の利用を促されていたが，一度も行くことのなかった患者を図書館へ引率した．そこで，本患者は趣味である音楽関連のCDや本を借りることができると知り，毎週末に図書館を利用するようになった．支援者と共に図書館を利用することで初めて本患者は図書館の利用価値を知ることができた．言葉による促しのみではなく，実際の体験があったからこそ，その人が利用価値を見出せ日常生活に汎化したものと考えられる． 共同発表者：福原啓太，小川泰弘，田中寛之，永田優馬，多和田卓也，石井幾子，園田むつみ，西川隆 本人担当部分：研究全般（研究計画，介入，執筆，データ収集・分析）
6　デイケア喫茶での役割を持つことで日常的な行動に変化が見られた，後期高齢の統合失調症患者の一症例	―	平成26年11月	第22回日本精神障害者リハビリテーション学会いわて大会（於いわて県民情報交流センターアイーナ）	認知症を伴わない高齢の精神疾患患者は，自宅生活科デイケアなどの施設に通所することが多く，このような患者は今後増加すると予測される．そこで，働きたいという希望を持ち，またそれが現実検討できていない状態として評価される後期高齢の地域在住の統合失調症患者一事例に対し，デイケアでの喫茶活動のマスターという役割を仕事実技プログラムの一環として提供したと．その結果，精神症状（意欲向上，自閉の消失，情動表出の改善），活動面（活動量の増加），社会的交流面（会話量の増加）に変化が認められた． 共同発表者：福原啓太，小川泰弘，西川隆 本人担当部分：研究全般（研究計画，介入，執筆，データ収集・分析）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7　統合失調症者のセルフエフィカシーに関する文献レビュー	―	平成26年11月	第29回大阪府作業療法学会（於大阪保健医療大学）	統合失調症とセルフエフィカシー（自己効力感）に関する文献を国内外問わず，レビューし，これまでの研究動向を調査した．結果は，海外の文献数のほうが多く，海外は比較対照研究・介入研究の評価として使用されることが多かった．国内では介入研究・ケーススタディが主に多かった．セルフエフィカシー研究の文献レビューにより，今後は，社会参加に向けた自己効力感の尺度に注目した研究やその尺度開発が必要であることがわかった． 共同発表者：小川泰弘，梅田錬，長池将太，福原啓太 本人担当部分：英語文献のレビューとそのまとめ作業
8　退院後の地域包括的支援が成功した要因の検討～長期入院後の高齢統合失調症患者一事例を通して～	―	平成27年3月	第10回日本統合失調症学会（於都市センターホテル）	長期入院を経た，高齢の統合失調症患者一事例が地域包括的支援により社会生活が安定した要因について検討した事例報告である．対象者は，退院後夫と二人暮らしになったが，外来通院に加え，デイケアと訪問看護によるチームアプローチにより，精神症状の安定，活動量の増加，対人交流の増加，QOLの向上が認められた．地域で生活することをチームで支えることで，精神症状が活発な患者であっても十分に地域生活できるケースが確認された． 共同発表者：福原啓太，藤林幸代，山西亜弥，前川公祐，小川泰弘，西川隆 本人担当部分：研究全般（研究計画，介入，執筆，データ収集・分析）
9　統合失調症を発症したジャズドラマーが発症前の自分を取り戻すまでの道のり	―	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（於神戸ポートピアホテル）	20年もの間，無為自閉で自宅生活を送っていた，元プロのジャズドラマーにおける事例報告である．対象者は本人が希望したデイケアでのバンド活動（作業療法）を通して，精神症状の安定，活動量の増加，対人交流の増加，QOLの向上が認められた．対象者のニーズを引き出すことで，本人が希望としたバンド活動が目的にも手段にもなり，社会生活が改善した．本人は，「昔の自分に戻れた」「意欲が出てきた」と発言し，リカバリーが達成された． 共同発表者：福原啓太，大尾充剛，森葉子，小川泰弘，西川隆 本人担当部分：研究全般（研究計画，介入，執筆，データ収集・分析）
10　人と人をつなぐことを目的としたプログラムの有効性―同性集団活動による対人関係の変化―	―	平成27年10月	第20回日本デイケア学会（於大阪府立国際会議場）	対人交流を活性化し，上手な人付き合い，仲間作りを目的にした介入についての実践報告である．デイケアプログラムの治療的効果の一つに，作業を共にすることによる「友人作り」が挙げられる．また同質グループはメンバー相互の共感が得られやすく集団としての凝集性も高くなりやすいといわれている．今回デイケアで実施した，同性（特に女性）同士のみで構成されたプログラムは，日常の男女混合のプログラムにはない凝集性が生まれやすくなることが確認された． 共同発表者：山西亜弥，山﨑勢津子,和田卓也，福原啓太 本人担当部分：研究計画指導，執筆指導，発表指導，データ収集，データ分析指導

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11　統合失調症者の就労に関する自己効力感尺度「Work - Related Self - Efficacy Scale」の作成	―	平成27年11月	第30回大阪府作業療法学会（於大阪国際交流センター）	就労に関する自己効力感尺度（Work - Related Self - Efficacy Scale; WSES）は海外で作成された評価尺度である．しかし，このような就労における自己効力感に関する評価尺度は本邦では見当たらない．そこで，WSES作成者に連絡をとり，日本語版WSESを作成の許可を得た．日本語翻訳をしたWSESを精神疾患を有する患者28人に対し実施し，日本語の分かりにくい箇所を指摘してもらった．さらにそれを修正した．今後はバックトランスレーション研究に移行していく予定である． 共同発表者：梅田錬．小川泰弘．長池将太，福原啓太 本人担当部分：研究計画，データ収集，データ分析，執筆指導，発表指導
12　長期入院患者が街に出た！！～退院促進プログラムの取り組みより～	―	平成27年12月	第23回日本精神障害者リハビリテーション学会高知大会（於高知市文化プラザかるぽーと）	長期入院中で病棟からの外出を拒否する統合失調症患者に退院促進プログラムとして，外出プログラムを導入した．自己効力感の先行要因（成功体験，代理体験，言語的説得，生理的情緒的高揚）に基づき，介入した結果，対象者は1人で，または病棟の友人と外出し買い物をするようになった．依然退院には結びついていないものの，退院促進プログラムによって，病院外への外出回数が増加し，社会生活における行動範囲の拡大が認められた． 共同発表者：前川公祐，福原啓太 本人担当部分：研究計画指導，執筆指導，発表指導
13　統合失調症の軽症事例に対するデイケア治療のみによる変化-事例報告 -	―	平成28年3月	第11回日本統合失調症学会（於ベイシア文化ホール）	統合失調症と診断された20代の対象者が，効果を実感できなかった薬物療法を拒否したため，デイケア治療のみで対応したところ，デイケアプログラムによる問題解決能力向上訓練を通して，他者交流が増加し，慢性的に持続していた対人面の不安感が消失した．また安心感の獲得により不安感や病的体験の減少が認められた．このような薬物療法がうまく適合しないケースでもデイケアのような心理社会的治療により社会機能が改善することが確認された． 共同発表者：福原啓太，藤林幸代，山西亜弥，西川隆 本人担当部分：研究全般（研究計画，介入，執筆，データ収集・分析）
14　強迫性障害患者の不安に対するdistraction技能獲得のための支援―事例報告―	―	平成28年9月	第50回日本作業療法学会（於ロイトン札幌）	不安を根底に持つ神経性障害には，一般的に薬物療法や認知行動療法などが適用される．認知行動療法の中でも，行動を伴う注意の転換（distraction）は強迫観念や不安の抑制に効果がある．事例報告では，20代女性，強迫性障害の患者に対し，distractionを支援した．具体的には，不安が増大する場面に対して本人がしうる対処行動をリスト化した．不安場面で，そのリストを見ることにより落ち着いて不安への対処行動を実行していくよう支援した．その結果，対処行動の強化，不安の軽減，地域生活に対する自己効力感の向上，社会生活の改善が認められた． 共同発表者：福原啓太，田中宏明，西川隆 本人担当部分：研究全般（研究計画，介入，執筆，データ収集・分析）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
15　統合失調症における病識と神経認知機能の関連	―	平成28年9月	第50回日本作業療法学会（於ロイトン札幌）	病識の低下は統合失調症の主要な特徴のひとつであり，治療コンプライアンスや再入院率などの因子と関連が示されていることから，臨床的にも重要な指標である．また病識の低下は，神経認知機能障害と関連していることが報告されている．本研究では，「狭義の病識」，「障害認識」と神経認知機能の関連について調査した．その結果，「狭義の病識」の低下には認知機能障害が影響している可能性が示唆された．一方「障害認識」は神経認知機能に依存していない可能性が示唆された． 共同発表者：小川泰弘，福原啓太，梅田錬，西川隆 本人担当部分：研究計画への提言，考察部分への提言，発表方法への提言
16　精神疾患患者を対象とした，生体医工学技術を用いた客観的指標の検討	―	平成28年10月	第31回大阪府作業療法学会（於大阪国際交流センター）	2013年にDSM-5が公表された．統合失調症の診断基準では，DSM-Ⅳ-TRで“affective flattening”とあった記載が，この改定で，“diminished emotional expression”へと変更された．これは，必ずしも統合失調症患者が感情体験に障害があるのではなく，むしろ表出にのみ障害が生じる場合があることを示したものである．本研究では，その感情表出のうち声の抑揚（prosody）の客観的評価に注目している．具体的な評価方法は主観的バイアスを排除したもので，被験者の声をデジタル録音し，コンピュータ分析により客観的評価として非常に精度の高いものとなっている．本報告では，本研究の有用性と研究経過について報告した． 共同発表者：福原啓太，小川泰弘，森泰祐 本人担当部分：研究全般（研究計画，執筆，データ収集・分析）
17　就労関連自己効力感尺度 Work-related self-efficacy scale WSES 日本語版の信頼性・妥当性の検討	―	平成28年10月	第31回大阪府作業療法学会（於大阪国際交流センター）	指針疾患患者に対する評価では，客観的指標だけでなく，「患者自身がどのように感じているか」という主観的側面の評価が重要視されている．主観的側面における評価指標の一つとしてセルフエフィカシーがある．本研究では，諸外国で用いられている「仕事関連自己効力感尺度 Work-related self-efficacy scale（WSES）」の原著者に許可を得て，日本語版を作成し，その信頼性・妥当性を検討している．WSESは就労についての患者の主観的側面を評価できることから，治療計画立案のための指標としてだけではなく，介入の効果指標としても有効であると思われる． 共同発表者：小川泰弘，梅田錬，長池将太，福原啓太 本人担当部分：研究全般（研究計画，執筆援助，データ収集・データ分析）
18　就労意欲が表面化していない精神科デイケア患者に対する短期就労体験プログラムの効果	―	平成29年9月	第51回日本作業療法学会（於東京国際フォーラム）	精神障害者の就職件数はこの10年で増加の一途をたどっているが，就労意欲が表面化しづらく就労へのニーズが潜在化している患者に対しては十分な支援が行き届いていない．そこでわれわれは，そのような患者8名に対し意欲を引き出すことを目的に病院内での短期就労体験プログラムを実施した．その結果，就労の継続を希望した者，ハローワークに通いだした者が認められた．たとえ対象者の就労意欲が表面化していなくとも，潜在的にそれを有している可能性があることが示唆された． 共同発表者：小川泰弘，田口功，高結花，福原啓太，西川隆 本人担当部分：研究計画，執筆補助，結果の解釈への提言

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
19　精神科生体医工学的指標・生活研究会H29年度研究報告	―	平成29年12月	第32回大阪府作業療法学会（於大阪国際交流センター）	統合失調症の症状は陽性症状，陰性症状，認知機能障害が主に挙げられるが，バイオマーカーのような客観的かつ定量的に評価されることは稀である．本研究では，陰性症状のうち情動表出の減少をプロソディと会話量の観点からコンピュータをもちいて分析した．また陽性・陰性症状，日常生活活動も評価し，それらとの関連性を検討した．その結果，一部のプロソディと会話量は統合失調症患者において障害が確認され，会話量は陰性症状と日常生活活動と関連した．会話量は他者との関りにおいて重要であることが示唆される． 共同発表者：福原啓太，小川泰弘，森泰祐 本人担当部分：研究全般（研究計画，執筆，データ収集・分析）
20　統合失調症における会話量と精神症状，活動量との関連について	―	平成30年7月	第38回近畿作業療法学会（於大阪国際交流センター）	統合失調症の言語表出能力が注目されている。その中でも本研究は会話量に着目した。統合失調症患者の会話量と精神症状、行動評価に関して関連性を分析したところ、ポジティブな刺激に対する発話時間と陰性症状は有意な負の相関を示し、ニュートラルな刺激に対する発話時間においても陰性症状と有意な負の相関を示し、そして行動評価とも有意な負の相関を示した。ネガティブな刺激に対する発話時間は陰性症状と有意な負の相関を示し、また行動評価とも有意な負の相関を示した。一方で、インタビュー時の発話時間は陽性症状と正の相関を示した。統合失調症の発話量は課題設定や状況により、異なるタイプの精神症状や行動と関連することが明らかとなった。 福原啓太、大尾充剛、森泰祐、小川泰弘、西川隆 本人担当部分：研究全般（研究計画、執筆、データ収集・分析）
21　統合失調症の情動表出能力について～精神科生体医工学的指標・生活研究会H30年度研究報告～	―	平成30年12月	第33回大阪府作業療法学会（於藍野大学）	統合失調症の「情動表出の減少」が注目されている。平成30年度は統合失調症と健常者を対象として、情動表出について評価者の耳による判断を用いて評価した。評価方法はPutnam(2007)の方法を採用している。研究進捗について、本学会で結果と考察を交え発表した。 福原啓太、 小川泰弘、森泰祐 本人担当部分：研究全般（研究計画、執筆、データ収集・分析）
22　引換券を用いることで予測障害を減少させ、活動範囲の拡大に至った慢性期統合失調症の患者について一事例報告一	―	平成30年12月	日本精神障害者リハビリテーション学会　第26回東京大会（於早稲田大学国際会議場）	将来のことに対して予測することが困難となり、活動の範囲が狭小化していた慢性期病棟に入院している統合失調症患者に対し、将来の活動を示した紙（引換券）を用いて、プログラム活動へ誘導した結果、次の行動（活動）に対して予測が可能となり、活動範囲の拡大に至った事例について報告した。 森泰祐、李真吾、稲富宏之、福原啓太、日垣一男 本人担当部分：執筆補助、介入補助、対象者評価

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
23　病院内売店実習と尺度を用いた振り返りにより就労への自己効力感が向上・適正化した事例について就労関連自己効力感尺度を用いて	―	令和元年9月	第53回日本作業療法学会（於福岡国際会議場）	我々の研究グループが海外から輸入し、日本語版について作成した就労関連自己効力感尺度を持ちて、就労支援を実施した。対象者には売店実習（店員補助）を活動として提供し、その振り返りを就労関連事故効力感尺度を用いて実施した結果、対象者は、自身の弱点を振り返ることがでい、支援者に指摘されるのではなく、能動的に自身の弱点を克服するための行動をとることができた事例について報告した。 福原啓太，小川泰弘，長池将太，梅田錬，田中寛之 本人担当部分：研究全般（研究計画、執筆、データ収集・分析）
24　複数の精神科デイケアを巡回式に利用する事の可能性についての一考察　－事例報告－	―	令和元年9月	日本デイケア学会第24回年次大会札幌大会（於北星学園大学）	問題行動を起こしてしまう精神科デイケアに通所する対象者に対し、複数の精神科デイケアが協同して、対象者を巡回式に支援した。その結果、対象者は適度な緊張感を保ちながら、問題行動を起こすことなく、各精神科デイケアで過ごすことができた。この画期的な方法について事例報告を行った。 森岡知久、谷上美奈子、福原啓太 本人担当部分：執筆補助、介入、データ整理補助
25　就労関連自己効力感Work-related self-efficacy scale日本語版（WSS-J）の作成　～信頼性・妥当性の検討～	―	令和元年9月	日本デイケア学会第24回年次大会札幌大会（於北星学園大学）	我々の研究グループは海外から就労関連自己効力感尺度を輸入し、日本語版を作製した。本研究では、本尺度の日本語版について、信頼性と妥当性を検討した結果、十分な信頼性と妥当性が示された。 梅田錬、長池将太、小川泰弘、福原啓太 本人担当部分：研究計画、執筆補助、データ収集、データ解析
26　精神科デイケアにおける多元主義の応用について	―	令和元年9月	日本デイケア学会第24回年次大会札幌大会（於北星学園大学）	精神医学において、現在、多元主義を用いた考え方が推奨されている。精神科デイケアにおいても多元主義の考え方は非常に有用である。その有用性について、事例を交えて報告した。 福原啓太、田中寛之、小川泰弘、西川隆 本人担当部分：執筆、事例介入
27　就労訓練によって自己効力感に変化の見られた一事例　～WSS-JとGSESの比較～	―	令和元年9月	日本デイケア学会第24回年次大会札幌大会（於北星学園大学）	精神科デイケアでの支援においては，「患者自身がどのように感じているか」という主観的側面，とりわけ自己効力感が重要な指標のひとつと考えられる．自己効力感には，具体的な課題や状況に依存せず，個人が日常生活の中で示す「一般性自己効力感」と，具体的な課題や領域に対する「課題特異的自己効力感」の2つの水準があることが知られている．今回の発表では，病院内就労体験と就労移行支援通所によって自己効力感に変化のみられた症例を報告し，就労に関連する課題特異的自己効力感尺度を臨床で使用する意義について述べることを目的として発表した． 小川泰弘、長池将太、福原啓太、梅田錬、西川隆 本人担当部分：執筆補助

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
28　精神障がい者の就労に関する自己効力感尺度 Work-Related Self-efficacy Scale日本語版作成の試み　～因子構造の検討～	―	令和元年9月	日本デイケア学会第24回年次大会札幌大会（於北星学園大学）	我々の研究グループは海外から就労関連自己効力感尺度を輸入し、日本語版を作製した。本研究では、本尺度の日本語版について、因子構造について検討した。119人の精神障害者を対象に就労関連自己効力感尺度を実施し、因子分析を行った。その結果、原版と同様に日本語版も4因子であることが確認された。 長池将太、福原啓太、梅田錬、小川泰弘 本人担当部分：研究計画、執筆補助、データ収集、データ解析
29　病院で働くリハビリテーション専門職の仕事不満足に関する要因	―	令和2年9月	第54回日本作業療法学会（於Web開催）	リハ専門職は増加傾向にある。一方、職場管理の観点から離職は問題の一つに挙げられる。本研究では病院で働くリハ専門職の仕事への不満足感に関連する要因を探索した。その結果、リハ専門職の仕事不満足感には人間関係の不満足が関連していた。 大浦智子、福原啓太、佐藤英人、加藤美樹、藤堂恵美子 本人担当部分：データ解析、執筆補助
30　アクチグラフを用いた生活リズムの可視化 ―就労に対する適切な行動へとつながった双極性障害の一症例―	―	令和2年9月	第54回日本作業療法学会（於Web開催）	精神科デイケア利用者において、睡眠の乱れや不規則な生活リズムはしばしば観察される。生活リズムの評価は、聞き取り調査や質問紙などの主観的なものが用いられるが、近年アクチグラフが注目されている。今回、アクチグラフを用いて生活リズムを評価し、その評価をかしかし共有した症例に生活リズムの改善の行動変容が認められたため、報告する。 小川泰弘、田中寛之、福原啓太、石丸大貴、西川隆 本人担当部分：内容の妥当性の担保、執筆補助、データ解釈補助
31　認知症患者の活動に対する取り組み方評価尺度の開発　Assessment Scale of Engagement to Activities と感情AIとの客観的妥当性	―	令和3年9月	第55回日本作業療法学会（於Web開催）	我々が開発した、認知症患者の集団作業療法活動に対する取り組み方を評価できるAssessment Scale of Engagement to Activities (ASEA) について、感情分析ソフトを用いてその妥当性を検証した。妥当性の検証には相関分析を用いた。その結果、ASEAの総合点と各領域の感情値には有意な相関が認められた。つまり、ASEAの感情領域や香料領域における妥当性を確認することができた。 田中寛之，永田優馬，石丸大貴，梅田錬，福原啓太 本人担当分：評価方法の検証、感情解析結果の解釈の指示
32　無為自閉が強い統合失調症患者が、就労プログラムを通して対人交流、活動量の増加に至った一事例	―	令和3年11月	日本デイケア学会第26回年次大会 （於Web開催） http://www.daycare.gr.jp/26th/outline.html	精神科デイケアを利用する無為・自閉、陰性症状が顕著な慢性期統合失調症患者に対し、自己効力感の観点から就労支援プログラムを提供した。本人が出来得る活動提供と積極的な声掛け、環境設定により就労意欲が高まり日常生活行動においても社会性が向上する般化が見られた。 麻野梨沙、福原啓太 本人担当部分：評価治療指示、評価治療支援、介入方針の指示、執筆補助

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
33　統合失調症の病識と心理防衛的傾向,神経認知機能病識は抑うつや心理的苦痛へとつながるか?	―	令和4年9月	第56回日本作業療法学会（於国立京都国際会館）	病識の低下は統合失調症の特徴の一つであり、服薬アドヒアランスや再入院率などの臨床的に重要な変数と関連が示されている。そこで、我々は、病識は心理防衛的傾向と関連があるのか、病識の高さは抑うつや心理的苦痛と関連があるのかについて調査した。その結果、未熟な防衛傾向をもつ統合失調症患者ほど、病識が高いことを示す一見矛盾した結果を得た。つまり、未熟な防衛をもつものは、自分はせいしんしっかんであるというラベルを用意に受け入れてしまう可能性が示唆された。また、その未熟な防衛の結果としての病識は、抑うつや心理的苦痛として当事者を苦しめてしまう可能性も示唆された。 小川泰弘，早川智美，浦川瑞生，福原啓太，西川隆 本人担当部分：内容の妥当性の担保、執筆補助、データ解釈補助
34　統合失調症患者における声による情動表出について コンピュータ解析による解明	―	令和5年11月	第57回日本作業療法学会（於沖縄コンベンションセンター）	統合失調症患者の情動表出についての研究で、観察者評価とコンピュータ解析を用いた。対象は統合失調症患者23名と健常者23名で、「幸せ」「怒り」「悲しみ」「無感情」の感情を伴った音読を録音し分析した。結果、患者群は全ての感情で声が小さく、ゆっくり話す傾向があり、特に「幸せ」「怒り」の感情では声の大きさが情動表出の判定に関連していた。また、「怒り」は早口で、「悲しみ」は声の高低の変化が重要であることが示唆された。これらの結果は、情動表出を豊かにするための治療戦略に役立つと考えられる。 福原啓太、中島大貴、田中寛之、小川泰弘、西川隆 本人担当部分：研究のデザイン、データ収集、データ解析、執筆
「シンポジウム」 1　臨床に従事する精神科OTが研究することの意義	―	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（於神戸ポートピアホテル）	臨床に従事しながらの研究は，労力と時間がかかり決して楽ではない．作業療法士が特に精神科領域において研究を続ける際，多くの困難と向き合う必要がある．発表者自身の臨床研究の経験を通し，臨床で芽生えた疑問を研究疑問に発展させ，臨床研究に結びつける過程を聴衆（臨床家）に対して教育的観点からわかりやすく説明している．エビデンスに基づいた評価・治療を患者に提供できるよう，全国学会の場で，精神科領域に従事する作業療法士に呼び掛けている．
2　「作業療法って何？」を伝える．考える．精神分野の作業療法士の役割	―	平成27年11月	第4回大阪府立大学作業療法大会（於大阪府立大学）	大阪府立大学学部生を対象に，精神分野における作業療法士の役割について教育的，学術的，臨床的観点から講演した．臨床現場に触れる機会が少ない学部生に精神障害をわかりやすく伝え，精神障害者の困難を社会機能の観点から解説し，演者が経験した症例を挙げ，臨床現場における作業療法士の役割，支援方法を提示した．その際，患者の生活と学生自身の生活を対比させ，患者が求める，あるいは社会的に求められる生活に向けたリハビリテーション・作業療法を提言した．

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和6年5月12　日

氏名　前田吉樹

研究分野	研究内容のキーワード
人間医工学　境界医学　脳科学	疼痛　恐怖条件付け　非侵襲脳計測　リハビリテーション 生理反応

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 1)実験形式の授業とレポートの提出・添削	平成22年4月 ～現在に至る	ハーベスト医療福祉専門学校　理学療法学科 「生理学実習」 1年次学生を対象に、血圧・スパイロメータ・筋電図・心電図・コキガス分析装置・感覚検査・バイオフィードバック・誘発電位などを用いた実験の指導と、実験レポートの作成法を指導。1グループ4-5名のグループに分かれ実験し、その内容をレポートとして提出させた。レポートについては個別に添削をおこない、授業中盤で実例を交えながらレポート作成時の注意点を再度説明した。
2)プレゼンテーションの導入、小テスト形式	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科　「内部障害学Ⅱ」 2年次学生を対象に、内臓疾患、内分泌・代謝疾患の講義を担当。該当する箇所について定期試験を作成・実施した。テスト対策として国家試験の問題を改変して小テストを作成・実施し、理解力向上の一助とした。
	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科　「理学療法総合演習」 国家試験対策として、「内分泌・代謝疾患」、「バイオメカニクス」「統計学・研究法」の分野に対し講義を実施。小テスト形式で添削をおこない回答力の向上を図った。
	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　教養科目「現実をみるG」 他学部の1年次・2年次学生を対象とした、健康科学関連の教養科目を担当。「痛みを知り痛みと向き合う」「女性が抱える痛みについて」「リハビリテーションの実際（脳卒中）」の3回を担当し、講義をおこなった。授業の終わりには理解確認のための小テストをこない、成績評価の一部とした。
	令和元年4月 ～現在に至る	奈良学園大学 保健医療学部 リハビリテーション学科　「痛み学概論」 1年次学生を対象に、痛みを通じて医療を学ぶことを目的とした講義を担当。「痛みを測る」「痛みの行動科学」「痛みの心理」「痛みの情動」「身近な痛み」を担当。スマートフォンを用いたオンライン回答システム「スマコク」を用いて知識確認を実施した。

事項	年月日	概　　要
	令和元年4月 ～現在に至る	甲南女子大学 看護リハビリテーション学部 理学療法学科 「理学療法行動科学」 3年次学生を対象とした講義において、行動科学の基礎や応用行動分析、バイオフィードバック、リハビリテーションへの応用について解説した。また、慢性痛の病態や認知行動療法についても講義を行い、「スマコク」を用いた小テストにて成績評価を行った。
	令和3年4月 ～現在に至る	奈良学園大学 保健医療学部 リハビリテーション学科 「疼痛リハビリテーション学」 3年次学生を対象に、痛みの病態を理解する上で重要な現象「恐怖条件付け」「オフセット鎮痛」「運動誘発性鎮痛」「ラバーハンドイリュージョン」について実技形式の講義をおこなった。
3)プレゼンテーションの導入、小テスト形式、実践・体験型学習・実技試験	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科　「筋骨格理学療法学Ⅰ」 2年次学生を対象に、「下肢の骨折（１）」、「脊椎疾患（１）」を担当。疾患の基礎知識の復習として講義を行った後、実技形式でストレッチ・筋力増強運動の手技や各種治療機器の使用方法について説明、学生どうしで模倣・練習させ、適宜個別指導によって指導した。その次の授業では小テストをおこない、理解力向上の一助とした。定期考査では筆記試験の他、実技試験も実施した。
	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科「運動機能障害診断学Ⅰ」 2年次学生を対象に、整形外科学的検査手技についての説明と、実技指導をおこなった。模擬患者を想定し、どのような検査が適当かを考えさせるグループワークもおこなった。定期考査として実技試験をおこなった。
4) 模擬患者を用いた実習、ビデオ撮影による振り返り、実践・体験型学習、グループワーク、レポートの活用、プレゼン形式	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科「理学療法計画論」 3年次学生を対象に、「中枢疾患に対する理学療法評価」の実習を担当。1グループ3名で模擬患者の理学療法評価をおこない、症例レポートを作成させる。レポートは個別で添削をおこなう。その後発表レジュメを作成させ、5～6名のグループで症例発表をさせる。最後に、模擬患者評価の模様をビデオ撮影したものを編集し、患者に対応する上での危険な場面、失礼に値する行動がなかったかを指摘、講義を行った。
5) 実験形式、マニュアルによる自己学習、グループワーク、レポートの活用、プレゼン形式	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科「運動学演習」 2年次学生を対象に、「筋力と関節角度や角速度の関係」に関する実習項目を担当した。バイオデックスを用いた筋力の測定実習に対してレポートを作成させた。実習は機器の使用方法を記載したマニュアルを読ませることで、学生自身で問題を解決させながら進めるよう実施した。レポートはグループにつき１つを提出するようにし、添削もグループ単位でおこなった。実習の終わりには、実験した内容についての発表会を行わせた。

事項	年月日	概　　要
	令和2年4月 ～現在に至る	奈良学園大学 保健医療学部 リハビリテーション学科 「運動学演習」 2年次学生を対象に、「3次元動作解析装置を用いた関節モーメントの推定」に関する実習項目を担当した。Optitrackを用いた運動学データの取得、フォースプレートを用いた力学データの取得、さらに両社から関節モーメントの算出までの過程を説明。学生には、得られた結果をグラフで図示・考察させた。レポートは各自1部ずつ提出させ、オンラインでの返信・添削をおこなった。
6)動物を用いた実験、グループワーク、レポートの活用、プレゼン形式	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科「人体の生理機能演習Ⅱ」（補助） 2年次学生を対象に、ウシガエルを用いた動物実験で、機器の使用法や結果の解釈の仕方などを学生に指導した。実験は1グループ５～６名でおこない、事前学習によって実験の結果予測したものを発表させ、入念に実験方法を学習させてから解剖を行わせた。
7)ゼミ活動	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科「基礎ゼミⅠ・Ⅱ」 1年次学生を対象としたゼミで、勉強の仕方やプレゼンテーションのまとめ方など、学生の基礎スキル向上を目的とした指導をおこなった。
	平成27年1月 ～平成28年3月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科「卒業研究」 配属された学生（3年・4年次学生）に対して、研究計画の立て方や、データを解釈し論文にまとめるまでの過程を指導。ゼミ内での論文抄読や予備実験、実験スケジュールの作成など行わせた。指導した卒論テーマは「運動誘発性鎮痛と身体感覚不一致感の関連についての研究」、「4肢位のマンスリービクス実施による月経随伴症状軽減効果の違いについての研究」であった。
	令和元年4月 ～現在に至る	奈良学園大学　保健医療学部 リハビリテーション学科　「ラーニングスキルズ」 1年次学生を対象としたゼミで、研究論文の読み方やまとめ方、プレゼンテーションの方法などを指導した上で、学生に文献レビューを行わせた。
２　作成した教科書，教材 パワーポイント資料、動画、 実験システム		パワーポイント資料、動画、心理生理・心理物理 実験システム、３次元動作解析マニュアル動画
３　教育上の能力に関する大学等の評価 なし		
４　実務の経験を有する者についての特記事項 「勉強会・研修会」 1）「高齢者の慢性疼痛管理」	平成29年12月	奈良学園大学公開講座 登美ヶ丘カレッジ 「最新の痛みのリハビリテーション　～痛みの病態に応じたケアを考える～」

事項	年月日	概　　要
2)　「恐怖条件付けの理論と臨床実践」	平成30年10月	平成30年度 厚生労働省 慢性疼痛診療体制構築モデル事業 理学療法士・作業療法士合同研修会
3)　「見て触れて学ぼう！『痛みの錯覚実験』」	令和6年3月17日	中学生・高校生のためのヒューマンサイエンス・エンジニアリングカフェ　in 登美ヶ丘
4)　「研究者リアル対談２：『ロボットと人間の未来　～協働、友情、結婚～』」	令和6年3月20日	学生の学生による学生のための教養講座 けいはんな科学コレクション
「臨床実習指導と臨床研究指導」	平成21年4月 ～平成25年1月	石川病院の理学療法士として、理学療法士養成校からの実習生を受け入れ、臨床実習教育に従事した。主に神戸大学、吉備国際大学、大阪リハビリテーション学院の実習生を指導した.また、研究面では院内理学療法士の研究・症例発表において指導をおこない、若手スタッフの研究発表の奨励に努めた。
５　その他		
ハーベスト医療福祉専門学校	平成22年4月 ～現在に至る	科目担当：生理学実習
甲南女子大学	平成27年1月 ～28年3月	科目担当：内部障害学Ⅱ、理学療法総合演習、現実をみるG、筋骨格理学療法学Ⅰ、運動機能障害診断学Ⅰ、理学療法計画論、運動学演習、人体の生理機能演習Ⅱ、基礎ゼミⅠ・Ⅱ、卒業研究
	令和元年4月 ～令和5年3月	科目担当：理学療法行動科学
奈良学園大学	平成31年4月 ～現在に至る	科目担当：痛み学概論、疼痛リハビリテーション学、運動学演習、基礎ゼミⅡ
国際電気通信基礎技術研究所	令和5年3月 ～現在に至る	ブレインロボットインタフェース研究室・連携研究員：歩行アシストロボットを用いた痛みの基礎研究に従事している。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　資格，免許		
理学療法士免許取得	平成16年5月7日	登録番号:第48466
修士（医科学）	平成21年3月23日	神戸大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程　第439号 論文題名「立位リーチ動作反復による学習の汎化について：三次元動作解析器を用いた検討」
博士（医学）	平成31年3月25日	大阪大学大学院医学系研究科外科系臨床医学専攻博士課程　第30571号 論文題名「Verbal instruction can induce extinction of fear of movement-related pain」
２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 石川病院　理学療法士	平成16年3月 ～平成25年1月	回復期リハビリテーション病棟、一般病棟、療養病棟、外来部門の患者に対して理学療法を実施。術後含めた骨関節疾患、および脳血疾患や神経難病含めた症例を一日につき6～10名ほど担当。また、院内委員会や部門内係の業務も実施。

事項	年月日	概　　要
日本損害保険協会　交通事故医療特定課題研究助成	平成23年 ～平成25年	研究題名：③新しい運動療法の開発：　脳機能画像を応用し、外傷後の「痛みの慢性化」に対して有効な運動療法を開発する 研究助成金：5,000千円 研究代表者：柴田政彦
奈良学園大学保健医療学部共同研究費	平成29年度	研究題名：痛みと運動知覚の恐怖条件付け研究 研究助成金：200千円 共同代表者：前田吉樹
日本学術振興会 科学研究費助成事業（若手研究）	令和2年度～ 現在に至る	研究題名：恐怖条件付け実験系を用いた慢性痛の病態と治療効果の客観的評価の試み 研究助成金：29,000千円 研究者代表者：前田吉樹
奈良学園大学保健医療学部共同研究費	令和4年度	研究題名：歩行運動のコントロール困難感が痛みの感じ方に与える影響について　-歩行アシストロボットを用いた検討- 研究助成金：500千円 共同研究者：前田吉樹，柴田政彦，辻下守弘，野田智之，瀧口述弘
４　その他 なし		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1）痛みのケア	共著	平成29年3月	ピラールプレス	本書は看護職が患者への最善の痛みケアを提供できるよう，第Ⅰ部で「痛みと人間」をテーマに「痛みと性」，「痛みの意味」，「痛みと倫理」「痛みと医療」について述べ，人間と痛みの関係を理解する。そして第Ⅱ部5章～８章で「痛み理論」を紹介し，痛みに関する理論をもとに痛みについての理解を深める・第Ⅲ部では「痛みと看護」をテーマに「高齢者の慢性的な痛みの治療と看護」，「検査に伴う痛みの看護」，「治療に伴う痛みの看護」「ターミナルケアと緩和医療」といった臨床の場面を想定した痛みのケアを学ぶ。そして，第Ⅳ部では「痛みケアにおける看護実践例」として，術後疼痛，癌性疼痛，急性・慢性疼痛，出産に関連した痛みの看護，小児に関連した痛みの看護といった主な疾患や状況における痛みケアの展開事例を紹介する。 B5判・全180頁 編者：守本とも子 共著者：守本とも子，池辺寧，辻下守弘，前田吉樹，篠原百合子，棚橋千弥子，田中登美，梶村郁子，立川茂樹，新谷奈苗，小池恵理子，澤田京子，横山美菜，室津史子，高垣麻衣 本人担当部分： 「第7章　痛みの心理と情動」 P48－P57を単著 痛みに深く関わる「心理」として不安・抑うつ，「情動」として社会的痛み，痛みの恐怖について解説。非侵襲的脳機能計測の発達により，目に見えない心を情動として観察し，その働きを推察することが少しずつ可能になってきている。情動から心理への因果関係や，それらのベースとなる共通の神経機構を理解することは，痛みの心理的・情動的側面を分析するうえでの一助となる。
2）高齢者のための疼痛ケア	共著	平成30年3月	三恵社	科学研究費助成事業「高齢者入居施設における疼痛管理教育プログラムの開発」の一環として、高齢者入居施設に勤務する看護職対象の疼痛管理教育テキストを作成した。「高齢者入居施設に勤務する看護職が受講したいと考えている教育内容」のアンケートに基づき、内容を構成した。 B5判・全33頁 編者：田中和奈 共著者：田中和奈，百瀬由美子，溝尾朗，前田吉樹，高橋晶 本人担当部分： 「第１章 高齢者の痛みとその特徴」 P2-P10を共著 痛みの定義や種類の説明、さらには高齢者の抱える疼痛の問題点について概説した。 共著者：田中和奈，百瀬由美子，高橋晶，前田吉樹 「第３章　理学療法的観点からの疼痛管理」 P25-27を単著 理学療法士の立場から、高齢者の痛みのマネジメントに重要な点と、効果的な運動療法の実施方法を中心に解説した。
（学術論文） 1）立位リーチ動作反復による学習の汎化について：三次元動作解析器を用いた検討 （修士論文）	共著	平成21年1月	神戸大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程	臨床上頻繁に用いられるファンクショナルリーチテストにおいて、リーチ動作練習の反復によって動作の汎化がおこるかどうかを三次元動作解析装置を用いて検証した。中枢におけるリーチ動作の運動プログラムは、手の前後方向の速度がピークに達したときに終了するとされているが、リーチ動作練習は手のピーク速度がより早期に出現するようにファンクショナルリーチ動作に対して汎化した。 （A4判 12ページ） 共著者：前田吉樹，安藤啓司 本人担当部分: 研究計画、データの計測・解析、論文の執筆

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2）中年女性に出現する肩こりと腰痛の重複症状の実態とその関連要因に関する研究	共著	平成27年3月	甲南女子大学紀要 看護学・リハビリテーション学編 vol.10 pp1-8	パソコン操作を主体とした作業に従事する中年女性従業員335 名を対象として，肩こりと腰痛の重複症状が出現する実態を明らかにするとともに，その身体的，心理的，社会的な要因との関連性について検討した。229名を対象とし、年齢，勤務年数，体格，運動態度，食行動，K6，情緒的サポートの程度，クッパーマン指数，そして肩こりと腰痛とした。結果、有訴者率は肩こりが73.8%，腰痛が53.3%であり，両者重複は47.6%であった。年齢，運動態度，食行動，K6，クッパーマン指数に有訴との有意な関連があった。肩こりと腰痛の両者重複者は、身体的、心理的に不健康な状態にあり、それらを改善させるアプローチの必要性が示唆された。 共著者：辻下守弘，永田昌美，芝寿実子，前田吉樹，川村博文，小貫睦巳 本人担当部分：データの計測・解析
3）低侵襲腰椎後方椎体間固定術後1年の能力障害を予測する術前および術後早期の心理的要因の検討 （査読付）	共著	平成29年9月	日本運動器疼痛学会誌 No.9(2)，2017 pp308-313	腰椎後方椎体間固定術は脊柱管狭窄症や腰椎すべり症に対して有効である一方、改善の乏しい症例も報告されている。そこで術前・術後の破局的思考・運動恐怖とが術後の能力障害に与える影響を検証した。結果、術前ではなく術後早期の運動恐怖が術後の長期的な能力障害に影響を及ぼすことが明らかとなった。 共著者：田村典子，西上智彦，前田吉樹，加賀威浩，和田治，田所浩 本人担当部分：論文の執筆、データの解析
4）局所皮下麻酔と圧刺激による筋の痛みの心理物理学 （査読付）	共著	平成30年2月	医療福祉情報行動科学研究 vol.5，2018 pp19-25	麻酔薬の皮下注により皮膚の痛みを除去し、筋のみに持続的な機械的痛み刺激を与える方法を用いて、被験者の主観的な痛みの強さと刺激圧と関係性を回帰モデルにあてはめた。健常成人13名を対象とし全員に「麻酔なし」と「麻酔あり」条件で、デジタル圧痛計による圧刺激を与え、痛みの強さをNRSで報告させた。結果、麻酔の有無にかかわらず線形モデルよりも非線形モデルの方が決定係数が高くなった。先行研究では熱刺激による皮膚の痛みの回帰モデルがべき関数で表されることが報告されているが、圧刺激による筋の痛みも同様に回帰できることを示している。 共著者：前田吉樹，大城宜哲，小山哲男，植松弘進，柴田政彦 本人担当部分：研究計画、データの計測・解析、論文執筆
5）足関節内反捻挫後のスポーツ動作開始時期に関連する因子の検討 -交絡因子を考慮した多変量解析による検討- （査読付）	共著	平成30年2月	医療福祉情報行動科学研究 vol.5，2018 pp11-17	復帰時期を予測しながらリハビリテーションを進めていくための評価指標として、片脚負荷テスト（OLL-Test）を考案した。本研究では、OLL-Testと圧痛部位ならびに年齢や性別・筋力等の行楽因子が復帰時期に与える影響を検証した。202名を対象とし、交絡因子を投入して多変量解析を行った結果，スポーツ動作開始時期を予測する変数としてOLL-Testの判定結果と圧痛部位が選択された。さらに交互作用項（OLL-Testの判定結果×圧痛部位）を多変量解析に投入した結果でも，OLL-Testの判定結果と圧痛部位，交互作用項が有意な変数として選択されたことから，OLL-Testの判定結果と圧痛部位は互いに影響し合ってスポーツ動作開始時期を調整することが分かった。 （共著者：野田優希，柿花 宏信，前田吉樹，古川裕之，松本 晋太朗，小松稔，内田智也，佃美智留，藤田健司） 本人担当部分：データの解析、論文の執筆

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6) Verbal instruction can induce extinction of fear of movement-related pain （教示は運動への痛み関連恐怖の消去を促す） （査読付） （博士論文）	共著	平成30年4月	The Journal of Pain, 19(9) 2018 pp1063-1073	「動かしたら痛い」という患者の恐怖（運動恐怖）が形成される過程と、その治療に繋がる心理過程を実験的に検証した基礎研究。運動時に痛み刺激が提示される過程を繰り返すことによって運動恐怖を形成し（恐怖条件付け）、その後の条件付けの消去の手続き（痛み刺激が伴わない運動の反復）によって運動恐怖が消失するかを検証した。さらに患者を安心させる声かけのように「動かしても痛み刺激がこない」という教示が条件付けの消去に影響するかを併せて検証した。結果、教示を与えて消去の手続きをおこなった群は恐怖を反映した皮膚電気活動が即座に消失し、教示を与えなかった群は皮膚電気活動の有意な減少がみられなかった。運動と痛みの恐怖が結びつくという現象の証明から、その消去、さらには教示が与える影響までと、自身の研究テーマである「運動と痛みの恐怖条件付け」の集大成として発表した。 （共著者：Yoshiki Maeda, Shigeyuki Kan, Yuji Fujino, Masahiko Shibata） 本人担当部分: 研究計画、データ測定・解析、論文の執筆
7) コロナ禍における地域理学療法・作業療法実習の取り組みと課題―学内実習の概要と学生アンケート調査による考察― (査読付)	共著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究 vol.9, 2022 pp31-38	訪問リハビリテーションまたは通所リハビリテーションに関する実習（以下、地域実習）を令和2年度・3年度において学内にて実習を行うこととなった。履修学生のアンケート調査より学内実習の課題と可能性について検討した。回答率は、令和2年度95.7%、令和3年度94.7%であった。アンケート調査の結果、両年度ともに類似した回答傾向であり、地域実習で扱ったテーマについては77.5 – 97.2%が理解できたと回答した。訪問・通所事業所のライブ中継については、94.4 – 100%で高い評価結果であった。一方、3年次以降の臨床実習に関する質問では、36.4 – 85.9%の学生が「不安」という回答であった。自由記載では、「地域リハビリテーションに関する関心や意識が向上した」という感想がある一方、「現場に行きたかった」「実技の時間が欲しい」などの意見もみられた。学内実習となった地域実習は、学生にとって充実した学修機会であったと思われる。 (共著者：滝本幸治，池田耕二，吉川義之，坪内善仁，笹野弘美，前田吉樹，中島大貴，辻下聡馬，大浦智子，山形力生) 本人担当部分: 研究計画、データ測定・解析
8) コロナ禍における理学・作業療法士養成課程の早期体験実習―学内実習後の学生アンケート調査による検証－ （査読付）	共著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究 vol.9, 2022 pp55-63	令和2年度および令和3年度，新型コロナウイルスの感染拡大をうけ早期体験実習を学内実習として実施した。学生アンケートの結果から，学内実習の意義や課題を明確にした。アンケートの結果，両年度とも実習内容については多くの学生が「よく理解できた」「まぁまぁ理解できた」と回答した反面，「2年次以降の学外実習に向けた不安」を訴える学生が多かった。自由記述では「教員が近くにいる分質問などがしやすかった」，「疑問をすぐに先生に質問することができた」という意見のほか，「自分が知らなかった分野にも興味が持てた」という意見もみられた。学内実習で医療施設での学びを完全に再現することは困難だが，早期体験実習の本来の目的を達成する上で，学内実習は必ずしも不利な点ばかりではない。 共著者：前田吉樹，中島大貴，伊藤健一，野中紘士，阿波邦彦，藤田信子，岩﨑智子，橋本雅至，山形力生，池田耕二 本人担当部分：研究計画、データの集計・解析、論文の執筆

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9）計測者に設置した慣性センサによる関節角度計測の妥当性と信頼性の検討 （査読付）	共著	令和5年3月31日	地域理学療法学 vol.3，2024 pp77-85	慣性計測ユニット（IMU）のセンサを計測者に設置して関節角度を計測する方法（IMUrater）の妥当性と信頼性について検証した．健常成人16名を対象とし，IMUraterと光学カメラを用いた運動分析システム（OMC）を利用した計測方法との妥当性と，IMUraterの信頼性を検証した．IMUraterとOMCを利用した方法との重相関係数（CMC），二乗平均平方根誤差（RMSE）はそれぞれ0.93，31.20度であった．IMUraterのセッション内のCMC，RMSE，級内相関係数（ICC）はそれぞれ0.95，19.40度，0.92，セッション間はそれぞれ0.85，35.74度，0.19であった．IMUraterの相対的な角度に高い妥当性が確認された．セッション内の信頼性は高かったが，セッション間では時系列波形データの類似性であるCMCのみが高い信頼性であった．絶対的な角度は誤差が大きいことも確認された 共著者：城野靖朋，野田優希，前田吉樹，山本秀美，池田耕二 本人担当部分：研究計画、データの集計・解析、論文の執筆
（その他） 「総説」 1）痛みの恐怖条件付け	共著	平成26年11月	Monthly Book Medical Rehabilitation No. 177 （11月号） pp25～30	痛みの慢性化には、「動かすと痛い」という一種の恐怖条件付けが重要な基礎として機能する。この考え方を支持する臨床研究、基礎研究を紹介しながら、恐怖を中心とした痛みの認知面の変化に基づき、痛みの慢性化の病態とその治療の考え方を概説している。 共著者：前田吉樹，柴田政彦 本人担当部分：全体の構成、本文執筆
2）慢性痛の問題点と今後の取り組み	共著	平成26年12月	理学療法学 No. 41(8) pp699～705	疫学、認知行動療法、条件付け、運動療法、脳機能画像研究、バイオフィードバックという幅広いテーマから、リハビリテーションにおける慢性痛の位置づけを詳細に解説した。 共著者：柴田政彦，山田恵子，前田吉樹，安達友紀，西上智彦，寒重之 本人担当部分：全体の構成、本文執筆
3）痛みのメカニズムの理解と痛みに対するリハビリテーションの実践	共著	平成29年4月	日本赤十字リハビリテーション協会誌 No.31 pp10-28	「慢性痛と恐怖条件付け」というタイトルで、恐怖条件付けの理論とその臨床応用、研究の方針までを解説した。 共著者：西上智彦，前田吉樹，壬生彰，田中 克宜，萬福允博，山下浩史，田村典子 本人担当部分：全体の構成、本文執筆
4）【疼痛に対する最新の理学療法-治療効果を最大化するための理論と実践】恐怖条件付けの理論と理学療法への応用	単著	令和2年10月	理学療法ジャーナル No.54(10) pp1143-49	恐怖-回避モデルでは,恐怖条件付けとその般化によって痛みが慢性化すると考えられている。恐怖の評価で重要なことは,患者の破局的な考えを聴取し,恐怖の対象を明確化することである。慢性痛に対する「段階的曝露療法」では,課題の段階付けが重要となる。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5）慢性痛の認知行動療法:―入院環境での取り組み―	共著	令和3年11月	リハビリテーション医学 No.58(11) pp1264-69	痛みのために，所見に比べて生活の質や活動性の低下が著しい慢性痛患者には，認知行動療法などの心理的アプローチを導入することで，痛みに対する捉え方を修正し，運動や活動に対する恐怖が軽減する。入院プログラムでは多職種が関与し，各々が認知行動療法的アプローチを行うことで，患者が自分の症状との向き合い方を知り，運動習慣を身につけることを支援している．当院の入院環境における認知行動療法の実際を紹介する． 共著者：高橋 紀代，前田 吉樹，中原 理，那須 貴之，柴田 政彦 本人担当部分：本文執筆
6）慢性痛患者の初診評価 ： 痛みの背景にある要因を探る多面的アプローチ	共著	令和5年12月1日	慢性疼痛 No.42(1) pp117-122	慢性痛患者への適切な治療やケアには、身体的、精神的、社会的要因だけでなく、生活に影響を及ぼす障害や不安などの背景を含めた多面的な評価が必要である。集学的診療を早い段階から行うことは、信頼関係の構築や治療効果の向上に寄与する。篤友会千里山病院集学的痛みセンターでは、初診時に多職種による多面的な評価を行い、患者への理解を深めながら痛みの背後にある要因を共に探求する。 共著者： 高橋 紀代，前田 吉樹，中原 理，柴田 政彦 本人担当部分：本文執筆
7）慢性疼痛難治例とは何か? －慢性疼痛医療への私の提言 －	共著	令和5年12月1日	慢性疼痛 No.42(1) pp6-10	慢性疼痛難治例は、様々な治療に抵抗し、生活の質が影響を受ける状態を指す。治療に反応せず、生活の質が低下する場合、運動療法や認知行動療法が一般的に推奨されるが、これらは治療意欲が必要であり、慢性疼痛難治例では治療意欲が不十分な場合が多い。このような場合、どのような医療的対応が適切かは課題となる。 共著者： 柴田 政彦，高橋 紀代，前田 吉樹 本人担当部分：本文執筆
「学会発表」				
＜国際学会＞				
1）Fear Conditioning and Extinction Associating Voluntary Movement with Painful Stimulus: Experimental Verification of Fear Avoidance Model Using Skin Potential Response （運動と痛みの恐怖条件づけ：恐怖回避モデルの実験的検証）	―	平成26年10月	15th World Congress of International Assicuation for the Study of Pain (Buenos Aires) 2014.10.6-11	運動と痛みの恐怖が結びつくという現象の証明から、その消去、さらには教示が与える影響までを検証した。 共同発表者：Yoshiki Maeda, Shigeyuki Kan, Yoshitetsu Oshiro, Satoru Miyauchi, Aya Nakae, Ben Seymour, Hideki Kashioka, Masahiko Shibata 本人担当部分: 研究計画、研究総括 ポスター発表
2）Psychologigal characteristics related to the acquisition and extention of pain-related fear (痛みに関連する恐怖の獲得と消去に影響する心理的特性の検証)	―	平成28年9月	16th World congress on pain (Yokohama) 2016.9.26-30	運動への恐怖条件づけの獲得、消去における個人差に着目し、各個人の心理特性との関連性を探索的に検討した。消去期におけるSPR振幅値と各心理指標との相関がみられた。本研究の結果は、疼痛の慢性化に性格傾向等の心理要因が関与する可能性を示唆している。 共同発表者：Takatoshi Masaki, Yoshiki Maeda, Shigeyuki Kan, Masahiko Shibata 本人担当部分: 研究計画、データ測定 ポスター発表
＜国内学会＞				

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
1）教示は運動に伴う痛みの恐怖条件付けの消去に強く影響する	―	平成26年6月	第36回日本疼痛学会（大阪府）	患者を安心させる教示の有効性が条件付けの消去に基づくものかを検証するために、「運動に結びついた痛みの恐怖」の消去に「動かしても刺激がこない」という教示が影響するかを実験的に検証した。結果、教示と経験による消去をおこなった群は恐怖を反映した皮膚電気活動が即座に消失し、経験だけで消去をおこなった群は最後まで皮膚電気活動の有意な減少がみられなかった。 共同発表者：前田吉樹，寒重之，大城宜哲，宮内哲，中江文，Ben Seymour，柏岡秀紀，柴田政彦 本人担当部分: 研究計画、データ測定・解析、抄録執筆 （口述発表）
2）運動への恐怖条件付けに関連する心理尺度	―	平成27年11月	第8回 日本運動器疼痛学会（愛知県）	運動への恐怖条件づけの獲得、消去における個人差に着目し、各個人の心理特性との関連性を探索的に検討した。消去期におけるSPR振幅値と各心理指標との相関がみられた。本研究の結果は、疼痛の慢性化に性格傾向等の心理要因が関与する可能性を示唆している。 共同発表者：柾木隆寿,前田吉樹，寒重之，柴田政彦 本人担当部分: 研究計画、データ測定 （口述発表）
3）肩甲下筋テスト時の肩関節周囲筋の筋活動の検討	―	平成28年11月	第56回 近畿理学療法学術大会（和歌山県）	肩甲下筋のテストであるLift off testとしてBelly press testとBelly off signが挙げられる。これら二つのテストの肩関節周囲筋の筋活動の違いを筋電図を用いて明らかにすることを目的とした。結果、BPはBOに比べ大胸筋、大円筋の働きが抑えられ肩甲下筋、三角筋の働きが大きくなることがわかった。 共同発表者：吉村拓実、春名匡史、立花 孝、土山耕南、西川 仁史、前田吉樹 本人担当部分：研究計画、準備 （口述発表）
4）運動恐怖，破局的思考に着目し肩関節痛が寛解した1症例	―	平成30年9月	第23回 日本ペインリハビリテーション学会学術大会（福岡県）	肩関節痛に関連する運動恐怖や破局的思考に着目することで症状が寛解した症例を経験した。痛みの持続因子となる運動恐怖、破局的思考の改善により、徒手的な介入が無くとも症状の寛解に繋がった。 共同発表者：永見達朗、 吉野敦雄、前田吉樹 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （ポスター発表）
5）股関節痛の寛解によって生物心理社会モデルへの理解を得られた1症例	―	平成30年12月	第11回 日本運動器疼痛学会（滋賀県）	本症例は重荷に感じていた仕事の終了に伴い股関節の痛みが寛解したため、仕事への不安が痛みに関係しているという気づきが得られた。急性の股関節痛を有する患者において、急に痛みが寛解したり、いつの間にか症状が改善している場合には、認知や環境の変化が影響している可能性がある。 共同発表者：永見達朗、吉野敦雄、前田吉樹 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （ポスター発表）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6）入院集学的リハビリテーションにおける恐怖―回避思考への教育介入　―運動恐怖への段階的暴露により機能が改善した慢性腰痛患者の1例―	―	令和1年9月	第24回 日本ペインリハビリテーション学会学術大会 （名古屋市）	入院集学的リハビリテーションに、恐怖―回避思考に対する教育介入を導入した症例を報告した。腰痛患者に対し、破局的思考を整理し、腰曲げや座位など各動作への恐怖心を点数化、紙面上に配置してその階層性を示した。「痛みが出現する恐れ」の確信度を確認しながら段階的に暴露した結果、柔軟性や自己効力感、QOLの改善がみられ、臥位時間が大幅に短縮した。特定の動作に強い恐怖を示す症例には、その思考を整理・明確化して暴露することで、入院リハの効果を高めることが可能と考える。 共同発表者：前田吉樹　佐々木樹　島田隆志　中原理 高橋紀代　榎本聖香　柴田政彦 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （口述発表）
7）疼痛教育、痛み日記を活用して股関節痛が緩解した一症例	―	令和1年9月	第24回 日本ペインリハビリテーション学会学術大会 （名古屋市）	変形性股関節症、進行期の女性に対し、痛みに対する破局的思考を整理、痛みに応じて活動量を上げるよう指導した。Dual taskによって痛みからの注意を逸らしつつ段階的に介入していくことで、夜間痛も消失した。また他人の過剰な気遣いに対する嫌悪感や、頼まれたことを何でも受け入れてしまう自分への気づきを促した。３か月後、１時間以上の長距離歩行が可能となった。進行期の股関節痛であっても、生物心理社会モデルに基づくアプローチによって痛みの緩解、ＱＯＬの向上が期待できることが示唆された。 共同発表者：永見達朗、吉野敦雄、前田吉樹 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （口述発表）
8）運動恐怖、破局的思考に着目し股関節痛が緩解した一症例	―	令和1年11月	第121回 日本運動器疼痛学会 （東京都）	60代女性、左変形性股関節症の患者に対し、外来リハビリ開始。他院で「歩くのは無理しないように」という説明を受けており、坂道に対する恐怖と「趣味の旅行に行けなくなるのでは」、「股関節術後に悪くなった近所の人のようになるのでは」という不安があった。困難な動作を痛みへの注意を逸らしつつ段階的に実施、痛みなくできることを経験させた。その後本人自身による行動の変容がみられ、リハビリ9回目で各動作をほぼ痛みなく行えるようになった。生物・心理・社会モデルの理解が得らて以降、症状の改善と破局的思考の減少に至った。 共同発表者：永見達朗、吉野敦雄、前田吉樹 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （ポスター発表）
9）集学的治療入院プログラムに対する3週間の漸増的サイクリング運動における痛みと運動の生理的変化	―	令和2年11月	第13回 日本運動器疼痛学会 （オンライン）	痛みの破局化や恐怖，回避などにより，活動性低下・不活動を引き起こしていると，目標とする運動強度まで到達できず，計画通りに治療が進まないことがある。この問題に焦点を当て，慢性痛患者を対象に痛みと運動負荷，自覚的運動強度，心拍数との関係を調べた。実施前に比べ終了時に痛み度が減少し，運動による鎮痛緩和がみられた。しかし運動中の生理的変化は健常者と相違しており，自覚的運動強度が高い傾向が認あられた。今後，症例を重ね慢性痛の病態解明や治療に生かしたい。 中原理、高橋紀代、西下祥子、丸山伸廣、前田吉樹、柴田政彦 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （口述発表）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10）就労希望のある慢性痛患者の就労状況について	―	令和2年11月	第13回 日本運動器疼痛学会（オンライン）	集学的痛みセンターを受診した初診患者のうち、就労希望のあった患者を対象に、職場復帰群と未復帰群の特徴を検討した。職場復帰群では、9回の外来診療や入院診療を利用することで、職場へ復帰していることが確認できた。 浦澤純一、高橋紀代、中原理、前田吉樹、柴田政彦 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （ポスター発表）
11）13年ぶりに就労を再開できた緊張型頭痛の1症例 ―長期的な外来リハビリテーションを通じて―	―	令和3年3月	第50回 日本慢性疼痛学会（オンライン）	痛みの訴えが多い患者に対して自主練習の記録を指導したことが、痛くても動けることを実感するきっかけとなった。自主練習のペーシングに難渋することもあったが、記録を行うことでペーシングの調整が可能となったと考えられた。長期的なリハビリを通じて活動量も向上していき、就労にも繋がったと推察された。 浦澤純一、前田吉樹、中原理、高橋紀代、榎本聖香、柴田政彦 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （オンデマンド発表）
12）痛みによる過度な安静により独居困難となり、入院リハビリテーション後に独居を再開した後期高齢者の一例	―	令和3年3月	第50回 日本慢性疼痛学会（オンライン）	痛みによる過度な安静が定着し、独居生活が困難になった症例を担当した。痛みがあっても動けることを自覚してもらうとともに痛みの対処法を指導した。その結果、退院後に独居と余暇活動を再開できた。集中的な入院リハビリテーションにより、自分に合った運動負荷、痛みの対処法を指導することで活動量が向上し、退院後のADL改善に繋がったと考える。 菱田稜介、浦澤純一、中原理、高橋紀代、榎本聖香、前田吉樹、柴田政彦 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （オンデマンド発表）
13）慢性痛患者に対する高強度負荷の有酸素運動における運動前後の痛みの緩和について	―	令和3年6月	第58回 日本リハビリテーション医学会 （国立京都国際会館）	慢性痛患者を対象に痛みと運動負荷，自覚的運動強度，心拍数との関係を調べた。患者は概ね目標心拍数に到達したが、痛みへの効果は個人差が大きかった。 共同発表者：中原理，高橋紀代，西下祥子，丸山伸廣，<u>前田 吉樹</u>，柴田政彦 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （オンデマンド発表）
14）入院集学的リハビリテーション後に職場復帰できた線維筋痛症の一症例	―	令和3年11月	第14回 日本運動器疼痛学会	院集学的リハビリテーション後に趣味を生かした仕事へ就職できた症例について報告する。患者は仕事を「したいことではなかった」「凄いストレス」と訴え、痛みで欠勤が多く入院前に退職したが、復職は考えていなかった。趣味に対しても「嫌いになる」と訴えていた。入院中は集中的に自転車エルゴメーターや屋外歩行に取り組む中で、次第に痛くても動けることを実感していき、自ら楽器を用意して演奏を楽しむこともできた。「趣味の調理を生かした仕事がしたい」と考えるようになり、退院1ヵ月後に調理の仕事へ応募し2ヵ月後に就職した。痛くても動けることを実感していき、趣味活動へ目を向けられるようにもなり、自信を取り戻していった。その結果、やりがいのある仕事への就職目標を持つことができ、就分へ至った。 共同発表者：浦澤純一，中原理，小泉優喜，津田清香，高橋紀代，榎本聖香，<u>前田吉樹</u>，柴田政彦 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （オンデマンド発表）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
15）医療者による教育的な関りによってADL・疼痛の著明な改善をもたらした一症例	―	令和4年11月	第15回 日本運動器疼痛学会	痛みの原因が特定できない場合、慢性的な痛みはドクターショッピングや対症療法の繰り返しになりがちである。医療者と患者の間で「痛みを軽減するのではなく、以前の生活に戻る」という考え方を共有するのは難しい。痛みは危険を回避し治癒するための重要なもので、危険な状態でも痛みがなかったり、危険でない状態で強い痛みがあることもある。患者に正しい知識を伝えることが運動療法や認知行動療法に有効。30歳代女性の症例では、痛みへの肯定的な受け入れが運動恐怖の減少と痛みの軽減につながった。 共同発表者：浦澤純一，中原理，前田吉樹，高橋紀代，柴田政彦 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （ポスター発表）
16）Virtual Reality はゲーム中断中および終了後でも痛みへの反応を変化させるか？	―	令和4年12月	第12回 保健医療学会学術集会	近年、医療でのVR技術の利用が進んでいる。痛みの軽減効果が注目されているが、一時的な気逸らし効果だけでなく、長期的な効果も検証される必要がある。健康な成人を対象に、VRの効果を痛みの閾値と自律神経反応で検証した結果、ゴーグル装着中は痛みの閾値が変化せず、ゴーグル除去後に有意な上昇が見られた。VRの鎮痛効果は気逸らしの影響が大きいことが示唆された。 共同発表者：増谷結菜，前田吉樹 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （ポスター発表）
17）目標設定が曖昧であったが入院リハ中に活動量が向上し、退院後に目標を達成できた後期高齢者の1例	―	令和5年3月	第52回日本慢性疼痛学会	本研究は、後期高齢者のリハビリテーションに関するケーススタディである。入院時には目標が曖昧であったが、リハビリテーション中の活動量の増加により、退院後に目標を達成することができた。目標設定の明確さよりも、積極的な活動とリハビリテーションチームとのコミュニケーションが機能向上に貢献する可能性が示されている。 共同発表者： 菱田稜介，浦澤純一,中原理，島田隆志,高橋紀代，前田吉樹，柴田政彦 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （ポスター発表）
18）治療に難渋することが予想されたにもかかわらず早期に就労できた慢性腰背部痛の一例	―	令和5年3月	第52回日本慢性疼痛学会	本研究では、慢性腰痛患者が集学的診療の過程で治療が難渋すると予測されていたが、早期就労に至った特異なケースの報告である。 共同発表者： 北純一，浦澤純一,中原理，津田清香，高橋紀代，前田吉樹，柴田政彦 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （ポスター発表）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
19) 持続する腰下肢痛に対し、疼痛教育を中心とした理学療法が奏功した症例	—	令5年3月	第8回　日本精神・心理領域理学療法研究会学術大会	今回の研究では、腰下肢痛に対する疼痛教育を含む理学療法が有効であることを報告した。症例は変形性腰椎症を診断された30代の女性で、日常生活での痛みやストレスが影響していた。リハビリテーションの過程で、痛みの理解や心理的要因に焦点を当てたアプローチが取られた。結果、痛みの軽減や日常生活への復帰が見られた。慢性疼痛には身体的な要因だけでなく心理的な影響も大きいことが示唆された. 共同発表者:永見達朗，檜高育宏，前田吉樹 本人担当部分:抄録執筆 (口述発表)
20) 自転車エルゴメータ駆動におけるVR使用が生体に及ぼす影響	—	令和6年1月	日本物理療法合同学術大会2024	自転車エルゴメータ駆動時のVR利用が運動前後の息切れ感や下肢疲労感に与える影響を明らかにする。実験結果から、VRの使用有無では息切れ感や下肢疲労感に有意な差は見られなかった。しかし、VR使用時に没入感がある場合、下肢疲労感が増加する傾向が見られた。また、VR使用時にVR酔いがある場合、息切れ感が増強される傾向があった。これにより、VRを使用した運動を行う際には、VR酔いの有無を事前に確認することが必要といえる。 共同発表者： 久下凜人,安岐颯一郎,植田 泰成,竹下 愛音,前田吉樹,阿波邦彦 本人担当部分：抄録執筆、発表準備 （ポスター発表）
〈依頼原稿〉 1) 「プラセボ効果とはどのようなものですか？」	—	平成26年10月	Locomotive Pain Frontier vol. 3 (2) pp42～43	プラセボ効果は、医学研究、とりわけ試薬の研究において本来の治療効果とは異なる「取り去るべき」ものとして捉えられてきた。しかしながら、近年痛みの臨床においてはプラセボ効果も治療の一つとして取り入れようという流れがある。それらプラセボ効果に関する認識の変遷を、具体的な研究報告とともに解説した。 （2頁） （分担執筆者：前田吉樹,柴田政彦）
2) けいはんな発イノベーション「ロボティクス」歩行アシスト型ロボットと実証する新しい「痛み」の考え方	—	令和5年12月	けいはんなView vol.59, pp5	奈良学園大学の前田吉樹は、慢性痛への新しいアプローチを提案している。運動が治療に有効であることを示唆し、歩行アシスト型ロボットを用いて痛みと運動の関連性を研究している。この研究では、ロボットが患者の運動や痛みの改善にどのように役立つかが明らかにされることが期待されている。 （1頁）
〈研究助成金〉 1) 奈良学園大学保健医療学部共同研究費		平成29年度	奈良学園大学	研究題名：痛みと運動知覚の恐怖条件付け研究 【平成29年度採択課題】 研究助成金：200千円 共同研究者：前田吉樹，辻下守弘，守本とも子
2) 科学研究費助成事業（若手研究）		令和2年度～現在に至る	日本学術振興会	研究題名：恐怖条件付け実験系を用いた慢性痛の病態と治療効果の客観的評価の試み 【令和2年度採択課題】 研究助成金：29,000千円 研究者代表者：前田吉樹
3) 奈良学園大学保健医療学部共同研究費		令和4年度	奈良学園大学	研究題名：歩行運動のコントロール困難感が痛みの感じ方に与える影響について　-歩行アシストロボットを用いた検討- 【令和4年度採択課題】 研究助成金：500千円 共同研究者：前田吉樹，柴田政彦，辻下守弘，野田智之，瀧口述弘

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　6年　3月　31日
氏名　吉川　義之　印

研究分野	研究内容のキーワード
リハビリテーション科学、応用健康科学、福祉工学	リハビリテーション医学、理学療法学、障害学、老年学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）ワークブック作成・活用による学習意欲の向上	令和1年度～令和4年度まで	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「運動学Ⅰ（総論）」にて実施。 運動学Ⅰ（総論）の講義は幅広く、教科書を読むだけでは学生へは伝わりにくい。そのため、教科書の中から比較的重要度の高い項目を抜き出し、ワークブックを作成した。そうすることで、学生の学習意欲意欲を高めることができた。
2）アクティブラーニング学習による自発性の向上	令和1年度～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「基礎ゼミⅡ・ラーニングスキルズ」にて実施。 基本的な学び方・調べ方の内容を教授したあとは、学生が自らで学び実践し、学生が発表する機会を多く与えた。また、将来学会発表など発信する練習も兼ねた授業を実施している。
3）反転授業による学習効率の向上	令和2年度～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「運動器障害評価学」にて実施。 「運動器障害評価学」では限られた時間内に徒手筋力検査法を覚える必要があるため、学生に対して教科書を確認の上、分からない箇所を授業中に質問させる用に実施した。また、チェックシートを記載させ、どの学生がどの程度理解しているのかを確認しながら実施した。
4）動画を利用した授業による学習意欲の向上	令和2年度～令和4年度	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「地域理学療法学演習」にて実施。 訪問・通所リハビリテーションを担当し、実際の臨床現場の動画を使用しながら授業を実施。その後、学生自身が障がいを持ったと仮定して自らの自宅で在宅生活をする体験をしてもらい、その内容をグループごとにディスカッションしてもらい代表者には全体で発表させた。
5）グループワークにより学生間理解の共有	令和2年度～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「日常生活活動演習」にて実施。 日常生活活動の教科書の写真や図の動きを解説しつつ、学生自身にも障害者の動作を体験させ、グループでレポートを作成させた。また、作成したレポートを発表し、学生同士でディスカッションを実施し、知識の共有を図る形式をとった。

６）学内実習による知識および興味・関心の向上	令和2年度～令和4年度	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「早期体験実習・地域理学療法実習（現見学実習Ⅰ～Ⅲ）」にて実施。 令和2年・3年度の早期体験実習・地域理学療法実習ではコロナ禍であったため、臨地実習ではなく学内実習となった。そのため、現場とのLive中継や現場で働く理学療法士を学内に招いたり、オンラインで繋ぐなどを通して可能な限り現場の雰囲気を学生に伝えられるよう配慮して実施した。学生からもLive中継に関する評価は非常に高かった。
７）最新知見の共有および文献抄読によるグループワークの実施による研究方法論の共有	令和2年度～令和4年度	奈良学園大学看護学研究科「在宅看護学特論Ⅰ」にて実施。 褥瘡予防・治療における最新の知見を紹介と失禁ケアやストーマ、スキンテアの最新論文（システマティックレビューなど）の抄読会を実施し、その結果を基にグループワークを実施した。
8）実際の患者を想定した理学療法プログラムの立案	令和3年度～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「物理療法学Ⅱ（各論）」にて実施。 前期で学修した物理療法の知識を基にペーパーペイシェントに対する物理療法を選択し、実際の臨床現場で実施するように理学療法士役と患者役を学生にしてもらい実施した。学生からは実際に実施することは思っていたよりも難しかったが、楽しかったと評価が高かった。
9）臨床実践方法の違いを他職種で共有することにより、多職種連携を強化する	令和3年度～令和4年度	奈良学園大学看護学研究科「在宅看護学特論Ⅲ（回復支援）」にて実施。 地域での在宅生活を回復支援する上での基盤となる地域リハビリテーションの理念、ケアに関わる者が果たすべき役割について理解を深めながら、多職種による知識・技術の違いを共有し多職種連携の強化を図った。また、今後現場におけるリーダーとして活躍できるような実践的能力の基礎を学修させた。
10）医療人としての心得とマネジメントについて、グループワーク・ディベートを実施し発言する力の向上	令和4年度～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「職場管理論」にて実施。 職場における労務管理やハラスメント、生涯学習などについてグループワークやディベートを実施し、今後医療人としてカンファレンスなどで自分の意見を発言する練習も兼ねて実施した。全学生に発言をする機会を与えることで普段あまり発言しない学生が授業に積極的に参加していた。
２　作成した教科書，教材 １）運動学ワークブック	令和1年度～令和4年度まで	基礎運動学（教科書）の範囲は幅広く、どの分野が重要なのかが非常に分かりにくいため、担当教員でそれぞれの単元をまとめたワークブックを作成し、その内容を中心に覚えられるように工夫した。 使用大学：奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科 共著者名：池田耕二、吉川義之、城野康朋、 本人担当分：姿勢、運動と動作分析①、運動と動作分析②、歩行と走行①、歩行と走行②

2）実習の手引	令和1年度～現在に至る	早期体験実習、地域実習用（現、見学実習Ⅰ～Ⅲ）の実習の手引を作成した。地域実習においては、学生が地域実習を円滑に行えるようにするため、経験項目シートを作成し、大学教員と臨床実習指導者が学生に実習してほしい項目に差が出ないようにする取り組みを行った。 使用大学：奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科
3）日常生活活動演習用課題シート作成	令和2年度～現在に至る	日常生活活動演習を学生が理解しやすくするため、各動作毎に項目分けされた課題シートを作成し、学生自身が課題シートに記入しながら学ぶ教材を作成した。これにより学生の自主性が得られ、学生同士でディスカッションする機会が増えた。 使用大学：奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科
4）実習経験シート作成	令和2年度～現在に至る	実習では実習地により経験できる項目に差が出現する可能性があるため、各学生が経験した項目を把握するために作成した。また、この実習経験シートは次の実習指導者へ申し送りできるため、実習指導者も経験項目と未経験項目を把握しやすくなる。 使用大学：奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科
5）地域理学療法実習用ワークシート作成	令和2年度～現在に至る	地域理学療法実習（現、見学実習Ⅲ）における学生が経験した項目などをまとめやすくするため、学ぶべき内容を単元ごとにまとめたワークシートを作成した。これを活用することにより学修の整理につながった。 使用大学：奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）大学設置・学校法人審議会の教員組織審査において、奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科講師として判定	平成30年4月	基礎ゼミⅡ、運動学Ⅰ(総論)、職場管理論、客観的臨床能力演習(理学療法)、理学療法卒業研究、運動器障害評価学、物理療法学Ⅰ(総論)、物理療法学Ⅱ(各論)、日常生活動作学演習、地域理学療法学演習、早期体験実習(理学療法)、地域理学療法実習、理学療法評価学実習、総合臨床実習Ⅰ(理学療法)、総合臨床実習Ⅱ(理学療法）の担当可と判定
2）学生による授業評価アンケート (奈良学園大学)	令和1年度～現在に至る	学生の授業評価アンケートは5段階において2.2～4.4点であった。評価の低い項目としては「この授業を理解するのに1週間に授業時間外でどれほど学習を行っていましたか？」に対して、「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した学生が半数以上いた。しかし、「この授業に積極的に参加していますか」「教員の説明はわかりやすいですか」「授業の要点はめいかくですか」などに関しては4点以上であった。予習・復習に対しての意識付けに課題がある一方で、授業に関する興味・関心は高いと評価されている。
3）大学設置・学校法人審議会の教員組織審査において、奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学研究科講師、修士マル合研究指導教員として判定		専門職間連携特論、生活支援特別演習、リハビリテーション研究特論、疼痛ケア・リハビリテーション学特論、リハビリテーション学特別研究の担当可と判定

4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）臨床実習教育	平成18年度～平成30年度	神戸大学、畿央大学、神戸学院大学、目白大学、神戸国際大学からの臨床実習指導を担当した。年間約10名の学生に対して、理学療法評価・理学療法実施方法について指導し、レポート作成および症例報告会を実施した。特に物理療法と地域理学療法に関しては大学で学んでいる学生が少なかったため、上記二点を中心に指導した。その結果、実習生は物理療法の効果については特に興味を抱いていた。
2）国家試験対策	平成24年度～平成26年度	関西総合リハビリテーション専門学校にて国家試験対策の講義を担当した。担当科目は内部障害理学療法と物理療法学であった。内部障害理学療法は心電図の診かたと心疾患の理学療法について国家試験問題を解きながら解説した。物理療法学は概論と物理療法の基礎、実施方法について国家試験問題を解きながら解説した。
3）専門学校記念式典の特別講演	平成27年10月	関西総合リハビリテーション専門学校卒業生として学生・教員・卒業生を対象に15周年記念式典での講演した。講演内容は「セラピストが褥瘡対策チームで発揮できる技術」とし、局所治療としての物理療法と、予防としてのポジショニングの有効性について講演した。
4）地域セミナー		
1．明石市介護保険事業所連絡協議会	平成24年10月	明石市介護保険事業所連絡協議会主催のセミナーにて「介護予防の為の運動療法」についての講演
2．加古川市地域セミナー	平成27年11月	加古川市の地域在住高齢者について「認知症予防と運動療法」について講演
3．明石市大久保町在宅介護支援センター	平成28年7月	明石市大久保町の老人クラブにて「認知症予防と運動療法の必要性」についての講演と自宅でできる運動を実施。
4．兵庫県健康保険事務所主催 「筋萎縮性側索硬化症（ALS）」 医療相談会・交流会	平成29年10月	ALS患者・患者家族に対して、神経内科医が「ALSの病態と治療について」、理学療法士が「ALSのリハビリテーション」の講演を行った。その後交流会に参加し、日常生活上で困っている事などについて助言を行った。
5．加西市生活サポーター＆介護予防 リーダー養成講座	平成30年6月	加西市の生活サポーター＆介護予防リーダー養成講座にて、地域の高齢者を対象に「加齢による変化を受入れ、華麗に介護予防を」について講演した。

5　その他 1）日本理学療法士協会認定理学療法必須研修会資料作成	平成25年度～令和3年度	褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会で指導するための教材を作成した。内容は「褥瘡の創面評価、リスク評価について」「褥瘡・創傷ケアに対する電気刺激療法の実際」の資料を作成した。
2）日本理学療法士協会褥瘡・創傷ケア認定理学療法士認定試験問題作成	平成25年度～令和3年度	褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の認定試験問題を作成した。
3）奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科	令和1年度～令和4年度	基礎ゼミⅡ、運動学Ⅰ(総論)、職場管理論、客観的臨床能力演習(理学療法)、理学療法卒業研究、運動器障害評価学、物理療法学Ⅰ(総論)、物理療法学Ⅱ(各論)、日常生活動作学演習、地域理学療法学演習、早期体験実習(理学療法)、地域理学療法実習、理学療法評価学実習の科目を担当した。
4）奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科	令和5年度～現在に至る	ラーニングスキルズ、職場管理論、客観的臨床能力演習(理学療法)、理学療法卒業研究、運動器障害評価学、物理療法学Ⅰ(総論)、物理療法学Ⅱ(各論)、日常生活動作学、日常生活動作学演習、早期体験実習(理学療法)、地域理学療法実習、理学療法評価学実習の科目を担当した。
5）奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学研究科	令和5年度～現在に至る	専門職間連携特論、生活支援特別演習、リハビリテーション研究特論、疼痛ケア・リハビリテーション学特論、リハビリテーション学特別研究を担当している。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1）理学療法士免許	平成15年4月30日	免許番号第47993号
2）修士（保健学）	平成23年3月	修第八八号(神戸大学大学院) 修士論文題名：「側臥位における大転子部の体圧分散を配慮したポジショニングの検証」
3）日本褥瘡学会　認定褥瘡理学療法士	平成23年9月1日	登録番号第417号（日本褥瘡学会）
4）認定理学療法士（褥瘡・創傷ケア）	平成25年4月1日	登録番号N11-0000225（日本理学療法士協会）
5）専門理学療法士（物理療法）	平成25年4月1日	登録番号S11-0000125（日本理学療法士協会）
6）博士（医療リハビリテーション学）	平成29年3月	医リ博甲第四号（神戸大学大学院） 博士論文題名:[Monophasic pulsed microcurrent of 1-8 Hz increases the number of human dermal fibroblasts.」（1-8Hzの単相性パルス微弱電流はヒト皮膚由来線維芽細胞を増殖させる。）
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）理学療法士の活動	平成16年4月～平成24年8月	平成16年4月～平成17年8月までは、河上整形外科にて整形外科の術後理学療法および切断患者の理学療法を経験し、下腿骨折患者の免荷装具を使用した理学療法や切断患者の義足適合・歩行練習等に従事した。 平成19年9月～平成24年8月までは、有床診療所の理学療法士として、褥瘡治療および褥瘡予防のポジショニング等を実施していた。褥瘡の理学療法に関する臨床研究はこの時期に実施していた。
2）神戸大学医学部附属病院形成外科	平成21年4月～現在に至る	平成21年4月神戸大学保健学研究科入学時より、神戸大学医学部附属病院形成外科にて外来診療補助・入院患者の創傷ケアにかかわっている。入院患者および外来患者の難治性潰瘍症例の治療や装具療法、切断患者の義足の適合判定、歩行再獲得にかかわっている。
3）株式会社アバンサール	平成24年9月～平成31年3月	平成24年11月に通所介護施設を開設し、機能訓練指導員として理学療法業務および管理者として運営面全般を実施していた。平成27年4月に訪問看護ステーションを開設し、それ以降は訪問看護ステーションからの訪問リハビリテーション業務に従事していた。平成26年度には明石市介護保険サービス事業者連絡協議会や在宅介護支援センター、兵庫県健康保険事務所より講演依頼をいただき、理学療法業務に加え講演等の職務も実施していた。平成30年度からは地域の神経内科医と共に神経難病患者（ALS、多系統萎縮症、脊髄小脳変性症等）を担当することが多く、褥瘡予防をはじめ、褥瘡治療、神経難病に対する理学療法業務を遂行していた。

4　その他		
（学会・論文査読実績）		
1）第48回日本理学療法学術大会	平成24年11月	一般演題査読
2）第26回兵庫県理学療法学術大会	平成26年4月	一般演題査読
3）第54回近畿理学療法学術大会	平成26年7月	一般演題査読
4）第50回日本理学療法学術大会	平成26年11月	一般演題査読
5）第27回兵庫県理学療法学術大会	平成27年4月	一般演題査読
6）第55回近畿理学療法学術大会	平成27年7月	一般演題査読
7）第51回日本理学療法学術大会	平成27年11月	一般演題査読
8）Journal of Wound Care（英文誌）	平成28年4月	投稿論文査読
9）第24回日本物理療法学会学術大会	平成28年7月	一般演題査読
10）第56回近畿理学療法学術大会	平成28年7月	一般演題査読
11）第52回日本理学療法学術大会	平成28年11月	一般演題査読
12）第29回兵庫県理学療法学術大会	平成29年4月	一般演題査読
13）第25回日本物理療法学会学術大会	平成29年7月	一般演題査読
14）第57回近畿理学療法学術大会	平成29年7月	一般演題査読
15）第26回日本物理療法学会学術大会	平成30年7月	一般演題査読
16）第27回日本物理療法学会学術大会	令和1年7月	一般演題査読
17）日本褥瘡学会誌	令和2年9月	投稿論文査読
18）第1回日本物理療法研究会学術大会	令和2年12月	一般演題査読
19）医療福祉情報行動科学研究	令和3年2月	投稿論文査読
20）第28回日本物理療法学会学術大会	令和3年7月	一般演題査読
21）第2回日本物理療法研究会学術大会	令和3年12月	一般演題査読
22）医療福祉情報行動科学研究	令和4年1月	投稿論文査読
23）体力科学	令和4年11月	投稿論文査読
24）第2回日本物理療法研究会学術大会	令和4年12月	一般演題査読
25）医療福祉情報行動科学研究	令和5年1月	投稿論文査読
26）保健医療学雑誌	令和5年3月	投稿論文査読
27）sage open medicine（英文誌）	令和5年10月	投稿論文査読
（一般演題座長）		
28）第54回近畿理学療法学術大会	平成26年11月3日	第17 セッション 生活環境支援系2の座長
29）第30回兵庫県理学療法学術大会	平成30年7月1日	第9 セッション の座長
30）第58回近畿理学療法学術大会	平成31年1月20日	第3 セッション 生活環境1　の座長
31）第21回日本褥瘡学会学術集会	令和1年8月23日	リハビリテーション２／機器・用具の座長
32）第28回日本物理療法学会学術大会	令和1年10月20日	一般口述演題Ⅴ　神経・筋制御の座長
（特別講演・教育講演座長）		
33）第1回物理療法研究会	令和3年2月20日	特別講演「物理療法最前線」の座長
34）第2回物理療法研究会	令和4年2月19日	特別講演「廃用に伴う骨格筋の可塑的変化のメカニズム ～筋萎縮・拘縮・疼痛に対する新たな物理療法戦略～」の座長
35）第24回日本褥瘡学会	令和4年8月28日	教育講演「教育講演12　物理療法最前線1」の座長
36）第24回日本褥瘡学会	令和4年8月28日	教育講演「教育講演13　物理療法最前線2」の座長
37）日本物理療法合同学術大会2023	令和5年2月18日	学術大会長講演「物理療法の評価と治療」の座長
38）日本物理療法合同学術大会2023	令和5年2月18日	教育講演「褥瘡の評価と治療」の座長
39）第25回日本褥瘡学会	令和5年9月1日	教育講演「教育講演1　装具によるMDRPUの対策」の座長
40）日本物理療法合同学術大会2024	令和6年1月26日	特別講演「創傷治癒促進を目的とした振動刺激デバイス開発に向けた看護理工学研究による挑戦」の座長
（シンポジウム・パネルディスカッション座長）		
41）第28回日本物理療法学会学術大会	令和3年10月23日	シンポジウム「訪問リハビリテーションで物理療法を使いこなす」の座長
42）第25回日本褥瘡学会	令和5年9月2日	シンポジウム「介護老人保健施設における褥瘡ケアの現状と問題点　～何に困っている？何がわからない？～」の座長

（シンポジウム・パネルディスカッション）		
43）職種別サテライトシンポジウム （理学療法士） テーマ：新人から見た褥瘡の魅力.	平成23年9月	褥瘡予防・管理に理学療法士としてどのように関わっているのか褥瘡に関わりだした新人セラピストとして、理学療法士が関わる魅力についてシンポジストとして発言した。（第13回日本褥瘡学会）
44）直流微弱電流刺激療法の効果と実践. テーマ：最先端のエビデンスUpdate 褥瘡ケアへの理学療法士の参画.	平成24年5月	臨床で実施している電気刺激療法の実際をシンポジストとして発言した。また、海外で発表されている先行研究との比較も行い、電気刺激療法の必要性について提言した。（第47回日本理学療法学術大会）
45）褥瘡局所治療（down stream)における 理学療法技術. テーマ：褥瘡対策チームで発揮できる 理学療法技術.	平成26年5月	褥瘡局所治療として電気刺激療法と超音波療法の有効性について、実施している方法と臨床データについてシンポジストとして発言した。（第49回日本理学療法学術大会）
46）日本褥瘡学会認定師によるチーム医療 の今後の方向性について	平成27年9月	認定褥瘡理学療法士として褥瘡予防・管理における理学療法士の必要性と可能性についてシンポジストとして発言した。（第17回日本褥瘡学会学術集会）
47）褥瘡ケアにおける多職種協働の取り組み ～地域連携の実際.	平成28年3月	褥瘡ケアにおける多職種協働の取り組みを在宅ケアに関わる理学療法士の立場からパネリストとして発言した。（第13回 日本褥瘡学会近畿地方会学術集会）
48）下肢創傷リハと褥瘡リハが実現する創傷 リハビリテーションの市民権	令和2年9月	褥瘡リハに関わる立場から理学療法士の必要性と現状の課題をシンポジストとして発言し、討論した。（第22回　日本褥瘡学会学術集会）
49）ベッド・マットレスにおける安全対策	令和2年9月	ベッドおよびマットレスの安全対策を理学療法士の立場から現状の問題点を中心に発言し、討論した。（第22回　日本褥瘡学会学術集会）
50）体圧分散寝具の最新知見	令和3年9月	臨床現場におけるマットレス選択や安全対策について理学療法士の立場から現状の問題点を中心に発言し、討論した。（第23回日本褥瘡学会学術集会）
51）褥瘡の保存的・予防的ケアにリハビリ テーション医学・医療はどのようにか かわるのか	令和5年6月	褥瘡の保存的・予防的ケアに関わる理学療法士として、車椅子やベッド上での姿勢、体圧分散の方法、電気刺激療法による予防・治療に関する内容を発言し、討論した。（第60回　リハビリテーション医学会学術集会）

（研修会講師）		
52）認定理学療法士必須研修会講師	平成25年9月29日	日本理学療法士協会主催の褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会にて「褥瘡の評価と物理療法の実際」のテーマで講義した。
53）認定理学療法士必須研修会講師	平成26年6月22日	日本理学療法士協会主催の褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会にて「褥瘡の評価と物理療法の実際」のテーマで講義した。
54）ハンズオンセミナー講師	平成27年10月24日	第23回日本物理療法学会学術大会にて、褥瘡・創傷ケアの物理療法について実際に物理療法機器を使用してハンズオンセミナーを実施した。
55）認定理学療法士必須研修会講師	平成27年12月6日	日本理学療法士協会主催の褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会にて「褥瘡の評価と物理療法の実際」のテーマで講義した。
56）第51回日本理学療法士協会全国学術研修大会講師	平成28年10月7日	沖縄県で開催された日本理学療法士協会全国学術研修大会において「褥瘡ケアで理学療法士だからできること～病院・施設・在宅ケア～」のテーマで講演した。
57）認定理学療法士必須研修会講師	平成28年10月30日	日本理学療法士協会主催の褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会にて「褥瘡の評価と物理療法の実際」のテーマで講義した。
58）兵庫県在宅褥瘡セミナー講師	平成28年12月11日	日本褥瘡学会主催の兵庫県在宅褥瘡セミナーのリハビリテーション分野で講師として、看護師・介護士理学療法士・作業療法士を対象に講義した。

59）富山県理学療法士会研修会講師	平成29年8月20日	褥瘡・創傷ケアの理学療法に関する内容で理学療法士・作業療法士・看護師を対象とした講演を実施した。
60）認定理学療法士必須研修会講師	平成29年10月15日	日本理学療法士協会主催の褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会にて「褥瘡の評価と物理療法の実際」のテーマで講義した。
61）認定理学療法士必須研修会講師	平成30年9月16日	日本理学療法士協会主催の褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会にて「褥瘡の評価と物理療法の実際」のテーマで講義した。
62）姿勢・活動ケア研究会 「褥瘡セミナー」講師	平成30年12月1日	姿勢・活動ケア研究会主催の褥瘡セミナーにて「褥瘡の評価と物理療法」のテーマで講義した。
63）姿勢・活動ケア研究会 「褥瘡セミナー」講師	令和1年5月18日	姿勢・活動ケア研究会主催の褥瘡セミナーにて「褥瘡の評価と物理療法」のテーマで講義した。
64）第21回日本褥瘡学会学術集会　教育講演11	令和1年8月24日	教育講演11（褥瘡患者のリハビリテーション医療）のテーマで講演した。なお、この教育講演は皮膚科領域講習1単位に該当する講演である。
65）認定理学療法士必須研修会講師	令和1年9月7日	日本理学療法士協会主催の褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会にて「褥瘡の評価と物理療法の実際」のテーマで講義した。
66）認定理学療法士必須研修会講師	令和3年7月17日	日本理学療法士協会主催の褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会にて「褥瘡の評価と物理療法の実際」のテーマで講義した。
67）創傷管理の物理療法　基礎から臨床応用	令和3年10月24日	創傷管理の物理療法について、培養細胞実験と臨床研究の結果を紹介し創傷管理の物理療法の発展に関する講演を実施した。
68）日本物理療法合同学術大会　教育講演	令和5年2月18日	「褥瘡の評価と治療」の教育講演で物理療法を使用した褥瘡治療について講演した。
69）第25回日本褥瘡学会	令和5年9月2日	「訪問リハビリテーションにおける理学療法士の介入方法と効果について」の教育講演で在宅褥瘡予防・治療について講演した
70）愛知県理学療法士会 「ADL維持向上等体制加算研修会」特別講演	令和5年10月22日	ADL維持向上等体制加算の算定要件にd2以上の褥瘡発生率が2.5%未満である必要性があるため、褥瘡予防・管理における特別講演を依頼され、講演した。
（学会運営）		
71）第6回日本褥瘡学会近畿地方会学術集会 準備委員	平成20年1月10日～ 平成21年3月8日	日本褥瘡学会近畿地方会学術集会準備委員として開催1年前より運営準備に従事した。
72）第11回日本褥瘡学会近畿地方会学術集会 準備委員	平成25年2月1日～ 平成26年3月2日	日本褥瘡学会近畿地方会学術集会準備委員として開催1年半前より運営準備に従事した。
73）第23回日本物理療法学会学術大会 準備委員	平成25年10月1日～ 平成26年10月25日	日本物理療法学会学術大会準備委員として開催1年半前より運営準備に従事した。主に演題担当として、演題の査読振り分け、プログラム作成に従事した。
74）日本褥瘡学会認定師委員会 認定師審査（新規・更新）	平成28年5月13日	日本褥瘡学会認定師委員会の認定師審査委員として、新規申請者および資格更新者の採点を行った。
75）日本褥瘡学会実態調査委員　協力者	平成28年10月1日	4年に1度の日本褥瘡学会褥瘡患者実態調査の調査委員の協力者として、兵庫県内の病院・施設などに調査依頼を行った。
76）日本褥瘡学会認定師委員会 認定師審査（新規・更新）	平成29年5月12日	日本褥瘡学会認定師委員会の認定師審査委員として、新規申請者および資格更新者の採点を行った。

77）日本物理療法学会　法人化担当委員	平成29年8月21日	任意団体であった日本物理療法学会を一般社団法人として法人化するための担当委員として勤めた。8月21日に一般社団法人として認可され、設立時社員として登記された。
78）日本褥瘡学会認定師委員会 認定師審査（新規・更新）	平成30年5月12日	日本褥瘡学会認定師委員会の認定師審査委員として、新規申請者および資格更新者の採点を行った。
79）日本褥瘡学会近畿地方会学術大会 準備委員長	平成30年3月～令和2年3月	日本褥瘡学会近畿地方会の学術大会において準備委員長を拝命した。
80）日本褥瘡学会認定師委員会 認定師審査（新規・更新）	令和2年6月10日	日本褥瘡学会認定師委員会の認定師審査委員として、新規申請者および資格更新者の採点を行った。
81）第1回物理療法研究会準備委員	令和2年10月1日～令和3年2月20日	第1回物理療法研究会準備委員として開催半年前より運営準備に従事した。
82）日本褥瘡学会認定師委員会 認定師審査（新規・更新）	令和3年6月15日	日本褥瘡学会認定師委員会の認定師審査委員として、新規申請者および資格更新者の採点を行った。
83）第2回物理療法研究会準備委員	令和3年3月1日～令和4年2月19日	第2回物理療法研究会準備委員として開催1年前より運営準備に従事した。
84）日本褥瘡学会認定師委員会 認定師審査（新規・更新）	令和4年5月17日	日本褥瘡学会認定師委員会の認定師審査委員として、新規申請者および資格更新者の採点を行った。
85）保健医療学学会第12回学術集会 準備委員長	令和2年12月15日～令和4年12月4日	保健医療学学会第12回学術集会準備委員長として開催1年前より運営準備に従事した。
86）日本物理療法合同学術大会2023 準備委員	令和4年3月1日～令和5年2月19日	日本物理療法合同学術大会2023の準備委員として開催1年前より運営準備に従事した。
87）日本物理療法合同学術大会2024 大会長	令和4年12月1日～令和6年2月29日	日本物理療法合同学術大会2024の大会長として準備から開催までを担当した。
88）日本褥瘡学会認定師委員会 認定師審査（新規・更新）	令和5年4月20日	日本褥瘡学会認定師委員会の認定師審査委員として、新規申請者および資格更新者の採点を行った。
89）第26回日本褥瘡学会事務局長	令和5年9月1日～現在	第26回日本褥瘡学会事務局長として開催までの準備を実施している。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書） 1.創傷のすべて	共著	平成24年9月	克誠堂	創傷に対する外科療法・保存療法・看護ケア・リハビリテーションの内容をまとめた書籍である。B5判 総頁数403頁 監修：市岡滋編集：安部正敏，溝上祐子，寺師浩人 共著者：市岡滋、安部正敏，溝上祐子，寺師浩人、杉元雅晴，吉川義之、他39名 本人担当部分：第Ⅳ章：創傷に対する治療選択：5. 物理療法 電気刺激療法　pp320，321（共著；杉元雅晴，吉川義之） 創傷に対する電気刺激療法の実施方法および効果についてまとめた。
2.理学療法から診る廃用症候群	共著	平成26年5月	文光堂	廃用症候群の特徴，発症のメカニズム、経過など，前提となる基礎知識を症状ごとに簡潔に解説した。また、実際の臨床でどう対応すべきか、主な疾患に特有な廃用症候群を想定し、その予防と臨床的介入について具体的に解説した。B5判　総頁数264頁 編集：奈良勲，神戸晃男，山崎俊明，木林勉 共著者：奈良勲，神戸晃男，山崎俊明，木林勉、杉元雅晴，吉川義之，前重伯壮、他23名 本人担当部分：第Ⅱ章：廃用症候群のメカニズム：A局所性廃用症候群のメカニズム05褥瘡）　pp73-85（共著；杉元雅晴，吉川義之，前重伯壮） 廃用症候群に合併する褥瘡について評価と治療について解説した。
3.理学療法士のための在宅療養者の診かた	共著	平成27年5月	文光堂	症例を通して、在宅療養者に対する理学療法の評価からプログラムの立案まで、実際の流れに沿って解説した実践書で、臨床の現場で役立つヒントや工夫はクリニカルヒントとしてまとめた。B5判 総頁数190頁 編集：杉元雅晴 共著者：杉元雅晴，吉尾雅春，望月久，岩崎洋，山川友康，平野康之，井澤和大，宮川哲夫，小嶋功，吉川義之，他7名 本人担当分：骨折－糖尿病を合併した下肢骨折　pp 96-102（単著） 糖尿病を合併した下肢骨折の症例を提示し、評価・理学療法プログラムの立案・実施について、リスク管理も含めて解説した。

4.理学療法を活かす褥瘡ケア	共著	平成28年8月	文光堂	理学療法士が褥瘡対策チームの一員として行う理学療法技術を豊富な図表を用い、予防や局所治療プログラムなど必要な知識が幅広く網羅されている。B5判 総頁数153頁 編集：杉元雅晴 共著者：杉元雅晴，吉川義之，他6名 本人担当部分：第Ⅱ章：褥瘡患者の評価；2．褥瘡の手段．第Ⅲ章：褥瘡の局所治療－物理療法；3．電気刺激療法．第Ⅳ章：予防―姿勢管理・運動療法；1．臥位姿勢．pp20-34，41-48，62-67（単著） 褥瘡の評価、局所治療（電気刺激療法）、ベッド上のポジショニングについて研究から得られた知見と臨床現場から得た知識を組み合わせて解説した。
5.PT・OT・STのための診療ガイドライン活用法	共著	平成29年5月	医歯薬出版	診療ガイドラインについて理解し、臨床現場での意志決定に活用できる力を身につけることを目的としており、ガイドラインの作成過程や基礎知識、ベースとなるエビデンスへの批判的吟味の方法、実践適用ケースまでをわかりやすく解説している。B5判 総頁数170頁 監修：中山健夫編集：日髙正巳、藤本修平 共著者：吉川義之、他21名 本人担当部分：第4章：診療ガイドラインの活用法；3　エビデンスと診療ガイドラインの活用の実際．褥瘡　pp152-155（単著） 日本褥瘡学会のガイドラインから、理学療法士が実施すべき内容について症例を提示して解説した。
6.イラストでわかる物理療法	共著	令和1年6月	医歯薬出版	物理療法の基礎知識から臨床応用までを分かりやすくまとめた教科書である。B5判 総頁数231頁 監修：上杉雅之　編集：杉元雅晴、菅原仁 共著者：安孫子幸子・植村弥希子・大矢暢久・金原一宏・斎藤弘・髙木峰子・中西亮介・平賀篤・太箸俊宏・吉川義之 本人担当部分：第4章：温熱療法（３）超音波療法　pp41-51（単著）、超音波の理論と治療方法・目的および留意点について説明し、疾患別に使用方法などを解説している。 第7章：水治療法　pp77-87（単著）、水の特性、力学的・生理学的作用および治療目的を解説し、実際の臨床場面での使用方法について説明している。
7.最新理学療法学講座物理療法学	共著	令和3年1月	医歯薬出版	物理療法の基礎知識から最新の物理療法までをを分かりやすくまとめた教科書である。B5判　総頁数294頁 編集：烏野大、川村博文 共著者：藤田峰子、森下勝行、久保田雅史、生野公貴、坂口顕、吉田秀樹、菅原仁、岡崎大資、山口智史、田上未来、荻野智之、大矢暢久、中村潤二、吉川義之、栗原靖、山本綾子、松田雅弘、日下隆一 本人担当部分：第14章：物理療法の臨床応用　褥瘡　pp232-236（単著）、褥瘡の物理療法について、電気刺激療法、超音波療法、近赤外赤外線療法、水治療法についての使用方法・目的などを解説している。

8.ハンドセラピィ	共著	令和4年3月	医学書院	ハンドセラピィの初学者にも分かりやすくまとめられた書籍である。ハンドセラピィに関わる上での必須となる知識が盛り込まれている。 編集：斎藤和夫、飯塚照史、下田信明 編集協力：秋山洋輔 共著者：斎藤和夫、粕渕賢志、岡本絵里加、平田久実、山中美季、飯塚照史、児島範明、田中芳美、平田恵介、松木良介、趙吉春、下田信明、吉川義之、車谷洋、谷口しのぶ、渡辺康太、高橋里奈、古田裕之、秋山洋輔、稲垣慶之、内屋純、桝田臣弘 本人担当部分：第3章：治療編 １．物理療法　PP86-93（単著）、ハンドセラピィにおける物理療法の紹介と注意事項、効能効果について解説している。
9. 地域理学療法学	共著	令和4年12月	文光堂	地域理学療法学のアクティブラーニングテキストであり、学部教育向けの書籍となる。 編集：日髙正巳 教育編集：有馬慶美、加藤研太郎 共著者：佐藤三矢、小貫睦巳、日髙正巳、加藤研太郎、永野忍、田口孝行、吉田一正、二宮省悟、門條宏宣、吉川義之、岩﨑祐子、三浦祐司、永井宏達、笹川健吾、井上順一朗、三村健、高倉保幸、國澤洋介、金谷佳和、渡邊観世子、藤田博暁、長谷川諒、明日徹、原真子、森明子、大内みふか、須永康代、佐野一成、及川龍彦、渡辺長、鈴木恭平 本人担当部分：第5章：通所施設における理学療法　PP86-96（共著）、通所施設における理学療法士の役割と制度について解説している。
10. エビデンスから身につける物理療法	共著	令和5年3月	羊土社	物理療法についてエビデンスレベルを解説しながら有効性の高い物理療法を学べるテキストとなっている。初学者にも分かりやすく解説されている。 編集：庄本康治 共著者：庄本康治、大住倫弘、瀧口述弘、吉田陽亮、安孫子幸子、椰野浩司、加賀谷善教、竹内伸行、生野公貴、徳田光紀、中村潤二、肥田光正、前重伯壮、吉川義之、箕島佑太 本人担当部分：第2章：治療法各論 10. 圧迫療法　pp287-300（単著）、圧迫療法における注意点・禁忌を解説しながら実施方法を解説している。
11. ポジショニング学 改訂第2版	共著	令和5年12月	中山書店	褥瘡予防におけるポジショニングを解説した書籍である。初学者向けの内容であり、ポジショニングの基礎から実践までが記された内容である。 監修：田中マキ子 編集：市岡滋、磯貝善蔵、前重伯壮、柳井幸恵 共著者：浅野隆之、植村弥希子、内山啓子、江村真弓、貝川恵子、清宮清美、真田弘美、塩谷俊之、只浦寛子、土屋智久、徳永恵子、徳山薫、仲上豪二朗、長瀬寅、吉川義之、他15名 本人担当部分：Chapter4：ポジショニングの実践方法　pp178-184（単著）、Chapter6：疾患別ポジショニング　pp310-313（単著）

（学術論文） 1.当院での運動機能検査による転倒カットオフ値の検出 （査読付）	共著	平成20年3月	理学療法兵庫 14: 43-46	田畑が残る地域での転倒予測カットオフ値を検出するため、地域のクリニックおよび通所利用者と対象にパフォーマンステストを用いてカットオフ値を検出した。その結果、10m歩行時間およびTUGのカットオフポイントは従来から報告されている値とほぼ同程度であった。また、FRでは有意差が認められず、転倒予測が不可能であった。 本人担当部分：検査・測定、統計処理、考察、まとめ 共著者：高尾篤，福林秀幸，吉川義之，竹内真，松田一浩，安川達哉，藤本絢子，梶田博之，杉元雅晴
2.傾斜角度計を用いた骨盤傾斜角度の測定と姿勢性腰痛の関連性 （査読付）	共著	平成20年3月	関西総合リハビリテーション専門学校紀要 1: 43-47	姿勢性腰痛で外来通院している患者を対象として、傾斜角度計を用いて立位と座位での骨盤傾斜角度を測定した。その後、問診により聴取した姿勢との関連性を統計学的に解釈した。その結果、骨盤傾斜角度と姿勢性腰痛には関連性がみられなかった。この結果から、骨盤傾斜角度が姿勢性腰痛の原因ではなく、その他の要因があることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、論文のまとめ 共著者：吉川義之，冨田義之
3.音叉を用いた振動覚検査による転倒リスク評価 （査読付）	共著	平成21年1月	理学療法科学 24: 53-57	音叉を用いた振動覚検査により転倒予測が可能であるかを検討した。また、一般的に用いられているパフォーマンステストとも比較し検査精度についても検討した。その結果、振動感知時間が短い高齢者ほど転倒しており、統計学的に有意に振動感知時間が短かった。また、その他のパフォーマンステンスと同様の検査精度であり、カットオフ値は5.65秒であった。これらの結果により音叉を用いた振動覚検査により転倒予測できることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、論文のまとめ 共著者：吉川義之，福林秀幸，高尾篤，竹内真，松田一浩，藤本絢子，梶田博之，杉元雅晴，村上雅仁
4.Evaluation of the combined use of ultrasound irradiation and wound dressing on pressure ulcers（褥瘡に対する超音波照射と創傷被覆材の併用操作の効果） （査読付）	共著	平成22年2月	Journal of Wound Care 19: 63-68.	褥瘡患者に対して超音波療法を実施し、創面積の推移を観察しながら、介入期間とコントロール機関の比較検討を実施した。研究デザインはABABA型のシングルケースデザインの症例集積研究である。その結果、超音波療法は褥瘡の創面積を縮小させる効果があり、有用な治療方法であることが確認された。これらの結果から、褥瘡治療の補完療法として超音波療法を実施する事が推奨される。 本人担当部分：統計、考察、まとめ 共著者：Maeshige N, Fujiwara H, Honda H, Yoshikawa Y, Terashi H, Usami M, Sugimoto M.

5.音叉を用いた振動覚検査による転倒予測の有用性-地域在住高齢者を対象とした前向き研究による検討- (査読付)	共著	平成22年7月	理学療法学 37：470-476	音叉を用いた振動覚検査による転倒予測を前向き研究により実施した。また、音叉の検者内・検者間信頼性も検討した。その結果、後ろ向き研究と同様の結果が得られた。カットオフ値についても後ろ向き研究と同程度の値であり、他のパフォーマンステストと同程度の検査精度があった。検者内・検者間信頼性も高い値であった。上記の結果から音叉を用いた振動覚検査は転倒予測において有用な検査であることが確認された。 本人担当部分：研究計画、実施、論文のまとめ 共著者：吉川義之，福林秀幸，高尾篤，竹内真，松田一浩，安川達哉，梶田博之，杉元 雅晴
6. Evaluation of the optimum electrical stimulation intensity for galvanotaxis in human fibroblast(ヒト皮膚線維芽細胞における直流微弱電流の最適電流強度の検討) (査読付)	共著	平成23年1月	Wound Repair and Regeneration 19(1)	培養線維芽細胞の電気走性と電流強度を検討した。線維芽細胞は陽極帯電しているため陰極側へ遊走することが報告されている。本研究結果も先行研究と同様の結果となった。また、電流強度に関しては50μA群でも陰極側への遊走が確認され、100μA群ではコントロール群と有意差がみられた。上記の結果から微弱な電流でも線維芽細胞が遊走することが確認された。 本人担当部分：細胞培養、実験、解析、まとめ 共者名：Sugimoto M, Terashi H, Maeshige N, Honda H, Yoshikawa Y
7.側臥位における大転子部の体圧分散を配慮したポジショニングの検証 (修士論文)	単著	平成23年3月	神戸大学大学院	健常成人と高齢者に対して30度側臥位時の体圧分散可能な肢位と安楽度について検討した。30度側臥位時は股関節を内旋させることにより、より広い殿筋面で圧を分散できるように考慮した。その結果、健常者も高齢者も体圧分散が可能になり有用な体位であることが示唆された。この殿筋面の広さについては健常者の骨盤周囲部をCTスキャンを用いて確認した。また安楽度にも問題なく臨床的にも問題ないことが示唆された。（A4判全11頁）
8.股関節運動と骨盤傾斜角度が仙骨部褥瘡の形状変化に及ぼす影響 (査読付)	共著	平成23年6月	褥瘡会誌 13：157-161	仙骨部の褥瘡は股関節運動および骨盤の傾斜角度により面積に影響を与えることが考えられる。そのため、股関節運動および骨盤傾斜角度が仙骨部褥瘡の面積にどのような影響を与えるのかを確認した。結果は股関節を屈曲すると短径および創面積が拡大し、伸展すると創面積は縮小した。また、股関節を屈曲する際は反対側の股関節を伸展することで面積の拡大を予防できた。この結果から仙骨部褥瘡患者に股関節の関節可動域運動を行う際は反対側の股関節を伸展する必要性が示唆された。 本人担当部分：解析、考察、まとめ 共著者：前重伯壮，本田寛人，吉川義之，山本将之，寺師浩人，杉元雅晴

9.直流微弱電流刺激療法がポケットを有する褥瘡に与える効果 （査読付）	共著	平成24年1月	日本物理療法学会会誌 19, 82-86	褥瘡の中でもポケットを有する褥瘡は難治性であり、治癒までに時間がかかると言われている。そのため、ポケットを有する褥瘡に対する治療は緊急の課題である。そこで、ポケットを有する褥瘡に対して電気刺激療法を実施した結果、治癒が促進された。この結果から、ポケットを有する褥瘡に対して電気刺激療法を実施する事でポケット面積の縮小が促進されることが示唆された。 本人担当部分：治療実施、解析、論文まとめ 共著者：吉川義之，杉元雅晴，前重伯壮，松田一浩
10.転倒リスク評価における振動覚検査の重要性 （査読付）	共著	平成24年1月	理学療法科学 27：55-59	これまで転倒予測に音叉を用いた振動覚検査が有用であることを報告してきた。本研究では振動覚検査は自覚症状に乏しいため、筋力低下などのように自覚せずに転倒するのではないかと考え自覚症状との関連性を検討した。その結果、振動覚の低下は転倒恐怖心などに影響を及ぼさず、低下していることを自覚している高齢者が少ないことを確認した。そのため、振動覚検査が低下している高齢者に対してはフィードバックする必要性があると考えられる。 本人担当部分：研究計画、実施、論文のまとめ 共著者：吉川義之，松田一浩，竹内真，福林秀幸，高尾篤，安川達哉，井上由里，梶田博之，杉元雅晴
11.Optimum microcurrent stimulation intensity for galvanotaxis of human dermal fibroblasts （ヒト皮膚線維芽細胞の直流電流に最適な微弱電流刺激強度） （査読付）	共著	平成24年1月	Journal of Wound Care 21: 5-10	培養線維芽細胞を用いて電気走性と最適電流強度についての実験を行った。電気刺激は50μAと100μAの微弱な電流強度で実施した。その結果、50μAでも陰極方向への遊走が確認され、100μAではコントロール群に比べ有意に陰極方向へ遊走していることが確認された。この実験により線維芽細胞が陰極方向へ遊走しやすいことが再確認され、100μAという微弱な電流でも遊走することが確認された。 本人担当部分：細胞培養、実験、統計解析、考察、まとめ 共著者：Sugimoto M, Maeshige N, Honda H, Yoshikawa Y, Uemura M, Yamamoto M, Terashi H

12. 30°側臥位の快適さの検証 （査読付）	共著	平成24年3月	関西総合リハビリテーション専門学校紀要 4：31-34	褥瘡予防におけるポジショニングに30度側臥位が推奨されている。しかし、30度側臥位は不安定な体位であるため快適さが疑問視されている。そのため体幹の捻じれに配慮した30度側臥位をとることで自律神経系に与える影響を調査した。その結果、体幹に捻じれのない30度側臥位は背臥位と同程度の快適さであり、苦痛な姿勢ではないことが確認された。それゆえに臨床で30度側臥位を実施する際は体幹の捻じれに配慮する必要性がある。 本人担当部分：研究計画、実施、論文のまとめ 共著者：吉川義之，杉元雅晴，前重伯壮，三嶋一規，谷川大地，山本将之
13. 高齢者の年齢階層別における転倒恐怖感消失要因の検証 （査読付）	共著	平成24年3月	神戸国際大学リハビリテーション研究 3：9-17	転倒恐怖感は年齢が高くなるほど抱きやすいといわれているため、高齢者の転倒恐怖感の関連要因を明らかにすることを目的とした。対象者を低年齢高齢者と高年齢高齢者の2群に分けて比較した。その結果、低年齢高齢者の転倒自己効力感はクリニカルパス4週目に向上が認められたが、高年齢高齢者の転倒自己効力感に変化はみられなかった。そのため、高年齢高齢者の転倒恐怖感の消失要因は運動機能だけではなく、社会的要因などが考えられた。 本人担当部分：考察、まとめ 共著者：小枝允耶，柿花宏信，植村弥希子，長尾徹，田川雄一，吉川義之，小枝英輝，武政誠一，山下拓，久綱正勇
14. 絵画教室の利用者が受講生に与える影響 （査読付）	共著	平成24年3月	神戸学院総合リハビリテーション研究 7：139-145	絵画教室における絵画作業が受講生の気分および生活にどのように影響を与えるかについて調査し、高齢者に対する介護予防や生きがい作りとしての有効性について検討した。その結果、絵画教室の利用は絵画技術の向上だけではなく、ストレス発散や余暇時間の有効利用、他者交流の促進などの役割を担っていた。この結果により絵画教室の利用は高齢者に対する介護予防や生きがい作りとしても有効である可能性が示された。 本人担当部分：解析、考察、まとめ 共著者：梶田博之，大瀧誠，中前智通，森川孝子，吉川義之，田伏勉
15. 仙骨部と大転子部の体圧分散を配慮したポジショニングと安楽度の検証－股関節回旋角度と体幹の回旋に着目して－ （査読付）	共著	平成25年1月	褥瘡会誌 15：1-7	健常成人に対して30度側臥位時の体圧分散可能な肢位と安楽度について検討した。30度側臥位時は股関節を内旋させることにより、より広い殿筋面で圧を分散できるように考慮した。その結果、体圧分散が可能になり有用な体位であることが示唆された。この殿筋面の広さについてはCTスキャンを用いて確認した。また安楽度にも問題なく臨床的にも問題ないことが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、解析、論文のまとめ 共著者：吉川義之，杉元雅晴，寺師浩人，前重伯壮，野口まどか

16. 運動機能別にみた高齢者の転倒関連因子の比較－ロジスティック回帰分析による検討－ （査読付）	共著	平成25年3月	身体教育医学研究 14：9-16	高齢者の転倒因子は多くの因子があるため把握することが困難な状況である。そのため、高齢者を運動機能の高い者と低い者に分け、それぞれの因子を検討した。その結果、運動機能の高い高齢者は振動覚の低下が転倒因子としてあがり、運動機能の低い高齢者は筋力低下やバランス能力の低下など多様な因子が関わっていたことが確認された。 本人担当部分：研究計画、実施、統計、論文のまとめ 共著者：吉川義之，梶田博之，松田一浩，高尾篤，井上由里，杉元雅晴
17. 通所リハビリテーションにおける内部障害の罹患率と課題 （査読付）	共著	平成25年3月	理学療法兵庫 18：7-9	介護保険領域でのリハビリテーションが増加している中、情報提供が乏しい現状にある。その中でも内部障害の既往をもった高齢者が多くいるにも関わらず、情報が乏しいことは運動中のリスク管理が不十分となることが考えられる。そのため、服薬状況や既往歴を利用者・利用者家族・ケアマネージャーに確認し情報の整理を行った。その結果、循環器疾患の既往や治療を行っている高齢者が多く確認された。 本人担当部分：研究計画、解析、考察、まとめ 共著者：松田一浩，吉川義之，竹内真，高尾篤，福林秀幸，安川達哉，杉元雅晴，梶田博之
18. 週1回のバランス練習を実施した脊髄小脳変性症の一例～移動能力の変化に着目して （査読付）	共著	平成25年3月	神戸国際大学リハビリテーション研究 4: 35-39	進行性疾患である脊髄小脳変性症患者に対してバランス練習を中心とした理学療法を実施した症例報告である。立位および膝立立位、四つ這い肢位でバランス練習を工夫して理学療法を実施した結果、日常生活活動の指標であるFIMの合計点数が改善した。進行性疾患ではあるが、廃用性による運動制限が出現していたために理学療法を実施する事でADLが改善した症例であった。 本人担当部分：プログラムの立案、考察、まとめ 共著者：小枝允耶，吉川義之，植村弥希子，梶田博之，小枝英輝
19. 個人情報記録における認知症原因疾患の記載状況について （査読付）	共著	平成25年3月	神戸学院総合リハビリテーション研究　8:139-144	介護保健施設利用者の多くは高齢であるため認知症を呈した割合も多い。そこで、介護保険施設の利用者の個人情報記録における認知症原因疾患の記載状況について調査した。対象は192名であった。その結果、認知症とのみ記載があったのが95件であった。認知症は疾患により適切な治療やケアが異なるため、今後はこれらの情報整理が必要である結果となった。 本人担当部分：情報整理、解析、まとめ 共著者：梶田博之，大瀧誠，中島綾，中前智通，森川孝子，久保田摩紀，松本謙，吉川義之
20. 褥瘡部を陰極とした微弱直流電流刺激療法による創の縮小効果 （査読付）	共著	平成25年6月	理学療法学 40：200-206	細胞培養実験にて得られた電気刺激条件を臨床研究にて確認した。刺激条件は褥瘡部を陰極とし、強度を80μAで1時間、週5回通電した。その結果、全症例の創の縮小が加速し、統計学的にも有意な結果となった。また、過去に行われた先行研究よりも週治癒率が高く、褥瘡に対する低強度の電気刺激療法は創の縮小に有用であることが確認された。 本人担当部分：研究計画、実施、統計解析、論文のまとめ 共著者：吉川義之，杉元雅晴，前重伯壮，植村弥希子，高尾篤，松田一浩，寺師浩人

21. 仙骨部褥瘡患者に対する直流微弱電流刺激療法の試み （査読付）	共著	平成25年10月	褥瘡会誌 14：582-586	仙骨部褥瘡に対して電気刺激療法を実施し、創の縮小効果について検討した。刺激条件は基礎研究のデータを用いて、褥瘡部を陰極、強度80μA、周波数0.1Hz、時間40分、頻度週5回とした。その結果、電気刺激療法の介入後に創の縮小が加速し最終的に治癒に至った。本結果より標準治療に電気刺激療法を併用することにより創の加速的治癒が期待できる。 本人担当部分：研究計画、実施、解析、論文のまとめ 共著者：吉川義之，杉元雅晴，前重伯壮，寺師浩人
22. Critical Point Of Direct Microcurrent Stimulation Intensity To Promote Galvanotaxis For Human Dermal Fibroblasts （ヒト真皮線維芽細胞の電気走性を促進する直流微弱電流刺激強度の重要なポイント） （査読付）	共著	平成26年1月	Wound Repair and Regeneration 22(1)：A19	陽極帯電している線維芽細胞の電気走性を促進するため、直流微弱電流刺激を実施した。その結果、コントロール群に比べ200 μA群で線維芽細胞の遊走は促進され、300 μA群で抑制されることが解明された。この結果により、臨床現場で褥瘡治癒を促進するための線維芽細胞遊走に期待する強度は200 μAであることが示唆された。 本人担当部分：解析、論文のまとめ 共著者：Uemura M, Maeshige N, Yoshikawa Y, Terashi H, Usami M, Takata S, Sugimoto M
23. NST対象患者の褥瘡発生に関わる危険因子の検討 （査読付）	共著	平成26年10月	褥瘡会誌 16：520-527	NST対象患者において、褥瘡ハイリスク患者ケア加算判定項目およびK式スケール判定項目と褥瘡発生の関連性を調査し、NST対象患者特有の褥瘡発生因子の解明を目的とした。その結果、褥瘡発生例では「必要カロリーを摂取していない」「褥瘡に関する危険因子があってすでに褥瘡を有するもの」「自力体位変換できない」「病的な骨突出」が有意に高かった。そのためこれらに注意する必要性が示唆された。 本人担当部分：解析、考察、まとめ 共著者：前重伯壮，野口まどか，今井秀人，沖佳祐，吉川義之，寺師浩人，宇佐美眞
24. 立ち上がり可能な座面の高さと日常生活活動の関連性について －通所利用者の立ち上がりによる検討－ （査読付）	共著	平成27年3月	神戸学院総合リハビリテーション研究 10：121-127	立ち上がり可能な座面の高さの違いによって日常生活活動との関連性があるかの検討を、通所リハ利用者を対象として実施した。その結果、30cmの高さから立ち上がれる高齢者は日常生活が自立していることが確認された。また、その他のパフォーマンステストとも関連性があり有用な検査であることが確認された。そのため、30cmをカットオフ値する事や30cmからの立ち上がりを目標とする必要性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、論文のまとめ 共著者：吉川義之，杉元雅晴，前重伯壮，門條宏宣，小枝允耶，柿花宏信，梶田博之，春藤久人

25. Positioning bedridden patients to reduce interface pressures over the sacrum and great trochanter (寝たきり高齢者の仙骨部と大転子部の体圧分散を配慮したポジショニング) (査読付)	共著	平成27年7月	Journal of Wound Care 4: 319-325	特別養護老人ホームに入所中の高齢者17名を対象に体圧分散可能なポジショニングの検討を行った。方法は30度40度側臥位時にベッドと接する側の股関節を自然位にした場合と内旋位した場合との比較検討を行った。その結果、ベッドと接する側の下肢を内旋位にした方が広い殿筋面で体圧を分散することができ、有用なポジショニングであることが確認された。この結果により、仙骨部および大転子部の褥瘡予防および褥瘡患者の治癒促進に期待できる。 本人担当部分：研究計画、実施、論文のまとめ 共著者：Yoshikawa Y, Maeshige N, Sugimoto M, Uemura M, Noguchi M, Terashi H
26. Monophasic pulsed microcurrent of 1-8 Hz increases the number of human dermal fibroblasts. (1-8Hzの直流パルス電流はヒト皮膚線維芽細胞数を増加させる。) (査読付)	共著	平成28年10月	Progress in Rehabilitation Medicine 1: 20160005	培養線維芽細胞を用いて電気刺激周波数の違いによる細胞増殖を確認した。褥瘡の治癒には線維芽細胞の遊走・増殖・分化が必要であり、本実験では増殖に着目して実験を行った。その結果、強度200μA, 1-8Hzの周波数で線維芽細胞の増殖が確認された。中でも周波数2Hzにおいて増殖が大きかった。本研究結果から褥瘡に対して電気刺激療法を実施する場合は周波数を2Hz前後で設定する必要性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、論文のまとめ 共著者：Yoshikawa Y, Sugimoto M, Uemura M, Matsuo M, Maeshige N, Niba ET, Shuntoh H
27. Monophasic pulsed microcurrent of 1-8 Hz increases the number of human dermal fibroblasts. (1-8Hzの直流パルス電流はヒト皮膚線維芽細胞数を増加させる。) (博士論文) (査読付)	単著	平成29年3月	神戸学院大学総合リハビリテーション学研究科	培養線維芽細胞を用いて電気刺激周波数の違いによる細胞増殖を確認した。褥瘡の治癒には線維芽細胞の遊走・増殖・分化が必要であり、本実験では増殖に着目して実験を行った。その結果、強度200μA, 1-8Hzの周波数で線維芽細胞の増殖が確認された。中でも周波数2Hzにおいて増殖が大きかった。本研究結果から褥瘡に対して電気刺激療法を実施する場合は周波数を2Hz前後で設定する必要性が示唆された。 （A4判全21頁）
28. 直流パルス電流の刺激周波数が線維芽細胞の遊走およびFocal adhesion kinaseに与える影響 (査読付)	共著	平成29年9月	物理療法科学 24: 26-31	培養線維芽細胞の遊走に関する電気刺激の最適周波数を検討した。スクラッチ法にて線維芽細胞の遊走に最適な周波数を求めた結果、2Hz群がコントロール群や10Hz群に比べ有意に遊走していることが確認された。 本人担当部分：細胞培養、実施、まとめ 共著者：植村弥希子, 前重伯壮, 井上岳人, 古賀由華, 杉元雅晴, 吉川義之, 宇佐美眞
29. Weight-bearing stretching of the triceps surae muscle increases the range of motion on ankle dorsiflexion in diabetic patients: an approach to reduce the risk of diabetic foot ulcer development（糖尿病患者に対する自重負荷による下腿三頭筋ストレッチングは足関節背屈可動 域を増加させる） （査読付）	共著	平成30年5月	J Jap.WOCM 22(3): 281-286	糖尿病患者に対して自重負荷による下腿三頭筋ストレッチングを実施することで、足関節背屈可動域の増加が確認された。足関節背屈可動域の低下は足底圧が上昇することにより足潰瘍の要因とされている為、本研究結果より糖尿病患者の足潰瘍発生リスクを減らすためのアプローチ方法確立の一助となる。 本人担当部分：研究計画、考察、まとめ。 共著者：Maeshige N, Hirasawa Y, Moriguchi M, Yoshikawa Y, Maruo K, Noguchi M, Terashi H, Fujino H

30. Modulation of plantar pressure and gastrocnemius activity during gait using electrical stimulation of the tibialis anterior in healthy adults（健常成人における前脛骨筋への電気刺激が歩行中の足底圧および腓腹筋活動に及ぼす影響について） （査読付）	共著	平成30年11月	PLoS One 10: e0195309	健常成人の前脛骨筋に電気刺激療法を実施することで拮抗筋である腓腹筋が相反神経抑制され、足底圧が減少する傾向が確認された。今後はこの方法を用いて足底圧が上昇することにより足潰瘍が発生しやすい糖尿病患者に対して実施し、足壊死や切断患者の予防に努めていく。 本人担当部分：研究計画、考察、まとめ。 共著者：Moriguchi M, Maeshige N, Ueno M, Yoshikawa Y, Terashi H, Fujino H.
31. Taking a sitting position within 13 days of subarachnoid hemorrhage onset prevents decline in the ability to perform activities of daily living and shortens hospitalization duration （クモ膜下出血の発症から13日以内に座位をとることは日常生活の活動能力の低下を防ぎ、入院期間を短縮する）（査読付）	共著	平成30年12月	Int J Disabil Hum Dev 14(4): 517-524	くも膜下出血患者を対象として早期に座位をとった症例と座位をとらなかった症例の日常生活活動レベルと入院期間を検討した。その結果、13日以内に座位をとった群は入院期間が短縮した。そのため、くも膜下出血患者は病状を把握し、神経学的兆候を確認しながら早期に歩行練習する必要性が示唆された。 本人担当部分：計画、考察、まとめ 共著者：Uemura M, Inoue T, Kuwata S, Yoshikawa Y, Matsumoto H, Hirata Y
32. 車椅子乗車時の戸の開閉操作が坐骨結節部へ与える影響 （査読付）	共著	令和2年3月	医療福祉情報行動科学研究 7: 25-35	車椅子乗車時における褥瘡好発部位である坐骨結節部位のずれ力と圧力の移動を検討した。平地走行ではなく、日常生活で必要となるドアの開閉動作時に坐骨結節部のずれ力と圧力を測定している。その結果、開き戸に比べ引き戸は前後のずれ力が少ない結果となった。しかし、前左右方向については開き戸も引き戸もずれ力に差がなかった。そのため、坐骨結節に褥瘡発生リスクがある対象者にはドアの開閉操作は極力避けるように促し、必要な場合は引き戸を勧めることが示唆された。 本人担当部分：計画、考察、まとめ 共著者：吉川義之，杉元雅晴，植村弥希子，松下友貴，松本流音
33. 1,25-Dihydroxyvitamin D3 Inhibits Lipopolysaccharide-Induced Interleukin-6 Production by C2C12 Myotubes （1,25-Dihydroxyvitamin D3はC2C12筋管細胞のリポポリサッカライドによるインターロイキン6産生を抑制する） （査読付）	共著	令和2年9月	Medicina 56(9): 450-457	本研究は、マウス由来C2C12筋管細胞に対する1,25-dihydroxyvitamin D3 [1,25(OH)2D3]の抗炎症作用と筋タンパク分解抑制作用を検討することを目的に実験を行った．その結果，LPSは培養液中のinterleukin (IL)-6を増加させた．しかしながらIL-6の濃度は1,25(OH)2D3処理した筋管細胞で処理されていない細胞に比べ，IL-6濃度は有意に低かった．ミオシンやMAFbxとMuRF1は各条件間で有意差は認められなかった．本研究結果から，1,25(OH)2D3がLPS刺激による筋管細胞でのIL-6産生を抑制することが示された． 本人担当部分：実験実施および，実験結果に基づき論文執筆の補助を担当した． 共著者：Nonaka K, Akiyama J, Yoshikawa Y, Une S, Ito K

34. 創傷被覆材における近赤外線透過率の検証 (査読付)	共著	令和3年3月	医療福祉情報行動科学研究 8: 11-17	褥瘡に対する近赤外線療法を実施する場合、褥瘡部分を覆っている創傷被覆材上から近赤外線療法を実施することが推奨される。そのため、ドレッシング材の赤外線透過率を検証した。近赤外線透過率はドレッシング材の種類により異なり、滲出液を吸収した際に透過しやすいドレッシング材や滲出液を吸収する前の方が透過しやすいドレッシング材があった。そのため、ドレッシング材によって照射時期を変える必要であることが確認された。 本人担当部分：計画、実施、統計解析、論文執筆 共著者：吉川義之，城野靖朋、滝本幸治、植村弥希子、辻下守弘
35. Monophasic Pulsed Current Stimulation of Duty Cycle 10% Promotes Differentiation of Human Dermal Fibroblasts into Myofibroblasts (デューティサイクル10%の単相パルス電流刺激は、ヒト皮膚線維芽細胞の筋線維芽細胞への分化を促進します) (査読付)	共著	令和3年3月	Phys Ther Res 24: 145-152	本研究は創傷治癒に必要な細胞である線維芽細胞に電気刺激を実施した実験である。本研究では線維芽細胞が分化するために有効なデューティサイクルの検証を実施した。その結果、10%のデューティサイクルにおいてα-平滑筋アクチンおよびトランスフォーミング成長因子のmRNA発現が有意に促進しました。それゆえにデューティサイクルは筋線維芽細胞の分化に影響を与える可能性があり、デューティサイクルが10%の電気刺激は創傷治癒に効果的であると示唆された。 本人担当部分：実験実施および，実験結果に基づき論文執筆の補助を担当した。 共著者：Uemura M, Sugimoto M, Yoshikawa Y, Hiramatsu T, Inoue T
36. The Shift of the Ischial Region during Maneuvering the Standard Wheelchair and the Electric Wheelchair in Healthy Adults (健常成人における標準車椅子および電動車椅子の駆動中の坐骨領域の座圧変化) (査読付)	共著	令和3年7月	International Journal of Clinical Medicine 12(7): 297-305	坐骨部褥瘡は再発が多いため車椅子乗車時の外力の把握が必要であるため、健常成人における標準型車椅子と電動車椅子乗車時の坐骨部圧と圧移動の変化を体圧分布装置を用いて測定した。その結果、電動車椅子では圧移動はみられないが、標準型車椅子では圧の移動が確認された。この結果から、坐骨部に褥瘡発生リスクがある患者および術後の患者に対しては自操式車椅子ではなく電動車椅子の使用が有用であると示唆された。 本人担当部分：研究計画，研究指導，実験結果に基づき論文執筆の補助を担当した. 共著者：Uemura M, Sugimoto M,Shimizu M, Maeshige N,Yoshikawa Y, Fujino H

37. Immediate Effects of Weight-Bearing Calf Stretching on Ankle Dorsiflexion Range of Motion and Plantar Pressure During Gait in Patients with Diabetes Mellitus. (糖尿病患者の歩行中の足関節背屈可動域および足底圧に対する腓腹筋ストレッチングの即時効果) (査読付)	共著	令和3年7月	The international journal of lower extremity wounds 13: 15347346211031318	本研究では糖尿病患者の体重負荷ストレッチの効果を研究することを目的とした。その結果、足首背屈ROMは、ストレッチ後に大幅に増加した。ピーク圧と圧力-時間積分は、足底表面全体で大幅に減少した。測定接地の持続時間はストレッチ後に減少した。ストレッチは、足首背屈ROMを改善し、歩行中の足底圧を低下させた。これらの結果は、腓腹筋のストレッチが糖尿病性足潰瘍を予防および治療するための効果的な手段である可能性があることを示唆している。 本人担当部分：研究計画、データ採取，実験結果に基づき論文執筆の補助を担当した. 共著者：Maeshige N, Uemura M, Hirasawa Y, Yoshikawa Y, Moriguchi M, Kawabe N, Fujii M, Terashi H, Fujino H
38. 皮下組織の損傷を超音波画像診断装置にて発見し、除圧を行うことで悪化せずに治癒に至った一症例 (査読付)	共著	令和3年9月	物理療法科学 28: 49-53	皮膚の欠損がなく皮下組織が損傷している褥瘡（深部損傷褥瘡：Deep tissue injury）に対して、超音波画像診断装置を用いて早期発見し、除圧および離床時間の延長を実施したことによって褥瘡を悪化させずに治癒に至った症例報告である。Deep tissue injuryは超音波画像診断装置を使用しなければ深部の損傷を把握することができないため、Deep tissue injuryが疑われる際は早期に超音波画像診断装置による評価が必要であることを示唆した論文である。それにより皮膚を損傷させずに深部褥瘡が治癒した新しい視点からの症例報告である。 本人担当部分：論文指導、論文執筆補助 共著者：植村弥希子，北村瑠玲，杉元雅晴，吉川義之，山浦生也，寺師浩人
39. 直流パルス微弱電流刺激療法の電極改良により褥瘡治癒が促進された症例 (査読付)	共著	令和3年9月	物理療法科学 28: 54-60	褥瘡部に対して適切に電流が到達するようにした改良電極を用いた電流刺激療法を実施した研究である。医師の指示のもとで電極を改良し電極の安全性を確認して実施した。その結果、停滞していた褥瘡が囲み電極を使用した電気刺激療法によって、創の縮小効果が認められた。また、改良電極を使用したことによる副作用も確認されなかった。 本人担当部分：実施計画、論文指導、論文執筆補助 共著者：出口太紀，杉元雅晴，吉川義之，植村弥希子，平松輝隆，巻渕弘治

40. コロナ禍における地域理学療法・作業療法実習の取り組みと課題―学内実習の概要と学生アンケート調査による考察― （査読付）	共著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究 9: 31-38	新型コロナウイルスの感染拡大により学内実習を実施した。実習後に学生に対してアンケート調査を実施した。回答率は95%であった。約90%の学生が理解できたと回答していた。また、現地からのライブ中継は高い評価であった。一方で臨地実習に行けていないことで40%程度の学生が将来の実習が不安であると回答していた。以上のことから学内実習は学生にとって充実した学習機会であったと思われる一方で、今後の実習に対する不安が高い結果であった。 本人担当部分：アンケート作成、調査、論文執筆補助、まとめ 共著者：滝本幸治，池田耕二，吉川義之，坪内善仁，笹野弘美，前田吉樹，中島大貴，辻下聡馬，大浦智子，山形力生
41. 線維芽細胞の増殖，遊走およびAkt活性化に対する微弱電流刺激の効果 （査読付）	共著	令和4年2月	医療福祉情報行動科学研究 9: 73-79	本研究では微弱電流刺激による線維芽細胞の増殖，遊走，Akt活性化に対する効果を調べることを目的とした．その結果，線維芽細胞は微弱電流刺激により有意に減少した．スクラッチアッセイの結果，微弱電流刺激により創傷治癒率は促進されなかった．また，微弱電流刺激によるAkt活性化を調べたが，微弱電流刺激による線維芽細胞のAkt活性化は認められなかった．本研究結果より，微弱電流刺激は刺激条件により線維芽細胞の増殖や遊走の促進は見られず，細胞数を減少させる可能性があることが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案、実験の実施および補助を行った． 共著者：野中紘士，吉川義之
42. Prediction of callus and ulcer development in the patients with diabetic peripheral neuropathy by isosceles triangle-forming tuning fork （二等辺三角形形成音叉による糖尿病性末梢神経障害患者の胼胝と潰瘍の発生の予測） （査読付）	共著	令和4年3月	SAGE Open Medicine 10: 1-10	健常高齢者と糖尿病性神経障害患者の身体機能を測定し、胼胝の発生原因を検討した。糖尿病性神経障害患者に対しては追跡調査を実施した。胼胝の発生については振動覚検査により判別が可能であった。下肢創傷についても振動覚検査によって予測することが可能であることが示唆された。そのため、改拇趾末節骨背側の振動検査を実施することで、胼胝・下肢創傷の予測が可能であると示唆された。 本人担当部分：研究計画、研究デザイン立案，統計解析、実験結果に基づき論文執筆を担当した． 共著者：Yoshikawa Y, Maeshige N, Uemura M, Tanaka M, Kawabe N, Atomu Yamaguchi, Fujino H, Terashi H
43. ヒト皮膚由来線維芽細胞の培養温度が細胞増殖に与える影響 （査読付）	共著	令和4年8月	物理療法科学 29:720-76	深い褥瘡の治癒には肉芽による修復が必須となる。その肉芽の基盤となるヒト皮膚由来線維芽細胞を温度のみ違う環境で培養した。その結果、体温よりも低い温度（31、33、35℃）では細胞増殖が抑制された。一方、体温よりも高い温度（39℃）では細胞増殖が促進した。そのため、褥瘡治療において創部周辺の温度管理は重要であり、低すぎると治癒に悪影響を及ぼし、体温よりもやや高めであると治癒が促進されることが示唆された。 本人担当部分：研究計画，研究デザイン立案，統計解析，実験，実験結果に基づき論文執筆を担当した． 共著者：吉川義之，野中紘士，滝本幸治，前重伯壮，植村弥希子，杉元雅晴

44. Electrical Shunting Prevents the Decline of Galvanotaxis After Monophasic Pulsed Microcurrent Stimulation in Human Dermal Fibroblasts. （ヒト皮膚由来線維芽細胞における単相性パルス微弱電流刺激後の電気シャントが逆向き電流による細胞遊走を抑制した） （査読付）	共著	令和4年8月	Eplasty 22 e27	培養線維芽細胞に単相性パルス電流刺激を実施し、放電操作の必要性について検証した。単相性パルス電流刺激では蓄電効果により、そのままにしておくと逆向き電流が発生するため、放電操作が必要と仮説を立てて実施した。その結果、放電操作をすれば陰極側へ遊走し、放電操作をしなければ線維芽細胞が逆向き（陽極）に遊走することが分かった。そのため、臨床で単相性パルス電流刺激を実施する際は放電作業を実施する必要性が示唆された。 本人担当部分：細胞培養、実施、解析、考察、まとめ、論文執筆補助 共著者：Uemura K, Sugimoto M, Yoshikawa Y, Inoue R
45. Efficacy of Low-frequency Monophasic Pulsed Microcurrent Stimulation Therapy in Undermining Pressure Injury: A Double-blind Crossover-controlled Study （褥瘡に対する低周波単相パルス微小電流刺激療法の有効性．二重盲検クロスオーバー対照試験） （査読付）	共著	令和4年9月	Progress in Rehabilitation Medicine 7 1-10	これまで褥瘡治療のために実施してきた電気刺激の細胞培養研究の結果を基に臨床研究を実施した。研究デザインは電気刺激介入期とプラセボ期を設けたクロスオーバー比較試験であった。実施した結果、電気刺激介入期に褥瘡の創縮小率が有意に促進された。電気刺激以外の項目に差はみられなかった。以上の結果から褥瘡に対する電気刺激は褥瘡の創縮小率を有意に改善し褥瘡治療に有用であることが示唆された。本人担当部分：研究計画，研究総括，解析，考察，論文執筆 共著者：Yoshikawa Y, Hiramatsu T, Sugimoto M, Uemura M, Mori Y, Ichibori R
46. Acute Effects of Combination Therapy by Triceps Surae Stretching and Electrical Stimulation to the Tibialis Anterior on Medial Forefoot Plantar Pressure During Gait in Patients With Diabetes Mellitus. （糖尿病患者の歩行時前足部足底圧に対する下腿三頭筋ストレッチと電気刺激併用の急性効果）（査読付）	共著	令和5年1月	The international journal of lower extremity wounds 15347346221148456	糖尿病性足病変の予防のため、ストレッチングと前脛骨筋に対する電気刺激療法の組み合わせが足底圧に及ぼす研究を実施した。対象は糖尿病患者であった。結果は、糖尿病患者に対してストレッチングと電気刺激療法を併用した群は、足底圧が有意に低下した。以上のことから、糖尿病性足病変のリスクのある患者に対してはストレッチングに電気刺激療法を併用することが有用であると示唆された。 本人担当部分：研究データ採取、解析、論文執筆補助 共著者：Maeshige N, Moriguchi M, Fujii M, Kanazawa H, Yoshikawa Y, Kitamura K, Okuno F, Yamaguchi A, Uemura M, Hosomi M, Hara K, Terashi H, Fujino H
47. 施設の種類に対応した臨床参加型実習モデルの提案-施設の特徴を活かした経験の積ませ方-	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要 15: 1-14	臨床実習が行われる施設を医療施設と介護施設、訪問リハビリテーションに大別しながら、各施設の理学療法の特徴や役割を整理し、臨床実習の内容や方向性を確認した。その中で、学生に対する経験の積ませ方を考慮しながら、各施設における臨床参加型実習モデルを構築し、併せて臨床実習におけるキーポイントを提示した。 本人担当部分：図表作成、通所・訪問リハビリテーション、論文執筆補助 共著者：池田耕二、滝本幸治、城野靖朋、吉川義之、野田優希、野中紘士、辻下守弘

48. 理学療法士を育む【場】づくりの着想に関する一考察	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要 15: 15-20	現在の理学療法士の現場教育や人材育成の課題と限界を提示し、理学療法育成システムにおける新たな取り組みの必要性を指摘した論文である。理学療法士の発達や成長を後押しする「理学療法士を育む【場】づくり」の特性やそれを成立するための条件を明らかにすることが目的である。これらに貢献できれば現場教育や人材育成に役に立つものとなる。本論文ではその枠組みをまとめたものである。 本人担当部分：論文執筆補助 共著者：池田耕二、田坂厚志、城野靖朋、吉川義之、野田優希
49. ラダー活用後のリハビリテーション医療関連職種の自己教育の変化 （査読付）	共著	令和5年3月	医療福祉情報行動科学研究 10: 73-79	臨床現場におけるリハビリテーション関連職種の教育にラダー教育を取り入れ、その後の自己教育の変化を検討した。その結果、ラダー教育により自己の課題に対して取り組みやすくなり、また自分の能力を他者に認めてもらう機会になることが可能性が示唆された。 本人担当部分：論文執筆補助 共著者：西村瞬、前重伯壮、吉川義之、奥野史也、小林賢二、木村圭司
50. Association between Patients' Body Mass Index and the Effect of Monophasic Pulsed Microcurrent Stimulation on Pressure Injury Healing（褥瘡治癒に対する単相パルス微小電流刺激の効果と患者の肥満度との関連性） （査読付）	共著	令和5年8月	Biomedicines 11(9), 2379	褥瘡に対する単相性パルス電気刺激療法の効果と対象者の背景因子の調査を実施した。その結果、単相性パルス電気刺激療法はBMIの高い患者ほど効果が高かった。対象者はベッド上生活者であったため、BMI高値はが筋量ではなく脂肪組織と考えられ、単相性パルス電気刺激療法と脂肪組織の関係性が示唆された研究であった。 本人担当部分：研究計画, 研究総括, 解析, 考察, 論文執筆 共著者：Yoshikawa Y, Maeshige N, Yamaguchi A, Uemura M, Hiramatsu T, Yoriko Tsuji, Terashi H

（その他） 「総説・依頼原稿」 1.物理療法技術の継承、こう考える－臨床の立場から	共著	平成22年7月	日本物理療法学会誌 17: 21-22	臨床の立場から物理療法技術を継承について教育現場・メーカーへの提言をまとめた。 本人担当部分：まとめ 共著者名：前重伯壮，藤原秀太郎，本田寛人，吉川義之，杉元 雅晴
2.最先端のエビデンスUpdate：褥瘡ケアへの理学療法士の参画	共著	平成25年2月	理学療法学 40: 56-58	褥瘡ケアへの理学療法士の参画を促すため，医師から理学療法士に期待する事をまとめていただき、理学療法士の立場から運動療法について、物理療法についての内容を記載した。また、褥瘡・予防ガイドラインの作成委員会からリハビリテーション分野のガイドラインについて解説した。 本人担当部分：電気刺激療法、まとめ 共著者名：杉元雅晴，日高正巳，寺師浩人，吉川義之，前重伯壮，廣瀬秀行
3.慢性創傷に対する理学療法	共著	平成25年4月	理学療法 30(4)：402-410	慢性創傷に対する電気刺激療法と超音波療法の使用方法と研究結果のまとめを総説論文としてまとめた。 本人担当部分：まとめ 共著者名：杉元雅晴，前重伯壮，吉川義之
4.褥瘡対策チームで発揮できる理学療法技術	共著	平成26年12月	理学療法学 41: 690-698	褥瘡対策チームで理学療法士が発揮できる技術について解説した。理学療法士は褥瘡を評価し、さらに動作を評価することにより適切なポジショニングを実施することができる。また、褥瘡部を評価することにより物理療法を用いて治療に参加することもできる。これらの技術で褥瘡対策チームで活躍する事に期待できる。 本人担当部分：電気刺激療法、まとめ 共著者名：前重伯壮，杉元雅晴，吉川義之，植村弥希子，井上里英子，日高正巳
5.褥瘡に対する物理療法の実践②：直流微弱電流刺激療法	単著	平成27年3月	理学療法magazine 2(3): 54-58	褥瘡に対する物理療法として電気刺激療法の使用方法を解説した。これまでの臨床研究の結果に加え基礎研究で得られたデータも提示し、より治癒効果の高い電気刺激療法を実施して頂けるように解説した総説論文である。

6.褥瘡ケアで理学療法士だからできること	単著	平成29年4月	理学療法学 44(1): 47-51	褥瘡・創傷ケアについて理学療法士の必要性を解説した。予防や環境調整などのポジショニングだけではなく、物理療法を用いて治療にも関われることを示し、理学療法士が褥瘡・創傷ケアに関わっていくべきという内容を解説した総説論文である。
7.理学療法士からみた褥瘡予防の問題点とその対応策	共著	平成30年4月	WOC Nursing 6(4)：63-72	理学療法士の視点から褥瘡予防の問題点を解説した。移乗や移動時の注意点、ベッド上のポジショニングや車椅子駆動時における問題点などを他職種にもわかりやすく解説している。 本人担当部分：体位変換・姿勢保持、基本動作における注意点。 共著者：杉元雅晴，吉川義之，植村弥希子
8.発生と悪化を防ぐための褥瘡予防	単著	令和1年12月	訪問リハビリテーション 9：352-358	褥瘡の発生予防と悪化予防を解説した。褥瘡の発生機序からリハビリテーションが褥瘡に与える影響などを説明し、理学療法や作業療法を実施する際の注意点をまとめた総説論文である。
9.褥瘡患者のリハビリテーション医療 ー褥瘡ケアの理学療法ー	単著	令和1年12月	褥瘡会誌 22（1）：19-25	これまで理学療法士が褥瘡患者に関わる際にポジショニングやシーティングを中心として関わってきたが、それ以外にも物理療法を用いて治療に参画できることを伝えた。しかし、その際は医師や看護師などの多職種協働が必要であり、褥瘡創面評価の必要性なども含めて解説した。
10.Infection Control Measures For The Use of Electrophysical Agents Devices and Treatment Procedures (物理療法機器における感染対策とICU関連筋力低下に対する物理療法について)	共著	令和2年9月	INTERNATIONAL SOCIETY FOR ELECTROPHYSICAL AGENTS IN PHYSICAL THERAPY	物理療法の使用による感染拡大を防ぐために、物理療法機器における感染対策をまとめている。また、重症化したSARS-CoV-2肺炎に併発する可能性のあるICU関連筋力低下について、近年、運動療法の代替手段として注目されている電気刺激療法に関する知見をまとめている。院内感染の広がりが懸念される中、本ガイドによって適正に感染対策がなされ、かつ少しでも良好な転機を導けるよう物理療法を臨床で活用していただくためにまとめている。 本人担当部分：物理療法の使用による感染対策について 共著者：Ikuno K, Yamaguchi T, Yoshikawa Y, Tokuda M, Nakamura J
11.坐骨部褥瘡患者へのリハビリテーション医療の原則	共著	令和3年2月	褥瘡会誌 23（1）：1-7	褥瘡の好発部位である坐骨褥瘡の予防（再発を含む）に関して解説している。特に、車椅子生活者は坐骨褥瘡を発生させやすいため、日常生活における注意点（圧迫とズレ力）を中心に解説し、理学療法士の関わるべき点なども解説している。また、創をみることでどこにどのような外力が加わっているかについても解説している。 本人担当部分：車椅子上のシーティングについて、まとめ 共著者：杉元雅晴、吉川義之、植村弥希子

12. 仙骨部褥瘡とリハビリテーション医療～仙骨部褥瘡を観て予防する，観て治療する～	共著	令和3年2月	褥瘡会誌 23（1）：14-18	本邦の褥瘡患者の特徴は高齢で痩せ型、病的骨突出を有していることがあげられる。また、仰臥位で寝ているため、病的骨突出がある高齢者は容易に褥瘡が発生してしまう。そのため、好発部位である仙骨部分に褥瘡が発生しないように頻回な体位変換や体圧分散寝具の活用が求められる。さらには、定期的に確認して予防する必要がある。この解説論文ではポジショニングを中心に仙骨部褥瘡の予防方法について解説している。 本人担当部分：ベッド上のポジショニングについて、まとめ 共著者：植村弥希子、杉元雅晴、吉川義之
13. 高齢者の褥瘡予防のためのポジショニング	共著	令和3年2月	臨床老年看護 28：25-32	加齢に伴い皮膚は脆弱化し、しわやたるみが多くなる。さらに、関節拘縮や変形、筋力低下などで褥瘡発生リスクが高まる。そのため、本解説論文では高齢者の褥瘡予防ケアを実施するにあたり、どのようなポジション具を実践していけばよいか、個人的要因と環境・ケア要因の両方から解説している。 本人担当部分：全体の編集、校正、まとめ 共著者：吉川義之、永吉恭子
14. 座圧の可視化により生まれる支援と責任	共著	令和3年10月	褥瘡会誌 23（4）：309-312	坐骨部や尾骨部の褥瘡は座位で発生することが多い。近年は座圧センサーマットが進化し、座圧を可視化することが可能となっているため座圧を軽減する提案が可能になってきている。一方で座圧センサーマットにはセンサーピッチ、圧測定範囲、シートの柔らかさ、圧のドリフトなど管理項目も多々存在する。これらの管理の必要性も大切である。本論文では、センサーシートの特性をふまえたうえで管理の仕方と測定結果の解釈などを解説している。 本人担当部分：座圧センサーマットの項目、座位褥瘡について、まとめ 共著者：前重伯壮、吉川義之、植村弥希子、寺師浩人
15. リハビリテーション専門職からみた基礎知識とアップデート	共著	令和3年10月	WOC Nursing 9(10)：59-65	リハビリテーション専門職からみた褥瘡予防・管理の基礎知識（特にシーティング）を解説した。また、近年トピックスとされているフレイル・サルコペニアについても褥瘡予防・管理に必要な知識として解説した。さらには、褥瘡管理における物理療法の必要性と今後の展望についてまとめ、今後リハビリテーション専門職が褥瘡予防・管理に参画する際の一助となる内容である 本人担当部分：全体の監修、校正、物理療法の項目 共著者：永吉恭子、門條宏宣、吉川義之
16. 【フットケア・足病に大切なリハビリテーション】糖尿病患者の足部・足関節周囲筋に対するストレッチングの効果	共著	令和4年5月	日本フットケア・足病医学会誌 3(2)：71-75	フットケアにおけるストレッチングの必要性と糖尿病性足病変に関わる理学療法士のための介入方法を解説した総説論文である。これまで実施してきた研究データなども加えながら、実施すべき点と注意点なども詳しく解説している。 本人担当部分：評価、これまでの研究データの生理、図、全体の校正 共著者：前重伯壮，吉川義之，植村弥希子，平沢良和，田中雅侑，河辺信秀，藤井美樹，寺師浩人，藤野英己

17.【訪問のための臨床実習】養成校からみた訪問への臨床実習の実際	共著	令和4年6月	訪問リハビリテーション 12(2)：112-123	臨床実習における訪問リハビリテーションの在り方、関わり方について奈良学園大学での取組、考え方を執筆している。訪問リハビリテーションにもいろいろな種類があるため、表を使用しながら整理している。これにより実習を送り出す教員側も実習を受け入れる現場の理学療法士も双方がどのように関われば良いのかが整理できると考えられる。 本人担当部分：全体の内容整理、表 共著者：池田耕二，吉川義之
18.物理療法，活かせていますか？	共著	令和4年8月	物理療法科学 29(1)：39-44	物理療法の禁忌・注意点を解説した総説論文となる。これまで禁忌とされてきた内容などについてもカナダで実施された研究論文を読み解き、絶対的禁忌と相対的禁忌の違いなどについても解説している。臨床で物理療法を適切に使用するための具体的な方法などをまとめた論文である。 本人担当部分：全体の内容整理、臨床現場での使用方法、図表 共著者：植村弥希子，杉元雅晴，前重伯壮，吉川義之
19.局所と全身の相互作用に注目した炎症・修復・免疫と理学療法の展望	共著	令和4年8月	物理療法科学 29(1)：29-32	物理療法が局所だけではなく全身にも影響を与えることが近年の研究で明らかとなってきた。骨格筋に対して物理的刺激を加えることで全人にも影響を与え、逆に全身運動が局所へも良い影響を与えることが明らかとなってきている。これからの理学療法ではこれらを含めた管理が必要であり、今後の展望なども含めた総説論文となっている。 本人担当部分：全体の内容整理、まとめ、 共著者：前重伯壮，吉川義之，植村弥希子，河辺信秀，林久恵，山口亜斗夢，馬暁琪，寺師浩人，藤野英己
20.創傷管理の物理療法	共著	令和4年8月	物理療法科学 29(1)：26-28	創傷における物理療法の効果と近年発表されたガイドラインに基づいて、本邦で使用可能な物理療法の解説をしている。まだまだエビデンスが足りない領域もあるため、使用方法などについても記載している。 本人担当部分：論文執筆 共著者：吉川義之，前重伯壮，植村弥希子，杉元雅晴
21.慢性創傷評価の最前線	共著	令和5年8月	物理療法科学 30(1)：8-13	慢性創傷の評価について解説した総説論文である。特に体圧分布測定装置の使用方法や注意点などについて詳細に解説している。 本人担当部分：論文執筆補助 共著者：前重伯壮，吉川義之，植村弥希子，園田悠馬
22.創傷予防・管理における物理療法	共著	令和5年8月	物理療法科学 30(1)：	慢性創傷における予防・治療の双方から物理療法の活用方法について解説している。物理療法は慢性創傷の予防においても活用できるため、これまで実施されてきた治療以外の内容を組み込んだ内容である。 本人担当部分：論文執筆 共著者：吉川義之，前重伯壮，植村弥希子，

「研究報告書」 1.研究助成報告書 研究題目：歩行時足底圧を減少させる中周波電気刺激の至適条件と機序の解明	共著	平成31年3月	日本褥瘡学会	健常成人の前脛骨筋に電気刺激療法を実施することで拮抗筋である腓腹筋が相反神経抑制され、足底圧が減少する傾向が確認された。今後はこの方法を用いて足底圧が上昇することにより足潰瘍が発生しやすい糖尿病患者に対して実施し、足壊死や切断患者の予防に努めていく。 （A4判全6頁） 本人担当部分：研究計画、実施、発表、報告書作成 共著者：吉川義之、前重伯壮、守口舞輝、前重伯壮、寺師浩人、藤野英己
2.研究助成報告書 研究題目：マウス由来Ｃ２Ｃ１２筋管細胞に対する活性型ビタミンＤの抗炎症作用および筋タンパク分解抑制に関する検討	共著	令和2年4月	奈良学園大学保健医療学部	本研究はマウス由来C2C12筋菅細胞に対する1,25-dihydroxyvitamin D3[1,25(OH)2D3]の抗炎症作用と筋タンパク分解抑制作用を検討した．その結果，LPSは培養液中のinterleukin (IL)-6を増加させた．IL-6の濃度は1,25(OH)2D3処理した筋管細胞で処理されていない細胞に比べ有意に低かった．ミオシンやMAFbxとMuRF1は各条件間で有意差は認められなかった．本研究結果から，1,25(OH)2D3がLPS刺激による筋菅細胞でのIL-6産生を抑制することが示された． （A4判全2頁） 本人担当部分：実験実施および，実験結果に基づき論文執筆の補助を担当した． 共著者：野中紘士、秋山純一、吉川義之、畦五月、伊藤健一
3.研究助成報告書 研究題目：ヒト皮膚由来線維芽細胞における温度の違いが細胞増殖に与える影響	共著	令和3年3月	日本物理療法学会	高齢者は低体温であり、皮膚温も低めである。しかし、培養細胞の環境は37℃で設定されているため、高齢者の体温を反映されていないと考えられる。そのため、ヒト皮膚由来線維芽細胞を温度環境の違う状況で培養し増殖を確認した。その結果、コントロール群に比べ39℃で有意に増殖し、31・33・35℃で有意に増殖が抑制された。これらの結果から体温低下は創傷治癒を抑制する影響があり、皮膚温の管理が創傷治癒を高める可能性が考えられた。 （A4判全4頁） 本人担当部分：研究計画、実施、統計処理、発表、報告書作成 共著者：吉川義之、野中紘士、滝本幸治、杉元雅晴、前重伯壮、植村弥希子
4.研究報告書 研究題目：創傷被覆材における近赤外線透過率の検証	共著	令和3年4月	奈良学園大学保健医療学部	褥瘡に対する近赤外線療法を実施する場合、褥瘡部分を覆っている創傷被覆材上から近赤外線療法を実施することが推奨される。そのため、ドレッシング材の赤外線透過率を検証した。近赤外線透過率はドレッシング材の種類により異なり、滲出液を吸収した際に透過しやすいドレッシング材や滲出液を吸収する前の方が透過しやすいドレッシング材があった。そのため、ドレッシング材によって照射時期を変える必要であることが確認された。 （A4判全2頁） 本人担当部分：計画、実施、統計解析、報告書作成 共著者：吉川義之，城野靖朋、滝本幸治、辻下守弘

5.研究報告書 研究題目：腱振動刺激中マッチング課題の経時的解析	共著	令和3年4月	奈良学園大学保健医療学部	振動刺激は運動錯覚を起こすことが明らかとされている。この運動錯覚は筋紡錘への刺激により起こるものとされているため、振動刺激による運動錯覚は筋緊張制御に期待できる物理療法手段である。本研究では上腕三頭筋に対して振動刺激を加えることにより肘関節角度に影響を及ぼすかを検討した。結果、上腕三頭筋への振動刺激は肘関節角度に影響を及ぼし運動錯覚が確認された。今後は脳卒中片麻痺患者の痙性筋に対して実施していくことで臨床応用に期待できる。 （A4判全2頁） 担当部分：実施、まとめ、報告書作成補助 共著者：城野靖朋、神里巌、吉川義之、辻下守弘
「国際学会」 1.Effect of the combined use of ultrasound irradiation and wound dressing on pressure ulcers (褥瘡に対する創傷被覆材と超音波照射の 併用効果)	―	平成22年9月	第11回 Asian Confederation for Physical Therapy（インドネシア）	褥瘡に対する超音波療法の効果について検討した。近年の褥瘡治療は創傷被覆材を使用しているため、補完療法として実施する際には創傷被覆材の上から超音波療法を実施する必要がある。そのため創傷被覆材の超音波透過率を調査し、超音波療法を実施した。その結果、褥瘡面積が縮小し加速的な治癒が認められた。 本人担当部分：解析、まとめ 共同演者：Maeshige N, Fujiwara H, Honda H, Yoshikawa Y, Terashi H, Usami M, Sugimoto M
2.A new proposal of a better positioning for a bedridden patient. (寝たきり高齢者に対する新しいポジショニングの提案)	―	平成24年9月	第4回 World Union of Wound Healing Societies（神奈川県）	褥瘡ハイリスク者である日常生活自立度Cランクの高齢者を対象に新しいポジショニングを検討した。ポジショニングは30度側臥位を実施した際にベッドと接する側の股関節を内旋させ、殿筋面を広げて体圧分散を試みた。その結果、体圧は分散される結果となった。上記の結果から、30度側臥位を実施する際はベッドと接する側の股関節を内旋させる必要性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、解析、発表 共同演者：Yoshikawa Y, Sugimoto M, Maeshige N, Honda H, Madoka Noguchi, Terashi H
3.Clinical Effects of Galvanic Micro-Current Stimulation for Pressure Ulcers (褥瘡に対する直流微弱電流刺激の臨床効果)	―	平成24年9月	第4回 World Union of Wound Healing Societies（神奈川県）	褥瘡を有する高齢者に対して電気刺激療法を実施し、効果を確認した。電気刺激療法は滲出液を吸収したドレッシング材に棒状電極を挿入し、ドレッシング材を関電極として使用した。不関電極は10cm程度離れた健常皮膚部位に貼付した。電流強度は80μAとして、周波数2Hz，極性は褥瘡部陰極として40分，週5日実施した。その結果、前例において創が治癒した。上記の結果から、褥瘡に対する電気刺激療法は褥瘡治癒を促進させる可能性がある。 本人担当部分：研究計画、実施、解析、発表 共同演者：Yoshikawa Y, Sugimoto M, Maeshige N, Honda H, Terashi H

4. Examination of risk factor for falls among the elderly with high physical activity (活動性の高い高齢者の転倒危険因子の検討)	―	平成25年9月	第6回 WCPT-AWP & 第12回 Asian Confederation for Physical Therapy（台湾）	TUG が11秒以下で身体能力が高いとされる高齢者を対象として転倒因子を検討した。その結果、転倒群と非転倒群において筋力に差はみられなかったが、振動覚の低下と片脚立位時間の低下が転倒因子として有意であった。この結果から、身体能力が高い高齢者に対しては振動覚検査と片脚立位時間で転倒予測を行う必要性がある事が示唆された。 本人担当部分：研究計画、解析、考察、まとめ、発表 共同演者：Yoshikawa Y, Kajita H, Matsuda K, Uemura M, Koeda M, Sugimoto M, Shuntoh H
5. Case report on wound healing promotion of an intractable pressure ulcer by long irradiation of low-intensity pulse mode ultrasound (低出力超音波の長時間照射によって難治性褥瘡が治癒促進した症例)	―	平成25年9月	第6回 WCPT-AWP & 第12回 Asian Confederation for Physical Therapy（台湾）	褥瘡に対する超音波療法の効果について検討した。超音波は固定式の超音波装置を用いて、褥瘡の洗浄時にフィルムドレッシングの上から照射した。その結果、コントロール期間に比べ有意に創の縮小が確認された。上記の結果から、褥瘡に対する固定式超音波療法は褥瘡の創治癒を促進させる可能性があるため、臨床での積極的に使用する必要性がある。 本人担当部分：解析、考察、まとめ 共同演者：Maeshige N, Fujiwara H, Honda H, Yoshikawa Y, Terashi H, Usami M, Sugimoto M
6. Greater influence of pain than motor function on the fear of falling (有痛性症例の転倒は運動機能よりも影響が大きい)	―	平成25年9月	第6回 WCPT-AWP & 第12回 Asian Confederation for Physical Therapy（台湾）	大腿骨近位部骨折患者は転倒リスクが高いことが示されている。最近の研究では運動機能が低下することで恐怖感が出現することを報告している。しかし、これらの研究は疼痛との関連性は検討していない。そのため、本研究では疼痛と運動機能が恐怖感に及ぼす影響を調査した。その結果、疼痛が運動機能よりも大きく影響を及ぼしていることが確認された。それゆえに、疼痛の緩和が優先されることが示唆された。 本人担当部分：考察、まとめ 共同演者：Kakihana H, Koeda M, Yamashita T Uemura M, Yoshikawa Y
7. Critical point of direct microcurrent stimulation intensity to promote galvanotaxis for in human dermal fibroblasts (ヒト皮膚線維芽細胞の遊走を促進する刺激強度の重要なポイント)	―	平成25年9月	第6回 WCPT-AWP & 第12回 Asian Confederation for Physical Therapy（台湾）	培養線維芽細胞の電気走性について検討した。これまで、コントロール群よりも100μAで陰極方向へ遊走することを確認してきたが、それ以上の強度について検討していない。本研究は100μA以上の強度を確認することが目的である。その結果、遊走は200μAで最大となり300μAで抑制されることが確認された。そのため、臨床で褥瘡に電気刺激療法を実施する際には200μA前後が望ましいことが推測される。 本人担当部分：細胞培養、実施、考察、まとめ 共同演者：Uemura M, Maeshige N, Yoshikawa Y, Terashi H, Usami M, Takata S, Sugimoto M

8. Effect of living at home on falls self-efficacy to patients with hip fracture (股関節骨折患者の自宅生活における自己効力感低下の影響)	―	平成25年9月	第6回 WCPT-AWP & 第12回 Asian Confederation for Physical Therapy（台湾）	自己効力感は大腿骨近位部骨折患者の転倒恐怖心と関連している。本研究は大腿骨近位部骨折患者の自己効力感に関する研究を実施した。対象を入院訓練群と退院訓練群に分け、比較検討した。その結果、転倒に対する自己効力感は退院訓練群において改善し、入院訓練群では変化がみられなかった。そのため、早期に退院し自宅で理学療法を行うことで自己効力感が改善する可能性が確認された。 本人担当部分：考察、まとめ 共同演者：Koeda M, Kakihana H, Uemura M, Yoshikawa Y, Kajita H, Bishu N
9. The effects of direct micro-current stimulation on proliferation of human dermal fibroblasts (ヒト皮膚線維芽細胞の増殖に対する直流微弱電流刺激の効果)	―	平成27年5月	第17回 World Confederation for Physical Therapy（シンガポール）	培養線維芽細胞に対して周波数を変更した電気刺激療法を実施し、細胞増殖について検討した。その結果、2Hz群で細胞増殖が確認された。また64Hzについては細胞増殖が抑制される結果となった。そのため、臨床で電気刺激療法を実施する際は2Hzで実施するすることで創の治癒が促進される可能性が示唆され、周波数の設定の必要性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、細胞培養、実施、解析、考察、まとめ、発表 共同演者：Yoshikawa Y, Sugimoto M, Uemura M, Matsuo M, Maeshige N, Shuntoh H
10. Early ambulation improves activities of daily living and reduces hospitalization in aneurysmal subarachnoid hemorrhage patients (くも膜下出血後の早期歩行開始は日常生活活動を改善し、入院期間を減少させる)	―	平成27年5月	第17回 World Confederation for Physical Therapy（シンガポール）	脳卒中専門の急性期病院に救急搬送された初発くも膜下出血患者の早期離床とその予後について検討した。その結果、早期離床を促せた患者ほど転帰がよく、早期離床が遅れるほど転帰が悪かったという結果が得られた。そのため、可能な限り早期離床を促してリハビリテーション介入する必要性が示唆された。 本人担当部分：考察、まとめ 共同演者：Uemura M, Kuwata S, Yoshikawa Y, Maeshige N, Inoue T, Natsume S, Yoshida Y, Matsumoto H
11. Effects of Gluteus Maximus Contraction by the Electrical Stimulation on Buttock Interface Pressure in the Supine Position	―	令和5年9月	23rd Annual Meeting of the European Pressure Ulcer Advisory Panel（イギリス）	仰臥位および30度背上げ臥位における仙骨部圧を減少させるため、大殿筋への電気刺激を実施した研究である。本研究結果から大殿筋に対して筋収縮を伴う電気刺激を実施することで仙骨部圧が有意に減少し褥瘡予防に有効であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、解析、考察、まとめ、発表 共同演者：Yoshikawa Y, Shimooka M, Yoshikawa M, Maeshige N, Uemura M, Terashi H

（国内発表） 1.当院での運動機能検査による転倒カットオフ値の検出	―	平成19年7月	兵庫県理学療法士学会（兵庫県小野市）	地域のクリニックに通院する高齢者と通所リハビリテーションを利用している高齢者を対象としてパフォーマンステストを実施し、クリニック周辺に在住する高齢者の転倒予測カットオフ値を算出した。 担当部分：検査・測定、統計処理、考察、まとめ 共同演者：高尾篤，福林秀幸，吉川義之，竹内真，松田一浩，安川達哉，藤本絢子，梶田博之，杉元雅晴
2.傾斜角度計を用いた骨盤傾斜角度の測定と姿勢性腰痛の関連性	―	平成19年5月	日本理学療法学術大会（新潟県）	整形外科外来に通院する腰痛患者を対象として骨盤の傾斜角度を計測し、姿勢性腰痛の関連性を検討した。その結果、骨盤傾斜角度と腰痛の関連性は認められずその他の要因が考えられた。 担当部分：研究計画、実施、発表 共同演者：吉川義之，冨田義之
3.音叉を用いた振動覚検査による転倒リスク評価	―	平成20年5月	日本理学療法学術大会（福岡県）	音叉を用いた振動覚検査にて下肢の体性感覚を検査し、転倒との関連性を検討した。その結果、振動覚の低下は転倒との関連性が示され、歩行速度やバランス能力との関連性も確認された。 担当部分：研究計画、実施、発表 共同演者：吉川義之，福林秀幸，高尾篤，竹内真，松田一浩，藤本絢子，梶田博之，杉元雅晴
4.ヒト培養線維芽細胞の電気走性の最適条件に関する研究	―	平成21年11月	日本創傷治癒学会（東京都）	培養線維芽細胞に電気刺激を実施し、線維芽細胞の電気走性と最適電流強度について検討した。線維芽細胞は陰極側に遊走し、コントロールに比べ100μAで有意に遊走することが確認された。 担当部分：細胞培養、実験、統計解析、まとめ 共同演者：杉元雅晴，前重伯壮，本田寛人，吉川義之
5.改良型音叉(Y-S音叉)を用いた検査法の信頼性について	―	平成21年6月	日本理学療法学術大会（東京都）	改良型音叉の検査方法の信頼性について検討した。音叉は叩打する強さにより振動の強さに差が出るため、一定にするための改良を行った。その結果、級内相関係数で0.99の信頼性が得られ検査者内、検査者間ともに信頼性が得られた。 担当部分：研究計画、実施 共同演者：安川達也，吉川義之，福林秀幸，高尾篤，嶋田智明，杉元雅晴
6.音叉を用いた振動覚検査による転倒予測の有用性	―	平成21年6月	日本理学療法学術大会（東京都）	音叉を用いた振動覚検査で転倒予測が可能であるかの前向き研究を実施した。前向き研究でも後ろ向き研究と同様の結果が得られ、振動覚検査の低下は転倒要因の一つであることが示唆された。 担当部分：研究計画、実施、発表 共同演者：吉川義之，松田一浩，竹内真，福林秀幸，高尾篤，安川達哉，梶田博之，杉元雅晴

7.転倒リスク評価における振動覚検査の重要性	―	平成22年5月	第45回日本理学療法学術大会（岐阜県）	転倒因子として振動覚の低下が考えられているが、振動覚の低下は自覚症状に乏しいことが指摘されている。そのため、振動覚と転倒恐怖心との関連性を確認した。その結果、運動機能の低下は転倒恐怖心に影響を及ぼすが、振動覚の低下は転倒恐怖心に影響を与えないことが確認された。そのため、振動覚のみが低下している活動性の高い高齢者は転倒に注意が必要であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、発表 共同演者：吉川義之，松田一浩，竹内真，福林秀幸，高尾篤，安川達哉，井上由里，梶田博之，杉元雅晴
8.身体能力及び活動性の高い高齢者の転倒因子の検討	―	平成22年7月	第21回兵庫県理学療法士学会（兵庫県朝来市）	身体能力が高く活動性の高い高齢者の転倒因子を検討した。上記の高齢者は身体能力が高いため、筋力低下や歩行能力は低下していなかったが、振動覚と片脚立位のみ低下していた。そのため、身体能力が高く活動性の高い高齢やの転倒因子を検討する際は振動覚と片脚立位時間を計測する必要性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、発表 共同演者：吉川義之，松田一浩，福林秀幸，竹内真，高尾篤，梶田博之，杉元雅晴
9.通所リハビリテーションにおける内部障害の罹患率と課題	―	平成22年7月	第21回兵庫県理学療法士学会（兵庫県朝来市）	通所リハビリテーション利用者には内部障害を合併した高齢者が多くいるにも関わらず情報が乏しい。そのため、服薬状況や本人・家族への問診により内部障害の罹患率を検討した。その結果、循環器疾患の罹患率が多くみられた。これは運動中のリスク管理が重要となってくるため、今後の情報提供の際に注意していく必要性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、解析、考察、まとめ　共同演者：松田一浩，吉川義之，福林秀幸，竹内真，高尾篤
10.仙骨部褥瘡患者に対する直流微弱電流刺激療法の試み	―	平成23年5月	第46回日本理学療法学術大会（宮崎県）	仙骨部褥瘡患者に対して標準治療の補完療法として電気刺激療法を実施した。刺激条件は褥瘡部陰極、周波数0.1Hz、強度100μA、時間40分、週5回とした。その結果、停滞していた創面積が縮小しはじめ最終的に治癒に至った。 本人担当部分：実施、解析、発表 共同演者：吉川義之，高尾篤，前重伯壮，杉元雅晴
11.30°側臥位の快適さの検証	―	平成23年7月	第22回兵庫県理学療法士学会（姫路市）	30度側臥位は褥瘡予防のポジショニングで最も頻繁に用いられる体位である。しかし、30度側臥位は快適性に欠けるとの報告がある。そこで、体幹の捻じれに配慮して快適性について検討した。その結果、体幹に捻じれがない30度側臥位は背臥位と同程度の快適性がある事がLF/HFの結果から確認された。そのため、30度側臥位を実施する際は体幹の捻じれに注意する必要性がある。 本人担当部分：研究計画、実施、解析、発表 共同演者：吉川義之，松田一浩，高尾篤，杉元雅晴

12. 運動機能と活動性により群分けした転倒因子の検討	―	平成23年7月	第22回兵庫県理学療法士学会（姫路市）	高齢者の転倒因子を運動機能の高い高齢者と低い高齢者に群分けして検討した。その結果、運動機能の高い高齢者は振動覚検査と片脚立位時間が転倒因子として有意であった。運動機能の低い高齢者は筋力やバランス能力・歩行スピードなど多種多様な原因が考えられた。そのため、転倒予測を行う際は運動機能により群分けして行うことで、より徹底したリスク管理が可能になることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、解析、まとめ、発表 共同演者：吉川義之，高尾篤，松田一浩，福林秀幸，竹内真，杉元雅晴
13. 直流微弱電流刺激療法の臨床効果	―	平成23年9月	第13回日本褥瘡学会（福岡県）	褥瘡患者3症例に対して電気刺激療法を実施し、創の縮小について検討した。電気刺激療法を実施する際は標準治療の補完療法として実施した。その結果、3症例とも創の縮小が促進され、最終的に治癒に至った。その他、副作用などは見られなかった。これらの結果から、褥瘡治療の補完療法として電気刺激療法を実施する事は早期治癒につながることが示唆される。 本人担当部分：計画、実施、解析、発表 共同演者：吉川義之，前重伯壮，寺師浩人，杉元雅晴
14. 直流微弱電流刺激療法がポケットを有する褥瘡に与える効果	―	平成23年10月	第19回日本物理療法学会（徳島県）	ポケットを有する仙骨部褥瘡患者に対して、標準治療の補完療法として電気刺激療法を実施した。ポケットを有する褥瘡は治癒に時間がかかり、難渋することが多い。そのため、加速的な治癒を目的に電気刺激療法を併用した。その結果、電気刺激療法によりポケットが6週間で閉鎖した。これまでポケットに対する物理療法は陰圧閉鎖療法のみであったが、電気刺激療法がポケットに対する物理療法として効果がある可能性を示唆する結果となった。 本人担当部分：計画、実施、まとめ、発表 共同演者：吉川義之，杉元雅晴，前重伯壮，松田一浩
15. 立ち上がり可能な高さと日常生活活動の関連性について	―	平成23年11月	第32回近畿理学療法士学術集会（滋賀県）	立ち上がり可能な高さと日常生活活動との関連性を検討した。対象を通所リハビリテーション利用者とした。その結果、30cmからの立ち上がりが可能な高齢者は日常生活が自立している方が多く、30cmから立ち上がりができない高齢者は日常生活に介助を有する方が多いという結果になった。そのため、30cmからの立ち上がりをひとつの目安になることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、解析、まとめ、発表 共同演者：吉川義之，鈴木昌幸，高尾篤，福林秀幸，竹内真，松田一浩，杉元雅晴
16. 糖尿病性神経障害における振動覚検査のカットオフ値と検査精度	―	平成24年5月	第55回日本糖尿病学会（神奈川県）	糖尿病性神経障害患者を対象として音叉を用いた振動覚検査について検討した。音叉を用いた振動覚検査は足関節内果もしくは母趾MP関節で実施する。本研究では検査精度とカットオフ値について検討した。その結果、糖尿病性神経障害患者は内果で検査をするよりも母趾MP関節で検査を実施する方が検査精度が高く、有用であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、解析、発表 共同演者：吉川義之，松本大輔，松田一浩，高尾篤，梶田博之

17. 加齢による振動覚の変化と糖尿病性神経障害患者の特異性	―	平成24年5月	第47回日本理学療法学術大会（兵庫県神戸市）	振動覚は加齢により低下すると言われているが、それらを検討した報告は散見される程度である。そのため、健常成人、健常高齢者、糖尿病性神経障害患者の3群で比較検討した。その結果、健常成人に比べ健常高齢者の振動覚閾値は有意に高く、また健常高齢者に比べ糖尿病性神経障害患者の振動覚閾値は有意に高かった。 本人担当部分：研究計画、実施、解析、発表 共同演者：吉川義之，松本大輔，松田一浩，高尾篤，梶田博之，杉元雅晴
18. 腰痛患者の腹部筋群の筋厚と筋力に関する検討	―	平成24年5月	第47回日本理学療法学術大会（兵庫県神戸市）	腰痛患者の腹筋筋力の低下は従来から指摘されている。本研究では超音波診断装置を用いて、腹直筋、腹斜筋ならびに腹横筋腹横筋の筋厚を測定し、筋力との関連性を検討した。その結果、筋厚と筋力には有意な相関があった。そのため、腰痛が増悪している患者で筋力が測定できない場合は、超音波診断装置を用いて筋厚を測定することが有用であると思われる。 本人担当部分：研究計画、データ採取、考察、まとめ 共同演者：高尾篤，福林秀幸，竹内真，吉川義之，松田一浩，加納和佳，杉元雅晴，中山潤一
19. 脳卒中片麻痺患者における膝伸展筋力対称性とバランス能力およびADLとの関連性	―	平成24年5月	第47回日本理学療法学術大会（兵庫県神戸市）	脳卒中片麻痺患者の膝伸展筋力とバランス能力およびADLの関連性について検討した。その結果、脳卒中片麻痺患者は膝伸展筋力の非対称性が強い方ほどバランス能力が悪く、ADLにおいて介助を必要としていた。そのため、脳卒中片麻痺患者の理学療法を実施する際には膝伸展筋力の非対称性を改善させる必要性がある事が示唆された。 本人担当部分：研究計画、解析、まとめ （鈴木昌幸，吉川義之，藤原正盛，吉川絵美，梶田博之，夏目重厚）
20. 大腿骨近位部骨折術後患者における自宅生活経験による転倒自己効力感の向上について	―	平成24年5月	第47回日本理学療法学術大会（兵庫県神戸市）	大腿骨近位部骨折患者を対象として、転倒自己効力感の変化について検討した。その結果、入院期間中は運動機能の改善はみられたが、転倒自己効力感については変化がみられなかった。その後、自宅退院した後には運動機能の改善はみられなかったが、転倒自己効力感は改善した。上記の結果から、自宅への生活に合わせた介入が必要であり、早期に外泊訓練する必要性が示唆された。 本人担当部分：考察、まとめ 共同演者：小枝允耶，植村弥希子，長尾徹，吉川義之，柿花宏信，山下拓，田川雄一，武政誠一
21. 股関節運動に伴う大転子部皮膚ずれ量測定の試み	―	平成24年8月	第21回日本創傷・オストミー・失禁管理学会（兵庫県神戸市）	股関節運動は大転子の骨突出部を移動される。これは大転子部褥瘡患者にとってはポケットを形成する原因となる。そのため，どの程度の運動でどの程度の骨突出の移動があるかを確認する必要がある。その結果、股関節70度以上の屈曲でずれ量の増大が確認された。上記の結果から、大転子部の褥瘡を保有する患者に対しては股関節屈曲70度までにすることが必要である。 本人担当部分：解析、考察、まとめ 共同演者：前重伯壮，上山徹，吉川義之，寺師浩人，杉元雅晴

22. 車いす駆動方法と坐骨部ずれの関連性についての検証	―	平成24年9月	第14回日本褥瘡学会（神奈川県）	車椅子駆動時の坐骨部に加わるずれについて検討した。車椅子駆動時には体幹の動きがあるため、坐骨部へずれが加わっていた。その際に、バックレストから背中を離さずに駆動することでずれは減少した。また、電動車いすは全くずれが出現しなった。上記の結果から、坐骨部褥瘡の術後の患者さんへのADL指導は、電動車椅子、自走車椅子の順にしていく事が望ましいことが示唆された。 本人担当部分：解析、考察、まとめ 共同演者：植村弥希子，杉元雅晴，山本将之，前重伯壮，吉川義之，寺師浩人
23. 大腿外側部へのポリウレタンフィルムの貼付が大転子部皮膚のずれに対して与える抑制効果	―	平成24年9月	第14回日本褥瘡学会（神奈川県）	大転子部褥瘡患者は股関節屈曲動作に伴い、ポケットを形成する可能性がある。そのため、ずれ量を最小限する必要性がある。そこでポリウレタンフィルムの貼付によるずれの抑制効果について検討した。その結果、貼付することで45％の抑制が確認された。 本人担当部分：解析、考察、まとめ 共同演者：上山徹，前重伯壮，吉川義之，植村弥希子，寺師浩人，杉元雅晴
24. ヒト皮膚線維芽細胞の電気走性を促進させる直流微弱電流刺激強度の臨界点	―	平成24年12月	第42回日本創傷治癒学会（神奈川県）	培養線維芽細胞に直流パルス電流刺激を実施し、線維芽細胞の電気走性を確認した。線維芽細胞は微弱な電流でも遊走が促進され、200μA群でコントロール群と有意な差が認められた。また、この電気走性は300μAでは抑制される結果となった。本研究の結果から、褥瘡患者に対して電流刺激療法を実施する際は200μA以下で実施する事が望ましいことが示唆された。 本人担当部分：細胞培養、実験、解析、まとめ 共同演者：植村弥希子，前重伯壮，吉川義之，寺師浩人，宇佐美眞，高田哲，杉元雅晴
25. 寝たきり患者に対するポジショニング評価方法の検討および評価に基づいた指導による改善 - 第２報 -	―	平成25年7月	第15回日本褥瘡学会（兵庫県神戸市）	褥瘡対策委員会で実施したポジショニングが病棟でどの程度把握し、実施できているかの検討を行った。その結果、胸郭・骨盤の角度設定不足、体圧分散不足、四肢の圧迫管理不足、マットレス管理不足などの問題点があげられた。この結果より、今回不足であった項目に対して再度チェックリストを作成し、より徹底したポジショニング管理ができるように試みる。 本人担当部分：考察、まとめ 共同演者：前重伯壮，上山徹，山本智恵子，大橋郁乃，尾上真俊，橋本弘子，植村弥希子，吉川義之，杉元雅晴，寺師浩人
26. 低出力パルスモード超音波の長時間照射により治癒の停滞が改善した一症例	―	平成25年7月	第15回日本褥瘡学会（兵庫県神戸市）	褥瘡に対する超音波療法を検討した症例報告である。基礎研究で得られた結果を臨床適応させた方法である。低出力パルスモードでSATP強度0.1W/cm2の20％パルスモードで実施した。その結果、停滞していた創収縮が改善され、創の加速的治癒につながった。本研究の結果より、低出力パルス超音波は創の縮小に効果があることを証明した。 本人担当部分：解析、方法、考察、まとめ 共同演者：前重伯壮，上山徹，山本智恵子，大橋郁乃，尾上真俊，吉川義之，植村弥希子，寺師浩人，杉元雅晴

27. シーティングにより、ズレによる圧迫及び食事時のムセが改善された１症例	―	平成25年7月	第15回日本褥瘡学会（兵庫県神戸市）	適切なシーティングを実施する事により嚥下がスムーズとなり活動性が向上しQOLが向上した症例を経験した。理学療法士が介入するまでは普通型車椅子を使用していたが、シーティングが不十分であったため、ティルト・リクライニング型車椅子を導入し適切なシーティングを行うこと改善した症例である。 本人担当部分：研究計画、実施、考察、まとめ 共同演者：原田浩樹，吉川義之
28. 車いす駆動にて戸の開閉時にかかる坐骨部への負担の検証	―	平成26年9月	第16回日本褥瘡学会（愛知県）	車椅子乗車時に戸の開閉動作を実施する事は多くみられる。しかし、その際に坐骨部に加わるずれ力や圧を検討した研究はない現状である。本研究では戸の開閉時に坐骨部に加わるずれ力と圧力について検討した。その結果、引き戸ではずれ力が少なく、開き戸ではずれ力が高くなることが確認された。そのためADL練習を実施する際は開き戸の使用は注意する必要がある。 本人担当部分：解析、考察、まとめ 共同演者：西山友貴，杉元雅晴，松本流音，藤島里英子，吉川義之
29. ヒト皮膚線維芽細胞増殖における電気刺激周波数の関連性	―	平成26年9月	第16回日本褥瘡学会（愛知県）	褥瘡治癒に必要な線維芽細胞を培養し、電気刺激を実施することでの変化を検討した。異なった周波数で電気刺激を行った結果、64Hzで細胞増殖が抑制され2Hzで細胞増殖が確認された。そのため、褥瘡患者に対いて電気刺激を実施する際は周波数64Hzを使用することは勧められず、2Hzを使用することが望ましいと考えられる。 本人担当部分：研究計画、細胞培養、実施、解析、考察、まとめ、発表 共同演者：吉川義之，杉元雅晴，前重伯壮，植村弥希子，藤島里英子，寺師浩人，春藤久人
30. 平地および坂道での車いす駆動が坐骨部のずれに与える影響	―	平成26年3月	第11回日本褥瘡学会近畿地方会学術集会（兵庫県神戸市）	車椅子を自操で駆動する際の坐骨部へ加わるずれ力について検討した。健常成人を対象として、平地走行と坂道走行を実施した。その結果、坂道走行は平地走行に比べ有意にずれ力が発生した。理由としては体幹の前屈動作が平地走行に比べ大きくなることが考えられた。そのため、車椅子走行を実施する際は体幹の前屈動作に注意する必要性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、解析、考察、まとめ 共同演者：山本将之，杉元雅晴，前重伯壮，吉川義之，植村弥希子，桑田真吾，小野くみ子，高田哲，寺師浩人

31. ストレッチングボードを用いた足関節底屈筋群の持続伸張が糖尿病患者の足関節背屈可動域に与える影響と足底圧変化の関連性	―	平成27年5月	第24回日本創傷・オストミー・失禁管理学会（千葉県）	糖尿病性神経障害患者の多くは足関節背屈可動域制限が出現し、足底圧の上昇が確認される。この足底圧上昇は糖尿病性足潰瘍の原因となるため、足関節背屈可動域の維持・拡大が必要である。そのため、ストレッチングボードを用いた持続伸張が背屈可動域改善に効果があるかを検討した。その結果、ストレッチングボードによる持続伸張は背屈可動域を拡大させ、足底の局所圧を低下することが示唆された。 本人担当部分：解析、考察、まとめ 共同演者：前重伯壮、平沢良和、守口舞輝、吉川義之、丸尾郁、寺師浩人、藤野英己
32. 線維芽細胞の電気走性における直流微弱電流刺激強度と integrin α2β1発現の関連性	―	平成27年9月	第17回日本褥瘡学会（宮城県）	培養線維芽細胞に対して電気刺激を実施し、細胞の電気走性について検討した。線維芽細胞は陰極方向に200μAで遊走が促進され、300μAで抑制されることが確認された。また細胞接着因子であるintegrin α2β1が電気刺激側へ移動していることが確認され、200μAの刺激により線維芽細胞が陰極側へ遊走することが確認された。この結果から臨床で実施する場合は強度を200μAで実施することで治癒効果が促進されることが示唆された。 本人担当部分：細胞培養、解析、考察、まとめ 共同演者：植村弥希子，前重伯壮，古賀由華，吉川義之，藤島里英子，杉元雅晴，青山（石川）倫子，三好真琴，寺師浩人，宇佐美眞
33. 直流パルス電流の刺激周波数が線維芽細胞の遊走およびFocal adhesion kinaseに与える影響	―	平成28年10月	第24回日本物理療法学会（宮城県）	培養線維芽細胞に異なった周波数の電気刺激を実施して、細胞遊走の活性化マーカーであるFAKに与える影響について検討した。その結果、コントロールと10Hz群に比べ2Hz群でFAKが活性化し、2Hz群ではスクラッチ法でも細胞の遊走が確認された。そのため、遊走においても周波数が影響することが示唆され、2Hzが有用であること確認された。 本人担当部分：細胞培養、実施、考察、まとめ 共同演者：植村弥希子，前重伯壮，井上岳人，古賀由華，杉元雅晴，吉川義之，宇佐美眞
34. 直流パルス電流刺激の周波数の違いにより筋線維芽細胞への分化に与える効果	―	平成28年12月	第46回日本創傷治癒学会（東京都）	培養線維芽細胞の遊走に関する電気刺激の最適周波数を検討した。スクラッチ法にて線維芽細胞の遊走に最適な周波数を求めた結果、2Hz群がコントロール群や10Hz群に比べ有意に遊走していることが確認された。 本人担当部分：細胞培養、実施、まとめ 共同演者：植村弥希子，杉元雅晴，吉川義之
35. ヒト皮膚由来線維芽細胞の電気走性における放電操作の有効性	―	平成28年12月	第46回日本創傷治癒学会（東京都）	培養線維芽細胞に直流微弱電流刺激を実施し、放電操作の必要性について検証した。直流電流刺激では蓄電効果により、そのままにしておくと逆向き電流が発生するため、放電操作が必要と仮説を立てて実施した。その結果、放電操作をすれば陰極側へ遊走し、放電操作をしなければ線維芽細胞が逆向き（陽極）に遊走した。 本人担当部分：細胞培養、実施、解析、考察、まとめ、発表 共同演者：吉川義之，井上里英子，杉元雅晴，植村弥希子

36. 糖尿病患者に対する足関節底屈筋群のストレッチングによる歩行時足底圧の減少	―	平成29年5月	第9回日本下肢救済・足病学会学術集会（福岡県）	糖尿病神経障害患者の胼胝形成に関与する理学療法評価の調査と3年間追跡調査し、創傷発生者と非発生者を比較検討した。その結果、振動覚の低下、触圧覚閾値の上昇、足関節背屈・母趾伸展可動域の低下などが胼胝形成に影響を及ぼしていた。また、創傷発生者は振動覚の低下が著しく、振動覚の低下は創傷発生の予測因子として有償である事が示唆された。 本人担当部分：計画、実施、解析、考察、まとめ、発表 共同演者：吉川義之，前重伯壮，渡邊佑，守口舞輝
37. 歩行時足底圧を減少させる経皮的電気刺激療法の至適条件および機序の検討	―	平成29年8月	第18回日本褥瘡学会（岩手県）	糖尿病性神経障害患者は足関節背屈可動域により足底圧が上昇するといわれている。そのため、電気刺激を使用し相反抑制を用いて背屈可動域の改善および筋の伸張性が増加すると考えた。まず、健常成人に対して基礎的研究を実施し、糖尿病性神経障害患者に適応するのが望ましいため、健常成人を対象とした研究を実施した。その結果、電気刺激により相反抑制が働き、H波が有意に抑制され、足底圧の低下が確認された。 本人担当部分：研究計画、実施、解析、考察、まとめ、発表 共同演者：吉川義之、守口舞輝、前重伯壮、寺師浩人、藤野英己
38. 疼痛の増悪によりADL制限を呈した関節リウマチ患者に対する振動・温熱・磁気刺激療法の効果	―	平成29年10月	第25回日本物理療法学会（奈良）	疼痛により日常生活活動が低下し、歩行困難となった3症例に対して、温熱・振動・磁気刺激を実施し、疼痛の緩和を試みた。その結果、薬剤や電気刺激療法では疼痛の緩和が図れなかった3症例の疼痛が緩和し、日常生活活動レベルが改善した。その内容をまとめ、学会発表した。 本人担当部分：計画、実施、考察、まとめ、発表 共同演者：吉川義之、門條宏宣
39. 褥瘡部の洗浄頻度と創治癒期間の関連性	―	平成29年10月	第25回日本物理療法学会（奈良）	理学療法士は水治療法として褥瘡部の洗浄を実施する事が可能であるが実施されていない現状にある。そのため、訪問リハビリテーション実施中に看護師と共に創部の洗浄を実施した7症例と訪問看護師のみが洗浄を実施した5例を比較検討した。その結果、理学療法士が訪問リハビリテーション中に洗浄を実施した群が有意に治癒日数が早かった。これは単純に洗浄回数が多かったことが要因と考えられた。そのため、理学療法士も洗浄を実施する必要がある事が示唆された。 本人担当部分：計画、実施、評価、考察、まとめ、発表 共同演者：吉川義之、杉元雅晴、植村弥希子、前重伯壮、平松輝隆
40. 褥瘡基礎研究の最先端:異分野融合 周波数と通電率による線維芽細胞への影響 褥瘡の加速的治癒を促す電気刺激療法の確立を目指して	―	平成30年9月	第20回日本褥瘡学会（神奈川）	皮膚由来線維芽細胞に対して電気刺激を実施し、周波数依存ではなく通電率による線維芽細胞への影響を検討した。その結果、通電率が高すぎる場合は細胞生存率が低下し、低すぎる場合には細胞遊走や増殖能が低下した結果となり、50%の通電率が最適であることが確認された。 本人担当部分：計画、細胞培養、考察、まとめ 共同演者：植村弥希子、杉元雅晴、吉川義之、平松輝隆

41. ストレッチングと電気刺激療法の併用が糖尿病患者における歩行時の足底圧異常に対して与える是正効果	―	令和1年6月	第11回日本下肢救済・足病学会学術集会（神戸）	糖尿病患者の足潰瘍は足関節可動域制限による前足部の足底圧の上昇が知られている。これまで我々は健常者に対して、下腿三頭筋へのストレッチングと前脛骨筋に対して電気刺激を実施することで前足部の足底圧を減少させることを確認した。本研究は糖尿病患者に対して実施し、健常者と同様の結果であるかを確認した。その結果、糖尿病患者においても同様の結果が得られ、下腿三頭筋へのストレッチングと前脛骨筋への電気刺激療法は足底圧を減少させることが確認された。 本人担当部分：実施、評価、まとめ 共同演者：守口舞輝、前重伯壮、藤井美樹、金沢星慶、吉川義之、北村和也、奥野史也、細見雅史、原賢太、寺師浩人、藤野英己
42. 膝OA一症例に対する経皮的電気刺激治療の鎮痛効果が日常生活と精神活動に及ぼす影響	―	令和1年9月	第27回日本物理療法学会（東京）	変形性膝関節症に対する経皮的電気刺激療法（TENS）は鎮痛効果が示されている。本研究は、1症例に対して日常生活上でも装着できる電気刺激治療器を用いて鎮痛効果を検証するとともに日常生活と精神活動を検証した。その結果、鎮痛効果が得られ、日常生活と精神活動にも良い影響を与えていることが示唆された。今後は症例数を増やして検討していく予定である。 本人担当部分：実施、評価、まとめ 共同演者：徳田光紀、庄本康治、吉川義之、瀧口述弘、山口智史
43. 上腕三頭筋腱振動刺激時の肘関節角度の違いが運動錯覚の惹起に及ぼす影響	―	令和1年9月	第27回日本物理療法学会（東京）	振動刺激は運動錯覚を起こすことが明らかとされている。この運動錯覚は筋紡錘への刺激により起こるものとされているため、振動刺激による運動錯覚は筋緊張制御に期待できる物理療法手段である。本研究では上腕三頭筋に対して振動刺激を加えることにより肘関節角度に影響を及ぼすかを検討した。その結果、上腕三頭筋への振動刺激は肘関節角度に影響を及ぼし運動錯覚が確認された。今後は脳卒中片麻痺患者の痙性筋に対して実施していくことで臨床応用に期待できる。 本人担当部分：実施、評価、まとめ 共同演者：城野靖朋、神里巌、吉川義之、辻下守弘
44. 肉眼的には判別困難な深部損傷褥瘡を超音波検査により確認できた褥瘡の一症例	―	令和1年9月	第27回日本物理療法学会（東京）	褥瘡は圧迫とずれ力により発生するといわれているが、深い褥瘡については骨側から発生することが知られている。中でも皮膚損傷のない深部褥瘡（DTI)については早期判別が困難であり、皮膚損傷が確認された時には骨まで至る難治性潰瘍となっていることがある。本研究ではDTIの疑いのある紫斑形成された褥瘡に対して超音波画像診断装置を用いて早期よりDTIを確認した。その結果、DTIが確認され早期より介入できたことで皮膚損傷が発生する前に治癒となった症例を経験した。今後は症例数を増やすことで早期介入の効果を検証したいと考えている。　本人担当部分：実施、評価、まとめ 共同演者：植村弥希子、北村瑠玲、杉元雅晴、吉川義之、平松輝隆、山浦生也、寺師浩人

45.直流パルス微弱電流刺激療法の電極改良により治癒が促進された症例	―	令和1年9月	第27回日本物理療法学会（東京）	褥瘡に対する電気刺激療法は治癒促進効果が示されている。しかし、創が小さくなるにつれて創部に適切に電流刺激をすることが難しくなる。そこで本研究は改良電極を用いて創の周囲から創部に対して適切に電流刺激が実施できるように実施した。その結果、小さくなった褥瘡に対しても変わらず電流刺激ができ、治癒速度を落とすことなく電気刺激療法が実施できた。今後は症例数を増やして検討していく必要がある。 本人担当部分：実施、評価、まとめ 共同演者：出口太紀、杉元雅晴、植村弥希子、吉川義之、平松輝隆、巻渕弘治
46.創傷被覆材における近赤外線透過率の検証	―	令和3年2月	第1回日本物理療法研究会（WEB）	褥瘡に対する近赤外線療法を実施する場合、褥瘡部分を覆っている創傷被覆材上から近赤外線療法を実施することが推奨される。そのため、ドレッシング材の赤外線透過率を検証した。近赤外線透過率はドレッシング材の種類により異なり、滲出液を吸収した際に透過しやすいドレッシング材や滲出液を吸収する前の方が透過しやすいドレッシング材があった。そのため、ドレッシング材によって照射時期を変える必要であることが確認された。 本人担当部分：研究計画、実施、統計処理、発表 共同演者：吉川義之、城野靖朋、滝本幸治、辻下守弘
47.培養筋管由来エクソソームがマクロファージM1gene発現に与える抑制効果	―	令和3年9月	第23回日本褥瘡学会（オンデマンド）	本研究では骨格筋由来エクソソームがマクロファージの極性変化に与える影響について検討した。その結果、骨格筋由来エクソソームがM1gene発現抑制に有効であり、作用時間を管理する必要性が示唆された。 本人担当部分：研究補助、まとめ 共同演者：前重伯壮、山口亜斗夢、馬暁琪、野口ひかり、植村弥希子、吉川義之、近藤浩代、藤野英己
48.ヒト皮膚由来線維芽細胞における温度の違いが細胞増殖に与える影響	―	令和3年10月	第28回日本物理療法学会（WEB）	高齢者は低体温であり、皮膚温も低めである。しかし、培養細胞の環境は37℃で設定されているため、高齢者の体温を反映されていないと考えられる。そのため、ヒト皮膚由来線維芽細胞を温度環境の違う状況で培養し増殖を確認した。その結果、コントロール群に比べ39℃で有意に増殖し、31・33・35℃で有意に増殖が抑制された。これらの結果から体温低下は創傷治癒を抑制する影響があり、皮膚温の管理が創傷治癒を高める可能性が考えられた。 本人担当部分：研究計画、実施、統計処理、発表 共同演者：吉川義之、野中紘士、滝本幸治、杉元雅晴、前重伯壮、植村弥希子

49. 近赤外線照射はヒト皮膚由来線維芽細胞増殖に影響を及ぼさない	―	令和4年7月	第31回奈良県理学療法士学会（奈良）	褥瘡治癒において必須となる線維芽細胞に対して電気刺激を実施し細胞増殖に最適な刺激周波数を検討した。その結果、単相性パルス電流刺激，強度200μA，周波数2Hz，電流時間率50%の電気刺激は細胞増殖を促進せず，細胞増殖を抑制することが示唆された．一方、筋線維芽細胞への分化は細胞増殖を停止させた状態で起こることが示されているため、上記の刺激条件が筋線維芽細胞への分化を促す可能性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、統計処理、発表 共同演者：吉川義之、野中紘士
50. 褥瘡に対する単相性パルス微弱電流刺激療法の効果とbody mass indexの関連性	―	令和4年11月	第52回日本創傷治癒学会（名古屋）	本研究では、ポケットを有する褥瘡に対する単相性パルス微弱電流の効果と背景因子を検証した。結果、単相性パルス微弱電流を実施した際は縮小率は有意に高値であった。また、非刺激縮小率は背景因子に対して有意な相関を示さず、単相性パルス微弱電流の縮小率はBMIに対して正の相関を示した。相対縮小率についてもBMIのみ正の相関を示した。以上のことから、褥瘡に対する単相性パルス微弱電流は創の縮小を促進し、BMIが高いほど単相性パルス微弱電流の効果が得られやすいことが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、統計処理、発表 共同演者：吉川義之、前重伯壮、平松輝隆、植村弥希子、寺師浩人
51. 車椅子クッションの違いが坐骨部圧に及ぼす影響について	―	令和4年12月	保健医療学学会第12回学術大会（奈良）	本研究では、車椅子クッションによる坐骨部圧の違いを比較検討した。結果、クッションを使用することで坐骨部圧は有意に低下し、素材による違いはウレタンおよびハイブリッドの減圧効果が高かった．坐骨部圧はクッションなしの場合はBMIと坐骨部圧に有意な負の相関を認めたが，クッションを用いることで相関関係は消失した．時間経過による坐骨部圧が変化しにくい素材はゲルであった．以上のことから，車椅子クッション使用時は対象者の特徴に合わせて選ぶ必要があると考えられた。 本人担当部分：研究計画、実施、統計処理、研究責任者 共同演者：瀧田脩斗，青山侑樹，和田哲平，永吉恭子，前重伯壮，吉川義之
52. 車椅子シートのたわみ補正がクッション使用時の坐骨部圧に与える影響	―	令和5年9月	第25回日本褥瘡学会（神戸）	本研究では車椅子クッションを有効に使用するため、車椅子シートのたわみを補正することに着目した。たわみの補正はウレタン素材のマットをシート状に敷きその上にクッションを置くようにした。その結果、たわみを補正した方が坐骨部圧が有意に減少した。以上のことにより、シートのたわみを補正して車椅子クッションを置くことが坐骨部圧の減少に効果的であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、統計処理、研究責任者 共同演者：吉川義之、永吉恭子、北出貴則、青山侑樹、瀧田脩斗、和田哲平、前重伯壮、寺師浩人

53. 貼付電極を用いた直流微弱電流刺激療法を実施した症例	―	令和6年1月	日本物理療法合同学術大会2024（奈良）	褥瘡に対する電気刺激療法はこれまで創部に直接電極を充てて実施されてきた。しかしその方法では体動により上手く電気刺激が実施できない症例がいた。そこで貼付電極を用いて電気刺激を実施した。その結果、貼付電極を用いても一定の効果が得られた。本報告はその症例をまとめた症例研究である。 本人担当部分：まとめ、研究アドバイス 共同演者：平松輝隆、植村弥希子、吉川義之、森悠貴、市堀涼子
54. ベッドの背上げおよび頭側挙上が仙骨部・坐骨部圧に与える影響	―	令和6年1月	日本物理療法合同学術大会2024（奈良）	本研究ではベッド上臥位時の背上げによる圧の変化を検討した。褥瘡の原因の一つに圧の上昇があり、圧を分散させることにより褥瘡予防が可能となる。これまで背上げ角度は30度までが推奨されてきたが、食事などの嚥下の際30度では不十分であることが指摘されてきた。そのため、背上げ30度に加え頚部を30度上げることにより仙骨部圧を上昇させずに60度程度の頭頚部の位置が確保できると考えた。その結果、仙骨部圧を上昇させずに頭頚部の位置を確保することが可能であった。 本人担当部分：研究計画、解析、まとめ、研究責任者 共同演者：佐々木基代、吉川義之、永吉恭子、馬暁琪、前重伯壮、寺師浩人
55. ベッド上臥位における大殿筋への神経筋電気刺激が臀部圧へ与える影響	―	令和6年1月	日本物理療法合同学術大会2024（奈良）	仰臥位および30度背上げ臥位における仙骨部圧を減少させるため、大殿筋への電気刺激を実施した研究である。本研究結果から大殿筋に対して筋収縮を伴う電気刺激を実施することで仙骨部圧が有意に減少し褥瘡予防に有効であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、解析、まとめ、研究責任者 共同演者：下岡美月、吉川桃代、吉川義之、前重伯壮、植村弥希子、山口亜斗夢、馬暁琪、寺師浩人

「研究大会」 1.温熱・振動・磁気刺激により疼痛が緩和した一症例	―	平成28年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会　茨城2016（茨城）	坐骨神経痛によりADLが低下した症例に対して温熱・振動・磁気刺激の3つの要素がある物理療法機器を使用した。坐骨神経痛に対して薬物療法や電気刺激療法を実施したが疼痛が緩和しなかったため、温熱・振動・磁気刺激が可能な物理療法機器で緩和を試みた。その結果、疼痛が緩和しADLが改善したため報告した。 本人担当部分：計画、実施、解析、考察、まとめ、発表 共同演者：吉川義之、小枝允耶、小枝美由紀
2.通所介護利用者における2型糖尿病罹患の有無が身体機能に及ぼす影響に関する調査―後ろ向き調査研究―	―	平成29年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会　久留米2017（福岡）	近年、糖尿病は筋力低下の原因や日常生活活動低下の原因とされている。そのため、当通所施設利用中の方を対象を糖尿病群と非糖尿群に分け、過去6ヶ月の身体機能を後ろ向きに調査した。その結果、非糖尿病群は身体機能が向上していたにも関わらず、糖尿病群は能力の維持もしくは低下していた。そのため、糖尿病患者に対する運動療法をより吟味する必要性が示唆された。 本人担当部分：計画、解析、考察、まとめ 共同演者：松本洋平、吉川義之、門條宏宣、吉川絵美、小枝允耶、菅原史帆、岩城一孝、松田美佳、長谷川千紗、小倉敬史、水岡崇、藤井勇太、千田日向子

教育研究業績書は、下記の点に注意して作成してください。

１．様式はエクセル形式、Ａ４版、文字はＭＳ　明朝で基本的に９ポイントで作成してください。
２．１つのセルには１５行以内で記入し、下部に約２行分の空白部分を入れてください。
３．各ページの上部の罫線は必ず入れてください。
４．枠外下段にページ番号を通し番号で記入してください。
５．記入した文字が印刷した際に途中で切れることが無いよう、最後に印刷プレビュー画面で確認してください。

教 育 研 究 業 績 書

令和 6年　1月　9日

氏　名　　笹野　弘美　　印

研究分野	研究内容のキーワード
人間医工学・健康スポーツ科学・社会医学	理学療法学・ヘルスプロモーション・加齢老化・地域保健・多職種連携教育

教育上の能力に関する事項	年　月　日	概　　要
1　教育方法の実践例		
1）高齢者の体力測定実施	平成26年4月 ～ 平成30年3月	名古屋学院大学リハビリテーション学部理学療法学科 高齢者の体力とヘルスプロモーションについて学習し、地域在住高齢者に対し体力測定の企画及び実施、結果のフィードバックを行うことで、高齢者の問題点について考える。体力測定に必要な知識とその結果が意味することを理解し、また、対象者に適切なフィードバックをする必要性を理解することができた。
2）小規模多機能型居宅介護施設でのレクリエーション実習の実施	平成26年4月 ～ 平成30年3月	名古屋学院大学リハビリテーション学部理学療法学科 小規模多機能型居宅介護施設におけるレクリエーションの企画及び実施。理学療法士が行うレクリエーションについて学習する。理学療法士がレクリエーションを行う意義、同じ内容であっても対象者の状態に応じた対応の必要性を理解できた。
3）高齢者へ運動指導を実施	平成26年4月 ～ 平成30年3月	地域在住高齢者に対し身体的精神的機能の維持を目的とした運動指導を行い、運動習慣をつけていただく方法を検討する。地域で生活する高齢者の特性について理解し、状態に応じて適切な運動を選択し指導する必要性を理解した。
4）多職種連携教育において医学部・薬学部・看護学部とともに行事を企画	平成26年4月 ～ 平成30年3月	名古屋学院大学リハビリテーション学部理学療法学科 医学部・薬学部・看護学部の学生とともに地域住民に対し健康に関する行事を企画及び実施。各学部の特色、使用する用語の違いなどを理解し、協働で1つの事に対応する必要性と困難さを理解した。
5）多職種連携教育において医学部・薬学部・看護学部とともに地域在住高齢者宅へ訪問を実施	平成26年4月 ～ 平成30年3月	名古屋学院大学リハビリテーション学部理学療法学科 医学部・薬学部・看護学部の学生とともに地域在住高齢者宅へ訪問し、閉じこもりがちな高齢者を見つけ参加を促すとともに健康面・生活面での問題点を見つけ解決策を検討する活動を企画及び実施。地域在住高齢者の現状を知るとともに、多職種で関わることの必要性を理解した。
6）ご当地ソングに合わせた体操の作成と普及	平成26年8月 ～ 平成28年3月	名古屋学院大学リハビリテーション学部理学療法学科 住民からの依頼により行政の許可のもとご当地ソングに合わせた高齢者向けの体操を作成し、地域イベントや集会にて普及活動を実施。高齢者に適した運動と行政への働きかけおよび協同の必要性について理解した。
7）地域で予防活動に関わる理学療法士の見学及び体験の企画、実施	平成28年1月 ～ 平成28年3月	名古屋学院大学リハビリテーション学部理学療法学科 地域で体操教室等の予防活動に関わる理学療法士に同行し見学及び体験の企画及び実施。理学療法士が予防に関わる意義について学習し、理学療法士が予防に関わることの難しさと地域で求められている事について理解した。
8）行政と共同で地域住民の予防活動を企画運営	平成29年4月 ～ 平成30年3月	名古屋学院大学リハビリテーション学部理学療法学科 行政の依頼による地域住民の予防活動を企画及び実施。理学療法士と行政との関わり、理学療法士が行政から求められている事について学習するとともに、理学療法士ができる予防活動について検討。行政、地域在住高齢者それぞれが理学療法士に求めている

		事、さらに理学療法士が予防活動に関わる必要性について理解した。
9）オンライン講義の実施	令和2年5月 ～ 令和5年4月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科 新型コロナウイルス感染拡大に伴い、講義および臨床実習をオンラインにて実施。限られた環境の中で最大限の知識と技術が習得できるよう工夫した。
10）学内実習	令和2年8月 ～ 現在	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科 新型コロナウイルス感染拡大に伴い、医療介護現場での臨床実習の実施が困難になったため、ライブ配信やグループ討議など学内において同等の知識や技術が習得できるよう工夫した。
11）過疎地域での体力測定実施	令和4年4月 ～ 現在	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科 卒業研究にて過疎地域の地域在住高齢者に対する体力測定に参加し、過疎地域および高齢者の問題点について考える。体力測定に必要な知識とその結果が意味することを理解するとともに過疎地域での理学療法士の役割について理解した。
12）コロナ禍における地域での予防活動と多職種連携教育の企画運営	令和4年8月 ～ 現在	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科 新型コロナウイルス感染拡大化において地域住民の予防活動について企画することの困難さ、さらに薬学部および地域 NPO 法人スタッフと合同で予防活動を実施することにより地域における多職種連携の重要性について理解した。
2　作成した教科書・教材		
1）スライド作成	平成26年4月 ～ 現在	地域理学療法学・地域理学療法学演習・日常生活動作学・福祉用具・生活環境論・老年期障害理学療法学・ヘルスプロモーション論等において、パワーポイントにてスライドを作成し、講義資料として使用。
2）予防理学療法学要論	平成29年1月	予防理学療法を体系化し基礎から応用までを網羅した教科書。
3）標準理学療法学 専門分野 理学療法 臨床実習とケーススタディ 第3版	令和2年12月	理学療法士養成課程における「臨床実習」の教科書。
4）理学療法ガイドライン第2版	令和3年10月	エビデンスに基づく理学療法によって臨床の質を高めるために、これからの臨床の指針となる一冊であり、学内教育においても教科書として活用できる。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
履修者による評価 （オムニバス科目は実施せず）	令和5年8月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻 地域理学療法学演習（履修者51名、回答率92%）5段階評価：3.6
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
「シンポジウム」		
1）AIP 社会の実現に向けて	平成26年11月	一般の方々に対し、理学療法士について及び AIP（Aging in Place）と理学療法士が AIP に関わる目的について講演。
2）学生の地域参加による AIP コミュニティづくり	平成27年2月	一般の方々に対し、なごやかモデルにおける名古屋学院大学リハビリテーション学部の活動報告と今後の課題について講演。
3）フラダンスによるロコモティブシンドロームの予防	平成28年2月	一般の方々に対し、ロコモティブシンドローム及びロコモティブシンドロームとメタボリックシンドローム・認知症とのかかわりについての講演、及び、フラダンス教室の紹介。
4）なごやかモデルにおける活動報告	平成29年12月	なごやかモデルにおける名古屋学院大学の取り組みと成果報告について発表。
「講演会」		
1）腰痛の予防と改善ワンポイントアドバイス	平成26年12月	地域住民に対し、腰痛の発生機序と予防・痛みの改善について講演。

2）レッツ！タオルを使って健康体操	平成27年5月	地域住民に対し、タオルを利用して簡単にできるストレッチ及び筋力トレーニングを指導。
3）予防理学療法の基本と実践	平成29年7月	理学療法士に対し、健康・AIP（Aging in　Place）・予防理学療法の概要についての講演、及び、介護予防の実践例としてフラダンス教室の紹介。
4）健康と体力の本当の話	令和5年6月	地域住民に対し、予防医学・予防理学療法の観点から生き生きとした暮らしを続けるための健康と体力について講演。
「講座・研修等」		
1）安全な介助のために	平成26年3月	飲食店従業員に対し、飲食店を開店するにあたり必要な身体及び精神障害者に対する知識と安全な介助について研修を実施。
2）日常での運動機能維持及び低下防止について	平成27年5月	一般の方々に対し、老化に伴う身体的・精神的変化についての講演、及び、日常生活でできる筋力トレーニングと複合課題を指導。
3）AIP について（なごやかモデルの紹介）	平成27年5月	リハビリテーションスタッフに対し、AIP（Aging in　Place）と理学療法士が AIP に関わる目的、及び「なごやかモデル」での AIP への取り組みについて講演。
4）痛みとその対処法について	平成28年1月	フラダンスの講師に対し、レッスン時に問題となる肩・腰・膝の痛みについて、出現の原因と疾患、その対処法について講演。
5）簡単筋トレで老化防止	平成28年3月	地域住民に対し、老化に伴う身体機能の低下について講演、及び、日常生活でできる筋力トレーニングを指導。
6）障害者の介助方法について	平成28年8月	飲食店従業員に対し、視覚障害者に対する知識の習得と安全な介助方法について研修を実施。
7）予防理学療法研修会(基礎編)(全2回)	平成29年1月 ～ 平成29年2月	理学療法士に対し、予防理学療法を教授できる理学療法士を養成するため、予防理学療法の基礎について講義。
8）日常生活で予防しようフレイルと MCI	平成29年3月	地域住民に対し、フレイルと MCI について概要と予防法について講演、及び、予防のためのストレッチ・筋力トレーニング・複合課題について指導。
9）いつまでも住み慣れた街で暮らすために～AIP の実現のための予防理学療法～	平成29年9月	中部リハビリテーション専門学校同窓会のナイトセミナーにおいて、予防理学療法の基礎と理学療法士の関わり方について講演。
10）予防理学療法研修会(基礎編)(全4回)	平成29年12月 ～ 平成30年2月	理学療法士に対し、予防理学療法を教授できる理学療法士を養成するため、予防理学療法の基礎について講義。
11）予防理学療法研修会(基礎編)	平成30年7月	理学療法士に対し、予防理学療法を教授できる理学療法士を養成するため、予防理学療法の基礎について講義。
12）フラダンスで健康に！	平成30年8月	NHK 名古屋放送局の情報番組「さらさらサラダ」にてフラダンスの運動効果について解説。
13）予防理学療法研修会(総論)	令和1年11月	理学療法士に対し、予防理学療法を教授できる理学療法士を養成するため、予防理学療法の基礎について講義。
14）薬剤師のためのスキルアップセミナー	令和1年12月	名古屋市立大学において、薬局薬剤師に対し予防理学療法についての講義と健康維持のための体操指導を実施。
15）アロハ　フラダンスで介護予防	令和3年7月	日本予防理学療法学会第6回サテライト集会の市民公開講座において、フラダンスを活用した介護予防プログラムについての実技を含めた講演。
16）軽度認知障害理学療法ガイドライン・フレイル理学療法ガイドラインの紹介	令和3年11月	第8回日本予防理学療法学術大会の特別講演Ⅲにおいて、令和3年10月に発刊した理学療法ガイドライン第2版の中で日本予防理学療法学会が担当した「軽度認知障害理学療法ガイドライン」および「フレイル理学療法ガイドライン」について紹介。
17）理学療法ガイドライン第2版について	令和4年3月	予防理学療法セミナーにおいて、理学療法ガイドライン第2版の作成過程から活用方法までを教授。
18）予防理学療法と Aging in Place～いつまでも住み慣れた街で暮らすために～	令和4年9月	福岡県理学療法士会主催の理学療法講習会において、健康と予防理学療法及び Aging in Place と理学療法士が Aging in Place に関わる目的について講演。
19）心と体を元気にかんたん筋トレで老化防止!!	令和5年9月	地域住民に対し、老化と加齢による機能低下および予防について講演し、日常生活で簡単にできるストレッチおよび筋力トレーニングを指導。

５　その他		
1）地域参加型多職種連携教育	平成26年4月 ～ 平成30年3月	名古屋市立大学医学部・薬学部・看護学部、名古屋工業大学大学院医療工学との地域参加型多職種連携教育を担当。

職務上の実績に関する事項	年月日	概　　要
１　資格、免許		
1）理学療法士免許	平成1年5月	登録 第17016号
2）福祉用具プランナー	平成17年2月	公益社団テクノエイド協会　登録 第16－30007号
3）学士(人間科学)	平成18年3月	人間総合科学大学
4）福祉住環境コーディネーター2級	平成18年7月	東京商工会議所　登録 第16－2－03666号
5）第35回理学療法士・作業療法士養成施設等教員講習会修了	平成21年2月	厚生労働省、(財)医療研究推進団　第3928号
6）専門理学療法士(予防理学療法)	平成21年3月	日本理学療法士協会(生活環境支援より移行)　S08-0000023
7）専門理学療法士(地域理学療法)	平成21年3月	日本理学療法士協会(生活環境支援より移行)　S08-0000021
8）専門理学療法士(支援工学理学療法)	平成21年3月	日本理学療法士協会(生活環境支援より移行)　S08-0000025
9）修士(医療リハビリテーション学)	平成24年3月	神戸学院大学大学院
10）認定理学療法士(学校教育)	平成28年3月	日本理学療法士協会　N16-0000816
11）Lomi Lomi セラピスト	平成28年9月	Aloha Lomi
12）博士(医療リハビリテーション学)	平成31年3月	神戸学院大学大学院
13）フィットネスフラ インストラクター	令和4年12月	JWI(JAPAN WELLNESS INNOVATION)
14）第1057回臨床実習指導者講習会修了	令和5年7月	厚生労働省　第2023-1057-023号
２　特許等		
特記事項なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
1)介護認定審査員	平成16年4月 ～ 平成21年3月	名古屋市中川区
2)在宅医療・介護連携部会専門委員	平成26年6月 ～ 平成28年3月	名古屋市緑区
3)平成26年度在宅医療と介護の連携に関する調査	平成26年6月	名古屋市緑区 研究経費：平成26年度　725千円 研究代表者：稲葉静代 研究分担者：姜瑛鎬，佐藤貴久，小森敦夫，山口一丸，永田康子，稲葉静代、鈴木恵美子、橋本慶太郎、水野ますみ、高木由加里、黒木信之、赤津裕康，川出義浩、村上正知、笹野弘美
4)サンシティ視察	平成26年10月	アメリカ合衆国アリゾナ州マリコパ郡内に位置する国勢調査指定地域サンシティにおいて「豊かに老いを迎え、その人らしく暮らすことのできるコミュニティ」の視察。

5)介護予防教室	平成26年12月 ～ 現在	名古屋市緑区
6)在宅医療推進多職種連携研修会準備委員	平成27年1月 ～ 平成28年3月	名古屋市緑区
7)住民の体力調査	令和4年4月 ～ 現在	岡山県真庭郡新庄村 (一社)むらづくり新庄村共催、新庄村後援にて実施
8)認知症カフェへの慰問	令和5年9月	名古屋市熱田区にある認知症カフェ「ろくちゃん」にて笹野が実施している介護予防フラダンス教室に通う高齢者9名とともに慰問。
４　その他		
特記事項なし		

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(著　書)				
1.　予防理学療法学要論	共著 (分担)	平成29年 1月	医歯薬出版株式会社	初めての予防理学療法分野の書籍であり、予防理学療法を体系化し、予防理学療法の定義、領域、制度、研究法、予防理学療法の役割などの基礎から栄養学や人間の成長との関わり、メタボリックシンドローム、認知症、スポーツ障害の予防や各疾患の再発予防などの応用までを網羅した教本。 B5版、全239ページ 共著者：新井武志、伊藤智子、伊東美緒、井上和久、浦辺幸夫、大江浩子、大渕修一、金子文成、上出直人、神谷健太郎、河合恒、解良武士、小島基永、小松泰喜、小森昌彦、齊藤正和、笹野弘美、佐野裕子、重田美和、柴喜崇、島田裕之、仙波浩幸、高田真利絵、高野賢一郎、高橋浩平、永井聡、中山健夫、樋口満、廣滋恵一、藤田博曉、藤本修平、古名丈人、細井俊希、三宅わか子、山田実、吉田剛、渡辺学 本人担当分：Ⅱ章5学童期の予防pp. 57～62
2.　地域包括ケアと口腔ケア	共著 (分担)	平成29年 8月	(一財)口腔保健協会	歯科医師及び歯科衛生士向けの書籍であり、地域包括ケアの基礎知識や医療計画に盛り込むべき5疾病における口腔ケアを解説するとともに、他職種が歯科に望むこと、また歯科が他職種とどのように連携していけばよいかについて、連携に関わる10職種が解説。 共著者：赤津裕康、粟飯原けい子、伊藤明美、稲本陽子、岩田彰、大原弘隆、小澤和枝、筧康正、河合李美、川出義浩、岸本裕充、髙本純平、古森孝英、坂井謙介、笹野弘美、佐藤恵子、杉本太造、田中創始、塚田淳子、馬場隆幸、本多豊彦、正木克由規、真下美枝子、宮本佳宏、森亮太、森寺邦康、内山千佳、山田耕太郎、山田正弘 B5版、全179ページ 本人担当部分：第2章2-2脳卒中－口腔ケアの実例pp. 36～37、第4章4-7多職種におけるそれぞれの役割と相互理解－理学療法士pp. 140～144
3.　標準理学療法学専門分野　理学療法　臨床実習とケーススタディ第3版	共著 (分担)	令和3年 10月	株式会社医学書院	理学療法士養成課程における「臨床実習」の教科書であり、臨床実習を控えた学生に主眼をおきつつ，教員や臨床実習指導者にも役立つ内容。学内実習やOSCE(客観的臨床能力試験)におけるペーパーペイシェント教材としても活用でき、また、新型コロナウイルス感染症とそれに対する学内実習の実際に関する内容も記載。 共著者：野口七恵、鶴見隆正、山田千鶴子、小貫睦巳、大塚圭、鈴木由佳里、櫻井宏明、金田嘉清、中川法一、大森

				圭貢、池田耕二、坂上昇、森尾裕志、宮本謙三、辻下守弘、岡崎大資、松浦純平、鈴木理砂、山崎貞一郎、林克郎、小嶋功、真壁寿、佐藤和命、富樫誠二、河村廣幸、渡邉観世子、小林量作、田中聡、神先秀人、工藤聡、畠中泰彦、加藤宗規、櫻井好美、藤田峰子、小柳磨毅、芥川知彰、内田茂博、鳥居昭久、伊藤俊一、長倉裕二、甲田宗嗣、間瀬教史、武市尚也、野村卓生、藤井伸行、平野康之、田邊素子、笹野弘美 B5版、全285ページ 本人担当部分：第8章4フレイル・サルコペニアに対する予防理学療法pp.276～279
4. 理学療法ガイドライン第2版	共著(分担)および編集	令和3年10月	株式会社医学書院	エビデンスに基づく理学療法によって臨床の質を高めるために、これからの臨床の指針となる一冊。理学療法の現在の立ち位置と進むべき方向を示すため21領域、41疾患・外傷を網羅。 統括委員：吉尾雅春、植松俊光、藤澤宏幸、吉井智晴、小塚直樹、赤坂清和、諸橋勇、片田圭一、中山恭秀、神津玲、新小田幸一、藪中良彦、舟見敬成、浦辺幸夫、池添冬芽、笹野弘美、日高正巳、川島敏生、前島洋、筧重和、中山孝、乙戸崇寛、藤本修平、佐々木祥、高﨑博司、小向佳奈子、杉田翔 （ガイドラインの執筆は各作成班で行っており個人を特定できないため、統括委員を記載） B5版、全632ページ 本人担当部分：作成資金、利益相反(COI)pp.xiii～xiv理学療法標準化検討委員会ガイドライン部会員(統括委員)として編集を行った。

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(学術論文)				
1. フラダンスは介護予防プログラムとして有効か(査読付)	共著(筆頭)	平成28年3月	名古屋学院大学論集　医学・健康科学・スポーツ科学篇第4巻2号(pp.15～22)	フラ未経験の高齢女性7名に3か月間(計12回)60分のフラレッスンを実施し、実施前後の運動機能・動作能力、E-SAS、HDS-Rを比較。対象者数が少なく統計学的有意差は認められなかったが、運動機能・動作能力6項目中4項目及びE-SAS5項目中3項目に改善傾向が見られた。また3か月で欠席及び辞退者は無かった。介護予防には継続的な運動が重要であり3か月の実施で改善傾向が見られている事よりフラは有効な手段と考える。今後は対象者を増やし検証していく必要がある。 共著者：◎笹野弘美、後東尚樹、北村敏乃
3. 地域在住高齢者の筋力と骨格筋量及び身体機能との関連性(査読付)	2	平成28年3月	名古屋学院大学論集医学・健康科学・スポーツ科学篇第4巻2号(pp.23～33)	地域在住高齢者52名に身体機能検査、体組成測定、E-SAS、MMSEを実施し、関連性について検討。筋力及び骨格筋量は女性に低値であり、骨格筋量は加齢に伴い低下する傾向にあった。筋力と骨格筋量は有意な相関関係にあり特に握力で相関が強かった。運動機能は筋力との相関を認めたが、骨格筋量との相関は認めなかった。認知機能と筋力及び骨格筋量に相関は認めなかった。今後も同地区にて経年的な経過を検証しながら健康増進を目指した取り組みに活かしたい。 共著者：平野孝行、笹野弘美
3. 多職種連携教育－なごやかモデルの紹介と学生の満足度－(査読付)	共著(筆頭)	平成29年3月	名古屋学院大学論集　医学・健康科学・スポーツ科学篇第5巻2号(pp.37～47)	「文部科学省 未来医療研究人材養成拠点形成事業 なごやかモデル」で実施しているIPEの紹介と、参加学生の満足度調査報告及び課題の検討を実施。学生は概ね満足しているも、各大学独自のカリキュラムがありキャンパスも離れている事より授業内に合同で活動することが困難だった。また単年度より複数年度参加学生の方が肯定的な意見が多いことより、SNS等の活用により学生同士が密に連絡を取りお

				互いを理解し共通認識を持つことが必要である。また、より学び易くなるよう時間割の調整や休日利用の検討も必要である。 共著者：◎笹野弘美、平野孝行
4. フラダンスの運動効果の検証と介護予防プログラムとしての有効性の検討(第1報)(査読付)	共著 (筆頭)	平成30年 3月	名古屋学院大学論集 医学・健康科学・スポーツ科学篇第6巻2号(pp.21～27)	地域在住高齢女性18名に週1回60分のフラレッスンを実施し、レッスン前及び開始3・6か月の運動機能・動作能力等を比較。FR、立ち上がりに有意差が認められ、実数で長座体前屈、片足立ち、反応時間に半数以上、股外転筋力、TUGに7割以上の改善が認められた。また希望者14名とインストラクターに三次元動作解析を実施。レッスン開始12カ月でインストラクターの動きに近づいた。これらよりフラは体幹・股関節周囲筋を多く使いステップに応じ個々の筋を選択的に使うため体幹・股関節周囲筋の筋力維持・強化に有効であり、介護予防の有効な手段である。 共著者：◎笹野弘美、平野孝行、森田良文、佐藤徳孝
5. 介護予防におけるフラダンスの有効性の検討(兼博士論文)(査読付)	共著 (筆頭)	平成31年 3月	地域リハビリテーション第14巻1号(pp.80～85)	フラ未経験高齢女性18名週1回60分のフラレッスンを実施、36か月継続できた14名のレッスン前・開始から3か月毎の運動機能・動作機能・能力を比較し、立ち上がり、FRに統計的有意差が認められ、片足立ちにおいて改善傾向が見られた。BMI、握力、股外転筋力、TUG、反応時間、つぎ足、E-SAS、MMSEの平均値に大きな低下は見られなかった。これらよりフラは体幹・股関節周囲筋の筋力維持・強化に有効である。また介護予防には運動の継続が重要であるが、14名が36か月継続できており、フラは介護予防の有効な手段である。 共著者：◎笹野弘美、備酒伸彦、平野孝行
6. フラの上達度の可視化と，上達度と身体機能・運動機能との関係について(第1報)(査読付)	共著 (筆頭)	令和3年 7月	医療福祉情報行動科学研究第8巻(pp.91～98)	三次元動作解析のグラフよりフラの上達度の可視化を検討し、リサジュー図形にて可視化が可能であるとわかった。さらにフラを活用した介護予防教室に参加し三次元動作解析を実施した9名より無作為に抽出した3名で、リサジュー図形を用いた上達度と身体機能・運動機能との関係について検証し長座体前屈とフラの上達度との関係がある可能性が高いとわかった。今後、他の6名も検証することで、フラを用いたより運動効果の高いプログラムの作成が可能となり、介護予防に寄与できると考える。 共著者：◎笹野弘美、平野孝行、森田良文、佐藤徳孝
7. フラの動作に関する研究－介護予防プログラムの検討に向けて－	共著 (筆頭)	令和3年 12月	中部リハビリテーション雑誌16巻(pp.8～11)	20歳代女性フラダンサー1名に対しフラの6種類の基本ステップ時の体幹及び下肢8筋の表面筋電を計測し、最大筋力時の筋活動と比較。多裂筋は全てのステップで60%、中殿筋も1つのステップを除いて50%前後の筋活動が見られ、ステップにより各筋の活動量に違いがあることが分かった。よって、多くの種類のステップを組み合わせて運動頻度を多くすることで、多裂筋、中殿筋以外の筋においても高い運動効果を得られる可能性があると考える。 共著者：◎笹野弘美、下野俊哉
8. コロナ禍における地域理学療法・作業療法実習の取り組みと課題－学内実習の概要と学生アンケート調査による考察－(査読付)	共著	令和4年 2月	医療福祉情報行動科学研究第9巻(pp.31～38)	指定規則改正により地域実習が必須となったが、COVID-19感染拡大により令和2・3年度は学内にて実施した。開始1か月前に予習課題をHPへ掲載し自己学習を促し、実習ではライブ中継やグループ討議など能動的に学習する機会を多く作った。終了後に振り返ることができるよう復習用資料をHPに掲載した。実習後に実施したアンケートでは7割以上の学生が扱ったテーマについて理解できたと回答したが、次年度以降の実習に関しては多くの学生が不安を持っていると分かった。次期実習までにこれらの結果を踏まえた学習の在り方を考える必要がある。 共著者：滝本幸治、池田耕二、吉川義之、坪内善仁、笹野弘美、前田吉樹、中島大貴、辻下聡馬、大浦智子、山形力生
9. コロナ禍における生活変化がフレイルに及ぼ	共著	令和5年 3月	医療福祉情報行動科学研究第10巻	コロナ禍における生活の変化がフレイルに及ぼす影響を検討するため、地域在住後期高齢者58名を対象に質問紙調査

す影響 ―山間地域における後期高齢者を対象とした質問紙調査―(査読付)			(pp.55～62)	を実施。主観的に移動量、下肢筋力、会話の機会が減少、あるいは心配や不安が増加したと回答した者が多い傾向にあった。FSIによりフレイルと判定されたものは8名で、コロナ禍における移動量、脚筋力の変化が影響していた。また年齢とともに脚筋力、食事量の変化が影響していた。これらより、コロナ禍における主観的な下肢筋力低下がフレイル状態を反映することが示唆された。 共著者：滝本幸治、池田耕二、笹野弘美、辻下聡馬、椿根純子、小杏宣子
10. 地域の特性を考慮した村民の健康増進への取り組みの検討	共著(筆頭)	令和5年12月	奈良学園大学紀要第16集(pp.47～52)	新庄村のAging in Placeの実現及び継続の為、地域の環境や特性・資源を調査した。新庄村は過疎化と高齢化が進んでいるが、元気な高齢者が多い。しかし村内公共交通機関が無く冬は雪深い為高齢者の生活の狭小化が懸念され、医療介護施設が少ない為障害を有すると村内での生活が困難となる。また農業従事者は仕事と生活の線引きが難しい為自身の健康へ目を向ける機会を増やす事が重要である。今後は結果を行政と共有しながらより具体的な関わり方を検討する。 共著者：◎笹野弘美、平野孝行、池田耕二、滝本幸治、辻下聡馬、笹野英樹

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(その他)				
「学会発表」				
1. 多職種連携教育とAIP(Aging in Place)コミュニティ作りについての報告	筆頭	平成27年3月	第24回愛知県理学療法学術集会(ウインクあいち)	「文部科学省 未来医療研究人材養成拠点形成事業 なごやかモデル」におけるIPEの取り組みと「学生と住民と協働してAIPコミュニティ作り」について報告。学生が職種毎に偏りがちな考え方を知り、お互いに話し合うことで最善の方法を見出すという「チーム」を学内教育で体験する事は重要である。しかし多大学で実施する場合はカリキュラムの調整が難しく、遠隔及び時間差での受講、eラーニング等の検討も必要である。
2. 在宅医療・地域包括体制構築に向けた行政、地域、大学連携による調査	共同	平成27年6月	第57回日本老年医学会学術集会(パシフィコ横浜)	名古屋市緑区で在宅医療及び介護施設の利用者本人とその家族(各20名)、サービスを提供する医師・歯科医師・薬剤師・訪問看護ステーション看護師・療法士・ケアマネージャー(計279名)に対し、地域における在宅、高齢者医療、介護体制の問題点と課題を明確化することを目的にアンケート調査を実施。詳細な内容の解析は改めて報告予定であるが、提供者側の回答率が率直に現在の問題点を反映している可能性が推察される。本結果を踏まえ名古屋市全体の現状・意識調査の展開により在宅医療・地域包括体制構築の糧としたい。
3. 介護予防におけるフラダンスの効果について－運動機能・運動能力に着目して－	筆頭	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会(札幌コンベンションセンター)	高齢女性18名を対象に週1回のフラレッスンを行い、介入前後の運動機能・能力について比較した。10項目中3項目に統計学的有意差が認められ、他の5項目にも改善傾向が認められた事より、フラは運動機能・能力の維持改善に有用な手段であると考える。また、実施期間中入院による1名を除く17名が継続できている。フラは楽しく、また人前で披露する満足感・達成感や普段と違う化粧による高揚感が運動の継続に繋がる。介護予防には定期的・継続的な運動が重要であり、本研究によりフラはその有効な手段であると考える。
4. 多職種連携教育－なごやかモデルの紹介と学生の満足度－	筆頭	平成28年11月	第4回日本理学療法教育学会学術集会(国際医療福祉	「文部科学省 未来医療研究人材養成拠点形成事業 なごやかモデル」における多職種連携教育の取り組みと、参加した当大学リハビリテーション学部4年生21名に実施した満足

			学院ももちホール)	度調査について報告。約6割の学生が満足したと回答したが、他職種の理解ができたと回答したのは3割強であった。このプログラムで連携している3大学のうち当大学のみキャンパスが離れており、グループ活動に参加しづらい状況であるため、これが、他の職種を理解できない要因の1つとなっていると考える。
5. 介護予防におけるフラダンスの効果について－フラ基本ステップの動作に着目して－	筆頭	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会(幕張メッセ)	フラインストラクター(48歳)及びフラレッスンに参加している高齢女性14名に対し基本ステップの動作解析を実施。フラの独特の動きである骨盤の傾斜に着目した。インストラクターは肩をほぼ水平に保ったまま骨盤を左右に傾斜させているが、高齢女性は介入前には肩と骨盤が同じように傾斜し体が傾いた状態で、介入後6か月でインストラクターの動きに近づいてきた。フラは体幹・股関節周囲筋を多く使い、これらの筋をステップに応じて個々にコントロールしており、体幹及び体幹・股関節周囲筋の筋力維持・強化に有効であると考える。
6. フラダンスを活用した介護予防プログラムの有効性の検討	筆頭	令和1年10月	第6回日本予防理学療法学会学術大会 第54回日本理学療法学術大会 (広島国際会議場)	高齢女性18名に36か月間フラレッスンを実施、継続できた14名を対象に介入前及び介入後3か月毎の身体機能・運動機能・能力を比較。立ち上がり、FRに有意な上昇、片脚立ちに改善傾向が見られた。フラは股・膝関節屈曲位、体幹正中位を保持し骨盤の回旋・傾斜運動を反復的に行うため体幹・股関節周囲筋の強化に有効であり、握力等に大きな変化が見られなかった事から維持的な効果もあると考える。また、音楽に合わせ歌詞の意味をハンドモーションで伝え幾つかのステップを組み合わせて踊るため、認知面での効果も期待できる。更に18名中14名が継続できた。これらよりフラを用いた介護予防プログラムは身体的要素の一部に短期的効果を期待できる。
7. 奈良学園大学におけるコロナ禍の学内実習の紹介－地域理学療法・作業療法実習の概要と学生アンケート調査－	共同	令和3年10月	第34回教育研究大会・教員研修会(福岡WEB開催)	COVID-19感染拡大に伴い、奈良学園大学では地域理学療法・作業療法実習を学内実習に切り替えて実施した。その実施方法の紹介および実施後の学生へのアンケート調査の結果を報告。実習のため、ライブ中継にて現場を理解する機会やグループワーク・発表の機会を持ち、学生の能動的学習の機会を多く作った。事後アンケートの結果では実習に対しては概ね肯定的な意見であったが、今後の実習に対して不安があることが分かった。そのため次期実習に向けた学生の不安要素に対する支援が必要である。
8. 地域の特性を考慮した村民の健康増進への取り組みの検討	筆頭	令和4年5月	第7回日本予防理学療法学会サテライト集会 (国分シビックセンター)	高齢化率40.2%(平成31年1月)である岡山県真庭郡新庄村にてAging in Placeを実現および継続するために、村民の健康増進および介護予防の方法を検討することを目的に地域の環境や特性・資源を調査した。村民の健康増進、介護予防およびAging in Placeの実現と継続には、自身の健康へ目を向ける機会を増やすとともに、農業による身体への負荷を軽減する動作指導等、高齢者と伴に中高年者へのアプローチが重要であることがわかった。
9. コロナ禍における生活変化はフレイルに影響するか？－後期高齢者を対象とした質問紙による検討－	共同	令和4年11月	第9回日本予防理学療法学会学術大会(赤羽会館)	高齢化が進む奈良県曽爾村の後期高齢者を対象に、コロナ禍における生活変化がフレイルに影響しているか質問紙にて調査を実施。毎日の移動量、脚の筋力に関する回答がフレイル判定と関連し、脚の筋力と食事量が後期高齢者の質問票と関連した。コロナ禍における生活の変化が、フレイル判定や後期高齢者の質問票の結果と関連していることが分かった。また、コロナ禍での生活変化が虚弱な状態への移行に関連している可能性が示唆された。
10. 岡山県真庭郡新庄村における日常生活と健康に関する調査（第1報）	筆頭	令和5年10月	第10回日本予防理学療法学会学術大会(函館市民会館・函館アリーナ)	高齢化率43.8%の新庄村にて、村民が住み慣れた地域で可能な限り自立した生活をするための方策を検討する事を目的に40歳以の全村民556名を対象として内閣府が実施した内容に準じた日常生活と健康に関する調査を実施したため一部を報告。村内で自立した生活を可能にするためには、介護サービスの体制の整備や高齢者に配慮したまちづくりなどの不安を解消するための施策が必要である。今後は年

				齢・性別等と各々の回答の関係や内閣府発表の結果との比較など詳細の結果を報告予定である。
11. コロナ禍の生活変化が１年後の健康状態に及ぼす影響―山間地域在住高齢者が対象の後ろ向きコホート研究–	共同	令和5年10月	第10回日本予防理学療法学会学術大会（函館市民会館・函館アリーナ）	奈良県曽爾村にて2021年度住民健診を受診した65歳以上の村民のうち、2022年度住民健診結果と突合できた前期高齢者58名と後期高齢者34名に対しコロナ禍における生活変化が１年後の健康状態にどの程度影響を及ぼしているかを検討。前期高齢者では多剤併用が１年後の健康状態に影響していることが示唆された。後期高齢者はコロナ禍の生活変化が１年後のフレイル状況に反映しており、生活習慣の変化がより長期にわたって影響することが示唆された。高齢な者ほど生活習慣の変容把握に努めると共に対策を講じる必要がある。
その他、著書○、学術論文○、「その他」○				

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　　4年　　3月　　31日

氏名　中島　大貴

研究分野	研究内容のキーワード
地域在住高齢者の健康増進	身体活動量，身体および精神心理機能

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 1）動画資料，病院とのライブ中継による講義の実施	令和1年8月 ～ 令和5年3月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科令和元年度は「早期体験実習」を臨地で実施したが，令和2年度および3年度は「早期体験実習」「地域作業療法実習」が学内実習となった．学内実習においては，協会の動画資料を用いた作業療法士の役割の説明，病院とのライブ中継や映像資料を用いた講義，多職種連携に関する講義，介護予防事業や地域づくりに関する講義を担当した．両実習共に学生から「満足した」との評価が得られた．
2）演習（高齢者との関りなど）による講義の実施	令和2年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「地域作業療法学Ⅱ」では，高齢者の健康増進事業に参加し，学生が考えたプログラムを高齢者とともに実践することで，高齢者との関わり方や健康増進事業の展開方法を学修できるよう努めている．「作業技術学Ⅰ」「作業技術学Ⅱ」「日常生活支援学Ⅱ」では，作業活動の実践やADL指導方法について学生同士での演習や道具・福祉用具の使用法に関する体験を通して実践力を育成できるよう努めている．授業アンケートの「講義内容のわかりやすさ」，「講義の要点の明確さ」においても4.0/5.0以上の評価を得られた．
3）国家試験対策も取り入れた講義の実施	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「身体障害作業療法Ⅱ（運動器・難病）」「地域作業療法学Ⅱ」「作業技術学Ⅰ」「作業技術学Ⅱ」「日常生活支援学Ⅱ（各論）」では，講義資料に国家試験で頻出する問題と関連する内容も含め，国家試験問題を小テストとして提示した．国家試験の出題傾向を理解できた等の評価を得られた．
4）症例検討を踏まえた講義の実施	令和3年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「作業療法総合演習」では，整形外科疾患（大腿骨頸部骨折または脊椎圧迫骨折）の症例検討を行い，作業療法における臨床思考過程を教授している．また，学生間での意見交換の機会を作り，他学生の意見を聞くことでより多面的な検討ができるよう促している．授業アンケートの「講義内容のわかりやすさ」においては4.8/5.0と高い評価が得られ，学生の理解度向上につながった．
２　作成した教科書，教材 1）講義で使用するパワーポイントの作成	令和1年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「基礎ゼミⅡ」「作業技術学Ⅰ」「作業技術学Ⅱ」「作業療法総合演習」「身体障害作業療法学Ⅱ（運動器・難病）」「日常生活支援学Ⅱ（各論）」「地域作業療法学Ⅱ（各論）」において講義で使用する資料を作成した．講義資料に掲載に同意の得られた実際の症例の映像などを用いることで，授業アンケートの「講義資料のわかりやすさ」では，4.2/5.0以上の評価が得られた．
2）国家試験問題問題等の小テストの作成	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「作業技術学Ⅰ」「作業技術学Ⅱ」「身体障害作業療法学Ⅱ（運動器・難病）」「日常生活支援学Ⅱ（各論）」「地域作業療法学Ⅱ（各論）」において，講義範囲に関係する国家試験問題を提示し，理解度を確認した．国家試験の出題傾向を理解できた等の評価を得られた．

事項	年月日	概　　要
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）東海記念病院リハビリテーション部 作業療法科 係長による評価	平成29年12月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において約6年勤務し，回復期リハビリテーション，認知症サポート委員，がんリハビリテーション委員，介護予防事業等多岐にわたる分野で活躍をしていた.各領域に関する知識等はその都度自身で積極的に学習し，患者様への還元が行えていた.また，そのような姿勢が部内の後輩の模範となるだけでなく，多職種からも信頼されており院内勉強会や医師会での講師や発表の経験も豊富である.研究活動に関しては自身の研究活動以外に後輩の研究活動へのアドバイザーとして協力しており部内の教育活動にも貢献していた.臨床・研究・教育のいずれの観点からみても教育上の能力を十分に有していると評価する.
2）文部科学省　教員審査結果	平成30年4月	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査において，奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科専任助教の判定を得た．また，「基礎ゼミⅡ」「チーム医療論演習」「作業技術学Ⅰ」「作業技術学Ⅱ」「作業療法卒業研究」「客観的臨床能力演習（作業療法）」「作業療法総合演習」「身体障害作業療法学Ⅱ（運動器・難病）」「日常生活支援学Ⅱ（各論）」「地域作業療法学Ⅱ（各論）」「早期体験実習（作業療法）」「地域作業療法実習」「検査・測定実習」「作業療法評価実習」「総合臨床実習Ⅰ（作業療法）」「総合臨床実習Ⅱ（作業療法）」の科目判定で「可」を得た.
3）授業アンケートの評価	令和1年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科「基礎ゼミⅡ」「作業技術学Ⅰ」「作業技術学Ⅱ」「作業療法総合演習」「身体障害作業療法学Ⅱ（運動器・難病）」「日常生活支援学Ⅱ（各論）」「地域作業療法学Ⅱ（各論）」のを担当した．令和3年度に実施された授業アンケートでは．すべての科目において「講義内容のわかりやすさ」で4.0/5.0以上の評価を得られた．また，「講義資料のわかりやすさ」では，4.2/5.0以上の評価が得られた.
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）東海記念病院リハビリテーション部 臨床実習指導（半日見学実習）	平成24年8月 ～ 平成29年8月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において，中部大学作業療法学科1年生の病院見学の引率を行った.
2）東海記念病院リハビリテーション部 臨床実習指導（総合実習）	平成25年6月 ～ 平成25年8月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において，中部大学作業療法学科4年生の臨床実習指導を行った（ケースバイザー）．内容は症例に対する評価・治療に関する助言やレポートの指導である.
3）東海記念病院リハビリテーション部 臨床実習指導（総合実習）	平成26年7月 ～ 平成26年8月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において，名古屋大学作業療法学科4年生の臨床実習指導を行った（ケースバイザー）．内容は症例に対する評価・治療に関する助言やレポートの指導である.
4）東海記念病院リハビリテーション部 臨床実習指導（総合実習）	平成27年6月 ～ 平成27年8月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において，中部大学作業療法学科4年生の臨床実習指導を行った（スーパーバイザー）．内容は症例に対する評価・治療に関する助言やレポートの指導である.
5）東海記念病院リハビリテーション部 臨床実習指導（総合実習）	平成28年6月 ～ 平成28年8月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において，星城大学作業療法学科4年生の臨床実習指導を行った（スーパーバイザー）．内容は症例に対する評価・治療に関する助言やレポートの指導である.
6）東海記念病院リハビリテーション部 臨床実習指導（総合実習）	平成29年1月 ～ 平成29年2月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において，日本福祉大学作業療法学科4年生の臨床実習指導を行った（スーパーバイザー）．内容は症例に対する評価に関しての助言やレポートの指導である.
7）東海記念病院リハビリテーション部 臨床実習指導（総合実習）	平成29年9月 ～ 平成29年10月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において，平成医療短期大学作業療法学科3年生の臨床実習指導を行った（ケースバイザー）．内容は症例の評価・治療に関する助言やレポートの指導である.

事項	年月日	概　　要
8）東海記念病院リハビリテーション部 臨床実習指導（見学実習）	平成29年9月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において，中部大学作業療法学科2年生の見学実習の引率とレポート指導を行った．
9）地域在住高齢者（サロン参加者）に対しての認知症予防に関する講演 （岐阜県下呂市社会福祉協議会下呂支部）	平成28年4月 ～ 平成28年12月	岐阜県下呂市社会福祉協議会が運営する「いきいきサロン」に講師として参加．地域在住高齢者を対象に認知症予防に関する講演を行った．講演は9ヶ所で実施した．
10）地域在住高齢者に対しての認知症ケアに関する講演 （岐阜県下呂市　本光坊）	平成28年6月	岐阜県下呂市にある寺院本光坊が主催する高齢者の集いに講師として参加．地域在住高齢者を対象に認知症予防に関する講演を行った．
11）認知症患者の介護者に対しての認知症ケアに関する講演 （岐阜県下呂市社会福祉協議会下呂支部）	平成28年7月	岐阜県下呂市社会福祉協議会が主催する「認知症介護者の集い」に講師として参加．認知症患者の介護者を対象に認知症ケアに関する講演を行った．
12）地域在住の中高齢者に対しての認知症ケアに関する講話 （愛知県春日井市一次予防事業）	平成28年8月	愛知県春日井市にある医療法人社団喜峰会東海記念病院において実施されている，介護予防事業「さぼてんクラブ」が主催している健康講話の講師として参加．地域在住の中高齢者に対して，自宅での認知症ケアに関して講話を行った．
13）地域在住の男性高齢者に対しての健康講話と運動指導 （愛知県海部郡大治町）	平成29年9月	愛知県海部郡大治町の保健センターが主催する一次介護予防事業である「じぃじ体操クラブ」に講師として参加．地域在住の男性高齢者に対して，健康講話と運動指導を行った．
14）登美ヶ丘カレッジの講師 （奈良学園大学）	平成30年10月	奈良学園大学が主催する市民公開講座「登美ヶ丘カレッジ」において，「住み慣れた環境で安心・安全で暮らすために」というテーマで講演を行った．加えて新設されるリハビリテーション学科や作業療法士の説明をした．
15）地域在住高齢者に対する健康講話 （奈良市登美ヶ丘地域包括支援センター）	平成31年3月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「POUTO」において，認知症予防に関する健康講話と運動指導を行った．
16）地域在住高齢者に対する運動指導 （奈良市登美ヶ丘地域包括支援センター）	平成31年3月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「ローレル会健康体操」において，認知症予防の運動「マットス」を紹介し，指導及び実施をした．
17）地域在住高齢者に対する健康講話 （アップル学園前・高齢者自主グループ）	平成31年4月	アップル学園前およびローレル会が主催する高齢者を対象にした勉強会において，「認知症と身体活動」というテーマで講演および運動指導を行った．
18）自立支援型地域ケア会議への出席 （奈良市登美ヶ丘地域包括支援センター）	平成31年4月 ～ 令和2年3月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「自立支援型地域ケア会議」に出席し，作業療法士の視点からケアプランへの助言を行っている．
19）社会福祉協議会職員および地域在住高齢者に対する健康講話 （登美ヶ丘地区社会福祉協議会）	令和1年6月	登美ヶ丘地区社会福祉協議会が主催する登美ヶ丘地区社会福祉協議会総会において，「介護予防-いつまでも元気でいられるように今から心掛けておくこと-」という内容で講演を行った．
20）地域在住高齢者に対する健康講話 （奈良市生涯学習財団　登美ヶ丘公民館）	令和1年6月	（公財）奈良市生涯学習財団登美ヶ丘公民館が主催する「ひとみ学級」において，「健康寿命を延ばすために」という内容で講演を行った．
21）地域在住高齢者に対する健康講話 （奈良市登美ヶ丘地域包括支援センター）	令和1年7月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「元気アップなら講座」において，「認知症と身体活動」というテーマで講演を行った．
22）地域在住高齢者に対する健康講話 （奈良市登美ヶ丘地域包括支援センター）	令和1年7月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「ちょこっとサロン」において，「認知症と身体活動」というテーマで講演を行った．
23）地域在住高齢者に対する健康講話 （奈良市登美ヶ丘地域包括支援センター）	令和1年8月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「登美ヶ丘地区元気いきいき講座」において，「認知症予防における身体活動・運動の重要性」というテーマで健康講話と運動指導を行った．

事項	年月日	概　　要
24）地域在住高齢者に対する健康講話 （奈良市登美ヶ丘地域包括支援センター）	令和1年9月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「POUTO」において，「認知症と身体活動」というテーマで健康講話と運動指導を行った．
25）地域在住高齢者に対する健康講話 （登美ヶ丘地区社会福祉協議会）	令和1年9月	東登美ヶ丘地区民生児童委員および登美ヶ丘地区社会福祉協議会が主催する「とみの里ふれあいサロン」において，「介護予防と運動について」というテーマで健康講話と運動指導を行った．
26）地域在住高齢者に対する健康講話 （奈良市登美ヶ丘地域包括支援センター）	令和1年10月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「ふれあい広場」において，「運動の大切さについて」というテーマで健康講話と運動指導を行った．
27）地域在住高齢者に対する健康講話 （奈良市登美ヶ丘地域包括支援センター）	令和1年10月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「POUTO」の参加者を対象に，大学内見学および交流会を実施した．
28）地域在住高齢者に対する健康講話 （奈良市二名地域包括支援センター）	令和1年10月 ～ 令和2年3月	奈良市二名包括支援センターが主催する「奈良市一般介護予防事業」において，介護予防に関する講話と運動指導を行っている．
29）地域在住の若年者から高齢者に対する講演 （奈良市生涯学習財団　登美ヶ丘南公民館）	令和1年12月	（公財）奈良市生涯学習財団登美ヶ丘南公民館が主催する「登美ヶ丘南公民館まつり」において，「楽しい健康づくり・コグニサイズ入門」というテーマで講演を行った．
30）地域在住高齢者に対する健康講話 （奈良市登美ヶ丘地域包括支援センター）	令和2年1月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「POUTO」において，「腰痛予防」というテーマで健康講話と運動指導を行った．
31）地域在住高齢者に対する健康講話 （奈良市登美ヶ丘地域包括支援センター）	令和2年2月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「ローレル会健康体操」において，「膝関節痛の予防」というテーマで健康講話と運動指導を行った．
32）自立支援型地域ケア会議への出席 （奈良市登美ヶ丘地域包括支援センター）	令和2年4月 ～ 令和3年3月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「自立支援型地域ケア会議」に出席し，作業療法士の視点からケアプランへの助言を行った．
33）自立支援型地域ケア会議への出席 （奈良市登美ヶ丘地域包括支援センター）	令和3年4月 ～ 令和4年3月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「自立支援型地域ケア会議」に出席し，作業療法士の視点からケアプランへの助言を行っている．
34）登美ヶ丘公民館「ひだまり体操」での講師 （奈良市生涯学習財団　登美ヶ丘公民館）	令和3年7月 ～ 令和4年3月	登美ヶ丘公民館が主催する「ひだまり体操」において，運動方法の指導を行っている．また，必要に応じて健康講話も行っている．
35）地域在住高齢者に対する健康講話 （奈良市登美ヶ丘地域包括支援センター）	令和3年7月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「ローレル会健康体操」において，「フレイルについて」というテーマで健康講話と運動指導を行った．
36）自立支援・重度化防止事業での講演 （奈良市登美ヶ丘地域包括支援センター）	令和3年7月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「自立支援・重度化防止事業」において，「作業療法士から見た自立と自律」というテーマで，介護支援専門員や介護保険事業所職員に向けて講演を行った．
37）オレンジカフェの助言と参加 （奈良市登美ヶ丘地域包括支援センター）	令和3年8月 ～ 令和4年3月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「オレンジカフェ」に対する助言をするとともに，本事業に参加し，当事者・家族の相談を受ける，集団活動を実施する等の活動を行っている．
38）地域在住高齢者に対する健康講話 （高齢者自主グループ）	令和4年2月	地域在住高齢者の自主グループであるAAA・Kネットワーク主催の「第3回ながらウォーキング」において，「歩行に関する豆知識」というテーマで健康講話と運動指導を行った．
39）自立支援型地域ケア会議への出席 （奈良市登美ヶ丘地域包括支援センター）	令和4年4月 ～ 令和5年3月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「自立支援型地域ケア会議」に出席し，作業療法士の視点からケアプランへの助言を行っている．

事項	年月日	概　　要
40）登美ヶ丘公民館「ひだまり体操」での講師 （奈良市生涯学習財団　登美ヶ丘公民館）	令和4年6月 ～ 令和5年3月	登美ヶ丘公民館が主催する「ひだまり体操」において，運動方法の指導を行っている．また，必要に応じて健康講話も行っている．
41）登美ヶ丘わいわいフェスタ2022への参加	令和4年10月	登美ヶ丘地区社会福祉協議会が主催する「登美ヶ丘わいわいフェスタ」に作業療法学専攻の代表として出店し，地域住民との交流を図った．また，学生も参加することで社会貢献活動の体験の場とした．
42）登美ヶ丘合同サロンの講師 （奈良市登美ヶ丘地域包括支援センター）	令和4年11月	住民同士のつながりの拡充を目的に奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催した「登美ヶ丘合同サロン」で介護予防と運動に関する講話と運動指導を行った．
43）登美ヶ丘地区での体力測定会の実施 （奈良市登美ヶ丘地域包括支援センター， 奈良市生涯学習財団　登美ヶ丘公民館）	令和4年11月 ～ 令和5年3月	登美ヶ丘地区在住の高齢者を対象とした体力測定会を実施した．本件は奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターや登美ヶ丘公民館の依頼のもと実施した．
44）自立支援型地域ケア会議への出席 （奈良市登美ヶ丘地域包括支援センター）	令和5年5月 ～ 令和6年2月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「自立支援型地域ケア会議」に出席し，作業療法士の視点からケアプランへの助言を行った．
45）登美ヶ丘公民館「ひだまり体操」での講師 （奈良市生涯学習財団　登美ヶ丘公民館）	令和5年5月 ～ 令和6年3月	登美ヶ丘公民館が主催する「ひだまり体操」において，運動方法の指導を行っている．また，必要に応じて健康講話も行った．
46）地域包括支援センター職員研修会の講師 （奈良市福祉政策課　基幹型地域包括支援センター）	令和5年6月	奈良市福祉政策課が主催する地域包括支援センター職員研修会において「登美ヶ丘地区体力測定結果と認知症予防の関連性について」というテーマで講演を行った．
47）地域在住高齢者に対する健康講話 （奈良市登美ヶ丘地域包括支援センター）	令和5年9月 令和5年11月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「元気アップなら講座」において，講演および運動指導を行った．
48）登美ヶ丘わいわいフェスタ2023への参加	令和6年10月	登美ヶ丘地区社会福祉協議会が主催する「登美ヶ丘わいわいフェスタ」にリハビリテーション学科の代表として学科長とともに出店し，地域住民との交流を図った．
49）奈良市介護給付費等の支給に関する審査会への出席 （奈良市福祉部障がい福祉課）	令和6年1月 令和7年3月	奈良市福祉部障がい福祉課が開催している「奈良市介護給付費等の支給に関する審査会」に参加し，作業療法士の視点から意見を述べた．
50）地域在住高齢者に対する健康講話 （橿原市長寿介護課）	令和6年2月	橿原市長寿介護課が主催する「介護予防セミナー」において，「認知症予防」というテーマで講演と運動指導を行った．
51）地域在住高齢者に対する健康講話 （株式会社長久手温泉）	令和6年3月	長久手市福祉部（委託事業者：株式会社長久手温泉）が主催する「アカデミーカフェで座談会」において，高齢者を対象に健康講話を行った．
52）地域在住高齢者に対する健康講話 （奈良市二名地域包括支援センター）	令和6年3月	奈良市二名地域包括支援センターが主催する「元気アップなら講座」において，「楽しく認知症予防、健口体操」というテーマで講演と運動指導を行った．
45）登美ヶ丘公民館「ひだまり体操」での講師 （奈良市生涯学習財団　登美ヶ丘公民館）	令和6年5月 ～ 令和7年3月	登美ヶ丘公民館が主催する「ひだまり体操」において，運動方法の指導を行っている．また，必要に応じて健康講話も行った．
53）自立支援型地域ケア会議への出席 （奈良市登美ヶ丘地域包括支援センター）	令和6年5月 ～ 令和7年2月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「自立支援型地域ケア会議」に出席し，作業療法士の視点からケアプランへの助言を行った．

事項	年月日	概　　要
5　その他		
1）星城大学リハビリテーション研究会の企画と運営	平成24年4月 ～ 平成27年3月	学校法人石田学園星城大学リハビリテーション学部卒業生を対象に，卒後教育，自己研鑽となることを目的とし，年2回の研究会をしている．これらのことにより，経験年数の短い後輩の新人セラピストに対し教員および経験年数の長い先輩のセラピストが指導する場となり，臨床現場への意欲の維持・向上を目的として、臨床現場の問題点に関するディスカッションや問題の明確化を行った．
2）4年制大学での科目担当	令和1年9月 ～ 令和4年3月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科講義または演習科目として，「基礎ゼミⅡ」「作業技術学Ⅰ」「作業技術学Ⅱ」「作業療法総合演習」「身体障害作業療法学Ⅱ（運動器・難病）」「日常生活支援学Ⅱ（各論）」「地域作業療法学Ⅱ（各論）」を担当した．
3）4年制大学での科目担当 （カリキュラム変更）	令和4年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科講義または演習科目として，「ラーニングスキルズ」「人体構造学演習」「作業技術学Ⅰ」「作業技術学Ⅱ」「作業療法総合演習」「身体障害作業療法学Ⅱ（運動器・難病）」「日常生活支援学Ⅱ（各論）」「地域作業療法学Ⅱ（各論）」を担当した．

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
作業療法士免許	平成24年4月	作業療法士名簿登録番号　第68464号
認知症対応向上研修　修了	平成26年7月	第14-363号
がんのリハビリテーション研修　修了	平成26年11月	厚後援26年5-124号
修士（リハビリテーション学）	平成30年3月	中部大学 論文題目「季節変動が寒冷地域在住高齢者の身体活動量に及ぼす影響」
マットスインストラクター	平成31年12月	I000096
2　特許等		
なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）身体障害領域，老年期障害領域・地域領域における臨床業務 （医療法人社団喜峰会東海記念病院）	平成24年4月 ～ 平成29年12月	医療法人社団喜峰会 東海記念病院において，身体障害・老年期障害領域（一般病棟，外来リハビリ，地域包括ケア病棟，回復期病棟）の臨床を行った．また，作業療法科リーダーとして，病棟でのカンファレンス，がんリハビリテーションチームや認知症対応チームでの活動にも参加した．
2）病院の認知症対応力向上事業での取り組み内容の報告	平成27年2月 ～ 平成29年2月	愛知県が取り組んでいる「病院の認知症対応向上事業」の活動報告会において，東海記念病院認知症サポートチームの取り組み状況を報告した．
3）第23回愛知県作業療法学会運営委員	平成27年5月	一般社団法人愛知県作業療法学会が主催の学術大会に運営スタッフとして参加し，学術大会の準備・運営業務に従事した．
4）奈良学園大学保健医療学部 リハビリテーション学科の申請準備	平成30年1月 ～ 平成31年3月	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の文部科学省への設置申請に向けて，病院訪問や書類作成業務を行った．
5）近畿作業療法学会の査読委員	令和3年1月	第41回近畿作業療法学会の査読委員として，一般演題の査読を行った．

事項	年月日	概　　要
6）日本作業療法士協会　教育部	令和4年12月 ～ 令和5年3月	日本作業療法士協会の教育部部員として，指定規則の改訂に関するWGに関わり，会議やアンケートの集計等を行った．
7）日本作業療法士協会　教育部	令和5年4月 ～ 令和7年3月	日本作業療法士協会の教育部部員として，指定規則の改訂に関するWGに関わり，会議やアンケートの集計等を行った．
8）全国リハビリテーション学校協会 第36回教育研究大会・教員研修会の査読委員	令和5年7月	第36回教育研究大会・教員研修会の査読委員として，一般演題の査読を行った．
9）全国リハビリテーション学校協会 第36回教育研究大会・教員研修会のシンポジスト	令和5年8月	第36回教育研究大会・教員研修会のシンポジストとして「ICT×アクティブラーニング」というテーマでシンポジウムを行った．
10）作業療法ジャーナルの査読委員	令和5年8月～	三輪書店の発刊する「作業療法ジャーナル」で査読委員として、論文の査読を行っている．
4　その他		
1）奈良学園大学保健医療学部 リハビリテーション学科での委員会業務等	平成31年4月 ～ 令和2年3月	実習部会（早期体験・地域実習，総合臨床実習，評価/検査測定実習），協会関連の対応，AC対応，共通教育委員会の業務を行った．
2）奈良学園大学保健医療学部 リハビリテーション学科での委員会業務等	令和2年4月 ～ 令和3年3月	実習部会（早期体験・地域実習，総合臨床実習，評価/検査測定実習，実習管理センター），入試広報部会（入試広報対策），協会関連の対応，AC対応，地域交流WG，共通教育委員会の業務を行った．
3）奈良学園大学保健医療学部 リハビリテーション学科での委員会業務等	令和3年4月 ～ 令和4年3月	教務部会（卒業研究），実習部会（早期体験・地域実習，総合臨床実習，評価/検査測定実習，実習管理センター），入試広報部会（入試広報対策），大学院設置準備WG，学科予算WG，協会関連の対応，AC対応，地域交流WG，広報委員会の業務を行った．
4）奈良学園大学保健医療学部 リハビリテーション学科での委員会業務等	令和4年4月 ～ 令和5年3月	教務部会（卒業研究），実習部会（早期体験・地域実習，総合臨床実習，評価/検査測定実習，実習管理センター），4年生学年担任，大学院設置準備WG，学科予算WG，登美ヶ丘自治会連携WG，広報委員会の業務を行った．
5）奈良学園大学保健医療学部 リハビリテーション学科での委員会業務等	令和5年4月 ～ 令和6年3月	実習部会（早期体験，評価/検査測定実習・総合臨床実習，実習管理センター，実習WG），1年生学年担任，リハ学科研究科委員会，学科予算WG，監査・大学認証対応，卒業生管理，広報委員会の業務を行った．

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） なし				
（学術論文） 1. Factors affecting the discharge destination on hip fracture patients who live alone and have been admitted to an inpatient rehabilitation unit （独居の大腿骨近位部骨折患者の転帰先に影響を及ぼす要因） （査読付）	共著	平成28年4月	「Journal of Physical Therapy Science」，28 （4） p.1228-p.1232	本研究の目的は，機能的評価と退院先との関係，大腿骨頸部骨折患者のリハビリ後の自宅退院におけるカットオフポイントの特定であった．多重ロジスティック回帰分析の結果，FIMの認知スコアが退院先に影響する重要な変数であった．また，ROC曲線分析において，認知スコア23.5点が自宅退院のカットオフポイントであることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集 共著者：Hayashi Hiroyuki, Iwai Midori, Matsuoka Hiroka, Nakashima Daiki, Nakamura Shugo, Kubo Ayumi, Tomiyama Naoki
2. Exploring the factor on sensory motor function of upper limb associated with executive function in community-dwelling older adults （地域在宅高齢者の遂行機能に関連する上肢の感覚運動機能） （査読付）	共著	平成28年8月	「Nagoya Journal of Medical Science」，78 （3） p.285-p.291	本研究では，地域在住高齢者における上肢の感覚・運動機能と遂行機能の関連性を評価することを目的とした．重回帰分析の結果，非利き手の手指巧緻性が遂行機能と関連付けていることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集 共著者：Hayashi Hiroyuki, Nakashima Daiki, Matsuoka Hiroka, Iwai Midori, Nakamura Shugo, Kubo Ayumi, Tomiyama Naoki
3. ボールローリングエクササイズは非利き手の手指巧緻動作と箸操作困難感を改善する：健常若年者を対象とした実験研究 （査読付）	共著	平成28年10月	日本作業療法士協会学術誌「作業療法」，35 （5） p.462-p.469	本研究では，健常若年者を対象にボールローリングエクササイズを行い，上肢機能やADL動作への効果を明らかにした．その結果，ボールローリングエクササイズが手指巧緻動作と箸操作困難感の改善に寄与することが明らかになった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，論文添削（修正案の提示） 共著者：中村守吾，中島大貴，川浦真未子，林浩之
4. 大腿骨近位部骨折患者における精神心理機能に関する研究：地域在住高齢者との比較 （査読付）	共著	平成29年4月	日本作業療法士協会学術誌「作業療法」，36 （1） p.35-p.41	本研究では，大腿骨頸部骨折患者の精神心理機能を明らかにするために，地域在住高齢者と比較した．大腿骨頸部骨折患者群は，MMSE，WHO-5が有意に低く，GDS-15は有意に高く，Delta TMTは異常値を示した． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，論文添削（修正案の提示） 共著者：岩井緑，林浩之，中島大貴，中村守吾，松岡紘佳，窪優太，久保歩，冨山直輝
5. 活動遂行における母指指節間関節と示指および中指近位指節間関節の可動域 （査読付）	共著	平成29年6月	日本作業療法士協会学術誌「作業療法」，36 （3） p.291-p.298	本研究は，健常者若年者を対象に母指IP関節と示指・中指PIP関節の機能的可動域を明らかにした．その結果，活動遂行に要する角度は，母指IP関節が44°/13°，示指PIP関節が74°/-3°，中指PIP関節が78°/-12°であった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，論文執筆 共著者：中島大貴，中村守吾，川浦真未子，林浩之
6. Upper-limb motor and sensory function in patients with hip fracture: Comparison with community-dwelling adults （股関節骨折患者における上肢運動および感覚機能：地域在住高齢者との比較） （査読付）	共著	平成29年6月	「Journal of Back and Musculoskeletal Rehabilitation」，30 （6） p.1231-p.1236	本研究では，股関節骨折患者32名と地域在住高齢者32名の上肢機能を比較し，股関節骨折患者の上肢機能を評価することを目的とした．その結果，股関節骨折患者は握力，ピンチ力，手指巧緻性，包括的な手機能が著名に低下していることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集 共著者：Hayashi Hiroyuki, Nakashima Daiki, Matsuoka Hiroka, Iwai Midori, Nakamura Shugo, Kubo Ayumi, Tomiyama Naoki

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7. 回復期リハビリテーション病棟入院の抑うつ・アパシーを呈する認知症高齢者に対する集団料理活動の効果 （査読付）	共著	平成29年8月	日本老年精神医学会学術誌「老年精神医学雑誌」，28（8） p.899-p.903	本研究では，認知症高齢者の抑うつ・アパシー改善を目的に集団での料理活動を実施した．介入の結果，対照群と比較して介入群では介入期間中に抑うつの有意な改善が認められたが，介入終了後の持続効果はなかった．一方，アパシー，QOLは有意な改善は認められなかった． 本人担当部分：研究計画，介入，論文添削（修正案の提示） 共著者：窪優太，中澤僚一，各務真菜，加藤美樹，中島大貴，岡村英俊，長谷川慧，竹田徳則
8. 季節変動が寒冷地域在住高齢者の身体活動量に及ぼす影響 （修士論文）	単著	平成30年3月	中部大学大学院	本研究では，寒冷地域在住高齢者を対象に，①季節による身体活動量の変動と②季節による生活活動内容の変化を検討した．多重比較検定の結果，Lifecorderで測定した歩数や低強度の活動時間は冬季に減少し，春季や夏季に増加することが明らかになった．一方で総エネルギー消費量や中強度以上の活動時間に季節変動は認められなかった．Physical activity scale for the elderlyを用いて評価した生活活動は，「屋外での園芸」のみ冬季に減少することが明らかとなった．（A4判用紙，全58頁）
9. 心理的介入により脳卒中後のapathyに改善を認め，ADLの回復へと繋がった一例 （査読付）	共著	令和1年6月	「脳神経内科」，90（6） p.701-p.704	本研究では，脳血管障害後のApathyを呈した症例に対して，認知症のApathyで有効とされる心理的アプローチを実施し，その効果を報告した．心理的介入を継続的に実施した結果，Apathyは改善し，ADLの改善に繋がった．そのため，心理的介入は脳血管障害後のApathyに対して有効であることが考えられた． 本人担当部分：研究計画，介入への助言，論文添削（一部執筆，修正案の提示） 共著者：舩戸敦，中島大貴，窪優太
10. Influence of seasonal variations on physical activity in older people living in mountainous agricultural areas （山間地域在住高齢者の身体活動に対する季節変動の影響） （査読付）	共著	令和1年11月	「Journal of Rural Medicine」，14（2） p.165-p.175	本研究では，地域在住高齢者を対象に，①季節による身体活動量の変動と②季節による生活活動内容の変化を検討した．多重比較検定の結果，加速度計で測定した歩数や低強度の活動時間は冬季に減少し，春季や夏季に増加することが明らかになった．Physical activity scale for the elderlyを用いて評価した生活活動は，「屋外での園芸」のみ冬季に減少することが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，論文執筆 共著者：Daiki Nakashima,Daisuke Kimura,Hidehiro Watanabe,Fumihiko Goto, Miki Kato,Keisuke Fujii,Eri Kasuya,Naoki Tomiyama,Ryuichi Hasegawa
11. 介護予防事業における集団ゴムバンド運動が軽度認知障害を有する女性高齢者の認知機能に及ぼす影響 （査読付）	共著	令和2年10月	「認知症ケア学会誌」，19（3） p.557-p.563	本研究では，軽度認知障害を有する地域在住女性高齢者を対象に，介護予防事業における運動教室が認 知機能に及ぼす効果を検討した．11週間の集団ゴムバンド運動教室参加者を介入群，11週間通常どおりの生活を送るよう求めた参加者を対照群とした．介入の効果を検討するために二要因共分散分析を用いて分析を行った結果，両群における日本語版Montreal Cognitive Assessment（合計）の変化に有意な交互作用は認められなかった(F = 0.008, p = 0.931). 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，論文添削（修正案の提示） 共著者：渡邉英弘，冨山直輝，後藤文彦，中島大貴，木村大介，井戸尚則，岡山直樹，長谷川龍一
12. 本学保健医療学部リハビリテーション学科志望経緯に関する調査	共著	令和2年12月	「奈良学園大学紀要」，13 p.149-p.156	本研究は，新入生の志望動機と経緯に関するアンケート調査を行い，今後の広報活動について検討することを目的とした．本研究では，2020年度の新入生を対象に，奈良学園大学を志望した経緯と大学に対する印象等を質問紙で調査した．その結果，PT・OTの両専攻において，多くの学生は当初の志望を中途変更しないことが明らかとなった．また，入学後の教育については肯定的な意見が多かった． 本人担当部分：研究計画，論文添削（修正案の提示） 共著者：飯塚照史，辻下守弘，池田耕二，城野靖朋，中島大貴

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13. 認知症高齢患者のせん妄後の抑うつに対するFettermanの3ステップアプローチ適用の効果 （査読付）	共著	令和3年1月	「認知症ケア学会誌」，19（4） p.701-p.708	本研究では，せん妄後の抑うつから自宅退院に消極的であった認知症高齢患者に対して，Fettermanの3ステップアプローチを適用して介入し，退院後の家庭内役割の再獲得を目指した．その結果，料理という家庭内役割を再獲得したことで，退院後生活への不安感や抑うつは軽減し，生活機能も改善し，自宅退院を実現した．このことから，入院中の3ステップアプローチによるエンパワメント促進は，せん妄後の抑うつを軽減し，安心した自宅退院の実現に貢献すると考えられた． 本人担当部分：研究計画，介入の助言，論文添削（修正案の提示） 共著者：坪内善仁，中島大貴，田丸佳希
14. Relationship between nutritional status and phase angle as a noninvasive method to predict malnutrition by sex in older inpatients （高齢入院患者における栄養障害を性ごとで予測するための栄養状態と非侵襲法であるPhase angleの関係） （査読付）	共著	令和3年1月	「Nagoya Journal of Medical Science」，83（1） p.31-p.41	本研究の目的は，Phase angleと低栄養の関係を明らかにし，性別に応じて，高齢入院患者のPhase angleによる低栄養状態のカットオフ値を算出することであった．男性59（平均年齢76.5歳）と女性101名（平均年齢78.8歳）を対象にPhase angleとGNRIを測定した．その結果，Phase angleは男性・女性の低栄養状態に関連することが明らかとなった．また，ROC曲線により算出したカットオフ値は，男性4.03度（感度：87.0%．特異性：75.9%），女性3.65度（感度：78.6%，特異性：60.5%）であった． 本人担当部分：研究計画，論文添削（修正案の提示） 共著者：Yuta Kubo, Kento Noritake, Daiki Nakashima, Keisuke Fujii, Kazumasa Yamada
15. 地域在住高齢者におけるテレビコマーシャルメッセージの時間を活用した身体活動促進プログラムの予備的研究 （査読付）	共著	令和3年4月	「健康支援」，23(2) p.195-p.200	本予備的研究では，高齢者においてCM中の歩行または足踏みを促す身体活動プログラムの効果と実行可能性を明らかにすることを目的とした。対象は健常高齢者20名（平均年齢75.0歳）とした．介入方法は、CM中の歩行または足踏みとした．歩数と歩行時間の測定は3軸加速度計を使用し，通常通りの日常生活を送る週（以下，通常週）とCM中の歩行または足踏みを促す週（以下，介入週）の計14日間の測定を実施した結果，通常週に歩数および歩行時間は有意に増加した（p < 0.01）． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，論文執筆 共著者：中島大貴，伊藤健一，坪内善仁，藤井啓介，田畑泉
16. 軽度認知障害が疑われる地域在住女性高齢者の個人的特徴と1年後の認知機能低下に影響する因子：エンパワメント評価を含めた後ろ向き観察研究 （査読付）	共著	令和3年8月	「医療福祉情報行動科学研究」，8 p.133-p.142	本研究の目的は,地域在住女性高齢者を対象に,MCIが疑われる者の特徴と1年後の認知機能低下に影響する因子を明らかにすることであった．初回調査時(初期)の MoCA-Jを用いて,26 点以上(健常群)と 25 点以下(MCI群)で,基本属性,精神心理機能,生活機能を Mann-Whitney の検定と Fisher の正確確率検定で比較した．さらに,MCI群について,1年後のMoCA-Jの変化量をもとに低下群・維持群・向上群に分け,一元配置分散分析および Fisherの正確確率検定で1年間の認知機能低下に関連する因子を検証した．その結果,MCI群の中でも低下群は教育年数が短く,エンパワメントの相互作用による問題の意識化で低下を認めた． 本人担当部分：研究計画，データ分析の助言，論文添削（修正案の提示） 共著者：坪内善仁，中島大貴，田丸佳希，内藤泰男
17. 介護予防を目的とした高齢者主体で運営される自主グループによるソーシャルサポート・ネットワークの変化 （査読付）	共著	令和3年8月	「理学療法科学」，36(4)， p.481-p.489	本研究は，運動教室後に継続して自主グループに参加した高齢者のソーシャルサポート・ネットワークを明らかにすることを目的とした．対象は，従来型運動教室に参加した30名と，自主グループ設立を目的とした運動教室に参加し，自主グループに継続して参加できた26名とした．ソーシャルサポート・ネットワークの評価にはLSNS- 6を用い，運動教室の前後とフォローアップ3か月後の計3時点で評価した．LSNS- 6の下位項目の交互作用は，友人で認められたが，家族では認められなかった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，論文添削（修正案の提示） 共著者：後藤文彦，渡邉英弘，中島大貴，井戸尚則，岡山直樹，冨山直輝，木村大介，長谷川龍一
18. 2021年度リハビリテーション学科新入生における志望経緯に関する調査	共著	令和3年12月	「奈良学園大学紀要」，14 p.1-p.6	本研究では，奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の3期生に志望経緯に関するアンケート調査を実施し，2期生と比較することで傾向を分析した．その結果，当初における職業選択は変更することなく，オープンキャンパスへの参加，加えて本学の近隣環境等への交換を以って進学した経緯があることが分かり，2期生との大きな変化はなかった．一方で，プレゼンスの高まり，教員対応への肯定的意見と捉えられる結果もあり，本学魅力の一端として認識する必要性が示唆された． 本人担当部部分：研究計画，論文添削（修正案の提示） 共著者：飯塚照史，辻下守弘，池田耕二，城野靖朋，中島大貴

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
19. コロナ禍における地域理学療法・作業療法実習の取り組みと課題 ―学内実習の概要と学生アンケート調査による考察― （査読付）	共著	令和4年2月	「医療福祉情報行動科学研究」，9 p.31-p.38	本研究では，令和2年度・3年度に実施した学内での地域実習の構成について触れ，履修学生のアンケート調査より学内実習の課題と可能性について検討した．学内での地域実習は2 週間にわたり実施した．学内実習は，①予習，②学内実習，③復習で構成した．令和2年度・3年度の履修学生に対し，実習終了後にアンケート調査を実施した．回答率は，令和2年度95.7%，令和3年度94.7%であった．アンケートの結果，両年度ともに類似した回答傾向であり、地域実習については 70%以上が理解できたと回答した．一方で，3年次以降の臨床実習については，36.4-85.9%の学生が「不安」と回答した． 本人担当部分：調査データの収集，論文添削（修正案の提示） 共著者：滝本幸治，池田耕二，吉川義之，坪内善仁，笹野弘美，前田吉樹，中島大貴，辻下聡馬，大浦智子，山形力生
20. コロナ禍における理学・作業療法士養成課程の早期体験実習 ―学内実習後の学生アンケート調査による検証― （査読付）	共著	令和4年2月	「医療福祉情報行動科学研究」，9 p.55-p.63	本研究では，令和2年度・3年度に実施した学内での早期体験実習実習を履修した学生のアンケート結果から，学内実習の意義や課題について考察した．早期体験実習は，1週間にわたり実施した．実習は①予習・復習，②映像資料やライブ中継の活用，③朝礼やロールプレイ，④グループワークによる学びの4点を重視した．実習終了後に実施したアンケートの結果，両年度とも実習内容については約90%が「理解できた」と回答した．一方で，2年次以降の学外実習に向けた不安については、令和2年度で約45%，令和3年度で50%以上が「不安」「非常に不安」と回答した． 本人担当部分：研究計画，データ収集，論文添削（修正案の提示） 共著者：前田吉樹，中島大貴，伊藤健一，野中紘士，阿波邦彦，藤田信子，岩崎智子，橋本雅至，山形力生，池田耕二
21. Frail older adults without occupational dysfunction maintain good subjective well-being: A cross-sectional study （作業機能障害を有さない虚弱高齢者は良好な主観的幸福感を維持している-横断的研究-） （査読付）	共著	令和4年9月	「Healthcare」，10(10) p.1922	本研究の目的では，フレイル/職業機能障害(OD) の有無と地域在住高齢者の主観的な幸福感との関係を明らかにした．対象は2,308名の高齢者とし，フレイルの有無と主観的幸福感を調査した．参加者をフレイルとODの程度で6グループに分類した．フレイル/ODと主観的幸福度の関係を調べるために，分散分析を行った．その結果，高齢者のフレイル/ODと主観的幸福の有無との間に有意な関連性が示された． 本人担当部部分：研究計画，論文添削（修正案の提示） 共著者：Keisuke Fujii, Yuya Fujii, Yuta Kubo, Korin Tateoka, Jue Liu, Koki Nagata, Daiki Nakashima, Tomohiro Okura
22. Relationship between Empowerment and Functioning and Disability in Older Japanese Patients: A Covariance Structure Analysis （日本人高齢患者におけるエンパワーメントと機能・障害との関連：共分散構造分析） （査読付）	共著	令和4年12月	「Healthcare」，11(11) p.44	本研究では，構造方程式モデリング（SEM）を使用して，エンパワメントと状況要因，機能・障害の関連を調査した．分析には，151名の患者が含まれた．SEM 解析の結果，役割の存在(β=0.45, $p<0.01$)と家族構造(β=0.18, p=0.02)がエンパワメントに影響することを示した．さらに，患者のエンパワメントが身体活動(β=0.25, $p<0.01$)および心身機能と能力(β=0.36, $p<0.01$) にプラスの影響を与えることを示した．なお，本研究で仮説を立てたモデルの適合度は優れていた． 本人担当部部分：研究計画，論文添削（修正案の提示） 共著者：Yoshihito Tsubouchi, Akiyoshi Tainosho, Koudai Shimomura, Motoasa Kou, Kyosuke Yorozuya, Daiki Nakashima, Yasuo Naito
23. Effect of acute high-intensity intermittent exercise on serum brain-derived neurotrophic factor concentrations （急性高強度間欠的運動による血清脳由来神経栄養因子への影響） （査読付）	共著	令和5年2月	「J Sports Med Phys Fitness」，63(6) p.731-p.738	本研究では，疲労困憊に至るHIIEと疲労困憊に至らないHIIE後の血清BDNF濃度の変化を比較することを目的とした．対象は健常大学生8名とした．参加者は170%VO_2maxの負荷で20秒の運動と10秒の休息を繰り返すHIIEを2条件（疲労困憊に至る：6-7set，疲労困憊に至らない：5set）で実施し，安静時・運動前・運動後複数回（直後，5分後，10分後，30分後,60分後，90分後）で血清BDNF濃度を測定した．その結果，両条件ともに運動後に血清BDNF濃度は上昇したが，疲労困憊に至るHIIEでは血清BDNF濃度上昇の持続時間が長いことが分かった． 本人担当部部分：研究計画，データ解析，論文執筆 共著者：Daiki Nakashima, Shumpei Fujie, Masanari Togo, Shunsuke Takeshita, Keiji Hasegawa, Izumi Tabata

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
24.Patient Empowerment Scale 日本語版の反応性・解釈可能性の検証 （査読付）	共著	令和5年3月	「医療福祉情報行動科学研究」，10 p.29-p.36	本研究では,PES-Jの反応性と解釈可能性を検証した．高齢患者151名を対象に,反応性では,SE，SOC-13，PGCの変化量とΔPES-Jとの関連を検証した．解釈可能性では，ΔPES-J と年齢,教育年数との関連,性別や入院契機となった疾患,既往歴の違いによるΔPES-Jの差を検証した．また，FIMとPES-Jの変化率の関連を検証した後,FIM 改善に対するΔPES-J のカットオフ値を算出した．反応性の検証では,ΔPES-JとSE,SOC-13,PGCの変化量で有意な相関を認めた．解釈可能性の検証では,ΔPES-Jと入院期間，PES-JとFIMの変化率で相関を認めた．FIM改善に対するΔPES-Jのカットオフ値は15点で，AUCは 0.70であった. 本人担当部部分：研究計画，論文添削（修正案の提示） 共著者：坪内善仁，田結荘秋嘉，下村広大，萬屋京典，洪基朝，中島大貴，内藤泰男
25.地域在住成人における実行機能質問紙の利用可能性の検討-客観的行動評価との関連- （査読付）	共著	令和5年3月	「医療福祉情報行動科学研究」，10 p.17-p.27	本研究の目的は，実行機能質問紙の得点と神経心理学的検査の成績との関連を明らかにし，前者の利用可能性を検討することである．実行機能の主観的評価としてEFQ・J-BES，客観的評価としてTMT-J・新ストループ検査Ⅱ・D-CATを実施した．年齢と認知機能成績別に参加者を各2群に分け，実行機能質問紙の得点と，神経心理学検査の成績との関連を検討した．実行機能質問紙において，年齢Low群，MoCA-J高成績群において有意な相関のある項目を多く認め，利用可能性が比較的高いことが示唆された。 本人担当部分：研究計画，データ収集の補助，論文添削（修正案の提示） 共著者：岩﨑智子，中田修，山形力生，中島大貴，大西久男
26.Relationships between Loneliness and Occupational Dysfunction in Community-dwelling Older Adults: A Cross-sectional Study （地域在住高齢者における孤独感と作業機能障害の関連性：横断的研究） （査読付）	共著	令和5年9月	「Occupational Therapy International」 p.1-p.7	本研究の目的は，地域在住高齢者の孤独感と作業機能障害の横断的関連性を明らかにすることであった．Bayesian statistical modelによる分析を行った結果，交絡因子を調整してもなお，作業機能障害は孤独感と関連することが明らかとなった（Odds Ratio = 2.363; 95% Bayesian Confidence Interval = 1.105-5.259） 本人担当部分：研究計画，データ収集，論文執筆 共著者：Daiki Nakashima, Keisuke Fujii, Yuta Kubo, Kyosuke Yorozuya
27.Relationship between Phase Angle and Physical Activity Intensity among Community-Dwelling Older Adults in Japan: A Cross-Sectional Study （地域在住高齢者におけるPhase angleと身体活動強度との関連：横断的研究） （査読付）	共著	令和6年1月	「Healthcare」，12(2), p. 167	本研究では，地域在住高齢者におけるPhAと身体活動強度の関連性を明らかにし，高いPhA を予測するための身体活動の強度と時間を検討することを目的とした．地域在住高齢者67人(平均年齢：78.3±5.5歳，女性：83.6%)が参加し，身体活動量と体組成を測定した．ベイズ統計では，交絡因子の調整後もPhAと中高強度活動の関連性が明らかになった．また，高いPhA を予測する中高強度活動のカットオフ値は，19.7分/日であった. 本人担当部分：研究計画，データ収集，論文執筆 共著者：Daiki Nakashima, Keisuke Fujii, Yoshihito Tsubouchi, Yuta Kubo, Kyosuke Yorozuya, Kento Noritake, Naoki Tomiyama, Soma Tsujishita, Terufumi Iitsuka
28.Appetite and family and friends network among community-dwelling older adults: A cross-sectional study （地域在住高齢者における食欲と家族・友人のネットワーク: 横断研究） （査読付）	共著	令和6年3月	「Nutrition」，119, 112321	地域在住高齢者における食欲とソーシャルネットワークの関係を横断的に調査した．分析対象は地域在住高齢者119名とし，食欲はSNAQ-J,ソーシャルネットワークはLSNS-6を用い家族ネットワーク，友人ネットワークをそれぞれ評価した．単回帰分析では両ネットワークとも食欲に関連を認めたが，重回帰分析では家族ネットワークのみ関連を認めた．ソーシャルネットワークのうち，家族ネットワークに着目することは，地域在住高齢者の食欲減退の予防に役立つ可能性があることが示唆された. 本人担当部分：研究計画，データ収集，論文添削 共著者：Kento Noritake, Keisuke Fujii, Yuta Kubo, Kyosuke Yorozuya, Takahiro Hayashi, Fumihiko Goto, Hidehiro Watanabe, Akihiro Yoshida, Yoshihito Tsubouchi, Daiki Nakashima

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
29. Associations between cognitive function and muscle quality among community-dwelling older adults: a cross-sectional study. （地域在住高齢者における認知機能と筋質との関連：横断的研究） （査読付）	共著	令和6年4月	「Experimental Aging Research」, p. 1-12	本研究では，地域在住高齢者の筋質と認知機能の関連について調査することを目的とした． 参加者は地域在住高齢者40名（平均78.85±6.40歳、女性31名）であった． 目的変数をCOGNISTAT Five のMCI Index，説明変数をecho intensity（EI）で示される筋質，共変量を年齢，性別，骨格筋量指数，歩行速度，身体活動レベルとし，ベイズ統計による重回帰分析を実施した．EIはMCI Index と有意に関連し，地域在住高齢者において，筋質は認知機能に関連する可能性が示唆された． 本人担当部分：研究計画，データ収集，論文添削 共著者：Kyosuke Yorozuya, Daiki Nakashima, Keisuke Fujii, Kento Noritake, Yuta Kubo, Yoshihito Tsubouchi, Naoki Tomiyama, Terufumi Iitsuka
30. Effect of Digital Game Intervention on Cognitive functions in Older Adults: A Multiple Baseline Single Case Experimental Design Study. （高齢者の認知機能に対するデジタルゲーム介入効果：多重ベースラインのシングルケーススタディ） （査読付）	共著	令和6年4月	「BMC Geriatrics」, 24, p. 1-10	有料老人ホーム入居者の認知機能に対するデジタルゲームの効果について，多層ベースラインのシングルケースデザインを使用して明らかにすることとした．期間は15週とし，有料老人ホーム入居者5 名をベースライン期を5～9週とした5つの層に振り分けた．介入期では，参加者はデジタル ゲーム（スペース インベーダー）を実施した．目的変数は脳検の各認知スコアとした．視覚判断およびベイズ統計を用いたマルチレベルモデリングにより，参加者の認知機能の維持・改善にデジタルゲームが効果的である可能性が示唆された． 本人担当部分：研究計画，論文添削 共著者：Kyosuke Yorozuya, Yuta Kubo, Keisuke Fujii, Daiki Nakashima, Taiki Nagayasu, Hiroyuki Hayashi, Kazuya Sakai, Keiji Amano
（その他） 「総説・依頼原稿」 1. コロナ禍で変わる臨床実習（奈良学園大学リハビリテーション学科）	共著	令和3年4月	「作業療法ジャーナル」, 55(4) p.373-p.374	2020年度は，COVID-19の影響により，各大学での臨床実習が学内実習によって代替された．本報告では，奈良学園大学で実施した「早期体験実習」および「地域実習」に関する実施方法や学生によるアンケート結果を記述した．特に本学独自で実施した臨床現場のライブ中継は非常に有意義であり，学生からも一定の評価が得られていた． 本人分担分：実習担当，依頼論文の執筆 共著者：中島大貴，坪内善仁，池田耕二，山形力生，大浦智子，辻下守弘
「国際学会」 1. Ball Rolling Exercise Improves Finger Dexterity and Chopstick Operability of the Non-Dominant Hand in Healthy Young Adults （ボールローリングエクササイズは非利き手の手指巧緻動作と箸操作困難感を改善する）	-	平成26年6月	第16回世界作業療法士連盟大会 第48回日本作業療法学会 （パシフィコ横浜）	本研究では，健常若年者を対象にボールローリングエクササイズを行い，上肢機能やADL動作への効果を明らかにした．その結果，ボールローリングエクササイズが手指巧緻動作と箸操作困難感の改善に寄与することが明らかになった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料添削 共同発表者：中村守吾，中島大貴，川浦真未子，林浩之
2. Physical, psychological, and cognitive factors that have higher influences on physical activity in community-dwelling oldest-old women （地域在住高齢者における身体活動量に影響を与える身体的，精神的，認知的要因）	-	平成29年7月	Occupational Therapy Australia 27th National Conference and Exhibition 2017 （Australia, Perth Convention and Exhibition Center）	本研究では，超高齢女性（85歳以上）の身体活動量に影響を与える要因を明らかにすることを目的とした．重回帰分析の結果，GDS-15のスコア（抑うつ）が，超高齢女性の身体活動量に影響を与える可能性が示唆された． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 共同発表者：Nakashima Daiki, Watanabe Hidehiro, Goto Fumihiko,Kimura Daisuke, Tomiyama Naoki, Islam Mohammod Monirul

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3. Effects of group-based resistance exercise on social networking and mental depression in older adults (集団で行う抵抗運動が高齢者のソーシャルネットワークと抑うつ状態に及ぼす影響)	-	平成29年7月	Occupational Therapy Australia 27th National Conference and Exhibition 2017 (Australia, Perth Convention and Exhibition Center)	本研究では，地域で高齢者の集団に運動介入を行い，地域交流のある高齢者群と地域交流のない高齢者群で，ソーシャルネットワークと精神機能にどのような効果を示すか明らかにした．介入の結果，地域交流のない群の方がソーシャルネットワークと精神機能が有意に拡大した． 本人担当部分：発表資料添削 共同発表者：Fumihiko Goto, Hidehiro Watanabe, Daiki Nakashima, Mohammod Monirul Islam, Ryuichi Hasegawa
4. Effects of elastic band-based resistance exercises on impaired cognition in community-dwelling older adults having mild cognitive impairment (軽度認知障害を有する地域在住高齢者における認知障害に対するゴムバンド運動の効果)	-	平成29年7月	Occupational Therapy Australia 27th National Conference and Exhibition 2017 (Australia, Perth Convention and Exhibition Center)	本研究は，地域在住の軽度認知症高齢者を対象に，認知機能に対するゴムバンド運動の効果を明らかにした．ゴムバンド運動の介入前後で，The Japanese version of Montreal Cognitive Assesmentの得点が有意に改善することが明らかになった． 本人担当部分：調査データの収集，発表資料添削 共同発表者：Hidehiro Watanabe, Fumihiko Goto, Daiki Nakashima, Mohammod Monirul Islam, Ryuichi Hasegawa
「国内学会」 1. 活動遂行における母指指節間関節と示指および中指近位指節間関節の可動域	-	平成25年6月	第47回日本作業療法学会（大阪国際会議場）	本研究は，健常者若年者を対象に母指IP関節と示指・中指PIP関節の機能的可動域を明らかにした．その結果，活動遂行に要する角度は，母指IP関節が44°/13°，示指PIP関節が74°/-3°，中指PIP関節が78°/-12°であった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 共同発表者：中島大貴，中村守吾，川浦真未子，林浩之
2. 地域在住高齢者の注意機能に関連する上肢機能の探索的研究	-	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸ポートピアホテル，神戸国際会議場）	本研究では，地域在住高齢者における上肢の感覚・運動機能と遂行機能の関連性を評価することを目的とした．重回帰分析の結果，非利き手の手指巧緻性が遂行機能と関連付けていることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 共同発表者：中島大貴，林浩之，金田（松岡）紘佳，市川（久保）歩，冨山直樹
3. 大腿骨近位部骨折患者における精神心理機能に関する研究：地域在住高齢者との比較	-	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸ポートピアホテル，神戸国際会議場）	本研究では，大腿骨頸部骨折患者の精神心理機能を明らかすることを目的に，地域在住高齢者との比較行った．大腿骨頸部骨折患者群は，MMSE，WHO-5が有意に低く，GDS-15は有意に高く，Delta TMTは異常値を示した． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料添削 共同発表者：岩井緑，林浩之，中島大貴，中村守吾，金田（松岡）紘佳

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4. 大腿骨近位部骨折患者の上肢機能に関する基礎的研究：地域在住高齢者との比較	－	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸ポートピアホテル，神戸国際会議場）	本研究は，大腿骨近位部骨折患者の上肢機能が地域在住高齢者と比較し，どの程度であるかを把握するために行った．その結果，大腿骨近位部骨折患者は，筋力，Jebsen-Taylor Hand function testのスコア，知覚機能が有意に低下していることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集 共同発表者：中村守吾，林浩之，中島大貴，金田（松岡）紘佳，岩井緑
5. 独居の大腿骨近位部骨折患者の転帰先を分けるFIM得点に関するパイロットスタディ	－	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸ポートピアホテル，神戸国際会議場）	本研究の目的は，大腿骨頸部骨折患者のリハビリ後の自宅退院におけるカットオフポイントの特定であった．多重ロジスティック回帰分析の結果，FIMの認知スコアが退院先に影響する重要な変数であった．また，ROC曲線分析において，認知スコア23.5点が自宅退院のカットオフポイントであることが明らかになった． 本人担当部分：調査データの収集 共同発表者：林浩之，岩井緑，金田（松岡）紘佳，中島大貴，市川（久保）歩
6. 地域在住高齢者の生活機能に影響を及ぼす上肢機能に関する予備的研究	－	平成27年11月	第74回日本公衆衛生学会（長崎ブリックホール）	本研究の目的は，高次生活機能に影響を与える上肢機能を明らかにすることであった．共分散構造分析の結果，手指巧緻性と知覚機能が高次生活機能に影響を及ぼす要因であることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 発表者：中島大貴
7. 抑うつ・アパシーを呈する認知症高齢者に対する集団料理活動の効果の検討-回復期リハビリテーション病棟における取り組み 第一報-	－	平成28年4月	第17回日本認知症ケア学会大会（神戸国際展示場）	本研究では，回復期リハビリテーション病棟入院中の抑うつ・アパシーを呈する認知症高齢者に対して実施した，集団料理活動の効果の検討を目的とした．その結果，介入群は抑うつ・アパシー・QOLの改善が認められた．集団での活動を通じた受容体験と賞賛による自己効力感の向上が抑うつ・アパシー・QOLの改善につながったと考えられた． 本人担当部分：研究計画，介入 共同発表者：窪優太，加藤美樹，中島大貴，岡村英俊，中澤僚一，長谷川慧，各務真奈，竹田徳則
8. 回復期リハビリテーション病棟入院の抑うつ・アパシーを呈する認知症高齢者に対する集団料理活動の持続効果の検討	－	平成28年9月	第6回日本認知症予防学会学術集会（東北大学百周年記念会館）	本研究では，回復期リハビリテーション病棟に入院中の抑うつ・アパシーを呈する認知症高齢者に集団料理活動を実施し，その持続効果を検討することを目的とした．その結果，料理活動後の持続効果は一部認められたが，抑うつには改善の持続は認められず，活動終了後のフォローアップの必要性が示唆された． 本人担当部分：研究計画，介入 共同発表者：窪優太，加藤美樹，中島大貴，岡村英俊，中澤僚一，長谷川慧，各務真奈，竹田徳則

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9. 地域在住高齢者におけるPhysical activity scale for the elderlyと加速度計からみた身体活動量の関連	－	平成29年10月	第66回日本農村医学会（沖縄コンベンションセンター）	本研究の目的は，Physical activity scale for the elderly（PASE）と加速度計を用いて高齢者の身体活動量を測定し，その関連を検討することとした。その結果，PASEと総エネルギー消費量の間に有意な相関が認められたが，中高強度の活動時間との間には関連を認めなかった。 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 発表者：中島大貴
10. 集団によるゴムバンド運動が軽度認知障害者の認知機能に与える効果	－	平成29年11月	第76回日本公衆衛生学会（鹿児島県民交流センター）	本研究は，集団ゴムバンド運動実施群（介入群）と対照群を設定し，集団ゴムバンド運動の認知機能への効果を検討した．二元配置分散分析の結果，交互作用は認めなかった．しかし，The Japanese version of Montreal Cognitive Assesmentの得点がカット値以上に改善した者の割合は，介入群で有意に多いことが明らかになった．. 本人担当部分：調査データの収集 共同発表者：渡邉英弘，中島大貴，藤井啓介
11. 季節変動が寒冷地域在住高齢者の身体活動量に及ぼす影響	－	平成30年9月	第73回日本体力医学会（アオッサ・ハピリン）	本研究では，地域在住高齢者を対象に，①季節による身体活動量の変動と②季節による生活活動内容の変化を検討した．多重比較検定の結果，Lifecorderで測定した歩数や低強度の活動時間は冬季に減少し，春季や夏季に増加することが明らかになった．一方で総エネルギー消費量や中強度以上の活動時間に季節変動は認められなかった．Physical activity scale for the elderlyを用いて評価した生活活動は，「屋外での園芸」のみ冬季に減少することが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 共同発表者：中島大貴，渡邉英弘，後藤文彦，加藤美樹，木村大介，冨山直輝，長谷川龍一
12. 入院超高齢患者の抑うつの有無による栄養状態，体組成，認知機能，日常生活動作能力の比較.	－	平成31年2月	回復期リハビリテーション病棟協会第33回研究大会 in 舞浜・千葉（東京ディズニーシー・ホテルミラコスタ）	本研究では，入院超高齢患者の抑うつの有無による栄養状態，体組成，認知機能，ADL能力について比較し，抑うつを有する入院超高齢患者の特徴を明らかにすることとした．その結果，抑うつ群は，チャールソン併存疾患指数が有意に高く，ADL能力の評価指標であるFunctional Independence Measure得点は有意に低かった．その他の項目は，いずれも統計的有意差を認めなかった． 本人担当部分：研究計画，発表資料作成 共同発表者：窪優太，則竹賢人，中島大貴，山田和政
13. 高齢骨折患者におけるPhase angleを用いた栄養状態の評価	－	令和元年11月	第3回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会（静岡県コンベンションアーツセンターグランシップ）	本研究では，高齢骨折患者におけるPAと栄養状態の関係を調査し，PAにおける栄養状態のカットオフ値を算出することを目的とした．解析の結果，PAは栄養障害と有意に関連し（OR: 2.73, 95%CI: 1.31-5.67），PAにおける栄養障害のカットオフ値は3.74度（AUC: 0.69, p = 0.004）であることが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画，発表資料の作成 共同発表者：窪優太，則竹賢人，中島大貴，藤井啓介，山田和政

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
14. 地域在住高齢者におけるコマーシャルメッセージ時間を活用した身体活動促進プログラムの検討	－	令和2年9月	第75回日本体力医学会（https://jspfsm75.society-web.jp/）	本研究では，高齢者においてCM中の歩行または足踏みを促す身体活動プログラムの効果と実行可能性を明らかにすることを目的とした．通常通りの日常生活を送る週（以下，通常週）とCM中の歩行または足踏みを促す週（以下，介入週）の計14日間の測定を実施した結果，通常週に歩数および歩行時間は有意に増加した（p＜0.01）． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 共同発表者：中島大貴，伊藤健一，坪内善仁，藤井啓介，田畑泉
15. 地域在住高齢者の孤独感と作業機能障害の関連性：横断研究	－	令和3年9月	第55回日本作業療法学会（https://www.c-linkage.co.jp/ot55/index.html）	本研究では，高齢者を対象として作業機能障害と孤独の関連性を検討した．孤独の測定には日本語版UCLA孤独感尺度を使用し，作業機能障害の測定にはCAODを使用した．また，孤独に関連する性別や学歴，家族構成等の交絡因子を調査した．共分散分析を行った結果，孤独に関連する交絡因子を調整した後でも，作業機能障害と孤独の関連性が確認された． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 共同発表者：中島大貴，藤井啓介
16. 近赤外分光法（NIRS）による手工芸の基礎的研究：健常若年者を対象とする予備的研究	－	令和3年9月	第55回日本作業療法学会（https://www.c-linkage.co.jp/ot55/index.html）	本研究では，近赤外線分光法を用いて，紙細工活動中の大脳半球前頭部の血流動態を検証した．その結果，ペーパーブロックとロールピクチャの両課題において，TMT partB・ΔTMTと「構成する課題」で左DLPFCとの間に負の相関がみられた（机上課題の遂行時間が短いほど左DLPFCのΔoxy-Hbが増加する傾向を示した）． 本人担当部分：研究計画，発表資料の作成 共同発表者：岩崎智子，大西久男，山形力生，中田修，中島大貴
17. 奈良学園大学におけるコロナ禍の学内実習の紹介② ― 早期体験実習の概要と学生アンケート調査―	－	令和3年10月	第34回教育研究大会・教員研修会（https://orbit-cs.net/34rehatki/registration.html）	本報告では，奈良学園大学で実施した早期体験実習の学内実習の概要と，学生対象のアンケート結果を報告した．早期体験実習は①動画資料等を用いた予習，②動画資料や病院からのライブ中継，③復習という構成とした．実習後のアンケートでは，多くの学生が実習内容を「よく理解した」と回答した．一方で，2年次以降の学外実習に向けた学習面の不安についておよそ半数が「不安」「非常に不安」と回答した． 本人担当部分：研究計画，データ収集，発表資料の作成 共同発表者：前田吉樹，中島大貴，伊藤健一，野中紘士，阿波邦彦，藤田信子，岩崎智子，橋本雅至，山形力生，池田耕二
18. 奈良学園大学におけるコロナ禍の学内実習の紹介③ ―地域理学療法・作業療法実習の概要と学生アンケート調査―	－	令和3年10月	第34回教育研究大会・教員研修会（https://orbit-cs.net/34rehatki/registration.html）	本報告では，奈良学園大学で実施した地域実習の学内実習概要とともに学生アンケート結果を報告した．地域実習では，①予習，②学内実習，③復習で構成した．実習後のアンケートでは，地域実習で扱ったテーマについては約90%の学生が理解できたと回答した．訪問・通所事業所のライブ中継は，実際の業務を見学するとともにスタッフ・サービス利用者に質問する機会があり，学生の95%が高く評価した．一方で，3年次以降の臨床実習に関する質問では，「不安」という回答が約50%を占めた． 本人担当部分：調査データの収集，発表資料の作成 共同発表者：滝本幸治，池田耕二，吉川義之，坪内善仁，笹野弘美，前田吉樹，中島大貴，辻下聡馬，大浦智子，山形力生

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
19. 地域在住成人の実行機能における主観的評価と客観的評価との関係 -実行機能質問紙の利用可能性の検討-	-	令和5年6月	第43回近畿作業療法学会（https://kinot43.second.net/）	本研究では，実行機能質問紙の得点と神経心理学的検査の成績との関連を明らかにし，前者の利用可能性を検討した．実行機能の主観的評価として実行機能質問紙（EFQ・J-BES），客観的評価として神経心理学検査（TMT-J・新ストループ検査Ⅱ・D-CAT）を実施した．年齢と認知機能成績（MoCA-J）別に参加者を各2群に分け，実行機能質問紙と神経心理学検査の関連を検討した。年齢Low群，MoCA-J高成績群において有意な相関のある項目を比較的多く認め，実行機能質問紙において利用可能性が比較的高いことが示唆された。 本人担当部分：研究計画，発表資料の作成 共同発表者：岩﨑智子，中田修，山形力生，中島大貴，大西久男
20. 地域在住高齢者における作業機能障害と孤独感およびソーシャルネットワークとの関連性	-	令和5年6月	第60回リハビリテーション医学会学術集会（福岡国際会議場，福岡サンパレス，福岡国際センター）	本研究では，地域在住高齢者の孤独感およびと業機能障害，精神的健康がどのように影響するか統計学的に検証することを目的とした．作業機能障害が精神的健康及び孤独感，ソーシャルネットワークに影響するという因果モデルを作成し，共分散構造分析を用いて直接効果と間接効果を算出した．モデルの適合度は$\chi 2$ =0.79（P=0.38），AGFI=0.92，CFI=1.00，RMSEA=0.00で許容範囲の適合度であった．作業機能障害から孤独感への直接効果は，精神的健康感を介する間接効果よりも影響が大きいことが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画，データ収集・入力，発表資料の作成 共同発表者：藤井啓介，中島大貴，窪優太，萬屋京典，則竹賢人，坪内善仁，冨山直樹，飯塚照史，木村大介
21. 地域高齢者における食欲低下と社会的要因の関連性	-	令和5年6月	第60回リハビリテーション医学会学術集会（福岡国際会議場，福岡サンパレス，福岡国際センター）	本研究では，地域在住高齢者における食欲と社会的要因の関連性を明らかにすることを目的とした．地域在住高齢者114名を対象に，従属変数をJapanese version of the Simplified Nutritional Appetite questionnaire，独立変数を日本語版LSNS-6，社会参加の有無，独居の有無とし，共変量を年齢，性，GDS-15，BMI，四肢骨格筋指数，握力，歩行速度とした重回帰分析を実施した．その結果，食欲に対し，家族ネットワーク（β=0.325，p=0.002）は有意な関連を認めた． 本人担当部分：研究計画，データ収集・入力，発表資料の作成 共同発表者：則竹賢人，藤井啓介，中島大貴，窪優太，萬屋京典，林尊弘，後藤文彦，渡邉英弘，吉田旭宏，坪内善仁
22. 地域在住高齢者において骨格筋の筋質と筋量はどちらがより認知機能に強く関連するのか?	-	令和5年6月	第60回リハビリテーション医学会学術集会（福岡国際会議場，福岡サンパレス，福岡国際センター）	本研究では，地域在住高齢者において，骨格筋の筋質と筋量のどちらがより認知機能に関連するのか検討することを目的とした．地域在住高齢者49名を対象に，目的変数を日本語版Cognistat Five のMCI Index，説明変数を筋輝度，SMIとし，歩行速度，PASE，年齢，性別を共変量とした重回帰分析をベイズ統計により実施した．結果，筋輝度のみがMCI Indexと有意に関連していた（事後期待値: 3.17［95%ベイズ信頼区間: 0.72，5.69］，t=2.50，β=0.40，p=0.016）． 本人担当部分：研究計画，データ収集・入力，発表資料の作成 共同発表者：萬屋京典，中島大貴，藤井啓介，則竹賢人，窪優太，坪内善仁，冨山直樹，飯塚照史
23. 都市的地域在住高齢者における作業機能障害と孤独の関連：縦断研究	-	令和5年10月	第72回日本農村医学会学術総会（あきた芸術劇場 ミルハス・にぎわい交流館AU）	本研究では，作業機能障害と孤独の縦断的関連性を明らかにし，作業療法の視点から孤独への対策を検討した．都市的地域在住高齢者22名（平均78歳）を対象とし，2019年（ベースライン）と2022年（追跡調査）にCAODと日本語版UCLA孤独感尺度（孤独感尺度）を調査した．CAODの継時変化から，参加者を作業機能の維持・向上群と低下群に分け，孤独感尺度の変化量をWelchのt検定で分析した．分析の結果，作業機能の低下群では，維持・向上群と比較して孤独感が有意に増加していた（p=.019）．本縦断調査から，孤独感に対して作業機能障害に着目する重要性が示唆された． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，統計解析，発表資料作成，発表 共同発表者：中島大貴，坪内善仁

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
24. 都市的地域在住高齢者のフレイルに影響する心理・社会的要因の検討	－	令和5年10月	第72回日本農村医学会学術総会 （あきた芸術劇場 ミルハス・にぎわい交流館AU）	本研究では都市的地域在住高齢者のフレイルに影響する心理・社会的要因を検討した．アンケートを実施し，年齢，性別，教育歴，経済状態，運動・外出頻度，フレイルの有無，JST，CAOD，LSNS，地域への愛着，ESEを調査した．分析は健常群とフレイル群に分け，各調査項目を比較した．次に，フレイルの有無を従属変数，2群で差のあった項目を独立変数としたロジスティック回帰分析を行なった．分析対象者は89名（77.52±6.44歳，男性13名）で，群間比較では年齢と経済状態，外出頻度，JST，CAOD，LSNS，ESEに有意差を認め，フレイルの主な影響要因では年齢とCAODが抽出された． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，統計解析，発表資料作成 共同発表者：坪内善仁，中島大貴
25. 地域在住高齢者における活動強度別の身体活動量とPhase Angleの関連	－	令和5年11月	第57回日本作業療法学会 （沖縄コンベンションセンター）	本研究は,地域在住高齢者における活動強度別の身体活動量とPhAの関連性を横断的に明らかにすることを目的とした.地域在住高齢者41名を対象として，質問紙を用いて年齢,性,既往歴,介護認定の有無を確認し,身長,体重,握力,通常歩行速度,身体組成,身体活動量を測定した.身体活動量は，座位行動,低・中・高強度活動の活動時間を抽出し,分析に使用した.統計解析では,従属変数をPhA,独立変数を活動強度別の身体活動量,共変量として年齢,筋肉量,握力,通常歩行速度を投入した重回帰分析(ステップワイズ法)を行った.重回帰分析の結果,中強度活動のみPhAと有意な関連性が認められた(β=.298,p=.036).. 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，統計解析，発表資料作成，発表 共同発表者：中島大貴，藤井啓介，窪優太，萬屋京典，則竹賢人
26. 統合失調症患者における声による情動表出について-コンピューター解析による解明-	－	令和5年11月	第57回日本作業療法学会 （沖縄コンベンションセンター）	本研究では，音声による情動表出について，コンピュータ解析で統合失調症患者と健常者の声の特性を比較し，主観的評価と客観的評価の関連性について明らかにした．統合失調症患者と健常者に，短い文章を4つの感情で音読させ，録音音声を分析した．2群間比較では，全ての感情において，患者群が有意にIntensityが小さく，Speech Timeが長かった．また，観察者評価と客観的評価の関連性は，「幸せ」でIntensity，「怒り」でIntensity，Speech Time，「悲しみ」で Inflectionと有意に相関した． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，統計解析，発表資料作成 共同発表者：福原啓太，中島大貴，田中寛之，小川泰弘，西川隆
27. 地域在住高齢女性における舌圧低下を予測する握力のカットオフ値の検討～口腔機能低下者の早期発見にむけた調査～	－	令和6年3月	第13回日本リハビリテーション栄養学会学術集会 （四日市市文化会館）	本研究は地域在住高齢者の舌圧低下を予測する握力のカットオフ値を算出することを目的とした．地域在住高齢者98名のうち包含基準を満たした高齢女性を対象とした．舌圧においては30kPa以下を低下と判断した。統計解析は、舌圧と握力の関係について，2項ロジスティック回帰分析にて確認した後，Receiver Operating Characteristic analysis にて舌圧低下を予測する握力のカットオフ値を算出した．握力は舌圧と関連し（OR:1.42，95%CI:1.10-1.98），舌圧低下を予測する握力のカットオフ値は18.7kg（AUC:0.74，95%CI:0.59-0.89）であった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成 共同発表者：窪優太，則竹賢人，藤井啓介，萬屋京典，冨山直輝，中島大貴
28. 家族・友人とのソーシャルネットワークが高齢者の食欲低下に及ぼす影響：共分散構造分析による抑うつの間接効果に着目した検討	－	令和6年3月	第13回日本リハビリテーション栄養学会学術集会 （四日市市文化会館）	本研究では家族ネットワーク，友人ネットワークが食欲に与える直接的影響と抑うつを介する間接的影響を明らかにした．2都市での健診事業に参加した地域在住高齢者139名を対象とした．SNAQ，LSNS-6，GDS-15を用いて評価した．共分散構造分析にて家族・友人ネットワークから食欲への直接効果と抑うつを介する間接効果を算出した．家族ネットワークから食欲への直接効果は有意であったが，抑うつを介した間接効果は有意でなかった．一方，友人ネットワークから食欲への直接効果は有意でなかったが，抑うつを介した間接効果は有意であった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成 共同発表者：則竹賢人，藤井啓介，中島大貴，窪優太，萬屋京典，林尊弘，後藤文彦，渡邉英弘，吉田旭宏

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「研究会」 1. 回復期リハビリテーション病棟における認知症を伴う高齢者を対象とした集団活動に関する効果の検討	－	平成27年11月	第12回東海記念病院リハビリテーション研究会（東海記念病院）	本研究では，回復期リハビリテーション病棟入院中の抑うつ・アパシーを呈した認知症高齢者に対する，集団作業活動の紹介と効果を検討した．集団活動実施群（介入群）と集団活動非実施群（対照群）で比較した結果，介入群に抑うつ・アパシーに対する即時的改善が認められたが，持続効果に一定した見解は得られなかった． 本人担当部分：研究計画，介入 共同発表者：窪優太，加藤美樹，中島大貴，岡村英俊，中澤僚一，長谷川慧，各務真菜，竹田徳則
2. 院内デイケアの活動内容と結果報告	－	平成28年11月	第13回東海記念病院リハビリテーション研究会（東海記念病院）	本研究では，東海記念病院で実施されている認知症高齢者を対象にした院内デイケアが，参加者の認知機能に与える影響を明らかにした．介入前後の比較を行った結果，Neuropsychiatric Inventoryに有意な改善が認められ，Mini-Mental State Examinationが維持されていたことから，認知機能の維持，BPSDの改善に有用であることが示唆された． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 共同発表者：中島大貴，窪優太，土屋智歩，船戸敦，岡村英俊，加藤美樹
3. 脳血管疾患患者に対する上肢機能訓練について	－	平成29年10月	第14回東海記念病院リハビリテーション研究会（東海記念病院）	本研究では，脳建艦疾患患者の上肢機能訓練に関して最新の知見を文献レビューした．また，東海記念病院で実施されている上肢機能訓練の効果を運動麻痺や上肢筋力の改善から検討した．文献レビューの結果，Bio feedback，電気刺激，課題指向型訓練などが有用であり，これらを取り入れた東海記念病院における介入でも上肢機能訓練が有意に改善していることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成 共同発表者：神村美帆，酒井美幸，長谷川慧，中島大貴

教　育　研　究　業　績　書

令和6年　　5月　　13日

氏名　中田　修

研究分野	研究内容のキーワード
高次脳機能障害、身体障害、認知症	脳損傷、在宅生活、テクノロジー

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）動画を用いた効果的な授業	平成26年10月 ～ 令和2年1月	「高次脳機能障害作業療法学」は高次脳機能障害の基礎知識を学ぶものである。この授業では実際の症状を理解しやすいように，市販されている症状に関する動画や学内に保管されている患者の動画を見ながら解説を加え患者の症状理解が進むように指導を行う。
2）患者に来校してもらい実際の評価の過程を体験	平成23年10月 ～ 令和2年1月	専門科目「日常生活活動」の授業後半では、評価実習を数か月後に控え、より実践的な作業療法手法を学ぶことを目的として3名の脊髄損傷患者に来校していただく。学生はあらかじめADLを中心とした評価項目を検討し評価計画を立て評価手技を練習する。こうすることで実践的な手技が身に付くだけでなく，評価実習に向けた心構えの形成に寄与する。また対象者との接し方や声のかけ方を学ぶことができる。
3）作業療法についての文章や書籍を予め読んでまとめ授業当日グループディスカッションと発表	平成26年4月 ～ 平成27年1月	専門科目「作業療法特論Ⅰ」では、作業療法への理解を深めることを目的に、30名の学生に対してグループディスカッションを主体とした授業を行う。担当教員が指定した書籍の1単元や1人の対象者について書かれたレビューを予め読んでまとめさせておく。授業時間では当日抽選で決まった5～6人を1グループとして30分間書いてあった内容や得た知識、感想や調べても理解できなかったことなどについてディスカッションを行う。最後にグループごとに発表を行う。作業療法についてさまざまな知識が得られるだけでなく、1年生時にすべての学生が自由に討議する機会を提供することで、クラスの凝集性が高まりその後の友人関係の形成に役立ったとの感想が学生から聞かれた。また発表者や書記・司会者も抽選でランダムに決定されるので、全ての学生に何らかの役割が常に与えられるようになっており、自ら主体的に他者と関わる機会にもなったとの感想もきかれた。
4）作業療法に関する文献を抄読し自らレビューを書いて他の学生に解説	平成27年4月 ～ 平成27年7月	専門科目「作業療法特論Ⅱ」では、1，2年生各4～5名が一組となり近隣の介護老人保健施設で、通所している高齢者に対して午後からのレクレーションを企画運営する形式で演習を実施している。担当教員は事前準備や企画書のチェックを行い、当日はリスク管理と終了後のフィードバックを行う。この演習を通して対象者との実践的な関わり方を学ぶだけでなく、１年生は2年生の行動や言動を見ることで今後の具体的な目標設定の一助となり、2年生はリハーサルや当日の進行の中で下級生にも配慮する必要性から自らの上級生としての在り方を自覚することが可能となる。このような学年間の相互作用が作業療法士を目指す学生の成長に貢献すると考える。
5）自らの実習での体験を学会形式で発表	平成27年11月 ～ 令和元年11月	専門科目「作業療法概論Ⅱ」の中で、研究法について教授する。この時期学生は臨床実習で少なくとも1名の患者を対象として治療を体験しているので、シングルケースとして7分のパワーポイントを作成し学会形式で発表会を授業の中で開催した。担当教員は各自の発表終了後1枚ずつのスライドについて、見せ方や、色の使い方、文字数などを細かく指導し、今後の学会発表に寄与するように心

事項	年月日	概　　要
２　作成した教科書，教材 1）講義用補助教材 2）実習に役立つ補助教材	平成23年4月 ～ 令和6年2月 平成27年10月 ～ 令和6年2月	「身体障害作業療法Ⅱ」で使用したスライドをカッコ抜きの問題形式に再編成し配布した。学生には授業中に得た知識の自宅での確認が可能との意見が聞かれた。 「高次脳機能障害作業療法学」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）で複数の授業の中で取り上げた「代表的な簡易評価バッテリー」の得点の解釈についてまとめたプリントを配布した。学生からは実習でバッテリー結果から患者の状態をどのように解釈すればよいかを判断する際に大いに役立ったとの意見が聞かれた。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 なし		
４　実務の経験を有する者についての特記事項 1）神戸協同病院院内勉強会にて講師 2）高次脳機能障害作業療法研究会第36回大会において発表者として講演 3）兵庫県活動分析研究会－ＡＤＬ勉強会において講義の講師 4）2017年度第二回兵庫県作業療法士会丹波北播磨ブロック勉強会の講師 5）2018年度第一回兵庫県作業療法士会丹波北播磨ブロック勉強会の講師 6）2019年度第一回兵庫県作業療法士会但馬ブロック勉強会の講師 7）2019年度第二回兵庫県作業療法士会丹波北播磨ブロック勉強会の講師 8）2021年度第二回兵庫県作業療法士会但馬ブロック勉強会の講師 9）兵庫県活動分析研究会－ＡＤＬ勉強会において講義の講師	 平成26年 3月10日 平成27年 11月15日 平成28年 8月12日 平成28年 9月20日 平成29年 8月4日 平成30年 8月24日 平成30年 9月4日 令和3年 9月19日 令和4年 3月23日	 院内勉強会に招かれて、注意障害とリハビリテーションというテーマで講義を行った。 頭部外傷により高次脳機能障害をきたし、在宅生活のさまざまな場面で家族の促しが必要であった症例に対するITを使った介入というテーマで講演し、受講者と議論した。 第一線で活躍する作業療法士の集まりである兵庫県活動分析研究会に講師として招かれ、高次脳機能障害について講演を行った。高次脳機能障害を抱える患者の問題点に関して活発な意見交換を行った。 兵庫県作業療法士協会が主催する丹波北播磨ブロック勉強会において「前頭前野と高次脳機能障害」というテーマで講義を行った。 兵庫県作業療法士協会が主催する丹波北播磨ブロック勉強会において「頭頂連合野のはたらき」というテーマで講義を行った。 兵庫県作業療法士協会が主催する但馬ブロック勉強会において前頭前野に関してで講義を行った。 兵庫県作業療法士協会が主催する丹波北播磨ブロック勉強会において「各脳葉と高次脳機能障害」というテーマで講義を行った。 兵庫県作業療法士協会が主催する但馬ブロック研修会において前頭前野の評価とアプローチに関してで講義を行った。 第一線で活躍する作業療法士の集まりである兵庫県活動分析研究会に講師として招かれ、意識障害と注意障害について講演を行った。

事項	年月日	概　　要
5　その他 1）神戸総合医療専門学校作業療法士科における教育実績	平成26年4月 ～ 令和6年3月	神戸総合医療専門学校作業療法士科専任教員として以下のような科目を担当した。
「解剖学実習Ⅰ」	平成26年4月 ～ 平成29年7月	「解剖学実習Ⅰ」（専門基礎科目、1年次配当、半期、必修2単位）において、下肢の解剖生理について講義および演習を実施した。人体模型を用いた実践的な講義を行い、個別に口頭試問を行うことで患者の体の構造を理解させる教育効果があった。
「運動学実習」	平成26年4月 ～ 平成29年7月	「運動学実習」（専門基礎科目、1年次配当、半期、必修2単位）において、運動学の基礎的用語について講義し、実際の体の動きや反応をについて講義および演習を実施した。1回ごとに実験テーマや運動課題を与え動作分析や姿勢分析の方法を指導した。健常者と運動の仕組みを理解することで、それと比較した患者の障害を理解させる教育効果があった。
「身体障害作業療法Ⅱ」	平成23年4月 ～ 令和5年7月	「身体障害作業療法Ⅱ」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において、脊髄損傷・関節リウマチ・ＡＬＳ等の神経筋疾患について講義を行った。各疾患の特性と作業療法における治療的介入について最新の知見を取り入れながら講義を行うことで、実習だけでなく免許取得後も実践において役に立つ教育を心がけた。
「解剖学実習Ⅱ」	平成23年10月 ～ 令和2年1月	「解剖学実習Ⅱ」（専門基礎科目、1年次配当、半期、必修2単位）において、大脳の解剖生理について講義および演習を実施した。実物大の脳模型を用いた実践的な講義を行い、大脳の構造及び機能が理解しやすいようにスライドでは図表を多用し、患者の大脳の構造および機能を理解させる教育効果があった。
「高次脳機能障害作業療法学」	平成23年10月 ～ 令和5年1月	「高次脳機能障害作業療法学」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において、高次脳機能障害の基礎知識から作業療法における治療的介入までを教授した。自らの研究成果や学会で得た知識を積極的に取り入れながら講義を行ったことで、高次脳機能障害に対する幅広い知識を理解させる教育効果があった。
「日常生活活動」	平成23年10月 ～ 令和2年1月	「日常生活活動」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において、ＡＤＬの概念や障害との関連について教授した。授業の後半では脊髄損傷の当事者3名に来校していただきＡＤＬ評価を体験する機会を提供した。この授業を通して知識だけでなく実践力を身につけるという教育効果があった。
「作業療法概論Ⅱ」	平成23年6月 ～ 令和元年11月	「作業療法概論Ⅱ」（専門科目、３年次配当、6月、8月、11月に集中講義として開催、必修2単位）において、研究法ならびに管理運営について講義した。管理運営については教科書を中心とした制度的な基礎知識を教授した。研究法については、作業療法における研究の意義と方法論を具体的に指導するだけでなく、学会発表を想定した模擬発表会を行った。このように将来の研究機会に備えた実践的な演習を通して作業療法の発展に寄与できる人材の育成を行った。
「作業療法特論Ⅰ」	平成26年4月 ～ 平成27年1月	「作業療法特論Ⅰ」（専門科目、1年次配当、通年、必修４単位）において、作業療法の基礎知識、ノートの取り方や具体的な学習方法について教授した。また早期臨床体験として近隣の老人保健施設や養護施設に出向き障害のある対象者と関わる機会を得た。このように学校生活に対する細かな指導や実際の現場を体験することで、早期から作業療法士を目指す学生としての自覚を促すことができ、専門学校での積極的な学びを実践する

事項	年月日	概　　要
「作業療法特論Ⅱ」	平成27年4月 ～ 平成28年1月	「作業療法特論Ⅱ」（専門科目、2年次配当、通年、必修４単位）において、作業療法の文献抄読や、過去の事例報告の再検討、自らの実習体験の報告などを行った。授業は3～4人のグループ単位でディスカッションしたのち全体での討議を行うという形式をとり、各学生が他の学生の発言を参考にしながら自らの考えを述べる機会が持てるように心がけた。また近隣の老人保健施設で1年生と合同で4～5人１組でレクリエーションを企画実施した。このような取り組みを通して、徐々に作業
「作業療法特論Ⅲ」	平成28年4月 ～ 令和2年1月	「作業療法特論Ⅲ」（専門科目、3年次配当、通年、必修４単位）において、実習準備と実習後のフォローアップを行った。また臨床実習報告会や、実習地で得た知識や技能をお互いに開示しあう勉強会なども定期的に開催した。またこの授業では国家試験対策も実施し、講師からの講義だけでなく、自分たちで小グループを組んでの過去問題の解答集作成や、国試新規問題の作成会を開催した。講師からは新規問題や過去問など実践的な小テストを1週間に数回開催するとともに、週に1回の面談を実施することで学生の進度に合わせたきめ細やかな指導が行われた。そのような指導を通して全国平均を上回る国家試験合格率を達成でき
２）奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻における教育実績	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻助教として以下のような科目を
「作業療法評価学Ⅰ（身体）」	令和2年4月 ～ 現在に至る	「作業療法評価学Ⅰ（身体）」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において、身体障害分野における作業療法評価の理論的側面を教授した。この授業を通して知識だけでなく対象者との良好な関係を築くための心得を身につけるという教育効果があった。
「作業療法評価学演習Ⅰ（身体）」	令和2年9月 ～ 現在に至る	「作業療法評価学演習Ⅰ（身体）」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において、身体障碍分野における作業療法評価の実践指導を実技を交えて教授した。学生に対して実技試験を実施しその場でフィードバックを行うことで、より実践力を養うという教育効果があった。
「高次脳機能障害作業療法（総論）」	令和3年4月 ～ 現在に至る	「高次脳機能障害作業療法（総論）」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）において、作業療法士として関わる高次脳機能障害の基礎知識を教授した。高次脳機能障害の一般的な特徴と患者への対応を円滑に行う上で基礎となる各症状の基本的な特性、各疾患と病態に対する適切な評価と援助の実践に関する理解を深める。事例などを視聴覚教材で示すことで、より具体的な障害像を
「高次脳機能障害作業療法学Ⅱ（各論）」	令和3年9月 ～ 現在に至る	「高次脳機能障害作業療法学Ⅱ（各論）」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において脳血管障害や頭部外傷などによる高次脳機能障害の各種検査の具体的方法を学ぶと共に、評価や結果の解釈とその思考の流れ等を学ぶ。高次脳機能障害作業療法学Ⅰ（総論）で修得した知識を基盤として、具体的な高次脳機能障害の評価方法や結果の解釈に関して、グループごとの検討会を通して
「作業療法特論Ⅴ（高次脳機能障害）」	令和3年9月 ～ 現在に至る	「作業療法特論Ⅴ（高次脳機能障害）」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において、高次脳機能障害領域の作業療法における最新の知見や臨床現場で用いられる治療・支援方法など、作業療法実践で注目されているテーマを紹介して知見を広げるために、具体的な症例を介して1人の対象者に対する総合的な見方ができるようになることを目指した。いくつかの症例を通してより実践
「日常生活支援学Ⅱ（各論）」	令和3年9月 ～ 現在に至る	「日常生活支援学Ⅱ（各論）」（専門科目、2年次配当、半期、必修2単位）において、対象者の日常生活活動の向上に向けた支援が検討できるよう、一般的な日常生活動作の各種実践方法と分析技能について演習を交えて教授した。作成した視聴覚教材を用いて分析を行いながら実践することで、より効果的な動作解析のプロセスを学ぶという教育効果があった。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
１　資格，免許 1）修士（理学）	平成8年3月	金沢大学第170251号 「修士論文名：昆虫インスリン様遺伝子の探索」
2）作業療法士免許	平成13年4月	名簿登録番号第24842号
3）博士（保健学）	平成29年3月	神戸大学第226号 「博士論文題名：Extraction and Classification of Difficulties Faced by Patients with Brain Injury Living at Home While Using Everyday Technology」 「和名：在宅生活をおくる脳損傷者が日常生活機器使用時に直面する困難さの抽出と分類」
２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 なし		
４　その他 なし		

事項			年月日	概　　要
研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） なし				
（学術論文） １）認知症の人に優しい家電　テレビのリモコン使用が混乱しないように(査読付)	共著	平成26年4月	福祉介護　テクノプラス 7 , 4 , pp14-17	認知症者のEveryday technology (ET) 使用状況調査を行ったところ，テレビのリモコンは使用頻度が高くリモコン操作に何らかの問題を抱えている認知症者が多いことが明らかとなった．さらにその困難さの質的内容を分析するとボタンの多さが問題で起こる間違いがみられた．そこでわれわれはボタン数が少なく形状が単純であるリモコンを用いて，さらに作成したリモコンカバーをこれに装着し（改良型リモコン），認知症者7名に約2週間使用してもらった．その結果改良型リモコンはボタン押し間違いが減少し利用に混乱が生じないことが確かめられた． A4判 全4頁 本人担当分：共同して在宅調査を行い，リモコンカバー作成過程の議論に参加した． 共著者：長尾徹、種村留美、野田和惠、中田修、相良二朗
２）Extraction and Classification of Difficulties Faced by Patients with Brain Injury Living at Home While Using Everyday Technology（在宅生活をおくる脳損傷者が日常生活機器使用時に直面する困難さの抽出と分類）（博士論文)(査読付)	共著	平成29年3月	Bulletin of Health Sciences Kobe,32,pp17-29,2017 （神戸大学）	脳損傷者の日常生活機器（以下ET）使用の困難さの特徴を明らかにするために脳損傷者と健常者各25名を対象としET使用困難さを抽出した。得られた困難さから質的分析手法に基づき分類表を作成した。得られたカテゴリーは脳機能との関連で理解可能であった。ABI者特有なカテゴリーは遂行機能と関連している一方で、注意関連のカテゴリーは健常者でもみられた。本分類表により、脳損傷者のET使用困難を具体的に理解でき、脳機能と関連させることが可能となる。 A4判 全13頁 本人担当分：調査及び結果の分析と論文執筆 共著者：OSAMU NAKATA 、RUMI TANEMURA 、KAZUE NODA、TORU NAGAO
３）Everyday technology use among older adults in Sweden and Japan: A comparative study. （スウェーデンと日本の高齢者間での日常生活機器使用の比較研究） （査読付）	共著	平成29年4月	Scandinavian Journal of Occupational Therapy. Vol. 27 P.1-P.11	日常生活機器の使用状況を調査する質問紙であるEveryday Technology Use Questionnaire (ETUQ)を用いて、日常生活機器使用のさまざまな側面をスウェーデンと日本の高齢者で比較検討した。統計学的分析によってＥＴを使う挑戦のレベルは両群で同じであったが、グループレベルの関連性はスウェーデンの高齢者の方が幾分か高く、ＥＴ使用に対する自覚的能力はスウェーデンの高齢者の方が有意に高かった。スウェーデンと日本の高齢者におけるＥＴ使用の違いや共通性はＥＴＵＱを使って明らかにすることができる。 本人担当分：日本の在宅高齢者の自宅での調査およびデータの入力と取りまとめを行った。 共著者：Malinowsky C, Nygård L, Tanemura R, Nagao T, Noda K, Nakata O, Sagara J, Rosenberg L, Asaba E, Kottorp A
４）Difficulties in Everyday Technology use of the people with acquired brain injury living at home comparing controls（在宅生活をおくる頭部外傷者の日常生活機器使用での困難さの対照群との比較）	共著	平成31年1月	Asian Journal of Occupational Therapy.Vol.15 P63-P68	日常生活機器は現代の生活の中心になっているが、その使用は認知障のある人に課題をもたらす。そこで本研究では、後天性脳機能障害を持つ人々が日常生活機器を使用する際に知覚される困難のレベルを説明しようと試みた。自覚的な困難のレベルと認知障害との相関関係を評価したところ、後天的脳機能障害を持つ対象者22人は使用している機器の比率と神経心理検査結果の間に負の相関の傾向が観察され、特に遂行機能障害の度合いと支援を必要としている機器の割合との間に強い負の相関が確認された。 本人担当分：調査及び結果の分析と論文執筆。 共著者：OSAMU NAKATA 、RUMI TANEMURA 、TORU NAGAO、KAZUE NODA、JIRO SAGARA.
５）The Characteristics of Perceived Difficulties in Everyday Technology Use among Individuals with Acquired Brain Injury Compared to That among Controls. (対照群と比較した脳損傷者の日常生活機器使用の特徴)	共著	令和2年10月	Journal of Behavioral and Brain Science, 10, 410-419.	脳損傷者は日常生活での機器使用時にさまざまな問題を抱えている。そこで本研究では機器使用時の困難さの特徴を対照群との比較において明らかにしようとした。脳損傷者は対照群と比較して使用している機器の使用は優位に少なく、さまざまな困難が生じたとき、彼らはETを独立して管理することができず、介護者の支援を必要としていることが明らかになった。 本人担当分：調査及び結果の分析と論文執筆。 共著者：Nakata, O. , Tanemura, R. , Nagao, T. , Noda, K. and Sagara, J.
６）在宅で生活する重度の高次脳機能障害者に対するAssistive Technology支援	共著	令和3年3月	医療福祉情報行動科学研究，第8巻、pp39-46	脳損傷者が抱える生活上の困難さを、シングルケースを通して明らかとし、テクノロジーを使ってそれらの困難さに対応することで、良好な効果を得たことを報告した。本研究では対象者の困難さが軽減されただけでなく、介護する家族の負担も軽減することが確認された。 共著者：中田　修，種村　留美，相良　二朗，野田　和惠，長尾　徹
７)外傷性脳損傷者の遂行機能障害とEveryday Technologyの使用状況との関連,(原著)	共著	令和4年3月	医療福祉情報行動科学研究，第8巻、pp39-46	外傷性脳損傷者は日常生活機器の使用にさまざまな困難さを抱えていることが知られている。外傷性脳損傷者において障害されることが多く、日常生活との関連が指摘されている遂行機能と日常生活機器使用児の困難さの傾向について報告した。調査の結果、遂行機能障害が重度の場合、困難さを感じずに使用できる日常生活機器が少なくなり、その対応の仕方は家族からの支援に頼っていることが明らかとなった。 共著者：中田　修，種村　留美，相良　二朗，野田　和惠，長尾　徹

事項			年月日	概　　要
８）Livelihood support by assistive technology based on a home visit survey（訪問調査に基づくAssistive Technologyを用いた支援）	共著	令和4年4月	Studies in Psychology, Volume 43, Issue 1 Pages 206-226	日本は今や超高齢化社会にあり、2025年までに4～5人に1人が75歳以上になると見込まれてる。テクノロジーは高齢者を中心に絶えず進歩しており、認知機能の低い高齢者は対応できていない。本研究ではこれらの問題を在宅生活を送る人々への調査を通して明らかにしたうえで、テクノロジーを用いた対応について具体例を挙げながら論じている。 Toru Nagaoa ,Rumi Tanemura,Kazue Noda,Jiro Sagara & Osamu Nakata
９）地域在住成人における実行機能質問紙の利用可能性の検討－客観的行動評価との関連－	共著	令和5年3月	医療福祉情報行動科学研究,vol.10,pp17-27	実行機能は神経心理学検査によって評価されるが，これらは検査に時間を要する等の不便さもあるため，簡便に行える質問紙検査の作成が試みられている。実行機能質問紙において，年齢Low群，MoCA-J高成績群において有意な相関のある項目を多く認め，利用可能性が比較的高いことが示唆された。対象者側の要因（年齢や全般的な認知機能の程度）と使用する質問紙検査側の要因を考慮することで，実行機能質問紙を客観的行動評価のスクリーニングとして利用できる可能性があると考えた。 共著者：岩﨑智子，中田修，山形力生，中島大貴，大西 久男

事項			年月日	概　　要
（その他） 「国際学会」 1）The comparison of everyday technology（ET）usage according to the severity of executive dysfunction（遂行機能障害の重症度に基づいたEveryday Technology（ＥＴ）使用の困難さの比較）	—	平成26年6月	16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists Congress 2014 －（Yokohama）	遂行機能障害とET使用状況との関連を明らかにすることを目的として，高次脳機能障害者を遂行機能障害の重症度で2群に分け，それぞれのET使用状況を比較した．使用ET数の平均はA群38.6±7.6品目,B群30.8±7.4品目（ｔ検定，ｐ<0.05），困難有りET数の平均は各13.9±6.4品目,15.1±4.8品目（n.s.）であった．さらに困難ありETを，独力使用 と援助使用とに分けると，A群とB群の各独力使用割合はA群78.3%/B群31.1%，各援助使用割合は A群21.7%/B群69.6%であった．A群がB群より有意に使用ET数が少なかったことから，ET使用数と遂行機能障害の重症度との関連が示唆された． 共著者：Osamu Nakata, Rumi Tanemura, Toru Nagao, Kazue Noda, Jiro Sagara
2）Comparison of everyday technology use between persons with dementia and cognitive impairment.（認知症者と高次脳機能障害者とのeveryday technology使用の比較）	—	平成29年10月	ASEAN Conference on Health Ageing －（Kuching）	認知症者と高次脳機能障害者のEveryday Technology （ET）使用状況をETUQを用いて調査し比較検討を行った。平均使用ET数は認知症者が28.4±8.9、高次脳機能障害者の35.1±8.2よりも有意に少なかった。困難がありながら使っているETの割合は認知症者が15.5%に対して高次脳機能障害者は40.2%と有意に高かった。使わなくなったETの平均数は認知症者が13.4個に対して高次脳機能障害者は1.4個だった。このことから,高次脳機能障害群は困難さがありながらもtry and errorで何とか使い続けられるのに対して,認知症群では認知機能の低下により今まで使えていたETが徐々に使えなくなり、困難となった場合には使うことを止めてしまったと考えられる。 共著者：Osamu Nakata, Rumi Tanemura, Toru Nagao, Kazue Noda, Jiro Sagara
3）The Effects of Individual Differences in Executive Function on Prefrontal Lobe Activation in Healthy Adults: An fNIRS Study（実行機能の差が健康な成人の前頭葉の活性化に及ぼす影響：fNIRS研究）	—	令和5年7月	The International Neuropsychological Society Meeting Taiwan（Taipei）	健康な成人54名を対象としfNIRSを用いて、実行機能テストのパフォーマンスの個人差と、WMおよびIC負荷による脳活性化の対応する変化を調べる。D-CATおよびストループテストの2種類の机上課題を用いて実行機能を測定した。両方のテストの領域の主効果に有意な差が見つかり、前頭極（FP）よりも左 DLPFC の活性化が有意に高いことが示唆された。両方のテストは、グループ×トライアル×領域の有意な相互作用を示し、事後テストでは、D-CAT3の高グループの左DLPFCの活性化が有意に高く、コントロールグループでも同様の結果が得られた。これらの結果は、実行機能の個人差が前頭前野の活性化の特定の側面に影響を与えることを示唆している。 共著者：Tomoko Iwasaki,Osamu Nakata,Rikio Yamagata,Hisao Ohnishi

事項			年月日	概　　要
「国内学会」 1) 高次脳機能障害者と認知症者と健常者の日常生活機	―	平成27年9月	第49回日本作業療法学会― (神	ETの使用状況を,在宅生活を送っている健常群及び高次脳機能障害群と認知症群で比較しその差を検討した．日常生活において高次脳機能障害者は健常者に比べて使用ET数が少なく，認知症者のそれはさらに少なかった．認知症者は金銭管理，移動関連，テレコミュニケーションに含まれるすべてのETの使用数が有意に少くこのことは認知症者の社会参加の低さを示している．また高次脳機能障害者は，使用時に困難なET数が他の群より多い一方，使用を中止したETが他群より少ないことから，認知症者のように困難さを感じてET使用を止めるのではなく，困難さがありながらもETをなんとか使い続けていると考えられる． 共著者：中田修、種村留美、長尾徹、野田和惠
2) 自閉スペクトラム症児に対する馬介在療法の効果	―	令和3年3月	日本看護研究学会第34回近畿・北陸地方会学術集会	医師により自閉スペクトラム症と診断された5名に対して馬介在療法がその心理的側面に及ぼす効果を検討した。POMS2下位尺度の怒り-敵意、活気-活力、およびTMD（総合的気分状態得点）で有意差が認められた。POMS2マニュアルによれば、TMD得点が高い場合「現在，情緒機能に関する問題を抱えている」とされる。従ってTMD得点が馬介在療法後に有意に低下しているということは、自閉スペクトラム症児の情緒機能の改善に馬介在療法が効果的であったことを示唆している。ASDの中核症状は社会性の障害であり、リハビリテーション場面だけでなく、日常生活において対人関係や情緒面でストレスを抱えやすいとされ、馬介在療法は自閉スペクトラム症児の社会性の改善の一助になる可能性がある。 共著者：中田修、笹井久嗣
3) 近赤外分光法（NIRS）による手工芸の基礎的研究：健常若年者を対象とする予備的研究	―	令和3年9月	第55回 日本作業療法学会	紙細工の認知的治療効果について，健常若年者を対象に近赤外分光法(NIRS)を用いて検証した．あわせて，ワーキングメモリと実行機能との関連も検討した．分散分析の結果では，課題ごとの5領域でのΔoxy-Hbについては，統計的差異は認められなかったが，部位と検査間の関連性の検討で，両活動において，ワーキングメモリや実行機能を反映する指標とされるTMT B・TMT(B-A)と，「構成する」課題で左DLPFCとの間に有意な負の相関がみられた． 共著者：岩崎智子，大西久男，山形力生，中田修，中島大貴
4) 奈良学園大学リハビリテーション学科におけるコロナ禍の学内実習の紹介①―実習専用ホームページの開設と運用方法の紹介―	―	令和3年10月	第34回教育研究大会・教員研修会	令和2年度のコロナ感染拡大下において，学内実習へと切り替えた2つの実習に関して、各実習を円滑・有意義に進めるため臨床実習専用ホームページ（以下，HP）を開設し運用した効果を考察した。保護者向けの説明や、学生向けコンテンツを作成したことに対して、学生へのアンケートを実施した結果、学生からは良好な感想を得た。学内実習では同じ教材・内容を用いるので個々の学生の学習進捗状況や理解度を把握する上でHPを通じた学習指導は有用と感じられた。
5)手工芸が健常成人の脳活動に及ぼす効果：実行機能の個人差に着目したfNIRS研究	―	令和4年9月	第56回 日本作業療法学会（京都）	作業療法で治療の手段として用いる手工芸の認知的効果について健常成人を対象に NIRSを用いて検証した．実行機能Low群とHigh群でΔoxy-Hbの総量を比較した分析の結果，両活動とも，Low群＞High群となった．Low群ではペーパーブロックの構成課題でのみ左右DLPFCが選択的に賦活されている点，ロールピクチャーの構成課題にでは3領域においてHigh群より有意に賦活している点等が特徴的であり，課題の難易度と認知的負荷が関連していると考えた．紙細工活動を治療として選択する際には，個人の実行機能に適した活動を選択することで，より効果的な治療として活用できる可能性があると考えられる。 共同発表：岩崎智子，大西久男，山形力生，中田修

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和 6 年　3月　31日

氏名　野田　優希

研究分野	研究内容のキーワード
スポーツリハビリテーション、運動器系理学療法	スポーツリハビリテーション、足関節、競技復帰

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例 (1) 講義の工夫	令和元年4月 ～ 現在に至る	講義では可能な限りイラストやビデオを多用し，分かりやすいように工夫している．また様々な資料等で出てくる単語の統一にも気を配り，学生が混乱しないように努めている． さらに，教科書的な内容の教授の後には，実際の症例に重ね合わせ，机上での勉強と臨床でのギャップを極力少なくするように努めている．また，国家試験対策も盛り込んでいる．
(2) 実験・実習の工夫	令和元年4月 ～ 現在に至る	基礎技術の習得には可能な限り時間を掛け，その後，習得した知識をどのように臨床応用するかイメージしやすいように、実際に臨床で経験した患者を例に挙げ実習している。また、エコーや骨模型を用いることで、軟部組織の動きや関節運動がイメージしやすいよう工夫している。
２　作成した教科書，教材 1）頭蓋療法を含むファンクショナルポジショナルリリースと促通位リリースのアプローチ（翻訳）（ポジショナルリリーステクニック）	平成30年9月25日	翻訳にあたって、できるだけ原文に忠実に翻訳した。また専門的な表現や特殊な言い回し、分かりにくい表現の場合は、可能な限り読者に伝わりやすいよう言葉を選び翻訳した。
2）教科書にはない敏腕PTのテクニック　臨床実践　スポーツ傷害膝の理学療法	令和2年12月10日	執筆にあたって、臨床で有用なテクニックや評価法等を自分の臨床経験を踏まえ記載した。多くの実際の患者さんの写真や治療場面の写真を含めることで、臨床に応用するイメージが湧きやすいよう工夫した。
3）PT入門　イラストでわかる運動器障害理学療法	令和3年1月25日	足関節捻挫に関する章を執筆した。執筆にあたって、現在のゴールドスタンダードとされる評価法や最新の情報を海外文献を引用して多く盛り込んだ。また、イメージしやすいよう多くの図や写真を掲載した。
4）シンプル理学療法学シリーズ　運動器障害理学療法学テキスト　改定第３版	令和3年8月15日	筋・軟部組織性障害の概論について執筆した。執筆にあたっては、臨床において担当することの多い疾患を中心に、基本的な病態と評価、治療プログラムを記載した。学生から新人にも理解しやすいようできるだけ図や写真を多くし、明瞭な記載を心がけた。
5）実践リハ評価マニュアルシリーズ　症例動画から学ぶ臨床姿勢分析　～姿勢・運動連鎖・形態の評価法	令和4年1月1日	足関節から上行性運動連鎖による膝への影響について臨床症例をイメージし執筆した。実際の症例の画像を多く含め、また運動連鎖についても丁寧に説明することで、二次的な障害が生じるメカニズムについて理解しやすいよう記述した。

3　教育上の能力に関する大学等の評価	平成30年8月	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査において 奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション科 助教 担当授業科目：「早期体験実習」「基礎ゼミⅡ」「スポーツ医学」「運動学演習」「スポーツ障害理学療法学」「筋骨格障害理学療法学Ⅱ（各論）」「理学療法計画論」「理学療法評価実習」「総合臨床実習Ⅰ（理学療法）」「総合臨床実習Ⅱ（理学療法）」「客観的臨床能力演習（理学療法）」「理学療法卒業研究」可と判定
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）富士通９人制バレーボールチームトレーナー	平成21年7月 ～ 現在に至る	富士通9人制バレーボールチームのトレーナーとして、週１回練習に帯同し、全国大会・近畿大会などの試合は計100回以上帯同した。選手のテーピングやウォーミングアップ、トレーニング指導およびアスレティックリハビリテーションを担当した。
2）実習指導実績	平成21年4月1～平成30年3月31日	藤田整形外科スポーツクリニック・リハビリテーション部において、毎年２～３名の専門学校生や大学生の評価実習・長期実習指導を担当した。患者さんとのコミュニケーションをとることを積極的に促し、机上の知識と臨床での現象をいかに分かりやすく結びつけるかを重要視して指導を行った。
3）神鋼環境ソリューション９人制バレーボール部トレーナー	令和6年2月～現在に至る	チームのトレーナーとして、月に１～２回練習に帯同し、ウォーミングアップ、トレーニングなどのコンディショニング業務を担当した。

5　その他 奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科における教育実績	令和元年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科における専任教員（助教）として、以下のような科目を担当した。
	令和元年9月 ～ 現在に至る	「スポーツ医学」 奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の助教として「スポーツ医学」（専門基礎科目、1年次配当、半期、必須1単位）を担当した。講義では可能な限りイラストや実際の患者さんの写真またはビデオを多用し,分かりやすいように工夫している．また専門的な言葉や表現については分かりやすいよう説明を加え、学生の理解の向上に努めている． 教科書的な内容を実際の症例に重ね合わせ，机上での勉強と臨床でのギャップを極力少なくするように努めている．実技を含む講義に関しては、教科書的な内容に加え、臨床において役立つコツや工夫についても経験をふまえ伝えるようにしている。
	令和元年9月 ～ 現在に至る	「基礎ゼミⅡ」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の助教として「基礎ゼミⅡ」（共通教育科目、1年次配当、半期、必須1単位）を担当した。少人数のゼミ形式で1年次生が大学の学習に慣れ、4年間の大学生活を有意義に送るための基礎を修得できるよう授業を組み立てた。最終的には一人一つのテーマを設定し、講義ノートの取り方、文献資料の検索、学術的な文章の読み方などについて、ゼミ形式の演習を通じて学修し、最終的には1人1テーマで学習した内容をまとめてプレゼンテーションを行った。それによって、学生に大学における能動的な学びを理解させ、慣れさせる教育効果があった。
	令和元年9月 ～ 現在に至る	「早期体験実習(理学療法)」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の助教として担当の「早期体験実習(理学療法)」（専門科目、1年次配当、半期、必須1単位）を担当した。教員引率による臨地での見学実習、および学内でのセミナーを通して、理学療法の役割と位置付けを学修させ、他職種の専門性と相互の連携を理解させ、理学療法士への動機付けと学習意欲を高める効果があった。 なお、令和2年度と3年度は学内にて実習を実施した。臨床のオンライン見学、視聴覚教材を用いたリハビリテーションにおける診療チームの役割を学習することで、理学療法の役割と位置付け、他職種の専門性と相互の連携を理解させる教育効果があった。
	令和2年4月 ～ 現在に至る	「運動学演習」 　奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の助教として担当の「運動学演習」（専門基礎科目、2年次配当、半期、必須1単位）を担当した。リハビリテーション評価の基礎となる運動の解析が行え、解析結果を解釈できるように授業を行った。それによって、学生に、運動学を臨床へ応用する方法とその重要性を理解させる教育効果があった。

	令和3年9月 ～ 現在に至る	「客観的臨床能力演習（理学療法）」 奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「客観的臨床能力演習（理学療法）」（専門科目、3年次配当、半期、必須2単位）を担当した。演習では学生同士で行う患者役、療法士役を担う演習内容の動画撮影を行った。巡回指導による細やかな指導と、学生間でのフィードバック、動画を振り返ることによる自己評価を通して、今まで学習してきた理学療法学を実践力として養わせた。これによって、学生に、理学療法学と実践の理学療法を結びつける効果、自己の苦手部分の理解と克服の効果があった。
	令和3年9月 ～ 現在に至る	「理学療法計画論」 奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の助教として「理学療法計画論」（専門科目、3年次配当、半期、必須2単位）をオムニバス形式で5回分の授業を担当した。講義では、実習でよく担当するであろう疾患を中心にとりあげ、実習に出た際に活用できる知識となることを意識させた資料作成を学生へ指導した。
	令和3年9月 ～ 現在に至る	「スポーツ障害理学療法学」 奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の助教として「スポーツ障害理学療法学」（専門科目、3年次配当、半期、必須1単位）をオムニバス形式で7回分の授業を担当した。講義では、スポーツ障害が生じるメカニズム、個人要因、環境要因に分け多面的な視点で評価する必要性について講義した。また、テーピングの実技も取り入れ実践を意識した内容とした。
	令和3年9月 ～ 現在に至る	「筋骨格障害理学療法学Ⅱ（各論）」 奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の助教として「スポーツ障害理学療法学」（専門科目、3年次配当、半期、必須1単位）をオムニバス形式で5回分の授業を担当した。講義では、教科書的な知識だけでなく実際のエピソードや臨床でのコツなどを交え、机上の知識と臨床像が繋がるよう意識した。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許 1）理学療法士免許	平成19年5月10日～ 現在に至る	第65175号：厚生労働省
2）認定理学療法士（スポーツ理学療法）	平成27年4月1日～ 令和2年3月31日	第9-80号：日本理学療法士協会
3）認定理学療法士（スポーツ理学療法）更新	令和2年4月1日～現在に至る	第9-560号：日本理学療法士協会
4)臨床実習指導者講習会修了	令和3年6月6日～現在に至る	第2021-368-044：厚生労働省
5)日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー	令和3年10月1日～ 現在に至る	登録番号：0446174：公益財団法人　日本スポーツ協会
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1)藤田整形外科スポーツクリニック　理学療法士	平成21年4月 ～ 令和元年3月	常勤スタッフとして、10年間勤務した。整形外科疾患を有する小学生から高齢者まで幅広い年齢層を対象にリハビリテーション業務に従事した。週末は、トレーナー契約を結んでいる実業団チームへ帯同し、選手のコンディショニング、アスレティックリハビリテーション、トレーニング業務に従事した。

４　座長・司会・シンポジウム等 1)第９回日本運動器理学療法学術大会	令和3年9月	ミニシンポジウムにて、「急性足関節捻挫に対する重症度評価指標と復帰時期との関連」というテーマで講演を行った。
2)第３１回 奈良県理学療法士学会	令和4年7月	教育講演6にて、畿央大学の福本貴彦先生を講師にむかえ司会を行った。
3)第１０回日本運動器理学療法学術大会	令和4年9月	ポスター演題、一般演題8「膝関節2」にて座長を担当した。
4)第３３回日本臨床スポーツ医学会学術集会	令和4年11月	日本スポーツ理学療法学会共催シンポジウム 「足関節靭帯損傷の予防に向けた機能評価」にて「足関節外側捻挫後の関節機能評価」というテーマで講演を行った。
5)保健医療学学会第１２回学術集会	令和4年12月	「学生演題発表」にて座長を担当した。
6)第9回日本スポーツ理学療法学会学術大会	令和4年12月	シンポジウム４「Performance Enhancement」にて「慣性センサを用いた片足連続ホッピング時のReactive Strength Index （RSI）測定の試み」というテーマで講演を行った。
7)和歌山市地域局研修会（主催；和歌山県理学療法士協会）	令和5年11月	和歌山市地域局研修会にて「足関節外側捻挫後の関節機能評価」というテーマで講演を行った。
５　その他 1)JWBAウェイクボード全日本選手権 in 芦屋　コンディショニングスタッフ	令和元年11月3日	大会に、コンディショニングスタッフとして参加し、選手のパフォーマンス向上および傷害予防を目的にコンディショニングの指導を行った。
2)臨床実習指導者講習会　世話人	令和3年11月4日～5日	講習会のファシリテーターとして業務に従事した（白鳳短期大学開催）
3)臨床実習指導者講習会　世話人	令和3年11月20日～21日	講習会のファシリテーターとして業務に従事した（奈良学園大学主催 WEB開催）
4)臨床実習指導者講習会　世話人	令和4年3月5日～6日	講習会のファシリテーターとして業務に従事した（畿央大学主催 WEB開催）
5)臨床実習指導者講習会　世話人	令和4年10月15日～16日	講習会のファシリテーターおよび講師として業務に従事した（白鳳短期大学大学主催 WEB開催）
6)臨床実習指導者講習会　講師	令和4年10月15日～16日	講習会の講義5の講師として業務に従事した（白鳳短期大学大学主催 WEB開催）
7)臨床実習指導者講習会　世話人	令和5年10月14日～15日	講習会のファシリテーターおよび講師として業務に従事した（白鳳短期大学主催 WEB開催）
8)臨床実習指導者講習会　講師	令和5年10月14日～15日	講習会の講義5の講師として業務に従事した（白鳳短期大学主催 WEB開催）
9)臨床実習指導者講習会　世話人	令和6年3月3日	講習会のファシリテーターおよび講師として業務に従事した（奈良学園大学主催 WEB開催）
10)臨床実習指導者講習会　講師	令和6年3月3日	講習会の講義5の講師として業務に従事した（奈良学園大学主催 WEB開催）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・	発行又は	発行所，発表雑誌等	概　　要
（著書） 1)頭蓋療法を含むファンクショナルポジショナルリリースと促通位リリースのアプローチ（翻訳）（ポジショナルリリーステクニック）	共著	平成30年9月	ガイアブックス	「頭蓋療法を含むファンクショナルポジショナルリリースと促通位リリースのアプローチ」 　翻訳にあたって、できるだけ原文に忠実に翻訳した。また専門的な表現や特殊な言い回し、分かりにくい表現の場合は、可能な限り読者に伝わりやすいよう言葉を選び翻訳した。 第1版　全頁253頁、 監訳者　森　彩子、小幡　太志 共著者　横山　茂樹、◎野田　優希 本人担当部分121-150頁
2)教科書にはない敏腕PTのテクニック　臨床実践　スポーツ傷害膝の理学療法	共著	令和2年12月	文光堂	「膝関節のオーバーユース障害の要因を評価し改善に導く」 　執筆にあたって、臨床で有用なテクニックや評価法等を自分の臨床経験を踏まえ記載した。多くの実際の患者さんの写真や治療場面の写真を含めることで、臨床に応用するイメージが湧きやすいよう工夫した。 第1版　全頁200頁 監修者　松尾　善美 編集者　橋本　雅至 共著者　橋本　雅至、◎野田　優希 本人担当部分124-140頁
3)PT入門　イラストでわかる運動器障害理学療法	単著	令和3年1月	医歯薬出版株式会社	「足関節の運動器障害 － 足関節外側靭帯損傷」 　足関節捻挫に関する章を執筆した。執筆にあたって、現在のゴールドスタンダードとされる評価法や最新の情報を海外文献を引用して多く盛り込んだ。また、イメージしやすいよう多くの図や写真を掲載した。 第1版　全頁291頁 監修者　上杉　雅之 編集者　横山　茂樹 単著　◎野田　優希 本人担当部分229-244頁
4)シンプル理学療法学シリーズ 運動器障害理学療法学テキスト	共著	令和3年8月	株式会社　南江堂	「筋・軟部組織性障害の概論」 　執筆にあたっては、臨床において担当することの多い疾患を中心に、基本的な病態と評価、治療プログラムを記載した。学生から新人にも理解しやすいようできるだけ図や写真を多くし、明瞭な記載を心がけた。 改訂第3版　全頁369頁 監修者　細田　多穂 編集者　高柳　清美 共著者　橋本　雅至、◎野田　優希、三谷　保弘 本人担当部分207-216頁

5)実践リハ評価マニュアルシリーズ　症例動画から学ぶ臨床姿勢分析　～姿勢・運動連鎖・形態の評価法	単著	令和4年1月1日	ヒューマン・プレス	足関節から上行性運動連鎖による膝への影響について臨床症例をイメージし執筆した。実際の症例の画像を多く含め、また運動連鎖についても丁寧に説明することで、二次的な障害が生じるメカニズムについて理解しやすいよう記述した。 第１版　全頁217頁 編集者　吉田 一也 単著　　◎野田 優希 本人担当部分188-199頁
（学術論文） 1）中学野球選手におけるFunctional Movement Screenと投球障害の関係（査読付）	共著	平成28年4月	「体力科学」第65巻第2号 P.237-P.242	兵庫県内の中学生に対し，Functional Movement Screenを実施し，そのScoreと投球障害の関係を分析した．投球障害を経験している者はScoreが低く，投球障害の経験のない者はScoreが高い結果となった． 共著者：内田 智也，松本 晋太朗，小松 稔，◎野田 優希，石田 美弥，佃 美智留，中山 良太，武田 雄大，平川 理映子，武藤 貢平，大久保 吏司，古川 裕之，藤田 健司 （本人担当部分：測定とデータ分析）
2）Single Leg Up Downテストと体重支持指数(Weight Bearing Index)の関連（査読付）	共著	平成28年12月	「理学療法科学」第31巻第6号 P.791-P.794	中学野球選手202名に我々が考案したSingle Leg Up Downテスト(以下SLUDテスト)と体重支持指数(以下WBI)の関連について検討した．20cm台からのSLUDテスト遂行の可否が下肢筋力のスクリーニングテストとして有用であることが示された． 共著者：内田 智也，古川 裕之，松本 晋太朗，小松 稔，◎野田 優希，石田 美弥，佃 美智留，大久保 吏司，藤田 健司（本人担当部分：測定）
3）足関節内反捻挫受傷後の初診時における片脚負荷テストと圧痛部位，スポーツ復帰時期の関連性（査読付）	共著	平成29年1月	「日本臨床スポーツ医学会誌」第25巻第1号 P.59-P.63	足関節捻挫後の復帰時期を予測するために片脚負荷テスト(OLLT)を実施した．OLLTは片脚立ち，片脚カーフレイズ，片脚ホップを実施した．受傷後早期にどの動作が可能かによって復帰時期に有意な差がみられた．OLLTのレベルによりスポーツ復帰時期を予測できることが分かった． 共著者：◎野田 優希，古川 裕之，松本 晋太朗，小松　稔，内田 智也，石田 美弥，佃 美智留，横山 茂樹，藤田 健司（本人担当部分：データ収集，結果分析，論文作成を行った）
4）　性差によるバレーボールの傷害発生の特徴（査読付）	共著	平成29年1月	「日本ヘルスプロモーション理学療法」第6巻第4号 P.197-P.200	バレーボールの傷害調査を行い，男女間の傷害発生の傾向を分析した．バレーボールでは足部，腰部，肩関節，下腿において発生する傷害が男女で異なっており，コンディショニング指導の際は性差による傷害発生の特徴を考慮する必要性が示された． 共著者：◎野田 優希，古川 裕之，松本 晋太朗，小松　稔，内田 智也，石田 美弥，佃 美智留，藤田 健司（本人担当部分：データ収集，結果分析，論文作成を行った）

5）投球動作のEarly Cocking期における軸足股関節の運動学・運動力学的特徴（査読付）	共著	平成29年1月	「日本臨床スポーツ医学会誌」第25巻第1号 P.16-P.23	中学野球選手51名を対象に，良好なEarly Cocking期の体重移動における軸足下肢運動の運動学的及び運動力学的な特徴を明らかにすることを目的とした．Early Cocking期の良好な体重移動を遂行するには軸足股関節屈曲位を保持するべく股関節伸展筋群の活動を意識することが重要だと考えられた． 共著者：内田 智也，大久保 吏司，松本 晋太朗，小松 稔,◎野田 優希，石田 美弥，佃 美智留，古川 裕之，藤田 健司（本人担当部分：測定）
6）中学野球選手の投球動作におけるEarly Cocking期の下肢関節・体幹動作の不良と上肢関節トルクの関係（査読付）	共著	平成29年8月	「日本臨床スポーツ医学会誌 」第25巻第3号 P.333-P.338	良好な投球動作を遂行するには，Early Cocking期（以下，E.C.期）の良好な下肢関節・体幹動作が重要とされる．そこで本研究はE.C.期の下肢関節・体幹動作の良否が上肢関節トルクに及ぼす影響を検討した．E.C.期の下肢関節・体幹動作の不良は，上肢関節へのストレスを増大させる一因になると考えられ，運動力学的にも障害発生リスクの高い投球動作であることが示唆された． 共著者：内田 智也，大久保 吏司，古川 裕之，松本 晋太朗，小松 稔，◎野田 優希，石田 美弥，佃美 智留，藤田 健司（本人担当部分：対象の測定）
7）投球動作におけるフットコンタクト時の軸足股関節屈曲角度と骨盤回旋の関係（査読付）	共著	平成29年8月	「日本臨床スポーツ医学会誌 」第25巻第3号 P.339-P.345	不良な投球動作の一つに「投球方向への早期の骨盤回旋」が挙げられ，その動作はFoot Contact(FC)での軸足股関節屈曲角度と関係があると考えられている．そこで，本研究はFCの軸足股関節屈曲角度と骨盤回旋との関係を検討することを目的とした．不良な投球動作の典型例である投球方向への骨盤の早期回旋を修正するにはFCにおける軸足股関節屈曲角度に着目することが重要であると考えられた． 共著者：内田 智也，大久保 吏司，古川 裕之，松本 晋太朗，小松 稔，◎野田 優希，石田 美弥，佃 美智留，藤田 健司（本人担当部分：対象の測定）
8）女性バレーボール競技者の ポジションによる 傷害発生の特徴 ―スパイカー,セッター,レシーバーの3つのポジションによる検討―（査読付）	共著	平成29年10月	「理学療法科学」第32巻第5号 P. 621-P.625	30歳未満の女性バレーボール競技者 290人 638 件を対象にバレーボールのポシ゛ションによる傷害発生の特徴を明らかにし，傷害予防やコンディショニング指導の一助とすることを目的とした.疾患はポジションにより特徴がみられた.傷害予防やコンディショニング指導の際には,ポジションによる傷害発 生の特徴を考慮する必要性が示唆された. 共著者：◎野田 優希，古川 裕之，松本 晋太朗，小松 稔，内田 智也，石田 美弥，佃 美智留，藤田 健司（本人担当部分：データ収集，結果分析，論文作成を行った）

9）足関節内がえし捻挫受傷後の圧痛部位を考慮した片脚負荷テストとスポーツ動作開始時期の関連性（査読付）	共著	平成30年1月	「日本臨床スポーツ医学会誌」第26巻第1号 P.54-P.59	足関節外側靭帯損傷と診断され，練習完全復帰までフォロー可能であった202名を対象に，圧痛部位を考慮した片脚負荷テスト（以下，OLL-Test）とスポーツ動作開始時期との関連性を検証した．圧痛部位を考慮したOLL-Testにより，足関節の荷重機能の障害度とスポーツ動作開始時期の関連性をより詳細に把握できる可能性を示唆した． 共著者：◎野田 優希，古川 裕之，松本 晋太朗，小松 稔，内田 智也，石田 美弥，佃 美智留，横山茂樹，藤田健司（本人担当部分：データ収集，結果分析，論文作成を行った）
10）足関節内反捻挫後のスポーツ動作開始時期に関連する因子の検討 －交絡因子を考慮した多変量解析による検討－（査読付）	共著	平成30年2月	「医療福祉情報行動科学」第5巻 P.11-P.17	練習完全復帰までフォロー可能であった202名，209足を対象とした．交絡因子を投入して多変量解析を行った結果，スポーツ動作開始時期を予測する変数として，片脚負荷テスト（以下，OLL-Test）の判定結果と圧痛部位が選択された．よって，OLL-Testの判定結果と圧痛部位は独立してスポーツ動作開始時期の予測に重要であることが分かった．さらに，交互作用項（OLL-Testの判定結果×圧痛部位）を多変量解析に投入した結果，OLL-Testの判定結果と圧痛部位，交互作用項が有意な変数として選択されたことから，OLL-Testの判定結果と圧痛部位は互いに影響し合ってスポーツ動作開始時期を調整することが分かった．　共著者：◎野田 優希，柿花 宏信，前田 吉樹，古川 裕之，松本 晋太朗，小松 稔，内田 智也，佃 美智留，藤田 健司（本人担当部分：データ収集，結果分析，論文作成を行った）
11）Quick and simple test to evaluate severity of acute lateral ankle sprain（査読付）	共著	令和3年7月	Asia-Pacific Journal of Sports Medicine, Arthroscopy, Rehabilitation and Technology 25 P.30-P.34	我々は、足関節捻挫受傷後早期にどれだけ荷重できるかがスポーツ動作開始時期に影響すると考え、独自の機能テスト（以下、片脚負荷テスト）を実施し、スポーツ復帰時期の目安としている。しかしながら、本テストが足関節捻挫後の状態を適切に反映しているかどうかは不明のため、靭帯損傷の程度および他のスコアリングスケールとの関連性について検討した。受傷後３日以内に当院を受診した足関節外側靭帯I度又はII度損傷と診断された50名（年齢15.6±3.0歳）に対し、片脚負荷テストを施行し、超音波検査による前距腓靭帯の損傷タイプ、客観的・主観的評価質問票との関連性について検討した。片脚負荷テストは、靭帯損傷の程度および他のスコアリングスケールと有意な相関を認め、足関節捻挫後の状態を簡便に調べる機能テストとして使用可能であることが示唆された。 ◎野田 優希，堀部 秀二，平松 久仁彦，高尾 理樹夫，藤田 健司 （本人担当部分：データ収集，結果分析，論文作成を行った）

12）荷重量と下肢アライメントを規定した足部内側縦アーチ測定法の信頼性（査読付）	共著	令和4年3月	医療福祉情報行動科学研究，第9巻P.47-P.54	足部内側縦アーチ（MLA）の評価は傷害発生を予防するうえで非常に重要である。スポーツ時は片脚荷重と非荷重が繰り返されることから、これらの条件を反映したMLAの評価が重要であるといえる。本研究の目的は，新たな測定方法の信頼性を検証することである。対象は，健常成人男性３名６足とし、90%荷重時と10%荷重時の2条件において，MLAを測定し級内相関係数を算出した。また，Bland-Altman分析によって系統誤差の有無を検証した。さらに，高い信頼性を確保するためにはICC≧0.7を満たすことが必要とされているが、その測定回数をSpearman-Brownの公式を用いて算出し，ICC（1，k）を求めた。Bland-Altman分析の結果，系統誤差は認められなかったことから，本測定法の測定値に含まれる誤差は，偶然誤差のみであり，測定を繰り返すことで高い信頼性を期待できることが分かった。また、本測定法は6回繰り返し測定を行うことで，信頼性の高い測定方法となることが分かった。 ◎野田 優希，城野 靖朋，藤田 信子，橋本 雅至 （本人担当部分：データ収集，結果分析，論文作成を行った）
13）Single-leg loading test performed after acute lateral ankle sprain in competitive athletes（博士論文）	単著	令和4年3月	大阪府立大学	足関節外側捻挫受傷後3日以内の240名を対象とし、独自の足関節機能テストである片脚負荷テスト（以下、SLL test）の有用性について検討した。SLL testは、片脚立位、片脚ヒールレイズ、片脚ホップから構成されており、それぞれの課題動作の可不可によって４つのレベルに分類するものである。本テストは、各種スコア、および超音波検査による靭帯評価と有意な相関を認め、かつ重回帰分析においても本テストが有意な変数として選択されたことから、足関節外側捻挫後の簡易的なスクリーニングテストとして使用できることが分かった。また、本テストを用いることでジョギング開始時期およびスポーツ復帰時期のを予測可能であることも明らかとなった。A4判　全20頁
14)Single-leg loading test to predict time to jog and return to sports after acute lateral ankle sprain in competitive athletes（査読付）	共著	令和4年6月	Kurume Medical Journal,69,P.81-P.87	急性足関節外側捻挫（LAS）後の片足負荷（SLL）テストの有用性を報告した。しかし，SLLテストで評価した重症度が，ジョギングやスポーツ復帰（RTS）と関連するかどうかは不明である。そこで本研究では，重症度によってジョギングやRTSの時期に違いがあるかを検討することを目的とした。対象は，LAS受傷後のアスリート240名を対象とした。初診時にSLLテストを実施し，4つのレベル（Levels 1-4）に分類した。SLLテストがジョギング開始時期およびRTSを予測できるかどうかを検証するために，Steel-Dwass多重比較法および重回帰分析を実施した。SLLテストの重症度とジョギング開始時期，RTSはほぼすべての重症度で有意差が認められた。さらに，重回帰分析の結果，SLLテストのみがジョギング開始時期とRTSに有意に影響することが明らかとなった。急性LAS患者に対し，SLLテストを用いることで，ジョギング開始時期とRTSを予測できることが示唆された。 共著者：◎野田 優希，堀部 秀二，平松 久仁彦，高尾 理樹夫，藤田 健司（本人担当部分：データ収集，結果分析，論文作成を行った）

15)理学療法士を育む【場】づくりの着想に関する一考察	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要，第15集 P.15-P.20	現在の理学療法士の現場教育や人材育成の課題と限界を提示し、新たな枠組みの必要性を指摘する。筆者らが着想する新たな枠組みとは、理学療法士の発達や成長を後押しする“理学療法士を育む【場】づくり”である。これは理学療法士の経験学習が促進されやすい【場】（雰囲気や組織風土からなる空間）をつくりあげるというものである。しかし、現在、理学療法士の経験学習を促す【場】の特性や、それを成立させるための条件は明らかになっていない。これらを解明することができれば、理学療法士を育む【場】づくりが可能となり、現場教育や人材育成に貢献できると考える。本枠組みの実現可能性は十分あり、これからの現場教育、人材育成の課題の一つとなる。 共著者：池田 耕二，田坂 厚志，城野 靖朋，吉川 義之，◎野田 優希 （本人担当部分：論文作成を行った）
15)各施設における臨床参加型臨床実習モデルの提案－施設の特徴を活かした経験の積ませ方－	共著	令和5年3月	奈良学園大学紀要，第15集 P.1-P.14	臨床実習が行われる医療施設と介護施設、訪問リハビリテーションに大別しながら、各施設の理学療法の特徴や役割を整理し、臨床実習の内容や方向性を確認した。次に、学生に対する経験の積ませ方を考慮しながら、各施設における臨床参加型臨床実習モデルを構築し、併せて臨床実習におけるキーポイントを提示した。 共著者：池田 耕二，滝本 幸治，城野 靖朋，吉川 義之，◎野田 優希，野中 紘士，辻下 守弘 （本人担当部分：論文作成を行った）
16）計測者に設置した慣性センサによる関節角度計測の妥当性と信頼性の検討（査読付）	共著	令和6年3月	地域理学療法学	本研究では慣性計測ユニット（IMU）のセンサを計測者に設置して関節角度を計測する方法（IMUrater）の妥当性と信頼性について検証した．健常成人16名を対象とし，IMUraterと光学カメラを用いた運動分析システム（OMC）を利用した計測方法との妥当性とIMUraterの信頼性を検証した．IMUraterの相対的な角度に高い妥当性が確認された．セッション内の信頼性は高かったが，セッション間では時系列波形データの類似性であるCMCのみが高い信頼性であった．絶対的な角度は誤差が大きいことも確認された． 共著者：城野 靖朋，◎野田 優希，前田 吉樹，山本 秀美，池田 耕二（本人担当部分：対象者のリクルート，データ測定を行った）
17)中高一貫校の軟式野球部のコンディショニングに対する意識向上を目的としたアクションリサーチの実践	共著	令和6年3月	奈良学園大学紀要，第16集,P.125-P.135	野球ではオーバーユースによる障害発生が問題となっている．そこで，アクションリサーチという手法を用いてコンディショニングの必要性の理解，意識向上を促し障害予防を行うことを目的とした．対象は奈良学園登美ヶ丘中学校・高等学校の軟式野球部の部員21名および監督とした．アンケート調査を行い，その結果をもとにウォーミングアップを考え提供した．介入によりウォーミングアップに対する意識は一旦低下したが，問題点を抽出し改善を加えることで再び意識は向上した。また，ウォーミングアップは身体的側面だけでなく，個人の取り組み方やチームの雰囲気にも影響を与えることが分かった． 共著者：◎野田 優希，寄能 彩未，寺岡　舞，池田 耕二（本人担当部分：データ収集，結果分析，論文作成を行った）

18)慣性センサによる片脚連続ホッピング時のReactive Strength Indexの妥当性と信頼性（査読付）	共著	令和6年3月	理学療法科学,第39巻第1号 P.6-P.11	慣性センサを用いた独自の解析方法にて，片脚連続ホッピング（OLCH）時の筋反応指数（RSI）を測定し，その妥当性と信頼性を検証した。慣性センサを用いたOLCH時のRSI-OGは，RSI-fpと有意な正の相関を認めたが，両測定値間には系統誤差を認めた。RSI-OGの級内相関係数ICC（1,1）は非常に高く誤差も含んでいなかった。以上より，RSI-OGは高い信頼性はあったが妥当性はなかったため，慣性センサ独自のRSI値として用いる必要があることが分かった。 共著者：◎野田 優希，城野 靖朋（本人担当部分：データ収集，結果分析，論文作成を行った）
「解説」				
1）慢性足関節不安定性(Chronic Ankle Instability; CAI)に対する固有感覚トレーニングの有効性とその課題	共著	平成28年9月	「Sportsmedicine」第183巻 P.9-P.14	慢性足関節不安定症について固有感覚に対する文献のレビューおよびその課題について述べた．また臨床で実践可能な評価トレーニングについても記載した． 共著者：◎野田 優希，竹之下秀樹，横山 茂樹（本人担当部分：本文作成，資料収集）
2）動作・運動計測機器の活用法　下肢荷重検査	共著	平成30年4月	医療と検査機器・試薬 第41巻P.83-P.88	下肢荷重検査の臨床における活用法について説明した．重心と足圧中心の違いについて説明した．また，実際の患者を症例として提示し，身体機能評価と重心動揺・足圧分布から患者の機能低下を推察する臨床思考について述べた． 共著者：◎野田 優希，瀬戸川 大(本人担当部分：本文作成，資料収集)
「国内学会発表」				
1）当院における足関節靱帯損傷の復帰傾向　初診時の足関節機能テストからジョグ開始時期・練習完全復帰時期は予測可能か	―	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会（神奈川）	当院で行っている初診時の足関節機能テスト（Ankle Functional Test：AFT）とジョグ開始時期,練習完全復帰時期の関係,およびAFTにおけるレベル別のジョグ開始時期と練習完全復帰時期の相関関係を分析した．足関節捻挫後にAFTを実施することである程度の復帰時期を予測できることが示された． 発表者：◎野田 優希，内田 智也，松本 晋太朗，小松 稔，石田 美弥，佃 美智留，古川 裕之，藤田 健司（本人担当部分：対象の治療，データ分析，学会発表）
2）SLUDテストと体重支持指数(Weight Bearing Index)の関連について	―	平成26年10月	第25回日本臨床スポーツ医学会学術集会（東京）	投球動作は運動連鎖に基づく全身運動であり，下肢筋力不足による投球フォームの乱れは投球障害発生の一因となる．下肢筋力の評価法としてSLUDテストを考案した．SLUDテストが競技特性を踏まえた投球障害のスクリーニングテストとなる可能が示唆された． 発表者：内田 智也，小松 稔，松本 晋太朗，◎野田 優希，石田 美弥，大久保 吏司，古川 裕之，藤田 健司（本人担当部分：測定）

3）当院における足関節靭帯損傷後の復帰傾向	—	平成26年10月	第25回日本臨床スポーツ医学会学術集会（東京）	足関節靭帯損傷後，内側に圧痛を認める選手は外側のみの選手よりも重症であり復帰が遅れる印象がある．受傷後早期の足関節機能と圧痛部位から復帰時期を分析した．ジョグ開始時期，練習復帰時期は全ての群間で有意な差があり受傷後早期の足関節機能により復帰時期に差が生じることが示された．圧痛部位では復帰時期に有意な差がなかったことから，復帰時期を考える際足関節機能が重要であることが示唆された． 発表者：◎野田 優希，内田 智也，松本 晋太朗，小松 稔，石田 美弥，佃美知留，古川 裕之，藤田 健司（本人担当部分：対象の治療，データ分析，学会発表）
4）Early cocking期の動作不良がその後の投球動作に及ぼす運動力学的影響	—	平成27年10月	第26回日本臨床スポーツ医学会学術集会（兵庫）	良好な投球動作を遂行するためにはEalry cocking期（E.C期）の軸足股関節を使った体重移動が重要となる．体重移動の可否により対象を良好群と不良群に分けた．不良群は球速の増大に伴い肩関節内旋トルク及び肘関節内反トルクが増大した．よって，E.C期の体重移動において股関節屈曲を意識させることが重要だと考えられた． 発表者：内田 智也，小松 稔，松本 晋太朗，◎野田 優希，石田 美弥，古川 裕之，大久保 吏司，藤田 健司（本人担当部分：対象の測定）
5）当院における肩関節前方脱臼に対する治療成績	—	平成27年10月	第26回日本臨床スポーツ医学会学術集会（兵庫）	肩関節前方脱臼に対して鏡視下Bankart法と鏡視下Bankart & open Bristow法を行った症例の治療経過，競技復帰について術式による違いを検討した．両術式ともに同様の回復過程を示し，競技復帰時期に術式の違いは認められなかった． 発表者：古川 裕之，松本 晋太朗，◎野田 優希，小松 稔，内田 智也，石田 美弥，佃 美智留，藤田 健司（本人担当部分：対象の治療，測定）
6）投球動作におけるステップ側の下肢筋力と膝関節動作及び肩関節・肘関節トルクとの関係	—	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会（北海道）	投球動作は軸足による並進運動及びステップ足を軸とした回転運動によって構成され，良好な投球動作を獲 得するためには，安定した下肢・体幹動作が重要となる．投球動作におけるステップ側の下肢筋力と膝関節 動作及び肩関節・肘関節トルクの関係を検討した．ステップ足の膝伸展筋力の筋力不足はフットプラント以降のスムーズな膝関節屈曲動作を阻害し，上肢に過 剰なストレスを与える投球動作に繋がることが示唆された． 発表者：内田　智也，松本　晋太朗，小松　稔，◎野田 優希，石田　美弥，佃　美智留，古川　裕之，大久保　吏司，藤田　健司（本人担当部分：測定）

7）当院における上腕骨小頭OCDに対するMosaicplastyの治療成績	—	平成28年10月	第27回日本臨床スポーツ医学会学術集会（千葉）	OCDの診断を受けMosaicplastyを施行し練習復帰までフォロー可能だった男性20例を対象とした．Mosaicplasty後の練習復帰は，諸家の報告と比べ早期に可能だった．また，今回の結果では特に屈曲可動域について有意な改善が見られた．術後急性期は愛護的な可動域訓練を行うが，術後3ヶ月までに積極的な可動域訓練を行うことで改善が可能だったと考えられる． 発表者：小松 稔，松本 晋太朗，内田 智也，◎野田 優希，石田 美弥，佃 美智留，古川 裕之，藤田 健司（本人担当部分：対象者の治療とデータ入力）
8）足関節内反捻挫受傷後における初診時の片脚負荷テストとスポーツ復帰時期の関連性	—	平成29年1月	第22回スポーツ傷害フォーラム（大阪）	当院で行っている初診時の片脚負荷テスト(One Leg Loading Test: OLL-Test)とジョギング開始時期,スポーツ復帰時期の関係を分析した．OLL-Testは足関節障害の重症度とスポーツ動作再開時期の関連性を把握できる有用なテストであることが示唆された． 発表者：◎野田 優希，内田 智也，松本 晋太朗，小松 稔，石田 美弥，佃美知留，古川 裕之，藤田 健司（本人担当部分：対象の治療，データ分析，学会発表）
9）投球動作におけるステップ側下肢筋力と身体重心速度および肩関節内旋トルクの関係	—	平成29年1月	第22回スポーツ傷害フォーラム（大阪）	上肢優位の不良な投球動作の一例に「膝の縦割れ」というステップ動作が挙げられ，大腿四頭筋の筋力不足はその一因であると考えられる．そこで，本研究はその根拠を示すべく，ステップ側下肢筋力と身体重心加速度および肩関節内旋トルク（SIRT）との関係を定量的に検討した．ステップ側下肢筋力不足は「膝の縦割れ」と表現される投球動作に繋がり，投球障害のリスクファクターになり得ることが示された． 発表者：内田 智也，古川 裕之，松本 晋太朗，小松 稔，◎野田 優希，石田 美弥，佃 美智留，大久保 吏司，藤田 健司（本人担当部分：対象の測定）
10）投球動作における“体の開き”の評価基準の検討	—	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会（千葉）	早期に骨盤・体幹の回転運動が開始する動作，いわゆる“体の開き”は不良な投球動作であるが統一した基準はない．そこで，本研究はその評価基準を統一化する一助となるべく，いわゆる“体の開き”に関連があるとされるEarly Cocking期（E.C.期）の軸足動作と骨盤回旋のタイミング（TPR）との関連を検討した．軸足股関節屈曲角度と骨盤回旋のタイミングを評価することで“体の開き”を評価することが出来る可能性があ示唆された． 発表者：内田 智也，松本 晋太朗，小松 稔，◎野田 優希，石田 美弥，佃 美智留，古川 裕之，大久保 吏司，藤田 健司（本人担当部分：対象の測定）

11）投球動作におけるステップ脚膝関節の力学的仕事量と肩関節トルクの関係	—	平成29年5月	第9回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会（北海道）	投球中の肩関節ストレスの軽減には，良好な下肢関節動作が重要となる．そこで，本研究はFoot Contact(FC)以降のステップ脚膝関節の力学的仕事量と肩関節トルクの関係について検討した．ステップ脚膝関節伸展筋力は良好な投球動作獲得に寄与し，FC以降の不十分な大腿四頭筋の遠心性筋発揮は肩関節ストレスを増大すると考えられた. 発表者：内田 智也，古川 裕之，松本 晋太朗，小松 稔，◎野田 優希，藤田 健司（本人担当部分：対象の測定）
12）足関節捻挫受傷後に実施した片脚負荷テストの妥当性の検証	—	令和元年10月	第30回日本臨床スポーツ医学会学術集会（神奈川）	我々は、足関節捻挫症例に対し、独自の機能テスト（以下、片脚負荷テスト）を実施し、スポーツ復帰時期の目安としている。本テストと靭帯損傷の程度および他のスコアリングスケールとの関連性について検討した。片脚負荷テストは、靭帯損傷の程度および他のスコアリングスケールと有意な相関を認め、足関節捻挫後の状態を簡便に調べる機能テストとして使用可能であることが示唆された。 発表者：◎野田 優希,藤田 健司,古川 裕之,松本 晋太朗,小松 稔,内田 智也,佃 美智留,土定 寛之,平松 久仁彦,堀部 秀二（本人担当部分：対象の治療，データ分析，学会発表）
13）足関節外側捻挫後の片脚負荷テスト　捻挫既往との関連	—	令和2年10月	第31回日本臨床スポーツ医学会学術集会（オンライン開催）	我々は、足関節捻挫受傷後早期に重症度判定のため、独自の機能テスト（以下、片脚負荷テスト）を実施しており、本テストと靭帯損傷の性状、客観的・主観的評価質問票と関連していたことを報告した。しかしながら、片脚負荷テストと捻挫既往との関連は不明である。片脚負荷テストは、初回群、既往群共に靭帯損傷の性状、客観的・主観的評価質問票と関連があり、捻挫の既往に関係なく使用可能なスクリーニングテストであることが示された。 発表者：◎野田 優希,藤田 健司,古川 裕之,松本 晋太朗,小松 稔,内田 智也,佃 美智留,土定 寛之,平松 久仁彦,堀部 秀二（本人担当部分：対象の治療，データ分析，学会発表）
14）筋腱振動刺激の圧力の信頼性と圧力値フィードバックの有効性について	—	令和3年2月	第1回物理療法部門研究会（Web）	本研究は筋腱振動刺激の圧力を被刺激部と刺激部の圧力センサーにてそれぞれ記録し、異なる振動周波数における圧力の信頼性について検討した。また、圧力センサーの値をフィードバックし、その効果についても検討した。本研究の結果から、刺激部の圧力は視覚的にフィードバックされており,全ての条件で高い信頼性を示した。しかし、被刺激部の圧力は信頼性が低く、特に振動が加わると信頼性は著しく低下することが明らかになった。 発表者：城野靖朋，吉川義之，◎野田 優希，神里巌，辻下守弘(本人担当部分：対象の測定)

15）筋腱振動刺激圧力の安全性に関する検討	—	令和3年10月	第28回物理療法学会学術大会（Web）	本研究は筋腱振動刺激を安全に実施することを目的に、主観的な疼痛閾値以下の最大限の圧力と、それらを繰り返し実施した際の信頼性について検討した。対象は健常成人9名の上腕二頭筋腱とし、2回の連続したセッションを行った。本研究の結果から、振動がある場合のセンサーからの圧力はセッション間で偶然誤差であった。このことから、本研究で用いた方法は、振動刺激を疼痛閾値以下で制御するパラメーターとして有効だと考えられる。 発表者：城野 靖朋，吉川 義之，◎野田 優希，神里 巌，辻下 守弘(本人担当部分：対象の測定)
16）足関節外側捻挫後の片脚負荷テスト −ジョギング開始時期およびスポーツ復帰時期との関連−	—	令和3年11月	第32回日本臨床スポーツ医学会学術集会（オンライン開催）	我々は、足関節捻挫受傷後早期に重症度判定のため、独自の機能テストを実施している。本研究では、片脚負荷テストとジョギング開始時期およびスポーツ復帰時期との関連性について検討した。対象は、受傷後3日以内に当院を受診し、足関節外側靭帯損傷と診断された244名（平均年齢15.3±2.5歳）に対し、初診時に片脚負荷テストを実施した。初診時の片脚負荷テストのレベルによるジョギング開始時期およびスポーツ復帰時期の差を、Steel-Dwassの多重比較法を用いて検討した。多重比較検定の結果、ジョギング開始時期およびスポーツ復帰時期は片脚負荷テストのレベル間で有意な差がみられ、レベルが上がるほどジョギング開始時期、スポーツ復帰時期は早かった。受傷後早期に実施した片脚負荷テストのレベル判定結果が、ジョギング開始時期、スポーツ復帰時期のひとつの指標となる可能性が示唆された。 発表者：◎野田 優希,藤田 健司,古川 裕之,松本 晋太朗,小松 稔,平松 久仁彦,堀部 秀二（本人担当部分：対象の治療，データ分析，学会発表）
17）異なる運動課題が反応時間の学年間の違いに及ぼす影響	—	令和3年12月	第8回 日本地域理学療法学会学術大会（Web）	本研究では中高生の神経機能の学年間の違いを明らかにすることを目的し、サッカー部所属の男子中高生31名（中学1年7名、2年7名、3年9名、高校1年8名）を対象にボタン押し、歩き始め、跳躍の運動課題で反応時間を計測した。その結果、ボタン押しのような焦点的な運動ではなく、歩きはじめや跳躍といった全身運動の反応時間に学年間の有意差がみられた。さらに跳躍でみられた反応時間の学年間の違いは、前運動時間の違いを反映している可能性があり、全身的な運動における動き始めるまでの神経系の情報処理プロセスは、中高生においても発達過程にあることが示唆された。 発表者：城野 靖朋，◎野田 優希，藤田 信子，三笘 康之，橋本 雅至 (本人担当部分：対象の測定)

18) 足関節外側捻挫の既往がステップ動作のpremotor timeに与える影響	—	令和4年7月	第31回 奈良県理学療法士学会（Web）	足関節外側捻挫後，姿勢制御能の低下や，腓骨筋の反応時間の遅延などによりパフォーマンスの低下が生じることが報告されている．本研究の目的は，足関節外側捻挫の既往がサイドステップ（以下，SS）とクロスオーバーステップ（以下，CS）のpremotor time（以下，PMT）に与える影響を検討することである．対象は，本学園サッカー部所属の男子中高生35名とし、足関節外側捻挫の既往を有する者（以下，既往群）と，足関節外側捻挫の既往の無い者（以下，コントロール群）に分類した．全身反応時間の課題はSSとCSとし，全身反応時間課題のPMTは，Fz成分について課題開始信号の直前500msec区間の平均値を基準とし，LEDライト点灯から3SD以上変位したタイミングとした．7回のPMTの平均値を算出した．既往群においてSS時のPMTが遅延しており、足関節外側捻挫の既往者によりSSの情報処理に中枢性の変容が生じている可能性が示唆された． 発表者：野田 優希，城野 靖朋 （本人担当部分：対象の測定，データ分析，学会発表）
19)中高一貫校の軟式野球部のコンディショニングに対する意識向上を目的とした アクションリサーチの実践	—	令和4年12月	保健医療学学会第12回学術集会（奈良）	アクションリサーチを用いたスポーツ現場の障害予防を実践した報告は見当たらない。そこで、本手法を用いて、コンディショニングに対する意識の向上を目的とした。対象は対象は奈良学園登美ヶ丘中学校・高等学校の軟式野球部の部員21名および監督とした。チームのコンディショニングに対する意識についてアンケート調査し、その結果を受けてウォーミングアップの提供および指導を行った。介入による意識や行動の変化を捉えるためにアクションリサーチの手法を用いて分析した。コンディショニングに対する生徒の意識は、介入により一旦低下したが、介入方法を修正することで再び向上した。介入に際しては、メニューの目的をしっかり伝えること、チームの練習時間によってメニュー変更可能であるものにすること、さらに習得度に合わせ段階的に提供することでコンディショニングに対する取り組みを促すことができることが示唆された。 発表者：野田優希、寄能彩未、寺岡舞、橋本晃樹、池田耕二 （本人担当部分：介入の実施，データ分析，学会発表）

別記様式第４号（その２の１）

（用紙　日本産業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

2024年　5月　13日

氏名　三上　亮

研究分野	研究内容のキーワード
教育学・社会医学、看護学・スポーツ科学、体育、健康科学	高等教育学、教育社会学、医療社会学、リハビリテーション科学、政策科学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
・授業中の頻回なアウトプットによる学習意欲の向上を促す取り組み	2023年4月11日～7月25日	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の「理学療法概論」及び「リハビリテーション医学」で実践。授業中に4回の筆記課題を与えることで、授業内容の即座に活用させた。これによって、授業の理解度があがり学生の集中力が向上した。また理解度が高まったことで、授業外学習に取り組む姿勢も改善した。
2　作成した教科書，教材		
・自身の博士論文作成過程をもとに作成した教材	2022年11月28日	東京大学大学院教育学研究科の「高等教育の社会学Ⅱ」の集中講義にて用いた。高等教育における社会学を、自身の博士論文作成過程に沿って学べる教材である。大学院生自身の研究と紐付けて講義内容を学修できるように工夫している。
・視聴覚資料を含む講義教材	2023年4月11日～7月25日	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の「理学療法概論」で用いた。過去に担当した症例の許可を得て、地域理学療法における長期にわたる実践を視聴させる内容。地域理学療法は患者と関わる時間が長く、学生にはなかなかイメージができないため、実践の様子を講義の内容と合わせて解説することで理解が深まった。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 該当なし		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
・地域ケア会議・介護予防事業の実践者報告・スキルアップ研修会の講師	2016年11月6日	広島県理学療法士協会で、地域ケア会議に関するアクティブラーニング型のセミナーの講師を務めた。
・訪問リハビリテーション実務者研修会の講師	2019年11月9日～2022年2月20日	広島県理学療法士協会で、訪問リハビリテーションに関する研修会の講師を務めた。
・2022（令和4）年度 広島大学高等教育研究開発センター公開研究会の講師	2022年7月4日	広島大学高等教育研究開発センターが主催する公開研究会にて講師を務めた。
・第26回広島県理学療法士学会の講師	2022年12月4日	第26回広島県理学療法士学会の教育に関するランチョンセミナーの講師を務めた。
5　その他		
・国家試験対策	2023年8月～2024年2月	過年度や既卒生など、学習の進みが悪い学生に対して、自己学修を促した。

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
理学療法士免許	2010年6月14日	登録番号　91657
認定理学療法士（臨床教育）	2022年4月1日	登録番号　N22-0005534
認定理学療法士（地域理学療法）	2022年4月1日	登録番号　N22-0004914
2　特許等 該当なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
・医工連携プロジェクト研修会の講師	2015年9月13日	広島県理学療法士協会で、福祉用具と理学療法士の共同研究を促進するための研修会の講師を務めた。
4　その他		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・	発行又は	発行所，発表雑誌等	概要
（著書） 1　該当なし :				
（学術論文） 1. 理学療法士養成制度成立過程における専門職像の変容 ：独自性と自律性に着目して（査読付）	単著	2018年12月21日	広島大学大学院教育学研究科紀要．第三部，教育人間科学関連領域　第67巻　pp．235～244（全10頁）	【目的・方法】理学療法士（以下、PT）の専門職性について「独自性」と「自律性」の観点から「理学療法士及び作業療法士法」の形成過程を対象に、法案から立法までにPTの専門職像がどう変遷したかを分析した。【結果】法案の起草時は「業務内容」に評価の業務が明記されていたこと等が修正されていたことが明らかになった。【考察】PTの法的根拠に基づく業務は治療等の実施の業務に狭められ、独自性や医師からの相補的自律性が低下に影響していると考えられた。
2. 理学療法士の資格制度形成過程 ： イシュー・アプローチによる政策過程分析（査読付）	単著	2021年7月31日	保健医療社会学論集　第32巻第1号　pp．85～95（全11頁）	【目的】理学療法士（以下、PT）の資格制度形成過程の政策推進の背景や、アクター間の相互作用が専門職化に与える影響を分析した。【方法】政策過程モデルのイシュー・アプローチを用いた。【結果】内科医や視覚障害者等が、資格制度案を、個別の政治課題の解決に利用していたことがわかった。そのため、資格制度案に内在していた高度なPT等への関心は低下した。【考察】こうした過程において、PTの専門職化というイシューは周辺化されていたと考えられた。
3．資格制度形成過程から見える理学療法士の専門職性：イシュー・エリア・アプローチと 「政策の窓」モデルを用いて（学位論文）	単著	2022年2月17日	広島大学 博士学位論文（全158頁）	【目的】理学療法士の養成・資格制度を事例に、その形成過程で誰がどのような背景のもとに新しい専門職を必要としたのかを明らかにした。【方法】政策過程分析モデルであるイシュー・エリア・アプローチと「政策の窓」モデルを組み合わせて用いた。【結果】身体障害者の更生政策と医学的リハビリテーション政策、既得権者と医師や厚生省等との関係が調整されないまま政策が形成されていた。【考察】アクター達の問題が未整理のまま立法化され今日まで改正されていないことは、現行養成制度下の養成像を曖昧にしていると考えられた。
（その他） 1. 生活期（在宅場面）での理学療法：理学療法士のアイデンティティに着目して	単著	2021年3月31日	理学療法の臨床と研究　第30巻　pp．3～7　（全5頁）	在宅場面においてリハビリの目標設定に難渋するケースは少なくないが、本稿ではPTのアイデンティティに着目することでこれらを解決する糸口を紹介した。病院から離れた在宅では、各専門職に独自の専門性に基づいた自律的な役割が求められる。よって、PTも自らの専門職像を明確にすることが肝要である。そこで、PTの法制度を手がかりに専門職性を導出し、それをどう在宅場面に活かすことができるか、先行研究や筆者の経験を交えて概説した。
2. 複線化する理学療法士教育における教育像の探究：資格制度から見える専門職性をてがかりに	単著	2022年7月2日	教育学術新聞　第2890号	養成数急増への対応や大学教育化は、理学療法士（以下、PT）教育における最も重要な課題とされる。背景には、PTの専門職性が曖昧であることが考えられる。すなわち、養成に何年を要し、どの学校種で教育すべきか、専門職性に基づく教育像が描けていないのである。一方、看護師は資格制度から患者ケアを中心的な専門職性と位置付け、養成段階や研究領域でも高度専門化し、法改正にも影響を与えてきた。PT教育でも資格制度を視野に入れた教育像の構築が待たれる。

3.日本高等教育学会会長プロジェクト：日本型 IR の現状と課題 ―全国 IR 調査データを用いて―：IR組織の整備状況と 役割付与から透けて見える 大学経営行動の合理性：自由回答を用いた分析と ゴミ箱モデルを援用した整理	–	2023年6月11日	第26回日本高等教育学会	政策波及の観点から，日本の大学の IR の 整備普及が，仮に国からの垂直波及性が強く、相互参照や横並び競争が生じやすい「外生的」なものであるとすれば，組織内部の IR 関連の整備状況についても，外発的・外生的 な痕跡や，一貫性や体系性，計画性の欠如が みられる可能性がある．当該 大学にとってIR機能の必然性が疑わしい(あるいはその判断を保留している)にも関わらず，大 学の重要な役割である政策(施策)提言機能まで IR にもたらしている大学の存在は，IR の普及が 各大学にとって内生的ではないことが“ゆがみ”となって表面化している証とも考えられる．
4.日本の保健医療福祉資格制度の特性と構造から見える理学療法士の専門職像：社会学的アプローチに基づくAdamsの分析モデルの援用	–	2023年12月8日	第12回日本理学療法教育学会	日本の理学療法士の専門職像に関する研究では、現行の制度において医師の指示の下での業務が主体であり、自律性が不足していることが指摘されている。この研究では、法律や資格制度を詳細に分析し、理学療法士の特性と構造を明らかにしている。その結果、理学療法士の自律性が制限されており、医療の枠組みの外での専門性が不十分であることが示されている。一方で、評価業務については医師の指示の外で行われることが明らかにされ、評価の重要性が強調されている。この結果から、理学療法士の教育では治療技術だけでなく、評価技術も重視されるべきだという結論が導かれている。

（注）

1　この書類は，学長（高等専門学校にあっては校長）及び基幹教員（大学院にあっては専任教員）について作成すること。

2　医科大学又は医学若しくは歯学に関する学部若しくは学部の学科の設置の認可を受けようとする場合，附属病院の長についてもこの書類を作成すること。

3　「研究業績等に関する事項」には，書類の作成時において未発表のものを記入しないこと。